

2021年度 大学院人文科学研究科 講義概要（シラバス）



法政大学

科目一覧

【発行日：2021/5/1】最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0000】	言語分析哲学研究Ⅰ-1 [中釜 浩一] 春学期授業/Spring	1
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0001】	言語分析哲学研究Ⅰ-2 [中釜 浩一] 秋学期授業/Fall	2
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0002】	言語分析哲学研究Ⅱ-1 [中釜 浩一] 春学期授業/Spring	3
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0003】	言語分析哲学研究Ⅱ-2 [中釜 浩一] 秋学期授業/Fall	4
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0004】	形而上学研究Ⅰ-1 [齋藤 元紀] 春学期授業/Spring	5
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0005】	形而上学研究Ⅰ-2 [齋藤 元紀] 秋学期授業/Fall	6
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0006】	古代哲学史研究Ⅰ-1 [奥田 和夫] 春学期授業/Spring	7
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0007】	古代哲学史研究Ⅰ-2 [奥田 和夫] 秋学期授業/Fall	8
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0008】	古代哲学史研究Ⅱ-1 [奥田 和夫] 春学期授業/Spring	9
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0009】	古代哲学史研究Ⅱ-2 [奥田 和夫] 秋学期授業/Fall	10
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0010】	論理学研究Ⅰ-1 [安東 祐希] 春学期授業/Spring	11
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0011】	論理学研究Ⅰ-2 [安東 祐希] 秋学期授業/Fall	12
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0012】	論理学研究Ⅱ-1 [計良 隆世] 春学期授業/Spring	13
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0013】	論理学研究Ⅱ-2 [計良 隆世] 秋学期授業/Fall	14
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0014】	近代倫理学史研究Ⅰ-1 [菅沢 龍文] 春学期授業/Spring	16
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0015】	近代倫理学史研究Ⅰ-2 [菅沢 龍文] 秋学期授業/Fall	17
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0016】	近代倫理学史研究Ⅱ-1 [菅沢 龍文] 春学期授業/Spring	18
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0017】	近代倫理学史研究Ⅱ-2 [菅沢 龍文] 秋学期授業/Fall	19
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0018】	実践哲学研究Ⅰ-1 [山口 誠一] 春学期授業/Spring	21
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0019】	実践哲学研究Ⅰ-2 [山口 誠一] 秋学期授業/Fall	22
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0020】	近代ドイツ哲学史研究Ⅰ-1 [笠原 賢介] 春学期授業/Spring	23
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0021】	近代ドイツ哲学史研究Ⅰ-2 [笠原 賢介] 秋学期授業/Fall	24
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0022】	現代哲学研究Ⅰ-1 [大池 惣太郎] 春学期授業/Spring	25
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0023】	現代哲学研究Ⅰ-2 [大池 惣太郎] 秋学期授業/Fall	26
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0024】	科学哲学研究Ⅰ-1 [安孫子 信] 春学期授業/Spring	27
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0025】	科学哲学研究Ⅰ-2 [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	28
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0026】	科学哲学研究Ⅱ-1 [安孫子 信] 春学期授業/Spring	29
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0027】	科学哲学研究Ⅱ-2 [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	30
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0028】	近代西洋哲学研究Ⅰ-1 [松井 久] 春学期授業/Spring	31
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0029】	近代西洋哲学研究Ⅰ-2 [松井 久] 秋学期授業/Fall	32
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0030】	近代フランス哲学史研究Ⅰ-1 [酒井 健] 春学期授業/Spring	33
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0031】	近代フランス哲学史研究Ⅰ-2 [酒井 健] 秋学期授業/Fall	34
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0032】	近代フランス哲学史研究Ⅱ-1 [酒井 健] 春学期授業/Spring	35
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0033】	近代フランス哲学史研究Ⅱ-2 [酒井 健] 秋学期授業/Fall	36
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0034】	超越論哲学研究Ⅱ-1 [大森 一三] 春学期授業/Spring	37
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0035】	超越論哲学研究Ⅱ-2 [鶴澤 和彦] 秋学期授業/Fall	38
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0036】	ヨーロッパ精神史研究Ⅰ-1 [半田 勝彦] 春学期授業/Spring	39
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0037】	ヨーロッパ精神史研究Ⅰ-2 [半田 勝彦] 秋学期授業/Fall	40
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0038】	ヨーロッパ精神史研究Ⅱ-1 [長谷川 悦宏] 春学期授業/Spring	41
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0039】	ヨーロッパ精神史研究Ⅱ-2 [長谷川 悦宏] 秋学期授業/Fall	42
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0040】	法哲学研究 1 [内藤 淳] 春学期授業/Spring	42
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0041】	法哲学研究 2 [内藤 淳] 秋学期授業/Fall	43
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0042】	哲学ドイツ語研究 1 [笠原 賢介] 春学期授業/Spring	44
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0043】	哲学ドイツ語研究 2 [笠原 賢介] 秋学期授業/Fall	45
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0044】	哲学フランス語研究 1 [酒井 健] 春学期授業/Spring	46
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0045】	哲学フランス語研究 2 [酒井 健] 秋学期授業/Fall	47
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0046】	哲学基礎研究Ⅰ [谷口 力] 春学期授業/Spring	48
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0047】	哲学基礎研究Ⅱ [伊藤 克巳] 春学期集中	49
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0048】	日本思想史研究Ⅰ-1 [西塚 俊太] 春学期授業/Spring	51
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0049】	日本思想史研究Ⅰ-2 [西塚 俊太] 秋学期授業/Fall	52
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0050】	日本思想史研究Ⅱ-1 [西塚 俊太] 春学期授業/Spring	54
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0051】	日本思想史研究Ⅱ-2 [西塚 俊太] 秋学期授業/Fall	55
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0052】	現象学研究Ⅰ-1 [君嶋 泰明] 春学期授業/Spring	57

哲学専攻(修士課程)-専門科目	【X0053】現象学研究Ⅰ-2〔君嶋 泰明〕秋学期授業/Fall	58
哲学専攻(博士後期課程)	【X0055】哲学特殊研究1〔君嶋 泰明〕春学期授業/Spring	59
哲学専攻(博士後期課程)	【X0056】哲学特殊研究2〔君嶋 泰明〕秋学期授業/Fall	60
哲学専攻(博士後期課程)	【X0057】哲学特殊研究1〔山口 誠一〕春学期授業/Spring	61
哲学専攻(博士後期課程)	【X0058】哲学特殊研究2〔山口 誠一〕秋学期授業/Fall	62
哲学専攻(博士後期課程)	【X0059】言語分析哲学特殊講義1〔中釜 浩一〕春学期授業/Spring	63
哲学専攻(博士後期課程)	【X0060】言語分析哲学特殊講義2〔中釜 浩一〕秋学期授業/Fall	64
哲学専攻(博士後期課程)	【X0061】古代哲学史特殊講義1〔奥田 和夫〕春学期授業/Spring	65
哲学専攻(博士後期課程)	【X0062】古代哲学史特殊講義2〔奥田 和夫〕秋学期授業/Fall	66
哲学専攻(博士後期課程)	【X0063】論理学特殊講義1〔安東 祐希〕春学期授業/Spring	67
哲学専攻(博士後期課程)	【X0064】論理学特殊講義2〔安東 祐希〕秋学期授業/Fall	68
哲学専攻(博士後期課程)	【X0065】近代倫理学史特殊講義1〔菅沢 龍文〕春学期授業/Spring	69
哲学専攻(博士後期課程)	【X0066】近代倫理学史特殊講義2〔菅沢 龍文〕秋学期授業/Fall	70
哲学専攻(博士後期課程)	【X0067】実践哲学特殊講義1〔山口 誠一〕春学期授業/Spring	71
哲学専攻(博士後期課程)	【X0068】実践哲学特殊講義2〔山口 誠一〕秋学期授業/Fall	72
哲学専攻(博士後期課程)	【X0069】近代ドイツ哲学史特殊講義1〔笠原 賢介〕春学期授業/Spring	73
哲学専攻(博士後期課程)	【X0070】近代ドイツ哲学史特殊講義2〔笠原 賢介〕秋学期授業/Fall	74
哲学専攻(博士後期課程)	【X0071】科学哲学特殊講義1〔安孫子 信〕春学期授業/Spring	75
哲学専攻(博士後期課程)	【X0072】科学哲学特殊講義2〔安孫子 信〕秋学期授業/Fall	76
哲学専攻(博士後期課程)	【X0073】近代フランス哲学史特殊講義1〔酒井 健〕春学期授業/Spring	77
哲学専攻(博士後期課程)	【X0074】近代フランス哲学史特殊講義2〔酒井 健〕秋学期授業/Fall	78
哲学専攻(博士後期課程)	【X0075】法哲学特殊講義1〔内藤 淳〕春学期授業/Spring	79
哲学専攻(博士後期課程)	【X0076】法哲学特殊講義2〔内藤 淳〕秋学期授業/Fall	80
哲学専攻(博士後期課程)	【X0077】現象学特殊講義1〔君嶋 泰明〕春学期授業/Spring	81
哲学専攻(博士後期課程)	【X0078】現象学特殊講義2〔君嶋 泰明〕秋学期授業/Fall	82
哲学専攻(博士後期課程)	【X0079】日本思想史特殊講義1〔西塚 俊太〕春学期授業/Spring	83
哲学専攻(博士後期課程)	【X0080】日本思想史特殊講義2〔西塚 俊太〕秋学期授業/Fall	84
哲学専攻(博士後期課程)	【X0082】哲学特殊研究1〔酒井 健〕春学期授業/Spring	85
哲学専攻(博士後期課程)	【X0083】哲学特殊研究2〔酒井 健〕春学期授業/Spring	86
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0100】日本文芸学A〔守安 敏久〕春学期授業/Spring	87
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0101】日本文芸学B〔守安 敏久〕秋学期授業/Fall	88
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0102】日本文芸批評史A〔田中 和生〕春学期授業/Spring	89
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0103】日本文芸批評史B〔田中 和生〕秋学期授業/Fall	90
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0104】日本古代文芸原典研究A〔坂本 勝〕春学期授業/Spring	91
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0105】日本古代文芸原典研究B〔坂本 勝〕秋学期授業/Fall	92
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0106】日本古代文芸演習A〔加藤 昌嘉〕春学期授業/Spring	93
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0107】日本古代文芸演習B〔加藤 昌嘉〕秋学期授業/Fall	94
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0108】日本中世文芸原典研究A〔佐藤 明浩〕春学期授業/Spring	95
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0109】日本中世文芸原典研究B〔佐藤 明浩〕秋学期授業/Fall	96
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0110】日本中世文芸演習A〔伊海 孝充〕春学期授業/Spring	97
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0111】日本中世文芸演習B〔伊海 孝充〕秋学期授業/Fall	98
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0112】日本近世文芸原典研究A〔小林 ふみ子〕春学期授業/Spring	99
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0113】日本近世文芸原典研究B〔小林 ふみ子〕秋学期授業/Fall	100
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0114】日本近世文芸演習A〔高木 元〕春学期授業/Spring	101
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0115】日本近世文芸演習B〔高木 元〕秋学期授業/Fall	102
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0116】日本近代文芸原典研究A〔中丸 宣明〕春学期授業/Spring	103
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0117】日本近代文芸原典研究B〔中丸 宣明〕秋学期授業/Fall	104
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0118】日本近代文芸演習ⅠA〔藤村 耕治〕春学期授業/Spring	105
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0119】日本近代文芸演習ⅠB〔藤村 耕治〕秋学期授業/Fall	106
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0121】日本言語学原典研究B〔間宮 厚司〕秋学期授業/Fall	107
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0122】日本言語学演習ⅠA〔尾谷 昌則〕春学期授業/Spring	108
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0123】日本言語学演習ⅠB〔尾谷 昌則〕秋学期授業/Fall	110
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0124】日本言語学演習ⅡA〔王 安〕春学期授業/Spring	111
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0125】日本言語学演習ⅡB〔王 安〕秋学期授業/Fall	112
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0126】日本語学特講A〔前田 直子〕春学期授業/Spring	114
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0127】日本語学特講B〔前田 直子〕秋学期授業/Fall	115
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0128】沖縄文芸史A〔福 寛美〕春学期授業/Spring	116

日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0129】	沖縄文芸史B〔福 寛美〕	秋学期授業/Fall	117
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0130】	中国文学A〔遠藤 星希〕	春学期授業/Spring	119
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0131】	中国文学B〔遠藤 星希〕	秋学期授業/Fall	120
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0132】	日本文芸特講ⅠA(文芸と音楽)〔スティーヴン・ネルソン〕	春学期授業/Spring	121
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0133】	日本文芸特講ⅠB(文芸と音楽)〔スティーヴン・ネルソン〕	秋学期授業/Fall	122
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0134】	日本文芸特講ⅡA(アトマネジメント研究)〔高橋 靖典〕	春学期授業/Spring	123
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0135】	日本文芸特講ⅡB(アトマネジメント研究)〔高橋 靖典〕	秋学期授業/Fall	124
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0138】	女性文学A〔藤木 直実〕	春学期授業/Spring	126
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0139】	女性文学B〔藤木 直実〕	秋学期授業/Fall	127
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0140】	文芸と視聴覚芸術A〔越川 道夫〕	春学期授業/Spring	128
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0141】	文芸と視聴覚芸術B〔越川 道夫〕	秋学期授業/Fall	129
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0142】	学際的文学論A(文学の境界領域、文学と宗教等)〔リネベ・アンドレ〕	春学期授業/Spring	130
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0143】	学際的文学論B(文学の境界領域、文学と宗教等)〔リネベ・アンドレ〕	秋学期授業/Fall	131
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0144】	文学と風土A〔庄司 達也〕	春学期授業/Spring	132
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0145】	文学と風土B〔庄司 達也〕	秋学期授業/Fall	133
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0146】	能楽作品研究A〔山中 玲子〕	春学期授業/Spring	134
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0147】	能楽作品研究B〔山中 玲子〕	秋学期授業/Fall	135
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0148】	能楽資料研究A〔宮本 圭造〕	春学期授業/Spring	136
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0149】	能楽資料研究B〔宮本 圭造〕	秋学期授業/Fall	137
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0150】	現代能楽論〔山中玲子・観世鍬之丞・観世喜正・中司由起子〕	秋学期授業/Fall	138
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0151】	日本語・日本文学の基礎A〔竹林 一志〕	春学期授業/Spring	139
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0152】	日本語・日本文学の基礎B〔竹林 一志〕	秋学期授業/Fall	140
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0153】	表現と社会〔内藤 裕之〕	春学期授業/Spring	141
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0154】	編集理論〔仲俣 暁生〕	秋学期授業/Fall	142
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0155】	作家特殊研究A〔伊藤 比呂美〕	春学期授業/Spring	143
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0156】	作家特殊研究B〔伊藤 比呂美〕	秋学期授業/Fall	144
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0157】	文芸創作研究A〔島田 雅彦〕	春学期授業/Spring	145
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0158】	文芸創作研究B〔島田 雅彦〕	秋学期授業/Fall	146
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0159】	日本文芸特殊研究ⅠA〔坂本 勝〕	春学期授業/Spring	147
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0160】	日本文芸特殊研究ⅠB〔坂本 勝〕	秋学期授業/Fall	148
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0161】	日本文芸特殊研究ⅡA〔小秋元 段〕	春学期授業/Spring	149
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0162】	日本文芸特殊研究ⅡB〔小秋元 段〕	秋学期授業/Fall	150
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0163】	日本文芸特殊研究ⅢA〔小林 ふみ子〕	春学期授業/Spring	151
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0164】	日本文芸特殊研究ⅢB〔小林 ふみ子〕	秋学期授業/Fall	152
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0165】	日本文芸特殊研究ⅣA〔スティーヴン・ネルソン〕	春学期授業/Spring	153
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0166】	日本文芸特殊研究ⅣB〔スティーヴン・ネルソン〕	秋学期授業/Fall	154
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0167】	日本文学・国際日本学基礎演習〔本塚 亘〕	秋学期授業/Fall	155
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0168】	日本文学・国際日本学論文作成基礎実習〔金子 広幸〕	秋学期授業/Fall	156
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0200】	米文学特殊研究第二(小説論)A〔小島 尚人〕	春学期授業/Spring	157
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0201】	米文学特殊研究第二(小説論)B〔小島 尚人〕	秋学期授業/Fall	159
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0202】	英米文学演習第二(American Fiction)A〔宮川 雅〕	春学期授業/Spring	160
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0203】	英米文学演習第二(American Fiction)B〔宮川 雅〕	秋学期授業/Fall	161
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0204】	英米文学演習第三(British Fiction)A〔丹治 愛〕	春学期授業/Spring	162
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0205】	英米文学演習第三(British Fiction)B〔丹治 愛〕	秋学期授業/Fall	163
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0206】	英語学演習(英語史・言語変化理論)A〔福元 広二〕	春学期授業/Spring	164
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0207】	英語学演習(英語史・言語変化理論)B〔福元 広二〕	秋学期授業/Fall	165
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0208】	言語学演習(応用言語学)A〔川崎 貴子〕	春学期授業/Spring	166
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0209】	言語学演習(応用言語学)B〔川崎 貴子〕	秋学期授業/Fall	167
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0211】	英語学特殊研究第二(英語リーディングの科学)A〔濱田 彰〕	春学期授業/Spring	168
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0212】	英語学特殊研究第二(英語リーディングの科学)B〔濱田 彰〕	秋学期授業/Fall	169
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0213】	言語学特殊研究(理論言語学・認知科学)A〔石川 潔〕	春学期授業/Spring	170

英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0214】	言語学特殊研究(理論言語学・認知科学) B [石川 潔]	秋学期授業/Fall	171
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0215】	英語教育学研究 A [印南 洋]	春学期授業/Spring	172
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0216】	英語教育学研究 B [印南 洋]	秋学期授業/Fall	174
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0217】	英語発音法 A [高橋 豊美]	春学期授業/Spring	175
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0218】	英語発音法 B [高橋 豊美]	秋学期授業/Fall	177
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0219】	英語表現演習 A [ニアル・ムルター]	春学期授業/Spring	178
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0220】	英語表現演習 B [ニアル・ムルター]	秋学期授業/Fall	179
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0221】	文学方法論 A [宮川 雅]	春学期授業/Spring	180
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0222】	文学方法論 B [宮川 雅]	秋学期授業/Fall	181
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0223】	英語音声・応用研究 A [田嶋 圭一]	春学期授業/Spring	182
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0224】	英語音声・応用研究 B [田嶋 圭一]	秋学期授業/Fall	183
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0225】	理論言語学・認知科学 A [ブライアン・ウィスナー]	春学期授業/Spring	184
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0226】	応用言語学・理論研究 A [熊澤 孝昭]	春学期授業/Spring	186
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0227】	応用言語学・理論研究 B [熊澤 孝昭]	秋学期授業/Fall	187
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0228】	言語科学方法論 A [石川 潔]	春学期授業/Spring	188
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0229】	言語科学方法論 B [ブライアン・ウィスナー]	秋学期授業/Fall	189
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0230】	音声言語科学特論 [田嶋 圭一]	春学期授業/Spring	190
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0231】	音声言語科学演習 [田嶋 圭一]	秋学期授業/Fall	191
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0232】	比較文学研究 A [日中 鎮朗]	春学期授業/Spring	192
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0233】	比較文学研究 B [日中 鎮朗]	秋学期授業/Fall	193
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0234】	Academic English (Effective Writing) A [安部 義治]	春学期授業/Spring	195
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0235】	Academic English (Effective Writing) B [安部 義治]	秋学期授業/Fall	196
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0236】	Academic English (Oral Presentation) A [安部 義治]	春学期授業/Spring	197
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0237】	Academic English (Oral Presentation) B [安部 義治]	秋学期授業/Fall	198
英文学専攻(博士後期課程)	【X0241】	言語学特殊演習 I A [ブライアン・ウィスナー]	春学期授業/Spring	199
英文学専攻(博士後期課程)	【X0242】	言語学特殊演習 I B [ブライアン・ウィスナー]	秋学期授業/Fall	200
英文学専攻(博士後期課程)	【X0243】	文学方法論特講 A [宮川 雅]	春学期授業/Spring	201
英文学専攻(博士後期課程)	【X0244】	文学方法論特講 B [宮川 雅]	秋学期授業/Fall	202
英文学専攻(博士後期課程)	【X0245】	言語科学方法論特講 A [石川 潔]	春学期授業/Spring	203
英文学専攻(博士後期課程)	【X0246】	言語科学方法論特講 B [ブライアン・ウィスナー]	秋学期授業/Fall	204
英文学専攻(博士後期課程)	【X0247】	英米文学特講 II A [丹治 愛]	春学期授業/Spring	205
英文学専攻(博士後期課程)	【X0248】	英米文学特講 II B [丹治 愛]	秋学期授業/Fall	206
英文学専攻(博士後期課程)	【X0249】	英米文学特講 IV A [宮川 雅]	春学期授業/Spring	207
英文学専攻(博士後期課程)	【X0250】	英米文学特講 IV B [宮川 雅]	秋学期授業/Fall	208
英文学専攻(博士後期課程)	【X0251】	英米文学特講 V A [日中 鎮朗]	春学期授業/Spring	209
英文学専攻(博士後期課程)	【X0252】	英米文学特講 V B [日中 鎮朗]	秋学期授業/Fall	210
英文学専攻(博士後期課程)	【X0253】	言語科学特講 I A [椎名 美智]	春学期授業/Spring	212
英文学専攻(博士後期課程)	【X0254】	言語科学特講 I B [椎名 美智]	秋学期授業/Fall	213
英文学専攻(博士後期課程)	【X0255】	言語科学特講 III A [石川 潔]	春学期授業/Spring	215
英文学専攻(博士後期課程)	【X0256】	言語科学特講 III B [石川 潔]	秋学期授業/Fall	216
英文学専攻(博士後期課程)	【X0257】	言語科学特講 V A [ブライアン・ウィスナー]	春学期授業/Spring	217
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0260】	英語学特殊研究第一(英文法・文体論・語用論) A [椎名 美智]	春学期授業/Spring	218
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0261】	英語学特殊研究第一(英文法・文体論・語用論) B [椎名 美智]	秋学期授業/Fall	219
英文学専攻(博士後期課程)	【X0263】	言語科学特講 II A [福元 広二]	春学期授業/Spring	220
英文学専攻(博士後期課程)	【X0264】	言語科学特講 II B [福元 広二]	秋学期授業/Fall	221
英文学専攻(博士後期課程)	【X0265】	英米文学特講 I A [小島 尚人]	春学期授業/Spring	222
英文学専攻(博士後期課程)	【X0266】	英米文学特講 I B [小島 尚人]	秋学期授業/Fall	224
英文学専攻(博士後期課程)	【X0267】	英米文学特殊演習 I A [丹治 愛]	春学期授業/Spring	225
英文学専攻(博士後期課程)	【X0268】	英米文学特殊演習 I B [丹治 愛]	秋学期授業/Fall	226
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0269】	英文学特殊研究第一(British Fiction) A [丹治 愛]	春学期授業/Spring	227
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0270】	英文学特殊研究第一(British Fiction) B [丹治 愛]	秋学期授業/Fall	228
英文学専攻(博士後期課程)	【X0271】	言語科学特講 IV A [川崎 貴子]	春学期授業/Spring	229
英文学専攻(博士後期課程)	【X0272】	言語科学特講 IV B [川崎 貴子]	秋学期授業/Fall	230
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0273】	Fiction 演習 I A [宮川 雅]	春学期授業/Spring	231
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0274】	Fiction 演習 I B [宮川 雅]	秋学期授業/Fall	232

史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0300]	日本史学研究Ⅰ [小倉 慈司] 春学期授業/Spring	233
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0301]	日本史学研究Ⅱ [及川 亘] 春学期授業/Spring	234
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0302]	日本史学原典研究Ⅰ [大塚 紀弘] 春学期授業/Spring	235
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0303]	日本史学原典研究Ⅱ [大塚 紀弘] 秋学期授業/Fall	236
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0304]	日本古代史特殊研究Ⅰ [山口 英男] 春学期授業/Spring	237
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0305]	日本古代史特殊研究Ⅱ [山口 英男] 秋学期授業/Fall	238
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0306]	日本中世史特殊研究Ⅰ [末柄 豊] 春学期授業/Spring	239
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0307]	日本中世史特殊研究Ⅱ [末柄 豊] 秋学期授業/Fall	240
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0308]	日本中世史特殊研究Ⅲ [仁平 義孝] 春学期授業/Spring	241
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0309]	日本中世史特殊研究Ⅳ [仁平 義孝] 秋学期授業/Fall	242
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0310]	日本近世史特殊研究Ⅰ [落合 功] 春学期授業/Spring	243
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0311]	日本近世史特殊研究Ⅱ [落合 功] 秋学期授業/Fall	244
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0312]	日本近世史特殊研究Ⅲ [西沢 淳男] 春学期授業/Spring	245
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0313]	日本近世史特殊研究Ⅳ [西沢 淳男] 秋学期授業/Fall	246
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0314]	日本近代史特殊研究Ⅰ [長井 純市] 春学期授業/Spring	247
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0315]	日本近代史特殊研究Ⅱ [長井 純市] 秋学期授業/Fall	249
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0316]	日本近代史特殊研究Ⅲ [森田 貴子] 春学期授業/Spring	250
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0317]	日本近代史特殊研究Ⅳ [森田 貴子] 秋学期授業/Fall	251
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0318]	日本考古学特殊研究Ⅰ [阿部 朝衛] 春学期授業/Spring	252
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0319]	日本考古学特殊研究Ⅱ [阿部 朝衛] 秋学期授業/Fall	253
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0320]	日本考古学特殊研究Ⅲ [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	254
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0321]	日本考古学特殊研究Ⅳ [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	255
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0322]	日本古代史演習Ⅰ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	256
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0323]	日本古代史演習Ⅱ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	257
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0324]	日本古代史演習Ⅲ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	258
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0325]	日本古代史演習Ⅳ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	259
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0326]	日本中世史演習Ⅰ [大塚 紀弘] 春学期授業/Spring	260
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0327]	日本中世史演習Ⅱ [大塚 紀弘] 秋学期授業/Fall	261
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0328]	日本近世史演習Ⅰ [松本 剣志郎] 春学期授業/Spring	262
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0329]	日本近世史演習Ⅱ [松本 剣志郎] 秋学期授業/Fall	263
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0330]	日本近代史演習Ⅰ [長井 純市] 春学期授業/Spring	263
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0331]	日本近代史演習Ⅱ [長井 純市] 秋学期授業/Fall	265
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0332]	日本考古学演習Ⅰ [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	266
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0333]	日本考古学演習Ⅱ [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	268
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0334]	日本古文書学研究Ⅰ [大塚 紀弘] 春学期授業/Spring	269
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0335]	日本古文書学研究Ⅱ [大塚 紀弘] 秋学期授業/Fall	270
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0336]	日本古代史研究Ⅰ [春名 宏昭] 春学期授業/Spring	271
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0337]	日本古代史研究Ⅱ [春名 宏昭] 秋学期授業/Fall	272
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0338]	日本古代史料研究 [山口 英男] 春学期授業/Spring	273
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0339]	日本中世史研究 [及川 亘] 秋学期授業/Fall	274
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0340]	日本近世史科学研究Ⅰ [松本 剣志郎] 春学期授業/Spring	275
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0341]	日本近世史科学研究Ⅱ [松本 剣志郎] 秋学期授業/Fall	276
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0342]	日本近代史研究Ⅰ [長井 純市] 春学期授業/Spring	277
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0343]	日本近代史研究Ⅱ [長井 純市] 秋学期授業/Fall	278
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0344]	沖縄学入門Ⅰ [大里 知子] 春学期授業/Spring	280
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0345]	沖縄学入門Ⅱ [大里 知子] 秋学期授業/Fall	281
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0346]	東洋史学特殊研究Ⅰ [塩沢 裕仁] 春学期授業/Spring	282
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0347]	東洋史学特殊研究Ⅱ [塩沢 裕仁] 秋学期授業/Fall	283
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0348]	東洋史学特殊研究Ⅲ [大島 誠二] 春学期授業/Spring	284
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0349]	東洋史学特殊研究Ⅳ [大島 誠二] 秋学期授業/Fall	285
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0350]	東洋史学演習Ⅰ [齋藤 勝] 春学期授業/Spring	286
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0351]	東洋史学演習Ⅱ [齋藤 勝] 秋学期授業/Fall	287
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0352]	東洋史学演習Ⅲ [水上 和則] 春学期授業/Spring	288
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0353]	東洋史学演習Ⅳ [水上 和則] 秋学期授業/Fall	289
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0354]	東洋史学演習Ⅴ [久野 美樹] 春学期授業/Spring	290
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0355]	東洋史学演習Ⅵ [久野 美樹] 秋学期授業/Fall	291
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0356]	東洋古代史研究Ⅰ [齋藤 勝] 春学期授業/Spring	292

史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0357]	東洋古代史研究Ⅱ	[齋藤 勝]	秋学期授業/Fall	293
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0358]	東洋中世史研究Ⅰ	[宇都宮 美生]	春学期授業/Spring	294
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0359]	東洋中世史研究Ⅱ	[宇都宮 美生]	秋学期授業/Fall	295
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0360]	東洋近代史研究Ⅰ	[芦沢 知絵]	春学期授業/Spring	296
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0361]	東洋近代史研究Ⅱ	[芦沢 知絵]	秋学期授業/Fall	297
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0362]	西洋史学特殊研究Ⅰ	[松原 俊文]	春学期授業/Spring	297
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0363]	西洋史学特殊研究Ⅱ	[松原 俊文]	秋学期授業/Fall	298
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0364]	西洋史学特殊研究Ⅲ	[篠原 琢]	春学期授業/Spring	299
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0365]	西洋史学特殊研究Ⅳ	[篠原 琢]	秋学期授業/Fall	301
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0366]	西洋史学特殊研究Ⅴ	[稲垣 春樹]	春学期授業/Spring	302
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0367]	西洋史学特殊研究Ⅵ	[稲垣 春樹]	秋学期授業/Fall	303
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0368]	西洋史学演習Ⅰ	[後藤 篤子]	春学期授業/Spring	304
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0369]	西洋史学演習Ⅱ	[後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	305
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0370]	西洋史学演習Ⅲ	[高澤 紀恵]	春学期授業/Spring	306
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0371]	西洋史学演習Ⅳ	[高澤 紀恵]	秋学期授業/Fall	307
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0372]	西洋史学演習Ⅴ	[大澤 広晃]	春学期授業/Spring	308
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0373]	西洋史学演習Ⅵ	[大澤 広晃]	秋学期授業/Fall	309
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0374]	西洋古代史研究Ⅰ	[後藤 篤子]	春学期授業/Spring	310
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0375]	西洋古代史研究Ⅱ	[後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	311
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0376]	西洋中世史研究Ⅰ	[小沼 明生]	春学期授業/Spring	312
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0377]	西洋中世史研究Ⅱ	[小沼 明生]	秋学期授業/Fall	313
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0378]	ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅰ	[高澤 紀恵]	春学期授業/Spring	314
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0379]	ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅱ	[高澤 紀恵]	秋学期授業/Fall	315
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0380]	アーカイブズ学Ⅰ	[宮間 純一]	春学期授業/Spring	316
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0381]	アーカイブズ学Ⅱ	[宮間 純一]	秋学期授業/Fall	317
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0382]	文書館管理研究Ⅰ	[宇都宮美生・青木直己・葦名ふみ・新井浩文・冨塚一彦・白石烈]	春学期授業/Spring	318
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0383]	文書館管理研究Ⅱ	[宇都宮美生・青木睦・赤松道子・長谷部圭彦・山田太造・渡辺浩一]	秋学期授業/Fall	319
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0384]	記録史料学研究Ⅰ	[松本 剣志郎]	春学期授業/Spring	320
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0385]	記録史料学演習Ⅰ	[松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	321
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0386]	記録史料学研究Ⅱ	[浅井 良亮]	春学期授業/Spring	322
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0387]	記録史料学演習Ⅱ	[浅井 良亮]	秋学期授業/Fall	323
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0388]	外書講読Ⅰ	[池本 今日子]	春学期授業/Spring	324
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0389]	外書講読Ⅱ	[池本 今日子]	秋学期授業/Fall	325
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0400]	地形学研究Ⅰ	[前杢 英明]	春学期授業/Spring	326
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0401]	地形学研究Ⅱ	[前杢 英明]	秋学期授業/Fall	327
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0402]	地形学演習Ⅰ	[前杢 英明]	春学期授業/Spring	328
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0403]	地形学演習Ⅱ	[前杢 英明]	秋学期授業/Fall	329
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0404]	気候学研究Ⅰ	[山口 隆子]	春学期授業/Spring	330
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0405]	気候学研究Ⅱ	[山口 隆子]	秋学期授業/Fall	331
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0406]	気候学演習Ⅰ	[山口 隆子]	春学期授業/Spring	332
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0407]	気候学演習Ⅱ	[山口 隆子]	秋学期授業/Fall	333
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0408]	水文学研究Ⅰ	[小寺 浩二]	春学期授業/Spring	334
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0409]	水文学研究Ⅱ	[小寺 浩二]	秋学期授業/Fall	335
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0410]	水文学演習Ⅰ	[小寺 浩二]	春学期授業/Spring	336
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0411]	水文学演習Ⅱ	[小寺 浩二]	秋学期授業/Fall	337
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0412]	第四紀学研究Ⅰ	[藁谷 哲也]	春学期授業/Spring	338
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0413]	第四紀学研究Ⅱ	[藁谷 哲也]	秋学期授業/Fall	339
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0414]	自然地理学文献講読Ⅰ	[小寺 浩二]	春学期授業/Spring	341
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0415]	自然地理学文献講読Ⅱ	[小寺 浩二]	秋学期授業/Fall	342
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0416]	自然地理学特殊講義Ⅰ	[荻谷 愛彦]	春学期集中	343
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0417]	自然地理学特殊講義Ⅱ	[石井 吉之]	秋学期集中	344
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0418]	人文地理学研究Ⅰ	[伊藤 達也]	春学期授業/Spring	345
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0419]	人文地理学研究Ⅱ	[伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	346
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0420]	人文地理学演習Ⅰ	[伊藤 達也]	春学期授業/Spring	347
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0421]	人文地理学演習Ⅱ	[伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	348

地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0422】社会経済地理学研究Ⅰ [小原 文明]	春学期授業/Spring	349
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0423】社会経済地理学研究Ⅱ [小原 文明]	秋学期授業/Fall	350
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0424】社会経済地理学演習Ⅰ [小原 文明]	春学期授業/Spring	351
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0425】社会経済地理学演習Ⅱ [小原 文明]	秋学期授業/Fall	352
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0426】文化地理学研究Ⅰ [中俣 均]	春学期授業/Spring	353
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0427】文化地理学研究Ⅱ [中俣 均]	秋学期授業/Fall	354
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0428】文化地理学演習Ⅰ [中俣 均]	春学期授業/Spring	355
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0429】文化地理学演習Ⅱ [中俣 均]	秋学期授業/Fall	356
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0430】空間構成論研究Ⅰ [山本 健児]	春学期授業/Spring	357
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0431】空間構成論研究Ⅱ [山本 健児]	秋学期授業/Fall	359
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0432】歴史地理学研究Ⅰ [米家 志乃布]	春学期授業/Spring	360
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0433】歴史地理学研究Ⅱ [米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	361
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0434】歴史地理学演習Ⅰ [米家 志乃布]	春学期授業/Spring	362
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0435】歴史地理学演習Ⅱ [米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	363
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0436】人文地理学文献講読Ⅰ [伊藤 達也]	春学期授業/Spring	364
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0437】人文地理学文献講読Ⅱ [伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	365
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0438】地理情報システム研究Ⅰ [中山 大地]	春学期授業/Spring	366
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0439】地理情報システム研究Ⅱ [中山 大地]	秋学期授業/Fall	367
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0440】地理学現地研究Ⅰ [専任教員が担当]	春学期集中	368
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0441】地理学現地研究Ⅱ [専任教員が担当]	秋学期集中	369
地理学専攻(博士後期課程)	【X0443】地理学特別演習Ⅰ [前杵 英明]	春学期授業/Spring	370
地理学専攻(博士後期課程)	【X0444】地理学特別演習Ⅱ [前杵 英明]	秋学期授業/Fall	371
地理学専攻(博士後期課程)	【X0445】地理学特別演習Ⅰ [小原 文明]	春学期授業/Spring	372
地理学専攻(博士後期課程)	【X0446】地理学特別演習Ⅱ [小原 文明]	秋学期授業/Fall	373
地理学専攻(博士後期課程)	【X0447】地理学特別演習Ⅰ [伊藤 達也]	春学期授業/Spring	374
地理学専攻(博士後期課程)	【X0448】地理学特別演習Ⅱ [伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	375
地理学専攻(博士後期課程)	【X0451】自然地理学特別講義Ⅲ [石井 吉之]	秋学期集中	376
地理学専攻(博士後期課程)	【X0452】人文地理学特別講義Ⅰ [中俣 均]	春学期授業/Spring	377
地理学専攻(博士後期課程)	【X0453】人文地理学特別講義Ⅲ [中俣 均]	秋学期授業/Fall	378
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0500】心理学研究法演習Ⅰ [吉村 浩一]	春学期授業/Spring	379
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0501】心理学研究法演習Ⅱ [吉村 浩一]	秋学期授業/Fall	380
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0502】心理学研究法演習Ⅰ [高橋 敏治]	春学期授業/Spring	381
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0503】心理学研究法演習Ⅱ [高橋 敏治]	秋学期授業/Fall	382
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0504】心理学研究法演習Ⅰ [渡辺 弥生]	春学期授業/Spring	383
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0505】心理学研究法演習Ⅱ [渡辺 弥生]	秋学期授業/Fall	385
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0506】心理学研究法演習Ⅰ [福田 由紀]	春学期授業/Spring	386
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0507】心理学研究法演習Ⅱ [福田 由紀]	秋学期授業/Fall	387
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0508】心理学研究法演習Ⅰ [島宗 理]	春学期授業/Spring	388
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0509】心理学研究法演習Ⅱ [島宗 理]	秋学期授業/Fall	389
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0510】心理学研究法演習Ⅰ [越智 啓太]	春学期授業/Spring	391
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0511】心理学研究法演習Ⅱ [越智 啓太]	秋学期授業/Fall	392
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0512】心理学研究法演習Ⅰ [田嶋 圭一]	春学期授業/Spring	393
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0513】心理学研究法演習Ⅱ [田嶋 圭一]	秋学期授業/Fall	394
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0514】心理学研究法演習Ⅰ [荒井 弘和]	春学期授業/Spring	395
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0515】心理学研究法演習Ⅱ [荒井 弘和]	秋学期授業/Fall	397
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0516】心理学研究法演習Ⅰ [林 容市]	春学期授業/Spring	398
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0517】心理学研究法演習Ⅱ [林 容市]	秋学期授業/Fall	399
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0518】音声言語科学特論 [田嶋 圭一]	春学期授業/Spring	400
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0519】社会心理特論 [越智 啓太]	春学期授業/Spring	401
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0520】読書心理特論 [平山 祐一郎]	秋学期授業/Fall	402
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0521】教育心理特論 [平山 祐一郎]	秋学期授業/Fall	403
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0522】犯罪心理特論 [越智 啓太]	秋学期授業/Fall	405
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0523】知覚運動論演習 [吉村 浩一]	秋学期授業/Fall	406
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0524】音声言語科学演習 [田嶋 圭一]	秋学期授業/Fall	407
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0525】精神生理特論 [高橋 敏治]	秋学期授業/Fall	408
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0526】臨床心理特論 [中村 玲子]	春学期授業/Spring	409
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0527】発達心理特論 [渡辺 弥生]	秋学期授業/Fall	410

心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0528】	障害児心理特論〔奥田 健次〕	秋学期集中	411
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0529】	人格心理特論〔大森 美香〕	春学期授業/Spring	413
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0530】	言語心理特論〔福田 由紀〕	秋学期授業/Fall	414
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0531】	精神保健特論〔高橋 敏治〕	春学期授業/Spring	416
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0532】	学校カウンセリング演習〔渡辺 弥生〕	春学期授業/Spring	417
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0533】	発達行動特論〔島宗 理〕	春学期授業/Spring	419
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0534】	生徒指導特論〔小澤 真〕	秋学期授業/Fall	420
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0535】	言語心理演習〔福田 由紀〕	春学期授業/Spring	422
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0536】	学校コンサルテーション特論〔島宗 理〕	秋学期授業/Fall	423
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0537】	心理教育アセスメント特論〔杉山 崇〕	秋学期授業/Fall	424
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0538】	心理教育アセスメント演習〔熊 仁美〕	春学期集中	425
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0539】	スポーツ心理特論〔荒井 弘和〕	春学期授業/Spring	427
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0540】	健康心理特論〔林 容市〕	秋学期授業/Fall	428
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0541】	心理研究法特論〔吉村 浩一〕	春学期授業/Spring	429
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0542】	応用心理統計Ⅰ〔山際 勇一郎〕	春学期授業/Spring	430
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0543】	応用心理統計Ⅱ〔山際 勇一郎〕	秋学期授業/Fall	431
心理学専攻(博士後期課程)	【X0545】	心理学特殊研究Ⅰ〔島宗 理〕	春学期授業/Spring	432
心理学専攻(博士後期課程)	【X0546】	心理学特殊研究Ⅱ〔島宗 理〕	秋学期授業/Fall	434
心理学専攻(博士後期課程)	【X0547】	心理学特殊研究Ⅰ〔藤田 哲也〕	春学期授業/Spring	435
心理学専攻(博士後期課程)	【X0548】	心理学特殊研究Ⅱ〔藤田 哲也〕	秋学期授業/Fall	436
心理学専攻(博士後期課程)	【X0549】	心理学特殊研究Ⅰ〔高橋 敏治〕	春学期授業/Spring	437
心理学専攻(博士後期課程)	【X0550】	心理学特殊研究Ⅱ〔高橋 敏治〕	秋学期授業/Fall	439
心理学専攻(博士後期課程)	【X0551】	心理学特殊研究Ⅰ〔越智 啓太〕	春学期授業/Spring	440
心理学専攻(博士後期課程)	【X0552】	心理学特殊研究Ⅱ〔越智 啓太〕	秋学期授業/Fall	441
心理学専攻(博士後期課程)	【X0553】	心理学特殊研究Ⅰ〔田嶋 圭一〕	春学期授業/Spring	442
心理学専攻(博士後期課程)	【X0554】	心理学特殊研究Ⅱ〔田嶋 圭一〕	秋学期授業/Fall	443
心理学専攻(博士後期課程)	【X0555】	心理学特殊研究Ⅰ〔荒井 弘和〕	春学期授業/Spring	444
心理学専攻(博士後期課程)	【X0556】	心理学特殊研究Ⅱ〔荒井 弘和〕	秋学期授業/Fall	445
心理学専攻(博士後期課程)	【X0557】	心理学特殊研究Ⅰ〔渡辺 弥生〕	春学期授業/Spring	446
心理学専攻(博士後期課程)	【X0558】	心理学特殊研究Ⅱ〔渡辺 弥生〕	秋学期授業/Fall	448
心理学専攻(博士後期課程)	【X0559】	心理学英語論文作成指導〔田嶋 圭一〕	秋学期集中	449
心理学専攻(博士後期課程)	【X0560】	精神生理学特殊講義〔高橋 敏治〕	春学期授業/Spring	450
心理学専攻(博士後期課程)	【X0561】	言語心理学特殊講義〔福田 由紀〕	春学期授業/Spring	451
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0600】	日本文学特殊演習A〔加藤 昌嘉〕	春学期授業/Spring	452
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0601】	日本文学特殊演習B〔加藤 昌嘉〕	秋学期授業/Fall	453
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0602】	日本文学特殊演習A〔坂本 勝〕	春学期授業/Spring	454
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0603】	日本文学特殊演習B〔坂本 勝〕	秋学期授業/Fall	455
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0604】	日本文学特殊演習A〔伊海 孝充〕	春学期授業/Spring	456
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0605】	日本文学特殊演習B〔伊海 孝充〕	秋学期授業/Fall	457
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0606】	日本文学特殊演習A〔スティーヴン・ネルソン〕	春学期授業/Spring	458
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0607】	日本文学特殊演習B〔スティーヴン・ネルソン〕	秋学期授業/Fall	459
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0608】	日本文学特殊演習A〔中丸 宣明〕	春学期授業/Spring	460
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0609】	日本文学特殊演習B〔中丸 宣明〕	秋学期授業/Fall	461
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0610】	日本文学特殊演習A〔藤村 耕治〕	春学期授業/Spring	462
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0611】	日本文学特殊演習B〔藤村 耕治〕	秋学期授業/Fall	463
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0612】	日本文学特殊演習A〔山中 玲子〕	春学期授業/Spring	464
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0613】	日本文学特殊演習B〔山中 玲子〕	秋学期授業/Fall	465
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0614】	日本文学特殊演習A〔小林 ふみ子〕	春学期授業/Spring	466
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0615】	日本文学特殊演習B〔小林 ふみ子〕	秋学期授業/Fall	467
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0616】	日本文学特殊演習A〔宮本 圭造〕	春学期授業/Spring	467
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0617】	日本文学特殊演習B〔宮本 圭造〕	秋学期授業/Fall	468
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0618】	日本文学特殊演習A〔田中 和生〕	春学期授業/Spring	469
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0619】	日本文学特殊演習B〔田中 和生〕	秋学期授業/Fall	470
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0620】	日本文学特殊演習A〔尾谷 昌則〕	春学期授業/Spring	471
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0621】	日本文学特殊演習B〔尾谷 昌則〕	秋学期授業/Fall	472
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0622】	日本文芸学特殊研究A〔守安 敏久〕	春学期授業/Spring	473
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0623】	日本文芸学特殊研究B〔守安 敏久〕	秋学期授業/Fall	474

日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0624】 日本文芸批評史特殊研究 A [田中 和生] 春学期授業/Spring	475
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0625】 日本文芸批評史特殊研究 B [田中 和生] 秋学期授業/Fall	476
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0626】 日本古代文芸特殊研究 A [坂本 勝] 春学期授業/Spring	477
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0627】 日本古代文芸特殊研究 B [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	478
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0628】 日本中世文芸特殊研究 A [佐藤 明浩] 春学期授業/Spring	479
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0629】 日本中世文芸特殊研究 B [佐藤 明浩] 秋学期授業/Fall	480
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0630】 日本近世文芸特殊研究 A [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	481
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0631】 日本近世文芸特殊研究 B [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	482
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0632】 日本近代文芸特殊研究 A [中丸 宣明] 春学期授業/Spring	483
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0633】 日本近代文芸特殊研究 B [中丸 宣明] 秋学期授業/Fall	484
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0635】 日本言語学特殊研究 B [間宮 厚司] 秋学期授業/Fall	485
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1000】 国際日本学演習 I [安孫子 信] 春学期授業/Spring	486
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1001】 国際日本学演習 II [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	487
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1002】 国際日本学演習 I [西塚 俊太] 春学期授業/Spring	488
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1003】 国際日本学演習 II [西塚 俊太] 秋学期授業/Fall	489
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1004】 国際日本学演習 I [伊海 孝充] 春学期授業/Spring	491
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1005】 国際日本学演習 II [伊海 孝充] 秋学期授業/Fall	492
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1006】 国際日本学演習 I [遠藤 星希] 春学期授業/Spring	493
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1007】 国際日本学演習 II [遠藤 星希] 秋学期授業/Fall	494
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1008】 国際日本学演習 I [王 安] 春学期授業/Spring	495
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1009】 国際日本学演習 II [王 安] 秋学期授業/Fall	496
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1010】 国際日本学演習 I [尾谷 昌則] 春学期授業/Spring	498
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1011】 国際日本学演習 II [尾谷 昌則] 秋学期授業/Fall	499
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1012】 国際日本学演習 I [小秋元 段] 春学期授業/Spring	500
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1013】 国際日本学演習 II [小秋元 段] 秋学期授業/Fall	501
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1014】 国際日本学演習 I [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	502
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1015】 国際日本学演習 II [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	503
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1016】 国際日本学演習 I [坂本 勝] 春学期授業/Spring	504
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1017】 国際日本学演習 II [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	505
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1018】 国際日本学演習 I [スティーヴン・ネルソン] 春学期授業/Spring	506
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1019】 国際日本学演習 II [スティーヴン・ネルソン] 秋学期授業/Fall	507
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1021】 国際日本学演習 II [間宮 厚司] 秋学期授業/Fall	508
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1022】 国際日本学演習 I [川崎 貴子] 春学期授業/Spring	509
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1023】 国際日本学演習 II [川崎 貴子] 秋学期授業/Fall	510
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1024】 国際日本学演習 I [椎名 美智] 春学期授業/Spring	511
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1025】 国際日本学演習 II [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	512
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1026】 国際日本学演習 I [小口 雅史] 春学期授業/Spring	513
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1027】 国際日本学演習 II [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	514
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1028】 国際日本学演習 I [松本 剣志郎] 春学期授業/Spring	515
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1029】 国際日本学演習 II [松本 剣志郎] 秋学期授業/Fall	516
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1030】 国際日本学演習 I [伊藤 達也] 春学期授業/Spring	516
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1031】 国際日本学演習 II [伊藤 達也] 秋学期授業/Fall	517
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1032】 国際日本学演習 I [小原 丈明] 春学期授業/Spring	518
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1033】 国際日本学演習 II [小原 丈明] 秋学期授業/Fall	519
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1034】 国際日本学演習 I [米家 志乃布] 春学期授業/Spring	520
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1035】 国際日本学演習 II [米家 志乃布] 秋学期授業/Fall	521
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1036】 国際日本学演習 I [島田 雅彦] 春学期授業/Spring	522
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1037】 国際日本学演習 II [島田 雅彦] 秋学期授業/Fall	523
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1038】 国際日本学演習 I [謝 荔] 春学期授業/Spring	524
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1039】 国際日本学演習 II [謝 荔] 秋学期授業/Fall	525
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1040】 国際日本学演習 I [高田 圭] 春学期授業/Spring	526
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1041】 国際日本学演習 II [高田 圭] 秋学期授業/Fall	527
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1042】 国際日本学合同演習 I [椎名 美智] 春学期授業/Spring	528
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1043】 国際日本学合同演習 II [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	529

国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1044】	世界の日本論と日本学Ⅰ [リネベ・アンドレ] 春学期授業/Spring	530
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1045】	世界の日本論と日本学Ⅱ [リネベ・アンドレ] 秋学期授業/Fall	531
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1046】	国際日本学論文作成実習(英語)Ⅰ [ステイーヴン・ネルソン] 春学期授業/Spring	532
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1047】	国際日本学論文作成実習(英語)Ⅱ [ステイーヴン・ネルソン] 秋学期授業/Fall	533
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1048】	国際日本学論文作成実習(英語)Ⅰ [ヤナ・ウルバノヴァー] 春学期授業/Spring	535
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1049】	国際日本学論文作成実習(英語)Ⅱ [ヤナ・ウルバノヴァー] 秋学期授業/Fall	536
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1050】	日本語論文作成実習Ⅰ [山中 玲子] 春学期授業/Spring	537
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1051】	日本語論文作成実習Ⅱ [山中 玲子] 秋学期授業/Fall	538
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1052】	日本語論文作成基礎Ⅰ [幸田 佳子] 春学期授業/Spring	539
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1053】	日本語論文作成基礎Ⅱ [中島 久朱] 春学期授業/Spring	540
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1054】	日本語論文作成基礎Ⅲ [幸田 佳子] 秋学期授業/Fall	541
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1055】	日本語論文作成基礎Ⅳ [中島 久朱] 秋学期授業/Fall	542
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1056】	日本語論文作成基礎ⅤⅠ [藤田 百子] 春学期授業/Spring	543
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1057】	日本語論文作成基礎ⅤⅡ [中島 久朱] 春学期授業/Spring	544
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1058】	日本語論文作成基礎ⅤⅢ [藤田 百子] 秋学期授業/Fall	545
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1059】	日本語論文作成基礎ⅤⅣ [中島 久朱] 秋学期授業/Fall	546
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1060】	日本語の性格Ⅰ [滝浦 真人] 春学期授業/Spring	547
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1061】	日本語の性格Ⅱ [滝浦 真人] 秋学期授業/Fall	548
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1062】	伝統文化と民衆世界Ⅰ [ヤナ・ウルバノヴァー] 春学期授業/Spring	549
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1063】	伝統文化と民衆世界Ⅱ [横山 泰子] 秋学期授業/Fall	550
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1064】	日本の思想・西欧の思想Ⅰ [安孫子 信] 春学期授業/Spring	551
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1065】	日本の思想・西欧の思想Ⅱ [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	552
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1066】	史料から読む琉球とアジアⅠ [得能 壽美] 春学期授業/Spring	553
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1067】	史料から読む琉球とアジアⅡ [得能 壽美] 秋学期授業/Fall	554
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1068】	戦後沖縄と対外関係Ⅰ [明田川 融] 春学期授業/Spring	555
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1069】	戦後沖縄と対外関係Ⅱ [明田川 融] 秋学期授業/Fall	556
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1070】	仏教思想と仏教美術Ⅰ [高橋 悠介] 春学期授業/Spring	557
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1071】	仏教思想と仏教美術Ⅱ [高橋 悠介] 秋学期授業/Fall	558
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1072】	データ分析法Ⅰ [田中 邦佳] 春学期授業/Spring	559
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1073】	データ分析法Ⅱ [田中 邦佳] 秋学期授業/Fall	560
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1074】	サブカルチャー論Ⅰ [倉本 さおり] 春学期授業/Spring	561
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1075】	サブカルチャー論Ⅱ [倉本 さおり] 秋学期授業/Fall	563
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1076】	日本文学・国際日本学基礎演習 [本塚 亘] 秋学期授業/Fall	564
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1077】	日本文学・国際日本学論文作成基礎実習 [金子 広幸] 秋学期授業/Fall	565
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1078】	近代の文芸批評Ⅰ [田中 和生] 春学期授業/Spring	567
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1079】	近代の文芸批評Ⅱ [田中 和生] 秋学期授業/Fall	568
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1080】	神話と歌Ⅰ [坂本 勝] 春学期授業/Spring	569
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1081】	神話と歌Ⅱ [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	570
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1082】	平安時代の物語Ⅰ [加藤 昌嘉] 春学期授業/Spring	571
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1083】	平安時代の物語Ⅱ [加藤 昌嘉] 秋学期授業/Fall	572
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1084】	書誌学と文献学Ⅰ [佐藤 明浩] 春学期授業/Spring	573
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1085】	書誌学と文献学Ⅱ [佐藤 明浩] 秋学期授業/Fall	574
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1086】	能と楽劇Ⅰ [山中 玲子] 春学期授業/Spring	575
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1087】	能と楽劇Ⅱ [山中 玲子] 秋学期授業/Fall	576
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1088】	江戸の文芸と文化Ⅰ [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	577

国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1089] 江戸の文芸と文化Ⅱ [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	578
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1090] 江戸の思想史Ⅰ [高木 元] 春学期授業/Spring	579
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1091] 江戸の思想史Ⅱ [高木 元] 秋学期授業/Fall	580
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1092] 日本語の歴史と現在Ⅰ [竹林 一志] 春学期授業/Spring	581
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1093] 日本語の歴史と現在Ⅱ [竹林 一志] 秋学期授業/Fall	582
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1094] 現代日本語のしくみⅠ [前田 直子] 春学期授業/Spring	583
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1095] 現代日本語のしくみⅡ [前田 直子] 秋学期授業/Fall	584
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1096] 沖縄文芸史Ⅰ [福 寛美] 春学期授業/Spring	585
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1097] 沖縄文芸史Ⅱ [福 寛美] 秋学期授業/Fall	586
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1098] 女性文学Ⅰ [藤木 直実] 春学期授業/Spring	588
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1099] 女性文学Ⅱ [藤木 直実] 秋学期授業/Fall	589
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1100] 文学と映画Ⅰ [越川 道夫] 春学期授業/Spring	590
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1101] 文学と映画Ⅱ [越川 道夫] 秋学期授業/Fall	591
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1102] 文学と風土Ⅰ [庄司 達也] 春学期授業/Spring	592
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1103] 文学と風土Ⅱ [庄司 達也] 秋学期授業/Fall	593
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1104] 表現と社会 [内藤 裕之] 春学期授業/Spring	594
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1105] 編集理論 [仲俣 暁生] 秋学期授業/Fall	595
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1106] 英語発音法Ⅰ [高橋 豊美] 春学期授業/Spring	596
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1107] 英語発音法Ⅱ [高橋 豊美] 秋学期授業/Fall	597
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1108] 行動科学方法論Ⅰ [石川 潔] 春学期授業/Spring	599
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1109] 西欧比較文学Ⅰ [日中 鎮朗] 春学期授業/Spring	600
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1110] 西欧比較文学Ⅱ [日中 鎮朗] 秋学期授業/Fall	601
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1111] 西欧の思想Ⅰ [谷口 力] 春学期授業/Spring	603
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1112] 西欧の思想Ⅱ [伊藤 克己] 春学期集中	604
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1113] 東北アジアの文化伝播Ⅰ－１ [阿部 朝衛] 春学期授業/Spring	606
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1114] 東北アジアの文化伝播Ⅰ－２ [阿部 朝衛] 秋学期授業/Fall	607
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1115] 東北アジアの文化伝播Ⅱ－１ [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	608
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1116] 東北アジアの文化伝播Ⅱ－２ [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	609
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1117] 東北アジアの文化伝播Ⅲ－１ [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	610
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1118] 東北アジアの文化伝播Ⅲ－２ [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	611
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1119] 東アジアの律令文化Ⅰ－１ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	612
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1120] 東アジアの律令文化Ⅰ－２ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	613
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1121] 東アジアの律令文化Ⅱ－１ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	614
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1122] 東アジアの律令文化Ⅱ－２ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	615
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1123] 王権の政治文化Ⅰ [春名 宏昭] 春学期授業/Spring	616
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1124] 王権の政治文化Ⅱ [春名 宏昭] 秋学期授業/Fall	617
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1125] 天皇制と政務・儀礼Ⅰ [山口 英男] 春学期授業/Spring	618
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1126] 天皇制と政務・儀礼Ⅱ [山口 英男] 秋学期授業/Fall	619
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1127] 日本の歴史と宗教 [及川 亘] 春学期授業/Spring	620
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1128] 古文書から読む江戸社会・入門編Ⅰ [松本 剣志郎]	
	春学期授業/Spring	621
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1129] 古文書から読む江戸社会・入門編Ⅱ [松本 剣志郎]	
	秋学期授業/Fall	622
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1130] 江戸の地方文化Ⅰ [西沢 淳男] 春学期授業/Spring	623
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1131] 江戸の地方文化Ⅱ [西沢 淳男] 秋学期授業/Fall	624
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1132] 日本文化と西洋文化Ⅰ [森田 貴子] 春学期授業/Spring	625
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1133] 日本文化と西洋文化Ⅱ [森田 貴子] 秋学期授業/Fall	626
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1134] 日本の近代と国際社会Ⅰ [長井 純市] 春学期授業/Spring	627
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	[X1135] 日本の近代と国際社会Ⅱ [長井 純市] 秋学期授業/Fall	629

国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1136]	沖縄学入門Ⅰ [大里 知子]	春学期授業/Spring	630
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1137]	沖縄学入門Ⅱ [大里 知子]	秋学期授業/Fall	631
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1138]	アーカイブズ学Ⅰ [宮間 純一]	春学期授業/Spring	632
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1139]	アーカイブズ学Ⅱ [宮間 純一]	秋学期授業/Fall	633
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1140]	文書館管理研究Ⅰ [宇都宮美生・青木直己・葦名ふみ・新井浩文・富塚一彦・白石烈]	春学期授業/Spring	634
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1141]	文書館管理研究Ⅱ [宇都宮美生・青木睦・赤松道子・長谷部圭彦・山田太造・渡辺浩一]	秋学期授業/Fall	635
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1142]	記録史料学研究Ⅰ [松本 剣志郎]	春学期授業/Spring	636
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1143]	記録史料学演習Ⅰ [松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	637
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1144]	記録史料学研究Ⅱ [浅井 良亮]	春学期授業/Spring	638
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1145]	記録史料学演習Ⅱ [浅井 良亮]	秋学期授業/Fall	639
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1146]	日本の環境論Ⅰ [伊藤 達也]	春学期授業/Spring	640
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1147]	日本の環境論Ⅱ [伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	641
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1148]	日本の都市と産業Ⅰ [小原 丈明]	春学期授業/Spring	642
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1149]	日本の都市と産業Ⅱ [小原 丈明]	秋学期授業/Fall	643
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1150]	地図の文化誌Ⅰ [米家 志乃布]	春学期授業/Spring	644
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1151]	地図の文化誌Ⅱ [米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	645
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1153]	国際日本学研究Ⅰ [スティーヴン・ネルソン]	春学期授業/Spring	646
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1154]	国際日本学研究Ⅱ [スティーヴン・ネルソン]	秋学期授業/Fall	647
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1155]	国際日本学研究Ⅰ [川崎 貴子]	春学期授業/Spring	648
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1156]	国際日本学研究Ⅱ [川崎 貴子]	秋学期授業/Fall	649
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1157]	国際日本学研究Ⅰ [伊藤 達也]	春学期授業/Spring	650
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1158]	国際日本学研究Ⅱ [伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	651
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1159]	国際日本学研究Ⅰ [小口 雅史]	春学期授業/Spring	652
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1160]	国際日本学研究Ⅱ [小口 雅史]	秋学期授業/Fall	653
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1161]	国際日本学研究Ⅰ [小林 ふみ子]	春学期授業/Spring	654
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1162]	国際日本学研究Ⅱ [小林 ふみ子]	秋学期授業/Fall	655
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1163]	国際日本学研究Ⅰ [小秋元 段]	春学期授業/Spring	655
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1164]	国際日本学研究Ⅱ [小秋元 段]	秋学期授業/Fall	656
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1165]	国際日本学研究Ⅰ [安孫子 信]	春学期授業/Spring	657
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1166]	国際日本学研究Ⅱ [安孫子 信]	秋学期授業/Fall	658
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1167]	国際日本学研究Ⅰ [尾谷 昌則]	春学期授業/Spring	659
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1168]	国際日本学研究Ⅱ [尾谷 昌則]	秋学期授業/Fall	660
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1169]	国際日本学特殊講義BⅠ [滝浦 真人]	春学期授業/Spring	661
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1170]	国際日本学特殊講義BⅡ [滝浦 真人]	秋学期授業/Fall	662
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1171]	国際日本学特殊講義CⅠ [ヤナ・ウルバノヴァー]	春学期授業/Spring	663
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1172]	国際日本学特殊講義CⅡ [横山 泰子]	秋学期授業/Fall	664
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1173]	国際日本学特殊講義DⅠ [安孫子 信]	春学期授業/Spring	665
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1174]	国際日本学特殊講義DⅡ [安孫子 信]	秋学期授業/Fall	666
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1175]	国際日本学特殊講義EⅠ [得能 壽美]	春学期授業/Spring	667
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1176]	国際日本学特殊講義EⅡ [得能 壽美]	秋学期授業/Fall	668
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1177]	国際日本学特殊講義FⅠ [明田川 融]	春学期授業/Spring	669
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1178]	国際日本学特殊講義FⅡ [明田川 融]	秋学期授業/Fall	671
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1179]	国際日本学特殊講義GⅠ [高橋 悠介]	春学期授業/Spring	672
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1180]	国際日本学特殊講義GⅡ [高橋 悠介]	秋学期授業/Fall	673
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1181]	国際日本学特殊講義JⅠ [田中 邦佳]	春学期授業/Spring	674
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1182]	国際日本学特殊講義KⅠ [田中 邦佳]	秋学期授業/Fall	675
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1183]	国際日本学特殊講義LⅠ [倉本 さおり]	春学期授業/Spring	676
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1184]	国際日本学特殊講義LⅡ [倉本 さおり]	秋学期授業/Fall	677
国際日本学インスティテュート(修士課程)-必修科目	[X1186]	国際日本学演習Ⅱ [水野 和夫]	秋学期授業/Fall	679
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1187]	国際日本学研究Ⅰ [島田 雅彦]	春学期授業/Spring	680
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1188]	国際日本学研究Ⅱ [島田 雅彦]	秋学期授業/Fall	681
史学専攻(博士後期課程)	[X1300]	史学特殊演習AⅠ [小口 雅史]	春学期授業/Spring	682
史学専攻(博士後期課程)	[X1301]	史学特殊演習AⅡ [小口 雅史]	秋学期授業/Fall	683

史学専攻 (博士後期課程)	[X1302]	史学特殊演習 A I	[大塚 紀弘]	春学期授業/Spring	684
史学専攻 (博士後期課程)	[X1303]	史学特殊演習 A II	[大塚 紀弘]	秋学期授業/Fall	684
史学専攻 (博士後期課程)	[X1304]	史学特殊演習 A I	[松本 剣志郎]	春学期授業/Spring	685
史学専攻 (博士後期課程)	[X1305]	史学特殊演習 A II	[松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	685
史学専攻 (博士後期課程)	[X1306]	史学特殊演習 A I	[長井 純市]	春学期授業/Spring	686
史学専攻 (博士後期課程)	[X1307]	史学特殊演習 A II	[長井 純市]	秋学期授業/Fall	687
史学専攻 (博士後期課程)	[X1308]	史学特殊演習 A I	[後藤 篤子]	春学期授業/Spring	689
史学専攻 (博士後期課程)	[X1309]	史学特殊演習 A II	[後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	690
史学専攻 (博士後期課程)	[X1310]	史学特殊演習 A I	[小倉 淳一]	春学期授業/Spring	691
史学専攻 (博士後期課程)	[X1311]	史学特殊演習 A II	[小倉 淳一]	秋学期授業/Fall	692
史学専攻 (博士後期課程)	[X1312]	日本史学特殊講義 A I	[阿部 朝衛]	春学期授業/Spring	693
史学専攻 (博士後期課程)	[X1313]	日本史学特殊講義 A II	[阿部 朝衛]	秋学期授業/Fall	694
史学専攻 (博士後期課程)	[X1314]	日本史学特殊講義 B I	[山口 英男]	春学期授業/Spring	695
史学専攻 (博士後期課程)	[X1315]	日本史学特殊講義 B II	[山口 英男]	秋学期授業/Fall	696
史学専攻 (博士後期課程)	[X1316]	日本史学特殊講義 C I	[末柄 豊]	春学期授業/Spring	697
史学専攻 (博士後期課程)	[X1317]	日本史学特殊講義 C II	[末柄 豊]	秋学期授業/Fall	698
史学専攻 (博士後期課程)	[X1318]	日本史学特殊講義 D I	[落合 功]	春学期授業/Spring	699
史学専攻 (博士後期課程)	[X1319]	日本史学特殊講義 D II	[落合 功]	秋学期授業/Fall	700
史学専攻 (博士後期課程)	[X1320]	日本史学特殊講義 E I	[森田 貴子]	春学期授業/Spring	701
史学専攻 (博士後期課程)	[X1321]	日本史学特殊講義 E II	[森田 貴子]	秋学期授業/Fall	702
史学専攻 (博士後期課程)	[X1322]	東洋史学特殊講義 A I	[大島 誠二]	春学期授業/Spring	703
史学専攻 (博士後期課程)	[X1323]	東洋史学特殊講義 A II	[大島 誠二]	秋学期授業/Fall	704
史学専攻 (博士後期課程)	[X1324]	東洋史学特殊講義 B I	[水上 和則]	春学期授業/Spring	705
史学専攻 (博士後期課程)	[X1325]	東洋史学特殊講義 B II	[水上 和則]	秋学期授業/Fall	706
史学専攻 (博士後期課程)	[X1326]	西洋史学特殊講義 A I	[松原 俊文]	春学期授業/Spring	707
史学専攻 (博士後期課程)	[X1327]	西洋史学特殊講義 A II	[松原 俊文]	秋学期授業/Fall	708
史学専攻 (博士後期課程)	[X1328]	西洋史学特殊講義 B I	[篠原 琢]	春学期授業/Spring	709
史学専攻 (博士後期課程)	[X1329]	西洋史学特殊講義 B II	[篠原 琢]	秋学期授業/Fall	710
史学専攻 (博士後期課程)	[X1330]	西洋史学特殊講義 C I	[稲垣 春樹]	春学期授業/Spring	712
史学専攻 (博士後期課程)	[X1331]	西洋史学特殊講義 C II	[稲垣 春樹]	秋学期授業/Fall	713
史学専攻 (博士後期課程)	[X1332]	史学特殊演習 B I	[大塚 紀弘]	春学期授業/Spring	714
史学専攻 (博士後期課程)	[X1333]	史学特殊演習 B II	[大塚 紀弘]	秋学期授業/Fall	714
史学専攻 (博士後期課程)	[X1334]	史学特殊演習 B I	[小口 雅史]	春学期授業/Spring	715
史学専攻 (博士後期課程)	[X1335]	史学特殊演習 B II	[小口 雅史]	秋学期授業/Fall	716
史学専攻 (博士後期課程)	[X1336]	史学特殊演習 B I	[小倉 淳一]	春学期授業/Spring	717
史学専攻 (博士後期課程)	[X1337]	史学特殊演習 B II	[小倉 淳一]	秋学期授業/Fall	718
史学専攻 (博士後期課程)	[X1338]	史学特殊演習 B I	[後藤 篤子]	春学期授業/Spring	719
史学専攻 (博士後期課程)	[X1339]	史学特殊演習 B II	[後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	720
史学専攻 (博士後期課程)	[X1340]	史学特殊演習 B I	[長井 純市]	春学期授業/Spring	721
史学専攻 (博士後期課程)	[X1341]	史学特殊演習 B II	[長井 純市]	秋学期授業/Fall	722
史学専攻 (博士後期課程)	[X1342]	史学特殊演習 B I	[松本 剣志郎]	春学期授業/Spring	724
史学専攻 (博士後期課程)	[X1343]	史学特殊演習 B II	[松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	724

PHL600B1

言語分析哲学研究Ⅰ－Ⅰ

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「心の哲学」は現代の形而上学・認識論・倫理学を論じるためのカギとなる分野である。この授業では、①なぜ「心」が哲学の問題になるのか、②現代哲学はどのような方法によって「心」を論じるのか、③「心」の正体に関して、どのような議論に基づき、どのような主張がなされているか、を代表的論者の論文を読解しながら検討する。春学期は主に「意識」の問題が扱われる。

【到達目標】

現代の心の哲学の主要な立場、その論拠と問題点の正しい理解を獲得し、「心」の正体に関する各自の立場を確立するための基礎を形成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	教員による現代の心の哲学に関する一般的説明。
第 2 回	Rosenthal, D.M. Higher Order Theories of Consciousness	pp.239-241
第 3 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.241-243
第 4 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.243-245
第 5 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.245-247
第 6 回	Higher Order Theories of Consciousness,	pp.247-248
第 7 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.248-250
第 8 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.250-251
第 9 回	Balog, K Phenomenal Concepts	pp.292-294
第 10 回	Phenomenal Concepts	pp.294-296
第 11 回	Phenomenal Concepts	pp.296-298
第 12 回	Phenomenal Concepts	pp.299-300
第 13 回	Phenomenal Concepts	pp.300-302

第 14 回 Phenomenal Concepts pp.302-303

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Philosophy of Mind, Oxford 2009
授業時にコピーを配布する。

【参考書】

Descartes, Searl, Davidson, Kim, Dennett, Churchland 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60 %
ディスカッションでの貢献 40 %

【学生の意見等からの気づき】

読解とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
<研究テーマ>
パースペクティヴィズムの形而上学的可能性
<主要研究業績>
著訳書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline and objectives】

'Philosophy of Mind' is a key to discussing modern metaphysics, epistemology and ethics. We will consider (1)why Mind matters to Philosophy, (2)what methods modern Analytical philosophy uses in discussing Mind, and (3)on what arguments some of the main positions concerning Mind depend, through carefully reading the papers of representative modern authors. In Spring term we focus on consciousness.

PHL600B1

言語分析哲学研究 I - 2

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「心の哲学」は現代形而上学・認識論・倫理学を論じるためのカギとなる分野である。この講義では、①なぜ「心」が哲学の問題になるのか、②現代分析哲学はどのような方法によって「心」を論じるのか、③「心」の正体に関して、どのような議論に基づき、どのような主張がなされているか、を代表的論者の論文を読解しながら検討する。秋学期では主に「志向性」の問題が扱われる。

【到達目標】

現代の心の哲学の主要な立場、その論拠と問題点の正しい理解を獲得し、「心」の正体に関する各自の立場を確立するための基礎を形成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Balog,K Phenomenal Concepts	pp.304-305
第 2 回	Phenomenal Concepts	pp.305-307
第 3 回	Phenomenal Concepts	pp.307-309
第 4 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.381-382
第 5 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.382-384
第 6 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.384-386
第 7 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.386-387
第 8 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.387-389
第 9 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	389-390
第 10 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.390-392

第 11 回	Millikan, R.G Biosemantics	pp394-395
第 12 回	Millikan, R.G Biosemantics	pp.394-396
第 13 回	Millikan, R.G Biosemantics	pp.396-398
第 14 回	Millikan, R.G Biosemantics	pp.398-399

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Philosophy of Mind, Oxford Univ.Press 2009

授業時にコピーを配布する。

【参考書】

Descartes, Searl, Davidson, Kim, Dennett, Churchland 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%

ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

<研究テーマ>

パースペクティヴィズムと現代形而上学

<主要研究業績>

著書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline and objectives】

'Philosophy of Mind' is a key to discussing modern metaphysics, epistemology and ethics. We will consider (1)why Mind matters to Philosophy, (2)what methods modern Analytical philosophy uses to discuss Mind,and (3)on what arguments some of the main positions concerning Mind depend, through carefully reading the papers of representative modern authors. In Autumn Term we focus on Intentionality.

PHL500B1

言語分析哲学研究Ⅱ－１

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

H.Putnam の Pragmatism を精読し、プラグマティズムに関する一般的理解を得るとともに、特に Rorty のと論争点を検討し、現代の哲学的問題への多角的視点を獲得する。

【到達目標】

哲学の諸問題に取り組むための現代プラグマティズムの方法と議論に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

H.Putnam の 'Pragmatism' をテキストとして、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	教員による一般的説明
第 2 回	Pragmatism	pp.8-12
第 3 回	Pragmatism	pp.13-19
第 4 回	Pragmatism	pp.19-23
第 5 回	Pragmatism	pp.27-28
第 6 回	Pragmatism	pp.28-32
第 7 回	Pragmatism	pp.32-35
第 8 回	Pragmatism	pp.35-38
第 9 回	Pragmatism	pp.39-41
第 10 回	Pragmatism	pp.42-45
第 11 回	Pragmatism	pp.45-47
第 12 回	Pragmatism	6pp.47-49
第 13 回	Pragmatism	Rpp.49-52
第 14 回	まとめ	教員によるまとめと全員による ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。他の者はテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

H.Putnam, Pragmatism, Blackwell, 1995

テキストは各自購入しておくこと

【参考書】

Quine, Davidson, Putnam, Rorty 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%

ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

<研究テーマ>

パースペクティヴィズムと現代形而上学

<主要研究業績>

著訳書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアークメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline and objectives】

Through carefully reading H.Putnam's 'Pragmatism', we try to gain a deep insight into the contexts and perspectives of modern Pragmatism.

PHL500B1

言語分析哲学研究Ⅱ－2

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

H.Putnam の著作 *Pragmatism* とその他の何篇かの論文を精読し、プラグマティズムに関する一般的理解と得るとともに、特に Rorty のと論争点を検討し、現代の哲学的問題への多角的視点を獲得する。

【到達目標】

哲学の諸問題に取り組むための現代プラグマティズムの方法と議論に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

H.Putnam の '*Pragmatism*' をテキストとして、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	教員による一般的説明
第 2 回	Pragmatism	pp.57-61
第 3 回	Pragmatism	pp.61-64
第 4 回	Pragmatism	pp.64-68
第 5 回	Pragmatism	pp.68-71
第 6 回	Pragmatism	pp.71-75
第 7 回	William James's Ideas	pp.217-219
第 8 回	William James's Ideas	pp.219-221
第 9 回	William James's Ideas	pp.222-224
第 10 回	William James's Ideas	pp.224-226
第 11 回	William James's Ideas	pp.226-228
第 12 回	William James's Ideas	pp.228-230
第 13 回	William James's Ideas	pp.230-231
第 14 回	まとめ	教員によるまとめと全員によるディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。他の者はテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

H.Putnam, *Pragmatism*, Blackwell, 1995,(各自購入しておくこと)

Realms with a Human Face, Harvard Univ. Press, 1990

【参考書】

Quine, Davidson, Rorty 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%

ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

＜研究テーマ＞

パースペクティヴィズムと現代形而上学

＜主要研究業績＞

著訳書 「できごとと対象－ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline and objectives】

Through carefully reading H.Putnam's '*Pragmatism*' and some of his papers, we try to gain an insight into the contexts and perspectives of modern Pragmatism.

PHL600B1

形而上学研究Ⅰ－1

齋藤 元紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、マルティン・ハイデガー著『存在と時間』（M. Heidegger, *Sein und Zeit*）の読解をとおり、学生が批判的な思考力を獲得することを目指す。

【到達目標】

この授業では、ハイデガーの著『存在と時間』の精密な読解と討論をとおり、学生が（１）哲学的文章を原文で読み解き、（２）彼の存在論についての理解を深め、さらに（３）自ら哲学的な批判的考察ができるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ハイデガーの著『存在と時間』は、従来のさまざまな哲学思想を引き受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をとおり展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の正確な読解をとおり、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語（日・英・仏）による参加にも配慮する。春学期は、『存在と時間』第一部第二編第 57 節から読み始める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション①	授業の進め方の説明・ハイデガー哲学の全体像
第 2 回	イントロダクション②	『存在と時間』の全体像
第 3 回	イントロダクション③	『存在と時間』の基本思想
第 4 回	第 57 節の読解①	良心の呼び声の現象的諸性格
第 5 回	第 57 節の読解②	良心の呼び声の存在論的性格
第 6 回	第 57 節の読解③	関心の呼び声としての良心
第 7 回	第 58 節の読解①	呼び声の告知する負い目
第 8 回	第 58 節の読解②	負い目の現象的諸性格
第 9 回	第 58 節の読解③	無性の根拠存在としての負い目
第 10 回	第 58 節の読解④	無性としての関心
第 11 回	第 58 節の読解⑤	良心を持とうと意志すること
第 12 回	第 59 節の読解①	良心の実存論的解釈と通俗的良心解釈との連関
第 13 回	第 59 節の読解②	通俗的良心解釈に対する反駁
第 14 回	第 59 節の読解③	通俗的良心解釈の基礎としての良心の根源的意味

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前にテキストを精読したうえで参加すること。また事典や関連文献を参考に、主要な概念や術語の意義についても確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1927.

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*(Gesamtausgabe Bd. 2), Vittorio Klostermann, 1977.

原佑・渡邊二郎訳『存在と時間Ⅱ』中公クラシックス、2003 年。

細谷貞夫訳『存在と時間』ちくま学芸文庫、1994 年。

熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫、2013 年。

高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2013 年。

【参考書】

①木田元『存在と時間の構築』岩波現代文庫、2000 年。

②細川亮一『ハイデガー哲学の射程』創文社、2000 年。

③齋藤元紀『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局、2012 年。

④齋藤元紀（共編著）『始まりのハイデガー』晃洋書房、2015 年。

⑤渡邊二郎編『ハイデガー『存在と時間』入門』講談社学術文庫、2011 年。

⑥ A. Luckner, *Martin Heidegger: » Sein und Zeit «*, 2. Aufl., Schöningh 2001.

⑦ M. King(Author), J. Llewelyn(ed.), *A Guide to Heidegger's Being and Time*, SUNY Press, 2001.

⑧ T. Rentsch(Hg.), *Sein und Zeit*, 2. Aufl., Akademie Verlag 2008.

⑨ M. A. Wrathall(ed.), *The Cambridge Companion to Heidegger's 'Being and Time'*, Cambridge University Press, 2013.

⑩ M. Heinz und T. Bender (Hg.), *Sein und Zeit neu verhandelt*, Felix Meiner Verlag, 2019.

【成績評価の方法と基準】

上記「到達目標」で示した達成度を授業中の参加の度合（35 %）、貢献度（35 %）に加え、レポート（30 %）を考慮し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

厳密な読解と徹底した議論をとおり哲学的思考を深める講義は例年好評を得ている。本年も基本的にその形式を踏襲し、ハイデガー存在論のさらなる理解を進めてゆく予定。積極的な授業参加を期待する。

【その他の重要事項】

ドイツ語辞書（紙・電子媒体いずれでもよい）を持参のこと。ただし初級用ではなく、『独和大辞典』（小学館）クラスが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

哲学・倫理学・思想史。

<研究テーマ>

ハイデガーをはじめとする現代哲学・現象学・解釈学・実存哲学の研究。環境思想や身体論等の応用哲学・応用倫理学研究。哲学対話をはじめとする哲学教育研究。

<主要研究業績>

『「存在と時間」——ハイデガーの衝撃』（『ドイツ文化事典』丸善出版、2020 年）、「存在論の神話」（『現代思想』青土社、2018 年 2 月臨時増刊号）、「気遣いぬもの」（ハイデガー研究会編『Zuspiel』第 1 号、2017 年）『終わりのなきデリダ——ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』（共編著、法政大学出版局、2016 年）、『21 世紀の哲学をひらく——現代思想の最前線への招待』（共編著、ミネルヴァ書房、2016 年）、『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か——黒ノートをめぐる討議』（共編著、水声社、2015 年）、『現代日本の四つの危機』（編著、講談社選書メチエ、2015 年）、『始まりのハイデガー』（共編著、晃洋書房、2015 年）、『ハイデガー読本』（共著、法政大学出版局、2015 年）『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』（法政大学出版局、2012 年）、『科学と技術への問い——ハイデガー研究会第三論集』（共編著、理想社、2012 年）、『概説 現代の哲学・思想』（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）、『ヨーロッパ現代哲学への招待』（共編著、梓出版社、2009 年）、『ハイデッガー『存在と時間』の現在 刊行 80 周年記念論集』（共著、南窓社、2007 年）、『ハイデッガーと思索の将来——哲学への〈寄与〉』（共著、理想社、2006 年）。リチャード・J・バーンスタイン『暴力——手すりなき思考』（監訳、法政大学出版局、2020 年）、ユルゲン・トラバント『人文主義の言語思想——フンボルトの伝統』（監訳、岩波書店、2020 年）、ギュンター・フィガール『問いと答え——ハイデガーについて』（監訳、法政大学出版局、2017 年）、トム・ロックモア『カントの軌跡のなかで——二十世紀の哲学』（共訳、法政大学出版局、2008 年）。

【Outline and objectives】

In this course, students will read Martin Heidegger's "Being and Time". On top of deepening their understandings of this book, this course aims for students to acquire the ability to better think in a critical and philosophical manner.

PHL600B1

形而上学研究Ⅰ－2

齋藤 元紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、マルティン・ハイデガー著『存在と時間』(M. Heidegger, *Sein und Zeit*) の読解をとおして、学生が批判的な思考力を獲得することを目指す。

【到達目標】

この授業では、ハイデガーの著『存在と時間』の精密な読解とそれを受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をとおして展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の正確な読解をとおして、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語（日・英・仏）による参加にも配慮する。秋学期は、春学期に続き『存在と時間』第一部第二編第 60 節から読み進める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ハイデガーの著『存在と時間』は、従来のさまざまな哲学思想を引き受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をとおして展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の正確な読解をとおして、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語（日・英・仏）による参加にも配慮する。秋学期は、春学期に続き『存在と時間』第一部第二編第 60 節から読み進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション①	授業の進め方の説明・ハイデガー哲学の概要
第 2 回	イントロダクション②	『存在と時間』の全体像
第 3 回	イントロダクション③	『存在と時間』の基本思想
第 4 回	第 60 節の読解①	覚悟性
第 5 回	第 60 節の読解②	状況
第 6 回	第 60 節の読解③	良心において証される本来的存在可能の実存論的構造
第 7 回	第 61 節の読解	現存在の本来的な全体存在の確定から時間性の現象的打開への方法的進路の素描
第 8 回	第 62 節の読解①	先駆的覚悟性
第 9 回	第 62 節の読解②	先駆的覚悟性としての現存在の実存的＝本来的な全体存在可能
第 10 回	第 63 節の読解①	関心の存在意味の解釈のために得られた解釈学的状況
第 11 回	第 63 節の読解②	実存論的分析論全般的方法的性格
第 12 回	第 64 節の読解①	関心と自己性
第 13 回	第 64 節の読解②	常住性と自立性
第 14 回	まとめ	『存在と時間』の射程と制約

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前にテキストを精読したうえで参加すること。また事典や関連文献を参考に、主要な概念や術語の意義についても確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1927.

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*(Gesamtausgabe Bd. 2), Vittorio Klostermann, 1977.

原佑・渡邊二郎訳『存在と時間Ⅱ』中公クラシックス、2003 年。

細谷貞夫訳『存在と時間』ちくま学芸文庫、1994 年。

熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫、2013 年。

高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2013 年。

【参考書】

①木田元『存在と時間の構築』岩波現代文庫、2000 年。

②細川亮一『ハイデガー哲学の射程』創文社、2000 年。

③齋藤元紀『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局、2012 年。

④齋藤元紀（共編著）『始まりのハイデガー』晃洋書房、2015 年。

⑤渡邊二郎編『ハイデガー『存在と時間』入門』講談社学術文庫、2011 年。

⑥ A. Luckner, *Martin Heidegger: » Sein und Zeit «*, 2. Aufl., Schöningh 2001.

⑦ M. King(Author), J. Llewelyn(ed.), *A Guide to Heidegger's Being and Time*, SUNY Press, 2001.

⑧ T. Rentsch(Hg.), *Sein und Zeit*, 2. Aufl., Akademie Verlag 2008.

⑨ M. A. Wrathall(ed.), *The Cambridge Companion to Heidegger's 'Being and Time'*, Cambridge University Press, 2013.

⑩ M. Heinz und T. Bender (Hg.), *Sein und Zeit neu verhandelt*, Felix Meiner Verlag, 2019.

【成績評価の方法と基準】

上記「到達目標」で示した達成度を授業中の参加の度合（35 %）、貢献度（35 %）に加え、レポート（30 %）を考慮し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

厳密な読解と徹底した議論をとおして哲学的思考を深める講義は例年好評を得ている。本年も基本的にその形式を踏襲し、ハイデガー存在論のさらなる理解を進めてゆく予定。積極的な授業参加を期待する。

【その他の重要事項】

ドイツ語辞書（紙・電子媒体いずれでもよい）を持参のこと。ただし初級用ではなく、『独和大辞典』（小学館）クラスが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

哲学・倫理学・思想史。

<研究テーマ>

ハイデガーをはじめとする現代哲学・現象学・解釈学・実存哲学の研究。環境思想や身体論等の応用哲学・応用倫理学研究。哲学対話をはじめとする哲学教育研究。

<主要研究業績>

「『存在と時間』——ハイデガーの衝撃」（『ドイツ文化事典』丸善出版、2020 年）、「存在論の神話」（『現代思想』青土社、2018 年 2 月臨時増刊号）、「気遣いえぬもの」（ハイデガー研究会編『Zuspiel』第 1 号、2017 年）『終わりのなきデリダ——ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』（共編著、法政大学出版局、2016 年）、『21 世紀の哲学をひらく——現代思想の最前線への招待』（共編著、ミネルヴァ書房、2016 年）、『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か——黒ノートをめぐる討議』（共編著、水声社、2015 年）、『現代日本の四つの危機』（編著、講談社選書メチエ、2015 年）、『始まりのハイデガー』（共編著、晃洋書房、2015 年）、『ハイデガー読本』（共著、法政大学出版局、2015 年）『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』（法政大学出版局、2012 年）、『科学と技術への問い——ハイデッガー研究会第三論集』（共編著、理想社、2012 年）、『概説 現代の哲学・思想』（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）、『ヨーロッパ現代哲学への招待』（共編著、梓出版社、2009 年）、『ハイデッガー『存在と時間』の現在 刊行 80 周年記念論集』（共著、南窓社、2007 年）、『ハイデッガーと思索の将来——哲学への〈寄与〉』（共著、理想社、2006 年）。リチャード・J・バーンスタイン『暴力——手すりなき思考』（監訳、法政大学出版局、2020 年）、ユルゲン・トラバント『人文主義の言語思想——フンボルトの伝統』（監訳、岩波書店、2020 年）、ギュンター・フィガール『問いと答え——ハイデガーについて』（監訳、法政大学出版局、2017 年）、トム・ロックモア『カントの航跡のなかで——二十世紀の哲学』（共訳、法政大学出版局、2008 年）。

【Outline and objectives】

In this course, students will read Martin Heidegger's "Being and Time". On top of deepening their understandings of this book, this course aims for students to acquire the ability to better think in a critical and philosophical manner.

PHL600B1

古代哲学史研究Ⅰ－1

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度春学期は第11巻第9章から第12巻第5章までを読解する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスには世界や事象を認識するにあたり彼独特の思考法がある。この思考法はさまざまなテーマについて多様な仕方でも繰り返される。正確な理解を得るためには、その思考法のパターンとその基礎にある概念やその使用法を理解し習熟することが第一の目標となる。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているだけに、本書について正確な理解を得ることは、後代の哲学の理解に際しても重要である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古典ギリシア語原典を訳読できる履修者が出席する場合、その者がまず原典を訳読し、次にそれ以外の履修者が英訳テキストを訳読する、という形式ですすめる。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約と内容の検討、討議をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	春学期イントロダクション	アリストテレスの基本用語 『自然学』第3巻第1－3章からの抜粋
第2回	第11巻第9章の精読・検討・理解	可能態、現実態、運動
第3回	第11巻第10章の精読・検討・理解	『自然学』第3巻第4，5，7章からの抜粋 無限
第4回	第11巻第10章の精読・検討・理解（続）	無限（続）
第5回	第11巻第11章の精読・検討・理解	『自然学』第5巻第1章からの抜粋 変化と運動
第6回	第11巻第12章の精読・検討・理解	『自然学』第5巻第2章からの抜粋 運動
第7回	第12巻第1章の精読・検討・理解	ウーシアー
第8回	第12巻第1章の精読・検討・理解（続）	ウーシアー（続）
第9回	第12巻第2章の精読・検討・理解	変化の原理
第10回	第12巻第3章の精読・検討・理解	質料と形相
第11回	第12巻第4章の精読・検討・理解	対抗性
第12回	第12巻第4章の精読・検討・理解（続）	対抗性（続）

第13回	第12巻第5章の精読・検討・理解	可能態と現実態
第14回	第12巻第5章の精読・検討・理解（続）	可能態と現実態（続）
	まとめ	学期の学習内容の確認と整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業計画にもとづき、次の授業が対象とする範囲を予習する（訳読のための準備し、疑問点、課題点を明確にしておく）。『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle's Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W.Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristoteis Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit W. Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出隆訳『形而上学』（岩波文庫 上・下 第11巻以下は下巻に収録）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポート内容、によって評価する（各25％ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報を履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅰ－2（秋学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績> 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）
「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年）
「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）
「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第80号 2020年）

【Outline and objectives】

In this class we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we will read from Book 11, ch.9 to Book 12, ch.4. The objects of the class are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

PHL600B1

古代哲学史研究Ⅰ－Ⅱ

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度秋学期は第12巻第6章から第12巻第9章までを読解する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているが、可能なかぎり正確な読解をすすめることにより、古代哲学を専攻する、しないにかかわらず、本書に関して哲学的にも正確なアリストテレス哲学の内容理解をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古代哲学を専門とする履修者がまず古典ギリシア語原典を訳読し、次に古代哲学を専攻としない履修者が英訳テキストを訳読する、という形式です（ただし履修生の状況を勘案する）。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約とその検討、討議をおこなう理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	秋学期イントロダクション	永遠なる不動の非感覚的ウーシア
	第12巻第6章の精読・検討・理解	
第2回	第12巻第6章の精読・検討・理解（続）	永遠なる不動の非感覚的ウーシア（続）
第3回	第12巻第7章の精読・検討・理解	不動の動者1
第4回	第12巻第7章の精読・検討・理解（続）	不動の動者1（続）
第5回	第12巻第8章の精読・検討・理解	不動の動者2
第6回	第12巻第8章の精読・検討・理解（続）	不動の動者2（続）
第7回	第12巻第9章の精読・検討・理解	思惟の思惟
第8回	第12巻第9章の精読・検討・理解（続）	思惟の思惟（続）
第9回	第12巻第10章の精読・検討・理解	善
第10回	第12巻第10章の精読・検討・理解（続）	善（続）
第11回	第13巻1章の精読・検討・理解	不動で永遠適的なウーシア
第12回	第13巻1章の精読・検討・理解（続）	不動で永遠適的なウーシア（続）
第13回	第13巻第2章の精読・検討・理解	数学的对象

第14回 第13巻第2章の精読・検討・理解（続）
数学的对象（続）
読・検討・理解（続） 当学期の学習内容の確認
まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する。
『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle's Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W. Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristoteis Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit W. Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出隆訳『形而上学』（岩波文庫）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポートの内容、によって評価する（各25%ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅰ－Ⅰ（春学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績>
「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」
（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」
（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）
「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年）
「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）
「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」
（『法政大学文学部紀要』第80号 2020年）

【Outline and objectives】

In this class we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we will read from Book 11, ch. 10 to Book 12 ch. 5. The objects of the class are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

PHL500B1

古代哲学史研究Ⅱ－１

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、西洋哲学の大本にあるギリシア哲学の古典の中から『ソクラテスの弁明』と『クリトン』を読む。ソクラテスはどのような理由で裁判にかけられ、何を法廷で語り、どのようにして死刑判決は確定したのか。また、死刑執行を目前に脱獄の準備をととのえ、ソクラテスを連れ出そうとする親友クリトンに対して、ソクラテスはどのような理由で獄中にとどまったのか——。ソクラテスの弟子プラトンが著わした、これら二つの作品をととして、ソクラテスその人の思想を探り、その思想はわれわれにとってどのような意義をもつのかを考察する。このような考察により、哲学・思想がもつ生命力をわがものとしてとらえてみるのがテーマである。

なお、この授業は夜間授業として、社会人の履修も予想している。実際の履修者の状況により、授業テーマの修正もありうる。

【到達目標】

『弁明』と『クリトン』の内容（各場面）を思い描きながら、そこで扱われている「問題」を正確にとらえ、その「問題」についてみずから考え、その考えを他者に伝えることができるようになること、そして上の【授業の目的】に記した主旨をふまえ「哲学とは何か」について自分なりの考えをもつことが到達目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は毎回報告者（発表者）が担当箇所の「要旨」、「重要事項」、「疑問点・考察」を発表し、それを糸口にして出席者で討議し内容理解を深める。履修者は必ず１回は報告（発表）を担当する。詳細は春学期の初回時に説明するので、必ず出席すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方の詳細説明と『ソクラテスの弁明』『クリトン』の概略説明。
2	『ソクラテスの弁明』（以下『弁明』）第 1－5 章の発表にもとづく検討・理解	ソクラテスの法廷における基本姿勢、神託事件
3	『弁明』第 6－10 章の発表にもとづく検討・理解	無知の自覚
4	『弁明』第 11－15 章の発表にもとづく検討・理解	メレトスへの反論
5	『弁明』第 16－20 章の発表にもとづく検討・理解	ソクラテスの愛知・哲学
6	『弁明』第 21－25 章の発表にもとづく検討・理解	ソクラテスの正義
7	『弁明』第 26－30 章の発表にもとづく検討・理解	有罪判決へのソクラテスの対応

- 8 『弁明』第 31－33 章 ソクラテスの生死の発表にもとづく検討・理解／『弁明』のまとめ
- 9 『クリトン』第 1－5 クリトンによる脱獄の説得章の発表にもとづく検討・理解
- 10 『クリトン』第 6－10 ソクラテスの基本姿勢、よく生き章の発表にもとづく検討・理解
- 11 『クリトン』第 11－15 章の発表にもとづく検討・理解 国家・国法と国民のありかた
- 12 『クリトン』第 16－17 章の発表にもとづく検討・理解／『クリトン』のまとめ なぜ脱獄しないのか
- 13 『弁明』、『クリトン』 ソクラテスの哲学・思想における思想の検討・理解
- 14 全体のまとめ／レポー 哲学とは何かト提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎回の授業で疑問点を提出できるように『ソクラテスの弁明』、『クリトン』を熟読し内容をよく考えること。参考文献を読むこと。

【テキスト（教科書）】

田中美知太郎訳を使用する。新潮文庫、中公クラシックス（『世界の名著』）、岩波書店版『プラトン全集』などにある。各自用意すること。

【参考書】

『ソクラテス』（岩波新書）。その他は必要時応じて適宜、指示する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容の到達度に照らして、① 授業での報告・発表 (20%) ② 毎回の討議への貢献度 (20%) ③ 小レポート (20%) ④ 期末レポートの内容 (40%) により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストを正確に読解することが授業の第一の目標であるが、可能なかぎり、第二次文献も読解・検討したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

秋学期の「古代哲学史研究Ⅱ－２」とともに履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績>
「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第 48 号 2003 年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成 14～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 2006 年）「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006 年）「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 59 号 岩波書店 2011 年）「『哲人王の行方』補説」（『西洋古典研究会論集』第 21 号 2012 年）「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第 80 号 2020 年）

【Outline and objectives】

In this class we read Plato's "The Apology of Socrates" and "Crito". The objects of the class are careful reading, understanding of the ways the characters think (and the author thinks) and estimation of their (his) thoughts, and by practicing these works students will go into training for their own thinking.

PHL500B1

古代哲学史研究Ⅱ－２

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「古代哲学史研究Ⅱ－１」に続き、ソクラテスの思想、哲学を探究する。この授業では、プラトンとは違う角度からソクラテス像を残したクセノポン（クセノフォン）の著作を読む。それは『ソクラテスの思い出』（『ソクラテス言行録』）である。クセノポンの著作はその成立事情もあり、プラトンとは異なる扱いが必要であるが、プラトンとは異なる見方を比較し、ソクラテス解釈の別の側面を確認する。（今学期は上の著作の第2巻第6章までを精読する。）

【到達目標】

正確な読解と緻密な分析により、プラトンとは異なるクセノポンのソクラテス像を明らかにすること。歴史上のソクラテス理解にとって、クセノポンの著作には独特の制限があるが、クセノポンの著作のどこかにソクラテスを新たに見つめ直す視点がないかを可能な限り探求することが到達目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

履修者は毎回、正確な内容要約と読解上の課題、問題点、解釈を発表し、これをもとに討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	クセノポンの生涯と著作
第2回	『ソクラテスの思い出』（『ソクラテス言行録』）第1巻第1章の検討と理解	クセノポンが理解した訴状
第3回	第1巻第2章の検討と理解	訴状への反論その1
第4回	承 前	訴状への反論その2
第5回	承 前	訴状への反論その3
第6回	第1巻第3章の検討と理解	神々への供儀 節制
第7回	第1巻第4章の検討と理解	神々について
第8回	第1巻第5章の検討と理解	快樂について
第9回	第1巻第6章の検討と理解	アンティポンの対話 哲学者について
第10回	第1巻第7章の検討と理解	徳と名声
第11回	第2巻第1章の検討と理解	支配者の自制心 労苦について
第12回	第2巻第2－3章の検討と理解	両親の恩 兄弟愛
第13回	第2巻第4－6章	友情について
第14回	当面のまとめ	クセノポンはソクラテスに何を見て何を得たのか

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

『ソクラテスの思い出』（『ソクラテス言行録』）全巻を精読すること。

【テキスト（教科書）】

『ソクラテスの思い出』（岩波文庫）、『ソクラテス言行録1』（西洋古典叢書、京都大学学術出版会）のどちらかを各自用意すること。

【参考書】

田中美知太郎『ソクラテス』（岩波新書）その他は随時、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容の到達度に照らして、① 授業での報告・発表（20%）② 毎回の討議への貢献度（20%）③ 小レポート（20%）④ 期末レポートの内容（40%）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅱ－１（春学期）と併せて受講することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞ 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
＜主要研究業績＞

「正しい人の快樂—プラトン『国家』第九巻における快樂論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）

「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書2006年）「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社2006年）「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年）「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B,739A-E,875-C-D-」（『法政大学文学部紀要』第80号2020年）

【Outline and objectives】

In this class we read Xenophon's "Memorabilia(Book I.1-II.6)". The objects of the class are careful reading of it and by which we can compare Xenophon's understandings of Socrates with Plato's one. Doing this work we will try to get another aspects of Socrates' thoughts.

PHL600B1

論理学研究 I - 1

安東 祐希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ゲンツェンの基本定理の証明を学ぶ。

【到達目標】

基本定理の証明を細部にわたり理解し、自ら証明を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

[授業形式：対面授業]

原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	証明の方針	論文 (III:3.1 前文) 部分
第 2 回	自由変数の付け替え	論文 (III:3.10) 部分
第 3 回	左上式が公理	論文 (III:3.111-112) 部分
第 4 回	左上式が右弱化	論文 (III:3.113.1-2) 部分
第 5 回	上式が左右連言等	論文 (III:3.113.31-32) 部分
第 6 回	上式が左右全称等	論文 (III:3.113.33-36) 部分
第 7 回	右階数が 1 より大	論文 (III:3.121 前文) 部分
第 8 回	I が左構造規則	論文 (III:3.121.21) 部分
第 9 回	I の上式が一つ	論文 (III:3.121.22) 部分
第 10 回	I の上式が二つ	論文 (III:3.121.23) 部分
第 11 回	右階数が 1	論文 (III:3.122) 部分
第 12 回	NJ における切断	論文 (III:3.21) 部分
第 13 回	階数が 2	論文 (III:3.231) 部分
第 14 回	階数が 2 より大	論文 (III:3.232) 部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。

【テキスト（教科書）】

G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szabo による英訳、Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】

・ Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
 ・ A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (60 %) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (40 %) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学（証明論）

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083 『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline and objectives】

This course deals with the proof of Gentzen's Hauptsatz.

PHL600B1

論理学研究 I - 2

安東 祐希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ゲンツェンの基本定理の応用例を学ぶ。合わせて、複数の体系に関する同等性を学ぶ。

【到達目標】

直観主義命題論理の決定問題などに対して基本定理を応用できて、基本定理で使用する体系と他の体系との同等性を証明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

[授業形式：対面授業]

原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	命題論理の無矛盾性	論文 (IV:1.1) 部分
第 2 回	直観主義の決定問題	論文 (IV:1.2) 部分
第 3 回	排中律	論文 (IV:1.3) 部分
第 4 回	強い形の基本定理	論文 (IV:2.1) 部分
第 5 回	強い定理の証明	論文 (IV:2.2) 部分
第 6 回	定理の他の強め方	論文 (IV:2.3) 部分
第 7 回	算術の体系	論文 (IV:3.1) 部分
第 8 回	帰納法無しの算術	論文 (IV:3.2) 部分
第 9 回	体系の拡張	論文 (IV:3.3) 部分
第 10 回	同等性と既存体系	論文 (V:§1-2) 部分
第 11 回	LHJ から NJ	論文 (V:§3) 部分
第 12 回	NJ から LJ	論文 (V:§4) 部分
第 13 回	LJ から LHJ	論文 (V:§5) 部分
第 14 回	LHK, NK と LK	論文 (V:§6) 部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。

【テキスト（教科書）】

G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szabo による英訳、Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】

・ Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
 ・ A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (60 %) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (40 %) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学（証明論）

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline and objectives】

This course deals with some applications of Gentzen's Hauptsatz and with the equivalence of related logical systems.

PHL500B1

論理学研究Ⅱ－1

計良 隆世

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インド仏教思想における真理説・レトリック（説得方法）・真理説論証・真理観。
 インド初期仏教は自らが示す真理説を聞き手に納得させるためにどのようなレトリックを用いたのか、またインド大乘仏教は真理説を根拠付け合理的に正当化するためにどのような論証を行ったのか、そのレトリックと論証方法を、初期經典の『無我相経』等、大乘經典の『稲苺経』とそれに対する後期中観派の注釈、『中論』等の大乘論書の原典からの英訳または和訳を輪読しながら、分析し理解していく。他方、インド仏教の真理観について、その特徴と西洋の哲学思想における真理観との差異とを、比較思想的方法を用いることにより、理解する。加えて最後に、仏教の言語観・言語理論（アポーハ論）を取り上げ、文献資料を用いながら、仏教の真理観と言語観との関係、アポーハ論と仏教論理学との関係、自身の言語観に基づくとも考えられる仏陀の教育指導法とその論理、そして大乘仏教の真理説論証（法無我・無自性性論証）で用いられる、帰謬法・自立論証等の論証方法についても学習し、理解する。

【到達目標】

- ・インド仏教が提示する三法印等の真理説の論理的構造を理解する。
- ・真理説を聞き手に納得させるために初期仏教が用いたレトリック、そして真理説を根拠付けるために大乘仏教が採用した論証方法とを理解する。
- ・仏教思想における真理観の特徴を理解する。
- ・仏教の言語観と言語理論（アポーハ論）、そしてアポーハ論と仏教論理学との関連を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形態：オンライン授業（リアルタイム配信型）。講義と演習の両形態を採る。
 授業の進め方：基本的には、各回、まずテーマについて概説し、文献資料と一緒に読み（もしくは担当者に訳文を発表してもらい）、その後で、学生に意見・感想を述べてもらう、という形になる。
 仏教の基本思想や関連する西洋哲学思想について、しばしば課題を出す予定である。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	仏教思想の出発点（1）	東西両哲学思想の比較研究の可能性、ウパニシャッドの哲学
第2回	仏教思想の出発点（2）	ブラフマニズムへの不信感、絶対神・創造神の否定
第3回	仏教の真理説「諸行無常」（1）	無常性の根拠、「諸行無常」から導出されること、無常性の解釈と根拠付け
第4回	仏教の真理説「諸行無常」（2）	「諸行無常」の真理観、西洋の真理観との比較
第5回	仏教の真理説「諸行無常」（3）	西洋の真理観との比較（続き）、ニーチェの仏教評価
第6回	仏教の真理説「一切皆苦」（1）	苦と苦の根拠、四諦説（苦諦・集諦）、十二支縁起

第7回	仏教の真理説「一切皆苦」（2）	苦の滅と苦の滅に至る方法、四諦説（滅諦・道諦）、八支聖道、中道、「苦からの解放」についてのニーチェの評価、苦滅と生の充実
第8回	仏教の真理説「諸法無我」（1）	我（アートマン）説、『無我相経』講読、非我と無我、無我説の説得方法（レトリック）
第9回	仏教の真理説「諸法無我」（2）	大乘仏教の無我解釈、中観思想（縁起・空・中）、中観派が提示する法無我的論理的根拠とその根拠の論理的構造
第10回	大乘仏教の縁起思想（1）	『稲苺経』・『稲苺経註』英訳講読（1）、外縁起と内縁起、縁起の二種観察法
第11回	大乘仏教の縁起思想（2）	『稲苺経』・『稲苺経註』英訳講読（2）、刹那滅論証、刹那滅と縁起・此縁性
第12回	大乘仏教の縁起思想（3）	『稲苺経』・『稲苺経註』英訳講読（3）、真理説に関する大乘仏教と小乗仏教との思想的差異、世俗と勝義の関係、これまでのまとめ
第13回	仏教の言語観・言語理論	インド版普遍論争、仏教の言語理論と仏教論理学
第14回	仏教の教育指導法とその論理	仏陀の対機説法と論理、帰謬法、自立論証と帰謬論証、否定対象と否定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
 授業前学習：文献資料の熟読、仏教専門用語の理解。授業内で出された

課題の発表用意（担当者のみ）。

授業後学習：参考文献の熟読。

【テキスト（教科書）】

『スッタニパータ』：中村元訳『ブッダのことば』、岩波文庫、東京、1958年。
 『ダンマパダ』：中村元訳『真理のことば・感興のことば』、岩波文庫、東京、1978年。
 『大パリニッバーナ経』：中村元訳『ブッダ最後の旅』、岩波文庫、東京、1980年。
 『無我相経』：中村元監修、及川・羽矢・平木訳『原始仏典Ⅱ 相応部 經典第三巻』、春秋社、東京、2012年。
 『稲苺経』・『稲苺経註』：Jeffrey Schoening, *Çālistambasūtra and its Indian commentaries*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 1995。
 『ミリンダ王経』：長尾雅人監修、服部・宇野・大地原・その他訳『世界の名著 1 パラモン教典・原始仏典』、中央公論社、東京、1969年。

【参考書】

・高崎直道監修、桂・齋藤・下田・その他編集『シリーズ大乘仏教9 認識論と論理学』、春秋社、東京、2012年。
 ・桜部・上山『仏教の思想2 存在の分析・アビダルマ』、角川文庫ソフィア、東京、1996年。
 ・桂紹隆「概念：アポーハ論を中心に」、『岩波講座・東洋思想10 インド仏教3』、岩波書店、東京、1989年。
 ・御牧克己「刹那滅論証」、『講座大乘仏教9 認識論・論理学』、春秋社、東京、1984年。
 ・齋藤明「中観思想の成立と展開：ナーガールジュナの位置づけを中心として」、『シリーズ大乘仏教6 空と中観』、春秋社、東京、2012年、pp. 3-41。

【成績評価の方法と基準】

評価方法：ゼミでの発表・訳読・質疑応答（30%）、議論への参加度・授業への貢献度（30%）、学期末レポート（40%）
 評価基準：主として、「到達目標」に掲げた事柄の理解度による。その他、授業前学習・授業後学習をきちんと行っているか

どうかも基準に含める。

【学生の意見等からの気づき】

仏教の認識論・言語理論など、仏教思想の詳細を学んだことのない学生がほとんどだと思いますので、授業では、丁寧な指導・解説を心掛けたいと思います。

【その他の重要事項】

必要な文献資料は学習支援システムにおいて配布する予定。履修者は授業前日までにダウンロードし、文献資料に目を通しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ インド哲学・仏教思想
 ＜研究テーマ＞ インド後期中観思想
 ＜主要研究業績＞

- ① Ryusei Keira, *Mādhyamika and Epistemology: A Study of Kamalashīla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the Madhyamakāloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.
- ② Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: Kamalashīla's way of adoptiong scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』, 山喜房仏書林, 東京, 2006年, pp. 177-192.
- ③ Ryusei Keira, The description of niHsvabhāvatā and its intentional meaning: Kamalashīla's solution for the doctrinal conflict between Mādhyamika and Yogācāra, *Acta Tibetica et Buddhica* 2, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.
- ④ 計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」, 『シリーズ大乘仏教6 空と中観』, 春秋社, 東京, 2012年, pp. 89-112.
- ⑤ 計良龍成, 『中観光明論』(*Madhyamakāloka*) 後主張第1章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究(1): 和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト, *Acta Tibetica et Buddhica* 9, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.
- ⑥ 計良龍成, 「『中観光明論』(*Madhyamakāloka*) が引用する『入楞伽經』 X 256-258 について」, *Acta Tibetica et Buddhica* 12, Monobusan University, Monobu, 2019, pp. 1-33.

【Outline and objectives】

This is a course to gain basic knowledge of Indian Buddhist epistemology and logic.

The aim of this course is to give participants an analysis of the logical structure of the Indian Buddhist theory of the truth and an understanding of the characteristics of the rhetoric or reasoning which rationally justifies the theory.

PHL500B1

論理学研究Ⅱ－2

計良 隆世

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中観思想と認識論・論理学；

インド大乘仏教後期中観派の学者 Kamalashīla は、自身の中観思想の確立のために、仏教論理学者 Dharmakīrti の認識論・論理学をどのように受け入れ、解釈したのか。

【到達目標】

- ・經典の權威に関する Dharmakīrti と Kamalashīla の立場と、Kamalashīla の經典解釈法を理解する。
- ・後期中観派の法無我・無自性性論証（真理説論証）の構造と特色とを理解する。
- ・法無我という真理の直観知はどのようにして成立するのか、その知の成立構造を理解する。
- ・後期中観派が示す「瞑想の階梯」から見て、中観思想はどのような哲学思想と言い得るか、その哲学思想としての本質について、自分の考えを纏めてみる。
- ・後期中観派が説く、菩薩の生き方・人生観を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形態：オンライン授業（リアルタイム配信型）。

授業の進め方：まず、仏教の基礎知識として、仏教の世界観、その特徴、初期・部派仏教と大乘仏教の間では、思想・教義の変化に応じて世界観がどのように変化したのか、これらについて概説する。次に、Kamalashīla の中観思想とそれを最も特徴付けている Dharmakīrti の認識論・論理学とを、Kamalashīla が著した中観仏教習得実践マニュアル『修習次第初編』(*First Bhāvanākrama* (= BK I)) の原典英訳（和訳参照可）を輪読しながら、理解していく。そのテキストの輪読の途中、經典の權威に関する Dharmakīrti と Kamalashīla の立場、Kamalashīla の經典解釈法、Kamalashīla の無自性性論証の論理については、論文講読を行い、中観思想と仏教論理学についての深い知識を習得する。後期中観派が提示する「瞑想の階梯」についてテキストを読解した後、中観思想の哲学思想としての本質について議論を行う。最後に、仏教徒の生き方・実践知の確立にとって最も重要な手がかり・手段となる「中道」と「中道の確立方法」とをテキストを通して学習してから、後期中観思想が説く、菩薩の人生観について考え、理解する。

授業は、概説・講義の回もあるが、基本的に演習形式である。担当者を決め、テキストや英語論文の訳文を発表してもらう。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	仏教の世界観とその変遷	『俱舍論』が説く世界観、大乘仏教の世界観
第2回	慈悲の修習	BK I, §1-§2, pp. 187, 1-190, 12.
第3回	慈悲心と中道	BK I, §5-§8, pp. 193, 13-198, 7.
第4回	無自性性論証と經典の權威	BK I, §9-§10, pp. 198, 8-200, 13.
第5回	後期中観派の經典解釈法	英語論文講読1： The description of niHsvabhāvatā and its intentional meaning.

第 6 回	仏教論理学の基礎知識	遍充論、推理論、正しい論証因、誤謬論
第 7 回	Dharmakīrti の論理学と無自性性論証	知覚不可能なもの否定は可能か、論証因の成立・不成立、基体不成立
第 8 回	Kamalashīla による無自性性論証の整理	BK I, §10-§11, pp. 200, 13-204, 9.
第 9 回	無自性性論証の論理 (1)	正しい認識手段の成立、主張命題の構造と解釈
第 10 回	無自性性論証の論理 (2)	Dharmakīrti の無知覚理論 (英語論文講読)
第 11 回	無自性性論証の論理 (3)	Kamalashīla による無知覚理論の解釈 (BK I, §16-§18, pp. 210, 5-217, 14.)
第 12 回	瞑想の階梯	ヨーガ行者の直接知覚、法無我という真理の直観智
第 13 回	中道の確立	BK I, §20-§21, pp. 219, 21-223, 5.
第 14 回	菩薩の人生観	智慧と方便の双運道

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業前学習：テキスト該当箇所の精読・訳文準備、論文等文献資料の熟読

授業後学習：参考文献の熟読

【テキスト（教科書）】

『修習次第初編』：

・ G.Tucci, *Minor Buddhist Texts, part 2: First Bhāvanākrama of Kamalashīla, Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction and English Summary*. Serie Orientale Rome IX 2, Rome 1958.
 ・ Martin T. Adam, *Meditation and the Concept of Insight in Kamalashīla's Bhāvanākramas*. A Thesis submitted to McGill University in partial fulfillment of the requirements of the degree of Doctor of Philosophy, Montreal 2002.

【参考書】

・ 桜部・上山『仏教の思想 2 存在の分析・アビダルマ』, 角川文庫ソフィア, 東京, 1996 年
 ・ Ryusei Keira, *Mādhyaṃika and Epistemology: A Study of Kamalashīla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the Madhyamakāloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.
 ・ Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: Kamalashīla's way of adopting scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』, 山喜房仏書林, 東京, 2006 年, pp. 177-192.
 ・ Ryusei Keira, The description of niHsvabhāvatā and its intentional meaning: Kamalashīla's solution for the doctrinal conflict between Mādhyaṃika and Yogācāra, *Acta Tibetica et Buddhica* 2, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.
 ・ 計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」, 『シリーズ大乘仏教 6 空と中観』, 春秋社, 東京, 2012 年, pp. 89-112.
 ・ 計良龍成, 「『中観光明論』(Madhyamakāloka) 後主張第 1 章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究 (1) : 和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト」, *Acta Tibetica et Buddhica* 9, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.

【成績評価の方法と基準】

評価方法：訳読・質疑応答（60％）、

議論への参加度・授業への貢献度（40％）

評価基準：主として、「到達目標」に掲げた事柄の理解度による。

その他、授業前学習・授業後学習をきちんと行っているかどうかも基準に含める。

【学生の意見等からの気づき】

東アジアに殆ど伝えられることが無かったインド後期中観思想を学ぶのは、多くの学生にとって初めてのことだと思います。授業では、丁寧な指導・解説を心掛けたいと思います。

【その他の重要事項】

必要な文献資料は学習支援システムにおいて配布する予定。履修者は授業前日までにダウンロードし、文献資料に目を通しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ インド哲学・仏教思想

＜研究テーマ＞ インド後期中観思想

＜主要研究業績＞

① Ryusei Keira, *Mādhyaṃika and Epistemology: A Study of Kamalashīla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the Madhyamakāloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.

② Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: Kamalashīla's way of adopting scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』, 山喜房仏書林, 東京, 2006 年, pp. 177-192.

③ Ryusei Keira, The description of niHsvabhāvatā and its intentional meaning: Kamalashīla's solution for the doctrinal conflict between Mādhyaṃika and Yogācāra, *Acta Tibetica et Buddhica* 2, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.

④ 計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」, 『シリーズ大乘仏教 6 空と中観』, 春秋社, 東京, 2012 年, pp. 89-112.

⑤ 計良龍成, 「『中観光明論』(Madhyamakāloka) 後主張第 1 章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究 (1) : 和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト」, *Acta Tibetica et Buddhica* 9, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.

⑥ 計良龍成, 「『中観光明論』(Madhyamakāloka) が引用する『入楞伽經』 X 256-258 について」, *Acta Tibetica et Buddhica* 12, Monobusan University, Monobu, 2019, pp. 1-33.

【Outline and objectives】

This is a course to gain basic knowledge of Indian Buddhist epistemology and Mādhyaṃika philosophy.

The main aim of this course is to give participants an understanding of how Kamalashīla, a later Mādhyaṃika philosopher, interpreted Dharmakīrti's epistemology in order to establish his own Mādhyaṃika philosophy.

PHL600B1

近代倫理学史研究 I - 1

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『純粋理性批判』を読む

——自由のアンチノミーとその解決——

カントの『純粋理性批判』の「弁証論」ではいわゆる「自由のアンチノミー」が提示され、その解決が論ぜられている。この箇所を詳しく読み解くことで、その「解決」を明らかにし、カントの「解決」の意味について考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初回からオンラインで授業を開始するが、状況に応じて対面授業に切り替える。なお、オンライン授業の接続（ZOOMを予定）の仕方については学習支援システムの本授業の「お知らせ」を参照してください。

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) 参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	(1) ゼミの方式、テキスト等について (2) カントの『純粋理性批判』の背景・全体像 (3) これから読む「自由のアンチノミー」およびその「解決」の位置づけ
第2回	定立の証明	カント『純粋理性批判』原典テキスト PhB548 ページ
第3回	定立に対する注	同上 550 ページ
第4回	定立に対する注（続）	同上 552 ページ
第5回	反定立の証明	同上 554, 549 ページ
第6回	反定立の証明（続）	同上 549, 551 ページ
第7回	反定立に対する注	同上 551, 553 ページ
第8回	二種類の原因性	同上 553, 555, 620-621 ページ

第9回 宇宙論的な意味での自由 同上 621-622 ページ

第10回 実践の意味での自由 同上 622-623 ページ

第11回 現象と物自体 同上 623-624 ページ

第12回 観知的原因 同上 624-625 ページ

第13回 観知的と感性的 同上 625-626 ページ

第14回 全体を振り返っての考察 期末レポート発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第5巻、理想社版・第5巻、その他多数。ゼミのなかで紹介する。

(英訳書)ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) ほか多数。

【参考書】

<カントの著作>

『プロレゴメナ』1783 年

<関連性の高い文献>

ヨハン・シュルツ『カント『純粋理性批判』を読むために』菅沢・渋谷・山下訳（梓出版社）

御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川選書）

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

- (1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
 - (2) レポート課題で確認される到達目標達成度
- (1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第 80 号、2020 年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年。

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013. (翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017 年。

【Outline and objectives】

Reading Kant's *Critique of Pure Reason*: The Antinomy of Freedom and the Resolution of it

The "Dialectic" of Kant's *Critique of Pure Reason* treats so-called "the antinomy of freedom" and the resolution of it. We read the concerned texts on the *Critique of Pure Reason* and inquire closely into them. As a result Kant's idea of this resolution will be clear and we consider the meaning of it.

PHL600B1

近代倫理学史研究 I - 2

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『純粋理性批判』を読む

——自由のアンチノミーとその解決——

カントの『純粋理性批判』の「弁証論」ではいわゆる「自由のアンチノミー」が提示され、その解決が論ぜられている。この箇所を詳しく読み解くことで、その「解決」を明らかにし、カントの「解決」の意味について考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業がオンラインになるか対面になるかについては、学習支援システムの授業の「お知らせ」を参照してください。

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) 参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	叡知的性格と経験的性格	カント『純粋理性批判』原典テキスト PhB626-627 ページ
第2回	メーメノンとしての主体	同上 627-628
第3回	生起とその原因	同上 628-629
第4回	自然結果と自由に基づく結果	同上 629-630
第5回	フェノメノンの原因	同上 630-631
第6回	経験的性格の超越論的原因である叡知的性格	同上 631-632
第7回	命法、「べし」（当為）	同上 632-633
第8回	生起しなかった行為の必然性	同上 633-634
第9回	同一行為について、観察と、理性との関係における考察	同上 634-635
第10回	時間	同上 635-636

第11回 理性 同上 636-637

第12回 あらゆる選択意志に基づく行為の無条件的条件である理性 同上 637-638

第13回 理性の統制的原理 同上 638-639

第14回 全体を振り返っての考察 期末レポート発表 察

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第5巻、理想社版・第5巻、その他多数。ゼミのなかで紹介する。

(英訳書) ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) ほか多数。

【参考書】

＜カントの著作＞

『プロレゴメナ』1783 年

＜関連性の高い文献＞

ヨハン・シュルツ『カント『純粋理性批判』を読むために』菅沢・渋谷・山下訳（梓出版社）

御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川選書）

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度

(2) レポート課題で確認される到達目標達成度

(1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

西洋近代の哲学・倫理学

＜研究テーマ＞

カント哲学・倫理学

＜主要研究業績＞

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第 80 号、2020 年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年。

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in: *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013. (翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』(春風社)、2017 年。

【Outline and objectives】

Reading Kant's *Critique of Pure Reason*: The Antinomy of Freedom and the Resolution of it

The "Dialectic" of Kant's *Critique of Pure Reason* treats so-called "the antinomy of freedom" and the resolution of it. We read the concerned texts on the *Critique of Pure Reason* and inquire closely into them. As a result Kant's idea of this resolution will be clear and we consider the meaning of it.

PHL600B1

近代倫理学史研究Ⅱ－1

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『実践理性批判』を読む

－ カント道徳哲学の原点 －

カントの『実践理性批判』の前半の「分析論」では、『道徳形而上学の基礎づけ』の第3章と並んで、道徳的な「定言命法」が探究され、我々の道徳的自由が正当化される。この春学期は、その「分析論」の最終節「純粹実践理性の分析論の批判的解明」を最初から読む。この箇所では、カントの自由概念が他の自由概念と比較されて、その概念の特徴が際立たせられている。ここでの議論を検討することにより、カントの自由概念にどのような意味があるのかを考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初回からオンラインで授業を開始するが、状況に応じて対面授業に切り替える。なお、オンライン授業の接続（ZOOMを予定）の仕方については学習支援システムの本授業の「お知らせ」を参照してください。

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) 参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初學者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ゼミへのイントロダクション	①ゼミのテーマと目標、方式について ②『実践理性批判』について ③これまでに読み進めた箇所と今後について
第2回	分析論の手順：始めに実践理性の法則	『実践理性批判』原典テキスト 121-122 ページ
第3回	純粹実践理性の論理学と感性論	同上 122-123 ページ
第4回	きわめて通常の実践的理性使用	同上 123-124 ページ
第5回	尊敬の感情	同上 124-125 ページ

第6回	幸福論と道徳論	同上 125-126 ページ
第7回	考慮から幸福を排除すること	同上 126-127 ページ
第8回	心理学的性質としての自由	同上 127-128 ページ
第9回	自然連鎖と自由	同上 128-129 ページ
第10回	自由の比較的概念	同上 129-130 ページ
第11回	心理学的原因性	同上 130-131 ページ
第12回	物質的自動機械や精神的自動機械	同上 131-132 ページ
第13回	本体としての主体の原因性	同上 132-133 ページ
第14回	春学期のまとめ：期末レポート発表	レポート

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der praktischen Vernunft*, Felix Meiner Verlag. (翻訳書)『カント全集』岩波書店版・第7巻、理想社版・第七巻など。単行本では、以文社版、岩波文庫版、光文社古典新訳文庫版、作品社版など。(英訳：ケンブリッジ版など)。

【参考書】

H・J・ペイトン『定言命法』（杉田聡訳、行路社）
L・W・ベック『カント『実践理性批判』の注解』（藤田昇吾訳、新地書房）
中島義道『悪への自由 カント倫理学の深層文法』（勁草書房）
その他の関連する入門書や解説書や研究文献をゼミで適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
 - (2) レポート課題で確認される到達目標達成度
- (1)を70%、(2)を30%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第76号、2018年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第70号、2015年。

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013. (翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。

【Outline and objectives】

Reading Kant's *Critique of Practical Reason*: Crucial Points of Kant's Moral Philosophy

Beside the section III of the *Groundwork of the Metaphysics of Morals*, in the first half of the *Critique of Practical Reason*: the "Analytik of Pure Practical Reason", Kant investigates into the moral "categorical imperative" and justifies our moral freedom. In our spring semester we read the last section of the "Analytic": "Critical Elucidation of the Analytic of Pure Practical Reason" from the start. In this section Kant's concept of freedom is compared to other concepts of freedom and sharpened. Examining Kant's argumentation we consider the meaning of Kant's concept of freedom.

PHL600B1

近代倫理学史研究Ⅱ－2

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『実践理性批判』を読む

－ カントの実践哲学の原点 －

カントの『実践理性批判』の前半の「分析論」では、『道徳形而上学の基礎づけ』の第3章と並んで、道徳的な「定言命法」が探究され、我々の道徳的自由が正当化される。この秋学期は、その「分析論」の最終節「純粹実践理性の分析論の批判的解明」を春学期の続きから読む。この箇所では、カントの自由概念が他の自由概念と比較されて、その概念の特徴が際立たせられている。ここでの議論を検討することにより、カントの自由概念にどういう意味があるのかを考える。なお、最後に『道徳形而上学の基礎づけ』の第3章冒頭の自由概念についての原典テキスト述を読んで、カントの自由概念について確認する。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形態がオンラインか対面かについては、学習支援システムの当授業の「お知らせ」欄を参照してください。

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) 参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	良心と後悔、および宿命論	『実践理性批判』原典テキスト 133-134 ページ
第2回	感性的生活と認知的意識（決定論と自由）	同上 134-135 ページ
第3回	生来の悪人、時間の観念性	同上 135-136 ページ
第4回	自動機械と人間	同上 136-137 ページ
第5回	メンデルスゾーン説	同上 137-138 ページ
第6回	スピノザ説とカント説	同上 138-139 ページ
第7回	時間・空間と物自体との分離	同上 139-140 ページ

- 第 8 回 原因性のカテゴリー 同上 140-141 ページ
第 9 回 知性的で感性的に条件 同上 141-142 ページ
づけられていない原因
性
第 10 回 必然的存在者の理念 同上 142-143 ページ
第 11 回 最高で無条件的な実践 同上 143-144 ページ
的法則
第 12 回 「自由の概念は意志の 『道徳形而上学の基礎づけ』 第 3
自律を説明するための 章の第 1 節のドイツ語原文
鍵である」
第 13 回 「自由はあらゆる理性 『道徳形而上学の基礎づけ』 第 3
的存在者の意志の固有 章の第 2 節のドイツ語原文
性として前提されねば
ならない」
第 14 回 秋学期のまとめ：期末 レポート発表
レポート

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握して
おくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ
語原典訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のま
とめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der praktischen Vernunft*, Felix Meiner Verlag.
(翻訳書)『カント全集』岩波書店版・第 7 巻、理想社版・第七巻な
ど。単行本では、以文社版、岩波文庫版、光文社古典新訳文庫版、作
品社版など。(英訳：ケンブリッジ版など)。

【参考書】

H・J・ペイトン『定言命法』（杉田聡訳、行路社）
L・W・ベック『カント『実践理性批判』の注解』（藤田昇吾訳、新
地書房）
中島義道『悪への自由 カント倫理学の深層文法』（勁草書房）
その他の関連する入門書や解説書や研究文献をゼミで適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で
観察される到達目標達成度
(2) レポート課題で確認される到達目標達成度
(1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

西洋近代の哲学・倫理学

＜研究テーマ＞

カント哲学・倫理学

＜主要研究業績＞

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法
論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第 80 号、
2020 年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントに
よる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、
2018 年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学
文学部紀要』第 70 号、2015 年。

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinan-
derbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die
Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Inter-
nationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.
(翻訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017 年。

【Outline and objectives】

Reading Kant's *Critique of Practical Reason*: Crucial Points of
Kant's Moral Philosophy

Beside the section III of the *Groundwork of the Metaphysics of
Morals*, in the first half of the *Critique of Practical Reason*: the
"Analytik of Pure Practical Reason", Kant investigates into the
moral "categorical imperative" and justifies our moral freedom.
In our autumn semester we continue to read the last section
of the "Analytic": "Critical Elucidation of the Analytic of Pure
Practical Reason" from the last page we have read in our spring
semester. In this section Kant's concept of freedom is compared
to other concepts of freedom and sharpened. Examining Kant's
argumentation we consider the meaning of Kant's concept of
freedom. At last we read the opening pages of the section III
of Kant's *Groundwork of the Metaphysics of Morals* to verify
Kant's concept of freedom.

PHL600B1

実践哲学研究Ⅰ－1

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ニーチェとヘーゲル—キリスト教批判の行為論的考察

【到達目標】

ニーチェとヘーゲルは、通常対立させられるが、両者は、ヨーロッパ人の生存を左右するキリスト教への批判という点で重なり合っている。

そこで、両者の重なり合いを、イエス論を中心に検討する。そして、その検討を通して哲学と宗教との関係について論述できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ニーチェの『アンティ・クリスト』のイエス論を講読してから、ヘーゲルの『キリスト教の精神とその運命』のイエス論を対面授業で講読する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	総説	ニーチェとヘーゲルの関係についての案内
第2回	ニーチェ総説	ニーチェのキリスト教批判についての案内
第3回	ヘーゲル総説	ヘーゲルのキリスト教批判についての案内
第4回	ニヒリズムとしてのキリスト教批判	『反キリスト者』第1節から第6節の検討
第5回	同情の宗教としてのキリスト教	『反キリスト者』第7節から第8節の検討
第6回	僧侶的類型としての近代哲学者	『反キリスト者』第9節から第14節の検討
第7回	唯一のキリスト者としてのイエス	『反キリスト者』第27節から第32節の検討
第8回	ヘーゲルのユダヤ教批判	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第9回	イエスの登場	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第10回	イエスの運命	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第11回	市民法と道徳律	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第12回	罪と罰	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第13回	運命としての罰	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第14回	キリスト教会への批判	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの下調べと参考文献の熟読。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

F. Nietzsche, Der Antichrist. In: F. Nietzsche, Kritische Studienausgabe. Hrsg. v. G. Colli u. M. Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag/de Gruyter, 1999, Berlin/New York.

ニーチェ『偶像の黄昏/アンティ・クリスト』、西尾幹二訳、白水社

ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』、伴博訳、平凡社ライブラリー（資料形式で配布予定）

【参考書】

山口誠一『クリエートする哲学—新行為論入門』、弘文堂、2007年

渡邊二郎編『ニーチェ・セレクション』、平凡社ライブラリー、2005年

【成績評価の方法と基準】

ニーチェとヘーゲルのキリスト教批判に関するゼミでの発表・訳読・研究発表（60%）、質疑応答（40%）を基準とする平常点評価

【学生の意見等からの気づき】

該当事項なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

ニーチェとヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明

<研究テーマ>

ニーチェとヘーゲルとの行為論的關係、ヘーゲル『精神現象学』「序説」の註解、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など

<主要研究業績>

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with Nietzsche's and Hegel's critic of christianity, with texts drawn from German, Japanese and English.

PHL600B1

実践哲学研究Ⅰ－2

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

弁証法哲学の観点からドイツ哲学について検討する。ドイツ哲学ということでシェリング、ヘーゲル、ニーチェを射程に収める。

【到達目標】

『精神現象学』序説精読から弁証法哲学について論述できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と原典講読の両面から『精神現象学』序説を手引きにして対面授業を進める。授業時課題レポートなどは次回授業時に講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	総説	弁証法哲学についての案内
第2回	『精神現象学』序説総説Ⅰ	ヘーゲルの『精神現象学』序説関連年譜についての案内
第3回	『精神現象学』序説総説Ⅱ	『精神現象学』序説梗概の案内
第4回	『精神現象学』序説総説Ⅲ	『精神現象学』序説の主題の案内
第5回	概念の労苦について	『精神現象学』序説第58節の検討
第6回	理屈づけについて	『精神現象学』序説第59節の検討
第7回	概念把握する思考について	『精神現象学』序説第60節の検討
第8回	哲学命題について	『精神現象学』序説第61節の検討
第9回	命題「神は存在である」について	『精神現象学』序説第62節の検討
第10回	思弁的思考について	『精神現象学』序説第63節の検討
第11回	彫塑的論述について	『精神現象学』序説第64節の検討
第12回	主体の叙述について	『精神現象学』序説第65節の検討
第13回	哲学的叙述について	『精神現象学』序説第66節の検討
第14回	哲学研究について	『精神現象学』序説第67節の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの下調べと参考文献の熟読。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

原典

G.W.F.Hegel, *Phänomenologie des Geistes*. Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988. 邦語訳

ヘーゲル『精神現象学Ⅰ』（『ヘーゲル全集』第8巻第1分冊）、山口誠一訳、知泉書館

【参考書】

山口誠一『ヘーゲル哲学の根源—『精神現象学』の問いの解明』、法政大学出版局、2016年（オンデマンド）

【成績評価の方法と基準】

弁証法哲学に関するゼミでの発表・訳読・研究発表（60%）、質疑応答（40%）を基準とする平常点評価

【学生の意見等からの気づき】

ドイツ語力の向上と哲学的思考力の統合を重視する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

＜研究テーマ＞

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

＜主要研究業績＞

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年
『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with a dialectical understanding of German philosophy (especially Shelling, Hegel and Nietzsche), with texts drawn from German and Japanese.

PHL600B1

近代ドイツ哲学史研究Ⅰ－1

笠原 賢介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前年度に引き続いて、カント『判断力批判』（1790 年）を原文で精読します。序論から美と芸術を扱った第一部へと読み進めます。『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・生命・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義について考えます。英訳での参加も可能です。

【到達目標】

『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・生命・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義についての理解を深める。それによって自らの思考の方向付けを行う。哲学者の思考世界をオリジナル・テキストから各自の目で読み出し、それを討議のなかで客観化して思考する能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

カント『判断力批判』の原文を、ゼミ形式で読み進めます。英訳での参加も可能です。テキストの精読と質疑応答、討論をおりまぜて進めます。必要に応じて関連する資料のプリントを配布し、レクチャーと質疑応答を行ないます。参加者に読解の課題を出し、学習支援システムを用いて提出、次回にプリントの形でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入的なレクチャー、前年度のゼミで明らかになった論点の整理。以下の進捗は目安です。	ゼミの進め方について。カントとゼミ・テキスト『判断力批判』についての基本的な事柄。前年度のゼミで明らかになった論点の整理。
第 2 回	テキスト S.12 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 3 回	テキスト S.13 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 4 回	テキスト S.13 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 5 回	テキスト S.14 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 6 回	テキスト S.14 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 7 回	テキスト S.15 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 8 回	テキスト S.15 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 9 回	テキスト S.16 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。

第 10 回	テキスト S.16 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 11 回	テキスト S.17 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 12 回	テキスト S.17 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 13 回	テキスト S.18 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 14 回	まとめ	春学期の内容を総括し、総合的に質疑応答と討論をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。毎回のテキストの精読箇所を予習し、課題を提出すること。毎回の精読・討論で焦点となった論点につき、フィードバックのプリントを再読し、授業内で示した文献に当たって論点を確認・掘り下げる。

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, Kritik der Urteilkraft, Hamburg: Meiner, 2009 (Philosophische Bibliothek Bd. 507) を用います。英訳は Critique of the Power of Judgement. Edited by P. Guyer. Translated by P. Guyer and E. Matthews. Cambridge, 2000 を用います。テキストについては、初回授業時に説明をします。

【参考書】

1. 宇都宮芳明『訳注・カント『判断力批判』上』以文社、1994 年。
2. カッシーラー（浜田義文他監修）『カントの生涯と学説』みすず書房、1986 年。
3. カッシーラー（中野好之訳）『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、1962 年。
4. ジル・ドゥルーズ（國分功一朗訳）『カントの批判哲学』ちくま学芸文庫、2008 年。
5. 佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代』岩波書店、2005 年。
6. 小田部胤久『美学』東京大学出版会、2020 年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、テキスト理解の正確さ・掘り下げ、質疑応答、討論への参加を総合して評価します。平常点 50%、発表 50%。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的事項を含め積極的に質問、討議をおこなってください。テキスト、レクチャー、討議の内容を正確に把握してください。

【学生が準備すべき機器他】

Zoom で接続可能な機器が必要である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化
 <研究テーマ>啓蒙の比較思想史、近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。
 <主要研究業績>アドルノ『本来性という隠語ードイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未来社、ポイエーシス叢書、1992 年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010 年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010 年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016 年 5 月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界ークニッゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未来社、2017 年。「レッシング『賢者ナータン』再読」（論文）、『思想』2018 年 2 月号。「ニーチェとプラトン」（論文）、『法政大学文学部紀要』第 79 号、2019 年。「多声的思考の系譜ーレッシング、ヘルダーからカントへ」『日本カント研究』第 21 巻、2020 年。

【Outline and objectives】

Intensive reading of Immanuel Kant's "Critique of Judgment"(1790) and discussion about the text. Key words: systematic position of "Critique of Judgement" within the Kantian philosophy; beauty, life and ethics; relation to modern philosophical issues.

PHL600B1

近代ドイツ哲学史研究Ⅰ－2

笠原 賢介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続いて、カント『判断力批判』（1790 年）を原文で精読します。序論から美と芸術を扱った第一部へと読み進めます。『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・生命・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義について考えます。英訳での参加も可能です。

【到達目標】

『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・生命・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義についての理解を深める。それによって自らの思考の方向付けを行う。哲学者の思考世界をオリジナル・テキストから各自の目で読み出し、それを討議のなかで客観化して思考する能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

カント『判断力批判』の原文を、ゼミ形式で読み進めます。英訳での参加も可能です。テキストの精読と質疑応答、討論をおりまぜて進めます。必要に応じて関連する資料のプリントを配布し、レクチャーと質疑応答を行ないます。参加者に読解の課題を出し、学習支援システムを用いて提出、次回にプリントの形でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス。テキスト S.18 の精読と討論。以下の進度は目安です。	春学期に明らかになった論点の確認。テキストの精読と討論。
第 2 回	テキスト S.19 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 3 回	テキスト S.19 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 4 回	テキスト S.20 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 5 回	テキスト S.20 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 6 回	テキスト S.21 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 7 回	テキスト S.21 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 8 回	テキスト S.22 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 9 回	テキスト S.22 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 10 回	テキスト S.23 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。

第 11 回	テキスト S.23 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 12 回	テキスト S.24 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 13 回	テキスト S.24 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 14 回	まとめ	秋学期の内容を総括し、総合的に質疑応答と討論をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。毎回のテキストの精読箇所を予習し、課題を提出すること。毎回の精読・討論で焦点となった論点につき、フィードバックのプリントを再読し、授業内で示した文献に当たって論点を確認・掘り下げること。

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, Kritik der Urteilkraft, Hamburg: Meiner, 2009 (Philosophische Bibliothek Bd. 507) を用います。英訳は Critique of the Power of Judgement. Edited by P. Guyer. Translated by P. Guyer and E. Matthews. Cambridge, 2000 を用います。テキストについては、初回授業時に説明をします。

【参考書】

1. 宇都宮芳明『訳注・カント『判断力批判』上』以文社、1994 年。
2. カッシーラー（浜田義文他監修）『カントの生涯と学説』みすず書房、1986 年。
3. カッシーラー（中野好之訳）『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、1962 年。
4. ジル・ドゥルーズ（國分功一朗訳）『カントの批判哲学』ちくま学芸文庫、2008 年。
5. 佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代』岩波書店、2005 年。
6. 小田部胤久『美学』東京大学出版会、2020 年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、テキスト理解の正確さ・掘り下げ、質疑応答、討論への参加を総合して評価します。平常点 50%、発表 50%。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的事項を含め積極的に質問、討議をおこなってください。テキスト、レクチャー、討議の内容を正確に把握してください。

【学生が準備すべき機器他】

Zoom で接続可能な機器が必要である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化

＜研究テーマ＞啓蒙の比較思想史、近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。

＜主要研究業績＞アドルノ『本来性という隠語ードイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未來社、ポイエーシス叢書、1992 年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010 年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010 年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016 年 5 月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界ークニッゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未來社、2017 年。「レッシング『賢者ナータン』再読」（論文）、『思想』2018 年 2 月号。「ニーチェとプラトン」（論文）、『法政大学文学部紀要』第 79 号、2019 年。「多声的思考の系譜ーレッシング、ヘルダーからカントへ」『日本カント研究』第 21 巻、2020 年。

【Outline and objectives】

Intensive reading of Immanuel Kant's "Critique of Judgement"(1790) and discussion about the text. Key words: systematic position of "Critique of Judgement" within the Kantian philosophy; beauty, life and ethics; relation to modern philosophical issues.

PHL600B1

現代哲学研究Ⅰ－Ⅰ

大池 惣太郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの精神分析医ジャック・ラカンの最重要セミナーの一つ、『精神分析の四基本概念』を精読する。無意識、反復、転移、欲動、シニフィアンの機能、対象 a、疎外など重要な論点を抑えながら、ラカン派精神分析理論の土台となる考え方や概念の拡がりを学ぶ。それを通じて、精神分析的な主体論の基本的な特徴を理解することが目的である。

【到達目標】

- ・ラカン派精神分析理論の土台となる考え方や概念の拡がりを学び、それを通じて、精神分析的な主体論の基本的な特徴を一定程度理解すること。
- ・研究した知見をレポートにおいて、説得的な形で論述できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・参加者全員が指定されたテキストを読んだ上で授業に参加する。毎回、発表担当者が決められ、担当者は、指定範囲のレジュメを作成する。
- ・授業の初めに、前回の授業で提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。
- ・授業では、担当者が重要と思う論点や疑問点を授業内で提起し、それを受けて全体でディスカッションを行う。
- ・本授業はオンラインで実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	フロイトの無意識とラカンの無意識	教科書第 1、2 節の講読
第 2 回	確信の主体について	教科書第 3 節の講読
第 3 回	テュケーとオートマトン	教科書第 4、5 節の講読
第 4 回	対象 a としての視線	教科書第 6、7 節の講読
第 5 回	視線と絵	教科書第 8、9 節の講読
第 6 回	分析家の役割	教科書第 10 節の講読
第 7 回	真理とシニフィアン	教科書第 11、12 節の講読
第 8 回	部分欲動とリビドー①	教科書第 13、14 節の講読
第 9 回	部分欲動とリビドー②	教科書第 15 節の講読
第 10 回	主体と＜他者＞	教科書第 16、17 節の講読
第 11 回	「知っている」と想定された主体	教科書第 18 節の講読
第 12 回	解釈から転位へ	教科書第 19 節の講読
第 13 回	出会い損ねの経験	教科書第 20 節の講読
第 14 回	総括	今学期の授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・参加者は、指定された範囲や関連文献をあらかじめ読んだ上で授業に参加する。
- ・発表担当者はレジュメを作り、事前に論点や疑問点を整理して授業に臨む。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念』（上・下）、岩波文庫、2020 年）。

【参考書】

ジャック・ラカン『転移（上・下）』（岩波書店、2015 年）
 ジャック・ラカン『不安（上・下）』（岩波書店、2017 年）
 ブルース・フィンク『ラカン派精神分析入門：理論と技法』（誠信書房、2008 年）
 ブルース・フィンク『後期ラカン入門』（人文書院、2013 年）

【成績評価の方法と基準】

授業への発表・参加（70%）と学期末のレポート（30%）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

20 世紀フランス思想・文学

【Outline and objectives】

The aim of this seminar is to understand some fundamental ideas of the Lacanian psychoanalysis. We read mainly Jacques Lacan's most important seminar, The Four Fundamental Concepts of Psychoanalysis (1973), to obtain basic knowledge and points of view of the Lacanian psychoanalysis theory concerning the "unconscious", "repetition", "transference", "drive", etc.

PHL600B1

現代哲学研究 I - 2

大池 惣太郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジャン＝ポール・サルトルの名著『存在と無』（L'Être et le néant, 1943）の概要をなす第三部「対他存在」を精読する。サルトルは「自由」を、選択の自由や束縛からの解放とはまるで異なる意味に理解している。私たちは恣意的に選べないものに事実として拘束されているが、そこになぜ「自由」が見出されるのか。近年の実存論のリバイバルの状況なども踏まえつつ、主に自由という主題において、サルトルの「現象学的存在論」の基本的な特徴を理解することが目的である。

【到達目標】

- ・主に自由という主題において、『存在と無』の考え方や概念の掘り学び、それを通じて、サルトルの「現象学的存在論」の基本的な特徴を一定程度理解すること。
- ・研究した知見をレポートにおいて、説得的な形で論述できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・参加者全員が指定されたテキストを読んだ上で授業に参加する。毎回、発表担当者が決められ、担当者は、指定範囲のレジュメを作成する。
- ・授業の初めに、前回の授業で提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。
- ・授業では、担当者が重要と思う論点や疑問点を授業内で提起し、それを受けて全体でディスカッションを行う。
- ・本授業はオンラインで実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	サルトルの『存在と無』第一部、第二部について概説
第 2 回	サルトル哲学における他者の存在	第三部第一章前半（p.17-44）講読
第 3 回	他者の視線① 他者の現象の意味	第一章第四節、p.92-107 の講読
第 4 回	他者の視線② 他者と世界	第一章第四節、p.108-123 の講読
第 5 回	他者の視線③ 私の対象性の必要条件	第一章第四節、p.124-144 の講読
第 6 回	他者の視線④ 視線の本性	第一章第四節、p.144-167 の講読
第 7 回	他者の視線⑤ 対他存在	第一章第四節、p.167-186 の講読
第 8 回	他者の視線⑥ 他者の対他への直接性	第一章第四節、p.186-201 の講読
第 9 回	他者の視線⑦ 精神の脱自的構造	第一章第四節、p.201-218 の講読
第 10 回	対自としての身体① 感覚的認識の問題	第二章第一節、p.226-246 の講読
第 11 回	対自としての身体② 共通世界と現前のかた	第二章第一節、p.246-270 の講読
第 12 回	対自としての身体③ 視野について	第二章第一節、p.270-288 の講読

第 13 回 対自としての身体④ 第二章第一節、p.289-308 の講読
身体を「存在する」

第 14 回 総括：サルトル的な自 授業全体のまとめ
由について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・参加者は、指定された範囲や関連文献をあらかじめ読んだ上で授業に参加する。
- ・発表担当者はレジュメを作り、事前に論点や疑問点を整理して授業に臨む。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ジャン＝ポール・サルトル『存在と無 現象学的存在論の試み』II、ちくま学芸文庫、2007 年）。

【参考書】

フレドリック・ジェイムソン『サルトル 回帰する唯物論』（論創社、1999 年）
ジャン＝リュック・ナンシー『自由の経験』（未来社、2000 年）

【成績評価の方法と基準】

授業への発表・参加（70%）と学期末のレポート（30%）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

20 世紀フランス思想・文学

【Outline and objectives】

The aim of this seminar is to reconsider the existential philosophy of Sartre, particularly on his strange idea of “freedom”. We read mainly the third part of Sartre’s monumental work, Being and Nothingness: An Essay on Phenomenological Ontology (1943), comparing that to some points of view of today’s philosophical discourses concerning the “existence”, human or not.

PHL600B1

科学哲学研究Ⅰ－1

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ベルクソン（Bergson 1859 – 1941）の主著である『物質と記憶』（Matière et mémoire, 1896）の読解を通じて、著者の「心身問題」についての主張の理解を図ります。昨年度秋学期からの続きで、春学期は第4章「意識と物質」の前半を扱います。

【到達目標】

- ベルクソンの原文を正確に読めるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を本書の論理の中で正確に捉えられるようになります。
- ベルクソンの個々の議論をベルクソン思想全体の中で理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を哲学史・科学史の背景を踏まえて理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を今日のわれわれの問題と結びつけて解釈できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面授業で行います。

前もって原文からの訳の準備をしてきた参加者が、一文一文を担当し、輪読で訳読を進めます。その際、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。テキストの切れ目では、当番の人に、当該テキスト部分についての問題提起をもらい、全員で検討を行っていきます。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テキストの先行部分の説明を行います。
第2回	二元論の難問（1）	訳解と討論
第3回	二元論の難問（2）	訳解と討論
第4回	とるべき道（1）	訳解と討論
第5回	とるべき道（2）	訳解と討論
第6回	知覚と物質（1）	訳解と討論
第7回	知覚と物質（2）	訳解と討論
第8回	知覚と物質（3）	訳解と討論
第9回	知覚と物質（4）	訳解と討論
第10回	知覚と物質（5）	訳解と討論
第11回	知覚と物質（6）	訳解と討論
第12回	知覚と物質（7）	訳解と討論
第13回	知覚と物質（8）	訳解と討論
第14回	知覚と物質（9）	訳解と討論、さらに学期全体の総括を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に先立って、毎回の当該テキスト箇所の訳を作成し、同時にその箇所での哲学問題の検討を行います。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Henri Bergson, Matière et mémoire, édition 《Quadrige》, PUF, 2008（Wormsの序文と、Riquierの注がついた、新しい版が望ましい）。

【参考書】

『思想—ベルクソン生誕150年』（岩波書店）
久米・中田・安孫子（編）『ベルクソン読本』（法政大学出版局）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（40％）と議論への参加（30％）、および学期末レポート（30％）で評価します。なおそれぞれの方法において、5つの到達目標への到達度は、フランス語力20％、テキスト理解20％、ベルクソン理解20％、哲学史・科学史理解20％、現代性理解20％の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ議論の時間を取っていききたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
-フランス哲学
〈研究テーマ〉
-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス19世紀思想史を材料にして行っています。
〈主要研究業績〉
-『ベルクソン読本』（編著、2006年、法政大学出版局）
-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著、2012年、OLMS)
-Annales bergsoniennes（編著、2013年、PUF）
-Tout ouvert ! l'évolution créatrice en tous sens(編著、2015年、OLMS)
-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016年、書肆心水）
-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著、2016年、書肆心水)
-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017年、書肆心水）
-Mécanique et mystique（編著、2018年、OLMS）
-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018年、書肆心水）

【Outline and objectives】

Through the main work of Bergson (1859-1941), "Matter and Memory", we will try to understand his claims of the dualistic reality, mind and body. We will read the first half of the chapter 4 in the spring semester.

PHL600B1

科学哲学研究 I - 2

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ベルクソン（Bergson 1859 - 1941）の著である『物質と記憶』（Matière et mémoire）の読解を通じて、著者の「心身問題」についての主張の理解を図ります。春学期からの続きで、第4章「意識と物質」の後半を扱います。

【到達目標】

- ベルクソンの原文を正確に読めるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を本書の論理の中で正確に捉えられるようになります。
- ベルクソンの個々の議論をベルクソン思想全体の中で理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を哲学史・科学史の背景を踏まえて理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を今日のわれわれの問題と結びつけて解釈できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面授業で行います。

前もって原文からの訳の準備をしてきた参加者が、一文一文を担当し、輪読で訳読を進めます。その際、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。テキストの切れ目では、当番の人に、当該テキスト部分についての問題提起をしてもらい、全員で検討を行っていきます。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされて行きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テキストの先行部分の説明を行います。
第2回	持続と緊張度（1）	訳解と討論
第3回	持続と緊張度（2）	訳解と討論
第4回	持続と緊張度（3）	訳解と討論
第5回	延長と広がり（1）	訳解と討論
第6回	延長と広がり（2）	訳解と討論
第7回	延長と広がり（3）	訳解と討論
第8回	心と身体（1）	訳解と討論
第9回	心と身体（2）	訳解と討論
第10回	心と身体（3）	訳解と討論
第11回	要約と結論（1）	訳解と討論
第12回	要約と結論（2）	訳解と討論
第13回	要約と結論（3）	訳解と討論
第14回	要約と結論（4）	訳解と討論、さらに学期全体の総括を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に先立って、毎回の当該テキスト箇所の訳を作成し、同時にその箇所での哲学問題の検討を行います。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Henri Bergson, Matière et mémoire, édition《Quadrige》, PUF, 2008（Wormsの序文と、Riquierの注がついた、新しい版が望ましい）

【参考書】

『思想—ベルクソン生誕 150 年』（岩波書店）
久米・中田・安孫子（編）『ベルクソン読本』（法政大学出版局）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（書肆心水）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（40 %）と議論への参加（30 %、および学期末レポート（30 %）で評価します。なおそれぞれの方法において、5つの到達目標への到達度は、フランス語力 20 %、テキスト理解 20 %、ベルクソン理解 20 %、哲学史・科学史理解 20 %、現代性理解 20 %の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ議論の時間を取っていききたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
-フランス哲学
〈研究テーマ〉
-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス 19 世紀思想史を材料にして行っています。
〈主要研究業績〉
-『ベルクソン読本』（編著、2006 年、法政大学出版局）
-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著、2012 年、OLMS)
-Annales bergsoniennes（編著、2013 年、PUF）
-Tout ouvert :l'évolution créatrice en tous sens(編著、2015 年、OLMS)
-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016 年、書肆心水）
-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著、2016 年、書肆心水）
-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017 年、書肆心水）
-Mécanique et mystique（編著、2018 年、OLMS）
-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018 年、書肆心水）

【Outline and objectives】

Through the main work of Bergson (1859-1941), "Matter and Memory", we will try to understand his claims of the dualistic reality, mind and body. We will read the second half of the chapter 4 in the autumn semester.

PHL600B1

科学哲学研究Ⅱ－1

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

■アランの科学の精神を学びます。

アラン (Alain 1868-1951) の短文形式の「プロボ」を、科学の精神、理性の立場から行われた人間についての議論とみなして検討していきます。

■とくにアラン『人間論』を学びます。

【到達目標】

- アランのフランス語原文を正確に日本語に訳せるようになる。
- アランの一つ一つの議論を、各プロボでの論理的一貫性の中で正確に捉えられるようになる。
- アランによる、深く科学的な精神からの一つ一つの議論を、今日の文明と社会の問題、さらには自分自身の問題と結びつけて解釈できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面授業で行います。

前もって訳を準備してきた参加者が、順に一文一文を担当し、輪読の形で訳読を進めます。その際、一文一文で、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。一つのプロボを3回に分けて読んでいきます。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、アランの 人と思想について説明を行います。
第2回	思考の技術 (1)	訳解と討論
第3回	思考の技術 (2)	訳解と討論
第4回	思考の技術 (3)	訳解と討論
第5回	物理学者たちのフェ ティシズム (1)	訳解と討論
第6回	物理学者たちのフェ ティシズム (2)	訳解と討論
第7回	物理学者たちのフェ ティシズム (3)	訳解と討論
第8回	進歩の幻想 (1)	訳解と討論
第9回	進歩の幻想 (2)	訳解と討論
第10回	進歩の幻想 (3)	訳解と討論
第11回	機械としての精神 (1)	訳解と討論
第12回	機械としての精神 (2)	訳解と討論

第13回 機械としての精神
(3) 訳解と討論

第14回 総括 参加者からの問題提起を受けて、
全体で総括の討論を行います

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎回の授業に先立って、当該テキスト箇所の訳の作成と、その箇所での語学的・哲学的問題の検討を準備として行います。

【テキスト（教科書）】

Alain, *Propos* 1 (1956, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade)
(授業ではコピーを用意します)

【参考書】

アラン『人間論』（原亨吉訳、1978、白水社）
アンドレ・モロワ『アラン』（佐貫健訳、1964、みすず書房）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（50％）と議論への参加（25％）、および数回のレジュメ発表（25％）で評価します。到達目標達成度との関係では、3つの評価方法のそれぞれで、語学力50％、テキストの内的理解25％、テキストの外的コンテキストからの理解25％の割合で勘案を行います。

【学生の意見等からの気づき】

哲学の問題以上に、語学の問題にこだわって読んでいきます。良い意味でフランス語の授業にしていけることができればと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
-フランス哲学
〈研究テーマ〉
-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス19世紀思想史を材料に行っています。
〈主要研究業績〉
-『ベルクソン読本』（編著、2006年、法政大学出版局）
-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著、2012年、OLMS)
-Annales bergsoniennes (編著、2013年、PUF)
-Tout ouvert : l'évolution créatrice en tous sens(編著、2015年、OLMS)
-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016年、書肆心水）
-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著、2016年、書肆心水)
-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017年、書肆心水）
-Mécanique et mystique (編著、2018年、OLMS)
-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018年、書肆心水）

【Outline and objectives】

We will learn the thought of Alain (1868-1951) about human beings. We will consider "Propos" of Alain as discussions about human beings conducted from the standpoint of deeply scientific reason.

PHL600B1

科学哲学研究Ⅱ－2

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

■アランの科学の精神を学びます。

アラン (Alain 1868-1951) の短文形式の「プロポ」を、科学の精神、理性の立場から行われた人間についての議論とみなして検討していきます。

■とくにアラン『人間論』を学びます。

【到達目標】

- アランのフランス語原文を正確に日本語に訳せるようになる。
- アランの一つ一つの議論を、各プロポでの論理的一貫性の中で正確に捉えられるようになる。
- アランによる、深く科学的な精神からの一つ一つの議論を、今日の文明と社会の問題、さらには自分自身の問題と結びつけて解釈できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。

前もって訳を準備してきた参加者が、順に一文一文を担当し、輪読の形で訳読を進めます。その際、一文一文で、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。一つのプロポを3回に分けて読んでいきます。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、アランの人と思想について説明を行います。
第2回	外的秩序と人間的秩序 (1)	訳解と討論
第3回	外的秩序と人間的秩序 (2)	訳解と討論
第4回	外的秩序と人間的秩序 (3)	訳解と討論
第5回	ダーウィンの魔力 (1)	訳解と討論
第6回	ダーウィンの魔力 (2)	訳解と討論
第7回	ダーウィンの魔力 (3)	訳解と討論
第8回	救いにもなる必然性 (1)	訳解と討論
第9回	救いにもなる必然性 (2)	訳解と討論
第10回	救いにもなる必然性 (3)	訳解と討論
第11回	思考なき麻痺状態 (1)	訳解と討論
第12回	思考なき麻痺状態 (2)	訳解と討論
第13回	思考なき麻痺状態 (3)	訳解と討論
第14回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
毎回の授業に先立って、当該テキスト箇所の訳の作成と、その箇所での語学的・哲学的問題の検討を準備として行います。

【テキスト（教科書）】

Alain, *Propos* 1 (1956, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade)
(授業ではコピーを用意します)

【参考書】

アラン『人間論』（原亨吉訳、1978、白水社）
アンドレ・モロワ『アラン』（佐貫健訳、1964、みすず書房）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（50％）と議論への参加（25％）、および数回のレジュメ発表（25％）で評価します。到達目標達成度との関係では、3つの評価方法のそれぞれで、語学力50％、テキストの内的理解25％、テキストの外的コンテキストからの理解25％の割合で勘案を行います。

【学生の意見等からの気づき】

哲学の問題以上に、語学の問題にこだわって読んでいきます。良い意味でフランス語の授業にしていくことができればと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
- フランス哲学
〈研究テーマ〉
- 科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス19世紀思想史を材料に行っています。
〈主要研究業績〉
- 『ベルクソン読本』（編著、2006年、法政大学出版局）
- *Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson* (編著、2012年、OLMS)
- *Annales bergsoniennes* (編著、2013年、PUF)
- *Tout ouvert : l'évolution créatrice en tous sens* (編著、2015年、OLMS)
- 『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016年、書肆心水）
- *Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle* (編著、2016年、書肆心水)
- 『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017年、書肆心水）
- *Mécanique et mystique* (編著、2018年、OLMS)
- 『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018年、書肆心水）

【Outline and objectives】

We will learn the thought of Alan (1868-1951) about human beings. We will consider "Propos" of Alain as discussions about human beings conducted from the standpoint of deeply scientific reason.

PHL600B1

近代西洋哲学研究 I - 1

松井 久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ルネ・デカルトの『方法序説』をフランス語で読む。テキストを批判的に読むことによって、哲学するとはどういうことか、それぞれ自分の問題として考えるようになることが目的である。

【到達目標】

哲学の古典を原語で読み、デカルト哲学の基本を理解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は「オンライン授業」形式で行う。一文ずつ訳しながら、まとまったところで議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方の紹介と自己紹介
第 2 回	第 1 部第 1・2 段落	訳読と議論
第 3 回	第 1 部第 3・4・5 段落	訳読と議論
第 4 回	第 1 部第 6・7・8 段落	訳読と議論
第 5 回	第 1 部第 9・10・11 段落	訳読と議論
第 6 回	第 1 部第 12・13・14・15	訳読と議論
第 7 回	第 2 部第 1 段落	訳読と議論
第 8 回	第 2 部第 2・3 段落	訳読と議論
第 9 回	第 2 部第 4・5 段落	訳読と議論
第 10 回	第 2 部第 6 段落	訳読と議論
第 11 回	第 2 部第 7・8・9・10 段落	訳読と議論
第 12 回	第 2 部第 11・12 段落	訳読と議論
第 13 回	第 2 部第 13 段落	訳読と議論
第 14 回	まとめ	議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
テキストを読む。わからない単語は調べ、すべて文法的に説明できるようにする。毎回、内容的に、明確な問題提起を行えるようにする。

【テキスト（教科書）】

Descartes, Discours de la Méthode. Présentation et dossier par Laurence Renault, Paris, Flammarion, 2000.

【参考書】

授業中に適宜指示する。

さしあたり、翻訳書は『方法序説』野田又夫訳、中公文庫、1974
参考書としては、野田又夫『デカルト』岩波新書、1966
を挙げておく。

【成績評価の方法と基準】

授業での訳読によってフランス語の習熟度を評価し（50 %）と議論への参加と学期末のレポートでデカルト哲学への理解度を評価（50 %）する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>生物学の哲学、19 世紀哲学

<研究テーマ>生物学における個性性、環境概念の歴史的考察
<主要研究業績>

« L'individualité biologique chez Bergson », Implications philosophiques, Bergson ou la science (Ebook), 2013, p. 8-26.

« La “métaphysique positive” de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle », Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan, vol. 1, 2017, p. 58-72.

« Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu », フランス哲学・思想研究 22 号, 2017, p. 231-241.

【Outline and objectives】

This seminar analyzes Descartes' Discours de la méthode. Its objective is to examine and establish your philosophical method through the critical lecture of the Cartesien original text.

PHL600B1

近代西洋哲学研究 I - 2

松井 久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ルネ・デカルトの『方法序説』をフランス語で読む。テキストを批判的に読むことによって、哲学するとはどういうことか、それぞれ自分の問題として考えるようになることが目的である。

【到達目標】

哲学の古典を原語で読み、デカルト哲学の基本を理解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は「オンライン授業」形式で行う。一文ずつ訳しながら、まとまったところで議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	前期の復習	前期の疑問点を中心に議論する。
第 2 回	第 3 部第 1・2 段落	訳読と議論
第 3 回	第 3 部第 3・4 段落	訳読と議論
第 4 回	第 3 部第 5 段落	訳読と議論
第 5 回	第 3 部第 6・7 段落	訳読と議論
第 6 回	第 4 部第 1 段落	訳読と議論
第 7 回	第 4 部第 2 段落	訳読と議論
第 8 回	第 4 部第 3 段落	訳読と議論
第 9 回	第 4 部第 4 段落	訳読と議論
第 10 回	第 4 部第 5 段落	訳読と議論
第 11 回	第 4 部第 6 段落	訳読と議論
第 12 回	第 4 部第 7 段落	訳読と議論
第 13 回	第 4 部第 8 段落	訳読と議論
第 14 回	まとめ	議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
テキストを読む。わからない単語は調べ、すべて文法的に説明できるようにする。毎回、内容的に、明確な問題提起を行えるようにする。

【テキスト（教科書）】

Descartes, Discours de la Méthode. Présentation et dossier par Laurence Renault, Paris, Flammarion, 2000.

【参考書】

授業中に適宜指示する。

さしあたり、翻訳書は『方法序説』野田又夫訳、中公文庫、1974
参考書としては、野田又夫『デカルト』岩波新書、1966
を挙げておく。

【成績評価の方法と基準】

授業での訳読によってフランス語の習熟度を評価し（50 %）と議論への参加と学期末のレポートでデカルト哲学への理解度を評価（50 %）する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞生物学の哲学、19 世紀哲学

＜研究テーマ＞生物学における個性性、環境概念の歴史的考察

＜主要研究業績＞

« L'individualité biologique chez Bergson », Implications philosophiques, Bergson ou la science (Ebook), 2013, p. 8-26.

« La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle », Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan, vol. 1, 2017, p. 58-72.

« Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu », フランス哲学・思想研究 22 号, 2017, p. 231-241.

【Outline and objectives】

This seminar analyzes Descartes' Discours de la méthode. Its objective is to examine and establish your philosophical method through the critical lecture of the Cartesien original text.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅰ－Ⅰ

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「呪われた部分」「蕩尽」など基本的な概念をしっかり押さえて後期バタイユの重要概念「至高性」を理解する。
- ②とりわけ『至高性』第 2 部と第 3 部を中心に精読していく。
- ③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。
- 2) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定
- 3) なお、本年度の開講は 2021 年 4 月 10 日土曜日（2 時限）に教室にて対面で行う予定である。ただし社会情勢に応じてオンラインのズーム授業に転じる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第 2 回	『至高性』第 1 回	バタイユと『至高性』の概要説明
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 2 部第 4 章第 1 節
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 2 部第 4 章第 2 節
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 2 部第 4 章第 3 節
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 2 部第 4 章第 4 節
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 2 部第 4 章第 5 節
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 2 部第 4 章第 6 節
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 2 部第 4 章第 7 節
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 3 部第 1 章第 1 節
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 3 部第 1 章第 2 節
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 3 部第 1 章第 3 節
第 13 回	『至高性』第 12 回	第 3 部第 1 章第 4 節
第 14 回	『至高性』第 13 回	第 3 部第 1 章第 5 節

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユならびに現代思想に関心を持って読書を進めてほしい。とくに参考書にあげた文献は読んでおいてほしい。本授業は準備。復習に各 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

酒井健著『バタイユ入門』（ちくま新書）、湯浅博雄『消尽』（講談社学術文庫）、
バタイユ著『呪われた部分、全般経済学試論・蕩尽』（酒井健訳、ちくま学芸文庫）

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
 - ②学期末の発表（50 %）
- ＜到達目標との対応＞
上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
 - ②学期末の発表（50 %）
- ＜到達目標との対応＞
上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞バタイユ研究

＜主要研究業績＞

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the thought of Georges Bataille, especially of one of his last works :Souveraineté. That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究 I - 2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続きフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ(1897-1962)の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「呪われた部分」「蕩尽」など基本的な概念をしっかり押さえて後期バタイユの重要概念「至高性」を理解する。
- ②とりわけ『至高性』第 3 部と第 4 部を中心に精読していく。
- ③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。
- 2) 原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交える。
- 3) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定していく。
- 4) なお、本年度の開講は 2021 年 9 月 18 日土曜日（2 時限）に教室にて対面で行う予定である。ただし社会情勢に応じてオンラインのズーム授業に転じる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第 2 回	『至高性』第 1 回	第 3 部第 2 章第 1 節
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 3 部第 2 章第 2 節
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 3 部第 2 章第 3 節
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 3 部第 2 章第 4 節
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 3 部第 2 章第 5 節
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 3 部第 2 章第 6 節
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 3 部第 2 章第 7 節
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 3 部第 2 章第 8 節
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 3 部第 2 章第 9 節
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 3 部第 2 章第 10 節
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 3 部第 2 章第 11 節
第 13 回	『至高性』第 12 回	至高性と政治について検討する。
第 14 回	『至高性』第 13 回	まとめと出席者による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユおよびフランス現代思想の著作に親しんでおくこと。
本授業は準備と復習にそれぞれ 4 時間かけることを標準とする。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

『バタイユ入門』ちくま新書、酒井健著

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
 - ②学期末の発表（50 %）
- ≪ 到達目標との対応 ≫
上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
 - ②学期末の発表（50 %）
- 《到達目標との対応》
≪ 到達目標との対応 ≫
上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。学生からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想
＜研究テーマ＞バタイユ研究
＜主要研究業績＞
『バタイユ入門』ちくま新書

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the thought of Georges Bataille, especially of one of his last works :Souveraineté. That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅱ－1

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジャック・デリダ（1930-2004）の後期の思想を理解する。作品としては昨年度に引き続いて、1998年発表のブラショ論 *Demeure*（邦題では『滞留』）の後半を読んでいく。デリダの基本から理解していき、フランス現代思想との接点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「宗教」「文学」などに対するデリダの基本的な考え方を知って、現代思想への理解を深めていく。
- ②とりわけ *Demeure* 後半を中心に精読していく。
- ③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いデリダの理解へ達する。たとえば「記号論」「正義論」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ゼミ形式の講読の授業。原書でデリダの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定である。

今年度の授業は4月10日土曜日から教室にて対面形式で行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	今期の授業の概要の説明。デリダに関する院生の研究発表
第2回	<i>Demeure</i> 第1回	テキスト 56-61 頁の解説。
第3回	<i>Demeure</i> 第2回	テキスト 61-66 頁解説
第4回	<i>Demeure</i> 第3回	テキスト 66-71 頁解説
第5回	<i>Demeure</i> 第4回	テキスト 71-76 頁解説
第6回	<i>Demeure</i> 第5回	テキスト 76-81 頁解説
第7回	<i>Demeure</i> 第6回	テキスト 81-86 頁解説
第8回	<i>Demeure</i> 第7回	テキスト 86-91 頁解説
第9回	<i>Demeure</i> 第8回	テキスト 91-96 頁解説
第10回	<i>Demeure</i> 第9回	テキスト 96-101 頁解説
第11回	<i>Demeure</i> 第10回	テキスト 101-110 頁解説
第12回	<i>Demeure</i> 第11回	テキスト 106-111 頁解説
第13回	<i>Demeure</i> 第12回	授業内容に関する院生の研究発表
第14回	試験、まとめ	まとめと復習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

デリダの入門書や翻訳書などを読んでおくこと。

たとえば

『ジャック・デリダ入門講義』仲正昌樹著、作品社

『ポジション』デリダ著、高橋允昭訳、青土者

【テキスト（教科書）】

Jacques Derrida, *Demeure*, Galilée, 1998

【参考書】

デリダ著『滞留』湯浅博雄監訳、郷原佳以訳、未来社

高橋哲哉著『デリダ』（講談社）等

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランス現代思想

<研究テーマ> バタイユ研究

<主要研究業績>

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the thought of Jacques Derrida, especially of one of his last works :*Demeure*. That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅱ－2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジャック・デリダ（1930-2004）の後期の思想を理解する。作品としては前学期に引き続いて、1998年発表のプランシヨ論 *Demeure*（邦題では『滞留』）の後半を読んでいく。さらに写真論でもある *Demeure, Athènes*（邦題では『留まれ、アテネ』）にも入っていく。デリダの基本から理解していき、フランス現代思想との接点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「宗教」「文学」などに対するデリダの基本的な考え方を知って、現代思想への理解を深めていく。
- ②とりわけ *Demeure*、および *Demeure, Athènes* を中心に精読していく。
- ③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いデリダの理解へ達する。たとえば「記号論」「正義論」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。
- 2) フランス語原文でデリダの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。
- 3) 題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定
- 4) 本授業の開講は2021年9月18日土曜日（3時限）、教室にて対面形式で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	<i>Demeure</i> 第1回	今期の授業の概要の説明。デリダに関する院生の研究発表
第2回	<i>Demeure</i> 第2回	テキスト 111-116 頁解説
第3回	<i>Demeure</i> 第3回	テキスト 116-121 頁解説
第4回	<i>Demeure</i> 第4回	テキスト 121-126 頁解説
第5回	<i>Demeure</i> 第5回	テキスト 126-131 頁解説
第6回	<i>Demeure</i> 第6回	テキスト 131-136 頁解説
第7回	<i>Demeure</i> 第7回	テキスト 136-139 頁、および 141-144 頁解説
第8回	<i>Demeure, Athènes</i> 第1回	テキスト 1-10 頁解説
第9回	<i>Demeure, Athènes</i> 第2回	テキスト 10-20 頁解説
第10回	<i>Demeure, Athènes</i> 第3回	テキスト 20-30 頁解説
第11回	<i>Demeure, Athènes</i> 第4回	テキスト 30-40 頁解説
第12回	<i>Demeure, Athènes</i> 第5回	テキスト 40-50 頁解説
第13回	<i>Demeure, Athènes</i> 第6回	テキスト 50 - 60 頁
第14回	まとめ	復習をかねて院生による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

春学期に指示した文献を読んでおくこと。
本授業の準備・復習時間は各4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

Jacques Derrida, *Demeure*; Galilée, 1998

Jacques Derrida, *Demeure, Athènes*; Galilée, 2009

【参考書】

デリダ著『滞留』、湯浅博雄監訳、郷原佳以訳、未来社

デリダ著『留まれ、アテネ』、矢橋透訳、みすず書房

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

《到達目標との対応》

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞ジョルジュ・バタイユ研究

＜主要研究業績＞近刊の訳書に『呪われた部分・全般経済学試論・蕩尽』（バタイユ著、ちくま学芸文庫）がある。

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the thought of Jacques Derrida, especially of one of his last works :*Demeure*. That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL600B1

超越論哲学研究Ⅱ－1

大森 一三

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の概要及び目的は、カントの批判の特徴や思考方法を理解し、その思想史的意義を学ぶことである。同時に批判哲学の現代的意義と課題についても理解し、学んでゆく。

【到達目標】

カントの批判期哲学の体系性の意義や今日の課題を把握し、具体的に説明できるようになること。また学生は、批判哲学の哲学史的意義と今日の意義の両者の結びつきを正確に示し、美学討論できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的にはオンライン授業型で行う。なお、途中オンデマンド授業も採用して進めてゆく。授業曜日・時間は時間割に示した通りだが、受講者の要望に応じて時間や進め方については、調整してゆく。授業では、毎回報告者を決めて、内容考察のレポートやドイツ語テキストの精読を担当していただき、相互の質疑応答により、内容理解と目的達成に努める。また、適宜、受講生にリアクションペーパーの提出を求め、授業内でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	批判哲学の概要	批判哲学の思想史上の意義と課題
第2回	三批判書の特徴と内容	三批判書の狙いと構成について
第3回	『判断力批判』の内容と構成	第三批判の狙いと意義について
第4回	『判断力批判』序論について	2つの序論の内容と違いについて
第5回	『判断力批判』第1節の読解	感性の特徴と意味について
第6回	『判断力批判』第2節の読解	趣味とは何か
第7回	『判断力批判』第3節の読解	批判哲学における「快」の意義
第8回	『判断力批判』第4節の読解	善について考える
第9回	ディスカッション	現代における美・芸術と『判断力批判』について考える
第10回	『判断力批判』第5節の読解	快・善・美の比較
第11回	『判断力批判』第6節の読解	美感的判断とは何か
第12回	『判断力批判』第7節の読解	美感的判断と悟性の関係について
第13回	『判断力批判』第8節の読解	主観的判断と客観的判断の違いとその意味について
第14回	本範囲の振り返りと総括	趣味判断の特徴と意義について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で示される講読範囲についての予習が必要です。また、各回での授業内容・訳読についての復習を行うことも推奨します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, Kritik der Urteilkraft. Meiner, (PHB 39a.), (Amazonにて、2000円程度)。岩波書店版『カント全集』第8巻（牧野英二訳・解説、5200円）。

【参考書】

高峯一愚『カント判断力批判注釈』（論創社、1990年）。『崇高の哲学—情感豊かな理性の構築に向けて』（法政大学出版局、2007年）、『新・カント読本』（法政大学出版局、2018年）いずれも牧野英二著・編。大森一三『文化の進歩と道徳性——カント哲学の「隠されたアンチノミー」』（法政大学出版局、2019年）、御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川書店、2020年）。

【成績評価の方法と基準】

訳読及び内容の報告・疑問点の提示を含む発表40%（発表数及び内容の適切さや独創性の評価を含む）、質疑応答30%（討論参加の回数、その努力や説得力の判定・評価）。春学期末提出のレポート（30%）。以上による総合的評価（合計100%）

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ受講者の皆さんと話し合い、それぞれの興味関心や研究テーマに応じて授業を進めてゆく予定です。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に参加できるための機器（パソコン、タブレット、スマホ等）

【その他の重要事項】

初回の授業の際に、受講者からの要望を受けての調整を行いたいと思います。幅広い関心を持った学生の参加を期待しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

カント哲学、哲学的文明論、比較思想、教育哲学

<研究テーマ>

近現代哲学および文化、文明に関する哲学的考察

世界市民教育と哲学の関係についての研究

<主要研究業績>

文化の進歩と道徳性—カント哲学の隠されたアンチノミー』（法政大学出版局、2019年）、「世界市民教育としての哲学」（『哲学の返還と知の越境:伝統的思考法を問い直すための手引き』法政大学出版局、2019年）、「純粋理性宗教と歴史的信仰の相克」（牧野英二編『新・カント読本』、法政大学出版局、2018年）等

【Outline and objectives】

This course will help you to understand Kants Critical philosophy. After taking this course you will be able to deepen the understandings the meaning of some his philosophy and terminology, for example, Ästhetisch, Zweckmäßigkeit and Schönheit. This course will be taught in Japanese.

PHL600B1

超越論哲学研究Ⅱ－2

鵜澤 和彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業はエルンスト・カッシーラー著『実体概念と関数概念』(Ernst Cassirer, *Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchung über die Grundfragen der Erkenntniskritik*)を精読し、カッシーラーの概念論、とくに数学的な構造主義の意義と役割を解明する。20世紀初頭、精密自然科学を基礎づけるには、その道具である数学的認識の可能性を論理的に明らかにする必要があった。しかし、アリストテレスの伝統的論理学では、この要求には応えることができなかった。この理由から、カッシーラーは新たな概念論（論理学）を構築し、この論理学から数学と精密自然科学を基礎づけようと試みた。授業では、この歴史的背景を踏まえて、現代の認識批判の意義と役割を明らかにする。

【到達目標】

- ① 20世紀初頭の心理主義と論理主義の論争を振り返り、認識論の根本問題を理解できる。
- ② 論理学と数学との関連、とくにカッシーラーの概念論とデューデキントの数論やフレーゲの論理学との関係を把握できる。
- ③ ドイツ語原文の音読、文法、表現に関する疑問を解決していくことで、テキストを正確に読み、翻訳する能力を習得できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ① 本講義は、対面授業の形式で行われる。
- ② 原典購読と講義ならびに質疑応答により、テキストの内容理解に努める。なお、ドイツ語を履修していない受講生にも配慮して、テキストの邦訳（参考書の欄を参考）による参加も可とする。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	第3章「空間概念と幾何学」幾何学の基礎づけの問題	幾何学の合理的基礎づけと経験的基礎づけ、数学的空間と感性的空間、幾何学と現実との関連について学ぶ。
第2回	第4章「自然科学的概念形成」第1節「自然概念と構成概念」	自然科学における純粋な記述という理想について解説する。
第3回	第4章「自然科学的概念形成」第2節「計数と計量提」	力学観の概念、運動の幾何学的概念と数学的観念を説明する。
第4回	第4章「自然科学的概念形成」第2節「極限概念とその意義」	極限概念の観念論的解釈と経験論的解釈、實在の問題、真理性と現実性の関係について学ぶ。
第5回	第4章「自然科学的概念形成」第3節「物理学的方法とその歴史」	古代の経験概念、自然概念と目的概念、目的論と数学、数学的物理学の経験概念について解説する。
第6回	第4章「自然科学的概念形成」第4節「自然科学的認識の方法」	仮説と自然法則、物理学の測定の前提、事実と理論、物理学の仮説の検証を説明する。
第7回	第4章「自然科学的概念形成」第4節「系列形成の根本思想」	物理学の系列概念、数概念と自然概念の関連について学ぶ。

第8回	第4章「自然科学的概念形成」第5節「事物概念の発展」	イオニアの自然哲学における実体概念、感性的質の物化、類概念の体系と感性的質の物理学について説明する。
第9回	第4章「自然科学的概念形成」第5節「原子論の体系」	原子論と数論、原子概念の基礎づけ、原子概念と微分計算、原子概念の変遷を解説する。
第10回	第4章「自然科学的概念形成」第5節「物質の概念とエーテルの概念」	物理学の対象概念の論理的形式、対象概念の現実的要請と非現実的要請を考察する。
第11回	第4章「自然科学的概念形成」第6節「空間と時間の概念」	絶対空間と絶対時間の概念、純粋力学の基準系、慣性法則、絶対空間と観念的空間について学ぶ。
第12回	第4章「自然科学的概念形成」第6節「物理学と存在論」	数学的観念としての空間と時間、絶対空間と観念的空間を解説する。
第13回	第4章「自然科学的概念形成」第7節「エネルギーの概念」	エネルギー概念と感性的質、エネルギー概念と数概念、計量概念について学ぶ。
第14回	第4章「自然科学的概念形成」第7節「純粋関係概念としてのエネルギー」	エネルギー一元論の形式的前提、物理学の抽象の方法と現代論理学における抽象の問題を解説する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。受講生は、各授業で扱うテキストの該当箇所を精読し、疑問点や問題点を整理しておいてください。

【テキスト（教科書）】

Ernst Cassirer, Birgit Recki, *Gesammelte Werke. Hamburger Ausgabe / Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchungen ueber die Grundfragen der Erkenntniskritik*, Meiner Felix Verlag(1999)

【参考書】

(邦訳) エルンスト・カッシーラー (著)、山本義隆 (訳)『実体概念と関数概念——認識批判の基本的諸問題の研究』（みすず書房、1979年）

【成績評価の方法と基準】

① 毎回の授業での訳の準備と内容理解は、成績全体の50%、② ドイツ語原文の音読・文法・表現に関する説明は25%、③ 概念の語源的意義と概念史的連関の理解は25%とする。なお、ドイツ語を履修していない受講生については、課題レポートの評価50%、コメント及び議論への参加50%とする。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミ参加者の研究テーマに配慮しながら、認識批判の諸概念を理解しやすく解説する。また、ドイツ語の読み方や文法の説明も併せて行う。

【学生が準備すべき機器他】

特にない。

【その他の重要事項】

オフィスアワーについては、授業終了後に質問を受け付ける。なお、随時、メールでの質問も受け付ける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> カントを中心とする近現代ドイツ哲学
<研究テーマ> 意味論、構想力論、心の哲学、解釈学、生命・医療倫理学
<主要研究業績>

(共著) Die japanische Edition von Kants Gesammelten Schriften, in: *Kant-Studien*, 2013, Band 104, Heft 3. S. 386-394. ヴィルヘルム・ディルタイ著『アカデミー版カント全集・前文』翻訳及び解説（日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』第25号、2014年）、p.98-117. 「編集者としてのディルタイ・アカデミー版カント全集の歴史的経緯からの考察」（日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』第26号、2015年）、p.56-72. 「カテゴリーの演繹論と図式論—超越論の真理概念をめぐる—」（牧野英二編『新・カント読本』、2018年）、「生命・医療倫理とゲシュタルトクライス—現代の論争点として仁恵原則を問う—」（『哲学の変換と知の越境』2019年）、「リベラル優生学のパラドックス—ゲノム編集における遺伝的多様性をめぐって—」（北里大学一般教育紀要第25号、2020年）

【Outline and objectives】

This course will consist of a close reading of Ernst Cassirer's *Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchung über die Grundfragen der Erkenntniskritik*, to clarify the significance and role of Cassirer's conceptual theory, especially mathematical structuralism. At the beginning of the 20th century, to provide a basis for a precise natural science, it was necessary to clarify the possibility of mathematical cognition, its tool, in terms of logic. However, the traditional Logic of Aristotle could not meet this demand. For this reason, Cassirer constructed a new conceptual theory (logic) and attempted to base mathematics and precise natural science on this logic. In the class, we will clarify the significance and role of modern cognitive criticism in light of this historical background.

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅰ－１

半田 勝彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「人間は本性上ポリスの（国家を持つ）動物である」という命題で夙に知られるアリストテレスの『政治学』を講読する。これは、西洋政治思想史において非常に大きな影響力を有する著作である。人間は自らの可能性（本性）を実現する為に国家を必要とする、とアリストテレスは考えた。本書の読解を通じて、国家の本質や目的、正義、法、最善の国制、その他政治に関する基本的な概念を考察することができる。

【到達目標】

テキストを正しく読解することができる。原文の内容を正確に理解したうえで、アリストテレスの考えを適切に擁護、ないしは、批判することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、オンデマンド授業（資料型）形式で行います。毎回１章ずつ進むことにして、担当者に、その章の①要約②疑問点・問題点③意見・感想などを報告してもらう。それに対して、他の参加者は、学習支援システムを介してコメントを投稿する。最後に、教員が、論点を整理し、コメントを加えて、全体に対してフィードバックを行う。このような形で授業を進めていき、必要に応じて、研究論文も読みながら、アリストテレスの考えの意義や問題点などを検討していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第１回	イントロダクション	授業の進め方
第２回	『ニコマコス倫理学』第１０巻第９章	倫理学から政治学へ
第３回	『政治学』第１巻第１章	共同体
第４回	『政治学』第１巻第２章	国家の自然性
第５回	『政治学』第１巻第２章	ポリスの動物
第６回	『政治学』第２巻第７章	パレアスの国制論批判
第７回	『政治学』第３巻第１章	市民の定義
第８回	『政治学』第３巻第２章	市民の定義に関する問題
第９回	『政治学』第３巻第３章	国家の同一性
第１０回	『政治学』第３巻第４章	よき人の徳とよき市民の徳
第１１回	『政治学』第３巻第５章	市民の種類

第12回 『政治学』第3巻第6章 正しい国制と逸脱した国制

第13回 研究論文の講読 論文の精読

第14回 総括 春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：テキストを精読し、疑問点や問題点を挙げておく。

復習：テキストの誤読がなかったかを確認し、疑問点や問題点を整理して自分の考えをまとめる。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

共通の邦訳テキストとして、

『政治学』：岩波新版『アリストテレス全集』第17巻

『ニコマコス倫理学』：光文社古典新訳文庫

を使用しますので各自用意して下さい。

【参考書】

『政治学』・『ニコマコス倫理学』の邦訳は、岩波文庫、岩波旧版『アリストテレス全集』、西洋古典叢書（京都大学学術出版会）にあるので、必要に応じて各自参照して下さい。

【成績評価の方法と基準】

読解・要約50%（テキストを正しく読解し要約できているか）と、解釈・意見50%（原文の内容を正確に理解したうえで、アリストテレスの考えを適切に擁護、ないしは、批判できているか）を勘案して総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストの内容を正確に理解したうえで、研究論文を批判的に読めるようにする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞古代ギリシア哲学

＜研究テーマ＞プラトンとアリストテレスの政治・倫理思想

＜主要研究業績＞①『自然と人間』（共著、梓出版社、2006年）

②「大衆の主権と政治参与——アリストテレスにおける「衆知の論」をめぐって——」（『倫理学年報』第61集、2012年）

③デモステネス『弁論集6』（共訳、京都大学学術出版会、2020年）

【Outline and objectives】

'Man is by nature a political animal.' We read Aristotle's *Politics*. It is one of the most influential texts in the history of political thought. Aristotle believed that the state is needed by man to fulfil his potential. By reading the *Politics*, we can study the nature of political organization, the aims of the state, justice, law, the best constitution, and other basic political concepts.

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅰ－2

半田 勝彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「人間は本性上ポリス的（国家を持つ）動物である」という命題で夙に知られるアリストテレスの『政治学』を講読する。これは、西洋政治思想史において非常に大きな影響力を有する著作である。人間は自らの可能性（本性）を実現する為に国家を必要とする、とアリストテレスは考えた。本書の読解を通じて、国家の本質や目的、正義、法、最善の国制、その他政治に関する基本的な概念を考察することができる。

【到達目標】

テキストを正しく読解することができる。原文の内容を正確に理解したうえで、アリストテレスの考えを適切に擁護、ないしは、批判することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、オンデマンド授業（資料型）形式で行います。毎回1章ずつ進むことにして、担当者に、その章の①要約②疑問点・問題点③意見・感想などを報告してもらう。それに対して、他の参加者は、学習支援システムを介してコメントを投稿する。最後に、教員が、論点を整理し、コメントを加えて、全体に対してフィードバックを行う。このような形で授業を進めていき、必要に応じて、研究論文も読みながら、アリストテレスの考えの意義や問題点などを検討していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	第3巻第7章	国制の分類
第3回	第3巻第8章	寡頭制と民主制
第4回	第3巻第9章	寡頭制的な正義と民主制的な正義
第5回	第3巻第10章	国家の主権の所在
第6回	第3巻第11章	衆知の論
第7回	第3巻第12章	平等と不平等
第8回	第3巻第13章	公職を要求する根拠
第9回	第3巻第14章	王制
第10回	第3巻第15章	王による支配
第11回	第3巻第16章	法による支配
第12回	第3巻第17章	絶対王制
第13回	研究論文の講読	論文の精読
第14回	総括	秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：テキストを精読し、疑問点や問題点を挙げておく。

復習：テキストの誤読がなかったかを確認し、疑問点や問題点を整理して自分の考えをまとめる。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

共通の邦訳テキストとして、

『政治学』：岩波新版『アリストテレス全集』第17巻

『ニコマコス倫理学』：光文社古典新訳文庫

を使用しますので各自用意して下さい。

【参考書】

『政治学』・『ニコマコス倫理学』の邦訳は、岩波文庫、岩波旧版『アリストテレス全集』、西洋古典叢書（京都大学学術出版会）にあるので、必要に応じて各自参照して下さい。

【成績評価の方法と基準】

読解・要約 50 %（テキストを正しく読解し要約できているか）と、解釈・意見 50 %（原文の内容を正確に理解したうえで、アリストテレスの考えを適切に擁護、ないしは、批判できているか）を勘案して総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストの内容を正確に理解したうえで、研究論文を批判的に読めるようにする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞古代ギリシア哲学

＜研究テーマ＞プラトンとアリストテレスの政治・倫理思想

＜主要研究業績＞①『自然と人間』（共著、梓出版社、2006 年）

②「大衆の主権と政治参与——アリストテレスにおける「衆知の論」をめぐって——」（『倫理学年報』第 61 集、2012 年）

③デモステネス『弁論集 6』（共訳、京都大学学術出版会、2020 年）

【Outline and objectives】

‘Man is by nature a political animal.’ We read Aristotle’s *Politics*. It is one of the most influential texts in the history of political thought. Aristotle believed that the state is needed by man to fulfil his potential. By reading the *Politics*, we can study the nature of political organization, the aims of the state, justice, law, the best constitution, and other basic political concepts.

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－１

長谷川 悦宏

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

J.S. ミルの『自由論』における社会的自由の諸問題を考察する。

【到達目標】

今日の政治哲学上の対立点などを明確に述べられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

第四章冒頭より輪読形式で読み進める。授業内発表も行う（発表に対する講評・解説を発表後行う）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	講義要項及び諸注意	『自由論』概説
2	自己配慮	テキスト 85-87 頁
3	自身に対する義務	テキスト 87-90 頁
4	バターナリズム	テキスト 90-94 頁
5	公衆による害意	テキスト 94-98 頁
6	英米における実例	テキスト 98-101 頁
7	宗教に関する事例	テキスト 101-105 頁
8	第四章の総括	第四章全体の内容の検討
9	二つの格率の均衡	テキスト 106-113 頁
10	間接的干渉	テキスト 113-115 頁
11	無効な契約の解除	テキスト 115-117 頁
12	家族関係、教育	テキスト 117-122 頁
13	政府による干渉	テキスト 122-129 頁
14	第五章の総括	第五章全体の内容の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文法や内容に関する疑問点などのメモを作成する（予習）。関連文献に目を通す（復習）。予復習とも二時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（J.S. Mill, On Liberty, Prometheus Books, 1986）はコピーを配布いたします。

【参考書】

『自由論』の邦訳は岩波文庫にあるので、各自用意すること。

【成績評価の方法と基準】

訳読 60 %、討論参加 30 %、レポート 10 %の割合で評価する。ミルの現代性に関して明快に述べることが重視される。

【学生の意見等からの気づき】

正確な訳読が前提であるが、今日の状況にも言及する。

【担当教員の専門分野】

＜専門領域＞19 世紀実証主義思想

＜研究テーマ＞コントと J.S. ミルの思想の比較考察

＜主要研究業績＞①『自然と人間』（共著、梓出版、2006）②「J.S. ミルの宗教思想—希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか—」（『法政大学文学部紀要』第 57 号、2008）③「ミル経験主義とプラグマティズム序論」（『法政哲学』第 14 号、2018）

【Outline and objectives】

J.S. Mill’s thoughts in his “On Liberty” are examined, and a problem of social liberty is considered.

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－2

長谷川 悦宏

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

J.S. ミルの『功利主義論』における倫理学上の諸問題を考察する。

【到達目標】

ミルと今日の哲学者との対立点などを明確に述べられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

冒頭より輪読形式で読み進める。授業内発表も行う（発表に対する講評・解説を発表後行う）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	講義要項及び諸注意	『功利主義論』概説
2	道徳の基礎原理	テキスト 272-74 頁
3	暗黙の基準	テキスト 274-76 頁
4	快楽の質	テキスト 276-79 頁
5	経験による判定	テキスト 279-81 頁
6	質批判の検討	テキスト 281-83 頁
7	幸福批判、利己心	テキスト 283-85 頁
8	精神の開発	テキスト 285-87 頁
9	幸福批判の評価	テキスト 287-288 頁
10	黄金律という理想	テキスト 288-89 頁
11	行為の基準と動機	テキスト 289-93 頁
12	宗教、便宜	テキスト 293-95 頁
13	行為の計算	テキスト 295-98 頁
14	第一、二章の総括	第一、二章全体の内容の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文法や内容に関する疑問点などのメモを作成する（予習）。関連分野に目を通す（復習）。予復習とも二時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（ J.S.Mill and Jeremy Bentham, Utilitarianism, Penguin Books,1987）はコピーを配布いたします。

【参考書】

邦訳は『功利主義論集』（京都大学学術出版会）がある。

【成績評価の方法と基準】

訳読 60 %、討論参加 30 %、レポート 10 % の割合で評価する。ミルの現代性を明快に述べることが重視される。

【学生の意見等からの気づき】

正確な訳読が前提であるが、現代的なトピックにも大いに言及する。

【担当教員の専門分野】

< 専門領域 > 19 世紀実証主義思想
 < 研究テーマ > コントと J.S. ミルの思想の比較考察
 < 主要業績 > ①『自然と人間』（共著、梓出版、2006）②「J.S. ミルの宗教思想－希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか－」（『法政大学文学部紀要』第 57 号、2008）③「ミル経験主義とプラグマティズム序論」（『法政哲学』14 号、2018）

【Outline and objectives】

J.S.Mil's thoughts in his 'Utilitarianism' are examined, and a problem of ethics is considered.

PHL600B1

法哲学研究 1

内藤 淳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Whitley R.P. Kaufman, Human Nature and the Limits of Darwinism, Palgrave Macmillan, 2016 の第 2 章「The Traditional Theory of Human Nature」を精読する。この章は、西洋哲学（の歴史的伝統）における人間本性の捉え方を分析する内容である。

【到達目標】

①西洋思想史における伝統的な人間観の特徴や論点、問題点を理解する。
 ②それらを踏まえて「人間本性」について自分なりの考えを持ち、それと他の人間観との相違点や対立点について説明できるようになる。
 ③英語の専門文献を読んで理解し、それについての正確な日本語訳が作れるようになる。また、正確な日本語で論理的な文章が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。但し、状況に応じて Zoom 等でのオンライン授業や課題提示等によるオンデマンド授業を組み入れる。その点を含めて、授業実施上必要な連絡や調整は適宜学習支援システムを活用しつつ行う。

毎回担当者を決め、テキスト担当箇所の日本語訳の作成を課題として課す。個々の授業においてその訳文の吟味・検討を行い、問題箇所を修正する。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。具体的な講読箇所は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第 2 回	昨年度の講読箇所の解説	西洋の二元論的人間観についての解説
第 3 回	西洋古代・中世の人間観と世界観について 1	テキスト第 2 章 pp.31-32
第 4 回	西洋古代・中世の人間観と世界観について 2	テキスト第 2 章 pp.32-33
第 5 回	西洋古代・中世の人間観と世界観について 3	テキスト第 2 章 pp.33-34
第 6 回	人間観と理性について 1	テキスト第 2 章 pp.34-35
第 7 回	人間観と理性について 2	テキスト第 2 章 pp.35-36
第 8 回	人間観と理性について 3	テキスト第 2 章 pp.36-37
第 9 回	理性の超越性について 1	テキスト第 2 章 pp.37-38
第 10 回	理性の超越性について 2	テキスト第 2 章 pp.38-39
第 11 回	理性の超越性について 3	テキスト第 2 章 pp.39-40
第 12 回	理性の超越性について 4	テキスト第 2 章 pp.40-42

第13回 理性と宗教の関係につ テキスト第2章 pp.42-43

いて

第14回 西洋の伝統的人間観の テキスト第2章 pp.43-45
全体的特徴について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳を作成する。

【テキスト（教科書）】

Whitley R.P. Kaufman, Human Nature and the Limits of Darwinism, Palgrave Macmillan, 2016

【参考書】

スティーブン・ピンカー『人間の本性を考える』（上）～（下）日本放送出版協会、2004年

スティーブン・ピンカー『心の仕組み』（上）～（下）日本放送出版協会、2003年

ダニエル・C・デネット『ダーウィンの危険な思想』青土社

ダニエル・C・デネット『心の進化を解明する』青土社

その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～③の達成度を評価する。担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況、それに関する授業での質疑応答を含む）の評価：80%。それ以外での授業での議論内容：20%。

【学生の意見等からの気づき】

訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。文法など、基礎的な要素の理解の徹底にも努めたい。

【学生が準備すべき機器他】

状況によりオンライン形式を組み入れた場合には、学習支援システム及び Zoom 等の双方向通信の利用ができる機器が必要になる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>法哲学

<研究テーマ>人権や憲法の基礎についての研究

<主要研究業績>

「功利原理と人間本性：ミルを進化心理学で批判する」法政大学文学部紀要 78 号、2018 年

「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要 75 号、2017 年

「平和は『絶対』を求めるべきか？：ホブズを進化心理学で修正する」（1）（2・完）法政大学文学部紀要 71 号・72 号、2015 年
「憲法学は立憲の憲法を正当化できるか？」(1)(2・完) 一橋法学 12 巻 2 号・3 号、2013 年

「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012 年
「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座 人権論の再定位 5）』法律文化社、2010 年

「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容を持ちうるか」『新世代法政策学研究』第 8 号、2010 年

【Outline and objectives】

This course introduces human nature in philosophical history. The main aim of this course is to help students understand the traditional theory of human nature by studying the history of Western philosophy. At the end of this course, participants are expected to have their own opinions on human nature and explain them rationally.

PHL600B1

法哲学研究 2

内藤 淳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Whitley R.P. Kaufman, Human Nature and the Limits of Darwinism, Palgrave Macmillan, 2016 の第 4 章「Reason, Truth, and Evolution」を精読する。この章は、西洋哲学の伝統的な二元論的人間観と、進化理論に基づく一元論的人間観との対立を論じる内容である。

【到達目標】

①西洋の伝統的な二元論的人間観と進化理論的な一元論的な人間観の特徴、対立点などを理解する。

②それらを踏まえて「人間本性」について自分なりの考えを持ち、それと他の人間観との相違点や対立点について説明できるようになる。

③英語の専門文献を読んで理解し、それについての正確な日本語訳が作れるようになる。また、正確な日本語で論理的な文章が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。但し、状況に応じて Zoom 等でのオンライン授業や課題提示等によるオンデマンド授業を組み入れる。その点を含めて、授業実施に必要な連絡や調整は適宜学習支援システムを活用しつつ行う。

毎回担当者を決め、テキスト担当箇所の日本語訳の作成を課題として課す。個々の授業においてその訳文の吟味・検討を行い、問題箇所を修正する。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。具体的な講読箇所は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第2回	概括的ポイントの解説	二元論的人間観と一元論的人間観の特徴について
第3回	進化理論的人間観の概観	テキスト第4章 pp.67-68
第4回	進化理論による伝統理論への批判について1	テキスト第4章 pp.68-69
第5回	進化理論による伝統理論への批判について2	テキスト第4章 pp.69-71
第6回	進化理論による伝統理論への批判について3	テキスト第4章 pp.71-73
第7回	進化理論による伝統理論への批判について4	テキスト第4章 pp.73-75
第8回	観念についての進化理論的説明1	テキスト第4章 pp.75-76
第9回	観念についての進化理論的説明2	テキスト第4章 pp.76-78
第10回	ミーム概念について1	テキスト第4章 pp.78-80
第11回	ミーム概念について2	テキスト第4章 pp.80-82
第12回	合理主義の矛盾について1	テキスト第4章 pp.82-83
第13回	合理主義の矛盾について2	テキスト第4章 pp.83-85
第14回	理性の役割について	テキスト第4章 pp.85-86

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳を作成する。

【テキスト（教科書）】

Whitley R.P. Kaufman, Human Nature and the Limits of Darwinism, Palgrave Macmillan, 2016

【参考書】

スティーブン・ピンカー『人間の本性を考える』（上）～（下）日本放送出版協会、2004 年
スティーブン・ピンカー『心の仕組み』（上）～（下）日本放送出版協会、2003 年
ダニエル・C・デネット『ダーウィンの危険な思想』青土社
ダニエル・C・デネット『心の進化を解明する』青土社
その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～③の達成度を評価する。担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況、それに関する授業での質疑応答を含む）の評価：80 %。それ以外での授業での議論内容：20 %。

【学生の意見等からの気づき】

訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。文法など、基礎的な要素の理解の徹底にも努めたい。

【学生が準備すべき機器他】

状況によりオンライン形式を組み入れた場合には、学習支援システム及び Zoom 等の双方向通信の利用ができる機器が必要になる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>法哲学
<研究テーマ>人権や憲法の基礎についての研究
<主要研究業績>
「功利原理と人間本性：ミルを進化心理学で批判する」法政大学文学部紀要 78 号、2018 年
「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要 75 号、2017 年
「平和は『絶対』に求めるべきか？：ホブズを進化心理学で修正する」（1）（2・完）法政大学文学部紀要 71 号・72 号、2015 年
「憲法学は立憲の憲法を正当化できるか？」(1)(2・完) 一橋法学 12 巻 2 号・3 号、2013 年
「一夫一婦制と『憲法』の目的」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012 年
「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座 人権論の再定位 5）』法律文化社、2010 年
「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第 8 号、2010 年

【Outline and objectives】

This course introduces human nature in philosophical history and modern evolutionary psychology. The main aim of this course is to help students understand the conflict between traditional theory and Darwinian theory concerning human nature. At the end of this course, participants are expected to have their own opinions on human nature and explain them rationally.

PHL500B1

哲学ドイツ語研究 1

笠原 賢介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ドイツ語で書かれた原典や研究文献を読むことを目標として、ドイツ語の基礎を第一歩から学びます。研究の前提となる基礎力を養うことが目標です。ドイツ語の未習者、および、既習者で知識を深めたいと思う者を対象とします。

【到達目標】

ドイツ語の文法をその第一歩から学び、基礎的な文法の全体を把握し、身につけることを目指す。それをもとにドイツ語で書かれたテキストの読解の初歩を目指す。読解の際のテキストは、ニーチェのアフォリズムを用いる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

『新訂・岩崎・平尾・初歩ドイツ文法（新正書法対応）』（同学社）を教科書として用います。毎回、文法の説明の後、練習問題によって理解を確認します。復習のための練習問題を参加者に課し、学習支援システムを用いて提出、次回にプリントの形でフィードバックします。文法の学習の終了の後には、ニーチェの短いアフォリズムを輪読形式で読む予定です。テキストはコピーで配布します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス。発音。	授業の進め方、内容、成績評価。テキストを原典で読むことの意義。ドイツ語の発音の基礎を学びます。以下の進度は目安です。
第 2 回	発音の復習。第一課「動詞の現在人称変化（1）」	発音の復習をし、動詞の現在人称変化の基礎を学びます。
第 3 回	第二課「動詞の現在人称変化（2）・格と人称代名詞」	第一課の復習をし、不規則な動詞の変化の一部、および人称代名詞の変化を学びます。
第 4 回	第三課「冠詞・名詞の単数形」	第二課の復習をし、定冠詞と不定冠詞の変化を名詞の単数形に関して学びます。
第 5 回	第四課「動詞の現在人称変化（3）・話法の助動詞・文と文成分」	第三課の復習をし、不規則な動詞の変化の一部、および話法の助動詞の変化を学びます。
第 6 回	第五課「不定冠詞類の格変化・前置詞と格支配・配語法（1）」	第四課の復習をし、不定冠詞類の格変化、前置詞、配語法の一部を学びます。
第 7 回	第六課「名詞の複数形」	第五課の復習をし、名詞の複数形のパターンを学びます。
第 8 回	第七課「定冠詞類の格変化・動詞の現在人称変化（4）・未来時称」	第六課の復習をし、定冠詞類の格変化と動詞の不規則な人称変化の一部を学びます。
第 9 回	第八課「形容詞の格変化」	第七課の復習をし、形容詞の格変化を学びます。
第 10 回	第九課「動詞の三基本形と過去人称変化・数詞」	第八課の復習をし、動詞の三基本形、過去人称変化、数の表現を学びます。
第 11 回	第十課「完了時称・配語法（2）」	第九課の復習をし、現在完了形および語順の規則を学びます。

- 第12回 第十一課「接続詞・配 第十課の復習をし、接続詞の種類
語法 (3)」と用法を学びます。
- 第13回 第十二課「所有代名 第十一課の復習をし、所有代名
詞・不定代名詞・疑問 詞、不定代名詞、疑問代名詞、形
代名詞・形容詞の名詞 容詞の名詞的用法を学びます。
的用法」
- 第14回 第十三課「分離動詞・ 第十二課の復習をし、分離動詞、
不定詞の用法・分詞と 不定詞と分詞の用法を学びます。
その用法」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。毎回、予習と復習を行ってください。

【テキスト（教科書）】

『新訂・岩崎・平尾・初歩ドイツ文法（新正書法対応）』同学社、2016 年（2000 円）を教科書として用います。

【参考書】

橋本文夫『詳解ドイツ大文法』三修社、2002 年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、平常点 50 %、課題への取り組み 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、予習と復習を欠かさないこと。

【学生が準備すべき機器他】

市販の独和辞典のいずれかを所持すること。

Zoom で接続可能な機器が必要である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化

＜研究テーマ＞啓蒙の比較思想史、近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。

＜主要研究業績＞アドルフ『本来性という隠語ードイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未来社、ポイエーシス叢書、1992 年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010 年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010 年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016 年 5 月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界ークニッゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未来社、2017 年。「レッシング『賢者ナータン』再読」（論文）、『思想』2018 年 2 月号。「ニーチェとプラトン」（論文）、『法政大学文学部紀要』第 79 号、2019 年。「多声的思考の系譜ーレッシング、ヘルダーからカントへ』『日本カント研究』第 21 巻、2020 年。

【Outline and objectives】

Study on philosophical German language. Key words: grasping grammatical structure of German language; broadening basic competence for academic research in the field of philosophy.

PHL500B1

哲学ドイツ語研究 2

笠原 賢介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ドイツ語で書かれた原典や研究文献を読むことを目指して、ドイツ語の基礎を学び、基礎的文法の全体を捉えます。それを踏まえて、ドイツ語で書かれた原典読解の基礎的な演習を行います。それらによって研究の前提となる基礎力を養うことを目標とします。ドイツ語の未習者、および、既習者で知識を深めたいと思う者を対象とします。

【到達目標】

ドイツ語の文法の基礎を学び、文法の全体を把握し、身につけることを目指す。それを踏まえて、ドイツ語で書かれた原典の読解の初歩を目指す。読解の際のテキストは、ニーチェのアフォリズムを用いる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

『新訂・岩崎・平尾・初歩ドイツ文法（新正書法対応）』（同学社）を教科書として用います。毎回、文法の説明の後、練習問題によって理解を確認します。復習のための練習問題を参加者に課し、学習支援システムを用いて提出、次回にプリントの形でフィードバックします。文法の学習の終了の後は、ニーチェの短いアフォリズムを輪読形式で読みます。テキストはコピーで配布します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス、春学期の復習。第十四課「形容詞と副詞の比較・形容詞の補足成分・語構成 (2)」	春学期の学習の要点を復習します。それを踏まえて、形容詞と副詞の比較を学びます。以下の進度は目安です。
第 2 回	第十四課（続き）	前回の形容詞と副詞の比較を復習します。形容詞の補足成分とドイツ語の語構成について学びます。
第 3 回	第十五課「指示代名詞・再帰代名詞・再帰動詞」	第十四課の内容の復習を行い、指示代名詞、再帰代名詞、再帰動詞について学びます。
第 4 回	第十六課「関係代名詞・単一文と複合文」	第十五課の内容を復習し、関係代名詞、単一文と複合文の違いについて学びます。
第 5 回	第十七課「非人称動詞・受動態・配語法 (4)」	第十六課の内容を復習し、非人称動詞、受動態を学び、配語法をまとめます。
第 6 回	第十八課「話法について・命令法・接続法の形態」	第十七課の内容を復習し、話法の内容、命令法と接続法の形態について学びます。
第 7 回	第十九課「接続法の時称・接続法の用法 (1)」	第十八課の内容を復習し、接続法の時称と用法の基礎を学びます。
第 8 回	第二十課「接続法の用法 (2)」	第十九課の内容を復習し、接続法の用法を学びます。
第 9 回	学習内容のまとめと補足。	春学期から学んできたドイツ語の文法の要点を振り返り、学び残された点を補います。

第10回	ニーチェのアフォリズムによる読解演習(1)	ニーチェの『人間的、あまりに人間的』からいくつかのアフォリズムを選んで輪読します。
第11回	ニーチェのアフォリズムによる読解演習(2)	引き続き『人間的、あまりに人間的』からいくつかのアフォリズムを選んで輪読します。
第12回	ニーチェのアフォリズムによる読解演習(3)	ニーチェの『曙光』からいくつかのアフォリズムを選んで輪読します。
第13回	ニーチェのアフォリズムによる読解演習(4)	ニーチェの『悦ばしき知恵』からいくつかのアフォリズムを選んで輪読します。
第14回	まとめ	輪読したテキストを振り返り、原文を読むことの意義を確認します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。毎回、予習と復習を行ってください。

【テキスト（教科書）】

『新訂・岩崎・平尾・初歩ドイツ文法（新正書法対応）』同学社、2016 年（2000 円）を教科書として用います。

【参考書】

橋本文夫『詳解ドイツ大文法』三修社、2002 年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして平常点 50 %、課題への取り組み 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、予習と復習を欠かさないこと。

【学生が準備すべき機器他】

市販のいずれかの独和辞典を持参のこと。
Zoom で接続可能な機器が必要である。

【その他の重要事項】

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化

<研究テーマ>啓蒙の比較思想史、近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。

<主要研究業績>アドルノ『本来性という隠語—ドイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未来社、ボイエーシス叢書、1992 年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010 年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010 年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016 年 5 月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界—クニッゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未来社、2017 年。「レッシング『賢者ナータン』再読」（論文）、『思想』2018 年 2 月号。「ニーチェとプラトン」（論文）、『法政大学文学部紀要』第 79 号、2019 年。「多声的思考の系譜—レッシング、ヘルダーからカントへ」『日本カント研究』第 21 巻、2020 年。

【Outline and objectives】

Study on philosophical German language. Key words: grasping grammatical structure of German language; broadening basic competence for academic research in the field of philosophy.

PHL500B1

哲学フランス語研究 1

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語で哲学書を読めるようにフランス語の読解能力をつける。基本的な文法事項を確認しながら、哲学の主要テーマにそってフランス語原文にあたってあらたに中級文法の復習と習得につとめる

【到達目標】

【修士課程】

①初級文法を復習して確実にフランス語の基盤を作る。

②さらに中級文法へ理解を高める。

③哲学者の原文を読めるように語学力をアップする。

【博士後期課程】

上記①と②と③においてより高度の知見への到達をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1) 一回の授業の前半では、毎回の授業時に配布する文法の問題集をこなし、後半では近現代のフランス人哲学者の文章の訳読にチャレンジする。

2) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

3) 今年度の授業開始は 4 月 8 日木曜日（2 時限）、教室にて対面で行う予定。ただし社会状況によってはオンラインのズーム授業に変更する場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第 2 回	文法事項・冠詞と実存主義論のテキスト第 1 回	冠詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトル）
第 3 回	文法事項・所有形容詞と実存主義論のテキスト第 2 回	所用形容詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその 2）
第 4 回	文法事項・形容詞と実存主義論のテキスト第 3 回	形容詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその 3）
第 5 回	文法事項・不定形容詞と実存主義論のテキスト第 4 回	不定形容詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその 4）
第 6 回	文法事項・関係代名詞第 1 回と実存主義論のテキスト第 5 回	関係代名詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその 5）
第 7 回	文法事項・関係代名詞第 2 回と実存主義論のテキスト第 6 回	関係代名詞に関するより高度な文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその 6）
第 8 回	文法事項・関係代名詞第 3 回と実存主義論のテキスト第 7 回	関係代名詞に関するよりいっそう高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（カミュ）
第 9 回	文法事項・中性代名詞第 1 回と実存主義論のテキスト第 8 回	中性代名詞に関する文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（カミュその 2）
第 10 回	文法事項・中性代名詞第 2 回と実存主義論のテキスト第 9 回	中性代名詞に関するより高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（カミュその 3）

第 11 回	文法事項・受動態第 1 回と実存主義論のテキスト第 10 回	受動態に関する文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（カミュ）
第 12 回	文法事項・受動態第 2 回と実存主義論のテキスト第 11 回	受動態に関するより高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（ナンシー）
第 13 回	文法事項・疑問文第 1 回と実存主義論のテキスト第 12 回	疑問文に関するより高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（ナンシーその 2）
第 14 回	文法事項・疑問文第 2 回と実存主義論のテキスト第 13 回	受動態に関するより高度な文法問題と他者に関する現代のテキストの読解（ナンシーその 3）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
日ごろからフランス語の文法問題集をこなして、仏検を目指すこと。

【テキスト（教科書）】

『新初等フランス語教本 文法編』
京都大学フランス語教室編 白水社

【参考書】

『フランス語文法問題集』白水社

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50 %）
②毎回の練習問題の対応度（50 %）
≪ 到達目標との対応 ≫
上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

①毎回の訳出（50 %）
②毎回の練習問題の対応度（50 %）
≪ 到達目標との対応 ≫
上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。
今年度は変則的な開始となりましたので、ネットでの授業での成績については後日また連絡いたします。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。受講者からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞バタイユ研究

＜主要研究業績＞

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the fundamental of French grammar and the reading of French philosophical text.

PHL500B1

哲学フランス語研究 2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語の基礎を学びながら、フランス哲学の原典の平易な文章を読んでいく。フランス語で哲学書を読めるようにフランス語の読解能力をつける。

【到達目標】

【修士課程】

①初級文法を復習して確実にフランス語の基盤を作る。
②さらに中級文法へ理解を高める。
③哲学書の原典を読めるように語学力をアップする。

【博士後期課程】

上記①と②と③においてより高度の知見への到達をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

一回の授業の前半では、毎回の授業時に配布する文法の問題集をこなし、後半では近現代のフランス人哲学者の文章の訳読にチャレンジする。
課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。
開講は 2021 年 9 月 23 日木曜日（2 時限）の予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第 2 回	文法事項・過去時制と共同体論のテキスト第 1 回	過去時制に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソー）
第 3 回	文法事項・過去時制と共同体論のテキスト第 2 回	過去時制に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーのその 2）
第 4 回	文法事項・未来時制と共同体論のテキスト第 3 回	未来時制に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーその 3）
第 5 回	文法事項・未来時制と共同体論のテキスト第 4 回	未来時制に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーその 4）
第 6 回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第 5 回	条件法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（カミュ）
第 7 回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第 6 回	条件法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（サルトル）
第 8 回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第 7 回	条件法に関するより高度な文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（サルトルその 2）
第 9 回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第 8 回	間接話法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユ）
第 10 回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第 9 回	間接話法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユのその 2）

第 11 回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第 10 回	間接話法に関するさらに高度文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユのその 3）
第 12 回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第 11 回	接続法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ブランショのその 1）
第 13 回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第 12 回	接続法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ブランショのその 2）
第 14 回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第 13 回	接続法に関するさらに高度な文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ナンシー）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
日ごろからフランス語の文法問題集をこなして、仏検を目指すこと。
共同体論に関する問題に関心をもって、他の授業にのぞむこと。

【テキスト（教科書）】

『新初等フランス語教本 文法編』京都大学フランス語教室編、白水社

【参考書】

『フランス語文法問題集』白水社

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

《到達目標との対応》

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。
・オンライン授業への変更に伴い、①と②を毎回の課題提出によって代替することにする。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。学生からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランス現代思想

<研究テーマ> バタイユ研究

<主要研究業績>

『バタイユ入門』ちくま新書

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the fundamental of French grammar and the reading of French philosophical text.

PHL500B1

哲学基礎研究 I

谷口 力

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代、近代の古典哲学から、現代の分析哲学までを概観しながら、哲学の基本的知識（問題提起、概念、思考方法、など）を学びます。また同時に、学術的研究における基本的作法（原文購読、論文執筆、慣用的表現、など）もできる限り習得します。

【到達目標】

西洋哲学史全体の流れ、および、以下の各哲学における基本的知識を把握することを目標とします。

- ・古代ギリシャ哲学
- ・大陸合理論
- ・イギリス経験論
- ・近代ドイツ哲学
- ・19～20 世紀哲学
- ・現代分析哲学

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的には講義形式ですが、内容に応じて議論も交えます。序論として、まず西洋哲学史全体について説明したうえで、各哲学の項目に入っていきます。授業の進め方としては、レジュメを配布し、ポイントを解説し、レジュメに書ききれない部分については、そのつど各哲学者の著作から補足していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業の案内と導入	哲学とは何か、西洋哲学史全体の流れ
第 2 回	古代ギリシャ哲学 (1)	ソクラテス以前の哲学者たち、プラトン①
第 3 回	古代ギリシャ哲学 (2)	プラトン②
第 4 回	古代ギリシャ哲学 (3)	プラトン③、アリストテレス、新プラトン学派
第 5 回	大陸合理論 (1)	近代への過渡期、デカルト
第 6 回	大陸合理論 (2)	スピノザ、ライプニッツ
第 7 回	イギリス経験論 (1)	ロック、ヒューム
第 8 回	イギリス経験論 (2)	バークリ、カント①
	～近代ドイツ哲学 (1)	
第 9 回	近代ドイツ哲学 (2)	カント②
第 10 回	近代ドイツ哲学 (3)	フィヒテ、シェリング、ヘーゲル
第 11 回	19～20 世紀哲学	ショーペンハウアー、ニーチェ、実存主義、など
第 12 回	現代分析哲学 (1)	フレーゲ、ウィトゲンシュタイン①、論理実証主義
第 13 回	現代分析哲学 (2)	ウィトゲンシュタイン②、心の哲学、ほか
第 14 回	まとめ	授業の総括、総合的議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には、興味ある哲学者の著作は読んでおくことが望ましい。授業後には、興味をもった哲学者の著作を読んでみるのが望ましい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

定まった教科書は用いません。授業時にプリントを配布します。

【参考書】

シュヴェーグラー『西洋哲学史』（上・下巻）、谷川徹三・松村一人訳、岩波文庫、1958 年改訂版。その他、授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

上記の「到達目標」に準じて、原則として、平常点（議論への参加含む）50%、学期末レポート 50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

専門外の人でも十分に理解できるように、わかりやすい説明を心がけていきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

哲学、言語哲学、形而上学

＜研究テーマ＞

世界、心、ウィットゲンシュタインの哲学

＜主要研究業績＞

「私的言語批判による独我論の貫徹および消去」（法政大学 言語・文化センター編『言語と文化』第 13 号、2016 年）、
「心の一般概念におけるいくつかの系統的区別と錯誤 ―ウィットゲンシュタインの心の非対象化についての一論証―」（『法政大学大学院紀要』第 71 号、2013 年）、など

【Outline and objectives】

The main objective of this course is to understand overview of the basic major philosophical questions and problems, in addition to this, to master some basic manners and methods in graduate studies.

PHL500B1

哲学基礎研究Ⅱ

伊藤 克巳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ：

アリストテレスにおけるプロター・ウーシア（第一の実有）について

アリストテレス哲学において、極めて重要な位置を占めるウーシア（実有）のうちでも、取り分けて「第一の」と限定される「プロター・ウーシア（第一の実有）」はその哲学の核心にあります。ところが分量的に最も頻繁にこの用語を使用している、『カテゴリー』（カテゴリー論）の用例は、すべての用例を代表するものとはなっていません。にもかかわらず、主に歴史的な経緯から、このいわゆる「個体」を示す用例が、代表的見解とされてきました。本集中講義では、『カテゴリー』、『形而上学』Z 巻、『形而上学』Λ 巻、の当該箇所主要テキストを、総合的に検討して考察し、アリストテレスが「プロター・ウーシア」に込めた真意を探求することを通して、哲学的思考のひとつのありかたについて学ぶことを目的といたします。

【到達目標】

集中講義で講義する毎回のテーマごとに、そのテーマについて考え、小レポートを作成することを積み重ねることによって、難解とされているアリストテレスの哲学の探求を通して、履修生諸君の哲学的思索力を鍛錬し、強化することを到達目標といたします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたなどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業の講義形式でおこないます。テーマごとに課題の小レポートを提出していただき、フィードバックさせていただきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	講義全体の構成について。本講義にかかわる古代ギリシア語のキーワードについて	本集中講義全体の構成について。アリストテレスにおける用語法の問題について。古代ギリシア語の「ウーシア」の訳語が、従来、「実体」と訳されてきた経緯についてと、その訳語を「実有」と訳することについての解説。古代ギリシア語の「ピロソビアー」が、日本語の訳語として「哲学」として定着してきた経緯について。古代ギリシア語の「カテゴリー」と、現代日本語に代表される、「カテゴリー」ということばとの関係について。

第2回	『カテゴリーアイ』のテキストの性格と列挙された「カテゴリー」について	『カテゴリーアイ』のテキストとしての独自の性格の考察。『カテゴリーアイ』以外の諸著作における文脈で複数の「カテゴリー」の「枚举」が行われている箇所を取り上げ、それらの箇所と『カテゴリーアイ』第4章における「枚举」に関する叙述を、特に「個体」（『カテゴリーアイ』における「第一の実有」と「種」（『カテゴリーアイ』における「第二の実有」）の区別がなされているかどうか、に着目しつつの比較検討。	第9回	「第一の哲学」の探究対象としての「第一の実有」について	『形而上学』Λ巻を中心とした、「第一の哲学」の探究対象としての「第一の実有」という側面の、テキストに即しての確認。アリストテレスにおける「第一の哲学」の重要性と、「第二の哲学」とのかかわりについての考察。
第3回	アリストテレスにおける「存在の類」と「あるもの」についての分類について	アリストテレスにおけるいわゆる「存在の類」とのかかわりに着目。『カテゴリーアイ』第2章における「あるもの」の四分類と、「あるもの」の分類に関連した言及のある他著作の場合との比較検討。特に「個体」が「あるもの」の分類項目として重視されているかどうかに着目しながらの考察。	第10回	「離されうる、動かされえない」「第一の実有」について	「第一の実有」の具体例として示唆された「離されうる、動かされえない「実有」」の内実について最も明確に叙述している文脈としての、『形而上学』Λ巻の第6章と第7章の一群の諸実例についての検討。
第4回	「第一の実有」、「第二の実有」の区別と「実有」の分類について	「実有」を「個体」と「種」・「類」に区別し分類する、という視点と、各著作における「実有」の様々な分類との比較検討。『カテゴリーアイ』第5章におけるような「個体」と「種」・「類」の区別が、他の箇所でも「実有」を分類する際にも見出せるかどうか、という点についての考察。	第11回	「ヌース」としての「第一の実有」について	『形而上学』Λ巻の課題としての、「実有」の探求。「実有」の中でも最高の「実有」としての「第一の実有」の提示。その際の「第一の実有」とは「ヌース」であり、「第一の動かされえずに動かすもの」であることの確認。アリストテレスの哲学における「ヌース」の重要性の指摘。
第5回	「個体」としての「第一の実有」について	『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の特徴と内実についての検討。古来、様々な形で議論されてきた、「個体」としての「第一の実有」の「個性性」にかかわる諸問題についての論及。『カテゴリーアイ』における「個体」としての「第一の実有」についてのまとめ	第12回	「動かされえない始源」としての「第一の実有」の意義について	『形而上学』Λ巻は、単に最初期の孤立した思考を示すのではなく、或る意味では『形而上学』全体の精髓を示しているという点の指摘。「第一の哲学」を見据えて、全領域的に「実有」を問題とした際の「第一の実有」が、「ヌース」としての「実動態」である「動かされえない始源」と密接にかかわっている、という点の確認。
第6回	「エイドス」という用語の諸解釈について。『形而上学』Z巻、H巻における「エイドス」の用例について	『形而上学』Z巻における「エイドス」としての「第一の実有」の探求の開始。「エイドス」に関する諸解釈を含めて、「エイドス」という、「種」にも「形相」にもおさまりきらない豊かな内容を持つ用語がどのような幅で解釈しうるのか、ということの検討。『形而上学』Z巻、H巻の構造の分析をおこない、挿入箇所と考えられる部分とそうでない部分を区別した上で、そこで使用されている「エイドス」の用例についての検討。	第13回	「第一の実有」の諸実例の相互関連について	本集中講義の第1回から第12回までの考察を踏まえた上で、『カテゴリーアイ』における「個体」とその具体例としての「その或る人」、『形而上学』Z巻における「エイドス」とその具体例としての「たましい」、『形而上学』Λ巻における「離されうる、動かされえない「実有」」とその具体例としての「ヌース」、等の「第一の実有」の諸例の相互関係に関する総合的考察。
第7回	「第一の実有」としての「エイドス」の言及箇所について。「たましい」としての「第一の実有」について	「エイドス」の特徴を抽出して考察の基準の確保。「第一の実有」としての「エイドス」の言及箇所の検討。帰結としての具体例としての「たましい」の提示と、「たましい」としての「第一の実有」の内実の探求。	第14回	まとめ・「プロテー・ウシアー（第一の実有）」の意義について	アリストテレスにおける「プロテー・ウシアー（第一の実有）」という表現が、『カテゴリーアイ』をも含む、それぞれの主題に応じていわばテーマに応じて互いに相補い、役割分担をしながら柔軟に叙述されていることが十分に認められるとともに、「第一の哲学」を見据えて、『形而上学』Z巻においては、「感覚的な実有」の根拠としての「内にあるエイドス」「たましい」を提示し、その内実を語り、そして『形而上学』Λ巻においては、全領域的に「実有」を問題とした際の、本来の「第一の実有」が、「第一の動かされえずに動かすもの」「ヌース」である、と主張し、その内実を論じている、という帰結の提示。
第8回	「エイドス」としての「第一の実有」の意義について	挿入箇所や参照箇所も含めた、「エイドス」をめぐる諸問題の考察。『形而上学』Z巻における「第一の実有」とされる、「エイドス」の内実と意義との解明のまとめ。			

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

集中講義当日の講義終了後に、その日の講義のそれぞれのテーマについて考えたことについての各テーマごとの小レポート（400字以内）を作成し、原則としてその次の集中講義の機会の際に提出すること。

【テキスト（教科書）】

担当者の博士論文を基礎とした集中講義のため、必要に応じて授業にて資料をお配りいたしますので、テキスト（教科書）は使用しません。

【参考書】

担当者の博士論文を基礎とした集中講義のため、必要に応じて授業にて資料をお配りいたしますので、参考書は使用しません。

【成績評価の方法と基準】

集中講義の毎回のテーマに対応した小レポートを、全部で 10 回以上は提出していただきますので、それらを合計して 100 % として評価いたします。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規集中講義につき、アンケートを実施しておりません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞＜研究テーマ＞＜主要研究業績＞

＜専門分野＞

西洋古代哲学

＜研究テーマ＞

アリストテレスのプロローター・ウーシア（第一の実有）論

＜主要研究業績＞

・『『形而上学』Z 巻における「第一の実有」としての「エイダス」の解釈について』,2006 年 8 月、『西洋古典研究会論集』第 15 号,pp.33-77.
・「『たましい』が「離されうる」ことについて ―アリストテレスにおける第一の哲学と第二の哲学―」, 2019 年 3 月、『ギリシャ哲学セミナー論集』XVI,pp.49-61.

・「プロローター・ウーシアー アリストテレスにおける「第一の実有」について」,2020 年 2 月,博士論文,立正大学大学院.

【Outline and objectives】

Theme: On Prote Ousia(first reality) in Aristotle

Among the Ousia(reality) that occupy an extremely important position in the Aristotelian philosophy, the “Prote Ousia(first reality)”, which is limited to “first”, is the core of that philosophy. However, the example of “Category”, which uses this term most frequently in terms of quantity, is not representative of all examples. Nevertheless, mainly for historical reasons, this so-called “individual” example has been regarded as a representative view. In this intensive lecture, the main texts of the relevant parts of “Category”, “Metaphysics” Z, and “Metaphysics” Λ, are comprehensively examined and considered, and search for the true meaning which Aristotle put them in “Prote Ousia”. And by exploring these issues, we aim to learn one way of philosophical thinking.

PHL600B1

日本思想史研究 I - 1

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

柳田国男の諸著作を読み進めることを通じて、日本近代における民俗学のあり方を把握していく。特に、日本の民間信仰の特性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】**【修士課程】**

・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くことが出来る。

・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。

・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【博士後期課程】

・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くことが出来る。

・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。

・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

・論文形式で文章を作成することが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

（１）受講者全員に柳田国男の諸著作の担当箇所を割り当てる。

（２）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。

（３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

（４）演習の始めに、前回の演習で議論された内容を整理しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	柳田国男に関する概説と演習の進行についての説明	柳田国男の民俗学に関する概要の説明と、演習内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	「海上」信仰に関する考察	「海神宮考」（一： 35-72）（以下全て柳田国男全集の巻数とページ数表記による）
第 3 回	異界との交流に関する考察	「みろくの船」（一： 73-84）・「根の国の話」（一： 85-109）
第 4 回	『遠野物語』の探究	『遠野物語』（四： 5-54）における異界の考察
第 5 回	『山の人生』① 里と山の相違から	『山の人生』（四： 57-126）における「山」と「里」の相違からの考察
第 6 回	『山の人生』② 異界としての「山」	『山の人生』（四： 126-186）における「山」の異界性の考察
第 7 回	「史料」の扱い① 「史料」を学問として扱う手法	「史料としての伝説」（四： 189-239）による、史料の扱いの習得
第 8 回	「史料」の扱い② 「伝説」を学問として扱うこと	「史料としての伝説」（四： 240-284）による、「伝説」を学問として扱うことの意義
第 9 回	「伝説」の扱い① 「伝説」の採録	「伝説」（五： 3-59）による、「伝説」の採録についての考察

第10回 「伝説」の扱い② 「伝説」の学問化	「伝説」(五：59-110)による、 「伝説」を学問として扱うこと の実際の方法の確認
第11回 「口承文芸」の扱い	「口承文芸史考」(六：3-78)に よる、「口承文芸」の扱い方につ いての考察
第12回 「口承文芸」の学問化	「口承文芸史考」(六：78-150) による、「口承文芸」を学問とし て扱うことについての検討
第13回 「物語論」	「物語と語り物」(七：3-65)に よる、物語論の検討
第14回 「物」とは何か、「物」 を「語る」とはいかな ることか	「物語と語り物」(七：66-123) による、「物」とは何か、「物」を 「語る」とはいかなる営みにつ いての考察

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。
特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジ
ュメを作成することが強く求められる。
本授業の準備・復習時間は、計5時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『柳田国男全集』を用いる。受講者自身が入手することが望ましい
が、入手難易度を考慮して演習担当者が資料を準備する予定である。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず先入観を排して柳田国男の原典そのも
のにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれ
なかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。
参考文献は講義内で適宜指示していくことになる。

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）(60%)
と、演習内での発言や議論への参加姿勢(40%)によって評価する。
【博士後期課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）
(70%)と、演習内での発言や議論への参加姿勢(30%)によって
評価する。

修士課程・博士後期課程ともに、講義においては毎回の発言・質問
を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したもの
とは見なさないの、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ
上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習の展開や学生からの要望次第によっては、より多くの文献を扱っ
ていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。
紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合に
おいても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式
を採用すること。
パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教
員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならび
に日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>

- ①「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間
学」をめぐる—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）
 - ②『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
 - ③「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武
道」との関係から—」（『倫理学紀要 第24輯』、2017）
- より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太の
ページ [http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/
profile.html](http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html) を参照

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding on
Japanese folklore through reading thoroughly the writings by
Kunio Yanagida. By the end of this course, students should
be able to fully grasp the background of Japanese thought and
faith.

PHL600B1

日本思想史研究Ⅰ-2

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

柳田国男の諸著作を読み進めることを通じて、日本近代における民俗
学のあり方を把握していく。特に、日本の民間信仰の特性とは一体
いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

【修士課程】

- ・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くこ
とができる。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることができる。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることができる。

【博士後期課程】

- ・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くこ
とができる。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることができる。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることができる。
- ・論文形式で文章を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
た能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に柳田国男の諸著作の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表を
する。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論
する。
- (4) 演習の始めに、前回の演習で議論された内容を整理しフィード
バックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	柳田国男に関する概説 と演習の進行について の説明	柳田国男の民俗学に関する概要の 説明と、演習内容や進め方および 評価方法の説明。
第2回	「昔話」の成立	柳田国男『桃太郎の誕生』の出だ し部分の検討（八：3-36）（以下 全て柳田国男全集の巻数とページ 数表記による）
第3回	「昔話」の構造の探究	『桃太郎の誕生』（八：37-74）に 示されている昔話の構造について の考察
第4回	「昔話」と学問	『桃太郎の誕生』（八：157-188） による、昔話と学問との関係につ いての考察
第5回	民俗学と女性	「女性と民間伝承」（八： 317-358）の分析による、民間伝 承と女性の関係についての考察
第6回	女性と社会	『妹の力』（九：3-81）の読解に よる、社会における女性の働き の検討
第7回	女性と伝承	『妹の力』（九：82-146）の読解 による、女性と伝承の関係につ いての検討
第8回	女性と力	『妹の力』（九：147-219）の読解 による、女性の力のあり方につ いての検討

第 9 回 祀りの問題	「巫女考」(九：221-260)の読解による、神の祀りの問題の検討
第 10 回 祀りと巫女	「巫女考」(九：260-301)の読解による、祀りと巫女との関係についての検討
第 11 回 祀りと共同体の問題	『先祖の話』(十：3-53)の読解による、祀りに共同体がいかに関わるのかという問題についての考察
第 12 回 共同体と信仰	『先祖の話』(十：54-104)の読解により、柳田国男の祖霊信仰の把握を目指す
第 13 回 祖霊信仰	『先祖の話』(十：104-152)の読解により、祖霊信仰の全体像の理解を目指す
第 14 回 祀りと祭	「日本の祭」(十：176-236)の読解による、信仰と祭りの関係性の把握を目指す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

本授業の準備・復習時間は、計 5 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『柳田国男全集』を用いる。受講者自身が入手することが望ましいが、入手難易度を考慮して演習担当者が資料を準備する予定である。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず先入観を排して柳田国男の原典そのものにあって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくことになる。

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）(60 %)と、演習内での発言や議論への参加姿勢（40 %）によって評価する。

【博士後期課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）(70 %)と、演習内での発言や議論への参加姿勢（30 %）によって評価する。

修士課程・博士後期課程ともに、講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習の展開や学生からの要望次第によっては、より多くの文献を扱っていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。

紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。

パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

①「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる—」(『日本倫理思想論 第 2 号』、2014)

②『科学技術の倫理学Ⅱ』(勢力尚雅 編共著、2015)

③「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」(『倫理学紀要 第 24 輯』、2017)

より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding on Japanese folklore through reading thoroughly the writings by Kunio Yanagida. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought and faith.

PHL500B1

日本思想史研究Ⅱ-1

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『精神主義』を中心とする清沢満之の著作群を読み進めることを通じて、日本近代思想において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・清沢満之の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （１）受講者全員に清沢満之の『精神主義』や他の論文の担当箇所を割り当てる。
- （２）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （４）演習の始めに、前回までに議論された内容を振り返る時間を設定しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	演習の実施方針・方法の説明	清沢満之『精神主義』に関する概要の説明と、演習内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	清沢満之『精神主義』第一章の「一」「二」「三」の検討	清沢満之『精神主義』の「一 精神主義」「二 万物一体」「三 自由と服従との相関」 pp.3-15（以下すべて中公クラシックス版の頁数表記による）
第 3 回	第一章の「四」から「八」の検討	「四 科学と宗教」「五 精神主義と物質的文明」「六 宗教は目前にある」「七 競争と精神主義」「八 まず須らく内観すべきだ」 pp.15-31
第 4 回	第一章の「九」から「一二」までの検討	「九 精神主義と唯心論」「一〇 精神主義と他力」「一一 迷悶者の慰安」「一二 精神主義と三世」 pp.31-46
第 5 回	第一章の「一三」から「一七」までの検討	「一三 精神主義と共同作用」「一四 親鸞聖人の御誕生会に」「一五 絶対他力の大道」「一六 生活問題」「一七 他力の救済」 pp.46-63
第 6 回	『精神主義』第二章と第三章の検討	精神主義（その２）と精神主義（その３） pp.64-88
第 7 回	清沢満之『精神講話』「因縁」「公德」「主観」「平等」の検討	「因縁と諦むること」「公德問題の基礎」「宗教は主観的事実なり」「平等感」 pp.91-109

第 8 回	『精神講話』「独立」「信念」「勇氣」の検討	「真正の独立」「宗教的信念の必須条件」「仏による勇氣」 pp.109-121
第 9 回	『精神講話』「安慰」「根拠」「道德」「わが信念」の検討	「倫理以上の安慰」「倫理以上の根拠」「宗教的道德〔俗諦〕と普通道德との交渉」「わが信念」 pp.121-151
第 10 回	清沢満之『教界時言』の検討	『教界時言』の全編の検討 pp.155-182
第 11 回	清沢満之『宗教哲学骸骨』第一章から第四章までの検討	清沢満之『宗教哲学骸骨』「第一章 宗教と学問」「第二章 有限無限論」「第三章 靈魂論」「第四章 転化論」 pp.185-214
第 12 回	『宗教哲学骸骨』第五章と第六章の検討	『宗教哲学骸骨』「第五章 善悪論」「第六章 安心修徳」 pp.214-234
第 13 回	清沢満之『在床懺悔録』「三」「四」「七」「八」「一〇」の検討	『在床懺悔録』「三 無限と心霊」「四 自力と他力」「七 『大無量寿経』」「八 経の多さ」「一〇 行とは」「一二 称名念仏とは」 pp.241-242,245,247,249
第 14 回	『在床懺悔録』「一三」「一六」「一七」「一九」「二一」の検討	『在床懺悔録』「一三 往生と報恩」「一六 南無阿弥陀仏の解釈」「一七 三信心心」「一九 信と行」「二一 凡夫」 pp.249-250,253-258,261-262,264-267

全体の総まとめを含む

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計 5 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

清沢満之『精神主義ほか』（中公クラシックス、2015 年）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、清沢満之の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（65 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（35 %）の合算によって評価する。演習においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱っていききたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>
①「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
②『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）

③「『三河物語』における譜代意識の根底―「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から―」（『倫理学紀要第24輯』、2017）より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese modern philosophy through reading thoroughly "Spiritualism" by Manshi Kiyozawa. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

PHL500B1

日本思想史研究Ⅱ-2

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

小林秀雄の諸論文を読み進めることを通じて、日本近代において「批評」という形式が成立する過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・小林秀雄の評論文を中心に、日本近代思想のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （1）受講者全員に小林秀雄の評論文の担当箇所を割り当てる。
- （2）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （3）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （4）演習の始めに前回の演習において議論された内容を再確認してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	小林秀雄に関する概説	小林秀雄の評論文についての概説と、演習内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『小林秀雄全集 第一巻』の代表的評論文の検討	（全集第一巻から）「様々なる意匠」（pp.133-151）・「文学は絵空ごとか」（pp.240-247）・「ランボオⅠ」（pp.83-95）・「ランボオⅡ」（pp.387-392）（すべて新潮社版全集の頁数表記による）
第3回	文学に関する批評群についての検討	（全集第二巻から）「批評に就いて」（pp.201-207）・「文章について」（pp.208-210）・「現代文学の不安」（pp.211-222）・「Xへの手紙」（pp.260-286）・「故郷を失った文学」（pp.366-375）
第4回	歴史に関する批評群についての検討	（全集第七巻から）「歴史と文学」（pp.194-220）・「伝統」（pp.247-259）・「平家物語」（pp.361-364）・「歴史の魂」（pp.365-377）
第5回	音楽に関する批評についての検討	（全集第八巻から）「モーツァルト」（pp.44-95）
第6回	人生観に関する批評についての検討	（全集第九巻から）「私の人生観」（pp.129-184）
第7回	「ゴッホの手紙」①	（全集第十巻から）「ゴッホの手紙」の出だし部分（pp.258-308）

第8回	「ゴッホの手紙」② 表現についての検討	(全集第十巻から) 「ゴッホの手紙」の中間部分の表現について検討していく (pp.308-357)
第9回	「ゴッホの手紙」③ 小林秀雄の批評の特徴 に迫るための検討	(全集第十巻から) 「ゴッホの手紙」の批評としての 特徴に関するまとめ (pp.358-412)
第10回	「白痴についてⅡ」① 「白痴論」の批評とし ての射程の検討	(全集第十巻から) 小林秀雄の「白痴論」の批評とし ての射程を見定めていく (pp.168-206)
第11回	「白痴についてⅡ」② 小林秀雄の「白痴論」 の特徴の把握	(全集第十巻から) 小林秀雄の「白痴論」の特徴の把 握を目指していく (pp.206-255)
第12回	政治と批評	(全集第十巻から) 政治に関する批評の方法論につい て検討していく 「悲劇について」(pp.48-53)・「政 治と文学」(pp.78-104)
第13回	言葉と思考についての 検討	(全集第十一巻・一二巻から) 「喋ることと書くこと」(第十一巻 pp.11-17)・「言葉」(第十二巻 pp.105-113)・「考へるといふ事」 (第十二巻 pp.287-295)
第14回	本居宣長論の検討	(全集第十二・十三巻から) 「本居宣長―「物のあはれ」の説 について―」(第十二巻 pp.169-199)・「生と死」(第十三 巻 pp.359-368)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。
特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジユ
メを作成することが強く求められる。
本授業の準備・復習時間は、計 5 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『小林秀雄全集』（新潮社）を使用する。参加者が各自で入手するこ
とが理想であるが、一冊一冊がかなり高価であるため担当教員が参
加者用に資料を準備する。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、小林秀雄の原典そのものに当たって
入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、
演習内の議論を通じて深めていくことになる。
参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジユメの水準を含む）（65 %）と、講義
内での発言や講義への参加姿勢（35 %）によって評価する。
講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質
問しなかった場合は出席したものとは見なさないの、事前学習とし
て事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要であ
る。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱ってい
きたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジユメを作成し配布すること。
紙媒体のレジユメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合に
おいても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式
を採用すること。
パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教
員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならび
に日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>

- ① 「「ひと」であること、「私」であること―三木清の「哲学的人間
学」をめぐる一」(『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014)
 - ② 『科学技術の倫理学Ⅱ』(勢力尚雅 編共著、2015)
 - ③ 「『三河物語』における譜代意識の根底―「慈悲」と「情」と「武
辺」との関係から―」(『倫理学紀要第 24 輯』、2017)
- より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太の
ページ [http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/
profile.html](http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html) を参照

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of
Japanese modern thought through reading thoroughly papers
by Hideo Kobayashi. By the end of this course, students should
be able to fully grasp the background of Japanese thought in
modern times.

PHL600B1

現象学研究 I - 1

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1930 年に行った講演「真理の本質について」と、1931/32 年冬学期に行われた同名の講義をドイツ語原文で読む。前者の講演は、後にハイデガーが自分の思索の「根本経験」に迫るものとして回顧している、きわめて重要なものである。二つのテキストを読むことを通じて、ハイデガーの思索の原点に迫る。

【到達目標】

- ①ハイデガーの真理観を理解する。
- ③ハイデガーの思索の「根本経験」とは何かを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業初めに行う。講演「真理の本質について」は全集第 9 巻に、同名の講義は全集第 34 巻に収められている。なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	概要の説明
第 2 回	講演「真理の本質について」①	報告と討議（177-182 頁）
第 3 回	講演「真理の本質について」②	報告と討議（183-187 頁）
第 4 回	講演「真理の本質について」③	報告と討議（188-192 頁）
第 5 回	講演「真理の本質について」④	報告と討議（193-198 頁）
第 6 回	講演「真理の本質について」⑤	報告と討議（199-202 頁）
第 7 回	講義「真理の本質について」①	報告と討議（1-5 頁）
第 8 回	講義「真理の本質について」②	報告と討議（6-10 頁）
第 9 回	講義「真理の本質について」③	報告と討議（11-15 頁）
第 10 回	講義「真理の本質について」④	報告と討議（16-20 頁）
第 11 回	講義「真理の本質について」⑤	報告と討議（21-25 頁）
第 12 回	講義「真理の本質について」⑥	報告と討議（26-30 頁）
第 13 回	講義「真理の本質について」⑦	報告と討議（31-35 頁）
第 14 回	講義「真理の本質について」⑧	報告と討議（36-40 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Wegmarken*, Gesamtausgabe Bd. 9, Vittorio Klostermann, 1976.

Martin Heidegger, *Vom Wesen der Wahrheit: Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet*, Gesamtausgabe Bd. 34, Vittorio Klostermann, 1988.

希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

M. ハイデガー著・辻村公一・H. ブフナー訳、『道標』、創文社、1985 年

M. ハイデガー著・細川亮一・I. ブフハイム訳、『真理の本質について——プラトンの洞窟の比喩と『テアイテトス』』、創文社、1995 年
どちらも上記テキストの翻訳。その他の参考書は適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 60%、参加者としての評価が 40%。前者は報告の内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこでの発言を評価の対象とする。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture of 1930, *On the Essence of Truth*, and lecture course of the same name of 1931/32, in the German original. The former lecture is extremely important, because it is looked back on by Heidegger as the one which gets to the "fundamental experience" of his thought. By reading these texts we will get to the putative origin of Heidegger's thought.

PHL600B1

現象学研究 I - 2

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーが 1931/32 年冬学期に行った講義「真理の本質について」をドイツ語原文で読む。ハイデガーは 1930 年に行った同名の講演を、自分の思索の「根本経験」に迫るものとして回顧している。授業ではこの講演の内容を踏まえ、講義の読解を通じてハイデガーの思索の原点に迫る。

【到達目標】

- ①ハイデガーの真理観を理解する。
- ③ハイデガーの思索の「根本経験」とは何かを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業初めに行う。講義「真理の本質について」は全集第 34 巻に収められている。なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	春学期の振り返りと概要の説明
第 2 回	講義「真理の本質について」①	報告と討議（41-45 頁）
第 3 回	講義「真理の本質について」②	報告と討議（46-50 頁）
第 4 回	講義「真理の本質について」③	報告と討議（51-55 頁）
第 5 回	講義「真理の本質について」④	報告と討議（56-60 頁）
第 6 回	講義「真理の本質について」⑤	報告と討議（61-65 頁）
第 7 回	講義「真理の本質について」⑥	報告と討議（66-70 頁）
第 8 回	講義「真理の本質について」⑦	報告と討議（71-75 頁）
第 9 回	講義「真理の本質について」⑧	報告と討議（76-80 頁）
第 10 回	講義「真理の本質について」⑨	報告と討議（81-85 頁）
第 11 回	講義「真理の本質について」⑩	報告と討議（86-90 頁）
第 12 回	講義「真理の本質について」⑪	報告と討議（91-95 頁）
第 13 回	講義「真理の本質について」⑫	報告と討議（96-100 頁）
第 14 回	講義「真理の本質について」⑬	報告と討議（101-105 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Vom Wesen der Wahrheit: Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet*, Gesamtausgabe Bd. 34, Vittorio Klostermann, 1988.

希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

M. ハイデガー著・細川亮一・I. ブフハイム訳、『真理の本質について——プラトンの洞窟の比喩と『テアイテトス』』、創文社、1995 年上記テキストの翻訳。その他の参考書は適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 60%、参加者としての評価が 40%。前者は報告の内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこでの発言を評価の対象とする。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号, 2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号, 2014 年。

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号, 2012 年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture of 1930, *On the Essence of Truth*, and lecture course of the same name of 1931/32, in the German original. The former lecture is extremely important, because it is looked back on by Heidegger as the one which gets to the "fundamental experience" of his thought. By reading these texts we will get to the putative origin of Heidegger's thought.

PHL700B1

哲学特殊研究 1

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の学生を対象に、博士論文完成に向けた指導を行う。

【到達目標】

博士論文を完成させること、ないしそのために必要な論文作成能力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】**【授業の進め方と方法】**

毎回の担当者による博士論文ないし研究の進捗についての報告を受けて、参加者全員で討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の進捗についての報告①	担当者による報告を受けて、参加者全員で討議する
第 2 回	研究の進捗についての報告②	報告と討議
第 3 回	研究の進捗についての報告③	報告と討議
第 4 回	研究の進捗についての報告④	報告と討議
第 5 回	研究の進捗についての報告⑤	報告と討議
第 6 回	研究の進捗についての報告⑥	報告と討議
第 7 回	研究の進捗についての報告⑦	報告と討議
第 8 回	研究の進捗についての報告⑧	報告と討議
第 9 回	研究の進捗についての報告⑨	報告と討議
第 10 回	研究の進捗についての報告⑩	報告と討議
第 11 回	研究の進捗についての報告⑪	報告と討議
第 12 回	研究の進捗についての報告⑫	報告と討議
第 13 回	研究の進捗についての報告⑬	報告と討議
第 14 回	研究の進捗についての報告⑭	報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。学生は討議で指摘された点を参考にし、論文をよりよいものにする努力を続けていく。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

報告内容に応じてそのつと指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容と（90 %）、討議における議論への貢献度（10 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度に引き続き、報告の不明瞭な点や疑問点を参加者全員で洗い出し、討議を通じて内容を徹底的に煮詰めていく。

【Outline and objectives】

To give doctoral students advise and guidance so as to help them complete their doctoral thesis.

PHL700B1

哲学特殊研究 2

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の学生を対象に、博士論文完成に向けた指導を行う。

【到達目標】

博士論文を完成させること、ないしそのために必要な論文作成能力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者による博士論文ないし研究の進捗についての報告を受けて、参加者全員で討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の進捗についての報告①	担当者による報告を受けて、参加者全員で討議する
第 2 回	研究の進捗についての報告②	報告と討議
第 3 回	研究の進捗についての報告③	報告と討議
第 4 回	研究の進捗についての報告④	報告と討議
第 5 回	研究の進捗についての報告⑤	報告と討議
第 6 回	研究の進捗についての報告⑥	報告と討議
第 7 回	研究の進捗についての報告⑦	報告と討議
第 8 回	研究の進捗についての報告⑧	報告と討議
第 9 回	研究の進捗についての報告⑨	報告と討議
第 10 回	研究の進捗についての報告⑩	報告と討議
第 11 回	研究の進捗についての報告⑪	報告と討議
第 12 回	研究の進捗についての報告⑫	報告と討議
第 13 回	研究の進捗についての報告⑬	報告と討議
第 14 回	研究の進捗についての報告⑭	報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。学生は討議で指摘された点を参考にし、論文をよりよいものにする努力を続けていく。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

報告内容に応じてそのつと指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容と（90 %）、討議における議論への貢献度（10 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度に引き続き、報告の不明瞭な点や疑問点を参加者全員で洗い出し、討議を通じて内容を徹底的に煮詰めていく。

【Outline and objectives】

To give doctoral students advise and guidance so as to help them complete their doctoral thesis.

PHL700B1

哲学特殊研究 1

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ヘーゲルにおける行為論について、初期原稿の根本的構えと関連付けることによって、その現代的意義を十全に示すこと

【到達目標】

初期ヘーゲルの根本的構えの解釈には、ヘーゲル哲学の思想史的背景への問いが含まれるので、この問いとヘーゲル哲学のアクチュアリティの発掘とが本研究においては連動する。このことによって、ヘーゲル哲学と現代を思想史的文脈において深い次元で結びつけ、ヘーゲル研究で半ば等閑に付されていた時期を解明するものである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 初期ヘーゲルの先行研究の議論を整理し検討する。国内で近年多く出されている諸研究を把握する。英米現代哲学のテキストにも目を通す。
- 初期ヘーゲルにおける行為の問題に関する議論と背景の整理。アカデミー版ヘーゲル全集の検討
- 本授業は対面形式で実施する。
- 受講者は毎回研究ノート原稿を用意して発表してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業オリエンテーション	受講者の研究計画書の吟味
第2回	ヘーゲルの修業時代	速水説の検討
第3回	ヘーゲルのチュービンゲン原稿	細谷説の検討
第4回	ヘーゲルのカント受容	寺澤説の検討
第5回	初期ヘーゲルのノール段階	ハリス説の関連
第6回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の最新研究	アカデミー版ヘーゲル全集第1巻編集者報告の検討
第7回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の総体的理解	アカデミー版ヘーゲル全集第1巻編集の検討
第8回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の宗教論	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の宗教関連原稿の検討
第9回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の実践理性理解	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の実践理解関連原稿の検討
第10回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の行為論	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の行為論関連原稿の検討
第11回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の道徳論	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の道徳論関連原稿の検討
第12回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の道徳的行為論	初期ヘーゲルのチュービンゲン期の道徳的行為論関連原稿の検討
第13回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期のユダヤ民族論	初期ヘーゲルのチュービンゲン期のユダヤ民族論関連原稿の検討
第14回	初期ヘーゲルのチュービンゲン期のユダヤ教	初期ヘーゲルのチュービンゲン期のユダヤ教関連原稿の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

研究計画と授業計画に従って、ヘーゲルの原典を自分なりに訳して理解しておくこと

【テキスト（教科書）】

教科書を指定しない。

【参考書】

参考書を指定しない。

【成績評価の方法と基準】

授業各回の発表 (50%) と討論 (50%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of young Hegel's theory of action, with texts drawn from German and English, Japanese.

PHL700B1

哲学特殊研究 2

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ヘーゲルにおける行為論について、初期原稿の根本的構えと関連付けることによって、その現代的意義を十全に示すことを目指す。

【到達目標】

ヘーゲル哲学と現代を思想史的文脈において深い次元で結びつけ、ヘーゲル研究で半ば等閑に付されていた時期を解明するものである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ヘーゲル哲学のフランクフルト期先行研究の整理。ヘーゲルのテキストを精査。本授業は対面形式で実施する。受講者発表については、毎回討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	後期授業オリエンテーション	受講者の研究計画書再吟味
2 回	初期ヘーゲルの実践概念	道徳性・愛・宗教
3 回	初期ヘーゲルの愛概念	道徳性・愛・宗教（続き）
4 回	初期ヘーゲルの存在概念	信じることと存在すること
5 回	初期ヘーゲルとヘルダーリン	ヘンリッヒ説の検討
6 回	初期ヘーゲルの合一説	「愛」の初稿検討 合一と愛について「愛」(Text 49a)の改稿と「ユダヤ人の歴史」 「愛と宗教」を検討
7 回	初期ヘーゲルの愛概念	「愛」の改稿「愛と宗教」を検討
8 回	ユダヤ人の歴史と初期ヘーゲル	「愛と宗教」検討
9 回	『キリスト教の精神』腹案1	テキスト 52「イエスがユダヤ民族のもとに登場してきたとき [・・・]」検討
10 回	『キリスト教の精神』腹案2	テキスト 53「B 道徳…」検討
11 回	イエスの道徳	テキスト 54「イエスが現れた [・・・]」検討
12 回	イエスの愛	テキスト 55「徳には実定性が [・・・]だけでなく」検討
13 回	イエスの宗教：愛と反省の合一	テキスト 56「最も興味深いことは、・・・」検討
14 回	後期授業のまとめ	初期ヘーゲル原稿群の展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
研究計画と授業計画に従って、初期ヘーゲルのテキストを自分なりに訳して理解しておくこと

【テキスト（教科書）】

アカデミー版ヘーゲル全集第 2 巻

【参考書】

国内外の関連研究書

【成績評価の方法と基準】

授業各回の発表 (50%) と討論 (50%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of young Hegel's philosophy, with texts drawn from German.

PHL500B1

言語分析哲学特殊講義 1

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「心の哲学」は現代の形而上学・認識論・倫理学を論じるためのカギとなる分野である。この授業では、①なぜ「心」が哲学の問題になるのか、②現代哲学はどのような方法によって「心」を論じるのか、③「心」の正体に関して、どのような議論に基づき、どのような主張がなされているか、を代表的論者の論文を読解しながら検討する。春学期は主に「意識」の問題が扱われる。

【到達目標】

現代の心の哲学の主要な立場、その論拠と問題点の正しい理解を獲得し、「心」の正体に関する各自の立場を確立するための基礎を形成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	教員による現代の心の哲学に関する一般的説明。
第 2 回	Rosenthal, D.M. Higher Order Theories of Consciousness	pp.239-241
第 3 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.241-243
第 4 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.243-245
第 5 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.245-247
第 6 回	Higher Order Theories of Consciousness,	pp.247-248
第 7 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.248-250
第 8 回	Higher Order Theories of Consciousness	pp.250-251
第 9 回	Balog, K Phenomenal Concepts	pp.292-294
第 10 回	Phenomenal Concepts	pp.294-296
第 11 回	Phenomenal Concepts	pp.296-298
第 12 回	Phenomenal Concepts	pp.299-300
第 13 回	Phenomenal Concepts	pp.300-302

第 14 回 Phenomenal Concepts pp.302-303

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Philosophy of Mind, Oxford 2009

【参考書】

Descartes, Searl, Davidson, Kim, Dennett, Churchland 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60 %
ディスカッションでの貢献 40 %

【学生の意見等からの気づき】

読解とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

<研究テーマ>

パースペクティヴィズムの形而上学的可能性

<主要研究業績>

著訳書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題 I、II」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline and objectives】

'Philosophy of Mind' is a key to discussing modern metaphysics, epistemology and ethics. We will consider (1)why Mind matters to Philosophy, (2)what methods modern Analytical philosophy uses in discussing Mind, and (3)on what arguments some of the main positions concerning Mind depend, through carefully reading the papers of representative modern authors. In Spring term we focus on consciousness.

PHL500B1

言語分析哲学特殊講義 2

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「心の哲学」は現代形而上学・認識論・倫理学を論じるためのカギとなる分野である。この講義では、①なぜ「心」が哲学の問題になるのか、②現代分析哲学はどのような方法によって「心」を論じるのか、③「心」の正体に関して、どのような議論に基づき、どのような主張がなされているか、を代表的論者の論文を読解しながら検討する。秋学期では主に「志向性」の問題が扱われる。

【到達目標】

現代の心の哲学の主要な立場、その論拠と問題点の正しい理解を獲得し、「心」の正体に関する各自の立場を確立するための基礎を形成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Balog,K Phenomenal Concepts	pp.304-305
第 2 回	Phenomenal Concepts	pp.305-307
第 3 回	Phenomenal Concepts	pp.307-309
第 4 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.381-382
第 5 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.382-384
第 6 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.384-386
第 7 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.386-387
第 8 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.387-389
第 9 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	389-390
第 10 回	Dretske, Information- theoretic Semantics	pp.390-392

第 11 回	Millikan, R.G Biosemantics	pp394-395
第 12 回	Millikan, R.G Biosemantics	pp.394-396
第 13 回	Millikan, R.G Biosemantics	pp.396-398
第 14 回	Millikan, R.G Biosemantics	pp.398-399

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Philosophy of Mind, Oxford Univ.Press 2009

【参考書】

Descartes, Searl, Davidson, Kim, Dennett, Churchland 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%
ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
<研究テーマ>
パースペクティヴィズムと現代形而上学
<主要研究業績>

著書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアークメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline and objectives】

'Philosophy of Mind' is a key to discussing modern metaphysics, epistemology and ethics. We will consider (1)why Mind matters to Philosophy, (2)what methods modern Analytical philosophy uses to discuss Mind, and (3)on what arguments some of the main positions concerning Mind depend, through carefully reading the papers of representative modern authors. In Autumn Term we focus on Intentionality.

PHL500B1

古代哲学史特殊講義 1

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度春学期は第 11 巻第 9 章から第 12 巻第 5 章までを読解する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスには世界や事象を認識するにあたり彼独特の思考法がある。この思考法はさまざまなテーマについて多様な仕方でも繰り返される。正確な理解を得るためには、その思考法のパターンとその基礎にある概念やその使用法を理解し習熟することが第一の目標となる。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているだけに、本書について正確な理解を得ることは、後代の哲学の理解に際しても重要である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古典ギリシア語原典を訳読できる履修者が出席する場合、その者がまず原典を訳読し、次にそれ以外の履修者が英訳テキストを訳読する、という形式ですすめる。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約と内容の検討、討議をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	春学期イントロダクション	アリストテレスの基本用語
	第 11 巻第 9 章の精読・検討・理解・理解	『自然学』第 3 巻第 1 - 3 章からの抜粋
第 2 回	第 11 巻第 9 章の精読・検討・理解・理解（続）	可能態、現実態、運動
第 3 回	第 11 巻第 10 章の精読・検討・理解	『自然学』第 3 巻第 4, 5, 7 章からの抜粋
第 4 回	第 11 巻第 10 章の精読・検討・理解（続）	無 限
第 5 回	第 11 巻第 11 章の精読・検討・理解	『自然学』第 5 巻第 1 章からの抜粋 変化と運動
第 6 回	第 11 巻第 12 章の精読・検討・理解	『自然学』第 5 巻第 2 章からの抜粋 運動
第 7 回	第 12 巻第 1 章の精読・検討・理解	ウーシアー
第 8 回	第 12 巻第 1 章の精読・検討・理解（続）	ウーシアー（続）
第 9 回	第 12 巻第 2 章の精読・検討・理解	変化の原理
第 10 回	第 12 巻第 3 章の精読・検討・理解	質料と形相
第 11 回	第 12 巻第 4 章の精読・検討・理解	反対性

第 12 回	第 12 巻第 4 章の精読・検討・理解（続）	反対性（続）
第 13 回	第 12 巻第 5 章の精読・検討・理解	可能態と現実態
第 14 回	第 12 巻第 5 章の精読・検討・理解（続）	可能態と現実態（続）
		当学期の学習内容の確認と整理まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する（訳読を準備し、疑問点、課題点を明確にする）。『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle's Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W.Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristotele's Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit W.Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出隆訳『形而上学』（岩波文庫上・下 第 11 巻以下は下巻に収録）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポート内容、によって評価する（各 25% ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報を履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

古代哲学史特殊講義 2（秋学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績> 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第 48 号 2003 年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成 14～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006 年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006 年 所収）「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 59 号 岩波書店 2011 年）「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第 21 号 2012 年）「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第 80 号 2020 年）

【Outline and objectives】

In this class we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we will read from Book 11, ch.2, 1060a27 to ch.9. The objects of the class are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

PHL500B1

古代哲学史特殊講義 2

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度秋学期は第 12 巻第 6 章から第 12 巻第 9 章までを読解する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているが、可能な限り正確な読解をすすめることにより、古代哲学を専攻する、しないにかかわらず、本書に関して哲学的にも正確なアリストテレス哲学の内容理解をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古代哲学を専門とする履修者がまず古典ギリシア語原典を訳読し、次に古代哲学を専攻としない履修者が英訳テキストを訳読する、という形式です（ただし履修生の状況を勘案する）。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約とその検討、討議をおこなう理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	秋学期イントロダクション	永遠なる不動の非感覚的ウーシアー
	第 12 巻第 6 章の精読・検討・理解	
第 2 回	第 12 巻第 6 章の精読・検討・理解（続）	永遠なる不動の非感覚的ウーシアー（続）
第 3 回	第 12 巻第 7 章の精読・検討・理解	不動の動者 1
第 4 回	第 12 巻第 7 章の精読・検討・理解（続）	不動の動者 1（続）
第 5 回	第 12 巻第 8 章の精読・検討・理解	不動の動者 2
第 6 回	第 12 巻第 8 章の精読・検討・理解（続）	不動の動者 2（続）
第 7 回	第 12 巻第 9 章の精読・検討・理解	思惟の思惟
第 8 回	第 12 巻第 9 章の精読・検討・理解（続）	思惟の思惟（続）
第 9 回	第 12 巻第 10 章の精読・検討・理解	善
第 10 回	第 12 巻第 10 章の精読・検討・理解	善（続）
第 11 回	第 13 巻 1 章の精読・検討・理解	不動で永遠適的なウーシアー
第 12 回	第 13 巻 1 章の精読・検討・理解（続）	不動で永遠適的なウーシアー（続）
第 13 回	第 13 巻第 2 章の精読・検討・理解	数学的对象

第 14 回 第 13 巻第 2 章の精読・検討・理解（続）
数学的对象（続）
当学期の学習内容の確認
まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する。
『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle's *Metaphysics*, A Revised Text with Introduction and Commentary by W. Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristotle's *Metaphysica*, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit W. Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii *Metaphysica*, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出陣訳『形而上学』（岩波文庫）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポートの内容、によって評価する（各 25% ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能な限り最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

古代哲学特殊講義 1（春学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績>
「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」
（『法政大学文学部紀要』第 48 号 2003）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」
（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成 14～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006 年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」共編著『自然と人間』梓出版社 2006 年 所収
「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 59 号 岩波書店 2011 年）
「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第 21 号 2012 年）
「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」
（『法政大学文学部紀要』第 80 号 2020 年）

【Outline and objectives】

In this class we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we will read from Book 11, ch.10 to Book 12 ch.5. The objects of the class are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

PHL500B1

論理学特殊講義 1

安東 祐希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ゲンツェンの基本定理の証明を学ぶ。

【到達目標】

関連分野への影響も踏まえながら、基本定理の証明を細部にわたり理解し、自ら証明を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

[授業形式：対面授業]

原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	証明の方針	論文 (III:3.1 前文) 部分
第 2 回	自由変数の付け替え	論文 (III:3.10) 部分
第 3 回	左上式が公理	論文 (III:3.111-112) 部分
第 4 回	左上式が右弱化	論文 (III:3.113.1-2) 部分
第 5 回	上式が左右連言等	論文 (III:3.113.31-32) 部分
第 6 回	上式が左右全称等	論文 (III:3.113.33-36) 部分
第 7 回	右階数が 1 より大	論文 (III:3.121 前文) 部分
第 8 回	I が左構造規則	論文 (III:3.121.21) 部分
第 9 回	I の上式が一つ	論文 (III:3.121.22) 部分
第 10 回	I の上式が二つ	論文 (III:3.121.23) 部分
第 11 回	右階数が 1	論文 (III:3.122) 部分
第 12 回	NJ における切断	論文 (III:3.21) 部分
第 13 回	階数が 2	論文 (III:3.231) 部分
第 14 回	階数が 2 より大	論文 (III:3.232) 部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。

【テキスト（教科書）】

G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szabo による英訳、Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】

・Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977・A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (50 %) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (50 %) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学（証明論）

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

・Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.・A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083 『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline and objectives】

This course deals with the proof of Gentzen's Hauptsatz.

PHL500B1

論理学特殊講義 2

安東 祐希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ゲンツェンの基本定理の応用例を学ぶ。合わせて、複数の体系に関する同等性を学ぶ。

【到達目標】

関連分野への影響も踏まえながら、直観主義命題論理の決定問題などに対して基本定理を応用できて、基本定理で使用する体系と他の体系との同等性を証明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

【授業形式：対面授業】

原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	命題論理の無矛盾性	論文 (IV:1.1) 部分
第 2 回	直観主義の決定問題	論文 (IV:1.2) 部分
第 3 回	排中律	論文 (IV:1.3) 部分
第 4 回	強い形の基本定理	論文 (IV:2.1) 部分
第 5 回	強い定理の証明	論文 (IV:2.2) 部分
第 6 回	定理の他の強め方	論文 (IV:2.3) 部分
第 7 回	算術の体系	論文 (IV:3.1) 部分
第 8 回	帰納法無しの算術	論文 (IV:3.2) 部分
第 9 回	体系の拡張	論文 (IV:3.3) 部分
第 10 回	同等性と既存体系	論文 (V:§1-2) 部分
第 11 回	LHJ から NJ	論文 (V:§3) 部分
第 12 回	NJ から LJ	論文 (V:§4) 部分
第 13 回	LJ から LHJ	論文 (V:§5) 部分
第 14 回	LHK, NK と LK	論文 (V:§6) 部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。

【テキスト（教科書）】

G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szabo による英訳, Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】

・ Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
・ A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (50 %) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (50 %) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学（証明論）

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083 『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline and objectives】

This course deals with some applications of Gentzen's Hauptsatz and with the equivalence of related logical systems.

PHL500B1

近代倫理学史特殊講義 1

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『純粋理性批判』を読む

——自由のアンチノミーとその解決——

カントの『純粋理性批判』の「弁証論」ではいわゆる「自由のアンチノミー」が提示され、その解決が論ぜられている。この箇所を詳しく読み解くことで、その「解決」を明らかにし、カントの「解決」の意味について考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初回からオンラインで授業を開始するが、状況に応じて対面授業に切り替える。なお、オンライン授業の接続（ZOOMを予定）の仕方については学習支援システムの本授業の「お知らせ」を参照してください。

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) 参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	(1) ゼミの方式、テキスト等について (2) カントの『純粋理性批判』の背景・全体像 (3) これから読む「自由のアンチノミー」およびその「解決」の位置づけ
第2回	定立の証明	カント『純粋理性批判』原典テキスト PhB548 ページ
第3回	定立に対する注	同上 550 ページ
第4回	定立に対する注（続）	同上 552 ページ
第5回	反定立の証明	同上 554, 549 ページ
第6回	反定立の証明（続）	同上 549, 551 ページ
第7回	反定立に対する注	同上 551, 553 ページ
第8回	二種類の原因性	同上 553, 555, 620-621 ページ

第9回 宇宙論的な意味での自由 同上 621-622 ページ

第10回 実践の意味での自由 同上 622-623 ページ

第11回 現象と物自体 同上 623-624 ページ

第12回 観知的原因 同上 624-625 ページ

第13回 観知的と感性的 同上 625-626 ページ

第14回 全体を振り返っての考察 期末レポート発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第5巻、理想社版・第5巻、その他多数。ゼミのなかで紹介する。

(英訳書)ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) ほか多数。

【参考書】

<カントの著作>

『プロレゴメナ』1783 年

<関連性の高い文献>

ヨハン・シュルツ『カント『純粋理性批判』を読むために』菅沢・渋谷・山下訳（梓出版社）

御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川選書）

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度

(2) レポート課題で確認される到達目標達成度

(1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第 80 号、2020 年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年。

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013. (翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社、2017 年）。

【Outline and objectives】

Reading Kant's *Critique of Pure Reason*: The Antinomy of Freedom and the Resolution of it

The "Dialectic" of Kant's *Critique of Pure Reason* treats so-called "the antinomy of freedom" and the resolution of it. We read the concerned texts on the *Critique of Pure Reason* and inquire closely into them. As a result Kant's idea of this resolution will be clear and we consider the meaning of it.

PHL500B1

近代倫理学史特殊講義 2

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『純粋理性批判』を読む

——自由のアンチノミーとその解決——

カントの『純粋理性批判』の「弁証論」ではいわゆる「自由のアンチノミー」が提示され、その解決が論ぜられている。この箇所を詳しく読み解くことで、その「解決」を明らかにし、カントの「解決」の意味について考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形態がオンラインか対面かは、学習支援システムの本授業の「お知らせ」を参照してください。

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) 参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	叡知的性格と経験的性格	カント『純粋理性批判』原典テキスト PhB626-627 ページ
第 2 回	メーメノンとしての主体	同上 627-628
第 3 回	生起とその原因	同上 628-629
第 4 回	自然結果と自由に基づく結果	同上 629-630
第 5 回	フェノメノンの原因	同上 630-631
第 6 回	経験的性格の超越論的原因である叡知的性格	同上 631-632
第 7 回	命法、「べし」（当為）	同上 632-633
第 8 回	生起しなかった行為の必然性	同上 633-634
第 9 回	同一行為について、観察と、理性との関係における考察	同上 634-635
第 10 回	時間	同上 635-636

第 11 回 理性 同上 636-637

第 12 回 あらゆる選択意志に基づく行為の無条件的条件である理性 同上 637-638

第 13 回 理性の統制的原理 同上 638-639

第 14 回 全体を振り返っての考察 期末レポート発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第 5 巻、理想社版・第 5 巻、その他多数。ゼミのなかで紹介する。

(英訳書) ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) ほか多数。

【参考書】

＜カントの著作＞

『プロレゴメナ』1783 年

＜関連性の高い文献＞

ヨハン・シュルツ『カント『純粋理性批判』を読むために』菅沢・渋谷・山下訳（梓出版社）

御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川選書）

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度

(2) レポート課題で確認される到達目標達成度

(1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞＜研究テーマ＞＜主要研究業績＞

【Outline and objectives】

Reading Kant's *Critique of Pure Reason*: The Antinomy of Freedom and the Resolution of it

The "Dialectic" of Kant's *Critique of Pure Reason* treats so-called "the antinomy of freedom" and the resolution of it. We read the concerned texts on the *Critique of Pure Reason* and inquire closely into them. As a result Kant's idea of this resolution will be clear and we consider the meaning of it.

PHL500B1

実践哲学特殊講義 1

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ニーチェとヘーゲル—キリスト教批判の行為論的考察

【到達目標】

ニーチェとヘーゲルは、通常対立させられるが、両者は、ヨーロッパ人の生存を左右するキリスト教への批判という点で重なり合っている。

そこで、両者の重なり合いを、イエス論を中心に検討する。そして、その検討を通して哲学と宗教との関係について論述できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ニーチェの『アンティ・クリスト』のイエス論を講読してから、ヘーゲルの『キリスト教の精神とその運命』のイエス論を講読する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	総説	ニーチェとヘーゲルの関係についての案内
第 2 回	ニーチェ総説	ニーチェのキリスト教批判についての案内
第 3 回	ヘーゲル総説	ヘーゲルのキリスト教批判についての案内
第 4 回	ニヒリズムとしてのキリスト教批判	『反キリスト者』第 1 節から第 6 節の検討
第 5 回	同情の宗教としてのキリスト教	『反キリスト者』第 7 節から第 8 節の検討
第 6 回	僧侶的類型としての近代哲学者	『反キリスト者』第 9 節から第 14 節の検討
第 7 回	唯一のキリスト者としてのイエス	『反キリスト者』第 27 節から第 32 節の検討
第 8 回	ヘーゲルのユダヤ教批判	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第 9 回	イエスの登場	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第 10 回	イエスの運命	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第 11 回	市民法と道徳律	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第 12 回	罪と罰	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第 13 回	運命としての罰	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討
第 14 回	キリスト教会への批判	ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』関連箇所の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの下調べと参考文献の熟読。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ニーチェ『アンティ・クリスト』、西尾幹二訳、白水社
ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』、伴博訳、平凡社ライブラリー（資料形式で配布予定）

【参考書】

山口誠一『クリエートする哲学—新行為論入門』、弘文堂、2007年
渡邊二郎編『ニーチェ・セレクション』、平凡社ライブラリー、2005年

【成績評価の方法と基準】

ニーチェとヘーゲルのキリスト教批判に関するゼミでの発表・訳読・研究発表 (60%)、質疑応答 (40%) を基準とする平常点評価

【学生の意見等からの気づき】

該当事項なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

ニーチェとヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明

<研究テーマ>

ニーチェとヘーゲルとの行為論的關係、ヘーゲル『精神現象学』「序説」の註解、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など

<主要研究業績>

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with Nietzsche's and Hegel's critic of christianity, with texts drawn from German and Japanese, and English.

PHL500B1

実践哲学特殊講義 2

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

弁証法哲学の観点からドイツ哲学について検討する。ドイツ哲学ということでシェリング、ヘーゲル、ニーチェを射程に収める。

【到達目標】

『精神現象学』序説精読から弁証法哲学について最先端から理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と原典講読の両面から『精神現象学』序説を手引きにして対面授業を進める。訳読レポートを踏まえて討論する。授業時課題レポートには次回授業時に講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	弁証法哲学総説	弁証法哲学についての案内をする。
第 2 回	『精神現象学』序説総説 I	ヘーゲルの『精神現象学』序説関連年譜についての案内
第 3 回	『精神現象学』序説総説 II	『精神現象学』序説梗概の案内
第 4 回	『精神現象学』序説総説 III	『精神現象学』序説の主題の案内
第 5 回	概念の労苦について	『精神現象学』序説第 58 節の検討
第 6 回	理屈づけについて	『精神現象学』序説第 59 節の検討
第 7 回	概念把握する思考について	『精神現象学』序説第 60 節の検討
第 8 回	哲学命題について	『精神現象学』序説第 61 節の検討
第 9 回	命題「神は存在である」について	『精神現象学』序説第 62 節の検討
第 10 回	思弁的思考について	『精神現象学』序説第 63 節の検討
第 11 回	彫塑的論述について	『精神現象学』序説第 64 節の検討
第 12 回	主体の叙述について	『精神現象学』序説第 65 節の検討
第 13 回	哲学の叙述について	『精神現象学』序説第 66 節の検討
第 14 回	哲学研究について	『精神現象学』序説第 67 節の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの下調べと参考文献の熟読。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

原典

G.W.F.Hegel, *Phänomenologie des Geistes*. Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.

邦語訳

ヘーゲル『精神現象学 I』（『ヘーゲル全集』第 8 巻第 1 分冊）、山口誠一訳、知泉書館

【参考書】

山口誠一『ヘーゲル哲学の根源——《精神現象学》の問いの解明』、法政大学出版局、2016 年（オンデマンド）

【成績評価の方法と基準】

弁証法哲学理解という目標に関するゼミでの発表・訳読・研究発表（60%）と応答（40%）を基準とする平常点評価

【学生の意見等からの気づき】

ドイツ語力の向上と哲学的思考力の統合を重視する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

＜研究テーマ＞

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

＜主要研究業績＞

『ヘーゲル哲学の根源——《精神現象学》の問いの解明』、法政大学出版局、2016、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011 年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010 年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005 年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998 年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with a dialectical understanding of German philosophy (especially Shelling, Hegel and Nietzsche), with texts drawn from German and Japanese.

PHL500B1

近代ドイツ哲学史特殊講義 1

笠原 賢介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前年度に引き続いて、カント『判断力批判』（1790 年）を原文で精読します。序論から美と芸術を扱った第一部へと読み進めます。『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・生命・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義について考えます。英訳での参加も可能です。

【到達目標】

『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・生命・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義についての理解を深める。それによって自らの思考の方向付けを行う。哲学者の思考世界をオリジナル・テキストから各自の目で読み出し、それを討議のなかで客観化して思考する能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

カント『判断力批判』の原文を、ゼミ形式で読み進めます。英訳での参加も可能です。テキストの精読と質疑応答、討論をおりまぜて進めます。必要に応じて関連する資料のプリントを配布し、レクチャーと質疑応答を行ないます。参加者に読解の課題を出し、学習支援システムを用いて提出、次回にプリントの形でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入的なレクチャー、前年度のゼミで明らかになった論点の整理。以下の進捗は目安です。	ゼミの進め方について。カントとゼミ・テキスト『判断力批判』についての基本的な事柄。前年度のゼミで明らかになった論点の整理。
第 2 回	テキスト S.12 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 3 回	テキスト S.13 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 4 回	テキスト S.13 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 5 回	テキスト S.14 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 6 回	テキスト S.14 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 7 回	テキスト S.15 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 8 回	テキスト S.15 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 9 回	テキスト S.16 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。

第 10 回	テキスト S.16 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 11 回	テキスト S.17 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 12 回	テキスト S.17 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 13 回	テキスト S.18 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 14 回	まとめ	春学期の内容を総括し、総合的に質疑応答と討論をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。毎回のテキストの精読箇所を予習し、課題を提出すること。毎回の精読・討論で焦点となった論点につき、フィードバックのプリントを再読し、授業内で示した文献に当たって論点を確認・掘り下げる。

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, Kritik der Urteilkraft, Hamburg: Meiner, 2009 (Philosophische Bibliothek Bd. 507) を用います。英訳は Critique of the Power of Judgement. Edited by P. Guyer. Translated by P. Guyer and E. Matthews. Cambridge, 2000 を用います。テキストについては、初回授業時に説明をします。

【参考書】

1. 宇都宮芳明『訳注・カント『判断力批判』上』以文社、1994 年。
2. カッシーラー（浜田義文他監修）『カントの生涯と学説』みすず書房、1986 年。
3. カッシーラー（中野好之訳）『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、1962 年。
4. ジル・ドゥルーズ（國分功一朗訳）『カントの批判哲学』ちくま学芸文庫、2008 年。
5. 佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代』岩波書店、2005 年。
6. 小田部胤久『美学』東京大学出版会、2020 年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、テキスト理解の正確さ・掘り下げ、質疑応答、討論への参加を総合して評価します。平常点 50%、発表 50%。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的事項を含め積極的に質問、討議をおこなってください。テキスト、レクチャー、討議の内容を正確に把握してください。

【学生が準備すべき機器他】

Zoom で接続可能な機器が必要である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化
 <研究テーマ>啓蒙の比較思想史、近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。
 <主要研究業績>アドルノ『本来性という隠語ードイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未來社、ポイエシス叢書、1992 年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010 年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010 年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016 年 5 月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界ークニッゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未來社、2017 年。「レッシング『賢者ナータン』再読」（論文）、『思想』2018 年 2 月号。「ニーチェとプラトン」（論文）、『法政大学文学部紀要』第 79 号、2019 年。「多声的思考の系譜ーレッシング、ヘルダーからカントへ」『日本カント研究』第 21 巻、2020 年。

【Outline and objectives】

Intensive reading of Immanuel Kant's "Critique of Judgment"(1790) and discussion about the text. Key words: systematic position of "Critique of Judgement" within the Kantian philosophy; beauty, life and ethics; relation to modern philosophical issues.

PHL500B1

近代ドイツ哲学史特殊講義2

笠原 賢介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続いて、カント『判断力批判』（1790 年）を原文で精読します。序論から美と芸術を扱った第一部へと読み進めます。『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・生命・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義について考えます。英訳での参加も可能です。

【到達目標】

『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・生命・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義についての理解を深める。それによって自らの思考の方向付けを行う。哲学者の思考世界をオリジナル・テキストから各自の目で読み出し、それを討議のなかで客観化して思考する能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

カント『判断力批判』の原文を、ゼミ形式で読み進めます。英訳での参加も可能です。テキストの精読と質疑応答、討論をおりまぜて進めます。必要に応じて関連する資料のプリントを配布し、レクチャーと質疑応答を行ないます。参加者に読解の課題を出し、学習支援システムを用いて提出、次回にプリントの形でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス。テキスト S.18 の精読と討論。以下の進度は目安です。	春学期に明らかになった論点の確認。テキストの精読と討論。
第 2 回	テキスト S.19 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 3 回	テキスト S.19 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 4 回	テキスト S.20 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 5 回	テキスト S.20 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 6 回	テキスト S.21 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 7 回	テキスト S.21 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 8 回	テキスト S.22 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 9 回	テキスト S.22 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 10 回	テキスト S.23 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。

第 11 回	テキスト S.23 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 12 回	テキスト S.24 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 13 回	テキスト S.24 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討する。プリントの配布と討議。
第 14 回	まとめ	秋学期の内容を総括し、総合的に質疑応答と討論をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。毎回のテキストの精読箇所を予習し、課題を提出すること。毎回の精読・討論で焦点となった論点につき、フィードバックのプリントを再読し、授業内で示した文献に当たって論点を確認・掘り下げること。

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, Kritik der Urteilkraft, Hamburg: Meiner, 2009 (Philosophische Bibliothek Bd. 507) を用います。英訳は Critique of the Power of Judgement. Edited by P. Guyer. Translated by P. Guyer and E. Matthews. Cambridge, 2000 を用います。テキストについては、初回授業時に説明をします。

【参考書】

1. 宇都宮芳明『訳注・カント『判断力批判』上』以文社、1994 年。
2. カッシーラー（浜田義文他監修）『カントの生涯と学説』みすず書房、1986 年。
3. カッシーラー（中野好之訳）『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、1962 年。
4. ジル・ドゥルーズ（國分功一朗訳）『カントの批判哲学』ちくま学芸文庫、2008 年。
5. 佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代』岩波書店、2005 年。
6. 小田部胤久『美学』東京大学出版会、2020 年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、テキスト理解の正確さ・掘り下げ、質疑応答、討論への参加を総合して評価します。平常点 50%、発表 50%。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的事項を含め積極的に質問、討議をおこなってください。テキスト、レクチャー、討議の内容を正確に把握してください。

【学生が準備すべき機器他】

Zoom で接続可能な機器が必要である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化

＜研究テーマ＞啓蒙の比較思想史、近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。

＜主要研究業績＞アドルノ『本来性という隠語ードイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未來社、ポイエーシス叢書、1992 年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010 年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010 年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016 年 5 月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界ークニッゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未來社、2017 年。「レッシング『賢者ナータン』再読」（論文）、『思想』2018 年 2 月号。「ニーチェとプラトン」（論文）、『法政大学文学部紀要』第 79 号、2019 年。「多声的思考の系譜ーレッシング、ヘルダーからカントへ」『日本カント研究』第 21 巻、2020 年。

【Outline and objectives】

Intensive reading of Immanuel Kant's "Critique of Judgement"(1790) and discussion about the text. Key words: systematic position of "Critique of Judgement" within the Kantian philosophy; beauty, life and ethics; relation to modern philosophical issues.

PHL500B1

科学哲学特殊講義 1

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ベルクソン（Bergson 1859 - 1941）の主著である『物質と記憶』（Matière et mémoire, 1896）の読解を通じて、著者の「心身問題」についての主張の理解を図ります。昨年度秋学期からの続きで、春学期は第4章「意識と物質」の前半を扱います。

【到達目標】

- ベルクソンの原文を正確に読めるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を本書の論理の中で正確に捉えられるようになります。
- ベルクソンの個々の議論をベルクソン思想全体の中で理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を哲学史・科学史の背景を踏まえて理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を今日のわれわれの問題と結びつけて解釈できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面授業で行います。

前もって原文からの訳の準備をしてきた参加者が、一文一文を担当し、輪読で訳読を進めます。その際、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。テキストの切れ目では、当番の人に、当該テキスト部分についての問題提起をしてもらい、全員で検討を行っていきます。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テキストの先行部分の説明を行います。
第2回	二元論の難問（1）	訳解と討論
第3回	二元論の難問（2）	訳解と討論
第4回	とるべき道（1）	訳解と討論
第5回	とるべき道（2）	訳解と討論
第6回	知覚と物質Ⅰ（1）	訳解と討論
第7回	知覚と物質Ⅰ（2）	訳解と討論
第8回	知覚と物質Ⅰ（3）	訳解と討論
第9回	知覚と物質Ⅱ（1）	訳解と討論
第10回	知覚と物質Ⅱ（2）	訳解と討論
第11回	知覚と物質Ⅱ（3）	訳解と討論
第12回	知覚と物質Ⅲ（1）	訳解と討論
第13回	知覚と物質Ⅲ（2）	訳解と討論
第14回	知覚と物質Ⅲ（3）	訳解と討論、さらに学期全体の総括を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に先立って、毎回の当該テキスト箇所の訳を作成し、同時にその箇所での哲学問題の検討を行います。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Henri Bergson, *Matière et mémoire*, édition 《Quadrige》, PUF, 2008（Wormsの序文と、Riquierの注がついた、新しい版が望ましい）。

【参考書】

『思想—ベルクソン生誕 150 年』（岩波書店）
久米・中田・安孫子（編）『ベルクソン読本』（法政大学出版局）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（40%）と議論への参加（30%）、および学期末レポート（30%）で評価します。なおそれぞれの方法において、5つの到達目標への到達度は、フランス語力20%、テキスト理解20%、ベルクソン理解20%、哲学史・科学史理解20%、現代性理解20%の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ議論の時間を取っていききたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
-フランス哲学
〈研究テーマ〉
-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス19世紀思想史を材料にして行っています。
〈主要研究業績〉
-『ベルクソン読本』（編著、2006年、法政大学出版局）
-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著、2012年、OLMS)
-Annales bergsoniennes（編著、2013年、PUF）
-Tout ouvert ! l'évolution créatrice en tous sens(編著、2015年、OLMS)
-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016年、書肆心水）
-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著、2016年、書肆心水)
-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017年、書肆心水）
-Mécanique et mystique（編著、2018年、OLMS）
-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018年、書肆心水）

【Outline and objectives】

Through the main work of Bergson (1859-1941), "Matter and Memory", we will try to understand his claims of the dualistic reality, mind and body. We will read the first half of the chapter 4 in the spring semester.

PHL500B1

科学哲学特殊講義 2

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ベルクソン（Bergson 1859 - 1941）の主著である『物質と記憶』（Matière et mémoire）の読解を通じて、著者の「心身問題」についての主張の理解を図ります。春学期からの続きで、第4章「意識と物質」の後半を扱います。

【到達目標】

- ベルクソンの原文を正確に読めるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を本書の論理の中で正確に捉えられるようになります。
- ベルクソンの個々の議論をベルクソン思想全体の中で理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を哲学史・科学史の背景を踏まえて理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を今日のわれわれの問題と結びつけて解釈できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面授業で行います。

前もって原文からの訳の準備をしてきた参加者が、一文一文を担当し、輪読で訳読を進めます。その際、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。テキストの切れ目では、当番の人に、当該テキスト部分についての問題提起をしてもらい、全員で検討を行っていきます。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされて行きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テキストの先行部分の説明を行います。
第2回	持続と緊張度（1）	訳解と討論
第3回	持続と緊張度（2）	訳解と討論
第4回	持続と緊張度（3）	訳解と討論
第5回	延長と広がり（1）	訳解と討論
第6回	延長と広がり（2）	訳解と討論
第7回	延長と広がり（3）	訳解と討論
第8回	心と身体（1）	訳解と討論
第9回	心と身体（2）	訳解と討論
第10回	心と身体（3）	訳解と討論
第11回	要約と結論（1）	訳解と討論
第12回	要約と結論（2）	訳解と討論
第13回	要約と結論（3）	訳解と討論
第14回	要約と結論（4）	訳解と討論、さらに学期全体の総括を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に先立って、毎回の当該テキスト箇所の訳を作成し、同時にその箇所での哲学問題の検討を行います。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Henri Bergson, Matière et mémoire, édition «Quadrige», PUF, 2008（Wormsの序文と、Riquierの注がついた、新しい版が望ましい）

【参考書】

『思想—ベルクソン生誕 150 年』（岩波書店）
久米・中田・安孫子（編）『ベルクソン読本』（法政大学出版局）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（書肆心水）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（40％）と議論への参加（30％）、および学期末レポート（30％）で評価します。なおそれぞれの方法において、5つの到達目標への到達度は、フランス語力 20％、テキスト理解 20％、ベルクソン理解 20％、哲学史・科学史理解 20％、現代性理解 20％の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ議論の時間を取っていききたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
-フランス哲学
〈研究テーマ〉
-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス 19 世紀思想史を材料にして行っています。
〈主要研究業績〉
-『ベルクソン読本』（編著、2006 年、法政大学出版局）
-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著、2012 年、OLMS)
-Annales bergsoniennes（編著、2013 年、PUF）
-Tout ouvert :l'évolution créatrice en tous sens(編著、2015 年、OLMS)
-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016 年、書肆心水）
-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著、2016 年、書肆心水）
-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017 年、書肆心水）
-Mécanique et mystique（編著、2018 年、OLMS）
-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018 年、書肆心水）

【Outline and objectives】

Through the main work of Bergson (1859-1941), "Matter and Memory", we will try to understand his claims of the dualistic reality, mind and body. We will read the second half of the chapter 4 in the autumn semester.

PHL500B1

近代フランス哲学史特殊講義 1

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【博士後期課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。
- 2) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定
- 3) なお、本年度の開講は 2021 年 4 月 10 日土曜日（2 時限）に教室にて対面で行う予定である。ただし社会情勢に応じてオンラインのズーム授業に転じる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第 2 回	『至高性』第 1 回	作品の概要説明
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 2 部第 4 章第 1 節
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 2 部第 4 章第 2 節
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 2 部第 4 章第 3 節
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 2 部第 4 章第 4 節
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 2 部第 4 章第 5 節
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 2 部第 4 章第 6 節
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 2 部第 4 章第 7 節
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 3 部第 1 章第 1 節
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 3 部第 1 章第 2 節
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 3 部第 1 章第 3 節
第 13 回	『至高性』第 12 回	第 3 部第 1 章第 3 節
第 14 回	『至高性』第 13 回	第 3 部第 1 章第 4 節

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
バタイユならびに現代思想に関心を持って読書を進めてほしい。とくに参考書にあげた文献は読んでおいてほしい。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

酒井健著『バタイユ入門』（ちくま新書）、湯浅博雄『消尽』（講談社学術文庫）、
バタイユ著『呪われた部分、全般経済学試論・蕩尽』（酒井健訳、ちくま学芸文庫）

【成績評価の方法と基準】

【博士後期課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
- ②学期末の発表（50 %）

《到達目標との対応》

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランス現代思想

<研究テーマ>バタイユ研究

<主要研究業績>

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the thought of Georges Bataille, especially of one of his last works :Souveraineté. That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL500B1

近代フランス哲学史特殊講義2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続きフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ(1897-1962)の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【博士課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。
- 2) 原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交える。
- 3) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定していく。
- 4) なお、本年度の開講は 2021 年 9 月 18 日土曜日（2 時限）に教室にて対面で行う予定である。ただし社会情勢に応じてオンラインのズーム授業に転じる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第 2 回	『至高性』第 1 回	第 3 部第 2 章第 1 節
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 3 部第 2 章第 2 節
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 3 部第 2 章第 3 節
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 3 部第 2 章第 4 節
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 3 部第 2 章第 5 節
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 3 部第 2 章第 6 節
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 3 部第 2 章第 7 節
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 3 部第 2 章第 8 節
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 3 部第 2 章第 9 節
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 3 部第 2 章第 10 節
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 3 部第 2 章第 11 節
第 13 回	『至高性』第 12 回	至高性と政治について検討する。
第 14 回	『至高性』第 13 回	まとめと出席者による発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユおよびフランス現代思想の著作に親しんでおくこと。
本授業は準備と復習にそれぞれ 4 時間かけることを標準とする。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

酒井健著『バタイユ入門』（ちくま新書）
湯浅博雄『消尽』（講談社学術文庫）
バタイユ著『呪われた部分、全般経済学試論・蕩尽』（酒井健訳、ちくま学芸文庫）

【成績評価の方法と基準】

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

《到達目標との対応》

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね好評であった。学生からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞ジョルジュ・バタイユ研究

＜主要研究業績＞酒井健著『バタイユと芸術』青土社、2019 年

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the thought of Georges Bataille, especially of one of his last works :Souveraineté. That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL500B1

法哲学特殊講義 1

内藤 淳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Whitley R.P. Kaufman, Human Nature and the Limits of Darwinism, Palgrave Macmillan, 2016 の第 2 章「The Traditional Theory of Human Nature」を精読する。この章は、西洋哲学（の歴史的伝統）における人間本性の捉え方を分析する内容である。

【到達目標】

- ①西洋思想史における伝統的な人間観の特徴や論点、問題点を理解する。
- ②それらを踏まえて「人間本性」について自分なりの考えを持ち、それと他の人間観との相違点や対立点について説明できるようになる。
- ③英語の専門文献を読んで理解し、それについての正確な日本語訳が作れるようになる。また、正確な日本語で論理的な文章が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。但し、状況に応じて Zoom 等でのオンライン授業や課題提示等によるオンデマンド授業を組み入れる。その点を含めて、授業実施に必要な連絡や調整は適宜学習支援システムを活用しつつ行う。

毎回担当者を決め、テキスト担当箇所の日本語訳の作成を課題として課す。個々の授業においてその訳文の吟味・検討を行い、問題箇所を修正する。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。具体的な講読箇所は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第 2 回	昨年度の講読箇所の解説	西洋の二元論的人間観についての解説
第 3 回	西洋古代・中世の人間観と世界観について 1	テキスト第 2 章 pp.31-32
第 4 回	西洋古代・中世の人間観と世界観について 2	テキスト第 2 章 pp.32-33
第 5 回	西洋古代・中世の人間観と世界観について 3	テキスト第 2 章 pp.33-34
第 6 回	人間観と理性について 1	テキスト第 2 章 pp.34-35
第 7 回	人間観と理性について 2	テキスト第 2 章 pp.35-36
第 8 回	人間観と理性について 3	テキスト第 2 章 pp.36-37
第 9 回	理性の超越性について 1	テキスト第 2 章 pp.37-38
第 10 回	理性の超越性について 2	テキスト第 2 章 pp.38-39
第 11 回	理性の超越性について 3	テキスト第 2 章 pp.39-40
第 12 回	理性の超越性について 4	テキスト第 2 章 pp.40-42

第 13 回 理性と宗教の関係につ テキスト第 2 章 pp.42-43
いて

第 14 回 西洋の伝統的人間観の テキスト第 2 章 pp.43-45
全体的特徴について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳を作成する。

【テキスト（教科書）】

Whitley R.P. Kaufman, Human Nature and the Limits of Darwinism, Palgrave Macmillan, 2016

【参考書】

スティーブン・ピンカー『人間の本性を考える』（上）～（下）日本放送出版協会、2004 年

スティーブン・ピンカー『心の仕組み』（上）～（下）日本放送出版協会、2003 年

ダニエル・C・デネット『ダーウィンの危険な思想』青土社

ダニエル・C・デネット『心の進化を解明する』青土社

その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～③の達成度を評価する。担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況、それに関する授業での質疑応答を含む）の評価：80 %。それ以外での授業での議論内容：20 %。

【学生の意見等からの気づき】

訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。文法など、基礎的な要素の理解の徹底にも努めたい。

【学生が準備すべき機器他】

状況によりオンライン形式を組み入れた場合には、学習支援システム及び Zoom 等の双方向通信の利用ができる機器が必要になる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>法哲学

<研究テーマ>人権や憲法の基礎についての研究

<主要研究業績>

「功利原理と人間本性：ミルを進化心理学で批判する」法政大学文学部紀要 78 号、2018 年

「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要 75 号、2017 年

「平和は『絶対に』求めるべきか？：ホッブズを進化心理学で修正する」（1）（2・完）法政大学文学部紀要 71 号・72 号、2015 年
「憲法学は立憲の憲法を正当化できるか？」（1）（2・完）一橋法学 12 巻 2 号・3 号、2013 年

「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012 年
「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座 人権論の再定位 5）』法律文化社、2010 年

「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第 8 号、2010 年

【Outline and objectives】

This course introduces human nature in philosophical history. The main aim of this course is to help students understand the traditional theory of human nature by studying the history of Western philosophy. At the end of this course, participants are expected to have their own opinions on human nature and explain them rationally.

PHL500B1

法哲学特殊講義2

内藤 淳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Whitley R.P. Kaufman, Human Nature and the Limits of Darwinism, Palgrave Macmillan, 2016 の第4章「Reason, Truth, and Evolution」を精読する。この章は、西洋哲学の伝統的な二元論的人間観と、進化理論に基づく一元論的人間観との対立を論じる内容である。

【到達目標】

- ①西洋の伝統的な二元論的人間観と進化理論的な一元論的な人間観の特徴、対立点などを理解する。
- ②それらを踏まえて「人間本性」について自分なりの考えを持ち、それと他の人間観との相違点や対立点について説明できるようになる。
- ③英語の専門文献を読んで理解し、それについての正確な日本語訳が作れるようになる。また、正確な日本語で論理的な文章が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業を行う。但し、状況に応じて Zoom 等でのオンライン授業や課題提示等によるオンデマンド授業を組み入れる。その点を含めて、授業実施に必要な連絡や調整は適宜学習支援システムを活用しつつ行う。

毎回担当者を決め、テキスト担当箇所の日本語訳の作成を課題として課す。個々の授業においてその訳文の吟味・検討を行い、問題箇所を修正する。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。具体的な講読箇所は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第2回	概括的ポイントの解説	二元論的人間観と一元論的人間観の特徴について
第3回	進化理論的人間観の概観	テキスト第4章 pp.67-68
第4回	進化理論による伝統理論への批判について1	テキスト第4章 pp.68-69
第5回	進化理論による伝統理論への批判について2	テキスト第4章 pp.69-71
第6回	進化理論による伝統理論への批判について3	テキスト第4章 pp.71-73
第7回	進化理論による伝統理論への批判について4	テキスト第4章 pp.73-75
第8回	観念についての進化理論的説明1	テキスト第4章 pp.75-76
第9回	観念についての進化理論的説明2	テキスト第4章 pp.76-78
第10回	ミーム概念について1	テキスト第4章 pp.78-80
第11回	ミーム概念について2	テキスト第4章 pp.80-82
第12回	合理主義の矛盾について1	テキスト第4章 pp.82-83
第13回	合理主義の矛盾について2	テキスト第4章 pp.83-85
第14回	理性の役割について	テキスト第4章 pp.85-86

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳を作成する。

【テキスト（教科書）】

Whitley R.P. Kaufman, Human Nature and the Limits of Darwinism, Palgrave Macmillan, 2016

【参考書】

スティーブン・ピンカー『人間の本性を考える』（上）～（下）日本放送出版協会、2004年
スティーブン・ピンカー『心の仕組み』（上）～（下）日本放送出版協会、2003年
ダニエル・C・デネット『ダーウィンの危険な思想』青土社
ダニエル・C・デネット『心の進化を解明する』青土社
その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～③の達成度を評価する。担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況、それに関する授業での質疑応答を含む）の評価：80%。それ以外での授業での議論内容：20%。

【学生の意見等からの気づき】

訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。文法など、基礎的な要素の理解の徹底にも努めたい。

【学生が準備すべき機器他】

状況によりオンライン形式を組み入れた場合には、学習支援システム及び Zoom 等の双方向通信の利用ができる機器が必要になる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>法哲学
<研究テーマ>人権や憲法の基礎についての研究
<主要研究業績>

「功利原理と人間本性：ミルを進化心理学で批判する」法政大学文学部紀要78号、2018年

「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要75号、2017年

「平和は『絶対』に求めるべきか？：ホブズを進化心理学で修正する」（1）（2・完）法政大学文学部紀要71号・72号、2015年
「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」（1）（2・完）一橋法学12巻2号・3号、2013年

「一夫一婦制と憲法の目的」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012年
「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座 人権論の再定位5）』法律文化社、2010年
「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第8号、2010年

【Outline and objectives】

This course introduces human nature in philosophical history and modern evolutionary psychology. The main aim of this course is to help students understand the conflict between traditional theory and Darwinian theory concerning human nature. At the end of this course, participants are expected to have their own opinions on human nature and explain them rationally.

PHL500B1

現象学特殊講義 1

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1930 年に行った講演「真理の本質について」と、1931/32 年冬学期に行われた同名の講義をドイツ語原文で読む。前者の講演は、後にハイデガーが自分の思索の「根本経験」に迫るものとして回顧している、きわめて重要なものである。二つのテキストを読むことを通じて、ハイデガーの思索の原点に迫る。

【到達目標】

- ①ハイデガーの真理観を理解する。
- ③ハイデガーの思索の「根本経験」とは何かを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業初めに行う。講演「真理の本質について」は全集第 9 巻に、同名の講義は全集第 34 巻に収められている。なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	概要の説明
第 2 回	講演「真理の本質について」①	報告と討議（177-182 頁）
第 3 回	講演「真理の本質について」②	報告と討議（183-187 頁）
第 4 回	講演「真理の本質について」③	報告と討議（188-192 頁）
第 5 回	講演「真理の本質について」④	報告と討議（193-198 頁）
第 6 回	講演「真理の本質について」⑤	報告と討議（199-202 頁）
第 7 回	講義「真理の本質について」①	報告と討議（1-5 頁）
第 8 回	講義「真理の本質について」②	報告と討議（6-10 頁）
第 9 回	講義「真理の本質について」③	報告と討議（11-15 頁）
第 10 回	講義「真理の本質について」④	報告と討議（16-20 頁）
第 11 回	講義「真理の本質について」⑤	報告と討議（21-25 頁）
第 12 回	講義「真理の本質について」⑥	報告と討議（26-30 頁）
第 13 回	講義「真理の本質について」⑦	報告と討議（31-35 頁）
第 14 回	講義「真理の本質について」⑧	報告と討議（36-40 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, Wegmarken, Gesamtausgabe Bd. 9, Vittorio Klostermann, 1976.

Martin Heidegger, Vom Wesen der Wahrheit: Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet, Gesamtausgabe Bd. 34, Vittorio Klostermann, 1988.

希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

M. ハイデガー著・辻村公一・H. ブフナー訳、『道標』、創文社、1985 年

M. ハイデガー著・細川亮一・I. ブフハイム訳、『真理の本質について——プラトンの洞窟の比喩と『テアイテトス』』、創文社、1995 年
どちらも上記テキストの翻訳。その他の参考書は適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 60%、参加者としての評価が 40%。前者は報告の内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこでの発言を評価の対象とする。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture of 1930, *On the Essence of Truth*, and lecture course of the same name of 1931/32, in the German original. The former lecture is extremely important, because it is looked back on by Heidegger as the one which gets to the "fundamental experience" of his thought. By reading these texts we will get to the putative origin of Heidegger's thought.

PHL500B1

現象学特殊講義2

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーが 1931/32 年冬学期に行った講義「真理の本質について」をドイツ語原文で読む。ハイデガーは 1930 年に行った同名の講演を、自分の思索の「根本経験」に迫るものとして回顧している。授業ではこの講演の内容を踏まえ、講義の読解を通じてハイデガーの思索の原点に迫る。

【到達目標】

- ①ハイデガーの真理観を理解する。
- ③ハイデガーの思索の「根本経験」とは何かを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業初めに行う。講義「真理の本質について」は全集第 34 巻に収められている。なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	春学期の振り返りと概要の説明
第 2 回	講義「真理の本質について」①	報告と討議（41-45 頁）
第 3 回	講義「真理の本質について」②	報告と討議（46-50 頁）
第 4 回	講義「真理の本質について」③	報告と討議（51-55 頁）
第 5 回	講義「真理の本質について」④	報告と討議（56-60 頁）
第 6 回	講義「真理の本質について」⑤	報告と討議（61-65 頁）
第 7 回	講義「真理の本質について」⑥	報告と討議（66-70 頁）
第 8 回	講義「真理の本質について」⑦	報告と討議（71-75 頁）
第 9 回	講義「真理の本質について」⑧	報告と討議（76-80 頁）
第 10 回	講義「真理の本質について」⑨	報告と討議（81-85 頁）
第 11 回	講義「真理の本質について」⑩	報告と討議（86-90 頁）
第 12 回	講義「真理の本質について」⑪	報告と討議（91-95 頁）
第 13 回	講義「真理の本質について」⑫	報告と討議（96-100 頁）
第 14 回	講義「真理の本質について」⑬	報告と討議（101-105 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Vom Wesen der Wahrheit: Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet*, Gesamtausgabe Bd. 34, Vittorio Klostermann, 1988.

希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

M. ハイデガー著・細川亮一・I. ブフハイム訳、『真理の本質について——プラトンの洞窟の比喩と『テアイテトス』』、創文社、1995 年上記テキストの翻訳。その他の参考書は適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 60%、参加者としての評価が 40%。前者は報告の内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこでの発言を評価の対象とする。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号, 2018 年.

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号, 2014 年.

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号, 2012 年.

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture of 1930, *On the Essence of Truth*, and lecture course of the same name of 1931/32, in the German original. The former lecture is extremely important, because it is looked back on by Heidegger as the one which gets to the "fundamental experience" of his thought. By reading these texts we will get to the putative origin of Heidegger's thought.

PHL500B1

日本思想史特殊講義 1

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

柳田国男の諸著作を読み進めることを通じて、日本近代における民俗学のあり方を把握していく。特に、日本の民間信仰の特性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

【修士課程】

- ・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【博士後期課程】

- ・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。
- ・論文形式で文章を作成することが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に柳田国男の諸著作の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- (4) 演習の始めに、前回の演習で議論された内容を整理しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	柳田国男に関する概説と演習の進行についての説明	柳田国男の民俗学に関する概要の説明と、演習内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	「海上」信仰に関する考察	「海神宮考」（一：35-72）（以下全て柳田国男全集の巻数とページ数表記による）
第3回	異界との交流に関する考察	「みろくの船」（一：73-84）・「根の国の話」（一：85-109）
第4回	『遠野物語』の探究	『遠野物語』（四：5-54）における異界の考察
第5回	『山の人生』① 里と山の相違から	『山の人生』（四：57-126）における「山」と「里」の相違からの考察
第6回	『山の人生』② 異界としての「山」	『山の人生』（四：126-186）における「山」の異界性の考察
第7回	「史料」の扱い① 「史料」を学問として扱う手法	「史料としての伝説」（四：189-239）による、史料の扱いの習得
第8回	「史料」の扱い② 「伝説」を学問として扱うこと	「史料としての伝説」（四：240-284）による、「伝説」を学問として扱うことの意義
第9回	「伝説」の扱い① 「伝説」の採録	「伝説」（五：3-59）による、「伝説」の採録についての考察

第10回 「伝説」の扱い②
「伝説」の学問化

第11回 「口承文芸」の扱い

第12回 「口承文芸」の学問化

第13回 「物語論」

第14回 「物」とは何か、「物」を「語る」とはいかなることか

「伝説」（五：59-110）による、「伝説」を学問として扱うことの実際の方法の確認

「口承文芸史考」（六：3-78）による、「口承文芸」の扱い方についての考察

「口承文芸史考」（六：78-150）による、「口承文芸」を学問として扱うことについての検討

「物語と語り物」（七：3-65）による、物語論の検討

「物語と語り物」（七：66-123）による、「物」とは何か、「物」を「語る」とはいかなる営みかについての考察

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計5時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『柳田国男全集』を用いる。受講者自身が入手することが望ましいが、入手難易度を考慮して演習担当者が資料を準備する予定である。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず先入観を排して柳田国男の原典そのものにあって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。参考文献は講義内で適宜指示していくことになる。

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60％）と、演習内での発言や議論への参加姿勢（40％）によって評価する。
【博士後期課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70％）と、演習内での発言や議論への参加姿勢（30％）によって評価する。

修士課程・博士後期課程ともに、講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習の展開や学生からの要望次第によっては、より多くの文献を扱っていききたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代哲学・日本思想史
＜研究テーマ＞京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
＜主要研究業績＞

①「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）

②『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）

③「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武刃」との関係から—」（『倫理学紀要第24輯』、2017）

より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding on Japanese folklore through reading thoroughly the writings by Kunio Yanagida. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought and faith.

PHL500B1

日本思想史特殊講義 2

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

柳田国男の諸著作を読み進めることを通じて、日本近代における民俗学のあり方を把握していく。特に、日本の民間信仰の特性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

【修士課程】

・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くことが出来る。

・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。

・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【博士後期課程】

・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くことが出来る。

・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。

・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

・論文形式で文章を作成することが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

（１）受講者全員に柳田国男の諸著作の担当箇所を割り当てる。

（２）担当者は担当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。

（３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

（４）演習の始めに、前回の演習で議論された内容を整理しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	柳田国男に関する概説と演習の進行についての説明	柳田国男の民俗学に関する概要の説明と、演習内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	「昔話」の成立	柳田国男『桃太郎の誕生』の出だし部分の検討（八：3-36）（以下全て柳田国男全集の巻数とページ数表記による）
第 3 回	「昔話」の構造の探究	『桃太郎の誕生』（八：37-74）に示されている昔話の構造についての考察
第 4 回	「昔話」と学問	『桃太郎の誕生』（八：157-188）による、昔話と学問との関係についての考察
第 5 回	民俗学と女性	「女性と民間伝承」（八：317-358）の分析による、民間伝承と女性の関係についての考察
第 6 回	女性と社会	『妹の力』（九：3-81）の読解による、社会における女性の働き方の検討
第 7 回	女性と伝承	『妹の力』（九：82-146）の読解による、女性と伝承の関係についての検討
第 8 回	女性と力	『妹の力』（九：147-219）の読解による、女性の力のあり方についての検討

第 9 回 祀りの問題

第 10 回 祀りと巫女

第 11 回 祀りと共同体の問題

第 12 回 共同体と信仰

第 13 回 祖霊信仰

第 14 回 祀りと祭

「巫女考」（九：221-260）の読解による、神の祀りの問題の検討
「巫女考」（九：260-301）の読解による、祀りと巫女との関係についての検討

『先祖の話』（十：3-53）の読解による、祀りに共同体がいかに関わるのかという問題についての考察
『先祖の話』（十：54-104）の読解により、柳田国男の祖霊信仰の把握を目指す

『先祖の話』（十：104-152）の読解により、祖霊信仰の全体像の理解を目指す

「日本の祭」（十：176-236）の読解による、信仰と祭りの関係性の把握を目指す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

本授業の準備・復習時間は、計 5 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『柳田国男全集』を用いる。受講者自身が入手することが望ましいが、入手難易度を考慮して演習担当者が資料を準備する予定である。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず先入観を排して柳田国男の原典そのものにあって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくことになる。

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60 %）と、演習内での発言や議論への参加姿勢（40 %）によって評価する。

【博士後期課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、演習内での発言や議論への参加姿勢（30 %）によって評価する。

修士課程・博士後期課程ともに、講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習の展開や学生からの要望次第によっては、より多くの文献を扱っていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。

パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

① 「「ひと」とであること、「私」とであること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）

② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）

③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第 24 輯』、2017）

より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding on Japanese folklore through reading thoroughly the writings by Kunio Yanagida. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought and faith.

PHL700B1

哲学特殊研究 1

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジャック・デリダの哲学を対象にした博士論文の制作を念頭において既存のデリダ論を熟読玩味する。

【到達目標】

デリダの基本となる概念をしっかりと把握する。

とくに

- 1) 脱構築
- 2) 差延
- 3) エクリチュール

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

G.C. スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を熟読玩味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業の概要説明	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』の紹介
第 2 回	デリダ論 1	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 10 頁まで読む。
第 3 回	デリダ論 2	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 20 頁まで読む。
第 4 回	デリダ論 3	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 30 頁まで読む。
第 5 回	デリダ論 4	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 40 頁まで読む。
第 6 回	デリダ論 5	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 50 頁まで読む。
第 7 回	デリダ論 6	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 60 頁まで読む。
第 8 回	デリダ論 7	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 70 頁まで読む。
第 9 回	デリダ論 8	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 80 頁まで読む。
第 10 回	デリダ論 9	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 90 頁まで読む。
第 11 回	デリダ論 10	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 100 頁まで読む。
第 12 回	デリダ論 11	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 110 頁まで読む。

第 13 回	デリダ論 12	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 120 頁まで読む。
第 14 回	まとめ	今学期の内容に即した発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回 10 頁読むので、事前に少なくともその分だけ内容を把握し、発表できるようにしておくこと。
本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』平凡社ライブラリー

【参考書】

『現代思想 2015 年二月臨時増刊号 総特集デリダ』

【成績評価の方法と基準】

脱構築、差延、エクリチュールなどのデリダの基本概念をどれだけしっかり理解しているかを基準にして成績をつける。平常点 50 %、期末のまとめの発表 50 % の割合を一つの目安とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ フランス現代思想

＜研究テーマ＞ バタイユ研究

＜主要研究業績＞ 『バタイユから生の深淵へ』青土社

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the thought of Jacques Derrida, especially his several important concept such as écriture, différance. That is for the students of doctor course.

PHL700B1

哲学特殊研究 2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文を制作するための院生に開かれた授業です。デリダ論を読んでいきます。

【到達目標】

デリダの思想をよりいっそう深く理解する。研究者の優れた論文を手掛かりにして、新たなデリダ読解の可能性を探る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期に続いて G.C. スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を熟読玩味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業の概要説明	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』の紹介
第 2 回	デリダ論 1	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 120 頁から 130 頁まで読む。
第 3 回	デリダ論 2	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 135 頁まで読む。
第 4 回	デリダ論 3	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 140 頁まで読む。
第 5 回	デリダ論 4	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 145 頁まで読む。
第 6 回	デリダ論 5	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 150 頁まで読む。
第 7 回	デリダ論 6	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 155 頁まで読む。
第 8 回	デリダ論 7	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 160 頁まで読む。
第 9 回	デリダ論 8	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 165 頁まで読む。
第 10 回	デリダ論 9	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 170 頁まで読む。
第 11 回	デリダ論 10	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 175 頁まで読む。
第 12 回	デリダ論 11	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 180 頁まで読む。
第 13 回	デリダ論 12	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 190 頁まで読む。

第 14 回 まとめと復習

スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』の総括的な発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回一定の分量を読むので、事前に少なくともその分だけ内容を把握し、発表できるようにしておくこと。

本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』平凡社ライブラリー

【参考書】

『現代思想 2015 年二月臨時増刊号 総特集デリダ』

【成績評価の方法と基準】

脱構築、差延、エクリチュールなどのデリダの基本概念をどれだけしっかり理解しているかを基準にして成績をつける。平常点 50 %、期末のまとめの発表 50 % の割合を一つの目安とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランス現代思想

<研究テーマ> バタイユ研究

<主要研究業績> 『バタイユから生の深淵へ』青土社

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the thought of Jacques Derrida, especially his several important concept such as écriture, différance. That is for the students of doctor course.

LIT500B2

日本文芸学 A

守安 敏久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前半の講義（および討議）では、三島由紀夫が能を近代的な装いのもとに転生させた現代戯曲『近代能楽集』連作について分析する。文学と演劇との関係を考察するとともに、古典の受容の問題についても理解を深める。後半は受講者各自がそれぞれ興味ある概念テーマと任意の文芸作品を選び、分担発表する。例えば、「幻想」「笑い」「不気味なもの」「超現実的なもの」「不条理」「悪」など、さまざまな概念テーマをめぐって、文芸理論的な学習と具体的な作品考察を交差させていくような発表を想定している。

【到達目標】

文芸作品を考察するさまざまな観点を修得する。観点のひとつとして、概念テーマを理論的に学習することで、それを作品考察に生かす。多角的な作品分析ができるような、幅広い知見を獲得し、それを論文作成に接続する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義（および討議）と担当発表を中心とした演習形式とによって構成。対面授業とオンデマンド授業を併用。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス、発表の分担	授業説明と担当発表の分担
第 2 回	三島由紀夫略述	三島由紀夫のひとと作品
第 3 回	能略述	能「葵上」解説
第 4 回	『近代能楽集』 葵上	三島由紀夫『近代能楽集』『葵上』解説と討議
第 5 回	『近代能楽集』 葵上 DVD 鑑賞	三島由紀夫『近代能楽集』『葵上』DVD 解説と討議
第 6 回	『近代能楽集』 班女	三島由紀夫『近代能楽集』『班女』解説と討議
第 7 回	三島由紀夫関連考察	三島由紀夫関連 DVD 解説と討議
第 8 回	受講者による担当発表・討議（1）	受講者による担当発表と討議
第 9 回	受講者による担当発表・討議（2）	受講者による担当発表と討議
第 10 回	受講者による担当発表・討議（3）	受講者による担当発表と討議
第 11 回	受講者による担当発表・討議（4）	受講者による担当発表と討議
第 12 回	受講者による担当発表・討議（5）	受講者による担当発表と討議
第 13 回	受講者による担当発表・討議（6）	受講者による担当発表と討議
第 14 回	まとめ・補説	まとめと補説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者自身の担当発表準備や、他の受講者の担当作品についての準備学習・復習など、1 週につき平均各 2 時間。

【テキスト（教科書）】

三島由紀夫『近代能楽集』（新潮文庫、1968）

【参考書】

『日本古典文学全集』第33・34巻〈謡曲集1・2〉（小学館、1973～1975）

堂本正樹『劇人三島由紀夫』（劇書房、1994）

高橋和幸『三島由紀夫の詩と劇』（和泉書院、2007）

田村景子『三島由紀夫と能楽』（勉誠出版、2012）

松本徹他・編『三島由紀夫事典』（勉誠出版、2000）

『三島由紀夫研究』①～②⑩（鼎書房、2005～）

【成績評価の方法と基準】

担当発表（60％）、および討論への参加状況（40％）。

【学生の意見等からの気づき】

受講者が意見を出しやすい授業環境を整える。

【学生が準備すべき機器他】

情報機器（パソコン）

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学、現代演劇・映画論。

＜研究テーマ＞寺山修司研究。文学と映画との相互影響の研究。

＜主要研究業績＞『寺山修司論―バロックの大世界劇場―』（単著、国書刊行会、2017）、『メディア横断芸術論』（単著、国書刊行会、2011）、『バロックの日本』（単著、国書刊行会、2003）

【Outline and objectives】

1.The theme of this class is the analysis and study on Mishima Yukio.

2.Students present their research according to their own themes.

LIT500B2

日本文芸学B

守安 敏久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前半の講義（および討議）では、三島由紀夫が自ら監督・脚本・主演した映画『憂国』（1966、原作小説＝三島由紀夫）、および寺山修司が監督・脚本を手がけた映画『草迷宮』（1979、原作小説＝泉鏡花）を考察する。小説とその映像化の問題を考える。後半は受講者各自がそれぞれ研究対象としている任意の文芸作品をあげ、分担発表する。

【到達目標】

文芸作品を考察するさまざまな観点を修得する。多角的な作品分析ができるような、幅広い知見を獲得し、それを論文作成に接続する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義（および討議）と担当発表を中心とした演習形式とによって構成。対面授業とオンデマンド授業を併用。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス、発表の分担	授業説明と担当発表の分担
第2回	三島由紀夫の小説『憂国』	小説『憂国』の解説と討議
第3回	三島由紀夫の映画『憂国』	映画『憂国』の解説と討議
第4回	寺山修司略述	寺山修司の人と作品
第5回	泉鏡花の小説『草迷宮』	小説『草迷宮』の解説と討議
第6回	寺山修司の映画『草迷宮』	映画『草迷宮』の解説と討議
第7回	寺山修司関連考察	寺山修司関連DVD解説と討議
第8回	受講者による担当発表・討議（1）	受講者による担当発表と討議
第9回	受講者による担当発表・討議（2）	受講者による担当発表と討議
第10回	受講者による担当発表・討議（3）	受講者による担当発表と討議
第11回	受講者による担当発表・討議（4）	受講者による担当発表と討議
第12回	受講者による担当発表・討議（5）	受講者による担当発表と討議
第13回	受講者による担当発表・討議（6）	受講者による担当発表と討議
第14回	まとめ・補説	まとめと補説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者自身の担当発表準備や、他の受講者の担当作品についての準備学習・復習など、1週につき平均各2時間。

【テキスト（教科書）】

三島由紀夫『花ざかりの森・憂国』（新潮文庫、1968）

泉鏡花『草迷宮』（岩波文庫、1985）（または「青空文庫」サイト）

【参考書】

松本徹他・編『三島由紀夫事典』（勉誠出版、2000）

『三島由紀夫研究』①～②⑩（鼎書房、2005～）

高取英『寺山修司論―創造の魔神』（思潮社、1992）

『寺山修司: いまこそ、新たな読者のために [増補新版]』(河出書房新社、文藝別冊 KAWADE ムック、2019)

【成績評価の方法と基準】

担当発表 (60 %)、および討論への参加状況 (40 %)。

【学生の意見等からの気づき】

受講者が意見を出しやすい授業環境を整える。

【学生が準備すべき機器他】

情報機器 (パソコン)

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学、現代演劇・映画論。

＜研究テーマ＞寺山修司研究。文学と映画との相互影響の研究。

＜主要研究業績＞『寺山修司論—バロックの大世界劇場—』(単著、国書刊行会、2017)、『メディア横断芸術論』(単著、国書刊行会、2011)、『バロックの日本』(単著、国書刊行会、2003)

【Outline and objectives】

1.The theme of this class is the analysis and study on Mishima Yukio and Terayama Shuji.

2.Students present their research according to their own themes.

LIT500B2

日本文芸批評史 A

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組みあわせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第 2 回	坪内逍遙と二葉亭四迷	坪内逍遙「小説神髓」と二葉亭四迷「小説総論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	島崎藤村と自然主義の誕生	島崎藤村「千曲川のスケッチ」を読み、日本における自然主義文学のはじまりについて解説します。
第 4 回	北村透谷『透谷選集』を読む	本の文芸批評の出発点として、北村透谷『北村透谷選集』について発表してもらいます。
第 5 回	1910 年と石川啄木	日本の近代文学史における 1910 年の状況を解説し、石川啄木「時代閉塞の現状」を読みます。
第 6 回	佐藤春夫の評論文を読む	印象批評の例として、佐藤春夫の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	平塚らいてうと与謝野晶子	平塚らいてう「元始女性性は太陽であつた」と与謝野晶子「母性偏重を排す」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	小林秀雄の出発	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	白樺派の登場と私小説の完成	生田長江「自然主義前派の跳梁」と武者小路実篤「新しき村に就て」を読み、その意義を理解します。

第10回	中野重治の批評	プロレタリア文学以降のもっとも重要な成果の一つである、中野重治の評論文について発表してもらいます。
第11回	谷崎潤一郎と芥川龍之介	谷崎潤一郎「饒舌録（抄）」と芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な（抄）」を読み、その意義を理解します。
第12回	平野謙の登場	戦後文学の代表的な文芸時評家である、平野謙の評論文について発表してもらいます。
第13回	中村光夫と 1945 年	中村光夫「『近代』への疑惑」を読み、1945 年の敗戦にいたるまでの日本文学の状況を概括します。
第14回	江藤淳の出版	戦後文学を問い直す視点を提示しつつけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇] および [昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B2

日本文芸批評史 B

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組みあわせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第 2 回	伊藤整と横光利一	伊藤整「新心理主義文学」と横光利一「純粋小説論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	萩原朔太郎と保田與重郎	萩原朔太郎「日本への回帰」と保田與重郎「文明開化の論理の終焉について」を読み、その意義を理解します。
第 4 回	吉本隆明の登場	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしてつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第 5 回	川端康成と三島由紀夫	敗戦による 1945 年の断絶に注意しつつ、川端康成「横光利一弔辞」と三島由紀夫「重症者の兇器」を読みます。
第 6 回	福田恒存の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、福田恒存の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	戦後文学の空間と戦後派の登場	敗戦後に登場した戦後派の作家たちについて概括し、戦後文学のあり方の特徴を理解します。
第 8 回	秋山駿の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、秋山駿の評論文について発表してもらいます。

第 9 回	第三の新人と戦後文学批判	戦後文学のあり方に抵抗するように登場した第三の新人について概括し、吉本隆明や江藤淳による戦後文学批判の視点を理解します。
第 10 回	柄谷行人の出発	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、柄谷行人の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	構造主義とテキスト論	20 世紀後半以降の構造主義思想の意義について考察し、その文学版であるテキスト論に対する理解を深めます。
第 12 回	加藤典洋の登場	江藤淳を批判しつつ戦後文学を相対化する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	フェミニズム文学論	1980 年代以降の日本のフェミニズム思想について考察を加え、その文学的意義を理解します。
第 14 回	現代文学の批評	現代文学に対して重要な論点を提供しているものを選び、その評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B2

日本古代文芸原典研究 A

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を講読する。

【到達目標】

巻 1・2 の柿本人麻呂作品を読み進める。その中から各自が最も関心のある作品を取り上げ、注釈的な読解を中心に発表する。それにより、上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概説	万葉集と柿本人麻呂について概説する。
第 2 回	近江荒都歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 3 回	吉野讃歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 4 回	留京三首	左記のテーマについて批評、検討する。
第 5 回	安騎野歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 6 回	石見相聞歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 7 回	日並皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 8 回	河嶋皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 9 回	明日香皇女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 10 回	高市皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 11 回	泣血哀慟哭歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 12 回	吉備津采女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 13 回	狭岑島死人歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 14 回	臨死歌	左記のテーマについて批評、検討する。 各自、春学期の研究テーマを総括し、新たな発展の方法を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、毎週 3 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文のついているもの。

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読む基本的知識の重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞上代文学

＜研究テーマ＞古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群についてー」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

Read the Manyoshu（万葉集），

LIT500B2

日本古代文芸原典研究 B

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を読む。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。各自、万葉集の中から学問的興味を持つ歌人、作品などを選定し、その作品について演習形式で読解を進める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の方法について概説する。
第 2 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 3 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 4 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 5 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 6 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 7 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 8 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 9 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 10 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 11 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 12 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 13 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。

第 14 回 まとめ 万葉集研究の方法と問題点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
予習、復習、課題など、毎週 3 時間以上の学習を必要とする。

【テキスト（教科書）】
万葉集、原文付き

【参考書】
授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】
原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞日本上代文学
＜研究テーマ＞古事記、万葉集の研究
＜主要研究業績＞
『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島—万葉集卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】
Read the Manyoshu（万葉集）。

LIT500B2
日本古代文芸演習 A

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
◆『源氏物語』写本の精読&注釈。
◆鎌倉時代に書写された『源氏物語』「帚木」巻の写本を、読解し、注釈してゆきます。

【到達目標】
◆以下の 5 点を身に付けることが目標です。
A. くずし字（変体仮名）を解読する力
B. 古文を正確に訳出する力
C. 語法や典拠を調査する力
D. 明快なプレゼンテーションをおこなう力
E. 問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、句読点やカギカッコを付し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。
◆それを元に、先行の注釈書と比較しながら、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「帚木」	序文
3	「帚木」	長雨
4	「帚木」	頭中将
5	「帚木」	雨夜の品定
6	「帚木」	左馬頭、藤式部丞
7	「帚木」	律の門の女
8	「帚木」	欠点
9	「帚木」	軽々しい女
10	「帚木」	艶なる女
11	「帚木」	夫婦
12	「帚木」	筆の道
13	「帚木」	物怨じの女
14	「帚木」	指をかむ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
◆「桐壺」巻～「若紫」巻を、よく読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】
阿仏尼本の影印（『東洋大学附属図書館蔵 阿仏尼本は、き木』勉誠出版）を用います。授業時に PDF 版を配布します。

【参考書】
◆以下のテキストのいずれかを座右に置いてください。
◎中嶋尚編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 帚木』（至文堂）
◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）
◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）
◎今泉忠義訳『源氏物語 新装版』1（講談社学術文庫）
◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）
◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】
◆発表の出来 70 %。ディスカッション参加度 30 %。
◆上記【到達目標】の 5 点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

◆専門領域：日本古典文学

◆研究テーマ：平安時代の物語

◆主要研究業績：著書『源氏物語』前後左右』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji " and the manuscripts.

LIT500B2

日本古代文芸演習 B

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

◆『源氏物語』写本の精読&注釈。

◆鎌倉時代に書写された『源氏物語』「帯木」巻の写本を、読解し、注釈してゆきます。

【到達目標】

◆以下の5点を身に付けることが目標です。

A. くずし字（変体仮名）を解読する力

B. 古文を正確に訳出する力

C. 語法や典拠を調査する力

D. 明快なプレゼンテーションをおこなう力

E. 問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、句読点やカギカッコを付し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。

◆それを元に、先行の注釈書と比較しながら、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「帯木」	風流な女
3	「帯木」	なでしこの花
4	「帯木」	常夏の歌
5	「帯木」	賢き女
6	「帯木」	蒜の歌
7	「帯木」	座談の結論
8	「帯木」	光源氏、移動
9	「帯木」	紀伊守の家
10	「帯木」	朝顔の姫君
11	「帯木」	伊予守の後妻
12	「帯木」	小君
13	「帯木」	光源氏、寝所へ
14	「帯木」	なよ竹の心地

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

◆「桐壺」巻～「若紫」巻を、よく読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

阿仏尼本の影印（『東洋大学附属図書館蔵 阿仏尼本は、き木』勉誠出版）を用います。授業時にPDF版を配布します。

【参考書】

◆以下のテキストのいずれかを座右に置いてください。

◎中嶋尚編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 帯木』（至文堂）

◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）

◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）

◎今泉忠義訳『源氏物語 新装版』1（講談社学術文庫）

◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）

◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。

◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

◆専門領域：日本古典文学

◆研究テーマ：平安時代の物語

◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji " and the manuscripts.

LIT500B2

日本中世文芸原典研究 A

佐藤 明浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

藤原定家著『僻案抄』の後撰集注釈をとりあげ、書誌・文献の知識を身につけたうえで、内容を精細に読解し、見出した課題を探究します。

【到達目標】

- ・書誌・文献に関する知識を身につけ、作品の研究を推進する技能を習得する。
- ・調査、考究の過程でみいだした課題について、適切な方法を用いて探究できる。
- ・写本、版本のくずし字を読解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・『僻案抄』の後撰集注釈を読解していきます。宮内庁書陵部鷹司家旧蔵本を底本とし、書誌の特徴をとらえたうえで、各受講者の担当部分を決め、精確に読解するための調査をし、課題について考究した内容を、作成した資料を提示して発表します。それを基に全員で討論します。
- ・はじめに各自の担当箇所を決め、調査・考究の方法、発表の要領を教員が提示します。
- ・発表、討論の内容、提出課題について、教員が講評します。
- ・研究文献を読んで、研究上の課題を共有します。
- ・随時、くずし字を読解する練習を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	調査、考究の方法 担当箇所の決定
第 2 回	『僻案抄』の概要	文献の基礎的情報
第 3 回	『僻案抄』の背景	平安・鎌倉時代の歌学・和歌注釈
第 4 回	『後撰和歌集』諸本の概要	天福本等の実態の確認
第 5 回	後撰 1「ふる雪の」	発表と討論
第 6 回	後撰 214「こよひかく」	発表と討論
第 7 回	後撰 241「けふよりは」	発表と討論
第 8 回	追註「かはやしる」	追註「かはやしる」の講読
第 9 回	後撰 262「秋くれば」	発表と討論
第 10 回	後撰 679「あふ事は」	発表と討論
第 11 回	『僻案抄』の研究	発表と討論
第 12 回	後撰 903「はちすはの」	発表と討論
第 13 回	後撰 1259「いまこむと」	発表と討論
第 14 回	まとめ	春学期の課題整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・各自の担当歌について、十分な調査、考究を行い、あらかじめ発表資料を提示して、発表に臨みます。担当者以外の受講者は、とりあげられる箇所について予習し、提示された資料を読んで、ポイントを把握して、討論に臨みます。
- ・授業でとりあげる研究文献をあらかじめ読んで、要点・問題点をとらえておきます。
- ・くずし字の読解練習をすすめます。
- ・準備学習、復習の時間は、1 回につき平均で 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

配付します。

【参考書】

授業時に提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容 50 %、考察レポート 20 %、討論への参加状況 30 %を総合して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

写本についての知識や読解技能を確認しながらすすめます。

【その他の重要事項】

受講者数によって、担当箇所、回数を調整します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本古典文学

＜研究テーマ＞平安・鎌倉時代の和歌集・歌書

＜主要研究業績＞『院政期和歌文学の基層と周縁』（和泉書院 2020 年）

【Outline and objectives】

This course deals with *Hekiansho*(written by Fujiwarano Sadaie).The aim of this course is to understand the characteristics of Waka literary works and to acquire skills to study them.

LIT500B2

日本中世文芸原典研究B

佐藤 明浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

藤原定家著『僻案抄』の古今集注釈をとりあげ、書誌・文献の知識を身につけたうえで、内容を精細に読解し、見出した課題を探究します。

【到達目標】

- ・書誌・文献に関する知識を身につけ、作品の研究を推進する技能を習得する。
- ・調査、考究の過程でみいだした課題について、適切な方法を用いて探究できる。
- ・写本、版本のくずし字を読解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・『僻案抄』の古今集注釈を読解していきます。宮内庁書陵部鷹司家旧蔵本を底本とし、書誌の特徴をとらえたうえで、各受講者の担当部分を決め、精確に読解するための調査をし、課題について考究した内容を、作成した資料を提示して発表します。それを基に全員で討論します。
- ・はじめに各自の担当箇所を決め、調査・考究の方法、発表の要領を教員が提示します。
- ・発表、討論の内容、提出課題について、教員が講評します。
- ・研究文献を読んで、研究上の課題を共有します。
- ・随時、くずし字を読解する練習を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	調査、考究の方法 担当箇所の決定
第 2 回	『僻案抄』の背景	藤原定家の三代集注釈
第 3 回	『古今和歌集』の受容	『古今和歌集』の諸本と注釈
第 4 回	古今 28「ももちどり」	発表と討論
第 5 回	古今 77「いざさくら」	発表と討論
第 6 回	古今 184「このまより」	発表と討論
第 7 回	『顯注密勘』との関係	研究上の課題
第 8 回	古今 208「わがかどに」	発表と討論
第 9 回	古今 469「ほととぎす」	発表と討論
第 10 回	古今 484「夕ぐれは」	発表と討論
第 11 回	藤原定家の歌学	研究文献の講読
第 12 回	古今 761「あかつきの」	発表と討論
第 13 回	古今 431「をがたまの木」	発表と討論
第 14 回	まとめ	課題の整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・各自の担当歌について、十分な調査、考究を行い、あらかじめ発表資料を提示して、発表に臨みます。担当者以外の受講者は、とりあげられる箇所について予習し、提示された資料を読んで、ポイントを把握し、討論に臨みます。
- ・授業でとりあげる研究文献をあらかじめ読んで、要点・問題点をとらえておきます。
- ・くずし字の読解練習をすすめます。
- ・準備学習、復習の時間は、1 回につき平均で 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

配付します。

【参考書】

授業時に提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容 50 %、考察レポート 20 %、討論への参加状況 30 %を総合して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

写本についての知識や読解技能を確認しながらすすめます。

【その他の重要事項】

受講者数によって、担当箇所、回数を調整します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本古典文学

＜研究テーマ＞平安・鎌倉時代の和歌集・歌書

＜主要研究業績＞『院政期和歌文学の基層と周縁』（和泉書院 2020 年）

【Outline and objectives】

This course deals with *Hekiansho*(written by Fujiwarano Sadaie).The aim of this course is to understand the characteristics of Waka literary works and to acquire skills to study them.

LIT500B2

日本中世文芸演習 A

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では狂言の作品を読んでいく。狂言の作品研究を行なうためには、台本の比較、語釈、作品背景の調査が必要となる。これらを行なうための基礎力をつけるため、祝本と他台本との比較検討を行なう。その上で、作品の典拠・歴史的背景を調査し、作品の素材となったものを分析する。それと同時に類曲の整理も行ない、狂言研究の基礎を学んでいく。

【到達目標】

本講義では、狂言台本の比較の詳細な分析を通して、狂言の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第 2 回	狂言の作品研究概説	主要な作品研究の先行論文を読み、研究手法を概説する。
第 3 回	狂言台本概説①	狂言の作品研究に用いる台本を概説する（各流の台本）。
第 4 回	狂言台本概説②	狂言の作品研究に用いる台本を概説する（各流の台本）。
第 5 回	「したうはうかく」①	担当者による資料分析。
第 6 回	「したうはうかく」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 7 回	「子ぬす人」①	担当者による資料分析。
第 8 回	「子ぬす人」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 9 回	「ぬすむかん」①	担当者による資料分析。
第 10 回	「ぬすむかん」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 11 回	「とひこゑ」①	担当者による資料分析。
第 12 回	「とひこゑ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 13 回	「しんぼち」①	担当者による資料分析。
第 14 回	「しんぼち」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。狂言だけでなく、能・歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%

講義での発言 30%

レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞能楽

＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011 年）「義経の悲運を〈語る〉劇：判官物の能の手法」（『説話文学研究』54号、2019年9月）

【Outline and objectives】

In this lecture, we will read Kyogen works. In order to study Kyogen, it is necessary to compare the scripts, interpret the words, and investigate the background of the works. In order to develop the basic skills to do this, we will compare Iwaibon with other scripts. In addition, we will investigate the sources and historical background of the works, and analyze the materials used in the works. At the same time, students will learn the basics of Kyogen research by organizing similar works.

LIT500B2

日本中世文芸演習 B

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様に天正狂言本と他台本の比較を通しての作品研究を行っていく。春学期からの出席者を考慮し、まず春学期に学んだ狂言の作品研究の基礎を確認した上で、当該資料を用いた作品研究を行っていく。

【到達目標】

本講義では、狂言台本の比較の詳細な分析を通して、狂言の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とするが、それがあ程度身に付いた出席者には他の資料も紹介し、主要な能楽資料に関する知識も広げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行っていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で議論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第2回	「おはか酒」①	担当者による資料分析。
第3回	「おはか酒」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第4回	「くわいちうむこ」①	担当者による資料分析。
第5回	「くわいちうむこ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第6回	「さいのめ」①	担当者による資料分析。
第7回	「さいのめ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第8回	「まんちううり」①	担当者による資料分析。
第9回	「まんちううり」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第10回	「かんつぶて」①	担当者による資料分析。
第11回	「かんつぶて」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第12回	「ぶす」①	担当者による資料分析。
第13回	「ぶす」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第14回	総括	狂言作品研究のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。狂言だけでなく、能・歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%

講義での発言 30%

レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】
専門外の学生にも配慮する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【Outline and objectives】

As in the spring term we will study the work by comparing iwaihon and other scripts. Considering attendees from the spring term, we will first confirm the basics of Kyogen research learned in the fthe spring term and analyze the work using the text.

LIT500B2

日本近世文芸原典研究 A

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期は 18 世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙を読み解く。作品としては草双紙の発展に即して、浮世絵師による画風の変遷も反映した式亭三馬画・作『稗史億説年代記〔くさぞうしこじつけねんだいき〕』（享和 2・1802 年刊）をとりあげ、本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら読解する。最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。簡略な既存の注釈を頼りに、三馬の仕掛けた謎をどこまで読み解けるかに挑戦しよう！

【到達目標】

（１）作品の翻刻を点検し、既存の注釈を批判的に検討しながら読む力をつける。
（２）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

作品の背景や注釈の方についての概説のあと、受講生で担当箇所を決めて、毎週、読解を発表してもらいます。本文の解釈とともに、挿絵の画風の分析も行いましょう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	時代状況と出版界、黄表紙とは
第 2 回	講義 1	作者・画工について
第 3 回	講義 2	注釈の基本・序文を読む
第 4 回	学生の発表	上巻 1
第 5 回	学生の発表	上巻 2
第 6 回	学生の発表	上巻 3
第 7 回	学生の発表	中巻 1
第 8 回	学生の発表	中巻 2
第 9 回	学生の発表	中巻 3
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	補足
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎週、次の場面を確認してきましょう。
発表担当者は既存の翻刻を点検・修正し、語釈・解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】

国立国会図書館・早稲田大学図書館・東京大学霞亭文庫／西尾市岩瀬文庫のデジタルデータを比較検討し、善本を選ぶ。注釈は『江戸の戯作絵本四末期黄表紙集』（社会思想社現代教養文庫 1983 * PDF で配付）を参照する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化

＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作

＜著書＞

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

【共著】

『最後の文人 石川淳の世界』集英社新書（集英社 2021）

『東アジア文化講座 3 東アジアに共有される文学圏』（文学通信 2021）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信 2019）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

LIT500B2

日本近世文芸原典研究 B

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。

【到達目標】

- （1）作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読む力をつける。
- （2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第 2 回	学生の発表	上巻 1
第 3 回	学生の発表	上巻 2
第 4 回	学生の発表	上巻 3
第 5 回	学生の発表	上巻 4
第 6 回	学生の発表	中巻 1
第 7 回	学生の発表	中巻 2
第 8 回	学生の発表	中巻 3
第 9 回	学生の発表	中巻 4
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	下巻 4
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

毎週、次回のテキストを読んでくる。

発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化

＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作

＜近年の論文・その他書き物＞

【論文】

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113 号 2021（査読付）

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020（査読付）
「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（単行本）勉誠出版） 2019

「書籍を模擬する遊び—「見立絵本」にかんする疑問、から—」『京都語文』26号 2018

「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【一般誌】「江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」『歴史 REAL 大江戸の都市力』洋泉社 MOOK 2018

「歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸」『別冊太陽 歌麿決定版』2016

「国芳時代の絵師ビジネス」『芸術新潮 2016年4月号』

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

LIT500B2

日本近世文芸演習 A

高木 元

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である注釈的読解に必要な参考資料群を紹介しつつ、具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見識を育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読し、固有名詞を中心とした語句の注釈が適切に出来るようになる。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけでなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと言う点の解明に及ぶ必要がある。これらの、原テキストに拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

年度始めに受講生の顔ぶれとその専攻する分野を見きわめつつ、採り上げるに相応しいテキストを複数提示する。その後、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第2回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第3回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第4回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第5回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第6回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第7回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第8回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第9回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第10回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第11回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第12回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第13回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第14回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
テキストを読んではくことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないと論じられない。

また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業の進み具合を受講者の理解度にそくして、適宜かえてみる。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本十九世紀文学

＜研究テーマ＞絵入小説史の書誌学的研究

＜主要研究業績＞『江戸読本の研究－十九世紀小説様式攷－』（ぺりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。
https://fumikura.net 参照

【Outline and objectives】

Learn the skills to read and understand Japanese modern literature annotatively.

LIT500B2

日本近世文芸演習 B

高木 元

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見通しを育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読力をつける。参考図書を活用して語句の注釈が適切に出来るようにする。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと云う点の解明に及ぶ必要がある。これらの原本に拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の専攻する分野を見きわめつつ、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第 2 回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第 3 回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第 4 回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第 5 回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 6 回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第 7 回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 8 回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第 9 回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 10 回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第 11 回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 12 回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第 13 回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 14 回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
テキストを読んではくことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないと論じられない。
また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の理解度を見ながら授業の進行速度を調整する。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本十九世紀文学

＜研究テーマ＞絵入小説史の書誌学的研究

＜主要研究業績＞『江戸読本の研究 -十九世紀小説様式攷-』（ぺりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。

<https://fumikura.net> 参照

【Outline and objectives】

Learn the skills to read and understand Japanese modern literature annotatively.

LIT500B2

日本近代文芸原典研究 A

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③「文学」を広く文化学的視野でとらえられるように幅広い知見を身につける。
- ④上記の研究を推進しながら、論文作成へと連続させていくこと。

【到達目標】

上記「授業のテーマ」で設定されていることが、受講者各自の研究テーマに即して実現されること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①各自の研究テーマにそって研究発表をする。
- ②近代文学の研究史上エポックをなした（と思われる）研究書を取り上げ、その研究史上の意味と現在の研究に資する方法論を探る。
- ①②とも発表と討論によって構成される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	本授業（演習）の目的・運営など。
2	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
3	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
4	研究書精読	文学研究の方法探求
5	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
6	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
7	研究書精読	文学研究の方法探求
8	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
9	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
10	研究書精読	文学研究の方法探求
11	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
12	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
13	研究書精読	文学研究の方法探求
14	前期のまとめ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表前提示される対象作品を事前に精読しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

学期初頭に受講生と討議して決定

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（40 %）および討論への参加（40 %）、期末レポート（20%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度よりの担当のため記入事項なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近代文学

＜研究テーマ＞

近代文学の成立期の研究－ 19 世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

＜主要研究業績＞

・「紀久八狂乱—広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『鬘下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ—雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学—『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline and objectives】

See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible.

LIT500B2

日本近代文芸原典研究 B

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③「文学」を広く文化的視野でとらえられるように幅広い知見を身につける。
- ④上記の研究を推進しながら、論文作成へと連続させていくこと。

【到達目標】

上記「授業のテーマ」で設定されていることが、受講者各自の研究テーマに即して実現されること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①各自の研究テーマにそって研究発表をする。
 - ②近代文学の研究史上エポックをなした（と思われる）研究書を取り上げ、その研究史上の意味と現在の研究に資する方法論を探る。
- ①②とも発表と討論によって構成される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	前期からの継続	各自前期の成果を確認
第 2 回	各自のテーマに即した 研究発表	各自の専門領域による発表・全員 討論
第 3 回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第 4 回	各自のテーマに即した 研究発表	各自の専門領域による発表・全員 討論
第 5 回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第 6 回	各自のテーマに即した 研究発表	各自の専門領域による発表・全員 討論
第 7 回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第 8 回	各自のテーマに即した 研究発表	各自の専門領域による発表・全員 討論
第 9 回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第 10 回	各自のテーマに即した 研究発表	各自の専門領域による発表・全員 討論
第 11 回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第 12 回	各自のテーマに即した 研究発表	各自の専門領域による発表・全員 討論
第 13 回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第 14 回	一年間の総括	各自一年間の成果を確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表前提示される対象作品を事前に精読しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各発表者が、その作品の書誌学的考察の上で決定し、全員討議の結果を経て、ゼミ員に周知させる。

【参考書】

学期初頭、さらに毎回、受講生と討議して決定。

【成績評価の方法と基準】

発表（40 %）および討論への参加（40 %）、期末レポート（20 %）。

【学生の意見等からの気づき】

去年度の最後のゼミ時における、総括の成果を踏まえる。このゼミナールの特色から各自の研究領域の独自性を最大限重んじた指導をするために、随時学生からのフィードバックを求めている。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近代文学

＜研究テーマ＞

近代文学の成立期の研究－19世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

＜主要研究業績＞

・「紀久八狂乱-広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『髪下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ-雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学-『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline and objectives】

See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible.

LIT500B2

日本近代文芸演習ⅠA

藤村 耕治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に扱う。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して研究報告としてのレジュメを作成し、発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く緻密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作品の、作家の全業績における位置づけ及び文学史全体における位置づけを明確にし、作家論的な視点と歴史的な視点の双方を導入することによって、より幅広い文学的な視野と知見を身につける。
2. レジュメの作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、最終的にはその成果を学術論文・修士論文にまとめられる高度な文章力・論理構成力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする日本近・現代の作家・評論家・詩人等の作品についてレジュメを作成して発表、他の受講者を交えて討議する形で行う。受講者の人数によって若干異なるが、担当回数は二回程度を目処とする。そのため、取り上げる具体的な作品に関しては、受講者の関心・研究テーマによって決定する。セメスター末には、発表・討議を通しての考察を踏まえた、総括的な成果報告を行う。

上記のように、特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に取り上げるが、必要に応じてそれ以前の文学者についても取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマについて聞く。
第2回	担当者1による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者1による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者2による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第5回	担当者2による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第6回	担当者3による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第7回	担当者3による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第8回	担当者4による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第9回	担当者4による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第10回	担当者5による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第11回	担当者5による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。

- 第12回 担当者6による発表・発表者の研究テーマに即した形で報告①
 第13回 担当者6による発表・討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。報告②
 第14回 各発表担当者による総括 各自の発表・報告・討議に基づいた総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、主題・動機・時代背景・人物・構造・文体等についても目を配りながら、毎回2000字から4000字程度の報告用レジュメを作成する。したがって、発表担当者は準備に5～10時間程度を要することになります。

担当者以外の受講者も、当該作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってこること。単に通り眼を通すというのではなく、担当者と互角に討議し、適確な批評が可能となるように十分な準備をしてこなければならない。また、担当者以外の受講生にも、当該作品に関する小レポートを提出してもらう。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

- 発表・報告時におけるレジュメとプレゼンテーションの内容(40%)
- 総括レポートとしての論文の内容(30%)
- 担当時以外的小レポートの内容(10%)
- 討議の場における積極的な参加態度及び発言(20%)

【学生の意見等からの気づき】

各人の修士論文の一部を構成しようという高度な論文を年間に一本は完成させることを目指せるよう指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学

〈研究テーマ〉特に第二次大戦後の戦後派文学および彼らの文学精神・意識を継承した作家・作品。

〈近年の主要な研究業績〉

- 「小田切秀雄の転向論」(『小田切秀雄の文学論争』 囲む会編、青柿堂、2005)
- 「〈共苦〉する思想 高橋和巳の宗教性」(国文学 解釈と鑑賞 74 巻 2 号、至文堂、2009)
- 「清岡卓行と大連」(『国際日本学研究会叢書 14 多文化共生としての日本研究』 勉誠出版、2012 年刊行予定)
- 「高橋和巳の〈文学〉概念」(日本文学誌要 85 号、2012)

【Outline and objectives】

- The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
- Students present their research results according to their own themes.
- To acquire advanced writing and logical composition skills for master's writing.

LIT500B2

日本近代文芸演習 I B

藤村 耕治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 日本近・現代の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に扱う。
- 受講者は自身の研究テーマに即して研究報告としてのレジュメを作成し、発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く緻密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。

【到達目標】

- 受講者が選択した作品の、作家の全業績における位置づけ及び文学史全体における位置づけを明確にし、作家論的な視点と歴史的な視点の双方を導入することによって、より幅広い文学的な視野と知見を身につける。
- レジュメの作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、最終的にはその成果を学術論文・修士論文にまとめられる高度な文章力・論理構成力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする日本近・現代の作家・評論家・詩人等の作品についてレジュメを作成して発表、他の受講者を交えて討議する形で行う。受講者の人数によって若干異なるが、担当回数は三回程度を目処とする。そのため、取り上げる具体的な作品に関しては、受講者の関心・研究テーマによって決定する。セメスター末には、発表・討議を通しての考察を踏まえた、総括的な成果報告を行う。

上記のように、特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に取り上げるが、必要に応じてそれ以前の文学者についても取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマについて聞く。
第2回	担当者1による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者1による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者2による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第5回	担当者2による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第6回	担当者3による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第7回	担当者3による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第8回	担当者4による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第9回	担当者4による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第10回	担当者5による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第11回	担当者5による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。

- 第12回 担当者6による発表・報告① 発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
- 第13回 担当者6による発表・報告② 討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
- 第14回 各発表担当者による総括 各自の発表・報告・討議に基づいた総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、主題・動機・時代背景・人物・構造・文体等についても目を配りながら、毎回 2000 字から 4000 字程度の報告用レジュメを作成する。したがって、発表担当者は準備に 5～10 時間程度を要することになります。

担当者以外の受講者も、当該作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行って行くこと。単に通り眼を通すというのではなく、担当者と互角に討議し、適確な批評が可能となるように十分な準備をしていく必要がある。また、担当者以外の受講生にも、当該作品に関する小レポートを提出してもらう。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメとプレゼンテーションの内容 (40%)
2. 総括レポートとしての論文の内容 (30%)
3. 担当時以外的小レポートの内容 (10%)
4. 討議の場における積極的な参加態度及び発言 (20%)

【学生の意見等からの気づき】

各人の修士論文の一部を構成しうような高度な論文を年間に一本は完成させることを目指せるよう指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学

〈研究テーマ〉特に第二次大戦後の戦後派文学および彼らの文学精神・意識を継承した作家・作品。

〈近年の主要な研究業績〉

- ①「〈共苦〉する思想 高橋和巳の宗教性」(国文学 解釈と鑑賞 74 巻 2 号、至文堂、2009)
- ②「清岡卓行と大連」(『国際日本学研究会叢書 14 多文化共生としての日本研究』勉誠出版、2012)
- ③「高橋和巳の〈文学〉概念」(日本文学誌要 85 号、2012)
- ④「国民文学論争と歴史社会学派」(近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会共編「近藤忠義 人と学問 第二集・第三集合併号」2012)

【Outline and objectives】

- 1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
- 2.Students present their research results according to their own themes.
- 3.To acquire advanced writing and logical composition skills for master's writing.

LIN500B2

日本語学原典研究 B

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第3回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第4回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第7回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第8回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第11回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第12回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマや課題について、まずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

秋学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

教室授業にしてほしい。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

＜研究テーマ＞

『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究

＜主要研究業績＞

『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005 年）

『万葉異説』（森話社、2011 年）

『沖縄古語の深層 [増補版]』（森話社、2014 年）

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

LIN500B2

日本語学演習 I A

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、前半は認知言語学（認知意味論）の基本的な考え方を学ぶためにテキストを皆で読み進める。受講生は、要約レポートを毎週作成し、授業開始時に提出する。その後、基本概念についての質疑応答、疑問点についての討論を行う。後半は、テキストで学んだことが実際の言語研究でどのように利用されているのかを学ぶために、意味について分析している学術論文を読む。受講生は、論文の要約レポートを毎週作成し、授業開始時に提出する。授業内容は、前半と同じように進める。

【到達目標】

テキストに出てくる認知言語学および言語学一般の基礎概念・用語を理解するとともに、具体例を挙げながら他者にそれらの概念を説明できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

▼前半の数回はテキストを皆で読み進める。まず授業開始時に要約レポートを提出し、その後、その章の内容に関する確認の質疑応答を行い、最後に疑問点や問題点についてディスカッションを行う。後半の数回は、前半で学習した事項が分析に利用されている学術論文を毎週 1 本読むが、授業の進め方は前半と同じである。

▼必要に応じて、ZOOM を用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	学習の仕方、要約の書き方、各種参考資料について	要約レポートの書き方などをレクチャーする
第 2 回	第 1 章「はじめに」と第 2 章「認知言語学」	受講生による発表・討論
第 3 回	第 3 章「認知メタファー理論」	受講生による発表・討論
第 4 回	第 4 章「新体制メタファー論」	受講生による発表・討論
第 5 回	第 5 章「イメージメタファー」と第 6 章「水のメタファー」	受講生による発表・討論
第 6 回	第 7 章「擬人のメタファー」と第 8 章「線と移動のメタファー」	受講生による発表・討論
第 7 回	第 9 章「因果のメタファー」と第 10 章「現実のメタファー」	受講生による発表・討論
第 8 回	第 11 章「可能性のメタファー」と第 12 章「希望のメタファー」	受講生による発表・討論
第 9 回	第 13 章「問題のメタファー」と第 14 章「善悪のメタファー」	受講生による発表・討論

- 第10回 論文レポート1（空間 受講生による発表・討論
のメタファーに関する
もの）
- 第11回 論文レポート2（時間 受講生による発表・討論
のメタファーに関する
もの）
- 第12回 論文レポート3（因果 受講生による発表・討論
のメタファーに関する
もの）
- 第13回 論文レポート4（水の 受講生による発表・討論
メタファーに関するも
の）
- 第14回 まとめ 本授業の総括をするとともに、期
末レポートの所注意を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【宿題】

- (1) テキストの該当箇所もしくは課題論文の要約レポート（A4 用紙一枚）。毎週、授業開始時に提出する。（1 時間程度）
- (2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。（2 時間程度）
- (3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく。（1 時間程度）

【テキスト（教科書）】

『日本語のメタファー』（鍋島弘治朗著、くろしお出版、3300 円＋消費税）

【参考書】

『認知言語学大事典』★★★（朝倉書店）
 『意味論キータム事典』★★（開拓社）
 『新編 認知言語学キーワード事典』★（研究社）
 『ことばの認知科学事典』★（大修館書店）
 『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
 『言語学大辞典』（三省堂）
 『日本語文法大辞典』（明治書院）
 『日本語学研究事典』（明治書院）
 『語用論キータム事典』（開拓者）
 『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社）
 『認知意味論：言語から見た人間の心』（ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店）
 『認知意味論のしくみ』（初山洋介著、研究社）
 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
 『概念化と意味の世界 認知意味論のアプローチ』（深田智・仲本康一著、研究社）
 『認知言語学 基礎から最前線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

宿題 (1)「要約レポート」(40 %)
 宿題 (2)(3) 質疑応答・ディスカッションへの参加態度 (40 %)
 学期末レポート (20 %)

【学生の意見等からの気づき】

論文を書くための基礎になる知識を中心に教えて欲しいとの要望があったので、知識と論文レビューの両方を行うこととした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）

「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）

『構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011 年）

【Outline and objectives】

To understand the basic concepts of cognitive linguistics, we read the textbook for cognitive linguistics(semantics) and academic papers on (cognitive) semantics. Students are supposed to submit a summary of the chapter(or a paper) that we are to read on the day.

LIN500B2

日本語学演習 I B

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、(認知)言語学的な研究手法を学ぶことができる雑誌記事・学術論文を読む。論文ごとに担当者を決め、担当者には、論文の要旨を分かりやすくレジュメにまとめたものを授業で配付し、口頭でレポートしてもらう。その後、質疑応答・ディスカッションを行い、論文の分析手法について批判的に検討する。

【到達目標】

- (1) 論文における主張と根拠を的確に理解し、分かりやすく要約してレポートができるようになる。
- (2) 言語学の諸概念が言語分析においてどのように応用されているのかを理解し、具体例を挙げながら、それらについて説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。発表者はレジュメを作って、論文の内容を分かりやすく伝える。それ以外の受講者は、論文の不明点や欠点について容赦なく質問し、発表者とひたすらディベートを行う。最後に皆でその論文の欠点と改善点について考える。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文レポートの方法について	論文の要約の仕方を学ぶ
第2回	論文レポート(1)	動詞の多義について
第3回	論文レポート(2)	形容詞の多義について
第4回	論文レポート(3)	接続詞の多義について
第5回	論文レポート(4)	言いさし文と文法化について
第6回	論文レポート(5)	モダリティ副詞と文法化について
第7回	論文レポート(6)	接続詞の文法化について
第8回	論文レポート(7)	談話標識について
第9回	論文レポート(8)	若者言葉と対話表現について
第10回	論文レポート(9)	待遇表現について
第11回	論文レポート(10)	活用の変化について
第12回	論文レポート(11)	新語の発生について
第13回	論文レポート(12)	コーパスについて
第14回	まとめ	総括をする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【宿題】

- (1) 課題論文の要約レポート（A4用紙一枚）。毎週、授業開始時に提出する。
- (2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。（2時間程度）
- (3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（2時間程度）。

【テキスト（教科書）】

使用しない。（必要に応じて、教員が資料を配付する。）

【参考書】

- 『認知言語学大事典』（朝倉書店）
 『意味論キーワード事典』（開拓社）
 『新編 認知言語学キーワード事典』（研究社）
 『ことばの認知科学事典』（大修館書店）
 『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
 『言語学大辞典』（三省堂）
 『日本語文法大辞典』（明治書院）
 『日本語学研究事典』（明治書院）
 『語用論キーワード事典』（開拓社）
 『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社）
 『認知意味論：言語から見た人間の心』（ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店）
 『認知意味論のしくみ』（初山洋介著、研究社）
 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
 『概念化と意味の世界 認知意味論のアプローチ』（深田智・仲本康一郎著、研究社）
 『認知言語学 基礎から最前線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

- 宿題(1) 「要約レポート」(40%)
 宿題(2)(3) 質疑応答・ディスカッションへの参加態度(40%)
 学期末レポート(20%)

【学生の意見等からの気づき】

論文の書き方が具体的に理解できた、というコメントが多かったのも、今年度実際に多くの論文を取り上げる予定である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年)

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年)

「接続詞ケドの接続的意味」(『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年)

『構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ』(共著、研究社、2011年)

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

LNG500B2

日本語学演習Ⅱ A

王 安

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日中対照研究に関する重要なトピックを中心に、重要文献・論文を精読し、日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。

【到達目標】

- 1、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
- 2、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象や問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
- 3、対照研究の研究方法を用いて自分の興味ある言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文 1 本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ (A4 サイズ 3～4 枚／一人で担当する場合は 6 枚) を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく (例えば質問リストを作成するなど)。

また、春学期の授業は Zoom によるオンライン形式で行う。授業計画について変更がある場合、学習支援システムでまたは前回の授業で知らせる。本授業の開始日は 4 月 12 日 (月) とし、この日までに授業ガイダンスの資料などを学習支援システムで提示するのでご参照ください。

なお、授業のフィードバックは随時授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第 2 回	論文解説 (その 1)	論文講読：吉永 (2008) 「心理動詞の動詞的性質について」
第 3 回	論文解説 (その 2)	論文 (吉永 2008) の内容に関して議論を行う。
第 4 回	論文解説 (その 3)	論文講読：玉村 (1997) 「日本語と中国語における音象徴語」
第 5 回	論文解説 (その 4)	論文講読：荒川 (1997) 「日本語名詞のトロロ性」
第 6 回	論文解説 (その 5)	論文講読：楊 (2018) 「現代中国語の人称代名詞 “人家” について」
第 7 回	論文解説 (その 6)	論文 (玉村 1997、荒川 1997、楊 2018) の内容に関して議論を行う。
第 8 回	論文解説 (その 7)	論文講読：小野 (2013) 「中国語における連体修飾語の意味機能」
第 9 回	論文解説 (その 8)	論文 (小野 2013) の内容に関して議論を行う。
第 10 回	論文解説 (その 9)	論文講読：王 (2016) 「日本語と中国語の受動文に見られる類似点と相違点」
第 11 回	論文解説 (その 10)	論文 (王 2016) の内容に関して議論を行う。

第 12 回	論文解説 (その 11)	論文講読：楊 (2018) 「日中受益表現と所有構造の対照研究」
第 13 回	論文解説 (その 12)	論文 (楊 2018) の内容について議論を行う。
第 14 回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ (最終レポートにするテーマ) について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。
 - 2、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する (論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たり A4 サイズ 3～4 枚、一人で発表する場合は 6 枚以内)
 - 3、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく (例えば質問リストを作成するなど)
- 本授業の準備学習・復習時間は、各 10～12 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】

- <中国語学>
○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕 監訳 2004 三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 商務印書館
『現代中国語文法総覧』劉月華他 1996 くおしお出版
『現代漢語專題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 北京大学出版社
『語法講義』朱德熙 1982 商務印書館
『語法問答』朱德熙 1986
『現代漢語語法研究教程』陸倸明 2005 北京大学
『現代中国語用法辞典』呂叔湘 1983 現代出版
『現代漢語八百詞』呂叔湘 2008 商務印書館 (虚詞が中心)
『漢語基本知識 (語法篇)』施春宏 2011 北京語言大学出版社
『中国語学概論』王占華他 2004 駿河台出版社
<対照言語学関係参考文献>
井上優 (2002) 『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究 X, 国立国語研究所
石綿敏雄 高田誠 (1990) 『対照言語学』桜楓社
生越直樹 (2002) 『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編 (1997) 『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
寺村秀夫 (1982) 「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学 10 外国語との対照』明治書院
中川正之 (1997) 「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
張 黎 (2012) 『漢語意合語法研究』白帝社
張麟生 (2007) 「言語研究のための対照研究について—日本国内の事例を中心に—」『言語文化学研究—言語情報編 2』1-14. 大阪府立大学。

<中国語教育参考書>

- 『中国語文法教室』杉村博文 1994 大修館書店
『中国語の文法書』相原茂 他 1996 同学社
『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他 高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート (10%) + 論文内容発表 (20%) + 質問・発言 (20%) + 期末レポート (50%) で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>
対照言語学、現代中国語文法、認知言語学
<研究テーマ>
形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究
<主要研究業績>

「中国語の＜主観性＞の再考察―使役表出文を例として―」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社
 「感情の普遍性とその言語化―感情表現の類型論的研究に向けて―」『ことばのパースペクティヴ』（中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社
 第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版
 「感情表現における日中対照研究―感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して―」『言語研究の諸相』 pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline and objectives】

The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.

LIN500B2

日本語学演習ⅡB

王 安

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

引き続き日中対照研究に関する重要なトピックを中心に、重要文献・論文を精読し、日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。また、学期後半の授業では各自の研究について発表をしてもらい、議論を行う。

【到達目標】

- 1、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
- 2、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象、問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
- 3、対照研究の研究方法を用いて自分の興味持つ言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文1本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ（A4サイズ3～4枚／一人で担当する場合は6枚）を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく（例えば質問リストを作成するなど）。なお、授業のフィードバックは随時授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	論文解説（その1）	論文講読：大河内（1997）「日本語と中国語の同形語」
第3回	論文解説（その2）	論文（大河内 1997）の内容に関して議論を行う。
第4回	論文解説（その3）	論文講読：役割語関連
第5回	論文解説（その4）	論文講読：認識思考動詞関連
第6回	論文解説（その5）	論文講読：中国語受動文関連
第7回	論文解説（その6）	以上のトピックについて議論を行う
第8回	論文解説（その7）	論文講読：中国語呼称語について
第9回	論文解説（その8）	論文講読：中国語時間表現・空間表現について
第10回	論文解説（その9）	論文講読：日本語の文末表現について
第11回	論文解説（その10）	以上のトピックについて議論を行う。
第12回	研究発表（その1）	グループ1発表と議論
第13回	研究発表（その2）	グループ2発表と議論
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ（最終レポートにするテーマ）について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。

2、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する
(論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たり A4 サイズ 3～4 枚、一人で発表する場合は 6 枚以内)
3、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(例えば質問リストを作成するなど)
本授業の準備学習・復習時間は、各 10～12 時間を標準とします。

【テキスト(教科書)】

特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】

＜中国語学＞

○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕 監訳 2004 三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 商務印書館

『現代中国語文法総覧』劉月華他 1996 くおしお出版

『現代漢語專題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 北京大学出版社

『語法講義』朱德熙 1982 商務印書館

『語法問答』朱德熙 1986

『現代漢語語法研究教程』陸俊明 2005 北京大学

『現代中国語用法辞典』呂叔湘 1983 現代出版

『現代漢語八百詞』呂叔湘 2008 商務印書館(虚詞が中心)

『漢語基本知識(語法篇)』施春宏 2011 北京語言大学出版社

『中国語学概論』王占華他 2004 駿河台出版社

＜対照言語学関係参考文献＞

井上優(2002)『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究 X, 国立国語研究所

石綿敏雄 高田誠(1990)『対照言語学』桜楓社

生越直樹(2002)『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編(1997)『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

寺村秀夫(1982)「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学 10 外国語との対照』明治書院

中川正之(1997)「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

張 黎(2012)『漢語意合語法研究』白帝社

張麟声(2007)「言語研究のための対照研究について—日本国内の事例を中心に—」『言語文化研究—言語情報編 2』1-14. 大阪府立大学.

＜中国語教育参考書＞

『中国語文法教室』杉村博文 1994 大修館書店

『中国語の文法書』相原茂 他 1996 同友社

『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他 高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート(40%) + 論文内容発表(40%) + 質問・発言(20%)
で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

対照言語学、現代中国語文法、認知言語学

＜研究テーマ＞

形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究

＜主要研究業績＞

「中国語の＜主観性＞の再考察—使役表出文を例として—」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社

「感情の普遍性とその言語化—感情表現の類型論的研究に向けて—」『ことばのパースペクティヴ』(中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社

第 8 章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版

「感情表現における日中対照研究—感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して—」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline and objectives】

The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.

LIN500B2

日本語学特講 A

前田 直子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語文法の多様性について、具体例の分析を通して学ぶ。テキストとして新書を使用し、日本語力全般の向上、読解力、書く能力、口頭発表能力の鍛錬も行う。

【到達目標】

- ・現代日本語の多様性について深く理解することができる。
- ・日本語のことばの地域差について理解することができる。
- ・日本語の語用論的な特徴について理解することができる。
- ・日本語の運用の全国的な多様性について理解することができる。
- ・日本語の地域差の歴史的変化を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、テキストの内容についての学生の発表、ディスカッション、それらに関する講義を通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期		
回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	この授業で学ぶこと、授業の進め方について説明し、担当を決める。
第 2 回	序章 ものの言い方にも地域差がある	日本人のものの言い方について「個性」ではなく「地域差」が多分に見られることを学ぶ。
第 3 回	第 1 章 口に出すか出さないか	おしゃべりか無口か、挨拶をするかしないか、といった言語行動に地域差が見られることを学ぶ。
第 4 回	第 2 章 決まった言い方をするかしないか（前半）	挨拶や喧嘩の場面での地域差（方言差）を学ぶ。
第 5 回	第 2 章 決まった言い方をするかしないか（後半）	言語行動に「型」を持つ地域（方言）と持たない地域（方言）があることを学ぶ。
第 6 回	第 3 章 細かく言い分けるかどうか	場面ごとに細かく言い分けるかどうか、という言語行動に地域差が見られることを学ぶ。
第 7 回	第 4 章 間接的に言うか直接的に言うか	相手に対し、間接的に言うか直接的に言うか、という言語行動に地域差が見られることを学ぶ。
第 8 回	第 5 章 客観的に話すか主観的に話すか	驚きや喜びなどのような主観的なことがらをどのように表現するかに地域差が見られることを学ぶ。
第 9 回	第 6 章 言葉で相手を気遣うかどうか	敬語を中心としたさまざまな気遣いを表す言語表現や言語行動に地域差が見られることを学ぶ。
第 10 回	第 7 章 会話を作るか作らないか	ボケとツッコミに代表される話術・会話の構成に地域差が見られることを学ぶ。
第 11 回	第 8 章 ものの言い方の発想法	第 1 章から第 7 章までをまとめ、言語行動の地域差を確認する。
第 12 回	第 9 章 発想法の背景を読み解く	社会環境の在り方が発想法と言語環境の様相に影響することを学ぶ。

第 13 回 第 10 章 発想法はどのように生まれ、発達するか

第 14 回 終章 ものの言い方を
見る目、および、本講義のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、プレゼンテーションの準備をします。担当者以外の学生は、テキストを読み、質問項目を考えることを宿題とします。本講義の準備学習および復習（宿題）等の時間はそれぞれ 2 時間を標準とします。（前年度の受講生の平均時間）

【テキスト（教科書）】

小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言い方西東』岩波新書、780 円（＋税）

【参考書】

授業時に章ごとに指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・授業でのプレゼンテーション：20 %
- ・毎回の宿題・小レポート：65 %
- ・最終レポート：15 %

【学生の意見等からの気づき】

教員の講義から始めるのではなく、学生のプレゼンテーションとディスカッションから始める授業は負担が大きく、最初は準備に長い時間がかかりますが、毎回「やってよかった」「だんだん短い時間で準備ができるようになった」との意見が出ていますので、ぜひ積極的に取り組んでほしいと思います。また、学生の課題の文章中に見られる日本語の誤用について解説をすることが好評を得ていますので、今学期もみなさんの希望があれば、実施したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>現代日本語文法

<研究テーマ>複文（条件文、および原因・理由文）の記述的研究、日本語教育文法

<主要研究業績>『ように』の意味・用法』笠間書院（2006）、『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版（2009）庵功雄・日高水穂・前田直子・山田敏弘・大和シゲミ（2020）『やさしい日本語のしくみ（改訂版）』くろしお出版、井島正博（編著）（2020）『現代語文法概説』朝倉書店

【Outline and objectives】

In this class, students learn the diversity of modern Japanese through analysis of concrete examples. Using a paperback pocket edition as a textbook, students can improve their Japanese skills and train their reading comprehension, writing, and oral presentation ability as well.

LIN500B2

日本語学特講 B

前田 直子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語の音韻・語彙・文法・表現に関する変化の様相を、具体例の分析を通して学ぶ。テキストとして新書を使用し、日本語力の向上、読解力および口頭発表能力の鍛錬も行う。

【到達目標】

- ・現代語に特徴的に見られる「新しい表現」について正確な理解を深めることができる。
- ・現代語の標準的な音韻・語彙・文法・表現について理解することができる。
- ・言語変化の様相について、正しく理解し、説明することができる。
- ・ことばの変化と社会の変化について、自分なりに考察する力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、テキストの内容についての学生の発表、ディスカッション、それらに関する教員からの講義を通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	この授業で学ぶこと、授業の進め方について説明し、担当を決める。
第 2 回	I ラ抜きことばの背景	ラ抜きことばとは何か、どのように広まったのか、変化の理由について学ぶ。
第 3 回	I ラ抜きことばの背景	ラ抜きことばの文法的な位置づけ、動詞の活用における意義について学ぶ。
第 4 回	II 「じゃん」の来道	「じゃん」という文末表現の地理的分布と歴史的な変化の過程について学ぶ。
第 5 回	III 簡略化の動き（前半）	「ちゃった」「わかんない」などの縮約や音便に関わる音韻変化と原理について学ぶ。
第 6 回	III 簡略化の動き（後半）	「違って」「みたく」のような品詞と活用形の齟齬に見られる現代語の変化について学ぶ。
第 7 回	IV 東京ことばの底流（前半）	「うざったい」「やっぱし」などの東京ことばに見られる新しい語彙の変化の過程について学ぶ。
第 8 回	IV 東京ことばの底流（後半）	方言から標準語に採用された語彙について、その変移のメカニズムを学ぶ。
第 9 回	V 新しい方言の広がり（前半）	東日本・西日本に見られる新しい方言の出現について学ぶ。
第 10 回	V 新しい方言の広がり（後半）	「新方言」と呼ばれる新しい方言について学ぶ。
第 11 回	VI 敬語の最前線	「デス」「(ラ)レル」敬語に見られる新たな敬語の形態について学ぶ。

第 12 回	VII 気になる？ 口調（前半）	ガ行鼻濁音の衰退や専門家アクセントなど、日本語の新たな音韻変化について学ぶ。
第 13 回	VII 気になる？ 口調（前半）	半疑問イントネーションをはじめとする、日本語の新たなパラ言語情報の変化について学ぶ。
第 14 回	VIII ことばの変化のとりえ方、および、本講義のまとめ	テキストを振り返り、本講義で学んだこと、学ぶべきことを整理する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、プレゼンテーションの準備をします。担当者以外の学生は、テキストを読み、質問項目を考えることを宿題とします。本講義の準備学習および復習（宿題）等の時間はそれぞれ2時間を標準とします。（前年度の受講生の平均時間）

【テキスト（教科書）】

井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』岩波新書、800 円＋税

【参考書】

- ・授業時に章ごとに指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・授業でのプレゼンテーション：20 %
- ・毎回の宿題・小レポート：65 %
- ・最終レポート：15 %

【学生の意見等からの気づき】

教員の講義から始めるのではなく、学生のプレゼンテーションとディスカッションから始める授業は負担が大きく、最初は準備に長い時間がかかりますが、毎回「やってよかった」「だんだん短い時間で準備ができるようになった」との意見が出ていますので、ぜひ積極的に取り組んでほしいと思います。また、学生の課題の文章中に見られる日本語の誤用について解説をすることが好評を得ていますので、今学期もみなさんの希望があれば、実施したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>現代日本語文法

<研究テーマ>複文（条件文、および原因・理由文）の記述的研究、日本語教育文法

<主要研究業績>『「ように」の意味・用法』笠間書院(2006)、『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版(2009)、庵功雄・日高水穂・前田直子・山田敏弘・大和シゲミ(2020)『やさしい日本語のしくみ（改訂版）』くろしお出版、井島正博(編著)(2020)『現代語文法概説』朝倉書店

【Outline and objectives】

In this class, students learn the new change of pronunciation, vocabulary, grammar and expressions of modern Japanese. Using a paperback pocket edition as a textbook, students will also improve their Japanese language skills and improve their reading, writing and oral presentation ability as well.

LIT500B2

沖縄文芸史 A

福 寛美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・琉球王国初の文字資料『おもろさうし』に親しむ。
- ・琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読む。
- ・また簡単な発表を通し、神歌や口頭伝承への理解を深める。
- ・琉球文学の古典に親しむ。

【到達目標】

- ・『おもろさうし』はおもろと称する神歌を集成した冊子である。おもろは日本本土のどのような歌謡とも似ていない。その世界観、そして神霊観を知ることが目的とする。
- ・また琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読み、その説話に影響を与えたと考えられる事象の考察も目的とする。
- ・琉球文学の古典に親しむことを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・講義形式と演習形式をまぜて行う。
- ・講義をした後、講義の内容にかかわる事象を学生が調べ発表する、という形をとる。
- ・調べものは琉球・沖縄に関する基本的な文献（辞典など）を使う程度とする。
- ・対面形式の授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷺の用例を読む 1	おもろの読み方を知り、おもろ世界の鷺の用例を読む。
第 2 回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷺の用例を読む 2	おもろ世界の鷺の用例を読んでいく。
第 3 回	第 1 回、第 2 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球・沖縄の文学や民俗に関する辞典の記述を読み、簡単に発表する。
第 4 回	おもろ世界の鷺の霊能、鷺のつく地名を考察する	おもろ世界の鷺は霊能ある存在とされている。そのことを考察していく。
第 5 回	鷺、そして鷺羽には戦勝の霊力があるとされた。そのことを考察する	おもろ世界の鷺、そして鷺羽の用例のうち、戦勝と関わる用例をみていく。
第 6 回	第 4 回、第 5 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『おもろさうし』の研究書で鷺の用例を考察したものを読み、簡単に発表する。
第 7 回	おもろ世界の船と猛禽類のダブルイメージのおもろを読む	おもろ世界では船が猛禽類とダブルイメージされることがある。その用例を読んでいく。
第 8 回	琉球船は実際に猛禽類と重ね合わされている。そのことを考察する	琉球船には猛禽類の目玉模様が付けられていた。その意味を考察していく。

第 9 回	第 7 回、第 8 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球船の絵図は残っており、インターネットでも検索できる。その絵図、またおもろについて調べ、簡単に発表する。
第 10 回	『遺老説伝』を知る	琉球の口頭伝承を集成した『遺老説伝』について学び、鷺羽の説話を読む。
第 11 回	鷺のイメージを考察する	おもろ世界の鷺のイメージ形成に関与した、と思われる神話を読む。また矢羽根として珍重された鷺の尾羽について学ぶ。
第 12 回	第 10 回、第 11 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『遺老説伝』の現代語訳を読む、またインターネットで読める文献を読み、簡単に発表する。
第 13 回	鳥の墓の伝承、現代の八重山諸島で愛される「鷺之鳥節」について考察する	多良間（たらま）島の鳥の墓の伝承、現代も愛される「鷺之鳥節」とおもろ世界の鷺を比較する。
第 14 回	春学期の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	主に第 13 回の講義に関わる事象を簡単に調べ、発表し、春学期をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・『火山と竹の女神』（教科書）の「おもろ世界の鷺」の部分を読む。
- ・授業支援システムにおもろの読み方、「おもろ世界の鷺」に関わる事柄を記したプリントをアップするので、あわせて読む。
- ・大学の沖縄文化研究所にはおもろ、ほか琉球文学に必要な文献が揃っているので、発表する時はそこで辞書を引いたり、参考文献を読んだりする。
- ・学習時間は各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】

- ・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021 年）
- ・（なお 2021 年 3 月末～4 月初旬に出版予定のため、価格は未定）

【参考書】

- ・『喜界島・鬼の海域』（福寛美、新典社、2008 年）
- ・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（福寛美、森話社、2013 年）
- ・『ぐすく造営のおもろ』（福寛美、新典社、2015 年）
- ・『奄美群島おもろの世界』（福寛美、南方新社、2018 年）

【成績評価の方法と基準】

- ・期末試験は、問題を複数提示し、2 問を選んでそれぞれ 400 字以上記述することとする。
- ・平常点に含まれる、出席回数、発表への積極性も評価基準とする。
- ・期末試験 70%、平常点 30% で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

担当者は琉球文学のほか、民俗学、神話学も専攻している。そのため、『おもろさうし』以外の学生の関心に応えることも可能である。学生からの申し出があった場合、『おもろさうし』のほか、シャーマン、神話なども積極的に授業で対応していきたい。過去の授業では、学生からの申し出によってシャーマンについて述べた。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムに副教材をアップするので、それを参照しながら受講することが望ましい。

【その他の重要事項】

春学期、秋学期ともに同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
琉球文学（『おもろさうし』）
民俗学（南西諸島のシャーマン）
神話学（日本神話、琉球神話）

【研究テーマ】

＜研究テーマ＞
現在の研究テーマの中心は南西諸島の神霊観である。また民俗学的関心としては、風が悪霊そのものを表現する事例であり、「悪霊の風」について考察している。

【主要研究業績】

＜主要研究業績＞

『火山と竹の女神』（七月社、2021 年）

『新うたの神話学』（新典社、2020 年）

『奄美群島おもろの世界』（南方新社、2018 年）

『歌とシャーマン』（南方新社、2015 年）

【主要研究業績】

『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015 年）

『うたの神話学』（森話社、2014 年）

『ユタ神誕生』（南方新社、2013 年）

『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013 年）

『夜の海、永劫の海』（新典社、2011 年）

【主要研究業績】

『琉球の恋歌』（新典社、2010 年）

『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008 年）

その他

『奄美三少年 ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017 年）の監修

【Outline and objectives】

The Omoro Soshi is the first written compilation of sacred songs and poems collected by Ryukyu kingdom. The Ryukyuan folklores in the Irousetsuden and the Okinawan cultural background may have affected the development of its oral traditions. In this course, you will learn the Ryukyuan sacred songs and literature are related to the cultures of surrounding areas and developed their own unique styles. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings.

LIT500B2

沖縄文芸史 B

福 寛美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・琉球文学・民俗を考察する際には南九州（薩摩）や薩南の島々についてよく知る必要がある。・古代日本の神話において、南九州を重視する箇所がある。
- ・そのことを考察し、沖縄島を中心とする南西諸島への理解を深めるようつとめる。

【到達目標】

- ・日本神話の従来の研究とは別の視点で神話を考察することにより、見えてくるものは多い。そのことを学ぶ。
- ・日本神話を火山や噴火という視点で考察する研究はあまり見られなかった。しかし、火山列島の日本で古代の噴火は神の仕業とされていた。そのことに注目し、新たな知見を得る。
- ・神話のコノハナノサクヤビメと『竹取物語』のカグヤヒメを比較検討する。
- ・日本語のヨ（世・代・節）は南西諸島の祭祀においても重要な存在である。またヨは世界観や時間意識を表現する語でもあるので、そのことを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・講義を数回した後、学生が講義に関わる事象について簡単な発表をする、という形をとる。
- ・講義と演習の混合形式で授業を進める。
- ・対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	噴火・火山の女神	古代における火山の噴火と、火山の女神とされるコノハナノサクヤビメについて考察する。
第 2 回	コノハナノサクヤビメの行動	コノハナノサクヤビメが天上のアマテラス同様の行動をとったり、隼人の女神らしく振舞ったりすることを考察する。
第 3 回	ヨ（節）	ヨが竹の節を意味する事例を考察し、『竹取物語』のカグヤヒメがそこにいた意義を考察する。
第 4 回	学生の発表	第 1～3 回の講義の中で関心のある箇所を調べ、簡単に発表する。辞書を引く、参考文献の粗筋を紹介する、などの発表をする。
第 5 回	ヨと輝き・カグヤヒメのカグ	カグヤヒメは竹の節の間におり、ヨ（節）は輝いていた。カグヤヒメと香具山、火の神カグツチを比較検討する。
第 6 回	影（カゲ）	カグと関わるカゲ（影）は霊力や魂、そして光とも結びつく語である。そのことを考察する。
第 7 回	隼人と畿内	隼人は畿内に移住し、その痕跡は考古学的事象、地名などに残っている。そのことを考察する。
第 8 回	学生の発表	第 4～7 回の講義の中で、学生が興味を持った箇所について発表する。

発行日：2021/5/1

- 第9回 コノハナノサクヤビメ・ナヨタケノカグヤヒメ
コノハナノサクヤビメとカグヤヒメが神話的に極めて興味深い対応をしていることを考察する。
- 第10回 富士山
コノハナノサクヤビメは富士山の女神とされている。その意義を考察する。
- 第11回 隼人と水の献上
隼人は朝廷で水を献上する役割を担っていた。そのことの意義を考察する。
- 第12回 日向出身の皇妃
日本古代、日向（現在の宮崎県）出身、つまり隼人の女性が皇妃になったことが語られる。そのことの意義を考察する。
- 第13回 隼人と狗吠え（いぬほえ）
隼人は魔を祓うため狗吠えという特殊な声を出す役割を担っていた。そのことを考察する。
- 第14回 学生の発表
第9～13回の講義で学生が興味を持った箇所を調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・『火山と竹の女神』の「火山と竹の女神」をよく読むこと。
- ・教科書の理解を助けるため、学習支援システムにプリントをアップするので、プリントもあわせて読むこと。
- ・参考文献、インターネットで読める参考文献を指示するので、それらも読むこと。
- ・学習時間については、各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】

- ・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021年）
- （2021年3月末～4月初めに刊行予定のため、価格は未定）

【参考書】

- ・『夜の海、永劫の海』（福寛美、新典社、2011年）
- ・『うたの神話学』（福寛美、森話社、2014年）
- ・『新うたの神話学』（福寛美、新典社、2020年）

【成績評価の方法と基準】

- ・学期末に期末試験を行う。問題を複数提示し、2問選んでそれぞれ400字以上記述する、という形をとる。
- ・平常点も評価に加える。最低6回は出席すること。
- ・期末試験を70%、平常点を30%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

- ・筆者は琉球文学のほかに、南西諸島のシャーマン（ユタガミ・ユタ）の研究もしている。
- ・学生の関心が琉球文学や神話学よりもシャーマンの場合、シャーマンについても講じることは可能である。
- ・シラバスに沿った授業のほかに関心がある、という申し出が過去にあり、その対応をしたこともある。そのような場合、授業の時に申し出てほしい。
- ・また授業の内容があまり馴染みのないものであると、難解すぎる、という声が聞かれる。なるべくわかりやすく解説するようにつとめる。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムに授業内容を理解する助けとなるプリントをアップするので、それをパソコンで読みながら授業に参加することが望ましい。

【その他の重要事項】

- ・春学期、秋学期は共に同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>
- ・琉球文学（『おもろさうし』）
 - ・神話学
 - ・民俗学（シャーマン研究）

【研究テーマ】

- <研究テーマ>
- ・『おもろさうし』の文学研究
 - ・日本神話・琉球神話研究
 - ・奄美のシャーマン研究

【主要研究業績】

- <主要研究業績>
- ・『新うたの神話学』（新典社、2020年）
 - ・『奄美群島おもろの世界』（南方新社、2018年）

- ・『歌とシャーマン』（南方新社、2015年）

【主要研究業績】

- ・『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015年）
- ・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013年）
- ・『ユタ神誕生』（南方新社、2013年）
- ・『夜の海、永劫の海』（新典社、2011年）

【主要研究業績】

- ・『うたの神話学』（森話社、2010年）
- ・『琉球の恋歌』（新典社、2010年）
- ・『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008年）

その他

『奄美三少年 ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017年）の監修

【Outline and objectives】

The myth and folklore of Nansei Islands are closely related to Southern Kyushu. The Hayato were the people who sailed across the Southern Kyushu and Southern Satsuma islands. In this course, the myth of the Hayato and the people of the sea who sailed across the Nansei areas will be learned. The relationship between the Hayato from the Southern Kyushu and Japanese myths reveals the presence of Hayato people in Japanese myths. The culture of ancient Kyushu will be deeply learned. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings.

LIT500B2

中国文学 A

遠藤 星希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『史記』精読】

司馬遷の『史記』を精読する。『史記』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、『源氏物語』にもその影響が色濃く見えるのみならず、その後の日本文学にも影響力を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（三家注や瀧川資言『史記會注考證』等）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ、『史記』巻七「項羽本紀」を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深め、そこに描かれた人々の英知を吸収すると同時に、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】

1. 『史記』についての基礎的な知識を習得する。
2. 漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
3. 漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『史記』本文を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『史記』の本文を数行ずつ区切ってそれぞれ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。毎回リアクションペーパーを提出して頂き、そこに書き込まれた質問等については、次の授業の冒頭でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『史記』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	ガイダンス（3）	『史記』から窺える当時の人々の世界観
第4回	『史記』精読（1）	担当者による発表と討論（1）
第5回	『史記』精読（2）	担当者による発表と討論（2）
第6回	『史記』精読（3）	担当者による発表と討論（3）
第7回	『史記』精読（4）	担当者による発表と討論（4）
第8回	『史記』精読（5）	担当者による発表と討論（5）
第9回	『史記』精読（6）	担当者による発表と討論（6）
第10回	『史記』精読（7）	担当者による発表と討論（7）
第11回	『史記』精読（8）	担当者による発表と討論（8）
第12回	『史記』精読（9）	担当者による発表と討論（9）
第13回	『史記』精読（10）	担当者による発表と討論（10）
第14回	『史記』精読（11）	担当者による発表と討論（11）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当部分について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・点校本二十四史修訂本『史記』（中華書局、2014）
- ・瀧川資言『史記會注考證』（上海古籍出版社、2015）
- ・吉田賢抗〔ほか〕著『史記』1-15（明治書院、1973-2014）
- ・小川環樹〔ほか〕訳『史記列伝』（岩波文庫、1975）
- ・小竹文夫、小竹武夫訳『列伝』1-4（ちくま学芸文庫、1995）
- ・武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（講談社文芸文庫、1997）
- ・宮崎市定『史記を語る』（岩波文庫、1996）

その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいうような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

時間意識・空間意識という側面からの分析を通じた、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討

<主要研究業績>

「唐代伝奇『定婚店』をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）

「遺臣のゆれる心——杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）

「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中国學會報』65集、2013・10）など

【Outline and objectives】

In this course, we will closely read Sima Qian's Shiji (The Records of the Grand Historian). Shiji is one of the most familiar Chinese classics that not only exerted strong influence on the Tale of Genji but also had enduring effects on the subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in literary Chinese (So-called Sanjia Zhu — three standard commentaries — and Shiki kaichu kosho by Sukenobu Takigawa). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and absorb wisdom of people described therein through close reading of Chapter 86, Biography of Xiang Yu, of Shiji, and develop basic skills for close reading of Chinese classic writings.

LIT500B2

中国文学B

遠藤 星希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『文選』精読】

梁の昭明太子が編纂した『文選』所収の詩を精読する。『文選』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、その後も日本文学に影響を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（李善注や五臣注など）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ『文選』所収の詩を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深めつつ、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】

1. 『文選』についての基礎的な知識を習得する。
2. 漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
3. 漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『文選』所収の詩を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収の詩の中から比較的有名なものを精選し、一首ずつ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。毎回リアクションペーパーを提出して頂き、そこに書き込まれた質問等については、次の授業の冒頭でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『文選』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	『文選』精読（1）	漢武帝「秋風辞」
第4回	『文選』精読（2）	「古詩十九首」其四
第5回	『文選』精読（3）	曹丕「燕歌行」
第6回	『文選』精読（4）	阮籍「詠懷詩」其四
第7回	『文選』精読（5）	謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」
第8回	『文選』精読（6）	陶淵明「雜詩二首」其二
第9回	『文選』精読（7）	鮑照「東武吟」
第10回	『文選』精読（8）	曹植「箜篌引」
第11回	『文選』精読（9）	無名氏「長歌行」
第12回	『文選』精読（10）	曹丕「芙蓉池作」
第13回	『文選』精読（11）	潘岳「悼亡詩三首」其一
第14回	『文選』精読（12）	謝朓「游東田」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する詩について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・『文選』（上海古籍出版社、1986）
- ・『文選』（中華書局、1977）
- ・『六臣注文選』（浙江古籍出版社、1999）
- ・『唐鈔文選集註彙存』（上海古籍出版社、2011）
- ・小尾郊一・花房英樹『文選』（集英社、1974-1976）
- ・内田泉之助・網祐次〔ほか〕『文選』（明治書院、1963-2001）
- ・斯波六郎・花房英樹『文選』（筑摩書房、1963）
- ・興膳宏・川合康三『文選』（角川書店、1988）
- ・高橋忠彦・神塚淑子『文選』（学習研究社、1985）
- その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70％）、討論への参加度・貢献度・積極性（30％）。

【学生の意見等からの気づき】

授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

時間意識・空間意識という側面からの分析を通じた、中国文学・思想上における李賀の定位の再検討

<主要研究業績>

「唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）

「遺臣のゆれる心——杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）

「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中国學會報』65集、2013・10）など

【Outline and objectives】

In this course, we will closely read poetry contained in the anthology Wen Xuan, which was compiled by Xiao Tong, a Crown Prince of the Chinese Liang Dynasty. Wen Xuan was one of the most familiar Chinese classics for aristocrats in the Heian period and has been influential in subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in Literary Chinese (Li Shan and Commentaries by Five Officials). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and while developing basic skills for reading Chinese classical writings through close reading of poetry contained in Wen Xuan.

ART500B2

日本文芸特講 I A（文芸と音楽）

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマを『源氏物語』と音楽とする。これに含まれる事柄は：1）『源氏物語』における音楽；2）『源氏物語』と同時代（10世紀～11世紀初頭）の音楽史；3）『源氏物語』が後世の日本古典音楽に及ぼした影響（源氏能、箏組歌など）。本年度は『源氏物語』第二部の音楽場面を主な研究対象とする。

【到達目標】

上記の事柄の内1と2を中心に調査・研究を進め、結果として『源氏物語』の音楽場面を「正しく読めるようになる」ことが、授業の到達目標となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

周知の通り、音楽は『源氏物語』の構想や主題性と密接に結び付いている。物語の歴史的信憑性を高めるため、重要な儀式や行事の場面では執筆時より半世紀以上遡る記録が準拠に用いられたりもするが、豊かな創造性に富む場面もある。一方、執筆当時の音楽文化を反映した、現実味の強い音楽描写も見られる。また、物語世界の長い時間の流れの中で、楽器の相承などに関して、例えば醍醐帝からの由緒ある正統であると、現実世界の音楽史に繋ぎ止めつつも、現実世界とは異なる、もう一つの虚構の「音楽史」を構築している。本授業では、こうしたことを考慮しながら、さまざまな観点から『源氏物語』の音楽を読み解いていく。春学期の授業は、特定の楽器や楽曲ごとに、教員等による講義・解説、院生主導による輪読、全員での討論を織り交ぜて行う。院生に対する指示、課題等に対するフィードバックは授業内で行い、適宜メール等で補う。以下の授業計画は実施例を示したものに過ぎず、実際に取り扱う題材、具体的なスケジュール等は、参加学生の人数・関心・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回の授業の際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	基本文献の調べ方・検索ツール
第2回	ガイダンス②	平安時代の音楽 年中行事、御遊、音楽論
第3回	ガイダンス③	『源氏物語』の音楽 作者と音楽
第4回	和琴① 基礎	楽器の構造、歴史、楽譜等
第5回	和琴② 概観	『源氏物語』における和琴
第6回	和琴③ 輪読	「常夏」巻 玉鬘とのやりとり
第7回	和琴④ 輪読	「竹河」巻 楽器と血統
第8回	琴① 基礎	楽器の構造、歴史、楽譜等
第9回	琴② 概観	『源氏物語』における琴
第10回	琴③ 輪読	「須磨」巻 流離譚と琴
第11回	琴④ 輪読	「明石」巻 明石一族の音楽
第12回	琴⑤ 輪読	「松風」巻 明石の君と琴
第13回	琴⑥ 輪読	「若菜下」巻 女楽と音楽論

第14回 秋学期に向けて

これまでの個人発表についての講評等

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 取り上げられる本文、解説、研究等を予め読んでおくとともに、各自の担当する輪読の範囲に応じて、計画的に調査・準備を進める。

【テキスト（教科書）】

法政大学図書館蔵本及び担当教員の研究室に保管されている文学部資料室蔵本等を活用する。『源氏物語』の研究を個人的に続けようと思っている学生には、自らの蔵書として小学館・岩波書店・新潮社等発行の『源氏物語』の購入を勧める。

【参考書】

- ① 山田孝雄『源氏物語之音楽』（宝文館、1934年。復刻版1969年）
- ② 中川正美『源氏物語と音楽』（和泉書院、1991年）
- ③ 『日本音楽教育事典』（音楽之友社、2004年）の関連項目（主に福島和夫）
- ④ 別冊太陽『雅楽』（平凡社、2004年）
- ⑤ 磯水絵『「源氏物語」時代の音楽研究』（風間書院、2008年）
- ⑥ 「源氏物語の語彙検索」<http://www2s.biglobe.ne.jp/~ant/genji/>
- ⑦ 渋谷栄一「源氏物語の世界」<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/>

【成績評価の方法と基準】

個人発表の内容 40 %、討論への参加等の平常点 20 %、学期末提出レポートの内容 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績>『源氏物語』・『平家物語』と音楽関連のもの

- ① 〈研究ノート〉「『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について ―古楽譜研究者の立場から―」（『日本文学誌要』92、2015年）
- ② 「『源氏物語』の音楽を読む ―現実と虚構、準拠と創作―」（芳賀徹企画・総監修、伊井春樹監修『源氏物語国際フォーラム集成』、源氏物語千年紀委員会、2009年）
- ③ 「平家語りの成り立ち ―平家語りの音楽生成論へ向けて―」（明治学院大学教養教育センター付属研究所編『カルチュラル』3、2006年）

【Outline and objectives】

The topic of this postgraduate class is music and *The Tale of Genji*. This includes: 1. music in *The Tale of Genji*; 2. music history at the time of its creation and preceding decades; and 3. the influence of *The Tale of Genji* on later genres of Japanese traditional music, such as Noh plays based on it, and Genji-themed texts in the classical repertoire of zither-accompanied songs known as *koto-kumiuta*.

ART500B2

日本文芸特講 I B（文芸と音楽）

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『源氏物語』と音楽。これに含まれる事柄は： 1）『源氏物語』における音楽； 2）『源氏物語』と同時代（10世紀～11世紀初頭）の音楽史； 3）『源氏物語』が後世の日本古典音楽に及ぼした影響（源氏能、箏組歌など）。

【到達目標】

今回は、上記の事柄の内1と2を中心に調査・研究を進め、結果として『源氏物語』の音楽場面を「正しく読めるようになる」ことが、授業の到達目標となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期の同項目を参照。秋学期の授業は導入の後、院生主導による輪読及び全員での討論を中心に行う。必要に応じて担当教員による講義・発表を交える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	春学期の復習、補足事項の確認
第2回	箏① 基礎	楽器の構造、歴史、楽譜等
第3回	箏② 概観	『源氏物語』における箏
第4回	箏③ 輪読	「紅葉賀」巻 紫の上と箏
第5回	箏④ 輪読	「少女」巻 雲居雁と箏
第6回	琵琶① 基礎	楽器の構造、歴史、楽譜等
第7回	琵琶② 概観	文学における「琵琶」
第8回	琵琶③ 輪読	『源氏物語』の琵琶 「紅葉賀」巻 源典侍と琵琶
第9回	琵琶④ 輪読	「橋姫」巻、「宿木」巻 宇治十帖の琵琶
第10回	横笛① 基礎	楽器の構造、歴史、楽譜等
第11回	横笛② 概観	『源氏物語』における横笛
第12回	横笛③ 輪読	「横笛」巻 柏木と横笛
第13回	横笛④ 輪読	「椎本」巻 薫と横笛
第14回	総括	これまでの個人発表についての講評等

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 取り上げられる本文、解説、研究等を予め読んでおくとともに、各自の担当する輪読の範囲に応じて、計画的に調査・準備を進める

【テキスト（教科書）】

阿部秋生他 校注・訳『源氏物語』④（小学館新編日本古典文学全集、全6冊のうち）。その他、法政大学図書館蔵本及び担当教員の研究室に保管されている資料室蔵本等を活用する。『源氏物語』の研究を個人的に続けようと思っている学生には、自らの蔵書として小学館・岩波書店・新潮社等発行の『源氏物語』の購入を勧める。

【参考書】

- ① 山田孝雄『源氏物語之音楽』（宝文館、1934年。復刻版1969年）
- ② 中川正美『源氏物語と音楽』（和泉書院、1991年）
- ③ 『日本音楽教育事典』（音楽之友社、2004年）の関連項目（主に福島和夫）
- ④ 別冊太陽『雅楽』（平凡社、2004年）
- ⑤ 磯水絵『「源氏物語」時代の音楽研究』（風間書院、2008年）
- ⑥ 「源氏物語の語彙検索」 <http://www2s.biglobe.ne.jp/~ant/genji/>
- ⑦ 渋谷栄一「源氏物語の世界」 <http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/>

【成績評価の方法と基準】

個人発表の内容40%、討論への参加等の平常点20%、学期末提出レポートの内容40%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞『源氏物語』・『平家物語』と音楽関連のもの

- ① 〈研究ノート〉「『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について ―古楽譜研究者の立場から―」（『日本文学誌要』92、2015年）
- ② 「『源氏物語』の音楽を読む ―現実と虚構、準拠と創作―」（芳賀徹企画・総監修、伊井春樹監修『源氏物語国際フォーラム集成』、源氏物語千年紀委員会、2009年）
- ③ 「平家語りの成り立ち ―平家語りの音楽生成論へ向けて―」（明治学院大学教養教育センター附属研究所編『カルチュラル』3、2006年）

【Outline and objectives】

The topic of this postgraduate class is music and *The Tale of Genji*. This includes: 1. music in *The Tale of Genji*; 2. music history at the time of its creation and preceding decades; and 3. the influence of *The Tale of Genji* on later genres of Japanese traditional music, such as Noh plays based on it, and Genji-themed texts in the classical repertoire of zither-accompanied songs known as *koto-kumiuta*.

LIT500B2

日本文芸特講Ⅱ A（アートマネジメント研究）

高橋 靖典

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまでの編集および作家の職能団体でのマネジメント実務の経験をもとに、文芸活動を取り巻く環境の解説と、創作活動支援、著作権保護、図書館事業やインターネット・ビジネスなどの今日的問題を検証します。また書店や文学館の未来図、文芸作品のデジタル・アーカイブといった創造的課題に取り組んでいただきます。これからの文芸分野で必要な実践的センスを涵養するのが目標です。

【到達目標】

授業で取り上げる文芸の課題について、本質の把握、解決の方向性を養うこと。ほかの受講生が選んだテーマについて、整合性を持って思考し、かつ応答、議論のできる実践的な態度を得ること、各個人が一生悩むのに困らない学究テーマを見出すこと、の3つです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本は、資料を適宜提示しながら講義をいたします。その後、受講生による発表やディスカッションを交え、最終週までにレポートを提出していただきます。数回は編集者、著作権管理者等の実務担当者に講演していただく予定です。ゲストの都合での内容変更の場合あり。事前確認を願います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	文芸を成り立たせているもの イントロダクション	……講義の概略、進め方と、受講者の過去の文芸体験と関心領域を語っていただきます。
第2回	文芸を成り立たせているもの 書物はいつ書物になったか	……書物の歴史・文芸の成り立ち・出版の現況 講義
第3回	文芸を成り立たせているもの レポートのテーマ設定	……2回までの概況をもとにテーマの策定、情報収集、意見交換
第4回	文芸を成り立たせているもの テーマの発表	……意見交換
第5回	文芸を成り立たせているもの 本のヒエラルキー	……書く時間と考える時間を考える 講義
第6回	文芸を成り立たせているもの まちは書物だ	……都市・詩情・パースペクティブ 講義 意見交換（宿題とし秋期第11回めに発表）
第7回	文芸をサポートする人々 編集とは何か	……物事の本質をつかむ 講義
第8回	文芸をサポートする人々 校正とは何か	……校正者と校閲者 講義
第9回	文芸をサポートする人々 レポート進捗の経過発表	……意見交換
第10回	文芸をサポートする人々 製紙・印刷・製本・デザイン	……デジタル最前線 ゲスト講師（デザイナー）による講義と質疑応答
第11回	文芸をサポートする人々 古書店はいま	……未曾有の好景気から20年後 講義

第12回	文芸をサポートする人々 文芸マネージャー（編集者）の現場	……ゲスト講師（編集者）による講義と質疑応答
第13回	文芸をサポートする人々 レポート発表	……発表 意見交換
第14回	文芸をサポートする人々 発表を受けて	……講評 ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

まちは「3D 立体書物」。日頃から意識してウォッチング、五感・六感の体験コレクションを増やしてください。

【テキスト（教科書）】

指定しない。必要な資料はコピーで配布します。

【参考書】

授業中に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

情報収集・整理の的確度（30％）受講中の姿勢等平常点（30％）レポート（40％）

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規につきアンケートを実施していません。

【その他の重要事項】

編集者であり文芸家協会事務局長
出版社にて、学芸書籍編集長はじめ『JJ』『CLASSY』等雑誌編集、新シリーズ単行本の企画開発等30年以上実務を経験、また文芸作家の職能団体である、「日本文藝家協会」の事務局長を10年ほど務めた経歴から、文芸創作をサポートする様々な仕組みの成り立ちとこれまでにについて解説していきます。メディアが大変革を迎えているいまだからこそ、創作実践の未来と一緒に考察していきたいと思っています。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
ノンフィクション、雑誌、文芸の企画編集
著作権者の権利保護とマネジメント
〈研究テーマ〉
都市社会学 世間学 文芸アーカイブ
〈主要研究業績〉
編集担当
『生きることば あなたへ』瀬戸内寂聴 光文社 2001
『ほんとうのアフガニスタン』中村 哲 光文社 2002
『呪術がつくった国』上田 篤 光文社 2002
『世間の目 なぜ渡る世間は「鬼ばかり」なのか』佐藤直樹 光文社 2004
『稼ぐが勝ち ゼロから100憶、ボクのやり方』堀江貴文 光文社 2004
『贅沢な読書』福田和也 光文社 2003
『他(た) 諺(げん)の空似(そらに)』米原万里 光文社 2006
『生死を分けた三分間 そのとき被災者はどう生きたか』日本聞き書き学会編 光文社 2006 など
編集担当
『文学 2012』～『文学 2019』日本文藝家協会編 講談社
『短篇ベストコレクション 現代の小説 2012』～『短篇ベストコレクション 現代の小説 2019』日本文藝家協会編 徳間書店
『ベストエッセイ 2012』～『ベストエッセイ 2019』日本文藝家協会編 光村図書出版
『現代小説クロニクル』講談社文芸文庫全8巻 日本文藝家協会編 講談社 2014～2015
『文藝年鑑 2012』～『文藝年鑑 2019』日本文藝家協会編 新潮社 など

【Outline and objectives】

This course provides discussion on the environment for literary activities and deals with contemporary topics such as financial assistance to writers, copyright protection for books, library management, and internet businesses on the basis of the lecturer's background as an editor and a supervisor for writers in the publishing business. In addition, we will cover a number of stimulating topics including the future of bookstores, literature museums, and the recording and archiving of literary works. The goal is to cultivate your practical perspective required in the literary field for the future.

LIT500B2

日本文芸特講ⅡB（アートマネジメント研究）

高橋 靖典

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまでの編集および作家の職能団体でのマネジメント実務の経験をふまえて、文芸活動を取り巻く環境の解説と、創作活動支援、著作権保護、図書館事業やインターネット・ビジネスなどの今日的問題を検証します。また書店や文学館の未来図、文芸作品のデジタル・アーカイブといった創造的課題に取り組んでいただきます。これからの文芸分野で必要な実践的センスを涵養するのが目標です。

【到達目標】

授業で取り上げる文芸の課題について、本質の把握、解決の方向性を探る力を養うこと。ほかの受講生が選んだテーマについて、整合性を持って思考し、かつ応答、議論のできる実践的な態度を得ること、各個人が一生悩むのに困らない学究テーマを見出すこと、の3つです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本は、資料を適宜提示しながら講義をいたします。その後、受講生による発表やディスカッションを交え、最終週までにレポートを提出していただきます。数回は編集者、著作権管理者等の実務担当者に講演していただく予定です。ゲストの都合での内容変更の場合あり。事前確認をお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	文芸をサポートする仕組み 著作権の保護と著作権者支援	……日本文藝家協会、日本ペンクラブ、著作者団体連合等、文芸団体の活動 講義
第2回	文芸をサポートする仕組み 知的財産権裁判の判例から	……権利の保護・主張・制限 講義
第3回	文芸をサポートする仕組み レポートのテーマ設定	……情報収集、意見交換
第4回	文芸をサポートする仕組み テーマ発表	……意見交換
第5回	文芸をサポートする仕組み 文芸と教育現場	……ICTと「授業目的公衆送信補償金制度」ゲスト講師（SARTRAS／授業目的公衆送信補償金等管理協会理事）による講義と質疑応答
第6回	文芸をサポートする仕組み インターネットと知的財産権の現在	……デジタル創作とモラルゲスト講師（ACCS／コンピュータソフトウェア著作権協会専務理事）による講義と質疑応答
第7回	文芸の拠点とアーカイブ 図書館はだれのものか	……読み手、創り手、子どもの未来 講義
第8回	文芸の拠点とアーカイブ 文学館・記念館・資料館	……試行錯誤とアーカイブ活動 講義
第9回	文芸の拠点とアーカイブ 作家の終活	……文献、資料の処分・寄贈・譲渡の現状 講義

- 第10回 文芸の拠点とアーカイブ ……意見交換
ブ レポート進捗経過
の発表
- 第11回 文芸の拠点とアーカイブ ……受講生の「わたしの東京」発表
まちは書物である 表 意見交換
発表
- 第12回 文芸の拠点とアーカイブ ……意見交換
ブ レポート発表
- 第13回 文芸の拠点とアーカイブ ……講評 ディスカッション
ブ レポート発表を受けて
- 第14回 文芸の拠点とアーカイブ ……今後の各自の研究テーマにつ
ブ 年間の講義総括 いての意見交換

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

まちは「3D 立体書物」。日頃から意識してウォッチング、五感・六感の体験コレクションを増やしてください。

【テキスト（教科書）】

指定しない。必要な資料はコピーで配布します。

【参考書】

授業中に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

情報収集・整理の的確度（30％）受講中の姿勢等平常点（30％）レポート（40％）

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規につきアンケートを実施していません。

【その他の重要事項】

編集者であり文芸家協会事務局長

出版社にて、学芸書籍編集長はじめ、『JJ』『CLASSY』等雑誌編集、新シリーズ単行本の企画開発等 30 年以上実務を経験、また文芸作家の職能団体である、「日本文藝家協会」の事務局長を 10 年ほど務めた経歴から、文芸創作をサポートする様々な仕組みの成り立ちとこれまでにについて解説していきます。メディアが大変革を迎えているいまだからこそ、創作実践の未来と一緒に考察していきたいと思っています。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

ノンフィクション、雑誌、文芸の企画編集

著作権者の権利保護とマネジメント

〈研究テーマ〉

都市社会学 世間学 文芸アーカイブ

〈主要研究業績〉

編集担当

『生きることば あなたへ』瀬戸内寂聴 光文社 2001

『ほんとうのアフガニスタン』中村 哲 光文社 2002

『呪術がつくった国』上田 篤 光文社 2002

『世間の目 なぜ渡る世間は「鬼ばかり」なのか』佐藤直樹 光文社 2004

『稼ぐが勝ち ゼロから 100 憶、ボクのやり方』堀江貴文 光文社 2004

『贅沢な読書』福田和也 光文社 2003

『他（た） 諺（げん）の空似（そらに）』米原万里 光文社 2006

『生死を分けた三分間 そのとき被災者はどう生きたか』

日本聞き書き学会編 光文社 2006 など

編集担当

『文学 2012』～『文学 2019』 日本文藝家協会編 講談社

『短篇ベストコレクション 現代の小説 2012』～『短篇ベストコレクション 現代の小説 2019』 日本文藝家協会編 徳間書店

『ベストエッセイ 2012』～『ベストエッセイ 2019』 日本文藝家協会編 光村図書出版

『現代小説クロニクル』講談社文芸文庫全 8 巻 日本文藝家協会編

講談社 2014～2015

『文藝年鑑 2012』～『文藝年鑑 2019』 日本文藝家協会編 新潮社

など

【Outline and objectives】

This course provides discussion on the environment for literary activities and deals with contemporary topics such as financial assistance to writers, copyright protection for books, library management, and internet businesses on the basis of the lecturer's background as an editor and a supervisor for writers in the publishing business. In addition, we will cover a number of stimulating topics including the future of bookstores, literature museums, and the recording and archiving of literary works. The goal is to cultivate your practical perspective required in the literary field for the future.

LIT500B2

女性文学 A

藤木 直実

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式による。2000 年代以降の芥川賞受賞作品のうち、女性作家による作品を精読する。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトまたはスライドにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス①	授業の目的、計画、方法についての概説
第 2 回	ガイダンス②	担当作品の決定
第 3 回	大道珠貴「しよっぱいドライブ」	担当者による報告と受講生による討議
第 4 回	金原ひとみ「蛇にピアス」	担当者による報告と受講生による討議
第 5 回	綿矢りさ「蹴りたい背中」	担当者による報告と受講生による討議
第 6 回	絲山秋子「沖で待つ」	担当者による報告と受講生による討議
第 7 回	青山七恵「ひとり日和」	担当者による報告と受講生による討議
第 8 回	川上未映子「乳と卵」	担当者による報告と受講生による討議
第 9 回	楊逸「時が滲む朝」	担当者による報告と受講生による討議
第 10 回	津村記久子「ボストライムの舟」	担当者による報告と受講生による討議
第 11 回	赤染晶子「乙女の密告」	担当者による報告と受講生による討議

第 12 回	朝吹真理子「きことわ」	担当者による報告と受講生による討議
第 13 回	鹿島田真希「冥土めぐり」	担当者による報告と受講生による討議
第 14 回	今期のまとめ	今期の学修内容の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期 20 世紀女性文学論』（晶文社、2014）、新・フェミニズム批評の会編『昭和後期女性文学論』（翰林書房、2020）、その他授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50 %）に加えて、報告の内容と水準（30 %）、授業中の貢献度（20 %）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【学生が準備すべき機器他】

ノートパソコンが自宅にあることが望ましい。プリンターがあれば学習効率がより高くなると思われる。オンライン会議用アプリケーションのダウンロードを求める可能性がある。

【その他の重要事項】

質問については学修支援システムとメールで対応する。メールでの質問の場合は、件名を「女性文学 学籍番号 氏名」とすること。メール宛先：fujiki@olive.ocn.ne.jp

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ> 森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績> 『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline and objectives】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

LIT500B2

女性文学B

藤木 直実

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式による。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的、計画、方法についての概説、春学期の振り返り
第2回	黒田夏子「ab さんご」	担当者による報告と受講生による討議
第3回	藤野可織「爪と目」	担当者による報告と受講生による討議
第4回	小山田浩子「穴」	担当者による報告と受講生による討議
第5回	柴崎友香「春の庭」	担当者による報告と受講生による討議
第6回	本谷有希子「異類婚姻譚」	担当者による報告と受講生による討議
第7回	村田沙耶香「コンビニ人間」	担当者による報告と受講生による討議
第8回	若竹千佐子「おらおらでひとりいぐも」	担当者による報告と受講生による討議
第9回	石井遊佳「百年泥」	担当者による報告と受講生による討議
第10回	今村夏子「むらさきのスカートの女」	担当者による報告と受講生による討議
第11回	高山羽根子「首里の馬」	担当者による報告と受講生による討議

第12回	宇佐美りん「推し、燃ゆ」	担当者による報告と受講生による討議
第13回	今期のまとめ	秋学期の学修内容の振り返り
第14回	今年度のまとめ	春学期秋学期を通じた学修内容の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50%）に加えて、報告の内容と水準（30%）、授業中の貢献度（20%）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ>森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績>『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline and objectives】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

ART500B2

文芸と視聴覚芸術 A

越川 道夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通して、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】

担当講師の作品だけでなく、主に参考作品を鑑賞し、または関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。オンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に回答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の概説
第 2 回	講義 1 / 現場からの報告①	毎年のことながら、映画の原理を知ることから授業を始めます。
第 3 回	講義 2 / 現場からの報告②	講師の現場での経験に則しながら、できるだけ具体的に映画の原理と身体との関係を学びます。
第 4 回	講義 3 / 現場からの報告③	実際の映画制作者が映画の現場において何を考えているかということ伝えていきます。
第 5 回	講義 4 / 現場からの報告④	必要に応じて文献を読むことを指示します。
第 6 回	講義 5 / 現場からの報告⑤	随時質問や学生の考えを吸い上げ、それに応える形で授業を進めていく予定です。
第 7 回	参考作品① / 鑑賞	参考作品①の鑑賞
第 8 回	参考作品① / ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第 9 回	参考作品① / ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第 10 回	講義 6 / 現場からの報告⑥	前回までのディスカッションを受けての講義
第 11 回	参考作品② / 鑑賞	参考作品②の鑑賞
第 12 回	参考作品② / ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第 13 回	参考作品② / ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第 14 回	講義 7 / 現場からの報告⑦	講師による講義 春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。

【テキスト（教科書）】

講師が選定する。授業内で指示する。

【参考書】

柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波現代文庫）
前田英樹『小津安二郎の家—持続と浸透』（書肆山田）

【成績評価の方法と基準】

研究発表、レポート (50 %)、授業参加度等 (50 %) によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年はオンラインでの授業となり、試行錯誤がありました。昨年の学生からの反応から本年もオンラインでの授業になった場合は、基本的に YouTube に限定公開します。授業を視聴後に講師のメールに必ず授業の感想、質問、授業を受けての考えを送ってください。そのメールに個別に回答、もしくは授業内でメールを紹介しつつ回答しながら臨機応変に授業を進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 映画

<研究テーマ> 映画

<主要研究業績> 『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

『夕陽のあと』（監督／2019）など

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline and objectives】

Through discussion and research, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, and the relationship between the body and the foundation of each.

ART500B2

文芸と視聴覚芸術 B

越川 道夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。また秋期は特に映画表現の多様性に触れることも目的とする。

【到達目標】

主に参考映画作品を鑑賞し、その作品に関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。オンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に回答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義 1 / 現場からの報告①	秋期の授業についてのガイダンス
第 2 回	参考作品① / 鑑賞	参考作品①を鑑賞する
第 3 回	参考作品① / ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第 4 回	参考作品① / ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第 5 回	参考作品② / 鑑賞	参考作品②を鑑賞する
第 6 回	参考作品② / ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第 7 回	参考作品② / ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第 8 回	講義 2 / 現場からの報告②	秋期はできるだけ多様な映画表現に触れることを目標とします。
第 9 回	参考作品③ / 鑑賞	参考作品③を鑑賞する
第 10 回	参考作品③ / ディスカッション①	参考作品③についてのディスカッション
第 11 回	参考作品③ / ディスカッション②	参考作品③についてのディスカッション
第 12 回	参考作品④ / 鑑賞	参考作品④を鑑賞する
第 13 回	参考作品④ / ディスカッション①	参考作品④についてのディスカッション
第 14 回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波現代文庫）
前田英樹『小津安二郎の家—持続と浸透』（書肆山田）

【成績評価の方法と基準】

研究発表、レポート (50 %)、授業参加度等 (50 %) によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年はオンラインでの授業となり、試行錯誤がありました。昨年の学生からの反応から本年もオンラインでの授業になった場合は、基本的に YouTube に限定公開します。授業を視聴後に講師のメールに必ず授業の感想、質問、授業を受けての考えを送ってください。そのメールに個別に回答、もしくは授業内でメールを紹介しつつ回答しながら臨機応変に授業を進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>映画

<研究テーマ>映画

<主要研究業績>『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

『夕陽のあと』（監督／2019）など

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline and objectives】

Through discussions and research presentations of their works, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, the relationship between the body and the foundation of each, and the diversity of film expression.

LNG600B3

学際的文学論 A（文学の境界領域、文学と宗教等）

リネベ・アンドレ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本論（＝日本文化論）について西洋と日本の著名な英文の文献をもとに、「世界の日本論」の言説史とそれにおけるキーとなるコンセプトを検討する。そのうえで、現代の日本学の可能性を考える。春学期には、明治後期から昭和前期にかけて西洋の読者に向けて書かれた文献や、英訳されて西洋で読まれた文献を検討する（新渡戸稲造、B.H. チェンバレン、岡倉天心、和辻哲郎など）。秋学期には戦後から現代に至るまで西洋の読者に向けて書かれた文献や英訳されて西洋で読まれた文献を検討する（R. ベネディクト、鈴木大拙、D. キーン、H. ハルトゥーニアンなど）。注意：「世界の日本論と日本学Ⅰ」と「世界の日本論と日本学Ⅱ」はそれぞれ単独での受講が可能です。

【到達目標】

- ・世界の日本論の言説史を説明できる
- ・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
- ・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
- ・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。
- ・授業内の購読（クロース・リーディングの方法による）
- ・授業内の発表（ショートプレゼンテーション、資料の紹介）
- ・ディスカッション（グループワーク、ペアワーク）
- ・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション：世界の日本論とは何か？	本授業の問題関心、方法論、文献の説明
第 2 回	明治後期の世界の日本論	文献講読（Nitobe, Bushido）、ディスカッション
第 3 回	明治後期の世界の日本論	文献講読（Chamberlain, Things Japanese）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 4 回	明治後期の世界の日本論	文献講読（Kanzo, Representative Men of Japan）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 5 回	明治後期の世界の日本論	文献講読（Hearn, Japan: An Attempt at Interpretation）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 6 回	大正期の世界の日本論	文献講読（Okakura, The Book of Tea）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 7 回	大正期の世界の日本論	文献講読（Dewey, Liberalism in Japan）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 8 回	大正期の世界の日本論	文献講読（Griffith, Japanese Fairy Tales）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション

第 9 回	大正期の世界の日本論	文献講読（Satow, A Diplomat in Japan）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 10 回	昭和前期の世界の日本論	文献講読（九鬼『いき』の構造）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 11 回	昭和前期の世界の日本論	文献講読（和辻『風土』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 12 回	昭和前期の世界の日本論	文献講読（タウト『日本文化私観』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 13 回	昭和前期の世界の日本論	文献講読（ヘリゲル『弓と禅』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 14 回	総括：現代の日本学の可能性を考える	ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各二時間を準備とします。
 ・本授業で指示した文献を読み、歴史・思想的背景について調べる
 ・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、資料のコメント）
 ・授業の出席前に前回の授業ノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】

- ・船曳健夫（2010）『日本人論』再考』講談社学術文庫
- ・南博（1994）『日本人論：明治から今日まで』岩波書店
- ・大久保橋樹（2003）『日本文化論の系譜：『武士道』から『甘え』の構造』まで』中公新書

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点（40％）：授業への参加、発言、提出課題などを総合的に評価する
- ・発表（40％）：数回のショートプレゼンテーションを総合的に評価する
- ・期末レポート（20％）

【学生の意見等からの気づき】

なし / none.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本思想史
 <研究テーマ> 近世の日本政治思想史

【Outline and objectives】

This course offers students an introduction into discourses about Japanese culture. It is designed to give an overview of key texts and concepts between the late Meiji-period until the present in international perspective. Students can expect to come out of the course better prepared to engage in an informed discussion about international discourses about Japanese culture and the challenges for future research in the field of Japanese studies.

LNG600B3

学際的文学論 B（文学の境界領域、文学と宗教等）

リネベ・アンドレ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本論（＝日本文化論）について西洋と日本の著名な英文の文献をもとに、「世界の日本論」の言説史とそれにおけるキーとなるコンセプトを検討する。そのうえで、現代の日本学の可能性を考える。秋学期には戦後から現代に至るまで西洋の読者に向けて書かれた文献や英訳されて西洋で読まれた文献を検討する（R. ベネディクト、鈴木大拙、D. キーン、H. ハルトゥーニアンなど）。注意：「世界の日本論と日本学 I」と「世界の日本論と日本学 II」はそれぞれ単独での受講が可能です。

【到達目標】

- ・世界の日本論の言説史を説明できる
- ・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
- ・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
- ・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。
- ・授業内の購読（クローズ・リーディングの方法による）
- ・授業内の発表（ショートプレゼンテーション、資料の紹介）
- ・ディスカッション（グループワーク、ペアワーク）
- ・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション：世界の日本論とは何か？	本授業の問題関心、方法論、文献の説明
第 2 回	戦後の世界の日本論	文献講読（Benedict, <i>Chrysanthemum and the Sword</i> , 第 1~3 章）、ディスカッション
第 3 回	戦後の世界の日本論	文献講読（Benedict, <i>Chrysanthemum and the Sword</i> , 第 10~13 章）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 4 回	戦後の世界の日本論	文献講読（Suzuki, <i>Zen and Japanese Culture</i> ）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 5 回	60~70 年代の世界の日本論	文献講読（丸山『日本の思想』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 6 回	60~70 年代の世界の日本論	文献講読（Richie, <i>The Japanese Movie</i> ）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 7 回	60~70 年代の世界の日本論	文献講読（土井『「甘え」の構造』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション

第 8 回	80~90 年代の世界の日本論	文献講読（中根『タテ社会の人間関係』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 9 回	80~90 年代の世界の日本論	文献講読（ベフ『イデオロギーとしての日本文化論』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 10 回	80~90 年代の世界の日本論	文献講読（Reischauer, <i>The Japanese Today</i> ）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 11 回	80~90 年代の世界の日本論	文献講読（青木『「日本文化論」の受容』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 12 回	2000 年以降の世界の日本論	文献講読（Dover, <i>Embracing Defeat</i> ）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 13 回	2000 年以降の世界の日本論	文献講読（Harootunian, <i>Japan After Japan</i> ）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 14 回	総括：現代の日本学の可能性を考える	ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を準備とします。

- ・本授業で指示した文献を読み、歴史・思想的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、資料のコメント）
- ・授業の出席前に前回の授業ノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】

- ・船曳健夫（2010）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
- ・吉野耕作（2006）『文化ナショナリズム社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会
- ・E.W. サイド著；今沢紀子訳（1993）『オリエンタリズム』（2 巻）平凡社
- ・赤澤史朗（2020）『戦中・戦後文化論：転換期日本の文化統合』法律文化社

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点（40 %）：授業への参加、発言、提出課題などを総合的に評価する
- ・発表（40 %）：数回のショートプレゼンテーションを総合的に評価する
- ・期末レポート（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

なし/none.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本思想史
<研究テーマ> 近世日本政治思想史

【Outline and objectives】

This course offers students an introduction into discourses about Japanese culture. It is designed to give an overview of key texts and concepts between the late Meiji-period until the present in international perspective. Students can expect to come out of the course better prepared to engage in an informed discussion about international discourses about Japanese culture and the challenges for future research in the field of Japanese studies.

LIT500B2

文学と風土 A

庄司 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代作家の残した書簡や原稿などの所謂「直筆資料」を素材として、調査と分析の経験を培う。

直筆資料を読むとはどういうことか、その現実的なあり方を探求するなかで、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を旨とする。

【到達目標】

資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で充分に活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。受講者は、講義毎にコメントペーパーを提出する。前回講義の振り返りにも使う。最初の時間に要領を説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する資料についての説明と担当する資料の決定。
第 2 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 3 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 4 回	受講者による報告 1	担当する資料体についての報告
第 5 回	受講者による報告 2	担当する資料体についての報告
第 6 回	受講者による報告 3	担当する資料体についての報告
第 7 回	受講者による報告 4	担当する資料体についての報告
第 8 回	受講者による報告 5	担当する資料体についての報告
第 9 回	受講者による報告 6	担当する資料体についての報告
第 10 回	受講者による報告 7	担当する資料体についての報告
第 11 回	受講者による報告 8	担当する資料体についての報告
第 12 回	受講者による報告 9	担当する資料体についての報告
第 13 回	受講者による報告 10	担当する資料体についての報告
第 14 回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。

【テキスト（教科書）】

教員により、提供される。

【参考書】

特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

コメントペーパー（Microsoft Forms により提出する事を予定。20 %）、発表（40 %）、レポート等の提出物（40 %）による総合評価。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

学外授業として、文学館への見学を予定している。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学

＜研究テーマ＞芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容

＜主要研究業績＞

編著『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』（2013 双文社出版）

【Outline and objectives】

In this class ,we will exercise in how to read writer's autograph from an expert's point of view,while thinking background.

LIT500B2

文学と風土 B

庄司 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

芥川龍之介の残した言葉とその事に関わる芸術体験を素材とし、基本的な調査と分析の能力を培う。

作家の言葉を解釈してゆく中で、その事に関わる事実を踏まえるとはどのような事か、そもそも体験した事実とは何か。芸術体験に関わる資料を探索し、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げ、芥川龍之介の体験を語る言葉を解釈する力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

また、上記のことがらに加え、このような体験を可能とした当時の「東京」という土地が有した文化状況についての知識を深め、自らジャンル横断的なアプローチを行う力を養成する。

【到達目標】

芸術体験に関わる芥川龍之介の「言葉」を解釈する為のスキルを養成する。すなわち、芥川龍之介の芸術体験に関わる資料の収集と解析を行う事ができ、その成果を自らの発表や論文で充分に活用できる能力の獲得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。受講者は、講義毎にコメントペーパーを提出する。前回講義の振り返りにも使う。最初の時間に要領を説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。芥川龍之介の芸術体験に関わる基礎となる情報を提供し、担当するテーマを決定する。
第 2 回	担当教員による報告 1	芸術体験を読み解くと云う事についてのガイダンス
第 3 回	担当教員による報告 2	芸術体験を読み解くと云う事についてのガイダンス
第 4 回	受講者による報告 1	担当するテーマについての報告
第 5 回	受講者による報告 2	担当するテーマについての報告
第 6 回	受講者による報告 3	担当するテーマについての報告
第 7 回	受講者による報告 4	担当するテーマについての報告
第 8 回	受講者による報告 5	担当するテーマについての報告
第 9 回	受講者による報告 6	担当するテーマについての報告
第 10 回	受講者による報告 7	担当するテーマについての報告
第 11 回	受講者による報告 8	担当するテーマについての報告
第 12 回	受講者による報告 9	担当するテーマについての報告
第 13 回	受講者による報告 10	担当するテーマについての報告
第 14 回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

受講者は、毎回、報告で取り上げる芸術体験に関わる基本情報を得ておくこと。事典等でベースとなる知識を得、自分なりにテーマに対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。

【テキスト（教科書）】

庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房 1800 円＋税）ISBN978-4-907282-13-4

【参考書】

特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

コメントペーパー（Microsoft Forms により提出する事を予定。20 %）、発表（40 %）、レポート等の提出物（40 %）による総合評価。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

学外授業として、文学館への見学を予定している。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学

<研究テーマ> 芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容

<主要研究業績>

編著『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』（2013 双文社出版）

【Outline and objectives】

In this class ,we will exercise in how to read AKUTAGAWA Ryunosuke's words from an expert's point of view,while thinking background.

LIT500B2

能楽作品研究 A

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能の大成者世阿弥の芸談『世子六十以後申楽談儀』を通読し、能楽研究のために必要な基本情報を知るとともに、世阿弥時代の能楽に関する断片的な記事を作品研究や演出研究に生かす方法を学ぶ。昨年度からの継続テーマ。

【到達目標】

- ①世阿弥時代の能楽について『申楽談儀』に記されている内容を理解する。
- ②能の作品研究をする際に確認すべき項目やそのために参照すべき資料について習熟する。
- ③能の作品研究の様々な切り口を知る。
- ④世阿弥時代の断片的な記事を作品研究や演出研究に生かす方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

現代の能楽および、能楽研究に必須の基本文献の紹介等の後、『世子六十以後申楽談儀』を講読していく。世阿弥伝書や謡本など、能楽研究所所蔵の原本に触れる機会も採り入れる。新型コロナウイルスの感染状況により、オンライン授業となる場合も、許される範囲で、交代で研究所の原本資料に触れられるように工夫したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	『申楽談儀』を含む世阿弥伝書についての概説
第 2 回	『申楽談儀』の講読：18 条	能の装束・道具など
第 3 回	『申楽談儀』の講読：18 条続き・19 条	能装束・道具・面
第 4 回	『申楽談儀』の講読：20 条～21 条	狂言の名人・田舎の風体
第 5 回	『申楽談儀』の講読：21 条～22 条	十二権守の手紙・面のこと
第 6 回	『申楽談儀』の講読：23 条	猿楽諸座の由緒
第 7 回	『申楽談儀』の講読：23～24 条	猿楽諸座の由緒（続き）・世阿弥をめぐる霊験談
第 8 回	『申楽談儀』の講読：25～28 条	田楽の起源・松囃子・薪猿楽
第 9 回	『申楽談儀』の講読：29～31 条	猿楽役者の日常の心がけ
第 10 回	『申楽談儀』の講読：結崎座座規	結崎座の座規・奥書
第 11 回	『申楽談儀』の講読：追記・別本聞書	獅子舞・声の薬・南都雨悦びの能・別本聞書
第 12 回	関連論文の輪読	大和猿楽の歴史に関する重要論文を選び輪読・討議
第 13 回	関連論文の輪読	申楽談儀の記事が重要な k ン居となる作品研究を選び輪読
第 14 回	まとめ	これまでの内容の確認。作品研究に役立つ他の世阿弥伝書について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指定された関連論文を次回までに読んで、疑問点があればまとめておく。

授業で扱う作品について、どんな形で本文を用意し、内容も把握しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

岩波思想大系『世阿弥・禅竹』（表章・加藤周一）が理想。どうしても入手できない場合は岩波文庫『世子六十以後申楽談儀』（表章校注）

【参考書】

授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

学期末に課すレポート（60 %）、輪読の担当箇所 understanding（30 %）、通常の授業への貢献度（10 %）等を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度一年間で『申楽談儀』を通読する予定だったが、同書の理解に必要な、能に関する基礎知識を共有するのに相当の時間を費やすことになった。そのため通読はあきらめてゆっくりと進んできた結果、今年度も前期は『申楽談儀』を続け、最後まで読み通すことになった。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

特に春学期は世阿弥伝書や謡曲本文の理解に基づいて授業を進めるため、古文が読めない場合は受講が難しいと思います。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域> 能楽研究
- <研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
- <主要研究業績>

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020 年）

- ★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 巻 3 号・2016 年 3 月
- ★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐる―」『文学』16 巻 2 号・2015 年 3 月
- ★「「天女舞」応用の一形態―神と遊女が舞った菩薩の舞―」『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）

【Outline and objectives】

In this class, students will read Zeami's "Sarugaku dangi(Talks on Sarugaku)" and acquire the basic knowledge about noh plays in his period

LIT500B2

能楽作品研究 B

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能の作品研究に必要な技術を身につけ、能作品の特徴や魅力などについて自分の言葉で語れるようになる。

【到達目標】

- ①古写謡本を翻刻し、小段に分けて本文テキストを作れるようになる。
- ②他の古典作品とは違う能独特の用語や決まりに習熟する。
- ③世阿弥伝書の記事を作品の理解に役立てる方法を学ぶ。
- ④独特のレトリックを持つ謡曲本文の注釈に必要な方法を身につける。
- ⑤能の作品について主題や研究上の問題点等を明解に指摘できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

能楽研究所所蔵の文献資料及びその画像データ等を利用し、

- ①古写謡本の翻刻のしかたや校異のとりかた等を学ぶワークショップ
- ②能のテキスト独特の用語や演出上の決まりごと、注釈の方法等に関する講義
- ③各自が作品を選んでおこなう作品研究のミニ発表

を組み合わせて進めて行く。

新型コロナウイルスの流行により研究所が使えない場合はこちらから資料のデータを提供する。可能であれば、人数を分けて能楽研究所にて資料調査ができるよう工夫する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方についてのガイダンス。能楽研究所での文献利用方法。
第 2 回	能のテキスト通読（1）：〈融〉前半	能〈融〉前半の詞章を活字で読み、独特の構造や表記法、演出上のルール等について確認する。
第 3 回	能のテキスト通読（2）：〈融〉後半	能〈融〉後半の詞章を活字で読み、舞や囃子に関する記号なども確認する。
第 4 回	先行研究・世阿弥伝書記事等の確認	〈融〉に関する世阿弥伝書の記事・主要論文などを確認する。
第 5 回	ワークショップ：古写謡本（上掛り/下掛り）を読む	能〈融〉の古写本を読み、謡本に独特の用字法・記号を学ぶ。上掛りと下掛りの違いを知る。
第 6 回	ワークショップ：作品研究のための本文確定	翻刻、校合、小段分け等、〈融〉の本文を用い、作品研究用の謡曲本文の作り方を確認する。
第 7 回	テキストの厳密な解釈	〈融〉のテキストを現代語訳していきながら、読み物として通読することと作品研究のために読み込むことの違いを知る。
第 8 回	作品研究の論文に必要な情報の確認	能の作品研究で通常必要とされる情報と、それを論文に入れていく方法について確認する。
第 9 回	学生の発表と討議（1）	ここまでの授業を踏まえ、各自が選んだ作品について発表し、全員で討議する。

第 10 回	学生の発表と討議（2）	各自が選んだ作品について発表し、全員で討議する。
第 11 回	学生の発表と討議（3）	各自が選んだ作品についての発表と討議。
第 12 回	学生の発表と討議（4）	各自が選んだ作品についての発表と討議。
第 13 回	学生の発表と討議（5）	各自が選んだ作品についての発表と討議。
第 14 回	まとめ	レポートにまとめるための整理と復習。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

能の概説、小段理論等については、配布する資料を熟読して基礎知識を身につけてほしい。翻刻・小段分け・注釈等、すべて事前に各自が能楽研究所の資料や文献（オンラインの場合はこちらから配布）を使って準備する必要がある、特に慣れない間は長時間の予習が必要である。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは用いず、能研蔵の資料を利用する。

【参考書】

授業時に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

ワークショップでの翻刻、注釈等の成果（30 %）、ミニ発表の成果や他の発表への発言（30 %）、学期末のレポート（40 %）を総合して判断する。

【学生の意見等からの気づき】

能について少し知りたいと思って受講すると、古写本の翻刻や世阿弥伝書の参照など、負担が大きいのと感じる場合もあるようです。もちろん、やってみたいと思ってくれれば、いくらでも支援します。古文が読めない場合は、受講は難しいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 能楽研究
 ＜研究テーマ＞ 能の作品研究・演出研究
 ＜主要研究業績＞

★「修羅能以前の「平家の能」—〈経盛〉の再検討を通して—」
 軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020 年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 巻 3 号・2016 年 3 月

★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐる—」『文学』16 巻 2 号・2015 年 3 月

★「「天女舞」応用の一形態—神と遊女が舞った菩薩の舞—」『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to acquire the skills of studying Noh works and to become able to explain the features and charms of Noh works in your own words.

LIT500B2

能楽資料研究 A

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「翁」は平安末～鎌倉期には成立していたと見られる古い猿楽の芸能で、現代においても能楽の根幹に位置する芸能として大切に扱われている。この授業では、その「翁」がいかんにして成立し、どのように現代にまで受け継がれてきたかを、能楽に関する様々な文献、祭礼芸能、民俗芸能など、多様な資料を用いて読み解いていく。「翁」がこのように長年にわたって演じ継がれてきた最大の理由はどこにあるのか。それは、「翁」が「天下泰平国土安穩」や「家内安全」「寿命長遠」といった人々の祈願とともに演じられてきたという点にある。その「翁」のテキストをどのように読み解くことができるのか、武家社会や村落社会においてどのように「翁」が演じられてきたのか、これらの問題を担当教員の講義と受講生の発表を通じ、考察する。

【到達目標】

この授業は能楽をの「翁」をテーマに、能と社会との関わりについての総合的な考察を目的とする。そのため、能楽資料のほか、祭礼芸能、民俗芸能など、様々な資料を用い、それらを相互に吟味し、「翁」という芸能の本質を明らかにすることを目指す。そうした作業を通じ、古文書の読解能力、資料批判の能力を獲得できるようにするとともに、その上で受講者各自が能楽に対する歴史的な視点を確立することを最終的な到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は講義と受講生の発表とによって進められる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	「翁」の現在	「翁」が現代の能楽においてどのように伝承されているかを学ぶ。
第 2 回	中世芸能の成立	「翁」の成立を促した中世芸能の成立過程を学ぶ。
第 3 回	「翁」の成立圏	「翁」がどのような環境において成立したかを考察する。
第 4 回	翁面の種々相	「翁」において用いられる翁面の特徴を明らかにする。
第 5 回	「翁」のテキスト	「翁」の古いテキストにはどのようなものがあるかを概観する。
第 6 回	鎌倉時代の「翁」	鎌倉時代の「翁」の実態を民俗芸能などの事例から読み解く。
第 7 回	室町時代の「翁」	能楽成立以後の「翁」のあり方について考察する。
第 8 回	「翁」の異式演出	「翁」の多様な上演形態について概観する。
第 9 回	「翁」と猿楽座	「翁」の上演組織の実態について明らかにする。
第 10 回	「翁」と神事能	「翁」と神事能との関わりについて考察する。
第 11 回	「翁」と武家儀礼	武家儀礼の中で演じられた「翁」について考察する。
第 12 回	「翁」をめぐる信仰	「翁」をめぐる雨乞い、厄払いなどの信仰のあり方について考察する。
第 13 回	「翁」の秘伝	「翁」をめぐる秘伝書の伝授のあり方について考察する。

第 14 回 まとめ—「翁」とは何以上を踏まえて、「翁」とはいかか—なる芸能であるか、を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、授業・発表に備える。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。担当教員・発表者が作成した資料を授業にて配布。

【参考書】

授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献度（出席等）30%、発表 70 %

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な参加が可能となるよう、討議の時間を十分に設ける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究

<研究テーマ> 能楽史

<主要研究業績> 『上方能楽史の研究』『近世諸藩能役者由緒書集成』

【Outline and objectives】

Okina is a piece which has been treated with utmost importance and respect within nohaku. The character of the old man Okina appears and prays for peace throughout the world with the chant "tengataihei kokudoannon". This course deals with how does Okina have a special significance as a part of Japanese culture and history.

LIT500B2

能楽資料研究 B

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能の作品成立の問題を考える上で、世阿弥が果たした役割はすこぶる大きい。現在上演されている能の作品に世阿弥の作が占める割合はかなり大きく、それ以外の作品の多くも、世阿弥の影響を多かれ少なかれ受けている。そのため、世阿弥以前の能の作品の実態を知るのは至難の業となっているのである。そこで、この授業では、一度、世阿弥の手になる、あるいは世阿弥の影響下にある能の作品群から距離を置き、中世芸能の古いテキストや寺院芸能、民俗芸能など、様々な資料の断片をつなぎ合わせることで、世阿弥以前の能の痕跡を注意深く読み取り、能における神能や鬼能がいかにして成立したか、その起源が何であったかを探り、それらの先行作品を世阿弥がどのように展開させたのか、考えてみたい。

【到達目標】

この授業は神能と鬼能をテーマに、能と宗教との関わりについて総合的に考察することを目的とする。そのため、能楽資料のほか、宗教関係の説話伝承や寺院芸能・民俗芸能などを相互に吟味し、成立期の能の実態を明らかにすることを目指す。そうした作業を通じ、テキストの読解能力、資料批判の能力を獲得できるようにするとともに、その上で受講者各自が能楽に対する文化史的な視点を確立することを最終的な到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は講義と受講生の発表とによって進められる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	能における神と鬼	能の作品に登場する神と鬼を概観する。
第 2 回	神能と神仏習合—神の造形—	中世における神仏習合説が能にどのように反映されているかを考察する。
第 3 回	中世芸能における神—神楽と神がかり—	世阿弥以前の神能がどのようなものであったのかを考察する。
第 4 回	世阿弥以前の神能	世阿弥以前の神能がどのようなものであったのかを考察する。
第 5 回	世阿弥の神能	世阿弥が作り上げた神能の特徴を明らかにする。
第 6 回	世阿弥以後の神能	世阿弥以後の神能がどのように展開したかを明らかにする。
第 7 回	神能をめぐる諸問題	以上を総括して、神能にはどのような問題点があるかを整理する。
第 8 回	中世における鬼の概念	中世において鬼がどのように捉えられていたかを確認する。
第 9 回	中世芸能における鬼	能以外の中世芸能において鬼がどのように表現されていたかを明らかにする。
第 10 回	中世における鬼の造形	中世における鬼の造形が鬼面にどのように反映されているかを明らかにする。
第 11 回	世阿弥以前の鬼能	世阿弥以前の鬼能がどのようなものであったのかを考察する。
第 12 回	修羅がかりの鬼能	修羅がかりの鬼能の系譜について考察する。

- 第 13 回 唱導劇としての鬼能 唱導劇としての鬼能の系譜について考察する。
- 第 14 回 鬼能をめぐる諸問題 以上を踏まえて、鬼能の成立と展開を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、授業・発表に備える。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。担当教員・発表者が作成した資料を授業にて配布。

【参考書】

授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献度（出席等）30%、発表 70 %

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な参加が可能となるよう、討議の時間を十分に設ける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究

<研究テーマ> 能楽史

<主要研究業績> 『上方能楽史の研究』『近世諸藩能役者由緒書集成』

【Outline and objectives】

The noh piece today is one which contains a story with the main character often being a god or demon, or the ghost of a warrior or woman. This course deals with the origins of these Kami-noh(god noh) and Oni-noh(demon noh).

ART500B2

現代能楽論

山中玲子・観世鏡之丞・観世喜正・中司由起子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本が世界に誇る伝統芸能、能について基本的な知識を身につけ、その身体表現の特徴を知るとともに、現在の能をとりまく環境（新型コロナウイルス流行や少子高齢化など）の影響を通して、今を生きる能の課題と展望を考える。

【到達目標】

- 1) 能について、参考書を丸写しにした知識だけではなく、自分の言葉で説明できる。
- 2) 能の謡や所作の基本、舞台や装束の特性を自分の言葉で伝えることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オムニバス方式の授業である。授業日程には通常と異なる部分があるので、「授業計画」でよく確認してほしい。初回は祝日であるが、9月20日におこなう。

1) 映像資料も用いながら能についての基礎知識を学ぶ授業と、2) 第一線で活躍中の能楽師による、「役者の身体やその基礎となる稽古」「現代における能の公演形態の問題等を考える授業」を組み合わせ、現代の能楽に関する総合的な知見を身につけていく。能楽堂における実地授業（4コマ分）もおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	9月20日ガイダンス (中司・山中)	講義および実習についてのガイダンス。受講に必要な最低限の基礎知識を得る。
第2回	9月27日能楽師と流儀	次回以降の能楽師による講義に向けて、能楽師の舞台上の役割や流儀など、能の基本知識を得る。
第3回	10月4日能楽師の活動 (観世喜正)	家元制度や内弟子制度など、現代に生きる能楽師の暮らし（活動の実態）について学ぶ。
第4回	10月18日能の伝承 (観世鏡之丞)	能がどのように伝承されているのか、能楽師の修業について知る。
第5回	10月25日能の興行 (観世喜正)	能の興行がどのようにおこなわれるのか、計画の段階から当日までの流れをおさえ、新型コロナウイルス流行の影響と能界の対応を知る。
第6回	11月1日【オンデマンド】能楽師の修業 (観世鏡之丞)	能楽師自身の言葉を通して、芸を伝承していくことの意義について考える。
第7回	11月8日9時30分～12時30分 実習①（観世鏡之丞・中司・山中）	青山の鏡仙会能舞台にて実習。能舞台上を歩く。能の謡・舞の体験。第8回と連続授業。
第8回	11月8日9時30分～12時30分 実習②（観世鏡之丞・中司・山中）	青山の鏡仙会能舞台にて実習。装束付けの体験と見学。能面の見学。第7回と連続授業。
第9回	11月15日 これまでの振り返り (中司)	これまでの講義・実習の振り返りとミニ発表・討議。

第10回	11月29日 能の普及 (観世喜正)	国内での普及活動と海外への発信の状況を通して、能の普及の実態と今後の展開を考える。
第11回	12月6日 能の演技	映像を視聴して、能の演技の特色を学ぶ。
第12回	12月13日9時30分～12時30分 実習③（観世鏡之丞・中司・山中）	矢来能楽堂での実習。能舞台の特徴。能の謡と所作の体験。第13回と連続授業。
第13回	12月13日9時30分～12時30分 実習④（観世鏡之丞・中司・山中）	矢来能楽堂での実習。能装束に実際に触れ、その扱いを学ぶ。第12回と連続授業。
第14回	1月17日。レポート発表とディスカッション (山中・中司)	各自のレポートを発表し、討議をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講期間中に必ず実際に能楽堂へ足を運んで能を見て、その経験をレポートに生かしてもらいたい。実際の能公演を鑑賞するのが難しい場合は、NHKの古典芸能番組やYouTube等にも上がっている能の動画を必ず視聴してほしい。

【テキスト（教科書）】

テキストは用いない。適宜プリントを配布する。

【参考書】

受講前に、市販のガイドブックや宣伝チラシなど、何でも良いので自分なりに能についての情報を得ておいてほしい。「文化デジタルライブラリー」にも基本情報を載せてある。
<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>

【成績評価の方法と基準】

レポート（30%）。課題「現在の社会状況において能楽を普及、活性化するにはどうしたらよいか」、2回の実習への参加（50%）、平常点（20%。講義中の発言等）を総合して決める。

【学生の意見等からの気づき】

文系・理系の学生が混ざる珍しいクラスなので、最終回に出席者が互いの意見を聞き合う機会を設けた。最終回に限らず、通常の授業中でも、ちょっとした感想、小さな疑問など、遠慮せず、積極的に発言してほしい。

【その他の重要事項】

★第一線で活躍中の能楽師を講師に招いての授業なので、授業日程が多少変則的になっています。特に2回の実習授業は、学外の施設にて、1限・2限の時間帯2コマ分を使つての授業ですが、単位取得のためには2回の実習授業出席は必須としますので、よく考えて受講計画をたててください。

★実習時には足袋が必要となります。入手方法はガイダンスの際に伝えます。

【Outline and objectives】

The aim of this class is:

- 1) to learn basic information about Noh and its body techniques
- 2) to think about the meaning of Noh in modern society.

LIN500B2

日本語・日本文学の基礎A

竹林 一志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学の言語表現は如何なるものか、それをどのように解析すればよいのか、ということを学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。一字一句をゆるがせにせず、古典本文を丁寧に読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 日本古典文学の言語表現の特徴について、特定の作品の具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン授業の形式で行う（Zoomを使用する予定）。資料の配付や課題の提出は学習支援システムを用い、授業内でフィードバックをする。この授業では、いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、古代・中世・近世の文学作品を対象として表現解析を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える。
第2回	古典文法	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する。
第3回	表現解析の方法	日本古典文学の表現解析法について概説する。
第4回	『古今和歌集』所収歌の読解（先行研究についての検討）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に16番歌）について先行研究の論を検討する。
第5回	『古今和歌集』所収歌の読解（新たな解釈の提示）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に16番歌）の表現を解析する。
第6回	『枕草子』冒頭部の読解（先行研究についての検討）	『枕草子』冒頭部について先行研究の論を検討する。
第7回	『枕草子』冒頭部の読解（新たな解釈の提示）	『枕草子』冒頭部の表現を解析する。
第8回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（先行研究についての検討）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現について先行研究の論を検討する。
第9回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（新たな解釈の提示）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現を解析する。
第10回	『徒然草』第89段の読解（先行研究についての検討）	『徒然草』第89段について先行研究の論を検討する。
第11回	『徒然草』第89段の読解（新たな解釈の提示）	『徒然草』第89段の表現を解析する。
第12回	松尾芭蕉の俳句の読解（先行研究についての検討）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」について先行研究の論を検討する。
第13回	松尾芭蕉の俳句の読解（新たな解釈の提示）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」の表現を解析する。

第14回 総括

本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各3時間を標準とする。各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。授業後は、配付物やノートを見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院、2009年、2,200円（税別）

【参考書】

『徒然草抜書』小松英雄、講談社
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：60%
平常点（提出物・受講姿勢）：40%

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

Zoom 授業を受けるために必要なデバイスや通信環境を整えておくてください。

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』いのちのことば社、2014年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年

【Outline and objectives】

In this class we study about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to improve the skills for reading Japanese classical literature. We try not to neglect any word or phrase in the texts. This class is mainly intended for overseas students.

LIN500B2

日本語・日本文学の基礎B

竹林 一志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『伊勢物語』第1段～第15段を丁寧に読み解きながら、日本古典文学の言語表現と、その解析法について学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。仮名文の性質を理解し、ディスコースの中で表現を読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 『伊勢物語』の言語表現の特徴について、具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン授業の形式で行う（Zoomを使用する予定）。資料の配付や課題の提出は学習支援システムを用い、授業内でフィードバックをする。この授業では、テキストを用い、おもに演習形式（受講者の分担発表と出席者全員による討議）で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」の読解	本授業の全体像を伝えた後、テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」を一緒に読む。発表の分担も行う。
第2回	テキスト「イントロダクション」の読解	担当教員作成のワークシートをもとに、テキスト「イントロダクション」を読み解く。
第3回	第1段「昔、を」とこ「心地まどひにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「昔、を」とこ「心地まどひにけり」の表現を解析する。
第4回	第1段「を」とこの着たりける」「雅をなむしける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「を」とこの着たりける」「雅をなむしける」の表現を解析する。
第5回	第2段・第3段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第2段・第3段の表現を解析する。
第6回	第4段・第5段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第4段・第5段の表現を解析する。
第7回	第6段～第8段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第6段～第8段の表現を解析する。
第8回	第9段「昔、を」とこ「ありけり」～「ほとびにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「昔、を」とこ「ありけり」～「ほとびにけり」の表現を解析する。
第9回	第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の表現を解析する。

第10回	第9段「なほ行き行きて」～「こぞりて泣きにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「なほ行き行きて」～「こぞりて泣きにけり」の表現を解析する。
第11回	第10段～第12段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第10段～第12段の表現を解析する。
第12回	第13段・第14段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第13段・第14段の表現を解析する。
第13回	第15段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第15段の表現を解析する。
第14回	総括	本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各3時間を標準とする。各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。授業後は、テキストやノート、発表者のレジュメを見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『伊勢物語の表現を掘り起こす』小松英雄、笠間書院、2010年、1,900円（税別）

【参考書】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表・提出物・受講姿勢）：60％
レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：40％

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

Zoom 授業を受けるために必要なデバイスや通信環境を整えておくてください。

【その他の重要事項】

春学期科目「日本語・日本文学の基礎A」（「日本語の歴史と現在Ⅰ」）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『聖書で読み解く『氷点』』続『氷点』いのちのこば社、2014年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年

【Outline and objectives】

In this class we carefully read 'The tale of Ise' (from chapter 1 through 15) for studying about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to understand the characteristics of classical texts written in *kana* and interpret the linguistic expressions precisely in the context. This class is mainly intended for overseas students.

LIT500B2

表現と社会

内藤 裕之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知的財産権について理解し、現実にかかる事例に沿って、争点を理解することで、実生活における的確な判断が行えることを目指す。

【到達目標】

事例に対して、自身の判断ができること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講人数によって変更するが、基本的には前半を知的財産権についての講義、後半を実際の判例に基づく各人の発表形式で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	授業概観と進め方	半期全体の進め方と手順
第2回	知的財産権とは何か	知的財産権について考える
第3回	知的財産権の判例を検討する	争点の分析、判決について現場との乖離を考える。
第4回	ジャンルで考える	言語、写真、建築、美術などジャンルによる権利侵害の比較。
第5回	メディアで考える	メディアの種類による比較。
第6回	実際の判例に関する解説1	判決からみる、侵害の理由
第7回	実際の判例に関する解説2	判決からみる、侵害の理由
第8回	受講者が関心を持った実際の判例①を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第9回	受講者が関心を持った実際の判例②を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第10回	受講者が関心を持った実際の判例③を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第11回	受講者が関心を持った実際の判例④を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第12回	受講者が関心を持った実際の判例⑤を検討する5	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第13回	受講者が関心を持った実際の判例⑥を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第14回	総括	全体に関する締めくくりと、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

判決の出ている知的財産権についての訴訟例を探し、自身で判決内容について検討する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

裁判例を探して課題点を発表すること60%、他の発表者への積極的質問、発言など30%、平常点10%。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

対面形式とします。

【担当教員の専門分野等】

総合出版社の講談社で、「FRIDAY」「PENTHOUSE」「群像」「小説現代」などの雑誌編集や、文庫、書き下ろし単行本の企画、編集、また文芸分野の責任者。

【Outline and objectives】

By understanding intellectual property rights and understanding the issues in line with actual cases, we aim to make accurate decisions in real life.

LIT500B2

編集理論

仲俣 暁生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「編集」という行為がもつ創造的機能をさまざまな現代日本の雑誌の事例をもとに理解する。

【到達目標】

「編集」という行為の価値を理解することを通して、日本における出版メディアの現代史についての基礎的な知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義を中心としつつも、各自が課題を設定しての研究レポートや討論をおりまぜる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	「編集」（エディターシップ）とは何か	この講義において取り扱う「編集」の範囲について確定し、全体のオリエンテーションとする。
第 2 回	編集されたメディアとしての「雑誌」	「雑誌」というメディアを編集という観点から概観する。
第 3 回	雑誌における「編集者」とはなにか	雑誌において「編集者（editor）」が担うさまざまな機能を理解する。
第 4 回	「雑誌」のケーススタディ①～文芸誌／論壇誌の場合	おもに文芸、論説などをあつかう雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 5 回	「雑誌」のケーススタディ②～ビジュアル雑誌の場合	グラフィカルな要素をもつ雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 6 回	「雑誌」のケーススタディ③～ジャンル雑誌の場合	特定のジャンルに根ざした雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 7 回	「雑誌」のケーススタディ④～ミニコミ、ジンの場合	ミニコミやジンと呼ばれる「小さなメディア」を「編集」という観点から分析する。
第 8 回	「雑誌」における編集についての中間まとめと討議	ケーススタディ①から③までを受けて学生をまじえてディスカッションを行う。
第 9 回	「編集」の拡散	出版以外の世界に「編集」という行為が広がっていることを理解する。
第 10 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ①～ワールドワイドウェブの登場	インターネット上における「編集」行為の場としての WWW のもつ意義を理解する。
第 11 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ②～ウェブ 2.0 以後	「ウェブ 2.0」以後に起きた WWW の変質について「編集」という観点から理解する。
第 12 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ③～ソーシャルメディア	ソーシャルメディア勃興による「編集」の危機について理解する。

第 13 回 あらたな「編集」に向けての討議

第 14 回 総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。講義内で培った「編集」への問題意識をもとに、身のまわりの出版物やメディア環境をとらえかえすこと。具体的な出版物（雑誌や書物、ウェブサイト）およびそれを編集している人物（編集者）や出版主体について、つねに関心を抱くことが望まれる。

【テキスト（教科書）】

必要な教材は講義の際に配布する。とくに教科書は指定しないが、参考図書には自発的に目を通すことを推奨する。

【参考書】

・外山滋比古『新・エディターシップ』（みすず書房、2009）
 ・佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店、2015）
 ・野中モモ、ばるばら『日本の ZINE について知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史 1960～2010 年代』（誠文堂新光社、2017）
 ・赤田祐一、ばるばら『20 世紀エディトリアル・オデッセイ：時代を創った雑誌たち』（誠文堂新光社、2014）
 ・仲俣暁生『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）

【成績評価の方法と基準】

講義に対する姿勢＝30％、自主課題への取り組み＝30％、最終レポート＝40％

【学生の意見等からの気づき】

昨年度はすべてオンラインでの開講となったため、事前に参考資料の配布を行った。今季は対面講義となる場合も、できるだけ事前予習が可能となるようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン講義となる可能性があるため、なるべく良好な通信環境とパソコンの用意を望む。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>出版論、メディア論

<研究テーマ>雑誌研究、メディア環境論、現代日本文学論

<主要研究業績>

- ①『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）
- ②編著『「電子社会」誕生～日本語ワープロからインターネットまで』（晶文社、1998）
- ③『極西文学論』（晶文社、2004 年）

【Outline and objectives】

To understand the creative function of "editorship" through the case studies of various magazines in modern Japan.

LIT500B2

作家特殊研究 A

伊藤 比呂美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

豊富なキャリアをもちなお第一線で活躍をつづける文芸創作作家が授業を担当し、学生たちはその作家の著作に於ける試みと成果を踏まえた、研究や創作物の発表を行います。それらの鑑賞と評価を通じて、一方通行の教授とは一線を画す、作家と大学院との創造的対話を実践します。

【到達目標】

自分の文学をみつける。文学で生きのびる術を身につける。そして「伊藤比呂美研究」の冊子を作ります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ゼミナール形式の研究発表。対話。講義形式。対面。オンライン。ZOOM。LINE。などを織り交ぜながら授業を進めます。学生それぞれが担当講師の作品研究を行い、その文学についての理解を深めます。みなさんが熊本に来ることができれば、フィールドワークもできます。【その他の重要事項】を見てください。に日程の予定（あくまで予定）が書いてあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の内容について概説する。
第2回	研究作品決定	研究発表する作品を決める。
第3回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第4回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第5回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第6回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第7回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第8回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第9回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第10回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第11回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第12回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第13回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第14回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

伊藤作品を読んで研究して発表にそなえる。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

伊藤比呂美諸作品。詩から小説、エッセイ、人生相談、お経の翻訳、絵本まで、いろいろあります。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】

作品研究の内容、および受講態度によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

担当講師が単年交代する授業であるため、とくにありません。

【学生が準備すべき機器他】

LINE に入っておいてください。

【その他の重要事項】

伊藤が熊本在住につき、隔週で2限つづけて授業をするつもりです。ときどきオンラインで授業する可能性もあります。その場合はLINEを黑板代わりに使います。いま予定している授業日は下記のとおり。

春学期

4/9、4/23、5/14、5/28、6/11、6/25、7/9

※初回授業日の4/9は対面授業を予定しています

秋学期

9/24、10/8、10/22、11/12、11/26、12/10、12/24

今はこのようにあいまいな予定ですが、まだやり方がわからないだけなのです。始めたら、誠心誠意対応してひとりひとりの文学の発見を手伝います。

【担当教員の専門分野等】

現代文学・現代詩。著書に『現代詩文庫 94 伊藤比呂美詩集』（現代詩）『河原荒草』（現代詩）『とげ抜き新巢鳴地蔵縁起』（現代詩・語り物・説経節）『読み解き般若心経』（小説・経典の翻訳）『切腹考』（小説・切腹）『なっちゃんのなつ』（絵本）『女の一生』（人生相談）『道行きや』（小説・エッセイ・詩）『犬心』（犬）『木霊草霊』（植物）『ウマし』（食べ物）『新訳説経節』（説経節）他

【Outline and objectives】

Hiromi Ito, a poet, covers the broad field, such as poetry, short stories, children's books, translation from classical works, essays about ecology, gender issues, is going to teach about her writing method/experience. Students learn to find their own literature and the means to live through their literary work.

LIT500B2

作家特殊研究 B

伊藤 比呂美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

豊富なキャリアをもちなお第一線で活躍をつづける文芸創作作家が授業を担当し、学生たちはその作家の著作に於ける試みと成果を踏まえた、研究や創作物の発表を行います。それらの鑑賞と評価を通じて、一方通行の教授とは一線を画す、作家と大学院との創造的対話を実践します。

【到達目標】

自分の文学をみつける。文学で生きのびる術を身につける。そして「伊藤比呂美研究」の冊子を作ります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ゼミナール形式の研究発表。対話。講義形式。対面。オンライン。ZOOM。LINE。などを織り交ぜながら授業を進めます。学生それぞれが担当講師の作品研究を行い、その文学についての理解を深めます。みなさんが熊本に来ることができれば、フィールドワークもできます。【その他の重要事項】を見てください。に日程の予定（あくまで予定）が書いてあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	講義の内容について概説する。
第 2 回	研究作品決定	研究発表する作品を決める。
第 3 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 4 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 5 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 6 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 7 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 8 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 9 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 10 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 11 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 12 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 13 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。
第 14 回	作家との対話。研究発表。	作家との対話。研究発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

伊藤作品を読んで研究して発表にそなえる。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

伊藤比呂美諸作品。詩から小説、エッセイ、人生相談、お経の翻訳、絵本まで、いろいろあります。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】

作品研究の内容、および受講態度によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

担当講師が単年交代する授業であるため、とくにありません。

【学生が準備すべき機器他】

LINE に入っておいてください。

【その他の重要事項】

伊藤が熊本在住につき、隔週で 2 限つづけて授業をするつもりです。ときどきオンラインで授業する可能性もあります。その場合は LINE を黑板代わりに使います。いま予定している授業日は下記のとおり。

春学期

4/9、4/23、5/14、5/28、6/11、6/25、7/9

秋学期

9/24、10/8、10/22、11/12、11/26、12/10、12/24

今はこのようにあいまいな予定ですが、まだやり方がわからないだけなのです。始めたら、誠心誠意対応してひとりひとりの文学の発見を手伝います。

【担当教員の専門分野等】

現代文学・現代詩。著書に『現代詩文庫 94 伊藤比呂美詩集』（現代詩）『河原荒草』（現代詩）『とげ抜き新巢鴨地蔵縁起』（現代詩・語り物・説経節）『読み解き般若心経』（小説・経典の翻訳）『切腹考』（小説・切腹）『なっちゃんのなつ』（絵本）『女の一生』（人生相談）『道行きや』（小説・エッセイ・詩）『犬心』（犬）『木霊草霊』（植物）『ウマし』（食べ物）『新訳説経節』（説経節）他

【Outline and objectives】

Hiromi Ito, a poet, covers the broad field, such as poetry, short stories, children's books, translation from classical works, essays about ecology, gender issues, is going to teach about her writing method/experience. Students learn to find their own literature and the means to live through their literary work.

LIT500B2

文芸創作研究 A

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

五感と言葉の関係を構築し直し、表現能力を拡張する。創作、批評がそのまま商品となるような実践的な指導を目指す。表現手段は小説、詩、映像、漫画などさまざまな形態が考えられよう。古今東西の主要作品がどのように描かれてきたかの検証を行いつつ、より能動的に創作活動を行い、書きつつ学ぶ。

【到達目標】

春学期・秋学期一編ずつの短編もしくは通年で一本の中編を仕上げる。その作業は各自で行うが、共同で作品の映像化を試みたり、現代文学の批評を試みたりする。文芸誌の新人賞獲得を目指し、さらには書き手としての実践的ノウハウを身につける。授業内で発表した小説、学期末に完成させた小説を評価の対象とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義とワークショップを交互に行う。個々のテーマによる創作は、随時発表の機会を作る。書くことと読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説の書き方 ABC を論じる。また映像化された古典や文学作品を研究し、文章表現の映像化のプロセスを検証し、実際にシナリオ化、撮影をしてみる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	文学とはどんな営みか？	日本語とはどういう言語か？ 書く動機
2	ジャンル論	ロマンスと小説の違い 漱石の試み
3	小説の構成	起承転結とストーリー
4	一人称	人称の研究 私語り。日記私小説
5	140字から始める	実践編 他者としての私
6	三人称	語り手の発明
7	神話の活用	素材と方法の組み合わせ 神話を現代化する。
8	夢の活用 1	漱石「夢十夜」の研究
9	夢の活用 2	夢を素材にショートショートを書く
10	小説のトポロジー 1	場所論 小説の舞台。上京小説。ロードノベル
11	小説のトポロジー 2	フィールドワーク 場所を描く 都内のある場所を選び、その印象、空間を描写してみる。
12	描写の手法	古今東西の優れた描写のサンプリングとテーマを決め、描写の腕を磨くワークショップ
13	小説のテーマの研究 1	労働を描く 奇妙な仕事 エキスパートの世界
14	短編小説	各人のテーマと題材による短編執筆指導

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指示したテキストを読み込んでくること。文芸誌の新人賞への応募。

【テキスト（教科書）】

『小説作法 ABC』島田雅彦著 新潮選書 2009

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

【参考書】

授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席、各回の課題の消化具合、セメスター末に提出が義務づけられている創作の出来で評価する。評価基準はレポート課題 80 %、平常点 20 % とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

<研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究

<主要研究業績>

小説作法 ABC 新潮選書 2008

徒然王子全 2 巻 朝日新聞出版 2009

悪貨 講談社 2010

傾国子女 文藝春秋 2013

ニッチを探して 新潮社 2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社 2014

暗黒寓話集 文藝春秋 2014

虚人の星 講談社 2015

【Outline and objectives】

Rebuild the relationship between the senses and words and extend the expression skill. While aiming at practical guidance that creation and criticism become sellable products in various forms such as novels, poetry, images, cartoons, etc. While conducting verification on how major works have been drawn, we will activate creative abilities and learn skills while writing.

LIT500B2

文芸創作研究 B

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

五感と言葉の関係を構築し直し、表現能力を拡張する。創作、批評がそのまま商品となるような実践的な指導を目指す。表現手段は小説、詩、映像、漫画などさまざまな形態が考えられよう。古今東西の主要作品がどのように描かれてきたかの検証を行いつつ、より能動的に創作活動を行い、書きつつ学ぶ。

【到達目標】

春学期・秋学期一編ずつの短編もしくは通年で一本の中編を仕上げる。その作業は各自で行うが、共同である作品の映像化を試みたり、現代文学の批評を試みる。文芸誌の新人賞獲得を目指し、さらには書き手としての実践的ノウハウを身につける。授業内で発表した小説、学期末に完成させた小説を評価の対象とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義とワークショップを交互に行う。個々のテーマによる創作は、随時発表の機会を作る。書くことと読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説の書き方 ABC を論じる。また映像化された古典や文学作品を研究し、文章表現の映像化のプロセスを検証し、実際にシナリオ化、撮影をしてみる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	小説の時間 1	過去とどう向き合うか 歴史上の人物、過去の出来事とどう向き合うか
2	小説の時間 2	記憶、時間軸、回想
3	小説のテーマの研究 2	愛の形 異性愛、同性愛 変態性欲
4	写生文	漱石の散文理論のリサイクル
5	キャラクター作り 1	魅力的な人物造型の実践 競作
6	キャラクター作り 2	魅力的な人物造型の実践 競作
7	小説のテーマの研究 3	死のデザイン あの世の研究 自殺 病気小説
8	小説のテーマの研究 4	交換 経済と文学 贋金づくり 詐欺というフィクション
9	創作	素材選び、プロット作り
10	創作	細部の検討、構成
11	鑑賞 1	文芸批評の実践
12	鑑賞 2	映画評、音楽評
13	創作中間発表	進行状況の報告
14	個人面談	細部のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指示したテキストを読み込んでくること。文芸誌の新人賞への応募。ゼミ主催のウェブマガジンへの発表。

【テキスト（教科書）】

『小説作法 ABC』島田雅彦著 新潮選書 2009

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

【参考書】

授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席、各回の課題の消化具合、セメスター末に提出が義務づけられている創作の出来で評価する。評価基準はレポート課題 80 %、平常点 20 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

<研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究

<主要研究業績>

小説作法 ABC 新潮選書 2008

徒然王子全 2 巻 朝日新聞出版 2009

悪貨 講談社 2010

傾国子女 文藝春秋 2013

ニッチを探して 新潮社 2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社 2014

暗黒寓話集 文藝春秋 2014

【Outline and objectives】

Rebuild the relationship between the senses and words and extend the expression skill. While aiming at practical guidance that creation and criticism become sellable products in various forms such as novels, poetry, images, cartoons, etc. While conducting verification on how major works have been drawn, we will activate creative abilities and learn skills while writing.

OTR600B2

日本文芸特殊研究 I A

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を精読する。

【到達目標】

万葉集の注釈書を精読し、研究史を理解する。学生が万葉集注釈書が抱える問題点についての的確に説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

万葉集の中から各自研究テーマ・作品を選び、注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を発表する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集注釈の歴史を概観し、研究史の流れを理解する。
第 2 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 3 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 4 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 5 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 6 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 7 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 8 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 9 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 10 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 11 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 12 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 13 回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第 14 回	まとめ	万葉集注釈の歴史の意義と問題点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、宿題など、毎週 3 時間以上の学習を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き。

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本上代文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集などの研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

Carefully read the Manyoshu.

OTR600B2

日本文芸特殊研究 I B

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を精読する。

【到達目標】

注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を検討し、万葉集読解の基本的力を養う。学生が作品論研究の抱える問題点についての的確に説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

万葉集の中から各自研究テーマ・作品を選び、注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を発表する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の歴史と問題点について概説する。
第 2 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 3 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 4 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 5 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 6 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 7 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 8 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 9 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 10 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 11 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 12 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 13 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 14 回	まとめ	万葉集研究の歴史と研究方法の問題点について確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、課題など、毎週 3 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本上代文学

＜研究テーマ＞古事記、万葉集の研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島一万葉集 卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群についてー」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

Carefully read the Manyoshu（万葉集）.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅱ A

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学を研究するにあたっては、注釈的な方法により本文を読むことが求められる。この授業では中世の刀剣伝承を集成した『剣巻』（『平家物語』『太平記』の一部の伝本の付録として流布）を素材に用い、輪読を行う。

【到達目標】

本授業の到達目標は以下のとおりとする。

1. 『剣巻』を的確に口語訳する作業を通じて、中世の文学作品を原文で読む力を習得する。
2. 現代の辞書、索引、データベースのみならず、他作品、資史料、古辞書等も使用して語釈を行い、作品の解釈を深める力を修得する。
3. 『剣巻』を通じて、怪異と刀剣をめぐる中世の伝承世界について一定の理解をもつ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業では、『剣巻』を素材として、履修者が各種の工具書、資史料、データベース等を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は本文2頁を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。また、授業に関する質問や研究指導は、授業時とオフィスアワーで対応する。なお、授業は来校できない学生がいることも考慮し、ハイフレックス方式で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	作品解説1	軍記物語・説話・お伽草子の歴史について概説する。
第2回	作品解説2	『剣巻』について概要を解説する。
第3回	作品講読1	p.409～412の講読。
第4回	作品講読2	p.413～416の講読。
第5回	作品講読3	p.417～420の講読。
第6回	作品講読4	p.421～424の講読。
第7回	作品講読5	p.425～428の講読。
第8回	作品講読6	p.429～432の講読。
第9回	作品講読7	p.433～436の講読。
第10回	作品講読8	p.437～440の講読。
第11回	作品講読9	p.441～444の講読。
第12回	作品講読10	p.445～448の講読。
第13回	作品講読11	p.449～450の講読。
第14回	まとめ	『剣巻』の文学史的位置づけについて確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

市古貞次校注・訳、完訳日本の古典『平家物語』四（小学館、1989年）。ただし、絶版のため、古書またはコピーを手許においてほしい。

【参考書】

大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編『平家物語大事典』（東京書籍、2010年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70％）、討論への貢献（30％）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【Outline and objectives】

In this course, we will read Tsurugi-no-Maki.

OTR600B2

日本文芸特殊研究ⅡB

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学を研究するにあたっては、既存の注釈書を批判的に読み、そこから問題点を見出だすことが大切である。この授業では『徒然草』を素材に、既存の注釈書を読み比べながら、この作品の課題を洗い出す。

【到達目標】

本授業の到達目標は以下のとおりとする。

1. 『徒然草』の代表的な注釈書を読み比べ、注釈の差異を指摘し、課題を読み取る能力を身に付ける。
2. 注釈書間における解釈の差に対し、どの説が妥当なものか判断する方法を身に付ける。
3. 『徒然草』をより深く読む姿勢と能力を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業では、『徒然草』の現代の代表的な注釈書（テキスト（教科書）欄参照）を複数とりあげ、読み比べる。そのなかで、注釈書間に解釈に差のある部分を見出だし、その違いを説明し、どの説が妥当かを検討し、その結果を口頭発表してもらう。履修者は1段を分担し、調査内容をレジュメにまとめ、発表するものとする。また、授業に関する質問や研究指導は、授業時とオフィスアワーで対応する。なお、授業は来校できない学生がいることも考慮し、ハイフレックス方式で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	作品解説1	『徒然草』について概説する。
第2回	作品解説2	『徒然草』の注釈書について解説する。
第3回	作品講読1	序段の講読。
第4回	作品講読2	第一段の講読。
第5回	作品講読3	第二段の講読。
第6回	作品講読4	第三段の講読。
第7回	作品講読5	第四段、第五段の講読。
第8回	作品講読6	第六段の講読。
第9回	作品講読7	第七段の講読。
第10回	作品講読8	第八段の講読。
第11回	作品講読9	第九段の講読。
第12回	作品講読10	第十段の講読。
第13回	作品講読11	第十一段の講読。
第14回	作品講読12	第十二段の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
分担箇所語訳・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

安良岡康作『徒然草全注釈』（角川書店、1967年）
三木紀人『徒然草 全訳注』（講談社学術文庫、1979年）
久保田淳『方丈記 徒然草』（岩波書店・新日本古典文学大系、1989年）
稲田利徳『徒然草』（貴重本刊行会、2001年）
小川剛生『新版 徒然草』（角川ソフィア文庫、2015年）

【参考書】

田辺爵『徒然草諸注集成』（右文書院、1962年）
桑原博史『徒然草研究序説』（明治書院、1976年）

三谷栄一・峯村文人『徒然草解釈大成』（有精堂出版、1986年）
小松英雄『新版 徒然草抜書』（花鳥社、2020年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70％）、討論への貢献（30％）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【Outline and objectives】

In this course, we will read Tsurezuregusa.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅲ A

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では研究文献を通じて日本文学とその周辺各分野の研究法を学び、その要件を考える。江戸～明治時代をおもな対象とし、文学・美術・芸能・思想など諸分野の論考を取りあげる。

【到達目標】

- (1) 各分野の研究アプローチの方法や要件を知り、またそれらに共通する点について説明できるようになる。
- (2) 文献から論点を探し、研究を発展させる視点を自分なりに獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究テーマを勘案して毎回、前の週に論文を配付する。各回の担当者は、その論文のテーマとその背景、内容、課題・問題をまとめて発表し、全員で議論する。そのなかでよい論文に求められるものについての理解を深める。
発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究とは	学際研究の課題
第 2 回	授業の進め方	一文献を例に本授業の発表方法についての理解を共有する。
第 3 回	文献講読 1 A	文学篇①
第 4 回	文献講読 1 B	同上
第 5 回	文献講読 2 A	文学篇②
第 6 回	文献講読 2 B	同上
第 7 回	文献講読 3 A	美術篇
第 8 回	文献講読 3 B	同上
第 9 回	文献講読 4 A	芸能篇
第 10 回	文献講読 4 B	同上
第 11 回	文献講読 5 A	思想篇
第 12 回	文献講読 5 B	同上
第 13 回	文献講読 6 A	歴史篇
第 14 回	文献講読 6 B	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
前の週に配られた文献を読んでくること。
5 月の土曜日にケンブリッジ大学の大学院生との交流研究発表会を 2 回実施しますので、参加してください。小林ゼミ所属学生（修士・博士とも）は発表を必須とします。

【テキスト（教科書）】

コピーを配布する。

【参考書】

適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 50 %、授業中の質疑などの参加態度 50 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の関心に即して文献を選択するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ> 大田南畝・江戸狂歌を中心とする近世中期文学・文化の研究

<近年の主要著書>

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル [インターナショナル新書] 2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

<共著>

『最後の文人石川淳の世界（仮題）』（集英社 [集英社新書] 2021）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『奇妙の江戸文学史』（文学通信 2019）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（共著 笠間書院 2014）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編 笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（江戸狂歌研究会編 共著 笠間書院 2014）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

【Outline and objectives】

Learning difference of disciplines to approach Tokugawa-Meiji period cultures by reading essays from various fields including literature, art history, performing arts, history etc.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅲ B

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、受講生相互の研究分野についての発表を通じて、学際的な日本研究をいかに意義づけるかについて、多様な視点から考える。

【到達目標】

- (1) 日本近世・近代文化研究がどのような学問領域にまたがっているかを認識する。
- (2) 日本文化史研究という広い視野で自らの研究の位置づけを説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は受講生が自らの研究において最重要と考える文献を紹介することを通じて、事例に則して「いい論文」とは何かを考える。後半は受講生相互の研究発表とする。発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究をどう意義づけるか（講義）
第2回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（1）
第3回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（2）
第4回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（3）
第5回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（4）
第6回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（5）
第7回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（6）
第8回	中間まとめ 討論	「いい論文」「いい研究」とは？
第9回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論1
第10回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論2
第11回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論3
第12回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論4
第13回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論5
第14回	まとめ	全体をふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
事前に配付された文献を読んでくるようにしましょう。

【テキスト（教科書）】
適宜配付します。

【参考書】
随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告50%、授業中の質疑などの参加態度50%によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な討論を期待します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・文化

＜研究テーマ＞近世中期文学・文化の研究

＜近年の主要論文＞

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113号 2021

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020

「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（勉誠出版）2019

「『書籍を模擬する遊び—「見立絵本」にかんする疑問、から—」『京都語文』26号 2018

【Outline and objectives】

Thinking how to attach significance to your interdisciplinary study/dissertation in a field of Japanese Studies

OTR600B2

日本文芸特殊研究ⅣA

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程 1 年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程 2 年次生は春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明
第 2 回	研究課題の紹介（2 年次生）①	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告
第 3 回	研究課題の紹介（2 年次生）②	同上
第 4 回	研究課題の紹介（2 年次生）③	同上
第 5 回	関心対象の紹介（1 年次生）①	関心対象について、学術研究の可能性を考える
第 6 回	関心対象の紹介（1 年次生）②	同上
第 7 回	修士課程の中間報告（2 年次生）①	国際日本学合同演習の中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第 8 回	修士課程の中間報告（2 年次生）②	同上
第 9 回	研究動向の確認（1 年次生）	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討
第 10 回	先行研究の論旨の整理（2 年次生）①	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討
第 11 回	先行研究の論旨の整理（2 年次生）②	同上
第 12 回	先行研究の論旨の整理（1 年次生）①	同上
第 13 回	先行研究の論旨の整理（1 年次生）②	同上
第 14 回	夏期休暇中の作業計画立案	各自が行うべき作業の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 5 分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014 年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013 年）◇付録 CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：筆簾《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・筆簾・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「工尺譜の起源をめぐって—唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集 文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』和泉書院、2013 年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR600B2

日本文芸特殊研究ⅣB

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程 1 年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程 2 年次生は秋学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第 2 回	修士論文構想の報告（2 年次生）①	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告
第 3 回	修士論文構想の報告（2 年次生）②	同上
第 4 回	先行研究の紹介と整理（1 年次生）①	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ
第 5 回	先行研究の紹介と整理（1 年次生）②	同上
第 6 回	修士課程の中間報告（1 年次生）①	国際日本学合同演習の中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第 7 回	修士課程の中間報告（1 年次生）②	同上
第 8 回	修士論文の中間報告（2 年次生）①	修士論文執筆の進捗状況に関する報告
第 9 回	修士論文の中間報告（2 年次生）②	同上
第 10 回	修士論文の構想発表（1 年次生）①	学術的な論理展開に基づき、修士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す
第 11 回	修士論文の構想発表（1 年次生）②	同上
第 12 回	修士論文提出前の総点検（2 年次生）	論文構成、要旨、英文要旨、参考文献などについて点検を行う

第 13 回 担当教員による年末講義 担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義

第 14 回 まとめ 1 年次生は春季休暇中の作業課題に関する計画を示し、2 年次生は提出論文について報告し、講評を受ける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014 年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013 年）◇付録 CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：筆箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・筆箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009 年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

BSP500B2

日本文学・国際日本学基礎演習

本塚 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本に関する各種の文献を読み、その内容を要約し、それに対する自分自身の見解を小論文形式の文章にまとめることで、日本研究に求められる基礎的能力を養う。

【到達目標】

- 1、日本の言語・文学・歴史・文化・社会等に関する論文を読み、その内容・着眼点・意義等について理解する。
- 2、文献の内容を要約する作業を通して、読解力と文章力を高める。
- 3、自分自身の見解を小論文形式でまとめ、学術論文に相応しい文章を書けるようにする。
- 4、修士論文執筆のための研究計画を具体的にし、文章化する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

原則として、対面形式での授業を行う予定です。

まず日本の各分野（言語・文学・歴史・文化・社会等）に関する論文を読みます。そして、その内容を 400 字程度の文章で要約し、自分自身の見解を 800 字程度の小論文にまとめます。さらに、履修者同士で小論文を読み合い、論文の内容について討論を行います。また、履修者は修士論文執筆に向けた研究計画書の作成を行います。なお、履修者が執筆した要約・小論文・研究計画書には、担当教員がすべて添削を行い、返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	国際日本学とは何か	国際日本学とは何かを解説し、その研究方法について説明する。
第 2 回	研究の進め方	大学院修士課程での研究の進め方について説明する。
第 3 回	法政大学図書館のデータベースの使用法	法政大学図書館で利用できるオンラインデータベースについて説明する。
第 4 回	オンラインデータベースの活用文献検索の方法	NDL オンラインほか、各種の文献検索ツールについて説明する。
第 5 回	研究倫理について	剽窃をはじめとする研究不正の概要を説明し、正しい研究のあり方を共有する。
第 6 回	課題論文 A1（日本語）	課題論文 A を読み、要約する。
第 7 回	課題論文 A2（日本語）	課題論文 A に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 8 回	課題論文 B1（日本文化）	課題論文 B を読み、要約する。
第 9 回	課題論文 B2（日本文化）	課題論文 B に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 10 回	課題論文 C1（日本社会）	課題論文 C を読み、要約する。
第 11 回	課題論文 C2（日本社会）	課題論文 C に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 12 回	研究計画の検討 1	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。
第 13 回	研究計画の検討 2	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。

第 14 回 研究計画の発表

履修者による研究計画の発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
宿題として作文を課す場合があります。また、第 12 回（履修者の研究計画の検討）までに、各自で A4 用紙 3 枚以上の研究計画書を準備する必要があります。

【テキスト（教科書）】

プリントを配付します。

【参考書】

授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物： 60 %
研究計画書の内容： 40 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

1. この科目は外国人留学生（なかでも中国 5 大学入試により入学した特別研修生）を主な対象とします。
2. 新型コロナウイルスに関する大学の方針変更等の事由により、上記の授業内容を変更する可能性があります。変更があった場合は、hoppii にて連絡いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本古代歌謡 日本音楽史

<研究テーマ> 催馬楽

<主要研究業績> 「催馬楽の成立に関する研究」(博士論文、2017)、「催馬楽「同音グループ」における「替え歌」生成の原理について——歌の詞章と旋律の関係を中心に」(『日本歌謡研究』59 号、2019 年)

【Outline and objectives】

Reading various literatures on Japan, summarizing the contents, and summarizing your own opinion on it in essay-style sentences, develop the basic abilities required for Japanese studies.

BSP500B2

日本文学・国際日本学論文作成基礎実習

金子 広幸

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

先行研究の閲覧から自らの研究課題の明確化を行い、研究活動における手法・手順・発表などを学ぶことができる。あわせてその過程から自らの日本語の問題点についての解決策を導くことができる。

【到達目標】

1. 研究の方向性を明確化することができる。具体的には、その研究課題について、何を明らかにするかを表明できるようになる。
2. 研究の手法・手順を学び、日本語の能力向上と併せて、進めることができるようになる。
3. 自らの研究課題などを研究言語である日本語で他者に明確に伝えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 9月17日（金曜日）からクラスが行われる。
教育支援システム（グーグルクラスルームやズームなど）を使用する。
1. 研究課題・計画を精緻化し明文化する作業を共同で行う。
 2. 先行研究の文献・研究手法についての模擬的な発表をする。
 3. 必要なら学期中に「ミニ調査（パイロット調査）」を行い、方向性を探る材料とする。
 4. 後半日程には、研究の進捗について成果の発表を行う。
 5. 完成した論文がどのようなものになるのか想定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	参加者の研究の課題を確認、学期全体の進め方とスケジュールを決める。
第2回	私の研究課題1	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する
第3回	私の研究課題2	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する。 【自らの日本語の問題点を探る】
第4回	私の研究課題3	研究課題を振りかえって何が学べたかを総括する。 【発表時に必要な日本語について模索する】【参考文献の引用などの扱い方、発表レジュメの書式などを学ぶ】
第5回	研究手法1	研究の過程で必要な手法について学ぶ。
第6回	研究手法2	研究の過程で必要な手法について学ぶ。 【研究・調査時に必要な日本語について学ぶ。連絡のメールや、調査依頼など】
第7回	研究手法3	研究の過程で必要な手法について学ぶ。【ミニ調査のガイダンス】
第8回	先行研究発表1	各自が探した先行研究について発表する。 【要旨をまとめる時の日本語の使い方を学ぶ】

第9回	先行研究発表2	各自が探した先行研究について発表する。 【スライドの作り方を学ぶ】
第10回	先行研究発表3	各自が探した先行研究について発表する。 【ミニ調査の進捗状況・テーマを確認する】
第11回	先行研究発表4	各自が探した先行研究について発表する。 【調査報告書への反映】
第12回	先行研究発表5	各自が探した先行研究について発表する。 【スライドの作り方を学ぶ】
第13回	成果発表1	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【研究論文の目次を作ってみる】 これは最終課題となる。
第14回	成果発表2 今後の課題を明確化する	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【前週に発表が終わっているものは反映点を明らかにする】

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、1回の講義に対して、以下のことを行うにあたって、各2時間を標準とします。

1. 研究の方向性を明確にするために、常に文献を探し、クラスで簡単に発表できるよう要点をまとめておくこと。
2. クラスでは問題を共有し、積極的に手法等について工夫を重ねること。
3. 日本語能力については、とくにスタイルや表現の選択を中心とした、「研究時に必要な日本語」を究明すること。
4. 発表がある場合には必ず「スライド」と「レジュメ」をその都度提出・配付すること。
5. 日本語使用者としての自覚に基づいて、クラスでの課題を作成・提出すること。
6. 発表や課題提出の時などは、あらかじめクラスメイト同士相互にチェックすること。

【テキスト（教科書）】

研究課題明確化が主目的なので教科書は使用しません。

【参考書】

金子広幸（2014）『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』

<https://www.ask-books.com/978-4-87217-856-2/>

研究活動を行うにあたってはメールで依頼する、調査時の使用言語など、敬語が必要です。敬語に関する知識・練習が足りない人は自主学習として使用してください。

【成績評価の方法と基準】

提出物（研究計画書 発表時のレジュメ 他メール文例作成など日本語に関する宿題など）30 %

発表参加 20 %

発表完成度 20 %

日本語小試験（2回程度実施）10 %

平常点 20 %

成績評価は 100 点満点で採点。60 点以上が合格。

【学生の意見等からの気づき】

参加者の皆さんへ。

●毎回参加者の発表があり、それについての教師のコメントや参加者の参加討議でクラスが進みます。準備をお願いします。

●参加人数にもよりますが、1学期あたり、4回程度の発表があります。他にもスライドやレジュメの作成、先行研究を探ることなど、様々な課題があります。

●準備してきた資料を読むだけでは、いい発表にはなりません。準備をさらに充実させて、視覚資料を使ったり、わかりやすく研究テーマを説明できるよう、教師といっしょに方法を探しましょう。もちろん自宅で発表の練習を「十分に」してください。

●これからの学術の世界を考える時、国際学術会議などでのオンライン発表は重要な鍵となります。対面クラスになっても、このオンライン発表などにぜひチャレンジしてください。

【学生が準備すべき機器他】

● ZOOM・ゲーグルクラスルームなどが使える機器・ネット環境の準備をお願いします。

【その他の重要事項】

● 日本語が不十分であることを恥じることはありませんが、しっかりと挑戦してください。

● オフィスワークの時間を2020年度から多くしました。以下の時間帯から「予約をとって」ZOOMで会いましょう。

「火曜日の14時から15時」

「金曜日の16時30分から17時30分」

連絡はメールをお願いします。

hirokyu.kaneko.75@hosei.ac.jp

【担当者の研究背景】

＜専門領域＞日本語教育学 社会言語学 地理学 歴史学 日本文化
＜研究テーマ＞敬語など待遇表現 日本語クラス活動 地域日本語支援 留学生相談業務 日中言語比較
＜主要研究業績＞

①『初級が終わったら始めよう にほんご敬語トレーニング』（アスク 2006年）

②『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』（アスク 2014年）

③『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ 50』（アスク 2005年）

④「日中漢字音対照研究の成果と今後の教学応用への可能性の模索」基礎研究その1（『日中学院紀要教学』 2008年）

⑤「初級日本語クラスで使用する絵の要素の分析」（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文 2012年）

【担当者の出演番組】

日本語教育関係のNHKの番組「しごとのにほんご」に出演・監修しています。（2023年まで以下で視聴可能）

<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/easyjapaneseforwork/>

【Outline and objectives】

You can clarify your own research issues by browsing previous research, and learn methods, procedures, and presentation methods in your research activities. At the same time, you can draw solutions for your Japanese language usage problems from the process.

LIT600B3

米文学特殊研究第二（小説論）A

小島 尚人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

講義題目：ノヴェルとアメリカ

本授業は、小説（novel）の歴史を背景として、アメリカにおける小説ジャンルの展開に大きく関わる作家の作品を読んでいくものである。学期前半では、代表的な小説論・小説史を参照して「小説とは何か」および「アメリカ小説の特質とは何か」という問題について考察する。そこで得た知見と問題意識を踏まえ、学期後半は、作家や作品の個性とアメリカ小説の歴史的展開との双方を視野に入れながら作品の精読をおこなう。春学期は、アメリカ型の近代小説を「ロマンス」と名づけながら確立した Nathaniel Hawthorne の代表作のひとつ *The Blithedale Romance*（1852）を扱う。

【到達目標】

- ・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
- ・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
- ・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
- ・自分の解釈を論理的に記述することができる。
- ・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
- ・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。授業は演習形式で進め、毎回発表担当者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメンテーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第2回	小説の歴史と理論①：勃興の背景	Ian Watt, <i>The Rise of the Novel</i>
第3回	小説の歴史と理論②：ネイション	Benedict Anderson, <i>Imagined Communities</i>
第4回	小説の歴史と理論③：近代的個人	Nancy Armstrong, <i>How Novels Think</i>
第5回	小説の歴史と理論④：ビルドゥングスロマン	Franco Moretti, <i>The Way of the World</i>
第6回	小説の歴史と理論⑤：アメリカン・ロマンス	Richard Chase, <i>The American Novel and Its Tradition</i>
第7回	前半のまとめ：ノヴェルとアメリカ	Homer Brown, "Why the Story of the Origin of the (English) Novel Is an American Romance (If Not the Great American Novel)"
第8回	作品読解①	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 1 - 6

第 9 回	作品読解②	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 7-11
第 10 回	作品読解③	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 12-16
第 11 回	作品読解④	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 17 - 22
第 12 回	作品読解⑤	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 23 - 29
第 13 回	先行研究の検討	<i>The Blithedale Romance</i> についての英語論文を読む
第 14 回	学期のまとめ	アメリカのナショナル・アイデンティティと小説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8～10 時間）

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance* (Bedford Cultural Editions, 1996). ISBN: 9780312118037

【参考書】

小説の理論と歴史

Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)

Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)

Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719 - 1900* (Columbia UP, 2005)

アメリカ小説論・アメリカ小説史

Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)

Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)

Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

・授業への貢献度（ちゃんと予習ができているか、討議に積極的に参加しているか）：30 %

・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30 %

・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40 %

【学生の意見等からの気づき】

批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞アメリカ文学

＜研究テーマ＞南北戦争後の小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論

＜主要研究業績＞

①「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について——アメリカ文学研究の Temporal Turn とその帰結」『英文学誌』（2020 年）

②「ギルバート・オズモンドはどこ出身か——*The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文学誌』（2018 年）

③「What Mary Knew: The Location of the Reader in Charles Brockden Brown's *Edgar Huntly*」『ストラータ』（2013 年）

【Outline and objectives】

This class is a seminar on the American novel. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, framing the questions of what the novel *is* and what the novel *does*, as well as what is “American” in the American novel. In the second half of the semester, through the close reading of Nathaniel Hawthorne's *The Blithedale Romance* (1852), students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity. Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures.

LIT600B3

米文学特殊研究第二（小説論） B

小島 尚人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

講義題目：ノヴェルとアメリカ

本授業は、小説（novel）の歴史を背景として、アメリカにおける小説ジャンルの展開に大きく関わる作家の作品を読んでいくものである。学期序盤では、春学期に引き続き代表的な小説論・小説史を参照して「小説とは何か」および「アメリカ小説の特質とは何か」という問題について考察する。そこで得た知見と問題意識を踏まえ、学期中盤以降は、作家や作品の個性とアメリカ小説の歴史的展開との双方を視野に入れながら作品の精読をおこなう。秋学期は、ヨーロッパとアメリカの狭間で揺れ動く人物たちの姿を緻密に描き出すことを通じて小説ジャンルの革新者となった Henry James の前期の代表作 *The Portrait of a Lady*（1881）を扱う。

【到達目標】

- ・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
- ・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
- ・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
- ・自分の解釈を論理的に記述することができる。
- ・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
- ・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。授業は演習形式で進め、毎回発表担当者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメントーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第 2 回	ヨーロッパ小説とアメリカ小説①：「偉大なアメリカ小説」とは	Lawrence Buell, <i>The Dream of the Great American Novel</i>
第 3 回	ヨーロッパ小説とアメリカ小説②：アメリカ文学におけるビルドゥングスroman	Sarah Graham, <i>A History of the Bildungsroman</i>
第 4 回	ヨーロッパ小説とアメリカ小説③：ビルドゥングスromanとジェンダー	Susan Fraiman, <i>Unbecoming Women: British Women Writers and the Novel of Development</i>
第 5 回	作品読解①	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 1 - 7
第 6 回	作品読解②	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 8 - 13
第 7 回	作品読解③	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 14 - 18

第 8 回	作品読解④	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 19 - 22
第 9 回	作品読解⑤	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 23 - 28
第 10 回	作品読解⑥	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 29 - 36
第 11 回	作品読解⑦	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 37 - 41
第 12 回	作品読解⑧	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 42 - 46
第 13 回	作品読解⑨	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 47 - 51
第 14 回	作品読解⑩	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 52 - 55

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8～10 時間）

【テキスト（教科書）】

Henry James, *The Portrait of a Lady* (Penguin Classics, 2016). ISBN: 9780141441269

【参考書】

小説の理論と歴史

Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)

Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)

Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719 - 1900* (Columbia UP, 2005)

アメリカ小説論・アメリカ小説史

Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)

Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)

Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

- ・授業への貢献度（ちゃんと予習ができていないか、討議に積極的に参加しているか）：30 %
- ・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30 %
- ・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40 %

【学生の意見等からの気づき】

批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>アメリカ文学

<研究テーマ>南北戦争後の小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論

<主要研究業績>

- ①「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について——アメリカ文学研究の Temporal Turn とその帰結」『英文学誌』（2020 年）
- ②「ギルバート・オズモンドはどこ出身か—— *The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文学誌』（2018 年）
- ③「What Mary Knew: The Location of the Reader in Charles Brockden Brown's *Edgar Huntly*」『ストラーク』（2013 年）

【Outline and objectives】

This class is a seminar on the American novel. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, framing the questions of what the novel *is* and what the novel *does*, as well as what is “American” in the American novel. In the second half of the semester, through the close reading of Henry James’s *The Portrait of a Lady* (1881), students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity. Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures.

LIT600B3

英米文学演習第二（American Fiction）A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① ブラウンの小説技法の検討
- ② 中間話法と語りの技法の検討
- ③ ゴシック小説の多様性を探る
- ④ *Wieland* のテキスト精読。

<講義題目> Charles Brockden Brown 研究

【到達目標】

- ① ゴシック・ロマンスの主題や方法についての概観的知識を得ること。
- ② チャールズ・ブロックデン・ブラウンの作家としての営みを概観して概嘆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。

チャールズ・ブロックデン・ブラウン (1771-1810) の作品を、Library of America 版に入ったシドニー・J・クラウス編の *Charles Brockden Brown: Three Gothic Novels* を使って読む。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じておこなう予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	レポーターの担当を決められるだけ決める／辞書・レファレンス類についてのプリント配布／ブラウンについての bibliography 配布
第 2 回	"Advertisement" など外枠の検討	他の作品の序文との比較など
第 3 回	Chapter 1: I feel little reluctance in complying with your request	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 4 回	Chapter 2: Early in the morning of a sultry day in August, he left Mettingen	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	Chapter 3: The shock which this disastrous occurrence occasioned to my mother	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	Chapter 4: Six years of uninterrupted happiness had rolled away	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	Chapter 5: Some time had elapsed when there happened another occurrence	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 8 回	Chapter 6: I now come to the mention of a person with whose name the most turbulent sensations are connected	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	Chapter 7: I will not enumerate the various inquiries and conjectures	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	Chapter 8: As soon as evening arrived, I performed my visit	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	Chapter 9: My brother had received a new book from Germany	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	Chapter 10: Order could not readily be introduced into my thoughts	レポーターによる発表と質疑応答と議論

第 13 回	Chapter 11: I was aroused from this stupor by sounds	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 14 回	Chapter 12: My way lay through the city	レポーターによる発表と質疑応答と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
辞書類にあたって、読み進めること。クロス・レファレンスを意識すること。

【テキスト（教科書）】
Sydney J. Krause (Editor). *Charles Brockden Brown: Three Gothic Novels: Wieland: or, The Transformation, An American Tale; Arthur Mervyn: or, Memoirs of the Year 1793; Edgar Huntly: or, Memoirs of a Sleep-Walker* (New York: Literary Classics of the United States, 1998) (hardcover). 914pp. (ISBN: 1-883011-57-4) (日本の書店で 2000 円程度)

【参考書】
クラウスが編者となった Kent 版全集本を専攻室に置く。アメリカのゴシック研究の古典は Donald Ringe の *American Gothic: Imagination and Reason in Nineteenth-Century Fiction* (University of Kentucky Press, 1982) [邦訳 小宮照夫ほか、松柏社、2005 年]。アメリカ小説研究の古典、Richard Chase の *American Novel and Its Tradition* はアメリカ小説のはじまりにブラウンを位置づけて持ち上げた（序章）。
ブラウンに関する研究書（アメリカン・ゴシックの研究書書誌を含む）は初回到プリントを配布する（学習支援システムの「教材」に入れる）。

【成績評価の方法と基準】
「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント
「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとめ度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート実施しておりません。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞ 近代アメリカ文学
＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
＜主要研究業績＞ 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文学誌』47 号（2005 年 3 月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50 号（2005 年 3 月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」『法政大学文学部紀要』51 号（2005 年 9 月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67。

【Outline and objectives】
Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Charles Brockden Brown's gothic fiction. Students also obtain knowledge about literaty gothicism and about its developments.

LIT600B3

英米文学演習第二（American Fiction）B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
① ブラウンの長篇小説の検討
② ゴシック小説の多様性を探る
③ 多様な解釈の可能性の検討
＜講義題目＞ Charles Brockden Brown 研究

【到達目標】
①ゴシック・ロマンスの主題や方法についての概観的知識を得ること。
②チャールズ・ブロックデン・ブラウンの作家としての営みを概観して概嘆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。
「英米文学演習第二（American Fiction）A」に続いて、チャールズ・ブロックデン・ブラウンの『ウィーランド』を読む。続編『腹話術師カーウインの回想』を余裕があったら読む。
課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じておこなう予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】		
秋学期		
回	テーマ	内容
第 1 回	Chapter 14: "Three days have elapsed since this occurrence	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 2 回	Chapter 15: Before I reached the city it was dark	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 3 回	Chapter 16: As soon as I arrived in sight of the front of the house, my attention was excited by a light	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 4 回	Chapter 17: I had no inclination nor power to move from this spot	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	Chapter 18: I had imperfectly recovered my strength	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	Chapter 19: Theodore Wieland, the prisoner at the bar, was now called upon for his defence	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	Chapter 20: Will you wonder that I read no farther?	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 8 回	Chapter 21: Such, for some time, was the course of my meditations	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	Chapter 22: The inhabitants of the <i>Hut</i> received me	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	Chapter 23: "My morals will appear to you far from rigid . . .	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	Chapter 24: "Deeply did I ruminate on the occurrences that had just passed. . . .	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	Chapter 25: A few words more and I lay aside the pen for ever	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	Chapter 26: My right hand, grasping the unseen knife, was still disengaged	レポーターによる発表と質疑応答と議論

第 14 回 Chapter 27: [Written three years after the foregoing, and dated at Montpellier.] I imagined that I had forever laid aside the pen

レポーターによる発表と質疑応答と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究書を読むことと辞書を引いて予習すること。

【テキスト（教科書）】
Sydney Krause, ed., *Charles Brockden Brown: Three Gothic Novels* (New York, 1998). 腹話術師カーウインの手記はライブラリー・オブ・アメリカ版には入っていないので、別途用意する。

【参考書】
A 参照

【成績評価の方法と基準】
「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント
「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとまり度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】
アンケート実施せず。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞ 近代アメリカ文学
＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
＜主要研究業績＞ 「Ormond におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文学誌』47 号（2005 年 3 月）：27-44、「ボアの宇宙論と錬金術（十） 第五章 ボーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50 号（2005 年 3 月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51 号（2005 年 9 月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline and objectives】
Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Charles Brockden Brown's gothic fiction. Students also obtain knowledge about literaty gothicism and about its developments.

LIT600B3

英米文学演習第三（British Fiction）A

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

＜講義題目＞ヴァージニア・ウルフとモダニズム文学
ウルフの初期短編と『ジェイコブの部屋』を、彼女の批評的エッセイとともに読み、そのことをとおしてウルフのモダニズムの特徴を理解する。

【到達目標】

- ・ヴァージニア・ウルフの生涯、作品、時代について、一般的な事実を列記することができる。
- ・モダニズム文学の一般的特徴について記述することができる。
- ・ウルフの初期短編、『Jacob's Room』の文体的主題的特徴について具体的に述べることができる。
- ・作品解釈について他人と議論することができる。
- ・批評論文を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】
春学期

回	テーマ	内容
①	ガイダンス・イントロダクション	授業のガイダンスとウルフ文学へのイントロダクション。
②	ウルフの初期批評（1）	ウルフのふたつの初期批評を精読し、モダニズム的特徴を同定する。
③	ウルフの初期批評（2）	ウルフの別のふたつの初期批評を精読し、モダニズム的特徴を同定する。
④	ウルフの初期短編（1）	ウルフの初期短編 2 編を、とくに文体と主題に注目しつつ精読する。
⑤	ウルフの初期短編（2）	ウルフの初期短編の別の 2 編を、とくに文体と主題に注目しつつ精読する。
⑥	ウルフの初期短編（3）	ウルフの初期短編のさらに別の 2 編を、とくに文体と主題に注目しつつ精読する。
⑦	中間まとめ	ディスカッションをとおしてウルフ文学のモダニズム的特徴についての理解を深める。
⑧	『ジェイコブの部屋』（1）	第一部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑨	『ジェイコブの部屋』（2）	第二部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。

⑩	『ジェイコブの部屋』 (3)	第三部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑪	『ジェイコブの部屋』 (4)	第四部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑫	『ジェイコブの部屋』 批評を読む（歴史主義的批評）	『ジェイコブの部屋』の歴史性・モダニズム性について論じた批評を精読する。
⑬	『ジェイコブの部屋』 批評を読む（形式主義的批評）	『ジェイコブの部屋』の形式性・モダニズム性について論じた批評を精読する。
⑭	授業のまとめ	授業のまとめとしてモダニズムについてディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中のディスカッションに参加できるよう、授業前に作品および作品に関する批評作品を精読し、自分の意見をまとめること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Virginia Woolf, *Jacob's Room* (Oxford World's Classics)
Virginia Woolf, *The Mark on the Wall and Other Short Fiction* (Oxford World's Classics)
Virginia Woolf, *Selected Essays* (Oxford World's Classics)

【参考書】

授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
4000 字程度の期末レポート 50%（作品と作品に関する批評作品を精読したうえで、自分なりの独創的解釈を創造し、その解釈の妥当性を論理的に証明すること）

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【その他の重要事項】

後期の「英米文学演習第三（British Fiction）B」を履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
イギリス文学
＜研究テーマ＞
19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline and objectives】

Lecture Title: Virginia Woolf and Modernist Literature
By reading Woolf's early short stories and *Jacob's Room*, along with her critical essays, we will understand the characteristics of her modernism.

LIT600B3

英米文学演習第三（British Fiction）B

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

＜講義題目＞ヴァージニア・ウルフとフェミニズム文学
ウルフの『オーランドウ』を、彼女の批評的エッセイ（とくに『自分ひとりの部屋』）とともに読み、そのことをとおしてウルフのフェミニズムの特徴を理解する。

【到達目標】

- ・ヴァージニア・ウルフの生涯、作品、時代について、一般的な事実を列記することができる。
- ・モダニズム文学の一般的特徴について記述することができる。
- ・ウルフの *Orlando* の文体的主題的特徴について具体的に述べることができる。
- ・作品解釈について他人と議論することができる。
- ・批評論文を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
①	ガイダンス・イントロダクション	授業のガイダンスとウルフ文学へのイントロダクション。
②	『自分ひとりの部屋』 (1)	第一部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
③	『自分ひとりの部屋』 (2)	第二部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
④	『自分ひとりの部屋』 (3)	第三部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑤	『自分ひとりの部屋』 (総括)	『自分ひとりの部屋』について総括する。
⑥	『オーランドウ』(1)	第一部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑦	『オーランドウ』(2)	第二部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑧	『オーランドウ』(3)	第三部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑨	『オーランドウ』(4)	第四部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑩	『オーランドウ』(5)	第五部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。

⑪	『オーランドウ』（総括）	『オーランドウ』について総括する。
⑫	『オーランドウ』の批評を読む（１）	『オーランドウ』についてのフェミニズムの批評を精読する。
⑬	『オーランドウ』の批評を読む（２）	『オーランドウ』についてのもうひとつのフェミニズムの批評を精読する。
⑭	授業のまとめ	授業のまとめとしてウルフのフェミニズムについてディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中のディスカッションに参加できるよう、授業前に作品および作品に関する批評作品を精読し、自分の意見をまとめること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Virginia Woolf, *Orlando* (Oxford World's Classics)
Virginia Woolf, *A Room of One's Own and Three Guineas* (Oxford World's Classics)

【参考書】

授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（準備をしたうえで、積極的にディスカッションに参加すること）

4000 字程度の期末レポート 50%（作品と作品に関する批評作品を精読したうえで、自分なりの独創的解釈を創造し、その解釈の妥当性を論理的に証明すること）

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

イギリス文学

＜研究テーマ＞

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline and objectives】

Lecture Title: Virginia Woolf and Feminist Literature
By reading Woolf's *Orlando*, along with her critical essays (*A Room of One's Own* in particular), we will understand the characteristics of Woolf's feminism.

LIN600B3

英語学演習（英語史・言語変化理論） A

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語史における言語変化についての基礎的な知識を得る。特に、完了形、進行形、受動態、助動詞、不定詞、分詞、動名詞などの構文が統語的にどのようにして発達してきたかについて学ぶ。

【到達目標】

英語史における文法変化や統語構造の変化について説明できるようになる。

英語史における文献をきちんと正確によめるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容の紹介
第 2 回	Chapter 1 Introduction	統語論の説明と歴史的データ
第 3 回	1.5 Interpreting historical data	歴史的データの扱い方
第 4 回	Chapter 2 Nominal categories	名詞の性・数・格
第 5 回	Chapter 3 Verbal categories	完了形
第 6 回	3.5 The perfect	アスペクトに関する文献紹介
第 7 回	3.6 The progressive	進行形
第 8 回	3.7 The passive	受動態
第 9 回	4. Modal auxiliaries	助動詞
第 10 回	文献紹介（２）	助動詞に関する文献紹介
第 11 回	4.5 The verbal characteristics of auxiliaries	助動詞の特徴
第 12 回	4.6 The rise of do-support	助動詞 do
第 13 回	文献紹介（３）	迂言法に関する文献紹介
第 14 回	春学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Bettelou Los (2015) *A Historical Syntax of English*. Edinburgh University Press.

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。(平常点 60 点、レポート 40 点)

【学生の意見等からの気づき】

「本年度授業担当者変更によりフィードバックできません」

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・英語史

<研究テーマ>

初期近代英語期の文法

<主要研究業績>

「第 6 章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English syntax from Old English to Present-day English. This course requires students to analyze the syntactic functions in constructions found in English sources such as novels and plays.

LIN600B3

英語学演習（英語史・言語変化理論）B

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語史における言語変化についての基礎的な知識を得る。特に、完了形、進行形、受動態、助動詞、不定詞、分詞、動名詞などの構文が統語的にどのようにして発達してきたかについて学ぶ。

【到達目標】

英語史における文法変化や統語構造の変化について説明できるようになる。

英語史における文献をきちんと正確によめるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要説明
第 2 回	5. Complementat	補文構造
第 3 回	5.3 The rise of the ing-form	ing 形の発達
第 4 回	5.4 The rise of the to-infinitive	to 不定詞の発達
第 5 回	文献紹介（1）	動名詞・不定詞に関する文献紹介
第 6 回	6. The structure of the clause	節の構造
第 7 回	6.3 The word order of the subclause	従属節の語順
第 8 回	6.5 The change from OV to VO	OV から VO への変化
第 9 回	文献紹介（2）	従属節の語順に関する文献紹介
第 10 回	7 Verb Second	動詞第二位置
第 11 回	8 Syntax and discourse	統語と談話
第 12 回	8.3 Foregrounding and peak marking	前景化
第 13 回	文献紹介（3）	談話に関する文献紹介
第 14 回	秋学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Bettelou Los (2015) A Historical Syntax of English. Edinburgh University Press.

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。(平常点 60 点、レポート 40 点)

【学生の意見等からの気づき】

「本年度授業担当者変更によりフィードバックできません」

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

英語学・英語史

＜研究テーマ＞

初期近代英語期の文法

＜主要研究業績＞

「第6章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English syntax from Old English to Present-day English. This course requires students to analyze the syntactic functions in constructions found in English sources such as novels and plays.

LNG600B3

言語学演習（応用言語学）A

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論していく。言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおこなえながら議論する。授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	人の言語能力	第一言語習得
3	言語習得研究 1	第一言語習得と第二言語習得
4	言語習得研究 2	L2 研究の歴史
5	言語獲得と言語習得	Learning & Acquisition
6	研究計画発表 1	修士 2 年生による研究計画発表・進捗状況の報告
7	研究計画発表 2	修士 1 年生による研究テーマ発表
8	エラーに関する研究 1	transfer エラー・developmental エラー
9	エラーに関する研究 2	Error Analysis
10	学びと注意 1	暗示的・明示的学び
11	学びと注意 2	気づき仮説
12	学生による発表 1	レビュー論文
13	学生による発表 2	実験による仮説検証
14	研究法	研究手法比較と研究計画の作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内でその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

＜修士課程学生＞

授業参加点：40%

授業内発表：30%

研究計画書：30%

【学生の意見等からの気づき】

受講生の基礎知識、興味の内容が大きく異なるため、それぞれの興味に応じて扱う題材を調整していきたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

LNG600B3

言語学演習（応用言語学）B

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の研究を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる第二言語習得の理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】

—音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法を学ぶ。

— SLA の音韻習得・語彙習得の論文を読み、習得・音韻理論への理解を深める。

—自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の形にすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション 第一言語習得と第二言語習得	授業内容の説明・母語の影響
2	修士 2 年生の研究発表	研究の進捗状況発表（2 年生）
3	修士 1 年生・研修生の研究発表	研究の進捗状況の発表（1 年生、および研修生）
4	習得理論 1	Noticing
5	習得理論 2	input と output
6	習得順序 1	処理可能性理論
7	習得順序 2	セイリエンス
8	第二言語習得の研究手法	学生による実験論文の発表
9	データの分析・可視化 1	データ分析・統計処理
10	データの分析・可視化 2	データ分析・統計処理（ハンズオンデータによる実習）
11	論文構成	論文の構成・書式について学ぶ
12	1 年生による修論計画発表	1 年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表。
13	2 年生による修論発表	2 年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

＜修士課程＞

授業発表....40%

授業内での発言・議論への貢献....30%

学期末アブストラクト....30%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マッシュューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

LIN600B3

英語学特殊研究第二（英語リーディングの科学）A

濱田 彰

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、文字言語情報をより正確かつ高度に処理するプロセスやその習得過程の解明を目指していく。特に読み手の知識や経験、関心、スタイルおよび認知的な要因が「読み」にどのような影響を与えているのか、読み手の心の中に生じているプロセスの分析を試み、リーディング能力の優劣はどのような要因から決定されるのかを探り、その応用として教室における英語リーディング指導の在り方を検証する。

【到達目標】

- ・第二言語読解の知識と技能の発達過程を理解する。
- ・第二言語読解の認知プロセスを理解する。
- ・第二言語読解理論を発展させる研究を立案できる。
- ・第二言語読解理論に基づいた読解指導を立案できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週レポーターが教科書の概要や研究プロポーザルを発表し、内容について全員で討議する。前回の授業で提出された発表資料および発表内容から良い点をいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックをおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Orientation	授業内容・方法の説明, Google Classroom の登録, 文献輪読の担当決め
第 2 回	Understanding L2 Reading 1	The Nature of Reading Abilities
第 3 回	Understanding L2 Reading 2	Comparing L1 and L2 Reading
第 4 回	Exploring Research in Reading 1	Key Studies in L1 Reading
第 5 回	Exploring Research in Reading 2	Key Studies in L2 Reading
第 6 回	L2 Reading Curricula and Instruction 1	Principles for L2 Reading-Curriculum Design
第 7 回	L2 Reading Curricula and Instruction 2	Teaching L2 Reading Using Evidence-Based Practices
第 8 回	Investigating Reading through Action Research 1	Reading Teachers as Action Researchers
第 9 回	Investigating Reading through Action Research 2	Action Research Projects: Set 1
第 10 回	Investigating Reading through Action Research 3	Action Research Projects: Set 2
第 11 回	Searching for Resources	Resources of Exploring L2 Reading
第 12 回	Planning Research for L2 Reading Instruction 1	Literature Review

第 13 回	Planning Research for L2 Reading Instruction 2	Teaching and Research Proposal 1
第 14 回	Planning Research for L2 Reading Instruction 3	Teaching and Research Proposal 2

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献の指定された箇所を事前に通読すること。
- ・読んだ文献を研究ノートとしてまとめておくこと。
- ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Grabe, W., & Stoller, F. (2019). Teaching and researching reading (3rd ed.). New York, NY: Routledge.
(<https://amzn.to/38jXF11>)

【参考書】

卯城祐司（編著）. (2009). 『英語リーディングの科学 —「読めたつもり」の謎を解く』東京：研究社.

川崎 恵里子（編著）. (2014). 『文章理解の認知心理学:ことば・からだ・脳』東京：誠信書房.

【成績評価の方法と基準】

Research proposal (60%)

Chapter presentation (40%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

本講座は Zoom によるオンライン授業の形態で行われます。授業への参加方法は学習支援システム (Hoppii) に記載しています。

This course is going to be conducted using Zoom. How to participate in the class is described in the learning support system (Hoppii).

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得・第二言語読解・言語テスト

<研究テーマ>

適性処遇交互作用に基づく英語語彙学習の最適化

<主要研究業績>

小林雄一郎・濱田彰・水本篤. (2020). 『R による教育データ分析入門』東京：オーム社.

Hamada, A. (2020). Using meta-analysis and propensity score methods to assess treatment effects toward evidence-based practice in extensive reading. *Frontiers in Psychology*, 11(617), 1 – 14.

Hamada, A., & Takaki, S. (2019). Approximate replication of Matsuda and Gobel (2004) for psychometric validation of Foreign Language Reading Anxiety Scale. *Language Teaching*, 1 – 17.

Hamada, A. (2015). Effects of forward and backward contextual elaboration on lexical inferences: Evidence from a semantic relatedness judgment task. *Reading in a Foreign Language*, 27, 1 – 21.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the whole picture of teaching and researching reading in a second language (L2) and discuss how reading works and differs for L2 learners. Students are required to propose their research projects and classroom instruction toward evidence-based practice in pedagogy.

LIN600B3

英語学特殊研究第二（英語リーディングの科学） B

濱田 彰

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、文字言語情報をより正確かつ高度に処理するプロセスやその習得過程の解明するための研究法を学ぶ。特に読み手の知識や経験、関心、スタイルおよび認知的な要因が「読み」にどのような影響を与えているのか、読み手の心の中に生じているプロセスの分析を試み、リーディング能力の優劣はどのような要因から決定されるのかを探り、その応用として教室における読解指導の問題を解決するためのアクションリサーチを体験する。

【到達目標】

- ・第二言語読解の知識と技能の発達過程を検証するための研究法を理解する。
- ・第二言語読解の認知プロセスを検証するための研究法を理解する。
- ・第二言語読解理論を発展させる研究を行うことができる。
- ・教室における読解指導の問題を解決するアクションリサーチを行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週レポーターが教科書の概要や研究プロポーザルを発表し、内容について全員で討議する。前回の授業で提出された発表資料および発表内容から良い点をいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックをおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Orientation	授業内容・方法の説明, Google Classroom の登録, 文献輪読の担当決め
第 2 回	Quantitative research: Association 1	Correlational relationships between reading comprehension and reading subcomponents
第 3 回	Quantitative research: Association 2	Planning associational research in L2 reading
第 4 回	Quantitative research: Association 3	Causal relationships between reading comprehension and reading subcomponents
第 5 回	Quantitative research: Association 4	Planning causal research in L2 reading
第 6 回	Quantitative research: Experiment 1	Effects of reading instruction on reading comprehension
第 7 回	Quantitative research: Experiment 2	Research methodologies for investigating cognitive processes in L2 reading
第 8 回	Quantitative research: Experiment 3	Research methodologies for investigating online and offline reading processes
第 9 回	Quantitative research: Corpus approach 1	Analyzing linguistic variables affecting L2 reading

第10回	Quantitative research: Corpus approach 2	Analyzing reading textbooks
第11回	Action research 1	Researching research background
第12回	Action research 2	Researching approaches to solving classroom-based problems
第13回	Action research 3	Researching data collection and analysis
第14回	Action research 4	Researching decision-making processes in action research

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・文献の指定された箇所を事前に通読すること。
 ・読んだ文献を研究ノートとしてまとめておくこと。
 本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Grabe, W., & Stoller, F. (2019). Teaching and researching reading (3rd ed.). New York, NY: Routledge.
<https://amzn.to/38jXF11>

【参考書】

市川伸一（編）. (2019). 『教育心理学の実践ベース・アプローチ実践しつつ研究を創出する』東京大学出版会.
 小林雄一郎・濱田彰・水本篤. (2020). 『Rによる教育データ分析入門』東京：オーム社.
 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）. 『心理学研究法入門—調査・実験から実践まで』東京大学出版会.

【成績評価の方法と基準】

Research paper (40%)
 Research presentation (40%)
 Chapter presentation (20%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

本講座は Zoom によるオンライン授業の形態で行われます。授業への参加方法は学習支援システム (Hoppii) に記載しています。
 This course is going to be conducted using Zoom. How to participate in the class is described in the learning support system (Hoppii).

【その他の重要事項】

英語学特殊研究第一（英語リーディングの科学）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
 第二言語語彙習得・第二言語読解・言語テスト
 ＜研究テーマ＞
 適性処遇交互作用に基づく英語語彙学習の最適化
 ＜主要研究業績＞

小林雄一郎・濱田彰・水本篤. (2020). 『Rによる教育データ分析入門』東京：オーム社.

Hamada, A. (2020). Using meta-analysis and propensity score methods to assess treatment effects toward evidence-based practice in extensive reading. *Frontiers in Psychology*, 11(617), 1 – 14.

Hamada, A., & Takaki, S. (2019). Approximate replication of Matsuda and Gobel (2004) for psychometric validation of Foreign Language Reading Anxiety Scale. *Language Teaching*, 1 – 17.

Hamada, A. (2015). Effects of forward and backward contextual elaboration on lexical inferences: Evidence from a semantic relatedness judgment task. *Reading in a Foreign Language*, 27, 1 – 21.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the research methodologies of teaching and researching reading in a second language (L2) and examine how reading works and differs for L2 learners. Students are required to conduct their research projects toward evidence-based practice in pedagogy.

LIN600B3

言語学特殊研究（理論言語学・認知科学）A

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理言語学のうち、単語処理および文処理の入門レベルの知識を学びます。「単語」および「文」とは、言語表現のサイズの分類であり、どちらの処理にも、音・文法・意味の両方が関わるので、それぞれの処理についての知識を得ることになります。

＜講義題目＞言語科学の下位分野の例（音声知覚、統語理論、文処理）

【到達目標】

単語処理や文処理について、どのような実験手法によってどのような知見が既に得られているのかという入門レベルの知識を得ること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に輪読形式を予定しています。発表に対してのコメントという形でのフィードバックを与えます。

なお、以下の授業計画は、学生のニーズおよび理解度などに応じて柔軟に変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業全体の紹介
第2回	過去またはこれからの研究の発表	前年度までに各自が行なった研究またはこれからの研究の予定の発表
第3回	単語の心的な表現	音節、形態素、など
第4回	語彙意味論1：単語同士の関係	意味ネットワーク
第5回	語彙意味論2：意味ネットワークのせいで生じる現象	プライミング
第6回	記号の接地問題	「意味」って何？
第7回	単語認知	様々な処理モデル
第8回	語彙レベルの曖昧性の解消	曖昧性の解消に文脈がどのように利用されるか
第9回	文処理の研究の必要性	構文解析の必要性
第10回	文処理のモデル1：2段階モデル	統語処理が終わった後に意味処理……という2段階モデル
第11回	文処理のモデル2：制約モデル	統語的な制約、意味的な制約、などが並列で働く、というモデル
第12回	文処理研究で知られている諸事実	どのようなモデルでも説明が必要とされる諸事実
第13回	文処理のモデル3：その他のモデル	もっと新しい諸モデル
第14回	新たなテーマの発表	これからの研究テーマ（予定）の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
 講読の発表では、書かれた内容の把握だけでなく、著者への批判または疑問も考えてください。

自分の研究（テーマ）の発表では、「相手は自分の発表なんか聞きたくない」という前提で準備をしてください。

【テキスト（教科書）】

Traxler, M. J. 2012. *Introduction to Psycholinguistics*. (Wiley-Blackwell.)

入手の仕方については、授業でお話しします。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、発表点 50 %

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は久しぶりの開講でしたが、以前と同様にアンケート非実施科目だったので、N/A。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムには自分が普段アクセスするメールアドレスを登録（または法政 gmail で、自分が普段アクセスするメールアドレスへの自動転送を設定）してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

＜研究テーマ＞音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、黙読時の音韻処理

＜主要研究業績＞ <http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An introduction to word and sentence processing.

LIN600B3

言語学特殊研究（理論言語学・認知科学） B

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

外国語教育や音声学は昔から実験科学分野ですが、近年は統語論研究においても実験研究への志向が見られます。なので、教育・音声・統語解析・理論言語学で必要となる実験データ分析を中級レベルで学びます。

＜講義題目＞心理言語学データの分析法（中級編）

【到達目標】

本来このような大学院科目は、履修者のニーズに応じて内容自体を変えるべきであり、具体的に何を指すかは履修者の希望と照らし合わせて決定します。しかしここでは、担当者の守備範囲の例示として、混合効果一般化線形モデルの入門を挙げておきます。その場合の到達目標は以下の通り：

- ・正規分布しないデータ（特定の選択肢の「選択率」やコーパスでのカウント数など）を一般化混合モデルで分析できるようになること。
- ・伝統的な分散分析では扱えない、実験参加者に加えて言語刺激についても一般化が必要になる通常の心理言語学実験のデータを、混合効果モデルで分析できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下の授業計画は、混合効果一般化線形モデルの入門の例。但し、その場合でも、具体的な進度・内容は例示に過ぎません。試験には個別に採点コメントを返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	環境整備	統計環境 R の導入
2	モデルの構築という考え方	線形回帰、およびその統計量の意味
3	線形回帰モデルの構築法	最小二乗法、最尤法
4	重回帰分析の基礎 1：重回帰分析とは何か	複数の変数による予測
5	重回帰分析の基礎 2：重回帰分析の見方	モデル全体としての予測と、個々の予測変数の寄与度との、違い
6	重回帰分析の基礎 3：個々の予測変数のさらなる評価法	モデル間の比較による、個々の予測変数の寄与度の評価
7	重回帰分析の基礎 4：伝統的な重回帰分析の限界	分布に関する前提
8	線形モデル	伝統的な分散分析や t 検定の、線形回帰モデルとしての表現
9	選択率データの分布	2 項分布、arcsine square-root transformation、logit transformation
10	ロジスティック回帰	ロジット及びロジスティック関数、線形予測子、リンク関数、separation
11	混合効果モデル 1：目的変数を左右する 2 種類の因子	固定因子および変量因子の概念

- 12 混合効果モデル2：複 subject analysis と item
数の変量因子への古典 analysis
的な対応方法
- 13 混合効果モデル3：混 変量因子にもとづく傾き・切片
合効果モデルにおける
変量因子の扱い
- 14 混合効果モデル4：モ モデルに含めるべき因子の検討
デル選択

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望まれますが、わからない箇所は教員または周囲に尋ねてください。
また、上記の授業計画の場合は、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみたり、自分の手持ち（または架空）のデータを分析してみる……といった作業を行うと良いでしょう。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

久保拓弥 (2012). 『データ解析のための統計モデリング入門—一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC—』
東京：岩波書店.

Winter, B. (2019). *Statistics for Linguists: An Introduction Using R*. Routledge.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

N/A.

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムに登録されたアドレスに諸般の連絡メールが行くので、普段からそのメールが読めるようにしておいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

＜研究テーマ＞ 音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

＜主要研究業績＞

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An intermediate-level course on statistical analysis of experimental data.

LIN500B3

英語教育学研究 A

印南 洋

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

＜講義題目＞ Second language acquisition and pedagogy

This course introduces some stimulating issues on second language acquisition and pedagogy. In particular, it focuses on the questions that people often have about language learning.

【到達目標】

In this course, students will learn about (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Through discussions after reading the course textbook and handouts, students will acquire a deeper understanding of these two issues. Repeating this process throughout the semester will help students develop their understanding of second language education and its application to pedagogy better, based on empirical evidence. By the end of this course, students will be able to better understand (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes consist of lectures, group discussions, and student presentations on topics in second language acquisition and pedagogy. Students are assigned readings from the textbook chapters. リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。For the 2021 spring semester, this course will be offered entirely online (オンライン授業 [リアルタイム配信型]).

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	Overview of the course and presentation schedule
第2回	Literature search	Literature search using digital and library resources
第3回	Myth 1: Children learn languages quickly and easily while adults are ineffective in comparison.	Language learning and age; the Critical Period Hypothesis
第4回	Myth 2: A true bilingual is someone who speaks two languages perfectly.	Bilingualism
第5回	Interim report on in-class student presentations	Report and feedback
第6回	Myth 3: You can acquire a language simply through listening or reading.	Input, output, and interaction
第7回	Myth 4: Practice makes perfect.	Attention and noticing

第 8 回	Interim report on in-class student presentations	Report and feedback
第 9 回	Myth 5: Language students learn (and retain) what they are taught.	Explicit and implicit learning; developmental sequences; interaction
第 10 回	Myth 6: Language learners always benefit from correction.	Correction and recasts
第 11 回	Myth 7: Individual differences are a major, perhaps the major, factor in SLA.	Individual differences
第 12 回	Myth 8: Language acquisition is the individual acquisition of grammar	Social approaches: Pragmatics, emergentism, sociocultural approaches, language socialization
第 13 回	Student presentation	Presentation and feedback
第 14 回	Student presentation	Presentation and feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper.

【テキスト（教科書）】

Steven Brown and Jenifer Larson-Hall. (2012). Second language acquisition myths: Applying second language research to classroom teaching. University of Michigan Press. ISBN: 978-0-472-03498-7

【参考書】

Joy Reid with Keith S. Folse, Cynthia M. Schuemann, Pat Byrd and John Bunting, Ken Hyland, Dana Ferris, Susan Conrad, Sharon Cavusgil, & Paul Kei Matsuda. (2008). Writing myths: Applying second language research to classroom teaching. ISBN 978-0-472-03257-0

Keith S. Folse. (2004). Vocabulary myths: Applying second language research to classroom teaching. ISBN 978-0-472-03029-3

望月昭彦、磐崎弘貞、卯城祐司、久保田章（著）。（2010）。『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』。大修館書店。ISBN: 978-4469245585

Patsy M. Lightbown & Nina Spada. (2013). How languages are learned (4th edition.). Oxford University Press.

Steven Brown. (2011). Listening myths: Applying second language research to classroom teaching. ISBN 978-0-472-03459-8

【成績評価の方法と基準】

Reaction paper (40%); Chapter presentation (10%); Student project (30%); Writing portfolio (20%)

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

Feel free to ask questions. I look forward to working with you.

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

Applied linguistics, language education, language testing, and program evaluation

＜研究テーマ＞

Test method effects on test performance

Construct validation study of a test/instrument/questionnaire

Meta-analytic inquiry into the variability of effects

Longitudinal measurement of change in language proficiency and program evaluation

Secondary analysis of survey and administrative datasets

Application of measurement models to language test data (especially, meta-analysis and structural equation modeling)

＜主要研究業績＞

In'nami, Y., & Koizumi, R. (2013). Statistics and software for test revisions. In A. Kunnan (ed.), Companion to language assessment (Vol. II: Approaches and Development, Part 7: Assessment Development, pp.925 - 943). New York: Wiley-Blackwell.

卯城祐司編著。『英語リーディングテストの考え方と作り方』。共著（第 5 章 テスト得点解釈の留意点 [pp. 78-87] を担当）。平成 24 年 9 月。研究社。

竹内理・水本篤編著。『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』。共著（第 14 章 SEM 入門 [pp. 194-206]、第 16 章 メタ分析入門 [pp. 227-239] を担当）。平成 24 年 5 月。松柏社。

【Outline and objectives】

＜講義題目＞ Second language acquisition and pedagogy

This course introduces some stimulating issues on second language acquisition and pedagogy. In particular, it focuses on the questions that people often have about language learning.

LIN500B3

英語教育学研究 B

印南 洋

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> Language testing and assessment

This course is mainly provided for student teachers to give an insight into how to evaluate learner knowledge and performance in L2 education. The course also introduces some stimulating issues on second language testing and assessment. In particular, it focuses on the questions that people often have about language testing and assessment. The students will also examine, discuss, and create types of assessing practices in L2 situations.

【到達目標】

In this course, students will learn about (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Through discussions after reading the course textbook and handouts, students will acquire a deeper understanding of these two issues. Repeating this process throughout the semester will help students develop their understanding of language testing and assessment and its relationship with pedagogy better, based on empirical evidence. By the end of this course, students will be able to better understand (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes consist of lectures, group discussions, and student presentations on topics in language testing and assessment. Students are assigned readings from the textbook chapters. リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。For the 2021 fall semester, this course will be offered entirely online (オンライン授業 [リアルタイム配信型]).

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction; Literature search	Overview of the course and presentation schedule; Literature search using digital and library resources
第 2 回	Introduction and Myth 1: Assessment is just writing tests and using statistics.	What we should know about assessment
第 3 回	Myth 2: A comprehensive final exam is the best way to evaluate students.	Formative and summative assessments; dynamic assessment
第 4 回	Myth 3: Scores on performance assessments are preferable because of their accuracy and authenticity.	Various issues on performance (speaking and writing) assessments

第 5 回	Myth 4: Multiple choice tests are inaccurate measures of language but are easy to write.	Various issues on multiple choice items
第 6 回	Myth 5: We should test only one skill at a time.	Integrated tasks
第 7 回	Myth 6: A test's validity can be determined by looking at it.	Validity, aspects of validity, and validation
第 8 回	Myth 7: Issues of fairness are not a concern with standardized testing.	Fairness issues in standardized, high-stakes testing
第 9 回	Myth 8: Teachers should not be involved in preparing students for tests.	Learning and assessment
第 10 回	Conclusion: Conclusion and review	Conclusion and review of each chapter
第 11 回	Test development	Exercise on developing a test
第 12 回	Item analysis	Distractor analysis and scoring multiple-choice items in Excel
第 13 回	Student project presentation	Presentation and feedback
第 14 回	Student project presentation	Presentation and feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper.

【テキスト（教科書）】

Assessment myths: Applying second language research to classroom teaching by Lia Plakans and Atta Gebriel. University of Michigan Press. 2015.

【参考書】

J. Charles Anderson, Caroline Clapham, and Dianne Wall. (2001). Language test construction and evaluation. Cambridge University Press. ISBN: 978-0521478298
小泉利恵、印南洋、深澤真 (編著). (2017). 『実例でわかる英語テスト作成ガイド』. 大修館書店. ISBN: 978-4469246100
望月昭彦、深澤真、印南洋、小泉利恵 (編著). (2015). 『英語 4 技能評価の理論と実践: CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで』. 大修館書店. ISBN: 978-4469245912

【成績評価の方法と基準】

Reaction paper (40%); Chapter presentation (10%); Student project (30%); Writing portfolio (20%)

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし
Feel free to ask questions. I look forward to working with you.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
Applied linguistics, language education, language testing, and program evaluation
<研究テーマ>
Test method effects on test performance
Construct validation study of a test/instrument/questionnaire
Meta-analytic inquiry into the variability of effects
Longitudinal measurement of change in language proficiency and program evaluation
Secondary analysis of survey and administrative datasets
Application of measurement models to language test data (especially, meta-analysis and structural equation modeling)

<主要研究業績>

In'nami, Y., & Koizumi, R. (2013). Statistics and software for test revisions. In A. Kunnan (ed.), Companion to language assessment (Vol. II: Approaches and Development, Part 7: Assessment Development, pp.925 - 943). New York: Wiley-Blackwell.

卯城祐司編著。『英語リーディングテストの考え方と作り方』。共著 (第 5 章 テスト得点解釈の留意点 [pp. 78-87] を担当)。平成 24 年 9 月。研究社。

竹内理・水本篤編著。『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』。共著 (第 14 章 SEM 入門 [pp. 194-206]、第 16 章 メタ分析入門 [pp. 227-239] を担当)。平成 24 年 5 月。松柏社。

【Outline and objectives】

<講義題目> Language testing and assessment

This course is mainly provided for student teachers to give an insight into how to evaluate learner knowledge and performance in L2 education. The course also introduces some stimulating issues on second language testing and assessment. In particular, it focuses on the questions that people often have about language testing and assessment. The students will also examine, discuss, and create types of assessing practices in L2 situations.

LIN500B3

英語発音法 A

高橋 豊美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

分節音の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- ・分節音の体系、分布、音声変化について、理論的に説明できる。
- ・発話を聞いて、分節音を発音記号で正確に書き取ることができる。
- ・発音記号を適切な発音で読むことができる。
- ・与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語を主な対象とし、個々の分節音の調音的・音響の特徴、分節音の体系について学んだ上で、授業計画に示すように分節音がかかわるさまざまな音声現象の仕組みを理解する。

配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取り、発音記号による発話モデルの作成などの練習などを行う。

課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。

授業は、対面で受講できない場合は、ビデオ会議システムと学習支援システムを併用してオンラインで受講する。(事前に学習支援システムのお知らせで受講方法等の詳細を確認すること。)

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 01 回	授業案内	授業の概要／参考文献
第 02 回	音声の基礎、母音	発声の仕組み／母音の調音的特徴／課題 1
第 03 回	子音、音素論	子音の調音的特徴／音声の分類／課題 2
第 04 回	音節の機能、構造	分節音と超分節音／リズムの基本単位／分節音現象の構造記述／課題 3
第 05 回	音節現象	音声変化／押韻／音節構造と音声分布／課題 4
第 06 回	音節とリズム	音節区分／音節子音／音節圧縮／課題 5
第 07 回	母音の変化	弱化／中和／短縮／課題 6
第 08 回	弱形	引用形と弱形／弱形の種類／課題 7
第 09 回	分節音現象	音声変化の概要／子音の分布／課題 8
第 10 回	連結、脱落	語境界を挟む音のつながり／子音の連続における発音の簡略化／課題 9

第11回 交替、挿入、短縮	語境界を挟む子音の同化／歯茎破裂音の挿入／硬音前母音短縮／課題 10
第12回 地域的な音声変化	母音体系／歯茎破裂音の異音／声門音化／r の現れ方
第13回 総括	前回までの授業内容のまとめと考察
第14回 課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を目安とする。
資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。
この授業では、10 回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上で返却される。チェックを受けた部分をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。
授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

・ Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
・ Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
・ Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.
・ BBC Learning English: Pronunciation Tips < <http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/grammar/pron/> >

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) に基づき成績を評価する。
・ 授業への取り組みでは、練習問題の解答や小テストの成績と、授業中の発言・質問の頻度と内容を、総合的に評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。
・ 課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。
・ 試験では、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。実技を含むので、毎回の授業を時間をかけて復習しておくこと。

【学生の意見等からの気づき】

課題で毎回同じ誤りが繰り返されている場合が複数あったので、次年度は授業の最後に質疑応答、リフレクションの時間をとるようにして、理解の定着を図っていく。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システム Hoppi を使用する。

【その他の重要事項】

英文学専攻では「英語発音法 B」、日本国際学専攻では「英語発音法 II」とあわせて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >
音声学、音韻論
< 研究テーマ >
音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
< 主要研究業績 >
・ Toyomi Takahashi (2014). Identity avoidance in the onset. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.
Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・ Toyomi Takahashi (2008). Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.
・ 高橋豊美 (2005). 『弁別素性理論』. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 『音韻理論ハンドブック』. 英宝社. 131-142.
・ Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.
Together with English Pronunciation B (English Pronunciation II), English Pronunciation A (English Pronunciation I) aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.
This course discusses segmental aspects of English pronunciation. Its topics include the articulatory features of individual sounds, their accentual variations, the syllable structure, the distribution of sounds, and connected speech phenomena (lenition, alteration and insertion). These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.
This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

LIN500B3

英語発音法 B

高橋 豊美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

韻律の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- ・音節の強さと発音の特徴、強勢の配置と役割、イントネーションのパターンと機能について、理論的に説明できる。
- ・発話を聞いて、強勢とイントネーションを含めて発音記号で正確に書き取ることができる。
- ・発音記号を適切な発音で読むことができる。
- ・与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語（Received Pronunciation）を主な対象とし、日本語との比較を適宜行いながら、リズムが形成される仕組みと、イントネーションの形式と機能を学び、韻律を含めた基本的な発話モデルの組み立てや、談話分析の方法を理解する。

配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取りの練習、発音記号で発話モデルを提示したり発話を書き取ったりする練習などを行う。

課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。

授業は、対面で受講できない場合は、ビデオ会議システムと学習支援システムを併用してオンラインで受講する。（事前に学習支援システムのお知らせで受講方法等の詳細を確認すること。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業案内／語・句強勢	授業概要／参考文献／強勢の音声の特徴／複合語と句の強勢／課題 1
第 2 回	文強勢（理論）	強勢移動／文強勢の配置／韻脚／課題 2
第 3 回	文強勢（実践）	文強勢モデルの記述と実践／課題 3
第 4 回	イントネーション概説	イントネーションの形式と機能／音調アクセント／課題 4
第 5 回	イントネーション理論 (1)：声調	イントネーション句の構成／核声調／課題 5
第 6 回	イントネーション理論 (2)：調性	イントネーション句の機能／課題 6
第 7 回	イントネーション理論 (3)：核配置	イントネーション句の焦点／核配置と焦点領域／課題 7
第 8 回	イントネーション理論 (4)：音調曲線	イントネーション句の頭部と核声調の組合せ／課題 8

- 第 9 回 イントネーションの意 下降声調の表す意味と用法／課題
味 (1)：下降声調 9
- 第 10 回 イントネーションの意 非下降声調の表す意味と用法／課題
味 (2)：非下降声調 10
- 第 11 回 イントネーションの定 複文・重文の音調曲線
型 (1)
- 第 12 回 イントネーションの定 対照的な要素を含む文の音調曲線
型 (2)
- 第 13 回 イントネーションの定 慣習的な音調曲線
型 (3)
- 第 14 回 課題報告、試験 音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を目安とする。

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。

この授業では、10 回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をととして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上で返却される。チェックを受けた部分をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

- ・Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
- ・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) に基づき成績を評価する。

・授業への取り組みでは、練習問題の解答や小テストの成績と、授業中の発言・質問の頻度と内容を、総合的に評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験では、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。実技を含むので、毎回の授業を時間をかけて復習しておくこと。

【学生の意見等からの気づき】

課題で毎回同じ誤りが繰り返されている場合が複数あったので、次年度は授業の最後に質疑応答、リフレクションの時間をとるようにして、理解の定着を図っていく。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システム Hoppi を使用する。

【その他の重要事項】

この授業は英文学専攻では「英語発音法 A」、日本国際学専攻では「英語発音法 I」の内容を前提としている。「英語発音法 A」・「英語発音法 I」を履修していない場合は、授業が始まるまでに、参考書に挙げた Tench (2011) の Part 1 をよく読んで理解しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

・Toyomi Takahashi (2008). *Unique Path*. 『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 弁別素性理論. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 音韻理論ハンドブック. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

Together with English Pronunciation A (English Pronunciation I), English Pronunciation B (English Pronunciation II) aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses prosodic aspects of English pronunciation. Its topics include the location and interpretation of stress in different domains (word/phrase/sentence), the components of intonational phrase and their pitch patterns, the location of nuclear accents and their focusing function, and the types and usage/meaning of tunes. These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

BSP500B3

英語表現演習 A

ニアル・ムルター

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Development of writing skills in English

【到達目標】

Students will learn to write clear and grammatically correct English with a high level of competency.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Using non-fiction articles, students will learn how to express ideas and opinions. Each week students will read and discuss a topic in class and then write a short report or essay outlining their reactions. Individual feedback will be given on each report or essay.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	Course outline
第2回	Text book outline	Background to text book content and author
第3回	Text book themes for academic writing	Reading of text book passages
第4回	Text book themes for literary writing	Summarizing text book passages
第5回	Developing ideas	Linking ideas from stories to experience
第6回	Thinking about your readers	The message you wish to convey
第7回	Organizing ideas	Sequencing of topics
第8回	Advanced topics	Writing style
第9回	Complex topics	Structure of essays
第10回	Academic subjects	Avoiding redundancy
第11回	News topics	Clarity and consistency
第12回	Essay topic selection	Generic or specific theme
第13回	Evaluation criteria	Impact and effect of writing
第14回	Conclusion	Summary of course

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will write short essays to be reviewed in class each week.

【テキスト（教科書）】

Articles will be provided in class.

【参考書】

Internet dictionary: <https://www.alc.co.jp/>

The Elements of Style, William Strunk, Jr., 50th Anniversary Edition, Pearson Longman, 2009

【成績評価の方法と基準】

Grades will be based on written essays to be submitted each week (100%).

Course credits will not be given where a student is absent three or more times in a semester without submitting a reason.

【学生の意見等からの気づき】

Techniques for minimizing errors in written English will be explained. Discussions and student opinions are encouraged.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Ontologies and knowledge representation.

<研究テーマ>

Translation memory tools.

<主要研究業績>

Artificial Intelligence in Japan, Centre for AI Research, Oxford (UK), 1997.

【Outline and objectives】

The objective of the course is to enable students to polish their writing skills to a high level. Reference will be made to articles provided in class to enable improvement in writing structure and content.

BSP500B3

英語表現演習 B

ニアル・ムルター

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Development of writing skills in English

【到達目標】

Students will learn to write clear and grammatically correct English with a high level of competency.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Using non-fiction articles, students will learn how to express ideas and opinions. Each week students will read and discuss a topic in class and then write a short report or essay outlining their reactions. Individual feedback will be given on each report or essay.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	Course outline
第 2 回	Foundations of writing: structure	Introduction to selected writing
第 3 回	Foundations of writing: themes	Reading of selected writing
第 4 回	Foundations of writing: impact	Summarizing of selected writing
第 5 回	Developing ideas	Linking ideas from stories to experience
第 6 回	Thinking about your readers	Expectation fulfillment
第 7 回	Flow of narrative	Connecting paragraphs
第 8 回	Stylistic conventions	Keywords and phrases
第 9 回	Domains of discourse	Essay requirements
第 10 回	Application to general writing themes	Impact of essay
第 11 回	Application to academic writing themes	Constraints of academia
第 12 回	Application to novel writing themes	Free writing
第 13 回	Student essay	Evaluation: comparison with other writing
第 14 回	Conclusions	Ideas for future study

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Students will write short descriptions to be reviewed in class each week.

【テキスト（教科書）】

Articles will be provided in class.

【参考書】

Internet dictionary: <https://www.alc.co.jp>

The Elements of Style, William Strunk, Jr., 50th Anniversary Edition, Pearson Longman, 2009

【成績評価の方法と基準】

Grades will be based on written essays (100%). Course credits will not be given where a student is absent three or more times in a semester without submitting a reason.

【学生の意見等からの気づき】

Techniques for minimizing errors in written English will be explained. Discussions and student opinions are encouraged.

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

Ontologies and knowledge representation.

＜研究テーマ＞

Translation memory tools.

＜主要研究業績＞

Artificial Intelligence in Japan, Centre for AI Research, Oxford (UK), 1997.

Configuration Design Tool as a Customizable Web Service, International Journal of Knowledge-based Systems, (Elsevier), Vol. 8, No. 3, 2004.

【Outline and objectives】

The objective of the course is to enable students to polish their writing skills to a high level. Reference will be made to articles provided in class to enable improvement in writing structure and content.

LIT500B3

文学方法論 A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論について学ぶ。3作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を3作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

中心的な「教科書」として、W・L・ゲーリン『文学批評入門』・青木健・日下洋右 訳・彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリントを読む（教員が準備する）。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション： “Armed Vision” (S. Hyman)	いかにテキストにむかうか
第 2 回	テキストとは何か	テキスト概念の変容
第 3 回	テクスチュアル・クリティシズム	本文校訂または批評以前の批評
第 4 回	印象批評とは何か	作家・作品・読者の三角形
第 5 回	印象批評の実践	レポーターによる発表と討論
第 6 回	フォルマリズム	形式主義的批評とテキスト分
第 7 回	フォルマリズム批評の実践	レポーターによる発表と討論
第 8 回	文化人類学と文学	神話批評
第 9 回	神話批評の実践	レポーターによる発表と討論
第 10 回	文学と心理分析	フロイト、ユング、その後
第 11 回	精神分析批評の実践	レポーターによる発表と討論
第 12 回	注釈	釈義学から解釈学へ
第 13 回	その実践	レポーターによる発表と討論
第 14 回	ディコンストラクションからニューヒストリシズムへ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

批評の対象となる作品テキストを読み進めること。自身の研究を進めて、批評理論の応用を考えること。予習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”

Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*

Shakespeare, *Hamlet*

W・L・ゲーリン『文学批評入門』・青木健・日下洋右 訳・彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

デリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマル・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 60 パーセント、レポート 40 パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学習支援システムの「教材」に（あとからも）参照可能なかたちで資料ファイルを整理して蓄積する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学

＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

＜主要研究業績＞ 『Ormond』におけるピクチャレスクな意匠をめぐって』『英文学誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十）第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline and objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read critical approaches applied to them.

LIT500B3

文学方法論B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。Bの過半は学生自身の実践的発表と質疑が主となる予定だが、春学期からの「教科書」として、W・L・ゲーリン『文学批評入門』・青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリントを参照・検討する。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論を学ぶ。3作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を3作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	分析と解釈の実践（1）	イメージ、シンボル、アレゴリー
第2回	分析と解釈の実践（2）	比喩と脱比喩
第3回	分析と解釈の実践（3）	プロットの構築
第4回	分析と解釈の実践（4）	キャラクター分析
第5回	中間まとめ	中間報告の反省
第6回	ニューヒストリシズムからカルチュラル・スタディーズへ	1980年代からの流れ
第7回	ポストコロニアリズム	プリント講読
第8回	フェミニズム批評	プリント講読
第9回	ジェンダー理論	プリント講読
第10回	ナラトロジー理論	プリント講読
第11回	分析と解釈の実践（5）	視点と声
第12回	分析と解釈の実践（6）	ナラトロジー
第13回	分析と解釈の実践（7）	ソース・スタディー
第14回	総まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。テキストの下調べ。自身の研究テーマの探求。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”

Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*

Shakespeare, *Hamlet*

W・L・ゲーリン『文学批評入門』・青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

ウェイン・ブース、米本弘一ほか訳『フィクションの修辭学』（水声社、1991）
デイヴィッド・ロッジ、柴田元幸・斎藤兆史訳『小説の技巧』（白水社、1997）
テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマル・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 30 パーセント、レポート 40 パーセント、試験 30 パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な参加を促せるようにつとめたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学
 ＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
 ＜主要研究業績＞ 「疑似科学と科学の境」(八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67. 「Cacotype ——言葉の影、または引用について」(『英文学誌』 58, 2016) 35-60. 「Wot's the hodds so long as you're 'appy ——いいじゃないの幸せならば、または Web の効用について」(『英文学誌』 59, 2017) 33-48.

【Outline and objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read critical approaches applied to them.

LIN500B3

英語音声・応用研究 A

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

調音音声学の基礎を学ぶ。

【到達目標】

音声言語（spoken language）がどのような仕組みで産出されるのかを理解し他者に説明できるようになること。音声学の中でも特に調音音声学（articulatory phonetics）について、用語や基本概念を自分の言葉で説明できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

言語音の調音の仕組み、言語音の表記方法、英語や日本語の母音・子音・リズム・イントネーション、音の素性などについて、順を追って理解を深めてゆく。欧米の音声学の授業などでは古典とされる Peter Ladefoged 著 *A Course in Phonetics* をテキストとし、受講者による担当箇所の発表および全員での内容の議論を中心に授業を進める予定。また、授業中に、受講者による発表や全員での議論について、クラス全体に向けてフィードバックを行う。授業は以下の授業計画に沿って進める予定だが、受講生の要望などによって変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入、言語学と音声学	シラバスの説明、言語学における音声学の位置づけ
2	言語音とその調音	音声産出、音波、母音・子音の調音的記述、韻律
3	音声表記と音韻論	子音と母音の表記方法、音韻論
4	英語の子音	閉鎖音、摩擦音、鼻音、接近音、英語の子音異音変化規則
5	英語の母音	母音の表記法、母音の音色、聴覚的母音空間、二重母音、弱母音、緊張・弛緩母音など
6	母音の調音	日本語・英語の母音、MRI で見る母音
7	英語の語と文の特徴	連続音声の中の単語、強勢、リズム、イントネーション
8	呼気流と発声の仕組み	声門の状態、VOT
9	子音の調音	調音動作の標的、調音動作の種類、調音様式
10	音響音声学	音源フィルタ理論、音響分析、子音の音響的特徴、スペクトログラムの見方
11	母音	基本母音、諸言語の母音、R 音化母音、母音の鼻音化、半母音
12	音節と韻律	音節、強勢、長さ、タイミング、強勢・声調・ピッチアクセント言語
13	空気力学	口腔内気圧変化、空気の流れを測る
14	言語学的音声学、総括	「個人」と「社会」の音声学、国際音声字母、素性階層、音声と記憶、授業のまとめと振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(1) 毎回指定範囲を読み、授業での討論に備えること、(2) 発表担当の場合、事前に発表用資料などを準備し、授業にてディスカッションをリードすること、(3) 学期中に 2-3 回出題される演習課題を行うこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

以下をテキストとして使用する予定。

Ladefoged, P. & Johnson, K. (2010). *A Course in Phonetics, international edition*. Heinle.

【参考書】

参考書として以下を挙げておく。

川原繁人 (2018). 『ビジュアル音声学』三省堂.

【成績評価の方法と基準】

平常点 40%、発表 60%の割合で評価する。指定範囲をよく読み、理解しておくことはもちろん、疑問点を考えたり、他の文献を調査したり、積極的な参加姿勢を特に重視する。原則として、正当な理由なく 4 回を超えて授業を欠席した場合は無断で発表を怠った場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート未実施につき該当なし

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをするので、受講者は初回授業に必ず出席すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 言語学・音声学・認知科学

＜研究テーマ＞ 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳 (2017). 『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房.

田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basics of articulatory phonetics.

LIN500B3

英語音声・応用研究 B

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音響・聴覚音声学の基礎を学ぶ。

【到達目標】

音声言語がどのような特徴を持ち、人間がどのような仕組みで音声言語を産出・知覚するのかを理解し、説明できるようになること。音声学の中でも特に音響音声学（acoustic phonetics）および聴覚音声学（auditory phonetics）の基礎的な概念や研究スキルを習得し、関連分野の学術論文の内容が理解できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

音響学の基礎、音声を PC 上で扱う際の基礎知識、聴覚と音声知覚、音声産出の音響理論、様々な母音や子音の音響の特徴などについて、順を追って理解を深めてゆく。音響音声学と聴覚音声学を扱うテキストとして Keith Johnson 著 *Acoustic and Auditory Phonetics* を用い、受講者による担当箇所の発表および全員での内容の議論を中心に授業を進める予定。また、授業中に、受講者による発表や全員での議論について、クラス全体に向けてフィードバックを行う。授業は以下の授業計画に沿って進める予定だが、受講生の要望などによって変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
1	導入、調音音声学	シラバスの説明、調音音声学の復習
2	音響学の基礎とフィルタ	音の感覚、単純周期音、複合周期音、非周期音、音響フィルタ
3	音声のデジタル信号処理	デジタル信号とアナログ信号、標本化と量子化、様々な音声分析
4	聴覚の基礎	聴覚末梢系、ラウドネス、音声の聴覚的表象
5	音声知覚	音声知覚実験、知覚的距離と知覚的写像
6	音声産出と音響理論	有声化、声道フィルタ、母音フォルマント、LPC
7	母音	母音産出の音響管理論、摂動理論、音響的母音空間、言語間での母音知覚
8	摩擦音	乱流、摩擦音の調音点、摩擦音の知覚的次元
9	閉鎖音と破擦音	閉鎖音と破擦音の音源特性、閉鎖音の声道特性
10	鼻音と側音	帯域幅、鼻音、鼻音化、側音、鼻音の知覚
11	母音・二重母音の音響特性	母音生成のモデル、母音の音響的記述
12	子音の音響特性	閉鎖子音、摩擦子音、鼻音、わたり音、流音
13	文脈や話者が及ぼす音響効果	調音結合、超分節素、話者変数：年齢と性別、言語障害
14	授業の振り返り	授業のまとめ、フィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(1) 毎回指定範囲を読み、授業での討論に備えること、(2) 発表担当の場合、事前に発表用資料などを準備し、授業にてディスカッションをリードすること、(3) 学期後半の実験課題を毎回段階的に行い実験プロジェクトを完成させること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

以下をテキストとして使用する予定。

Johnson, K. (2003). *Acoustic and Auditory Phonetics*. Malden, MA:Blackwell Publishing.

【参考書】

参考書として以下を挙げておく。

レイ・D・ケント、チャールズ・リード（著）、荒井隆行、菅原勉（監訳）（1996）『音声の音響分析』海文堂。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40%、発表 60%の割合で評価する。指定範囲をよく読み、理解しておくことはもちろん、疑問点を考えたり、他の文献を調査したり、積極的な参加姿勢を特に重視する。原則として、正当な理由なく 4 回を超えて授業を欠席した場合は無断で発表を怠った場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート未実施につき該当なし

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをするので、受講者は初回授業に必ず出席すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 言語学・音声学・認知科学

＜研究テーマ＞ 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳 (2017). 『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房。

田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basics of acoustic and auditory phonetics.

LIN600B3

理論言語学・認知科学A

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and classify theories of L2 learning and apply the findings to the development of principled approaches to L2 pedagogy.

＜講義題目＞

第二言語習得 Second Language Acquisition

【到達目標】

Upon successful completion of this course, M.A. and doctoral students are expected to be able to do the following:

1. Explain the core issues in L2 acquisition research

2. Examine the connection between L2 research and pedagogy

In addition to 1 and 2, doctoral students are expected to be able to do the following:

3. Conduct research on instructed L2 learning, and relate the findings to L2 learning and teaching in Japan

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics. Feedback will be given after each presentation. This course will be conducted online.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction to the course	Presentation of key concepts in second language acquisition and teaching
第 2 回	First language acquisition	How do people learn an L1?
第 3 回	Second language acquisition	How do adults learn an L2?
第 4 回	Age and L2 acquisition	How does age affect L2 acquisition?
第 5 回	Interaction in L2 classrooms	Does interaction lead to L2 acquisition?
第 6 回	Focus on form	Attending to meaning and form in L2 learning
第 7 回	Acquisition of L2 grammar	How is L2 grammar acquired?
第 8 回	Acquisition of L2 vocabulary	Issues related to L2 vocabulary acquisition
第 9 回	Contexts of instructed second language acquisition	In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?
第 10 回	Foreign language aptitude	Does language aptitude influence L2 learning?
第 11 回	Motivation	To what extent does motivation affect L2 learning?
第 12 回	Affect and other individual differences	What other variables play a role in L2 learning?

第 13 回	Research presentations	Research project presentations
第 14 回	Feedback on research presentations and final exam	Discussion of and feedback on students' research projects and final exam

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2013). *How languages are learned*. Oxford University Press.

Shawn Loewen. (2015). *Introduction to instructed second language acquisition*. Routledge.

Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition*. Hodder Education.

Rod Ellis. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd edition). Oxford University Press.

H. Douglas Brown. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy* (3rd edition). Longman.

H. Douglas Brown. (2006). *Principles of language learning and teaching* (5th edition). Longman.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

< M.A. Students >

In-class presentations: 50%

Written report: 25%

Final Exam: 25%

< Doctoral Students >

In-class presentations: 25%

Written report: 25%

Research proposal: 25%

Final Exam: 25%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments and a final exam. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for missing an assignment (i.e., presentation, report, or test) or for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】

Students commented that they benefited from conducting research and preparing presentations on the course content. I plan to allot more time for students to reflect on the course content and to conduct research for their presentations.

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 第二言語習得・英語教育学

< 研究テーマ > 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

< 主要研究業績 >

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月

三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三

省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline and objectives】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and classify theories of L2 learning and apply the findings to the development of principled approaches to L2 pedagogy.

< 講義題目 >

第二言語習得 Second Language Acquisition

LIN500B3

応用言語学・理論研究 A

熊澤 孝昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は応用言語学で扱われているテーマに関連した学術論文を精読することと、その問題点等を議論することを主な目的とする。また、応用言語学で用いられている研究手法についても学習する。

【到達目標】

授業目標は次の 3 点である：1. 応用言語学の研究手法についての知識を得る。そして、実践を積む。2. 論文を読むスキルおよび理解するための知識を身につける。3. 論文の内容を発表することにより発表スキルを身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者が研究手法についての講義を行う。そして、履修者は扱われた研究手法が用いられた論文を精読したうえで、その要旨等の発表を行う。その後、問題点などを議論することを行う。授業形式については、初回は対面で行い、状況を鑑み判断する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入と応用言語学とは	シラバス説明および講義
第 2 回	文法	文法とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 3 回	語彙	語彙とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 4 回	談話分析	談話分析とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 5 回	語用論	語用論とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 6 回	第二言語習得	第二言語習得とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 7 回	心理言語学	心理言語学とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 8 回	社会言語学	社会言語学とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 9 回	学習者要因	学習者要因とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 10 回	リスニング	リスニングとはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 11 回	スピーキングと発音	スピーキングと発音とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 12 回	リーディング	リーディングとはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 13 回	ライティング	ライティングとはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第 14 回	評価	評価とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に指定教科書および論文を読むこと。また、発表担当者はレジュメ作成等の準備をすること。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

指定教科書：初回に知らせる。

指定論文は配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

50 %（平常点・発表）、50 %（期末テスト）

【学生の意見等からの気づき】

履修生にとってためになる授業を提供できればと思う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

応用言語学、英語教育学、言語テスト、第二言語習得

<研究テーマ>

応用言語学の分野でも特に英語教育学を専門とする。特に、第二言語習得の観点からみた動機付けや信条などの教育心理、教授法、および言語テストに興味がある。

<主要研究業績>

(2016). Factors affecting multiple-choice cloze test score variance: A perspective from generalizability theory. *International Journal of Language Studies*, 10.

(2013). 「英語教育学の量的研究で用いられる統計について」. 『コンピュータ&エデュケーション』, 34.

(2013). 「学内開発ブレイスメントテスト得点解釈と使用の妥当性の評価について」. *JALT Journal*, 35.

(2011). Systematic criterion-referenced test development in an English-language program. (Doctoral Dissertation).

(2010). 「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」. *JALT Journal*, 32.

(2009). Revision of a criterion-referenced vocabulary test using generalizability theory. *JALT Journal*, 31.

【研究テーマ】

応用言語学の分野でも特に英語教育学を専門とする。特に、第二言語習得の観点からみた動機付けや信条などの教育心理、教授法、および言語テストに興味がある。

【主要研究業績】

(2016). Factors affecting multiple-choice cloze test score variance: A perspective from generalizability theory. *International Journal of Language Studies*, 10.

(2013). 「英語教育学の量的研究で用いられる統計について」. 『コンピュータ&エデュケーション』, 34.

(2013). 「学内開発ブレイスメントテスト得点解釈と使用の妥当性の評価について」. *JALT Journal*, 35.

(2011). Systematic criterion-referenced test development in an English-language program. (Doctoral Dissertation).

(2010). 「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」. *JALT Journal*, 32.

(2009). Revision of a criterion-referenced vocabulary test using generalizability theory. *JALT Journal*, 31.

【Outline and objectives】

本科目の目的は以下の通りとする。

- ・学術論文を精読することによって、自らのテーマについての理解を深めることができる。
- ・研究手法について理解し、さらに実際に用いることによって実践を積むことができる。

LIN500B3

応用言語学・理論研究B

熊澤 孝昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は応用言語学で扱われているテーマに関連した学術論文を精読することと、その問題点等を議論することを主な目的とする。また、応用言語学で用いられている研究手法についても学習する。

【到達目標】

到達目標は次の3点である：1. 応用言語学の研究手法についての知識を得る。そして、実践を積む。2. 論文を読むスキルおよび理解するための知識を身につける。3. 論文の内容を発表することにより発表スキルを身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者が研究手法についての講義を行う。そして、履修者は扱われた研究手法が用いられた論文を精読したうえで、その要旨等の発表を行う。その後、問題点などを議論することを行う。授業形式については、初回は対面で行い、状況を鑑み判断する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入（シラバス説明等）	シラバスおよび授業運営について説明を行う
第2回	学習方略	関連論文についての発表および議論を行う
第3回	学習信条	関連論文についての発表および議論を行う
第4回	評価	関連論文についての発表および議論を行う
第5回	教材	関連論文についての発表および議論を行う
第6回	教授法	関連論文についての発表および議論を行う
第7回	リーディング	関連論文についての発表および議論を行う
第8回	リスニング	関連論文についての発表および議論を行う
第9回	ライティング	関連論文についての発表および議論を行う
第10回	スピーキング	関連論文についての発表および議論を行う
第11回	文法	関連論文についての発表および議論を行う
第12回	語彙	関連論文についての発表および議論を行う
第13回	発音	関連論文についての発表および議論を行う
第14回	まとめ	到達度合いを確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定教科書および論文を精読する。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

指定教科書は第1回目に知らせる。指定論文は配布する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表、参加度合い）50%、試験 50%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 応用言語学

<研究テーマ> SLA, Language Testing, TESOL

<主要研究業績 (2016). Factors affecting multiple-choice cloze test score variance: A perspective from generalizability theory. International Journal of Language Studies, 10.

(2013). 「英語教育学の量的研究で用いられる統計について」, 『コンピュータ&エデュケーション』, 34.

(2013). 「学内開発ブレイスメントテスト得点解釈と使用の妥当性の評価について」, JALT Journal, 35.

(2011). Systematic criterion-referenced test development in an English-language program. (Doctoral Dissertation).

(2010). 「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」, JALT Journal, 32.

(2009). Revision of a criterion-referenced vocabulary test using generalizability theory. JALT Journal, 31.

【Outline and objectives】

授業目標は次の3点である：1. 応用言語学の研究手法についての知識を得る。そして、実践を積む。2. 論文を読むスキルおよび理解するための知識を身につける。3. 論文の内容を発表することにより発表スキルを身につける。

LIN500B3

言語科学方法論 A

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。
・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
・実験設計およびデータの統計処理
＜講義題目＞言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようにすること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義およびパソコン実習。
試験には各人ごとに採点コメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること、注目していない要因の効果の除去
第4回	論文執筆の基本	構成、引用の方法
第5回	統計学的検定の基本1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t 検定（その1）	被験者間要因の場合
第11回	t 検定（その2）	1 サンプルの t 検定
第12回	t 検定（その3）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
わからない箇所は教員や周囲に質問すること。
また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしていただくこと。

【テキスト（教科書）】

学習支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.
大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.
Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology*. (6th ed.) Wadsworth.
Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS*. Sage.
Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

全員の理解度をもっと上げたいです。

【その他の重要事項】

この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

＜研究テーマ＞

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

＜主要研究業績＞

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An introduction to research methodology in linguistic sciences, covering:

- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis

LIN500B3

言語科学方法論 B

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in the Linguistic Sciences

【到達目標】

Upon successful completion of this course, M.A. and doctoral students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

Additionally, doctoral students are expected to be able to design a research study, collect data, and report the results of statistical analyses.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses in the computer lab. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. This course is conducted in English. Feedback will be given after each presentation. This course will be conducted online.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Research methods in the linguistic sciences	Introduction to why research is conducted and the concepts covered in this course
第 2 回	Variables & levels of measurement	Classification and measurement of variables
第 3 回	Visual descriptive statistics	Creating graphs and plots
第 4 回	Statistical assumptions	Methods of addressing statistical assumptions
第 5 回	Correlation	Background and calculation of Pearson's correlation coefficient
第 6 回	Other methods of correlation	Calculation of Spearman's correlation coefficient
第 7 回	Linear regression	Background and calculation of linear regression
第 8 回	Multiple regression	Calculating and interpreting multiple regression
第 9 回	T-tests and research design	Background of t-tests and calculation of a paired-samples t-test and an independent samples t-test

第 10 回	ANOVA, planned comparisons, and post-hoc tests	Background and calculation of ANOVA
第 11 回	Factorial ANOVA	Background and calculation of factorial ANOVA
第 12 回	Repeated-measures ANOVA	Background and calculation of repeated-measures ANOVA
第 13 回	Factor analysis	Background of factor analysis
第 14 回	Applying factor analysis	Factor analyzing data

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.

Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.

Fred L. Perry, Jr. (2011). *Research in applied linguistics: Becoming a discerning consumer*. Routledge.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

< M.A. Students >

Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%

< Doctoral Students >

Presentations: 25%; Research Report: 25%; Final Data Analysis Assignment: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Doctoral students will also submit a research report. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【その他の重要事項】

Students should have already taken 言語科学方法論 A or an equivalent course.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline and objectives】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in the Linguistic Sciences

PSY500B3

音声言語科学特論

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語学について基礎から学ぶ。

【到達目標】

母語話者として言葉を操るには、その言語の音（音声学、音韻論）、語彙（形態論）、文の作り方（統語論）、語句の意味（意味論）、他者との対話の中での言葉づかい（語用論）など、様々な知識が必要である。この言語知識を科学的な観点から追究する言語学の諸分野について、基礎概念を学び、問題を解く能力を身に付けることを本授業の目標とする。授業では言語学を初めて学ぶ学生を想定しているが、受講生の既有知識に応じて進度を適宜調整する。授業終了時には、言語に関する様々な現象や疑問について吟味・解決できるようになることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

人間に特有の能力とされる言語がどのような原理によって成立しているのかを科学的に追究する言語学について概観する。言語学の諸分野の中でも音声学、音韻論、形態論、統語論の中から適宜重要なトピックを取り上げる予定である。日本語や英語などの諸言語から様々な具体例を検討し、問題を実際に解く作業を通して、言語学の基礎概念や分析方法を身に付ける。また、音声学分野で広く利用されているフリーソフト **Praat** の実習を行う。授業は、教員による講義、課題に関するディスカッション、教員から全員に向けてのその場でのフィードバックなどを織り交ぜながら進める予定である。授業後半では、言語に関係する学術論文を学生が自ら選定し、その内容を授業にて発表する機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入、言語と言語学	シラバスの説明、言語学とは？、言語学の諸分野、二種類の言語
2	形態論：形態素、語形成	心内辞書と一般辞書、形態論と形態素、形態素の種類、偶発的な語形成、少し規則的な語形成
3	形態論：複合、派生	主要部、複合語の種類、複合語の意味、派生語の樹形図
4	形態論：屈折、形態素解析	屈折と活用、形態素解析の方法、練習問題
5	統語論：導入、カテゴリー、意味役割、マージ	構成素、句構造、句の主要部、文を作り上げるための材料：カテゴリー、項と意味役割、文を組み立てる仕組み：マージ、様々な種類の句
6	統語論：文の組み立て	英語の文・日本語の文の組み立て、動詞句の組み立て、屈折辞と格、一般的な句の構造
7	統語論：補文	動詞句の拡張、補部と指定部、文の中の文＝補文
8	音声学・音韻論：母音と子音	発話のメカニズム、母音、子音
9	音声学・音韻論：音素	音素、音素分析
10	実験音声学：音声分析	Praat を使った音声の録音・可視化・編集・分析・ラベリング
11	実験音声学：音声合成	Praat を使った音声の再合成

- 12 実験音声学：音声知覚 **Praat** を使った音声知覚実験
 13 論文発表（1） 言語に関わる学術論文の発表
 14 論文発表（2）、総括 言語に関わる学術論文の発表、授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

（1）毎回、テキストの指定範囲を読み、課題に取り組み、次回の授業で議論をするための準備をすること。（2）学期の後半では言語に関わる学術論文を各自選定し、学期末にその内容について発表すること。本授業の準備学習・復習時間は、計 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

以下の文献の一部を授業で使用する予定。

西光義弘（編集）（1999）. 日英語対照による英語学概論：増補版
くろしお出版.

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 音声学を学ぶ人のための **Praat** 入門 ひつじ書房.

【参考書】

参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 20%、課題 50%、発表 30%の割合で評価する。言語学は知識の段階的な学習とともに、問題を解く能力の習得が求められるので、授業参加と課題を重視する。原則として、4 回を超えて授業への出席や課題の提出がなかった場合、または論文発表を行わなかった場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

2018 年度春学期は、回答者 4 名全員が「履修してよかったか」「工夫されていたか」「理解できたか」という間に「4」か「5」で回答してくれました。授業外学習時間については「週 1～2 時間」が 2 名、「週 2～3 時間」が 2 名でした。コメント欄への記入はあまりありませんでしたが、「**Praat** の使い方が身につけてよかった」という感想をいただきました。

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 言語学・音声学・認知科学

＜研究テーマ＞ 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞

北原真冬・田嶋圭一（2011）. 音声分析ソフトウェア **Praat** を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.

田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

This course introduces students to the fundamentals of linguistics.

PSY500B3

音声言語科学演習

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間は言語を「話す」または「聞く」能力を 3-4 歳までにある程度習得するが、「読む」または「書く」能力はより時間と労力を要する。また、人間同様に流暢に会話ができるコンピュータは未だ完成していない。これはなぜだろうか？ 本授業ではこのような疑問を出発点に、音声言語の認知処理過程について学ぶ。

【到達目標】

音声言語が話し手にどのように産出され、音としてどのような特徴を持ち、聞き手にどのように知覚されるのかについて、説明できるようになることが目標である。また、音声分析ソフトを使って音声言語の特徴を分析できるようになることも目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

音声言語の発話と知覚の仕組み、音声の物理的な特徴、乳幼児による母国語の知覚能力の発達、成人による外国語音声の学習などについて、言語心理学や音声科学の知見を学ぶ。授業は講義、課題に関するディスカッション、教員による解説やフィードバックを中心に進める予定である。また、音声分析ソフト **Praat** を使った課題や演習も盛り込む予定である。授業の内容や進め方については受講生の人数や理解度・要望に応じて変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	シラバスの説明、音声言語と文字言語、「言葉の鎖」
2	音声とは	音声の確実性と速さ、音声産出のメカニズム、母音と子音
3	音響音声学の基礎（1）	音の正体、音の種類、音を可視化する方法、音声のデジタル化
4	音声の音響分析	Praat を使った音声の録音・可視化・編集・分析
5	音響音声学の基礎（2）	フィルタ、音声産出の音源フィルタ理論、基本周波数、フォルマント周波数
6	母音の知覚	聴覚器官、母音の特徴と知覚、母音の正規化
7	子音の知覚（1）	音響的不変性の欠如、ローカス理論、音声の符号化
8	音声の再合成	Praat を使った音声の録音・分析・再合成
9	子音の知覚（2）、カテゴリー知覚	調音点の知覚、声の有無の知覚、分節音と韻律、カテゴリー知覚とは、同定と弁別
10	音声知覚の実験	同定課題と弁別課題の演習
11	音声知覚の発達	生得と学習、乳児の音声知覚、満 1 歳までに起こる変化
12	外国語の音声知覚	成人による外国語音の学習、知覚と産出の関係、外国語音の知覚的同化
13	文脈の影響	トップダウン処理とボトムアップ処理、音声知覚と単語認知のモデル

14 音声知覚言語と社会的 話し方と対人認知の関係、授業の認知、総括 まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業にて指示されたテキストの範囲を読み、復習問題に回答し、次の授業にて提出すること。また、音声分析用フリーソフト **Praat** を使った課題を学期中に数回課すので、課題を行い成果を提出すること。本授業の準備学習・復習時間は、計 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

ジャック・ライアルズ（著）、今富摂子他（訳）（2003）. 音声知覚の基礎 海文堂. 石川圭一（2005）. ことばと心理 くろしお出版. 川崎恵里子（編著）（2005）. ことばの実験室 プレーン出版. 重野 純（2003）「音の世界の心理学」ナカニシヤ出版. 北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 音声学を学ぶ人のための **Praat** 入門 ひつじ書房.

【成績評価の方法と基準】

平常点 20%、課題 50%、発表 30%の割合で評価する予定。原則として、正当な理由なく 4 回を超えて授業への出席や課題の提出がなかった場合、発表を怠った場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

2019 年度はアンケートを実施したものの回答がありませんでした。2020 年度はオンライン授業となったためアンケートが実施されませんでした。そのため、2018 年度のアンケート結果からの気づきを以下に記します。
「積極的な工夫がされていた」「理解できた」「受講してよかった」いずれも 3 名全員「4」または「5」という回答でした。授業外学習も全員 2 時間以上でした。課題は多かったが、課題の確認とフィードバックを授業内で行えたので勉強になった、というコメントを複数いただきました。

【その他の重要事項】

授業の内容や運営方法の詳細について説明しますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一（2011）. 音声分析ソフトウェア **Praat** を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.

田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn about the cognitive mechanisms that underlie the processing of spoken language.

LIT500B3

比較文学研究 A

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会の追求は人類の歴史の中の根源的なテーマである。現代においても、あらゆる国家はそれを目指して考え続け、努力しているといっても過言ではない。

そのために理想社会、あるいはユートピアについて、とりわけ思想、文学、映画、芸術においてどのように考えられ、受容され、作用してきたのかを Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を講読しながら、考える。

とりわけ、＜現在＞という時点からのアクチュアルな問題提起として、現代の文学をも分析対象にいい、さまざまな文学作品を読みながら、現代文学の取り組みを考察する。

反ユートピア（ディストピア）、サイエンス・フィクション、映画、パラダイス・ロストなど現代の（反）ユートピア像の歴史に的を絞って、文献によって探っていく。＜講義題目＞現代のディストピアとユートピア像

【到達目標】

現代のユートピアの歴史を理解することができる。

また、その際に Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』やこの講義で挙げられた、あるいは考察対象とする小説や作品を読み、論じるので、そうした現代作家や作品の取り組みを知り、その小説や作品をユートピアという視点から批判的に分析できるようになる。

そうした討議の際に、自分の意見を明確に表現し、伝えることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的な概説として Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を読んでゆく。

ただし、総論から入るのではなく、各論から入って最終的に総論としてユートピアを考えるほうが理解を得やすい。そのために、後半部から読み進めたい。

また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア関連の文学作品（おもに米、英、カナダ、日本の作品）を比較文学的に読み、また思想、芸術などの諸分野においてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、プレゼンてもらう。また課題に対しては、次回の授業にフィードバックを行い、さらに全体で議論・検討を加えていきたい。

また、学期末の2回を使って、レポート発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第2回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解①	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（1）

第3回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解②	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（2） ザミヤーチン『われら』
第4回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解③	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（3） オーウェル『1984』
第5回	Chapter13 の後半部 のまとめ 現代社会とディストピア	ル・グイン『所有せざる人々』 ウエルバック『服従』 をめぐる問題
第6回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解①	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（1）
第7回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解②	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（2）
第8回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解③	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（3） クラーク『2001 年 宇宙の旅』
第9回	Chapter14 のまとめ	バージェス『時計仕掛けのオレンジ』 ゴールディング『蠅の王』 をめぐる問題
第10回	アトウッド『侍女の物語』	アトウッドとディストピア
第11回	カズオ・イシグロ『私 を離さないで』 をめぐる問題	イシグロと現代と科学 吉田修一『橋を渡る』
第12回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 まとめ	まとめとプレゼンテーション
第13回	ユートピアと意識され たユートピア	レポート発表・討議
第14回	現代をめぐる問題に関 する考察	レポート発表・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
全体を通して基本文献である Claeys のテキストの精読をおこなってこくこと。

また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claeys
『Searching for Utopia. The History of an Idea』
Thames and Hudson
New York
ISBN-978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。

これはコピーにて配布する。

また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献に関するものが参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題（最終回での各人のレポート発表）50 %
 平常点（訳読・レジュメ・プレゼンテーション・議論）50 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間をもっととり、議論を深めていきたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ドイツ文学、比較文学・文化、比較芸術

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術における諸テーマの扱われ方③ユートピア論、ファム・ファタル論

＜主要研究業績＞

①『英語文化研究』共著、2013 年、成美堂

②『英文学の風景』共著、2012 年、文化書房博文社

③「文学・科学・知の相互浸透—イシグロ。ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」

『言語と文化』第 17 号、2020 年、法政大学 言語・文化センター

④「知の獲得と語りのあて先— Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き」『異文化の諸相』第 39 号、日本英語文化学会、2019 年、

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』（共訳）2007 年、法政大学出版局

【Outline and objectives】

The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys' Searching for Utopia. The History of an Idea 《.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including contemporary literature.

To provide graduate students with opportunities to read and treat American, English, Canadian and Japanese literature from the perspective of comparative literature.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

LIT500B3

比較文学研究 B

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会をどう考えるか、またどのようにそこに近づいていくのかは人類の歴史の中で考えられ続けてきたテーマである。

現代においても国家や政府、また個人がそれについて思索し、実現を目指し努力している。

理想的な社会のなかで＜ユートピア＞といわれるものの近代における定義を検証し、ユートピアが人間や社会にどのように発生し、変化を遂げ、受容され、作用したのか、ユートピアの意味を概念的に見てゆくことが秋学期の目的である。

秋学期のこの授業でも、さらにテキストを読みながら、現代におけるユートピア文学、ユートピア的思想を検討する。

ユートピアに関する思想を社会の中に位置づけることを目的とする。従って、さまざまなユートピア文学にも触れる。

こうした作業を通して、ユートピアまた反ユートピア（ディストピア）の意味や機能についても考察する。

＜講義題目＞

ユートピア像の歴史と受容

【到達目標】

近現代以降のユートピアに関する歴史的俯瞰と意味付けを理解することが目標である。

またその際に、Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』やこの講義で挙げられた作品を論じるので、それらを理解し、批判的に分析できるようになることが、第二の目標である。

最後に、そうした討議の際に自分の意見をわかりやすく表現し、伝え、また他者の意見を理解し、議論できるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的、概念的な整理としてユートピアの歴史や意義、範囲の基本文献である Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を基本文献として読みすすめてゆくが、また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア像を思想的、宗教的、また社会実現の試みにおいてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、訳読・プレゼンしてもらう。独自の観点でいいので、議論・検討に積極的に加わってほしい。

プレゼンテーション、考えるべき課題についてのフィードバックは次回の授業内でその都度、行う。

学期末の 2 回を使って、レポート発表を行ってもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第 2 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ① について	テキストの読解とジュール・ヴェルヌとその作品について

第 3 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ② について	テキストの読解と H.G. ウェルズ とその作品について
第 4 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ③ について	テキストの読解と R.L. スティー ブンソンとその作品について
第 5 回	Chapter 11,12 The Emergence of Science Fiction: Inventing Progress	テキストの読解と M.W. シュ リー、ペラミーとその作品につ いて
第 6 回	Chapter 9,10 The Second Age; Utopia as Community について	共同体としてのユートピア（現実 世界での実現へ）
第 7 回	Chapter 8 Ideal Cities について	理想の都市、都市国家としての ユートピア
第 8 回	Chapter 5,6,7 Revolution and Enlightenment: The Age of Defoe and Swift	新世界、デフォーとその作品につ いて
第 9 回	Chapter 4 A Genre Defined に ついて	領域の定義 トマス・モアとその作品について
第 10 回	Chapter 3 Extra-European Visions	東洋、オリエントのユートピア像 と概念について
第 11 回	Chapter 2 Christian Archetypes	キリスト教的原理 楽園思想、千年王国について
第 12 回	Chapter 1 The Classical Age	古典古代、黄金時代というイメー ジ
第 13 回	Conclusion Pradise Lost? ユートピアそしてユー トピアニズムとは何 か？	テキストの読解と 世界の現状分析（環境・戦争・宗 教）について レポート発表・討議
第 14 回	プレゼンテーション	レポート発表・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体を通して基本文献である **Claeys** のテキストを精読してくること（予習）が必要である。また、その都度のテーマについての文献を読んでくことや内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる環境を作る。授業は全体的な展望をもちつつ、時間を考慮しながら個々の例を取り上げるので、自分で気づいたものがあればそれも絶好の題材となるので、各自で授業内で取り上げることもできる。さまざまな形のユートピアを検討したい。具体的には各回のテーマと内容を参照してほしい。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』
New York:Thames and Hudson,
ISBN 978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。

これはコピーにて配布する。

また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献が参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題（最終回での各人のレポート発表） 50 %

平常点（訳読・レジュメ・プレゼンテーション・議論） 50 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間をもっととりたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ドイツ文学、比較文学・文化、比較芸術

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術における諸テーマの扱われ方③ユートピア論、ファム・ファタル論

＜主要研究業績＞

①『英語文化研究』共著、2013 年、成美堂

②『英文学の風景』共著、2012 年、文化書房博文社

③「文学・科学・知の相互浸透－イシグロ。ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」

『言語と文化』第 17 号、2020 年、法政大学 言語・文化センター

④「知の獲得と語りのあて先－ Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き」『異文化の諸相』第 39 号、日本英語文化学会、2019 年、

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』（共訳）2007 年、法政大学出版局

【Outline and objectives】

The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'『Searching for Utopia. The History of an Idea』.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including contemporary literature.

To provide graduate students with opportunities to read and treat American, English, Canadian and Japanese literature from the perspective of comparative literature.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

LIN500B3

Academic English (Effective Writing) A

安部 義治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行います。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセイが書けるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はオンラインで行います。受講者は資料として配布されるテキストを読み、問題演習を行ったうえで、テキストで扱われている問題に関する自分の意見をエッセイにしてまとめることが必要になります。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業についての説明・資料配布
第2回	The Apgar Test	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第3回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第4回	Operation Migration	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第5回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第6回	The Story of Corn	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第7回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第8回	From Ponzi to Madoff	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第9回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第10回	Don't Eat the Marshmallow	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第11回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第12回	Presentation(1)	プレゼンテーション
第13回	Presentation(2)	プレゼンテーション
第14回	総括・まとめ	授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。各ユニット毎にエッセイを書くことになります。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。資料はプリント (PDF ファイル) で配布します。

【参考書】

参考書は使用しません。資料はプリント (PDF ファイル) で配布します。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題 (100%) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞第二言語習得、TESOL

＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得

＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010 年 12 月

Second Language. vol.9, pp.19-48.

【Outline and objectives】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.

LIN500B3

Academic English (Effective Writing) B

安部 義治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行います。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセイが書けるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はオンラインで行います。受講者は資料として配布されるテキストを読み、問題演習を行ったうえで、テキストで扱われている問題に関する自分の意見をエッセイにしてまとめることが必要になります。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業についての説明・資料配布
第 2 回	A Vacation That Is Out of This World!	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 3 回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 4 回	1816: The Year without a Summer	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 5 回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 6 回	Born to Surf	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 7 回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 8 回	Gross National Happiness	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 9 回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 10 回	Fordlandia	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 11 回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 12 回	Presentation(1)	プレゼンテーション
第 13 回	Presentation(2)	プレゼンテーション
第 14 回	総括・まとめ	授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。各ユニット毎にエッセイを書くことになります。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。資料はプリント (PDF ファイル) で配布します。

【参考書】

参考書は使用しません。資料はプリント (PDF ファイル) で配布します。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題 (100%) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞第二言語習得、TESOL

＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得

＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010 年 12 月 Second Language. vol.9, pp.19-48.

【Outline and objectives】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.

LIN500B3

Academic English (Oral Presentation) A

安部 義治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行います。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセーが書けるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はオンラインで行います。受講者は資料として配布されるテキストを読み、問題演習を行ったうえで、テキストで扱われている問題に関する自分の意見をエッセーにしてまとめることが必要になります。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業についての説明・資料配布
第 2 回	Photojournalism: A Dangerous Job	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 3 回	Essay Writing	エッセーを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 4 回	El Sistema - Changing Education and Communities	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 5 回	Essay Writing	エッセーを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 6 回	Cell Phones: Help for Small Businesses in the Developing World	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 7 回	Essay Writing	エッセーを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 8 回	The World Population in 2050	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 9 回	Essay Writing	エッセーを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 10 回	Nature's Design Secrets	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第 11 回	Essay Writing	エッセーを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第 12 回	Presentation(1)	プレゼンテーション
第 13 回	Presentation(2)	プレゼンテーション
第 14 回	総括・まとめ	授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。各ユニット毎にエッセーを書くことになります。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。資料はプリント (PDF ファイル) で配布します。

【参考書】

参考書は使用しません。資料はプリント (PDF ファイル) で配布します。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題 (100%) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>第二言語習得、TESOL

<研究テーマ>第二言語学習者による項構造の習得

<主要研究業績>日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010 年 12 月 Second Language. vol.9, pp.19-48.

【Outline and objectives】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.

LIN500B3

Academic English (Oral Presentation) B

安部 義治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行います。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセイが書けるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はオンラインで行います。受講者は資料として配布されるテキストを読み、問題演習を行ったうえで、テキストで扱われている問題に関する自分の意見をエッセイにしてまとめることが必要になります。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業についての説明・資料配布
第2回	Brain Injuries and Sports	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第3回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第4回	Wearing Wireless	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第5回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第6回	What is Diversity?	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第7回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第8回	Rules for Conversation	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第9回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第10回	Responsible Tourism	問題演習 (Reading Comprehension, Vocabulary)
第11回	Essay Writing	エッセイを書いて提出後、教員の添削を参考に受講者自身が推敲する
第12回	Presentation(1)	プレゼンテーション
第13回	Presentation(2)	プレゼンテーション
第14回	総括・まとめ	授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。各ユニット毎にエッセイを書くことになります。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。資料はプリント (PDF ファイル) で配布します。

【参考書】

参考書は使用しません。資料はプリント (PDF ファイル) で配布します。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題 (100%) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞第二言語習得、TESOL

＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得

＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010年12月 Second Language. vol.9, pp.19-48.

【Outline and objectives】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.

LNG700B3

言語学特殊演習 I A

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines advanced concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and summarize L2-related research findings and consider principled approaches to L2 pedagogy.

<講義題目>

第二言語習得 Second Language Acquisition

【到達目標】

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:

1. Conduct literature searches on L2-related topics
2. Summarize research findings on L2-related topics
3. Present summaries and proposals for L2-related research projects

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics. Feedback will be given after each presentation. This course will be conducted online.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction to the course	Presentation of core and advanced concepts in second language acquisition and teaching
第 2 回	Literature searches	Conducting a literature search
第 3 回	Summarizing studies	Outlining and summarizing previous studies
第 4 回	Declarative and procedural knowledge	Examining types of L2 knowledge
第 5 回	Measuring declarative and procedural knowledge	How can L2 knowledge be assessed?
第 6 回	Acquisition of L2 grammar	How is L2 grammar acquired?
第 7 回	Acquisition of L2 vocabulary	Issues related to L2 vocabulary acquisition
第 8 回	Individual differences	To what extent do individual differences affect L2 learning?
第 9 回	Contexts of instructed second language acquisition	In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?
第 10 回	Focus on form	Attending to meaning and form in L2 learning
第 11 回	Feedback	What is the role of feedback in L2 learning?
第 12 回	Developing language courses	Core components of L2 programs and courses

第 13 回	Research presentations	Research project presentations
第 14 回	Feedback on research presentations	Discussion of and feedback on students' presentations

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Shawn Loewen. (2015). *Introduction to instructed second language acquisition*. Routledge.

Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition*. Hodder Education.

Rod Ellis. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd edition). Oxford University Press.

H. Douglas Brown. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy* (3rd edition). Longman.

H. Douglas Brown. (2006). *Principles of language learning and teaching* (5th edition). Longman.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

Presentations: 50%

Written report: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content with outside information and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline and objectives】

This course examines advanced concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and summarize L2-related research findings and consider principled approaches to L2 pedagogy.

<講義題目>

第二言語習得 Second Language Acquisition

LNG700B3

言語学特殊演習 I B

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines the role of advanced research methods and statistics in applied linguistics.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in Applied Linguistics

【到達目標】

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in applied linguistics; (b) perform statistical analyses using Excel, SPSS, JASP, R, Winsteps, and Facets; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses in the computer lab. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. Feedback will be given after each presentation. This course will be conducted online.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Research methods in applied linguistics	Introduction to research methods and the concepts covered in this course
第 2 回	Fundamental measurement	Principles of measuring constructs
第 3 回	Construct modeling	Construct definition and instrument development
第 4 回	Data screening	Screening data prior to conducting analyses
第 5 回	Rasch analyses	Analyzing dichotomous data
第 6 回	Rasch rating scale analyses	Analyzing rating scale data
第 7 回	Multifaceted Rasch measurement	Conducting and interpreting multifaceted Rasch analyses
第 8 回	Correlation and univariate analyses	Conducting and interpreting correlation and univariate analyses
第 9 回	Multiple regression	Conducting and interpreting multiple regression
第 10 回	Multivariate analysis of variance and covariance	Conducting and interpreting multivariate analyses
第 11 回	Principal components and factor analysis	Background of principal components and factor analysis
第 12 回	Applying factor analysis	Factor analyzing data

第 13 回	Structural equation modeling	Background of structural equation modeling
第 14 回	Applying structural equation modeling	Conducting and interpreting structural equation modeling

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.

Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.

Andy Field et al. (2012). *Discovering statistics using R*. Sage.

Tabachnick, B. G., & Fidell, L. S. (2013). *Using multivariate statistics* (6th edition). Pearson.

Fred L. Perry, Jr. (2011). *Research in applied linguistics: Becoming a discerning consumer*. Routledge.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

Presentations: 50%

Data Analysis Assignment: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline and objectives】

This course examines the role of advanced research methods and statistics in applied linguistics.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in Applied Linguistics

LIT500B3

文学方法論特講 A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みられる。具体的に批評アプローチを意識した論文をまとめられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論を学ぶ。3作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を3作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション： “Armed Vision” (S. Hyman)	いかにテキストにむかうか
第 2 回	テキストとは何か	テキスト概念の変容
第 3 回	テクスチュアル・クリティシズム	本文校訂または批評以前の批評
第 4 回	印象批評とは何か	作家・作品・読者の三角形
第 5 回	印象批評の実践	レポーターによる発表と討論
第 6 回	フォルマリズム	形式主義的批評とテキスト分
第 7 回	フォルマリズム批評の実践	レポーターによる発表と討論
第 8 回	文化人類学と文学	神話批評
第 9 回	神話批評の実践	レポーターによる発表と討論
第 10 回	文学と心理分析	フロイト、ユング、その後
第 11 回	精神分析批評の実践	レポーターによる発表と討論
第 12 回	注釈	釈義学から解釈学へ
第 13 回	その実践	レポーターによる発表と討論
第 14 回	ディコンストラクションからニューヒストリシズムへ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
批評の対象となる作品テキストを読み進めること。自身の研究を進めて、批評理論の応用を考えること。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”

Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*

Shakespeare, *Hamlet*

W・L・ゲーリン 『文学批評入門』、青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

ウェイン・ブース、米本弘一ほか訳『フィクションの修辞学』（水声社、1991）
デイヴィッド・ロッジ、柴田元幸・斎藤兆史訳『小説の技巧』（白水社、1997）
テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマール・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 30 パーセント、レポート 40 パーセント、試験 30 パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

作品を多く読ませる工夫をしたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学

＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

＜主要研究業績＞ 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐる『英文学誌』47 号（2005 年 3 月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50 号（2005 年 3 月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか?」『法政大学文学部紀要』51 号（2005 年 9 月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline and objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read critical approaches applied to them.

LIT500B3

文学方法論特講 B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。Bの過半において、学生は実践的発表と質疑をおこなう。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論を学ぶ。3作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を3作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	分析と解釈の実践（1）	イメージ、シンボル、アレゴリー
第2回	分析と解釈の実践（2）	比喩と脱比喩
第3回	分析と解釈の実践（3）	プロットの構築
第4回	分析と解釈の実践（4）	キャラクター分析
第5回	中間まとめ	中間報告の反省
第6回	ニューヒストリシズムからカルチュラル・スタディーズへ	1980年代からの流れ
第7回	ポストコロニアリズム	プリント講読
第8回	フェミニズム批評	プリント講読
第9回	ジェンダー理論	プリント講読
第10回	ナラトロジー理論	プリント講読
第11回	分析と解釈の実践（5）	視点と声
第12回	分析と解釈の実践（6）	ナラトロジー
第13回	分析と解釈の実践（7）	ソース・スタディー
第14回	総まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。テキストの下調べ。自身の研究テーマの探求。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”

Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*

Shakespeare, *Hamlet*

W・L・ゲーリン 『文学批評入門』・青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマール・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 30 パーセント、レポート 40 パーセント、試験 30 パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年より担当。学生の積極的な参加を促せるようにつとめたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67. 「Cacotype ——言葉の影、または引用について」（『英文学誌』58、2016）35-60. 「Wot's the hodds so long as you're 'appy ——いいじゃないの幸せならば、または Web の効用について」（『英文学誌』59、2017）33-48.

【Outline and objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read critical approaches applied to them.

LNG500B3

言語科学方法論特講 A

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。

- ・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
- ・実験設計およびデータの統計処理

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようにすること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義およびパソコン実習。

試験には各人ごとに採点コメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測、不純な要因と minimal pair
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること
第4回	統計学の必要性	注目していない要因の効果の除去
第5回	統計学的検定の基本1	要因・水準、従属変数
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、 etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説および対立仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t 検定1	被験者間要因の場合
第11回	t 検定2	1 サンプルの t 検定
第12回	t 検定3	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
わからない箇所は教員や周囲に質問すること。

また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしていただくこと。

【テキスト（教科書）】

学習支援システムでハンドアウトおよびデータセットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.

大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.

Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology*. (6th ed.) Wadsworth.

Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS*. Sage.

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論、音声学）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An introduction to research methodology in linguistic sciences, covering:

- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis

LNG500B3

言語科学方法論特講 B

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in the Linguistic Sciences

【到達目標】

Upon successful completion of this course, M.A. and doctoral students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

Additionally, doctoral students are expected to be able to design a research study, collect data, and report the results of statistical analyses.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses in the computer lab. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. This course is conducted in English. Feedback will be given after each presentation. This course will be conducted online.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Research methods in the linguistic sciences	Introduction to why research is conducted and the concepts covered in this course
第 2 回	Variables & levels of measurement	Classification and measurement of variables
第 3 回	Visual descriptive statistics	Creating graphs and plots
第 4 回	Statistical assumptions	Methods of addressing statistical assumptions
第 5 回	Correlation	Background and calculation of Pearson's correlation coefficient
第 6 回	Other methods of correlation	Calculation of Spearman's correlation coefficient
第 7 回	Linear regression	Background and calculation of linear regression
第 8 回	Multiple regression	Calculating and interpreting multiple regression
第 9 回	T-tests and research design	Background of t-tests and calculation of a paired-samples t-test and an independent samples t-test

第 10 回	ANOVA, planned comparisons, and post-hoc tests	Background and calculation of ANOVA
第 11 回	Factorial ANOVA	Background and calculation of factorial ANOVA
第 12 回	Repeated-measures ANOVA	Background and calculation of repeated-measures ANOVA
第 13 回	Factor analysis	Background of factor analysis
第 14 回	Applying factor analysis	Factor analyzing data

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.

Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.

Fred L. Perry, Jr. (2011). *Research in applied linguistics: Becoming a discerning consumer*. Routledge.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

< M.A. Students >

Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%

< Doctoral Students >

Presentations: 25%; Research Report: 25%; Final Data Analysis Assignment: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Doctoral students will also submit a research report. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【その他の重要事項】

Students should have already taken 言語科学方法論 A or an equivalent course.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline and objectives】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in the Linguistic Sciences

LIT500B3

英米文学特講Ⅱ A

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> ヴァージニア・ウルフとモダニズム文学

ウルフの初期短編と『ジェイコブの部屋』を、彼女の批評的エッセイとともに読み、そのことをとおしてウルフのモダニズム的特徴を理解する。

【到達目標】

- ・ヴァージニア・ウルフの生涯、作品、時代について、一般的な事実を列記することができる。
- ・モダニズム文学の一般的特徴について記述することができる。
- ・ウルフの初期短編、『*Jacob's Room*』の文体的主題的特徴について具体的に述べるができる。
- ・作品解釈について他人と議論することができる。
- ・批評論文を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
①	ガイダンス・イントロダクション	授業のガイダンスとウルフ文学へのイントロダクション。
②	ウルフの初期批評（1）	ウルフのふたつの初期批評を精読し、モダニズム的特徴を同定する。
③	ウルフの初期批評（2）	ウルフの別のふたつの初期批評を精読し、モダニズム的特徴を同定する。
④	ウルフの初期短編（1）	ウルフの初期短編 2 編を、とくに文体と主題に注目しつつ精読する。
⑤	ウルフの初期短編（2）	ウルフの初期短編の別の 2 編を、とくに文体と主題に注目しつつ精読する。
⑥	ウルフの初期短編（3）	ウルフの初期短編のさらに別の 2 編を、とくに文体と主題に注目しつつ精読する。
⑦	中間まとめ	ディスカッションをとおしてウルフ文学のモダニズム的特徴についての理解を深める。
⑧	『ジェイコブの部屋』（1）	第一部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑨	『ジェイコブの部屋』（2）	第二部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。

⑩	『ジェイコブの部屋』（3）	第三部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑪	『ジェイコブの部屋』（4）	第四部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑫	『ジェイコブの部屋』批評を読む（歴史主義的批評）	『ジェイコブの部屋』の歴史性・モダニズム性について論じた批評を精読する。
⑬	『ジェイコブの部屋』批評を読む（形式主義的批評）	『ジェイコブの部屋』の形式性・モダニズム性について論じた批評を精読する。
⑭	授業のまとめ	授業のまとめとしてモダニズムについてディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中のディスカッションに参加できるよう、授業前に作品および作品に関する批評作品を精読し、自分の意見をまとめてくること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Virginia Woolf, *Jacob's Room* (Oxford World's Classics)Virginia Woolf, *The Mark on the Wall and Other Short Fiction* (Oxford World's Classics)Virginia Woolf, *Selected Essays* (Oxford World's Classics)

【参考書】

授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
4000 字程度の期末レポート 50%（作品と作品に関する批評作品を精読したうえで、自分なりの独創的解釈を創造し、その解釈の妥当性を論理的に証明すること）

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【その他の重要事項】

後期の「英米文学演習第三（British Fiction）B」を履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

イギリス文学

<研究テーマ>

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline and objectives】

Lecture Title: Virginia Woolf and Modernist Literature

By reading Woolf's early short stories and *Jacob's Room*, along with her critical essays, we will understand the characteristics of her modernism.

LIT500B3

英米文学特講Ⅱ B

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

＜講義題目＞ヴァージニア・ウルフとフェミニズム文学
ウルフの『オーランドウ』を、彼女の批評的エッセイ（とくに『自分ひとりの部屋』）とともに読み、そのことをとおしてウルフのフェミニズム的特徴を理解する。

【到達目標】

- ・ヴァージニア・ウルフの生涯、作品、時代について、一般的な事実を列記することができる。
- ・モダニズム文学の一般的特徴について記述することができる。
- ・ウルフの *Orlando* の文体的主題的特徴について具体的に述べることができる。
- ・作品解釈について他人と議論することができる。
- ・批評論文を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
①	ガイダンス・イントロダクション	授業のガイダンスとウルフ文学へのイントロダクション。
②	『自分ひとりの部屋』（1）	第一部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
③	『自分ひとりの部屋』（2）	第二部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
④	『自分ひとりの部屋』（3）	第三部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑤	『自分ひとりの部屋』（総括）	『自分ひとりの部屋』について総括する。
⑥	『オーランドウ』（1）	第一部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑦	『オーランドウ』（2）	第二部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑧	『オーランドウ』（3）	第三部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑨	『オーランドウ』（4）	第四部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。
⑩	『オーランドウ』（5）	第五部の重要箇所をリストアップし、それについてディスカッションする。

- | | | |
|---|-------------------|------------------------------------|
| ⑪ | 『オーランドウ』（総括） | 『オーランドウ』について総括する。 |
| ⑫ | 『オーランドウ』の批評を読む（1） | 『オーランドウ』についてのフェミニズムの批評を精読する。 |
| ⑬ | 『オーランドウ』の批評を読む（2） | 『オーランドウ』についてのもうひとつのフェミニズム的批評を精読する。 |
| ⑭ | 授業のまとめ | 授業のまとめとしてウルフのフェミニズムについてディスカッション |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中のディスカッションに参加できるよう、授業前に作品および作品に関する批評作品を精読し、自分の意見をまとめてくること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Virginia Woolf, *Orlando* (Oxford World's Classics)Virginia Woolf, *A Room of One's Own and Three Guineas* (Oxford World's Classics)

【参考書】

授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（準備をしたうえで、積極的にディスカッションに参加すること）

4000 字程度の期末レポート 50%（作品と作品に関する批評作品を精読したうえで、自分なりの独創的解釈を創造し、その解釈の妥当性を論理的に証明すること）

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

イギリス文学

＜研究テーマ＞

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline and objectives】

Lecture Title: Virginia Woolf and Feminist Literature

By reading Woolf's *Orlando*, along with her critical essays (*A Room of One's Own* in particular), we will understand the characteristics of Woolf's feminism.

LIT500B3

英米文学特講Ⅳ A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① ブラウンの小説技法の検討
 - ② 中間話法と語りの技法の検討
 - ③ ゴシック小説の多様性を探る
 - ④ *Wieland* のテキスト精読。
- <講義題目> Charles Brockden Brown 研究

【到達目標】

- ① ゴシック・ロマンスの主題や方法についての概観的知識を得ること。
- ② チャールズ・ブロックデン・ブラウンの作家としての営みを概観して慨嘆すること。
- ③ アメリカ小説のはじまりについて歴史的理解を得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。
チャールズ・ブロックデン・ブラウン (1771-1810) の作品を、Library of America 版に入ったシドニー・J・クラウス編の *Charles Brockden Brown: Three Gothic Novels* を使って読む。
授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	レポーターの担当を決められるだけ決める／辞書・レファレンス類についてのプリント配布／ブラウンについての bibliography 配布
第 2 回	"Advertisement" など外枠の検討	他の作品の序文との比較など
第 3 回	Chapter 1: I feel little reluctance in complying with your request	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 4 回	Chapter 2: Early in the morning of a sultry day in August, he left Mettingen	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	Chapter 3: The shock which this disastrous occurrence occasioned to my mother	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	Chapter 4: Six years of uninterrupted happiness had rolled away	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	Chapter 5: Some time had elapsed when there happened another occurrence	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 8 回	Chapter 6: I now come to the mention of a person with whose name the most turbulent sensations are connected	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	Chapter 7: I will not enumerate the various inquiries and conjectures	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	Chapter 8: As soon as evening arrived, I performed my visit	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	Chapter 9: My brother had received a new book from Germany	レポーターによる発表と質疑応答と議論

第 12 回	Chapter 10: Order could not readily be introduced into my thoughts	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	Chapter 11: I was aroused from this stupor by sounds	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 14 回	Chapter 12: My way lay through the city	レポーターによる発表と質疑応答と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

辞書類にあたって、読み進めること。クロス・レファレンスを意識すること。

【テキスト（教科書）】

Sydney J. Krause (Editor). *Charles Brockden Brown: Three Gothic Novels: Wieland: or, The Transformation, An American Tale; Arthur Mervyn: or, Memoirs of the Year 1793; Edgar Huntly: or, Memoirs of a Sleep-Walker* (New York: Literary Classics of the United States, 1998) (hardcover). 914pp. (ISBN: 1-883011-57-4) (日本の書店で 2000 円程度)

【参考書】

クラウスが編者となった Kent 版全集本を専攻室に置く。アメリカのゴシック研究の古典は Donald Ringe の *American Gothic: Imagination and Reason in Nineteenth-Century Fiction* (University of Kentucky Press, 1982) [邦訳 小宮照夫ほか、松柏社、2005 年]。アメリカ小説研究の古典、Richard Chase の *American Novel and Its Tradition* はアメリカ小説のはじまりにブラウンを位置づけて持ち上げた（序章）。
ブラウンに関する研究書（アメリカン・ゴシックの研究書誌を含む）は初回にプリントを配布する（学習支援システムの「教材」に入れる）。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント
「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとまり度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート実施しておりません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学
<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
<主要研究業績> 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐる『英文学誌』47 号（2005 年 3 月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十）第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50 号（2005 年 3 月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51 号（2005 年 9 月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline and objectives】

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Charles Brockden Brown's gothic fiction. Students also obtain knowledge about literaty gothicism and about its developments.

LIT500B3

英米文学特講Ⅳ B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① ブラウンの長篇小説の検討
 ② ゴシック小説の多様性を探る
 ③ 多様な解釈の可能性の検討
 <講義題目> Charles Brockden Brown 研究

【到達目標】

- ① ゴシック・ロマンスの主題や方法についての概観的知識を得ること。
 ② チャールズ・ブロックデン・ブラウンの作家としての営みを概観して慨嘆すること。
 ③ アメリカ小説のはじまりについて歴史的 understanding を得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。
 「英米文学演習第二 (American Fiction) A」に続いて、チャールズ・ブロックデン・ブラウンの『ウィーランド』を読む。続篇『腹話術師カーウインの回想』を余裕があったら読む。
 授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
 あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Chapter 14: "Three days have elapsed since this occurrence"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 2 回	Chapter 15: Before I reached the city it was dark	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 3 回	Chapter 16: As soon as I arrived in sight of the front of the house, my attention was excited by a light	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 4 回	Chapter 17: I had no inclination nor power to move from this spot	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	Chapter 18: I had imperfectly recovered my strength	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	Chapter 19: Theodore Wieland, the prisoner at the bar, was now called upon for his defence	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	Chapter 20: Will you wonder that I read no farther?	レポーターによる発表と質疑応答と議論

第 8 回	Chapter 21: Such, for some time, was the course of my meditations	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	Chapter 22: The inhabitants of the <i>Hut</i> received me	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	Chapter 23: "My morals will appear to you far from rigid . . .	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	Chapter 24: "Deeply did I ruminate on the occurrences that had just passed. . . .	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	Chapter 25: A few words more and I lay aside the pen for ever	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	Chapter 26: My right hand, grasping the unseen knife, was still disengaged	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 14 回	Chapter 27: [Written three years after the foregoing, and dated at Montpelier.] I imagined that I had forever laid aside the pen	レポーターによる発表と質疑応答と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究書を読むことと辞書を引いて予習すること。

【テキスト（教科書）】

Sydney Krause, ed., *Charles Brockden Brown: Three Gothic Novels* (New York, 1998). 腹話術師カーウインの手記はライブラリー・オブ・アメリカ版には入っていないので、別途用意する。

【参考書】

A 参照

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント
 「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとめ度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート実施せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
 <主要研究業績> 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐる『英文学誌』47 号 (2005 年 3 月) : 27-44、「ポーの宇宙論と錬金術 (十) 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書 (その二)」『法政大学文学部紀要』50 号 (2005 年 3 月) : 91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか?」(『法政大学文学部紀要』51 号 (2005 年 9 月) : 1-13、「疑似科学と科学の境」(八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67.

【Outline and objectives】

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Charles Brockden Brown's gothic fiction. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about its developments.

LIT500B3

英米文学特講Ⅴ A

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会の追求は人類の歴史の中の根源的なテーマである。現代においても、あらゆる国家はそれを目指して考え続け、努力しているといっても過言ではない。

そのために理想社会、あるいはユートピアについて、とりわけ思想、文学、映画、芸術においてどのように考えられ、受容され、作用してきたのかを Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を講読しながら、考える。

とりわけ、＜現在＞という時点からのアクチュアルな問題提起として、現代の文学をも分析対象にいい、さまざまな文学作品を読みながら、現代文学の取り組みを考察する。

反ユートピア（ディストピア）、サイエンス・フィクション、映画、パラダイス・ロストなど現代の（反）ユートピア像の歴史に的を絞って、文献によって探っていく。＜講義題目＞現代のディストピアとユートピア像

【到達目標】

現代のユートピアの歴史を理解することができる。

また、その際に Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』やこの講義で挙げられた、あるいは考察対象とする小説や作品を読み、論じるので、そうした現代作家や作品の取り組みを知り、その小説や作品をユートピアという視点から批判的に分析できるようになる。

そうした討議の際に、自分の意見を明確かつ論理的に表現し、伝えられるようになることができる。

比較することにより、研究・分析の視野を広げることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的な概説として Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を読んでゆく。

ただし、総論から入るのではなく、各論から入って最終的に総論としてユートピアを考えるほうが理解を得やすい。そのために、後半部から読み進めたい。

また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア関連の文学作品（主に米、英、カナダ、日本の作品）を比較文学的に読み、また思想、芸術などの諸分野においてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、プレゼンてもらう。また課題に対しては、次回の授業にフィードバックを行い、さらに全体で議論・検討を加えていきたい。

また、学期末の2回を使って、レポート発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第2回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解①	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（1）

第3回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解②	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（2） ザミヤーチン『われら』
第4回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解③	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（3） オーウェル『1984』
第5回	Chapter13 の後半部のまとめ 現代社会とディストピア	ル・グイン『所有せざる人々』 ウエルバック『服従』 をめぐる問題
第6回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解①	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（1）
第7回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解②	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（2）
第8回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解③	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（3） クラーク『2001年 宇宙の旅』
第9回	Chapter13 のまとめ	バーजेス『時計仕掛けのオレンジ』 ゴールディング『蠅の王』 をめぐる問題
第10回	アトウッド『侍女の物語』	アトウッドとディストピア
第11回	カズオ・イシグロ『私を離さないで』 をめぐる問題	イシグロと現代と科学 吉田修一『橋を渡る』
第12回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 まとめ	まとめとプレゼンテーション
第13回	ユートピアと意識されたユートピア	レポート発表・討議
第14回	現代をめぐる問題に関する考察	レポート発表・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
全体を通して基本文献である Claeys のテキストの精読をおこなってこよう。

また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claeys
『Searching for Utopia. The History of an Idea』
Thames and Hudson
New York
ISBN-978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。

これはコピーにて配布する。

また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献に関するものが参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題（最終回での各人のレポート発表）50 %
平常点（訳読・レジュメ・プレゼンテーション・議論）50 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間をもっととり、議論を深めていきたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ドイツ文学、比較文学・文化、比較芸術

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術における諸テーマの扱われ方③ユートピア論、ファム・ファタル論

＜主要研究業績＞

①『英語文化研究』共著、2013 年、成美堂

②『英文学の風景』共著、2012 年、文化書房博文社

③「文学・科学・知の相互浸透—イシグロ。ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」

『言語と文化』第 17 号、2020 年、法政大学 言語・文化センター

④「知の獲得と語りのあて先— Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き」『異文化の諸相』第 39 号、日本英語文化学会、2019 年、

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』（共訳）2007 年、法政大学出版局

【Outline and objectives】

The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys' Searching for Utopia. The History of an Idea 《.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including contemporary literature.

To provide graduate students with opportunities to read and treat American, English, Canadian and Japanese literature from the perspective of comparative literature.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

LIT500B3

英米文学特講 V B

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会をどう考えるか、またどのようにそこに近づいていくのかは人類の歴史の中で考えられ続けてきたテーマである。

現代においても国家や政府、また個人がそれについて思索し、実現を目指し努力している。

理想的な社会のなかで＜ユートピア＞といわれるものの近代における定義を検証し、ユートピアが人間や社会にどのように発生し、変化を遂げ、受容され、作用したのか、ユートピアの意味を概念的に見てゆくことが秋学期の目的である。

秋学期のこの授業でも、さらにテキストを読みながら、現代におけるユートピア文学、ユートピア的思想を検討する。

ユートピアに関する思想を社会の中に位置づけることを目的とする。従って、さまざまなユートピア文学にも触れてゆく。

こうした作業を通して、ユートピアまた反ユートピア（ディストピア）の意味や機能についても考察する。

＜講義題目＞

ユートピア像の歴史と受容

【到達目標】

近現代以降のユートピアに関する歴史的俯瞰と意味付けを理解することが目標である。

またその際に、Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』やこの講義で挙げられた作品を論じるので、それらを理解し、批判的に分析できるようになることが、第二の目標である。

最後に、そうした討議の際に自分の意見を簡潔にかつ論理的に表現し、わかりやすく伝え、また他者の意見を理解し、議論できるようになること、また比較することにより、研究・分析の視野を広げることができることを目標としている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的、概念的な整理としてユートピアの歴史や意義、範囲の基本文献である Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を基本文献として読みすすめてゆきますが、また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア像を思想的、宗教的、また社会実現の試みにおいてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、訳読・プレゼンしてもらいます。独自の観点でいいので、議論・検討に積極的に加わってもらおう。

プレゼンテーション、考えるべき課題についてのフィードバックは次回の授業内でその都度、おこなう。

学期末の 2 回を使って、レポート発表を行ってもらおう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第 2 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ① について	テキストの読解とジュール・ヴェルヌとその作品について

第 3 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ② について	テキストの読解と H.G. ウェルズ とその作品について
第 4 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ③ について	テキストの読解と R.L. スティー ブンソンとその作品について
第 5 回	Chapter 11,12 The Emergence of Science Fiction; Inventing Progress	テキストの読解と M.W. シュ リー、ペラミーとその作品につ いて
第 6 回	Chapter 9,10 The Second Age: Utopia as Community について	共同体としてのユートピア（現実 世界での実現へ）
第 7 回	Chapter 8 Ideal Cities について	理想の都市、都市国家としての ユートピア
第 8 回	Chapter 5,6,7 Revolution and Enlightenment: The Age of Defoe and Swift	新世界、デフォーとその作品につ いて
第 9 回	Chapter 4 A Genre Defined に ついて	領域の定義 トマス・モアとその作品について
第 10 回	Chapter 3 Extra-European Visions	東洋、オリエントのユートピア像 と概念について
第 11 回	Chapter 2 Christian Archetypes	キリスト教的原理 楽園思想、千年王国について
第 12 回	Chapter 1 The Classical Age	古典古代、黄金時代というイメー ジ
第 13 回	Conclusion Pradise Lost? ユートピアそしてユー トピアニズムとは何 か？	テキストの読解と 世界の現状分析（環境・戦争・宗 教）について レポート発表・討議
第 14 回	プレゼンテーション	レポート発表・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体を通して基本文献である **Claeys** のテキストを精読してくること（予習）が必要である。また、その都度のテーマについての文献を読んでくことや内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる環境を作ってゆく。授業は全体的な展望をもちつつ、時間を考慮しながら個々の例を取り上げるので、自分で授業内で取り上げることもできる。さまざまな形のユートピアを検討したい。具体的には各回のテーマと内容を参照すること。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』
New York:Thames and Hudson,
ISBN 978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。

これはコピーにて配布する。

また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献が参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題（最終回での各人のレポート発表） 50 %

平常点（訳読・レジュメ・プレゼンテーション・議論） 50 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間をもっととりたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ドイツ文学、比較文学・文化、比較芸術

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術における諸テーマの扱われ方③ユートピア論、ファム・ファタル論

＜主要研究業績＞

①『英語文化研究』共著、2013 年、成美堂

②『英文学の風景』共著、2012 年、文化書房博文社

③「文学・科学・知の相互浸透－イシグロ。ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」

『言語と文化』第 17 号、2020 年、法政大学 言語・文化センター

④「知の獲得と語りのあて先－ Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き」『異文化の諸相』第 39 号、日本英語文化学会、2019 年、

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』（共訳）2007 年、法政大学出版局

【Outline and objectives】

The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'『Searching for Utopia.The History of an Idea』.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including contemporary literature.

To provide graduate students with opportunities to read and treat American, English, Canadian and Japanese literature from the perspective of comparative literature.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

LNG500B3

言語科学特講 I A

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分の研究テーマに関連したテキストを正確に読み、かつ批判的読解をし、自分の論文を書きあげることを目指します。

【到達目標】

語用論の基本的な知識を身につけて、自分で分析に使えるようにします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初回は4月7日です。授業の形態（対面・リモート）は、毎回 HOPPII で連絡しますので、必ず毎週チェックしてください。テキストを章ごとに読み、ディスカッションしながら、学生のニーズに合わせた内容と速度で進めていきます。

リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	教員による授業の解説、受講生の研究テーマの発表により今後の発表分担の決定
第2回	第一章：イントロダクション	文脈における意味、英語の語用論
第3回	第二章：指示語用論（1）： 定表現、ダイクシス	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第4回	第二章：指示語用論（2）： 前方照応	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第5回	第二章：指示語用論（3）： 相互行為における指示表現の使用と理解	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第6回	第三章：情報語用論（1）： 情報語用論、情報基盤	情報語用論、情報基盤、情報的背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第7回	第三章：情報語用論（2）：情報的背景	情報語用論、情報基盤、情報的背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第8回	第三章：情報語用論（3）： 相互好意的側面	情報語用論、情報基盤、情報的背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第9回	第四章：語用論の意味 I（1）：「言われたこと」以上の意味	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション

第10回	第四章：語用論の意味 I（2）：「言われたこと」対「推意とされたこと」	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第11回	第四章：語用論の意味 I（3）：「言われたこと」と「推意とされたこと」	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第12回	第五章：語用論の意味 II（1）：語用論の意味の分析	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション
第13回	第五章：語用論の意味 II（2）：誰の意味なのか、意味を理解すること、	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション
第14回	第五章：語用論の意味 II（3）：相互行為の文脈における意味	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション、これまでの授業のまとめに加え、レポート等、課題に対する講評や解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

セメスターを通じて、以下に留意して授業に臨んでください。

- 1：各自の過去の学術論文、研究のまとめと今後の研究計画を立てる。
- 2：自分の担当した箇所をきちんと読み、プレゼンテーションができるように予習・準備をする。
- 3：自分に必要な参考文献を集めて、読む。
- 4：各自、自分の研究テーマについて中間発表を繰り返しながら、論文完成を目指す。

【テキスト（教科書）】

ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』研究社

【参考書】

上記以外の文献は、必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表とディスカッションへの参加状況（20%）、提出されたレポート（80%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

自分の研究について発表してみんなからフィードバックをもらうことが論文執筆に重要なステップだと認識しているようなので、引き続きこの方法を続けます。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

日本語用論学会などの学会への参加をお勧めします。オフィスアワーは火曜日4限ですが、水曜日の授業後の時間も可能です。論文指導の場合は、事前に原稿を教員に渡しておいてもらえると、効率的なコンサルテーションになると思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、社会言語学
<研究テーマ> 近代英語の歴史語用論的研究
<主要研究業績>

- (1)「呼びかけ語」の機能——歴史語用論のアプローチ（2010）、川端朋広他編『秋元実治教授退職記念論文集』、ひつじ書房。
- (2)「歴史語用論の新展開:方法と課題」（2009）『月刊言語』2009年2月号、大修館書店 pp. 66-73.
- (3)'Positioning and Functioning of Vocatives: A Case Study in Historical Pragmatics', (2008) Bulletin of the Faculty of Letters, No. 56, Hosei University, pp. 29-48.

【Outline and objectives】

This course deals with pragmatics. Students are expected to find their topics for their theses.

LNG500B3

言語科学特講 I B

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分の論文のテーマに関連したテキストを正確に読み、かつ批判的読解をしながら、自分の論文を完成させることを目標にします。

【到達目標】

語用論の基本的な知識を身につけて、自分で分析に使えるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

一章ずつのテキストの講読、論文指導、面談で、論文の執筆を指導していきます。授業の形態（対面。リモート）は HOPPII でお知らせしますので、毎週必ず HOPPII を確認してください。リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	第六章：語用論的行為（1）：伝統的な言語行為論	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論的行為とスキーマ理論、相互行為における語用論的行為：担当の受講生による発表とディスカッション
2	第六章：語用論的行為（2）：直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論的行為とスキーマ理論、相互行為における語用論的行為：担当の受講生による発表とディスカッション
3	第六章：語用論的行為（3）：語用論的行為とスキーマ理論、相互行為における語用論的行為	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論的行為とスキーマ理論、相互行為における語用論的行為：担当の受講生による発表とディスカッション
4	第七章：対人語用論（1）：ポライトネスへの2つの一般的アプローチ	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション
5	第七章：対人語用論（2）：2つの古典的な語用論的ポライトネス観	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション
6	第七章：対人語用論（3）：2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション

7	第八章：メタ語用論 (1)：メタ語用論と 再帰性	メタ語用論と再帰性、メタ語用論 的意識の形成、実用的メタ語用論 ：担当の受講生による発表とディス カッション
8	第八章：メタ語用論 (2)：メタ語用論的 意識の形成	メタ語用論と再帰性、メタ語用論 的意識の形成、実用的メタ語用論 ：担当の受講生による発表とディス カッション
9	第八章：メタ語用論 (3)：実用的メタ語 用論：	メタ語用論と再帰性、メタ語用論 的意識の形成、実用的メタ語用論 ：担当の受講生による発表とディス カッション
10	第九章：結論(1)： 語用論の使用の相にお ける言語	語用論の使用の相における言語、 統合的語用論、諸英語の語用論： 担当の受講生による発表とディス カッション
11	第九章：結論(2)： 統合的語用論	語用論の使用の相における言語、 統合的語用論、諸英語の語用論： 担当の受講生による発表とディス カッション
12	第九章：結論(3)： 英語の語用論	語用論の使用の相における言語、 統合的語用論、諸英語の語用論： 担当の受講生による発表とディス カッション
13	研究発表会	担当の受講生による研究論文発表 とディスカッション
14	研究発表会と総括	担当の受講生による研究発表と ディスカッション、および総括、 これまでの授業のまとめに加え、 レポート等、課題に対する講評や 解説

【Outline and objectives】

This course deals with pragmatics. Students are expected to find their topics for their theses.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

セメスターを通じて、以下に留意して授業に臨んでください。

- 1：各自の過去の学術論文、研究のまとめと今後の研究計画を立てる。
- 2：自分の担当した箇所をきちんと読み、プレゼンテーションができるように予習・準備をする。
- 3：自分に必要な参考文献を集めて、読む。
- 4：自分の研究テーマについて中間発表を繰り返しながら、論文完成を目指す。

【テキスト（教科書）】

ジョナサン・カルベパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』研究社

【参考書】

上記以外の文献は、必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表とディスカッションへの参加状況（20%）、提出されたレポート（80%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

引き続き、きめ細かい論文指導、面談指導を行います。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

日本語用論学会などの学会への参加をお勧めします。
オフィスアワーは火曜日4限ですが、水曜日の授業後の時間も可能です。論文指導の場合は、事前に原稿を教員に渡しておいてもらえると、効率的なコンサルテーションになると思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 語用論、文体論、社会言語学

＜研究テーマ＞ 近代英語の歴史語用論的研究

＜主要研究業績＞

(1)「『呼びかけ語』の機能——歴史語用論的アプローチ」(2010)、川端朋広他編『秋元実治教授退職記念論文集』、ひつじ書房。

(2)「歴史語用論の新展開:方法と課題」(2009)『月刊言語』2009年2月号、大修館書店 pp. 66-73.

(3)'Positioning and Functioning of Vocatives: A Case Study in Historical Pragmatics',

(2008) *Bulletin of the Faculty of Letters*, No. 56, Hosei University, pp. 29-48.

LNG500B3

言語科学特講Ⅲ A

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理言語学のうち、単語処理および文処理の入門レベルの知識を学びます。「単語」および「文」とは、言語表現のサイズの分類であり、どちらの処理にも、音・文法・意味の両方が関わるので、それぞれの処理についての知識を得ることになります。

<講義題目>言語科学の下位分野の例（音声知覚、統語理論、文処理）

【到達目標】

単語処理や文処理について、どのような実験手法によってどのような知見が既に得られているのかという入門レベルの知識を得ること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に輪読形式を予定しています。発表に対してのコメントという形でのフィードバックを与えます。

なお、以下の授業計画は、学生のニーズおよび理解度などに応じて柔軟に変更します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業全体の紹介
第2回	過去またはこれからの研究の発表	前年度までに各自が行なった研究またはこれからの研究の予定の発表
第3回	単語の心的な表現	音節、形態素、など
第4回	語彙意味論1：単語同士の間の関係	意味ネットワーク
第5回	語彙意味論2：意味ネットワークのせいで生じる現象	プライミング
第6回	記号の接地問題	「意味」って何？
第7回	単語認知	様々な処理モデル
第8回	語彙レベルの曖昧性の解消	曖昧性の解消に文脈がどのように利用されるか
第9回	文処理の研究の必要性	構文解析の必要性
第10回	文処理のモデル1：2段階モデル	統語処理が終わった後に意味処理……という2段階モデル
第11回	文処理のモデル2：制約モデル	統語的な制約、意味的な制約、などが並列で働く、というモデル
第12回	文処理研究で知られている諸事実	どのようなモデルでも説明が必要とされる諸事実
第13回	文処理のモデル3：その他のモデル	もっと新しい諸モデル
第14回	新たなテーマの発表	これからの研究テーマ（予定）の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
講読の発表では、書かれた内容の把握だけでなく、著者への批判または疑問も考えてください。
自分の研究（テーマ）の発表では、「相手は自分の発表なんか聞きたくない」という前提で準備をしてください。

【テキスト（教科書）】

Traxler, M. J. 2012. *Introduction to Psycholinguistics*. (Wiley-Blackwell.)

入手の仕方については、授業でお話しします。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、発表点 50 %

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は久しぶりの開講でしたが、以前と同様にアンケート非実施科目だったので、N/A。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムには自分が普段アクセスするメールアドレスを登録（または法政 gmail で、自分が普段アクセスするメールアドレスへの自動転送を設定）してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、黙読時の音韻処理

<主要研究業績> <http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An introduction to word and sentence processing.

LNG500B3

言語科学特講Ⅲ B

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

外国語教育や音声学は昔から実験科学分野ですが、近年は統語論研究においても実験研究への志向が見られます。なので、教育・音声・統語解析・理論言語学で必要となる実験データ分析を中級レベルで学びます。

【到達目標】

本来このような大学院科目は、履修者のニーズに応じて内容自体を変えるべきであり、具体的に何をを目指すかは履修者の希望と照らし合わせて決定します。しかしここでは、担当者の守備範囲の例示として、混合効果一般化線形モデルの入門を挙げておきます。その場合の到達目標は以下の通り：

- ・正規分布しないデータ（特定の選択肢の「選択率」やコーパスでのカウント数など）を一般化混合モデルで分析できるようになること。
- ・伝統的な分散分析では扱えない、実験参加者に加えて言語刺激についても一般化が必要になる通常の心理言語学実験のデータを、混合効果モデルで分析できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下の授業計画は、混合効果一般化線形モデルの入門の例。但し、その場合でも、具体的な進度・内容は例示に過ぎません。試験には個別に採点コメントを返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	環境整備	統計環境 R の導入
第 2 回	モデルの構築という考え方	線形回帰、およびその統計量の意味
第 3 回	線形回帰モデルの構築法	最小二乗法、最尤法
第 4 回	重回帰分析の基礎 1：重回帰分析とは何か	複数の変数による予測
第 5 回	重回帰分析の基礎 2：出力結果の見方	モデル全体としての予測と、個々の予測変数の寄与度との、違い
第 6 回	重回帰分析の基礎 3：個々の予測変数のさらなる評価法	モデル間の比較による、個々の予測変数の寄与度の評価
第 7 回	重回帰分析の基礎 4：伝統的な重回帰分析の限界	分布に関する前提
第 8 回	線形モデル	伝統的な分散分析や t 検定の、線形回帰モデルとしての表現
第 9 回	選択率データの分布	2 項分布、arcsine square-root transformation、logit transformation
第 10 回	ロジスティック回帰	ロジット及びロジスティック関数、線形予測子、リンク関数、separation
第 11 回	混合効果モデル 1：目的変数を左右する 2 種類の因子	固定因子および変量因子の概念
第 12 回	混合効果モデル 2：複数の変量因子への古典的な対応方法	subject analysis と item analysis

第 13 回 混合効果モデル 3：混 変量因子にもとづく傾き・切片
混合効果モデルにおける

変量因子の扱い

第 14 回 混合効果モデル 4：モ デルに含めるべき因子の検討
デル選択

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望まれますが、わからない箇所は教員または周囲に尋ねてください。

また、上記の授業計画の場合は、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみたり、自分の手持ち（または架空）のデータを分析してみる……といった作業を行うと良いでしょう。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

久保拓弥 (2012). 『データ解析のための統計モデリング入門—一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC』
東京：岩波書店.

Winter, B. (2019). *Statistics for Linguists: An Introduction Using R*. Routledge.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

N/A.

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムに登録されたアドレスに諸般の連絡メールが行くので、普段からそのメールが読めるようにしておいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 統語論・意味論、音声学、人間の言語処理

<研究テーマ> 音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An intermediate-level course on statistical analysis of experimental data.

LNG500B3

言語科学特講Ⅴ A

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and classify theories of L2 learning and apply the findings to the development of principled approaches to L2 pedagogy.

< 講義題目 >

第二言語習得 Second Language Acquisition

【到達目標】

Upon successful completion of this course, M.A. and doctoral students are expected to be able to do the following:

1. Explain the core issues in L2 acquisition research
 2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
- In addition to 1 and 2, doctoral students are expected to be able to do the following:
3. Conduct research on instructed L2 learning, and relate the findings to L2 learning and teaching in Japan

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics. Feedback will be given after each presentation. This course will be conducted online.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction to the course	Presentation of key concepts in second language acquisition and teaching
第 2 回	First language acquisition	How do people learn an L1?
第 3 回	Second language acquisition	How do adults learn an L2?
第 4 回	Age and L2 acquisition	How does age affect L2 acquisition?
第 5 回	Interaction in L2 classrooms	Does interaction lead to L2 acquisition?
第 6 回	Focus on form	Attending to meaning and form in L2 learning
第 7 回	Acquisition of L2 grammar	How is L2 grammar acquired?
第 8 回	Acquisition of L2 vocabulary	Issues related to L2 vocabulary acquisition
第 9 回	Contexts of instructed second language acquisition	In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?
第 10 回	Foreign language aptitude	Does language aptitude influence L2 learning?
第 11 回	Motivation	To what extent does motivation affect L2 learning?
第 12 回	Affect and other individual differences	What other variables play a role in L2 learning?

第 13 回	Research presentations	Research project presentations
第 14 回	Feedback on research presentations and final exam	Discussion of and feedback on students' research projects and final exam

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2013). *How languages are learned*. Oxford University Press.

Shawn Loewen. (2015). *Introduction to instructed second language acquisition*. Routledge.

Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition*. Hodder Education.

Rod Ellis. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd edition). Oxford University Press.

H. Douglas Brown. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy* (3rd edition). Longman.

H. Douglas Brown. (2006). *Principles of language learning and teaching* (5th edition). Longman.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

< M.A. Students >

In-class presentations: 50%

Written report: 25%

Final Exam: 25%

< Doctoral Students >

In-class presentations: 25%

Written report: 25%

Research proposal: 25%

Final Exam: 25%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments and a final exam. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for missing an assignment (i.e., presentation, report, or test) or for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】

Students commented that they benefited from conducting research and preparing presentations on the course content. I plan to allot more time for students to reflect on the course content and to conduct research for their presentations.

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 第二言語習得・英語教育学

< 研究テーマ > 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

< 主要研究業績 >

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline and objectives】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and classify theories of L2 learning and apply the findings to the development of principled approaches to L2 pedagogy.

<講義題目>

第二言語習得 Second Language Acquisition

LIN600B3

英語学特殊研究第一（英文法・文体論・語用論） A

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には書かれたテキスト分析の方法です。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それを一つのテキストとみなし、そのスタイルを、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をします。今年は語用論研究の領域を概観します。それを出発点として、狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つのテキスト分析の方法を確認していきます。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とします。学生は、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初回は4月7日です。担当を決めるので、履修予定の学生は、必ず初回に出席してください。状況によってzoomと対面授業をします。HOPPIIの「教材」のところで連絡をしますので、毎週必ず見てください。

テキストは担当を決めて、発表してもらいます。その後で、みんなでコメントを交換し、ディスカッションをします。

リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	学生のプレゼンテーションと議論：「語用論」とは何か？
第2回	第一章：イントロダクション	文脈における意味、英語の語用論：学生のプレゼンテーションと議論
第3回	第二章：指示語用論（1）：定表現、ダイクシス	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第4回	第二章：指示語用論（2）：前方照応	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第5回	第二章：指示語用論（3）：相互行為における指示表現の使用と理解	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第6回	第三章：情報語用論（1）：情報語用論、情報基盤	情報語用論、情報基盤、情報背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第7回	第三章：情報語用論（2）：情報背景、	情報語用論、情報基盤、情報背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション

第 8 回	第三章：情報語用論 (3)：相互好意的側面	情報語用論、情報基盤、情動的背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第 9 回	第四章：語用論の意味 I (1)：「言われたこと」以上の意味	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第 10 回	第四章：語用論の意味 I (2)：「言われたこと」対「推意とされたこと」	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第 11 回	第四章：語用論の意味 I (3)：「言われたこと」と「推意とされたこと」	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第 12 回	第五章：語用論の意味 II (1)：語用論の意味の分析	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション
第 13 回	第五章：語用論の意味 II (2)：誰の意味なのか	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション
第 14 回	第五章：語用論の意味 II (3)：意味を理解すること、相互行為の文脈における意味	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習・復習については各 2 時間を標準とします。担当者でなくても、かならずテキストを読んで予習をしてきてください。

【テキスト（教科書）】

ジョナサン・カルベパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』研究社

【参考書】

適宜、指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート（50 %）に加え、授業中の参加の度合、貢献度（50 %）を考慮し、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

面談が評判がよいので、指導は授業と面談とのコンビネーションで進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>語用論、文体論、コミュニケーション論
<研究テーマ>英語の呼称について、日本語のベネファクティブとポライネスについて
<主要研究業績>「させていただく」という問題系『日本語語用論フォーラム 2』2017, ひつじ書房、他

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to gain an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply the methodologies and theories that are needed in their own research.

LIN600B3

英語学特殊研究第一（英文法・文体論・語用論） B

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には書かれたテキスト分析の方法である。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それの一つのテキストとみなし、その語用論の意味を、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をします。狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つ一つのテキスト分析の方法を確認していきます。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とします。学生には、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得してもらうことをめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の形態は毎回 HOPPII でお知らせしますので、毎週必ずチェックしてください。

担当者がテキストについて発表し、その後、みんなでコメントを交わしてディスカッションをします。

秋セメスターは基本的にリモート授業ですが、コロナの感染状況によって大学の基準が変更する場合は、授業形式も変更になります。その場合は、HOPPII でお知らせします。大学の HP も定期的にみておいて下さい。

リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論の行為とスキーマ理論、相互行為における語用論の行為：担当の受講生による発表とディスカッション
第 2 回	第六章：語用論の行為（1）：伝統的な言語行為論	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論の行為とスキーマ理論、相互行為における語用論の行為：担当の受講生による発表とディスカッション
第 3 回	第六章：語用論の行為（2）：直接性・間接性	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論の行為とスキーマ理論、相互行為における語用論の行為：担当の受講生による発表とディスカッション
第 4 回	第六章：語用論の行為（3）：社会・文化的文脈における言語行為など	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論の行為とスキーマ理論、相互行為における語用論の行為：担当の受講生による発表とディスカッション

第 5 回	第七章：対人語用論（1）：ポライトネスへの2つの一般的アプローチ	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション
第 6 回	第七章：対人語用論（2）：2つの古典的な語用論的ポライトネス観	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション
第 7 回	第七章：対人語用論（3）：最近の展開、インポライトネス	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション
第 8 回	第八章：メタ語用論（1）：メタ語用論と再帰性	メタ語用論と再帰性、メタ語用論的意識の形成、実用的メタ語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 9 回	第八章：メタ語用論（2）：実用的メタ語用論	メタ語用論と再帰性、メタ語用論的意識の形成、実用的メタ語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 10 回	第八章：メタ語用論（3）：実用的メタ語用論	メタ語用論と再帰性、メタ語用論的意識の形成、実用的メタ語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 11 回	第九章：結論（1）：語用論の使用の相における言語	語用論の使用の相における言語、統合的語用論、諸英語の語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 12 回	第九章：結論（2）：統合的語用論	語用論の使用の相における言語、統合的語用論、諸英語の語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 13 回	第九章：結論（3）：諸英語の語用論	語用論の使用の相における言語、統合的語用論、諸英語の語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 14 回	語用論的研究の今後の課題	タームを振り返って、問題点などを議論する、これまで学んだことを総括する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習・復習については各 2 時間を標準とします。担当者もそれ以外の人も、全員、テキストを読んで予習をして来てください。

【テキスト（教科書）】

ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』研究社

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート（50 %）に加え、授業中の参加の度合、貢献度（50 %）を考慮し、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

面談が指導に有効で良かったと言われているので、授業に並行して、定期的に面談を行い、一人一人の論文作成を進めていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>語用論、文体論、コミュニケーション論
<研究テーマ>英語の呼称問題、日本語のベネファクティブとポライトネス
<主要研究業績>「させていただく」という問題系、『日本語語用論フォーラム 2』（ひつじ書房）2017 他

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to gain an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply the methodologies and theories that are needed in their own research.

LIN500B3

言語科学特講Ⅱ A

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語史における言語変化についての基礎的な知識を得る。特に、完了形、進行形、受動態、助動詞、不定詞、分詞、動名詞などの構文が統語的にどのようにして発達してきたかについて学ぶ。

【到達目標】

英語史における文法変化や統語構造の変化について説明できるようになる。

英語史における文献をきちんと正確によめるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容の紹介
第 2 回	Chapter 1 Introduction	統語論の説明と歴史的データ
第 3 回	1.5 Interpreting historical data	歴史的データの扱い方
第 4 回	Chapter 2 Nominal categories	名詞の性・数・格
第 5 回	Chapter 3 Verbal categories 3.5 The perfect	完了形
第 6 回	文献紹介（1）	アスペクトに関する文献紹介
第 7 回	3.6 The progressive	進行形
第 8 回	3.7 The passive	受動態
第 9 回	4. Modal auxiliaries	助動詞
第 10 回	文献紹介（2）	助動詞に関する文献紹介
第 11 回	4.5 The verbal characteristics of auxiliaries	助動詞の特徴
第 12 回	4.6 The rise of do-support	助動詞 do
第 13 回	文献紹介（3）	迂言法に関する文献紹介
第 14 回	春学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Bettelou Los (2015) A Historical Syntax of English. Edinburgh University Press.

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。(平常点 60 点、レポート 40 点)

【学生の意見等からの気づき】

「本年度授業担当者変更によりフィードバックできません」

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

英語学・英語史

＜研究テーマ＞

初期近代英語期の文法

＜主要研究業績＞

「第 6 章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English syntax from Old English to Present-day English. This course requires students to analyze the syntactic functions in constructions found in English sources such as novels and plays.

LIN500B3

言語科学特講Ⅱ B

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語史における言語変化についての基礎的な知識を得る。特に、完了形、進行形、受動態、助動詞、不定詞、分詞、動名詞などの構文が統語的にどのようにして発達してきたかについて学ぶ。

【到達目標】

英語史における文法変化や統語構造の変化について説明できるようになる。

英語史における文献をきちんと正確によめるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要説明
第 2 回	5. Complementat	補文構造
第 3 回	5.3 The rise of the ing-form	ing 形の発達
第 4 回	5.4 The rise of the to-infinitive	to 不定詞の発達
第 5 回	文献紹介（1）	動名詞・不定詞に関する文献紹介
第 6 回	6. The structure of the clause	節の構造
第 7 回	6.3 The word order of the subclause	従属節の語順
第 8 回	6.5 The change from OV to VO	OV から VO への変化
第 9 回	文献紹介（2）	従属節の語順に関する文献紹介
第 10 回	7 Verb Second	動詞第二位置
第 11 回	8 Syntax and discourse	統語と談話
第 12 回	8.3 Foregrounding and peak marking	前景化
第 13 回	文献紹介（3）	談話に関する文献紹介
第 14 回	秋学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Bettelou Los (2015) A Historical Syntax of English. Edinburgh University Press.

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。(平常点 60 点、レポート 40 点)

【学生の意見等からの気づき】

「本年度授業担当者変更によりフィードバックできません」

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

英語学・英語史

＜研究テーマ＞

初期近代英語期の文法

＜主要研究業績＞

「第6章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English syntax from Old English to Present-day English. This course requires students to analyze the syntactic functions in constructions found in English sources such as novels and plays.

LIT500B3

英米文学特講 I A

小島 尚人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

講義題目：ノヴェルとアメリカ

本授業は、小説（novel）の歴史を背景として、アメリカにおける小説ジャンルの展開に大きく関わる作家の作品を読んでいくものである。学期前半では、代表的な小説論・小説史を参照して「小説とは何か」および「アメリカ小説の特質とは何か」という問題について考察する。そこで得た知見と問題意識を踏まえ、学期後半は、作家や作品の個性とアメリカ小説の歴史的展開との双方を視野に入れながら作品の精読をおこなう。春学期は、アメリカ型の近代小説を「ロマンス」と名づけながら確立した Nathaniel Hawthorne の代表作のひとつ *The Blithedale Romance*（1852）を扱う。

【到達目標】

- ・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
- ・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
- ・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
- ・自分の解釈を論理的に記述することができる。
- ・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
- ・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。
- ・修士課程の学生に対して指導的な役割を演じられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。授業は演習形式で進め、毎回発表担当者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメントーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第2回	小説の歴史と理論①：勃興の背景	Ian Watt, <i>The Rise of the Novel</i>
第3回	小説の歴史と理論②：ネイション	Benedict Anderson, <i>Imagined Communities</i>
第4回	小説の歴史と理論③：近代的個人	Nancy Armstrong, <i>How Novels Think</i>
第5回	小説の歴史と理論④：ビルドゥングスロマン	Franco Moretti, <i>The Way of the World</i>
第6回	小説の歴史と理論⑤：アメリカン・ロマンス	Richard Chase, <i>The American Novel and Its Tradition</i>
第7回	前半のまとめ：ノヴェルとアメリカ	Homer Brown, “Why the Story of the Origin of the (English) Novel Is an American Romance (If Not the Great American Novel)”

第 8 回 作品読解①	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 1 – 6
第 9 回 作品読解②	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 7-11
第 10 回 作品読解③	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 12-16
第 11 回 作品読解④	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 17 – 22
第 12 回 作品読解⑤	Nathaniel Hawthorne, <i>The Blithedale Romance</i> : Chapters 23 – 29
第 13 回 先行研究の検討	<i>The Blithedale Romance</i> についての英語論文を読む
第 14 回 学期のまとめ	アメリカのナショナル・アイデンティティと小説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8～10 時間）

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance* (Bedford Cultural Editions, 1996). ISBN: 9780312118037

【参考書】

小説の理論と歴史

Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)

Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)

Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719 – 1900* (Columbia UP, 2005)

アメリカ小説論・アメリカ小説史

Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)

Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)

Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

・授業への貢献度（ちゃんと予習ができているか、討議に積極的に参加しているか）：30 %

・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30 %

・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40 %

【学生の意見等からの気づき】

批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>アメリカ文学

<研究テーマ>南北戦争後の小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論

<主要研究業績>

①「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について——アメリカ文学研究の Temporal Turn とその帰結」『英文學誌』（2020 年）

②「ギルバート・オズモンドはどこ出身か——*The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文學誌』（2018 年）

③「What Mary Knew: The Location of the Reader in Charles Brockden Brown's *Edgar Huntly*」『ストラータ』（2013 年）

【Outline and objectives】

This class is a seminar on the American novel. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, framing the questions of what the novel *is* and what the novel *does*, as well as what is “American” in the American novel. In the second half of the semester, through the close reading of Nathaniel Hawthorne's *The Blithedale Romance* (1852), students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity. Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures.

LIT500B3

英米文学特講 I B

小島 尚人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

講義題目：ノヴェルとアメリカ

本授業は、小説（novel）の歴史を背景として、アメリカにおける小説ジャンルの展開に大きく関わる作家の作品を読んでいくものである。学期序盤では、春学期に引き続き代表的な小説論・小説史を参照して「小説とは何か」および「アメリカ小説の特質とは何か」という問題について考察する。そこで得た知見と問題意識を踏まえ、学期中盤以降は、作家や作品の個性とアメリカ小説の歴史的展開との双方を視野に入れながら作品の精読をおこなう。秋学期は、ヨーロッパとアメリカの狭間で揺れ動く人物たちの姿を緻密に描き出すことを通じて小説ジャンルの革新者となった Henry James の前期の代表作 *The Portrait of a Lady*（1881）を扱う。

【到達目標】

- ・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
- ・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
- ・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
- ・自分の解釈を論理的に記述することができる。
- ・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
- ・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。
- ・修士課程の学生に対して指導的な役割を演じられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。授業は演習形式で進め、毎回発表担当者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメントによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第 2 回	ヨーロッパ小説とアメリカ小説①：「偉大なアメリカ小説」とは	Lawrence Buell, <i>The Dream of the Great American Novel</i>
第 3 回	ヨーロッパ小説とアメリカ小説②：アメリカ文学におけるビルドゥングスロマン	Sarah Graham, <i>A History of the Bildungsroman</i>
第 4 回	ヨーロッパ小説とアメリカ小説③：ビルドゥングスロマンとジェンダー	Susan Fraiman, <i>Unbecoming Women: British Women Writers and the Novel of Development</i>
第 5 回	作品読解①	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 1 – 7
第 6 回	作品読解②	Henry James, <i>The Portrait of a Lady</i> : Chapters 8 – 13

第 7 回 作品読解③

第 8 回 作品読解④

第 9 回 作品読解⑤

第 10 回 作品読解⑥

第 11 回 作品読解⑦

第 12 回 作品読解⑧

第 13 回 作品読解⑨

第 14 回 作品読解⑩

Henry James, *The Portrait of a Lady*: Chapters 14 – 18Henry James, *The Portrait of a Lady*: Chapters 19 – 22Henry James, *The Portrait of a Lady*: Chapters 23 – 28Henry James, *The Portrait of a Lady*: Chapters 29 – 36Henry James, *The Portrait of a Lady*: Chapters 37 – 41Henry James, *The Portrait of a Lady*: Chapters 42 – 46Henry James, *The Portrait of a Lady*: Chapters 47 – 51Henry James, *The Portrait of a Lady*: Chapters 52 – 55

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8～10 時間）

【テキスト（教科書）】

Henry James, *The Portrait of a Lady* (Penguin Classics, 2016). ISBN: 9780141441269

【参考書】

小説の理論と歴史

Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)

Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)

Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719 – 1900* (Columbia UP, 2005)

アメリカ小説論・アメリカ小説史

Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)

Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)

Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

・授業への貢献度（ちゃんと予習ができていないか、討議に積極的に参加しているか）：30 %

・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30 %

・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40 %

【学生の意見等からの気づき】

批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>アメリカ文学

<研究テーマ>南北戦争後の小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論

<主要研究業績>

①「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について——アメリカ文学研究の Temporal Turn とその帰結」『英文學誌』（2020 年）

②「ギルバート・オズモンドはどこ出身か——*The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文學誌』（2018 年）

③「What Mary Knew: The Location of the Reader in Charles Brockden Brown's *Edgar Huntly*」『ストラータ』（2013 年）

【Outline and objectives】

This class is a seminar on the American novel. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, framing the questions of what the novel *is* and what the novel *does*, as well as what is “American” in the American novel. In the second half of the semester, through the close reading of Henry James's *The Portrait of a Lady* (1881), students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity. Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures.

LIT700B3

英米文学特殊演習 I A

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の目的は、博士論文の執筆のために必要な知識とスキルを獲得することである。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②関連する文献を批判的に読み、自分なりの（独創的な）解釈を発見する。
- ③その解釈の妥当性を論理的に証明するスキルと文章力を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評をする力を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはループリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	本年度の研究計画、主題を決定	博士論文の構想を明らかにし、本年度の主題を決定する。
第 2 回	論文執筆にむけた作品の読解（1）	主題と関連する作品の第一部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 3 回	論文執筆にむけた作品の読解（2）	主題と関連する作品の第二部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 4 回	論文執筆にむけた作品の読解（3）	主題と関連する作品の第三部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 5 回	論文執筆にむけた作品の読解（4）	主題と関連する作品の第四部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 6 回	論文執筆にむけた作品の読解（5）	主題と関連する作品の第五部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 7 回	論文執筆にむけたリサーチ（1）	主題と関連する先行研究（作家関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 8 回	論文執筆にむけたリサーチ（2）	主題と関連する先行研究（歴史関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 9 回	論文執筆にむけたリサーチ（3）	主題と関連する先行研究（作品関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 10 回	論文執筆にむけたリサーチ（4）	主題と関連する先行研究（思想関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 11 回	論文第一ドラフトの執筆と検討	作品研究の第一段階ドラフトを読みあわせ、問題点を指摘する。文章については教員が個人指導。

第 12 回	論文第二ドラフトの執筆と検討	第二段階ドラフトを読み合わせ、問題点を指摘する。文章についても指導。
第 13 回	論文の執筆と修正 1	前回までの指摘を踏まえて修正・加筆された原稿を読み合わせ、論評する。
第 14 回	論文の完成にむけての調整	論文に修正を加え完成させる。最終的なチェックは教員による個人指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。
論文のドラフトを書けるところまで書く。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（プレゼンテーションとディスカッション） 50 %
期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

はじめて担当する授業なので、学生の意見はまだない。学生の意見を随時反映しながら授業を進めていきたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
イギリス文学
＜研究テーマ＞
19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline and objectives】

The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation

LIT700B3

英米文学特殊演習 I B

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の目的は、博士論文の執筆のために必要な知識とスキルを獲得することである。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②関連する文献を批判的に読み、自分なりの（独創的な）解釈を発見する。
- ③その解釈の妥当性を論理的に証明するスキルと文章力を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評をする力を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	本年度秋学期の研究計画、主題を確認	夏期休暇中の研究の進捗状況を報告し、後期の具体的な研究計画を確認する。
第 2 回	論文執筆にむけた作品の読解（1）	主題と関連する作品の第一部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 3 回	論文執筆にむけた作品の読解（2）	主題と関連する作品の第二部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 4 回	論文執筆にむけた作品の読解（3）	主題と関連する作品の第三部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 5 回	論文執筆にむけた作品の読解（4）	主題と関連する作品の第四部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 6 回	論文執筆にむけた作品の読解（5）	主題と関連する作品の第五部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 7 回	論文執筆にむけたリサーチ（1）	主題と関連する先行研究（作家関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 8 回	論文執筆にむけたリサーチ（2）	主題と関連する先行研究（歴史関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 9 回	論文執筆にむけたリサーチ（3）	主題と関連する先行研究（作品関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 10 回	論文執筆にむけたリサーチ（4）	主題と関連する先行研究（思想関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション

第 11 回	論文第一ドラフトの執筆と検討	作品研究の第一段階ドラフトを読みあわせ、問題点を指摘する。文章については教員が個人指導。
第 12 回	論文第二ドラフトの執筆と検討	第二段階ドラフトを読みあわせ、問題点を指摘する。文章についても指導。
第 13 回	論文の執筆と修正 1	前回までの指摘を踏まえて修正・加筆された原稿を読みあわせ、論評する。
第 14 回	論文の完成にむけての調整	論文に修正を加え完成させる。最終的なチェックは教員による個人指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。
論文のドラフトを書けるところまで書く。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（プレゼンテーションとディスカッション） 50 %
期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

はじめて担当する授業なので、学生の意見はまだない。学生の意見を随時反映しながら授業を進めていきたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
イギリス文学
＜研究テーマ＞
19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline and objectives】

The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation

LIT600B3

英文学特殊研究第一（British Fiction） A

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、田園こそがイングランドの本質的なナショナル・アイデンティティであるという田園主義的イングリッシュネス概念の構築と脱構築の歴史を背景として、それに関連する代表的なイギリス小説を読んでいくものである。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解をとおして論理的にものを考える力、文学作品を解釈する能力、作品のコンテクストをリサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

＜講義題目＞：イギリス小説における田園の表象とナショナル・アイデンティティ

【到達目標】

- ・文学作品を論理的に分析することができる。
- ・文学作品およびその批評について他人と議論することができる。
- ・それぞれの作家の文学的立場について記述することができる。
- ・イギリス小説における田園の表象の特徴について説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

イギリス小説における田園の表象の変容を講義形式でたどりながら、個々の作品の読解は演習形式で進める。演習においては、それぞれの作品を精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていくことが求められる。そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。フィードバックは授業内でとりあげたり、コメントを返したりするかたちで行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
①	イントロダクション	イングリッシュネス・スタディーズ序説
②	ジェイン・オースティン以前	ピクチャレスクな風景の発見とロマン派
③	Austen, 映画 <i>Sense and Sensibility</i>	映画の解釈（1）
④	Austen, <i>Northanger Abbey</i>	ゴシックとピクチャレスク
⑤	Austen, <i>Emma</i>	イングランドの風景の発見
⑥	まとめと質疑応答（1）	質問と議論で授業のまとめをする。
⑦	Dickens, <i>Oliver Twist</i>	都市の影、田園の光
⑧	Brontë, 映画 <i>Wuthering Heights</i>	映画の解釈（2）
⑨	Brontë, <i>Wuthering Heights</i>	南と北の田園風景
⑩	Eliot, <i>Adam Bede</i>	反牧歌の伝統（1）
⑪	Hardy, 映画 <i>Tess of the D'Urbervilles</i>	映画の解釈（3）
⑫	Hardy, <i>Tess of the D'Urbervilles</i>	反牧歌の伝統（2）
⑬	Morris, <i>News from Nowhere</i>	田園のヘリテージ化

- ⑭ まとめと質疑応答（2） 質問と議論で授業のまとめをする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
- ・授業中の討議に参加できるよう、指定されたテキストを授業前に精読し、自分の意見をまとめる。

【テキスト（教科書）】

とくに用いない。

【参考書】

レイモンド・ウィリアムズ『都会と田舎』

Patrick Parrinder, *Nation and Novel: The English Novel from Its Origins to the Present Day* (Oxford UP)

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
- ・4000 字程度の期末レポート 50%（自分なりの主題を発見し、それについて論理的に述べる）

【学生の意見等からの気づき】

- ・精読する作品、ペース配分など、可能なところは学生と相談しながら決める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

イギリス文学

＜研究テーマ＞

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

＜主要研究業績＞

(分担執筆)

『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、2009 年 2 月、『『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解—都市退化論と「土地に還れ」運動』、pp. 115-134, 「『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解への不満—貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い」、pp. 135-155.

『イギリス小説の愉しみ』塩谷清人、富山太佳夫編、音羽書房鶴見書店、2009 年 6 月、『『ドラキュラ』、ゴシック小説、心霊研究』、pp. 240-58.

『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学教養学部編、東京大学出版会、2010 年 3 月、『『タイム・マシン』の歴史主義的解釈—文学作品の思想的歴史的文脈』、pp. 86-101.

【Outline and objectives】

In this class students study the history of the construction and deconstruction of the concept of rural Englishness that the country is the essential national identity of England, and read some of the representative British novels against the background of the history. They are expected to improve the ability to read critically, the ability to think logically, the ability to interpret literary works in the original way, the ability to research the context of works, and the ability to present, discuss and write a paper.

LIT600B3

英文学特殊研究第一（British Fiction） B

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、田園こそがイングランドの本質的ナショナル・アイデンティティであるという田園主義的イングリッシュネス概念の構築と脱構築の歴史を背景として、それに関連する代表的なイギリス小説を読んでいくものである。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解をとおして論理的にものを考える力、文学作品を解釈する能力、作品のコンテクストをリサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

＜講義題目＞：イギリス小説における田園の表象とナショナル・アイデンティティ

【到達目標】

- ・文学作品を論理的に分析することができる。
- ・文学作品およびその批評について他人と議論することができる。
- ・それぞれの作家の文学的立場について記述することができる。
- ・イギリス小説における田園の表象の特徴について説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

イギリス小説における田園の表象の変容を講義形式でたどりながら、個々の作品の読解は演習形式で進める。演習においては、それぞれの作品を精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていくことが求められる。そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。

フィードバックは、授業内でとりあげたり、コメントを返したりするかたちで行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
①	イントロダクション	イングリッシュネス・スタディーズ序説
②	Gissing, <i>The Private Papers of Henry Ryecroft</i>	田園主義的イデオロギーの拡大
③	Forster, 映画 <i>Howards End</i>	映画の解釈（1）
④	Forster, <i>Howards End</i>	都市退化論と田園回帰
⑤	Forster, <i>Maurice</i>	国民国家のなかの緑林
⑥	まとめと質疑応答（1）	質問と議論で授業のまとめをする。
⑦	Woolf, 映画 <i>Mrs. Dalloway</i>	映画の解釈（2）
⑧	Woolf, <i>Mrs. Dalloway</i>	遊歩者の都市
⑨	Woolf, <i>Between the Acts</i>	田園概念の脱構築
⑩	Country House Novels	カントリーハウスのヘリテージ化（1）
⑪	Waugh, <i>Brideshead Revisited</i>	カントリーハウスのヘリテージ化（2）
⑫	Ishiguro, 映画 <i>The Remains of the Day</i>	映画の解釈（3）

- ⑬ Ishiguro, *The Remains of the Day* カントリーハウスのヘリテージ化 (3)
- ⑭ まとめと質疑応答 (2) 質問と議論で授業のまとめをする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
・授業中の討議に参加できるよう、指定されたテキストを授業前に精読し、自分の意見をまとめる。

【テキスト（教科書）】

とくに用いない。

【参考書】

レイモンド・ウィリアムズ『都会と田舎』

Patrick Parrinder, *Nation and Novel: The English Novel from Its Origins to the Present Day* (Oxford UP)

【成績評価の方法と基準】

・平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
・4000 字程度の期末レポート 50%（自分なりの主題を発見し、それについて論理的に述べる）

【学生の意見等からの気づき】

・精読する作品、ペース配分など、可能なところは学生と相談しながら決める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

イギリス文学

<研究テーマ>

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化
<主要研究業績>

(分担執筆)

『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、2009 年 2 月、『『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解—都市退化論と「土地に還れ」運動』、pp. 115-134, 『『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解への不満—貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い』、pp. 135-155.

『イギリス小説の愉しみ』塩谷清人、富山太佳夫編、音羽書房鶴見書店、2009 年 6 月、『『ドラキュラ』、ゴシック小説、心霊研究』、pp. 240-58.

『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学教養学部編、東京大学出版会、2010 年 3 月、『『タイム・マシン』の歴史主義的解釈—文学作品の思想的歴史的文脈』、pp. 86-101.

【Outline and objectives】

In this class students study the history of the construction and deconstruction of the concept of rural Englishness that the country is the essential national identity of England, and read some of the representative British novels against the background of the history. They are expected to improve the ability to read critically, the ability to think logically, the ability to interpret literary works in the original way, the ability to research the context of works, and the ability to present, discuss and write a paper.

LIN500B3

言語科学特講Ⅳ A

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を読み、言語習得の理論研究についての知識を身につける。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法の知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論していく。言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1 年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおこなえながら議論する。授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	人の言語能力	第一言語習得
3	言語習得研究 1	第一言語習得と第二言語習得
4	言語習得研究 2	L2 研究の歴史
5	言語獲得と言語習得	Learning & Acquisition
6	研究計画発表 1	修士 2 年生による研究計画発表・進捗状況の報告
7	研究計画発表 2	修士 1 年生による研究テーマ発表
8	エラーに関する研究 1	transfer エラー・developmental エラー
9	エラーに関する研究 2	Error Analysis
10	学びと注意 1	暗示的・明示的学び
11	学びと注意 2	気づき仮説
12	学生による発表 1	レビュー論文
13	学生による発表 2	実験による仮説検証
14	研究法	研究手法比較と研究計画の作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて論文を指定する。

【参考書】

授業内でその都度、指定する。

【成績評価の方法と基準】

<博士後期課程学生>

授業参加点：30%
授業内発表：30%
Squib(論文)：40%

【学生の意見等からの気づき】

受講生の基礎知識、興味の内容が大きく異なるため、それぞれの興味に応じて扱う題材を調整していきたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

LIN500B3

言語科学特講Ⅳ B

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の研究を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる第二言語習得の理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】

音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法を身につける。SLA の音韻習得・語彙習得の論文を読み、習得・音韻理論の知識を身につける。自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の形にすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究論文の構成・データ分析の手法を学ぶ。授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容の説明・母語の影響
	第一言語習得と第二言語習得	
2	修士 2 年生の研究発表	研究の進捗状況発表（2 年生）
3	修士 1 年生・研修生の研究発表	研究の進捗状況の発表（1 年生、および研修生）
4	習得理論 1	Noticing
5	習得理論 2	input と output
6	習得順序 1	処理可能性理論
7	習得順序 2	セイリエンス
8	第二言語習得の研究手法	学生による実験論文の発表
9	データの分析・可視化 1	データ分析・統計処理
10	データの分析・可視化 2	データ分析・統計処理（ハンズオンデータによる実習）
11	論文構成	論文の構成・書式について学ぶ
12	1 年生による修論計画発表	1 年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表。
13	2 年生による修論発表	2 年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

＜博士課程＞

授業発表....40%

授業内での発言・議論への貢献....30%

Short Paper....30%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マッシュューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

LIT600B3

Fiction 演習 I A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アメリカ小説に関する古典的研究や文学史の本を複数参照しながら、歴史的に正典とされてきた小説作品を読んで議論する。小説家 (novelist) の小説 (novel) だけでなく、短篇小説 (short story) も考察の対象とする。のみならず思想史的な背景の知識を探ることも必要となる。また、小説理論についての研究書もとりあげる。

＜講義題目＞ アメリカ小説論研究

【到達目標】

アメリカ小説を歴史的・構造的に理解し、作品読解の力が身についている。前期（春学期）の具体的目標として、アメリカ小説に則して——

- (1) novel と romance の対概念を理解している。
- (2) story と plot の対概念を理解している。
- (3) round character と flat character の対概念を理解している。
- (4) American gothic の特性について理解している。
- (5) the beautiful, the sublime, the picturesque の美学について歴史的に理解している。
- (6) 描出話法・中間話法について理解している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本年度はアメリカ小説論の古典である Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (OUP, 1957) を中心にして、チェイスの議論を読み、とりあげられた作品を読み、あわせて議論を進める形式をとる。レポーター制だが、レポーター以外も作品と批評を読んで積極的に議論に参加することが求められる。同時に小説の諸相について短い講義をおこなって小説論の理解を深める。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション： American fiction のリズム——現実とは何か	レポーターの担当を決められるだけ決める／辞書・レファレンス類についてのプリント配布
第 2 回	アメリカ小説のはじまり	感傷小説とゴシック小説
第 3 回	Charles Brockden Brown (1)	<i>Wieland</i> ——アメリカン・ゴシックの誕生
第 4 回	Charles Brockden Brown (2)	サブライムの美学とピクチャレスクの美学
第 5 回	Washington Irving	小説の枠構造と時間と語り
第 6 回	Edgar Allan Poe (1)	小説論
第 7 回	Nathaniel Hawthorne (1)	<i>The Scarlet Letter</i>
第 8 回	Nathaniel Hawthorne (2)	<i>The Blithedale Romance</i>
第 9 回	Edgar Allan Poe (2)	plot と story
第 10 回	Ralph Waldo Emerson	アメリカのロマン主義の思想的背景
第 11 回	Herman Melville (1)	<i>Typee</i>
第 12 回	Herman Melville (2)	<i>Moby-Dick</i> (1)
第 13 回	Herman Melville (3)	<i>Moby-Dick</i> (2)
第 14 回	まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

辞書などを駆使した予習、ならびに参考論文・研究書・アメリカ文学作品の自主的な読み。標準的な予習・復習時間は合計 4 時間位。

【テキスト（教科書）】

Charles Brockden Brown, *Wieland*

Edgar Allan Poe, *Tales of the Grotesque and Arabesque*

Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*; *The Blithedale Romance*

Herman Melville, *Moby-Dick*

【参考書】

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (OUP, 1957).

Charles Feidelson, *Symbolism and American Literature* (U of Chicago P, 1953)

Leslie Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (OUP, 1960; 1966).

D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (1923).

E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (1927).

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010）.
その他、教室で提示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント
「評価基準」： レポーター時の発表の内容ととまり度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生間の議論を、有意義なかたちで、いかに形づくることにいかに協力できるか、模索中。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学
＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
＜主要研究業績＞ 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文学誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline and objectives】

This course attempts a historical survey of American novel through reading Richard Chase's *American Novel and Its Tradition*. Attempting an exercise in synthesis, we will read and discuss and write, and comment on each other.

LIT600B3

Fiction 演習 I B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アメリカ小説に関する古典的研究や文学史の本を複数参照しながら、歴史的に正典とされてきた小説作品を読んで議論する。小説家 (novelist) の小説 (novel) だけでなく、短篇小説 (short story) も考察の対象とする。のみならず思想史的な背景の知識を探ることも必要となる。また、小説理論についての研究書もとりあげる。

＜講義題目＞ アメリカ小説論研究

【到達目標】

アメリカ小説を歴史的・構造的に理解し、作品読解の力が身についている。後期（秋学期）の具体的目標として、アメリカ小説に則して——

- (1) 視点の概念を理解している。
- (2) 語りの枠構造を理解している。
- (3) 自然主義の意義を理解している。
- (4) 語りの技法を理解している。
- (5) 「意識の流れ」について知識を持っている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本年度はアメリカ小説論の古典である Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (OUP, 1957) を中心にして、チェイスの議論を読み、とりあげられた作品を読み、あわせて議論を進める形式をとる。レポーター制だが、レポーター以外も作品と批評を読んで積極的に議論に参加することが求められる。同時に小説の諸相について短い講義をおこなって小説論の理解を深める。

良いコメントや発見された問題は積み重ねていき、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期		
回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション： American fiction のリアリズム	南北戦争と小説のリアリズム
第 2 回	Samuel Clemens	国際 (international) テーマのはじまり
第 3 回	Mark Twain (1)	<i>Adventures of Huckleberry Finn</i>
第 4 回	Mark Twain (2)	American vernacular と小説の語り
第 5 回	William Dean Howells	<i>The Rise of Silas Rappaport</i>
第 6 回	Henry James (1)	視点の問題
第 7 回	Henry James (2)	<i>The Portrait of a Lady</i> と幽霊小説
第 8 回	Henry James (3)	ホーソーンの <i>The Marble Faun</i> とロマンスの限界
第 9 回	Frank Norris	アメリカの自然主義 (1)
第 10 回	Stephen Crane	アメリカの自然主義 (2)
第 11 回	F. Scott Fitzgerald	<i>The Great Gatsby</i>
第 12 回	William Faulkner (1)	<i>The Sound and the Fury</i> (1)
第 13 回	William Faulkner (2)	<i>The Sound and the Fury</i> (2)
第 14 回	Willa Cather —— 「家具を取り払った小説」	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

辞書などを駆使した予習、ならびに参考論文・研究書・アメリカ文学作品の自主的な読み。標準的な予習・復習時間は合計 4 時間位。

【テキスト（教科書）】

Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*.

Henry James, *The Portrait of a Lady*.

Frank Norris, *McTeague*.

Stephen Crane, *The Red Badge of Courage*.

F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*.

William Faulkner, *The Sound and the Fury*.

【参考書】

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (OUP, 1957).

Charles Feidelson, *Symbolism and American Literature* (U of Chicago P, 1953)

Leslie Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (OUP, 1960; 1966).

D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (1923).

E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (1927).

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010）.

その他、教室で提示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント
「評価基準」： レポーター時の発表の内容とまとまり度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生間の議論を、有意義なカタチで、いかに形づくることにいかに協力できるか、思案中。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学
＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法
＜主要研究業績＞ 「疑似科学と科学の境」(八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67. 「エドガー・アラン・ポー「アッシャー家の没落」(竹内理矢・山本洋平編『深まりゆくアメリカ文学——源流と展開』ミネルヴァ書房、2021) 58-59. 「「ペレナイシイ」とポーと男女の病——三分説の視点からの覚書」(『英文学誌』 63, 2021) 97-127.

【Outline and objectives】

This course attempts a historical survey of American novel through reading Richard Chase's *American Novel and Its Tradition*. Attempting an exercise in synthesis, we will read and discuss and write, and comment on each other.

HIS500B4

日本史学研究 I

小倉 慈司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『類聚三代格』から検討する日本古代史。『類聚三代格』を題材に古代法制史料を独力で読解できるようにし、大学院生にふさわしい研究能力・論文執筆能力を身につける。

【到達目標】

古代法制史料を独力で読解できるようにする。文字の異同も含めた本文検討ができるようにする。史料をもとに先行研究を把握し、自ら課題を発掘して研究を進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古代史の基本的な法制史料である『類聚三代格』を一点ずつ取り上げ、読解を行ない当該史料の歴史的意義や先行研究、問題点について報告する。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。なお、授業は原則、対面授業でおこなう予定であるが、状況に応じ、参加者と相談の上、オンライン授業に切り替えることがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	『類聚三代格』の研究史	ガイダンス
第 2 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 弘仁 11 年 12 月 26 日太政官符	左記史料の検討
第 3 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 仁寿 3 年 5 月 25 日太政官符	左記史料の検討
第 4 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 貞観 4 年 6 月 5 日太政官符	左記史料の検討
第 5 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 承和元年 2 月 3 日太政官符	左記史料の検討
第 6 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 延喜 2 年 3 月 13 日太政官符	左記史料の検討
第 7 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 大同 4 年 9 月 16 日太政官符	左記史料の検討
第 8 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 元慶 3 年 12 月 4 日太政官符	左記史料の検討
第 9 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 天長 6 年 6 月 22 日太政官符	左記史料の検討

- 第10回『類聚三代格』巻 左記史料の検討
15(12 巻本巻 9) 霊亀
3 年 5 月 11 日太政官
符
- 第11回『類聚三代格』巻 左記史料の検討
15(12 巻本巻 9) 弘仁
7 年 11 月 4 日太政官
符
- 第12回『類聚三代格』巻 左記史料の検討
15(12 巻本巻 9) 慶雲
3 年 9 月 20 日勅
- 第13回『類聚三代格』巻 左記史料の検討
15(12 巻本巻 9) 天長
2 年 10 月 20 日太政
官符
- 第14回『類聚三代格』巻 左記史料の検討
15(12 巻本巻 9) 延喜
2 年 3 月 13 日太政官
符

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、次回の授業範囲を予習する。特に発表担当者は担当史料の読解や問題点を調べ、レジュメを作成する。本授業の準備時間は平均して毎回4時間以上を標準とし、復習時間は毎回1時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

新訂増補国史大系『類聚三代格』前篇（吉川弘文館）

【参考書】

尊経閣善本影印集成『類聚三代格』1～3（八木書店 2005 年）
米田雄介編『類聚三代格総索引』（高科書店 1991 年）
（神道大系『類聚三代格』（神道大系編纂会 1993 年））
（関見監修『狩野文庫本類聚三代格』（吉川弘文館 1989 年））
ジャパナレッジ等の活用は必須。
大修館『大漢和辞典』も参照することが望ましい。
他、参考文献は適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

配分：平常点（50％）および発表内容（50％）
評価基準：授業参加と発表における取り組み、史料の理解度

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本古代史、史料学
<研究テーマ> 古代神祇祭祀制度、延喜式、禁裏公家文庫研究など
<主要研究業績>
（共著）天皇の歴史 09『天皇と宗教』（講談社 2011 年）
「高松宮家伝来禁裏本」の形成過程』『国立歴史民俗博物館研究報告』
第 178 集（2013 年）
「本朝皇胤紹運録」写本の基礎的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』
第 163 集（2011 年）

【Outline and objectives】

This course aims to help students acquire the necessary skills and knowledge needed to conduct studies on the ancient history of Japan. We will study "Ruiju-sandaiyaku".

HIS500B4

日本史学研究Ⅱ

及川 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の 16 世紀末～17 世紀初頭は城郭建設の時代である。当該期の城郭建設に関する大名間もしくは大名と家臣の間で取り交わされた書状を中心に読解し、当時の政治・社会の在り方について考える。

【到達目標】

16～17 世紀の日本史を考えるうえで、書状の読解は重要な要素であるが、難しい点の一つは、書状には基本的に日付のみで年次が記されないことにある。書状の年次を確定することは、その内容を正確に把握するうえで必要不可欠であり、一方で書状の年次を確定するためには、その内容を正確に把握しなければならない。本授業では書状を中心として 16～17 世紀の史料読解の基礎的な技術を獲得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回は教員側で史料読解の方法を例示する。その後は担当者を決めて、担当史料の内容解釈・解説をしてもらい、参加者全員で討論する。教員側からは関連史料などを提示し解説する。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。
なお、授業は ZOOM を用いて行う。新型コロナウイルス感染症の状況が劇的に改善した場合は対面授業に戻す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業方法と使用テキストに関する説明。
第 2 回	名古屋城建設に関する史料を読む ①	教員による史料読解の例示
第 3 回	名古屋城建設に関する史料を読む ②	教員による史料読解の例示
第 4 回	名古屋城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 5 回	名古屋城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 6 回	大坂城建設に関する史料を読む ①	担当者による報告と討論
第 7 回	大坂城建設に関する史料を読む ②	担当者による報告と討論
第 8 回	大坂城建設に関する史料を読む ③	報告者による報告と討論
第 9 回	大坂城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 10 回	江戸城建設に関する史料を読む ①	担当者による報告と討論
第 11 回	江戸城建設に関する史料を読む ②	担当者による報告と討論
第 12 回	江戸城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 13 回	江戸城建設に関する史料を読む ④	報告者による報告と討論
第 14 回	まとめ—書状から読み解く時代性	第 13 回までの全体の内容について討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

報告担当者は、担当史料を読解し、その年次・内容について十分に調査検討することが求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

教科書は用いず、テキストはプリントを配布する。

【参考書】

『大日本史料』第十二編之一～六十二

『佐賀県史料集成』一～三〇

『佐賀県近世史料』第一編・第二編

『大日本近世史料』細川家史料

『出水叢書 綿考輯録』一～四

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での担当箇所への報告と授業への参加度）により評価する。（100%）

【学生の意見等からの気づき】

関連史料なども使いながら、中近世の政治・社会が具体的にイメージできるようにしたい。また実践を通じて史料読解の方法が身に着くようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

ZOOM を利用できるインターネット環境。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルス感染症流行の状況により、ZOOM を用いて実施する。

URL は学習支援システムの当該授業のページで通知する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本中・近世史

＜研究テーマ＞

中世・近世の都市・流通史研究、中近世移行期の社会経済変動の研究

＜主要研究業績＞

論文「現場監督する大名―多久家文書にみる公儀普請―」小宮木代良編『近世前期の公儀軍役負担と大名家―佐賀藩多久家文書を読みなおす―』（岩田書院、2019 年）

論文「旅行者と通行証―関所通過のメカニズム―」高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世―史料の機能、日本とヨーロッパ―』（東京大学出版会、2017 年）

編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告 2015-3、2016 年

論文「中世の戦争と商人」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学 5 戦争と平和』竹林舎、2014 年）

論文「町の経済―算用帳にみる京都の人的結合―」（高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市―史料の魅力、日本とヨーロッパ―』東京大学出版会、2009 年）

論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝保鎮夫編『寺院・検断・徳政―戦国時代の寺院史料を読む―』山川出版社、2004 年）

【Outline and objectives】

From the end of the 16th century to the beginning of the 17th century, Japan entered the era of castle construction. Read mainly the letters regarding the construction of the castle during that period, and think about the state of politics and society at that time.

HIS500B4

日本史学原典研究 I

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代後期に編纂された公家の歴史書である『百練抄』を講読する。中世の漢文史料を訓読し、内容を深く理解する力を養成する。『百練抄』のうち、平安時代後期の部分を取り上げ、本文を訓読・現代語訳し、内容を理解する。その際、同時代の公家日記である『玉葉』『吉記』『明月記』、鎌倉幕府の『吾妻鏡』さらには『平家物語』などの史料や先行研究を参照し、当該記事に関する史実について議論する。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

講読・研究発表や議論、レポート執筆を通じて、中世の国家・政治や社会について研究する方法、研究成果を公表する方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、ハイフレックス授業形式で行ないます。対面授業をオンラインでもリアルタイムで配信します。皆さんの都合に合わせて、教室での対面授業か、自宅等でのオンライン授業かを選択してください。

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	『百練抄』とは	履修のガイダンス
第 2 回	『百練抄』講読（1）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 3 回	『百練抄』講読（2）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 4 回	論文批評（1）	報告と議論
第 5 回	『百練抄』講読（3）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 6 回	『百練抄』講読（4）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 7 回	研究発表（1）	報告と議論
第 8 回	『百練抄』講読（5）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 9 回	『百練抄』講読（6）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 10 回	論文批評（1）	報告と議論
第 11 回	『百練抄』講読（7）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 12 回	『百練抄』講読（8）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 13 回	研究発表（2）	報告と議論
第 14 回	『百練抄』と公家の日記	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読する記事について予習しておく。担当者は担当範囲を読解し、関係する史料や研究論文を収集し、レジュメを用意する。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 日本紀略（後篇）百鍊抄』（吉川弘文館、2007年）

講読する部分のコピーを配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Read the medieval Chinese texts and train the ability to understand the contents deeply.

HIS500B4

日本史学原典研究Ⅱ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代後期に編纂された公家の歴史書である『百鍊抄』を講読する。中世の漢文史料を訓読し、内容を深く理解する力を養成する。春学期に引き続き『百鍊抄』のうち、鎌倉時代前期の部分を取り上げ、本文を訓読・現代語訳し、内容を理解する。その際、同時代の公家日記である『玉葉』『吉記』『明月記』『玉葉』、鎌倉幕府の『吾妻鏡』さらには古文書などの史料や先行研究を参照し、当該記事に関する史実について議論する。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

講読・研究発表や議論、レポート執筆を通じて、中世の国家・政治や社会について研究する方法、研究成果を公表する方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、ハイフレックス授業形式で行ないます。対面授業をオンラインでもリアルタイムで配信します。皆さんの都合に合わせて、教室での対面授業か、自宅等でのオンライン授業かを選択してください。

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	『百鍊抄』とは	履修のガイダンス
第2回	『百鍊抄』講読（1）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第3回	『百鍊抄』講読（2）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『百鍊抄』講読（3）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第6回	『百鍊抄』講読（4）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『百鍊抄』講読（5）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第9回	『百鍊抄』講読（6）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『百鍊抄』講読（7）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第12回	『百鍊抄』講読（8）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	『百鍊抄』と公家の日記	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読する記事について予習しておく。担当者は担当範囲を読解し、関係する史料や研究論文を収集し、レジュメを用意する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 日本紀略（後篇）百鍊抄』（吉川弘文館、2007年）

講読する部分のコピーを配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%に合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Read the medieval Chinese texts and train the ability to understand the contents deeply.

HIS500B4

日本古代史特殊研究Ⅰ

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第3回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第4回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第5回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第6回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第7回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第8回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第9回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第10回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第11回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。

第12回	武芸関係史料の検討 (儀式書・法制史料)	武芸に関わる政務・儀式について 儀式書・法制史料から検討します
第13回	武芸関係史料の検討 (古記録・編年史料)	同じく古記録・編年史料から検討 します。
第14回	武芸関係史料の検討 (儀式・政務次第の整理)	それらの政務・儀式の内容・次第 を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「古代の馬の生産と地域社会」（『歴史評論』839 2020年）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）
「正倉院文書と古代史料学」（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本古代史特殊研究Ⅱ

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討 (儀式書・法制史料)	仏事に関わる政務・儀式について 儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討 (古記録・編年史料)	同じく古記録・編年史料から検討 します。
第4回	仏事関係史料の検討 (儀式・政務次第の整理)	それらの政務・儀式の内容・次第 を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の 歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷 を整理し、歴史的性質を検討しま す。
第6回	神事関係史料の検討 (儀式書・法制史料)	神事に関わる政務・儀式について 儀式書・法制史料から検討します
第7回	神事関係史料の検討 (古記録・編年史料)	同じく古記録・編年史料から検討 します。
第8回	神事関係史料の検討 (儀式・政務次第の整理)	それらの政務・儀式の内容・次第 を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の 歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷 を整理し、歴史的性質を検討しま す。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検 討（儀式書・法制史 料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式につ いて儀式書・法制史料から検討し ます。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検 討（古記録・編年史 料）	同じく古記録・編年史料から検討 します。

第 12 回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 13 回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 14 回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第 1・2・3 編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編 3』山梨県、2001 年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編 1』2004 年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（1001%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019 年
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018 年）
「正倉院文書と古代史料学」（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016 年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本中世史特殊研究 I

末柄 豊

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明 4 年（1472）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	概要の説明、分担箇所の決定
第 2 回	輪読 1	担当者の報告、質疑応答、解説
第 3 回	輪読 2	担当者の報告、質疑応答、解説
第 4 回	輪読 3	担当者の報告、質疑応答、解説
第 5 回	輪読 4	担当者の報告、質疑応答、解説
第 6 回	輪読 5	担当者の報告、質疑応答、解説
第 7 回	輪読 6	担当者の報告、質疑応答、解説
第 8 回	輪読 7	担当者の報告、質疑応答、解説
第 9 回	輪読 8	担当者の報告、質疑応答、解説
第 10 回	輪読 9	担当者の報告、質疑応答、解説
第 11 回	輪読 10	担当者の報告、質疑応答、解説
第 12 回	輪読 11	担当者の報告、質疑応答、解説
第 13 回	輪読 12	担当者の報告、質疑応答、解説
第 14 回	輪読 13	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのももちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松園斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011 年）の 12 章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史
＜研究テーマ＞室町時代の政治史・文化史・史料論
＜主要研究業績＞
『戦国時代の天皇（日本史リブレット 82）』（山川出版社、2018 年）
「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世 3、2014 年）
「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230 号、2012 年）

【Outline and objectives】
Diary of the Muromachi period

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅱ

末柄 豊

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明4年（1472）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第2回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読14	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのももちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松岡齊編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>室町時代の政治史・文化史・史料論

<主要研究業績>

『戦国時代の天皇（日本史リブレット82）』（山川出版社、2018年）

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【Outline and objectives】
Diary of the Muromachi period

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅲ

仁平 義孝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西園寺公衡の日記『公衡公記』を講読し、鎌倉時代後期の政治や社会について考察する。

【到達目標】

中世記録史料の読解力や、鎌倉時代の政治・社会、とくに公家社会に関する研究に必要な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Zoomを使用したオンライン授業。Zoom ミーティングの情報などは学習支援システムで連絡する。

授業は受講生による輪番報告を中心に進め、報告に対する質疑・討論を通して条文の理解を深めていきたい。今年度は正和4年(1315)5月1日条から講読する。報告者は、担当条文から読み取った事柄について詳細に報告し、その報告内容に関して参加者全員で討論する。報告者はレジュメを作成して、報告前に学習支援システムを通じて提出すること。提出方法などの詳細は、初回授業時に指示する。提出されたレジュメに対するフィードバックは、報告時に行う。また、受講生の個人研究発表の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方法の説明、分担の決定
第2回	史料講読1	担当者の報告、質疑・討論
第3回	史料講読2	担当者の報告、質疑・討論
第4回	史料講読3	担当者の報告、質疑・討論
第5回	史料講読4	担当者の報告、質疑・討論
第6回	研究発表1	個人研究の発表
第7回	史料講読5	担当者の報告、質疑・討論
第8回	史料講読6	担当者の報告、質疑・討論
第9回	史料講読7	担当者の報告、質疑・討論
第10回	研究発表2	個人研究の発表
第11回	史料講読8	担当者の報告、質疑・討論
第12回	史料講読9	担当者の報告、質疑・討論
第13回	史料講読10	担当者の報告、質疑・討論
第14回	まとめ	春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
担当条文について詳細に調べ、関連史料や先行研究などを精査して十全な準備をする。

【テキスト（教科書）】

『公衡公記』（史料纂集）

【参考書】

授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし

【学生が準備すべき機器他】

Zoomにて受講できる環境を整える。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞鎌倉時代政治史

＜主要研究業績＞「執権政治期の幕政運営について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45 集、1992 年）

「鎌倉幕府発給文書にみえる年号裏書について」（中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003 年）

「執権時頼・長時期の幕政運営について」（『法政史学』79 号、2013 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to research the society in the later Kamakura period by reading a diary of Saionji Kinshira.

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅳ

仁平 義孝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西園寺公衡の日記『公衡公記』を講読し、鎌倉時代後期の政治や社会について考察する。

【到達目標】

中世記録史料の読解力や、鎌倉時代の政治・社会、とくに公家社会に関する研究に必要な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Zoom を使用したオンライン授業。Zoom ミーティングの情報などは学習支援システムで連絡する。

授業は受講生による輪番報告を中心に進め、報告に対する質疑・討論を通して条文の理解を深めていきたい。春学期に講読した条文に続けて読み進めていく。報告者は、担当条文から読み取った事柄について詳細に報告し、その報告内容に関して参加者全員で討論する。報告者はレジュメを作成して、報告前に学習支援システムを通じて提出すること。提出方法などの詳細は、初回授業時に指示する。提出されたレジュメに対するフィードバックは、報告時に行う。また、受講生の個人研究発表の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	史料講読 1	担当者の報告、質疑・討論
第 2 回	史料講読 2	担当者の報告、質疑・討論
第 3 回	史料講読 3	担当者の報告、質疑・討論
第 4 回	史料講読 4	担当者の報告、質疑・討論
第 5 回	研究発表 1	個人研究の発表
第 6 回	史料講読 5	担当者の報告、質疑・討論
第 7 回	史料講読 6	担当者の報告、質疑・討論
第 8 回	史料講読 7	担当者の報告、質疑・討論
第 9 回	史料講読 8	担当者の報告、質疑・討論
第 10 回	研究発表 2	個人研究の発表
第 11 回	史料講読 9	担当者の報告、質疑・討論
第 12 回	史料講読 10	担当者の報告、質疑・討論
第 13 回	史料講読 11	担当者の報告、質疑・討論
第 14 回	まとめ	一年間のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
担当条文について詳細に調べ、関連史料や先行研究などを精査して十全な準備をする。

【テキスト（教科書）】

『公衡公記』（史料纂集）

【参考書】

授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし

【学生が準備すべき機器他】

Zoom にて受講できる環境を整える。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞鎌倉時代政治史

＜主要研究業績＞「執権政治期の幕政運営について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45 集、1992 年）

「鎌倉幕府発給文書にみえる年号裏書について」（中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003 年）

「執権時頼・長時期の幕政運営について」（『法政史学』79 号、2013 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to research the society in the later Kamakura period by reading a diary of Saionji Kinshira.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅰ

落合 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究の諸問題。各人の研究テーマ、関心に即しながら、近世史の問題点を摘出し検討する。

受講生は、自分の関心から何を明らかにすべきかを考え、その学問的意味を理解することを目指す。

【到達目標】

各人の研究で何をやりたいかを明らかにする。報告を期待するが、難しい場合、論文購読を行うようにする。

受講生は、批判的に論文が読めるようになること、また、自身の研究が如何なる研究史に位置づけられるかを明確にしたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式はブレンド型で行う。1 回目は対面で実施するので、その時に計画を報告する。

講義は基本的に報告とそれに対する議論とする。可能であれば合宿も考えたいが、それは、受講生と相談の上、決める。

課題や発表に対するフィードバックは授業内で講評として実施する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テーマの紹介	Introduction of a theme
第 2 回	中近世移行期を考える。	Time during the modernized world medieval
第 3 回	徳川政権	Tokugawa political power
第 4 回	近世前期論	The early modern period first term is considered.
第 5 回	新井白石の政治	Arai Hakuseki's politics
第 6 回	享保改革	Tokugawa Yoshimune's politics
第 7 回	田沼時代	Tanuma's politics
第 8 回	寛政改革	Matudaira Sadanobu's politics
第 9 回	天保改革	Mizuno Tadakuni's politics
第 10 回	近世後期の社会	Society in the modern period latter period
第 11 回	幕末社会論	Society in the early modern period last years
第 12 回	明治維新期	Meiji restoration period
第 13 回	近世社会論	I think about the early modern period.
第 14 回	まとめ	Summary

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告は事前に当てるので、その準備を行う。もちろん、論文を読んだり、史料を読んだうえでのぞまなければならない。報告担当者でない場合でも、当該テーマについて、事前に予習しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてその都度指示する。

【参考書】

必要に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

各回に課せられた報告内容と議論の質（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

単位を目的とするのであれば、履修しないで欲しい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【日本社会経済史】

「近世後期、広島藩の経済政策思想」『日本経済思想史研究』17、2017 年

【日本金融史】

「戦後直後の中小企業金融論議」(『青山経済論叢』68 - 4、2017 年)

【近世社会論】

「二か領用水の展開と水争い」中央大学人文科学研究所編『地域史研究の今日的課題』（中央大学出版会、2018 年 3 月）

【日本経済思想史】

『国益思想の源流』（同成社、2016 年）

【Outline and objectives】

Miscellaneous problems of early modern history study.It's based on each person's research subject and interest.The problem of a modern history study is made clear on it.A member of a class thinks what to do clearly from the interest.And I aim to understand its scientific point.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅱ

落合 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究の諸問題。各人の研究テーマ、関心に即しながら、近世史の問題点を摘出し検討する。
受講生は、自分の関心から何を明らかにすべきかを考え、その学問的意味を理解することを目指したい。

【到達目標】

各人の研究で何をやりたいかを明らかにする。報告を期待するが、難しい場合、論文購読を行うようにする。
受講生は、批判的に論文が読めるようになること、また、自身の研究が如何なる研究史に位置づけられるかを明確にしたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式はブレンド型で行う。1 回目は対面で実施するので、その時に計画を報告する。
講義は基本的に報告とそれに対する議論とする。可能であれば合宿も考えたいが、それは、受講生と相談の上、決める。
課題や発表に対するフィードバックは授業内で講評として実施する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テーマの紹介	Introduction of a theme
第 2 回	兵農分離	The dissociation of the soldier and the farmer
第 3 回	鎖国と海禁	National isolation and sea prohibition
第 4 回	飢饉	Famine
第 5 回	国益	National interests
第 6 回	徳川政権論	Tokugawa political power
第 7 回	貨幣と紙幣	Money and bill
第 8 回	実学	Practical science
第 9 回	砂糖業史	Sugar industry history
第 10 回	塩業史	Salt industry history
第 11 回	都市打毀し	House destruction
第 12 回	農兵	Farmer's soldier
第 13 回	大久保利通	Okubo Toshimichi
第 14 回	まとめ	Summary

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告は事前に当てるので、その準備を行う。もちろん、論文を読んだり、史料を読んだうえでのぞまなければならない。報告担当者でない場合でも、当該テーマについて、事前に予習しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてその都度指示する。

【参考書】

必要に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

各回に課せられた報告内容と議論の質（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

単位を目的とするのであれば、履修しないで欲しい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【日本社会経済史】

「近世後期、広島藩の経済政策思想」『日本経済思想史研究』17、2017 年

【日本金融史】

「戦後直後の中小企業金融論議」(『青山経済論叢』68 - 4、2017 年)

【近世社会論】

「二か領用水の展開と水争い」中央大学人文科学研究部編『地域史研究の今日的課題』(中央大学出版会、2018 年 3 月)

【日本経済思想史】

『国益思想の源流』(同成社、2016 年)

【Outline and objectives】

Miscellaneous problems of early modern history study.It's based on each person's research subject and interest.The problem of a modern history study is made clear on it.A member of a class thinks what to do clearly from the interest.And I aim to understand its scientific point.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅲ

西沢 淳男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】

日本近世史社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。授業はオンライン授業で行います。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配信し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第 2 回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義
第 3 回	「豊田友直日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第 4 回	「豊田友直日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第 5 回	「豊田友直日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第 6 回	「豊田友直日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第 7 回	「豊田友直日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第 8 回	「豊田友直日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第 9 回	「豊田友直日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第 10 回	「豊田友直日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第 11 回	「豊田友直日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第 12 回	「豊田友直日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第 13 回	「豊田友直日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第 14 回	「豊田友直日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1 (岩田書院、2019 年)7,000 円。コピー対応で問題ありません。購入希望の場合は、教員より 3 割引で購入できます。

【参考書】

西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015 年)920 円。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の報告と討論参加 (50 %)、レポート (30 %)、平常点 (20 %)

【学生の意見等からの気づき】

より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【担当教員の専門分野等】

https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline and objectives】

This course introduces reading a diary of Gundai who was a local administrative official of Edo Bakufu and learning about the local history, customs, folklore, prices, weather, flora and fauna, civil administration, administration, family, mountain village and fishing village life of Hida country controlled by Gundai by reading personal diary to students taking this course.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅳ

西沢 淳男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】

日本近世史社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。授業はオンライン授業で行います。フィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配信し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第 2 回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義 新規受講者がいない場合は講読とします。
第 3 回	「豊田友直日記」1	日記の講読と質疑・応答
第 4 回	「豊田友直日記」2	日記の講読と質疑・応答
第 5 回	「豊田友直日記」3	日記の講読と質疑・応答
第 6 回	「豊田友直日記」4	日記の講読と質疑・応答
第 7 回	「豊田友直日記」5	日記の講読と質疑・応答
第 8 回	「豊田友直日記」6	日記の講読と質疑・応答
第 9 回	「豊田友直日記」7	日記の講読と質疑・応答
第 10 回	「豊田友直日記」8	日記の講読と質疑・応答
第 11 回	「豊田友直日記」9	日記の講読と質疑・応答
第 12 回	「豊田友直日記」10	日記の講読と質疑・応答
第 13 回	「豊田友直日記」11	日記の講読と質疑・応答
第 14 回	「豊田友直日記」12	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1 (岩田書院、2019 年)7,000 円。コピー対応で問題ありません。購入希望の場合は、教員より 3 割引で購入できます。

【参考書】

西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015 年)920 円。

その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の報告と討論参加 (50 %)、レポート (30 %)、平常点 (20 %)

【学生の意見等からの気づき】

より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【担当教員の専門分野等】

https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline and objectives】

This course introduces reading a diary of Gundai who was a local administrative official of Edo Bakufu and learning about the local history, customs, folklore, prices, weather, flora and fauna, civil administration, administration, family, mountain village and fishing village life of Hida country controlled by Gundai by reading personal diary to students taking this course.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅰ

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業の概要：日本近現代史研究に関する活字史料およびくずし字史料を通して、日本近現代政治史に関する幅広い知識と理解を深める。
・目的：日本近現代史研究に関する活字史料およびくずし字史料の読解力を高めること。それらの史料を論文作成に応用する能力を養成し、高めること。史料に基づいて歴史像を再構成し、ディスカッションする能力を養成し、高めること。

【到達目標】

到達目標：1) 一次史料（原文書）の調査・収集に関するスキルを身につけること。2) 一次史料の読解力を高めること。3) 一次史料を論文に引用することができるようになること。4) 一次史料に基づいて先行研究の評価・批判ができるようになること。5) 一次史料に基づいてプレゼンテーションができるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・進め方：講義形式。
・方法：史料プリントを配布し、受講生に音読させ、字句の意味を説明させたり、内容理解を発言させたり、記された事象を解釈させたり、史料全体の意味を論じさせたり、能動的な学習を促しつつ双方向的な授業運営を行う。教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策として、ZOOM を利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	草書体史料の読解 (1)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (1)
第 3 回	草書体史料の読解 (2)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (2)
第 4 回	草書体史料の読解 (3)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (3)
第 5 回	草書体史料の読解 (4)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (4)
第 6 回	草書体史料の読解 (5)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (5)
第 7 回	草書体史料の読解 (6)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (6)
第 8 回	草書体史料の読解 (7)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (7)
第 9 回	草書体史料の読解 (8)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (8)

発行日：2021/5/1

第10回	草書体史料の読解 (9)	国立国会図書館憲政資料室所蔵 「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読(9)
第11回	草書体史料の読解 (10)	国立国会図書館憲政資料室所蔵 「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読(10)
第12回	草書体史料の読解 (11)	国立国会図書館憲政資料室所蔵 「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読(11)
第13回	草書体史料の読解 (12)	国立国会図書館憲政資料室所蔵 「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読(12)
第14回	まとめ	授業総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・準備学習：くずし字辞典・漢和辞典・国語辞典などを使って史料の釈文を作成し、読めるようにしておくこと。
- ・復習：授業配布プリントを読み直すこと。下記「参考書」欄記載のウェブサイトを活用して知識を増やし、理解を深めること。
- ・本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。史料プリントを配布する（学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに添付ファイル形式でアップロードするので、受講生各自、ダウンロードすること）。

【参考書】

佐々木隆『日本の歴史 21 明治人の力量』（講談社）
伊藤之雄『日本の歴史 22 政党政治と天皇』（講談社）
有馬 学『日本の歴史 23 帝国の昭和』（講談社）
季武嘉也『日本の時代史 24 大正社会と改造の潮流』（吉川弘文館）
アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館のウェブサイトにおける関連コラム

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 100 %。
- ・特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

史料プリントに基づく学生の授業内ショートプレゼンテーションの時間を毎回設定するように努める。

【学生が準備すべき機器他】

- ・学習支援システムを利用することができる IT 機器。
- ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

- ・「日本近代史特殊研究Ⅱ」（秋学期）との継続履修を強く推奨する。
- ・学部生の履修可能科目である。
- ・授業に関する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや「授業内掲示板」サイトで通知する。
- ・担当教員への直接連絡は、メールで行うこと。そのメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）

『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This course has three main points. The first point is to study old documents, through handouts, written in cursive style in the prewar period by bureaucrats or political leaders. The second one is to study how to utilize those documents in an academic thesis. The third is to obtain and enhance the skill of an academic discussion on the topics of the Japanese modern history.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅱ

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業の概要：日本近現代史研究に関する活字史料およびくずし字史料を通して、日本近現代政治史に関する幅広い知識と理解を深める。
 ・目的：日本近現代史研究に関する活字史料およびくずし字史料の読解力を高めること。それらの史料を論文作成に応用する能力を養成し、高めること。史料に基づいて歴史像を再構成し、ディスカッションする能力を養成し、高めること。

【到達目標】

到達目標：1) 一次史料（原文書）の調査・収集に関するスキルを身につけること。2) 一次史料の読解力を高めること。3) 一次史料を論文に引用することができるようになること。4) 一次史料に基づいて先行研究の評価・批判ができるようになること。5) 一次史料に基づいてプレゼンテーションができるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・進め方：講義形式。
 ・方法：史料プリントを配布し、受講生に音読させ、字句の意味を説明させたり、内容理解を発言させたり、記された事象を解釈させたり、史料全体の意味を論じさせたり、能動的な学習を促しつつ双方向的な授業運営を行う。教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策として、ZOOMを利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業全体の概要紹介
第2回	草書体史料の読解 (1)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (1)
第3回	草書体史料の読解 (2)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (2)
第4回	草書体史料の読解 (3)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (3)
第5回	草書体史料の読解 (4)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (4)
第6回	草書体史料の読解 (5)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (5)
第7回	草書体史料の読解 (6)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (6)
第8回	草書体史料の読解 (7)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (7)
第9回	草書体史料の読解 (8)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (8)

第10回	草書体史料の読解 (9)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (9)
第11回	草書体史料の読解 (10)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (10)
第12回	草書体史料の読解 (11)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (11)
第13回	草書体史料の読解 (12)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「松方正義関係文書」所収伊藤博文書翰講読 (12)
第14回	まとめ	授業総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・準備学習：くずし字辞典・漢和辞典・国語辞典などを使って史料の釈文を作成し、読めるようにしておくこと。
 ・復習：授業配布プリントを読み直すこと。下記「参考書」欄記載のウェブサイトを活用して知識を増やし、理解を深めること。
 ・本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。史料プリントを配布する（学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに添付ファイル形式でアップロードするので、受講生各自、ダウンロードすること）。

【参考書】

佐々木隆『日本の歴史 21 明治人の力量』（講談社）
 伊藤之雄『日本の歴史 22 政党政治と天皇』（講談社）
 有馬 学『日本の歴史 23 帝国の昭和』（講談社）
 季武嘉也『日本の時代史 24 大正社会と改造の潮流』（吉川弘文館）
 アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館のウェブサイトにおける関連コラム

【成績評価の方法と基準】

・平常点 100 %。
 ・特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

史料プリントに基づく学生の授業内ショートプレゼンテーションの時間を毎回設定するように努める。

【学生が準備すべき機器他】

・学習支援システムを利用することができる IT 機器。
 ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

・「日本近代史特殊研究Ⅱ」（秋学期）との継続履修を強く推奨する。
 ・学部生の履修可能科目である。
 ・授業に関する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや「授業内掲示板」サイトで通知する。
 ・担当教員への直接連絡は、メールで行うこと。そのメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程
 <主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）
 「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）
 『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）
 『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）
 「河野広中」吉川弘文館（2009 年）、
 「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）
 「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）
 「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）
 『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）
 『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）
 「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）
 「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）
 『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This course has three main points. The first point is to study old documents, through handouts, written in cursive style in the prewar period by bureaucrats or political leaders. The second one is to study how to utilize those documents in an academic thesis. The third is to obtain and enhance the skill of an academic discussion on the topics of the Japanese modern history.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅲ

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

洪沢栄一は、91年の生涯に約500の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。

近代日本の社会構造について、洪沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】

近代日本の社会構造について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・この授業は Zoom を使用し、オンライン授業（リアルタイム配信型）にて実施します。

――

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	洪沢栄一	洪沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（1）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（2）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（1）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（2）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（1）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（2）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（1）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（2）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（1）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（2）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（1）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（2）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜、レジュメ・資料を配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度とテーマを連続しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007 年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011 年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市 3 インフラ』東京大学出版会、2010 年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅳ

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

渋沢栄一は、91年の生涯に約500の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。

近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】

近代日本の社会構造について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・この授業は Zoom を使用し、オンライン授業（リアルタイム配信型）にて実施します。

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（1）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（2）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（1）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（2）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（1）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（2）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（1）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（2）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（1）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（2）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（1）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（2）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜レジュメ・資料を配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70 %）、コメント等の授業への参加度（30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度とテーマを連続しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007 年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011 年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010 年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business.

HIS500B4

日本考古学特殊研究 I

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を修得し、それを各自が保有する資料へ適用することによってその理解を深める。この過程で、考古学の課題・問題点の把握能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料にそれらの方法を適用する。修士2年の場合は、状況に応じ、課題の順番を入れ替える。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また、課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論の発展させ、課題の理解を深める。発表に対してのフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第2回	編年研究の基礎1	型式学的前提、属性の抽出と操作方法
第3回	編年研究の基礎2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第4回	編年研究の基礎3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第5回	実践的研究の検討1	モンテリウスの研究1
第6回	実践的研究の検討2	モンテリウスの研究2
第7回	実践的研究の検討3	セリエーション1
第8回	実践的研究の検討4	セリエーション2
第9回	論文の検討1	旧石器時代論文
第10回	論文の検討2	縄文時代論文
第11回	論文の検討3	弥生時代・他論文
第12回	資料の検討1	旧石器時代資料
第13回	資料の検討2	縄文時代資料
第14回	資料の検討3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

テキストの熟読、課題に関連する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 The Theory and Practice of Archaeology. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.

上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 Archaeology: Theories, Methods, and Practice. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50％）とレポート（50％）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼をおいて検討する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本旧石器時代、縄文時代

＜研究テーマ＞

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

＜主要研究業績＞

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年
「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年
「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社
「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』Ⅱ 2009年
新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年
「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年
「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018年
「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020年

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of the chronology in the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to make chronology of their own archaeological materials.

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅱ

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。春期パターンソンのテキストを継続して使う。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理・方法の理解を深め、それを各自が保有する資料に適用することによって実践的な能力の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。

最初の数回の授業は、パターンソンのテキストの読解を行う。修士2年の場合、状況に応じて課題の順番を入れ替える。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論を発展させ、課題内容の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	春学期の課題・方法の整理
第2回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第3回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第4回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第5回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第6回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第7回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第8回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第9回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第10回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第11回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第12回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第13回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第14回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50％）とレポート（50％）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年
「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年
「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社
「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』II 2009年 新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年
「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年
「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018年
「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020年

【Outline and objectives】

This course deals with the chronological and typological methods and theories of the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to understand many kinds of the methods and theories, and apply them to the participants' materials.

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅲ

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術を高める必要がある。本講義では考古学資料から情報を引き出すための方法論について、資料調査（整理・修復）・講読と発表を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

1）考古学資料の整理・修復等の方法に関する実践・検討

2）考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行くかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の概要把握	対象資料の選定と資料整理に関わる予備調査
第3回	資料整理の実践（1）	土器の拓本
第4回	資料整理の実践（2）	土器の断面実測
第5回	資料整理の実践（3）	写真撮影
第6回	資料整理の実践（4）	事実記載
第7回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第1章）講読（1）
第8回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第1章）講読（2）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第2章）講読（1）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第2章）講読（2）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第3章）講読（1）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第3章）講読（2）
第13回	考古学資料の見学	博物館等での考古学資料の見学と解説
第14回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

第1回 自己の実習計画の立案

第 2 回 選定した考古学資料に関する学習と整理方針のまとめ
 第 3 回～第 6 回 実習内容の復習 用具・用材の特性の理解
 第 7 回～第 12 回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
 第 13 回 見学対象資料についての事前学習
 第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
 個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）

討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30 %（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅳ

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術も高める必要がある。本講義では考古学資料から得られる情報を表現するための方法について、資料実測・文献講読と発表等を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

1）考古学資料の整理・作図の方法に関する実践・検討

2）考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	実習資料の検討	対象資料の概要把握と整理方法の検討
第 3 回	資料整理の実践（1）	土器の実測
第 4 回	資料整理の実践（2）	石器の実測
第 5 回	資料整理の実践（3）	資料のトレース
第 6 回	資料整理の実践（4）	デジタルトレースの概要と実技
第 7 回	資料整理の実践（5）	挿図・図版の構成
第 8 回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第 4 章）講読（1）
第 9 回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第 4 章）講読（2）
第 10 回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第 5 章）講読（1）
第 11 回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第 5 章）講読（2）
第 12 回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第 6 章）講読（1）
第 13 回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第 6 章）講読（2）
第 14 回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の実習計画の立案

第 2 回 発掘調査報告書等からみる報告計画のまとめ

第3回～第4回 実習内容の復習
 第5回～第7回 トレースの復習と図化の完了
 第8回～第13回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
 第14回 成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
 個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
 討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末リポート（成果報告） 30 %（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

HIS600B4

日本古代史演習Ⅰ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。春学期は第 22 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。

事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 22 条還公田条講読（1）	田令第 22 条還公田条集解 A 部分の論理展開
第 3 回	田令集解第 22 条還公田条講読（2）	田令第 22 条還公田条集解古記による大宝令の復原
第 4 回	田令集解第 22 条還公田条講読（3）	田令第 22 条還公田条の意味
第 5 回	田令集解第 23 条班田条講読（1）	田令第 23 条班田条集解 A 部分の論理展開
第 6 回	田令集解第 23 条班田条講読（2）	田令第 23 条班田条集解 B 部分の論理展開
第 7 回	田令集解第 23 条班田条講読（3）	田令第 23 条班田条集解 C 部分の論理展開
第 8 回	田令集解第 23 条班田条講読（4）	田令第 23 条班田条集解 D 部分の論理展開
第 9 回	田令集解第 23 条班田条講読（5）	田令第 23 条班田条集解古記による大宝令の復原
第 10 回	田令集解第 23 条班田条講読（6）	校田とは何か
第 11 回	田令集解第 24 条授田条講読（1）	田令集解第 24 条授田条集解 A 部分の論理展開
第 12 回	田令集解第 24 条授田条講読（2）	田令集解第 24 条授田条集解古記による大宝令の復原

- 第 13 回 田令集解第 24 条授田 課役とは何か
条講読 (3)
- 第 14 回 班田収授法のまとめ 半年間の講読を踏まえて班田制と
(1) は何かについて意見交換を行う。
修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に 2 時間程度、聴講者の準備学習は標準的に 1 時間程度を要する。復習はそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館 蔵 貴重典籍叢書〈歴史篇〉 第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する（75 % 相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25 % 相当）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008 年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007 年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B4

日本古代史演習Ⅱ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけてもらいます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は第 25 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 25 条交錯条講読 (1)	田令集解第 25 条交錯条解 A 部分の論理展開 1
第 3 回	田令集解第 25 条交錯条講読 (2)	田令集解第 25 条交錯条解 A 部分の論理展開 2
第 4 回	田令集解第 25 条交錯条講読 (3)	田令集解第 25 条交錯条解 A 部分の論理展開 3
第 5 回	田令集解第 25 条交錯条講読 (4)	田令集解第 25 条交錯条解 B 部分の論理展開 1
第 6 回	田令集解第 25 条交錯条講読 (5)	田令集解第 25 条交錯条解 B 部分の論理展開 2
第 7 回	田令集解第 25 条交錯条講読 (6)	田令集解第 25 条交錯条解 B 部分の論理展開 3
第 8 回	田令集解第 26 条官人百姓条講読 (1)	田令集解第 26 条官人百姓条 A 部分の論理展開 1
第 9 回	田令集解第 26 条官人百姓条講読 (2)	田令集解第 26 条官人百姓条 A 部分の論理展開 2
第 10 回	田令集解第 26 条官人百姓条講読 (3)	田令集解第 26 条官人百姓条 A 部分の論理展開 3
第 11 回	田令集解第 26 条官人百姓条講読 (4)	百姓の字義をめぐって
第 12 回	田令集解第 26 条官人百姓条講読 (5)	官人の字義をめぐって

- 第13回 田令集解第26条官人 自院の土地所有をめぐる
百姓条講読(6)
- 第14回 班田収授法のまとめ 半年間の講読を踏まえて班田制の
(2) 多様な側面について意見交換を行
う。修論執筆に資する内容にす
る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に2時間程度、聴講者の準備学習は標準的に1時間程度を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書〈歴史篇〉第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する(75%相当)。また討論においては自主的な発言の内容を重視する(25%相当)。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界ー城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等めぐって』『古文書研究』66
2007年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後ーFileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position. We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B4

日本古代史演習Ⅲ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公刊された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較史ながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。
海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。本年度は田令集解第22条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（1）	日本田令第22条相当条文の比定と配列
第3回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（2）	日本田令第22条相当条文の読解
第4回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（3）	日本田令第22条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第5回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（1）	日本田令第23条相当条文の比定と配列
第6回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（2）	日本田令第23条相当条文の読解（1）
第7回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（3）	日本田令第23条相当条文の読解（2）
第8回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（4）	日本田令第21条相当条文と武徳令・開元7年令との比較（1）
第9回	天聖田令（日本令第223条相当）講読（5）	日本田令第21条相当条文と武徳令・開元7年令との比較（2）
第10回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（6）	日本田令第23条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論完成にむけての報告会を兼ねます。
第11回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（1）	日本田令第24条相当条文の比定と配列

第12回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（2）	日本田令第24条相当条文の読解
第13回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（3）	日本田令第24条相当条文と武徳令・開元7年令との比較
第14回	秋学期の総括	唐代の田種と吐魯番文書にみえる田制実例との比較を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、海外史料である天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70%）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66
2007年、『「在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録」のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position. We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

HIS600B4

日本古代史演習Ⅳ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公刊された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較史ながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。
海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は田令集解第25条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期		
回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（1）	日本田令第25条相当条文の比定と配列1
第3回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（2）	日本田令第25条相当条文の比定と配列2
第4回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（3）	日本田令第25条相当条文の読解1
第5回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（4）	日本田令第25条相当条文の読解2
第6回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（5）	日本田令第25条相当条文の読解3
第7回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（6）	日本田令第25条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第8回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（1）	日本田令第26条相当条文と比定と配列1
第9回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（2）	日本田令第26条相当条文と比定と配列2
第10回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（3）	日本田令第26条相当条文の読解1
第11回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（4）	日本田令第26条相当条文の読解2
第12回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（5）	日本田令第26条相当条文の読解3。

- 第13回 天聖田令（日本令第26条相当）講読（6） 日本田令第26条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
- 第14回 秋学期の総括 日唐の寺田の違いについて比較史的に総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、海外史料である天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70%）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66
2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position. We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

HIS600B4

日本中世史演習Ⅰ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三条西実隆の日記『実隆公記』の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。中世の日記を読解する力を養成するとともに、中世の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

中世の漢文史料を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。戦国時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、ハイフレックス授業形式で行ないます。対面授業をオンラインでもリアルタイムで配信します。皆さんの都合に合わせて、教室での対面授業か、自宅等でのオンライン授業かを選択してください。演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	『実隆公記』とは	履修のガイダンス
第2回	『実隆公記』講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	『実隆公記』講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『実隆公記』講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	『実隆公記』講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『実隆公記』講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	『実隆公記』講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『実隆公記』講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	『実隆公記』講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究報告（2）	報告と議論
第14回	戦国時代の貴族と京都	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意する。発表後、レジュメを修正して全員に配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講読する部分のコピーを配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Read the medieval Chinese texts and train the ability to understand the contents deeply.

HIS600B4

日本中世史演習Ⅱ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中世文書の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。古文書を読解する力を養成するとともに、中世の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

中世の漢文史料を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、ハイフレックス授業形式で行ないます。対面授業をオンラインでもリアルタイムで配信します。皆さんの都合に合わせて、教室での対面授業か、自宅等でのオンライン授業かを選択してください。

演習形式で進める。担当者が担当範囲についての発表レジュメを用意して発表した後、発表内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	中世の古文書	履修のガイダンス
第2回	古文書の講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	古文書の講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	古文書の講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	古文書の講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	古文書の講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	古文書の講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	古文書の講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	古文書の講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	中世社会と古文書	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意する。発表後、レジュメを修正して全員に配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講読する部分のコピーを配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Read the medieval Chinese texts and train the ability to understand the contents deeply.

HIS600B4

日本近世史演習Ⅰ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①研究論文の位置を理解することができる。
- ②史料から議論を立ち上げることができる。
- ③学会発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（5）	学会発表をめざして
第7回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（2）	論文構成の方法
第9回	論文講読（3）	史料批判
第10回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（1）	今後の方針
第13回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation.

HIS600B4

日本近世史演習Ⅱ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

論文を執筆することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックとする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation.

HIS600B4

日本近代史演習Ⅰ

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業の概要：日本近現代史に関する受講生の研究発表と質疑応答を行う。
・目的：担当教員の講評や受講生同士の質疑応答を通して受講生各自の研究を改善・向上させる。また、学術的コミュニケーションを身につける。

【到達目標】

到達目標：1) 日本近現代史に関する研究を行う能力・スキルを養成し高めること。2) 日本近現代史に関する現在の研究動向を把握すること。3) 研究発表（プレゼンテーション）および質疑応答（ディスカッション）を行うことにより学術的なコミュニケーション能力を養成し高めること。4) 日本近現代史研究に関する幅広い知識と深い理解を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・進め方：演習形式である。
・方法：毎回、発表形式で行われる。受講生各自の研究関心に基づく発表を原則とする。発表者は発表内容に関するプリントを作成し、参加者に配布した上で、発表を行う。そののち、教員を含む参加者全員の講評および質疑応答を行う。教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策として、ZOOMを利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第2回	自由研究発表（1）	発表者の研究関心に基づき論文を予定している発表と質疑応答。
第3回	新刊書あるいは最新論文の批評（1）	発表者の研究関心に基づく最新の研究成果に対する論評と質疑応答。
第4回	史料紹介（1）	発表者の研究関心に基づき取り組んでいる史料の概要紹介と質疑応答。
第5回	歴史系展示批評（1）	発表者の研究関心に基づき見学した最近の展示への論評と質疑応答。
第6回	学界動向紹介（1）	発表者の研究関心に基づき参加した研究大会等の概要紹介と質疑応答。
第7回	自由研究発表（2）	発表者の研究関心に基づき論文を予定している発表と質疑応答。
第8回	新刊書あるいは最新論文の批評（2）	発表者の研究関心に基づく最新の研究成果に対する論評と質疑応答。
第9回	史料紹介（2）	発表者の研究関心に基づき取り組んでいる史料の概要紹介と質疑応答。
第10回	歴史系展示批評（2）	発表者の研究関心に基づき見学した最近の展示への論評と質疑応答。

- 第 11 回 学界動向紹介（2） 発表者の研究関心に基づき参加した研究大会等の概要紹介と質疑応答。
- 第 12 回 自由研究発表（3） 発表者の研究関心に基づき論文を予定している発表と質疑応答。
- 第 13 回 新刊書あるいは最新論文の批評（3） 発表者の研究関心に基づく最新の研究成果に対する論評と質疑応答。
- 第 14 回 まとめ 授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・準備学習：発表者の予告に基づき発表テーマに関連する文献や、学術的なウェブサイトで公開されている関連記事を読んでおくこと。
- ・復習：配布されたプリントを読み直すこと。下記「参考書」欄のウェブサイトの公開史料や関連コラムを読み、理解を深め、定着させること。学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに毎回授業後掲示される授業要点を読み、同システムの「一般ディスカッション」サイトを活用すること。
- ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。発表する受講生が自作のプリントを配布する。

【参考書】

- ・『日本近代の歴史』（吉川弘文館）全 6 巻。
- ・アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館のウェブサイトにおける公開史料と関連コラム。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 % とする。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

講評（コメント）の中に、学術性を有する配布資料の作成要領や学術的コミュニケーションとしての質疑応答のあり方についても指摘し、注意を喚起する発言を含める。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムを利用することが出来る IT 機器。
- ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

- ・「日本近代史演習Ⅱ」（秋学期）との継続履修を強く推奨する。
- ・学習支援システムを授業運営上フル活用するので、頻繁に閲覧し、見落としがないようにすること。
- ・発表者は事前に配布プリントを添付ファイル形式で学習支援システムの「一般ディスカッション」サイトにアップロードし、受講生が各自ダウンロードできるようにしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近現代政治史

＜研究テーマ＞

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

＜主要研究業績＞

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）

『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This course has two main points. The first point is that every student has to make his/her presentation based on his/her research of the Japanese modern history and on a lately published book or the exhibition of a museum related to the Japanese modern history. The second one is that every student has to be a participant of the discussion among classmates and enhance the skill of an academic discussion on the topics about the Japanese modern history. Through this course every student can improve his/her ability and skill of writing good theses.

HIS600B4

日本近代史演習Ⅱ

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業の概要：日本近現代史に関する受講生の研究発表と質疑応答を行う。

・目的：担当教員の講評や受講生同士の質疑応答を通して受講生各自の研究を改善・向上させる。また、学術的コミュニケーションを身につける。

【到達目標】

到達目標：1) 日本近現代史に関する研究を行う能力・スキルを養成し高めること。2) 日本近現代史に関する現在の研究動向を把握すること。3) 研究発表（プレゼンテーション）および質疑応答（ディスカッション）を行うことにより学術的なコミュニケーション能力を養成し高めること。4) 日本近現代史研究に関する幅広い知識と深い理解を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・進め方：演習形式である。

・方法：毎回、発表形式で行われる。受講生各自の研究関心に基づく発表を原則とする。発表者は発表内容に関するプリントを作成し、参加者に配布した上で、発表を行う。そののち、教員を含む参加者全員の講評および質疑応答を行う。教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策として、**ZOOM** を利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第2回	自由研究発表（1）	発表者の研究関心に基づき論文化を予定している発表と質疑応答。
第3回	新刊書あるいは最新論文の批評（1）	発表者の研究関心に基づく最新の研究成果に対する論評と質疑応答。
第4回	史料紹介（1）	発表者の研究関心に基づき取り組んでいる史料の概要紹介と質疑応答。
第5回	歴史系展示批評（1）	発表者の研究関心に基づき見学した最近の展示への論評と質疑応答。
第6回	学界動向紹介（1）	発表者の研究関心に基づき参加した研究大会等の概要紹介と質疑応答。
第7回	自由研究発表（2）	発表者の研究関心に基づき論文化を予定している発表と質疑応答。
第8回	新刊書あるいは最新論文の批評（2）	発表者の研究関心に基づく最新の研究成果に対する論評と質疑応答。
第9回	史料紹介（2）	発表者の研究関心に基づき取り組んでいる史料の概要紹介と質疑応答。
第10回	歴史系展示批評（2）	発表者の研究関心に基づき見学した最近の展示への論評と質疑応答。

第11回	学界動向紹介（2）	発表者の研究関心に基づき参加した研究大会等の概要紹介と質疑応答。
第12回	自由研究発表（3）	発表者の研究関心に基づき論文化を予定している発表と質疑応答。
第13回	新刊書あるいは最新論文の批評（3）	発表者の研究関心に基づく最新の研究成果に対する論評と質疑応答。
第14回	まとめ	授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・準備学習：発表者の予告に基づき発表テーマに関連する文献や、学術的なウェブサイトで公開されている関連記事を読んでおくこと。

・復習：配布されたプリントを読み直すこと。下記「参考書」欄のウェブサイトの公開史料や関連コラムを読み、理解を深め、定着させること。学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに毎回授業後掲示される授業要点を読み、同システムの「一般ディスカッション」サイトを活用すること。

・本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。発表する受講生が自作のプリントを配布する。

【参考書】

・『日本近代の歴史』（吉川弘文館）全6巻。

・アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館のウェブサイトにおける公開史料と関連コラム。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 % とする。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

講評（コメント）の中に、学術性を有する配布資料の作成要領や学術的コミュニケーションとしての質疑応答のあり方についても指摘し、注意を喚起する発言を含める。

【学生が準備すべき機器他】

・授業支援システムを利用することが出来る IT 機器。

・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

・「日本近代史演習Ⅰ」（春学期）との継続履修を強く推奨する。

・学習支援システムを授業運営上フル活用するので、頻繁に閲覧し、見落としがないようにすること。

・発表者は事前に配布プリントを添付ファイル形式で学習支援システムの「一般ディスカッション」サイトにアップロードし、受講生が各自ダウンロードできるようにしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本近現代政治史
＜研究テーマ＞
日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程
＜主要研究業績＞
「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）
「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）
『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）
『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）
『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、
「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）
「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）
「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）
「棚橋小虎日記・昭和 20 年」（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）
「棚橋小虎日記・昭和 17 年」（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）
「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）
「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）
「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）

『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This course has two main points. The first point is that every student has to make his/her presentation based on his/her research of the Japanese modern history and on lately published book or the exhibition of a museum related to the Japanese modern history. The second one is that every student has to be a participant of the discussion among classmates and enhance the skill of an academic discussion on the topics about the Japanese modern history. Through this course every student can improve his/her ability and skill of writing good theses.

HIS600B4

日本考古学演習 I

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

考古学資料を用いた実践研究の成果を受講者各々が発表し、内容について検討する。受講者は研究論文の体裁と形式をふまえたうえで、具体的な考古学資料を提示するとともに考古学の方法にもとづいて発表内容を作成する。実際の発表においてはレジュメをまとめ、研究の詳細を報告するものとする。次いで全員での討論に移り、発表者の研究目的と問題の所在がいかなる場所にあり、設定された問題が適切であるかどうかを検討し、さらに取り扱う資料群の全体が議論にふさわしいものであるのか、提示された方法が適切であるか、考察および結論が正しいか等についても検討する。

また、本授業では各自の研究に関連する課題論文の講読も合わせて行うこととする。受講者は研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

これらの後に、自らの論文の構想発表指導を行う。

上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 3 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第 4 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 5 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）

第 9 回 論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回 論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 11 回 論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 12 回 論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 13 回 論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 14 回 成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の学習計画の立案

第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）

個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早淵川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

HIS600B4

日本考古学演習Ⅱ

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

考古学の分野で自らの論文を執筆する受講者に対して、論文構想の提示、研究上の最重要文献の講読、実践研究の報告などを行う。まず、自らの論文構想を提示し、具体的な資料検討状況についても報告し、それにもとづいた討議を行う。

次いで、今後の研究の核となる先行研究の成果について論文をもとに報告し、研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

さらに、受講者それぞれの研究状況を具体的に報告し、討議を行う。上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 3 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 4 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 5 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 11 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）

第 12 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 13 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 14 回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の学習計画の立案

第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）

個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—樺田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午玉山遺跡」『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

HIS500B4

日本古文書学研究Ⅰ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教科書を基に日本古文書学を体系的に学ぶとともに、古文書読解の基礎的な能力を身につける。日本古代（奈良時代から平安時代）に成立した代表的な古文書の様式・機能について理解し、読解力を養成することを目的とする。

【到達目標】

法令に規定された公式様文書、公式様文書から派生した公家様文書の機能と様式について理解することができる。教科書に取り上げられた古文書や関連する古文書を正確に訓読し、内容の概要を読み取ることができる。また、簡単な崩し字を解説することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、対面授業形式で行ないます。

講義形式とし、教科書の内容に沿いつつ、配布プリントを基に進める。古文書について解説した後、参加者に訓読してもらう。また、古文書写真のプリントを配布し、参加者に翻刻してもらう機会を設ける。漢文訓読の基礎知識を有することを前提に進める。引き続き秋学期に「日本古文書学研究Ⅱ」を履修することが望ましい。授業の初めに、前回の授業で訓読した古文書をいくつか取り上げ、フィードバックを行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	古文書学とは	履修のガイダンス
第2回	検非違使別当宣	古文書に親しむ
第3回	紛失状	古文書に親しむ
第4回	公式様文書 宣命・詔	様式・機能の解説と訓読
第5回	公式様文書 符（1）	様式・機能の解説と訓読
第6回	公式様文書 符（2）	様式・機能の解説と訓読
第7回	公式様文書 移	様式・機能の解説と訓読
第8回	公式様文書 牒	様式・機能の解説と訓読
第9回	公式様文書 解	様式・機能の解説と訓読
第10回	公式様文書 宣旨	様式・機能の解説と訓読
第11回	公家様文書 官宣旨	様式・機能の解説と訓読
第12回	公家様文書 院庁下文	様式・機能の解説と訓読
第13回	公家様文書 摂関家政 所下文	様式・機能の解説と訓読
第14回	公式様文書と公家様文書	授業内容の総括（試験）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書を用いて予習し、配布プリントを用いて復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

佐藤進一『新版 古文書学入門』（法政大学出版局、2003年）

【参考書】

日本歴史学会編『概説古文書学 古代・中世編』（吉川弘文館、1983年）

久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く1 中世文書の流れ』（山川出版社、2006年）

菊米一志『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』（吉川弘文館、2015年）

【成績評価の方法と基準】

学期末試験の点数100%で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

次回取り上げる文書を予告する。

【Outline and objectives】

Learn Japanese archaeological studies systematically and acquire the basic ability of reading old documents.

HIS500B4

日本古文書学研究Ⅱ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「日本古文書学Ⅰ」から継続し、教科書を基に日本古文書学を体系的に学ぶとともに、古文書読解の基礎的な能力を身につける。日本中世（平安時代から室町時代）に成立した代表的な古文書の様式・機能について理解し、読解力を養成することを目的とする。

【到達目標】

公家様文書および公家様文書から派生した武家様文書の機能と様式について理解することができる。教科書に取り上げられた古文書や関連する古文書を正確に訓読し、内容の概要を読み取ることができる。また、簡単な崩し字を解説することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、対面授業形式で行ないます。

教科書の内容に沿って、配布プリントを基に講義を進める。古文書について解説した後、参加者に訓読してもらう。また、古文書写真のプリントを配布し、参加者に翻刻してもらう機会を設ける。漢文訓読の基礎知識を有することを前提に進める。春学期に「日本古文書学研究Ⅰ」を履修することを必須とする。授業の初めに、前回の授業で訓読した古文書をいくつか取り上げ、フィードバックを行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	古文書学とは	履修のガイダンス
第2回	公家様文書 国司序宣	様式・機能の解説と訓読
第3回	公家様文書 綸旨	様式・機能の解説と訓読
第4回	公家様文書 院宣	様式・機能の解説と訓読
第5回	公家様文書 御教書	様式・機能の解説と訓読
第6回	武家様文書 下文	様式・機能の解説と訓読
第7回	武家様文書 下文	様式・機能の解説と訓読
第8回	武家様文書 下知状	様式・機能の解説と訓読
第9回	武家様文書 下知状	様式・機能の解説と訓読
第10回	武家様文書 鎌倉幕府の御教書	様式・機能の解説と訓読
第11回	武家様文書 室町幕府の奉書	様式・機能の解説と訓読
第12回	武家様文書 室町幕府の直状	様式・機能の解説と訓読
第13回	起請文・売券・譲状	様式・機能の解説と訓読
第14回	公家様文書と武家様文書	授業内容の総括（試験）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書を用いて予習し、配布プリントを用いて復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

佐藤進一『新版 古文書学入門』（法政大学出版局、2003年）

【参考書】

日本歴史学会編『概説古文書学 古代・中世編』（吉川弘文館、1983年）

久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く1 中世文書の流れ』（山川出版社、2006年）

苅米一志『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』（吉川弘文館、2015年）

【成績評価の方法と基準】

学期末試験の点数100%で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

次回取り上げる文書を予告する。

【Outline and objectives】

Learn Japanese archaeological studies systematically and acquire the basic ability of reading old documents.

HIS500B4

日本古代史研究Ⅰ

春名 宏昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「平安時代と貴族社会」と題して講義します。平安前期の改革の時代の国家・政治のあり方、貴族たちのあり方を理解するようつとめます。

【到達目標】

平安時代の貴族社会のあり方の把握を目指します。基礎的な知識を得、その上でそれぞれの事象に興味を持ってアプローチし、国家・政治の本質を理解できる能力を身につけることができます。平安時代の官僚のあり方は現代の日本にも通じるオンタイムの問題ですから、現代の政治が抱える問題点も理解できるようになるでしょう。そのような視点から課題レポートにも取り組んで下さい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

平安前期の改革の時代から平安中期の王朝貴族の時代への移行期間に関しては、嵯峨天皇・藤原良房・藤原基経・宇多天皇に注目して国家・政治のあり方の変化を見ていきます。この授業では、一般啓蒙書に書かれることのない貴族たちのあり方を見ていきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組む必要があります。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。課題を課した場合は、次の授業でコメントします。本科目は対面授業で行いますが、参加が難しい場合はハイフレックス授業を検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要の説明
第2回	〈時代〉の変化	ワンランク上の国家を目指して
第3回	官人たちの変化	良吏政治のスタート＝大同元年勅
第4回	天皇の性格変化	桓武天皇と平城天皇
第5回	良吏政治の展開	嵯峨朝への政策継承
第6回	良吏政治の実践	弘仁三年勅から天長元年官符へ
第7回	承和の変の前奏	淳和朝・仁明朝の政治状況
第8回	承和の変	母橘嘉智子と娘正子内親王
第9回	貴族の時代へ	文徳朝・清和朝の様相
第10回	応天門の変	安定の時代、摂関政治へ
第11回	源氏と藤原氏	源氏の左大臣と藤原氏の右大臣
第12回	藤原基経の国政運営	清和天皇の悲嘆と陽成天皇の廃位
第13回	阿衡の紛議	昌泰の変へ
第14回	平安前期という時代	平安時代史概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平安時代に関して問題意識を持つには、その前提として平安前期・中期の知識が必要です。奈良時代から平安時代への推移についても概括的な理解は必要です。それらを得るためには、どれでもいいですから参考書（該当巻）を読んでみましょう。ただし、著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。

この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということ述べます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。また、講義の対象とする嵯峨朝の前の時代を知るには私の『平城天皇』（吉川弘文館人物叢書）を、延喜年間以降については『岩波講座日本歴史』第5巻の「摂関時代と政治構造」を読んで下さい。この講義の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

春名宏昭『〈謀反〉の古代史』（吉川弘文館）。
授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波書店の『シリーズ日本の古代史』（新書）、『岩波講座日本歴史』の該当巻。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで評価します。
基準は平常点30%、レポート70%です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作して下さい。

【Outline and objectives】

This lecture is attended under the heading of “The Heian period and the aristocracy”. We try to understand how should be the nation and aristocrats in the former term of the Heian period when the political innovation was extensively carried out.

HIS500B4

日本古代史研究Ⅱ

春名 宏昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「続日本紀の史料学」と題して講義を行ないます。八世紀の日本は、当時先進の文化を誇った中国のような国家建設を目標に掲げて邁進していました。『続日本紀』を題材に史料への取り組み方を学び、日本古代史における歴史の流れ、あり方の把握を目指します。

【到達目標】

続日本紀の記事を数点取り上げ、史料へのアプローチの仕方を知ることができる。この授業を通して、奈良時代の基礎的な理解を身につけ、他の史料に対してもつねに興味を持って臨めるようになり、それを論理的に解析し正しい理解に到達できる技能を身につけられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

取り上げた記事を糸口に、その背後にある問題点を探り出し検証していきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

課題を課した場合は、次の授業でコメントします。本科目は対面授業で行いますが、参加が難しい場合はハイフレックス授業を検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の概要の説明
第2回	天平二年の太政官奏（1）	続日本紀の3つのテキスト
第3回	天平二年の太政官奏（2）	天平二年六月甲寅朔条の紹介
第4回	天平二年の太政官奏（3）	関連史料の検討
第5回	税司主鑑（1）	大宝令施行直後の地方政治
第6回	税司主鑑（2）	大宝二年二月乙丑条の紹介
第7回	税司主鑑（3）	関連史料の検討
第8回	皇太妃と中宮職（1）	大宝元年七月壬辰条の紹介
第9回	皇太妃と中宮職（2）	天皇のキサキ（妃と夫人・嬪）
第10回	慶雲元年の公廩銀（1）	慶雲元年七月庚子条の紹介
第11回	慶雲元年の公廩銀（2）	関連史料の検討
第12回	衛士の代易（1）	和銅四年九月甲戌条の紹介
第13回	衛士の代易（2）	関連史料の検討
第14回	奈良時代史概観	これまでの授業内容をふまえて奈良時代を概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

取り上げた記事が含む意味を理解するためには、それぞれの記事に現れた事象の時代背景を知る必要があります。そのためには、どれでもいいですから参考書（奈良時代該当巻）を読んでみて下さい。著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。

この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということ述べていきます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。
この講義の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

岩波書店・新日本古典文学大系『続日本紀』が基本です。他に一般啓蒙書として、中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波新書『シリーズ日本の古代史』、『岩波講座日本歴史』の該当巻があります。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで評価します。基準は平常点30%、レポート70%です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史

〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制

〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』（吉川弘文館）

『平城天皇』（吉川弘文館）

『皇位継承 歴史をふりかえり変化を見定める』（共著、山川出版社）

『〈謀反〉の古代史 平安朝の政治改革』（吉川弘文館）

【Outline and objectives】

This lecture is attended under the heading of "The world of Shokunihongi". In the way of taking up some descriptions of Shokunihongi, we were to learn how to grapple with problems in order to understand how Japan changed in the ancient regime.

HIS500B4

日本古代史料研究

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

正倉院文書と木簡を中心に、日本古代史料研究の課題、古代史料の特徴、歴史情報抽出の方法を学び考えます。史料のどこに注目したらよいかを知ることで、史料の背後の世界へと視野が広がります。日本古代史を研究するための材料となる史料は、他の時代に比べて数が限定されている印象が強く、新たな検討の余地は少ないように思われがちです。しかし、周知の史料でありながら十全な検討がなされていないものや、研究の進展に応じた再調査・再検討が必要となっている史料が意外に多くあります。

何よりも、正倉院文書や木簡など、当時の実務の現場で用いられた書面が大量に残されていることが、日本古代史料の特質です。現代に引きつけていけば、お役所の内部書類が外部に流出したようなものです。まさに「宝の山」といってよい史料群であり、分析されることを待っている情報がまだまだたくさんあります。

これらをどのように分析するのか。記載内容（文字）を読み取るだけではなく、史料を「もの」として分析することで、古代史料学・古文書学の新たな知見が蓄積されて来ています。より多くの情報を史料から抽出することで、古代史研究の地平をさらに広げていくことが期待できます。本講義では、古代史料の「すがた・かたち」を検討しながら、史料の分類と分析の視角・手法を考え、古代史研究の新たな視野を展望します。

【到達目標】

古代史料研究の課題について理解する。

古代史料の特徴を知り、歴史情報を抽出するための視角と分析手法を身につける。

史料に対する目のつけどころ、問いかけ方を学ぶことで、史料の持つ豊かで多様な情報に近づくことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は講義形式（対面授業）で進めます。

配布した史料プリントを使いながら、史料の分析とはどういう作業であるのか、その結果何がわかるのか、具体的な例を挙げながら解説します。

3回程度の講義のまとめりとともに、小レポートを提出してもらうことで、理解と認識の深まりを確かめながら進めます。小レポートについては、下記も参照してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義のねらいと進め方
第2回	古代の実務文書の面白さ	正倉院文書と木簡
第3回	古代史料学の課題と視角①	古代史料の概要と史料批判
第4回	古代史料学の課題と視角②	古代史料の特徴と分析視角
第5回	古代史料学の課題と視角③	実務官司の仕事と書面
第6回	古代史料に見る情報の定着と移動①	情報の記録・伝達と〈書類学〉という考え方

第7回	古代史料に見る情報の定着と移動②	仕事に用いる文書とメモ
第8回	古代史料に見る情報の定着と移動③	仕事の進行と成長する書面
第9回	木簡と帳簿①	木簡と古代史料学の関係
第10回	木簡と帳簿②	紙の書面と木簡
第11回	木簡と帳簿③	「食口」という方法と木簡
第12回	口頭伝達と書面の関係①	書面の背後に見える口頭伝達

第13回	口頭伝達と書面の関係②	口頭伝達の記録
------	-------------	---------

第14回	口頭伝達と書面の関係③	「口状」の発見からわかった業務の実態
------	-------------	--------------------

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

配布するテキストに目を通しておいください。また、講義の内容を、自分なりに文章に整理しておくことをすすめます。参考書や、講義中に紹介した研究文献にもできるだけ目を通してください。本授業の準備・復習時間は、2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布するので、講義に必ず持参してください。教科書は使用しません。

【参考書】

栄原永遠男『正倉院文書入門』（角川学芸出版、2011年）

市川理恵『正倉院写経所文書を読みとく』（同成社、2017年）

山口英男『日本古代の地域社会と行政機構』（吉川弘文館、2019年）

山口英男『正倉院文書に見える「口状」について』（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

山口英男『写経所の機構』（犬飼隆編『古代の文字文化』竹林舎、2017年）

山口英男『正倉院文書から見た「間食」の意味について』（『正倉院文書研究』13、2013年）

東京大学史料編纂所編『日本史の森を行く』（中公新書、2014年）

山口英男『正倉院文書に見える文字の世界』（国立歴史民俗博物館他編『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』大修館書店、2014年）

正倉院文書マルチ支援（多元的解析支援）データベース SHOMUS・奈良時代大日本古文書フルテキストデータベース（東京大学史料編纂所 SHIPS データベース <http://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html>）

奈良文化財研究所 木簡庫データベース <http://mokkanko.nabunken.go.jp/en/>

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、期間中に提出してもらう複数の小レポートの内容によって行います。講義の進行に合わせて課題を出します。小レポートでは、講義の受講を前提に、講義内容の整理とその批判的論評を求めます。理解力（40%）、調査・考察力（30%）、文章力・独創性（30%）を基準に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

小レポートは、提出の翌週にコメントと評価を付して返却しますので、次のレポート作成の参考にしてください。これを繰り返すことで、文章のレベルや内容、説得力が確実にアップします。

【その他の重要事項】

インターネット等から文章を「剽窃」したレポートに対しては厳格な措置を取ります。他人の文章を盗み、あたかも自分の文章であるかのように人を欺く行為が許されないことを十分認識してください。

【Outline and objectives】

Learn research subjects on ancient historical materials in Japan, features of ancient historical documents, and the method of historical information extraction, focusing on Shosoin Document and Wooden Tablet.

HIS500B4

日本中世史研究

及川 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代人の生活はしばしば「都市的」と形容される。生活の都市化によって、われわれは都市を基軸とする社会的分業がもたらす様々な日常の便利さや快適さを享受するとともに、都市ならではの問題にも直面する。日本列島で初めてそれらを民衆レベルまで含めて体験することになったのは、中世の人々であると言ってよいだろう。本授業では、16世紀前半から17世紀前半の京都を描いた「洛中洛外図屏風」を素材として、そこに描かれるものを一つ一つ読み解きながら、中世から近世に至る都市景観の変化や、都市に住む人々の生活のあり方について考える。

【到達目標】

「洛中洛外図屏風」の読解を通じて、画像史料読解の基礎を学ぶとともに、都市に関連するトピックを中心として、日本中世・近世史の基礎的な概念や考え方を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初に「洛中洛外図屏風」に描かれている場面の読み方や調べ方を例示し、その後は担当者（受講人数によってはグループ）を決めて、担当箇所について何がどのように描かれているか、調べて分かったこと、考えたことを発表してもらい、参加者全員で討論する。併せて教員側からは関連資料を提示しながら解説（フィードバック）する。新型コロナウイルス感染症の流行が収束しない場合は、授業はZOOMを利用して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期		
回	テーマ	内容
第1回	「洛中洛外図屏風」について	ガイダンス 授業の進め方と利用史料について
第2回	「洛中洛外図屏風」歴博甲本を読む ①	下京隻（右隻）第一・二扇を読む。
第3回	「洛中洛外図屏風」歴博甲本を読む ②	下京隻（右隻）第三・四扇を読む。
第4回	「洛中洛外図屏風」歴博甲本を読む ③	下京隻（右隻）第五・六扇を読む。
第5回	「洛中洛外図屏風」歴博甲本を読む ④	上京隻（左隻）第一・二扇を読む。
第6回	「洛中洛外図屏風」歴博甲本を読む ⑤	上京隻（左隻）第三・四扇を読む。
第7回	「洛中洛外図屏風」歴博甲本を読む ⑥	上京隻（左隻）第五・六扇を読む。
第8回	小括 I	戦国期の京都の都市景観
第9回	「洛中洛外図屏風」林原本を読む ①	右隻第一～三扇を読む。
第10回	「洛中洛外図屏風」林原本を読む ②	右隻第四～六扇を読む。
第11回	「洛中洛外図屏風」林原本を読む ③	左隻第一～三扇を読む。
第12回	「洛中洛外図屏風」林原本を読む ④	左隻第四～六扇を読む。
第13回	小括 II	近世初期の京都の都市景観
第14回	まとめ	京都の変貌 中世から近世へ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当箇所について何が描かれているか、そして描かれているものに関する語彙や背景知識を十分に調査検討し、史料を読み込むことが求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

前半の「洛中洛外図屏風」歴博甲本については、国立歴史民俗博物館のウェブサイトで公開されている画像（https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_kou/rakuchu_kou_l.html）
https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_kou/rakuchu_kou_r.html）を利用し、後半の「洛中洛外図屏風」林原本については配布プリントを利用する。また適宜プリントを利用する。

【参考書】

石田尚豊監修ほか『洛中洛外図大観』小学館
京都国立博物館編『洛中洛外図 都の形像』淡交社
高橋康夫・吉田伸之ほか編『図集 日本都市史』東京大学出版会
高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市 史料の魅力、日本とヨーロッパ』東京大学出版会
笠松宏至ほか編『日本思想体系 22 中世政治社会思想 下』岩波書店
『日本都市史・建築史事典』丸善出版

【成績評価の方法と基準】

平常点60%、期末試験（またはレポート）40%で評価する。積極的な授業参加を期待する。

【学生の意見等からの気づき】

歴史学では必ずしも一つの答えが見つかるわけではないが、史料読解や論理展開にいくつかの可能性がある場合も、それらになるべく分かりやすく整理して解説したい。

【学生が準備すべき機器他】

予習・復習のためにインターネット環境が必要である。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルス感染症の流行が収束しない場合は、授業はZOOMを利用して行う。URLはHOPPIIの本授業のページに掲載する。

【Outline and objectives】

The life of modern people is often described as "urban". Through the urbanization of life, we enjoy the various conveniences and comforts of everyday, and also face the problems unique to the city. It can be said that it was the medieval people who first experienced them in the Japanese archipelago, including at the people's level. In this class, using "Rakuchu Rakugai Zu Byobu", which depicts Kyoto from the first half of the 16th century to the first half of the 17th century, as a material, while reading each one drawn there, changes in the cityscape from the Middle Ages to the early modern period, Think about the way people live in the city.

HIS500B4

日本近世史科学研究Ⅰ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究において、くずし字の読解能力を身につけていることは、研究の幅を大きく広げると同時に、学問をより深めるものとなる。本授業は、基礎的な読解能力を養成することを目的とする。あわせて基本的な近世文書の種類を覚えていってもらいたい。

【到達目標】

- ①くずし字の読解能力を身につける。
- ②基本的な近世文書の種類を覚える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習を併用するかたちをとる。古文書のコピー Hoppii にアップするので、まずは自力で読解に取り組む（教室でプリントは配布しない）。授業時に割り当てるので、学生はこれを板書し、答え合わせをする。教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	くずし字の辞典について
第2回	古文書解読入門	近世史科学講義
第3回	検地帳読解（1）	数字を覚えよう
第4回	検地帳読解（2）	単位を覚えよう
第5回	武家屋敷組合名簿読解（1）	名前を覚えよう
第6回	武家屋敷組合名簿読解（2）	通称を覚えよう
第7回	領地宛行状読解	大名家領の安堵
第8回	年貢割付状読解	年貢請求書
第9回	年貢皆済目録読解	年貢領収書
第10回	宗門人別改帳読解	江戸時代の家族
第11回	五人組帳前書読解	百姓への規制
第12回	変体仮名読解	俳句をよむ
第13回	金子借用証文読解	年貢滞納
第14回	試験とまとめ	解説とも

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に、配布された古文書のコピーを辞書を引きながら予習すること。事後には、読めなかった字を必ず復習すること。とにかく古文書をながめる時間をたくさんとること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『新編古文書解読字典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）など
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】

まずは自分で辞書をひきながら読むことが大事です。

【その他の重要事項】

学部合同科目である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関与した実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline and objectives】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

HIS500B4

日本近世史料科学研究Ⅱ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多様な近世史料の読解能力を養うことを目的とする。さまざまなくずし字を解読すると同時に、読解した史料の意味を理解することが重要となる。

【到達目標】

- ①くずし字を解読することができる。
- ②読解した史料の意味を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は日本近世史料学Ⅰを履修済みであることを前提として授業を進める。Hoppii に古文書のコピーをアップするので、これにまずは自力で読解に取り組む。授業時に答え合わせし、教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。古文書読解の中級編として、近世の行政文書のほか、書状や発句など書体の異なる史料も対象とする。なお、近世ゼミの夏合宿で撮影した古文書をテキストとすることがある。また、現物古文書の整理作業を体験することもある。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	発句読解	変体仮名
第2回	離縁状読解	三行半
第3回	触書読解（1）	ペリー来航
第4回	触書読解（2）	株仲間再興
第5回	武家文書読解（1）	御堀の管理
第6回	武家文書読解（2）	橋梁の管理
第7回	武家文書読解（3）	三方領地替（前半）
第8回	武家文書読解（4）	三方領知替（後半）
第9回	漢詩読解	七言絶句
第10回	書状読解（1）	松平容保書簡（前半）
第11回	書状読解（2）	松平容保書簡（後半）
第12回	日記読解（1）	自家年譜（前半）
第13回	日記読解（2）	自家年譜（後半）
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布された古文書のコピーを、辞書を使って自力で読むこと。事後には、必ず復習すること。多くの古文書に触れることが重要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『新編古文書解読字典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】

筆の動きをみることで、古文書読解能力向上のためのポイントです。

【その他の重要事項】

学部合同科目である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline and objectives】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

HIS500B4

日本近代史研究 I

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業の概要：日露戦争後の明治時代の政治史を学ぶ。20 世紀初頭の日露戦争での勝利を経て、世界の列強の注目する軍勢力を有することとなった大日本帝国が、経済・産業・生活などの分野における後進性の克服に努める様相を学ぶ。

・目的：1）大日本帝国の政治に関する知識を得る。2）アジア地域唯一の列強となった大日本帝国の国際社会における影響力行使と問題点に関する知識を得る。3）日本近代史研究の現状に関する情報を得る。4）大日本帝国と日本国との連続性と断絶とについて考える手がかりを得る。

【到達目標】

到達目標：1）日露戦争後の政治、とりわけ桂園体制と称される政治状況に関する知識を得る。2）当該期の経済・産業・文化・生活の発展・向上に関する知識を得る。3）そうした知識の修得を通して、今日の日本との連続性と断絶を捉え、20 世紀日本の総合的理解と 21 世紀日本の展望とを併せ持つ手がかりを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・進め方：講義形式である。

・方法：受講生の能動的な学習と双方向的な授業運営に努め、授業での配布プリントに記載された史料を受講生が音読することや、教員・受講生間の質疑応答、受講生同士のディスカッションを取り入れる。

・教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策に対応して、ZOOM を利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次回の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	帝国議会と国会	国会開設百年に関するビデオの視聴とその解説。
第 3 回	帝国議会の制度と人（1）	帝国議会に関する制度の解説。
第 4 回	帝国議会の制度と人（2）	帝国議会に関する人々の解説。
第 5 回	第 25 回帝国議会	第 25 回帝国議会の状況と争点の解説。
第 6 回	第 25 回帝国議会後の社会情勢	第 25 回帝国議会後の社会情勢の解説。
第 7 回	第 26 回帝国議会	第 26 回帝国議会の状況と争点の解説。
第 8 回	第 26 回帝国議会後の社会情勢	第 26 回帝国議会後の社会情勢の解説。
第 9 回	第 27 回帝国議会	第 27 回帝国議会の状況と争点の解説。
第 10 回	第 27 回帝国議会後の社会情勢	第 27 回帝国議会後の社会情勢の解説。
第 11 回	第 28 回帝国議会	第 28 回帝国議会の状況と争点の解説。
第 12 回	第 28 回帝国議会後の社会情勢	第 28 回帝国議会後の社会情勢の解説。

第 13 回 第 29 回帝国議会、大正時代の幕開け 第 29 回帝国議会の状況と争点の解説。大正時代の幕開けと展望の解説。

第 14 回 まとめ 授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・準備学習：学習支援システムの「授業内掲示板」サイトにテキストとなる授業プリントを添付ファイルでアップロードするので、受講生各自、授業前にダウンロードして読んでおくこと。授業テーマに関する参考文献を読んでおくこと。

・復習：授業後に授業プリントを読み直すこと。学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに記される毎回の授業の要点を読むこと。授業の中で示された参考文献を読むこと。

・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

・刊本としてのテキストは使用しない。

・授業内容をまとめたプリント（授業プリント）を学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに添付ファイルでアップロードする。

【参考書】

佐々木隆『日本の歴史 21 明治人の力量』（講談社）

小風秀雅『日本の時代史 23 アジアの帝国国家』（吉川弘文館）

飯塚一幸『日本近代の歴史 3 日清・日露戦争と帝国日本』（吉川弘文館）

宮田昌明『英米世界秩序と東アジアにおける日本』（錦正社）

アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館の各ウェブサイトにおける日本近代史関連解説コラム

【成績評価の方法と基準】

・平常点 40 %、試験 60 %（設題は到達目標に沿うものとする）。参照可。

・特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、あるいは試験を受験しない場合には、不合格の評価とする。

・新型コロナウイルス感染防止策として教室での試験ができない場合には、リポート（設題方針は試験の場合と同じ）に切り替えることもある。

【学生の意見等からの気づき】

日本近代史に関する基礎的な知識の不足を感じている受講生もいることから、授業内容の理解と定着に資する質疑応答を積極的に行い、受講生の学習の動機付けや意欲を高めるように努める。

【学生が準備すべき機器他】

・学習支援システムを利用することができる IT 機器。

・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

・学部合同科目（「日本近代史」）である。

・「日本近代史科学」（秋学期・学部合同科目、大学院科目「日本近代史研究Ⅱ」）との継続履修を強く推奨する。

・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。

・新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。

・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、頻繁に閲覧し、見落とさないようにすること。

・担当教員宛の直接連絡にはメールを利用すること。そのメールアドレスは、学習支援システムに掲載する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近現代政治史

＜研究テーマ＞

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

＜主要研究業績＞

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）
「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）
「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）
『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）
『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）
「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）
「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）
「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）
『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This course has four main points. The first point is to study the politics of Japan in the early 20th century, the period from the end of the Russo-Japanese War to the end of the Meiji Era. The second one is to study how Japan developed economy, industry, or life style in the above period as one of the Great Powers. The third is to get a basic information on the academic trends in the study of Japanese modern history. The fourth is to get clues for a comprehensive image of the 20th century Japan and a prospect on the 21st century Japan.

HIS500B4

日本近代史研究Ⅱ

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・授業の概要：史料を通して日本近代史の種々相を学ぶ。
- ・目的：和紙に毛筆・草書体で書かれた史料の読解力を養うこと。

【到達目標】

到達目標：１）日本近代史に関する幅広い知識を得る。２）日本近代史研究に関わる史料の所蔵機関や利用法に関わる知識を得ること。３）日本近代史研究に関わる史料の調査・収集に関わる知識を得ること。４）日本近代史研究に関わる史料の読解力を養うこと。５）情報・知識の調査・収集・分析・利用に関わる能力・技術を養い、高める手がかりを得ること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・進め方：講義形式である。
- ・方法：受講生の能動的な学習促進と双方向的な授業運営のために、教員と受講生間の質疑応答、受講生グループの助け合い学習による草書体文字の翻刻作業を取り入れる。新型コロナウイルス感染防止策への対応が必要な場合には、教室での対面授業を ZOOM を使って同時配信する方式を採用する。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	主な史料所蔵機関のウェブサイト	独立行政法人国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所戦史研究センター、国立国会図書館など主な史料所蔵機関のウェブサイトの説明。
第 3 回	日本近代古文書読解(1)	第 1 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 4 回	日本近代古文書読解(2)	第 2 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 5 回	日本近代古文書読解(3)	第 3 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 6 回	日本近代古文書読解(4)	第 4 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 7 回	日本近代古文書読解(5)	第 5 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 8 回	日本近代古文書読解(6)	第 6 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 9 回	日本近代古文書読解(7)	第 7 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 10 回	日本近代古文書読解(8)	第 8 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 11 回	日本近代古文書読解(9)	第 9 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 12 回	日本近代古文書読解(10)	第 10 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 13 回	日本近代古文書読解(11)	第 11 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 14 回	まとめ	授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・準備学習：学習支援システムにアップロードされる授業プリントを事前にダウンロードして読んでおくこと。
- ・復習：授業プリントを読み直すこと。授業後、学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに掲示される毎回の授業要点を読むこと。授業テーマに関するウェブサイト（国立国会図書館電子展示会、アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館など）の関連コラムを読むこと。
- ・本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- ・刊本としてのテキストは使用しない。
- ・毎回授業前に、授業の要点をまとめたプリントや史料プリント（国立国会図書館所蔵「寺内正毅関係文書」コピー版）を学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに添付ファイルでアップロードするので、受講生各自、ダウンロードすること。

【参考書】

- ・くずし字辞典
- ・『日本近代の歴史』（吉川弘文館）全6巻
- ・アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館電子展示会の各ウェブサイトにおける日本近代史関連解説コラム。

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点40%、試験60%（設題は到達目標に沿うものとする）。参照可。
- ・特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、あるいは試験を受験しない場合には、不合格の評価とする。
- ・新型コロナウイルス感染防止策として教室での試験ができない場合には、レポート（設題方針は試験の場合と同じ）に切り替えることもある。

【学生の意見等からの気づき】

日本近代史に関する基礎的な知識の不足を感じている受講生もいることから、授業内容の理解と定着に資する質疑応答を積極的に行い、受講生の学習の動機付けや意欲を高めるように努める。

【学生が準備すべき機器他】

- ・学習支援システムを利用することができるIT機器。
- ・ZOOM授業を受講することができるIT機器。

【その他の重要事項】

- ・学部合同科目（「日本近代史科学」）である。
- ・「日本近代史」（春学期・学部合同科目、大学院科目「日本近代史研究Ⅰ」）との継続履修を強く推奨する。
- ・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
- ・新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
- ・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、頻繁に閲覧し、見落とさないようにすること。
- ・担当教員宛の直接連絡にはメールを利用すること。そのメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第66号、2013年3月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第52～65号、2005～2012年）

『山県有朋関係文書』第1～3巻（山川出版社、2004～2007年）

『戸孝允関係文書』第1～4巻（東京大学出版会、2006～2009年）

『河野広中』吉川弘文館（2009年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第72号、2009年9月、同73号、2010年3月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第74号、2010年9月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第76号、2011年9月）

『棚橋小虎日記・昭和20年』（法政大学大原社会問題研究所、2009年）

『棚橋小虎日記・昭和17年』（法政大学大原社会問題研究所、2011年）
「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第761号、2011年10月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第71号、2015年10月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成30年秋の特別展躍動する明治図録』、2018年）

『棚橋小虎日記・昭和19年』（法政大学大原社会問題研究所、2019年）

【Outline and objectives】

This course has four main points. The first point is to get a basic knowledge about Japanese modern archives. The second one is to get an academic skill for reading old documents written in cursive style of Chinese characters in the Meiji era. The third is to study the Japanese modern history through reading old documents above. The fourth is to get clues for getting or improving the general skill of researching, gathering, analyzing and utilizing of information and knowledge.

CUA500B4

沖縄学入門Ⅰ

大里 知子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけた上で、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第2回	琉球・沖縄史概説	時代区分論、基礎資料・文献など
第3回	明治国家と「琉球処分」①日本国への併合	国王尚泰の冊封問題、台湾出兵と日清交渉、「琉球処分官」の派遣
第4回	明治国家と「琉球処分」②廃藩置県と日清交渉	「廃琉置県」と列強の対応、「分島・改約交渉」と琉球人の行動
第5回	明治国家と「琉球処分」③日清戦争と琉球救国運動	「琉球救国運動」と「脱清人」、日清戦争と運動の終焉
第6回	明治期の沖縄県政①明治政府による沖縄統治	「内国植民地」と初期県政
第7回	明治期の沖縄県政②「旧慣温存」とその転換	「大名県令」から「官僚県令」へ、奈良原知事による長期県政
第8回	明治期の沖縄県政③統治形態の変化と民衆の生活	「旧慣温存期」の村と民衆、宮古島における人頭税廃止運動
第9回	沖縄における近代化政策の導入①地方制度のなかの異制度	沖縄の地方制度改革、沖縄県島嶼町村制の制定
第10回	沖縄における近代化政策の導入②学校制度と日本化	近代学校制度の導入、標準語教育の開始
第11回	沖縄における近代化政策の導入③「土地整理事業」の影響	土地・租税制度の改革、「土地整理事業」
第12回	沖縄における近代化政策の導入④軍隊と民衆	徴兵制の施行と徴兵忌避
第13回	沖縄における近代化政策の導入⑤旧王府勢力と参政権	「公同会運動」、謝花昇の民権運動
第14回	「初期県政」について	沖縄の近代化政策についてまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布する

【参考書】

・沖縄県教育委員会『沖縄県史 各論編第5巻 近代』（2011）東洋企画
・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父 伊波普猷 [新訂版]』（2017）清水書院
・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %、レポート 20 % 毎回の授業への参加態度に、授業内容に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】

「入門」という科目なので、基本的な内容をベースにしているが、より専門的な議論を求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html>

【Outline and objectives】

In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.

It also the purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.

CUA500B4

沖縄学入門Ⅱ

大里 知子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。

「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけた上で、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第 2 回	近代沖縄の言論界①留学と新知識	琉球藩期の留学生、県費留学制度、沖縄青年会の設立
第 3 回	近代沖縄の言論界②新聞の発刊と言論	『琉球新報』と太田朝敷、『沖縄毎日新聞』と伊波月城
第 4 回	近代沖縄の言論界③「南島研究」の勃興	沖縄における郷土研究の興隆、柳田国男と南島研究
第 5 回	近代沖縄の言論界④沖縄の文化と「方言論争」	柳宗悦と「沖縄方言論争」
第 6 回	沖縄の移民①移民開始の背景	移民の開始と展開、移民の社会的背景
第 7 回	沖縄の移民②移民先での沖縄人	沖縄県民の移民先、南洋・南米・北米・ハワイ
第 8 回	沖縄の移民③大日本帝国の拡大と沖縄移民	「移住」と戦争、台湾・満州、東南アジア移民
第 9 回	沖縄の移民④「ソテツ地獄」と移民	「本土」への出稼ぎ、移民と家族、「世界のウチナーンチュ大会」
第 10 回	近代教育と皇民化①近代的女子教育の展開	地方改良運動と女子教育の拡充、女子青年会・婦人会
第 11 回	近代教育と皇民化②社会運動と同化	労働組合運動と教育統制、標準語励行
第 12 回	近代教育と皇民化③近代的医療制度とハンセン病	ハンセン病政策と沖縄救済運動
第 13 回	国家総動員体制下の沖縄	「ソテツ地獄」と沖縄県振興計画
第 14 回	戦時下の沖縄	近代沖縄、これまでのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】

新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画

【参考書】

・沖縄県教育委員会『沖縄県史 各論編第 5 巻 近代』（2011）東洋企画
 ・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父 伊波普猷 [新訂版]』（2017）清水書院
 ・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %、レポート 20 % 毎回の授業への参加態度に、授業内容に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】

「入門」という科目なので、基本的な内容をベースにしているが、より専門的な議論を求める学生に対して、個別に対応する工夫が必要となる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html>

【Outline and objectives】

In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.

It also the purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.

HIS600B4

東洋史学特殊研究Ⅰ

塩沢 裕仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国考古学資料の解説

【到達目標】

近年膨大な資料が提示されている中国考古学の現状を理解するとともに研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索しようとするならば必然的にその淵源たる中国古代文化を研究する必要がある。その方法としては第一に文献を理解することが求められるが、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。古代中国文化の中心地といえば河南洛陽である。本講座では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解を通して中国物質文化への理解を深めていきたいと思う。具体的には春学期は洛陽市文物管理局が編纂した『古都洛陽』を読み進めていく。春学期は三代といわれる夏・殷（商）・周を中心に報告資料の講読と考古資料の検討を行いたい。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

授業形式（対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国考古学の状況と考古学報告活用の意味
第2回	夏代の洛陽Ⅰ	夏都の変遷と二里头宮殿遺址
第3回	夏代の洛陽Ⅱ	夏代の奴隸制国家機構
第4回	夏代の洛陽Ⅲ	夏代洛陽地区の経済と科学技術
第5回	商代早期の都城—西亳Ⅰ	商湯の討夏と偃師商城遺址の発見
第6回	商代早期の都城—西亳Ⅱ	商代の奴隸制国家
第7回	商代早期の都城—西亳Ⅲ	商代洛陽地区の経済と科学技術
第8回	西周の洛陽Ⅰ	洛邑成周の造営
第9回	西周の洛陽Ⅱ	成周の所在、規模、位置付け
第10回	西周の洛陽Ⅲ	西周墓葬と車馬坑
第11回	西周の洛陽Ⅳ	成周の農業と手工業
第12回	東周の洛陽Ⅰ	東周の成立と周王室の衰退
第13回	東周の洛陽Ⅱ	東周国都の王城と成周城の建設規模
第14回	東周の洛陽Ⅲ	東周の貴族墓葬、陪葬坑、車馬坑

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで中国語を学んだことがなくとも十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

【成績評価の方法と基準】

【評価配分（％）】 発表内容：50、討論への参加姿勢：50

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理

＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。

＜主要研究業績＞

『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新67号、2010年

『関野貞大陸調査と現在Ⅰ・Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2012年、2014年

「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012年

『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年

「函谷関遺跡考証—四つの函谷関遺跡について」『東京大学東洋文化研究所紀要』169冊、2016年

「城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址」『国際シンポジウム・前近代中国における交通路と関津に関する環境史的研究』2017年

【Outline and objectives】

On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

HIS600B4

東洋史学特殊研究Ⅱ

塩沢 裕仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国考古学資料の解説

【到達目標】

近年膨大な資料が提示されている中国考古学の現状を理解するとともに研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索しようとするならば必然的にその淵源たる中国古代文化を研究する必要がある。その方法としては第一に文献を理解することが求められるが、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。古代中国文化の中心地といえば河南洛陽である。本講座では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解を通して中国物質文化への理解を深めていきたいと思う。具体的には秋学期は洛陽市文物管理局が編纂した『古都洛陽』を読み進めていく。秋学期は後漢・魏晉・北魏という日本古代とも関連の深い時代の報告資料の講読と考古資料の検討を行いたい。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

授業形式（対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	後漢の洛陽Ⅰ	後漢洛陽の規模と宮殿・苑園
第2回	後漢の洛陽Ⅱ	後漢帝陵と洛陽刑徒墓
第3回	後漢の洛陽Ⅲ	後漢洛陽の商業・経済・対外交渉
第4回	後漢の洛陽Ⅳ	後漢洛陽の科学文化
第5回	後漢の洛陽Ⅴ	嵩山の漢闕
第6回	後漢の洛陽Ⅵ	中国最古の仏教古刹白馬寺
第7回	魏晉北魏の洛陽Ⅰ	魏晉北魏の洛陽城
第8回	魏晉北魏の洛陽Ⅱ	魏晉北魏の帝陵
第9回	魏晉北魏の洛陽Ⅲ	魏晉北魏の重要墓葬
第10回	魏晉北魏の洛陽Ⅳ	洛陽の北魏石窟
第11回	隋唐の洛陽Ⅰ	隋唐洛陽城の発掘Ⅰ
第12回	隋唐の洛陽Ⅱ	隋唐洛陽城の発掘Ⅱ
第13回	隋唐の洛陽Ⅲ	隋唐洛陽城関連遺跡
第14回	隋唐の洛陽Ⅳ	隋唐の龍門石窟

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで中国語を学んだことがなくとも十分に対応ができよう。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

【成績評価の方法と基準】

【評価配分（%）】 発表内容：50、討論への参加姿勢：50

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理

＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。

＜主要研究業績＞

『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

『漢魏洛陽城の都市空間』『史潮』新67号、2010年

『関野貞大陸調査と現在Ⅰ・Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2012年、2014年

『漢魏洛陽城穀水水文考』『東洋史研究』71-2、2012年

『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年

『函谷関遺跡考証—四つの函谷関遺跡について』『東京大学東洋文化研究所紀要』169冊、2016年

『城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址』『国際シンポジウム・前近代中国における交通路と関津に関する環境史的研究』2017年

【Outline and objectives】

On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data

HIS500B4

東洋史学特殊研究Ⅲ

大島 誠二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻を用いる。前期は、「涇北商城」「西周都城」を輪読する。どのように涇北商城および西周都城が構成され成立したのか、その過程を追ひ、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

考古学資料による分析方法を身につける。
中国古代社会の成立過程を理解する。
中国古代における都市の形態と役割、発展について考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。受講者の発表によって進行する。
対面授業で実施予定。状況が悪化すればオンライン授業【リアルタイム配信型】に移行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	涇北商城の発現と発掘	「涇北商城の発現と発掘」を読み、涇北商城の発見と発掘の経緯を確認する。
第 2 回	涇北商城の布局	「涇北商城の布局」を読み、涇北商城の全体像を把握する。
第 3 回	涇北商城の城壁	「涇北商城の城壁」を読み、城壁の範囲と規模について確認する。
第 4 回	涇北商城の宮殿	「涇北商城の宮殿」を読み、宮殿区の配置と構造について理解する。
第 5 回	涇北商城年代と性質的討論①	「関于涇北商城年代と性質的討論」を読み、涇北商城の年代問題の研究史をたどりつつ年代について考察する。
第 6 回	涇北商城年代と性質的討論②	「関于涇北商城年代と性質的討論」を読み、宮殿区の建設年代について考察し、殷王朝の中で果たした役割について考察する。
第 7 回	殷王朝における都城の形態	「鄭州商城」「偃師商城」「涇北商城」「殷墟」を比較検討し、殷代の都城の構造と都市機能について考察する。
第 8 回	西周都城概述	「西周都城概述」を読み、西周王朝の都城の変遷をたどる。
第 9 回	豊鎬遺址①	「遺跡概況」を読み、豊鎬遺址の分布範囲を把握する。
第 10 回	豊鎬遺址②	「宮殿遺址」を読み、豊鎬遺址の大型建築遺跡の状況を把握する。
第 11 回	豊鎬遺址③	「墓地」を読み、豊鎬遺址の墓地の分布とその内容を把握する。
第 12 回	洛邑	「洛邑」を読み、西周時代の洛邑の痕跡について把握する。

- 第 13 回 西周時期都城特点① 「都城形態」を読み、文献史料上の記載と考古学資料の出土状況について比較検討する。
- 第 14 回 西周時期都城特点② 「都城相地与規格」を読み、西周の都城の立地と都市構造について考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
発表担当者は、参加者の理解のために、レジュメを作成してほしい。
博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003 年（2011 年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004 年（2011 年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート作成 50 %

【学生の意見等からの気づき】

画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史、中国考古学
<研究テーマ> 秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
<主要研究業績>
「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996 年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版社 2005 年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008 年

【Outline and objectives】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Huanbei Shang city", "Western Zhou period city". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

HIS500B4

東洋史学特殊研究Ⅳ

大島 誠二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現研究』上巻を用いる。後期は、「西周都城」「東周都城」を輪読する。西周時代の都城と東周時代の都城とを比較検討し、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

考古学資料による分析方法を身につける。
中国古代社会の成立過程を理解する。
中国古代における都市の形態と役割、発展について考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。受講者の発表によって進行する。
対面授業で実施予定。状況が悪化すればオンライン授業【リアルタイム配信型】に移行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	西周時期都城特点③	「宗廟与宮殿是都城中的重要建築」を読み、西周時期の大型建築址の構造と機能について検討する。
第 2 回	西周時期都城特点④	「聚族而居与聚族而葬」を読み、西周時代の集落と墓地の構成について考察する。
第 3 回	西周時代の都城形態の検討	「周原遺跡」「豊鎬遺跡」「洛邑遺跡」を新資料を交えて比較検討し、西周時代の都市の構造と機能について考察する。
第 4 回	東周時期都城概述	「東周時期都城概述」を読み、東周時代の都城形態の変化について理解する。
第 5 回	東周洛陽王城①	「城址概況」を読み、東周洛陽城概略を理解する。
第 6 回	東周洛陽王城②	「宮殿建築基址」を読み、文献史料の記載と比較し、宮殿区の立地と建設年代について検討する。
第 7 回	東周洛陽王城③	「手工業作坊区与糧倉」を読み、洛陽における手工業生産と食糧問題について考察する。
第 8 回	東周洛陽王城④	「墓葬分布区」を読み、洛陽の墓地分布と車馬坑から見た王陵区問題について考察する。
第 9 回	侯馬晋国故城①	「城址概況」を読み、侯馬晋国故城の全体像を把握する。
第 10 回	侯馬晋国故城②	「宮殿建築基址」を読み、分散する大型建築遺跡の分布状況を理解し、その機能を考察する。

第 11 回	侯馬晋国故城③	「祭祀遺址」を読み、遺跡の状況を把握するとともに、出土した盟書の内容を理解し、祭祀の持つ意味を考察する。
第 12 回	侯馬晋国故城④	「手工業遺址」を読み、鑄銅遺跡の生産形態とその役割を考察する。
第 13 回	侯馬晋国故城⑤	「墓葬分布区」を読み、墓地区の分布状況を把握し、晋公陵墓とその他の墓地の構成要素を比較検討する。
第 14 回	西周時期と東周時代の都城形態	西周時期と東周時代の都城形態の変化を踏まえながら、背後にある社会状況の変化を考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
発表担当者は、他の参加者の理解のためにレジュメを作成してほしい。
また博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってもらいたい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003 年（2011 年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004 年（2011 年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート作成 50 %

【学生の意見等からの気づき】

画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国古代史、中国考古学
<研究テーマ>秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
<主要研究業績>
「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996 年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』 中央大学出版部 2005 年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』 白東史学会発行 2008 年

【Outline and objectives】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Western Zhou period city" and "Eastern Zhou period city". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

HIS600B4

東洋史学演習 I

齋藤 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史研究の展開

自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】

中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。原則として授業は対面で行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概論	授業の趣旨と進め方
第 2 回	漢文史料を読む	講読 『三国志』
第 3 回	前回の史料についての検討	『三国志』の成書と内容について
第 4 回	漢文史料を読む	講読 『晋書』
第 5 回	前回の史料についての検討	『晋書』の成書と内容について
第 6 回	漢文史料を読む	講読 『世説新語』
第 7 回	前回の史料についての検討	『世説新語』の成書と内容について
第 8 回	歴史評論を読む	講読 『日知録』
第 9 回	『日知録』を理解するために	顧炎武とその時代について
第 10 回	『日知録』を読むために	典故について
第 11 回	『日知録』を考える	講読 『日知録』についての諸研究
第 12 回	これまでの整理	これまで読んできたものについての比較検討
第 13 回	参加者各自の問題意識と先行研究	講読 参加者任意の文献
第 14 回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

課題の達成度によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 中国古代史

＜研究テーマ＞ 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

＜主要研究業績＞

「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999 年

「9・10 世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004 年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008 年

【Outline and objectives】

Improving skills and critical minds to study the history of ancient China

HIS600B4

東洋史学演習Ⅱ

齋藤 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史研究の展開

自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】

中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】**【授業の進め方と方法】**

毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。原則として授業は対面で行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes**【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】**

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『資治通鑑』
第3回	前回の史料についての検討	『資治通鑑』の成書と内容について
第4回	研究文献を読む	講読 陳垣『通鑑胡注表微』
第5回	前回の文献についての検討	陳垣とその時代について
第6回	前回の文献に関する補足	胡三省とその時代について
第7回	研究文献を読む	講読 桑原隲蔵の諸論文
第8回	前回の文献についての検討	桑原隲蔵とその時代について
第9回	研究文献を読む	講読 陳垣の諸論文
第10回	研究の比較	桑原隲蔵と陳垣の比較検討
第11回	研究文献を読む	講読 陳寅恪の諸論文
第12回	研究の比較	陳寅恪と陳垣の比較検討
第13回	参加者各自の問題意識の提示	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史

<研究テーマ> 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

<主要研究業績>

『唐・回鶻絹馬交易再考』『史学雑誌』108-10、1999年

『9・10世紀敦煌の牧羊代行業について』『歴史学研究』796、2004年

『唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会』『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline and objectives】

Improving skills and critical minds to study the history of ancient China

HIS500B4

東洋史学演習Ⅲ

水上 和則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度は、12世紀初期より15世紀末期までの青花瓷生産について学ぶ。

景德鎮窯が窯業生産技術をリードする立場にあったことを理解する。加えて各地から出土する青花瓷から、世界に向けて広く交易されていた事を理解する。

【到達目標】

唐から元代にかけて、中国陶瓷の名品を生み出した諸窯について学び、陶瓷器の鑑賞能力を獲得する。また、わが国で“茶の湯”文化が生まれることで、新たに福建地域へ発注が行われた例など、中国陶瓷が東アジアに向けて広く交易されていた事を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古代よりわが国への貿易陶瓷の中心は、中国であった。またその多くが、茶文化と深く関わった茶器から始まっており、近世に到り食器類が増加する。中国からの輸入先を俯瞰すると、中心となった生産窯は、現在の浙江省越窯、湖南省長沙窯、福建省建窯、江西省景德鎮窯と推移し、この間に河北省定窯、磁州窯などが並行輸入されている。

以上にあげた諸窯を中心に実物瓷片等から理解を深めてゆく。さらに古窯址の発掘報告書、中国の関係古文獻、わが国での研究成果を著した書籍類を読んでゆく。

【授業形式】 全回対面授業を行う。

基本的に疑問は授業内で解決すること。授業内で出来なかった質問等は、教員の学内メールで受け付ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国陶瓷史と東アジア交易入門
第2回	唐代の陶瓷	唐三彩と白瓷の完成 河南省白瓷窯としての鞏県窯と、河北省ケイ州窯を出土品の化学分析から違いを理解する。
第3回	宋代の陶瓷	宋代は諸窯が林立し、大量生産の始まる時期であった。 宋代名窯の古窯跡探査の紹介と、各窯の製品伝搬を出土品から理解する。
第4回	元代の陶瓷	元代に始まる窯業の新技術を概観する
第5回	景德鎮窯 (1)	景德鎮窯と青白瓷生産
第6回	景德鎮窯 (2)	諸外国への技法伝搬と周辺諸窯 景德鎮の装飾技法と貿易陶瓷
第7回	景德鎮窯 (3)	原料枯渇と工房移転 鎮窯のはじまり
第8回	景德鎮窯の発掘報告書 (1)	景德鎮元代青花瓷窯址調査
第9回	景德鎮窯の発掘報告書 (2)	落馬橋鎮窯の発掘報告
第10回	景德鎮窯の生産技術 (1)	青花瓷生産技法について
第11回	景德鎮窯の生産技術 (2)	『中国陶瓷見聞録』（清・康熙六十一年）を読む (1)

第12回 景德鎮窯の生産技術 『中国陶瓷見聞録』の輪読 (2) (3)

第13回 景德鎮窯の生産技術 『中国陶瓷見聞録』の輪読 (3) (4)

第14回 景德鎮窯の生産技術 『中国陶瓷見聞録』の輪読 (4) (5)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

予め講義資料の配布を行うので、授業に関係する箇所を読んでおくことを求める。

テキスト中の専門用語を抜き出し、出来る限りその意味を調べておくこと。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

『中国陶瓷見聞録』（清・康熙六十一年）東洋文庫

『景德鎮陶録 1・2』（清・嘉慶二十年）東洋文庫

【参考書】

詳細は、授業の進行に沿って随時伝える。

【成績評価の方法と基準】

平常の学習意欲を小テスト等で評価 (40%) し、あわせて期末学修レポート (60%) の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶瓷史

<研究テーマ>

唐宋代の陶瓷技法の研究

<主要研究業績>

(1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002年

(2)「宋元代景德鎮窯業における素地土配合の研究」『亜州古陶瓷研究Ⅳ』2009年

(3)「青花瓷生産黎明期の景德鎮窯業」『専修人文論集 97号』2015年

(4)「景德鎮調合原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』株式会社 雄山閣・2018年

(5)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第90号』法政大学史学会・2018年

(6)「宋代建窯黒褐釉媒熔剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』株式会社 雄山閣・2021年

【Outline and objectives】

History of Chinese ceramics. In addition, related East Asia trade.

HIS500B4

東洋史学演習Ⅳ

水上 和則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度は、12 世紀初期より 15 世紀末期までの青花瓷生産について学ぶ。

景德鎮窯が窯業生産技術をリードする立場にあったことを理解する。加えて各地から出土する青花瓷から、世界に向けて広く交易されていた事を理解する。

【到達目標】

唐から元代にかけて、中国陶瓷の名品を生み出した諸窯について学び、諸窯における生産品の特徴を区別して理解する。合わせて陶器の鑑賞能力を獲得する。

わが国で“茶の湯”文化が生まれることで、新たに福建地域へ発注が行われた例など、中国陶瓷が東アジアに向けて広く交易されていた事を学び、茶器を含む陶器生産が中国からもたらされた技術であることを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古代よりわが国への貿易陶瓷の中心は、中国であった。

またその多くが、茶文化と深く関わった茶器から始まっており、近世に到り食器類が増加する。中国からの輸入先を俯瞰すると、中心となった生産窯は、現在の浙江省越窯、湖南省長沙窯、福建省建窯、江西省景德鎮窯と推移し、この間に河北省定窯、磁州窯などが並行輸入されている。

以上にあげた諸窯を中心に実物瓷片等から理解を深めてゆく。さらに古窯址の発掘報告書、中国の関係古文書、わが国での研究成果を著した書籍類を読んでゆく。

【授業形式】 全回対面授業を行う。

基本的に疑問は授業内で解決すること。授業内で出来なかった質問等は、教員の学内メールで受け付ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	景德鎮窯の技法研究 (1)	『景德鎮陶録』(清・嘉慶二十年)を読む
第 2 回	景德鎮窯の技法研究 (2)	『景德鎮陶録』の輪読 (2)
第 3 回	景德鎮窯の技法研究 (3)	『景德鎮陶録』の輪読 (3)
第 4 回	青花瓷の出土品 (中国内 1)	報告書『四川遂寧金魚村南宋窖藏』を読む
第 5 回	青花瓷の出土品 (中国内 2)	高安市第 2 電気廠窖藏出土品
第 6 回	青花瓷の出土品 (中国内 3)	保定市永華路南小学校窖藏出土品
第 7 回	青花瓷の出土品 (中国内 4)	集寧路窖藏出土の釉裏紅瓷を考える
第 8 回	景德鎮窯の技法研究 (3)	『中国陶瓷見聞録』から釉裏紅瓷の生産法について
第 9 回	貿易陶瓷 (1)	新安沈船と海交史博物館
第 10 回	貿易陶瓷 (2)	『カラコルム遺跡出土の元青花瓷』の報告書を読む
第 11 回	貿易陶瓷 (3)	トブカプサライ収蔵の青花瓷 (1) 三上次男の著書から

第 12 回	貿易陶瓷 (4)	トブカプサライ収蔵の青花瓷 (2) 三上次男の著書から
第 13 回	日本国内出土の元青花瓷 (1)	沖縄出土の元青花瓷 報告書から《首里城出土品》
第 14 回	日本国内出土の元青花瓷 (2)	沖縄出土の元青花瓷 報告書から《グスク出土品》

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
予め講義資料の配布を行うので、授業に関係する箇所を読んでおくことを求める。
テキスト中の専門用語を抜き出し、出来る限りその意味を調べておくこと。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

『中国陶瓷見聞録』(清・康熙六十一年) 東洋文庫

『景德鎮陶録 1・2』(清・嘉慶二十年) 東洋文庫

【参考書】

景德鎮窯関係文献

その他授業の進行に沿って随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常の学習意欲を提出物等で評価 (40%) し、あわせて期末レポート課題 (60%) の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

博物館・美術館への中国陶瓷器見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶瓷史

<研究テーマ>

唐宋時代の陶瓷技法の研究

<主要研究業績>

(1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002 年

(2)「宋元代景德鎮窯における素地土配合の研究」『亜州古陶瓷研究Ⅳ』2009 年

(3)「青花瓷生産黎明期の景德鎮窯業」『専修人文論集 97 号』2015 年

(4)「景德鎮調合原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』株式会社 雄山閣・2018 年

(5)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第 90 号』法政大学史学会・2018 年

(6)「宋代建窯黒褐釉熔剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』株式会社 雄山閣・2021 年

【Outline and objectives】

History of Chinese ceramics. In addition, related East Asia trade.

HIS500B4

東洋史学演習 V

久野 美樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インド、中央アジア、中国（北朝）仏教美術史

【到達目標】

仏教美術史の基本を習得し、物質文化研究の方法とインド、中央アジアおよび中国北朝期の仏教美術を理解します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン授業となった場合にはオンデマンド授業（資料型）にします。教員は各授業の 1 週間前に、学生が法政大学に登録したメールアドレスに向け、大学の学習支援システム Hoppii を通して「授業内容のレジュメ」「口語体の解説文」「画像データ」を配布します。学生はそれを自主学習し、各回ごとにコメントと質問を教員に送り、教員との質疑応答を実施します。

特定の論文を学習する場合には、学生の経済的負担にならないよう、教員が学習部分をコピーし各学生の自宅に送ります。

学生の修士論文の内容に沿って柔軟に授業内容を変更します。また学生に修論の中間報告をしていただき、それを教員が添削しアドヴァイスを書いて返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の主旨と進め方、美術史学の方法
第 2 回	仏教と仏教美術の基本	釈迦の生涯、上座部仏教と大乘仏教、その美術
第 3 回	仏像出現以前のインド	B.C.3c.～A.D.2c. の北西インドの美術
第 4 回	大乘菩薩の誕生	弥勒、釈迦、観音菩薩像の誕生
第 5 回	インドの石窟寺院（1）	アジャンタ仏教石窟
第 6 回	インドの石窟寺院（2）	ヒンドゥー教石窟
第 7 回	中央アジアの美術	クチャ、ホータンの美術
第 8 回	敦煌の美術	濱田瑞美「莫高窟初期窟の図像と窟内構想」
第 9 回	雲岡石窟（1）	雲岡石窟 開鑿前、Ⅰ期、Ⅱ期前半、北魏の漢化
第 10 回	雲岡石窟（2）	雲岡石窟Ⅱ期後半、Ⅲ期、北魏の漢化
第 11 回	龍門石窟	龍門石窟、北魏の漢化と浄土美術
第 12 回	洛陽郊外の鴻慶寺石窟	鴻慶寺石窟の浄土美術、法華経、その他の主題
第 13 回	北齊の石窟美術	北齊の浄土美術、小南海石窟、南響堂山石窟
第 14 回	修士論文の中間報告	修士論文の中間報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。新型コロナウイルスの流行がおさまった後、美術館・博物館に行き実物を観察します。

【テキスト（教科書）】

学習する書籍、論文は事前にプリント配布します。

【参考書】

授業内で随時紹介。

【成績評価の方法と基準】

各授業内容に対するコメント、質問、教員との質疑応答 70 %、修論の中間発表 30 %。物質資料についての正確な理解と研究者としての論理の構築ができているかをみます。

【学生の意見等からの気づき】

仏教美術の基本が理解できるよう丁寧な指導を心がけます。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン（オンライン授業の場合）

【その他の重要事項】

学生は事前配布する資料を当該授業までに読み、コメント、質問、質疑応答の準備をします。

学生は教員に対しどのようなことでも質問や意見を出してほしいと考えます。教員へのメールを歓迎します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> アジア仏教美術史、石窟美術研究

<研究テーマ> 5c. 頃から 8c. 頃の石窟美術にみられる浄土観、仏身観

<主要研究業績> 「龍門石窟北魏窟」『アジア仏教美術論集 東アジアⅠ 後漢・三国・南北朝』中央公論美術出版 2017 年、「鴻慶寺石窟第一窟について」『法政史学』第 84 号 2015 年、『唐代龍門石窟の研究』中央公論美術出版 2011 年

【Outline and objectives】

Buddhist Art History of India, Central Asia and China (Northern Dynasties)

HIS500B4

東洋史学演習Ⅵ

久野 美樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

唐代仏教美術史

【到達目標】

物質文化研究の方法及び唐を中心とした仏教美術を理解します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン授業となった場合にはオンデマンド授業（資料型）に
します。教員は各授業の 1 週間前に、学生が法政大学に登録したメー
ルアドレスに向け、大学の学習支援システム Hoppii を通して「授業
のレジュメ」「口語体の解説文」「画像データ」を配布します。学生
はそれを自主学習し、各回ごとにコメントと質問を教員に送り、教
員との質疑応答を実施します。

特定の論文を学習する場合には、学生の経済的負担にならないよ
う、教員が学習部分をコピーし各学生の自宅に送ります。

学生の修士論文の内容に沿って柔軟に授業内容を変更します。また
学生に修論の中間報告をしていただき、それを教員が添削しアドヴァ
イスを書いて返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	中国人の昇天思想	馬王堆墓出土物
第 2 回	莫高窟西魏窟	莫高窟第 285 窟
第 3 回	龍門石窟	中国伝統文化からみた龍門
第 4 回	世俗王権と仏教美術	肥田「一州一寺制と皇帝等身像」
第 5 回	唐代龍門の大仏像	大仏像の尊格
第 6 回	唐代龍門奉先寺洞像	東大寺大仏像の思想的淵源、龍門 奉先寺洞大仏像
第 7 回	日本への唐文化の影響	奈良の造形
第 8 回	世俗王権と仏教美術	優填王像の流行と意義
第 9 回	唐代龍門の一仏多菩薩 像	久野「一仏多菩薩像」
第 10 回	敦煌莫高窟の絵画史	画卷形式から大画面形式へ
第 11 回	敦煌大画面形式の造形	観音経変、阿弥陀浄土変
第 12 回	釈迦であり阿弥陀であ る仏像	初盛唐期の造形
第 13 回	密教美術	中期密教と曼荼羅
第 14 回	修士論文の中間発表	修士論文の中間発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
コロナの流行がおさまった後、美術館・博物館に行き実物を観察し
ます。

【テキスト（教科書）】

学習する資料は事前にプリント配布します。

【参考書】

授業内で随時紹介。

【成績評価の方法と基準】

各授業内容に対するコメント、質問、教員との質疑応答 80 %、修
論の中間発表 20 %。物質資料についての正確な理解と研究者とし
ての論理の構築ができてきているかをみます。

【学生の意見等からの気づき】

仏教美術の基本が理解できるよう丁寧な指導を心がけます。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン（オンライン授業の場合）

【その他の重要事項】

学生は事前配布する資料を当該授業までに読み、議論の準備をします。
学生は教員に対しどのようなことでも質問や意見を出してほしいと
考えます。教員へのメールも歓迎します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞アジア仏教美術史、石窟美術研究

＜研究テーマ＞ 5c. 頃から 8c. 頃の石窟美術にみられる浄土観、仏
身観

＜主要研究業績＞「唐代龍門石窟」『アジア仏教美術論集Ⅱ 隋・唐』
中央公論美術出版 2019 年、「釈迦であり阿弥陀である仏像―初盛
唐期法華経関連の造形を中心として―」『法政史学』第 91 号 2019
年、『唐代龍門石窟の研究』中央公論美術出版、2011 年

【Outline and objectives】

Buddhist Art History of Tang Dynasty

HIS500B4

東洋古代史研究 I

齋藤 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史の基礎史料の講読
中国古代史研究に必要な漢文史料の読解力を高める。

【到達目標】

中国古代史研究に用いる漢文史料を多読し、自力で研究を進めていくために必要な漢文読解力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料についての講読を行う。課題に対してのフィードバックは、講読の中で適宜行っていく。原則として授業は対面で行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	儒家の文献を読む	講読 『論語』
第 2 回	儒家の文献を読む	講読 『孟子』
第 3 回	儒家の文献を読む	講読 『荀子』
第 4 回	儒家の文献を読む	講読 『春秋左氏伝』
第 5 回	儒家の文献を読む	講読 『春秋公羊伝』
第 6 回	墨家の文献を読む	講読 『墨子』
第 7 回	道家の文献を読む	講読 『老子』
第 8 回	道家の文献を読む	講読 『莊子』
第 9 回	法家の文献を読む	講読 『管子』
第 10 回	法家の文献を読む	講読 『商君書』
第 11 回	法家の文献を読む	講読 『韓非子』
第 12 回	史書を読む	講読 『史記』
第 13 回	史書を読む	講読 『漢書』
第 14 回	史書を読む	講読 『資治通鑑』

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

課題の達成度によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

例年、授業内容、特に漢文訓読に関心の無い方が履修されることが多いのですが、関心を持っている履修者の学習の妨げになりうるので、よく授業内容を理解した上で履修してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 中国古代史

＜研究テーマ＞ 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

＜主要研究業績＞

「唐・回鹘絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999 年

「9・10 世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004 年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008 年

【Outline and objectives】

Improving skills and critical minds to study the history of ancient China

HIS500B4

東洋古代史研究Ⅱ

齋藤 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史の基礎史料の講読
中国古代史研究に必要な漢文史料の読解力を高める。

【到達目標】

中国古代史研究に用いる漢文史料を多読し、自力で研究を進めていくために必要な漢文読解力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料についての講読を行う。課題に対してのフィードバックは、講読の中で適宜行っていく。原則として授業は対面で行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	漢文の文献を読む	講読 『塩鉄論』本議
第 2 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』力耕
第 3 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』通有
第 4 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』錯幣
第 5 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』禁耕
第 6 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』復古
第 7 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』非鞅
第 8 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』晁錯
第 9 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』刺権
第 10 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』刺復
第 11 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』論儒
第 12 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』憂辺
第 13 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』園池
第 14 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』輕重

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

例年、授業内容、特に漢文訓読に関心の無い方が履修されることが多いのですが、関心を持っている履修者の学習の妨げになりうるので、よく授業内容を理解した上で履修してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史

<研究テーマ> 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

<主要研究業績>

「唐・回鹘絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999 年

「9・10 世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004 年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008 年

【Outline and objectives】

Improving skills and critical minds to study the history of ancient China

HIS500B4

東洋中世史研究 I

宇都宮 美生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

倭寇対策に編まれた明代鄭若曾の日本研究書『籌海図編』を講読することにより、中国と日本の交流史についての知識を身に付けるだけでなく、東洋史の研究にあたって必要とされる漢文史料の読解能力と記事のもとになる原典（一次史料）の探し方を養い、関連資料の探し方や使い方を学ぶ。

【到達目標】

『籌海図編』は中国から日本への使者と日本から中国への使者を記した歴史書であり、比較的平易な文法構造であり、初心者でも理解しやすい。したがって、授業では句読点のない原文（白文）と、訓点のある標点本を併用し、訓点、送り仮名、訓読という日本独自の漢文の読み方に習熟するだけでなく、訓点のない漢文に慣れ、原文講読に対する基礎的な能力の向上を目指す。また、講読に必要なとされる工具書に関する知識や使い方を学び、使えるようにするだけでなく、考古資料、関連論文等の資料を自分で探し、それを併用して広範囲な意味の解釈をする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

『籌海図編』の「王官使和事略」と「和國朝貢事略」を相互に検討する。講読に関しては毎回担当者に訓読と現代語訳のレジュメを作成して報告してもらい、全員でその部分について議論するという形で進めていく。フィードバックは随時、授業中に行う。多様な工具書を併用するため、史料室での対面式の授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 『籌海図編』講読 1	テキストの紹介、授業の進め方の説明、工具書の使い方。
第2回	『籌海図編』講読 2	漢文の基礎知識の確認と共同作業 担当者の報告と参加者全員による議論。
第3回	『籌海図編』講読 3	担当者の報告と参加者全員による議論。
第4回	『籌海図編』講読 4	担当者の報告と参加者全員による議論。
第5回	『籌海図編』講読 5	担当者の報告と参加者全員による議論。
第6回	『籌海図編』講読 6	担当者の報告と参加者全員による議論。
第7回	『籌海図編』講読 7	担当者の報告と参加者全員による議論。
第8回	『籌海図編』講読 8	担当者の報告と参加者全員による議論。
第9回	『籌海図編』講読 9	担当者の報告と参加者全員による議論。
第10回	『籌海図編』講読 10	担当者の報告と参加者全員による議論。
第11回	『籌海図編』講読 11	担当者の報告と参加者全員による議論。
第12回	『籌海図編』講読 12	担当者の報告と参加者全員による議論。
第13回	『籌海図編』講読 13	担当者の報告と参加者全員による議論。

第14回 『籌海図編』講読 14 担当者の報告と参加者全員による議論。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、担当者以外にも回答を求めるため、全員予習をしておく。高校での漢文の基礎的な知識があることを前提に授業を進めるため、初心者は基礎的な知識に関して自宅学習を求める。授業ではそれを用いて説明をするため、事前に目を通しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

最初の授業でコピーを配布する。

【参考書】

森克己・沼田次郎編『対外関係史』山川出版社、1978年
鈴木靖民編『日本古代交流史入門』勉誠出版、2017年、3800円+税
村井章介『中世日本の内と外』筑摩書房、2013年、1200円+税
中田易直編『近世対外関係史論』有信堂高文社、1979年、2500円+税
簗原俊洋、奈良岡聰智編著『ハンドブック近代日本外交史：黒船来航から占領期まで』ミネルヴァ書房、2016年、3000円+税
田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、1987年、13000円+税
*このほか、日本の対外関係史に関する文献は多数あるので、図書館等で利用してほしい。

【成績評価の方法と基準】

・授業中の積極的な参加（50%）
無断欠席、遅刻なども授業中の態度評価の対象となるので注意されたい。
被報告者の授業中の態度（質問やメモ）などの取り組み方も評価する。
・予習および発表の状況を基準とした平常点（50%）
初回の発表については問わないが、次回以降での向上（完璧でなくともいい）と真摯な取り組みを評価する。
報告を担当する学生は担当日に必ず発表する。

【学生の意見等からの気づき】

わかりやすい授業を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

初回：授業用の大学ノート 1冊、はさみ、糊
毎回：『漢和辞典』（必須）
報告担当者：報告レジュメ（少し）を全員分コピーし、当日配布

【その他の重要事項】

発表担当日に担当者が欠席することを禁じる。やめず欠席する場合、他の学生とスケジュールを調整し、必ず発表すること。

【Outline and objectives】

This course introduces an understanding of the relationship between Chinese & Japanese by reading of Old Chinese Literature. The aim of this course is to help students acquire reading Chinese Literature and history.

HIS500B4

東洋中世史研究Ⅱ

宇都宮 美生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

倭寇対策に編まれた明代鄭若曾の日本研究書『籌海図編』を講読することにより、中国と日本の交流史についての知識を身に付けるだけでなく、東洋史の研究にあたって必要とされる漢文史料の読解能力と記事のもとになる原典（一次史料）の探し方を養い、関連資料の探し方や使い方を学ぶ。

【到達目標】

『籌海図編』は中国から日本への使者と日本から中国への使者を記した歴史書であり、比較的平易な文法構造であり、初心者でも理解しやすい。したがって、授業では句読点のない原文（白文）と、訓点のある標点本を併用し、訓点、送り仮名、訓読という日本独自の漢文の読み方に習熟するだけでなく、訓点のない漢文に慣れ、原文講読に対する基礎的な能力の向上を目指す。また、講読に必要なとされる工具書に関する知識や使い方を学び、使えるようにするだけでなく、考古資料、関連論文等の資料を自分で探し、それを併用して広範囲な意味の解釈をする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

『籌海図編』の「王官使和事略」と「和國朝貢事略」を相互に検討する。講読に関しては毎回担当者に訓読と現代語訳のレジュメを作成して報告してもらい、全員でその部分について議論するという形で進めていく。フィードバックは随時、授業中に行う。多様な工具書を併用するため、史料室での対面式の授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 『籌海図編』講読 1	テキストの紹介、授業の進め方の説明、工具書の使い方。 漢文の基礎知識の確認と共同作業
第2回	『籌海図編』講読 2	担当者の報告と参加者全員による議論。
第3回	『籌海図編』講読 3	担当者の報告と参加者全員による議論。
第4回	『籌海図編』講読 4	担当者の報告と参加者全員による議論。
第5回	『籌海図編』講読 5	担当者の報告と参加者全員による議論。
第6回	『籌海図編』講読 6	担当者の報告と参加者全員による議論。
第7回	『籌海図編』講読 7	担当者の報告と参加者全員による議論。
第8回	『籌海図編』講読 8	担当者の報告と参加者全員による議論。
第9回	『籌海図編』講読 9	担当者の報告と参加者全員による議論。
第10回	『籌海図編』講読 10	担当者の報告と参加者全員による議論。
第11回	『籌海図編』講読 11	担当者の報告と参加者全員による議論。
第12回	『籌海図編』講読 12	担当者の報告と参加者全員による議論。
第13回	『籌海図編』講読 13	担当者の報告と参加者全員による議論。

第14回 『籌海図編』講読 14 担当者の報告と参加者全員による議論。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、担当者以外にも回答を求めるため、全員予習をしておく。高校での漢文の基礎的な知識があることを前提に授業を進めるため、初心者は基礎的知識に関して自宅学習を求める。授業ではそれを用いて説明をするため、事前に目を通しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

最初の授業でコピーを配布する。

【参考書】

森克己・沼田次郎編『対外関係史』山川出版社、1978年
鈴木靖民編『日本古代交流史入門』勉誠出版、2017年、3800円＋税
村井章介『中世日本の内と外』筑摩書房、2013年、1200円＋税
中田易直編『近世対外関係史論』有信堂高文社、1979年、2500円＋税
簗原俊洋、奈良岡聰智編著『ハンドブック近代日本外交史：黒船来航から占領期まで』ミネルヴァ書房、2016年、3000円＋税
田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、1987年、13000円＋税
＊このほか、日本の対外関係史に関する文献は多数あるので、図書館等で利用してほしい。

【成績評価の方法と基準】

・授業中の積極的な参加（50%）
無断欠席、遅刻なども授業中の態度評価の対象となるので注意されたい。
被報告者の授業中の態度（質問やメモ）などの取り組み方も評価する。
・予習および発表の状況を基準とした平常点（50%）
初回の発表については問わないが、次回以降での向上（完璧でなくともいい）と真摯な取り組みを評価する。
報告を担当する学生は担当日に必ず発表する。

【学生の意見等からの気づき】

わかりやすい授業を心がける。

【学生が準備すべき機器他】

初回：授業用の大学ノート1冊、はさみ、糊
毎回：『漢和辞典』（必須）
報告担当者：報告レジュメ（少し）を全員分コピーし、当日配布

【その他の重要事項】

発表担当日に担当者が欠席することを禁じる。やもえず欠席する場合、他の学生とスケジュールを調整し、必ず発表すること。

【Outline and objectives】

This course introduces an understanding of the relationship between Chinese & Japanese by reading of Old Chinese Literature. The aim of this course is to help students acquire reading Chinese Literature and history.

HIS500B4

東洋近代史研究 I

芦沢 知絵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「外交からみる中国近現代史」をテーマとする。

現在、中国は東アジアのみならず、世界全体に大きな影響力を持つ「グローバル大国」となった。もともと、歴史的に見れば、こうした国際社会における中国の位置づけは、中国国内の政治局面の変化とともに、常に大きく揺れ動いてきたといえる。特に近代以降は、欧米列強や日本の中国進出、戦後の冷戦構造の下で、極端な外交政策の転換も迫られた。

本授業では、こうした近現代における中国の外交の歴史を中心にたどりながら、現在の「グローバル大国」中国がどのように形成されてきたのか概観する。その上で、昨今の中国をめぐる国際的な諸問題について、歴史的な視点から共に考えていきたい。

【到達目標】

近現代における中国の外交の歴史をたどり、中国近現代史に関する知識や理解を深めるとともに、現在の中国をめぐる国際的な諸問題について、主体的に考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

原則として対面授業を実施する。基本的に講義形式をとり、毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。提出されたリアクションペーパーは、次回授業時に一部を公開・回答し、フィードバックを行う。また、授業内で文献・史料の読解を行うため、ある程度の予習が必要となる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	中国近現代史入門	中国近現代史を学ぶ意義・方法
第 2 回	前近代中国の対外関係	王朝体制と「華夷秩序」
第 3 回	清朝とアヘン戦争	中国における「西洋の衝撃」
第 4 回	清末の条約・開港	中国近代外交の幕開け
第 5 回	日清戦争と「瓜分の危機」	伝統的国際秩序の崩壊
第 6 回	辛亥革命と中華民国の成立	近代国家としての中国
第 7 回	軍閥割拠とナショナリズム	「国民外交」の希求
第 8 回	南京国民政府の成立	国民党の外交戦略
第 9 回	満洲事変から日中戦争へ	日中対立と国際社会
第 10 回	国共内戦と中華人民共和国の成立	戦後東アジアの冷戦構造
第 11 回	社会主義体制と文化大革命	中国共産党の国際的孤立
第 12 回	改革開放の時代	協調外交への転換
第 13 回	現代中国の対外関係	「グローバル大国」の行方
第 14 回	中国近現代史の課題と展望	中国近現代史をめぐる諸問題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で紹介した参考文献や配布プリントをもとに知識と理解を深める。また、中国に関するニュースや新聞・雑誌記事にも自主的に目を通し、問題意識を高める。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

主な概説書は以下。その他は授業内で紹介する。

岡本隆司・箱田恵子編著『ハンドブック 近代中国外交史——明清交替から満洲事変まで』ミネルヴァ書房、2019 年。
川島真・毛里和子著『グローバル中国への道程——外交 150 年（叢書 中国の問題群 12）』岩波書店、2009 年。
毛里和子『現代中国外交』岩波書店、2018 年。
吉澤誠一郎他『中国近現代史①～⑤』岩波書店（岩波新書）、2010～14 年。

【成績評価の方法と基準】

① 平常点 30 %

毎回授業後に提出するリアクションペーパーを評価対象とする。

② 期末試験 70 %

授業内容に関する論述問題を出題する。

【学生の意見等からの気づき】

初学者にも理解しやすい講義を心がけ、写真や映像などの視覚的な資料も多く用いる。また、毎回リアクションペーパーのフィードバックを行う。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを利用する。

【Outline and objectives】

This course introduces the history of modern China focusing on diplomatic relations. The aim of this course is to help students acquire an understanding of the historical process and current issues about modern China as a great power.

HIS500B4

東洋近代史研究Ⅱ

芦沢 知絵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「近現代の中国経済史」をテーマとする。
中国の経済発展は今や目覚ましい。一方、中国がなぜこれほど急速な発展を遂げたのか、また中国経済の実態や構造はどのようなものなのか、疑問を持つ人も多いであろう。そもそも歴史を振り返ってみれば、近代以前の中国は、政治的にも経済的にもアジアの中心であった。しかし、近代以降は列強の進出や戦争の影響により、中国経済は「停滞」したとされる。もっとも、近年の研究では、上海などの沿海都市部における、近代産業の発展の側面も明らかにされつつある。

本授業では、こうした最新の研究成果や諸資料をもとに、中国がどのような過程を経て今日の経済発展に至ったのか概観する。その上で、現在にも通じる中国経済の特質・問題点とは何か、歴史的な視点から共に考えていきたい。

【到達目標】

近現代における中国経済の変遷をたどり、中国近現代史及び中国経済史に関する知識や理解を深めるとともに、歴史的視点からみた中国経済の特質・問題点について、主体的に考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

原則として対面授業を実施する。基本的に講義形式をとり、毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。提出されたリアクションペーパーは、次回授業時に一部を公開・回答し、フィードバックを行う。また、授業内で文献・史料の読解を行うため、ある程度の予習が必要となる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	中国経済史入門	中国経済史を学ぶ意義・方法
第2回	前近代の中国経済	伝統的商業秩序の形成
第3回	清末の近代化①	開港と外国資本
第4回	清末の近代化②	洋務運動と殖産興業
第5回	民国期の産業勃興①	新興資本家の出現
第6回	民国期の産業勃興②	軍閥と地方財政
第7回	国民政府の経済政策①	中央集権化と幣制改革
第8回	国民政府の経済政策②	戦時下の動員・統制
第9回	戦後の香港・台湾経済	冷戦期の華人資本
第10回	社会主義計画経済①	集団化と国有化
第11回	社会主義計画経済②	政治運動と混乱・停滞
第12回	改革開放と経済成長①	市場経済への移行
第13回	改革開放と経済成長②	WTO加盟とグローバル化
第14回	現在の中国経済	発展と社会矛盾

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で紹介した参考文献や配布プリントをもとに知識と理解を深める。また、中国経済に関するニュースや新聞・雑誌記事にも自主的に目を通し、問題意識を高める。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

主な概説書は以下。その他は授業内で紹介する。

岡本隆司編『中国経済史』名古屋大学出版会、2013年。（第4・5章）
久保亨・加島潤・木越義則『統計でみる中国近現代経済史』東京大学出版会、2016年。
丸川知雄『現代中国経済』有斐閣、2013年。

【成績評価の方法と基準】

- ① 平常点 30 %
毎回授業後に提出するリアクションペーパーを評価対象とする。
② 期末レポート 70 %
授業内容に関するテーマをもとにレポートを執筆し提出する。

【学生の意見等からの気づき】

初學者にも理解しやすい講義を心がけ、写真や映像などの視覚的な資料も多く用いる。また、毎回リアクションペーパーへのフィードバックを行う。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムを利用する場合がある。

【Outline and objectives】

This course introduces the history of the modern Chinese economy. The aim of this course is to help students acquire an understanding of the historical process and problems of China's economic growth.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅰ

松原 俊文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

- 本授業は、以下を到達目標とします。
- ・ 英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。
 - ・ 文章と文章のつながりを読み取り、論旨と文脈を正確に捉えることができる。
 - ・ 古代ローマ史上の問題とそれに関する近年の研究動向を把握する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. この授業は、オンライン授業（リアルタイム配信型）形式で行います。アプリケーションは Skype の WEB ミーティング機能を使用する予定です。
2. 古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。
3. 授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを下読みし、内容を把握しておく必要があります。
4. フィードバックは、授業時間内に講評と解説の機会をもうける形で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第2回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第3回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第4回	文献講読 3	第一節講読
第5回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第6回	文献講読 5	第二節講読
第7回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第8回	文献講読 7	第三節講読
第9回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第10回	文献講読 9	第四節講読
第11回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第12回	文献講読 11	第五節講読
第13回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第14回	春学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。事前に指定された英文テキストの箇所を充分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストを配信します。

【参考書】

- ・ Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.
- ・ Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.
- ・ Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.
- ・ バウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
- ・ 松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（予習を前提とした授業参加度 50%、英文読解の精度と内容理解度 50 %）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回授業に英和辞書を持ってくる。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

古代ローマ史

＜研究テーマ＞

ギリシア・ローマの歴史叙述

＜主要研究業績＞

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「伝記と歴史の境界を越えて - 英雄伝というジャンルの誕生」、小池登、佐藤昇、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦 新たなプルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、2019 年
3. 「記憶（メモリア）と政治 - ローマの政治文化における歴史の役割 -」、『西洋史研究』新輯第 48 号、西洋史研究会、2019 年

【Outline and objectives】

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅱ

松原 俊文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

本授業は、以下を到達目標とします。

- ・ 英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。
- ・ 文章と文章のつながりを読み取り、論旨と文脈を正確に捉えることができる。
- ・ 古代ローマ史上の問題とそれに関する近年の研究動向を把握する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. この授業は、オンライン授業（リアルタイム配信型）形式で行います。アプリケーションは Skype の WEB ミーティング機能を使用する予定です。
2. 古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。
3. 授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを下読みし、内容を把握しておく必要があります。
4. フィードバックは、授業時間内に講評と解説の機会をもうける形で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	秋学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前に指定された英文テキストの箇所を充分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストを配信します。

【参考書】

- ・ Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.
- ・ Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.
- ・ Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.
- ・ バウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
- ・ 松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（予習を前提とした授業参加度 50%、英文読解の精度と内容理解度 50%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回授業に英和辞書を持ってくる。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

古代ローマ史

＜研究テーマ＞

ギリシア・ローマの歴史叙述

＜主要研究業績＞

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「伝記と歴史の境界を越えて - 英雄伝というジャンルの誕生」、小池登、佐藤昇、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦 新たなプルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、2019 年
3. 「記憶（メモリア）と政治 - ローマの政治文化における歴史の役割 -」、『西洋史研究』新輯第 48 号、西洋史研究会、2019 年

【Outline and objectives】

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅲ

篠原 琢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

18 世紀末から第一次世界大戦期までの「長い 19 世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝國的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。

ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い 19 世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった……。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation State を近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の 19 世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。

【到達目標】

受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。

授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii 上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ 1. 帝国概論	ハプスブルク帝国とはどのような帝国だったのか、概説的に解説する。
第 2 回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ 2. 帝国を思い出す	ハプスブルク帝国崩壊後、帝国にどのようなイメージが存在したのか、代表的な流れを考える。
第 3 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 1. 帝国解体は必然だったのか？	ハプスブルク帝国後継諸国の歴史認識を問う。
第 4 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 2. 時代錯誤の帝国？	Oscar Jaszi, <i>The Dissolution of Habsburg Monarchy</i>

第 5 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 3. 帝国の長い解体過程	Alan Sked, The Fall and Decline of the Habsburg Monarchy
第 6 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 4. 帝国解体は必然ではない！	Pieter Judson, Habsburg Empire. New History
第 7 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 1. 諸国民社会の形成	Miroslav Hroch, Social Preconditions of National Revival in Europe
第 8 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 2. できごととしてのネーション	Rogers Brubaker, Nation without Groups
第 9 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 3. National Indifference	Tara Zahra, "Imagined Non-communities"
第 10 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 4. 国民化する帝国	Alexei Miller, Nationalizing Empires
第 11 回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国 1. ガリツィア・プロヴィナ	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第 12 回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国 2. 文明化の使命	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第 13 回	ハンナ・アーレント『全体主義の起原』から帝国を考える	ハンナ・アーレント、『全体主義の起原』のうち、第二巻「帝国主義」を扱う。
第 14 回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時に扱うテキストは PDF で配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備してくる。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New History を教科書とする。

【参考書】

授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】

演習への貢献度、演習時の報告を 40%、学期末のレポートを 60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講者がいなかったため、該当しない。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中央ヨーロッパ近現代史
 ＜研究テーマ＞中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline and objectives】

We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of different territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic existence by itself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anomaly deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summarizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅳ

篠原 琢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

18 世紀末から第一次世界大戦期までの「長い 19 世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝國的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。

ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い 19 世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった……。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation State を近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の 19 世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。前期は帝国史について、方法論を主に検討したが、後期は帝国の諸地域を具体的に検討する。

【到達目標】

受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii 上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ボヘミア（パーメン）史 1. チェコ「国民再生」の思想と運動 1.	「国民再生」概念について概説する。
第 2 回	ボヘミア（パーメン）史 2. チェコ「国民再生」の思想と運動 2.	Vladimír Macura を読む
第 3 回	ボヘミア（パーメン）史 3. 1848 年革命 1	「フランクフルトへの手紙」を考える
第 4 回	ボヘミア（パーメン）史 4. 1848 年革命 2	「フランクフルトへの手紙」を考える

第 5 回	ボヘミア（パーメン）史 5. 19 世紀後半のチェコ社会	チェコ・ナショナリズムと「ボヘミア王国の歴史的権利」
第 6 回	ボヘミア（パーメン）史 6. 「言語闘争」	19 世紀のハプスブルク帝国の「ナショナリズム」問題について、「言語闘争」は典型的だと考えられてきた。その問題について批判的に検討を加える。
第 7 回	ボヘミア（パーメン）史 7. 第一次世界大戦とチェコ社会	第一次世界大戦中の「帝国愛国主義」とチェコスロヴァキア独立論について検討する。
第 8 回	チェコにおけるユダヤ人社会	ボヘミア・モラヴィアにおける「ユダヤ人社会」、その同化とユダヤ・ナショナリズムを考える。
第 9 回	ガリツィア史 1. 「ガリツィアの虐殺」	1846 年のガリツィア蜂起、およびそれに伴って起こった「ガリツィアの虐殺」をナショナリズムの観点から考える。
第 10 回	ガリツィア史 2. ポーランド貴族とポーランド王国の正統性	ポーランド分割後のポーランド貴族の政治的影響力について考える。
第 11 回	ガリツィア史 4. 農民ナショナリズムの進展	19 世紀後半のポーランドの国民形成過程を農民を中心に考える。
第 12 回	ガリツィア史 5. ウクライナのピエモンテ?	ポーランド貴族の政治的・文化的ヘゲモニーに抗して進展したウクライナ・ナショナリズムをリヴィウを中心に考える。
第 13 回	ガリツィア史 6. ガリツィアにおけるユダヤ人社会	ガリツィアにおけるシオニズム、ユダヤ自治主義、同化主義の問題を考える。
第 14 回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時に扱うテキストは PDF で配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備しておくこと。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New History を教科書とする。

【参考書】

授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】

演習への貢献度、演習時の報告を 40%、学期末のレポートを 60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講者がいなかったため、特に該当しない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中央ヨーロッパ近現代史
<研究テーマ> 中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline and objectives】

We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of different territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic existence by itself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anomaly deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summarizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.

HIS500B4

西洋史学特殊研究 V

稲垣 春樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テキストの講読を通じて、19 世紀イギリス帝国に関する政治史研究の基本的な論点についての知識を深めます。

【到達目標】

学生は、イギリス帝国史の研究書を読み、議論することができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ハイフレックス授業。授業前にテキストを読み、論点をまとめておきます。授業では、各自が論点を報告し、全員で議論します。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について案内します。
第 2 回	文献講読 1	Introduction
第 3 回	文献講読 2	Chapter 1 - Setting the Scene for Emancipation
第 4 回	文献講読 3	Chapter 2 - Managing Expectations
第 5 回	文献講読 4	Chapter 3 - Political Freedom
第 6 回	文献講読 5	Chapter 4 - Settler Liberties
第 7 回	文献講読 6	Chapter 5 - Free Trade, Famine and Invasion
第 8 回	文献講読 7	Chapter 6 - Steam and Opium
第 9 回	文献講読 8	Chapter 7 - Setting the Scene: Hubris and Crisis
第 10 回	文献講読 9	Chapter 8 - 'A Struggle of Life and Death'
第 11 回	文献講読 10	Chapter 9 - A New Imperial Government
第 12 回	文献講読 11	Chapter 10 - Liberal Fathers and Sons
第 13 回	文献講読 12	Chapter 11 - Imperialism
第 14 回	文献講読 13、まとめ	Chapter 12 - Imperial Wars and Their Aftermaths

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は 4 時間を標準とします。授業前に、テキストの読解、追加調査、論点に関するコメントの作成を行ってください。

【テキスト（教科書）】

Alan Lester, Kate Boehme, and Peter Mitchell, *Ruling the World: Freedom, Civilisation and Liberalism in the Nineteenth-Century British Empire* (Cambridge, 2021).

【参考書】

参考書は授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。毎回の事前準備（論点コメントの作成）と授業中のディスカッションへの参加により判断します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度が担当初年度のため特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞イギリス帝国史

＜研究テーマ＞植民地における政治と法、インド、ジャマイカ

＜主要研究業績＞「専制と法の支配— 1820 年代ボンベイにおける政府と裁判所の対立—」『史学雑誌』 127 編 1 号（2018 年 1 月）1～34 頁。

【Outline and objectives】

The class will read the text and discuss various topics on political history of 19th-century British Empire.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅵ

稲垣 春樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テキストの講読を通じて、イギリス帝国史研究の基本的な方法論および論点についての知識を深めます。

【到達目標】

学生は、イギリス帝国史の研究書を読み、議論することができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ハイフレックス授業。授業前にテキストを読み、論点をまとめておきます。授業では、各自が論点を報告し、全員で議論します。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について案内します。
第 2 回	文献講読 1	Introduction
第 3 回	文献講読 2	Chapter 1 - Colonial and Indigenous Origins of Comparative Development
第 4 回	文献講読 3	Chapter 2 - Origins of Colonialism: Is There One Story?
第 5 回	文献講読 4	Chapter 3 - Colonialism as an Agent of Globalization
第 6 回	文献講読 5	Chapter 4 - Growth and Development in the Colonies
第 7 回	文献講読 6	Chapter 5 - Debates about Cost and Benefits
第 8 回	文献講読 7	Chapter 6 - How Colonial States Worked
第 9 回	文献講読 8	Chapter 7 - Did Institutions Matter?
第 10 回	文献講読 9	Chapter 8 - Colonialism and the Environment
第 11 回	文献講読 10	Chapter 9 - Business and Empires
第 12 回	文献講読 11	Chapter 10 - Decolonization and the End of Empire
第 13 回	文献講読 12	Chapter 11 - Summary and Conclusion
第 14 回	まとめ	授業のまとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は 4 時間を標準とします。授業前に、テキストの読解、追加調査、論点に関するコメントの作成を行ってください。

【テキスト（教科書）】

Leigh Gardner and Tirthankar Roy, _The Economic History of Colonialism_ (Bristol, 2020).

【参考書】

参考書は授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。毎回の事前準備（論点コメントの作成）と授業中のディスカッションへの参加により判断します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度が担当初年度のため特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞イギリス帝国史

＜研究テーマ＞植民地における政治と法、インド、ジャマイカ

＜主要研究業績＞「専制と法の支配— 1820 年代ボンベイにおける政府と裁判所の対立—」『史学雑誌』 127 編 1 号（2018 年 1 月）1～34 頁。

【Outline and objectives】

The class will read the text and discuss various topics and methods in British colonial history.

HIS600B4

西洋史学演習 I

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋古代・中世史の修士論文を書く上で必須のラテン語史料の読解能力を身につけ、向上させるために、ラテン語史料を精読する。合わせて当該史料の読解に資する英語文献も講読する。また、修士論文作成に向けて各自の研究の現状報告も行う。

【到達目標】

- （1）英語文献の読解能力を向上させ、筆者の論理展開を批判的に追えるようになる。
 - （2）Oxford Latin Dictionary の用例の見方に慣れ、大羅英辞典を独力で使いこなせるようになる。
 - （3）ラテン語辞典や文法書を参照しつつ、ラテン語史料を正確に逐語訳できるようになる。
- 以上の3点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生と相談のうえ、ブレンド型（対面授業の回とオンライン授業の回の混在）で実施する予定。最初にラテン語史料読解に役立つ英語文献について、受講生にその内容を報告してもらう。その後はラテン語史料を精読するが、受講生は毎回、事前に学習支援システムに和訳を提出し、それに対する教員からのフィードバックを踏まえたうえで、授業での質疑応答・解説に臨む必要がある。夏期休暇に入る前には、受講生各自に修士論文作成に向けた研究内容の発表をもらい、質疑応答と教員による講評を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	各受講生の研究テーマ紹介と、英語やラテン語を「精読」するための注意
第 2 回	英語文献の内容報告 (1)	『ガリア戦記』 Loeb 版の Appendix A を読んで内容を報告する (1)
第 3 回	英語文献の内容報告 (2)	同 Appendix A を読んで内容を報告する (2)
第 4 回	ラテン語史料精読に向けて	ラテン語の予習の仕方と、『ガリア戦記』 1 巻をラテン語で講読した上級生による概要紹介。
第 5 回	ラテン語史料精読 (1)	カエサル『ガリア戦記』 2 巻 1 節の読解と質疑応答
第 6 回	ラテン語史料精読 (2)	カエサル『ガリア戦記』 2 巻 2-3 節の読解と質疑応答
第 7 回	ラテン語史料精読 (3)	カエサル『ガリア戦記』 2 巻 4 節の読解と質疑応答
第 8 回	ラテン語史料精読 (4)	カエサル『ガリア戦記』 2 巻 5-6 節の読解と質疑応答
第 9 回	ラテン語史料精読 (5)	カエサル『ガリア戦記』 2 巻 7-8 節の読解と質疑応答
第 10 回	ラテン語史料精読 (6)	カエサル『ガリア戦記』 2 巻 9-10 節の読解と質疑応答
第 11 回	ラテン語史料精読 (7)	カエサル『ガリア戦記』 2 巻 11 節の読解と質疑応答
第 12 回	ラテン語史料精読 (8)	カエサル『ガリア戦記』 2 巻 12-13 節の読解と質疑応答

- 第13回 修士論文作成に向けて 受講生による研究の現状報告と質疑応答(1)
- 第14回 修士論文作成に向けて 受講生による研究の現状報告と質疑応答(2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

英語文献については各自で読解し、授業でその内容を報告するための準備をする。

ラテン語史料読解については、Oxford Latin Dictionary や羅和辞典、および文法書を参照しつつ十分に予習したうえで、事前に学習支援システムに試訳を提出する。教員からは誤訳や問題ある箇所を示したフィードバックを返すので、毎回の授業までに誤訳の原因等について考えておくこと。毎回の授業後には、当日読み進んだ部分に不明箇所が残っていないか、必ず自分でテキストを読み直してみる。並行して、修士論文作成に向けて各自の研究も進める。本授業の授業時間外学習の時間は、ラテン語の習熟度にもよるが、準備・復習あわせて最低でも計5時間前後を要するであろう。

【テキスト（教科書）】

Caesar, *The Gallic Wars*, tr. by H. J. Edwards (Loeb Classical Library 72).

【参考書】

カエサル『ガリア戦記』、國原吉之助訳、講談社学術文庫、1994年。

『カエサル戦記集 ガリア戦記』、高橋宏幸訳、岩波書店、2015年。

長谷川博隆『カエサル』講談社学術文庫、1994年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（英語・ラテン語の予習度 30 %、英語・ラテン語読解の精度 50%、質疑応答・討議への参加など授業への積極的取組 20 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞古代ローマ史

＜研究テーマ＞帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

＜主要研究業績＞

- ① The ‘conversion’ of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, Vol.XCIII (2017).
- ② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012年
- ③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91編10号(1982年10月)

【Outline and objectives】

In order to acquire and improve the ability to read and comprehend the historical sources written in Latin, students are required to translate the Latin text into Japanese, and to read the correlated academic articles written in English.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅱ

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋古代・中世史で修士論文を作成するうえで必要となるラテン語史料の読解力を向上させるとともに、自分の研究成果を公表する能力を習得する。

【到達目標】

ラテン語辞典や文法書を参照しつつ、ラテン語史料を正確に逐語訳できるようになる。各自のプレゼンテーション能力を向上させる。以上の2点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生とも相談のうえでブレンド型（対面授業の回とオンライン授業の回の混在）で実施し、「西洋史学演習Ⅰ」とは異なる文体のラテン語史料にも慣れてもらうために、小ブリニウス『書簡集』所収の書簡を精読する。受講生は毎回、事前に学習支援システムに和訳を提出し、それに対する教員からのフィードバックを踏まえたうえで、授業での質疑応答・解説に臨む必要がある。また、受講生による修士論文作成に向けた研究発表を数回行い、質疑応答と教員による講評を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	修士論文作成に向けて	受講生による夏期休暇中の研究の進捗状況報告と質疑応答・ディスカッション
2	ラテン語史料精読(1)	小ブリニウス『書簡集』第1巻第10書簡の読解と質疑応答
3	ラテン語史料精読(2)	同第3巻第5書簡の読解と質疑応答(1)
4	ラテン語史料精読(3)	同第3巻第5書簡の読解と質疑応答(2)
5	ラテン語史料精読(4)	同第3巻第19書簡の読解と質疑応答
6	修士論文作成に向けて(2)	修士論文構想発表会用のレジュメに基づく受講生の発表と質疑応答・講評
7	ラテン語史料精読(5)	小ブリニウス『書簡集』第4巻第22書簡の読解と質疑応答
8	ラテン語史料精読(6)	同第5巻第8書簡の読解と質疑応答(1)
9	ラテン語史料精読(7)	同第5巻第8書簡の読解と質疑応答(2)
10	修士論文作成に向けて(3)	修士論文構想発表会での質疑応答・批判内容を踏まえたうえでの、受講生による研究報告と質疑応答・講評
11	ラテン語史料精読(8)	小ブリニウス『書簡集』第5巻第9書簡の読解と質疑応答
12	ラテン語史料精読(9)	同第5巻第19書簡の読解と質疑応答(1)
13	ラテン語史料精読(10)	同第5巻第19書簡の読解と質疑応答(2)
14	修士論文反省会	修士論文を提出した受講生による自己評価とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、ラテン語の辞書・文法書、さらに Sherwin-White のコメントにも参照しつつ、ラテン語史料読解の予習を十分にしたいうえで、事前に学習支援システムに試訳を提出する。教員からは誤訳や問題ある箇所を示したフィードバックを返すので、毎回の授業までに誤訳の原因等について考えておくこと。毎回の授業後には、当日読み進んだ部分に不明箇所が残っていないか、必ず自分でテキストを読み直してみる。平行して、修士論文作成に向けて各自の研究を進める。本授業の授業時間外学習の時間は、ラテン語の習熟度にもよるが、準備・復習あわせて最低でも計5時間前後を要するであろう。

【テキスト（教科書）】

A. N. Sherwin-White (ed.), *Fifty Letters of Pliny*, Oxford, 2nd ed. 2000.

【参考書】

国原吉之助訳『プリニウス書簡集—ローマ帝国一貴紳の生活と信条』講談社学術文庫、1999 年。

Pliny, *Letters and Panegyricus*, Vols.I and II, Loeb Classical Library 55 & 59, London/Cambridge, Mass, 1969.

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（ラテン語の予習度 40 %、ラテン語史料読解の精度 40 %、質疑応答や討議への参加など授業への積極的取り組み 20 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞古代ローマ史

＜研究テーマ＞帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

＜主要研究業績＞

① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).

②（分担執筆・史料邦訳）歴史学研究会編『世界史史料 1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012 年。

③シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10（1982 年 10 月）。

【Outline and objectives】

In order to improve the ability to read and comprehend the historical sources written in Latin, students are required to translate the Latin text into Japanese. Students are also required to make a presentation concerning their own research.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅲ

高澤 紀恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代史に関する英語テキストを丁寧に読み、内容について議論する。西洋史を学ぶ上で必須である外国語文献の読解力を養うとともに、報告を行うことでプレゼンテーション能力を高め、議論する力を培う。

【到達目標】

- ・外国語を読解し、日本語で表現し、考察する力を持つようにする。
- ・歴史、特に西洋近現代に関わる外国語文献を読むことで歴史を比較する力を養うことができる。
- ・報告することでプレゼンテーション力をつけることができる。
- ・議論することで他者と双方向で思考することができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

外国語文献の和訳を分担して担当し、各自がレジュメを作成して報告する。これに対して参加者の意見を受けて正確な訳と理解に努める。演習形態である。単に和訳を作成するだけでなく、内容について歴史研究においてどう考えるかを議論するようにする。

2021 年度は、2020 年度に引きつづき『コモンセンス』を読む。授業は、原則としてオンラインで行う。ただし、オフィスアワーを使って、フィードバックや質問などを行う際には、可能な限り対面とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	趣旨説明。使用文献の決定、配布。各回担当者の決定。
第 2 回	報告、発表、議論（1）	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第 3 回	報告、発表、議論（2）	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第 4 回	報告、発表、議論（3）	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第 5 回	報告、発表、議論（4）	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第 6 回	報告、発表、議論（5）	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第 7 回	小括（1）	これまでの内容を振り返り、内容を確認する。
第 8 回	報告、発表、議論（6）	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第 9 回	報告、発表、議論（7）	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第 10 回	報告、発表、議論（8）	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。

- 第11回 報告、発表、議論（9） 順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
- 第12回 報告、発表、議論（10） 順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
- 第13回 報告、発表、議論（11） 順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
- 第14回 小括（2） これまでの内容を振り返り、内容を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
担当分以外の部分も、全員辞書を丹念にひいて自分で和訳する。

【テキスト（教科書）】

トマス・ペイン（小松春雄訳）『コモン・センス』岩波文庫、1976年。

【参考書】

その都度参考になる文献を指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告のレベルと討論への参加の熱心さによる（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

オンラインでの授業でしたが、進め方などは受講生と相談しつつ進めることで、実質的なトレーニングは行えたと思います。

【Outline and objectives】

This course aims to improve the reading ability of English articles on European modern history. Attendants are expected to read assignments in advance and participate in the discussion.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅳ

高澤 紀恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代に関わる外国語文献を読み、現代世界の諸問題の歴史的な理解を深める。また研究者としての素養を高めると共に各専門分野に関わる外国語文献・史料の読解能力を高める。
秋学期も引きつづき「コモン・センス」を精読する。

【到達目標】

大学院生として自分の問題関心を明確に言葉に表し、自立的に研究活動を行えるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

外国語文献・史料の読解能力を高めること、研究者としての基礎能力の向上を目指すことを主眼とする。同時に現代世界と歴史的研究の関わりを認識を深めることを目指す。文献については最初の授業で受講者の希望を聞いて決定したい。各人の研究発表を適宜行う。授業はオンラインで行うが、フィードバックは基本的にオフィスアワーにおいて対面で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	希望によるテキスト選定、割当	受講者の希望を聞く
第2回	テキスト講読①	質疑、講読
第3回	テキスト講読②	質疑、講読
第4回	テキスト講読③	質疑、講読
第5回	研究発表①	各受講者の研究発表
第6回	研究発表②	各受講者の研究発表
第7回	テキスト講読④	質疑、講読
第8回	討論	質疑、講読
第9回	テキスト講読⑤	質疑、講読
第10回	テキスト講読⑥	質疑、講読
第11回	テキスト講読⑦	質疑、講読
第12回	テキスト講読⑧	質疑、講読
第13回	研究発表③	各受講者の研究発表
第14回	研究発表④	各受講者の研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。
原典を精読する能力を高めましょう。

【テキスト（教科書）】

配布する。

【参考書】

特に定めない。

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行と発表、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度はオンラインで行いましたが、研究発表のレジュメを前日までに共有するなど、学生と一緒に工夫することで、実質的なトレーニングはできたように思います。

【Outline and objectives】

This course aims to improve the reading ability of English articles on European modern history. Attendants are expected to read assignments in advance and participate in the discussion.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅴ

大澤 広晃

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代史における帝国・植民地支配という問題に焦点をあて、関連する外国語文献を講読し、議論する。また、修士論文の執筆に向けて、中間報告を行う。

【到達目標】

- ・研究動向に照らしながら外国語文献を正確かつ批判的に読解する能力を身につける。
- ・自分の研究内容を簡潔かつ説得的に発表する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は演習形式で行う。授業形態は、ハイフレックス（対面とリアルタイム・オンラインの併用）方式である。授業では、課題文献の内容をみなで吟味し、議論する。また、受講生が自身の研究を定期的に報告する機会を設ける。課題や質問に対するフィードバック・コメントは、授業時間内に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要と進め方を説明し、役割分担を決める。
第 2 回	文献講読と議論（1）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 3 回	文献講読と議論（2）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 4 回	文献講読と議論（3）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 5 回	文献講読と議論（4）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 6 回	文献講読と議論（5）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 7 回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第 8 回	文献講読と議論（6）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 9 回	文献講読と議論（7）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 10 回	文献講読と議論（8）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 11 回	文献講読と議論（9）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 12 回	文献講読と議論（10）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第 13 回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第 14 回	まとめ	授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。事前に課題文献や報告レジュメを精読し、質問や議論したい点などをあらかじめ準備して授業にのぞむこと。また、授業後には、議論で出た論点や自身の理解を再確認し、さらなる学びを主体的に進めること。

【テキスト（教科書）】

Thompson, Andrew, ed. Britain's Experience of Empire in the Twentieth Century. Oxford: Oxford University Press, 2012.

【参考書】

授業のなかで、その都度提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業参加度、課題への取り組み、研究報告の質）：100 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近現代イギリス史・イギリス帝国史

＜研究テーマ＞ 南部アフリカの植民地支配、宣教と帝国、フィランソロピー

＜主要研究業績＞

・『帝国主義を歴史する』清水書院、2019 年

・「キリスト教宣教がつなぐ世界」、永原陽子編『人々がつなぐ世界史』（MINERVA 世界史叢書第 4 巻）ミネルヴァ書房、2019 年、113-135 頁

・'Wesleyan Methodists, Humanitarianism and the Zulu Question, 1878 - 87', Journal of Imperial and Commonwealth History, 43:3, 2015, 418-437.

【Outline and objectives】

This course examines issues surrounding imperialism and colonialism in modern and contemporary western history. Students are expected to participate actively in discussion on relevant literature and give presentation about their own research projects on regular basis.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅵ

大澤 広晃

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代史における帝国・植民地支配という問題を、史資料を用いて考察する。また、修士論文の執筆に向けて、中間報告を行う。

【到達目標】

・研究動向を意識しながら外国語の史資料を批判的に読解する力を身につける。

・史資料から得た知見に独自の考察を加え、それを口頭と文章で効果的に発表する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は演習形式で行う。授業形態は、ハイフレックス（対面とリアルタイム・オンラインの併用）方式である。授業では、課題文献と関連する史料の内容をみなで吟味し、議論する。また、受講生が自身の研究を定期的に報告する機会を設ける。課題や質問に対するフィードバック・コメントは、授業時間内に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要と進め方を説明し、役割分担を決める。
第 2 回	文献および関連史料の講読と議論（1）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 3 回	文献および関連史料の講読と議論（2）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 4 回	文献および関連史料の講読と議論（3）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 5 回	文献および関連史料の講読と議論（4）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 6 回	文献および関連史料の講読と議論（5）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 7 回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第 8 回	文献および関連史料の講読と議論（6）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 9 回	文献および関連史料の講読と議論（7）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 10 回	文献および関連史料の講読と議論（8）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 11 回	文献および関連史料の講読と議論（9）	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 12 回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第 13 回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。

第14回 まとめ 授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に課題文献や報告レジュメを精読し、質問や議論したい点などをあらかじめ準備して授業にのぞむこと。授業後には、議論で出た論点や自身の理解を再確認し、さらなる学びを主体的に進めること。また、授業の内容や自分の研究に関連する史資料を幅広く集めつつ、その批判的な読解につとめ、自らの知見を発表する準備を進めること。

【テキスト（教科書）】

Manela, Erez. The Wilsonian Moment: Self-Determination and the International Origins of Anticolonial Nationalism. Oxford: Oxford University Press, 2007.

*法政大学が契約している The Times Digital Archive や New York Times などのデータベースも活用する。

【参考書】

授業のなかで、その都度提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業参加度、課題への取り組み、研究報告の質）：100%

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近現代イギリス史・イギリス帝国史

＜研究テーマ＞南部アフリカの植民地支配、宣教と帝国、フィランソロピー

＜主要研究業績＞

・『帝国主義を歴史する』清水書院、2019年

・「キリスト教宣教がつなぐ世界」、永原陽子編『人々がつなぐ世界史』（MINERVA 世界史叢書第4巻）ミネルヴァ書房、2019年、113-135頁

・'Wesleyan Methodists, Humanitarianism and the Zulu Question, 1878 - 87', Journal of Imperial and Commonwealth History, 43:3, 2015, 418-437.

【Outline and objectives】

This course examines issues surrounding imperialism and colonialism in modern and contemporary western history through primary and secondary sources. Students are expected to participate actively in discussion on relevant literature and give presentation about their own research projects on regular basis.

HIS500B4

西洋古代史研究Ⅰ

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、2世紀後半～5世紀のローマ帝国の詳しい歴史を政治史を中心に学び、帝政後期のローマ社会を概観することで、ローマ帝国の「東西分裂」という表現や、「ローマ」対「ゲルマン」という二項対立的見方の妥当性について考える。

【到達目標】

2世紀後半～5世紀のローマ帝国の政治と社会についての基本的知識を習得する。

帝政前期からの変化をもたらし諸要因について、自分で考察できる。ローマ帝国の「東西分裂」という表現や、「ローマ」対「ゲルマン」という二項対立的見方の妥当性について、根拠を明示しつつ自分で考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的には対面授業の講義形式で進めるが、講義レジュメは原則として1週間前に学習支援システムの教材欄にアップするので、受講者は事前によく目を通し、予習したうえで授業に臨むこと。教室授業は講義レジュメの補足説明と、学習支援システム上に設定する質問受付コーナーに事前に投稿される質問や、その場で出される質問・意見へのフィードバックを中心に進める。グループディスカッションを行う回は各グループから討議内容を報告してもらい、最後に全体へのフィードバックを行うが、時間が足りない場合は学習支援システムを利用した報告提出とフィードバックに切り替える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	帝政前期ローマ社会の概要
第2回	「ローマの平和」の終焉	「五賢帝」時代末期からセウエルス朝期の政治史
第3回	「アフリカ人皇帝」の復讐？	セプティミウス・セウエルス帝の評価をめぐるグループディスカッション
第4回	3世紀のローマ帝国(1)	「軍人皇帝時代」の開始
第5回	3世紀のローマ帝国(2)	「軍人皇帝時代」の展開
第6回	「3世紀の危機」？	「危機」の諸相。軍人皇帝への再評価をめぐるグループディスカッション。
第7回	「危機」の克服	ディオクレティアヌス登位からコンスタンティヌス帝死去までの政治史
第8回	「大きな政府」の出現	ディオクレティアヌス・コンスタンティヌス両帝の諸改革と帝政後期の社会
第9回	4世紀のローマ帝国	コンスタンティヌス帝死去から「ゲルマン民族大移動」の開始まで
第10回	「ローマ」と「ゲルマン」	ローマ・ゲルマン関係史と「ゲルマン民族大移動」開始後の状況。
第11回	ローマ帝国の「東西分裂」？	4世紀末～5世紀初頭の政治史

- 第12回 5世紀前半のローマ帝 ローマとコンスタンティノープル国
- 第13回 5世紀後半のローマ帝 テオドシウス朝断絶後の状況
- 第14回 まとめ 到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の講義レジュメは原則として1週間前に学習支援システムの教材欄にアップするので、受講生は事前に目を通し、知らない人名や事項についてはまず自分で調べてみる。そのうえで、不明点や疑問点は授業時の質疑応答で解決を図ること。授業後は講義や質疑応答の内容を復習し、まだ理解が不十分と思われる点や疑問点について、まず自分で講義時のノートや参考文献を利用して考えてみる。それでも残る不明点・疑問点については、学習支援システムの授業内掲示板等に設定する質問受付コーナーか、次回授業の質疑応答時間に必ず解決するようにする。また、ディスカッションの素材は1週間前に配布する講義レジュメに記載するので、よく読んで自分の意見をまとめておくこと。本授業の予習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。講義概要と関連史料・図版等を記載したレジュメを、原則として講義の1週間前に、学習支援システムの教材欄にアップする。

【参考書】

井上文則『軍人皇帝のローマ―変貌する元老院と帝国の衰亡』講談社選書メチエ、2015年。
 ベルナル・レミイ『ディオクレティアヌスと四分統治』、清水裕裕訳、白水社（文庫クセジュ）、2010年。
 ベルトラン・ランソン『コンスタンティヌスとその生涯と治世』、清水裕裕訳、白水社（文庫クセジュ）、2012年。
 弓削達『永遠のローマ』講談社学術文庫、1991年。
 田中創『ローマ史再考―なぜ「首都」コンスタンティノープルが生まれたのか』NHKブックス、2020年。
 その他の参考文献は、講義レジュメで随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（質問やディスカッションでの発言等、授業への積極的参加度）20%、期末筆記試験80%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度は全科目がオンライン授業となり、それへの対応で授業準備に例年をはるかに上回る時間を要したため、予習時間を十分に確保できるようなタイミングで講義レジュメを事前アップできなかったことが、最大の反省点です。2021年度は1週間前のアップを心がけ、諸般の事情で遅れる場合でも、2020年度のような大幅な遅れにはならないようにします。

【Outline and objectives】

This course deals with the history of the Roman empire from the late 2nd century through the 5th century, considering such themes as the division of the Roman empire into the western and eastern parts, and the relationship between the 'Romans' and the 'Germans'.

HIS500B4

西洋古代史研究Ⅱ

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ローマ帝国の「衰亡」をめぐるのは、当時から現代に至るまで実に多くの見解が出されている。本授業ではローマ帝国「衰亡論」の歴史の概要を学ぶと同時に、それを通じて「歴史は今を映す鏡」と言われる所以を考える。さらにグループ学習を通じて、他者の見解を批判的に読解してその問題点を発見する能力を向上させる。本授業での学びを通じて、昨今また盛んになっている「国家の衰亡」をめぐる種々の論議を批判的に読み解く力を培うことが、本授業の目指すところである。

【到達目標】

- ・「ローマ帝国衰亡論」の歴史について基本的知識を習得する。
- ・今日までに展開されてきた多様な「衰亡」原因論を批判的に考察し、それらの問題点を発見する能力を向上させる。
- ・自分の見解を、他者に理解・納得してもらえるような形で口頭や文章で発表する、プレゼンテーション能力を向上させる。
- ・質疑応答やディスカッションを通じて自分の見解を客観的に見直し、必要な修正等を実施することができる柔軟な思考力を培う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は基本的に対面授業で行う。前半は講義形式で進めるが、その間にグループ学習を進めてもらい、後半はグループ別発表と質疑応答、およびディスカッションを中心とする。学習支援システム上に設定する質問等受付コーナーに投稿される質問・意見等へのフィードバックは毎回の授業時に行う予定だが、時間が足りないような場合は、数回分をまとめて学習支援システム上でフィードバックする。グループ発表へのフィードバックは当該授業内および学習支援システム上で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方、および期末レポート課題の説明と、参考文献リストの配布。
第2回	ローマ帝国概観	背景知識が不十分な受講者向けに、帝政期のローマの歴史と社会を概述
第3回	近代歴史学成立以前の「衰亡」論	古代ローマ人の衰退論～ギボン『ローマ帝国衰亡史』まで
第4回	ローマ帝国の「衰亡」をめぐる多様な見解	「民族移動」や自然的要因を重視する諸説をめぐる
第5回	ローマ帝国の「衰亡」をめぐる多様な見解	人間的要因や政治・軍事的要因を重視する諸説をめぐる
第6回	ローマ帝国の「衰亡」をめぐる多様な見解	「衰亡」という捉え方自体をめぐる多様な見解
第7回	ローマ帝国の「衰亡」をめぐる多様な見解	「古代末期」学派の出現と同派への批判
第8回	ローマ帝国の「衰亡」をめぐる多様な見解	近年の動向をめぐる
第9回	グループ発表に向けて	グループ毎の発表レジュメの作成と質疑応答

第 9 回	グループ発表と質疑応答 (1)	モミリアーノ論文・ジョーンズ論文の概要と、両者が考える「衰亡原因」についての批判的考察
第 10 回	グループ発表と質疑応答 (2)	弓削達氏が考える「衰亡原因」の概要と、それについての批判的考察
第 11 回	グループ発表と質疑応答 (3)	南川高志氏が考える「衰亡原因」の概要と、それについての批判的考察
第 12 回	グループ発表と質疑応答 (4)	J・シュミットが考える「ローマ帝国の衰退」の概要と、それについての批判的考察
第 13 回	ローマ帝国の「衰亡」をめぐって	各グループ発表を受けての全体討議。グループ別発表を終えての各自の感想の提出。
第 14 回	まとめ	教員による全体講評。期末レポートの提出。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義レジュメは原則として1週間前に学習支援システムの教材欄にアップするので、受講生は事前によく目を通して、不明点や疑問点は授業時の質疑応答で解決を図るか、学習支援システム上でも質問を受け付けるのでそこに投稿すること。授業後に残った不明点や疑問点も、学習支援システムに投稿すること。

グループ学習は参考書欄に記載した4点のうち一つを選んで進めてもらうが、グループ分けは受講者の希望に沿う形で行うので、グループ分けまでにどの参考文献を精読したいか、各自で決めておくこと。グループ別発表のレジュメ作成時間は授業内でも取るが、それまでにグループで参考書の読み込みを進め、発表内容を協議しておく必要がある。したがって、本授業の準備・復習時間は計4時間が標準だが、それ以上の時間を要するかもしれないことは承知しておくこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは特に指定しない。講義形式で進める部分のレジュメは、原則として講義の1週間前に、学習支援システムの教材欄にアップする。

【参考書】

- 古代学協会編『西洋古代史論集Ⅲ』東京大学出版会、1978年。
A. モミリアーノ「キリスト教とローマ帝国の衰亡」(秀村欣二訳)
A. H. M. ジョーンズ「ローマ帝国の衰退」(杉村貞臣訳)
- 弓削達『ローマはなぜ滅んだか』講談社現代新書、1989年。
- 南川高志『新・ローマ帝国衰亡史』岩波新書、2013年。
- ジョエル・シュミット『ローマ帝国の衰退』文庫クセジュ、2020年。グループ学習で使用する上記4点以外の参考文献リストは初回時に配布する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（質問やグループ発表・ディスカッション時の発言等、授業への積極的参加度）20%、グループ学習を終えての感想（全員提出）20%、期末レポート60%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度は、予習時間を十分に確保できるようなタイミングで講義レジュメを事前アップできなかったことが最大の反省点で、2021年度は1週間前のアップを心がけます。また、2020年度はZoomのブレイクアウトルーム機能を使ったグループ討議の時間も設けましたが、教員自身が不慣れであったためグループ毎の質問への対応に手間取るなど、あまりうまく運営できていなかったと思いますので、その点についても改善を図ります。

【Outline and objectives】

This course aims at learning the history of various opinions about "the decline and fall" of the Roman Empire, and thereby acquiring the basic ability for critical reading and logical thinking.

HIS500B4

西洋中世史研究Ⅰ

小沼 明生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の国際社会を理解するために不可欠な知識を中心に、古代ローマ世界の終わりから15世紀までを扱います。巨大な文明の崩壊後、新しい世界の萌芽となる古代末から、キリスト教ヨーロッパの基礎を築いた中世初期、現代の国際関係のもととなる国民意識を生み出した中世後期の世界までを概観します。現代世界に通じる部分と異質な部分を合わせ持つ前近代の西洋世界の歴史を学ぶことを通じて、今の自分自身が置かれた位置を広い視野で考えてほしいと思います。

【到達目標】

この授業には二つの目的を設定します。一つ目は、異文化や異世界に対する理解と、自らの文化や世界に対する相対的な見方、そして歴史的なものの考え方を身につけることです。二つ目は、文献を収集、比較・分析し、そこから自分の見解を導きだし、表現できるようになることです。前者については授業内容で、後者についてはレポートの作成を通じて学んでいきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業はオンデマンド授業（フルオンデマンド型）で行います。課題やコメントへのフィードバックは主に授業動画の中で行います。授業では一回に一つのトピックを取り上げ、時代の流れの中に位置づけながら解説します。現代を生きる上でぜひ知っておいてほしい事件やことがらを厳選して紹介していきます。各授業の終わりに、日本語に訳された史料、つまり歴史を書く際に証拠として使われてきたテキストや画像、音楽などを取り上げ、その時代背景や作者の情報、意図などを自由に想像して考えてもらいます。続く授業でその史料の内容と背景を解説し、そこからどのような歴史像が作られてきたかを学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	西洋前近代の歴史を学ぶこと
第2回	ローマ世界の終焉	民族大移動と古代の終わり
第3回	フランク王国の成立と発展	カールの戴冠と西ヨーロッパ世界
第4回	ローマカトリックの伝播	聖歌の成り立ちから見る典礼の成立
第5回	聖職叙任権闘争	カノッサの屈辱から見えること
第6回	十字軍	西ヨーロッパの拡大とその目的
第7回	中世の世界観	地図から見る世界観の変遷
第8回	サンチャゴ巡礼とレコンキスタ	巡礼の書と巡礼地の発展
第9回	教会建築の変化	ゴシック建築の誕生
第10回	黒死病と死の舞踏	パンデミックとその原因・結果
第11回	百年戦争	中世的国家の変質
第12回	中世の終焉とルネサンス	ルネサンスの源流を探る
第13回	宗教改革	ウィクリフから、フス、ルターまで
第14回	まとめとレポート講評	テキストを批判的に読むこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

授業の最後に次回の授業で使う課題を渡します。課題の中のキーワードなどを参考に予習をしておくことを勧めます。
また、レポートの作業を分割して進めますので、毎週3～4時間ほどの準備時間を用意してください。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業ごとにプリントを用意します。

【参考書】

木下康彦ほか編『改訂版詳説世界史研究』山川出版社、2008年

【成績評価の方法と基準】

学期中に簡単な小レポートを二回、そしてそれを踏まえた形で学期末にレポートを提出してもらいます。合計三回のレポートの評価と、出席状況および授業への参加を合計して最終的な評価を行います。なお、授業への参加については、授業内での課題への回答を見て評価します。配点は以下の通りです：

コメントと課題への対応：30

レポートA：10

レポートB：20

レポートC：40

【学生の意見等からの気づき】

毎回課題に回答してもらいますが、正解を求めるというより想像力を働かせて推理するという気持ちでやってみてください。

【学生が準備すべき機器他】

オンデマンド動画を視聴できる環境と学習支援システムでコメントと課題を提出できる環境を準備してください。

【Outline and objectives】

This is the lecture about western history focused on the middle ages. It begins with the post-roman era and ends with 15th century and based on the basic knowledge of the world-history. You will get a historical point of view and technique of the critical reading of the historical text through the class.

HIS500B4

西洋中世史研究Ⅱ

小沼 明生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期の西洋中世史では有名な事件やトピックを中心に紹介しましたが、後期のこの講義では西洋中世の社会構造や思考・行動の在り方を中心にみていきます。時系列ではなく、社会を構成していた要素、つまり皇帝、国王、貴族、聖職者、都市、農民などに注目していきます。授業ごとに紹介する史料から、過去の社会を想像することを通じて理解を深めていきます。

【到達目標】

この授業には二つの目的を設定します。一つ目は西洋文化の基礎を作った時代である中世の歴史的知識を、またそれを通じて歴史的な見方・考え方を身につけます。二つ目は文献を収集、比較・分析し、そこから自分の見解を導きだし、表現できるようになることです。前者については授業内容で、後者についてはレポートの作成を通じて学んでいきます

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

当面、当授業はオンデマンド授業（フルオンデマンド型）としておきます。コメントと課題へのフィードバックは主に授業動画内で行います。

授業では一回に一つのトピックを取り上げ、時代の流れの中に位置づけながら解説します。現代を生きる上でぜひ知っておいてほしい事件やことがらを厳選して紹介していきます。各授業の終わりに、日本語に訳された史料、つまり歴史を書く際に証拠として使われてきたテキストや画像、音楽などを取り上げ、その時代背景や作者の情報、意図などを自由に想像して考えてもらいます。続く授業でその史料の内容と背景を解説し、そこからどのような歴史像が作られてきたかを学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	異世界としての中世・ルーツとしての中世
第2回	王と皇帝と教皇	貴族的社会と文化の成立と発達
第3回	騎士と貴族の世界	貴族的社会と文化の成立と発達
第4回	修道院と修道士の世界	修道院の始まりとその発展
第5回	修道院と修道士の世界	托鉢修道会の成立と発展
第6回	ローマカトリック教会	教会の構造とその発展の発展
第7回	ローマカトリック教会	教会分裂と公会議の変質
第8回	都市の成立と発展	西洋における都市の成立過程とその特徴
第9回	手工業者と都市住民	手工業と手工業者の発展
第10回	ドゥームズデイブックと中世の農村	農村の形態と農民・領主関係
第11回	中世農村と農奴制	農奴制の成立と変化
第12回	西洋中世の貨幣と貨幣制度	貨幣単位の由来と互換関係、購買力
第13回	14世紀の危機	黒死病の流行と中世後期の世界
第14回	まとめとレポート講評	テキストを批判的に読むこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業の最後に次回の授業で使う課題を渡します。課題の中のキーワードなどを参考に予習をしておくことを勧めます。
また、レポートの作業を分割して進めますので、毎週 3～4 時間ほどの準備時間を用意してください。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業ごとにプリントを用意します。

【参考書】

木下康彦ほか編『改訂版詳説世界史研究』山川出版社、2008 年
甚野尚志『中世の異端者たち』世界史リブレット 20、山川出版社、1996 年
朝倉文市『修道院にみるヨーロッパの心』世界史リブレット 21、山川出版社、1996 年
河原温『中世ヨーロッパの都市世界』世界史リブレット 23、山川出版社、1996 年
堀越宏一『中世ヨーロッパの農村世界』世界史リブレット 24、山川出版社、1997 年など

【成績評価の方法と基準】

学期中に簡単な小レポートを二回、そしてそれを踏まえた形で学期末にレポートを提出してもらいます。合計三回のレポートの評価と、出席状況および授業への参加を合計して最終的な評価を行います。なお、授業への参加については、授業内での課題への回答を見て評価します。配点は以下の通りです：

コメントと課題： 30

レポート A： 10

レポート B： 20

レポート C： 40

【学生の意見等からの気づき】

毎回課題に回答してもらいますが、正解を求めるというより想像力を働かせて推理するという気持ちでやってみてください。

【Outline and objectives】

This is the lecture about western history focused on the middle ages. Its time scope is between 5th and 15th century and we will work on the society and culture of each classes in this era; emperors, kings and nobles, the clergy and monks, citizens and farmers. You will get a historical point of view and technique of the critical reading of the historical text through the class.

POL500B4

ヨーロッパ近現代政治史研究 I

高澤 紀恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世ヨーロッパ社会の基底で起こった変化を、「生存の条件」「社会的結合関係」「文化変容」「緊張と排除」という 4 つの視角から検討する。対象とする時期は 16 世紀から 18 世紀とする。あらかじめ配布した資料をもちいて小グループでディスカッションする機会をもうけるなど、学生の主体的参加を求める。

【到達目標】

近世ヨーロッパ社会史をテーマとするこの授業は、2 つの到達目標をもつ。ひとつは、16 世紀以降のヨーロッパの歴史を基底でゆっくり変化する人々の生活・宗教・意識の変化から追ひ、近代ヨーロッパの理解を深めることである。二つ目は、日常性に着目する社会史の方法と成果を学ぶことを通して、私たちの生きる時代と社会を相対化し、その歴史的特質を理解することである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義、学生による報告、ディスカッションを組み合わせたクラスである。

リアクション・ペーパーは毎回提出を求める。

授業は基本的に対面で行う。レポートならびにディスカッションへのフィードバックは、授業内で行う。また学生のリアクションへのフィードバックは、次回の授業冒頭でまとめる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	社会史とはなにか
第 2 回	映画『帰ってきたマルタン・ゲール』	次回、感想文を提出のこと
第 3 回	生存の条件	他者としての過去との出会い
第 4 回	社会的結合関係（1）	血縁的な結合
第 5 回	ディスカッション（1）	婚姻と家をめぐって
第 6 回	社会的結合関係（2）	宗教的結合と地縁的結合
第 7 回	文化変容（1）	宗教改革とカトリック改革
第 8 回	文化変容（2）	民衆文化と時間・空間意識
第 9 回	文化変容（3）	文字文化の浸透
第 10 回	緊張と排除（1）	魔女
第 11 回	緊張と排除（2）	放浪者・貧民
第 12 回	緊張と排除（3）	ユダヤ人
第 13 回	ディスカッション（2）	近代と排除
第 14 回	まとめ	啓蒙のゆくえ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講学生は、テーマの一つを選び、報告（30 分）を準備すること。ディスカッションに際しては、事前に配布された資料について課題に対する自分の考えを A 4 一枚程度のレポートにまとめて持参すること。レポートはディスカッション終了後に提出すること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

とくに定めず

【参考書】

ナタリー・ゼーモン・デーヴィス『帰ってきたマルタン・ゲール——16 世紀フランスの偽亭主事件』平凡社ライブラリー、1993 年ほか。

参考文献表を最初の授業で配布する。

【成績評価の方法と基準】

報告への評価（40％）

ディスカッションへの参加・提出物などによる平常点（20％）

エッセイ形式の期末試験（40％）

【学生の意見等からの気づき】

二〇一九年度は分厚い参考文献表を最初の授業に配布しましたが、受講生はあまり活用していないことに気がつきました。今年はリストを短くして必読文献に絞るほうが有益かと思います。

【Outline and objectives】

Social history is not a simple branch of history but a critical history in its own right. By grasping the society as a whole on the level of everyday experience, it illuminates every aspect of social life considered meaningful to each historian. In this course, participants are expected to make a presentation on a topic provided in advance, and engage in discussion.

POL500B4

ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅱ

高澤 紀恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

都市は、政治・社会・経済・宗教の変動の最先端にあり、新たな統治技術が生まれる場でもあった。2021年度においては、パリという具体的な都市の歴史に即して、空間、建物、信仰の三点から中・近世における変化を分析する。あらかじめ配布した資料をもちいて小グループでディスカッションする機会をもうけるなど、学生の主体的参加を求める。

【到達目標】

中・近世都市の歴史をテーマとするこの授業は、三つの到達目標をもつ。ひとつは、「市民」、「公共性」、「代表」、「救済」といった概念が、どのような歴史的現実の中で育まれ、変容してきたかを理解することである。二つ目は、都市史研究の成果と方法を学び、自分の生活空間を学問的に検討する力を養うことである。三つめは、自分の課題意識に応じたレポート作成の技術を高めることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

このコースは、講義を中心とするが、グループ・ディスカッションも行う。

その場合は、事前に配布された資料をよく読み、A4一枚程度に考えをまとめてレポートを作成すること。このレポートをディスカッションに持参し、提出のこと。

レポートならびにディスカッションへのフィードバックは、授業内で行う。また学生のリアクションへのフィードバックは、次の授業冒頭でまとめる。

可能な限り、対面授業を基本とするが、ディスカッション部分のみZoomとするなど、ブレンド型になる可能性もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	福澤諭吉から考える都市
第2回	空間を読む（1）	パリの三つの顔
第3回	空間を読む（2）	シテ島の中心性
第4回	空間を読む（3）	右岸と市民
第5回	空間を読む（4）	左岸と大学
第6回	ディスカッション	都市と大学をめぐって
第7回	建物を読む（1）	ノートル・ダムを読む
第8回	建物を読む（2）	サン・ポールを読む
第9回	ディスカッション	残るもの、失うもの
第10回	見えないものを読む（1）	教区と街区
第11回	見えないものを読む（2）	教区教会の役割
第12回	見えないものを読む（3）	教区における闘い
第13回	見えないものを読む（4）	都市と信仰、都市の信仰
第14回	まとめ	都市を考える、都市から考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義中心のクラスであるが、ディスカッションに際しては事前に配布された資料を熟読の上、課題に答えるA4一枚程度のレポートを用意し、これを基にディスカッションを行う。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

とくになし

【参考書】

吉田伸之、伊藤毅（編）『伝統都市 全四巻』東京大学出版会、2010 年。
高澤紀恵『近世パリに生きる——ソシアビリテと秩序』岩波書店、2008 年。

高澤紀恵、アラン・ティレ、吉田伸之編『パリと江戸—— 伝統都市の比較史へ』山川出版社、2009 年。

【成績評価の方法と基準】

ディスカッションへの参加・提出物などによる平常点（40 %）、
エッセイ形式の期末試験（60 %）

【学生の意見等からの気づき】

2019 年度のクラスでは、ディスカッションに際して多くの学生がよく考えて準備してくれたと思います。2020 年度は、オンラインで行いましたが、ほぼ毎回事前に課題を出してグループ・ディスカッションを行いました。学生たちは、積極的に参加してくれ、オンライン授業が充実したものとなりました。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出などは学習支援システムを活用しますので、パソコンを使える環境がのぞましい。

【その他の重要事項】

関心のある方は必ず仮登録をしてください。
ネット環境が整わない方は、メールで相談してください。

【Outline and objectives】

This course aims to help students understand the social and spatial transformation in early modern Paris, focusing on the following four topics: topography, architecture, and religion. This course consists of lectures and discussions. Students are expected to read assignments in advance.

CUM500B4

アーカイブズ学 I

宮間 純一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学の概要と基本理念を理解する。また、記録管理のあり方をその背景にある人間社会の営みと関連付けて考える思考力を身につける。

アーカイブズとは、①組織や個人の活動のなかで蓄積された記録（とくに、永久保存される文書）、②記録を管理・公開する組織や施設のことを意味する用語であり、アーカイブズ学とはアーカイブズを支える学問分野である。

【到達目標】

アーカイブズ学の諸分野について具体的に探求するとともに、自己の研究領域とアーカイブズとの関係を認識し、具体的な研究課題を発見・設定することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義および演習。第 1・2 回は講義とし、第 3 回から 13 回は演習形式で論文講読を行う。論文講読は、受講生が分担して担当・発表したのち、教員が解説を加え、ディベートを実施する。第 14 回は、総括討論を行う。

ハイフレックス型の授業を予定しているが、感染症拡大の状況によっては、Zoom を用いたオンライン授業とする。

課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	アーカイブズ学の概要と学ぶ意義に関する講義
第 2 回	アーカイブズ学総論	アーカイブズの歴史と基本理念に関する講義
第 3 回	アーカイブズと周縁の学問領域	アーカイブズと歴史学・博物館学などに関する論文を講読する
第 4 回	前近代のアーカイブズ	前近代のアーカイブズに関する論文を講読する
第 5 回	近代日本の官僚組織と記録管理	近代日本の官僚組織と記録管理に関する論文を講読する
第 6 回	戦争と記録	戦争と記録に関する論文を講読する
第 7 回	アーカイブズと現代社会	アーカイブズと現代社会に関する論文を講読する
第 8 回	オーラル・ヒストリー	オーラル・ヒストリーに関する論文を講読する
第 9 回	近世「家」文書の構造	近世日本の文書群の構造分析に関する論文を講読する
第 10 回	近現代行政文書の構造	近現代の行政組織と公文書の構造に関する文献を講読する
第 11 回	近現代の企業記録	近代の企業記録に関する文献を講読する
第 12 回	評価選別論	アーカイブズの評価選別論に関する文献を講読する
第 13 回	アーカイブズの編成と記述	アーカイブズの編成と記述に関する論文を講読する
第 14 回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に講読する論文および関連する文献を各自が事前に目を通して
くる。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、
2003 年）

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道-記録・文書をどう残すか-』（吉
川弘文館、1985 年）
大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）
鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、
2002 年）
他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

輪読する文献は、受講生の要望を聞きながら選定する。

【学生が準備すべき機器他】

教室での参加が困難な受講生は、オンライン授業に参加可能なデバ
イス（PC・タブレット等）およびネットワーク環境が必要。また、
資料配付・諸連絡は原則 Hoppii にて行う。

【その他の重要事項】

以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う
2016 年 4 月 - 2018 年 3 月国文学研究資料館研究部 准教授
2011 年 4 月 - 2016 年 3 月宮内庁書陵部宮内公文書館 内閣府事
務官
2007 年 4 月 - 2011 年 3 月千葉県文書館県史・古文書課 嘱託職員

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代史およびアーカイブズ学
<研究テーマ>政治史、地域史、記録管理
<主要研究業績>

「公文書管理法前後の自治体アーカイブズ-アンケート調査の結果か
ら-」（『日本歴史学協会年報』（34）、2019 年）／『天皇陵と近代-
地域の中の天友皇子伝説-』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立-
明治国家と「功臣」の死-』（勉誠出版、2015 年）／『戊辰内乱期
の社会-佐幕と勤王のあいだ-』（思文閣出版、2015 年）

【Outline and objectives】

In this seminar, students learn the basic principles of archival
science.

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅱ

宮間 純一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学におけるアーカイブズ資源研究の基本的な理念・手
法を理解し、具体的な文書群の構造分析を行うことができるように
なる。
アーカイブズ資源研究とは、記録管理に関わる研究、記録の伝来を
めぐる研究、アーカイブズの構造分析などからなる分野である。

【到達目標】

アーカイブズ学資源研究の理念・手法を踏まえて、自己の研究にお
いて利活用している（あるいはこれから利活用することが予定され
ている）文書群を対象としたアーカイブズ学的分析を具体的に行之、
その成果・課題を適切に示すことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
たどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義および演習。第1・2回は講義とし、第3回から13回は演習
形式で、受講生が具体的な文書群に関わる研究発表を行う（文書群
や研究テーマは各自が設定する、授業計画に示したのは例）。発表の
のちディベートを実施する。第14回は、総括討論を行う。ハイレ
ベックス型の授業を予定しているが、感染症拡大の状況によっては、
Zoom を用いたオンライン授業とする。
課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の理念・概要に関 する講義
第2回	アーカイブズ資源研究 の方法論	アーカイブズ資源研究の研究史・ 方法論に関する講義
第3回	古代朝廷の文書管理	古代朝廷の文書管理に関する研究 報告
第4回	戦国大名の文書管理	戦国大名の文書管理に関する研究 報告
第5回	徳川幕府の文書管理	徳川幕府の官僚組織と文書管理に 関する研究報告
第6回	前近代の「家」と文書 管理	前近代の「家」における文書管理 に関する研究報告
第7回	近代官僚組織と文書管 理	近代官僚組織の成立・展開と文書 管理に関する研究報告
第8回	軍隊と文書管理	軍隊と文書管理に関する研究報告
第9回	政治家と文書管理	政治家と文書管理に関する研究報 告
第10回	企業と文書管理	企業と文書管理に関する研究報告
第11回	寺院と文書管理	寺院と文書管理に関する研究報告
第12回	神社と文書管理	神社と文書管理に関する研究報告
第13回	天皇と文書管理	天皇と文書管理に関する研究報告
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の発表担当者は関連する史料・文献を熟読し、報告の準備をす
る。それ以外の受講生は、発表担当者から事前に紹介された参考文
献に目を通してくる。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003 年）

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道－記録・文書をどう残すか－』（吉川弘文館、1985 年）

大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）

鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002 年）

国文学研究資料館編『近世大名のアーカイブズ資源研究』（思文閣出版、2016 年）

他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生からの要望に応じて、古文書調査や文書館見学の機会を設ける（任意参加）。

【学生が準備すべき機器他】

教室での参加が困難な受講生は、オンライン授業に参加可能なデバイス（PC・タブレット等）およびネットワーク環境が必要。また、資料配付・諸連絡は原則 Hoppii にて行う。

【その他の重要事項】

以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う

2016 年 4 月-2018 年 3 月国文学研究資料館 研究部准教授

2011 年 4 月-2016 年 3 月宮内庁書陵部宮内公文書館 内閣府事務官

2007 年 4 月-2011 年 3 月千葉県文書館県史・古文書課 嘱託職員

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代史およびアーカイブズ学

＜研究テーマ＞政治史、地域史、記録管理

＜主要研究業績＞「公文書管理法前後の自治体アーカイブズアンケート調査の結果から」（『日本歴史学協会年報』（34）、2019 年）／『天皇陵と近代－地域の中の天友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015 年）／『戊辰内乱期の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015 年）

【Outline and objectives】

In this seminar, students learn the application of archives science.

CUM500B4

文書館管理研究Ⅰ

宇都宮美生・青木直己・葦名ふみ・新井浩文・富塚一彦・白石烈

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要：日本および各国のアーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。

目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。

なお、この授業は、文書館管理研究Ⅱ（秋学期）と連続して受講することを必須とする。

【到達目標】

到達目標：１）アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。２）アーキビストとしての技能を身に着け、実践することができる。３）アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の進め方：オムニバス形式で教員が講義する。

方法：初回のみオンライン授業とする。２回目より対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション (04/07 宇都宮美生)	授業の計画と心構え
第 2 回	とらや文庫 1 (04/14 青木直己)	企業アーカイブズの歴史
第 3 回	とらや文庫 2 (04/14 7 限 青木直己)	企業における記録史料の収集と管理
第 4 回	とらや文庫 3 (05/26 7 限 青木直己)	企業アーカイブズの利用
第 5 回	外務省外交史料館 1 (05/12 富塚一彦)	外交史料館所蔵記録の概要と記録公開の現状
第 6 回	外務省外交史料館 2 (05/19 富塚一彦)	外務省記録および日本外交文書の歴史学的利用
第 7 回	国立国会図書館憲政資料室 1 (05/26 葦名ふみ)	憲政資料室の収集活動（歴史と現状）
第 8 回	国立国会図書館憲政資料室 2 (06/02 葦名ふみ)	憲政資料室の実務
第 9 回	宮内庁書陵部 1 (06/09 白石烈)	「皇室アーカイブズ」の概要
第 10 回	宮内庁書陵部 2 (06/16 白石烈)	宮内公文書館所蔵資料の構造
第 11 回	宮内庁書陵部 3 (06/23 白石烈)	図書寮文庫の資料保存
第 12 回	埼玉県立文書館 1 (06/30 新井浩文)	概論：公立文書館の歴史と運営
第 13 回	埼玉県立文書館 2 (07/07 新井浩文)	公文書等の保存と運営

第 14 回 埼玉県立文書館 3 公文書等の公開と活用
(07/14 新井浩文)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：参考書を読むこと。各回のテーマに関わるウェブサイトの公開情報を読んでおくこと。

復習：参考書や関連文献を読み、理解を深めること。各国アーカイブズのウェブサイトを利用して識見を広げること。

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道』（吉川弘文館、1985 年）

高野修『日本の文書館』（岩田書院、1997 年）

安藤正人『記録史科学と現代』（吉川弘文館、1998 年）

青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004 年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、期末試験（レポート形式）50 %。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

担当教員間の内容重複、関連する他の授業との内容重複に留意し、受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【学生が準備すべき機器他】

ZOOM を利用した授業もあるので、それを受講することができる IT 機器を用意すること。

学習支援システムを利用して受講に必要な情報を提供するので、それを利用することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルス感染防止対策として教室での授業ができない場合には、授業内容を変更する。本学 Web 学習支援システムの本科目における掲示板などの機能を利用するので、課題などを見落とさないように注意すると共に、頻繁に閲覧し、添付資料のダウンロードなどを行うこと。

第 3 回、第 4 回の授業が変更になっているので授業計画で確認して間違わないこと。

【担当教員の専門分野等】

〈現職〉

青木直己・元とらや文庫研究主幹

葦名ふみ・国立国会図書館利用者サービス部政治史料課憲政資料係長
新井浩文・埼玉県立文書館主席学芸主幹

白石烈・宮内庁書陵部編修課研究員

富塚一彦・外務省外交史料館外交公文書編纂官

【Outline and objectives】

Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below.(1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by professors.

CUM500B4

文書館管理研究Ⅱ

宇都宮美生・青木睦・赤松道子・長谷部圭彦・山田太造・渡辺浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要：日本および各国のアーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。

目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。

【到達目標】

到達目標：1）アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。2）アーキビストとしての技能を身につけ、実践することが出来る。3）アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の進め方：オムニバス形式で教員が講義する。

方法：オンライン授業あるいは対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション (09/22 宇都宮美生)	授業全体の概要説明と受講上の注意。
第 2 回	東京大学史料編纂所 1 (09/29 山田太造)	史料編纂所とコンピューターシステム～総論～
第 3 回	東京大学史料編纂所 2 (10/06 山田太造)	史料編纂所の DB～テキスト系 DB とメタデータ～
第 4 回	東京大学史料編纂所 3 (10/13 山田太造)	史料編纂所の DB～複製史料の画像系 DB～
第 5 回	トルコの文書館 1 (10/20 長谷部圭彦)	大統領府オスマン文書館の沿革と所蔵史料
第 6 回	トルコの文書館 2 (11/03 長谷部圭彦)	オスマン語文書史料を用いた研究の実例
第 7 回	ロシアの文書館 1 (11/10 赤松道子)	ロシアの文書と文書管理システムの歴史
第 8 回	ロシアの文書館 2 (11/17 赤松道子)	ロシアの文書と亡命
第 9 回	ロシアの文書館 3 (11/24 赤松道子)	ロシアの文書館の特徴：ロシア国立文書館など
第 10 回	アーカイブズ記述編成の方法 (12/01 渡辺浩一)	I S A D（G）「記録史料記述の国際標準」を学ぶ
第 11 回	アーカイブズ記述編成の実例 (12/08 渡辺浩一)	日本近世の文書を対象に I S A D（G）を実際に使ってみる
第 12 回	国文学研究資料館 1 (12/15 青木睦)	戦後の史料保存運動と史料保存の原則
第 13 回	国文学研究資料館 2 (12/22 青木睦)	史料のための保存環境と劣化の予防
第 14 回	国文学研究資料館 3 (01/12 青木睦)	アーカイブズ建築・設備と災害対策

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：参考書を読むこと。各回のテーマに関わるウェブサイトの公開情報を読んでおくこと。

復習：参考書や関連文献を読み、理解を深めること。各国アーカイブズのウェブサイトを利用して識見を広げること。

本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】

青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』岩田書院、2004 年

安藤正人『記録史料学と現代』吉川弘文館、1998 年

今村文彦『災害記録を未来に活かす』勉誠出版、2019 年

加藤諭『大学アーカイブズの成立と展開』吉川弘文館、2019 年
国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版、2014 年

高埜利彦『近世史研究とアーカイブズ学』青史出版、2018 年

壺阪龍哉『文書と記録』樹村房、2018 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、期末試験（レポート形式）50 %。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

担当教員間の内容重複、関連する他の授業との内容重複に留意し、受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【学生が準備すべき機器他】

ZOOM を利用した授業もあるので、それを受講することができる IT 機器を用意すること。

学習支援システムを利用して受講に必要な情報を提供するので、それを利用することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

「文書館管理研究Ⅰ」（春学期）との継続履修を強く推奨する。
新型コロナウイルス感染防止対策として教室での授業ができない場合には、授業内容を変更します。本学 Web 学習支援システムの本科目における掲示板などの機能を利用するので、課題などを見落とさないように注意すると共に、頻繁に閲覧し、添付資料のダウンロードなどを行うこと。

【担当教員の専門分野等】

<現職>

青木 睦・国文学研究資料館准教授

赤松（梶）道子・法政大学大学院兼任講師

長谷部圭彦・東京大学東洋文化研究所特任研究員

山田太造・東京大学史料編纂所准教授

渡辺浩一・国文学研究資料館教授

【Outline and objectives】

Every student of this class can get practical and basic knowledge and skills as to five points below.(1)What's an archive? (2)What are archives? (3)What's an archivist? (4)What's the mission of an archives and an archivist? (5)What are the skills of an archivist working for an archives? Students' questions, comments and discussion about the contents of this class are welcomed by the professors.

CUM500B4

記録史料学研究Ⅰ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

主に地方文書の保存・調査（整理）・管理の実践的知識について習得することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

記録史料管理の理論と方法について下記のような計画で授業を進める。具体的には、古文書の書札札や様式論を踏まえ、実物の古文書の初歩的・入門的な解説、古文書の取り扱いに関する手法、調査台帳の作り方や目録作成方法の基礎の習得が中心となる。講義・実習・発表を取り交えた授業とする。課題等に対するフィードバックは授業の後半でおこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	記録史料調査の理論と方法	目的 計画 etc
第 2 回	記録史料管理の歴史と現在 (1)	資料管理の歴史と現在
第 3 回	記録史料管理の歴史と現在 (2)	現在の史料管理の課題
第 4 回	記録史料の範疇 (1)	各種の資料管理の実情 社会組織と記録史料（身分・家・家業）
第 5 回	記録史料の範疇 (2)	地方文書 町方文書 武家文書 寺社文書
第 6 回	記録史料の範疇 (3)	古文書と古記録 古文書の種類
第 7 回	記録史料の範疇 (4)	古文書と古記録 古記録の種類
第 8 回	記録史料の取り扱い (1)	古文書 1
第 9 回	記録史料の取り扱い (2)	古文書 2
第 10 回	記録史料の取り扱い (3)	古記録 1
第 11 回	記録史料の取り扱い (4)	古記録 2
第 12 回	記録史料群の保存と調査	調査台帳の作成方法
第 13 回	記録史料群の調査・整理	調査台帳の作成方法
第 14 回	記録史料群の整理・管理	調査台帳と文書目録

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）

日本歴史学会編『概説古文書学』近世編 (吉川弘文館)
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』(柏書房)。

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %／研究発表 20 %

【学生の意見等からの気づき】

古文書をながめる時間をたくさん持つことが大事です。

【その他の重要事項】

本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史

〈研究テーマ〉都市論、記憶論

〈研究業績〉『江戸の都市化と公共空間』(塙書房、2019 年)

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

CUM500B4

記録史料学演習Ⅰ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究Ⅰの内容を踏まえ、より深く地方文書の保存・調査（整理）・管理について実践的に習得することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古文書学およびアーカイブズ学の成果ないし方法に基づき、実際の記録史料群をいかに構造的に理解し、有効な検索システムを構築するかを学ぶ。そのためには個々の史料を理解し、それを史料群全体に位置づけるという作業が必要となる。このとき史料群を生み出した人ないし組織への理解が必要不可欠となる。こうしたことを実践的に学ぶ。課題等に対するフィードバックは授業の後半でおこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容	etc
第 1 回	史料群とは何か	目的 計画	
第 2 回	史料群構造の理解（1）	史料群 1	
第 3 回	史料群構造の理解（2）	史料群 2	
第 4 回	史料群構造の理解（3）	史料群 3	
第 5 回	記録史料の取扱い（1）	古文書 1	
第 6 回	記録史料の取扱い（2）	古文書 2	
第 7 回	記録史料の取扱い（3）	古文書 3	
第 8 回	記録史料の取扱い（4）	古文書 4	
第 9 回	記録史料の調査（1）	史料 1	
第 10 回	記録史料の調査（2）	史料 2	
第 11 回	記録史料の調査（3）	史料 3	
第 12 回	記録史料の調査（4）	史料 4	
第 13 回	検索システムの構築（1）	目録整備 1	
第 14 回	検索システムの構築（2）	目録整備 2	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編（吉川弘文館）
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %／発表 20 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史

〈研究テーマ〉都市論、記憶論

〈主要研究業績〉『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019 年）

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

CUM500B4

記録史料学研究Ⅱ

浅井 良亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代の記録史料について理解を深めるため、多様な分析手法を学ぶ。具体的には、記録史料の構造や様態について、アーカイブズ学や史料学・書誌学の方法論を学ぶ。

【到達目標】

記録史料について、文字情報だけでなく、多様な情報を読み取るための知識と技能の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン方式による講義を予定している。ただし、受講生からの希望があれば、ハイフレックス方式への切替を検討する。授業は講義形式で行う。ただし、まとめの回には、質疑応答・ディスカッションを取り交えて授業を進める。課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行うこととする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	本授業の概要
第 2 回	記録史料の構造（1）	記録史料構造論と分析手法
第 3 回	記録史料の構造（2）	行政文書の構造と分析
第 4 回	記録史料の構造（3）	地域文書の構造と分析
第 5 回	記録史料の構造（4）	私家文書の構造と分析
第 6 回	記録史料の構造（5）	収集文書の構造と分析
第 7 回	記録史料の構造（6）	記録史料の構造とデジタルアーカイブ
第 8 回	まとめ	記録史料構造論に関する質疑応答・ディスカッション
第 9 回	記録史料の様態（1）	記録史料様態論と分析手法
第 10 回	記録史料の様態（2）	行政文書の様態と分析
第 11 回	記録史料の様態（3）	私家文書の様態と分析
第 12 回	記録史料の様態（4）	図像史料の様態と分析
第 13 回	記録史料の様態（5）	記録史料の様態とデジタルアーカイブ
第 14 回	まとめ	記録史料様態論に関する質疑応答・ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備（2 時間を標準）：授業内で関連文献を随時紹介するので、事前にそれらを読んで授業に臨むこと。

復習（2 時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

・熊本史雄『近代日本の外交史料を読む』ミネルヴァ書房、2020 年
・鈴江英一編『開拓使文書の森へ』北海道出版企画センター、2005 年
・中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %・レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度授業担当者変更のため）

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】

授業外の取組として、博物館や文書館における講習会の実施を予定している（詳細については、授業内でアナウンスする）。なお、講習会の参加については、あくまで授業外の取組であるため、成績評価には反映しない。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

- ・日本近世近代史
- ・史料学

＜研究テーマ＞

- ・近世近代移行期の政治と社会
- ・歴史の編纂と叙述

＜関連業績＞

- ・「モノとしての歴史資料を考える」（『村野日誌』第1巻、町田市教育委員会、2021年）
- ・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）
- ・「岩倉使節団復命記録の構造と特質」（『北の丸』52号、2020年）
- ・「戊辰戦争と『裏切り』言説」（原田敬一編『近代日本の軍隊と社会』吉川弘文館、2019年）
- ・「明治を編む―維新史料編纂事務局による維新史料の蒐集と編纂」（『北の丸』50号、2018年）

【Outline and objectives】

Learn how to understand the structure of Fonds and the function of Items for Archive Materials recorded in Modern Japan.

CUM500B4

記録史料学演習Ⅱ

浅井 良亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代の記録史料について理解を深めるため、多様な分析手法を学ぶ。具体的には、記録史料の構造や様態について、アーカイブズ学や史料学・書誌学の方法論を学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を、近代史料の調査研究やアーカイブ実務（史料整理・保存管理等）に応用することのできる実践的能力の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン方式による演習を予定している。ただし、受講生からの希望があれば、ハイフレックス方式への切替を検討する。授業は演習形式で行う。発表・質疑応答・ディスカッションを取り交えて授業を進める。課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行うこととする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の概要
第2回	発表（1）	担当受講生による発表・質疑応答
第3回	講評（1）	教員による講評およびディスカッション
第4回	発表（2）	担当受講生による発表・質疑応答
第5回	講評（2）	教員による講評およびディスカッション
第6回	発表（3）	担当受講生による発表・質疑応答
第7回	講評（3）	教員による講評およびディスカッション
第8回	発表（4）	担当受講生による発表・質疑応答
第9回	講評（4）	教員による講評およびディスカッション
第10回	発表（5）	担当受講生による発表・質疑応答
第11回	講評（5）	教員による講評およびディスカッション
第12回	発表（6）	担当受講生による発表・質疑応答
第13回	講評（6）	教員による講評およびディスカッション
第14回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備（2時間を標準）：授業で取り上げる記録史料を随時紹介するので、事前にそれらを読解・理解して授業に臨むこと。
復習（2時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

- ・熊本史雄『近代日本の外交史料を読む』ミネルヴァ書房、2020年
- ・鈴江英一編『開拓使文書の森へ』北海道出版企画センター、2005年
- ・中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %・発表 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度授業担当者変更のため）

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】

記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を基礎として授業を進めるため、同科目と合わせて受講することを推奨する。

授業外の実習として、博物館や文書館における講習会の実施を予定している（詳細については、授業内でアナウンスする）。なお、講習会の参加については、あくまで授業外の実習であるため、成績評価には反映しない。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

- ・日本近世近代史
- ・史料学

＜研究テーマ＞

- ・近世近代移行期の政治と社会
- ・歴史の編纂と叙述

＜関連業績＞

- ・「モノとしての歴史資料を考える」（『村野日誌』第1巻、町田市教育委員会、2021年）
- ・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）
- ・「岩倉使節団復命記録の構造と特質」（『北の丸』52号、2020年）
- ・「戊辰戦争と『裏切り』言説」（原田敬一編『近代日本の軍隊と社会』吉川弘文館、2019年）
- ・「明治を編む：維新史料編纂事務局による維新史料の蒐集と編纂」（『北の丸』50号、2018年）

【Outline and objectives】

Learn how to understand the structure of Fonds and the function of Items for Archive Materials recorded in Modern Japan.

LIN500B4

外書講読Ⅰ

池本 今日子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア史に関するロシア語文献ないし史料を読み、研究の深化につながる読み方を身につける。

【到達目標】

ロシア史に関する理解を深める。

論文作成に必要な、ロシア語文献の読解能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

外国語文献の講読。オンライン授業（リアルタイム配信型）。Zoom使用。テキストは、ロシア・東欧に関する外国語論文や史料の中から、受講者全員の希望を聞いて、全体として相応しいものを選ぶ予定である。たとえば、次の文献が候補の一つだが、柔軟に対応する。カルボーヴィチ『近代ロシア革命への道程』（白水社）（日本語の注釈付きロシア語テキスト）。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキスト決定など
第2回	講読①	講読、質疑、解説
第3回	講読②	講読、質疑、解説
第4回	講読③	講読、質疑、解説
第5回	講読④	講読、質疑、解説
第6回	講読⑤	講読、討論
第7回	講読⑥	講読、討論
第8回	講読⑦	講読、質疑、解説
第9回	講読⑧	講読、質疑、解説
第10回	講読⑨	講読、質疑、解説
第11回	講読⑩	講読、質疑、解説
第12回	講読⑪	講読、質疑、解説
第13回	講読⑫	講読、討論
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。講読テキストの予習。各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。

【テキスト（教科書）】

未定（カルボーヴィチ『近代ロシア革命への道程』（白水社）をテキストとする場合以外はプリントを配布）

【参考書】

特に定めない

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ロシア史

＜研究テーマ＞外交、憲法、ポーランド問題

＜主要研究業績＞『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』2006年12月、風行社。

【Outline and objectives】

To read documents on Russian history in Russian.

LIN500B4

外書講読Ⅱ

池本 今日子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア史に関するロシア語文献ないし史料を読み、研究の深化につながる読み方を身につける。

【到達目標】

ロシア史に関する理解を深める。

論文作成に必要な、ロシア語文献の読解能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

外国語文献の講読。オンライン授業（リアルタイム配信型）。Zoomを使用。テキストは、ロシア・東欧に関する外国語論文や史料の中から、受講者全員の希望を聞いて、全体として相応しいものを選ぶ予定である。次の文献を候補の一つとするが、柔軟に対応する。カルポーヴィチ『近代ロシア革命への道程』（白水社）（日本語注釈つきロシア語テキスト）。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの決定など
第2回	講読①	講読、質疑、解説
第3回	講読②	講読、質疑、解説
第4回	講読③	講読、質疑、解説
第5回	講読④	講読、質疑、解説
第6回	講読⑤	講読、討論
第7回	講読⑥	講読、討論
第8回	講読⑦	講読、質疑、解説
第9回	講読⑧	講読、質疑、解説
第10回	講読⑨	講読、質疑、解説
第11回	講読⑩	講読、質疑、解説
第12回	講読⑪	講読、質疑、解説
第13回	講読⑫	講読、討論
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

講読テキストの予習。各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。

【テキスト（教科書）】

未定（カルポーヴィチ『近代ロシア革命への道程』（白水社）をテキストとする場合以外はプリント配布）。

【参考書】

特に定めない

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ロシア史

<研究テーマ>外交、憲法、ポーランド問題

<主要研究業績>『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』2006年12月、風行社。

【Outline and objectives】

To read documents on Russian history in Russian.

GEO500B5

地形学研究 I

前 佐 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形・地質学的方法による活動的な地殻変動の解明

【到達目標】

地震、火山噴火、曲隆・曲降など活動的な地球変動のメカニズムについて、地形・地質学的方法によりアプローチした研究論文を読解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	地球規模からみた世界の変動帯
第 2 回	活動的な地殻変動 (1)	アメリカ西海岸の活構造
第 3 回	活動的な地殻変動 (2)	造陸運動とプレート内部の活動
第 4 回	活動的な地殻変動 (3)	活断層評価と災害
第 5 回	活動的な地殻変動 (4)	褶曲に関連する活断層
第 6 回	活動的な地殻変動 (5)	活構造と河川の沖積作用
第 7 回	活動的な地殻変動 (6)	海岸の変動地形
第 8 回	活動的な地殻変動 (7)	山麓での変動地形
第 9 回	活動的な地殻変動 (8)	活構造の研究法と地球表層プロセス
第 10 回	活動的な地殻変動 (9)	古地震研究と活構造
第 11 回	活動的な地殻変動 (10)	活構造プロセスの測地学的研究
第 12 回	活動的な地殻変動 (11)	年代測定法
第 13 回	活動的な地殻変動 (12)	地震災害に関する地質学的研究
第 14 回	活動的な地殻変動 (13)	火山災害とアセスメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成を行う際に、参考書やネットで公開されている情報を幅広く検索し、担当するテーマそのものだけでなく、関連する分野の知識も同時に身に付けることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

Active Tectonics, National Academy Press, 1986

Tsunamiites, Elsevier, 2008

The Geology of Earthquakes, Oxford University Press, 1997

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション 50 %、討論 40 %、態度・意欲 10 %

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象科目ではないため該当しない。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター、パソコン、スクリーン

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Tectonic geomorphology

GEO500B5

地形学研究Ⅱ

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形・地質学的方法による活動的な地殻変動の解明

【到達目標】

地震、火山噴火、曲隆・曲降、活断層など活動的な地球変動のメカニズムについて、地形・地質学的方法による新たな研究テーマを設定できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	変動地形および地殻変動研究の動向
第2回	活断層研究(1)	日本の活断層研究(1)
第3回	活断層研究(2)	日本の活断層研究(2)
第4回	活断層研究(3)	世界の活断層研究(1)
第5回	活断層研究(4)	世界の活断層研究(2)
第6回	活断層研究(5)	世界の活断層研究(3)
第7回	津波研究(1)	津波の海洋学的研究
第8回	津波研究(2)	津波堆積物研究(1)
第9回	津波研究(3)	津波堆積物研究(2)
第10回	津波研究(4)	津波巨礫研究
第11回	広域的地殻変動研究(1)	日本の海成段丘研究
第12回	広域的地殻変動研究(2)	世界の海成段丘研究
第13回	広域的地殻変動研究(3)	造山運動研究
第14回	広域的地殻変動研究(4)	造盆地運動研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
 プレゼンテーション準備、レジュメ作成を行う際に、参考書やネットで公開されている情報を幅広く検索し、担当するテーマそのものだけでなく、関連する分野の知識も同時に身に付けることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

学術雑誌または論文集の研究論文を使用する

【参考書】

Active Tectonics, National Academy Press,1986

Tsunamiites,Elsevier,2008

The Geology of Earthquakes, Oxford University Press,1997

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション 50 %、討論 40 %、態度・意欲 10 %

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象科目ではないため該当しない。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター、パソコン、スクリーン

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Tectonic geomorphology

GEO600B5

地形学演習 I

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる修士論文作成のための研究指導

【到達目標】

修士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を熟成させることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】**【授業の進め方と方法】**

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第 2 回	研究テーマの設定 1	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換 1
第 3 回	研究テーマの設定 2	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換 2
第 4 回	研究内容の紹介 1	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 1
第 5 回	研究内容の紹介 2	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 2
第 6 回	研究内容の紹介 3	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 3
第 7 回	研究内容の紹介 4	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 4
第 8 回	受講生の研究内容 1	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 1
第 9 回	受講生の研究内容 2	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 2
第 10 回	受講生の研究内容 3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 3
第 11 回	受講生の研究内容 4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 4
第 12 回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導 1	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 1
第 13 回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導 2	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 2
第 14 回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導 3	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 3

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

とくに指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献を使用する。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会

「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Research instruction for master thesis on Geomorphology or Quaternary Science

GEO600B5

地形学演習Ⅱ

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる修士論文作成のための研究指導

【到達目標】

修士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を熟成・完成させることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	受講生の研究内容1	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論1
第3回	受講生の研究内容2	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論2
第4回	受講生の研究内容3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論3
第5回	受講生の研究内容4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論4
第6回	受講生の研究内容5	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論5
第7回	受講生の研究内容6	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論6
第8回	受講生の研究内容7	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論7
第9回	受講生の研究内容8	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論8
第10回	受講生の研究内容9	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論9
第11回	受講生の研究内容10	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論10
第12回	受講生の研究内容11	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導11
第13回	受講生の研究内容12	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導12

第14回 受講生の研究内容13 受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

とくに指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献を使用する。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会
「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前空英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Research instruction for master thesis on Geomorphology or Quaternary Science

GEO500B5

気候学研究 I

山口 隆子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学・生気象学を研究していくうえで必要となる環境気候学を学びます。

【到達目標】

環境と気候のとらえかたを学び、気候学に関する研究テーマを設定できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とします。

作成したレジュメに対するフィードバックは、講義内で行います。対面での講義が実施できない場合、ZOOMによるオンライン授業になります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生との講義内容に関する意見交換
第2回	地生態学概論①	地生態学とは何か
第3回	地生態学概論②	地生態学の方法
第4回	高山帯の植生①	木曽駒ヶ岳高山帯の自然景観
第5回	高山帯の植生②	白馬岳の植生①
第6回	高山帯の植生③	白馬岳の植生②
第7回	高山帯の植生④	檜尾岳の植生
第8回	高山帯の植生⑤	蝶ヶ岳の植生
第9回	高山帯の植生⑥	赤石岳の植生
第10回	高山帯の植生⑦	白馬岳の植生遷移と斜面発達
第11回	山地帯・丘陵帯の植生①	三頭山のブナ
第12回	山地帯・丘陵帯の植生②	飯豊山地の風食と植物群落
第13回	山地帯・丘陵帯の植生③	東北日本の地すべり起源の植物群落
第14回	山地帯・丘陵帯の植生④	多摩地域のカンアオイ類の分布と地形

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成に際し、周辺分野についても幅広く取り扱うようにすること。

【テキスト（教科書）】

小泉武栄(2018)：『地生態学からみた日本の植生』、文一総合出版,444p.

【参考書】

講義内でその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。

発表：50%、討論：50%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、気候変動等の取組について講義していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学・気候学・生気象学

<研究テーマ>

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

<主要研究業績>

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 - 128.

山口隆子（2006）：日本における百葉箱の歴史と現状について，天気，Vol.53, No.4, pp. 3 - 13.

山口隆子（2004）：生気象学的観点からみた気圧変動について，日本生気象学会誌，Vol.40, No.S, pp. 293 - 302.

【Outline and objectives】

Learn the environmental climatology that is necessary for studying climatology and biometeorology.

GEO500B5

気候学研究Ⅱ

山口 隆子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学・生気象学を研究していくうえで必要となる環境気候学を学びます。

【到達目標】

人間環境と気候及び気候利用について学び、気候学に関する研究テーマを設定できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とします。作成したレジュメに対してのフィードバックは、講義内で行います。対面での講義が実施できない場合、ZOOM によるオンライン授業になります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	講義内容に関する意見交換
第 2 回	火山の植生①	御嶽山の植生
第 3 回	火山の植生②	磐梯山カルデラ内の植生
第 4 回	火山の植生③	乗鞍の高山植生
第 5 回	石灰岩地の植生①	アボイ岳の植生
第 6 回	石灰岩地の植生②	早池峰山の植生
第 7 回	永久凍土地域の植生①	大雪山の植生
第 8 回	永久凍土地域の植生②	エルズミア島の植生
第 9 回	永久凍土地域の植生③	黄河源流地域の植生
第 10 回	ニュージーランドの自然①	ニュージーランドの氷河と植生
第 11 回	ニュージーランドの自然②	トンガリロ国立公園の自然誌
第 12 回	河川と水辺の植生①	多摩川のカワラノギク
第 13 回	河川と水辺の植生②	渥美半島のシデコブシ
第 14 回	まとめ	地生態学とは何か

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成に際し、周辺分野についても幅広く取り扱うようにすること。

【テキスト（教科書）】

小泉武栄（2018）：『地生態学からみた日本の植生』，文一総合出版，444p.

【参考書】

講義内でその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。

発表：50 %、討論：50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、気候変動等の取組について講義していきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学・気候学・生気象学

＜研究テーマ＞

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

＜主要研究業績＞

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 - 128.

山口隆子（2006）：日本における百葉箱の歴史と現状について，天気，Vol.53, No.4, pp. 3 - 13.

山口隆子（2004）：生気象学的観点からみた気圧変動について，日本生気象学会誌，Vol.40, No.5, pp. 293 - 302.

【Outline and objectives】

Learn the environmental climatology that is necessary for studying climatology and biometeorology.

GEO600B5

気候学演習 I

山口 隆子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学に関わる修士論文作成のための研究指導。

【到達目標】

研究テーマ設定、既存研究論文紹介、研究手法について発表し、議論を重ねることによって、修士論文を仕上げていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の研究テーマに関する手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行います。提出されたレジュメに対し、授業内に講評、フィードバックを行います。対面での講義が実施できない場合、ZOOM によるオンライン授業になります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	本演習の進め方について
第 2 回	研究テーマの設定（1）	研究テーマに関する意見交換（1）研究目的
第 3 回	研究テーマの設定（2）	研究テーマに関する意見交換（2）研究計画
第 4 回	研究内容の紹介（1）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（1）気候学（国内）
第 5 回	研究内容の紹介（2）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（2）気象学（国内）
第 6 回	研究内容の紹介（3）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（3）気候学（海外）
第 7 回	研究内容の紹介（4）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（4）気象学（海外）
第 8 回	研究手法の検討（1）	研究手法の報告、議論（1）対象地域
第 9 回	研究手法の検討（2）	研究手法の報告、議論（2）対象期間
第 10 回	研究手法の検討（3）	研究手法の報告、議論（3）対象データ
第 11 回	研究手法の検討（4）	研究手法の報告、議論（4）解析手法
第 12 回	研究の方向性（1）	研究の方向性に関する議論
第 13 回	研究の方向性（2）	研究の方向性に関する指導
第 14 回	まとめ	修士論文の中間発表及び今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
研究テーマに関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

泉岳樹・松山洋（2017）：『卒論・修論のための自然地理学フィールド調査』，古今書院，120 p.

【成績評価の方法と基準】

到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。

ゼミという科目の性格上、出席状況と本演習の場へ臨む「姿勢・取り組み方」(30%)、「討論への参加と応答」(30%)、「発表内容」(40%)で評価を行います。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学・気候学・生気象学

＜研究テーマ＞

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

＜主要研究業績＞

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 - 128.

山口隆子（2006）：日本における百葉箱の歴史と現状について，天気，Vol.53, No.4, pp. 3 - 13.

山口隆子（2004）：生気象学的観点からみた気圧変動について，日本生気象学会誌，Vol.40, No.S, pp. 293 - 302.

【Outline and objectives】

Research guidance for preparing master's thesis related to climatology.

GEO600B5

気候学演習Ⅱ

山口 隆子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学に関わる修士論文作成のための研究指導。

【到達目標】

観測・解析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を仕上げていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の研究テーマに関する手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行います。提出されたレジュメに対し、講義内で講評、フィードバックを行います。対面での講義が実施できない場合、ZOOMによるオンライン授業になります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本演習の進め方
第2回	研究内容の報告（1）	研究の進捗状況報告（研究目的）
第3回	研究内容の報告（2）	研究の進捗状況議論（研究目的）
第4回	研究内容の報告（3）	研究の進捗状況報告（研究手法）
第5回	研究内容の報告（4）	研究の進捗状況議論（研究手法）
第6回	研究内容の報告（5）	研究の進捗状況報告（対象地域）
第7回	研究内容の報告（6）	研究の進捗状況議論（対象地域）
第8回	研究内容の報告（7）	研究の進捗状況報告（対象期間）
第9回	研究内容の報告（8）	研究の進捗状況議論（対象期間）
第10回	研究内容の報告（9）	研究の進捗状況報告（対象データ）
第11回	研究内容の報告（10）	研究の進捗状況議論（対象データ）
第12回	研究内容の報告（11）	研究の進捗状況報告（解析結果）
第13回	研究内容の報告（12）	研究の進捗状況議論（解析結果）
第14回	まとめ	修士論文の最終発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
研究テーマに関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

泉岳樹・松山洋（2017）：『卒論・修論のための自然地理学フィールド調査』，古今書院，120 p.

【成績評価の方法と基準】

到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。

ゼミという科目の性格上、出席状況と本演習の場へ臨む「姿勢・取り組み方」(30%)、「討論への参加と応答」(30%)、「発表内容」(40%)で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学・気候学・生気象学

＜研究テーマ＞

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

＜主要研究業績＞

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 - 128.

山口隆子（2006）：日本における百葉箱の歴史と現状について，天気，Vol.53, No.4, pp. 3 - 13.

山口隆子（2004）：生気象学的観点からみた気圧変動について，日本生気象学会誌，Vol.40, No.S, pp. 293 - 302.

【Outline and objectives】

Research guidance for preparing master's thesis related to climatology.

GEO500B5

水文学研究 I

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業概要：水循環の定量的評価と水資源の持続可能な利用と GIS を用いた地域空間解析

・授業の目的・意義：水文学の根幹を成す水循環を定量的に評価する手法について理解し，水資源の持続可能な利用への応用を学ぶ。また、水文学以外の分野を専門とする学生を中心に、GIS を用いた地域空間解析の手法の基礎について学ぶ。

【到達目標】

環境および資源として人間生活と密接な関わりを持つ陸水について，存在量と循環速度を評価することができるようにする。

異なる時空間尺度における水温・水質の分布特性について，水循環の過程におけるあり方を理解することができるようにする。

水文学・陸水学分野において修士論文を書く学生に対しては，テーマ設定から研究・調査方法・分析手法・解析手法・論文執筆について基本的な能力を養成する。

他の分野を主とする学生に対しても，GIS を用いた地域空間情報解析を行った上での基本的な研究能力の育成を図る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究課題に結びつくテーマを中心に，論文講読，受講生による発表，討議を中心に進めることにより，受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。

毎回の授業では，出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ，次回授業でその内容についてコメントする。

また，小レポートと最終レポートを提出させ，それぞれ評価した上で，模範解答を基に，理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	1. 地球上の水の量と循環 2. 地域空間情報解析とは	1. 資源としての水の再検証 2. 地域空間情報解析の基礎概念の理解
第 2 回	1. 水収支要素の算出手法 2. 様々な地域空間情報	1. 水の地域配分の決定事項 2. 地域空間情報にどのようなものがあるか理解する
第 3 回	1. 水収支の変化と要因 2. ラスタデータとベクタデータ	1. 降水量と蒸発散量の評価 2. 様々なタイプのデータについて理解する
第 4 回	1. 降雨－流出過程 2. 国土数値情報	1. 降雨に伴う河川の応答 2. 様々な国土数値情報の特性と活用法について理解する
第 5 回	1. 直接流出と基底流出 2. 統計 GIS	1. ハイドログラフの解析 2. 統計 GIS のデータの特性と活用法について理解する
第 6 回	1. 地下水と河川水の交流 2. 一般図	1. 流域における水の挙動 2. 一般図として活用できる電子地図について理解する
第 7 回	1. 閉塞湖の地下水漏出 2. 主題図	1. 湧水涵養源としての湖水 2. 主題図の基本について理解する

第 8 回	1. 課題発表と討論 2. ジオリファレンス	1. プレゼンテーション実施 2. ジオリファレンスの基礎について学ぶ
第 9 回	1. 陸水の水温特性 2. 土地利用変化解析	1. 水の熱的特性と水温構造 2. 土地利用変化解析の基礎について学ぶ
第 10 回	1. 水質形成の自然的要因 2. 国勢調査データ解析	1. 溶存成分の起源・由来 2. 国勢調査データ解析の基礎を学ぶ
第 11 回	1. 水質形成の人為的要因 2. バッファリング	1. 水質と人間活動 2. バッファリングの基礎について学ぶ
第 12 回	1. 水質の変動機構 2. ネットワーク解析	1. 水域の富栄養化 2. ネットワーク解析の基礎について学ぶ
第 13 回	1. 水質汚染の解明手法 2. 総合実習①	1. 水質の時系列変化 2. 個別テーマでの総合実習
第 14 回	1. 水循環の定量的評価 2. 総合実習②	1. 滞留時間の算定 2. 個別テーマでの総合実習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
各回のテーマと内容に則した論文を事前に検索し、研究対象地域の水文特性、調査研究手法、および結果と考察に関する要約を簡潔に文書化する。論文講読による準備学習の成果を授業中の質疑応答と討議の際の重要な素材とするので、事前の学習活動と主体的に取り組むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として授業中に配布する。

【参考書】

森 和紀・佐藤芳徳（2015）：「図説 日本の湖」，朝倉書店。
市川正巳【編】（1990）：「水文学－総観地理学講座 8－」，朝倉書店。

【成績評価の方法と基準】

発表 30 %，討議参加 20 %，レポート 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究分野、興味の対象に応じ、毎回の質疑応答の結果を見ながら、適宜講義内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】

基本的に、GIS を用いた解析が前提になっているので、必要なハードウェアとソフトウェアの準備が必要。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞水文学・陸水学・自然地理学
＜研究テーマ＞人間活動に伴う水文環境の変化

【Outline and objectives】

The basic ability is trained about a research work, investigation method, an analytical method, an analysis method and thesis writing from theme setting to the student who writes a master thesis in hydrology and the land water science field.

The case which is the hydrology field to the student who makes the other fields the center, too, and, I plan for upbringing of basic research capability.

In addition, students who specialize in fields other than hydrology will learn the basics of regional spatial analysis using GIS.

GEO500B5

水文学研究Ⅱ

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業概要：水環境の保全と水資源の統合管理・GIS を用いた地域空間情報解析
・授業の目的・意義：水環境保全の解決手法を理解し、今日的課題としての水資源の統合管理について学ぶ。また、水文学を主専攻としない学生は、GIS を用いた地域空間情報解析の応用について主に学ぶ。

【到達目標】

・陸水の理化学的特性とその変動機構、水文環境と気候変動との因果関係について評価することができる。
・水圏・大気圏・岩石圏の複合領域において存在する地球上の水のあり方、流域単位の水管理について理解することができる。
・様々な地域空間情報に関して、GIS を用いた解析とその結果を用いた主題図などの作成ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究課題に結びつくテーマを可能な限り取り上げることにより、水をキーワードとする自然地理学の研究法を議論し、受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。論文講読、受講生による発表、および全員での討議を中心に進める。水文学以外を主専攻とする学生に関しても、専門に応じて同様に授業を進める。

毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	1. 水温による水の追跡 2. 地域空間情報解析の応用	1. 温度が語る水の履歴 2. 地域空間情報解析の応用について学ぶ
第 2 回	1. 放射性同位体の応用 2. 様々な地域空間情報	1. トリチウム 2. 国内外の様々な地域空間情報について
第 3 回	1. 安定同位体の応用 2. 国土数値情報の活用	1. 酸素 18，デューテリウム 2. 国土数値情報を活用する応用面について学ぶ
第 4 回	1. 気候変動と水賦存量 2. 統計 GIS の活用	1. 水温上昇が与える影響 2. 統計 GIS データの活用に関する応用面について学ぶ
第 5 回	1. 地球温暖化と水文環境 2. 投影法の変更	1. 貧酸素層の形成 2. 目的に応じた投影法の変更について学ぶ
第 6 回	1. 都市の水文環境 2. 測地系の変更	1. 地下水環境の変化 2. 測地系の変更について学ぶ
第 7 回	1. 水資源の持続可能性 2. ラスタデータの幾何補正①	1. 水資源の開発と適正利用 2. 様々なラスタデータの幾何補正について学ぶ①

第 8 回	1. 課題発表と討論 2. ラスタデータの幾何補正②	1. プレゼンテーション実施 2. 様々なラスタデータの幾何補正について学ぶ②
第 9 回	1. 親水環境の創造 2. 複数レイヤ解析	1. 親水環境の創造 2. 複数のレイヤを用いた地域空間情報解析について学ぶ
第 10 回	1. 総合治水と流域管理 2. 複合解析①	1. 治水と治山 2. 複数の解析を組み合わせた地域空間情報解析について学ぶ①
第 11 回	1. 日本の水利用と課題 2. 複合解析②	1. 地下水の人工涵養 2. 複数の解析を組み合わせた地域空間情報解析について学ぶ②
第 12 回	1. 国際社会の水資源問題 2. 総合実習①	1. 途上国の水資源と水環境 2. 具体的なテーマに対して総合実習を行う①
第 13 回	1. 水文環境の保全 2. 総合実習①	1. 「名水」の提唱と保存 2. 具体的なテーマに対する総合実習の結果を発表する
第 14 回	1. 風土としての水 2. まとめ	1. 自然地理学からみた水 2. 総合実習の結果などについて講評する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

各回のテーマと内容に則した論文を事前に検索し、研究対象地域の水文特性、調査研究手法、および結果と考察に関する要約を簡潔に文書化する。論文講読による準備学習の成果を授業中の質疑応答と討議の際の重要な素材とするので、事前の学習活動と主体的に取り組むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として授業中に配布する。

【参考書】

新井 正（2004）：「地域分析のための熱・水収支水文学」、古今書院。

山本莊毅・高橋 裕（1988）：「図説 水文学－水文学講座 2－」、共立出版。

【成績評価の方法と基準】

総合的に判断する。

発表 30 %，討議参加 20 %，レポート 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究分野、興味の対象に応じ、毎回の講義に対する学生の反応を基に、修正を加えながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】

基本的に、GIS を用いた地域空間情報解析を中心とするので、ハードウェアとソフトウェアの事前準備が必要である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>水文学・陸水学・自然地理学

<研究テーマ>人間活動に伴う水文環境の変

【Outline and objectives】

The basic ability is trained about a research work, investigation method, an analytical method, an analysis method and thesis writing from theme setting to the student who writes a master thesis in hydrology and the land water science field.

The case which is the hydrology field to the student who makes the other fields the center, too, and, I plan for upbringing of basic research capability.

Students who do not major in hydrology mainly learn about the application of regional spatial information analysis using GIS.

GEO600B5

水文学演習 I

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

水文学の根幹を成す水循環を定量的に評価する手法について理解し、水資源の持続可能な利用への応用を学ぶ。

環境および資源として人間生活と密接な関わりを持つ陸水について、存在量と循環速度を評価することができるようにする。異なる時空間尺度における水温・水質の分布特性について、水循環の過程におけるあり方を理解することができるようにする。

水文学・陸水学分野において修士論文を書く学生に対しては、テーマ設定から研究・調査方法・分析手法・解析手法・論文執筆について基本的な能力を養成する。他の分野を主とする学生に対しても、水文学分野の事例をもとに、基本的な研究能力の育成を図る。

【到達目標】

受講生は、研究課題に結びつくテーマを中心に、現地調査方法、調査結果の分析・解析方法、まとめ方などについて、発表、討議を中心に進め、研究結果を論文としてまとめる基礎的能力の育成を図る。

同時に、GIS を用いて時空間解析を行い、様々な主題図として提示する能力も身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初年時の学生は、卒論について発表し、受講生全員で議論しながら、修論への展開について指針を示す。2 年次以降の学生は修論に関わる調査結果を発表し、主にデータ解析について受講生全員で議論する。

毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	卒論結果・修論構想発表①	テーマ・キーワード・研究目的について
第 2 回	卒論結果・修論構想発表②	研究方法・地域概略について
第 3 回	卒論結果・修論構想発表③	結果・考察について
第 4 回	卒論結果・修論構想発表④	まとめ・文献・要旨について
第 5 回	文献検索法	国内外の文献について
第 6 回	研究法・調査法	研究理論と現地調査方法
第 7 回	水質分析法①	一般水質
第 8 回	水質分析法②	安定同位体・環境同位体
第 9 回	データ解析法①	一般解析（相関・重回帰など）
第 10 回	データ解析法②	GIS 解析（小流域原単位法・SWAT モデルなど）
第 11 回	データ解析法③	様々な解析法（クラスター・主成分など）
第 12 回	主題図作成法①	水文誌
第 13 回	主題図作成法②	統計地図・水質分布図
第 14 回	まとめ	総合的な考察

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

各回のテーマと内容に則し、ほぼ毎回、受講生の研究テーマに沿った発表を求めるので、事前に準備して望むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を指示する。

【参考書】

森 和紀・佐藤芳徳（2015）：「図説 日本の湖」，朝倉書店。
市川正巳〔編〕（1990）：「水文学－総観地理学講座 8－」，朝倉書店。

【成績評価の方法と基準】

授業内での発表、討議を踏まえて、提出論文をもとに、総合的に評価する。

発表 30 %，討議参加 20 %，レポート 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義に対する学生の反応をもとに適宜修正しながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】

毎回、プレゼンテーションが必要であるため、必ずノートパソコンを用意すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 自然地理学・水文学・陸水学

<研究テーマ>

- 1) 水循環に伴う物質循環
- 2) 人間活動に伴う水環境変化と保全
- 3) GIS を用いた流域水・物質循環解析と環境マネジメント

【Outline and objectives】

A member of a class plans for upbringing of the basic ability to gather a research result as a thesis by an analysis of field survey method and survey result and the thing from which an announcement by a member of a class and discussion are advanced to the center about an analysis method and how to gather focusing on the theme related to a research task of a member of a class.

GEO600B5

水文学演習Ⅱ

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

水環境保全の解決手法を理解し、今日的課題としての水資源の統合管理について学ぶ。

陸水の理化学的特性とその変動機構、水文環境と気候変動との因果関係について評価することができるようにする。水圏・大気圏・岩石圏の複合領域において存在する地球上の水のあり方、流域単位の水管理についても理解することができるようにする。

受講生が、それぞれのテーマにしたがって、実際に論文が執筆できる能力の育成を図る。

【到達目標】

受講生は、研究課題に結びつくテーマを可能な限り取り上げることにより、水をキーワードとする自然地理学の研究法を議論し、受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。

また、GIS を用いて時空間解析を行い、様々な主題図として示す能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初年次の学生は、「水文学演習Ⅰ」の結果をもとに修論の構想を発表し、予備調査の結果について報告する。2 年次以降の学生は、仮の論文を提出し発表して、受講生全員で内容の吟味を行う。

毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の構成	先行研究・目的・研究法など
第 2 回	調査計画	対象地域選定・観測頻度など
第 3 回	現地調査法①	利用機材・設置方法など
第 4 回	現地調査法②	現地との連携・許可申請など
第 5 回	論文の構成①	形式について
第 6 回	論文の構成②	図表の配置について
第 7 回	論文の構成③	文献・要旨など
第 8 回	論文の推敲①	文章の長さ
第 9 回	論文の推敲②	文章表現
第 10 回	論文の推敲③	文章のバランス
第 11 回	投稿先選定	学会誌毎の特徴
第 12 回	編集委員とのやりとり	投稿規定など
第 13 回	査読者とのやりとり	修正要求への返答法
第 14 回	まとめ	実際に論文を完成させ、投稿

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

各自の具体的なテーマに応じて、実際に論文を作成し、学会誌に投稿する段階まで指導するので、事前に調査結果などを精査し、解析しておくこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として利用する。

【参考書】

新井 正（2004）：「地域分析のための熱・水収支水文学」，古今書院。

山本莊毅・高橋 裕（1988）：「図説 水文学－水文学講座 2－」，共立出版。

【成績評価の方法と基準】

総合的に判断する。

発表 30 %、討議参加 20 %、レポート 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義に対する学生の反応を基に、修正を加えながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】

毎回、必ずプレゼンテーションが必要なので、ノートパソコンを持参すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学・水文学・陸水学

<研究テーマ>

- 1) 水循環に伴う物質循環
- 2) 人間活動に伴う水環境変化と保全
- 3) GIS を用いた流域水・物質循環解析と環境マネジメント

【Outline and objectives】

Solution methodology of water environment protection is understood and it's learned about integrated management of water resources as a present-day problem.

I make sure that it'll be possible to estimate about the physics and chemistry-like special quality of the land water, the fluctuation organization and causality with hydrological environment and variation in climate. I make sure that it'll be also possible to understand about water management of the state of the water and the basin unit on the earth which exists in compound territory in hydrosphere, atmosphere and a lithosphere.

A member of a class plans for upbringing of the ability with which a thesis can be written actually with the respective themes.

GEO500B5

第四紀学研究 I

藁谷 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人類の進化と現在の自然環境の成立にとって、極めて関連の深い第四紀の自然環境とその変動について講義する。学生は、第四紀の自然環境のうち、気候変動、地形・地質、雪氷などの知識を修得する。そして、自然環境の構成要素が相互に関連しあっていることを認識し、地学現象の解明には統合的視点が重要であることを理解する。

【到達目標】

学生は、気候変動、氷河の発達、および近年の気候変化に伴う自然災害などに関する知識を獲得し、自らこれらを説明することができる。また、地形図判読の課題を通じて、地形・地質の理解に不可欠の地形図による地形判読のスキルを身につけることができる。そして、自然をシステムという観点からとらえ、統合的な見方・考え方を獲得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、大学が定義するオンデマンド授業により実施する。すなわち、オンデマンドによる教材、既文文献・資料のレビューなどのコンテンツ配信を基本とするが、オンラインにより学生による発表・討論などを総合した形式で進める。取り上げる主要テーマは「授業計画」の通りである。また、課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	地球システムの見方・考え方	地球をシステムとして捉えて自然環境を観察することの重要性を講義する。
2	第四紀の定義と環境	第四紀の定義および地形・地質環境に関する基本的な事項を講義する。
3	気候変動の仕組み	ミランコビッチサイクルなど、気候変動の原因について講義する。
4	第四紀の気候と海水準の変動	氷期サイクルとそれが地形形成に与える効果について講義する。
5	第四紀の地形と地質（1）	完新統からなる地形について解説するとともにその地形判読をおこなう。
6	第四紀の地形と地質（2）	更新統以降の地質からなる地形について解説するとともにその地形判読をおこなう。
7	第四紀の気候と植生・土壌	第四紀の気候、植生、土壌環境に関する基本的な事項を講義する。
8	アントロポセン（人新世）における気候システムの变化	産業革命以降の気候システムの変化について講義する。
9	大陸氷床・山岳氷河の形成と分布	氷床、氷河などの分布やそれらの形成過程を講義する。
10	氷河の作用と氷河地形	氷河の作用と山岳氷河がつくりあげる地形について講義する。
11	周氷河プロセスと周氷河地形	周氷河作用と周氷河地形について講義する。

12	氷河湖の形成と決壊洪水	近年の気候変化に伴う氷河湖の拡大と氷河湖決壊洪水について講義する。
13	巨大崩壊による堰止湖の形成とその影響	カラコラム山脈における巨大崩壊を事例にして、河道閉塞に伴う堰止湖の形成過程を講義する。
14	まとめと解説	講義内容を総括し、レポート等により受講生の到達度をチェックする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1 回につき 4 時間以上を標準とします。
参考書にあげた専門書や担当教員の論文等を事前に読み、関連知識を深めてください。また、講義後には関連研究やインターネットなどを通じて理解しにくかった基礎的部分を解消するように努めてください。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しないが、担当教員が作成した資料を配布。

【参考書】

遠藤邦彦・山川修治・藁谷哲也編著『極圏・雪氷圏と地球環境』二宮書店、2010 年
大塚友美編著、藁谷哲也 [ほか] 著『人類の歩み（21 世紀の分岐点）』文真堂、2017 年
貝塚爽平『発達史地形学』東京大学出版会、1998 年
鈴木隆介『建設技術者のための地形図読図入門－第 1～4 巻－』古今書院、1997 年
岩田修二『氷河地形学』東京大学出版会、2011 年
岩田修二『統合自然地理学』東京大学出版会、2018 年
その他、講義の際に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

レポートに加え、意見や質問などの授業参画度、理解度を考慮し総合的に評価する：討論参加 20%、発表 30%、レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

大学院は、学問のすそ野や視野を広げるところでもあります。自分の専門にこだわらず、様々な知識を獲得して自身の研究に活かすようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために授業支援システム等を利用する。

【その他の重要事項】

質疑応答には学習支援システムの掲示板やメールを利用しますが、すぐに返事ができない場合もありますのでご了承ください。

【担当教員の専門領域】

地形学、岩石風化

【研究テーマ】

1. 岩石の風化と風化プロセスに関する研究
2. カンボジア・アンコール遺跡を構成する石材の風化特性に関する研究
3. パキスタン・カラコラム山脈に発達する氷河の変動に関する研究

【主要研究業績】

1. 衛星画像及び DEM を用いたカラコラム山脈フンザ川流域の氷河台帳と氷河分布図、(2013) 地図、Vol. 51(3), p.1 - 16.
2. 遠藤邦彦・山川修治・藁谷哲也編著『極圏・雪氷圏と地球環境』朝倉書店、(2010)
3. 2010 年 1 月にパキスタン北部・アタバードで発生した巨大崩壊と堰止湖の拡大、(2011) 地学雑誌、120, 993-1002

【Outline and objectives】

We learn about the Quaternary environment and its changes that are extremely relevant to human evolution and the formation of natural environment. Students gain knowledge of the natural environment, such as climate change, landforms, geology, and glaciers. Students recognize that the components of the natural environment are interconnected, and understand that an integrated perspective is important for understanding geological phenomena.

GEO500B5

第四紀学研究Ⅱ

藁谷 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在みられる自然環境は、人類が第四紀に進化、拡散しながら自然改変を進めてきた結果である。この講義では、第四紀における人類の進化と拡散を俯瞰し、乾燥帯や熱帯など日本とは異なる自然地域における環境の重層の関係を学ぶ。学生は、第四紀における自然環境の成立を人間との関係から理解する。

【到達目標】

学生は異なる自然地域における自然条件の重層の関係、および人間活動の自然環境に与える連鎖的影響などを包括的に知ることができる。とりわけ、乾燥地域と熱帯地域の地形、地質、気候、植生、土壌などの知識を獲得するとともに、自ら説明することができる。また、人間活動がこれらの地域に与える様々な影響について理解し、人間と自然との関係性を重視する自然地理学的視点を獲得、解説することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、大学が定義するオンデマンド授業により実施する。すなわち、オンデマンドによる教材、既往文献・資料のレビューなどのコンテンツ配信を基本とするが、オンラインにより学生による発表・討論などを総合した形式で進める。取り上げる主要テーマは「授業計画」の通りである。また、課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	第四紀における人類の進化と拡散	化石や遺伝的近縁関係などから、人類の進化と拡散を俯瞰する。
2	乾燥帯の気候とそこに分布する地形、地形発達	乾燥気候の特徴とそこに発達する地形、地形発達について講義する。
3	オーストラリア大陸の多様な自然環境	白亜紀以降孤立してきたオーストラリア大陸の自然環境の構成要素に関する概要を講義する。
4	オーストラリア大陸の乾燥地に発達する地形と先住民の痕跡	長期にわたって風化、侵食作用を被ってきたオーストラリア大陸に見られる地形の特徴を講義する。
5	オーストラリア大陸の河川と自然改変	オーストラリア大陸東部の主要河川の特徴や人為的な自然環境改変に伴う影響について講義する。
6	ブッシュファイヤーとオーストラリア先住民	ブッシュファイヤーの発生とその影響、および自然環境と共生する先住民の暮らしについて講義する。
7	熱帯の気候とそこに分布する地形、地形発達	熱帯気候の特徴とそこに発達する地形や地形発達について講義する。
8	インドシナ半島の自然環境	モンスーンの影響を強く受ける湿潤なインドシナ半島の自然環境について講義する。
9	インドシナ半島沿岸の三角州と酸性硫酸塩土壌の形成	マングローブ、三角州の人工改変、酸性硫酸塩土壌の発生などについて講義する。

10	インドシナ半島における熱帯林の消滅	商業伐採や農地転用などによって減少する熱帯林の現状について講義する。
11	カンボジア・アンコール遺跡の成立とその後の環境変化	世界遺産に指定されたアンコール遺跡の周辺に暮らす人々と遺跡との関わりを講義する。
12	アンコール遺跡に見られる風化と風化速度	アンコール遺跡を事例に、熱帯気候下の風化プロセスについて講義する。
13	アンコール遺跡の保全とその影響	熱帯気候下における石造文化財の劣化と保存・修復活動を講義する。
14	まとめ	講義内容を総括し、レポート等により受講生の到達度をチェックする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1回につき4時間以上を標準とします。

参考書にあげた専門書や担当教員の論文に事前に目を通し、自然環境に関する知識を深めてください。また、講義後には関連研究やインターネットなどを通じて理解しにくかった基礎的部分を解消するように努めてください。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しないが、担当教員が作成した教材をもとに学習する。

【参考書】

岩田修二『統合自然地理学』東京大学出版会、2018年

岩田修二編『実践 統合自然地理学: あたらしい地域自然のとらえ方』古今書院、2018年

大塚友美編著、藁谷哲也 [ほか] 著『人類の歩み（21世紀の分岐点）』文真堂、2017年

藁谷哲也編『カンボジア研究』文真堂、2019年

松岡 憲知、泉山茂之、檜本正明、松本潔編『山岳科学』古今書院、2020
その他、講義の際に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

レポートに加え、意見や質問などの授業参画度、理解度を考慮し総合的に評価する：討論参加 20%、発表 30%、レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

大学院は学問のすそ野や視野を広げるところでもあります。自分の専門にこだわらず、様々な知識を獲得して自身の研究に生かすようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために授業支援システム等を利用する。

【その他の重要事項】

質疑応答には学習支援システムの掲示板やメールを利用しますが、すぐに返事ができない場合もありますのでご了承ください。

【担当教員の専門領域】

地形学、岩石風化

【研究テーマ】

1. 岩石の風化と風化プロセスに関する研究
2. カンボジア・アンコール遺跡を構成する石材の風化特性に関する研究
3. パキスタン・カラコラム山脈に発達する氷河の変動に関する研究

【主要研究業績】

1. アンコール・ワットを構成する砂岩およびラテライトの風化環境と風化プロセス. (2005) 地形, 26(3), 239-257.
2. The effect of rock strength on weathering rates of sandstone used for Angkor temples in Cambodia. (2016) Engineering Geology, 207, 24-35.
3. Waragai T., Hiki Y. (2019) Influence of microclimate on the directional dependence of sandstone pillar weathering in Angkor Wat temple, Cambodia. Earth and Planetary Science. 6:10. <https://doi.org/10.1186/s40645-019-0254-5>

【Outline and objectives】

The present natural environment is the result of the evolution and spread of humans in the Quaternary, while promoting natural modification. In this lecture, we look at the evolution and spread of humans in the Quaternary, and learn the multilayered relationship of the environment in different natural areas such as the arid zone and the tropics. Students understand the formation of the natural environment in the Quaternary from the relationship with humans.

GEO500B5

自然地理学文献講読Ⅰ

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然地理学関連の欧文の文献を精読し、当該研究分野の国際的動向を探るとともに、専門分野の欧文文献を読みこなす語学力を養成する。

【到達目標】

自然地理学のうち、年度によって水文・地形・気候分野の文献を講読し、外国語（英語）の読解力を高め、国際的に評価が高い外国文献から広く情報収集できる能力を身に付けることを目標とする。
また、外国語（英語）による論文執筆の基礎についても学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

自然地理関係の欧文文献の内容を正確に読み取れるように、受講者が精読した上で内容に関する討議を踏まえて講義を進める。年度によって、水文・地形・気候学の一般論を扱った洋書を精読する予定である。ただし、課題図書を精読するうちに、受講者が特に関心を持った文献が見つかった場合は、途中でその文献を優先させて紹介させる可能性もありうる。

また、各自の卒論・修論を英訳し、英語論文執筆の基礎的能力を育成する。

毎回の授業では、①第1段階、②第2段階、③第3段階、④最終の発表資料を事前に提出し、その内容をもとに発表した上で、質疑応答の後、コメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入・授業概略	本講義の扱う内容や進め方に関して説明し、質疑応答を行う。 その上で、用意した欧文図書の中から、受講生と相談の上で、対象図書を選定する。
第2回	欧文図書輪読（1） 文献検索法（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 J-Stage を用いた検索法について学ぶ。
第3回	欧文図書輪読（2） 文献検索法（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 CiNii を用いた検索法について学ぶ。
第4回	欧文図書輪読（3） 文献検索法（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 その他の検索法について学ぶ。
第5回	欧文図書輪読（4） 文献講読法（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「タイトル」を中心に質疑応答。
第6回	欧文図書輪読（5） 文献講読法（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 キーワード」を中心に質疑応答。
第7回	欧文図書輪読（6） 文献講読法（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「要旨」を中心に質疑応答。

第8回	欧文図書輪読（7） 文献講読法（4）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「文献リスト」を中心に質疑応答。
第9回	欧文図書輪読（8） 文献講読法（5）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「文献引用法」を中心に質疑応答。
第10回	欧文図書輪読（9） 英文論文執筆の基礎（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のレビューを行う。
第11回	欧文図書輪読（10） 英文論文執筆の基礎（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のタイトルとキーワードについて議論する。
第12回	欧文図書輪読（11） 英文論文執筆の基礎（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Abstract について議論する。
第13回	欧文図書輪読（12） 英文論文執筆の基礎（4）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Introduction について議論する。
第14回	欧文図書輪読（13） 英文論文執筆の基礎（5）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Conclusion について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

適宜、図書館に入荷している洋雑誌を閲覧して、欧文の文献に関心を払って欲しい。

毎回の授業に対し、予習・復習それぞれ2時間、合計4時間以上の取り組みが必要である。

【テキスト（教科書）】

自然地理分野の欧文論文を扱う予定。その分野とは主に、気候・地形・水文の各分野である。ただし、本年度は水文学に関する教科書を講読する予定であるが、詳細は第一回目の導入時に受講者と相談のうえで決定したい。

【参考書】

その他適宜授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

発表担当以外も、必ず事前に読み込んでくること。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、受講生の状況を見て判断し、次回以降の内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】

原則として、毎回、ネット環境を用いた文献閲覧などを行うので、ノートパソコンを持参すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学・水文学・陸水学

<研究テーマ>

- 1) 水循環に伴う物質循環
- 2) 人間活動に伴う水環境変化と保全
- 3) GIS を用いた流域水・物質循環解析と環境マネジメント

【Outline and objectives】

Carefully read the Western literature related to physical geography, explore the international trends in the research field, and develop the language ability to read the European literature in the specialized field.

GEO500B5

自然地理学文献講読Ⅱ

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然地理学関連の欧文の文献を精読し、当該研究分野の国際的動向を探るとともに、専門分野の欧文文献を読みこなす語学力を養成する。

【到達目標】

自然地理学のうち、受講者それぞれの研究対象分野に応じた文献を精読し、外国語（英語）の読解力を高め、国際的に評価が高い外国文献から広く情報収集できる能力を身に付けることを目標とする。

また、外国語（英語）による論文の執筆法についても学び、具体的な論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

自然地理関係の欧文文献の内容を正確に読み取れるように、受講者が精読した上で内容に関する討議を踏まえて講義を進める。年度によって、水文・地形・気候学の一般論を扱った洋書を精読する一方、受講者が関心に応じた文献を選定し、レビューし発表する中で、内容について討議する。

また、各自の卒論・修論等を英訳した上で、英語論文として仕上げる方法についても学ぶ。

毎回の授業では、①第1段階、②第2段階、③第3段階、④最終の発表資料を事前に提出し、その内容をもとに発表した上で、質疑応答の後、コメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入・授業概略	レビューの方法、授業の進め方について説明する。
第2回	文献検索法（1）	文献目録集や国内の検索サイトを用いた検索について
第3回	文献検索法（2）	文献目録集や海外の検索サイトを用いた検索について
第4回	文献講読法（1）	タイトル・キーワードを中心に
第5回	文献講読法（2）	Abstract を中心に
第6回	文献講読法（3）	文献引用法を中心に
第7回	英語論文執筆法（1）	邦文の英訳
第8回	英語論文執筆法（2）	対訳による検証
第9回	英語論文執筆法（3）	英語論文としての修正
第10回	英語論文執筆（1）	レビュー
第11回	英語論文執筆（2）	タイトルとキーワード
第12回	英語論文執筆（3）	Abstract
第13回	英語論文執筆（4）	Introduction
第14回	英語論文執筆（5）	Conclusion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

適宜、図書館に入荷している洋雑誌を閲覧して、欧文の文献に関心を払って欲しい。

毎回の授業に対し、予習・復習それぞれ2時間、合計4時間以上の取り組みが必要である。

【テキスト（教科書）】

自然地理分野の欧文図書・論文を扱う予定。その分野とは主に、気候・地形・水文の各分野である。ただし、詳細は第一回目の導入時に受講者と相談のうえで決定したい。

【参考書】

その他適宜授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、討論：50 %

発表担当以外も、必ず事前に読み込んでくること。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、学生の状況を見て次回以降の内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】

原則として、毎回、ネット環境を用いた文献閲覧などを行うので、ノートパソコンを持参すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学・水文学・陸水学

<研究テーマ>

- 1) 水循環に伴う物質循環
- 2) 人間活動に伴う水環境変化と保全
- 3) GISを用いた流域水・物質循環解析と環境マネジメント

【Outline and objectives】

Carefully read the Western literature related to physical geography, explore the international trends in the research field, and develop the language ability to read the European literature in the specialized field.

GEO500B5

自然地理学特殊講義Ⅰ

刈谷 愛彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

寒冷地域（高標高山岳地域や高緯度地域）の自然環境のうち、主として地形に着目し、様々な地形種の形成作用や発達史の基礎を解説します。題材は日本を中心とする予定ですが、典型的な例が国内にない場合は海外の事例も積極的にとりあげます。開講日のうち1日はフィールド・ワークに充てる予定です（後述）。

寒冷地域に特徴的な地形の種類と、それらの形成過程・形成作用、第四紀地球環境変動との関連について理解できるようになることを第一の目標とします。そのうえで、地球温暖化に対して脆弱な寒冷地域の自然環境の成り立ちと特性を正しく理解し、その保護・保全に役立てることができるようになることを第二の目標とします。

【到達目標】

- ・寒冷地域の自然環境の特性と分布が理解できるようになる。
- ・寒冷地域に特有な主な地形種について、地形の重要な属性である形態、物質、作用、年代のそれぞれが適切に理解できるようになる。
- ・寒冷地域に特有な自然地理学的景観要素（地形、植生、土壌、微気候等）の相互作用や自然史について理解できるようになる。
- ・寒冷地域の自然景観を解説し、地形はもちろんのこと、その全体的成り立ちについても科学的に推理できるようになる。
- ・山岳地におけるフィールドワークの技法や着眼点が修得できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・講義及び日帰り実習（1日）
- ・必要に応じて授業内での簡単なプレゼンテーション（現在受講者が取り組んでいる研究の紹介等）を指示します。
- ・現地日帰り実習についてはレポートの提出を指示し、評価対象の一部とします。その評価（フィードバック）については電子メール等を用いて受講者に伝達する予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	寒冷地域の定義	寒冷地域や周氷河地域はどのような自然環境の特性によって定義されるのかを、地形学、気候学、植生学などの広範な観点から探ります。寒冷地域の分布も確認します。
第2回	更新世環境変動（1）	第四紀地球環境変動の基礎を解説します。主に、地球軌道要素の変化や海面変動、古海況などに言及します。
第3回	更新世環境変動（2）	第四紀地球環境変動の基礎を解説します。主に、氷河・氷床変動、陸上の古気候、地形変化、植生変化などに言及します。
第4回	地形の属性	地形の重要な属性である「形態」、「物質」、「作用」、「年代」とは何かについて、受講者の基礎知識を確認しつつ、日本の寒冷地域の諸例を中心にとりあげながら解説します。地形のスケール区分にも言及します。

第5回 寒冷地域の地形（1）
：氷河地形

第6回 寒冷地域の地形（2）
：周氷河地形 A

第7回 寒冷地域の地形（3）
：周氷河地形 B

第8回 寒冷地域の地形（4）
：周氷河地形 C

第9回 寒冷地域の地形（5）
：周氷河地形 D 及び
ふりかえり

第10回 野外実習（1）

第11回 野外実習（2）

第12回 野外実習（3）

第13回 野外実習（4）

第14回 野外実習（5）

氷河作用や氷河の地形システムに着目し、氷河侵食地形と氷河堆積地形とに分けて、日本及び海外の諸例を解説します。氷河地形と紛らわしいマスマーブメント地形も紹介します。

周氷河（凍結融解）作用に着目し、特に永久凍土が主体的に関与する様々な地形について、日本及び海外の諸例を解説します。化石永久凍土地形にも言及します。

周氷河（凍結融解）作用に着目し、特に季節凍土が主体的に関与する様々な地形について、日本及び海外の諸例を解説します。

周氷河（凍結融解）作用に着目し、特に残雪の直接的・間接的作用が主体的に関与する様々な地形について、日本及び海外の諸例を解説します。

第6～8回目で取り上げたものの以外の様々な寒冷地域の地形（風食地形やマスマーブメント地形等）について、日本及び海外の諸例を解説します。また、ここまでの講義の内容に関して概括的に整理し、理解度を確認します。

日帰り実習地の自然環境のあらましを、地形・地質、植生、小気候等にわけて現地で解説します。またそれらの相互作用についても考えます。

調査地の地形のうち、斜面崩壊（マスマーブメントの一種）を中心に観察し、地形の属性を明らかにします。また地質や地形条件との関係や、崩壊の誘因についても議論します。

調査地の地形のうち、土石流（マスマーブメントの一種）を中心に観察し、地形の属性を明らかにします。また地質や地形条件との関係や、土石流の誘因について議論します。

調査地の地形のうち、岩塊集積地形（岩塊斜面）を中心に観察し、地形の属性を明らかにします。また地質や地形条件との関係や、地形の起源（周氷河性/非周氷河性）について議論します。

実習内容を整理し、オンサイトで質疑を行います。レポートのまとめ方についても解説します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・指示された文献や参考書を事前によく読み授業に臨んでください。
- ・質問や議論を予めメモしておき、授業時間中に教員と受講者同士で共有できるようにしてください。
- ・本授業の準備及び復習時間は1回につき各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。

【参考書】

- 1) French, H. M. 2018 The Periglacial Environment 4th ed.
- 2) Lowe and Walker 2015 Reconstructing Quaternary Environments. 3rd ed.
- 3) 貝塚ほか編 日本の地形（東京大学出版会） 各編
- 4) 地すべりに関する地形地質用語委員会（日本地すべり学会）編 2004 地すべり＝地形地質的認識と用語
- 5) 岩田修二 2011 氷河地形学

その他については、授業時間中に適宜指示する予定です。

【成績評価の方法と基準】

・複数のレポートを課し、それらを総合評価します（合計 90 %）
・授業中（日帰り実習を含む）に担当教員と受講者間で交わされる質疑やディスカッション等の内容と貢献度を評価します（10 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません

【学生が準備すべき機器他】

・講義においてはインターネットに接続可能なノートパソコンまたは大型タブレットまたはスマートフォン（地理地図情報等の参照を想定）
・日帰り実習においては関東地方の標高 1500m 程度の夏季山岳に適した登山用具・衣類（ザック、雨具、登山靴またはトレッキングシューズ、化学繊維を中心とした速乾性肌着や衣類等）。地図アプリをインストールしたスマートフォン。

【その他の重要事項】

・日帰り実習は奥多摩地域（例：三頭山 都民の森）を想定しています。登山道沿いに 4～6 時間徒歩移動します。登山道はよく整備されています。都心に比べて冷涼ですが、夏季のため高温多湿な森林内の移動となります。担当教員として危険の予見には十分注意しますが、場所柄と季節柄、夕立や落雷が予想されます。
・三頭山周辺で実施する場合、JR 五日市線武蔵五日市駅に午前 7 時 45 分頃までに到着し、バスに乗り換える必要があります。移動時間等を検討してください。詳細は講義初日に説明します。
・上記の準備すべき登山用具についても確認してください。
・日帰り実習への出席を単位認定要件の 1 つとするため、上記諸条件のほか、自己の体力や基礎疾患等を客観視し、履修登録は慎重に行うようにしてください。
・オフィスアワーについては担当教員が非常勤のため授業時間内または前後とします。授業開始前に担当教員と連絡（質問）をとる必要がある場合は、文学部地理学科の受け入れ担当教員にコンタクトしてください。

【自然地理学】

<専門領域> 地形学・第四紀学

<研究テーマ> 山岳地域の斜面変化。とくに大規模崩壊現象とその誘因について地形学・地質学・第四紀年代学の観点で探求しています。
<主要研究業績> ◆ Kariya 2002 Permafrost and Periglacial Processes ◆ Kariya 2005 CATENA ◆ Kariya et al. 2011 Geomorphology ◆ 荻谷ほか 2012 地学雑誌 ◆ 荻谷ほか 2014 地理学評論 ◆ 荻谷ほか 2016 第四紀研究 ◆ 荻谷・西井 2017 地理学評論 ◆ 荻谷 2019 第四紀研究 ◆ 山田ほか 2021 砂防学会誌

【Outline and objectives】

Among the natural environments in cold regions (i.e., high altitude mountainous regions, high latitude regions), we will focus on various landforms and understand their historical development and morphogenetic processes. The subject matter is mainly referred from Japan, but if there are no typical examples in Japan, we will also take up overseas cases. One day trip to the Okutama Area west of central Tokyo will be planned as fieldwork. By taking this lecture, you will be able to understand the variety of landforms in cold regions, their formation processes, as well as their relationships with global environmental changes in the Quaternary period.

GEO500B5

自然地理学特殊講義 II

石井 吉之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地球雪氷圏における水循環プロセスの特徴を、国内外の研究事例を通して学ぶ。

【到達目標】

地球雪氷圏の分布やそこでの水循環特性についての理解を深めることにより、地球の温暖化や寒冷化に伴う水循環変動について自らの意見を述べられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

はじめに地球上の雪氷圏の分布やそこで生起する雪氷水文現象について学ぶ。次に、積雪の一生すなわち堆積・消耗過程についての講義を受け、積雪の持つ二面性（災害と資源）について理解する。さらに、これまでの融雪洪水論の展開の中でとり残された課題について理解する。講義の中で、何回か関連した課題が与えられるので、学生どうして議論しながら解答を導くことで理解を深める。課題の解答例は次の講義時に提示し補足説明をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講師紹介と趣旨説明
第 2 回	地球雪氷圏の概要	地球上で雪氷が関与する地域について学ぶ。
第 3 回	積雪の一生 (1) 降雪のメカニズム	日本に大雪をもたらす降雪のしくみについて学ぶ。
第 4 回	積雪の一生 (2) 雪の堆積と変態	雪の降り積もり方やその後の雪粒の変態について学ぶ。
第 5 回	積雪の一生 (3) 雪の消耗プロセス	雪解けのメカニズムを熱収支の面から学ぶ。
第 6 回	災害としての雪 (1) 雪氷災害の分類	様々な雪氷災害の種類分けについて学ぶ。
第 7 回	災害としての雪 (2) 雪氷災害の実例	顕著な災害の実例を詳しく紹介する。
第 8 回	災害としての雪 (3) 対策と防御	災害対策の手法と課題について学ぶ。
第 9 回	資源としての雪 水資源・冷熱資源・観光資源	雪が持つ資源としての利点を理解する。
第 10 回	融雪洪水論 (1) 融雪流出過程	既にモデル化もされているが、残された重要課題も少なくないことを学ぶ。
第 11 回	融雪洪水論 (2) 流出過程の遅れ	融雪の諸過程の伝搬と時間的遅れについて学ぶ。
第 12 回	融雪洪水論 (3) 雪質の効果	雪質の違いによって融雪速度に違いが生じる理由について学ぶ。
第 13 回	積雪の化学	酸性雪の環境への影響やアシッド・ショック（酸衝撃）について学ぶ。
第 14 回	まとめと試験	講義の全体を総括し、試験を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、配布資料に沿って講義を行う。配布資料は pdf ファイルを web 上に置くので、各自ダウンロードして使用する。

【参考書】

- ・雪と氷の世界―雪は天からの恵み―（若濱五郎著、東海大学出版会、1995 年）
- ・Principles of Snow Hydrology (DeWalle, D.R. and Rango, A., Cambridge Univ. Press, 2008)

【成績評価の方法と基準】

与えられた課題に対する解答内容 (50 %), および試験結果 (50 %) から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の研究分野や興味対象に応じ、講義中の質疑応答などを考慮し、必要に応じて講義内容を修正する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
流域水文学、雪氷水文学
＜研究テーマ＞
積雪寒冷地における雪氷水文過程
＜主要研究業績＞
降雨と融雪が重なって生じる融雪出水
融雪水の積雪内浸透に及ぼす雪質の効果
東シベリア中央ヤクーチャにおける広域熱・水循環
アラスカ内陸部の大規模森林火災跡地における凍土水文過程
インドネシアの森林泥炭火災跡地における広域地下水流動の変化

【Outline and objectives】

By knowing many hydrological study instances, students can learn the characteristics of the water cycle in the cryosphere on earth.

HUG500B5

人文地理学研究 I

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

経済地理学の基本的な方法論、研究分野の書かれたテキストを読み、発表することによって、経済地理学的方法についての深い理解を目指します。具体的には経済地理学の目標、理論、方法論、研究アプローチを取得し、自らの研究遂行時にそれらを使うことができるようにします。

【到達目標】

経済地理学に関する知識の蓄積、思考力、解決能力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く経済地理学の専門内容を理解すること、そして、自らの研究テーマに関わらせて、それをより深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらに受講生の関心領域、研究テーマと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロ	授業方針の決定
第 2 回	テキスト「序章」	「序章 環境・空間と経済社会」の報告と討論
第 3 回	テキスト「第 1 章」	「第 1 章 経済立地の理論」の報告と討論
第 4 回	テキスト「第 2 章」	「第 2 章 地域経済の発展のメカニズム」の報告と討論
第 5 回	テキスト「第 3 章」	「第 3 章 サービス経済化と広がる地域間格差」の報告と討論
第 6 回	テキスト「第 4 章」	「第 4 章 人々のキャリアと経済空間」の報告と討論
第 7 回	テキスト「第 5 章」	「第 5 章 経済のグローバル化と産業立地・地域経済」の報告と討論
第 8 回	テキスト「第 6 章」	「第 6 章 サプライチェーンと南北問題」の報告と討論
第 9 回	テキスト「第 7 章」	「第 7 章 経済を左右する地域の制度と文化」の報告と討論
第 10 回	テキスト「第 8 章」	「第 8 章 都市の発展が生むインナーシティ問題」の報告と討論
第 11 回	テキスト「第 9 章」	「第 9 章 グローバル化時代の都市と都市ネットワーク」の報告と討論
第 12 回	テキスト「第 10 章」	「第 10 章 地域のなかでのものづくり」の報告と討論
第 13 回	テキスト「第 11 章」	「第 11 章 工業で変わる新興国」の報告と討論
第 14 回	まとめ	まとめ 授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業前、テキストの該当箇所を読んでくることはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。

授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】

伊藤・小田・加藤編著（2020）『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房

（2020 年度と同じため、履修学生によって変更する可能性があります）

【参考書】

山崎 朗ほか著（2016）『地域政策』中央経済社

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、討論：50 %

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64 - 2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改变事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72 - 3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

I aim at deep understanding about economic geography by reading and releasing the text on which basic methodology and research field of economic geography were written. A target, theory, methodology and research approach of economic geography are acquired and makes sure that it'll be possible to use those at the time of the study execution.

HUG500B5

人文地理学研究Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。今年度は「地方都市の地域活性化」をテーマに行います。人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。

【到達目標】

人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。こうした作業を通じて、自らの調査能力のスキルアップを目指し、修士論文作成時の分析能力の向上を到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。アンケート票の作成は学生が行います。その後、具体的にアンケート調査を実施します。調査地域は学生が相談の上決定します。現地へ出向き、調査を共同で実施し、より多くの調査票の回収を目指します。授業の後半では、回収された調査票を集計し、その後、単純集計、クロス集計の分析を行います。最後に各自で報告書を作成します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。レポートなどについては、コメントをつけて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロ	調査目的と調査方針の決定
第 2 回	社会調査の基本の説明	社会調査の基本の説明
第 3 回	アンケート票作成時のルール (1)	フェイスシートの作成
第 4 回	アンケート票作成時のルール (2)	質問項目の作成
第 5 回	アンケート票作成時のルール (3)	回答項目の作成
第 6 回	現地調査のマナーの説明	現地調査のマナーの説明
第 7 回	アンケート票の作成 (1)	アンケート票の形式の作成
第 8 回	アンケート票の作成 (2)	質問項目の選定
第 9 回	アンケート票の作成 (3)	アンケート票の完成
第 10 回	アンケート票の分析 (1)	データ打ち込み
第 11 回	アンケート票の分析 (2)	単純集計
第 12 回	アンケート票の分析 (3)	クロス集計
第 13 回	報告書の作成 (1)	作成手順の説明
第 14 回	報告書の作成 (2)	完成書の提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めますが、作業は授業外でも行うことになります。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

作業：50 %、報告書：50 %

【学生の意見等からの気づき】

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めます。

【学生が準備すべき機器他】

授業では必ずパソコンを使用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論
<研究テーマ> 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
<主要研究業績>
1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64 - 2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改善事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72 - 3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A questionnaire survey is performed at this session. We decide about an investigation theme, survey item and investigation method, etc. first. Next a questionnaire vote is made. After that a questionnaire survey is put into effect specifically. Survey result is totaled by the tuition's second half, it's analyzed and a report is made. "Activation in a local city" is made a theme this fiscal year. And We aim at a rise of the investigation ability about the human geography.

HUG600B5

人文地理学演習 I

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	ゼミガイダンス	春学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定
第 2 回	論文の作成技法	論文の作成技法の講義
第 3 回	文献検索方法	文献検索方法の講義
第 4 回	修士 2 年生の発表、発表レジュメ	発表レジュメの解説
第 5 回	日本語の文法	日本語の文法の説明
第 6 回	引用文献の表示	引用文献の表示方法の説明
第 7 回	修士 1 年生の発表、参考文献の表示	修士 1 年生の研究テーマ発表と参考文献の表示方法の説明
第 8 回	注の付け方	注の付け方の説明
第 9 回	構成表の作り方	構成表の作り方の説明
第 10 回	修士 2 年生二度目の発表、理論の考え方	修士 2 年生二度目の研究テーマ発表と理論の考え方の説明
第 11 回	方法論の選択	方法論の選択の説明
第 12 回	説明順序	説明順序の説明
第 13 回	夏季休暇のフィールドワーク準備 (1) - 調査マナー -	調査マナーの説明
第 14 回	夏季休暇のフィールドワーク準備 (2) - 調査方法 -	調査方法の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、討論：50 %

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A member of a class aims at completion of a master thesis by reporting and discussing. Other members of a class learn his thesis by questioning and submitting an opinion to an announcement. The several items necessary to thesis making are learned at the same time.

HUG600B5

人文地理学演習Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	秋学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定をします
第 2 回	修士 2 年生の発表と研究題名	修士 2 年生の研究テーマ発表と「疑問文で成り立つ題名」の説明をします
第 3 回	研究目的	研究目的における「オリジナリティの必要性」について説明します
第 4 回	方法論 (1)	経済地理学の方法論について説明します
第 5 回	方法論 (2)	方法論「地域事例の理論」について説明します
第 6 回	修士 2 年生二度目の発表と先行研究 (1)	修士 2 年生の研究テーマ発表と理論をたどる先行研究の重要性について説明します
第 7 回	先行研究 (2)	先行研究の類型化の重要性について説明します
第 8 回	説明順序の説明 (1)	説明順序「単純ストーリー」の重要性について説明します
第 9 回	説明順序の説明 (2)	説明順序「クロスストーリー」の重要性について説明します
第 10 回	修士 1 年生の発表と構成表の説明 (1)	修士 1 年生の研究テーマ発表と構成表による「全説明事項の見える化」の重要性について説明します
第 11 回	構成表の説明 (2)	構成表による「ボリュームの見える化」の重要性について説明します
第 12 回	日本語の説明	論文を支える日本語の文法的重要性について説明します
第 13 回	結論の説明	結論の中の「提案と願望」について説明します
第 14 回	論文を支える問題意識の説明	研究を支える「熱い心と冷静な頭」の重要性について説明します

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、討論：50 %

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御座産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A member of a class aims at completion of a master thesis by reporting and discussing. Other members of a class learn his thesis by questioning and submitting an opinion to an announcement. The several items necessary to thesis making are learned at the same time.

HUG500B5

社会経済地理学研究Ⅰ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年春学期の授業では、主として都市の経済や産業に関わる都市の理論や概念、実践について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

また、課題等のフィードバックは次回以降の授業等で適宜行います。なお、今年度、本授業は基本的に対面形式で行う予定ですが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	都市に関する理論・概念の概観（1）	都市に関する理論・概念についての整理
第 2 回	都市に関する理論・概念の概観（2）	都市に関する理論・概念の関係性
第 3 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（1）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（1）
第 4 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（2）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（2）
第 5 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（3）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する議論（1）
第 6 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（4）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（3）
第 7 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（5）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（4）
第 8 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（6）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する議論（2）
第 9 回	都市の経済・産業に関する都市への実践例（1）	都市の経済・産業に関する実践例についての講読（1）
第 10 回	都市の経済・産業に関する都市への実践例（2）	都市の経済・産業に関する実践例についての講読（2）

- 第11回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 都市の経済・産業に関する実践例
についての議論 (1)(3)
- 第12回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 都市の経済・産業に関する実践例
についての講読 (3)(4)
- 第13回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 都市の経済・産業に関する実践例
についての講読 (4)(5)
- 第14回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 都市の経済・産業に関する実践例
についての議論 (2)(6)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50 %、ディスカッション：50 %で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「社会経済地理学研究Ⅱ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅱ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories, concepts and practices about urban economy and industries.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

HUG500B5

社会経済地理学研究Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念、実践に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年秋学期の授業では、主として都市計画や都市開発に関わる都市の理論や概念について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

また、課題等のフィードバックは次回以降の授業等で適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的に対面形式で行う予定ですが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	都市に関する理論・概念の概観 (1)	都市に関する理論・概念についての整理
第2回	都市に関する理論・概念の概観 (2)	都市に関する理論・概念についての関係性
第3回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (1)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (1)
第4回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (2)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (2)
第5回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (3)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する議論 (1)
第6回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (4)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (3)
第7回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (5)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (4)
第8回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (6)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する議論 (2)
第9回	都市計画・都市開発に関する都市への実践 (1)	都市計画・都市開発の実践に関する講読 (1)
第10回	都市計画・都市開発に関する都市への実践 (2)	都市計画・都市開発の実践に関する講読 (2)

第 11 回	都市計画・都市開発に関する都市への実践	都市計画・都市開発の実践に関する議論 (1)
第 12 回	都市計画・都市開発に関する都市への実践	都市計画・都市開発の実践に関する議論 (3)
第 13 回	都市計画・都市開発に関する都市への実践	都市計画・都市開発の実践に関する議論 (4)
第 14 回	都市計画・都市開発に関する都市への実践	都市計画・都市開発の実践に関する議論 (2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内に決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50 %、ディスカッション：50 %で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「社会経済地理学研究Ⅰ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅰ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories, concepts and practices about urban planning and urban development.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

HUG600B5

社会経済地理学演習Ⅰ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は対面形式で行いますが、場合によってはオンライン形式や対面（ハイフレックス）形式となる可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ゼミガイダンス	ゼミ概要の説明／方針の決定
第 2 回	研究テーマの発表	全受講生による発表
第 3 回	研究内容の報告 (1)	担当者の発表と質疑応答
第 4 回	研究内容の報告 (2)	担当者の発表と質疑応答
第 5 回	研究内容の報告 (3)	担当者の発表と質疑応答
第 6 回	研究内容の報告 (4)	担当者の発表と質疑応答
第 7 回	研究テーマに関する課題の検討 (1)	関連分野についての説明と討論
第 8 回	研究テーマに関する課題の検討 (2)	関連分野についての説明と討論
第 9 回	研究テーマに関する課題の検討 (3)	関連分野についての説明と討論
第 10 回	研究テーマに関する課題の検討 (4)	関連分野についての説明と討論
第 11 回	研究内容の報告 (5)	担当者の発表と質疑応答
第 12 回	研究内容の報告 (6)	担当者の発表と質疑応答
第 13 回	研究内容の報告 (7)	担当者の発表と質疑応答
第 14 回	研究内容の報告 (8)	担当者の発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

しかし、自らの研究課題に対しての発表準備をしっかりと行うことが求められ、また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので、授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり，問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また，討論については，疑問点・問題点を整理しつつ，論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「国際日本学演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

HUG600B5

社会経済地理学演習Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では，受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し，それら報告に基づいて討論をすることで，各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また，受講生自身の研究を進めるだけでなく，他者の報告を聞き，討論を行うことを通じて，社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】

本授業を通じて，受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに，社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また，適宜，各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し，その課題について検討を行います。

また，本授業は演習（ゼミナール）形式ですので，課題等のフィードバックは適宜行います。

なお，今年度，本授業は基本的には対面形式で行いますが，場合によっては，オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式となる可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの発表	全受講生による研究の進捗状況の報告
第2回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第3回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第7回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第11回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答
第14回	総合討論	まとめ／包括的な討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は，各2時間を標準とします。

しかし，自らの研究課題に対しての発表準備をしっかりと行うことが求められ，また，適宜，授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので，授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「国際日本学演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論

＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

HUG500B5

文化地理学研究Ⅰ

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキストの講読という形で、1980年代以降大きな変貌を遂げた「新しい」文化地理学の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】

古典的（＝平板！）なイメージをもたれがちな文化地理学が、近年どのように装いを新たにしているかを概観し、そこから自分なりの問題意識をもってテーマを立てられるようになることを目指したい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキストの各章をみて、あらましを把握する
第2回	テキスト第1章を読む①	「文化地理学から新しい文化地理学へ」 その①
第3回	テキスト第1章を読む②	「文化地理学から新しい文化地理学へ」 その②
第4回	テキスト第2章を読む①	「認識としての文化」その①
第5回	テキスト第2章を読む②	「認識としての文化」その②
第6回	テキスト第3章を読む①	「認識としての文化」その①
第7回	テキスト第3章を読む②	「認識としての文化」その②
第8回	テキスト第4章を読む①	「現代メディア空間と地理学」その①
第9回	テキスト第4章を読む②	「現代メディア空間と地理学」その②
第10回	テキスト第5章を読む①	「空間の政治学に向けて」その①
第11回	テキスト第5章を読む②	「空間の政治学に向けて」その②
第12回	テキスト第6章を読む①	「変わりゆく文化・人間概念と人文地理学」その①
第13回	テキスト第6章を読む②	「変わりゆく文化・人間概念と人文地理学」その②
第14回	テキスト第7章を読む①	「民俗文化のゆくえ」その①

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。事前にテキストの担当部分を詳しく読んで、自分なりの疑問点や問題点を析出しておくこと。

【テキスト（教科書）】

中俣均編 (2011)：『空間の文化地理—シリーズ・人文地理学 7』（朝倉書店）を用いる。このシリーズは人文地理学を学ぶ大学院生用のテキストを提供することを目的の一つとしているものだが、中身はなかなか難解なものである。個人的に取り組むのもよいが、一緒に議論しながら読んでいくことで、その難解な内容がいくらかでも理解しやすくなるであろう。

なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。

【参考書】

上記テキスト各章末にあげられている参考文献を適宜利用する。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定 (50%)、授業時の議論の内容 (50%) を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化地理学、島嶼地理学、沖縄地域研究など

<研究テーマ>日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

<主要研究業績>

中俣均 (2014):『渡名喜島—地割制と歴史的集落景観の保全—』(古今書院)

中俣均編著 (2011):『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7. (朝倉書店)

中俣均編著:『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9. (朝倉書店)

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

In this course we are going to study how we should “do Cultural Geography”.

HUG500B5

文化地理学研究Ⅱ

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

島嶼地理学について総観的に記されたテキストを講読する。人類の生活空間の一部である島嶼のもつ特殊性、そこを舞台として展開される地理学の実相、そして島嶼があらゆる人文地理学的関心の集中する場であることを実感する。

【到達目標】

世界の島嶼についての知識を得るとともに、それを基軸にして地球大の人間の生活空間を認識する視点を獲得することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。今年度はテキストの後半 5 章分を読んでいく。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト前半部分の復習
第 2 回	テキスト第 5 章①	読解と発表, 議論①
第 3 回	テキスト第 5 章②	読解と発表, 議論②
第 4 回	テキスト第 6 章①	読解と発表, 議論③
第 5 回	テキスト第 6 章②	読解と発表, 議論④
第 6 回	テキスト第 6 章③	読解と発表, 議論⑤
第 7 回	テキスト第 7 章①	読解と発表, 議論⑥
第 8 回	テキスト第 7 章②	読解と発表, 議論⑦
第 9 回	テキスト第 8 章①	読解と発表, 議論⑧
第 10 回	テキスト第 8 章②	読解と発表, 議論⑨
第 11 回	テキスト第 9 章①	読解と発表, 議論⑩
第 12 回	テキスト第 9 章②	読解と発表, 議論⑪
第 13 回	テキスト第 10 章①	読解と発表, 議論⑫
第 14 回	テキスト第 10 章②	読解と発表, 議論⑬

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

事前の文献読み込みが必須である。それをもとに授業で不明な個所などを読み解き理解してゆく。

【テキスト（教科書）】

Stephen Royle(2001)"A Geography of Islands : small island insularity." (Routledge). 著者は北アイルランド・Queens University の名誉教授。英語で書かれた島嶼の地理学の概説書であり、理解しやすい。原著は地理学科図書室に配架あり。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。

【参考書】

特に指定はしない。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定 (50%)、授業時の議論の内容 (50%) を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学，島嶼地理学，沖縄地域研究など

＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞

中俣均 (2014):『渡名喜島一地割制と歴史的集落景観の保全』(古今書院)

中俣均編著 (2011):『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7. (朝倉書店)

中俣均編著:『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9. (朝倉書店)

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

In this course we are going to study how we should “do cultural geography”.

HUG600B5

文化地理学演習 I

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、文化地理学に包含される論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かった論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】

春学期に行なわれるこの授業では、上記概要の①および②を中心に進め、執筆する修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業方針の説明と各受講生の修士論文作成スケジュールの確認
第 2 回	論題の表明	全受講生による方針の発表
第 3 回	論題の確立	受講生相互で議論し、論題を確定させる
第 4 回	研究内容の報告①	各受講生の発表と質疑応答①
第 5 回	研究内容の報告②	各受講生の発表と質疑応答②
第 6 回	研究内容の報告③	各受講生の発表と質疑応答③
第 7 回	研究内容の報告④	各受講生の発表と質疑応答④
第 8 回	研究内容の報告⑤	各受講生の発表と質疑応答⑤
第 9 回	研究内容の報告⑥	各受講生の発表と質疑応答⑥
第 10 回	研究内容の報告⑦	各受講生の発表と質疑応答⑦
第 11 回	研究内容の報告⑧	各受講生の発表と質疑応答⑧
第 12 回	研究内容の報告⑨	各受講生の発表と質疑応答⑨
第 13 回	研究内容の報告⑩	各受講生の発表と質疑応答⑩
第 14 回	全体的整理	全体的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

さまざまな「論文の書き方」についてのマニュアルなどを適宜活用してほしい。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定 (50%)、授業時の議論の内容 (50%) を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学・島嶼地理学・沖縄地域研究など
＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞中俣均 (2014)『渡名喜島－地割制と歴史的集落景観の保全－』（古今書院）

中俣均編著 (2011)『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7.（朝倉書店）

中俣均編著 (2004)『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9.（朝倉書店）

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』（法政大学出版局）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help student acquire some fundamental bases for his/hers master's thesis.

HUG600B5

文化地理学演習Ⅱ

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、文化地理学に包含される論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かったの論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】

秋学期に行なわれるこの授業では、上記概要の②および③を中心に進め、執筆する修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の説明と各受講生の論文作成スケジュールの確認
第 2 回	研究内容の報告①	受講生の発表と質疑①
第 3 回	研究内容の報告②	受講生の発表と質疑②
第 4 回	研究内容の報告③	受講生の発表と質疑③
第 5 回	研究内容の報告④	受講生の発表と質疑④
第 6 回	研究内容の報告⑤	受講生の発表と質疑⑤
第 7 回	研究内容の報告⑥	受講生の発表と質疑⑥
第 8 回	研究内容の報告⑦	受講生の発表と質疑⑦
第 9 回	研究内容の報告⑧	受講生の発表と質疑⑧
第 10 回	研究内容の報告⑨	受講生の発表と質疑⑨
第 11 回	研究内容の報告⑩	受講生の発表と質疑⑩
第 12 回	研究内容の報告⑪	受講生の発表と質疑⑪
第 13 回	最終執筆指導①	論文内容の相互チェックと形式的整理－全体的検討
第 14 回	最終執筆指導②	論文内容の相互チェックと形式的整理－最終的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

さまざまな「論文作成のためのマニュアル」類を適宜活用してほしい。ただし、マニュアルはそれをなぞるためではなく、精神をくみ取ることが大切である。

【成績評価の方法と基準】

発表のしかたとその内容 (50%) および質疑応答への内容 (50%) とを評価対象とする。自分の関心を他者に的確に説明し、その学問的意義を主張できることが重要である。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学・島嶼地理学・沖縄地域研究など
 ＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞中俣均 (2014)『渡名喜島－地割制と歴史的集落景観の保全－』（古今書院）

中俣均編著 (2011)『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7.（朝倉書店）

中俣均編著 (2004)『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9.（朝倉書店）

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』（法政大学出版局）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help student acquire some fundamental bases for his/hers master's thesis.

HUG500B5

空間構成論研究Ⅰ

山本 健児

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「空間構成論研究」で扱う空間とは、大は地球規模の空間から、小は例えば都市の一街区に至るまで様々なスケールがあります。どのスケールの空間を扱うにせよ、空間構成諸要素は何か、それら諸要素がどのような関係にあるかを研究することによって、取り扱う空間の全体像を理解することができます。今年度のこの授業では、ドイツに的を絞り、その経済地理的な全体像を提示したうえで、特徴ある地域の経済発展を考察します。あわせて、院生にも独自に取り組んでいる研究テーマでの報告を求めます。なお、時間的余裕があれば、オーストリアとスイスそれぞれにおいて、一時期衰退の危機にあったものの復活し、21世紀において経済活力を発揮している地域を取り上げる可能性があります。

【到達目標】

国よりも小さなスケールの地域の経済発展に関する理論を理解する能力を身につけ、これを踏まえて具体的な地域に関する現実に関する分析能力を身につけることが、この授業の到達目標です。今年度は特にドイツの経済地理的な全体像と、各国における特徴ある地域の経済発展の諸要因の理解も到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教室での対面でこの授業を行ないます。ただし、COVID-19 感染状況に対する国及び東京大都市圏内都県の政策、そして本学の方針を鑑みて、オンライン授業に変更する可能性があります。その場合には、Zoom を用いて同期双方向通信での授業とします。オンライン授業の場合には Hoppii を用いてこの科目の履修登録者に連絡します。

最初の3回分の授業で、地域経済の発展に関する諸理論の検討を行ないます。その後、ドイツに関する具体的な講義を行ないます。各回での山本からの講義は50分以内にとどめ、その後に質疑応答、ディスカッションをしたいと思います。このディスカッションが学生の疑問に対するフィードバックとなります。講義当日までに読んでおいてほしい論文については、その取得が論文掲載雑誌の発行機関のリポジトリなどからダウンロードできる場合、事前に読んでおくことが必要となります。論文草稿やリポジトリなどからのダウンロード不可能な論文については、そのpdfをHoppiiにアップロードすることもあります。

参加院生には、自身の研究テーマに関する報告を少なくとも1回行なってもらいます。その際には、これを踏まえてディスカッションも行ないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	D.C. North の移出 ベース理論	地域経済発展の原動力を移出産業に求める考え方を講義する。
第2回	Jane Jacobs の多様性重視論	都市経済の発展は、都市内部の多様性に依存するのであり、多様性は improvisation とこれに基づく移入置換とを契機とする、と主張する Jacobs 考え方を再検討する。

- 第 3 回 David B. Audretsch 産業経済研究の第一人者の「場所の戦略的経営論」Audretsch が説く「地域経済の 4 つの支柱」とそこにおける「場所の戦略的経営」について検討する。
- 第 4 回 欧州の中でのドイツの地域構造 ドイツが多極分散型の地域構造を呈することは広く知られている。その形成の歴史的背景と具体的な姿を、欧州全体を視野に置きつつ、概説する。
- 第 5 回 ドイツにおける経済的地域間格差の変動 ドイツ経済を主導する産業の歴史の変遷とこれに伴う地域間格差の変動を明らかにする。
- 第 6 回 バイエルン州とミュンヘンの繁栄 20 世紀前半までドイツの中で農業地帯だったバイエルン州が第 2 次世界大戦後、ドイツ諸州の中で経済的に最も豊かな州の一つになった理由について、州都ミュンヘンに焦点を当てて考察する。
- 第 7 回 バーデン・ヴュルテンベルク州の特徴ある産業地区（1）Tuttlingen 外科医治療器具の開発生産に特化する大中小様々な企業が集積する Tuttlingen について考察する。
- 第 8 回 バーデン・ヴュルテンベルク州の特徴ある産業地区（2）Schwäbisch Gmünd とその隣接地区 包装機械の開発生産に特化する大中小様々な企業が集積する Schwäbisch Gmünd とその隣接地区について考察する。
- 第 9 回 ライン・マイン・ネッカー大都市圏の印刷機械工業 マイケル・ポーターが産業クラスターの典型例として称揚したドイツの印刷機械工業企業が集積しているとされているライン・マイン・ネッカー大都市圏におけるその実態を検討する。
- 第 10 回 ルール工業地帯の変容 ドイツ経済の心臓部と言われ、石炭鉄鋼業によって繁栄したルール工業地帯の実態と変容を考察する。
- 第 11 回 Emsland の経済発展 ドイツの貧民窟と言われたほどに貧しい農村地域だったエムスラントがドイツの平均を上回る経済水準を達成し、かつ平均を上回る経済成長率を 21 世紀において実現しているのは何故かを考察する。
- 第 12 回 院生 A の報告 院生 A の研究報告とこれをもとにしたディスカッションを行う。
- 第 13 回 院生 B の報告 院生 B の研究報告とこれをもとにしたディスカッションを行う。
- 第 14 回 総合ディスカッション 13 回の授業を振り返って、総合的な討論を参加者全員で行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業に臨む前に、テキストを読み、理解困難な部分があるか否かを明確にすること。復習として、授業中に提示する文献を読むことが求められます。

【テキスト（教科書）】

各回の授業のために事前に院生に読んでもらう文献についてはその都度指示しますが、この授業に関わる文献を参考文献欄に記すので、必要に応じて参照してください。

【参考書】

- ・山本健児（2005）『経済地理学入門 新版』原書房。
- ・山本健児（2005）『産業集積の経済地理学』法政大学出版局。
- ・山本健児『現代ドイツの地域経済－企業の立地行動との関連－』法政大学出版局、1993 年。
- ・山本健児・平川一臣（編）『朝倉世界地理講座 第 9 巻 中央・北ヨーロッパ』朝倉書店、2014 年。
- ・経済地理学会編（2018）『キーワードで読む経済地理学』原書房。

- ・Aoyama,Y., J.T. Murphy and S. Hanson (2011) *Key Concept in Economic Geography*. London: Sage Publications Ltd.
- ・Bathelt, H. und J. Glückler (2012) *Wirtschaftsgeographie*. 3., vollständig überarbeitete und erweiterte Auflage, Stuttgart: Verlag Eugen Ulmer.
- ・Barnes, T. J. and B. Christophers (2018)*Economic Geography. A Critical Introduction*. Oxford: John Wiley & Sons Ltd.

【成績評価の方法と基準】

授業に臨む姿勢、即ちディスカッションへの参加程度（50 %）とレポートの内容（50 %）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

質問の発出や院生自身の研究に関する報告など、積極的な参加が求められます。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>社会経済地理学
- <研究テーマ>周辺地域における経済発展、移民と都市
- <主要研究業績>
- ・山本健児『現代ドイツの地域経済－企業の立地行動との関連－』法政大学出版局、1993 年。
- ・山本健児『国際労働力移動の空間－ドイツに定住する外国人労働者－』古今書院、1995 年。
- ・山本健児『産業集積の経済地理学』法政大学出版局、2005 年。
- ・山本健児・平川一臣（編）『朝倉世界地理講座 第 9 巻 中央・北ヨーロッパ』朝倉書店、2014 年。
- ・山本健児（2018a）「ドイツ経済復活の鍵としてのミッテルシュタントと地域経済」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 84 巻、第 5・6 合併号、pp.51-86。
- ・山本健児（2018b）「地域経済の 4 つの支柱とシュタントオルトポリティークの意義」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 85 巻、第 1 号、pp.1-26。
- ・山本健児（2018c）「地域経済の構造転換と「場所に関する戦略的経営」－オーストリア・フォラルベルク州の事例－」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 85 巻第 4 号、pp.59-106。
- ・山本健児（2019）「地域経済とイノベティブな企業群」－オーストリア・フォラルベルク州における製造企業最大 4 社の事例－、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 86 巻第 1 号、pp.61-111。
- ・山本健児（2020a）「オーストリア・フォラルベルク州における優良企業」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 86 巻第 5/6 号、pp.49-84。
- ・山本健児（2020b）「伝統的工業部門で進化したオーストリア・フォラルベルク企業」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 87 巻第 1・2・3 号、pp.31-66。
- ・Yamamoto, Kenji (2020c) Evolution of a Small and Medium-sized Enterprise in a Peripheral Area of Japan into a Hidden Champion. 『経済学研究』（九州大学経済学会）第 87 巻第 4 号、pp.23-45。
- ・山本健児（2021）「地域経済の発展に関する Douglass C. North の理論的考察の意義と問題点」、『経済志林』第 88 巻第 4 号、印刷中。

【Outline and objectives】

This lecture deals with economic development of regions, which consist of a nation state such as Japan, Germany and Austria. Attending students should report his or her own research theme at least once within a semester.

HUG500B5

空間構成論研究Ⅱ

山本 健児

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「空間構成論研究」で扱う空間とは、大は地球規模の空間から、小は例えば都市の一街区に至るまで様々なスケールがあります。どのスケールの空間を扱うにせよ、空間構成諸要素は何か、それら諸要素がどのような関係にあるかを研究することによって、取り扱う空間の全体像を理解することができます。この授業では、諸都市が織りなす空間と、個別の都市内部構成を考察対象とします。今年度のこの授業では、ドイツの諸都市を主たる事例研究対象として、移民をめぐる諸問題を検討します。そこで、国際的な人口移動にも言及することになります。あわせて、院生にも独自に取り組んでいる研究テーマでの報告を求めます。

【到達目標】

都市とはどのような存在であるかを理解するために、諸都市が構成する空間と、個々の諸都市内部の空間構成に関する諸理論を理解し、そうした諸理論の有効性を批判的に考察する能力を身につけることが、この授業の到達目標です。今年度は特にドイツの諸都市にみられる共通性と各都市の独自性の理解、及びその背景をなす国際的な人口移動の実態理解も到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教室での対面での授業を行ないます。ただし、COVID-19 感染状況に対する国及び東京大都市圏内都県の政策、そして本学の方針を鑑みて、オンライン授業に変更する可能性があります。その場合には、Zoom を用いて同期双方向通信での授業とします。オンライン授業の場合には Hoppii を用いてこの科目の履修登録者に連絡します。

最初に、都市という概念、諸都市が構成する空間、個別都市内部の空間構成などに関する諸理論に関する原典を読みます。それを踏まえて、ドイツの諸都市に関する講義を行ないます。山本が講義する場合には 60 分程度を目途とし、その後はディスカッションにあてます。このディスカッションが学生の疑問に対するフィードバックとなります。山本の講義の前には、事前に読むべき文献を指定しますので、院生はそれを読んで授業に臨むことが求められます。そうした文献のかなりは、掲載学術雑誌発行大学のリポジトリや J-Stage などからダウンロードできますので、院生自身でダウンロードし、プリントアウトしてもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	都市の概念	都市論の古典をもとに、都市の概念について考察し、それがドイツの諸都市にどのように適用されるかを検討する。
第 2 回	ドイツの都市システム	東西ドイツ統合以前のドイツの都市システムを東西ドイツそれぞれについて概観し、統合以降の変容を検討する。
第 3 回	EU の都市政策	1990 年代から推進されてきた EU による都市政策の意義を考察する。

第 4 回 ドイツの都市政策

1990 年代以降のドイツで推進された「社会的都市」に関する考え方を、その具体的事例に即して考察する。

第 5 回 ベルリン

ベルリンの歴史と、その社会経済的な空間構成を考察する。

第 6 回 ミュンヘン

ミュンヘンの歴史と、その社会経済的な空間構成を考察する。

第 7 回 ライン・ルール大都市圏

ライン・ルール大都市圏の歴史と、その社会経済的な空間構成を考察する。

第 8 回 フランクフルト・アム・マイン

フランクフルト・アム・マインの歴史と、その社会経済的な空間構成を考察する。

第 9 回 ドイツの小都市

ドイツでは活力ある小都市が比較的多い。その理由について考察する。

第 10 回 縮小する都市

ドイツ諸都市の中で縮小と衰退に苦しむ都市について考察する。

第 11 回 ドイツにおける「スマートシティ」

ドイツ南西部、ボーデン湖畔に位置する小都市 Friedrichshafen で実践されたスマートシティ」に関する文献を読む。

第 12 回 院生 A による報告

院生 A が進めている研究テーマに関する報告とディスカッション。

第 13 回 院生 B による報告

院生 B が進めている研究テーマに関する報告とディスカッション。

第 14 回 総合ディスカッション

13 回の授業を振り返って、総合的な討論を参加者全員で行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業に臨む前に、テキストを読み、理解困難な部分があるか否かを明確にすること。復習として、授業中に提示する文献を読むことが求められます。

【テキスト（教科書）】

各回の授業のために事前に院生に読んでもらう文献についてはその都度指示しますが、この授業に関わる文献を参考文献欄に記すので、必要に応じて参照してください。

【参考書】

- ・山本健児『経済地理学入門 新版』原書房、2005 年、第 4 章「都市システムと経済的空間的連関」。
- ・山本健児（2005）「フローの空間」における「場所の空間」としてのミュンヘンとベルリン、『経済志林』（法政大学経済学会）第 72 巻第 4 号、pp.87-180。
- ・山本健児（2007）「ドイツの都市政策における「社会的都市プログラム」の意義」、『人文地理』第 59 巻、pp.205-226。
- ・山本健児（2009）「ドイツの都市内社会的空間的分極化は激化したか？—ドルトムント市の事例—」、『地理学評論』第 82 巻、pp.1-25。
- ・山本健児（2010）「EU による都市政策"URBAN Community Initiative"の実態—デュースブルク市マルクスロー地区の事例—」、『経済志林』第 77 巻第 4 号、pp.47-105。
- ・山本健児（2019）「ドイツにおける都市空間整備と移民の背景を持つ人々—ミュンヘン市における「社会的都市プログラム」の事例—」、『都市計画』336 号、pp.14-17。
- ・山本健児（2020）「ドイツの大都市における「問題街区」のリノベーションはジェントリフィケーションか？—ミュンヘン市シュヴァンターラーヘーエ（ヴェストエント）の事例—」、コルナトゥスキ・ヒュラルド・水内俊雄・福本拓（編）『『ジェントリフィケーション』を超えて—日本・ドイツの都市住宅市場からみた地域の賦活とイノベーション—』大阪市立大学都市研究プラザ「URP「先端都市研究」シリーズ 21」、pp.237-308。
- ・Castells, Manuel (1989) *The Informational City. Information Technology, Economic Restructuring, and the Urban-Regional Process*. Oxford: Basil Blackwell Ltd.
- ・Häußermann, H., D. Läßle und W. Siebel (2008) *Stadtpolitik*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.

【成績評価の方法と基準】

授業に臨む姿勢、即ちディスカッションへの参加程度 (50 %) とレポートの内容 (50 %) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

質問の発出や自らの研究に関する報告など、積極的な参加が求められます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞社会経済地理学

＜研究テーマ＞周辺的地域における経済発展、移民と都市

＜主要研究業績＞

・山本健児『現代ドイツの地域経済－企業の立地行動との関連－』法政大学出版局、1993 年。

・山本健児『国際労働力移動の空間－ドイツに定住する外国人労働者－』古今書院、1995 年。

・山本健児『産業集積の経済地理学』法政大学出版局、2005 年。

・山本健児、平川一臣（編）『朝倉世界地理講座－大地と人間の物語－第 9 巻 中央・北ヨーロッパ』朝倉書店、2014 年。

・山本健児（2018a）「ドイツ経済復活の鍵としてのミッテルシュタントと地域経済」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 84 巻、第 5・6 合併号、pp.51-86。

・山本健児（2018b）「地域経済の 4 つの支柱とシュタントオルトポリティークの意義」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 85 巻、第 1 号、pp.1-26。

・山本健児（2018c）「地域経済の構造転換と「場所に関する戦略的経営」－オーストリア・フォアールベルク州の事例－」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 85 巻第 4 号、pp.59-106。

・山本健児（2019）「地域経済とイノベーション企業群」－オーストリア・フォアールベルク州における製造企業最大 4 社の事例－、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 86 巻第 1 号、pp.61-111。

・山本健児（2020a）「オーストリア・フォアールベルク州における優良企業」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 86 巻第 5/6 号、pp.49-84。

・山本健児（2020b）「伝統的工業部門で進化したオーストリア・フォアールベルク企業」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 87 巻第 1・2・3 号、pp.31-66。

・Yamamoto, Kenji (2020c) Evolution of a Small and Medium-sized Enterprise in a Peripheral Area of Japan into a Hidden Champion. 『経済学研究』（九州大学経済学会）第 87 巻第 4 号、pp.23-45。

・山本健児（2021）「地域経済の発展に関する Douglass C. North の理論的考察の意義と問題点」、『経済志林』第 88 巻第 4 号、印刷中。

【Outline and objectives】

This lecture deals with urban system and intra-city structure in developed countries such as Japan, USA, Germany and so on. Attending students should report his or her own research theme at least once within a semester.

HUG500B5

歴史地理学研究 I

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸東京を学び、江戸東京アトラスを作成しよう！（1）

【到達目標】

江戸東京の地図作成の流れについて、各時期の主要な江戸図・東京図を取り上げ、その特徴を学習したうえで、各種の歴史的事象のデータをもとに江戸東京の地図を作成することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 近世江戸における絵図・地図を取り上げ、個別の絵図・地図に関する研究史を概観し、江戸図の特徴を把握する。
 2. 近代以降の東京における地図史の展開を踏まえながら、現代東京に至る地図全般について議論する。
 3. 具体的な地図作成として、江戸東京の構造物（橋や広場、堀など）・名所旧跡・史跡などの歴史的データを収集し、東京の地図上にマッピングする。
 4. 地図上に歴史的現象を可視化することから、江戸東京の都市的・地域の特徴を考察する。
- 対面授業とオンライン授業を併用します。Google ドライブ上で作業をし、紙の配布・紙での作業は極力控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。大学の方針や社会状況の変化で授業方法を変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、履修者・出席者の確認をする。
2	江戸図の概説	主要な江戸図の歴史を学ぶ。
3	近代東京図の概説	主要な東京図の歴史を学ぶ。
4	江戸東京の鳥観図・風景画の概説	江戸東京の鳥観図や風景画について学ぶ。
5	戦後～現代東京図の概説	戦後から現代にいたる東京図について学ぶ。
6	江戸東京の歴史的データの収集①	地図化するために、どのようなデータがあるのか、検討する。
7	江戸東京の歴史的データの収集②	東京の名所史跡のデータを収集する。
8	江戸東京の歴史的データの収集③	東京の名所史跡のデータを収集してまとめる。
9	東京の地図上にマッピングする①	名所史跡の分布を地図上に示す。
10	東京の地図上にマッピングする②	名所史跡の分布を地図上に示した地図をみながら考察する。
11	東京の地図上にマッピングする③	東京の名所史跡の分布の特徴を考察し、その検討事項をまとめる。
12	東京の地図上にマッピングする④	東京の名所史跡の分布の意味を分析する。
13	江戸東京における名所史跡の分布を考察する	それぞれの分布について、その特徴を考察し、その意味を分析する。
14	まとめ	作成した地図をもとに、江戸東京の空間的な多様性および歴史的な地域性についてまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
各地の博物館や美術館で開催されている地図展や風景画展などの常設および企画展をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

春学期は、江戸時代の代表的な名所図会『江戸名所図会』および江戸の地誌である『御府内備考』（文政年間〜）および東京府編『東京府史蹟』（大正 8 年）を使います。江戸名所図会と御府内備考はデータを配布して作業します。東京府史蹟は国会図書館デジタルコレクションを利用します。Google ドライブに配布します。

【参考書】

Google ドライブに適宜、関連文献を紹介しします。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：参加 50 %、発表・作業 40 %、議論 10 %
「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

実際にデータを収集して地図を作成する作業は、とても面白いと感想をいただきました。いろいろな地図を見る機会をつくり、フィールドワークもします。江戸東京の地理にも詳しくなります。地理学専攻以外の大学院生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】

地図上の位置を探すために Google マップが必要です。スマートフォンや PC、iPad などの機器類を持参してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究
<研究テーマ> 日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究
<主要研究業績>
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015 年「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号、2020 年予定など

【Outline and objectives】

Studying and mapping Edo-Tokyo(1)

HUG500B5

歴史地理学研究Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸東京を学び、江戸東京アトラスを作成しよう！（2）

【到達目標】

江戸東京の各時期の主要な地図や歴史的事象に関する論文や文献を読み、江戸東京に関する地理的知識を深めるとともに、地図にかかわる歴史的事象のデータをもとに江戸東京の地図を作成することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 江戸東京の都市空間の形成史、とりわけ「新宿区」を中心に学び、都市の空間的特徴を把握する。
 2. 江戸東京の地図を見ながら、治水や土木工事、都市開発などの研究史をおさえ、都市の空間的発達を歴史を学ぶ。
 3. 具体的な地図作成として、江戸東京の遺産にかかわる歴史的数据を収集し、東京の地図上にマッピングする。
 4. 地図上に歴史的事象を可視化することから、江戸東京の歴史地理的特徴を考察する。
- 対面授業とオンライン授業を併用します。Google ドライブ上で作業を行います。なるべく紙の配布や紙上での共同作業は控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントして返します。なお、大学の方針や社会状況の変化で、授業方法を変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の説明、履修者・出席者の確認をする。
第 2 回	江戸の都市形成、新宿区の歴史を学ぶ①	江戸城およびその周辺、新宿区のフィールドワーク 新宿歴史博物館の見学
第 3 回	江戸の都市発展、新宿区の歴史を学ぶ②	江戸の都市図で確認作業する
第 4 回	近代東京の都市形成、新宿区の歴史を学ぶ①	新宿駅周辺の開発史を学ぶ
第 5 回	近代東京の都市変容、新宿区の歴史を学ぶ②	東京の都市図で確認作業する
第 6 回	江戸東京の旧跡や地形、土木事業関係のデータを収集する①	掘割・河川などの情報に関する文献を確認する。
第 7 回	江戸東京の旧跡や地形、土木事業関係のデータを収集する②	坂・谷など地形関連の情報を確認する。
第 8 回	江戸東京の旧跡や地形、土木事業関係のデータを収集する③	橋・河川改修などのデータを収集する。
第 9 回	江戸東京の旧跡や地形、土木事業関係のデータを収集する④	陸地測量部など地図作成にかかわる旧跡を確認する。
第 10 回	地図上にマッピングする①	収集したデータを地図上に表現する。
第 11 回	地図上にマッピングする②	収集したデータを地図上に表現して考察する。

- 第12回 地図上にマッピングする 各要素の分布の意味を分析する。
③
- 第13回 地図上にマッピングする 分布を考察し、江戸東京の地域的
④ 特徴を考察する。
- 第14回 まとめ 地図から見える江戸東京の歴史地
理的特性を考察し、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
江戸東京の地形や水系、それらの変化の歴史などを把握するために、
こまめにフィールドにでて、実際に歩いてみることをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

秋学期は、具体的な地域として、法政大学周辺としての「新宿区」の
歴史地理を中心に学びます。引き続き、江戸の地誌である『御府内
備考』（文政年間～）も利用します。

【参考書】

Google ドライブに適宜、関連文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：参加 50 %、発表・作業 40 %、議論 10 %
「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

ただ作業するだけでなく、実際に東京を歩いてみたいという意見を多
くいただきました。秋～冬は気候も温暖で歩きやすいので、ぜひ外
にでてみたいと思います。地理学専攻以外の大学院生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】

地図上の位置を探すために Google マップが必要です。スマートフォ
ンや PC、iPad などの機器類を持参してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>歴史地理学 地図史研究
<研究テーマ>日本北方の歴史地理学 日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究
<主要研究業績>
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本
をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015 年「近代の名所
図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号、2020 年予定など

【Outline and objectives】

Studying and mapping Edo-Tokyo(2)

HUG600B5

歴史地理学演習 I

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法（1）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収
集方法・分析方法について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 歴史地理学の論文を読み、筆者の主張や学史における位置づけ
を読みとる訓練を行う。
 2. 歴史地理学的研究を行ううえでの史料収集の方法や史料読解の
技術を身につけるため、実際の史料を読む練習を行い、該当分野の
テキストを読んで学習する。
 3. 歴史地理学の論文内でのデータの利用方法や処理の仕方を学習
する。
 4. 具体的な史料やデータを用いて、歴史地理学的な論理構成を考
える訓練を行う。
- 対面授業とオンライン授業を組み合わせで行います。資料類はすべ
て学習支援システムにアップするようにします。紙での配布は行い
ません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点な
どをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	出席者の確認、授業の概要につ いて説明する。発表の順番を決め る。
2	歴史地理学の論文の収 集方法	テキストを読みながら、歴史地理 学的テーマとは何かを把握し、そ れらに関連する論文の収集方法に ついて学ぶ。
3	歴史地理学の論文の読 み方①	論文の著者の主張について十分に 理解する。
4	歴史地理学の論文の読 み方②	論文中での図表の効果的な扱い方 について、先行研究をもとに学 ぶ。
5	歴史地理学の論文の読 み方③	統計資料や行政の報告書類を用い た研究方法について、先行研究を もとに議論する。
6	史料の収集方法①	図書館における史料収集の方法を 学ぶ。
7	史料の収集方法②	地方の文書館や博物館における史 料収集の方法を学ぶ。
8	史料の読解練習①	古地図の読解方法について学ぶ。
9	史料の読解練習②	文書史料の読解方法について学 ぶ。
10	データの処理方法①	史料をもとに、どのようなデータ が論文作成に必要なか学ぶ。
11	データの処理方法②	歴史地理学的な研究テーマに即し た効果的なグラフや表を作成す る。
12	データの処理と論文構 成①	先行研究をもとに、収集・処理し たデータと論文構成の関係につい て分析する。

13	データの処理と論文構成②	先行研究をもとに、データと論旨の関係について把握する。
14	データの処理と論文構成③	自分の研究テーマに即したデータの処理方法と構成について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。自分の発表前には、図書館における事前の文献調査は十分に行うようにしてください。また、テキストなどのわからない（読めない）専門用語などは事前に各自で調べてから授業に参加してください。

【テキスト（教科書）】

有蘭正一郎ほか『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2007 年。授業で使う該当部分を各自でコピーしていただきます。適宜授業内で指示します。

【参考書】

授業内において適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 30 %、討論への参加 20 %
評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

オリジナリティの高い論文が作成できるように、一人ずつ丁寧に指導するようにします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向けの演習です。大学院および学部の人文学部・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究
＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究
＜主要研究業績＞
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015 年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015 年
「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号 2020 年予定など

【Outline and objectives】

Writing a paper on historical geography (1)

HUG600B5

歴史地理学演習Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法（2）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法、分析方法について、自分の関心あるテーマを選んで、発表し、論文作成の手順について学ぶことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 春学期の歴史地理学演習Ⅰの授業内容を踏まえ、各自の関心にもとづいて、歴史地理学的研究テーマを選ぶ。
2. 受講者が先行研究の紹介、史料収集、データ処理と分析を行い、それを発表し、授業内で議論する。
対面授業とオンライン授業を組み合わせで行います。資料はすべて学習支援システムにアップするようにします。紙での配布はいたしません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	受講者を確認し、発表の順番を決める。
2	先行研究の紹介①	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ①）。
3	先行研究の紹介②	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ②）。
4	先行研究の紹介③	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ③）。
5	先行研究の紹介④	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ④）。
6	史料紹介①	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ①）。
7	史料紹介②	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ②）。
8	史料紹介③	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ③）。
9	史料紹介④	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ④）。
10	研究報告①	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ①）。

11	研究報告②	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ②）。
12	研究報告③	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ③）。
13	研究報告④	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ④）。
14	まとめ	受講者による研究報告を踏まえて、歴史地理学研究的今後の展開について議論を行う（受講者全員）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。各自の発表の前には、その内容を十分に準備してください。

【テキスト（教科書）】

有蘭正一郎ほか『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2007 年。授業で使う該当部分を各自でコピーしていただきます。適宜授業内で指示します。

【参考書】

各自のテーマに即して、適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 50 %

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

先行研究の読み込みや論文の書き方など、一人ずつ丁寧に指導いたします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向きの演習です。大学院および学部的人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究 江戸東京の名所研究

＜主要研究業績＞

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015 年

「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号 2020 年予定など

【Outline and objectives】

Writing a paper on historical geography (2)

HUG500B5

人文地理学文献講読 I

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人文地理学の英文文献を使って、英語読解能力を強化します。テキストに「Geography of Tokyo」を用いることによって、会話時の表現方法を豊かにします。

【到達目標】

英語読解能力の強化と、会話時の表現方法を豊かにすることを目標にします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生が英文テキストを紹介し、全員で議論を行うことによって進める。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。レポートなどについては、コメントをつけて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロ	講義方針の決定
第 2 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Introduction Discover Tokyo」
第 3 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter1 Tokyo's Landforms」
第 4 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter1 Close-up」
第 5 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter2 Tokyo's Climate」
第 6 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter2 Close-up」
第 7 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter3 Vegetation and Wildlife in Tokyo」
第 8 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter3 Close-up」
第 9 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter4 Tokyo's Waters and Seas」
第 10 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter4 Close-up」
第 11 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter5 Tokyo's History and Culture」
第 12 回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter5 Close-up」

- 第13回 テキストの報告と討論 各受講生による発表
「Chapter6 Living in Tokyo」
- 第14回 テキストの報告と討論 各受講生による発表
「Chapter6 Close-up」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを読んできるところを前提とする。その上で内容の確認、理解に努める。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Toshio Kikuchi, Hiroshi Matsuyama, Lidia Sasaki, Eranga Ranaweera(eds) Geography of Tokyo, Asakura Publishing, 2020

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

十分な準備が大前提となる。発表時だけの準備ではなく、参加時の準備も評価の大きな対象となる。

【学生の意見等からの気づき】

辞書を引く癖をつけてもらいます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、環境問題の発生メカニズム

＜主要研究業績＞

1. 「木曾川水系の水資源利用・管理システムの特徴と問題点（上・下）」水利科学 323、325、2012年
2. 「わが国の水資源政策と水資源問題」（所収 中藤康俊・松原宏編『日本の資源問題』古今書院）2012年
3. 「ダム・河口堰問題から山村地域を考える」環境技術 40-10、2011年
4. 「河川行政の見直しと科学技術」（吉岡 斉編『新通史 日本の科学技術 第1巻』原書房）2011年
5. 「ダム計画の中止・推進をめぐる地域事情」経済地理学年報 57-1、2011年

【Outline and objectives】

Improve our English reading comprehension with the English literature of human geography. By using "Geography of Tokyo" in the text, we will enrich the expression method during conversation.

HUG500B5

人文地理学文献講読Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人文地理学の英文文献を使って、英語読解能力を強化します。テキストに「Geography of Tokyo」を用いることによって、会話時の表現方法を豊かにします。

【到達目標】

英語読解能力の強化と、会話時の表現方法を豊かにすることを目標にします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生が英文テキストを紹介し、全員で議論を行うことによって進める。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。レポートなどについては、コメントをつけて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	講義方針の決定
第2回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter7 Tokyo's Economy」
第3回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter7 Close-up」
第4回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter8 Tourism in Tokyo」
第5回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Chapter8 Close-up」
第6回	テキストの報告と討論	各受講生による発表 「Conclusion Tokyo's Future」
第7回	論文（経済地理学）の報告と討論	各受講生による発表
第8回	論文（社会地理学）の報告と討論	各受講生による発表
第9回	論文（都市地理学）の報告と討論	各受講生による発表
第10回	論文（文化地理学）の報告と討論	各受講生による発表
第11回	論文（政治地理学）の報告と討論	各受講生による発表
第12回	論文（経済地理学(2)）の報告と討論	各受講生による発表
第13回	論文（社会地理学(2)）の報告と討論	各受講生による発表
第14回	まとめ	各受講生同紙による議論と確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを読んできるところを前提とする。その上で内容の確認、理解に努める。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Toshio Kikuchi, Hiroshi Matsuyama, Lidia Sasaki, Eranga Ranaweera(eds) Geography of Tokyo, Asakura Publishing, 2020

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、討論：50 %

十分な準備が大前提となる。発表時だけの準備ではなく、参加時の準備も評価の大きな対象となる。

【学生の意見等からの気づき】

辞書を引く癖をつけてもらいます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、環境問題の発生メカニズム

＜主要研究業績＞

1. 「木曾川水系の水資源利用・管理システムの特徴と問題点（上・下）」水利科学 323、325、2012 年
2. 「わが国の水資源政策と水資源問題」（所収 中藤康俊・松原宏編『日本の資源問題』古今書院）2012 年
3. 「ダム・河口堰問題から山村地域を考える」環境技術 40-10、2011 年
4. 「河川行政の見直しと科学技術」（吉岡 斉編『新通史 日本の科学技術 第1巻』原書房）2011 年
5. 「ダム計画の中止・推進をめぐる地域事情」経済地理学年報 57-1、2011 年

【Outline and objectives】

Improve our English reading comprehension with the English literature of human geography. By using "Geography of Tokyo" in the text, we will enrich the expression method during conversation.

GEO500B5

地理情報システム研究 I

中山 大地

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

数値標高モデルの処理方法について述べられた英語文献を輪読しながら、内容に基づいて Python によるプログラミングを行う。その結果に機械学習の一種である決定木を適用して土砂災害判別モデルならびに土砂災害予測モデルを作成し、ハザードマップを作成する。

【到達目標】

- (1) ラスタ型の代表的なデータである数値地形モデルの処理方法について、原理を理解するとともに原理に基づいた数値計算ができる。
- (2) 判別モデルの性能について定量的に評価できる。
- (3) 土砂災害判別モデルに基づいたハザードマップが作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義ならびに実習形式とする。授業内での発表を含む。分析結果についてのグループディスカッションを行う。提出されたりアクションペーパーや課題については授業内で解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	空間データの取得	数値標高モデルのダウンロードとモザイク、投影変換
第 2 回	文献輪読と数値計算（その 1）	Python による傾斜量の計算
第 3 回	文献輪読と数値計算（その 2）	Python による曲率の計算
第 4 回	文献輪読と数値計算（その 3）	Python による接峰面の計算
第 5 回	文献輪読と数値計算（その 4）	Python による流路網処理
第 6 回	文献輪読と数値計算（その 5）	Python による Sediment Transport Index と Wetness Index の計算
第 7 回	ラスタ型データの集計処理	第 2 回から第 6 回で計算した地形量と土砂災害の有無をポリゴンごとに集計する。
第 8 回	機械学習を用いた土砂災害判別モデルの作成	第 7 回で集計した地形量を説明変数、土砂災害の有無を目的変数として、決定木を用いた判別モデルを作成する。
第 9 回	土砂災害判別モデルの評価	第 8 回で作成した判別モデルについて、判定効率表・正解率・カッパ係数・ROC 曲線に基づいた評価を行う。
第 10 回	土砂災害判別モデルの地図化	第 9 回で作成した判別モデルを、GIS を用いて地図化する。
第 11 回	土砂災害予測モデルの作成	第 8 回から第 10 回にかけて作成した土砂災害判別モデルをトレーニングデータとした土砂災害予測モデルを作成する。
第 12 回	土砂災害予測モデルの評価	第 11 回で作成した予測モデルの性能評価を行う。
第 13 回	土砂災害予測モデルの地図化	土砂災害予測モデルを図化し、ハザードマップを作成する。

第14回 修士論文研究に関する 修士論文研究での GIS 応用に関する プレゼンテーション するプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

週あたりおよそ2時間の事前学習（特に文献講読・プログラミングなど）が必要となる。

前後期ともにGISを用いた実習を含む。実習は授業内では終わらないので、授業外での復習（目安として週あたり2時間以上）が必要になる。

【テキスト（教科書）】

Burrough, P. A. and McDonnell, Rachael (1998) Principles of Geographical Information Systems (Spatial Information Systems), Oxford Univ. Press, pp. 333, ISBN-10: 9780198233657. (受講生に貸与する)

【参考書】

特に指定しない

【成績評価の方法と基準】

（1）成績評価方法

平常点およびプレゼンテーション

（2）成績評価基準・評価の配分等

平常点として授業への貢献度（20％）ならびに講義内容の理解度（40％）とする。これに加えてプレゼンテーション（40％）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

ノートPCを持参すること。フリーのデスクトップGISであるQGISをインストールしておくこと。Googleのアカウントを作成しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、地理情報科学、災害シミュレーション

＜研究テーマ＞

自然災害のシミュレーション、避難行動シミュレーション、地形の定量的分析

＜主要研究業績＞

<https://researchmap.jp/read0196218>

【Outline and objectives】

We will read the textbook in English that describes how to process digital elevation models. Programming in Python will be conducted based on the content of the textbook. Then, we apply decision trees, a type of machine learning, to the results to create a landslide discrimination model and a landslide prediction model, and produce a hazard map.

GEO500B5

地理情報システム研究Ⅱ

中山 大地

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

道路データを用いたネットワーク分析を行う。ネットワーク分析には到達圏解析、最近隣施設探索、ODコストマトリクスの計算など含まれるが、これらの機能の基本的な考え方を理解した上で、実社会への応用として避難所の到達圏解析を行い、ハザードマップを作成する。

【到達目標】

(1) ベクタ型の代表的なデータである道路データを用いてネットワーク分析を行い、施設の到達圏に基づいた人口集計ができる。

(2) 避難行動シミュレーションに基づいたハザードマップが作成できる。

(3) 自身の修士論文研究にGISを応用する具体的な方策を立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義ならびに実習型とする。授業内での発表を含む。分析結果についてのグループディスカッションを行う。提出されたりアクションペーパーや課題については授業内で解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	空間データの取得	基盤地図情報ベクタデータならびに国土数値情報の入手と投影変換を行う。
第2回	面積按分による人口推定（その1）	建物データと小地域データを用いて建物ごとの人口推定を行う。
第3回	空間結合による人口推定（その2）	第2回の結果を用いて土砂災害危険地域の人口推定を行う。
第4回	ネットワーク分析の基礎	ネットワーク分析に関する基本的な考え方、応用例などを理解し、必要なデータについての検討を行う。
第5回	道路ネットワークセットの作成	国土基本情報を用いて道路ネットワークデータセットを作成する。
第6回	避難所データの作成	避難所のポイントデータを作成する。
第7回	避難所における到達圏解析	ネットワーク解析に基づいて避難所ごとの到達圏（時間距離）を計算する。
第8回	避難所到達圏内の人口推定	第2回・第7回の結果を用いて避難所からの到達圏内の人口を推定する。
第9回	避難所到達圏の地図化	第6回から第8回の結果を用いて避難所到達圏の地図を作成する。
第10回	通行不可領域がある場合の避難シミュレーション（その1）	通行不可能領域（バリア）を設定して避難所の到達圏解析を行う。
第11回	通行不可領域がある場合の避難シミュレーション（その2）	第10回の結果を用いて地図を作成し検討する。

- 第12回 立ち寄り地がある場合 立ち寄り地がある場合（二段階避
の避難シミュレーション（その1） 難）の避難シミュレーションとし
て、OD行列を用いた最短経路検
索を行う。
- 第13回 立ち寄り地がある場合 第12回の結果を用いて地図を作
の避難シミュレーション（その2） 成し検討する。
- 第14回 修士論文研究に関する プレゼンテーション 修士論文研究でのGIS応用に関
するプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前後期ともにGISを用いた実習を含む。実習は週あたりおよそ2時間の事前学習と、授業外での復習（目安として週あたり2時間以上）が必要になる。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。必要なプリント類を配付する。

【参考書】

特に指定しない。

【成績評価の方法と基準】

(1) 成績評価方法

平常点およびプレゼンテーション

(2) 成績評価基準・評価の配分等

平常点として授業への貢献度（20％）ならびに講義内容の理解度（40％）とする。これに加えてプレゼンテーション（40％）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

ノートPCを持参すること。フリーのデスクトップGISであるQGISをインストールしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、地理情報科学、災害シミュレーション

<研究テーマ>

自然災害のシミュレーション、避難行動シミュレーション、地形の定量的分析

<主要研究業績>

<https://researchmap.jp/read0196218>

【Outline and objectives】

Perform network analysis using road data. Network analysis includes service area analysis, nearest facility search, OD cost matrix calculation, etc. After understanding the basic concept of these functions, we perform service area analysis of evacuation centers as an application to the real world. Create a hazard map.

GEO600B5

地理学現地研究Ⅰ

専任教員が担当

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教室内での講義内容を踏まえた上で、実際に現地に赴いて多くの地理学的事象を直接、観察・観測し、適切に理解することを目標にする。

【到達目標】

現地に赴いて、地理学的事象を目にした際、的確に自分の「眼（マナコ）」で理解可能な力の養成をすること、この科目の主目標を据えている。本科目の履修を通して、地域における地理学的事象を客観的に把握できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

地理学専攻修士課程においては必修科目であり、修了までに地理学現地研究Ⅰ（1単位＝2泊3日以上）、および地理学現地研究Ⅱ（1単位＝2泊3日以上）の合計2単位の取得が必要です。履修する場合は、各年次の初めに必ず履修登録して下さい。個々の現地研究の実施などに関しては実施の都度、実施教員を通じて伝達する予定です。なお、現地研究を実施する担当教員やそのテーマによっては、海外で行う場合もあるので、その点に関して予め断っておきます。

基本的に地理学現地研究Ⅰは修士1年次に、地理学現地研究Ⅱは修士2年次に履修するのが望ましいでしょう。

なお、課題等に関してはオフィス・アワーでフィードバックする予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
1	本科目の概要説明	年度はじめに実施予定の担当教員とテーマを公表する予定である。
2以降	集中的に実施する	現地での調査研究手法を学び、修士論文につなげる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、あわせて1時間を標準とします。ただし、集中講義形式であるので、その限りではありません。現地（フィールド）での学びだけでなく、事前学習や事後学習も十分に行う必要があります。

日頃から、年度の実施予定内容を念頭に置き、その事象が現場ではどのような状況にあるのかを考慮しながら、関連文献に目を通してください。

【テキスト（教科書）】

個々の教員が、その都度、適切な文献の紹介や地理学的事象への補足的な説明をする。

【参考書】

各実施教員が、その都度、適切な文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

各教員が個々に実施した現地研究への参加学生に対して、その理解度などを中心に評価を行う。目安として参加に伴う平常点60％、レポート40％。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域><研究テーマ><主要研究業績>

【Outline and objectives】

The aim of this course (fieldwork ,excursion) is to enable each student to conduct field survey independently by training in survey technics.

GEO600B5

地理学現地研究Ⅱ

専任教員が担当

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教室内での講義内容を踏まえた上で、実際に現地に赴いて多くの地理学的事象を直接、観察・観測し、適切に理解することを目標にする。

【到達目標】

現地に赴いて、地理学的事象を目にした際、的確に自分の「眼（マナコ）」で理解可能な力の養成をすることに、この科目の主目標を据えている。本科目の履修を通して、地域における地理学的事象を客観的に把握できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

地理学専攻修士課程においては必修科目であり、修了までに地理学現地研究Ⅰ（1単位＝2泊3日以上）、および地理学現地研究Ⅱ（1単位＝2泊3日以上）の合計2単位の取得が必要です。履修する場合は、各年次の初めに必ず履修登録して下さい。個々の現地研究の実施などに関しては実施の都度、実施教員を通じて伝達する予定です。なお、現地研究を実施する担当教員やそのテーマによっては、海外で行う場合もあるので、その点に関して予め断っておきます。

基本的に地理学現地研究Ⅰは修士1年次に、地理学現地研究Ⅱは修士2年次に履修するのが望ましい。

なお、課題等に関してはオフィス・アワーでフィードバックする予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
1	本科目の概要説明	年度はじめに実施予定の担当教員とテーマを公表する予定である。
2以降	集中的に実施する	現地での調査研究手法を学び、修士論文につなげる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、あわせて1時間を標準とします。ただし、集中講義形式であるので、その限りではありません。現地（フィールド）での学びだけでなく、事前学習や事後学習も十分に行う必要があります。

日頃から、年度の実施予定内容を念頭に置き、その事象が現場ではどのような状況にあるのかを考慮しながら、関連文献に目を通してください。

【テキスト（教科書）】

個々の教員が、その都度、適切な文献の紹介や地理学的事象への補足的な説明をする。

【参考書】

各実施教員が、その都度、適切な文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

各教員が個々に実施した現地研究への参加学生に対して、その理解度などを中心に評価を行う。目安として参加に伴う平常点 60 %、レポート 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域><研究テーマ><主要研究業績>

【Outline and objectives】

The aim of this course (fieldwork ,excursion) is to enable each student to conduct field survey independently by training in survey technics.

HUG700B5

地理学特別演習 I

前 全 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】

博士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、博士論文を熟成させることを目標とする。またその過程において、まとまった研究課題ごとに、学術雑誌等に投稿する準備をすることも本授業の目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第 2 回	研究テーマの設定 1	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換 1
第 3 回	研究テーマの設定 2	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換 2
第 4 回	研究内容の紹介 1	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 1
第 5 回	研究内容の紹介 2	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 2
第 6 回	研究内容の紹介 3	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 3
第 7 回	研究内容の紹介 4	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 4
第 8 回	受講生の研究内容 1	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 1
第 9 回	受講生の研究内容 2	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 2
第 10 回	受講生の研究内容 3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 3
第 11 回	受講生の研究内容 4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 4
第 12 回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導 1	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 1
第 13 回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導 2	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 2
第 14 回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導 3	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 3

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。
準備・復習時間は1回につきそれぞれ2時間以上とする。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。自然地理学に関連する内外の文献。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会
「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)
を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Research instruction to complete doctor thesis on geomorphology and Quaternary sciences

HUG700B5

地理学特別演習Ⅱ

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】

博士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、博士論文を熟成・完成させることを目標とする。またその過程において、まとまった研究課題ごとに、学術雑誌等に投稿する準備をすることも本授業の目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	受講生の研究内容1	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論1
第3回	受講生の研究内容2	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論2
第4回	受講生の研究内容3	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論3
第5回	受講生の研究内容4	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論4
第6回	受講生の研究内容5	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論5
第7回	受講生の研究内容6	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論6
第8回	受講生の研究内容7	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論7
第9回	受講生の研究内容8	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論8
第10回	受講生の研究内容9	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論9
第11回	受講生の研究内容10	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論10
第12回	受講生の研究内容11	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導11

- 第13回 受講生の研究内容12 受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導12
- 第14回 受講生の研究内容13 受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。予習復習に2時間以上かけること。準備・復習時間は1回につきそれぞれ2時間以上とする。

【テキスト（教科書）】

とくに指定しない。自然地理学に関連する内外の文献。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会
「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【その他の重要事項】

今年度は特殊事情のため、専攻生以外の受講はできないこととする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前空英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Research instruction to complete doctor thesis on geomorphology and Quaternary sciences

HUG700B5

地理学特別演習 I

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、受講生が博士論文を執筆することを念頭に置いた授業です。具体的には、受講生が自らの研究内容に関する報告を行い、それに対する議論を通じて研究の進捗状況を確認するとともに、受講生の博士論文の研究に関連する研究動向や研究手法を広げ、高めることを目的とします。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が自らの研究を進展させることを目標とします。具体的には、研究内容のプレゼンテーションおよびディスカッションを通じて受講生が各自の研究を向上させ、そして、自らの研究の成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は演習科目であることから、主として、受講生による研究内容のプレゼンテーションと、それに関するディスカッションによって授業を展開します。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的には対面形式で行いますが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認／具体的な授業計画の調整・確認
第2回	研究内容および研究計画の紹介①	受講生による研究内容の概要および研究計画の紹介と意見交換①
第3回	研究内容および研究計画の紹介②	受講生による研究内容の概要および研究計画の紹介と意見交換②
第4回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告および議論①
第5回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告および議論②
第6回	研究分野のレビュー①	受講生の研究関連分野の動向に関する整理および議論①
第7回	研究分野のレビュー②	受講生の研究関連分野の動向に関する整理および議論②
第8回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告および議論③
第9回	研究内容の報告④	受講生による研究の中間報告および議論④
第10回	研究手法の確認・検討①	受講生の研究に関わる研究手法（調査方法、分析方法など）の確認および議論①
第11回	研究手法の確認・検討②	受講生の研究に関わる研究手法（調査方法、分析方法など）の確認および議論②
第12回	研究内容の報告⑤	受講生による研究の中間報告および議論⑤

- 第13回 研究内容の報告⑥ 受講生による研究の中間報告および議論⑥
- 第14回 課題の提示および方向性の確認 春学期を通じての受講生の研究の取り組みに対する課題の提示／今後の方向性の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とするが、研究を進め、論文を作成するには多くの時間が必要であるため、その限りではありません。

また、受講生が自らの研究を進展させておくことと共に、常に関連分野の研究動向を把握するよう努めることが求められます。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

特定の参考書は設定しませんが、受講生の研究内容に関わる文献すべてが参考書との扱いになります。

【成績評価の方法と基準】

受講生による各種プレゼンテーション：50％、ディスカッション：50％で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

基本的には受講生の研究を進捗させることを第一の目的とする授業ですが、視野を広げ、関連分野の知識・方法論を修得することも視野に入れて授業を行います。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「地理学特別演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

HUG700B5

地理学特別演習Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、受講生が博士論文を執筆することを念頭に置いた授業です。具体的には、受講生が自らの研究内容に関する報告を行い、それに対する議論を通じて研究の進捗状況を確認するとともに、受講生の博士論文の研究に関連する研究動向や研究手法を広げ、高めることを目的とします。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が自らの研究を進展させることを目標とします。具体的には、研究内容のプレゼンテーションおよびディスカッションを通じて受講生が各自の研究を向上させ、そして、自らの研究の成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は演習科目であることから、主として、受講生による研究内容のプレゼンテーションと、それに関するディスカッションによって授業を展開します。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的には対面形式で行いますが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認／具体的な授業計画の調整・確認
第2回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告および議論①
第3回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告および議論②
第4回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告および議論③
第5回	研究内容の報告④	受講生による研究の中間報告および議論④
第6回	研究内容の報告⑤	受講生による研究の中間報告および議論⑤
第7回	研究内容の報告⑥	受講生による研究の中間報告および議論⑥
第8回	研究内容の報告⑦	受講生による研究の中間報告および議論⑦
第9回	研究内容の報告⑧	受講生による研究の中間報告および議論⑧
第10回	研究内容の報告⑨	受講生による研究の中間報告および議論⑨
第11回	研究内容の報告⑩	受講生による研究の中間報告および議論⑩
第12回	研究内容の報告⑪	受講生による研究の中間報告および議論⑪
第13回	研究内容の報告⑫	受講生による研究の中間報告および議論⑫

第 14 回 課題の提示および方向 秋学期を通じての受講生の研究の性の確認
取り組みに対する課題の提示／今後の方向性の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とするが、研究を進め、論文を作成するには多くの時間が必要であるため、その限りではありません。

また、受講生が自らの研究を進展させておくことと共に、常に関連分野の研究動向を把握するよう努めることが求められます。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

特定の参考書は設定しませんが、受講生の研究内容に関わる文献すべてが参考書との扱いになります。

【成績評価の方法と基準】

受講生による各種プレゼンテーション：50 %，ディスカッション：50 %で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

基本的には受講生の研究を進捗させることを第一の目的とする授業ですが、視野を広げ、関連分野の知識・方法論を修得することも視野に入れて授業を行います。

【その他の重要事項】

春学期開講の「地理学特別演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

HUG700B5

地理学特別演習Ⅰ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文が作成できるようになる。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識、適切な説明論理、適切な説明能力を獲得し、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。研究内容の報告については、授業内のやりとりで対応する。共同調査については、最後に提出してもらったレポートの評価を行い、受講生に返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第 2 回	研究内容の報告（1）	受講生の発表
第 3 回	研究内容の報告（2）	受講生の発表
第 4 回	研究内容の報告（3）	受講生の発表
第 5 回	研究内容の報告（4）	受講生の発表
第 6 回	共同調査（1）	フィールドワークを行う
第 7 回	共同調査（2）	フィールドワークを行う
第 8 回	共同調査（3）	フィールドワークを行う
第 9 回	共同調査（4）	フィールドワークを行う
第 10 回	共同調査（5）	フィールドワークを行う
第 11 回	共同調査（6）	フィールドワークを行う
第 12 回	研究内容の報告（5）	受講生の発表
第 13 回	研究内容の報告（6）	受講生の発表
第 14 回	研究内容の報告（7）	受講生の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。自らの研究課題に対しての準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 % 討論：50 % 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A member of a class reports on a thesis for a doctorate. A member of a class aims at completion of a thesis for a doctorate by discussing. A joint investigation is put into effect at the same time.

HUG700B5

地理学特別演習Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文が作成できるようになる。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識、適切な説明論理、適切な説明能力を獲得し、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。研究内容の報告については、授業内のやりとりで対応する。共同調査については、最後に提出してもらったレポートの評価を行い、受講生に返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第 2 回	研究内容の報告（1）	受講生の発表
第 3 回	研究内容の報告（2）	受講生の発表
第 4 回	研究内容の報告（3）	受講生の発表
第 5 回	研究内容の報告（4）	受講生の発表
第 6 回	共同調査（1）	フィールドワークを行う
第 7 回	共同調査（2）	フィールドワークを行う
第 8 回	共同調査（3）	フィールドワークを行う
第 9 回	共同調査（4）	フィールドワークを行う
第 10 回	共同調査（5）	フィールドワークを行う
第 11 回	共同調査（6）	フィールドワークを行う
第 12 回	研究内容の報告（5）	受講生の発表
第 13 回	研究内容の報告（6）	受講生の発表
第 14 回	研究内容の報告（7）	受講生の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 % 討論：50 % 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A member of a class reports on a thesis for a doctorate. A member of a class aims at completion of a thesis for a doctorate by discussing. A joint investigation is put into effect at the same time.

GEO500B5

自然地理学特別講義Ⅲ

石井 吉之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地球雪氷圏における水循環プロセスの特徴を、国内外の研究事例を通して学ぶ。

【到達目標】

地球雪氷圏の分布やそこでの水循環特性についての理解を深めることにより、地球の温暖化や寒冷化に伴う水循環変動について、水文学的見地から専門家としての持論を展開できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

はじめに地球上の雪氷圏の分布やそこで生起する雪氷水文現象について学ぶ。次に、積雪の一生すなわち堆積・消耗過程についての講義を受け、積雪の持つ二面性（災害と資源）について理解する。さらに、これまでの融雪洪水論の展開の中でとり残された課題について理解する。講義の中で、何回か関連した課題が与えられるので、学生どうして議論しながら解答を導くことで理解を深める。課題の解答例は次回の講義時に提示し補足説明をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講師紹介と趣旨説明
第 2 回	地球雪氷圏の概要	地球上で雪氷が関与する地域について学ぶ。
第 3 回	積雪の一生 (1) 降雪のメカニズム	日本に大雪をもたらす降雪のしくみについて学ぶ。
第 4 回	積雪の一生 (2) 雪の堆積と変態	雪の降り積もり方やその後の雪粒の変態について学ぶ。
第 5 回	積雪の一生 (3) 雪の消耗プロセス	雪解けのメカニズムを熱収支の面から学ぶ。
第 6 回	災害としての雪 (1) 雪氷災害の分類	様々な雪氷災害の種類分けについて学ぶ。
第 7 回	災害としての雪 (2) 雪氷災害の実例	顕著な災害の実例を詳しく紹介する。
第 8 回	災害としての雪 (3) 対策と防御	災害対策の手法と課題について学ぶ。
第 9 回	資源としての雪 水資源・冷熱資源・観光資源	雪が持つ資源としての利点を理解する。
第 10 回	融雪洪水論 (1) 融雪流出過程	既にモデル化もされているが、残された重要課題も少なくないことを学ぶ。
第 11 回	融雪洪水論 (2) 流出過程の遅れ	融雪の諸過程の伝搬と時間的遅れについて学ぶ。
第 12 回	融雪洪水論 (3) 雪質の効果	雪質の違いによって融雪速度に違いが生じる理由について学ぶ。
第 13 回	積雪の化学	酸性雪の環境への影響やアシッド・ショック（酸衝撃）について学ぶ。
第 14 回	まとめと試験	講義の全体を総括し、試験を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、配布資料に沿って講義を行う。配布資料は pdf ファイルを web 上に置くので、各自ダウンロードして使用する。

【参考書】

- ・雪と氷の世界―雪は天からの恵み―（若濱五郎著、東海大学出版会、1995 年）
- ・Principles of Snow Hydrology (DeWalle, D.R. and Rango, A., Cambridge Univ. Press, 2008)

【成績評価の方法と基準】

与えられた課題に対する解答内容 (50 %), および試験結果 (50 %) から総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の研究分野や興味対象に応じ、講義中の質疑応答などを考慮し、必要に応じて講義内容を修正する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

流域水文学, 雪氷水文学

<研究テーマ>

積雪寒冷地における雪氷水文過程

<主要研究業績>

降雨と融雪が重なって生じる融雪出水

融雪水の積雪内浸透に及ぼす雪質の効果

東シベリア中央ヤクーチャにおける広域熱・水循環

アラスカ内陸部の大規模森林火災跡地における凍土水文過程

インドネシアの森林泥炭火災跡地における広域地下水流動の変化

【Outline and objectives】

By knowing many hydrological study instances, students can learn the characteristics of the water cycle in the cryosphere on earth.

HUG500B5

人文地理学特別講義 I

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキストの講読という形で、1980 年代以降大きな変貌を遂げた「新しい」文化地理学の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】

古典的（＝平板！）なイメージをもたれがちな文化地理学が、近年どのように装いを新たにしているかを概観し、そこから自分なりの問題意識をもってテーマを立てられるようになることを目指したい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキストの各章をみて、あらましを把握する
第 2 回	テキスト第 1 章を読む①	「文化地理学から新しい文化地理学へ」 その①
第 3 回	テキスト第 1 章を読む②	「文化地理学から新しい文化地理学へ」 その②
第 4 回	テキスト第 2 章を読む①	「認識としての文化」その①
第 5 回	テキスト第 2 章を読む②	「認識としての文化」その②
第 6 回	テキスト第 3 章を読む①	「認識としての文化」その①
第 7 回	テキスト第 3 章を読む②	「認識としての文化」その②
第 8 回	テキスト第 4 章を読む①	「現代メディア空間と地理学」その①
第 9 回	テキスト第 4 章を読む②	「現代メディア空間と地理学」その②
第 10 回	テキスト第 5 章を読む①	「空間の政治学に向けて」その①
第 11 回	テキスト第 5 章を読む②	「空間の政治学に向けて」その②
第 12 回	テキスト第 6 章を読む①	「変わりゆく文化・人間概念と人文地理学」その①
第 13 回	テキスト第 6 章を読む②	「変わりゆく文化・人間概念と人文地理学」その②
第 14 回	テキスト第 7 章を読む①	「民俗文化のゆくえ」その①

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前にテキストの担当部分を詳しく読んで、自分なりの疑問点や問題点を析出しておくこと。

【テキスト（教科書）】

中俣均編 (2011)：『空間の文化地理—シリーズ・人文地理学 7』（朝倉書店）を用いる。このシリーズは人文地理学を学ぶ大学院生用のテキストを提供することを目的の一つとしているものだが、中身はなかなか難解なものである。個人的に取り組むのもよいが、一緒に議論しながら読んでいくことで、その難解な内容がいくらかでも理解しやすくなるであろう。

なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。

【参考書】

上記テキスト各章末にあげられている参考文献を適宜利用する。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定 (50%)、授業時の議論の内容 (50%) を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学、島嶼地理学、沖縄地域研究など

＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞

中俣均 (2014):『渡名喜島—地割制と歴史的集落景観の保全—』(古今書院)

中俣均編著 (2011):『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7. (朝倉書店)

中俣均編著:『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9. (朝倉書店)

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

In this course we are going to study how we should “do Cultural Geography”.

HUG500B5

人文地理学特別講義Ⅲ

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

島嶼地理学について総観的に記されたテキストを講読する。人類の生活空間の一部である島嶼のもつ特殊性、そこを舞台として展開される地理学の実相、そして島嶼があらゆる人文地理学的関心の集中する場であることを実感する。

【到達目標】

世界の島嶼についての知識を得るとともに、それを基軸にして地球大の人間の生活空間を認識する視点を獲得することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。今年度はテキストの後半 5 章分を読んでいく。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト前半部分の復習
第 2 回	テキスト第 5 章①	読解と発表, 議論①
第 3 回	テキスト第 5 章②	読解と発表, 議論②
第 4 回	テキスト第 6 章①	読解と発表, 議論③
第 5 回	テキスト第 6 章②	読解と発表, 議論④
第 6 回	テキスト第 6 章③	読解と発表, 議論⑤
第 7 回	テキスト第 7 章①	読解と発表, 議論⑥
第 8 回	テキスト第 7 章②	読解と発表, 議論⑦
第 9 回	テキスト第 8 章①	読解と発表, 議論⑧
第 10 回	テキスト第 8 章②	読解と発表, 議論⑨
第 11 回	テキスト第 9 章①	読解と発表, 議論⑩
第 12 回	テキスト第 9 章②	読解と発表, 議論⑪
第 13 回	テキスト第 10 章①	読解と発表, 議論⑫
第 14 回	テキスト第 10 章②	読解と発表, 議論⑬

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

事前の文献読み込みが必須である。それをもとに授業で不明な個所などを読み解き理解してゆく。

【テキスト（教科書）】

Stephen Royle(2001)"A Geography of Islands : small island insularity." (Routledge). 著者は北アイルランド・Queens University の名誉教授。英語で書かれた島嶼の地理学の概説書であり、理解しやすい。原著は地理学科図書室に配架あり。

なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。

【参考書】

特に指定はしない。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定 (50%)、授業時の議論の内容 (50%) を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学，島嶼地理学，沖縄地域研究など

＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞

中俣均 (2014):『渡名喜島一地割制と歴史的集落景観の保全ー』(古今書院)

中俣均編著 (2011):『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7. (朝倉書店)

中俣均編著:『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9. (朝倉書店)

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

In this course we are going to study how we should “do cultural geography”.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

吉村 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知心理学領域での研究の立案を進める方法を習得します。

【到達目標】

受講者が関心を持つ認知心理学領域での研究テーマについて、オリジナリティある研究立案が行えるようになることを目標にします。知覚研究に限らず、広く認知研究がテーマであれば、受講可能です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は対面とオンデマンドの回を原則として交互に行う予定ですが、状況により変更する可能性がありますので、Hoppii の「お知らせ」に注意しておいてください。

授業は演習形式で行い、受講者が関心を持つテーマに基づいて、心理学実験を立案する工程を、この授業を通して支援していきます。

毎週の課題の提出およびフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究テーマの確立	受講者が取り組もうとする研究領域の確定。
第 2 回	日本語文献の検索	研究遂行に必要な日本語文献の検索と収集を行う。
第 3 回	日本語文献講読 (1)	選出した日本語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第 4 回	日本語文献講読 (2)	選出した日本語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第 5 回	日本語文献講読 (3)	選出した日本語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第 6 回	英語文献の検索	研究遂行に必要な英語文献の検索と収集を行う。
第 7 回	英語文献講読 (1)	研究遂行に必要な英語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第 8 回	英語文献講読 (2)	研究遂行に必要な英語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第 9 回	研究計画の立案	講読した文献に基づき、自らの研究計画を立案する。
第 10 回	仮説の検討	計画した研究で検討する仮説を実証的に検証できるものとして構築する。
第 11 回	オリジナリティの検討	計画する実証的研究の中に、どのようなオリジナリティがあるか、またそのオリジナリティにどのような価値があるかを検討する。
第 12 回	計画した研究に対する文献的精査	実施しようとする研究に対し、これまでの研究文脈ではどのように扱われているかを把握し、これから行おうとしている研究を当該研究領域の中に位置づける。
第 13 回	分析方法の検討	計画している研究で得られるであろうデータをどのような統計的手法で分析するかをシミュレーションする。

第14回 倫理審査に向けての研究計画の整備
計画している研究を実施するにあたり、研究倫理の面から問題がないかを検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テーマ選定に始まり、文献渉猟・講読、実験プログラムや刺激の作成など、研究実施に向けての全工程に対し、授業中に出された指示に基づき、授業外に受講者自らが学習します。特に、2回目から8回目までの文献の読み込み自体は授業時間外に各自が行い、授業時間中は読み込みが難しい箇所集中して講読することになります。9回目の実験立案以降においても、原則的にそれらの作業は授業外に各自が行い、授業時には受講者が提案する案に対してクリティカルに検討していきます。

【テキスト（教科書）】

テキストは用いません。

【参考書】

選択したテーマの研究実施に必要な資料は、授業時に適宜指摘します。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、授業での検討結果を受けての成果50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

一面的な捉え方でなく、受講している他の学生も含め計画している研究を多面的に検討し、さまざまな可能性を探る機会を提供する授業になるよう心がけていきます。

【その他の重要事項】

重複履修が可能です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 知覚・認知心理学

＜研究テーマ＞

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

＜主要研究業績＞

・吉村浩一 2006 運動現象のタキシノミー：心理学は"動き"をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版

・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. Perception, 36, 1049-1056.

・吉村浩一 2009 直交3軸のうち1軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み—不可能図形と影絵の回転による検討— アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students perform an experimental study in the field of cognitive psychology.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

吉村 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知心理学領域での研究の遂行方法を学びます。

【到達目標】

受講者が立案した研究を実施し分析し考察する能力を身につけることを目標にします。知覚研究に限らず、広く認知研究がテーマであれば、受講可能です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は対面とオンデマンドの回を原則として交互に行う予定ですが、状況により変更する可能性がありますので、Hoppiiの「お知らせ」に注意しておいてください。

受講者が計画した実証的研究を実施する工程を、この授業を通して支援します。

毎週の課題の提出およびフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	予備実験のデータの収集	本実験に先立ち、少人数に対して予備的に実験を実施し、データの現れ方を検討する。
第2回	問題点の洗い出しと修正	予備実験の結果、予想外なことや未検討なことがあるかどうかを確認する。
第3回	本実験計画の完成	予備実験での検討課題を修正し、実験計画を完成させる。
第4回	文献講読（1）	データ収集と並行して、考察に必要な関連文献の検討を行う。
第5回	文献講読（2）	データ収集と並行して、考察に必要な関連文献の検討を行う。
第6回	文献講読（3）	データ収集と並行して、考察に必要な関連文献の検討を行う。
第7回	データ分析（1）	統計的検定を中心に、収集したデータの分析を行う。
第8回	データ分析（2）	統計的検定を中心に、収集したデータの処理を行う。
第9回	実験結果の考察（1）	立てた仮説に照らし、得られたデータがどのように位置づけられるかを検討する。
第10回	実験結果の考察（2）	データ解釈の可能性を多面的に検討する。
第11回	論文作成（1）	行った事実の記述、すなわち「方法」と「結果」を記述する。
第12回	論文作成（2）	「問題」と「考察」を対応させながら論理的に記述する。
第13回	論文作成（3）	「問題」から始まり、「引用文献」に至る各節を完成させる。
第14回	論文の推敲	授業担当者の添削に基づき、受講者本人が論文推敲を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

問題点の洗い出しに始まり、文献渉猟・講読、実験プログラムや刺激の作成など、研究の全工程に対し、授業中に出された指示に基づき、授業外に受講者自らが作業を進めます。特に、4回目から6回目までの文献の読み込み自体は授業時間外に各自が行い、授業時間には読み込みが難しい箇所集中して講読していきます。7回目のデータ分析以降についても、原則的に作業は授業外に各自が行い、授業時には受講者による報告に対する検討を行います。

【テキスト（教科書）】

テキストは用いません。

【参考書】

選択したテーマの研究実施に必要な資料は、授業時に適宜指摘します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 70 %、授業での検討結果を受けての成果 30 %で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

一面的な捉え方でなく、受講している他の学生も含めた多面的検討により、さまざまな可能性を探る機会となる授業を心がけていきます。

【その他の重要事項】

重複履修が可能です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 知覚・認知心理学

＜研究テーマ＞

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

＜主要研究業績＞

・吉村浩一 2006 運動現象のタキソノミー：心理学は"動き"をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版

・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. Perception, 36, 1049-1056.

・吉村浩一 2009 直交3軸のうち1軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み—不可能図形と影絵の回転による検討— アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students perform an experimental study in the field of cognitive psychology.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、修士論文作成に必要な知識やスキルをゼミ形式で議論します。

【到達目標】

1. 論文作成のための実験計画法を自分で作成できるようにします。
2. 生理心理学の実験を計画・遂行・分析が自分でできるようにします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

生理心理学の実験論文を抄読し、その論文のレジメを発表していきます。付随する生理心理学の実験手法（脳波、脳波の周波数解析、心電図からの自律神経活動、虚偽検出など）について、実習形式で学びます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、生じた疑問や問題を議論します。発表後には、振り返りレポートを提出してもらい、疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	テーマや内容について希望を聞きます。
第2回	演習での進め方例示	発表の方法やレジメの書き方や議論の方法を検討し、順番を決めます。
第3回	抄読会 1	参考論文の発表、生理指標と心理的指標の設定の仕方
第4回	抄読会 2	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（脳波）
第5回	抄読会 3	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（脳波の周波数分析）
第6回	実験計画法とスキルの習得 1	実験機器ポリメイトやテレメーターの使用の仕方
第7回	抄読会 4	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（眼電図・心電図）
第8回	抄読会 5	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（心電図周波数解析）
第9回	抄読会 6	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（自律神経解析）
第10回	実験計画法とスキルの習得 2	心電図の周波数解析ソフトの操作や解析の仕方
第11回	抄読会 7	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（虚偽検出の原理）
第12回	抄読会 8	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（虚偽検出の応用）
第13回	抄読会 9	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（虚偽検出のデータ分析の仕方）
第14回	総括まとめ	課題レポートの検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 回目：自己紹介と自分の希望をレポートで提出
- 2 回目：生理心理学の雑誌から論文を選択
- 3 回目～5 回目：脳波発表レジメの作成
- 6 回目：脳波発表レジメ修正版の作成（方法・分析・結果部分）
- 7 回目～9 回目：心電図発表レジメの作成

10 回目：心電図発表レジュメ修正版の作成（方法・分析・結果部分）
 11 回目～13 回目：虚偽検出発表レジュメの作成
 14 回目：課題レポートの作成

【テキスト（教科書）】

特に用いません。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.

堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第 I 巻 基礎. 北大路書房, 京都.

堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第 II 巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）50 %, 発表 30 %, レポート課題 20 %とします。

【学生の意見等からの気づき】

新型コロナ肺炎流行のため、2020 年度は実施しませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。

【その他の重要事項】

学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。また、課題は虚偽検出、P300、睡眠ポリグラフ検査などから受講生の要望に応じて適宜変更します。

【重要】新型コロナ肺炎に関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。皆さんの希望も調査したいと思いますので、初回の授業には必ず出席して下さい。

【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として 30 年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞精神生理学、精神保健学

＜研究テーマ＞眠気、睡眠、うつ、ストレス

＜主要研究業績＞

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメディスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気、睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害、睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline and objectives】

In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for master thesis preparation in seminar form.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、修士論文作成に必要な知識やスキルをゼミ形式で議論します。

【到達目標】

1. 論文作成のための実験計画法を自分で作成できるようにします。
2. 生理心理学の実験を計画・遂行・分析ができるようにします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

生理心理学の実験論文から、その論文のレジュメを発表してもらいます。付随する生理心理学の実験手法（脳波、P300、脳波の周波数解析、心電図からの自律神経活動、虚偽検出など）について、検討します。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、生じた疑問や問題を議論します。発表後には、振り返りレポートを提出してもらい、疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	テーマや内容について希望を聞きます。
第 2 回	演習での進め方例示	発表の方法や議論の方法を検討します。発表の振り返りレポートの必要性や順番を決めます。
第 3 回	実験計画の発表 1	自分の春学期レポートの発表 1
第 4 回	実験計画の発表 2	自分の春学期レポートの発表 2
第 5 回	実験計画の発表 3	自分の春学期レポートの発表 3
第 6 回	実験計画法のまとめ	問題点や修正点の議論
第 7 回	生理指標のデータ取得（脳波）1	脳波記録のデータ取得と周波数解析の実際
第 8 回	生理指標のデータ取得（脳波）2	脳波結果の表示・論文の作成
第 9 回	生理指標のデータ取得（心電図・血圧）1	心電図データから自律神経データの解析の実際
第 10 回	生理指標のデータ取得（心電図・血圧）2	自律神経データの結果の表示・論文の作成
第 11 回	生理指標のデータ取得（虚偽検出の分析の仕方）1	虚偽検出の分析の仕方
第 12 回	生理指標のデータ取得（虚偽検出の分析の仕方）2	虚偽検出の結果の表示・論文の作成
第 13 回	論文作成の注意点	論文での生理指標の方法・分析の注意点
第 14 回	総括まとめ	課題レポート作成と検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 回目：自己紹介と自分の希望をレポートで提出
- 2 回目～5 回目：レポート発表の作成
- 6 回目：発表後の修正版の作成
- 7 回目～8 回目：脳波データの課題レポート
- 9 回目～10 回目：心電図データの課題レポート
- 11 回目～12 回目：虚偽検出データの課題レポート
- 13 回目～14 回目：課題レポートの作成

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅰ巻 基礎. 北大路書房, 京都.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅱ巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）50%, 発表30%, レポート課題20%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

3人の受講者のうち2名から回答者を頂きました。大学院のゼミなので詳細は省きますが、学会や学内発表会の検討を繰り返し行いました。「修論の進捗状況の共有のほか、細かくアドバイスをもらうことができてよかったです」「困っていることの相談ができて大変ありがたかった」など、いずれも授業外学習は3時間以上と自分の課題に真剣に取り組んでくれました。この方法を今後も継続したいと思っています。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。内容については、受講生の希望や興味のある領域に合わせて、虚偽検出、P300、睡眠ポリグラフ検査などから適宜変更します。受講生の希望や興味のある領域について調査しますので、最初の授業には必ず出席して下さい。

【その他の重要事項】

学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。また、課題は虚偽検出、P300、睡眠ポリグラフ検査などから受講生の要望に応じて適宜変更します。
【重要】新型コロナウイルスに関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。皆さんの希望も調査したいと思っていますので、初回の授業には必ず出席して下さい。
【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として30年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 精神生理学, 精神保健学

<研究テーマ> 眠気, 睡眠, うつ, ストレス

<主要研究業績>

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメディスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.
高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.
高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.
高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline and objectives】

In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for master thesis preparation in seminar form.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅰ

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

発達心理学研究に関連した課題をもとに、実践につながる演習を行う。乳児期から高齢期までを含めて生涯発達の視点に立って、これまでの研究の流れを理解するとともに、まだ明らかにされていないリサーチクエストを各自追求していく。先行研究で明らかにされていることから応用できることや、フィールドで求められている専門性など双方向からの研究態度を身につけ、社会に貢献できることをめざす。

【到達目標】

- （1）発達心理学研究におけるテーマと研究の特徴及び背景について理解する。
- （2）発達心理学研究の研究論文を批判的に読む力を養う。
- （3）先行研究を批判し改善策を練った具体的な研究計画を行い実行できる力を育む。
- （4）研究計画、研究内容、その成果を発表する技術を習得する。
- （5）社会に貢献できる展望をもつ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発達心理学領域における理論や特徴を体系的に理解したうえで、具体的な研究論文を読み、理解し、自身で研究を計画できるスキルを獲得する。具体的な方法としては、そのトピックの流れを支えてきた主要な研究をリストアップする。その際、批判に値する点を考え、改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考える。そのうえで、発達研究の方法論を駆使して具体的に実行する計画を立てる。可能であれば並行して実践する。課題などの提出についてのフィードバックは、学習支援システムや Google Classroom を通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	研究の体系（マクロ）と各研究論文（ミクロ）を考える	適当なトピックをもとに、各研究者の論文と各トピックの研究の体系との関係について考える。
3	展望論文をもとに読む（和文）（1）	読解の力を養う。発達研究を展望する。
4	展望論文をもとに読む（和文）（2）	読解の力を養う。発達研究を展望する。
5	論文をもとに発表と討議	先行研究の流れを理解し、さらにはどのような研究が積み重ねられるべきかを考える。
6	共通論文をもとに発表と討議 問題意識に焦点を当てる	レビュー論文の書き方や、留意点について学ぶ。
7	自分の興味のある領域の文献リストをつくる（1）	各院生が興味のある領域について、文献のリストをつくり、研究の流れをまとめる。
8	自分の興味のある領域の文献リストをつくる（2）	文献リストをつくるとともに、年次別、あるいは内容別の観点から、研究の流れをつかみ、批判する。

- | | | |
|----|---|---|
| 9 | 論文をもとに発表と
討議
理解（１） | 各院生が自分の研究につながる論文を選び、研究の内容を理解する。 |
| 10 | 論文をもとに発表と
討議
理解（２）
優れたところに言及するとともに批判する | 選んできた論文の優れたところと批判点を明らかにし、レジュメをつくり、発表する。 |
| 11 | 研究計画を立てる
（１） | 選んできた論文の批判点をもとに、改善点を考え、新しい研究を考える。 |
| 12 | 研究計画を立てる
（２） | 考えた研究が実行可能であるか目的や方法論の視点から再考する。 |
| 13 | 研究計画を立てる
（３） | 結果が得られた場合の、分析方法について予測する。 |
| 14 | 研究計画を立てる
（４） | 結果が得られた場合の分析方法を予測し、その方法論を習得しているか確認する。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習であることから、目的をよく理解し、文献研究の収集やリストアップ。論文を読み、理解し、まとめることの積み重ねを求める。各研究の問題と目的、方法、分析結果、考察を自身で追試できるレベルでの理解が求められる。そのうえで、批判できるところ、それを改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考え、プレゼンを実施するための準備をする。後半は、特に、発達心理学領域における方法論についての理解が深まるように、研究目的を検討するためにどのようなスキルが必要かについて考える。和文および英文の最先端の研究にチャレンジする。最終的に、各自研究計画を立てるスキルを獲得する。予習復習にはそれぞれ2時間はとるようにする。

【テキスト（教科書）】

こちらで準備する。授業時に紹介。
査読付き雑誌のレビュー論文を用いる。

【参考書】

発達の研究領域についておおざっぱに理解しておくため、渡辺弥生編著『発達心理学』（北大路書房）『子どもの「10歳の壁」とは何か？』（光文社）『感情の正体』（Zoom）といった基礎的な発達心理学や教育心理学、発達臨床心理学系の本を読んでおくことを求める。

【成績評価の方法と基準】

毎回課されている課題をこなすことを前提として、報告書の提出（100%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

活発な演習ができているが、そこで得た課題や気づきをもとに、実行していくことがさらに求められる。具体的に各自の作業が進行しているかを Dropbox やペーパーの形で確認し、実行力の強化につとめる。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントと DVD を用いることもある。授業支援システムが用いることもあるので、随時チェックすることを習慣づけてほしい。パソコンを用いることが多くなる。

【その他の重要事項】

文献検索などは自身で活発に行うことが前提。課題提出の時間厳守。

【担当教員の専門分野等】

ホームページ参照 <https://sites.google.com/site/emywata/Home>

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学

<研究テーマ> 社会性の発達といじめなどの予防教育の展開

<主要研究業績>

(1) 世界の学校予防教育 2013 金子書房

(2) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学
2011 光文社

(3) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店

(4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

【Outline and objectives】

Based on issues related to developmental psychological research, we will conduct a practicum connected with actual practice. From the viewpoint of lifelong development, including from infancy to elderly, we will attempt to understand the flow of research to date and pursue research questions that have not been previously clarified. We will aim to contribute to society by acquiring bidirectional research attitudes from both what can be applied from what has been clarified in the previous research and expertise required in the field.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

発達心理学研究に関連した課題をもとに、実践につながる演習を行う。乳児期から高齢期までを含めて生涯発達の視点に立って、これまでの研究の流れを理解するとともに、まだ明らかにされていないリサーチクエストを各自追求していく。さらに、この問題提起をもとに研究を実行し、さらに論文を投稿できるように書くことに焦点を当てる。

【到達目標】

- (1) 発達心理学研究におけるテーマと研究の特徴及び背景について理解する。
- (2) 先行研究を批判し改善策を練った具体的な研究計画を実行できる力を育む。
- (3) 投稿論文を書く力を養う。
- (4) 論文の投稿を実行する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発達心理学領域における理論や特徴を体系的に理解したうえで、具体的な研究論文を読み、理解し、自身で研究を計画できるスキルを獲得する。具体的な方法としては、そのトピックの流れを支えてきた主要な研究をリストアップする。その際、批判に値する点を考え、改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考える。そのうえで、発達研究の方法論を駆使して具体的に実行する計画を立てる。可能であれば並行して実践する。さらに、それを投稿できるような論文を書くことにチャレンジする。課題などの提出のフィードバックは、学習支援システムや Google classroom などを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	研究の体系（マクロ）と各研究論文（ミクロ）をメタ的に考え、実行する研究の意義を考える	適当なトピックをもとに、各研究者の論文と各トピックの研究の体系との関係について考える。
3	問題と目的を書く (1) 構造を考える a	パラグラフの構造を考え、プランニングする。
4	問題と目的を書く (2) 構造を考える b	パラグラフの構造を考え、プランニングする。
5	問題と目的を書く (1) 肉付けをする a	引用文献の必要性を意識し、フルに書いていく。
6	問題と目的を書く (2) 肉付けをする b	引用文献の必要性を意識し、フルに書いていく。
7	グループワーク (1) 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう a	グループワーク 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう。
8	グループワーク (2) 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう b	グループワーク 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう。

9	適切な方法論を考え、書く (1)	具体的な方法についての書き方を修得し、実際に書く。
10	適切な方法論を考え、書く (2)	具体的な方法についての書き方を修得し、実際に書く。
11	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ (1)	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ。
12	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ (2)	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ。
13	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ (1)	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ。投稿論文の形式を各自調べ、発表する。
14	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ (2)	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ。投稿論文の形式を各自調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習であることから、目的をよく理解し、文献研究の収集やリストアップ。論文を読み、理解し、まとめることの積み重ねを求める。各研究の問題と目的、方法、分析結果、考察を自身で追試できるレベルでの理解が求められる。そのうえで、批判できるところ、それを改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考え、準備をする。後半は和文および英文の最先端の研究をモデルに、「書く」イメージをもち、実際にチャレンジする。予習復習には各2時間はかける。

【テキスト（教科書）】

こちらで準備する。授業時に紹介。

【参考書】

日本発達心理学会 編 岩立志津夫・西野泰広 責任編集『発達科学ハンドブック 2 研究法と尺度』など。発達科学ハンドブック、児童心理学の進歩などレビュー雑誌を読んでおく。英語によるメールの書き方などの本を読んでおく。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（単に出席という意味ではなく、毎回自分の意見を述べることを基準とする）

【学生の意見等からの気づき】

時間を引き延ばすエクスキューズがないように、立てた計画をつねに実行していくようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンを使用することが多い。授業支援システムに入る。

【その他の重要事項】

文献検索などは自身で活発に行うことが前提。学会に参加したり、研究者にメールを出したり、実際の研究活動を体験していく。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home>

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ> 社会性の発達といじめなどの予防教育の展開
<主要研究業績>

- (1) 感情の正体
- (2) 世界の学校予防教育 2013 金子書房
- (3) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011 光文社
- (4) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店
- (5) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

【Outline and objectives】

We will conduct a practicum connected with actual practice, based on issues related to developmental psychological research. From the viewpoint of lifelong development, including from infancy to elderly, we will attempt to understand the flow of research to date and pursue research questions that have not been previously clarified. We will aim to contribute to society by acquiring bidirectional research attitudes from both what can be applied from what has been clarified in the previous research and expertise required in the field.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語心理学に関連するテーマを選択し、その先行研究群を批判的に概観して、展望論文を作成する。

【到達目標】

- ①自分の興味にあった言語心理学に関するテーマを選択できる。
- ②当該のテーマに関連する先行研究群を柔軟に検索できる。
- ③当該の先行研究群を批判的に読み、問題点や改善点を指摘できる。
- ④③を受けて、新しい提案ができる。
- ⑤当該のテーマに関連した展望論文を作成する。
- ⑥論文を的確に評価することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の最初に展望論文の作成の仕方について、討議を行う。それを受けて、前半の授業では、自分の興味に合ったテーマに関連する先行論文群を精読し、発表する。そして、論文を作成し、ピアレビューを通して完成度の高い展望論文を完成させる。また、提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第 2 回	展望論文の概説	展望論文の特性について理解を深める。
第 3 回	種論文の発表 1	自分のテーマにあった、核となる論文を各自発表する。
第 4 回	種論文の発表 2	自分のテーマにあった、核となる論文を各自発表する。
第 5 回	種論文から派生した論文の発表 1	種論文から派生した論文の発表をする。
第 6 回	種論文から派生した論文の発表 2	種論文から派生した論文の発表をする。
第 7 回	種論文から派生した論文の発表 3	種論文から派生した論文の発表をする。
第 8 回	先行研究群の問題点・改善点の発表 1	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第 9 回	先行研究群の問題点・改善点の発表 2	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第 10 回	展望論文の骨子に関する発表 1	展望論文の骨子に関する発表をする。
第 11 回	展望論文の骨子に関する発表 2	展望論文の骨子に関する発表をする。
第 12 回	展望論文の発表 1	作成された展望論文をピアレビューする。
第 13 回	展望論文の発表 2	作成された展望論文をピアレビューする。
第 14 回	修正展望論文の講評	修正された展望論文を講評し、全体で討議する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第 1 回 モデルとなる展望論文を精読し、その特性に関してレジюмеを作成する。
- 第 2・3 回 自分にあったテーマの種論文を精読し、発表の準備を行う。

第 4～6 回 種論文から検索できる先行研究群を精読し、発表の準備を行う。

第 7・8 回 先行研究群の問題点・改善点についてレジюмеにまとめ、発表の準備を行う。

第 9・10 回 展望論文作成のための骨子をレジюмеにまとめ、発表の準備を行う。

第 11・12 回 展望論文を作成する。

第 13 回 第 11・12 回におけるピアレビューを受け、展望論文を修正する。

【テキスト（教科書）】

特になし。適宜、紹介する。

【参考書】

福田由紀（編）（2012）. 言語心理学入門 培風館

日本読書学会（編）（2019）. 読書教育の未来 ひつじ書房

石黒圭 （2020）. 段落論 光文社新書

【成績評価の方法と基準】

発表 20%, 発表への質問・コメント 20%, 討論への積極的な参加 20%, 展望論文の提出 40%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2020 年度は開講されませんでした。そのため、以前のアンケート結果からの気づきを紹介します。

自分で考え、工夫して発表する形式の授業のせいか、好評です。ぜひ、考えて考え抜いて、自分の研究活動をやっていきましょう。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学

<研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割

<主要研究業績>

①福田由紀（2019）. 読みと感情 日本読書学会（編） 読書教育の未来 Pp.144-154.

②福田由紀・穂原遥・菊池理紗（2018）. 言語心理学で何を学べるか？—言語学との学問イメージ比較— 法政大学文学部紀要, 76,115-127.

③福田由紀・佐藤志保（2017）. ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn how to write a review paper. Students will be expected to select theme they are interested in and critically reads previous papers, writes a review paper.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語心理学に関連するテーマを選択し、実験・調査の計画・実施・発表・論文の作成を通して、心理学の研究のプロセスを実践的に学ぶ。

【到達目標】

- ①自分の興味にあった言語心理学に関するテーマを選択できる。
- ②当該のテーマに関して、適切な実験・調査計画を立てることができる。
- ③自分の計画を実際に行うことができる。
- ④実験・調査結果を適切に分析・考察できる。
- ⑤分析・考察したことを的確に他者に伝達できる。
- ⑥論文を作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

自分の興味にあったテーマに関して研究計画を立て、授業で発表をする。ピアレビューを通して、仮説の設定、変数の決定、統制の仕方、材料の収集、分析手法を洗練していく。その研究計画にそった実験・調査を実施する。その結果を発表し、完成度の高い実証的な論文を完成させる。提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	研究テーマの設定	研究テーマを発表する。
第3回	実験・調査立案における注意1	仮説、変数、統制の仕方、材料の収集の仕方を発表し、全員で討議する。
第4回	実験・調査立案における注意2	具体的な分析方法を発表し、全員で討議する。
第5回	研究計画申請書の発表	法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会宛の書式にそった研究計画申請書を発表し、全員で討議する。
第6回	実験・調査の実施1	実験・調査を遂行し、その進捗状況を発表し、全員で討議する。
第7回	実験・調査の実施2	実験・調査を遂行し、その進捗状況を発表し、全員で討議する。
第8回	データの分析	分析結果を発表し、全員で討議する。
第9回	考察	結果と先行研究の知見を利用して論理的に考えられる考察を発表し、全員で討議する。
第10回	要旨の作成	学会発表で求められる要旨を作成し、ピアレビューをする。
第11回	論文の作成	学術論文の書き方について確認する。
第12回	成果発表1	与えられた時間内に効果的に発表し、全員で討議する。
第13回	成果発表2	与えられた時間内に効果的に発表し、全員で討議する。
第14回	論文の提出と総括	実証的な方法を使って学術論文を作成し、提出し、そのプロセスに関して振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回 自らの研究テーマの発表の準備を行う。
 第2・3回 自分の目的にあった実験・調査計画を立て、発表の準備を行う。
 第4回 研究計画申請書を作成し、発表の準備を行う。
 第5～6回 実験・調査を実施する。
 第7回 データを分析し、発表の準備を行う。
 第8回 分析結果をもとに考察を行い、発表の準備を行う。
 第9回 要旨を作成し、発表の準備を行う。
 第10回 論文を作成する。
 第11・12回 成果発表の準備を行う。
 第13回 提出する論文の作成・見直しをする。

【テキスト（教科書）】

特になし。適宜、紹介する。

【参考書】

福田由紀（編）（2012）. 言語心理学入門 培風館
 日本読書学会（編）（2019）. 読書教育の未来 ひつじ書房
 石黒圭（2020）. 段落論 光文社新書

【成績評価の方法と基準】

発表 20%、発表への質問・コメント 20%、討論への積極的な参加 20%、論文の提出 40%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度は開講されませんでした。そのため、以前のアンケート結果からの気づきを紹介します。

週3時間以上の予習・復習。がんばりました！また、自由記述を読むと、他の受講生の発表等へのコメントの際のポイントをつかんだようです。よかったです。他の人へのコメントは、その人にとってどれだけ有用なコメントをするかが、重要でしたね。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学
 <研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割
 <主要研究業績>
 ①福田由紀（2019）. 読みと感情 日本読書学会（編） 読書教育の未来 Pp.144-154.
 ②福田由紀・菰原遥・菊池理紗（2018）. 言語心理学で何を学べるか？一言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.
 ③福田由紀・佐藤志保（2017）. ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.
 <HP>
 「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the process of psychological study practically. Students will be expected to plan their research and do their experiment, make a presentation, write a paper.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、就職する人も博士課程に進学する人も、それぞれ仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：標的行動を具体化し、測定方法を決めること、標的行動の制御変数に関する先行研究を調べること、制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、実験計画書を作成し、発表すること、実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、本実験を実施し、データを分析し、まとめて図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。

これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のためだけの研究法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。M1 次には修論の準備として予備的な研究に取組みます。M2 次には修論の本実験を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【重要】新型コロナ感染拡大防止のために、この授業は感染状況に応じてオンラインと対面を適宜組み合わせで行います。学習支援システムのこの授業科目のトップページで、対応状況やそれに伴うシラバスからの変更点について案内しますのでご確認ください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	全員： 授業内容と方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。

第 2 回 実験計画の発表 1

全員：

独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などを学びます。

M1 次生：

自分の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進めます。

M2 次生：

各自、実験計画を発表し、討論します。GO サインがでたら予備実験に移れるように、実験計画は「概要」ではなく、刺激や記録用紙なども用意してプレゼンして下さい。

同上

同上

全員：

データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などを学びます。

M1 次生も M2 次生も、予備実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。

同上

同上

全員：

先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけます。研究のストーリーをまとめあげる方法について解説します。

同上

同上

全員：

データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（継続実験の計画）などをさらに学びます。

M1 次生も M2 次生も、本実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。

同上

同上

全員：

全課題を振り返り、討論します。

各自、自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。修論のストーリーを端的に伝える練習をします。

M1 次生は予備実験、M2 次生は本実験のレポートを提出します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。

- 興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の 3 つを考え、提案するための資料を作成する。
- 実験計画について予測する結果を作図する。
- 5 つ以上の先行研究を表にまとめる。

○本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

【参考書】

研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します（以下はシングルケースデザイン法に関する参考書の例）。

○ Alberto, P., & Troutman, A. C. (1999). Applied behavior analysis for teachers. Prentice Hall. (アルバート, P. A.・トルーマン, A. C. 佐久間 徹・谷 晋二・大野裕史 (監訳) はじめての応用行動分析 日本語版 第 2 版 (2004) 二瓶社)

○ Barlow, D. H., & Hersen, M. (1984). Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change. Pergamon. (バーロー, D. H.・ハーセン, M. 高木俊一郎・佐久間 徹 (監訳) 一事例の実験デザイン ―ケーススタディの基本と応用― 二瓶社)

○ Cooper, J. C., Heron, T. E., & Heward, W. L. (2007). Applied Behavior Analysis. Pearson Education. (クーバー, J. C., ヘロン, T. E., & ヒューワード, W. L. 中野良顯 (訳) (2013) 応用行動分析学 明石書店)

○岩本隆茂・川俣甲子夫 (1990). シングル・ケース研究法―新しい実験計画法とその応用― 勁草書房。

【成績評価の方法と基準】

○授業への参加 (40 %)、課題遂行 (40 %)、レポート提出 (20 %) から成績を評価します。

○欠席が 5 回以上になると自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

(2020 年度は未開講でした)

【その他の重要事項】

この科目は M1 次生と M2 次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますので、M1 次と M2 次には同じ教員の授業を受講してください。

☆研究テーマは受講生の興味を最優先して決めます。行動分析学は研究対象を限定しません。基本的に何でも研究できると考えて下さい。ただし、大学院生活のほとんどをかけて取り組む研究ですから、自分の得意なこと、興味があること、これだけは人に負けないぞと自信があること、そういう自信をつけたいことなどを選んで下さい。こんなことでも実験できるのだろうか？ と思うとどまらず、ぜひ一度相談して下さい。修論ですから、大がかりな実験はできませんが、世界に二つとない実験を共につくりましょう。

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学

新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、M1 次生は予備実験の報告書と修士論文の実験計画書、M2 次生は修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること、実験から得られたデータを分析し、わかったこと、わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを提案すること。わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと。詳細な規定にきめ細かく対応した校正を行うこと。締切から逆算して計画をたて、遂行すること。自分では解決できない問題について仲間や指導教員から助言をもらうこと、助言すること。

これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のための研究法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。M1 次には心理学研究法演習Ⅰで行った予備実験と次年度に行う修論実験を題材に課題に取り組みます。M2 次には各自の修論研究を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【重要】新型コロナ感染拡大防止のために、この授業は感染状況に応じてオンラインと対面を適宜組み合わせで行います。学習支援システムのこの授業科目のトップページで、対応状況やそれに伴うシラバスからの変更点について案内しますのでご確認ください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	全員：授業内容と方法、約束事を説明します。 M1 次生は予備実験、M2 次生は修論実験の内容を 1 分間でプレゼンする練習をします。
第 2 回	論文を書く： アウトラインを書く	全員：アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。日本心理学会「執筆・投稿の手引き」の参照方法も解説します。 M1 次生は予備実験のレポートを執筆します。M2 次生は修論実験を論文にしていきます。

第 3 回	論文を書く： データの視覚的な提示	全員： 実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。
第 4 回	論文を書く： 推敲する (1)	全員： 方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲します。方法の章で最も重要なのは読み手がその実験を追試できるように書かれているかどうかです。読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。
第 5 回	論文を書く： 事実を書く	全員： アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。
第 6 回	論文を書く： 先行研究をまとめる	全員： 先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。
第 7 回	論文を書く： 研究を位置づけるアウトラインを書く	全員： 第 6 回でまとめた先行研究の展望を活かし、また前期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法（段落をトピック文とサポート文で構成する手法）を解説し、練習します。
第 8 回	論文を書く： 推敲する (2)	全員： 第 5 回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。
第 9 回	論文を書く： 推敲する (3)	全員： パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。日本語の作文技術について確認し、推敲の練習をします。さらに、チェックリストを使って、「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。
第 10 回	論文を書く： 執筆ルールに基づいて校正する	全員： 引用文献一覧を作成します。「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。また、本文と合わせて、引用の方法が適切かどうかを確認します。
第 11 回	論文を書く： 推敲する (4)	全員： 小実験レポート、修論のゼミ内提出の前の最終確認とチェックリストを使った推敲の練習をします。また、自分で書いた文章を自分で推敲するのは困難であることを自覚するために、他の受講生の修論を校正する練習もします。校正に使う一般的な記号を習得しましょう。

第 12 回	研究計画 (1)	M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。 M2 次生： 修論を推敲し、提出します。
第 13 回	研究計画 (2)	M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。 M2 次生： 修論の要旨を作成して提出します。要旨は修論のストーリーをわかりやすく伝える文章です。セールスポイントの抽出と伝達、文字数が限られている場合の推敲方法について解説し、練習します。
第 14 回	まとめと研究計画 (3)	全員： 授業全体を振り返り、討論します。 M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。 M2 次生： 修論発表会に備え、修論研究の発表練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。
○春学期に実施した実験の発表資料を作成し、練習をする。
○自分の研究の社会的意義を示す資料を収集し、発表資料としてまとめる。
○日本心理学会の「執筆・投稿の手引き」およびゼミの論文推敲チェックリストを用いて、「結果」の章を推敲し、提出する。
○本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
テキストはありませんが、研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【参考書】
倉島保美（2012）論理が伝わる世界標準の「書く技術」 講談社

【成績評価の方法と基準】
○授業への参加（40 %）、課題遂行（40 %）、レポート提出（20 %）から成績を評価します。
○欠席が 5 回以上になると自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】
（2020 年度は未開講でした）

【その他の重要事項】
この科目は M1 次生と M2 次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますので、M1 次と M2 次には同じ教員の授業を受講してください。

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞ 行動分析学
＜研究テーマ＞
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
＜主要研究業績＞
① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社
② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社
③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including evaluation of single-case design data with visual inspection, and interpretation of functional relationship between dependent and independent variables. Student will also aim to master how to write a research paper, by learning about paragraph writing, Japanese Psychological Association's publication manual, and other miscellaneous rules in academic writing.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。

リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	春学期の研究計画について具体化する。
第 2 回	研究報告と討論（おもに文献収集）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 3 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 4 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 5 回	研究報告と討論（おもに文献文の読解 3）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 6 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 4）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 7 回	研究報告と討論（おもに文献の読解のまとめと整理統合 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 8 回	研究報告と討論（主に文献の読解のまとめと整理統合 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 9 回	研究報告と討論（おもに先行研究のメタ分析）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 10 回	研究報告と討論（主に研究計画の立案 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 11 回	研究報告と討論（おもに研究計画の立案 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 12 回	研究報告と討論（おもに研究計画のプレゼンテーション）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 13 回	研究報告と討論（おもに研究計画の評価と討論 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 14 回	研究報告と討論（おもに研究計画の評価と討論 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。毎回 4 時間程度の予習と 1 時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進捗できたか（40％）。他人の研究について適切なコメントができたか（60％）。授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

学会発表のためのサポートを充実させるとともに統計手法についてのコメントをより詳細なものにします。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業をとるものは、この授業の参加をほかのすべての行事よりも優先すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞犯罪心理学

＜研究テーマ＞犯罪捜査への心理学の応用

＜主要研究業績＞「犯罪捜査の心理学」（新曜社）、「ケースで学ぶ犯罪心理学」（北大路書房）

【Outline and objectives】

Do research on criminal psychology

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	秋学期の研究計画について具体化する。
第 2 回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 3 回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告のプレゼンテーション）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 4 回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告の図表表示）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 5 回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告の論文記述）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 6 回	研究報告と討論（おもに結果の分析手法）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 7 回	研究報告と討論（おもに結果の分析の問題点）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 8 回	研究報告と討論（主に結果の分析の論文記載）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 9 回	研究報告と討論（おもに理論的な問題点の吟味）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 10 回	研究報告と討論（おもに考察）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 11 回	研究報告と討論（おもに研究のリミテーションとその記述）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 12 回	研究報告と討論（おもに投稿準備）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 13 回	研究報告と討論（おもに論文のフォーマット）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 14 回	研究報告と討論（まとめ 3）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。特に毎回のテーマ（おもに～と記載されている部分）について重点的に準備してくること。毎回 4 時間程度の予習と 1 時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進できたか（40％）。他人の研究について適切なコメントができたか（60％）。授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

修士論文指導に関しては、論文の読み合わせ、口頭発表のシミュレーションなどを充実させます。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業受講者は他のすべての行事よりもこの授業への参加を優先すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞犯罪心理学
＜研究テーマ＞犯罪捜査への心理学の応用
＜主要研究業績＞「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline and objectives】

Do research on criminal psychology

PSY600B6

心理学研究法演習 I

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

関心のある心理学研究分野の研究史を作成し、研究計画の立案する。

【到達目標】

自分が関心のある研究テーマについて先行研究を調査し、研究史をまとめ、未解決の問題を追究するための研究計画を立てることを春学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理学に関わる問題を自ら設定し、研究を実施し、論文やプレゼンとしてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで、研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。春学期は、研究テーマに関する先行研究の知識を深めるための研究史（レビュー）を執筆したり、独自の研究の内容を記述した研究計画書を作成したりする。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式のため、学生による活動報告やディスカッションが中心となる。授業および学習支援システムを通して、課題や発表に対するフィードバックを個別または全員に向けて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1	導入	シラバスの説明、達成目標の設定
2	研究テーマの設定（1）	キーワードの選定、先行研究の検索・講読
3	研究テーマの設定（2）	キーワードの選定、先行研究の検索・講読
4	文献の検索・講読（1）	先行研究の検索・講読、研究史の作成
5	文献の検索・講読（2）	先行研究の検索・講読、研究史の作成
6	研究史としての文献の発表	研究史の発表
7	研究史の見直し	他者からのフィードバックの検討
8	修正研究史発表	修正版の研究史の発表
9	問題の設定	問題意識と研究目的の設定
10	変数の整理、仮説の設定	従属変数・独立変数の整理、目的に沿った研究仮説の設定
11	研究計画の立案	研究の目的・方法・予想される結果の検討、研究計画書の書き方、倫理審査のための準備
12	研究計画書の発表	研究計画の発表
13	研究計画書の見直し	他者からのフィードバックの検討
14	修正研究計画書発表、総括	修正版の研究計画書の発表、春学期のまとめ、今後の展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究の流れに沿って、ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し、次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業にて報告するための資料を準備する。本授業の準備・復習時間は、あわせて 1 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキストは特にない。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）（2001）. 心理学研究法入門
—調査・実験から実践まで— 東京大学出版会.
高野陽太郎・岡 隆（編）（2004）. 心理学研究法 一心を見つめる
科学のまなざし— 有斐閣アルマ.
松井豊（2006）. 心理学論文の書き方—卒業論文や修士論文を書く
ために— 河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%, 進捗状況報告 25%, 発表（研究史・研究計画書）50%の割合で評価する。原則として出席が授業の 2/3 に満たない場合または発表を怠った場合は単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

【直近の 2017 年度アンケート結果より】回答者 2 名全員が、「履修してよかったか」「理解できたか」「工夫されていたか」という問に「5」で回答してくれました。授業外学習時間については 1 名が 2～3 時間、1 名が 3 時間以上と回答していました。自由記述欄も肯定的なコメントが多かったです。

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 言語学・音声学・認知科学

＜研究テーマ＞ 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』 ひつじ書房.

田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will conduct a thorough literature review and construct a research agenda in a topic of their interest in the field of psychology.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分で設定した研究計画に沿った研究を実施し、研究成果の発表および研究論文の執筆を行う。

【到達目標】

春学期に立てた研究計画に従って研究を実施し、論文やプレゼンとしてまとめることを秋学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理学に関わる問題を自ら設定し、研究を実施し、論文としてまとめるプロセスを始めから終わりまで体験することで、研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。秋学期は、研究計画書に沿って研究を実施し、必要なデータを収集・分析・解釈した上で、研究論文の執筆や効果的なプレゼンといった形で成果をまとめることを目指す。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式のため、学生による活動報告やディスカッションが中心となる。授業および学習支援システムを通して、課題や発表に対するフィードバックを個別または全員に向けて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	研究計画の確認、進捗状況報告
2	研究の実施（1）	研究の実施、経過報告
3	研究の実施（2）	研究の実施、経過報告
4	研究の実施（3）	研究の実施、経過報告
5	データの整理・分析（1）	データの入力・整理
6	データの整理・分析（2）	データの入力・整理
7	記述統計量の計算	記述統計量の算出、効果的な図表の作り方
8	中間報告	研究結果に関する中間報告・討論
9	推測統計の適用	適切な検定の適用、検定結果の解釈
10	論文の執筆（1）	研究論文の書き方、「方法」「結果」の書き方
11	論文の執筆（2）	「導入」「考察」の書き方
12	論文の執筆（3）	タイトルのつけ方、参考文献の書き方、原稿の推敲
13	口頭発表の仕方（1）	口頭発表の心得、効果的な発表資料の作り方
14	口頭発表の仕方（2）、総括	論文提出、最終成果発表の準備、質疑への準備、秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究の流れに沿って、ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し、次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業で報告するための資料を準備する。本授業の準備・復習時間は、あわせて 1 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキストは特になし。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）（2001）. 心理学研究法入門
—調査・実験から実践まで— 東京大学出版会.

高野陽太郎・岡 隆（編）（2004）. 心理学研究法 ―心を見つめる科学のまなざし― 有斐閣アルマ.
松井豊（2006）. 心理学論文の書き方―卒業論文や修士論文を書くために― 河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%, 進捗状況報告 25%, 発表 50%の割合で評価する。原則として出席が授業の 2/3 に満たない場合または発表を怠った場合は E 評価となる。

【学生の意見等からの気づき】

【直近の 2018 年度アンケート結果より】「積極的な工夫がされていた」「理解できた」「受講してよかった」いずれの項目も全員「4」または「5」という回答でした。異なるゼミの院生が集まってそれぞれの視点から活発な議論が出来たので、大変有意義だったのではないかと思います。

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 言語学・音声学・認知科学

＜研究テーマ＞ 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳 (2017). 『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房.

田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will carry out research based on their research agenda, and summarize the results into a coherent presentation and research paper.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

スポーツ心理学、または、スポーツ心理学と他の心理学分野との関連性に焦点を当てます。そして、研究課題を明確にして、研究計画を立てることをテーマとします。

【到達目標】

授業の到達目標は、以下の 3 点です。(1) 先行研究を概観して、研究の課題を整理することができる。(2) 研究の課題を解消するための研究計画を立てることができる。(3) 以上 2 点について、他の受講生と論理的な意見交換を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

(1) 研究論文を読んで発表したり、(2) 意見交換をしたりして、研究課題や研究計画を具体化できるようになることを目指します。授業中に行うことは、(1) 発表と意見交換、(2) グループワークです。課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	自分の関心を洗い出す (1)	関心のあるテーマを出し合う。その内容について、意見交換を行う。
第 2 回	自分の関心を洗い出す (2)	関心のあるテーマを出し合う。その内容について、意見交換を行う。
第 3 回	先行研究を読み、内容をまとめる (1)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 4 回	先行研究を読み、内容をまとめる (2)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 5 回	先行研究を読み、内容をまとめる (3)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 6 回	先行研究を読み、内容をまとめる (4)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 7 回	先行研究を読み、内容をまとめる (5)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。

- 第 8 回 先行研究を読み、内容をまとめる (6) 関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
- 第 9 回 先行研究を読み、内容をまとめる (7) 関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
- 第 10 回 先行研究を読み、内容をまとめる (8) 関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
- 第 11 回 研究計画を立てる (1) 研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
- 第 12 回 研究計画を立てる (2) 研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
- 第 13 回 研究計画を立てる (3) 研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
- 第 14 回 研究計画を立てる (4) 研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 文献検索、(2) 授業中に提示された課題、(3) 発表資料の作成に取り組みます。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 作成したレポートや発表の内容が 60%、(2) 意見交換やグループワークへの参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、スポーツ心理学に特化しすぎず、受講生の関心に沿って授業を展開します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

スポーツ心理学、健康心理学

＜研究テーマ＞

アスリートの支援、生涯スポーツの普及

＜主要研究業績＞

荒井弘和（編著）(2020). アスリートのメンタルは強いのか？—スポーツ心理学の最先端から考える— 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline and objectives】

It will be focused on the relationship between sports psychology or sports psychology and other psychology fields. Then, the students will clarify their own research topics and to plan on the research.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

スポーツ心理学、または、スポーツ心理学と他の心理学分野との関連性に焦点を当てます。そして、研究を実践し、その結果を研究論文として執筆することをテーマとします。

【到達目標】

授業の到達目標は、以下の3点です。(1) 研究計画に沿って研究を実践することができる。(2) その結果を研究論文として執筆することができる。(3) 以上2点について、他の受講生と論理的な意見交換を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

(1) データ分析の結果を報告したり、(2) その解釈について意見交換をしたりして、論文を執筆することができるようになることを目指します。授業中に行うことは、(1) 発表と意見交換、(2) グループワークです。

課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究計画の実施経過を報告する	実施経過を報告し、その内容について、意見交換を行う。
第2回	データを分析する (1)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第3回	データを分析する (2)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第4回	データを分析する (3)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第5回	データを分析する (4)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第6回	データを分析する (5)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。

第7回	研究論文を完成させる (1)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第8回	研究論文を完成させる (2)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第9回	研究論文を完成させる (3)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第10回	研究論文を完成させる (4)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第11回	研究論文を完成させる (5)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第12回	研究論文を完成させる (6)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第13回	研究論文を完成させる (7)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第14回	研究内容を口頭発表する	研究論文を元に発表資料を作成し、口頭発表を行う。 その後、質疑応答を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 研究の実施（データ収集やデータの分析も含む）、(2) 授業中に提示された課題、(3) 発表資料の作成に取り組みます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 作成したレポートや発表の内容が60%、(2) 意見交換やグループワークへの参加状況が40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、スポーツ心理学に特化しすぎず、受講生の関心に沿って授業を展開します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

スポーツ心理学、健康心理学

<研究テーマ>

アスリートの支援、生涯スポーツの普及

＜主要研究業績＞

荒井弘和 (編著) (2020). アスリートのメンタルは強いのか？ — スポーツ心理学の最先端から考える — 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline and objectives】

It will be focused on the relationship between sports psychology or sports psychology and other psychology fields. Then, the students will implement their research and write a research paper.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

林 容市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

健康心理学、生理心理学に関連した事項を中心に、実践に繋がる課題の解決を通じて研究の実践方法を学ぶ。

【到達目標】

1. 先行研究の知見の集積から、健康心理学、生理心理学に関する検討課題を指摘できる。
2. 上記 1 の検討課題を解決するための様々な指標について、その測定方法を理解し、結果を適切に解釈できる。
3. 上記 1 の検討課題について、具体的な手法を踏まえて研究計画（解決方法）を設定できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の到達目標を踏まえて、受講生が興味を有する健康心理、生理心理をテーマとする研究を調べ、現在までの研究の状況を確認して課題を明らかにし、プレゼンテーションを行う。次に特に代謝、骨格筋活動に関する測定機器を実際に使用してデータを測定し、その結果について論議した上で判読・解釈法について学ぶ。また、これらの生理的指標の変化と心理的状態（感覚、努力度など）との関係を学ぶ。

また、前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては、授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	健康心理学、生理心理学の概要の理解
第 2 回	研究例の紹介	身体活動に関連した健康心理学、生理心理学の研究事例の紹介
第 3 回	文献研究およびプレゼンテーションの方法	文献レビューとプレゼンテーション方法の理解
第 4 回	文献研究結果の発表 1	受講者選定のテーマに関する文献研究の結果発表および課題の討論
第 5 回	文献研究結果の発表 2	受講者選定のテーマに関する文献研究の結果発表および課題の討論
第 6 回	エネルギー代謝測定の実際 1	代謝量測定に関する基本的理論の学習および健康心理学、生理心理学の研究における具体的な使用法の理解
第 7 回	エネルギー代謝測定の実際 2	呼気ガス分析器の使用法の学習および様々な身体状態・活動状況における代謝量 (kcal) の実測
第 8 回	エネルギー代謝測定の実際 3	3 軸加速度センサによる活動量計の使用法の学習および活動量と心理指標（主観的努力感など）の実測
第 9 回	エネルギー代謝測定の実際 4	複数の方法で測定されたエネルギー代謝量の解釈・理解
第 10 回	骨格筋活動測定の実際 1	骨格筋活動測定に関する基本的理論の学習および健康心理学、生理心理学の研究における具体的な使用法の理解

第 11 回	骨格筋活動測定の実 2	筋電図の測定機器の使用法の学習 および様々な身体活動時における 筋電図と心理指標（主観的努力感 など）の実測
第 12 回	骨格筋活動測定の実 3	簡便な手法を用いた筋力の調整力 と心理指標（主観的努力感など） の実測
第 13 回	生理的指標と生理指標 との対応	各生理指標の測定結果と心理指標 との対応関係の理解
第 14 回	研究計画の検討	様々な指標を用いた研究計画の発 表と実現可能性についての討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1 回：本授業において主として習得を希望する手法についてレポートの作成。2-5 回：個人で設定したテーマに関連した文献を検索、精読し、発表準備を行う。6-13 回：事前に配布された資料を精読し、機器の操作法、測定方法、分析方法について予習する。14 回：研究計画を立案し、プレゼンテーションの準備を行う。これらの授業時間外の学習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて授業中に資料を配布します。

【参考書】

田中喜代次，大蔵 倫博（編），健康運動の支援と実践，金芳堂。

【成績評価の方法と基準】

授業への参画（出席ではない）状況：50%，プレゼンテーションおよびディスカッション内容：30%，研究計画内容：20%

【学生の意見等からの気づき】

前年度休講のため，特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 生理心理学，応用健康科学，健康心理学

＜研究テーマ＞ 運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する

＜主要研究業績＞ 林容市 他，就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響，体育測定評価研究：18, 35-46, 2019；林容市 他，個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係，体力科学 57：197-206, 2008 ほか

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to learn and master research methods through the resolution of practice tasks related to Health Psychology and Physiological Psychology.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

林 容市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

健康心理学，生理心理学に関連した事項を中心に，現在の研究の進展状況を確認し，新たな課題を設定した上で，それを解決しうる研究計画を立案する。

【到達目標】

1. 先行研究の知見の集積から，健康心理学，生理心理学に関する具体的な検討課題を選定できる。
2. 上記 1 の検討課題について，具体的な手法を踏まえて研究計画（解決方法）を立案できる。
3. 必要な指標を用いて研究を実践し，適切にデータを分析した上で，ミニ論文を作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生が興味を有する健康心理，生理心理をテーマとする先行研究を調べ，検討課題を明らかにした上で，プレゼンテーションを行う。その内容について論議を進め，具体的な研究計画を立案し，生理指標と心理状態（感覚，努力度など）を用いた実験・測定を通じてミニ論文を作成する。

また，前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては，授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業概要と到達目標の説明
第 2 回	研究テーマの検討 1	研究テーマの発表と実現可能性を考慮した論議
第 3 回	研究テーマの検討 2	研究テーマの確定と具体的な手続きの検討
第 4 回	関連研究のまとめ 1	テーマに関連した先行研究のまとめと発表
第 5 回	関連研究のまとめ 2	テーマに関連した先行研究のまとめと課題の決定
第 6 回	研究計画の立案 1	具体的な研究計画の発表と受講者内での論議
第 7 回	研究計画の立案 2	具体的な研究計画の発表と受講者内での論議
第 8 回	研究計画の実践 1	研究の実践に向けた研究計画の確定
第 9 回	研究計画の実践 2	研究計画に沿った実験の実践：心理・生理指標の測定
第 10 回	研究計画の実践 3	研究計画に沿った実験の実践：心理・生理指標の測定
第 11 回	測定データの検討 1	測定されたデータの整理と分析
第 12 回	測定データの検討 2	整理・分析したデータを発表と受講者内での論議
第 13 回	研究結果の報告 1	ミニ論文の作成
第 14 回	研究結果の報告 2	ミニ論文の作成と発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1 回：本授業において主として習得を希望する手法についてレポートの作成。2, 3 回：個人で設定したテーマに関連した文献を検索、精読し、発表準備を行う。4, 5 回：関連する複数の先行研究を読んでまとめ、発表準備を行う。6, 7 回：研究計画を立案し、発表準備を行う。8-10 回：研究計画に沿ったデータ測定に向け、事前に配布された資料を精読して機器の操作法、測定方法、分析方法について予習する。11, 12 回：測定したデータを分析し、発表準備を行う。13, 14 回：ミニ論文を作成し、資料を作成する。これらの授業時間外の学習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて授業中に資料を配布します。

【参考書】

田中喜代次, 大蔵 倫博 (編), 健康運動の支援と実践, 金芳堂。

【成績評価の方法と基準】

授業への参画（出席ではない）状況：50%, プレゼンテーションおよびディスカッションの内容：30%, ミニ論文の内容：20%

【学生の意見等からの気づき】

前年度休講のため、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 生理心理学, 応用健康科学, 健康心理学

＜研究テーマ＞ 運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する

＜主要研究業績＞ 林容市 他, 就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響, 体育測定評価研究：18, 35-46, 2019；林容市 他, 個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係, 体力科学 57：197-206, 2008 ほか

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to examine the progress of current research on health psychology and physiological psychology and to be able to formulate research proposals to solve problems after setting up a new research problem independently.

PSY500B3

音声言語科学特論

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語学について基礎から学ぶ。

【到達目標】

母語話者として言葉を操るには、その言語の音（音声学、音韻論）、語彙（形態論）、文の作り方（統語論）、語句の意味（意味論）、他者との対話の中での言葉づかい（語用論）など、様々な知識が必要である。この言語知識を科学的な観点から追究する言語学の諸分野について、基礎概念を学び、問題を解く能力を身に付けることを本授業の目標とする。授業では言語学を初めて学ぶ学生を想定しているが、受講生の既有知識に応じて進度を適宜調整する。授業終了時には、言語に関する様々な現象や疑問について吟味・解決できるようになることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

人間に特有の能力とされる言語がどのような原理によって成立しているのかを科学的に追究する言語学について概観する。言語学の諸分野の中でも音声学、音韻論、形態論、統語論の中から適宜重要なトピックを取り上げる予定である。日本語や英語などの諸言語から様々な具体例を検討し、問題を実際に解く作業を通して、言語学の基礎概念や分析方法を身に付ける。また、音声学分野で広く利用されているフリーソフト **Praat** の実習を行う。授業は、教員による講義、課題に関するディスカッション、教員から全員に向けてのその場でのフィードバックなどを織り交ぜながら進める予定である。授業後半では、言語に関係する学術論文を学生が自ら選定し、その内容を授業にて発表する機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入, 言語と言語学	シラバスの説明, 言語学とは?, 言語学の諸分野, 二種類の言語
2	形態論: 形態素, 語形成	心内辞書と一般辞書, 形態論と形態素, 形態素の種類, 偶発的な語形成, 少し規則的な語形成
3	形態論: 複合, 派生	主要部, 複合語の種類, 複合語の意味, 派生語の樹形図
4	形態論: 屈折, 形態素解析	屈折と活用, 形態素解析の方法, 練習問題
5	統語論: 導入, カテゴリー, 意味役割, マージ	構成素, 句構造, 句の主要部, 文を作り上げるための材料: カテゴリー, 項と意味役割, 文を組み立てる仕組み: マージ, 様々な種類の句
6	統語論: 文の組み立て	英語の文・日本語の文の組み立て, 動詞句の組み立て, 屈折辞と格, 一般的な句の構造
7	統語論: 補文	動詞句の拡張, 補部と指定部, 文の中の文=補文
8	音声学・音韻論: 母音と子音	発話のメカニズム, 母音, 子音
9	音声学・音韻論: 音素	音素, 音素分析
10	実験音声学: 音声分析	Praat を使った音声の録音・可視化・編集・分析・ラベリング
11	実験音声学: 音声合成	Praat を使った音声の再合成

- 12 実験音声学：音声知覚 Praat を使った音声知覚実験
 13 論文発表（1） 言語に関わる学術論文の発表
 14 論文発表（2）、総括 言語に関わる学術論文の発表、授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

（1）毎回、テキストの指定範囲を読み、課題に取り組み、次回の授業で議論をするための準備をすること。（2）学期の後半では言語に関わる学術論文を各自選定し、学期末にその内容について発表すること。本授業の準備学習・復習時間は、計 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

以下の文献の一部を授業で使用する予定。

西光義弘（編集）（1999）. 日英語対照による英語学概論：増補版
 くろしお出版.

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 音声学を学ぶ人のための Praat 入門 ひつじ書房.

【参考書】

参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 20%, 課題 50%, 発表 30% の割合で評価する。言語学は知識の段階的な学習とともに、問題を解く能力の習得が求められるので、授業参加と課題を重視する。原則として、4 回を超えて授業への出席や課題の提出がなかった場合、または論文発表を行わなかった場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

2018 年度春学期は、回答者 4 名全員が「履修してよかったか」「工夫されていたか」「理解できたか」という間に「4」か「5」で回答してくれました。授業外学習時間については「週 1～2 時間」が 2 名、「週 2～3 時間」が 2 名でした。コメント欄への記入はあまりありませんでしたが、「Praat の使い方が身についてよかった」という感想をいただきました。

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
 <主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一（2011）. 音声分析ソフトウェア Praat を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.

田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

This course introduces students to the fundamentals of linguistics.

PSY500B6

社会心理特論

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要：

テーマ 社会問題とその解決について：心理学の観点から

心理学の専門家として、社会問題についての従来の研究とエビデンスを効果的に収集し、決められた時間内に効果的にプレゼンテーションを行う演習である。受講にあたっては、心理学の基本的知識、データ収集の知識、数値的なデータの分析・解析技術、パワーポイントの使用、心理学の外国語文献の読解能力が必要である。

授業の意義：

この講義を受講することによって以下のことを達成できるようにする。

- ①社会問題について心理学の専門家の立場から適切に分析できる
- ②社会問題について心理学の専門家の立場から適切にコメントできる
- ③社会問題について心理学の専門家の立場から議論できる
- ④社会問題について心理学の専門家の立場から自分の主張をプレゼンテーションできる

【到達目標】

- （1）主張したい問題についての分析
- （2）エビデンスの収集
- （3）エビデンスの比較と分析
- （4）自分の意見の構成
- （5）自分の意見の主張の構成
- （6）効果的なプレゼンテーション
- （7）他人のプレゼンテーションへの批判・質問スキル
- （8）他人のプレゼンテーションの評価ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は各自があらかじめ、選択したテーマについて 60 分間でプレゼンテーションを行い、それについて受講者全員でディスカッションする形式で行う。発表内容についての知識を深めるだけでなく、プレゼンテーションの方法や、質問に対する答え方、プレゼン時の動作などについても訓練を行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
 あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業についての説明
第 2 回	発表と討論（1）発表形式に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 3 回	発表と討論（2）発表時の振る舞いに重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 4 回	発表と討論（3）パワーポイントの内容に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 5 回	発表と討論（4）議論の進め方に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 6 回	発表と討論（5）質問に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント

第 7 回	発表と討論（6）質問 対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについて のコメント
第 8 回	発表と討論（7）反論 に重点を置く	受講生の発表と討論、それについて のコメント
第 9 回	発表と討論（8）反論 のエビデンス提示に重 点を置く	受講生の発表と討論、それについて のコメント
第 10 回	発表と討論（9）反論 対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについて のコメント
第 11 回	発表と討論（10）ま とめに重点を置く	受講生の発表と討論、それについて のコメント
第 12 回	発表と討論（11）発 表の進め方に重点を置 く	受講生の発表と討論、それについて のコメント
第 13 回	発表と討論（12） 総合評価（1）	受講生の発表と討論、それについて のコメント
第 14 回	発表と討論（13）総 合評価（2）	受講生の発表と討論、それについて のコメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
自分の発表に際しては、事前調査と発表の準備（50 時間程度）
他人の発表に際してはその予習（数時間程度）が必要。

【テキスト（教科書）】

使用しない

【参考書】

発表者が指定する

【成績評価の方法と基準】

評価基準 授業におけるプレゼンテーション 50 %、授業における
討論の質と量 50 %
自分の発表時でなくても積極的に発言しないと、後者の 50 % の加
点は得られない。たとえば、自分の発表がパーフェクトでも授業中
の自発的な発言があり、かつそれが有益なものでない限り単位は得
られない。すべての回に出席しても貢献度が少ないと単位は得られ
ない。

【学生の意見等からの気づき】

例年、プレゼン能力や質問能力がついたというポジティブな評価を
いただいています。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを授業時に持参すること。
授業中にインターネットなどを参照しながら授業に参加すること

【担当教員の専門分野等】

専門領域 犯罪心理学、社会心理学
研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用
主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ 犯罪捜査の心理学；越
智啓太 2015 恋愛の科学 実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで
学ぶ犯罪心理学 北大路書房；越智啓太 2008 犯罪捜査の心理
学 化学同人；越智啓太ほか 2008 自伝的記憶の心理学 北大
路書房

【Outline and objectives】

Discuss social issues based on research results of social
psychology

PSY500B6

読書心理特論

平山 祐一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本という媒体を使って行われる心理的活動が「読書」である。そ
の「読書」という行為はどのような心理的過程を通じて行われるの
か、そして「読書」という行為の結果、人間の心理的活動がどのよ
うな影響を受けるのかについて考察する。また、教育現場では「読
書離れ」が問題視され、様々な対応がなされている。そもそも「読
書離れ」とはどのような現象なのか、そして、その読書離れへの有
効な対応策にはどのようなものが考えられるのかについて具体的に
議論する。さらに、近年、電子書籍が登場し、従来の「読書」とい
う心理的活動が変貌することが予想されている。電子書籍が人間にど
のような影響を与えるのか、その長所・短所について予測する。受
講者は以上の課題に対して、適切な議論や考察、予測ができるよう
になることを目的とする。

【到達目標】

この授業では、講義と議論により、心理学的観点から「読書」に
ついて理解を深める。この授業に積極的に参加することにより、受
講者には以下の力がつく可能性が高まる。

- ①読書という活動やその作用について、心理学的に説明できる。
- ②読書離れの原因と対策について、心理学的観点から言及できる。
- ③電子書籍の影響について、心理学的に予測できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
たどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、発表者を決め、授業計画に沿ったテーマで発表を行う。こ
の発表に対し、出席者全員が議論する。その中で【到達目標】の 3
点の達成を目指す。具体的には【成績評価の方法と基準】を参照す
ること。オンライン授業（リアルタイム配信型）の実施を予定して
いる。また、提出物等でよいコメント等があった場合は、授業内で
紹介し、議論に活かしていく予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	オリエンテーションとして、授業 の目的・方法・成績評価・注意事 項を詳しく説明する。発表担当者 を決定する。イントロダクション として、読書に関する小講義を行 う。
第 2 回	「ネット時代の読書論」	発表者の説明後、全員で議論を行 う。
第 3 回	「ネット時代の読書論」	発表者の説明後、全員で議論を行 う。
第 4 回	教科書「ネット・ バカ」	発表者の説明後、全員で議論を行 う。
第 5 回	「ネット・バカ」	発表者の説明後、全員で議論を行 う。
第 6 回	「ネット・バカ」	発表者の説明後、全員で議論を行 う。
第 7 回	「ネット・バカ」	発表者の説明後、全員で議論を行 う。
第 8 回	「ネット・バカ」	発表者の説明後、全員で議論を行 う。

第9回 「ネット・バカ」総合考察	第4回～第8回までの内容について総合的に考察・議論する。
第10回 教科書「スマホ脳」前半部	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第11回 「スマホ脳」後半部	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第12回 「ネット・バカ」「スマホ脳」の関連文献の検討①	第4回～第11回までの授業内容に関連した書籍・論文・記事等を集め、議論を深める。主に和文。
第13回 「ネット・バカ」「スマホ脳」の関連文献の検討②	第4回～第11回までの授業内容に関連した書籍・論文・記事等を集め、議論を深める。主に英文。
第14回 授業のまとめ	授業全体に関して、受講者からの質問をもとに議論する。まとめとしての小講義も行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。準備学習として、文献の読み込みなどの予習を毎回指示する。※所要時間2時間。復習として、①授業内容を要約する、②授業内で生じた「問い」へ解答する、などのミニ・レポートを毎回提出する。※所要時間2時間。

【テキスト（教科書）】

- ①「ネット・バカ インターネットがわたしたちの脳にしていること」ニコラス・G・カー（著）青土社 2010年 2420円
 ②「スマホ脳」アンデシュ・ハンセン（著）新潮新書 2020年 1078円

【参考書】

必要に応じて、参考となる書籍を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記【到達目標】の①～③の達成をめざすため、以下の要素（観点）と配分（％）により、成績評価を行う。[1] 発表 50％ ①質の高いレジュメを作成し、わかりやすく、簡潔な発表をしたか。②議論を呼び起こす発表をしたか。[2] 議論 30％ ①積極的に議論に参加したか。②適切な質問をしたか。③斬新な問いを立てられたか。④建設的な意見表明をしたか。⑤発見的な考察ができたか。[3] 提出物 20％ ①要約が適切か。②問いに的確に答えているか。※【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】を参照。

【学生の意見等からの気づき】

毎年の授業アンケートや受講者の感想から、議論を多く取り入れた授業であることが好評であることがわかった。今季も議論の中から、大小いくつもの発見があるような授業を運営したい。ただし、議論は白熱すると本題から離れる場合があるので、その舵取りを工夫したい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業（リアルタイム配信型）の実施を予定しているため、その準備をしておいてください。

【その他の重要事項】

シラバスは状況に応じて変更する。授業やメールなどで連絡・説明する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉教育心理学
 〈研究テーマ〉読書心理、作文・表現の心理、学習指導と評価
 〈主要研究業績〉①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所 ②平山祐一郎 2015 大学生の読書の変化-2006年調査と2012年調査の比較より- 読書科学,56,55-64. ③平山祐一郎 2020 大学生の読書をどうするか IDE 現代の高等教育,621,26-30.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to provide participants with some points of view about effects or impacts of reading books in the psychological context. Main topics are as follows: what kind of psychological process is necessary for reading books? or what kind of effect happens by electronic books? In addition to these, we will consider the cause of increase in the number of non-readers.

PSY500B6

教育心理特論

平山 祐一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教育心理学には少なくとも2つの目的がある。①教育という活動に心理学の光を当て、深く理解すること。②心理学の知見を教育活動に反映させ、質の向上をはかること。この授業では、受講者はそれらに加えて、学校心理士という資格とその活動から見えてくる教育にも知識を深める。

【到達目標】

この授業に積極的に参加することにより、受講者には以下の力がつく可能性が高まる。①国内外の教育課題を多面的に把握し、心理学的に説明できる。②教育課題に関して、証拠に基づいた原因分析と対策立案ができる。③学校心理士という資格とその活動について述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、発表者を決める。発表に対して出席者全員が議論する。具体的には、【テキスト（教科書）】欄に記載されている教科書を用いて、【授業計画】欄の内容に沿って授業を進める。発表者は各回のテーマに関して、①教科書の内容を深めること、②教科書の資料や考え方を最新のものにすること、③具体例を集めること、に留意しレジュメを作成する。毎回の発表と議論を通じて、【到達目標】の3点の達成を目指す。具体的には【成績評価の方法と基準】を参照すること。※月刊「教育と医学」（慶應義塾大学出版会）から論文を選択し、その発表も行う。

オンライン授業（リアルタイム配信型）の実施を予定している。

また、提出物等でよいコメント等があった場合は、授業内で紹介し、議論に活かしていく予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期		
回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション（教育心理学の目的と課題）	授業の目的・方法を提示する。イントロダクションとして、教育心理学の歴史と今後の課題について、学校心理学と関連づけて講義する。
第2回	心理教育的援助サービスのモデル①&「教育と医学」から発表	「4種類のヘルパー論」について概略を講義した上で、「ボランティアのヘルパー」「役割的ヘルパー」について検討・議論する。
第3回	心理教育的援助サービスのモデル②&「教育と医学」から発表	「4種類のヘルパー論」について、「複合的ヘルパー」「専門的ヘルパー」「被援助志向性」について検討・議論する。
第4回	心理教育的援助サービスのモデル③&「教育と医学」から発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「1次的援助サービス」について現代的課題を含め、多面的に検討・議論する。
第5回	心理教育的援助サービスのモデル④&「教育と医学」から発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「2次的援助サービス」について多面的に検討・議論する。
第6回	心理教育的援助サービスのモデル⑤&「教育と医学」から発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「3次的援助サービス」について最新の資料を収集しつつ、検討・議論する。

- 第7回 学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために①&「教育と医学」から発表
子どもの抱える問題を捉えるために各種資料を収集し、援助案の作成等を行うための「アセスメント」について学ぶ。
- 第8回 学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために②&「教育と医学」から発表
子どもの発達を促進するために、子どもや保護者へ直接的に行われる援助サービスが「カウンセリング」である。その方法と注意点を学ぶ。
- 第9回 学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために③&「教育と医学」から発表
子どもの発達を促進するために間接的に行われる「コンサルテーション」について、「問題解決型」「研修型」「システム介入型」の3つを理解する。
- 第10回 学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために④&「教育と医学」から発表
援助の必要性が高い子どもに、校内の援助資源（養護教諭等）を用いたり、学校外の資源（相談機関等）と連携したりすることを「コーディネート」という。その事例検討等を行う。
- 第11回 子どもの問題状況を解消に導くチーム援助の在り方①&「教育と医学」から発表
チーム援助とは複数のメンバーにより子どもを多面的に捉え、共通方針を持ち役割分担し、相補関係を築きながら援助を行うことである。そのバリエーションを知る。
- 第12回 子どもの問題状況を解消に導くチーム援助の在り方②&「教育と医学」から発表
チーム援助の主たる構成メンバーである教師や保護者へのコンサルテーションを意識し、成功事例・失敗事例等を分析的に検討する。
- 第13回 教育心理学と倫理① &「教育と医学」から発表
教育心理学の研究者・実践家、学校心理士が研究や調査を行う際の配慮事項や成果の公開方法について、人権の尊重や秘密保持の厳守等の観点から、具体例を扱いつつ検討を行う。
- 第14回 教育心理学と倫理② &まとめ
教育心理学の実践家や学校心理士がその活動において配慮すべき人権尊重や秘密厳守、責任保持について具体例を交えて議論する。また、研修や自己研鑽の必要性について考える。最後に授業全体をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。準備学習として、文献の読み込みなどの予習を毎回指示する。※所要時間2時間。復習として、①授業内容を要約する、②授業内で生じた「問い」へ解答する、などのミニ・レポートを毎回提出する。※所要時間2時間。

【テキスト（教科書）】

①「よくわかる学校心理学」（水野治久・石隈利紀・田村節子・田村修一・飯田順子編著、ミネルヴァ書房、2400円＋税）を使用予定。《注意》ただし、変更する可能性もある。指示があるまで購入しない。
②月刊「教育と医学」（慶應義塾大学出版会）の論文をもとにした発表を求める。《注意》法政大学図書館で閲覧できるため、購入する必要はない。

【参考書】

参考になる書籍等は必要に応じて、授業内で紹介する予定である。

【成績評価の方法と基準】

【到達目標】に従い、以下の要素（観点）と配分（％）により、成績評価を行う。[1] 発表 50％ ①質の高いレジュメを作成し、わかりやすく、簡潔な発表をしたか。②議論を呼び起こす発表をしたか。[2] 議論 30％ ①積極的に議論に参加したか。②適切な質問をしたか。③斬新な問いを立てられたか。④建設的な意見表明をしたか。⑤発見的な考察ができたか。[3] 提出物 20％ ①要約が適切か。②問いに的確に答えているか。※【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】を参照。

【学生の意見等からの気づき】

毎年の授業アンケートや受講者の感想から、議論を多く取り入れた授業であることが好評であることがわかった。今季も議論の中から、大小いくつもの発見があるような授業を運営したい。ただし、議論は白熱すると本題から離れる場合があるので、その舵取りを工夫したい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業（リアルタイム配信型）の実施を予定しているため、その準備をしておいてください。

【その他の重要事項】

シラバスは状況に応じて変更する。授業やメールなどで連絡・説明する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉教育心理学

〈研究テーマ〉①読書の心理 ②作文・表現の心理 ③学習指導と評価
〈主要研究業績〉①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所 ②平山祐一郎 大学生の読書の変化-2006年調査と2012年調査の比較より- 読書科学,56,55-64. ③平山祐一郎 2020 大学生の読書をどうするか IDE 現代の高等教育,621,26-30.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to give participants the basic knowledge and the practical skills of educational psychology. It is especially important to develop psychological ways to deal with the matters that concern to education and to know the application of psychological findings to educational activities for the improvement of those qualities.

PSY500B6

犯罪心理特論

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の目的：

この授業では、犯罪心理学の計量的な研究（とくにプロファイリングに関する論文）を集中して読解し、現在の研究水準を理解する。本年度はとくに大量殺人とスクールシューティングの論文を読解する。

授業の概要：

本講義では、高度な多変量解析技法を用いた犯罪心理学研究を中心として、最先端の研究論文を集中して読解する。なるべくたくさんの論文を読むことを目的とするため、英語（犯罪心理学の英語専門論文を読解する能力）、数学（多重応答分析などの MDS 系手法、ロジスティック回帰分析）、心理学、犯罪者プロファイリングに関する基礎的な知識については習得済みであるという前提で授業を進める。心理学以外の専攻の方の受講もその専攻が許せば可能であるが、とくに他専攻であることは考慮しないで授業を進行するので、実質的に単位取得は極めて困難であることを了解して受講されたし。

【到達目標】

各自が専門とする分野（犯罪心理学）についての専門論文（英文）を 20 本以上程度読解して、時間内に効果的に発表する。

各自が専門とする分野に関する最先端の研究の現在の到達水準について説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の専門分野に関連した、海外の専門論文を各自が 1 論文 30 分程度で要約して説明し、ディスカッションを 10 分程度行う。毎回、2～5 論文を読解し、合計 50 論文を読むことを目的とする。ひとつの論文は、10～40 ページ程度の英文である。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション、 犯罪捜査への心理学の 応用 (以下、例えば大量殺人を専門とする場合の例を示す)	オリエンテーション、プロファイリング研究の現状についての講義
2	大量殺人：大量殺人に ついてのレビュー論文 1	論文の読解と議論
3	大量殺人：大量殺人に ついてのレビュー論文 2	論文の読解と議論
4	大量殺人：大量殺人の 動機についての研究論 文 1	論文の読解と議論
5	大量殺人：大量殺人の 動機についての研究論 文 2	論文の読解と議論
6	大量殺人：大量殺人犯 人の行動パターンにつ いての研究 1	論文の読解と議論

7	大量殺人：大量殺人犯 人の行動パターンにつ いての研究 2	論文の読解と議論
8	大量殺人：大量殺人犯 人の行動パターンにつ いての MDS 研究 1	論文の読解と議論
9	大量殺人：大量殺人犯 人の行動パターンにつ いての MDS 研究 2	論文の読解と議論
10	学会参加とその内容に ついてのレポート	学会参加
11	大量殺人：ロジス ティック回帰分析など を用いた行動予測研究 1	論文の読解と議論
12	大量殺人：ロジス ティック回帰分析など を用いた行動予測研究	論文の読解と議論
13	大量殺人：マルチレベ ル分析を用いた行動予 測研究	論文の読解と議論
14	大量殺人：年間読解論 文のまとめ	論文の読解と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎週 2～5 本の英語論文を読んでいく。受講者の人数によるが、基本的に毎週 1 本程度の論文を読解し、レジュメを作成することが必要となる。毎週、上記のテーマにしたがった論文を探して準備し、十分に精読してレジュメを作成してくること。

【テキスト（教科書）】

すべて専門雑誌論文を使用する。基本的に各分野の基盤ジャーナルを中心として論文を選択する。

【参考書】

犯罪心理学についての専門雑誌論文を参照する。具体的には授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 授業での発表
論文を正確に読み解き、要点をまとめて適切にレジュメ化し、手際よく発表する能力について、それぞれ評価する（25%）
- (2) 発表論文の選択
多数の論文の中から、興味深い論文を選択できたかどうか評価する（20%）
- (3) 授業の参加
授業時における質疑、応答の量と質を評価する（15%）。自発的な発言がないと点数を与えない。
- (4) レポート
授業期間内に自分の読んだ（授業内外）論文のレジュメを提出するその量と質で評価（40%）

【学生の意見等からの気づき】

プロファイリングについての最新の知識を習得できるのは日本の大学ではこの授業が唯一であり、受講者の意欲と満足度は非常に高い。

【その他の重要事項】

警視庁科学捜査研究所等における実務経験があるので、その経験なども含めて指導する。

【担当教員の専門分野等】

専門領域 犯罪心理学、社会心理学
研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用
主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ 犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学 実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学 北大路書房；越智啓太 2008 犯罪捜査の心理学 化学同人；越智啓太ほか 2008 自伝的記憶の心理学 北大路書房

【Outline and objectives】

Read papers on profiling and discuss its contents

PSY500B6

知覚運動論演習

吉村 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知心理学、特に知覚を扱う研究を実施する方法を学びます。

【到達目標】

各自選定した研究テーマに対し、研究文献の講読から始まる研究全体を多角的に捉え、批判に耐えうる研究を実施していくための能力の習得を目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は対面とオンデマンドの回を原則として交互に行う予定ですが、状況により変更する可能性がありますので、Hoppiiの「お知らせ」に注意しておいてください。

演習形式で各受講者が自らの研究を実施していくプロセスを示し、受講者全員がその進行過程についてクリティカルに議論していくことで授業を構成します。

毎週の課題の提出およびフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	授業概要の説明	授業の構成と、受講するに当たっての心構えの説明。
2	研究例の紹介	教授者の行っている研究を例に、研究の進め方の解説を行う。
3	研究テーマの検討（1）	受講者が行おうと考える研究の提示と授業担当者によるコメント。
4	研究テーマの検討（2）	前回のコメントを踏まえ、研究テーマの確定。
5	関連研究のレビュー（1）	受講者による研究レビューの発表。
6	関連研究のレビュー（2）	受講者による研究レビューの発表。
7	研究法の検討（1）	方法論的観点からの研究実現性の検討。
8	研究法の検討（2）	方法論的観点からの研究実現性の検討。
9	予備実験の計画作成（1）	小規模実験の実施に向けての計画作成。
10	予備実験の計画作成（2）	小規模実験の実施に向けての計画作成。
11	予備実験の関連研究の検討（1）	予備実験の内容に関連する文献の解説。
12	予備実験の関連研究の検討（2）	予備実験の内容に関連する文献の解説。
13	予備実験の結果の検討（1）	データの整理と結果の評価。
14	予備実験の結果の検討（2）	データの整理と結果の評価。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
受講者が行おうとする 3 回目から 8 回目までの研究に関する文献の読み込みと、9 回目から 14 回目までの予備実験の実施は授業時間外の学習として各自が行います。また、授業での発表の準備も授業時間外に行います。

【テキスト（教科書）】

教科書は用いません。

【参考書】

受講者の研究に関連する研究資料の紹介を授業時に適宜行います。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、授業時のディスカッションでの発言 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

他の受講生の研究について関心を持ち、議論に積極的に関わるための環境作りに努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 知覚・認知心理学

＜研究テーマ＞

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

＜主要研究業績＞

・吉村浩一 2006 運動現象のタキソノミー：心理学は"動き"をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版

・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. Perception, 36, 1049-1056.

・吉村浩一 2009 直交 3 軸のうち 1 軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み ―不可能図形と影絵の回転による検討― アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

This course deals with perceptual studies and the aim of this course is to help students perform their own study.

PSY500B3

音声言語科学演習

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間は言語を「話す」または「聞く」能力を 3-4 歳までにある程度習得するが、「読む」または「書く」能力はより時間と労力を要する。また、人間同様に流暢に会話ができるコンピュータは未だ完成していない。これはなぜだろうか？ 本授業ではこのような疑問を出発点に、音声言語の認知処理過程について学ぶ。

【到達目標】

音声言語が話し手にどのように産出され、音としてどのような特徴を持ち、聞き手にどのように知覚されるのかについて、説明できるようになることが目標である。また、音声分析ソフトを使って音声言語の特徴を分析できるようになることも目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

音声言語の発話と知覚の仕組み、音声の物理的な特徴、乳幼児による母国語の知覚能力の発達、成人による外国語音声の学習などについて、言語心理学や音声科学の知見を学ぶ。授業は講義、課題に関するディスカッション、教員による解説やフィードバックを中心に進める予定である。また、音声分析ソフト **Praat** を使った課題や演習も盛り込む予定である。授業の内容や進め方については受講生の人数や理解度・要望に応じて変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	シラバスの説明、音声言語と文字言語、「言葉の鎖」
2	音声とは	音声の現実性と速さ、音声産出のメカニズム、母音と子音
3	音響音声学の基礎（1）	音の正体、音の種類、音を可視化する方法、音声のデジタル化
4	音声の音響分析	Praat を使った音声の録音・可視化・編集・分析
5	音響音声学の基礎（2）	フィルタ、音声産出の音源フィルタ理論、基本周波数、フォルマント周波数
6	母音の知覚	聴覚器官、母音の特徴と知覚、母音の正規化
7	子音の知覚（1）	音響的不変性の欠如、ローカス理論、音声の符号化
8	音声の再合成	Praat を使った音声の録音・分析・再合成
9	子音の知覚（2）、カテゴリー知覚	調音点の知覚、声の有無の知覚、分節音と韻律、カテゴリー知覚とは、同定と弁別
10	音声知覚の実験	同定課題と弁別課題の演習
11	音声知覚の発達	生得と学習、乳児の音声知覚、満 1 歳までに起こる変化
12	外国語の音声知覚	成人による外国語音の学習、知覚と産出の関係、外国語音の知覚的同化
13	文脈の影響	トップダウン処理とボトムアップ処理、音声知覚と単語認知のモデル

14 音声知覚言語と社会的 話し方と対人認知の関係、授業の認知、総括 まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業にて指示されたテキストの範囲を読み、復習問題に回答し、次の授業にて提出すること。また、音声分析用フリーソフト **Praat** を使った課題を学期中に数回課すので、課題を行い成果を提出すること。本授業の準備学習・復習時間は、計 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

ジャック・ライアルズ（著）、今富摂子他（訳）（2003）. 音声知覚の基礎 海文堂. 石川圭一（2005）. ことばと心理 くろしお出版. 川崎恵里子（編著）（2005）. ことばの実験室 プレーン出版. 重野 純（2003）「音の世界の心理学」ナカニシヤ出版. 北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 音声学を学ぶ人のための **Praat** 入門 ひつじ書房.

【成績評価の方法と基準】

平常点 20%、課題 50%、発表 30%の割合で評価する予定。原則として、正当な理由なく 4 回を超えて授業への出席や課題の提出がなかった場合、発表を怠った場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

2019 年度はアンケートを実施したものの回答がありませんでした。2020 年度はオンライン授業となったためアンケートが実施されませんでした。そのため、2018 年度のアンケート結果からの気づきを以下に記します。
「積極的な工夫がされていた」「理解できた」「受講してよかった」いずれも 3 名全員「4」または「5」という回答でした。授業外学習も全員 2 時間以上でした。課題は多かったが、課題の確認とフィードバックを授業内で行えたので勉強になった、というコメントを複数いただきました。

【その他の重要事項】

授業の内容や運営方法の詳細について説明しますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞ 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原真冬・田嶋圭一（2011）. 音声分析ソフトウェア **Praat** を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn about the cognitive mechanisms that underlie the processing of spoken language.

PSY500B6

精神生理特論

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、生理心理学の基礎と、研究論文作成過程で用いられるさまざまな生理指標について、実習も入れて学びます。

【到達目標】

各生理指標が反映する心理状態と、生理指標を心理学で用いることのメリットについての知識を身に付け、生理指標を実際に測定することができるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

生理心理学の基本的なアプローチである、電気生理機器の構造や方法を学びます。実際に機器を使用して、心理状態による各生理指標の変化を体験・確認してもらいます。また講義では、生理指標の応用方法や、各指標の発生機序についても説明します。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、生じた疑問や問題を討論します。発表後には、振り返りレポートを提出してもらい、疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	生理心理学の基礎と授業の概要についての説明
第2回	機器説明	多用途脳波計（ポリメイト）の説明
第3回	心理生理的測定法	心理生理的測定指標の基礎的説明
第4回	脳波	脳波についての基礎的説明、脳波の電極の付け方（国際 10-20 法）と測定法
第5回	脳波測定 1	脳波の測定、脳波パターンと行動の関連についての検討 1
第6回	脳波測定 2	脳波の測定、脳波パターンと行動の関連についての検討 2
第7回	脳波測定（周波数解析）	脳波の周波数と意識レベルの関連についての検討
第8回	眼球運動図の測定	眼電位法を用いた目の動きの測定
第9回	心電図の測定	心電図から心拍数などの測定
第10回	心電図から自律神経の解析 1	心電図の R-R 間隔からパワースペクトラム解析の考え方
第11回	心電図から自律神経の解析 1	心電図の R-R 間隔からパワースペクトラム解析の実際
第12回	虚偽検出の測定 1	ポリグラフ検査の理論
第13回	虚偽検出の測定 2	ポリグラフ検査の実際
第14回	総括まとめ	課題レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
脳波、周波数解析、眼電図、事象関連電位 P300 に関するレポートを課します。各回の授業後には、配布した資料に再度眼を通すとともに、紹介した文献を参考にして、各指標に関する理解を深めて下さい。また、理解できなかった点に関しては、質問できるようにしておいて下さい。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しません。授業時に必要に応じてプリントを配付します。また、課題に必要な文献はその都度、配布します。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第 I 巻 基礎. 北大路書房, 京都.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第 II 巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %, 発表・レポート課題 50 %により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

4 名の受講者中 4 名から回答を頂きました。4-5 の段階が、授業の工夫では 100 %, 理解できたかで 75 %, 履修してよかったかは 100 % の評価でした。授業外学習では、2 時間以上が 50 %, 2 時間未満が 50 % と発表の課題をこなす時間が多くて比較的大変だったようです。自由記述では、「コロナ禍であっても、複数回実習ができてよかった」「それぞれの生理指標が生まれるメカニズムなどを詳しく学べた」「実験ができないのは残念でしたが、今年は自律神経系の活動を測定する生理指標の基礎知識を専門的に・重点的に・着実に学ぶことができた」など実習が限られた回数でも、対面でできた点がよかったようです。今後も実験実習は継続していく必要を実感しました。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で授業を開催することが多いので注意して下さい（BT1113）。

【その他の重要事項】

【重要】新型コロナ肺炎に関する状況を考慮して、一部の授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。皆さんの希望も調査したいと思いますので、初回の授業には必ず出席して下さい。実施の順序については変更することがあるため、学習支援システムや授業の中で案内しますので、注意してください。

【オフィスアワー】シラバスの教員紹介に記載してあります。厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として 30 年以上精神科の臨床に携わって実務面の仕事をしています。この経験を生かして、一緒に考えて行きます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>精神生理学, 精神保健学

<研究テーマ>眠気, 睡眠, うつ, ストレス

<主要研究業績>

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメディスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline and objectives】

In this lesson, we will learn about the fundamentals of physiological psychology and various physiological indicators used in the process of preparing research papers, with practical training.

PSY500B6

臨床心理特論

中村 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

概要：主な臨床心理学のアプローチについて、報告・質疑応答形式で講義を行う。また具体的な事例を通して、心理・教育的支援について検討を行う。さらに学校との協働や他機関との連携をふまえ、校内支援チームの構築やケアマネジメントについても理解を深める。

目的：臨床心理学の知識や技術を用いた児童・生徒に対する支援について、具体的な事例をもとに検討することにより、学校現場における心理・教育的支援の方法を習得する。

【到達目標】

目標：臨床心理学を用いた児童生徒・保護者の支援、教員や専門機関との連携について学習する。

- ①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる。
- ②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
- ③上記2点について、考察したことを表現し、記述することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義及び授業内の発表を通して学習する。理解を深めるための演習も適宜とり入れていく。演習後にはリアクションペーパーの記述を求める。提出課題のフィードバックは、翌週の授業の冒頭で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	臨床心理学の定義、必要性について学ぶ。
第2回	臨床心理学とは	臨床心理学の倫理・学校現場における臨床心理学
第3回	臨床心理学の倫理・学校現場における臨床心理学	臨床心理学の実践における倫理について学ぶ。
第4回	学童期・思春期の心と行動	児童・生徒が抱えやすい学童期・思春期の問題について学ぶ。
第5回	精神分析のアプローチ	精神力動的アプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。また、事例を提示し、その適用法についても考察する。
第6回	ロジャーズ学派	来談者中心的アプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。傾聴技法について学ぶ。
第7回	行動理論	行動理論について報告・質疑応答形式や事例を通して理解を深める。
第8回	認知行動療法	認知行動療法について報告・質疑応答形式で理解を深める。また、認知的再体制化のプロセスについて事例を通して学ぶ。
第9回	交流分析理論	交流分析理論について報告・質疑応答形式で理解を深める。
第10回	アセスメントの方法	アセスメントの目的・内容・方法と検査倫理について学ぶ。
第11回	ケアマネジメントと校内チーム支援	学校現場におけるチームアプローチについて、事例を通して理解する。

第11回 児童生徒に対する支援 学校現場における支援の実際について、事例を通して学ぶ。

第12回 他機関との連携—児童虐待の事例 学校と他機関との連携の必要性について、事例を通して学ぶ。

第13回 コミュニケーション・スキルの習得・いじめの防止—心理教育的プログラムの実践 学校現場で有用な心理教育的アプローチについて、事例を通して学ぶ。

第14回 まとめ 授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 配布された資料を事前に読む
- 発表担当の際は、文献を読み発表資料を作成する。
- 演習を行った際はミニレポートを提出する。

【テキスト（教科書）】

教場で資料を配布する。

【参考書】

氏原寛・成田善弘（1999）. 臨床心理学①カウンセリングと精神療法 培風館
乾吉佑・亀口憲治・東山紘久・氏原寛（編）（2005）. 心理療法ハンドブック 創元社
鍾幹一郎・名島潤慈（2010）. 心理臨床家の手引き 誠信書房

【成績評価の方法と基準】

- ①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる
 - ②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
 - ③上記2点について、考察したことを表現し、記述することができる。
- 3つの到達目標に対する成績評価は主に以下とする。
- ①②平常点・グループ討議への参加態度（40%）、文献報告の内容と作成資料（30%）
 - ③ミニレポート課題（30%）

【学生の意見等からの気づき】

事例や自己理解を通し、できるだけわかりやすい授業を心がけたい。また積極的な質問や疑問の提示を期待する。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>教育心理学
<研究テーマ>中学校における心理教育的プログラムの開発・実施
<主要研究業績>
○中学校におけるいじめ抑止を目的とした心理教育的プログラムの開発とその効果の検討/教育心理学研究 62 - 2 / 日本教育心理学会/共著/2014
○「傍観」に着目したいじめ介入プログラムの開発とその効果の検討/早稲田大学/単著/2017.01

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students acquire an understanding of the clinical psychology. Students should be able to recognize and recall major terms and concepts in clinical psychology.

PSY500B6

発達心理特論

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学研究において発達の視点をもつことにどのような意義があるかについて理解する。そのために、これまでの発達心理学研究の体系的な流れを捉える。特に、乳幼児期、児童期、青年期に焦点を当てるとともに、学校心理士の資格に必要な基盤としての発達心理学および、認知・思考、自己意識、社会性の発達を重点的に理解する。その上で、各自の今後の研究へのリサーチクエストを考える。

【到達目標】

上記の授業テーマの枠組を意識した上で、

- ①発達心理学研究史に残る著名な理論を理解し説明することができる。
 - ②身につけた知識をもとに発展的な課題について討議することができる。
 - ③知識や理解をもとに自分の研究に応用できるよう計画することができる。
- を到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

従来の先行研究で取り上げられてきた主要テーマのもとに、著名な理論を理解していく。さまざまな理論がどのような研究者によって、どういった方法で提唱されるに至ったのかを詳しく理解することが求められる。本講義では、発達心理学の中でも特に人間の行動の発達に関する理論と研究に焦点を当てる。毎回、ある研究者に焦点を当て、研究の経緯、方法など背景となる点を紹介する。発表担当者は、参考文献や自身で調べた内容を取り入れ、その研究者の研究を他の受講者に説明する。全受講者が自身の研究や経験を重ねながらいくつかのトピックで討論する。これにより、各自が研究知識を広げ、研究態度を学び具体的な研究計画が立てられる力を獲得する。課題などのフィードバックは、学習支援システムで回答したりアドバイスする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。 自己や対人関係のあり方については、各時間で言及する。
2	認知の発達 Cognitive Facets	Piaget & Inhelder(1969) : Crain(2011) の6章をもとに認知発達の理論を理解し、討論する。
3	初期の対人関係 Early Relationships	Bowlby(1982) : Crain(2011) の3章をもとに、乳幼児期の愛着理論を理解し、討論する。
4	成熟に関する理論 Maturation	Gesell(1952) : Crain(2011) の2章をもとに、子どもを育てることと成熟の関係を理解し、討論する。
5	発達と教育との関係 Early Education in the Home	Montessori(1949):Crain(2011) の4章をもとに、モンテッソーリ教育をもとに教育との関係を考える。

6	学習理論 Learning Theory	Pavlov(1928), Watson(1936), Skinner(1953) Crain(2011) の8章をもとに人間の行動のメカニズムを考える。
7	道徳性の発達 Moral Development	Kohlberg(1958): Crain(2011) の7章をもとに、道徳性の判断や行動の発達について討論する。
8	社会的学習理論の理解 Social Learning Theory	Bandura(1962):Crain(2011) の9章をもとに、どのように攻撃性や向社会的行動が獲得されるか理解する。
9	記憶、言語、遊びの発達 Social-Historical Theory	Vygotsky(1930): Crain(2011) の10章をもとに、心理学的な道具と行動の関係について学ぶ。言語の役割について考える。
10	精神分析理論と発達 Psychoanalytic Theory	Freud(1910):Crain(2011) の11章をもとに、精神分析理論における発達理論を学ぶ。
11	ライフサイクル The Eight Stage of Life	Erikson(1968):Crain(2011) の12章をもとに、生涯発達の視点から人間の一生を考える。
12	分離と固体化 Separation / Individuation	Mahler(1968) :Crain(2011) の13章をもとに、母親からの分離について考え、討論する。
13	友だち関係と友情 Friendships and Peers	Hartup(1998): プリントをもとに、友情の発達や友だち関係の形成について考える。
14	親密な関係の形成 Close Relationship	Collins & Sroufe(1999): プリントをもとに、人間の性の発達や親密な関係について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

1. プレゼンテーションの準備：必ず上記理論提唱者についてプレゼンができるよう準備する。必要な内容は、a. 理論やアイデア、b. 個人の生き方と研究の関係、c. 各理論が反映された最近の研究紹介、d. 学問の応用について、e. 発達についての個人の考え（キーとなるポイント）。事前に、担当教員にメールで提出しておく。当日の発表の要約（A4 2枚以内）。ただし、昨年と同じ発表方法にせず、今年は新しいスタイルを考える。
2. 担当していない週では、その週のトピックに関する討論に参加できるようにテキストや論文を読んでおく。また、最終的に提出するレポート課題を適宜準備しておく。

【テキスト（教科書）】

Crain,W. (2011). Theories of Development: Concepts and Applications およびプリント。受講者の人数や専門によって選ばれる発達理論は異なる。他の研究者の自伝を活用する可能性はある。

【参考書】

渡辺弥生監修 (2019). まんがでわかる発達心理学 講談社
二宮克美・渡辺弥生（編）(2017)『発達心理学』北大路書房
渡辺弥生 (2019) 『感情の正体』筑摩書房

【成績評価の方法と基準】

平常点（単に出席という意味ではなく、毎回自分の意見を述べることを基準とする）を80%、担当した部分のレジュメ作成とパワーポイントでの発表を20%とする。

【学生の意見等からの気づき】

評価も高く時間外の勉強を動機づけることができたと考えられるが、発表内容の厚みについて個人差が見られた。また、発表者が集団で討論できるようリサーチクエストを見つけれられていない場合があることから、単に調べたことを発表するというのではなく、批判的な視点や発展的な意識をもち、討論できるような水準で発表できるように支援していきたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。毎回機器を授業に間に合うよう準備することを徹底したい。

【その他の重要事項】

シラバスを変更することもあると理解してください。今の所、下記の予定である。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home>

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学

<研究テーマ> 社会性の発達といじめなどの予防教育の展開

<主要研究業績>

(1) 世界の学校予防教育 2013 金子書房

(2) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学
2011 光文社

(3) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店

(4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

(5) 幼児・児童における分配の公正さに関する研究 1992 風間書房、など。

【Outline and objectives】

We will attempt to understand the significance of having a developmental perspective in psychological research. Therefore, we will attempt to understand the systematic flow of developmental psychology research to date. In particular, we will focus on infancy, childhood and adolescence, and emphasize developmental psychology and development of cognition/thinking, self-consciousness, and social competence as the basis necessary for the qualification of school psychologist. Based on this, students will consider research questions related to their future research.

PSY500B6

障害児心理特論

奥田 健次

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間は、対人的なかかわりを通して、人間らしい社会的関係を生み出し、社会でよりよく生きるために調整する力が育てられる。しかし、自閉症スペクトラムなどの障害のある子どもは、適切な対人関係をもつことに大きな問題をかかえることが多い。障害のある子どもをもつ家族に対する支援や指導、学校に対する支援やコンサルテーションなど、当事者と当事者を取り巻く人々に対する包括的な支援について考える。

【到達目標】

障害のある子どもの知的発達、社会性の発達、行動情緒の問題について、実践的な視点から具体的に論じることができる。
アセスメントの方法、実際の支援の方法について、具体的事例を通じて実践的な方法を討議し、いくつかのケース課題のワークショップを通して心理学的援助の方法を検討し、発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

「障害がある」とはどういうことか。逆に「障害がない」とはどういう状態のことをいうのか。これだけでも、大きなテーマであるといえる。しかし、哲学的な考察を深めるような授業ではなく、現実的な課題となっている「専門的支援」について、実践的に役立つ知識と技能を具体的な事例を通して学ぶ。そのために、基本的には講義形式で進められるが、グループワークや発表、討論の機会を設けて、受講者に能動的な学習ができるようはたらきかける。グループワークや発表へのフィードバックは授業中に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第1回	障害の概念と特別な教育ニーズおよび合理的配慮	「障害」とは何か、国際障害分類の定義について説明する。また、特別な教育ニーズについて具体例を挙げながら説明する。「合理的配慮」について具体事例を挙げて検討する。
第2回	知的障害児の発達と心理	知能の定義、知的障害について説明し、教育や発達の支援についてのワークを行う。
第3回	視覚障害・聴覚障害児の発達と心理	視覚障害および聴覚障害について、発達のな特徴と教育方法を説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第4回	肢体不自由・病虚弱児の発達と心理	肢体不自由・病虚弱について、発達のな特徴と教育方法を説明する。また、特別支援や家族支援上の課題について説明する。
第5回	自閉症児の発達と心理	自閉症について、発達のな特徴と教育方法の変遷について説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第6回	発達障害者の青年期・成人期での支援	発達障害者の青年期問題や成人期の課題、就業支援、余暇支援について説明する。

第 7 回	LD・ADHD 児の発達と心理	LD・ADHDについて、発達的な特徴と教育方法を説明する。学校教育上の教育支援や家族支援上の課題について説明する。
第 8 回	特別支援教育とは	特別支援教育について、従来の特殊教育からの変遷や目的・特徴の差について説明する。また、ガイドラインのねらいについて説明する。
第 9 回	実態把握と相談支援	特別支援教育において行われる実態把握と相談支援の具体的方法について説明する。支援システムの構築の実例について発表する。
第 10 回	個別の指導計画と個別の教育支援計画	個別の指導計画と個別の教育支援計画について実際の計画案から説明する。また、問題のある計画の改善についてのワークを行う。
第 11 回	校内委員会と支援体制	校内委員会と支援体制について、機能的な組織の在り方について説明する。また、学校と家庭の連携・協働における課題について説明する。
第 12 回	特別支援教育（児童期の支援事例）	小学校における特別支援教育の支援事例を説明し、仮想事例から支援計画を検討して発表する。
第 13 回	特別支援教育（青年期の支援事例）	中学校における特別支援教育の支援事例を説明する。また、高等学校における特別な教育ニーズのある生徒への支援課題について説明する。
第 14 回	学校コンサルテーション、まとめ	特別支援教育で専門的な支援者に求められる学校コンサルテーションについて説明する。また、これまでの講義のまとめと講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

日常生活上の「障害」について、具体的な実例を考えておく。知的障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由・病虚弱的教育支援方法について調べておく。自閉症についての発達的な特徴について調べておく。学校で求められる合理的配慮の実例を考えておく。文部科学省「特別支援教育」ガイドラインの目次部分を、各自で準備し、調べておく。個別の指導計画と個別の教育支援計画の見本を、教科書や専門サイトなどから、各自で準備し、調べておく。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

奥田健次（編著）教師と学校が変わる学校コンサルテーション。金子書房、2018 年。

【成績評価の方法と基準】

集中講義であるため出席基準（4/5 以上の出席）を満たしていることを前提に、授業参加 40 %、グループ発表 30 %、テーマ毎に実施するミニクイズ 30 %

【学生の意見等からの気づき】

授業改善のための意見を聞かせて下さい。

【学生が準備すべき機器他】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

応用行動分析学、特別支援教育、行動療法

＜研究テーマ＞

自閉症児への応用行動分析学による指導、自閉症児の「心の理論」、特別支援教育と学校コンサルテーション、家族支援とペアレントトレーニング、行動コーチング

＜主要研究業績＞

奥田健次編著（2018）教師と学校が変わる学校コンサルテーション。金子書房。

仁藤二郎・奥田健次（2016）痙攣性発声障害と診断された男性の日常生活における行動アセスメント。行動分析学研究, 31(1), 40-47.
仁藤二郎・奥田健次（2013）嘔吐不安を訴えるひきこもり男性の食事行動への介入：エクスポージャーにおける行動アセスメントと介入の評価。行動分析学研究, 27(2), 80-91.

奥田健次（2012）メリットの法則－行動分析学・実践編。集英社。

奥田健次・小林重雄（2009）自閉症児のための明るい療育相談室－親と教師のための楽しいABA講座。学苑社。

奥田健次（2006）症例研究の方法。河合伊六（監修）、辻下守弘・小林和彦（編）、リハビリテーションのための行動分析学入門（pp.37-49）。医歯薬出版株式会社。

奥田健次（2005）不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果－トークン・エコー法と強化基準変更法を使った登校支援プログラム－。行動分析学研究, 20(1), 2-12.

奥田健次（2001）認知発達と言語行動：「心の理論」研究から。日本行動分析学会（編）、浅野俊夫・山本淳一（編）、ことばと行動：言語の基礎から臨床まで（pp. 189-210）。ブレーン出版。

【Outline and objectives】

Children with disabilities such as Autism Spectrum Disorder (ASD) often have serious problems in human interpersonal relationships. Think about support for people surrounding the parties, such as support for families with children with disabilities, support and consultation to schools, and so on.

PSY500B6

人格心理特論

大森 美香

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人格（パーソナリティ）は、行動にみられる個人差を説明する概念であり、パーソナリティ理解は、教育・産業・臨床など生活のあらゆる場面での個人理解に必要不可欠である。本授業の目的は、以下の2点にある。1）人間の心理・行動の個人差およびそのメカニズムに関するアプローチを理解する、2）パーソナリティ特性と個人の行動、自己形成、また精神的健康の関連について最新の知見に触れ考察する。この目的に到達するため、古典的なパーソナリティ理論に加え、パーソナリティに関する最新の人間科学、社会科学、自然科学のアプローチについても学習する。授業は、学生によるプレゼンテーションの形式を中心に講義および討論を行いながら進める予定である。パーソナリティについてさまざまな角度からアプローチしながら、人間行動に関する関心、個人の尊厳、現代において個人がよりよく生きるとはどのようなことかについての考察を深めていただきたい。

【到達目標】

授業の主要な到達目標は、以下の2点である。1）代表的なパーソナリティ理論およびアプローチを理解すること、2）パーソナリティや人間行動に関する広い視野を獲得し考察すること、3）授業を通して、プレゼンテーションや討論において、自分の考えをわかりやすく伝える技術を獲得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学生による発表と討論を中心に、講義を交えながら、授業を進める。発表の課題、期末レポートのフィードバックは、授業中ないし授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要説明；パーソナリティとパーソナリティ理論の概観
第2回	パーソナリティ心理学：人間科学、自然科学、社会科学的アプローチ	パーソナリティについての、心理生物社会的アプローチについて理解する
第3回	パーソナリティ理論(1)：心理療法への応用	パーソナリティの3大理論の心理療法にどのように応用されているのかレビューする。
第4回	パーソナリティ理論(2)：類型論と特性論	類型論と特性論の差異；パーソナリティ理論の歴史的展開
第5回	パーソナリティを「測る」	心理学的測定法、心理検査法（質問紙法、投影法）
第6回	パーソナリティの物語的把握	ナラティブアプローチによるパーソナリティ理解
第7回	生命現象としてのパーソナリティ	パーソナリティに関する生物学的規定因
第8回	パーソナリティの発達的变化	パーソナリティの発達的变化に関する最新の知見をレビューする
第9回	パーソナリティの相互作用論	パーソナリティに関する遺伝と環境の要因の相互作用

第10回	認知・感情・動機とパーソナリティ(1)：認知・感情とパーソナリティ	感情および認知的特徴に及ぼすパーソナリティの影響
第11回	認知・感情・動機とパーソナリティ(2)：動機とパーソナリティ	動機づけに及ぼすパーソナリティの影響
第12回	文化・社会とパーソナリティ	社会文化的要因がパーソナリティに及ぼす影響
第13回	さまざまな生活領域（家庭、学校、職場）や健康とパーソナリティ	各受講生の研究関心領域とパーソナリティの関連についての学生の発表
第14回	まとめ	進度調整および統括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業該当箇所のテキストの講読、課題への対応、発表準備。

【テキスト（教科書）】

『パーソナリティ心理学』 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也〔著〕有斐閣

【参考書】

『ヒルガードの心理学』（金剛出版（16版が最新ですが、図書館などで入手可能な版で結構です）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%、発表 40%、期末レポート 30%

【学生の意見等からの気づき】

これまでの授業で、毎回の授業で扱う範囲が多いとの意見がありました。大学院では、既存の知識や理論のインプットにとどまらず、批判的にとらえ考察を深化することが求められ、そのため授業の事前準備は必須と考えています。大学院での少人数での演習形式の授業では、知識理解はもちろんのこと、討論や発表スキルを確実に高めることが期待できます。

【学生が準備すべき機器他】

発表時の配布資料

【その他の重要事項】

*受講においては、学部の概論レベルの心理学の授業を受講済みであることを前提としています。
*授業計画は、受講者数、バックグラウンド、理解度により調整します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>健康心理学
<研究テーマ>健康行動、ボディイメージ、食行動
<主要研究業績>

Rodgers, R. F., Lombardo, C., Cerolini, S., Franko, D. L., Omori, M., Fuller-Tyszkiewicz, M., Linardon, J., Courtet, P., & Guillaume, S. (2020 jun). The Impact of the COVID-19 Pandemic on Eating Disorder Risk and Symptoms. *International Journal of Eating Disorders*. <https://doi.org/10.1002/eat.23318>

Takamura, A., Yamazaki, Y., & Omori, M. (2019). Developmental changes in fat talk to avoid peer rejection in Japanese girls and young women. *Health Psychology Open*. <https://doi.org/10.1177/2055102919854170>

Omori, M., Yamazaki, Y., Aizawa, N., de Zoysa, P. (2016). Thin-ideal internalization and body dissatisfaction in Sri Lankan adolescents. *Journal of Health Psychology*. Online First.

Omori, M., Yamawaki, N., & McKyer, E.L. (2015). A Comparative study of smoking in American and Japanese adolescents: Self, social influences, and health beliefs. *International Journal of Adolescent Mental Health and Addiction*. 13, 345-360.

【Outline and objectives】

Personality pertains to individual difference in human behaviors. In order to understand individuals in academic, industrial, and clinical setting, it is inevitable to understand personality. Objectives of this course are twofold: 1) to understand fundamental theories on individual differences underlying psychological processes and behaviors; 2) to learn and discuss most updated findings on associations between personality and self perception, behaviors, and mental health. In order to accomplish these objectives, this course covers recent theories and findings of personality from biopsychosocial perspectives as well as traditional theories. Classroom activities involves both students' presentations and lectures.

PSY500B6

言語心理特論

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

読解力とは何か？それを伸ばすために何をしたらよいのか？について、心理学的な観点から検討することが本授業のテーマである。具体的には、まず、日本やそれ以外の国で行われている指導法について、模擬授業を通して体感する。次に、文章読解のプロセスやそれに影響する要因について学習をする。それらをもとに読解力を高めるためにどのようにしたらよいかを考える。

【到達目標】

- ①日本とそれ以外の国で行われている読解力向上の指導法を理解し、説明できる。
- ②文章読解に影響する要因に関する文献を探することができる。
- ③文章読解に影響する要因について理解し、説明できる。
- ④文章読解のプロセスを理解し、説明できる。
- ⑤読解力向上のための指導法を提案する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の前半は日本と UK で使用されている学習指導方法にそって、模擬授業を行う。その後、読解のプロセスや読解力の定義、読解力に影響を与える要因に関する文献を講読し、発表を行う。授業の最終段階では、各自が考える読解力の定義とそれを向上させるための指導方法を発表する。また、提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。グループ分け。
第 2 回	日本式模擬授業 1	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第 3 回	日本式模擬授業 2	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第 4 回	UK 式模擬授業 1	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第 5 回	UK 式模擬授業 2	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第 6 回	読解力を伸ばすための指導法の日英比較の発表	模擬授業を通して実感した UK と日本の目指している読解力の相違点と共通点を比較検討した結果を発表する。
第 7 回	読解力に影響する要因に関して考える 1：読解力の発達の様相	読み書きの発達の様相に関する論文を全員が読み、担当者が説明する。

第 8 回	読解力に影響する要因に関して考える 2：語彙量、ワーキングメモリ	読解力に影響を与える要因として語彙量とワーキングメモリを取り上げる。具体的には、それらの要因がどのように読解力に影響を与えるかの概略を担当者が説明する。
第 9 回	読解力に影響する要因に関して考える 3：認知・思考の発達	読解力に影響を与える要因として認知・思考力を取り上げる。具体的には、文章理解時にどのような推論をしているのか、発達的な観点に関して概略を担当者が説明する。
第 10 回	読解力に影響する要因に関して考える 4：文書の理解	読解力に影響を与える要因として非連続型テキストである文書の理解を取り上げる。具体的には、文書の理解と文章の理解の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第 11 回	読解力に影響する要因に関して考える 5：PISA の読解力	PISA が提案している読解力と、日本の教育で目指している読解力の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第 12 回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方についての発表 1	読解力の定義を明確にし、それを伸ばすための方法を発表する。その際、対象はだれか、具体的な方法を発表する。
第 13 回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方についての発表 2	読解力の定義を明確にし、それを伸ばすための方法を発表する。その際、対象はだれか、具体的な方法を発表する。
第 14 回	講評会	12 回と 13 回で行った発表に関して全員で講評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

第 1 回～第 4 回 模擬授業を行うための準備を行う。

第 5 回 指導法の日英比較発表の準備を行う。

第 6 回～第 10 回 発表者は論文の発表準備を行う。それ以外の院生は、発表予定の論文を読み込んでくる。

第 11 回・第 12 回 次週の発表の準備を行う。

第 13 回 授業での発表や議論を振り返り、講評を作成する。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しない。毎授業時にプリントを配付する。また、課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】

福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門 培風館

大村彰道（監修）(2001). 文章理解の心理学 北大路書房

【成績評価の方法と基準】

発表 40%, 発表への質問・コメント 30%, 討論への参加 30%などを総合的に評価する。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

2020 年度はオンライン授業が行われ、授業アンケートは実施されませんでした。そのため、2019 年度の授業のアンケート結果を紹介します。

春の入学ガイダンス時に「この授業は『考える授業』です。その対象は『読解力』です」と紹介しました。コメントをみると「たくさん『考える』ことがあり、とても楽しかった・・・」考えたのですね。「有意義だった」活発な意見交換などで「モチベーションを高く保てた」よかった。

修士課程の皆さんはすでにいろいろなスキルを持っているでしょう。それを使ってももらいました。そうすると・・・、対象を「読解力」ではなく、自分のテーマに置き換えたら・・・？ そう、修論道筋が見えるのでは？ という話を最後にしたら、授業中にはそこまで理解が至らなかった、というコメントをもらいました。ということは、授業の最初にこのメタ目的を伝えた方がいいのかな？ うーん、悩みどころです。自力で気づいてもらおうと嬉しいけど、学期の途中くらいだといいいかな？ 考え中です。

【その他の重要事項】

グループ分けや発表論文の割り当てをするので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

なお、心理学専攻の大学院生は、この授業の履修単位を学会連合格「学校心理士/補」の受験資格として申請できます（領域：「3. 発達心理学の領域」）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学

<研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割

<主要研究業績>

①福田由紀 (2019). 読みと感情 日本読書学会 (編) 読書教育の未来 Pp.144-154.

②福田由紀・穂原遥・菊池理紗 (20018). 言語心理学で何を学べるか？一言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.

③福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

What is the text comprehension? What should I do to lengthen it? It is the theme of this class to examine from a psychological point of view. Students will be expected to perform a trial lesson and make a presentation about methods to promote text comprehension.

PSY500B6

精神保健特論

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 学校精神保健に必要なそして基本的な基礎知識を習得します。
2. 学校現場で生じる具体的なケースを通じたメンタルな問題の見分け方やアプローチの仕方を学びます。精神科医として 30 年以上活動している臨床現場での経験をもとに、学生が知っておくべき臨床の知識、対処法や予防法を取り上げます。

【到達目標】

1. ライフサイクルと学校精神保健の関係を説明し、学校精神保健と関連する法律や関係機関との連携機関の仕方を具体的に述べるができるようにすること。
2. 臨床場面でもっとも使用頻度の高い DSM-5 を各障害について調べて、その診断基準を使用し、運用方法について具体例を通してながら実際に示すことができるようにすること。
3. 学校心理士の実践的な活用に向けた精神保健学の知識や技能を習得し、具体例に即して対策や解決策を提示できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学校保健学や精神保健学での基本問題を、具体的な症例などを交えながら、障がいの理解と同時に関連機関との連携の仕方を学びます。特に学童期に顕在化しやすい不安障害、パニック障害、強迫障害、摂食障害、解離性障害、そして青年期後期以降の統合失調症、気分（うつ病）障害、人格障害、ストレス関連障害などをライフサイクルの観点から取り上げます。自殺、不登校、いじめ、児童虐待、引きこもりなどのトピックスについても理解を深め、具体例を通してながら実際の運用に触れながら学びます。その過程で学校精神保健の現場でのケース、実際の場面での困難事例など、実践に即した対策や解決策を個人、あるいはグループで考えていきます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、生じた疑問や問題を討論します。発表後には、振り返りレポートを提出してもらい、疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーションと学校精神保健の基礎	授業の目的と方法の確認します。精神保健学の歴史・基礎知識・現状や問題点を、担当者が説明します。
第 2 回	学校教育の基盤としての精神保健学的なアセスメントと援助について	心理面・行動面の問題で学校生活の困難をもつ児童生徒が、良質のアセスメントの仕方と援助の方法の概要を、担当者が説明します。
第 3 回	精神保健学の症候とその見かた—表情・行動・思考—	実際にこころと行動の問題がどのように分類・整理されるかを DSM-5 を用いながら表情・行動・思考などの面を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 4 回	精神保健学の症候とその見かた—感情・記憶・意識—	実際にこころと行動の問題がどのように分類・整理されるかを DSM-5 を用いながら感情・記憶・意識などの面を分担と決めて発表し、全員で検討します。

第 5 回	学校における児童生徒の問題—家庭内暴力・虐待—	学校現場で児童生徒の問題としてよくみられる家庭内暴力・虐待の問題について、分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 6 回	学校における児童生徒の問題—不登校、いじめ、非行—	学校現場で児童生徒の問題としてよくみられる不登校、いじめ、非行の問題について、分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 7 回	学校における精神保健の実際の問題点—発達障害・注意欠陥障害—	DSM-5 のテキストとケースを基に、学校でみられる発達障害・注意欠陥障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 8 回	学校における精神保健の実際の問題点—不安障害・適応障害—	DSM-5 のテキストとケースを基に、学校でよくみられる不安障害・身体表現性障害・適応障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 9 回	学校における精神保健の実際の問題点—素行障害・人格障害—	DSM-5 のテキストとケースを基に、学校でみられる素行症や人格障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 10 回	学校における精神保健の実際の問題点—統合失調症・気分障害—	DSM-5 のテキストとケースを基に、学校でみられる統合失調症・気分障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 11 回	多様な臨床心理学的アプローチ精神分析的（力動的）アプローチ、来談者中心的（パーソンセンタード）アプローチなど	主な心理療法の枠組みをきちんと理解し、児童生徒の学校生活での困難の要因の理解と援助の枠組みを検討します。今回の対象は精神分析的（力動的）アプローチ、来談者中心的（パーソンセンタード）アプローチなどであり、グループ発表を行ない、全員で検討します。
第 12 回	多様な臨床心理学的アプローチ認知行動論的アプローチ、システム論的アプローチ、マインドフルネスなど	前回に引き続き、主な心理療法の枠組みをきちんと理解し、児童生徒の学校生活での困難の要因の理解と援助の枠組みを検討します。今回の対象は認知行動論的アプローチ、システム論的アプローチ、マインドフルネスなどであり、グループ発表を行ない、全員で検討します。
第 13 回	学校・家庭・地域における精神保健活動の連携—学校・家庭・地域における精神保健活動の実際・連携の仕方	学校・家庭・地域における精神保健活動の実際・連携の仕方を担当者から説明し、その際に生じる問題点などを検討します。
第 14 回	実際の学校現場のケースを基に問題点のアセスメント・症状のとらえ方・専門機関の連携の仕方、まとめ	実際の学校現場のケースを基に問題点のアセスメント・症状のとらえ方・専門機関の連携の仕方をグループを決めて発表し、全体で検討します。授業を振り返ってのまとめの議論をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

1. 精神保健についての基礎知識、今後の学びたいことについてレポート課題を実施し、それを参考に今後の授業内容を決めます。
2. 実際の症例問題で DSM-V に関するレポート課題を行ないます。
- 3～7. 授業内容に関する所見を実際の症例を学習しながら要点をレポートとしてまとめます。
- 8～11. 授業内容に関する実際の症例から診断やケア上の問題点をレポート提出します。
- 12～13. 授業内容に関する臨床心理学的アプローチをグループ学習し授業内で発表とともにレポートにまとめます。
14. レポート課題の際には、問題点のアセスメント・症状のとらえ方・専門機関の連携の仕方を必ず自分の学習した視点で記述し、提出します。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しません。毎授業時に適宜プリントを配付します。

【参考書】

米国精神医学会（編） 日本精神神経学会（監修）（2014 年）. DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル，医学書院，東京。
高橋 三郎（著）（2015 年）. DSM-V ケースファイル，医学書院，東京。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %，個人及び集団課題発表と報告および発表への質問やコメントなど討論への参加姿勢 30 %，期末レポート（内容評価）30 %などを総合的に評価します。特に，討論への積極的な参加姿勢を重視します。

【学生の意見等からの気づき】

新型コロナ肺炎流行のため，2020 年度は実施しませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。必要に応じパワーポイントを使用します。

【その他の重要事項】

【重要】新型コロナ肺炎に関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。皆さんの希望も調査したいと思いますので，初回の授業には必ず出席して下さい。

【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は，厚生労働省精神保健指定医，日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として 30 年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし，この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 精神生理学，精神保健学

<研究テーマ> 眠気，睡眠，うつ，ストレス

<主要研究業績>

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメデイスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社，東京，p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社，東京，p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社，東京，p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療，11，525-530.

【Outline and objectives】

1. We will learn the basic knowledge necessary for school mental health.
2. We will learn how to identify mental problems and how to approach through concrete cases occurring at the school site.

PSY500B6

学校カウンセリング演習

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「学校」における生徒理解と対応としてのカウンセリングのあり方について理解するとともに実際に実施できる力量を獲得する。さらに，学校心理士の資格に必要な学校カウンセリング・コンサルテーション基礎実習を履修する。具体的には，かかわりづくりに関するグループでの実習や，基本的な傾聴技法を身につけるほか，カウンセリングのプロセスを理解し，コンサルテーション，コーディネーションを含む幅広い活動能力を学ぶ。

【到達目標】

- (1) 学校内で生じる児童生徒の問題や原因について理解する。
- (2) 学校心理学や学校にかかわる基礎知識を獲得する。
- (3) 個別、小集団、スクールワイドという3段階に対応する知識と対応方法を学ぶ。
- (4) こうした知識や理解をもとに具体的な実践を行い，実際のフィールドに出られるコンピテンスを獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

今年度は，集中授業とする。学校現場で生じる問題は年代とともに変化しているが，さまざまである。それらの現状を理解するとともに，なぜそのような問題が生じるのか背景を理解する。そのうえで，どういった対応が求められているか，また，具体的にどのように対応すればよいのか，について実習を通して実践的な能力を獲得する。アクティブラーニングを基本とする。授業で出した課題のフィードバックは学習支援システムなどで行ったり，授業内でコメントする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	カウンセリングに必要な自己分析など基本的な実習	カウンセリングの難しさ自己理解のための実習する。
3	カウンセリングに必要な態度および技法の理解	生徒とラポールを形成するためにどのようにかかわっていけばよいのか、「傾聴」をキーワードに理解する。
4	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習 1	傾聴のための技法の理解 ペアワーク 1
5	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習 2	傾聴のための技法の理解 ペアワーク 2
6	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習 3	実際の場面を想定したロールプレイング（グループワーク）
7	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの理解	構成的グループエンカウンター、ストレスマネジメント、ソーシャルスキルトレーニング、などの理解
8	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別的理解と実習 1—つなぐ—	構成的グループエンカウンターの理論と実際 1

- | | | |
|----|--|--|
| 9 | かわりづくりに必要
なサイコエドケ
ションの個別の理解と
実習2-つなぐ- | 構成的グループエンカウ
ンターの理論と実践2 |
| 10 | かわりづくりに必要
なサイコエドケ
ションの個別の理解と
実習3-知る- | ストレスマネジメントの理
論と実践 |
| 11 | かわりづくりに必要
なサイコエドケ
ションの個別の理解と
実習-獲得する- | ソーシャルスキルトレー
ニングの理論と実践1 |
| 12 | かわりづくりに必要
なサイコエドケ
ションの個別の理解と
実習1-獲得する- | ソーシャルスキルトレー
ニングの理論と実践2
指導案の作成 |
| 13 | かわりづくりに必要
なサイコエドケ
ションの個別の理解と
実習2-獲得する- | ソーシャルスキルトレー
ニングの理論と実践3
実際の応用 |
| 14 | 学校危機予防の現状と
対応について考える
コンサルテーションと
コーディネーションの
実習1 | 自然災害、自殺、いじめ、犯罪な
ど学校現場で生じる
学校危機予防対策について考え
る。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
実習が多いため、実習に取り組むことができる予備知識やポイント
を事前におさえておく必要がある。実習の目標、必要なもの、どのよ
うな動きが求められるか等予習復習が求められる。範囲が広いこと
から、各自、カウンセリングの基本的な知識やグループワーク、ソー
シャルスキルトレーニング、構成的グループエンカウンター、ピア
サポートなどの支援方法について学習しておく。集中授業であるた
め、文献を事前に読んでおく。

【テキスト（教科書）】

「必携 生徒指導と教育相談」渡辺弥生・西山久子 編著 北樹出版

【参考書】

「子どもの感情表現ワークブック」 明石書店
「小学生のためのソーシャルスキルトレーニング」 明治図書
「中学生・高校生のためのソーシャルスキルトレーニング」 明治図書

【成績評価の方法と基準】

平常点（単に出席という意味ではなく、積極的な授業態度や実習内
でのプレゼンテーションを基準とする）100%。特にトレーニング
要素が強いので、出席重視。

【学生の意見等からの気づき】

各自グループカウンセリングを学校で実施する授業案をつくり、実際
に模擬授業を実施し、基本的なスキルやテクニックを獲得している
が、さらに社会貢献ができる実践力を身につけるよう改善していく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

具体的な実習資料は、適宜配布する。フィールドに出る機会に恵ま
れれば学外に行く可能性あり。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home> <専門領域> 発達
心理学、発達臨床心理学、学校心理学

<研究テーマ> 社会性の発達といじめなどの予防教育の展開

<主要研究業績>

(1) 世界の学校予防教育 2013 金子書房

(2) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学
2011 光文社

(3) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店

(4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

(5) 感情の正体 2019 筑摩書房

【Outline and objectives】

We will learn about student understanding in "school" and
counseling as a response as well as acquire the capabilities
to put learned skills into actual practice. In addition,
the fundamental school counseling and consultation practical
training necessary for the qualification of school psychologist
will be implemented. Specifically, in addition to acquiring
practical training in groups on the creation of relationships,
students will study basic learning techniques, understand
the counseling process, learn a wide range of activity ability
including consultation and coordination, etc.

PSY500B6

発達行動特論

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会の問題や個人の悩みは、よくよく考えてみると何らかの行動の問題であることが多いものです。心理学は行動の科学として“行動の予測と制御”に関わる法則を見いだしてきました。こうした法則をうまく適用すれば、社会の問題を解決し、個人の悩みを解消することも可能です。この授業では、社会的・個人的に重要な課題を行動問題としてとらえ、個人攻撃の罠に陥らず、環境を整備しながら問題を解決していく行動分析学の考え方を学びます。

【到達目標】

行動分析学の基礎的な概念を理解し、人や動物の発達や認知に関する様々な現象を、強化や弱化的随伴性を分析することで解釈できるように学びます。基礎的な概念を説明できるようになり、それらの概念を応用して、社会や学校、家庭における行動問題の解決方法を立案できるようになること、そうした解決方法を基礎的な概念を使ったコミュニケーションを介して討議し、協調すること、さらに、課題分析やABC分析、行動の観察・記録法を実施できるようになることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週、教科書の指定された章を読んで、関連する課題を行い、それについて授業中に討論したり、演習します。課題へのフィードバックは授業中の討論を介して行います。

【重要】新型コロナ感染拡大防止のために、この授業は感染状況に応じてオンラインと対面を適宜組み合わせで行います。学習支援システムのこの授業科目のトップページで、対応状況やそれに伴うシラバスからの変更点について案内しますのでご確認ください。学習目標や参考図書などの教材は下記のURLを参照してください。
<https://docs.google.com/document/d/1XqZ7yScRRs24S2HJX8g1DLKW7CDnLTwm6FvUotXHZT8/edit?usp=sharing>

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	行動分析学の概説、教科書の紹介、プロジェクトについての話し合いなど。
2	好子、嫌子とは	好子、嫌子、行動随伴性の定義や具体例について学ぶ（教科書、第1-2章）：行動の定義、死人テスト、医学モデル、説明のレベル、循環論。
3	強化と弱化	基本的な4つの随伴性について学ぶ（教科書 3-5章）：PTSDや汚言症の治療における強化、社会的悪循環、科学における節約性、自閉症の療育における代替行動の分化強化、社会的妥当性、学級経営のための集団随伴性、反応コストとタイムアウト。

4	消去と復帰、分化強化と分化弱化	消去と復帰、分化強化と分化弱化について学ぶ（教科書 6-7章）：精神科病棟での問題行動修正、夜泣きの消去、バーストと自発的回復、自閉症児の自己刺激行動、消去と忘却の区別、スポーツのコーチング、課題分析、カウンセラーによる無意識の条件づけ、創造性。
5	シェイピング、強化スケジュール	シェイピングと強化スケジュールについて学ぶ（教科書 8-9章）：失語症の行動療法、部分強化と連続強化、累積記録、FI、FR、VI、VR、消去抵抗、強化スケジュールによって生じる反応パターン。
6	生得性好子、生得性嫌子、特殊な確立操作、習得性好子、習得性嫌子	行動分析学における「動機づけ」について学ぶ（教科書 10-12章）：遮断化と飽和化、確立操作、行動内在的随伴性と付加的随伴性、プリマックの原理、多飲症、攻撃行動と攻撃性好子、依存性好子、妄想を減らす行動療法、価値変容の原理、トークンエコノミーシステム。
7	刺激弁別、刺激般化、概念形成、模倣	弁別学習や概念学習、模倣による学習について学ぶ（教科書 13-15章）：弁別刺激、概念の行動的定義、読字指導、刺激性制御、学習障害、機械利用型指導法、直感、プロンプトとフェイディング、遅延誘導手続き、リダクション、模倣と般化模倣。
8	阻止による強化、阻止による弱化、並立随伴性	回避行動、選択行動について学ぶ（教科書 16-18章）：姿勢の矯正プログラム、自閉症における視線合わせ、警告刺激、ADHD、非両立行動の分化強化、対応法則。
9	刺激反応連鎖と反応率随伴性、レスポナント条件づけ	複雑な行動の学習、レスポナント条件づけについて学ぶ（教科書 19-20章）：逆行連鎖化、順行連鎖化、総課題提示法、トイレトレーニング、自立訓練、早食いの抑制、恐怖症とその治療、高次条件づけ、系統的脱感作法。
10	言語行動	言語行動論について学ぶ（教科書 21章）：マンド、タクト、イントラバーバル、エコリーク、テクスチャル、書き取り、聞き取り、書き写し、オートクリティック、私的刺激。
11	強化モドキ、ルール支配行動	直接効果的随伴性、間接効果的随伴性について学ぶ（教科書 22-23章）：拒食症の治療、随伴性形成行動、ルール支配行動、コミュニティ心理学、イメージトレーニング、パフォーマンス・マネジメント、自己管理。
12	ベイ・フォー・パフォーマンス、道徳と法による行動の制御	ルール支配行動によるマネジメントについて学ぶ（教科書 24-25章）：作文指導、就労支援プログラム、銀行におけるベイ・フォー・パフォーマンス、法律と道徳（倫理）、宗教、性同一性障害。
13	行動の維持、行動の転移	学習した行動を維持させ、転移させる要因について学ぶ（教科書 26-27章）：行動の罠、般化を促進させる要因、自己教示。

14 研究法

行動分析学における研究法、特にシングルケースデザインについて学ぶ（教科書 28 章）：社会的妥当性、観察法、観察の信頼性、反転法、多層ベースライン法、基準変化法、条件交替法、内的妥当性、外的妥当性。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
- 毎回、次の週の授業で討論する具体的なテーマに関する予習課題を提示するので、受講生は関連する教科書の章を読み、予習課題に取り組み、討論の準備をすること。
- 本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均 3 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『行動分析学入門』（杉山・島宗・佐藤・マロット・マロット、産業図書、1998）

【参考書】

『ワードマップ：応用行動分析学』（島宗、2019）他。適宜、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加点 50%、課題点（最終レポート含む）50%で成績を評価します。
- 授業を欠席したときには授業内課題を補完するレポートを書いて提出してください。学期内 6 回まではこのレポートの得点で授業内の課題得点を補完できるものとします。授業参加点は補填されません。

【学生の意見等からの気づき】

（2019 年度の授業改善アンケートより）*2020 年度は授業改善アンケートを実施していないので過年度の気づきを掲載します。

4 人中 2 人が回答してくれました（50%）。そのうち 2 人が「この授業を履修してよかった」と回答してくれました（100%）。

大学院に入る前の行動分析学の習得水準がばらばらなところにつきも苦労する授業ですが、みなさんそれぞれよく考えて課題に取り組んでくれました。面白い議論をたくさん楽しめました。

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to master basic principles, procedures, and research methods pertaining to applying behavior analysis in schools or in other educational or therapeutic settings. Focus will be placed on knowledge and skills in applying basic concepts of learning to interpret behavioral phenomena in real-world educational or societal settings.

PSY500B6

生徒指導特論

小澤 真

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生活指導、教育相談、キャリア教育、発達障害への対応など、生徒指導に関わる様々な局面で、それらが有効に機能するために教師に求められる役割とは何かについて考察する。あわせて、そうした役割を果たしていくための教師自身の自己理解、自己成長についても論及する。

【到達目標】

- ①生徒指導の意義と役割について基本的な概念を説明できること。
- ②教育相談やキャリア教育、生活指導等の活動を通じて果たすべき教師の役割とその方策について理解し、独自の考えを具体的に述べられること。
- ③生徒理解の方法について理解を深め、自分なりの工夫やアイデアを提案できること。
- ④青年の自己の確立とは何かについて、教育相談やキャリア教育、生活指導との関連で記述するとともに、自己理解や自己成長にも応用できること。
- ⑤広汎性発達障害、ADHD 等の発達障害についてその概要を説明し、その対応策を案出できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

生徒指導の意義を理解し、教師の役割と効果的な方策を学習することが本科目の主たる目的である。各回のテーマについての理論的な概説や事例の提供を小澤による講義、または課題についての発表により行った後、全員で討論することにより、生徒指導に関わるさまざまな場面において、その本質を踏まえて、教師としていかにして効果的に対応するかを検討し、理解を深める。その際には、心理的な動きを中心とした生徒の内面の理解ばかりでなく、受講院生自身の教師としての自己理解を深めることも大切である。また折に触れて教師と生徒の効果的なコミュニケーションについて交流分析の視点からの理論的な検討も加える。これにより、生徒指導のための具体的な方法を指導者として考える力が養われるとともに、受講院生の自己成長がはかられることが期待される。

・授業形式：対面授業を予定している。ただし、新型コロナウイルスの感染症の拡大状況によってはオンライン授業（リアルタイム配信型）に移行する。

・フィードバック方法：各回の授業の終わりにその回の発表、討議に対して講評や解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション／生徒指導とは	授業の目的と方法の確認。生徒指導の概念、意義と方法についての概説を担当者が行う。
2	生徒指導の体制と諸問題	生徒指導の学校分掌上の位置づけ、学校内外との連携、およびそこで生じる諸問題について担当者が説明し、全員で討論する。
3	生徒理解と生徒指導	青年期の発達課題の理解を踏まえて、生徒指導における生徒理解の意義について担当者が説明する。

4	生徒指導における教師と生徒とのコミュニケーション	前回の内容をさらに展開し、生徒とのコミュニケーション把握および改善するための方法、教師の自己理解と成長について担当者が説明する。
5	教育相談の意義	他の領域の臨床心理学的援助との異同を踏まえながら、学校教育相談の意義と特質について担当者が説明する。
6	教育相談の体制と構造	教育相談の学校分掌上の位置づけ、ハード、ソフト両面の構造、校外諸機関との連携等について担当者が説明する。
7	教育相談の具体的な展開 (1) 社会的ひきこもりの理解と対応	担当者が社会的ひきこもりについての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
8	教育相談の具体的な展開 (2) 反社会的問題への対応	担当者が反社会的問題についての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
9	教育相談の具体的な展開 (3) 心身症の理解と対応	担当者が心身症についての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
10	生徒の心のケアと学校の役割	学校内外で緊急事態が発生した際の生徒の心のケアについて、担当者が具体的な事例を提示し、教師の役割について全員で話し合う。
11	発達障害の基本理解	広汎性発達障害、ADHD 等の発達障害について発表を行い、担当者が説明する。
12	発達障害への対応	広汎性発達障害、ADHD 等の発達障害を持つ生徒に対する教師としての対応について全員で話し合う。
13	キャリア教育の意義と内容／具体的な展開	青年期の発達課題の理解を踏まえて、キャリア教育の具体的な方法を発表し、全員で討論する。
14	まとめ／生徒指導とは	これまでの学習を踏まえて、生徒指導の意義や教師の役割について全員で討論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

第 1 回 教育基本法、学習指導要領を調べ、生徒指導の位置づけについてレポートする。

第 2 回 自らが生徒として生徒指導を受けた体験をもとに、そこから生じる諸問題についてレポートする。

第 3 回 エリクソンの発達課題を中心に、青年期の発達課題についてレポートする。

第 4 回 自らが陥りやすい、適応的でないコミュニケーションパターンを振り返りレポートする。

第 5 回 他の領域の臨床心理学的援助と学校教育相談との異同についてレポートする。

第 6 回 各自が学校内の相談室の理想的な構造を考え、レポートする。

第 7 回 社会的ひきこもりの問題に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。

第 8 回 生徒の反社会的問題に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。

第 9 回 生徒の心身症に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。

第 10 回 PTSD についてレポートする。

第 11 回 発達障害についてレポートする。

第 12 回 発達障害に対する対応例についてレポートする。

第 13 回 キャリア教育の具体例をレポートする。

第 14 回 なし

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。授業で使用する文献・資料はその都度配布する。

【参考書】

佐々木雄二・笠井仁（編）（2010）. 図で理解する生徒指導・教育相談 福村出版.

稲垣應顕・犬塚文雄（編）（2004）. わかりやすい生徒指導論改訂版 文化書房博文社.

石隈利紀（1999）. 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房

【成績評価の方法と基準】

討論参加 20 % 発表 40 % 期末レポート 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の積極的な参加によってディスカッションが活発になされ、お互いにとって良い刺激となとなっている。その状況をさらに促進するため、それぞれの受講生の研究テーマを生かせるような授業展開を心がけた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>臨床心理学

<研究テーマ>交流分析理論の実証的な研究

<主要研究業績>

*小澤 真（2010）. 対人関係にアプローチする—交流分析— 佐々木雄二・笠井仁（編） 図で理解する生徒指導・教育相談 第 15 章. 福村出版.

*小澤 真（2000）. 生徒理解のための交流分析の活用—高校生の学校ストレス認知とエゴグラム— 交流分析研究,25(2),117-123.

*小澤 真（2000）. 学校も家もつまらない—不適応の心理— 古川聡（編） 教職に活かす教育心理—子どもと学校の今— 第 12 章. 福村出版.

*小澤 真・西森優実子（2016）交流分析と自律訓練法の効果的な利用法を探る. 交流分析研究, Vol.41(1), Pp.11~20.

【Outline and objectives】

In this class, we consider the role of teachers to work effectively in the various aspects involved in student guidance for life coaching, counseling, career education, developmental disabilities, or else. On the other hand, to fulfill such a role, we mention on teachers' self-understanding and self-growth.

PSY500B6

言語心理演習

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度は、「読む・書く」といった言語行動に明示的におよび、暗示的に影響を与えている「自己」を中心に取り上げる。例えば「昨日、新宿に行った」と書かれた日記の文章は「私」が新宿に行ったことを暗示している。また、文章を読む際には、自分の体験をうまく利用することによりコストを低減できる。このような「自己」の影響を検討する。

【到達目標】

本授業の到達目標は、以下の通りである。自ら問題発見をし、それを仮説に定義し直し、発表できるようにする。

- ①言語活動に関わる自己の影響に関する今までの知見を学ぶ。
- ②知見に基づき、「読む・書く」といった言語行動における自己について、自ら仮説を設定する。
- ③自らの仮説を実証的に検討する研究計画を立てる。
- ④研究計画について発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業の目的は、「読む・書く」といった言語活動に影響をあたえる「自己」の心理的実在を自ら実証することである。そのために、授業の前半では目的に関連した先行研究を精読し、発表をする。次に、実証できる仮説を設定し、実際に研究を行う。その際、実証研究のためのスキルを確認し、よりよい方法を模索し、実行する。その結果に関して、効果的なプレゼンテーションを行う。授業は受講生による発表で主に進めていく。それを受けて全員でディスカッションを行う。また、提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	読み・書きに対する自己の影響に関する文献の説明
第2回	読みに対する自己の影響の発表1	読みに対する自己の影響の発表と討論1
第3回	読みに対する自己の影響の発表2	読みに対する自己の影響の発表と討論2
第4回	書きに対する自己の影響の発表1	書きに対する自己の影響の発表と討論1
第5回	書きに対する自己の影響の発表2	書きに対する自己の影響の発表と討論2
第6回	実験・調査の注意点の確認	言葉を扱う研究実施における注意点の確認をする
第7回	実験・調査の立案	実験・調査の素案に関する討論
第8回	研究計画の発表	実施計画の発表と討論
第9回	研究計画の修正発表	修正した実施計画の発表と討論
第10回	ポスター発表の仕方	自分の実験・調査の効果的なポスター発表と討論
第11回	口頭発表の仕方	自分の実験・調査の効果的な口頭発表と討論
第12回	読み書きに対する自己の影響の発表1	読み書きに対する自己の影響の発表と討論1
第13回	読み書きに対する自己の影響の発表2	読み書きに対する自己の影響の発表と討論2
第14回	講評会	発表に対する全員で講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

第1回～第4回 次週の発表の準備

第6回 先行研究における様々な方法の収集

第7回～第12回 次週の発表の準備

第13回 講評の準備

【テキスト（教科書）】

特になし。適時、周知する。

【参考書】

福田由紀 (2012). 言語心理学入門 培風館

郡司隆男・坂本勉 (1999). 言語学の方法 岩波書店

【成績評価の方法と基準】

発表 40%, 発表への質問・コメント 30%, 討論への参加 30%などを総合的に評価する。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度は開講されませんでした。そのため、以前のアンケートからの気づきを紹介しました。

「論文作成にあたって有益な授業でした。」というコメントをもらいました。私もいろいろと考えさせられ、自らの論文作成に有益でした。ありがとうございました。その中でも文章作成にとって、論の展開がとても重要ですね。それを忘れずに、今後ともがんばっていきましょう！

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学

<研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割

<主要研究業績>

①福田由紀・菰原遥・菊池理紗 (20018). 言語心理学で何を学べるか？—言語学との学問イメージ比較— 法政大学文学部紀要, 76,115-127.

②福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.

③福田由紀・土清水咲菜・荒井弘和 (2016). 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか？ 法政大学文学部紀要, 73,99-108.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the effect of “self” on language activities. Students will be expected to make a presentation about the effect of “self” on language activities by individual literature study and deepen their comprehension of it.

PSY500B6

学校コンサルテーション特論

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学校心理学の基本的な概念と学校コンサルテーションの実践について学ぶ。特に発達障害や知的障害をもった児童や生徒の指導に関する小中高特別支援学校教員へのコンサルテーションを念頭におき、心理学の専門家として教育の現場で仕事をするための知識と技術の習得を目指す。コンサルテーションに活用できる指導方法や支援方法に関する情報を研究論文から読み取り、教員や保護者に伝えるコミュニケーションスキルを練習しながら、実務的な注意点などを講義で補足する。

【到達目標】

- ①学校心理学の全体像を学校コンサルテーションに必要な知識や技能として説明できる。
- ②心理教育的援助サービスのモデルについて説明できる。
- ③学校心理士の役割や活動を具体的に述べられる。
- ④教師・保護者らとのチームによる援助の実例について、具体例を述べられる。
- ⑤学校心理士の倫理について注意すべき点を列記できる。
- ⑥相談されている事例について学校コンサルテーションに活用できる支援方法、指導方法を調べ、わかりやすく説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の前半では学校心理学と学校コンサルテーションの基礎について学ぶ。受講生は事前に提示される学習目標にそって教科書を読み、授業中の発表と討論に参加して理解を深める。コンサルテーションの演習科目であることから、発表者は聞き手が学校教員や保護者であると想定し、わかりやすく話をする、質問にもわかりやすく、丁寧に回答することを繰り返し練習する。授業の後半では、学校コンサルテーションに活用できる指導方法や支援方法に関する研究論文を検索し、読み、発表する。ここでも、発表者は聞き手が学校教員や保護者であると想定し、研究成果を実践現場に還元するためのコミュニケーションの方法を練習する。

課題へのフィードバックは授業中の討論を介して行います。

【重要】新型コロナウイルス感染拡大防止のために、この授業は感染状況に応じてオンラインと対面を適宜組み合わせで行います。学習支援システムのこの授業科目のトップページで、対応状況やそれに伴うシラバスからの変更点について案内しますのでご確認ください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーションと学校心理学の全体像	授業の目的と方法の確認。学校心理学の全体像（3つの柱）、心理教育的サービスの実例などについて担当者が講義する。
第 2 回	心理教育的援助サービスのモデル	外部専門家の役割（援助者の種類）や学校内部の組織づくり（校内の運営委員会や支援委員会）、援助サービスの段階（一次、二次、三次）について学ぶ。
第 3 回	学校心理士の活動	アセスメント、コンサルテーション、コーディネーション、カウンセリングについて、それぞれ具体例を元に特色と違いを学ぶ。

第 4 回	教師とのチーム援助 (1)	教師とチームを形成して問題解決に取り組むモデルについて学ぶ。
第 5 回	教師とのチーム援助 (2)	教師とチームを形成して問題解決に取り組むモデルについて学ぶ。
第 6 回	保護者や地域とのチーム援助	保護者や地域とチームを形成して問題解決に取り組むモデルについて学ぶ。
第 7 回	学校や地域全体の支援	学校全体や地域ぐるみで問題解決に取り組むモデルについて学ぶ。
第 8 回	学校心理士の倫理	人権の尊重、秘密保持の厳守、責任の保持、研修の責務、研究と公開について、学校心理士の倫理綱領を元に学ぶ。
第 9 回	特別支援教育における学校コンサルテーション (1)	特殊教育から特別支援教育への移行、それに伴う、校内委員会の設置や特別支援教育コーディネーターの配置、巡回指導や専門家によるコンサルテーションの導入などについて学ぶ。
第 10 回	特別支援教育における学校コンサルテーション (2)	特別支援教育における学校コンサルテーションの事例を学ぶ。
第 11 回	学校コンサルテーションに活用できる指導法や支援法 (1)	学校コンサルテーションに活用できる指導法や支援法に関する応用、実践、臨床研究論文を読み、発表し、討論する。
第 12 回	学校コンサルテーションに活用できる指導法や支援法 (2)	同上。
第 13 回	学校コンサルテーションに活用できる指導法や支援法 (3)	同上。
第 14 回	まとめと総括、討論。	学期中に学んだことを振り返り、まとめ、質疑応答および討論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業外に行うべき学習活動

- 第 1 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 2 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 3 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 4 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 5 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 6 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 7 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 8 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 9 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 10 回 担当するキーワードについて調べて発表準備をする。
- 第 11 回 論文を検索し、読み、発表資料をまとめる。
- 第 12 回 論文を検索し、読み、発表資料をまとめる。
- 第 13 回 論文を検索し、読み、発表資料をまとめる。
- 第 14 回 論文を検索し、読み、発表資料をまとめる。
- 第 15 回 なし

【テキスト（教科書）】

購入を求める教科書はありません。図書館やスタディールーム、心理学実習室に所蔵してある参考書を参照してください。

【参考書】

『講座 学校心理士—理論と実践』（学校連合資格「学校心理士」認定運営機構 企画・監修、北大路, 2004）
『特別支援教育を支える行動コンサルテーション』（加藤・大石〔編〕、学苑社、2004）
『教師と学校が変わる学校コンサルテーション』 奥田健次編著（金子書房, 2018）、他。適宜、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加（課題の発表や討論）30%、教科書の学習目標に関する課題の遂行 40%、講読した論文の発表 30%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

（2019 年度の授業改善アンケートより）*2020 年度は未開講のため過年度の気づきを掲載します。

「外部のコンサルタントの仕事内容、取り組み問題の範囲の詳細の説明がありましたら、課題に取り組みやすかったと思います」というご意見をいただきました。この授業の後半では学校コンサルテーションの業務をロールプレイ的に演習しましたが、コンサルタントという仕事には、何が問題でどこまで仕事をするのが仕事を始めるときには決まっていないという特徴があります。そのような状況でコンサルティからニーズを聞き出し、貢献できる仕事を提案していく技術を習得するための演習であるということを

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の4限、秋学期は火曜日の2限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。
担当者は特別支援学校や小中学校に対する学校コンサルテーションを行ってきました。この授業ではその実務経験も活かして授業を行います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 行動分析学

＜研究テーマ＞

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

＜主要研究業績＞

- ① 島宗 理 (2018). 学校コンサルテーションの意義 奥田健次 (編著) 教師と学校が変わる学校コンサルテーション 金子書房 pp. 10-18.
- ② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社
- ③ 島宗 理・永富 大輔・八木 絵梨奈 (2015). 知的障害のある生徒がメモをとるように指導する—ガイド付きノートの効果— 行動分析学研究, 86-93.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the basic concepts of school psychology and the practice of school consultation. Focus will be placed on special education and consultation for the teachers working with children who have developmental disabilities and intellectual disabilities. Students will read relevant research papers, design behavioral treatment plans, and in role-play situations with other students, practice presenting their treatment plans to consultees, guide discussions, and finalize concrete and informed plans. Academic as well as practical advices will be provided by the lecture.

PSY500B6

心理教育アセスメント特論

杉山 崇

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学的測定の原理・原則、および心理・教育的アセスメントの方法、効果的な活用法と施行倫理を学ぶ

【到達目標】

- (1) 心理測定の原理・原則とその活用スキルを身につける。
- (2) 心理アセスメント（心理査定）と教育評価の方法と使い方を身につける。
- (3) アセスメントの結果に基づいた本人および教師・父兄へのコンサルテーションを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本演習では、個人のパーソナリティおよびストレス反応のアセスメント、教育評価、学級・学校のアセスメントなど、心理職が活躍する現場における心理アセスメントの手法を学ぶ。

授業計画にあるように、個人のアセスメントから学校・学級という組織・集団のアセスメントまで、学校現場で行われている心理学的なアセスメント法の理論と実際に学び、学校現場で機能できるようにコンサルテーションを想定した報告書作成の実習を行う。

なお、提出した課題および授業中の発表などへのフィードバックは、原則として口頭でその授業内で行うが、場合によっては次の授業でフィードバックを行う場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	心理教育的アセスメントの概要	学校で求められている心理教育アセスメントの特徴を理解する。
2	学校と心理測定	学校で心理測定がどのように活用され、どのように受容されてきたか理解する。
3	心理教育的アセスメントの倫理	事例から学校における心理測定のメリットとデメリットを理解し、倫理的配慮の必要性を学ぶ。
4	心理検査学概論	心理検査はどのようなグランドデザインで構成されて、どのような方法へと分化したか学ぶ。
5	絵画法①	学校で良く用いられる、バウム法、HTP を学ぶ。
6	絵画法②	風景構成法の施行法と実際に体験的に学ぶ。
7	質問紙法①	質問紙で実施できる心理尺度の作成方法、実施方法、結果の活用方法を学ぶ
8	投影法①	人間関係や社会的な問題が浮上すると言われている絵画統覚検査（TAT）を体験的に学ぶ。
9	投影法②	P-F スタディを体験し、実施における留意点を学ぶ。
10	知能検査	学校における知能検査データの使い方の配慮について検討する。
11	学級アセスメント	学校風土に基づいた学級アセスメントの理論と技法を学ぶ。
12	学校アセスメント	学校アセスメントの理論と実際に学ぶ。

13	教育評価	教育評価の技法と心理学的教育評価の実際を学ぶ。
14	教師へのコンサルテーション	アセスメント結果の報告書の作成とコンサルテーションの実際を学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 第 1 回 学校を見学するなど、学校を体験することが望ましい。
 第 2 回 心理測定の基本的考え方の資料を読んでくる。
 第 3 回 臨床心理学の倫理規定を読んでくる。
 第 4 回 教材論文を読んでくる。
 第 5 回 事前に 2 人組で相互にバウムテストを試行し合う。
 第 6 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 第 7 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 第 8 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 第 9 回 当該技法を事前に実施し、スコアリングを行う。
 第 10 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 第 11 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 第 12 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 第 13 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 第 14 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しない。毎授業時に資料や課題を指示する。また、課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】

『必携 臨床心理アセスメント』金剛出版

【成績評価の方法と基準】

発表 40%、出席・発表への質問・コメント 30%、討論への参加 30%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

自己理解、他者理解を通した査定法の習得が有益であることがわかったため、この機会を増やす方向を検討している。

【学生が準備すべき機器他】

PC、課題資料

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>臨床心理学。精神医療施設、中学校、高等学校、公立教育相談室、などで、25 年、心理アセスメント・心理カウンセリングを担当する心理職に就き、また、特別支援学校などで教師へのコンサルテーションの活動を行っている。

公式 WebPage：http://www.sugys-lab.com/

<研究テーマ>

- 1) 心理臨床実務における活用性の高い心理尺度の作成・改訂
 - 2) アセスメントを活用した教育臨床、病院臨床、産業臨床
- <主要研究業績>
 杉山崇・前田泰宏・坂本真士（2007）『これからの心理臨床』ナカニシヤ出版
 坂本真士・杉山崇・伊藤絵美（2010）『臨床に活かす基礎心理学』東京大学出版会
 伊藤絵美・杉山崇・坂本真士（2011）『事例でわかる心理学のうまい活かし方』金剛出版
 山脇圭輔・杉山崇（2012）『カウンセリングと援助の実際』北樹出版
 杉山崇（2015）『入門！産業社会心理学』北樹出版
 SUGIYAMA.T., (2008) 'Assessments of Depressive-Process and Personality for Cognitive Behavior Therapy: Theory and Practice of Client Centered Cognitive Behavior Therapy', 1st Asian Conference of CBT Papers. Asian Conference of CBT.
 杉山崇（2007）『抑うつ心理臨床に向けたロールシャッハ法、TAT、SCT と各種質問紙法の実施法および臨床的利点：投影法、質問紙法の臨床活用とテストバッテリーに向けた一考察』、山梨英和大学紀要

【Outline and objectives】

Learn the principles and principles of psychological measurement, methods of psychology / educational assessment, effective application methods and enforcement ethics

PSY500B6

心理教育アセスメント演習

熊 仁美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

検査を通じて対象児の特性を的確に把握し、支援計画の策定に役立つよう解釈しまとめる知識と技術の習得を目的とする。心理検査の概要や発達障害の基礎知識を学んだあと、療育支援の現場に校外学習にでむき、個別心理検査の実習を行う。検査を実施し、結果を解釈し、結果に基づいて指導案を作成する。今年度は、ウェクスラー式知能検査WISC-IVを使用する予定である。

【到達目標】

- (1) WISCIVを実施できるようになる
- (2) WISCIVの検査結果を解釈できるようになる
- (3) WISCIVの検査結果に基づいて、指導案を作成できるようになる。
- (4) 発達に遅れや偏りのある児童に分かりやすい関わり方の基礎を習得する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は、大学にて検査の概要に関する講義とロールプレイによる実技演習を行います。発達障害や応用行動分析学に基づくかわり方の基礎も学んでいただきます。後半は、福祉施設に校外実習に出向きます。発達障害のある小学校低学年のお子さんにご協力を頂いて実際に検査をとる練習をします。課題などのフィードバックは、学習支援システム等を活用して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	第 1 セッション 1	検査の実施に関する説明と諸注意。発達障害支援における活用の概要なども開設する。
第 2 回	第 1 セッション 2	教室内で受講者同士がペアとなり、模擬的に検査を実施する。
第 3 回	第 1 セッション 3	同上
第 4 回	第 2 セッション 1	模擬検査について結果を算出し、検査のプロフィールを合わせて解釈し、それに対するフィードバックを受ける。
第 5 回	第 2 セッション 2	同上
第 6 回	第 2 セッション 3	同上
第 7 回	第 3 セッション 1	模擬検査に基づき、個別の指導計画などに組み込める具体的な指導案を作成し、フィードバックを受ける。
第 8 回	第 3 セッション 2	同上
第 9 回	実習-1	校外にて発達支援の現場見学を行い、検査に必要なラポール形成のスキルを学ぶ。
第 10 回	実習-2	校外にて子どもを対象に検査を実施する
第 11 回	実習-3	同上
第 12 回	実習-4	同上
第 13 回	実習-5	同上
第 14 回	総括	上記の検査で得られた結果を解釈し、指導案を作成してレポートとして提出する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
集中講義開始前までにテキストを読んでおくこと（心理学準備室に用意してあります）。履修者が決定したら、授業支援システムを使ってレポートの分担を送ります。割り振られた分担箇所について、各自レポートにまとめてもらい、授業当日に発表をして頂きます。

【テキスト（教科書）】

日本版 WISC-IV 刊行委員会 訳編著 2010 年 日本文化科学社
・WISC-IV 実施・採点マニュアル
・WISC-IV 理論・解釈マニュアル

【参考書】

日本版 WISC-IV による発達障害のアセスメント - 代表的な指標パターンの解釈と事例紹介- 上野一彦 松田 修 小林 玄 木下智子 著 2015 年 日本文化科学社
https://www.amazon.co.jp/dp/4821063719/ref=cm_sw_r_li_dp_U_a8GrEb322RD5E

【成績評価の方法と基準】

実習のため、全セッションへの出席と参加が評価の前提となる。成績はレポートを 100 点満点で採点し、評価する。

【学生の意見等からの気づき】

・実習前に対象児童のプロフィールや生活の見通しをより詳しく伝達することで、検査実施の意味や結果の活用についての考察を深めることができる。
・学生間のディスカッションや協働を積極的にもうけることで、自発的・自律的な学びを重視する。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクタ・スクリーンが使える状態にしておくこと。検査器具を部屋に運んでおくこと。

【その他の重要事項】

動きやすい服装で参加してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞発達心理学・応用行動分析学＜研究テーマ＞大学における研究や NPO 法人における臨床活動を通して、自閉症スペクトラム障害児に対する早期療育支援やペアレントトレーニング、セラピスト養成や共同注意などの前言語コミュニケーションに関する研修に取り組んできた。

＜主要研究業績＞

熊仁美・竹内弓乃・原由子・直井望・山本淳一・高橋甲介・飯島啓太・齊藤宇開・渡邊倫・服巻繁・ボンディ アンディ (2010). 自閉症とコミュニケーション（公開講座：わが国における最新の研究と実践）, 行動分析学研究, 24(1), 85-105.

熊仁美・直井望・山本淳一 (2010). 自閉症児の共同注意とコミュニケーション：発達初期コミュニケーション尺度を用いた分析 ― 人間と社会の探求：慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 69, 131-144.

熊仁美・山本淳一 (2014). 自閉症児の要求音声言語の獲得と拡張に及ぼす PECS の効果, 特殊教育研究, 51(5), 407-419.

熊仁美 (2016) 自閉症スペクトラム障害における共同注意と社会的参照行動. 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士論文（未公刊）

■取得研究費

熊仁美 (2016) 「エビデンスに基づいて保護者とともに取り組む発達障害児の早期療育モデルの実装」 国立研究開発法人科学技術振興機構 28 年度戦略的創造研究推進事業 研究開発成果実装支援プログラム 2,100 万円

【Outline and objectives】

The purpose of the "Psychoeducation Assessment Exercise" is to interpret the test results and accurately grasp the characteristics of the target child, and to acquire the skills to formulate a support plan based on the test results. After learning the outline of psychological tests and basic knowledge of developmental disabilities, they will go to a developmental support facility and practice the tests with the cooperation of their children. Interpret the results and create a teaching plan that suits the child. We plan to use WISC-IV this year.

PSY500B6

スポーツ心理特論

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業のテーマは、スポーツ心理学のテーマ（スポーツ・運動・身体活動への心理学的アプローチ）を実践的に学習することです。

【到達目標】

運動やスポーツを含む身体活動は、私たちの「こころ」と深い関わりをもっています。スポーツ心理学の研究や知見を理解することによって、「こころの仕組み」に関する理解を深め、身体活動・運動・スポーツ場面において心理学的な支援を実践できるようになることを目標とします。

また、各受講生が専門とする心理学領域と、スポーツ心理学との関連に着目します。そして、両者の発展可能性を明確にすることができるようになることも目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業では、運動学習や運動の習慣化に関連する理論モデルから、メンタルトレーニングやスポーツパーソンシップまで、幅広い内容を扱います。さらに、欧米で注目されている最新のトピックや、実際のスポーツ場面で生じた事例についても触れます。

以上のことによって、現代社会においてスポーツ心理学が果たす役割について具体的に考え、心理学的な支援を実践できるようになることを目指します。

この授業では、講義だけでなく、講義内容に基づくワークを毎回行います。授業の後半では、受講生による発表・意見交換を行います。課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストなどを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	スポーツ心理学とは何か？を学ぶ	スポーツ心理学の全体像を理解し、説明できるようになる。
第 2 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 1) スポーツメンタルトレーニングを学ぶ	メンタルトレーニングのスキルを理解し、実践し、活用できるようになる。
第 3 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 2) チームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。	ファシリテーションを用いたチームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。
第 4 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 2) チームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。	ファシリテーションを用いたチームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。
第 5 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 2) チームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。	ファシリテーションを用いたチームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。
第 6 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 2) チームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。	ファシリテーションを用いたチームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。
第 7 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 2) チームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。	ファシリテーションを用いたチームビルディングの方法を理解し、実践し、活用できるようになる。

第 8 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 3) スポーツパーソンシップを考える	スポーツパーソンシップについて学び、自分の考えとその根拠を明確にできるようになる。
第 9 回	健康スポーツの心理学を学ぶ 1) 運動を促進させるための働きかけを学ぶ	マーケティングの方法論を用いて、自分や周りの人に対して、運動を促進するための働きかけができるようになる。
第 10 回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える (1)	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う。
第 11 回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える (2)	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う。
第 12 回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える (3)	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う。
第 13 回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える (4)	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う。
第 14 回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える (5)	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容を実践・活用できるようになることを目指して、毎回の授業中に提示されるレポート課題に取り組めるよう、事前に学習を行ってください。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは設定しません。必要に応じて、資料配付・文献紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 授業の到達目標と対応した期末レポートが 60%、(2) 授業中に実施する課題、プレゼンテーション、グループワーク、意見交換への参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が低下します。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、受講生の専門領域にスポーツ心理学の知見を活かす方法を提供します。

【学生が準備すべき機器他】

ありません。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。グループワークを行いますので、協力的な姿勢で授業に参加してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

スポーツ心理学、健康心理学

<研究テーマ>

アスリートの支援、生涯スポーツの普及

<主要研究業績>

荒井弘和（編著）(2020). アスリートのメンタルは強いのか？— スポーツ心理学の最先端から考える— 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

<研究室のホームページ>

<http://health.sports.coocan.jp/wp/>

【Outline and objectives】

The theme of the class is the practical study of sport psychology themes (psychological approaches to sport, exercise, and physical activity).

PSY500B6

健康心理特論

林 容市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々な事象、対象について、健康心理的視点から捉え、該当分野における研究の現状を理解する。

【到達目標】

個人の健康観に関する諸要因について理解する。
特に身体活動と関連する心理的要因、および生理的要因と感覚との関係を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では、個人や社会における健康に関する基礎的理論・概念を理解した上で、最新の研究結果を踏まえて健康に関する心理的要因を論議する。毎回、主たるテーマを設け、基礎的な情報の提供を受け、それらを踏まえて参考文献を読み、受講者全体で討論した上で、複数回の発表を行う。これらを通じ、研究の視点および方法について視野を広げ、研究活動に資する知識・技術を獲得する。
また、前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては、授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	オリエンテーション、健康に関する研究の現状の紹介
第2回	健康に対する意識と主観 (1)	健康度評価に関する研究の展開
第3回	健康に対する意識と主観 (2)	クオリティ・オブ・ライフの意味するもの
第4回	健康に対する意識と主観 (3)	健康観や健康行動におけるパラダイムシフト
第5回	様々な対象における健康と心理 (1)	生活習慣病や障害と満足度研究と実際の応用
第6回	様々な対象における健康と心理 (2)	高齢者のサクセスフルエイジングと健康
第7回	様々な対象における健康と心理 (3)	医療者・患者間コミュニケーション、インフォームドコンセント
第8回	様々な対象における健康と心理 (4)	女性における健康と心理
第9回	社会環境的側面からの健康 (1)	地域・ネットワーキングと保健・医療の新しい展開
第10回	社会環境的側面からの健康 (2)	コミュニティにおけるヘルスプロモーションの展開
第11回	健康行動としての身体活動と心理的背景 (1)	心理行動的要因と様々な行動変容モデル
第12回	健康行動としての身体活動と心理的背景 (2)	身体活動時の感覚と生理的状態
第13回	健康行動としての身体活動と心理的背景 (3)	主観的努力観と身体活動・スポーツ
第14回	健康行動としての身体活動と心理的背景 (4)	運動習慣・健康行動と自己効力感活動と心理的背景 (4)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ごとに指示された調査および論文を事前に読む予習を行う。また、プレゼンテーションの担当となった場合には、スライドや発表資料の作成も求める。さらに、毎回の授業内容についてとりまとめ、次回以降の授業内でのディスカッションに備えること。なお、これらの各回の授業に対する準備および復習等の時間は、それぞれ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

学術雑誌に掲載されている論文を使用し、必要に応じて指示する。その他の資料は適宜授業中に配布する。

【参考書】

田中喜代次、大蔵 倫博（編）、健康運動の支援と実践、金芳堂。

【成績評価の方法と基準】

授業への参画（出席ではない）状況：50%、プレゼンテーション（資料等の評価も含む）：50%

【学生の意見等からの気づき】

2020年度はすべてオンライン授業となってしまったため、知識提供型の授業と成らざるをえず、履修者の意見や考えを授業内容にうまく反映できませんでした。また、資料の配付が前日になってしまう場合が多く、フィードバックも十分ではなかったと感じています。2021年度は原則対面での授業を行います。事前の資料を早めに提供し、リアクションペーパーなどに対するフィードバックも充実させていく予定です。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 生理心理学、応用健康科学、健康心理学

<研究テーマ> 運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する

<主要研究業績> 林容市 他、個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係、体力科学 57：197-206, 2008 ほか

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to understand the current state of research into account various events and subjects concerned from a health-psychological perspective.

PSY500B6

心理研究法特論

吉村 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教授者自身が一研究者としてこれまで用いてきたさまざまな研究法を解説しますので、受講生の皆さんは、それを自分が利用する可能性もある方法として受けとめ、それぞれの方法に対する利用可能性とその方法のもつ問題点を考えていきます。

【到達目標】

現在の心理学で用いられているさまざまな研究法を知ることを通して、自らの研究で用いる方法的可能性を、頭を柔軟にして広げる姿勢を身につけることを到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は対面とオンデマンドの回を原則として交互に行う予定ですが、状況により変更する可能性がありますので、Hoppiiの「お知らせ」に注意しておいてください。

教授者自身が一研究者としてこれまで実際に使用してきたさまざまな研究法を体験し、受講者自身がそれぞれの研究法を自らの研究に活用できる可能性を探ります。毎回、異なる研究法を学習し、最後の数回では各受講者が興味をもった、あるいは使用経験のある研究法について、可能性と問題点を自覚する方向性で検討を加え、発表・解説します。

毎週の課題の提出およびフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	はじめに	授業全体の概要説明。
2	心理学研究法の類型化	さまざまな研究法を類型化し、受講者自身がこれまで取ってきた俵給法をその中に位置づける作業を行う
3	心理学実験とは	「準実験」という考え方の理解と研究の生態学的妥当性について考える
4	実験計画法	分散分析法が利用されるに至った経緯と現在の利用状況の解説
5	精神物理学的測定法	古典的と言われるこの方法に現在でも有効なさまざまな方法があることを解説
6	調査法（1）	モデル構成まで含めた心理学での調査法を解説
7	調査法（2）	サンプリングに関わるさまざまな問題を解説
8	検査法	テストの標準化を中心に解説
9	観察法	KJ法とアイデアプロセッサの利用を解説
10	面接法	さまざまなインタビュー法の紹介
11	反応時間	心理学実験で広く用いられてきた反応時間の位置づけとそれを用いる際の注意点
12	受講者による発表（1）	受講者が自ら行っている、またはこれから採用したい研究法について考察を含めた紹介を行う

- 13 受講者による発表(2) 受講者が自ら行っている研究を研究方法という観点から俯瞰する発表を行う。
- 14 まとめ 授業の総括と受講者の発表内容についての討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
各回に取り上げた研究方法について、受講者自身の研究に活用できる可能性を検討する作業を授業時間外の学習として行います。特に、12 回目以降に行う発表・解説に向け、2 回目から 11 回目までの授業で取り上げた研究方法を自らが活用できる可能性について検討する作業を毎回の授業時間外学習とします。

【テキスト（教科書）】

使用しません。

【参考書】

担当教員が執筆した関連論文の抜刷を授業時に配布する

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%と、「受講者による発表」内容 50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者による成果発表では、受講生が取り組んでいる研究の方法について見つめ直し深められるような形の発表を喚起します。

【その他の重要事項】

心理学が用いるさまざまな研究方法を広く紹介するので、受講者の研究領域にかかわらず、広く受講することを奨めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 知覚・認知心理学

＜研究テーマ＞

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究方法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

＜主要研究業績＞

・吉村浩一 2006 運動現象のタキシノミー：心理学は"動き"をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版

・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. Perception, 36, 1049 -1056.

・吉村浩一 2009 直交3軸のうち1軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み—不可能図形と影絵の回転による検討— アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

This course deals with some topics using various kinds of psychological methods that the instructor use so far. Students are required to brush up the methods assuming to use them in their own research.

PSY500B6

応用心理統計 I

山際 勇一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義は心理統計の理論を学習し、また実践的使用を可能にするスキルを学ぶことを重くとする。すなわち、①多変量解析などの応用的解析方法につながる理論的な基礎事項を再確認する。
② R を用いてさまざまな解析方法を実習し習得する。

【到達目標】

研究に心理統計が使用できるようになること。
使用できるというのは、①研究計画時に適切な方法を選択しながら、計画を立てることができること、②収集したデータを適切に分析処理できること、③結果を論文に記載できること、④他の研究論文を適切に読めること、の4点をいう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理統計解析の基礎理論の再確認および応用的実践的手法を R を用いて実習する。

一般的な進め方：各テーマについて数理的な視点からの解説を行う。次に、受講生が R を用いて、その内容について実践的な統計処理などを解説する。講義＋解析実習である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	基本的な統計的検定などの知識の確認	基礎知識の確認
第 2 回	統計解析の基礎①	ベクトル、行列、行列式、固有値問題など
第 3 回	統計解析の基礎②	R の基本操作
第 4 回	統計解析の基礎③	最大、最小問題と微分方程式
第 5 回	統計解析の基礎④	統計関数と分布
第 6 回	平均の比較①	分散分析
第 7 回	平均の比較②	多重比較と事後検定
第 8 回	平均の比較③	3 要因以上の分散分析
第 9 回	回帰分析	回帰分析と重回帰分析
第 10 回	カテゴリカルデータの解析①	カイ二乗検定など基礎的な検定方法
第 11 回	カテゴリカルデータの解析②	対数線形モデル
第 12 回	カテゴリカルデータの解析③	二項ロジスティック回帰分析
第 13 回	カテゴリカルデータの解析④	多項ロジスティック回帰分析
第 14 回	最新のトピックについて	マルチラベル分析、階層的回帰分析など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
シラバスを確認し、各回の統計解析に関する基礎的な知識を確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

読んでわかる心理統計法 服部・山際 サイエンス社 2019 年

【参考書】

各テーマごとに紹介する。

ただし、基礎数学（線形代数）に関しては各自が理解しやすいと思う参考書等を補助資料として用意すること。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：授業での発表と課題 (50 %), 授業への取り組み (50%)
 「評価基準」：基本的な知識が習得されていること, R を用いてデータを適切に解析できること

【学生の意見等からの気づき】

改善アンケートからの参考になる記述は特になし。
 授業において各テーマの終了後ではなく短い間隔で発表を行う。
 学生の自主的な学習に期待できないので、課題を多くする必要がある。

【学生が準備すべき機器他】

個人用パソコンを用意すること

【その他の重要事項】

発表用のレジメとシミュレーションデータは前日までに提出し、また受講生全員に配布すること

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会心理学

<研究テーマ>社会的行動に影響を及ぼす人間関係と文化の影響

<主要研究業績>

服部環・山際勇一郎 2019 心理統計法 サイエンス社 pp.1-299.
 Yamagiwa, Y., Roh, Y-J, & Hyun, J-H. 2019 The relationship between Ambivalent Sexism and Attitudes toward Close Relationships: Cross-cultural Comparison in Korean and Japanese Students. 2019 Annual Conference of the Korean Psychological Association. Seoul, South Korea. JPA131.

服部環・山際勇一郎 2019 カイ 2 乗検定および事前検定を伴う分散分析の棄却率 日本応用心理学会第 86 回大会発表論文集 64
 山際勇一郎 2018 父親の養育不安について—テキスト型データの解析から— 首都大学東京人文学報 514-4,11-16.

山際勇一郎・小湊真衣・高向山・梅崎高・玄正煥 2017 保護者と保育者による子どもの発達評定の差異に関する文化比較 日本教育心理学会第 59 回総会 (PA01-83)

Yamagiwa, Y., Roh, Y-J, & Hyun, J-H. 2018 Cross-cultural study on ambivalent sexism between Korean and Japanese university students. 2018 Annual Conference of the Korean Psychological Association. Seoul, South Korea.

【Outline and objectives】

This course will help you to acquire the advanced data-analysis skill for psychological research by using R.

PSY500B6

応用心理統計Ⅱ

山際 勇一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義は心理統計の理論を学習し、また実践的使用を可能にするスキルを学ぶことを重くとする。すなわち①多変量解析などの応用的解析方法を学ぶ。

② R を用いてさまざまな解析方法を実習し習得する。

【到達目標】

研究に心理統計が使用できるようになること。

使用できるというのは、①研究計画時に適切な方法を選択しながら、計画を立てることができること、②収集したデータを適切に分析処理できること、③結果を論文に記載できること、④他の研究論文を適切に読めること、の4点をいう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理統計解析の基礎理論の再確認および応用的実践的手法を R を用いて実習する。

一般的な進め方：各テーマについて数理的な視点からの解説を行う。次に、受講生が R を用いて、その内容などを解説する。課題のフィードバックは、学習支援システムなどを用いて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	量的尺度の関連と構造	①主成分分析の分析
第 2 回	量的尺度の関連と構造	②因子分析の分析
第 3 回	量的尺度の関連と構造	③判別分析の分析
第 4 回	量的尺度の関連と構造	④クラスター分析の分析
第 5 回	量的尺度の関連と構造	⑤多次元尺度構成法の分析
第 6 回	名義尺度の関連と構造	⑥単純相関分析の分析
第 7 回	名義尺度の関連と構造	⑦多重相関分析の分析
第 8 回	共分散構造分析	①理論的基礎
第 9 回	共分散構造分析	②確認的因子分析
第 10 回	共分散構造分析	③パス解析
第 11 回	共分散構造分析	④多母集団因子分析
第 12 回	共分散構造分析	⑤平均共分散構造分析
第 13 回	その他の解析法	最新のトピックの紹介
第 14 回	その他の解析法	最新のトピックの紹介

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 春学期の学習内容の再確認を行っておくこと。
 また、各回の内容の復習は必ず行うこと。

【テキスト（教科書）】

なし。各テーマごとに発表者がレジメを配布する。

【参考書】

R による多変量解析入門 川端一光他 オーム社

R による教育データ分析入門 小林雄一郎他 オーム社など

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：授業での発表と課題 (50 %), 授業への取り組み (50%)
「評価基準」：基本的な知識が習得されていること, R を用いてデータを適切に解析できること

【学生の意見等からの気づき】

改善アンケートからの参考になる記述は特になし。
授業において各テーマの終了後ではなく短い間隔で発表を行う。
学生の自主的な学習に期待できないので、課題を多くする必要がある。

【学生が準備すべき機器他】

個人用パソコンを用意すること。

【その他の重要事項】

発表用のレジメとシミュレーションデータは前日までに提出し、受講者全員に配布すること

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞社会心理学
＜研究テーマ＞社会的行動に影響を及ぼす人間関係と文化の影響

【Outline and objectives】

This course will help you to acquire the advanced data-analysis skill for psychological research by using R.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。博士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、それぞれの仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。

- (1) 標的行動を具体化し、測定方法を決めること、
- (2) 標的行動の制御変数に関する先行研究を調べること、
- (3) 制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、
- (4) 実験計画書を作成し、発表すること、
- (5) 実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、
- (6) 本実験を実施し、データを分析すること、
- (7) 実験結果をまとめて図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生各自の博論の進捗にあわせ、毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業内容と方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第 2 回	実験計画の発表 1	独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などについて、博論実験の計画をしながら討論します。
第 3 回	実験計画の発表 2	博論の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進め、報告します。
第 4 回	実験計画の発表 3	博論の予備実験の準備を進めます。刺激や装置、教示や記録用紙など、具体的な材料を持ち寄り、確認と質疑応答をします。
第 5 回	予備実験の報告 1	予備実験の結果を報告し、データ視覚化と分析、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などについて討論します。

- 第 6 回 予備実験の報告 2 予備実験の結果をまとめ、プレゼンします。データから「わかったこと」「わからなかったこと」をわかりやすく、見て伝わる資料を作成できているか、相手にわかるように話しているかどうかを評価し、フィードバックします。
- 第 7 回 予備実験の報告 3 次の予備実験あるいは本実験の実験計画についてプレゼンし、話し合います。
- 第 8 回 先行研究をまとめる 1 先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけします。
- 第 9 回 先行研究をまとめる 2 先行研究の中に本実験をどのように位置づけるかを話し合い、討論します。
- 第 10 回 本実験の準備 本実験の準備を進め、予備実験から改訂した刺激や装置、教示や記録用紙など、具体的な材料を持ち寄り、確認と質疑応答をします。
- 第 11 回 本実験の報告 1 本実験の結果を報告し、データ視覚化と分析、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（次の実験計画）などについて討論します。
- 第 12 回 本実験の報告 2 本実験の結果をまとめ、プレゼンします。データから「わかったこと」「わからなかったこと」をわかりやすく、見て伝わる資料を作成できているか、相手にわかるように話しているかどうかを評価し、フィードバックします。
- 第 13 回 次の実験の計画 次の実験計画についてプレゼンし、話し合います。
- 第 14 回 まとめ 自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。
博論のストーリーを端的に伝える練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい（以下に一例）。

○興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の3つを考え、提案する資料を作成する。

○本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

【参考書】

以下、シングルケースデザイン法に関する参考書です。

○ Barlow, D. H., & Hersen, M. (1984). Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change. Pergamon. (バーロー, D. H.・ハーセン, M. 高木俊一郎・佐久間徹 (監訳) 一事例の実験デザイン ―ケーススタディの基本と応用― 二瓶社)

○ Cooper, J. C., Heron, T. E., & Heward, W. L. (2007). Applied Behavior Analysis. Pearson Education. (クーパー, J. C., ヘロン, T. E., & ヒューワード, W. L. 中野良顯 (訳) (2013) 応用行動分析学 明石書店)

【成績評価の方法と基準】

○学期初めに受講生が計画し、承認した研究計画 to-do リスト上の達成率（最大 100%）にもとづいて成績を評価します。

○欠席が5回以上になると自動的にE評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

（この授業では授業改善アンケートを実施していないので個人的な気づきです）

今年度は昨年度から引き続き、企業からの研修生を迎え、博士ゼミ生1名、企業研修生1名、研究員1名で授業を行いました。他のゼミの博士課程の院生も参加し、活発な議論が展開しました。行動分析学の研究アプローチを土台に、言語行動に関する基礎研究、企業における実践研究、コーチングに関する応用研究と、多様なテーマに関する深い討論と考察ができたのではないかと思います。

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の4限、秋学期は火曜日の2限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 行動分析学

＜研究テーマ＞

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

＜主要研究業績＞

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、博士論文の実験計画書や研究論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。

- 1) 自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること、
- 2) 実験から得られたデータを分析し、わかったこと、
- 3) わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを実験計画として提案すること、
- 4) わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、
- 5) 論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週、受講生各自の博論研究の進捗にあわせた課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業内容と方法、約束事を説明します。
第 2 回	論文を書く： アウトラインを書く	博論実験の内容を 1 分間でプレゼンする練習をします。 アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。
第 3 回	論文を書く： データの視覚的な提示	実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。
第 4 回	論文を書く： 推敲する (1)	方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲します。読み手がその実験を追試できるように書かれているかどうか、読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。
第 5 回	論文を書く： 事実を書く	アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。

第 6 回 論文を書く：
先行研究をまとめる

先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。

第 7 回 論文を書く：
研究を位置づけるア
ウトラインを書く

第 6 回でまとめた先行研究の展望を活かし、また春学期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法を解説し、練習します。

第 8 回 論文を書く：
推敲する (2)

第 5 回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。

第 9 回 論文を書く：
推敲する (3)

パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。チェックリストを使って推敲する練習を続けます。

第 10 回 論文を書く：
執筆ルールに基づい
て校正する

引用文献一覧を作成します。本文と見合わせて、引用の方法が適切かどうかを確認します。

第 11 回 論文を書く：
推敲する (4)

研究論文の初稿を用い、推敲の練習をします。また、自分で書いた文章を自分で推敲するのは困難であることを自覚するために、他の受講生の論文を校正する練習もします。

第 12 回 論文を投稿する：
学術雑誌への投稿手
順

論文を学術雑誌へ投稿する手順やその後のやりとりについて解説します。

第 13 回 研究計画 (1)

次年度に行う実験の計画を発表し、討論します。

第 14 回 研究計画 (2)

次年度に行う実験の計画を発表し、討論します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい（以下に一例）。
○日本心理学会の『執筆・投稿の手引き』およびゼミの『論文執筆チェックリスト』を用いて「結果」の章を推敲し、提出する。
○本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストはありませんが、研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【参考書】

以下、パラグラフライティング法に関する参考書です。
○倉島保美 論理が伝わる世界標準の「書く技術」ブルーバックス
○野田直人 小論文・レポートの書き方—パラグラフ・ライティングとアウトラインを鍛える演習帳— 有限会社人の森

【成績評価の方法と基準】

○学期初めに受講生が計画し、承認した研究計画 to-do リスト上の達成率（最大 100%）にもとづいて成績を評価します。
○欠席が 5 回以上になると自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

（この授業では授業改善アンケートを実施していないので個人的な気づきです）

今年度は昨年度から引き続き、企業からの研修生を迎え、博士ゼミ生 1 名、企業研修生 1 名、研究員 1 名で授業を行いました。行動分析学の研究アプローチを土台に、言語行動に関する基礎研究と企業における実践研究が交差する、深い討論と考察ができたのではないかと思います。

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学
<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学
新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including evaluation of single-case design data with visual inspection, and interpretation of functional relationship between dependent and independent variables. Student will also aim to master how to write a research paper, by learning about paragraph writing, Japanese Psychological Association's publication manual, and other miscellaneous rules in academic writing.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として博士後期課程の院生が、各自で研究を遂行できるようになるために必要な諸々の力を向上させることが授業の目的である。そのために必要な研究活動を自分自身で計画し、実行し、成果を自己評価して、次の計画に活かすという PDCA サイクルを体得する。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

- 的確に自分自身の研究能力を現状分析できること。
- 博士後期課程全体の目標、各年度での中期目標、セメスター単位での小目標を合理的に立案できる。
- 上記 a, b の内容をふまえて、具体的な行動計画および達成指標を立案できる。
- 上記 a, b, c の内容をふまえて、実際に行動する。
- 上記 a, b, c, d の内容をふまえて、セメスター単位での到達度を適正に自己評価できる。
- 上記 e の自己評価を、次の目標設定に活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたなどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

まず最初に、博士後期課程を通じての自分自身の目標を、複数の観点から立てる。次に、その全体目標を達成するための中目標として、当該学年での目標を立てる。さらに、小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。

発表は 3 種類の趣旨のものになる。1. 現状分析と目標設定、2. 目標を達成するために各自が設定した課題（2 回）、3. 目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。

授業ではそれぞれの発表に対して全員で意見交換をして、自己評価基準の適正化を図る。

各課題に対する評価は、学習支援システムを通じてフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要および各自課題の説明
第 2 回	目標設定の発表	学位論文作成に向け、現状分析を踏まえた春学期の各自の目標
第 3 回	各自課題 1 - 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 1 回
第 4 回	各自課題 1 - 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 2 回
第 5 回	各自課題 1 - 3	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 3 回
第 6 回	中間振り返り 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定した 1 巡目の課題に関する振り返り
第 7 回	各自課題 2 - 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 1 回
第 8 回	各自課題 2 - 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 2 回

発行日：2021/5/1

第 9 回	各自課題 2－3	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 3 回
第 10 回	中間振り返り 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定した 2 巡目の課題に関する振り返り
第 11 回	各自課題 3－1	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 3 巡目の第 1 回
第 12 回	各自課題 3－2	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 3 巡目の第 2 回
第 13 回	各自課題 3－3	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 3 巡目の第 3 回
第 14 回	目標達成度の自己評価	達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と改善案の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。より具体的には、3 種類の発表について以下の通りに授業前の準備と授業後の復習をすることを求める。

「現状分析と目標設定」については、発表後に授業時間内の議論を踏まえて修正を加え、提出する。

「各自課題」は、各自が目標を達成するために発表課題を設定し、発表の準備をするとともに、発表後に課題の修正を行う。

「目標達成度に対する自己評価と今後の改善策」は事前の発表準備に加え、授業後に修正版を作成し提出する。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房
そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ出席し、討論に参加していること自体を評価対象とする。

各自課題 30 %…発表の仕方（プレゼン技術）、発表の内容、発表資料の質を評価対象とする。

目標設定発表 20 %…発表の仕方、目標設定の水準および適切さ、目標の実現可能性、現状分析の適切さを評価対象とする。

自己評価発表 10 %…発表の仕方、期末の自己評価の妥当性を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

博士後期課程向け授業のため、アンケートは未実施でした。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

2021 年度は国内研究期間中のため、オフィスアワーは設定しないが、対応はするので、相談がある場合には個別に連絡のこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8 章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2 章 学文社, pp.22-37

【Outline and objectives】

The goal of this class is to improve the various powers necessary for graduate students of Doctoral Course to be able to carry out their own research. For that purpose, students will acquire the PDCA cycle to plan and execute research activities, self-evaluate results, and make use of it in the next plan.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として博士後期課程の院生が、各自で研究を遂行できるようになるために必要な諸々の力を向上させることが授業の目的である。年度当初（春学期）に立てた各年度の中期目標を達成するために、秋学期の小目標を立て、具体的な研究活動を計画、実行し、成果を自己評価して、次の年度の計画に活かすという PDCA サイクルを体得する。なお、自分の研究領域の先行研究と自分自身の研究の関係を明確にするために、レビューを行うことを課題に含める。

【到達目標】

春学期に引き続き、秋学期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

- 的確に自分自身の研究能力を現状分析できること。
- 博士後期課程全体の目標、各年度での中期目標、セメスター単位での小目標を合理的に立案できる。
- 上記 a、b の内容をふまえて、具体的な行動計画および達成指標を考案できる。
- 上記 a、b、c の内容をふまえて、実際に行動する。
- 上記 a、b、c、d の内容をふまえて、自分の研究を先行研究の中に適切に位置づけることができる。
- 上記 a、b、c、d、e の内容をふまえて、セメスター単位での到達度を適正に自己評価できる。
- 上記 f の自己評価を、次の目標設定に活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期の「心理学特殊研究Ⅰ」において、博士後期課程を通じての自分自身の目標を、複数の観点から立てた。次にその全体目標を達成するための中目標として、当該学年での目標を立てた。春学期の成果をふまえて、新たな小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。

発表は 4 種類の趣旨のものになる。1. 現状分析と目標設定、2. 目標を達成するために各自が設定した課題、3. 自分の研究領域における先行研究の概観（レビュー）、4. 目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。

授業ではそれぞれの発表に対して全員で意見交換をして、自己評価基準の適正化を図る。

各課題に対する評価は、学習支援システムを通じてフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要および各自課題、レビュー発表の説明
第 2 回	目標設定の発表	学位論文作成に向け、現状分析を踏まえた秋学期の各自の目標
第 3 回	各自課題 1－1	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 1 回
第 4 回	各自課題 1－2	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 2 回
第 5 回	各自課題 1－3	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 3 回
第 6 回	中間振り返り 1	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した 1 巡目の課題に関する振り返り
第 7 回	各自課題 2－1	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 1 回
第 8 回	各自課題 2－2	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 2 回
第 9 回	各自課題 2－3	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 3 回
第 10 回	中間振り返り 2	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した 2 巡目の課題に関する振り返り
第 11 回	レビュー発表 1	各自の研究領域に関するレビュー発表の第 1 回
第 12 回	レビュー発表 2	各自の研究領域に関するレビュー発表の第 2 回

第 13 回	レビュー発表 3	各自の研究領域に関するレビュー発表の第 3 回
第 14 回	目標達成度の自己評価	達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と改善案の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。より具体的には、4 種類の発表について以下の通りに授業前の準備と授業後の復習をすることを求める。

「現状分析と目標設定」については、発表後に授業時間内の議論を踏まえて修正を加え、提出する。

「各自課題（1、2）」は、各自が目標を達成するために発表課題を設定し、発表の準備をするとともに、発表後に課題の修正を行う。

「レビュー発表」では、先行研究論文を多数読み、独自の視点から問題意識を構築し、発表の準備をするとともに、発表後にレビューの修正を行う。

「目標達成度に対する自己評価と今後の改善策」は事前の発表準備に加え、授業後に修正版を作成し提出する。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配布プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ出席し、討論に参加していること自体を評価対象とする。

各自課題とレビュー発表 30 %…発表の仕方（プレゼン技術）、発表の内容、発表資料の質を評価対象とする。

目標設定発表 20 %…発表の仕方、目標設定の水準および適切さ、目標の実現可能性、現状分析の適切さを評価対象とする。

自己評価発表 10 %…発表の仕方、期末の自己評価の妥当性を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

博士後期課程向け授業のため、アンケートは未実施でした。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。

心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

2021 年度は国内研究期間中のため、オフィスアワーは設定しないが、対応はするので、相談がある場合には個別に連絡のこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8 章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2 章 学文社, pp.22-37

【Outline and objectives】

The objective of this class is to improve the various abilities necessary for graduate students of Doctoral Course to be able to carry out research. In order to achieve the middle-term goals of each fiscal year established at the beginning of the spring semester, students set small goals for the fall semester and acquire the PDCA cycle on research activities. In order to clarify the relationship between the previous research and the student's own research, students review the preceding research.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生理心理学の関連論文の抄読と、それをもとに自分の研究成果の学会発表・論文作成の方法を学び、その過程を繰り返しながら博士論文の成果としてまとめます。特に生理心理学の手技・操作に精通し、必要なデータを採取し、解析ができるようにします。

【到達目標】

1. 生理心理学手法を駆使し、適切なデータ解析・図表の説明・考察などを通して関係する学会への発表、および論文投稿を行います。
2. 特に学会発表の場合は、エントリーから実際の発表までの過程やスケジュールの調整などを学びます。
3. 論文作成の場合は、投稿誌の選び方、投稿雑誌へ調整、査読への返し方などを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習のため、発表を繰り返し行い、発表時のコメントなどについて自ら調べ、リアクションペーパーとしてまとめ、提出してもらいます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、質疑応答や提出されたリアクションペーパーから生じた良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	生理心理学手法の習熟程度の把握や授業内容や範囲の希望をすり合わせます。
第 2 回	春学期の学会発表の検討	発表可能な学会の検索、学会スケジュール、準備すべきものを確認します。
第 3 回	先行研究の抄読会（1） 日本語論文を中心に	自分の研究に関係の深い論文・成書の抄読します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「問題点提起」に焦点を当てまとめます。
第 4 回	先行研究の抄読会（2） 日本語論文を中心に	自分の研究に関わり合いの深い論文・成書を抄読します。 前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「対象・方法」に焦点を当てまとめます。
第 5 回	先行研究の抄読会（3） 日本語論文を中心に	自分の研究に関係の深い論文・成書を抄読します。 前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「分析」に焦点を当てまとめます。

- 第 6 回 先行研究の抄読会（4） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語論文を中心に
成書を抄読します。
前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。
パワーポイントで発表原稿を作成します。
先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
- 第 7 回 先行研究の抄読会（5） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語論文を中心に
成書を抄読します。
前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。
パワーポイントで発表原稿を作成します。
先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
- 第 8 回 先行研究の抄読会（6） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語論文を中心に
成書を抄読します。
疑問点や問題点を検討します。
パワーポイントで発表原稿を作成します。
先行研究の「文献」の書き方に焦点を当てまとめます。
- 第 9 回 学会発表の準備（1） 日本語での発表を中心に
学会発表への準備をします。
抄録の作成のためのデータ解析を行います。
抄録のエントリー時に必要な情報の確認します。
学会発表研究に関係の深い論文・成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い作成します。
- 第 10 回 学会発表の準備（2） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語での発表を中心に
成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い作成します。
- 第 11 回 学会発表の準備（3） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語での発表を中心に
成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い作成します。
発表時間や発表の仕方に合わせて練習します。発表がポスターの場合は、ポスター作製の操作や手順を習います。
- 第 12 回 論文の作成（1） 日本語論文を中心に
今までの抄読会や学会発表の成果を通して論文にまとめます。
投稿する論文を言語、難易度などを考慮し雑誌を選定します。
雑誌の投稿要領を検討します。
- 第 13 回 論文の作成（2） 日本語論文を中心に
投稿論文に関係の深い論文・成書を抄読します。投稿原稿を作成する上での疑問点や問題点を検討します。先行研究の「文献」に焦点を当てまとめます。
- 第 14 回 統括・まとめ
レポート課題の作成し精査します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第 1 回：レポート課題として文献を英文・日本語論文としてリスト化
第 2 回：レポート課題として生理心理学・睡眠関係の学会をリスト化
文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
第 3 回～7 回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
（それぞれ「対象・方法」「図」「表」「考察」「文献」次回の授業で焦点を当てる項目を綿密に準備）
第 8 回～10 回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
第 11 回～14 回：論文原稿準備、繰り返し推敲
第 14 回：論文を完成させレポートとして提出（雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査）
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間計 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。適宜プリントなどを配布します。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第 I 巻 基礎. 北大路書房, 京都.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第 II 巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）30％、発表（学会も含む）30％、事前の課題（論文も含む）40％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

新型コロナ肺炎流行のため、2020 年度は実施しませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。事前に案内しますが、実施場所については注意してください。

【その他の重要事項】

学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。

【重要】新型コロナ肺炎に関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。受講生の希望も調査したいと思いますので、初回の授業には必ず出席して下さい。

【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として 30 年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞精神生理学、精神保健学

＜研究テーマ＞眠気、睡眠、うつ、ストレス

＜主要研究業績＞

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）、診療所で診るトラベルメデイスン（大越裕文 編著）、日本医事新報社、東京、p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気、睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）、新興医学出版社、東京、p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害、睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）、（株）新興医学出版社、東京、p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline and objectives】

We will learn how to read papers related to physiological psychology and how to prepare academic presentations / papers of their own research results. We will summarize the results of doctoral dissertation by repeating the process.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生理心理学の関連論文の抄読と、それをもとに自分の研究成果の学会発表・論文作成の方法を学び、その過程を繰り返しながら博士論文の成果としてまとめます。

特に生理心理学の手技・操作に精通し、必要なデータを採取し、解析ができるようにします。それらの成果を英文で発表できるようにします。

【到達目標】

1. 生理心理学手法を駆使し、適切なデータ解析・図表の説明・考察などを通して関係する学会への発表、および論文投稿を英語で行います。
2. 特に学会発表の場合は、海外での発表を意識し、エントリーから実際の発表までの過程やスケジュールの調整などを学びます。
3. 英語論文で、投稿誌の選び方、査読への返し方などを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習のため、発表を繰り返し行い、発表時のコメントなどについて自ら調べ、アクションペーパーとしてまとめ、提出してもらいます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、質疑応答や提出されたリアクションペーパーから生じた良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	生理心理学手法の習熟程度の把握や授業内容や範囲の希望をすり合わせます。
第2回	秋学期の学会発表の検討	海外での発表可能な学会の検索、学会スケジュール、準備すべきものを確認します。
第3回	先行研究の抄読会（1） 英語論文を中心に	自分の研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「問題点提起」に焦点を当てまとめます。
第4回	先行研究の抄読会（2） 英語論文を中心に	自分の研究に関わり合いの深い英語論文・英語成書の抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「対象・方法」に焦点を当てまとめます。
第5回	先行研究の抄読会（3） 英語論文を中心に	自分の研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「分析」に焦点を当てまとめます。

第6回	先行研究の抄読会（4） 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
第7回	先行研究の抄読会（5） 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「考察」に焦点を当てまとめます。
第8回	先行研究の抄読会（6） 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。疑問点や問題点を検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「文献」の書き方に焦点を当てまとめます。
第9回	学会発表の準備（1） 英語での発表を中心に	海外での学会発表への準備をします。抄録の作成のためデータ解析を行います。抄録のエントリー時に必要な情報を確認します。学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い発表原稿を英語で作成します。
第10回	学会発表の準備（2） 英語での発表を中心に	海外での学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い英語で作成します。英語論文の校閲の受け方を学びます。
第11回	学会発表の準備（3） 英語での発表を中心に	海外での学会発表研究に関係の深い論文・成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い英語で作成します。発表時間や発表の仕方に合わせて練習します。発表がポスターの場合は、ポスター作製の操作や手順を習います。
第12回	論文の作成（1）英語 での発表を中心に	今までの抄読会や学会発表の成果を通して英語論文にまとめます。投稿する論文を言語、難易度などを考慮し雑誌を選定します。雑誌の投稿要領を検討します。投稿論文に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。
第13回	論文の作成（2）英語 での発表を中心に	投稿原稿を作成する上での疑問点や問題点を検討します。先行研究の「文献」に焦点を当てまとめます。
第14回	論文の作成（3）英語 での発表を中心に	今までの抄読会や学会発表の成果を通して英語で論文にまとめます。投稿する英語論文を推敲します。雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回：レポート課題として文献を英文・日本語論文としてリスト化
第2回：レポート課題として生理心理学・睡眠関係の海外での学会をリスト化
文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
第2回は「問題点提起」に焦点を当てまとめます。

第3回～7回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表英語原稿準備

(それぞれ次回の授業で焦点を当てる項目を綿密に準備)

第3回は「対象・方法」に焦点を当てまとめます。

第4回は「分析」「結果」に焦点を当てまとめます。

第5回は「図」「表」に焦点を当てまとめます。

第6回は「考察」に焦点を当てまとめます。

第7回は「文献」の示し方に焦点を当てまとめます。

第8回～10回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、英語原稿を準備

第11回～14回：英語論文原稿準備、繰り返し推敲

第14回：英語論文を完成させレポートとして提出（雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査）

本授業の準備・復習時間は、各2時間計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。適宜プリントなどを配布します。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.

堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅰ巻 基礎. 北大路書房, 京都.

堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅱ巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）30%, 発表（学会も含む）30%, 事前の課題（論文も含む）40%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者が1名のため、特に評価アンケートはありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。事前に案内しますが、実施場所については注意してください。

【その他の重要事項】

学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。

【重要】新型コロナウイルスに関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。受講生の希望も調査したいと思しますので、初回の授業には必ず出席して下さい。

【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として30年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞精神生理学, 精神保健学

＜研究テーマ＞眠気, 睡眠, うつ, ストレス

＜主要研究業績＞

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメデイスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline and objectives】

We will learn how to read papers related to physiological psychology and how to prepare academic presentations / papers of their own research results. We will summarize the results of doctoral dissertation by repeating the process.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅰ

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論（おもに文献検討）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第3回	研究報告と討論（おもに内容）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第4回	研究報告と討論（主に分析）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第5回	研究報告と討論（おもに論理展開）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論（おもに理論）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論（おもに全体構成）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論（おもに論文フォーマット）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論（まとめ1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論（おもに実験計画）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論（おもに実験の実施法）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	研究報告と討論（おもに実験手続き）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究報告と討論（おもに実験実施上の問題点）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第14回	研究報告と討論（まとめ2）おもに	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。各回のテーマ（おもに～と記載されているもの）をとくに重視してまとめること。

本授業は毎回準備のために2時間以上の予習と同程度の復習を必要とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（40％）。
他人の研究について適切なコメントができたか（60％）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

学会発表のためのサポートを充実させるとともに統計手法についてのコメントをより詳細なものにします。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業をとるものは、この授業の参加をほかのすべての行事よりも優先すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞犯罪心理学
＜研究テーマ＞犯罪捜査への心理学の応用
＜主要研究業績＞「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline and objectives】

Do research on criminal psychology

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	秋学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。1）
第3回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。2）
第4回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。3）
第5回	研究報告と討論（おもにデータ分析についての討論、実習、問題点の修正1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論（おもにデータ分析についての討論、実習、問題点の修正2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論（おもにプレゼンテーションの準備1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論（おもにプレゼンテーションの準備2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論（おもに研究のプレゼンテーションとその相互評価1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論（おもに研究のプレゼンテーションとその相互評価2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論（おもに研究プレゼンテーションの修正と実習）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

- 第12回 研究報告と討論（おも 各自の研究の進捗状態を報告し、
に学会発表の準備、実 全員でディスカッションを行う。
習）
- 第13回 研究報告と討論（おも 各自の研究の進捗状態を報告し、
に論文執筆の準備） 全員でディスカッションを行う。
- 第14回 研究報告と討論（年間 各自の研究の進捗状態を報告し、
の研究業績の発表と討 全員でディスカッションを行う。
論）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（40％）。
他人の研究について適切なコメントができたか（60％）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

論文指導に関しては、論文の読み合わせ、口頭発表のシミュレーションなどを充実させます。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業受講者は他のすべての行事よりもこの授業への参加を優先すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 犯罪心理学

<研究テーマ> 犯罪捜査への心理学の応用

<主要研究業績> 「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline and objectives】

Do research on criminal psychology

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅰ

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

高水準の研究を行うためのプロセスとして、自分が研究したい分野の研究史の作成と、研究計画の立案を行う。

【到達目標】

自分が関心のある研究テーマについて先行研究を調査し、研究史をまとめ、未解決の問題を追究するための研究計画を立てることを春学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理学に関わる問題を自ら設定し、研究を実施し、論文やプレゼンとしてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで、研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。春学期は、研究テーマに関する先行研究の知識を深めるための研究史（レビュー）を執筆したり、独自の研究の内容を記述した研究計画書を作成したりする。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式のため、学生による活動報告やディスカッション、教員によるフィードバックが主体となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入	シラバスの説明、達成目標の設定
2	研究テーマの設定（1）	キーワードの選定、先行研究の検索・講読
3	研究テーマの設定（2）	キーワードの選定、先行研究の検索・講読
4	文献の検索・講読（1）	先行研究の検索・講読、研究史の作成
5	文献の検索・講読（2）	先行研究の検索・講読、研究史の作成
6	研究史としての文献の発表	研究史の発表
7	研究史の見直し	他者からのフィードバックの検討
8	修正研究史発表	修正版の研究史の発表
9	問題の設定	問題意識と研究目的の設定
10	変数の整理、仮説の設定	従属変数・独立変数の整理、目的に沿った研究仮説の設定
11	研究計画の立案	研究の目的・方法・予想される結果の検討、研究計画書の書き方、倫理審査のための準備
12	研究計画書の発表	研究計画の発表
13	研究計画書の見直し	他者からのフィードバックの検討
14	修正研究計画書発表、総括	修正版の研究計画書の発表、春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究の流れに沿って、ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し、次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業にて報告するための資料を準備する。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキストは特になし。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）（2001）. 心理学研究法入門
—調査・実験から実践まで— 東京大学出版会.
高野陽太郎・岡 隆（編）（2004）. 心理学研究法 一心を見つめる
科学のまなざし— 有斐閣アルマ.
松井豊（2006）. 心理学論文の書き方—卒業論文や修士論文を書く
ために— 河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%, 進捗状況報告 25%, 発表（研究史・研究計画書）50%の
割合で評価する。原則として正当な理由なく 4 回を超えて授業を
欠席した場合または発表を怠った場合は単位が授与されないものと
する。

【学生の意見等からの気づき】

博士後期課程科目につき授業改善アンケートを実施せず

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に
必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 言語学・音声学・認知科学
＜研究テーマ＞ 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞
北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 『音声学を学ぶ人のための
Praat 入門』ひつじ書房.
田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 「依頼に対する回答の仕方が話し手
の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目し
て」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R.,
and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to
perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of
the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

To develop a high-quality research program in psychology,
students will conduct a thorough literature review and
construct a research agenda in their area of specialization.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

高水準の研究を行うためのプロセスとして、自分で設定した研究計
画に沿った研究の実施と、研究成果の発表および研究論文の執筆を
行う。

【到達目標】

春学期に立てた研究計画に従って研究を実施し、論文やプレゼンと
してまとめることを秋学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
た能力を習得することができる（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理学に関わる問題を自ら設定し、研究を実施し、論文としてまと
め上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで、研究を行
うためのノウハウを実践的に学ぶ。秋学期は、研究計画書に沿って
研究を実施し、必要なデータを収集・分析・解釈した上で、研究論文
の執筆や効果的なプレゼンといった形で成果をまとめることを目指
す。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚など
のテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授
業は演習形式なので、学生による活動報告やディスカッション、教
員によるフィードバックが主体となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	研究計画の確認、進捗状況報告
2	研究の実施（1）	研究の実施、経過報告
3	研究の実施（2）	研究の実施、経過報告
4	研究の実施（3）	研究の実施、経過報告
5	データの整理・分析（1）	データの入力・整理
6	データの整理・分析（2）	データの入力・整理
7	記述統計量の計算	記述統計量の算出、効果的な図表の作り方
8	中間報告	研究結果に関する中間報告・討論
9	推測統計の適用	適切な検定の適用、検定結果の解釈
10	論文の執筆（1）	研究論文の書き方、「方法」「結果」の書き方
11	論文の執筆（2）	「導入」「考察」の書き方
12	論文の執筆（3）	タイトルのつけ方、参考文献の書き方、原稿の推敲
13	口頭発表の仕方（1）	口頭発表の心得、効果的な発表資料の作り方
14	口頭発表の仕方（2）、総括	論文提出、最終成果発表の準備、質疑への準備、秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究の流れに沿って、ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し、次の回
までに研究を進展させる。進捗状況を授業で報告するための資料を
準備する。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキストは特になし。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）（2001）. 心理学研究法入門
—調査・実験から実践まで— 東京大学出版会.

高野陽太郎・岡 隆（編）（2004）. 心理学研究法 ―心を見つめる科学のまなざし― 有斐閣アルマ.
松井豊（2006）. 心理学論文の書き方―卒業論文や修士論文を書くために― 河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%, 進捗状況報告 25%, 発表 50%の割合で評価する。原則として 4 回を超えて授業を欠席した場合または発表を怠った場合は単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

博士後期課程科目につき授業改善アンケートを実施せず

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 言語学・音声学・認知科学

＜研究テーマ＞ 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
＜主要研究業績＞

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 『音声学を学ぶ人のためのPraat 入門』 ひつじ書房.

田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

To maintain a high-quality research program in psychology, students will carry out research based on their research agenda, and summarize the results into a coherent presentation and research paper.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の大学院生が、主体的に研究を行い、論文を作成して投稿し、その論文が受理されるまでの一連の過程を実践できるようになることを目的とします。

【到達目標】

- (1) 研究テーマに関連する先行研究のシステムティックレビューを行うことができる。
- (2) 研究計画申請書を作成することができる。
- (3) 研究を実施してデータを収集することができる。
- (4) 論文を作成して、投稿することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回の授業では、各受講生の研究に関する発表と、それに対する意見交換を行います。受講生が将来、自立した研究者として活動することができるよう、主体的な活動を求めます。
課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストなどを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	各自の目標設定	この授業の受講を終えたとき、どのような成果を得ていたいかわかるようにする。
第 2 回	先行研究のシステムティックレビュー (1)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 3 回	先行研究のシステムティックレビュー (2)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 4 回	先行研究のシステムティックレビュー (3)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 5 回	先行研究のシステムティックレビュー (4)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 6 回	研究計画申請書の作成 (1)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 7 回	研究計画申請書の作成 (2)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 8 回	研究の実施状況の報告 (1)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 9 回	研究の実施状況の報告 (2)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。

第10回	研究の実施状況の報告 (3)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第11回	研究の実施状況の報告 (4)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第12回	研究の実施状況の報告 (5)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第13回	投稿論文の作成	投稿論文を作成して発表し、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第14回	目標の振り返り	授業開始時の目標を振り返り、今後の自らの研究活動を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 授業中に提示された課題、(2) 発表資料の作成に取り組みます。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 発表の内容が 60%、(2) 意見交換への参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の要望にしたがい、受講生の研究業績に直接的につながるような授業を行えるよう工夫します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

スポーツ心理学、健康心理学

＜研究テーマ＞

アスリートの支援、生涯スポーツの普及

＜主要研究業績＞

荒井弘和（編著）(2020). アスリートのメンタルは強いのか？ — スポーツ心理学の最先端から考える — 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to enable graduate students in doctoral course to independently do research, write and submit a research paper until the research paper is accepted.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の大学院生が、主体的に研究を行い、論文を作成して投稿し、その論文が受理されるまでの一連の過程を実践できるようになることを目的とします。

【到達目標】

(1) 論文を作成して、投稿することができる。

(2) 査読を受け、それに対して回答し、論文を受理してもらうことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回の授業では、各受講生の研究に関する発表と、それに対する意見交換を行います。受講生が将来、自立した研究者として活動することができるよう、主体的な活動を求めます。

課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストなどを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	各自の目標設定	この授業の受講を終えたとき、どのような成果を得たいか明確にする。
第2回	投稿論文の作成 (1)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第3回	投稿論文の作成 (2)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第4回	投稿論文の作成 (3)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第5回	投稿論文の作成 (4)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第6回	投稿論文の作成 (5)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第7回	投稿論文の作成 (6)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第8回	査読に対する回答 (1)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第9回	査読に対する回答 (2)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第10回	査読に対する回答 (3)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。

- 第11回 査読に対する回答 (4) 査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
- 第12回 査読に対する回答 (5) 査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
- 第13回 査読に対する回答 (6) 査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
- 第14回 目標の振り返り 授業開始時の目標を振り返り、今後の自らの研究活動を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 授業中に提示された課題、(2) 発表資料の作成に取り組みます。

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 発表の内容が 60%、(2) 意見交換の参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の要望にしたがい、受講生の研究業績に直接的につながるような授業を行えるよう工夫します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

スポーツ心理学、健康心理学

<研究テーマ>

アスリートの支援、生涯スポーツの普及

<主要研究業績>

荒井弘和（編著）(2020). アスリートのメンタルは強いのか？—スポーツ心理学の最先端から考える— 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to enable graduate students in doctoral course to independently do research, write and submit a research paper until the research paper is accepted.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間の発達の多様性や可変性を心理学研究の視点から捉え理解し、人間の発達のメカニズムを学び、発達心理学に深く関連する教育や臨床に貢献できる研究方法を学ぶ。

【到達目標】

人間の発達の多様性や可変性などマクロな視点から理解する。つぎに、心理学研究が着目してきた研究の流れを把握した上で、どういった研究テーマがあるかを理解する。そのうえで、自分の研究テーマを決定し、独自の研究方法を考案し、データの取りかたや、予測できる分析のしかたを学ぶとともに、分析した結果の考察の重要性を理解する。前期のなかで研究者としての研究行動（学会発表、論文投稿、研究費の獲得など）についても理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式とする。各自が積極的に研究を報告しディスカッションする。前期は、特に自分の研究テーマが発達心理学研究のどのような立ち位置にあり、どういった研究の貢献が可能であるか俯瞰できるようにする。毎回、レジュメとパワーポイントで説明できるようにする。課題のフィードバックは、学習支援システムなどで行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の本授業の目標と具体的な予定について理解する。
第2回	発達心理学および発達臨床心理学、学校心理学などの体系について理解する。	ハンドブックなどをもとに、研究をマクロな視点から理解する。
第3回	マクロな視点から自分の興味あるテーマを考える。	自分の興味が、これまでの研究の流れのなかでどのような位置にあるかを理解する。
第4回	自分の興味あるテーマに関する文献のリストアップ	キーワードを駆使して、自分の興味ある研究テーマの論文をリストアップし、可能な論文は入手する。
第5回	研究テーマに関する興味ある論文を発表する (1)。	自分の興味のある論文を発表し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究テーマに関する興味ある論文を発表する (2)。	自分の興味のある論文を発表し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究テーマに伴うさまざまな意見をまとめる (1)。	同じテーマでも対立する考えを見出し、まとめてみる。
第8回	研究テーマに伴うさまざまな意見をまとめる (2)。	同じテーマでも対立する考えを見出し、まとめてみる。
第9回	貢献できるフィールドを考えて見学する。	自分の研究テーマがによって将来貢献できるフィールドを考える。発表する。

- 第10回 貢献できるフィールド 自分の研究テーマがによって将来
を考えて見学する。 貢献できるフィールドを考えて、
訪問する。できれば発表する。
- 第11回 大枠でリサーチクエス 各自の進捗状態を報告し、全員で
ションを考え、研究計 ディスカッションを行う。
画を練る（1）。
- 第12回 大枠でリサーチクエス 各自進捗状態を報告し、全員で
ションを考え、研究計 ディスカッションを行う。
画を練る（2）。
- 第13回 研究構想を発表と討論 研究構想を発表し合い、ディス
（1） カッションする。
- 第14回 緩急構想の発表と討論 継続して、研究構想を発表し、
（2） ディスカッションする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
レビューとなる研究論文や書籍を読破するとともに、常に最新の研
究論文をチェックし、問題と目的を明確にし、研究計画をたて実施
し、分析し、考察することをデフォルトにできるようにする。また、
長期的な展望のなか学会発表や論文の投稿を計画し毎回自主的に実
施していく。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。ただし、4月までに良書が紹介できたら、授業の開始
時に伝える。

【成績評価の方法と基準】

毎回の活動目的を遂行しているか（80％）。
実際の研究活動をポートフォリオでチェックし、実行できているか
（20％）。

【学生の意見等からの気づき】

授業では全体指導であるが、それに関連する個別のサポートを明確
にし、互いに連動できるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

つねに、何が必要かどうかすれば研究が進むかをメタ認知し、必要な
機器を準備する。

【その他の重要事項】

この授業の参加を優先すること。自分からやりたいことを提案でき
るようにモチベーションを高くもてるようレジリエントになること。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home> <専門領域> 発達心
理学、発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ> 社会性、道徳性、感情のメカニズムの解明と社会や
学校での危機問題の予防
Homepage 参考

【関連論文1】

児童の感情リテラシーは教育しうるか—発達のアウトラインと支援
のありかた— エモーション・スタディーズ
第2巻 第1号 pp. 16—24 2016年

【関連論文2】

健全な学校風土をめざすユニヴァーサルな学校予防教育—免疫力を
高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソー
シャル・エモショナル・ラーニング 教育心理学年報 Vol.54,126-
141. 2015年8月25日

【関連論文3】

「学校予防教育に必要な『道徳性・向社会的行動』の育成」発達心理
学研究 2014年12月20日第25巻, 第4号, 422-431.

【関連論文4】

School psychology research and practice in East Asia:
Perspectives on the past, present, and future directions
of the field. School Psychology International, 1-26. doi:
10.1177/014034316671354.
(with Brown, J.A., Lee, D.H., & McIntosh, K.)

【Outline and objectives】

We will attempt to understand the diversity and variability
of human development from the viewpoint of psychological
research, study the mechanisms of human development, and
learn about research methods that can contribute to educa-
tional and clinical research deeply related to developmental
psychology.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間の発達の多様性や可変性を心理学研究の視点から捉え理解し、人間の発達のメカニズムを学び、発達心理学に深く関連する教育や臨床に貢献できる研究方法を学ぶ。

【到達目標】

心理学特殊研究Ⅰをさらに発展させ、具体的な研究目標のもとに研究を発表し、研究論文を執筆することを目標とする。研究論文の多様性や求められていること（研究分野、執筆要項の特徴、研究評価の観点など）を明確に理解し、発表のスキルと執筆スキルを獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式とする。各自が積極的に研究を報告しディスカッションする。後期は自分の研究テーマが発達心理学研究のどのような立ち位置にあり、どういった研究の貢献が可能であるかを明確にし、毎回アウトプットできるようにする。課題のフィードバックは、学習支援システムで行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	秋学期の本授業の目標と具体的な予定について理解する。
第2回	学術研究論文の特徴と執筆要項を学ぶ	関連する学術雑誌の特徴と執筆要項について理解し、発表する。
第3回	注目している和文の文献をレポートする（1）。	各自注目している和文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第4回	注目している和文の文献をレポートする（2）。	各自注目している和文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第5回	注目している英文の文献をレポートする（1）。	各自注目している英文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第6回	注目している英文の文献をレポートする（2）。	各自注目している英文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第7回	研究を発表する（学会発表スキル）（1）	学会発表をするための具体的な行動を学ぶ。
第8回	研究を発表する（学会発表スキル）（2）	学会発表をするための具体的な行動を学ぶ。
第9回	研究論文を執筆する（1）。	自分の研究したいことをまとめられるようにスキルを考える。
第10回	研究論文を執筆する（2）。	自分の研究したいことをまとめられるようにスキルをアップする方法を考える。
第11回	研究論文を執筆する（3）。	先行研究の技術を発見する。
第12回	研究論文を執筆する（4）。	実際に執筆してみる。
第13回	互いに査読しあう（1）。	どのようなことが研究するに必要なかを体感できるようにする。
第14回	互いに査読しあう（2）。	さらにチャレンジできるように総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。レヴューとなる研究論文や書籍を読破するとともに、常に最新の研究論文をチェックし、問題と目的を明確にし、研究計画をたて実施し、分析し、考察することをデフォルトにできるようにする。また、長期的な展望のなか学会発表や論文の投稿を計画し毎回自主的に実施していく。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

毎回の活動目的を遂行しているか（80％）。実際の研究活動をポートフォリオでチェックし、実行できているか（20％）。

【学生の意見等からの気づき】

授業では全体指導であるが、それに関連する個別のサポートを明確にし、互いに連動できるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

つねに、何が必要かどうかすれば研究が進むかをメタ認知し、必要な機器を準備する。

【その他の重要事項】

この授業の参加を優先すること。自分からやりたいことを提案できるようにモチベーションを高くもてるようレジリエントになること。英語論文の書き方、また海外の学会参加及び発表の仕方も伝える。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞社会性、道徳性、感情のメカニズムの解明と社会や学校での危機問題の予防

Homepage 参考

<https://sites.google.com/site/emywata/Home>

【関連論文1】

児童の感情リテラシーは教育しうるか—発達のアウトラインと支援のありかた— エモーション・スタディーズ
第2巻 第1号 pp. 16—24 2016年

【関連論文2】

健全な学校風土をめざすユニバーサルな学校予防教育—免疫力を高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソーシャル・エモショナル・ラーニング 教育心理学年報 Vol.54,126-141. 2015年8月25日

【関連論文3】

「学校予防教育に必要な『道徳性・向社会的行動』の育成」発達心理学研究 2014年12月20日第25巻, 第4号,422-431.

【関連論文4】

School psychology research and practice in East Asia: Perspectives on the past,present,and future directions of the field. School Psychology International,1-26. doi: 10.1177/014034316671354. (with Brown,J.A.,Lee,D.H.,& McIntosh ,K.)

【Outline and objectives】

We will attempt to understand the diversity and variability of human development from the viewpoint of psychological research, study the mechanisms of human development, and learn about research methods that can contribute to educational and clinical research deeply related to developmental psychology.

PSY500B6

心理学英語論文作成指導

田嶋 圭一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学分野で高水準の英語論文を自分で執筆するための知識やスキルを学ぶ。

【到達目標】

1. 論文の着想から投稿・査読・採択までの具体的な流れを把握する。2. 日本語論文との比較を通して英語論文の特徴をつかむ。3. 英語学術雑誌に投稿可能な高水準の論文を執筆するためのノウハウを習得する。4. 論文にふさわしい英語表現のレパートリーを可能な限り蓄積する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的には講義より学生による演習およびグループまたは全体でのディスカッション、教員からのフィードバックを中心に授業を進める。講義では、論文執筆のプロセス、英語論文の特徴や具体的な書き方などについて解説を行う。演習では、受講生に英語表現や論文執筆に関する課題に取り組んでもらう。時間があれば、実際に受講生が執筆中あるいは執筆準備中の論文に取り組んでもらうことも考えられる。英語論文作成の経験量や熟達度は個人差があることが予想されるため、受講生の進度に応じた指導を行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の目的と計画の説明、受講生の英語レベルの確認
第2回	英語論文の特徴	論文とは、英語論文の特徴、着想から投稿・採択まで、英語論文作成のメリット
第3回	英語表現演習（1）	機能語と内容語
第4回	英語表現演習（2）	表現英訳、全文英訳
第5回	英語タイトルの特徴	英文タイトルの特徴
第6回	英語タイトル表現演習	英語タイトル課題の復習
第7回	英語アブストラクトの特徴	英語アブストラクトの特徴、読み方
第8回	英語アブストラクト表現演習（1）	導入・方法の英訳
第9回	英語アブストラクト表現演習（2）	結果・考察の英訳
第10回	英語アブストラクト表現演習（3）	演習問題に関するディスカッション・フィードバック
第11回	自分の研究の英語表現演習（1）	自分の研究を日本語で表現
第12回	自分の研究の英語表現演習（2）	自分の研究を英語で表現
第13回	自分の研究の英語表現演習（3）	自分の研究を英語で表現、演習問題に関するディスカッション・フィードバック
第14回	授業の総括	授業全体のまとめ、フィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、計4時間を標準とする。毎回の授業で指定された課題に取り組み、次の授業に備えること。

【テキスト（教科書）】

英語論文作成に関しては多数の書籍が出版されている。心理学に特化したものもあればより一般的なものもある。以下にその一部を記載する。本授業では特に1番の書籍を参考に講義を行う予定である。購入は必須ではないが、今後の研究活動に役立つ可能性があるという意味では買って置いて損はないかもしれない。

1. 坂本真士、大平英樹（2013）. 心理学論文道場—基礎から始める英語論文執筆 世界思想社.
2. 羽生和紀（2014）. 心理学のための英語論文の書き方・考え方 朝倉書店.
3. 高橋雅治, デイビッドシュワープ, バーバラ・シュワープ（2013）. 心理学のための英語論文の基本表現 朝倉書店.
4. 崎村耕二（1991）. 英語論文によく使う表現 創元社.
5. 安原和也（2013）. 基本例文 200 で学ぶ英語論文表現—アウトプット練習問題集 三修社.
6. エディテージ（著）, 熊沢美穂子（訳）（2016）. 英文校正会社が教える英語論文のミス 100 ジャパンタイムズ.

【参考書】

【テキスト（教科書）】の項目を参照。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40%, 課題 60%の割合で評価する予定。

【学生の意見等からの気づき】

博士課程の集中講義だったが、2018年度に独自にアンケートを実施したので気づきを以下に記す。

回答者4名中3名が「履修してよかったか」「工夫されていたか」「理解できたか」という間に「4」「5」で回答してくれました。自分の研究に英語アブストラクトを書く作業を中心に、文法・体裁・内容の相互チェックや教員によるライブ添削を行いました。色々と各自が疑問に思っていたことが解決できたという肯定的なコメントもありましたが、一方で3日間の集中講義形式には限界があり、仮に今後もこの授業形態を維持しつつも論文本体の執筆にも取り組むのであれば、事前に受講希望者の熟達度チェックや課題などを導入する必要があるかも知れないことに気づきました。

【その他の重要事項】

集中講義をより充実した内容にするために事前課題を課す可能性がある。詳細は適宜学習支援システムや大学院 ML などでお知らせする予定。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 『音声学を学ぶ人のためのPraat 入門』ひつじ書房.

田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn and develop skills to write a publishable-quality English research paper in the field of psychology.

PSY500B6

精神生理学特殊講義

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学専攻で博士後期課程のコースワークとしての講義です。自分の専門以外の研究分野の方法や内容を知り、将来のキャリア形成、研究分野の視野形成の拡大に寄与するための科目です。自分の専門以外の領域の研究を学べる機会と位置づけて、興味や知識の拡大の意義を理解し、受講してください。内容としては、睡眠と生体リズムの研究の現状やそれが及ぼす精神保健上のストレスの問題を取り上げます。

【到達目標】

精神生理学・精神保健学の専門領域の研究現状を知り、心理学の教育・研究に携わる際の応用力を蓄積することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義者が実際に行ってきた精神生理学・精神保健学の研究分野を具体的に解説し、またこの分野においては是非知っておくべき文献検討を行っていきます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、生じた疑問や問題を討論します。発表後には、振り返りレポートを提出してもらい、疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	この授業の趣旨と扱うテーマの概要説明
第2回	睡眠研究の基礎	睡眠の基礎と方法論の展開
第3回	睡眠研究の現状 1	精神生理学的な手法とデータ採取
第4回	睡眠研究の現状 2	心理学者が知っておくべき論文：睡眠と記憶
第5回	睡眠研究の現状 3	心理学者が知っておくべき論文：睡眠と生体リズム
第6回	睡眠研究をひもとく 1	隔離実験（北海道大学での共同研究）睡眠編
第7回	睡眠研究をひもとく 2	隔離実験（北海道大学での共同研究）生体リズム編
第8回	睡眠研究の現状 4	心理学者が知っておくべき論文：眠気
第9回	睡眠研究の現状 5	時差ぼけのフィールド実験 1 日本からアメリカへ
第10回	睡眠研究の現状 6	時差ぼけのフィールド実験 2 日本から欧州へ
第11回	睡眠研究と精神保健学 1	睡眠と身体的健康に関する文献研究
第12回	睡眠研究と精神保健学 2	睡眠とメタボリック症候群に関する文献研究
第13回	睡眠研究と精神保健学 3	睡眠とうつに関する文献研究
第14回	睡眠研究と精神保健学 4	睡眠と自殺に関する文献研究、総括
	まとめ	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回（第2回～14回）の話題に対して、文献や資料を提示します。次の授業で議論を深めるため授業時間外学習として提示された文献等に目を通してきてください。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

使用しません。適宜プリントで配布します。

【参考書】

特に指定しません。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、授業時のディスカッションでの発言 50 %で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

3年に一度の開講科目のため、2020年度は実施しませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

博士後期課程のコースワークとして、指導教員以外の学生しか単位認定されません。

【重要】新型コロナ肺炎に関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。皆さんの希望も調査したいと思いますので、初回の授業には必ず出席して下さい。

【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として30年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>精神生理学、精神保健学

<研究テーマ>眠気、睡眠、うつ、ストレス

<主要研究業績>

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメディスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社、東京、p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気、睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社、東京、p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害、睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社、東京、p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療、11, 525-530.

【Outline and objectives】

This is a lecture as a coursework for the doctoral program in the Department of Psychology.

In this class, we will learn the methods and contents of research fields other than your own specialty, and to contribute to future career development and expansion of the field of view of your research field. Please consider this as an opportunity to learn research in areas other than your own specialty, understand the significance of expanding your interests and knowledge, and take the course. The content will cover the current state of sleep and biological rhythm research and the problems of mental health stress caused by it.

PSY500B6

言語心理学特殊講義

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

私たちが文章を読んでいる際、様々な認知活動は行われている。従来、書かれた情報がどのように理解されるかについて研究が多く行われていたが、最近、感情に焦点化した研究が増えてきた。その感情喚起プロセスについて、本授業で

取り上げる。授業の目的は最新の感情喚起プロセスについて学ぶ。その際、博士後期課程の院生に求められている英語力を上げるために、取り上げる論文はすべて英文とする。また、得られた知識を分かりやすく伝えるためにどうすればよいかについても体験を通して学ぶ。

【到達目標】

- ①読解中に読み手の感情や読み手による感情推論に関する最近の知見を得る。
- ②得られた情報を元に、自分なりの感情と読みの知見を再構成する。
- ③②について、異なった知識量を持った人々に効果的に伝えられるようになる。
- ④英語論文の読解力が高くなる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による発表が中心である。発表の形式は各自工夫すること。ただし、どのような方法で発表する場合でも、配付資料は用意すること。また、提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認
第2回	KW 論文発表1	用意された読みと感情に関する論文を発表
第3回	KW 論文発表1	用意された読みと感情に関する論文を発表
第4回	発展論文発表1	KW 論文発表を受けて、それを発展させる論文を検索し、発表
第5回	発展論文発表2	KW 論文発表を受けて、それを発展させる論文を検索し、発表
第6回	自分の研究と関連した論文発表1	今までの発表と自分の研究をリンクさせる論文を検索し、発表
第7回	自分の研究と関連した論文発表2	今までの発表と自分の研究をリンクさせる論文を検索し、発表
第8回	感情と読みに関するまとめ発表1	院生による発表
第9回	感情と読みに関するまとめ発表2	院生による発表
第10回	大学生向け模擬授業1	大学生を対象に、感情と読みをテーマにした模擬授業をおこなう
第11回	大学生向け模擬授業2	大学生を対象に、感情と読みをテーマにした模擬授業をおこなう
第12回	高校生向け模擬授業1	高校生を対象に、感情と読みをテーマにした模擬授業をおこなう
第13回	高校生向け模擬授業2	高校生を対象に、感情と読みをテーマにした模擬授業をおこなう
第14回	総括	感情と読みをテーマにした模擬授業をおこなう

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回～第8回 発表の準備

第9回～第12回 模擬授業の準備

第13回 自分の知識変化や自他の発表に関する自己評価
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特にありません

【参考書】

O'Brien et al.(Eds.) (2015). Inferences during Reading. Cambridge University.

【成績評価の方法と基準】

授業中の発表 50%とディスカッション時の発言 50%で評価します。準備をして授業に参加することが重要な科目になっています。そのため、4回以上欠席した場合は単位は修得できません。

【学生の意見等からの気づき】

新規授業のために記述する内容はあります。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

本授業担当の福田の専門領域は言語心理学である。言語心理学の知見を生かし、国語教育に応用する教育心理学的な研究も行っている。研究テーマは、文章理解における浅い処理に関する研究、コミュニケーションにおける言語活動の役割である。主要研究業績は以下の通りである。

*福田由紀・菰原遥・菊池理紗(印刷中). 言語心理学で何を学べるか? —言語学との学問イメージ比較— 法政大学文学部紀要,

*福田由紀・佐藤志保(2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか? 読書科学, 59,161-171.

*福田由紀・土清水咲菜・荒井弘和(2016). 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか? 法政大学文学部紀要, 73,99-108.

*福田由紀・楢原拓也(2015). 朗読をすると気分がよくなるのか? —音読と比較して— 読書科学, 57,23-34.

*福田由紀・内山和希(2015). 表示媒体は校正読みにおける誤字脱字検出数と内容理解に影響するか? —印刷物とタブレット、パソコンディスプレイの比較— 法政大学文学部紀要, 70,89-100.

*福田由紀・青山喜乃(2014). 手書き文字の筆跡と表記の親近性が自他の名前判断に及ぼす影響 法政大学文学部紀要, 69,75-86.

*福田由紀(2014). 暗唱の言語心理学的検討—行動指標と脳神経学的指標を用いて— 野間教育研究所紀要第54集, 1-166.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the process of reader's emotions during reading. Students will be expected to make a presentation about the reader's emotions during reading by individual literature study and deepen their comprehension of it.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』写本の精読と注釈。
- ◆鎌倉時代に書写された『源氏物語』「帯木」巻の写本を、読解し、注釈してゆきます。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
 - A, くずし字（変体仮名）を解説する力
 - B, 古文を正確に訳出する力
 - C, 語法や典拠を調査する力
 - D, 明快なプレゼンテーションをおこなう力
 - E, 問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、句読点やカギカッコを付し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。
- ◆それを元に、先行の注釈書と比較しながら、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「帯木」	序文
3	「帯木」	長雨
4	「帯木」	頭中将
5	「帯木」	雨夜の品定
6	「帯木」	左馬頭、藤式部丞
7	「帯木」	葎の門の女
8	「帯木」	欠点
9	「帯木」	軽々しい女
10	「帯木」	艶なる女
11	「帯木」	夫婦
12	「帯木」	筆の道
13	「帯木」	物怨じの女
14	「帯木」	指をかむ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「桐壺」巻～「若紫」巻を、よく読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

阿仏尼本の影印（『東洋大学附属図書館蔵 阿仏尼本は、き木』勉誠出版）を用います。授業時にPDF版を配布します。

【参考書】

- ◆以下のテキストのいずれかを座右に置いてください。
 - ◎中嶋尚編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 帯木』（至文堂）
 - ◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）
 - ◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）
 - ◎今泉忠義訳『源氏物語 新装版』1（講談社学術文庫）
 - ◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）
 - ◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』写本の精読&注釈。
- ◆鎌倉時代に書写された『源氏物語』「帯木」巻の写本を、読解し、注釈してゆきます。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
- A, くずし字（変体仮名）を解説する力
- B, 古文を正確に訳出する力
- C, 語法や典拠を調査する力
- D, 明快なプレゼンテーションをおこなう力
- E, 問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、句読点やカギカッコを付し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。
- ◆それを元に、先行の注釈書と比較しながら、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「帯木」	風流な女
3	「帯木」	なでしこの花
4	「帯木」	常夏の歌
5	「帯木」	賢き女
6	「帯木」	蒜の歌
7	「帯木」	座談の結論
8	「帯木」	光源氏、移動
9	「帯木」	紀伊守の家
10	「帯木」	朝顔の姫君
11	「帯木」	伊予守の後妻
12	「帯木」	小君
13	「帯木」	光源氏、寝所へ
14	「帯木」	なよ竹の心地

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「桐壺」巻～「若紫」巻を、よく読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

阿仏尼本の影印（『東洋大学附属図書館蔵 阿仏尼本は、き木』勉誠出版）を用います。授業時にPDF版を配布します。

【参考書】

- ◆以下のテキストのいずれかを座右に置いてください。
- ◎中嶋尚編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 帯木』（至文堂）
- ◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）
- ◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）
- ◎今泉忠義訳『源氏物語 新装版』1（講談社学術文庫）
- ◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）
- ◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成のために、論文執筆の基礎を学び、実際に博士論文作成の作業を行う。

【到達目標】

博士論文作成の基礎的学力を身につけ、論文作成のための研究計画を確実なものとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

先行研究の検討と論文作成のための基礎資料を収集する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説 1	博士論文の意義
第 2 回	概説 2	博士論文の意義
第 3 回	先行研究の調査 1	先行論文の検討
第 4 回	先行研究の調査 2	先行論文の検討
第 5 回	先行研究の調査 3	先行論文の検討
第 6 回	基礎資料の収集と分析 1	基礎資料の分析と問題点の析出
第 7 回	基礎資料の収集と分析 2	基礎資料の分析と問題点の析出
第 8 回	基礎資料の収集と分析 3	基礎資料の分析と問題点の析出
第 9 回	論文骨子の作成 1	論文の全体像を検討する
第 10 回	論文骨子の作成 2	論文の全体像を検討する
第 11 回	論文骨子の作成 3	論文の全体像を検討する
第 12 回	論文骨子の作成 4	論文の全体像を検討する
第 13 回	論文骨子の作成	論文の全体像を検討する
第 14 回	まとめ	春学期における博士論文作成段階の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
先行研究の収集と分析。

【テキスト（教科書）】

特にない。

【参考書】

必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

論文作成の到達度をもとに評価する。100 %。

【学生の意見等からの気づき】

博士論文作成には長期の研究計画が必要であり、そのことを意識して指導する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代日本文学
<研究テーマ> 古事記、万葉集
<主要研究業績>

「亡き人に逢える 島一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

We would study the basics of doctoral thesis writing and actually write doctoral thesis.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成のために、論文執筆の基礎を学び、実際に博士論文作成の作業を行う。

【到達目標】

博士論文作成の基礎的学力を身につけ、論文作成のための研究計画を確実なものとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

先行研究の検討と論文作成のための基礎資料を収集する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説 1	博士論文の意義
第 2 回	概説 2	博士論文の意義
第 3 回	先行研究の調査 1	先行論文の検討
第 4 回	先行研究の調査 2	先行論文の検討
第 5 回	先行研究の調査 3	先行論文の検討
第 6 回	基礎資料の収集と分析 1	基礎資料の分析と問題点の析出
第 7 回	基礎資料の収集と分析 2	基礎資料の分析と問題点の析出
第 8 回	基礎資料の収集と分析 3	基礎資料の分析と問題点の析出
第 9 回	論文骨子の作成 1	論文の全体像を検討する
第 10 回	論文骨子の作成 2	論文の全体像を検討する
第 11 回	論文骨子の作成 3	論文の全体像を検討する
第 12 回	論文骨子の作成 4	論文の全体像を検討する
第 13 回	論文骨子の作成	論文の全体像を検討する
第 14 回	まとめ	秋学期における博士論文作成段階の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
先行研究の収集と分析。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

論文作成の到達度をもとに評価する。100 %。

【学生の意見等からの気づき】

博士論文作成には長期の研究計画が必要であり、そのことを意識して指導する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代日本文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集

<主要研究業績>

「亡き人に逢える 島一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

We would study the basics of doctoral thesis writing and actually write doctoral thesis.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では狂言の作品を読んでいく。狂言の作品研究を行なうためには、台本の比較、語釈、作品背景の調査が必要となる。これらを行なうための基礎力をつけるため、祝本と他台本との比較検討を行なう。その上で、作品の典拠・歴史的背景を調査し、作品の素材となったものを分析する。それと同時に類曲の整理も行ない、狂言研究の基礎を学んでいく。

【到達目標】

本講義では、狂言台本の比較の詳細な分析を通して、狂言の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げするための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第 2 回	狂言の作品研究概説	主要な作品研究の先行論文を読み、研究手法を概説する。
第 3 回	狂言台本概説①	狂言の作品研究に用いる台本を概説する（各流の台本）。
第 4 回	狂言台本概説②	狂言の作品研究に用いる台本を概説する（各流の台本）。
第 5 回	「したうはうかく」①	担当者による資料分析。
第 6 回	「したうはうかく」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 7 回	「子ぬす人」①	担当者による資料分析。
第 8 回	「子ぬす人」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 9 回	「ぬすむかん」①	担当者による資料分析。
第 10 回	「ぬすむかん」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 11 回	「とひこゑ」①	担当者による資料分析。
第 12 回	「とひこゑ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 13 回	「しんぼち」①	担当者による資料分析。
第 14 回	「しんぼち」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
発表することだけでなく、必ず論文文化を目指す。

【テキスト（教科書）】
授業内に指示する。

【参考書】
授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%
講義での発言 30%
レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

口頭発表の機会を作る。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞能楽

＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011 年）「義経の悲運を〈語る〉劇：判官物の能の手法」（『説話文学研究』54 号、2019 年 9 月）

【Outline and objectives】

In this lecture, we will read Kyogen works. In order to study Kyogen, it is necessary to compare the scripts, interpret the words, and investigate the background of the works. In order to develop the basic skills to do this, we will compare Iwaibon with other scripts. In addition, we will investigate the sources and historical background of the works, and analyze the materials used in the works. At the same time, students will learn the basics of Kyogen research by organizing similar works.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様に天正狂言本と他台本の比較を通しての作品研究を行っていく。春学期からの出席者を考慮し、まず春学期に学んだ狂言の作品研究の基礎を確認した上で、当該資料を用いた作品研究を行っていく。

【到達目標】

本講義では、狂言台本の比較の詳細な分析を通して、狂言の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とするが、それがある程度身に付いた出席者には他の資料も紹介し、主要な能楽資料に関する知識も広げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行っていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第 2 回	「おほか酒」①	担当者による資料分析。
第 3 回	「おほか酒」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 4 回	「くわいちうむこ」①	担当者による資料分析。
第 5 回	「くわいちうむこ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 6 回	「さいのめ」①	担当者による資料分析。
第 7 回	「さいのめ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 8 回	「まんちううり」①	担当者による資料分析。
第 9 回	「まんちううり」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 10 回	「かんつぶて」①	担当者による資料分析。
第 11 回	「かんつぶて」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 12 回	「ぶす」①	担当者による資料分析。
第 13 回	「ぶす」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 14 回	総括	狂言作品研究のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

学外での発表も求めていく。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%
講義での発言 30%
レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

雑誌への投稿論文と結びつけていく。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【Outline and objectives】

As in the spring term we will study the work by comparing iwaibon and other scripts. Considering attendees from the spring term, we will first confirm the basics of Kyogen research learned in the fthe spring term and analyze the work using the text.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程 1 年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程 2・3 年次はそれぞれ秋学期と春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明
第 2 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）①	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告
第 3 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）②	同上
第 4 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）③	同上
第 5 回	関心対象の紹介（1 年次生）①	関心対象について、学術研究の可能性を考える
第 6 回	関心対象の紹介（1 年次生）②	同上
第 7 回	博士後期課程の中間報告（2・3 年次生）①	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第 8 回	修士課程の中間報告（2・3 年次生）②	同上
第 9 回	研究動向の確認（1 年次生）	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討
第 10 回	先行研究の論旨の整理（2・3 年次生）①	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討
第 11 回	先行研究の論旨の整理（2・3 年次生）②	同上
第 12 回	先行研究の論旨の整理（1 年次生）①	同上
第 13 回	先行研究の論旨の整理（1 年次生）②	同上
第 14 回	夏期休暇中の作業計画立案	各自が行うべき作業の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 5 分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014 年）

②「「秘曲尽くし」再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013 年）◇付録 CD 「「秘曲尽くし」再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏・小調子、笙・平調入調、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「工尺譜の起源をめぐって—唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集 文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』和泉書院、2013 年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程 1 年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程 2・3 年次生はそれぞれ秋学期、春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第 2 回	博士論文構想の報告 (2・3 年次生) ①	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告
第 3 回	博士論文構想の報告 (2・3 年次生) ②	同上
第 4 回	博士論文構想の報告 (2・3 年次生) ③	同上
第 5 回	先行研究の紹介と整理 (1 年次生) ①	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ
第 6 回	先行研究の紹介と整理 (1 年次生) ②	同上
第 7 回	博士後期課程の中間報告 (1・2 年次生) ①	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第 8 回	博士後期課程の中間報告 (1・2 年次生) ②	同上
第 9 回	博士論文の中間報告 (2 年次生) ①	博士論文執筆の進捗状況に関する報告
第 10 回	博士論文の中間報告 (2 年次生) ②	同上
第 11 回	博士論文の構想発表 (1 年次生) ①	学術的な論理展開に基づき、博士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す
第 12 回	博士論文の構想発表 (1 年次生) ②	同上
第 13 回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義

第 14 回 まとめ

春季休暇中の作業課題に関する計画を示す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014 年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013 年）◇付録 CD 「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏・小調子、笙・平調入調、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009 年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
 ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
 ③受講生各自の研究する作家・作品に近接する仕事をした作家・作品に関する認識の養成。これにより幅広い知見を獲得する。
 ④上記の研究を推進しながら、博士論文作成へと連続させていくこと。

【到達目標】

受講者各人が、具体的な作品・テキストに向き合い、立論・注釈・解釈・先行文献の調査などのさまざまな方法を学びつつ、論文作成の実際を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本の一九世紀及び二〇世紀前半の任意の作品・テキストを取り上げ、各自の研究計画に基づいて授業で発表・討議する。自己の研究を深めていくと同時に、他の受講生からの批判、助言、異なった観点や見解等を汲み上げながら、文学認識を高度化していく。それらにより、目標とする優れた博士論文作成へと繋げていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回	オリエンテーション	本授業（演習）の目的と運営概説。 春学期の成果との関連性の確認。
2 回	研究史を踏まえた方法論の諸問題 1	近代文学研究史をどう自分のものにするか。
3 回	研究史を踏まえた方法論の諸問題 2	近代文学研究史をどう自分のものにするか。
4 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
5 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
6 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
7 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
8 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
9 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。

10 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
11 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
12 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
13 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
14 回	総括	それぞれの反省と今後の展望。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自己の担当作品の発表の準備を充分にすることは当然のことながら、演習参加者も作品を読み私見を深め討論の準備をすること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントによる。発表者は発表にさきがけて当該作品のテキストを指定すること。

【参考書】

演習中に適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

発表内容（40 %）、討論への参加状況（40 %）、期末レポート（20 %）。

【学生の意見等からの気づき】

活発な議論の場を提供する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学

<研究テーマ>

近代文学の成立期の研究－19 世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

<主要研究業績>

・「紀久八狂乱－広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『髪下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ－雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学－『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline and objectives】

See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③受講生各自の研究する作家・作品に近接する仕事をした作家・作品に関する認識の養成。これにより幅広い知見を獲得する。
- ④上記の研究を推進しながら、博士論文作成へと連続させていくこと。

【到達目標】

受講者各人が、具体的な作品・テキストに向き合い、立論・注釈・解釈・先行文献の調査などのさまざまな方法を学びつつ、論文作成の実際を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本の一九世紀及び二〇世紀前半の任意の作品・テキストを取り上げ、各自の研究計画に基づいて授業で発表・討議する。自己の研究を深めていくと同時に、他の受講生からの批判、助言、異なった観点や見解等を汲み上げながら、文学認識を高度化していく。それらにより、目標とする優れた博士論文作成へと繋げていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	オリエンテーション	本授業（演習）の目的と運営概説。 春学期の成果との関連性の確認。
2 回	春学期のでの成果を踏まえたうえでの課題の整理	各自の論の反省的省察。
3 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
4 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
5 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
6 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
7 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
8 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
9 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
10 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。

- | | | |
|------|----------------------------|--------------------|
| 11 回 | 受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議 | 各人のテーマに基づく研究発表・討議。 |
| 12 回 | 受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議 | 各人のテーマに基づく研究発表・討議。 |
| 13 回 | 受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議 | 各人のテーマに基づく研究発表・討議。 |
| 14 回 | 総括 | それぞれの反省と今後の展望。 |

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自己の担当作品の発表の準備を充分にすることは当然のことながら、演習参加者も作品を読み私見を深め討論の準備をすること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントによる。発表者は当該作品のテキストを指定し周知すること。

【参考書】

演習中に適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

発表内容（40 %）、討論への参加状況（40 %）、期末レポート（20 %）。

【学生の意見等からの気づき】

活発な議論の場を提供する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学

<研究テーマ>

近代文学の成立期の研究－19 世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

<主要研究業績>

・「紀久八狂乱－広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『鬘下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ－雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学－『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline and objectives】

See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

藤村 耕治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代文学の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現在に至るまでの作家・作品を中心に扱う。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して、研究報告を発表用資料として論文形式で作成し、それを基に発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く厳密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。
3. 博士論文執筆のための高度な文章力・論理構成力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作家・作品について、従来の研究成果を十分に踏まえつつ、新しい、独自の観点から分析・検討を行い、博士論文の一部を構成する論文を執筆すること。
2. 発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、学会発表などに耐えうる客観的で高度な研究の力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする作家・作品について論文形式の発表用資料を作成して発表し、他の受講者を交えて討議する形で行う。発表者は討議内容を踏まえて、自身の発表における不備や再考を要する点などを十分に検討し、精度を高めていき、最終的には学会誌等に投稿可能な論文に練り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマと現時点での展望について聞く。
第 2 回	担当者 1 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 3 回	担当者 1 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 4 回	担当者 1 による発表・報告③	結論と今後の課題についての報告。
第 5 回	担当者 2 による発表・報告①	第 2 回と同じ。
第 6 回	担当者 2 による発表・報告②	第 3 回と同じ。
第 7 回	担当者 2 による発表・報告③	第 4 回と同じ。
第 8 回	担当者 3 による発表・報告①	第 2 回と同じ。
第 9 回	担当者 3 による発表・報告②	第 3 回と同じ。
第 10 回	担当者 3 による発表・報告③	第 4 回と同じ。
第 11 回	担当者 4 による発表・報告①	第 2 回と同じ。
第 12 回	担当者 4 による発表・報告②	第 3 回と同じ。
第 13 回	担当者 4 による発表・報告③	第 4 回と同じ。

第 14 回 総括①

各自の発表・討議に基づいた研究の総括的報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作家・作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、毎回 2000 字から 4000 字程度の発表用資料を作成する。したがって、発表担当者は準備に 5 ～ 10 時間程度を要することになります。

担当者以外の受講者も、当該作家・作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってこること。担当者と互角に討議し、的確な批評が可能となるように十分な準備をしてこなければならない。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメ（論文形式）とプレゼンテーションの内容（80 %）
2. 討議の場における積極的な参加態度及び発言（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

各人の博士論文の一部を構成しうるような論文を年間に少なくとも一本は完成させることを目指して指導に当たる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近・現代文学

<研究テーマ> 特に第二次大戦後の戦後派文学およびその継承者たちの作品。

<近年の主要研究業績>

- ①「高橋和巳の〈文学〉概念」（日本文学誌要 85 号、2012）
- ②「国民文学論争と歴史社会学派」（近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会共編「近藤忠義 人と学問 第二・三集合併号、2012 年）
- ③「笠原淳論序説」（日本文学誌要 93 号、2016 年）

【Outline and objectives】

- 1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
- 2.Students present their research results according to their own themes.
- 3.To acquire advanced writing and logical composition skills for writing doctoral dissertations.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

藤村 耕治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代文学の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現在に至るまでの作家・作品を中心に扱う。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して、研究報告を発表用資料として論文形式で作成し、それを基に発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く厳密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。
3. 博士論文執筆のための高度な文章力・論理構成力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作家・作品について、従来の研究成果を十分に踏まえつつ、新しい、独自の観点から分析・検討を行い、博士論文の一部を構成する論文を執筆すること。
2. 発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、学会発表などに耐えうる客観的で高度な研究の力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする作家・作品について論文形式の発表用資料を作成して発表し、他の受講者を交えて討議する形で行う。発表者は討議内容を踏まえて、自身の発表における不備や再考を要する点などを十分に検討し、精度を高めていき、最終的には学会誌等に投稿可能な論文に練り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマと現時点での展望について聞く。
第 2 回	担当者 1 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 3 回	担当者 1 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 4 回	担当者 1 による発表・報告③	結論と今後の課題についての報告。
第 5 回	担当者 2 による発表・報告①	第 2 回と同じ。
第 6 回	担当者 2 による発表・報告②	第 3 回と同じ。
第 7 回	担当者 2 による発表・報告③	第 4 回と同じ。
第 8 回	担当者 3 による発表・報告①	第 2 回と同じ。
第 9 回	担当者 3 による発表・報告②	第 3 回と同じ。
第 10 回	担当者 3 による発表・報告③	第 4 回と同じ。
第 11 回	担当者 4 による発表・報告①	第 2 回と同じ。
第 12 回	担当者 4 による発表・報告②	第 3 回と同じ。
第 13 回	担当者 4 による発表・報告③	第 4 回と同じ。

第 14 回 総括①

各自の発表・討議に基づいた研究の総括的報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作家・作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、毎回 2000 字から 4000 字程度の発表用資料を作成する。したがって、発表担当者は準備に 5 ～ 10 時間程度を要することになります。

担当者以外の受講者も、当該作家・作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってこること。担当者と互角に討議し、的確な批評が可能となるように十分な準備をしてこなければならない。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメ（論文形式）とプレゼンテーションの内容（80 %）
2. 討議の場における積極的な参加態度及び発言（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

各人の博士論文の一部を構成しうるような論文を年間に少なくとも一本は完成させることを目指して指導に当たる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近・現代文学

<研究テーマ> 特に第二次大戦後の戦後派文学およびその継承者たちの作品。

<近年の主要研究業績>

- ①「高橋和巳の〈文学〉概念」（日本文学誌要 85 号、2012）
- ②「国民文学論争と歴史社会学派」（近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会共編「近藤忠義 人と学問 第二・三集合併号、2012 年）
- ③「笠原淳論序説」（日本文学誌要 93 号、2016 年）究業績>

【Outline and objectives】

- 1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
- 2.Students present their research results according to their own themes.
- 3.To acquire advanced writing and logical composition skills for writing doctoral dissertations.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽に関する博士論文の執筆に向けて、必要な先行研究の整理や要約、自分のアイデアを論理的な文章にすること等を、実地を通して学ぶ。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②先行研究を十分に把握する。
- ③自分の発見やアイデアを論文としてまとめる技術を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評ができるようになる。
- ⑤留学生の場合、論文を書くための正確な日本語を磨く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究内容についての発表、先行論文の精読、個人指導による論文添削等を組み合わせる。能楽に関する論文を執筆しようとしている学生を対象とした演習である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究計画の確認	博士論文の構想を明らかにし、本年度の研究計画を立てる。
第 2 回	先行研究の把握と問題点の抽出（1）リスト作成	博士論文の一章を構成する作品に関し、先行研究リストを作成する。
第 3 回	先行研究の把握と問題点の抽出（2）先行文献の論評	先行研究リスト中で特に重要な先行文献を読み論評する。
第 4 回	先行研究の把握と問題点の抽出（3）関連論文の論評	先行研究の中で触れられている関連論文にまで目を配り読み込んでいく。
第 5 回	論文執筆にむけた謡曲本文読解（1）	論文で扱う謡曲の本文を精確に読む。
第 6 回	論文執筆にむけた謡曲本文読解（2）	論文で扱う謡曲の本文を精確に読む。
第 7 回	論文執筆にむけた研究発表と討議（1）素材の検討	謡曲の素材となったと考えられる古典・巷説等を集めて比較検討する。
第 8 回	論文執筆にむけた研究発表と討議（2）素材と謡曲の比較	謡曲の素材となった古典・巷説等の比較検討の続き。
第 9 回	論文の執筆に向けての準備	何をどのような順で明らかにしていくか検討。
第 10 回	論文第 1 ドラフト（一部）の執筆と検討	第 1 段階ドラフト（一部）を読み合わせ、問題点を指摘する。文章についても指導。
第 11 回	前回の書き直しと次の章の書き足し（第 2 ドラフト）執筆と検討	第 2 ドラフトの読み合わせ、問題点の指摘。文章についても指導。
第 12 回	第 3 ドラフトの執筆と検討	第 3 ドラフトの読み合わせ、問題点の指摘。文章についても指導。
第 13 回	論文の執筆と修正 1	前回までの指摘を踏まえて修正・加筆された原稿を読み、論評する。

第 14 回 論文の完成にむけての 論文に修正を加え完成させる。教員による個人指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。

論文のドラフトを書けるところまで書く。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

持参する論文ドラフトの内容および持参頻度（50 %）、論文の達成度（50 %）を総合して判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生が論文をある程度書き上げるまで待つのではなく、一行も書けなければ本演習にてそれを報告し授業中に一行でも書き進むための場とする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 能楽研究

＜研究テーマ＞ 能の作品研究・演出研究

＜主要研究業績＞

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020 年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 巻 3 号・2016 年 3 月

★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐる―」『文学』16 巻 2 号・2015 年 3 月

★「「天女舞」応用の一形態―神と遊女が舞った菩薩の舞―」『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）

【Outline and objectives】

The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽に関する博士論文の執筆に向けて、必要な先行研究の整理や要約、自分のアイデアを論理的な文章にすること等を、実地を通して学ぶ。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②先行研究を十分に把握する。
- ③自分の発見やアイデアを論文としてまとめる技術を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評ができるようになる。
- ⑤留学生の場合、論文を書くための正確な日本語を磨く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究内容についての発表、先行論文の輪読、個人指導による論文添削等を組み合わせていく。能楽に関する論文を執筆しようとしている学生を対象とした演習である。実際には現在在籍中の留学生の指導を念頭に置いている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	後期の研究計画の確認	夏期休暇中の研究の進捗状況を報告し、後期の具体的な研究計画を確認する。
第 2 回	先行研究の把握と問題点の抽出（1）リスト作成	春学期とは別の作品またはテーマに関し、先行研究リストを作成する。
第 3 回	先行研究の把握と問題点の抽出（2）先行文献の論評	先行研究リスト中で特に重要な先行文献を読み論評する。
第 4 回	先行研究の把握と問題点の抽出（3）論文テーマの決定	先行研究を踏まえてそこに自分が何を付け加えるべきかを明らかにする。
第 5 回	論文執筆にむけた作品の精読（1）校訂本文の作成	論文で取り上げる作品のうち、信頼できる活字がない曲の校訂本文を作成する。
第 6 回	論文執筆にむけた作品の精読（2）小段構成の確認	作成した校訂本文の小段わけを行い、小段成・段構成を確定する。
第 7 回	論文執筆にむけた作品の精読（3）内容の理解	修辞の特徴などにも目を配りつつ作品の内容を読み取る。
第 8 回	論文執筆にむけた作品の精読（4）他作品との比較	同ジャンルの他作品とも比較しながら作品の特徴を考える。
第 9 回	論文の構成と材料の検討	ここまでの作業で確認できた内容を確認し、論文の構成を考える。
第 10 回	論文執筆にむけたドラフトの作成、添削	書きやすい部分からドラフト執筆を始め、それについて討議。日本語チェック。
第 11 回	論文執筆にむけたドラフトの書き継ぎと添削・修正（1）	前回修正部分のチェックと再修正。書き足した部分の論理整合性などの確認。日本語チェック。

第 12 回	論文執筆にむけたドラフトの書き継ぎと添削・修正（2）	前回修正部分のチェックと再修正。書き足した部分の論理整合性などの確認。日本語チェック。
第 13 回	論文執筆にむけたドラフトの書き継ぎと添削・修正（3）	ドラフトがある程度まとまってきたところで、一本の論文としての構成をもう一度考える。
第 14 回	まとめ 論文完成へ向けて	前回までの修正を踏まえ、論文完成にむけての確認をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。
論文のドラフトを書けるところまで書く。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

持参する論文ドラフトの内容および持参頻度（50 %）、論文の達成度（20 %）を総合して判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生が論文をある程度書き上げるまで待つのではなく、一行も書けなければ本演習にてそれを報告し授業中に一行でも書き進むための場とする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 能楽研究
＜研究テーマ＞ 能の作品研究・演出研究
＜主要研究業績＞

★「修羅能以前の「平家の能」—〈経盛〉の再検討を通して—」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020 年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 巻 3 号・2016 年 3 月

★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐる—」『文学』16 巻 2 号・2015 年 3 月

★「「天女舞」応用の一形態—神と遊女が舞った菩薩の舞—」『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）

【Outline and objectives】

The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、博士論文の完成に至るまでの各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文完成に向けて発表を重ねて研究を進め、学期に少なくとも 1 論文をしあげる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に各自、成果を 2～4 週に 1 度程度送って添削を受けることとします。オンラインゼミをやるかどうか、4/27 以降を目安に学習支援システム上で考えましょう。演習時にコメントするほか、執筆した原稿を添削して返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第 2 回	学生の報告 1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第 3 回	学生の報告 2	同上
第 4 回	学生の報告 3	同上
第 5 回	学生の報告 4	同上
第 6 回	学生の報告 5	同上
第 7 回	学生の報告 6	同上
第 8 回	学生の報告 7	同上
第 9 回	学生の報告 8	同上
第 10 回	学生の報告 9	同上
第 11 回	学生の報告 10	同上
第 12 回	学生の報告 11	同上
第 13 回	学生の報告 12	同上
第 14 回	学生の報告 13	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
ひたすら論文執筆と学会報告準備をすること。

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸、文化

＜研究テーマ＞戯作と挿絵、絵本、江戸東京

＜ 2019 - 20 年度の主要業績＞

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文芸』113 号 2020 年（査読付）

「四方赤良こと大田南畝判『狂歌角力草』稿本解題・翻刻」『法政大学文学部紀要』81 号

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179 号 2020（査読付）

編・執筆『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（文学通信）
みなさんもがんばって書きましょう！

【Outline and objectives】

Reporting and discussing each student's academic activities

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文に向けて発表を重ねて研究を進める。学期に少なくとも 1 論文を書くことを目標とする。演習での発表にコメントし、執筆した論文は添削して返却する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学生の報告と議論で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第 2 回	学生の報告 1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第 3 回	学生の報告 2	同上
第 4 回	学生の報告 3	同上
第 5 回	学生の報告 4	同上
第 6 回	学生の報告 5	同上
第 7 回	学生の報告 6	同上
第 8 回	学生の報告 7	同上
第 9 回	学生の報告 8	同上
第 10 回	学生の報告 9	同上
第 11 回	学生の報告 10	同上
第 12 回	学生の報告 11	同上
第 13 回	学生の報告 12	同上
第 14 回	学生の報告 13	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
ひたすら論文執筆と学会報告準備をすること。

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸、文化

<研究テーマ> 最近、プロジェクトの関係で

江戸東京の地理や地誌をやっています。

江戸東京研究センターからもうすぐ江戸東京とヴェネツィアの比較研究の本を出します。

【Outline and objectives】

Reporting and discussing each student's academic activities

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文の作成に向けて、江戸期以来の新作能の文化的背景について学ぶ。

【到達目標】

博士論文の作成をめざし、資料の収集、読解、および問題を設定して、それにふさわしい構成と文体の論文を執筆できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は主に受講生の発表によって行われる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	近世の新作能の概要	近世の新作能の全体像をつかむ。
第 2 回	武家に関わった新作能	武家に関わって新作能を概観する。
第 3 回	武家の新作能の文化的背景	武家の新作能がどのような文化的背景の中で生まれたのかを学ぶ。
第 4 回	武家の新作能と政治状況とのかかわり	武家の新作能とそれを生み出した政治的背景とのかかわりについて学ぶ。
第 5 回	武家の新作能の上演	武家の新作能がどのような場で上演されたのかを学ぶ。
第 6 回	武家の新作能の受容	武家の新作能が当時の人々にどのように受容されていたのかを学ぶ。
第 7 回	御当地能としての新作能	近世に多く作られた御当地能について概観する。
第 8 回	御当地能の制作背景	御当地能がどのような人々によって作られたのかを学ぶ。
第 9 回	御当地能と寺社縁起	御当地能に寺社縁起の素材がどのように取り込まれているのかを学ぶ。
第 10 回	御当地能の影響	御当地能が文芸に与えた影響について学ぶ。
第 11 回	御当地能の上演状況	御当地能がどのような場で上演されたのかを学ぶ。
第 12 回	新作能の謡本	新作能の謡本の出版状況を学ぶ。
第 13 回	新作能の謡本の書誌	新作能の謡本がどのような版元によって出版されたのかを学ぶ。
第 14 回	御当地能の復活	近年における御当地能の復興について学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業のテーマに沿って発表の準備を計画的にすすめる。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に使用しない。

【参考書】

岩波講座『能・狂言』第一巻能楽の歴史

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 パーセント、発表 30 点、レポート 40 点。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【Outline and objectives】

This course deals with the Shinsaku nō from Edo-period onwards.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸期以降の新作能の制作背景と文化史的意義について学ぶ。

【到達目標】

博士論文の作成をめざし、資料の収集、読解、および問題を設定して、それにふさわしい構成と文体の論文を執筆できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表によって進められる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	近世の新作能の思想的背景	近世の新作能と宗教・学問とのかかりについて学ぶ。
第 2 回	真宗関係の新作能	信州関係の新作能について概観する。
第 3 回	真宗関係の新作能の作者	真宗関係の新作能がどのような人々によって作られたのかを考察する。
第 4 回	真宗関係の新作能の受容	真宗関係の新作能がどのような場で受容されたのかを学ぶ。
第 5 回	石門心学と謡曲	石門心学と謡曲とのかかりについて学ぶ。
第 6 回	心学関係の新作能	心学関係の新作能について概観する。
第 7 回	心学関係の新作能の作者	心学関係の新作能がどのような人々によって作られたのかを学ぶ。
第 8 回	心学関係の新作能の受容	心学関係の新作能の出版状況、受容の諸相について学ぶ。
第 9 回	近世文芸と新作能	戯作本と新作能とのかかりについて学ぶ。
第 10 回	歌舞伎関係の新作能	歌舞伎と素材を共有する新作能について学ぶ。
第 11 回	浄瑠璃関係の新作能	浄瑠璃と素材を共有する新作能について学ぶ。
第 12 回	新作能と俳諧	新作能と俳諧関係者とのかかりについて学ぶ。
第 13 回	新作能と徒然講釈	新作能と徒然講釈との関係について学ぶ。
第 14 回	新作能と神道講釈	新作能と神道講釈の関係について学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、発表に備える。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

岩波講座『能・狂言』

【成績評価の方法と基準】

平常点 30、発表 30、レポート 40

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞能楽研究

＜研究テーマ＞能楽史

＜主要研究業績＞『上方能楽史の研究』

【Outline and objectives】

This course deals with the Shinsaku nō from Edo-period onwards.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代以降の文学作品について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につけます。

【到達目標】

受講者が選択したテーマ、作家、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行います。フィードバックは発表ごとに口頭で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	文学研究の方法（1）	文学研究の方法について概説し、受講者が採用する方法を検討します。
第 2 回	受講者 1 による発表 a	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行います。
第 3 回	受講者 1 による発表 b	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深めます
第 4 回	受講者 1 による発表 c	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示します
第 5 回	受講者 2 による発表 a	第 2 回と同じ
第 6 回	受講者 2 による発表 b	第 3 回と同じ
第 7 回	受講者 2 による発表 c	第 4 回と同じ
第 8 回	文学研究の方法（2）	受講者の発表を踏まえ、文学研究の方法について考察します
第 9 回	受講者 3 による発表 a	第 2 回と同じ
第 10 回	受講者 3 による発表 b	第 3 回と同じ
第 11 回	受講者 3 による発表 c	第 4 回と同じ
第 12 回	受講者 4 による発表 a	第 2 回と同じ
第 13 回	受講者 4 による発表 b	第 3 回と同じ
第 14 回	受講者 4 による発表 c	第 4 回と同じ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 受講者は、自らが選択したテーマ、作家、作品について、発表が可能となるような研究を行います。また他の受講者のテーマ、作家、作品についても理解を深めることで、文学研究者としての専門的な知見を身につけます。

【テキスト（教科書）】

受講者のテーマに応じた文学作品を選びます。

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表 6 割で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近・現代文学、文芸評論

＜研究テーマ＞

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

＜主要研究業績＞

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えてー日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『古本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of Japanese modern literature, using specialized knowledges.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代以降の文学作品について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につけます。

【到達目標】

受講者が選択したテーマ、作家、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行います。フィードバックは発表ごとに口頭で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	文学研究の方法（1）	文学研究の方法について概説し、受講者が採用する方法を検討します。
第 2 回	受講者 1 による発表 a	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行います。
第 3 回	受講者 1 による発表 b	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深めます
第 4 回	受講者 1 による発表 c	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示します
第 5 回	受講者 2 による発表 a	第 2 回と同じ
第 6 回	受講者 2 による発表 b	第 3 回と同じ
第 7 回	受講者 2 による発表 c	第 4 回と同じ
第 8 回	文学研究の方法（2）	受講者の発表を踏まえ、文学研究の方法について考察します
第 9 回	受講者 3 による発表 a	第 2 回と同じ
第 10 回	受講者 3 による発表 b	第 3 回と同じ
第 11 回	受講者 3 による発表 c	第 4 回と同じ
第 12 回	受講者 4 による発表 a	第 2 回と同じ
第 13 回	受講者 4 による発表 b	第 3 回と同じ
第 14 回	受講者 4 による発表 c	第 4 回と同じ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

受講者は、自らが選択したテーマ、作家、作品について、発表が可能となるような研究を行います。また他の受講者のテーマ、作家、作品についても理解を深めることで、文学研究者としての専門的な知見を身につけます。

【テキスト（教科書）】

受講者のテーマに応じた文学作品を選びます。

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表 6 割で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近・現代文学、文芸評論

＜研究テーマ＞

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

＜主要研究業績＞

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えてー日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of Japanese modern literature, using specialized knowledges.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論・語用論・統語論の基礎概念を理解し、適切な具体例を用いて説明できるようになる。(2) それらの分野における様々な研究・分析・論証の方法を理解し、自身でも実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学ぶ。

▼必要に応じて、ZOOM を用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	論文について	論文の構成について
第 2 回	論文リポート 1 名詞	受講生による発表・討論の意味拡張
第 3 回	論文リポート 2 動詞	受講生による発表・討論の意味拡張
第 4 回	論文リポート 3 形容	受講生による発表・討論の意
第 5 回	論文リポート 4 接続	受講生による発表・討論の意
第 6 回	論文リポート 5 語用	受講生による発表・討論と意味論
第 7 回	論文リポート 6 語用	受講生による発表・討論推論
第 8 回	論文リポート 7 ポラ	受講生による発表・討論イトネス
第 9 回	論文リポート 8 イン	受講生による発表・討論ボライトネス
第 10 回	論文レポート 9 対人	受講生による発表・討論的モダリティ
第 11 回	論文リポート 10 対	受講生による発表・討論事的モダリティ
第 12 回	論文レポート 11 若	受講生による発表・討論者ことば
第 13 回	論文レポート 12 文	受講生による発表・討論未表現
第 14 回	論文レポート 13	受講生による発表・討論ネットスラング

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分らない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2 時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約を A4 用紙一枚に書くこと（1 時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1 時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キーターム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

発表 30 % 発言等受講態度 30 % 期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

博士論文のテーマだけに絞らず、言語学全般についての理解・知識が深められるコースワークになるよう、幅広い内容の研究論文を取り上げよう心がけている。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

＜研究テーマ＞

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

＜主要研究業績＞

「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』 pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）

「接続詞ケドの接続的意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）

『構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011 年）

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語の意味を分析するための手法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論の専門用語・諸概念について理解し、説明できる。(2) 意味を研究するための様々な分析手法を理解し、実践できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、意味研究における基礎概念や分析方法について学ぶ。

▼必要に応じて、ZOOM を用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに	意味を分析する上での諸注意
第 2 回	論文リポート 1	多義 受講生による発表・討論
第 3 回	論文リポート 2	メタ 受講生による発表・討論
第 4 回	論文リポート 3	ファー 受講生による発表・討論
第 5 回	論文リポート 4	ニミー 受講生による発表・討論
第 6 回	論文リポート 5	ス キーマとプロトタイプ 受講生による発表・討論
第 7 回	論文リポート 6	意味 ネットワーク 受講生による発表・討論
第 8 回	論文リポート 7	拡張 と動的用法基盤モデル 受講生による発表・討論
第 9 回	論文リポート 8	文法 受講生による発表・討論
第 10 回	論文リポート 9	変化と意味変化 受講生による発表・討論
第 11 回	論文リポート 10	主体 受講生による発表・討論
第 12 回	論文リポート 11	接続詞と文法化 受講生による発表・討論
第 13 回	論文リポート 12	接 受講生による発表・討論
第 14 回	論文リポート 13	尾辞と文法化 受講生による発表・討論
		否 受講生による発表・討論
		定表現の拡張
		コーパスと定量的分析

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2 時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約を A4 用紙一枚に書くこと（1 時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1 時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『認知言語学研究の方法 ― 内省・コーパス・実験』（辻幸夫監修、ひつじ書房）
 『日本語教育のためのコーパス調査入門』（李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著、くろしお出版）
 『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
 『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
 『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
 『言語学大辞典』（三省堂）
 『日本語文法大辞典』（山口明徳・秋本守英編著、明治書院）
 『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
 『語用論キーターム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

発表 30 % 発言等受講態度 30 % 期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

論文の具体的な書き方が理解できるよう、また博士課程らしい専門性が身につけられるよう、言語（意味）変化について深く理解するための研究論文を取り上げるよう心がけた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』 pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）
 「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）
 「接続詞ケドの手続きの意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）
 『構文ネットワークと文法 ― 認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011 年）

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

LIT700B2

日本文芸学特殊研究 A

守安 敏久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前半の講義（および討議）では、三島由紀夫が能を近代的な装いのもとに転生させた現代戯曲『近代能楽集』連作について分析する。文学と演劇との関係を考察するとともに、古典の受容の問題についても理解を深める。後半は受講者各自がそれぞれ興味ある概念テーマと任意の文芸作品を選び、分担発表する。例えば、「幻想」「笑い」「不気味なもの」「超現実的なもの」「不条理」「悪」など、さまざまな概念テーマをめぐって、文芸理論的な学習と具体的な作品考察を交差させていくような発表を想定している。

【到達目標】

文芸作品を考察するさまざまな観点を修得する。観点のひとつとして、概念テーマを理論的に学習することで、それを作品考察に生かす。より高度で多角的な作品分析ができるような、幅広い知見を獲得し、それを論文作成の深化に接続する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義（および討議）と担当発表を中心とした演習形式とによって構成。対面授業とオンデマンド授業を併用。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス、発表の分担	授業説明と担当発表の分担
第 2 回	三島由紀夫略述	三島由紀夫のひとと作品
第 3 回	能略述	能「葵上」解説
第 4 回	『近代能楽集』 葵上	三島由紀夫『近代能楽集』「葵上」解説と討議
第 5 回	『近代能楽集』 葵上 DVD 鑑賞	三島由紀夫『近代能楽集』「葵上」DVD 解説と討議
第 6 回	『近代能楽集』 班女	三島由紀夫『近代能楽集』「班女」解説と討議
第 7 回	三島由紀夫関連考察	三島由紀夫関連 DVD 解説と討議
第 8 回	受講者による担当発表・討議（1）	受講者による担当発表と討議
第 9 回	受講者による担当発表・討議（2）	受講者による担当発表と討議
第 10 回	受講者による担当発表・討議（3）	受講者による担当発表と討議
第 11 回	受講者による担当発表・討議（4）	受講者による担当発表と討議
第 12 回	受講者による担当発表・討議（5）	受講者による担当発表と討議
第 13 回	受講者による担当発表・討議（6）	受講者による担当発表と討議
第 14 回	まとめ・補説	まとめと補説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者自身の担当発表準備や、他の受講者の担当作品についての準備学習・復習など、1 週につき平均各 2 時間。

【テキスト（教科書）】

三島由紀夫『近代能楽集』（新潮文庫、1968）

【参考書】

『日本古典文学全集』第33・34巻〈謡曲集1・2〉（小学館、1973～1975）

堂本正樹『劇人三島由紀夫』（劇書房、1994）

高橋和幸『三島由紀夫の詩と劇』（和泉書院、2007）

田村景子『三島由紀夫と能楽』（勉誠出版、2012）

松本徹他・編『三島由紀夫事典』（勉誠出版、2000）

『三島由紀夫研究』①～②⑩（鼎書房、2005～）

【成績評価の方法と基準】

担当発表（60％）、および討論への参加状況（40％）。

【学生の意見等からの気づき】

受講者が意見を出しやすい授業環境を整える。

【学生が準備すべき機器他】

情報機器（パソコン）

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学、現代演劇・映画論。

＜研究テーマ＞寺山修司研究。文学と映画との相互影響の研究。

＜主要研究業績＞『寺山修司論—バロックの大世界劇場—』（単著、国書刊行会、2017）、『メディア横断芸術論』（単著、国書刊行会、2011）、『バロックの日本』（単著、国書刊行会、2003）

【Outline and objectives】

1.The theme of this class is the analysis and study on Mishima Yukio.

2.Students present their research according to their own themes.

LIT700B2

日本文芸学特殊研究B

守安 敏久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前半の講義（および討議）では、三島由紀夫が自ら監督・脚本・主演した映画『憂国』（1966、原作小説＝三島由紀夫）、および寺山修司が監督・脚本を手がけた映画『草迷宮』（1979、原作小説＝泉鏡花）を考察する。小説とその映像化の問題を考える。後半は受講者各自がそれぞれ研究対象としている任意の文芸作品をあげ、分担発表する。

【到達目標】

文芸作品を考察するさまざまな観点を修得する。より高度で多角的な作品分析ができるような、幅広い知見を獲得し、それを論文作成の深化に接続する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義（および討議）と担当発表を中心とした演習形式とによって構成。対面授業とオンデマンド授業を併用。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス、発表の分担	授業説明と担当発表の分担
第2回	三島由紀夫の小説『憂国』	小説『憂国』の解説と討議
第3回	三島由紀夫の映画『憂国』	映画『憂国』の解説と討議
第4回	寺山修司略述	寺山修司の人と作品
第5回	泉鏡花の小説『草迷宮』	小説『草迷宮』の解説と討議
第6回	寺山修司の映画『草迷宮』	映画『草迷宮』の解説と討議
第7回	寺山修司関連考察	寺山修司関連DVD解説と討議
第8回	受講者による担当発表・討議（1）	受講者による担当発表と討議
第9回	受講者による担当発表・討議（2）	受講者による担当発表と討議
第10回	受講者による担当発表・討議（3）	受講者による担当発表と討議
第11回	受講者による担当発表・討議（4）	受講者による担当発表と討議
第12回	受講者による担当発表・討議（5）	受講者による担当発表と討議
第13回	受講者による担当発表・討議（6）	受講者による担当発表と討議
第14回	まとめ・補説	まとめと補説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者自身の担当発表準備や、他の受講者の担当作品についての準備学習・復習など、1週につき平均各2時間。

【テキスト（教科書）】

三島由紀夫『花ざかりの森・憂国』（新潮文庫、1968）

泉鏡花『草迷宮』（岩波文庫、1985）（または「青空文庫」サイト）

【参考書】

松本徹他・編『三島由紀夫事典』（勉誠出版、2000）

『三島由紀夫研究』①～②⑩（鼎書房、2005～）

高取英『寺山修司論—創造の魔神』（思潮社、1992）
『寺山修司：いまこそ、新たな読者のために [増補新版]』（河出書房新社、文藝別冊 KAWADE ムック、2019）

【成績評価の方法と基準】

担当発表（60 %）、および討論への参加状況（40 %）。

【学生の意見等からの気づき】

受講者が意見を出しやすい授業環境を整える。

【学生が準備すべき機器他】

情報機器（パソコン）

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学、現代演劇・映画論。

＜研究テーマ＞寺山修司研究。文学と映画との相互影響の研究。

＜主要研究業績＞『寺山修司論—バロックの大世界劇場—』（単著、国書刊行会、2017）、『メディア横断芸術論』（単著、国書刊行会、2011）、『バロックの日本』（単著、国書刊行会、2003）

【Outline and objectives】

1.The theme of this class is the analysis and study on Mishima Yukio and Terayama Shuji.

2.Students present their research according to their own themes.

LIT500B2

日本文芸批評史特殊研究 A

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組みあわせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第 2 回	坪内逍遙と二葉亭四迷	坪内逍遙「小説神髓」と二葉亭四迷「小説総論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	島崎藤村と自然主義の誕生	島崎藤村「千曲川のスケッチ」を読み、日本における自然主義文学のはじまりについて解説します。
第 4 回	北村透谷『透谷選集』を読む	本の文芸批評の出発点として、北村透谷『北村透谷選集』について発表してもらいます。
第 5 回	1910 年と石川啄木	日本の近代文学史における 1910 年の状況を解説し、石川啄木「時代閉塞の現状」を読みます。
第 6 回	佐藤春夫の評論文を読む	印象批評の例として、佐藤春夫の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	平塚らいてうと与謝野晶子	平塚らいてう「元始女性に太陽であつた」と与謝野晶子「母性偏重を排す」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	小林秀雄の出版	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	白樺派の登場と私小説の完成	生田長江「自然主義前派の跳梁」と武者小路実篤「新しき村に就て」を読み、その意義を理解します。

第10回	中野重治の批評	プロレタリア文学以降のもっとも重要な成果の一つである、中野重治の評論文について発表してもらいます。
第11回	谷崎潤一郎と芥川龍之介	谷崎潤一郎「饒舌録（抄）」と芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な（抄）」を読み、その意義を理解します。
第12回	平野謙の登場	戦後文学の代表的な文芸時評家である、平野謙の評論文について発表してもらいます。
第13回	中村光夫と 1945 年	中村光夫「『近代』への疑惑」を読み、1945 年の敗戦にいたるまでの日本文学の状況を概括します。
第14回	江藤淳の出版	戦後文学を問い直す視点を提示しつつけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇] および [昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B2

日本文芸批評史特殊研究 B

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組みあわせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第 2 回	伊藤整と横光利一	伊藤整「新心理主義文学」と横光利一「純粋小説論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	萩原朔太郎と保田與重郎	萩原朔太郎「日本への回帰」と保田與重郎「文明開化の論理の終焉について」を読み、その意義を理解します。
第 4 回	吉本隆明の登場	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしてつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第 5 回	川端康成と三島由紀夫	敗戦による 1945 年の断絶に注意しつつ、川端康成「横光利一弔辞」と三島由紀夫「重症者の兇器」を読みます。
第 6 回	福田恒存の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、福田恒存の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	戦後文学の空間と戦後派の登場	敗戦後に登場した戦後派の作家たちについて概括し、戦後文学のあり方の特徴を理解します。
第 8 回	秋山駿の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、秋山駿の評論文について発表してもらいます。

第 9 回	第三の新人と戦後文学批判	戦後文学のあり方に抵抗するように登場した第三の新人について概括し、吉本隆明や江藤淳による戦後文学批判の視点を理解します。
第 10 回	柄谷行人の出発	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、柄谷行人の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	構造主義とテキスト論	20 世紀後半以降の構造主義思想の意義について考察し、その文学版であるテキスト論に対する理解を深めます。
第 12 回	加藤典洋の登場	江藤淳を批判しつつ戦後文学を相対化する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	フェミニズム文学論	1980 年代以降の日本のフェミニズム思想について考察を加え、その文学的意義を理解します。
第 14 回	現代文学の批評	現代文学に対して重要な論点を提供しているものを選び、その評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。
まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。
また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B2

日本古代文芸特殊研究 A

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を講読する。

【到達目標】

巻 1・2 の柿本人麻呂作品を読み進める。その中から各自が最も関心のある作品を取り上げ、注釈的な読解を中心に発表する。それにより、上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。その成果を博士論文作成に反映させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発表と問題点の確認、博士論文作成の経過確認を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめと復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概説	万葉集と柿本人麻呂について概説する。
第 2 回	近江荒都歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 3 回	吉野讃歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 4 回	留京三首	左記のテーマについて批評、検討する。
第 5 回	安騎野歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 6 回	石見相聞歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 7 回	日並皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 8 回	河嶋皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 9 回	明日香皇女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 10 回	高市皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 11 回	泣血哀慟哭歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 12 回	吉備津采女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 13 回	狭岑鳥死人歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 14 回	臨死歌　まとめ	左記のテーマについて批評、検討する。 各自、春学期の研究テーマを総括し、新たな発展の方法を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、毎週 3 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文のついているもの。

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

第 14 回 まとめ 万葉集研究の方法と問題点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
予習、復習、課題など、毎週 3 時間以上の学習を必要とする。

【テキスト（教科書）】
万葉集、原文付き

【参考書】
授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】
発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】
原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】
＜＜専門領域＞＞日本上代文学
＜研究テーマ＞古事記、万葉集の研究
＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島—万葉集卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】
Carefully read the Manyoshu（万葉集）

LIT500B2

日本中世文芸特殊研究 A

佐藤 明浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

藤原定家著『僻案抄』の後撰集注釈をとりあげ、書誌・文献の知識を身につけたうえで、内容を精細に読解し、見出した課題を探究します。

【到達目標】

- ・書誌・文献に関する知識を身につけ、作品の研究を推進する技能を習得する。
- ・調査、考究の過程でみいだした課題について、適切な方法を用いて探究できる。
- ・写本、版本のくずし字を読解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・『僻案抄』の後撰集注釈を読解していきます。宮内庁書陵部鷹司家旧蔵本を底本とし、書誌の特徴をとらえたうえで、各受講者の担当部分を決め、精確に読解するための調査をし、課題について考究した内容を、作成した資料を提示して発表します。それを基に全員で討論します。
- ・はじめに各自の担当箇所を決め、調査・考究の方法、発表の要領を教員が提示します。
- ・発表、討論の内容、提出課題について、教員が講評します。
- ・研究文献を読んで、研究上の課題を共有します。
- ・随時、くずし字を読解する練習を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	調査、考究の方法 担当箇所の決定
第 2 回	『僻案抄』の概要	文献の基礎的情報
第 3 回	『僻案抄』の背景	平安・鎌倉時代の歌学・和歌注釈
第 4 回	『後撰和歌集』諸本の概要	天福本等の実態の確認
第 5 回	後撰 1「ふる雪の」	発表と討論
第 6 回	後撰 214「こよひかく」	発表と討論
第 7 回	後撰 241「けふよりは」	発表と討論
第 8 回	追註「かはやしろ」	追註「かはやしろ」の講読
第 9 回	後撰 262「秋くれは」	発表と討論
第 10 回	後撰 679「あふ事は」	発表と討論
第 11 回	『僻案抄』の研究	発表と討論
第 12 回	後撰 903「はちすはの」	発表と討論
第 13 回	後撰 1259「いまこむと」	発表と討論
第 14 回	まとめ	春学期の課題整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・各自の担当歌について、十分な調査、考究を行い、あらかじめ発表資料を提示して、発表に臨みます。担当者以外の受講者は、とりあげられる箇所について予習し、提示された資料を読んで、ポイントを把握して、討論に臨みます。
- ・授業でとりあげる研究文献をあらかじめ読んで、要点・問題点をとらえておきます。
- ・くずし字の読解練習をすすめます。
- ・準備学習、復習の時間は、1 回につき平均で 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】
配付します。

【参考書】
授業時に提示します。

【成績評価の方法と基準】
発表内容 50 %、考察レポート 20 %、討論への参加状況 30 %を総合して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

写本についての知識や読解技能を確認しながらすすめます。

【その他の重要事項】

受講者数によって、担当箇所、回数を調整します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本古典文学

＜研究テーマ＞平安・鎌倉時代の和歌集・歌書

＜主要研究業績＞『院政期和歌文学の基層と周縁』（和泉書院 2020 年）

【Outline and objectives】

This course deals with *Hekiansho*(written by Fujiwarano Sadaie).The aim of this course is to understand the characteristics of Waka literary works and to acquire skills to study them.

LIT500B2

日本中世文芸特殊研究B

佐藤 明浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

藤原定家著『僻案抄』の古今集注釈をとりあげ、書誌・文献の知識を身につけたうえで、内容を精細に読解し、見出した課題を探究します。

【到達目標】

- ・書誌・文献に関する知識を身につけ、作品の研究を推進する技能を習得する。
- ・調査、考究の過程でみいだした課題について、適切な方法を用いて探究できる。
- ・写本、版本のくずし字を読解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・『僻案抄』の古今集注釈を読解していきます。宮内庁書陵部鷹司家旧蔵本を底本とし、書誌の特徴をとらえたうえで、各受講者の担当部分を決め、精確に読解するための調査をし、課題について考究した内容を、作成した資料を提示して発表します。それを基に全員で討論します。
- ・はじめに各自の担当箇所を決め、調査・考究の方法、発表の要領を教員が提示します。
- ・発表、討論の内容、提出課題について、教員が講評します。
- ・研究文献を読んで、研究上の課題を共有します。
- ・随時、くずし字を読解する練習を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	調査、考究の方法 担当箇所の決定
第 2 回	『僻案抄』の背景	藤原定家の三代集注釈
第 3 回	『古今和歌集』の受容	『古今和歌集』の諸本と注釈
第 4 回	古今 28「ももちどり」	発表と討論
第 5 回	古今 77「いざさくら」	発表と討論
第 6 回	古今 184「このまより」	発表と討論
第 7 回	『顯注密勘』との関係	研究上の課題
第 8 回	古今 208「わがかどに」	発表と討論
第 9 回	古今 469「ほととぎす」	発表と討論
第 10 回	古今 484「夕ぐれは」	発表と討論
第 11 回	藤原定家の歌学	研究文献の講読
第 12 回	古今 761「あかつきの」	発表と討論
第 13 回	古今 431「をがたまの 木」	発表と討論
第 14 回	まとめ	課題の整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・各自の担当歌について、十分な調査、考究を行い、あらかじめ発表資料を提示して、発表に臨みます。担当者以外の受講者は、とりあげられる箇所について予習し、提示された資料を読んで、ポイントを把握し、討論に臨みます。
- ・授業でとりあげる研究文献をあらかじめ読んで、要点・問題点をとらえておきます。
- ・くずし字の読解練習をすすめます。
- ・準備学習、復習の時間は、1 回につき平均で 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

配付します。

【参考書】

授業時に提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容 50 %、考察レポート 20 %、討論への参加状況 30 %を総合して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

写本についての知識や読解技能を確認しながらすすめます。

【その他の重要事項】

受講者数によって、担当箇所、回数を調整します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本古典文学

＜研究テーマ＞平安・鎌倉時代の和歌集・歌書

＜主要研究業績＞『院政期和歌文学の基層と周縁』（和泉書院 2020 年）

【Outline and objectives】

This course deals with *Hekiansho*(written by Fujiwarano Sadaie).The aim of this course is to understand the characteristics of Waka literary works and to acquire skills to study them.

LIT500B2

日本近世文芸特殊研究 A

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期は 18 世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙を読み解く。作品としては草双紙の発展に即して、浮世絵師による画風の変遷も反映した式亭三馬画・作『稗史億説年代記〔くさぞうしこじつけねんだいき〕』（享和 2・1802 年刊）をとりあげ、本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら読解する。

最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。簡略な既存の注釈を頼りに、三馬の仕掛けた謎をどこまで読み解けるかに挑戦しよう！

【到達目標】

- （１）作品の翻刻を点検し、既存の注釈を批判的に検討しながら読む力をつける。
- （２）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

作品の背景や注釈の方についての概説のあと、受講生で担当箇所を決めて、毎週、読解を発表してもらいます。本文の解釈とともに、挿絵の画風の分析も行いましょう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	時代状況と出版界、黄表紙とは
第 2 回	講義 1	作者・画工について
第 3 回	講義 2	注釈の基本・序文を読む
第 4 回	学生の発表	上巻 1
第 5 回	学生の発表	上巻 2
第 6 回	学生の発表	上巻 3
第 7 回	学生の発表	中巻 1
第 8 回	学生の発表	中巻 2
第 9 回	学生の発表	中巻 3
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	補足
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎週、次の場面を確認してきましょう。
発表担当者は既存の翻刻を点検・修正し、語釈・解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】

国立国会図書館・早稲田大学図書館・東京大学霞亭文庫／西尾市岩瀬文庫のデジタルデータを比較検討し、善本を選ぶ。注釈は『江戸の戯作絵本四末期黄表紙集』（社会思想社現代教養文庫 1983 ＊PDF で配付）を参照する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化

＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作

＜著書＞

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

【共著】

『最後の文人 石川淳の世界』集英社新書（集英社 2021）

『東アジア文化講座 3 東アジアに共有される文学圏』（文学通信 2021）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信 2019）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

LIT500B2

日本近世文芸特殊研究 B

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。

【到達目標】

- （1）作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読む力をつける。
- （2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第 2 回	学生の発表	上巻 1
第 3 回	学生の発表	上巻 2
第 4 回	学生の発表	上巻 3
第 5 回	学生の発表	上巻 4
第 6 回	学生の発表	中巻 1
第 7 回	学生の発表	中巻 2
第 8 回	学生の発表	中巻 3
第 9 回	学生の発表	中巻 4
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	下巻 4
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

毎週、次回のテキストを読んでくる。

発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化

＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作

＜近年の論文・その他書き物＞

【論文】

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113 号 2021（査読付）

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020（査読付）
「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（単行本）勉誠出版 2019

「書籍を模擬する遊び—「見立絵本」にかんする疑問、から—」『京都語文』26号 2018

「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【一般誌】「江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」『歴史 REAL 大江戸の都市力』洋泉社 MOOK 2018

「歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸」『別冊太陽 歌麿決定版』2016

「国芳時代の絵師ビジネス」『芸術新潮 2016年4月号』

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

LIT500B2

日本近代文芸特殊研究 A

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③「文学」を広く文化学的視野でとらえられるように幅広い知見を身につける。
- ④上記の研究を推進しながら、博士論文作成へと連続させていくこと。

【到達目標】

上記「授業のテーマ」で設定されていることが、受講者各自の研究テーマに即して実現されること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①各自の研究テーマにそって研究発表をする。
- ②近代文学の研究史上エポックをなした（と思われる）研究書を取り上げ、その研究史上の意味と現在の研究に資する方法論を探る。
- ①②とも発表と討論によって構成される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	本授業（演習）の目的・運営など。
2	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
3	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
4	研究書精読	文学研究の方法探求
5	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
6	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
7	研究書精読	文学研究の方法探求
8	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
9	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
10	研究書精読	文学研究の方法探求
11	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
12	各自のテーマに即した	受講者各自のテーマによる研究発表
13	研究書精読	文学研究の方法探求
14	前期のまとめ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者以外の者も当該テキストを事前に精読しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

研究書に関しては、学期当初に受講者と相談の上決定。

【参考書】

授業の進行に従って、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（40％）および討論への参加（40％）、期末レポート（20％）。

【学生の意見等からの気づき】

去年度、非開講のためアンケートなし。
学生との対話を大切にします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近代文学

＜研究テーマ＞

近代文学の成立期の研究－19世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

＜主要研究業績＞

・「紀久八狂乱－広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『髪下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ－雑誌『人情世界』の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学－『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline and objectives】

See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible.

LIT500B2

日本近代文芸特殊研究B

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③「文学」を広く文化的視野でとらえられるように幅広い知見を身につける。
- ④上記の研究を推進しながら、博士論文作成へと連続させていくこと。

【到達目標】

受講者各人が、具体的な作品・テキストに向き合い、立論・注釈・解釈・先行文献の調査などのさまざまな方法を学びつつ、論文作成の実際を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①各自の研究テーマにそって研究発表をする。
 - ②近代文学の研究史上エボックをなした（と思われる）研究書を取り上げ、その研究史上の意味と現在の研究に資する方法論を探る。
- ①②とも発表と討論によって構成される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回	（前期からの継続）受	各人のテーマに基づく研究発表。講者各自による発表及び討議
2 回	受講者各自による発表	各人のテーマに基づく研究発表。及び討議
3 回	研究書精読	文学研究の方法論探求
4 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。及び討議
5 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。及び討議
6 回	研究書精読	文学研究の方法論探求
7 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。及び討議
8 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。及び討議
9 回	研究書精読	文学研究の方法論探求
10 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。及び討議
11 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。及び討議
12 回	研究書精読	文学研究の方法論探求
13 回	一年間のまとめ	修論・博論にむけて
14 回	一年間のまとめ	修論・博論にむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自己の担当作品の発表の準備を充分にすることは当然のことながら、演習参加者も作品を読み私見を深め討論の準備をすること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントによる。

【参考書】

演習中に適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

発表内容（40％）、討論への参加状況（40％）、期末レポート（20％）。

【学生の意見等からの気づき】

活発な議論の場を提供する。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近代文学

＜研究テーマ＞

近代文学の成立期の研究－19世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

＜主要研究業績＞

・「紀久八狂乱-広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『鬢下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ-雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学-『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline and objectives】

See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible.

LIN500B2

日本言語学特殊研究 B

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。博士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

参考書は各自の研究テーマにそって、そのつど提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（30％）・質疑応答の発言（30％）・レポート（40％）を勘案して、総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

博士課程の受講生が履修している場合には、修士の受講生との違いを考慮するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

＜研究テーマ＞

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

＜主要研究業績＞

『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005年）

『万葉異説』（森話社、2011年）

『沖縄古語の深層【増補版】』（森話社、2014年）

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〈日本をどう論じるか〉

日本を他とは違うものと見なすこと、そのことは恐らく間違ったことではありません。ただその時とかく伴うのが、いたずらな自虐か、そうでなければ、いたずらな自賛です。その両者を免れているまれな例の一つが、丸山真男の仕事です。授業では、丸山がなにを見たのか以上に、どのように、そしてなぜ見たのかに注目して、丸山の『忠誠と反逆』の前半を学んでいきます。

【到達目標】

- 代表的な〈日本論〉での著者の主張が正確に理解できるようになります。
- 代表的な〈日本論〉での著者の主張に自ら批判ができるようになります。
- グローバリゼーションが進む現代世界において〈日本論〉はどんなレゾンデートルを持つのかを考えることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。

毎回、定められたテキスト箇所についてまとめと解釈のレジュメ発表を当番が行い、その後発表者の問題提起に従って、全員参加で討論を行います。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業でフィードバックされ議論に活かされていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テーマについて概要の説明を行います。
第2回	忠誠と反逆 (1)	議論の理解と批判
第3回	忠誠と反逆 (2)	議論の理解と批判
第4回	忠誠と反逆 (3)	議論の理解と批判
第5回	忠誠と反逆 (4)	議論の理解と批判
第6回	忠誠と反逆 (5)	議論の理解と批判
第7回	忠誠と反逆 (6)	議論の理解と批判
第8回	幕末における視座の 変革 (1)	議論の理解と批判
第9回	幕末における視座の 変革 (2)	議論の理解と批判
第10回	開国 (1)	議論の理解と批判
第11回	開国 (2)	議論の理解と批判
第12回	近代日本思想史における 国家理性の問題 (1)	議論の理解と批判

第13回 近代日本思想史における 議論の理解と批判
国家理性の問題
(2)

第14回 総括 参加者からの問題提起を受けて、
全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回予定のテキスト箇所は下調べをし、読み、理解した上で授業に参加します。またとくに当番に当たったときは、当該箇所について、解釈と問題提起のレジュメを作成して授業に参加します。学期末にはまとめのレポートを作成します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

丸山真男『忠誠と反逆—転形期日本の精神的位相』（ちくま学芸文庫、1998）

【参考書】

荻部直『丸山真男—リベラリストの肖像』（岩波新書）
竹内洋『丸山真男の時代—大学・知識人・ジャーナリズム』（中公新書）
水谷三公『丸山真男—ある時代の肖像』（ちくま新書）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 40 %、学期末レポート 20 %で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、テキストの理解 30 %、テキストの批判 30 %、日本人論の評価 40 %の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
-国際日本学
-哲学
＜研究テーマ＞
-明治の日本近代思想の再評価
-西洋思想の近代日本への導入の問題
＜主要研究業績＞
-Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan(共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所）

-「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの』、国際日本学研究叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所）

-La philosophie japonaise（共著、Vrin, 2013）

-『風土（Fudo）から江戸東京へ』（編著、2020年3月、法政大学出版局）

【Outline and objectives】

< How to discuss Japan >

It's probably not wrong to consider Japan different. However, what accompanies it at that time is mischievous self-deprecation, or otherwise mischievous self-praise. One of the rare examples of avoiding both is the work of Masao Maruyama. In class, we will focus on how and why Maruyama saw more than what he saw, and learn the first half of Maruyama's "Loyalty and Rebellion."

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〈日本をどう論じるか〉

日本を他とは違うものと見なすこと、そのことは恐らく間違ったことではありません。ただその時とかく伴うのが、いたずらな自虐か、そうでなければ、いたずらな自賛です。その両者を免れているまれな例の一つが、丸山真男の仕事です。授業では、丸山がなにを見たのか以上に、どのように、そしてなぜ見たのかに注目して、丸山の『忠誠と反逆』の後半を学んでいきます。

【到達目標】

- 代表的な〈日本論〉での著者の主張が正確に理解できるようになります。
- 代表的な〈日本論〉での著者の主張に自ら批判ができるようになります。
- グローバリゼーションが進む現代世界において〈日本論〉はどんなレゾンデートルを持つのかを考えることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。

毎回、定められたテキスト箇所についてまとめと解釈のレジュメ発表を当番が行い、その後発表者の問題提起に従って、全員参加で討論を行います。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業でフィードバックされ議論に活かされて行きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テーマについて概要の説明を行います。
第2回	日本思想史における問答体の系譜	議論の理解と批判
第3回	日本思想史における問答体の系譜	議論の理解と批判
第4回	福沢・岡倉・内村	議論の理解と批判
第5回	福沢・岡倉・内村	議論の理解と批判
第6回	歴史意識の「古層」	議論の理解と批判
第7回	歴史意識の「古層」	議論の理解と批判
第8回	歴史意識の「古層」	議論の理解と批判
第9回	歴史意識の「古層」	議論の理解と批判
第10回	歴史意識の「古層」	議論の理解と批判
第11回	歴史意識の「古層」	議論の理解と批判
第12回	思想史の考え方について	議論の理解と批判

第13回 思想史の考え方について

(2)

第14回 総括

参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回予定のテキスト箇所は下調べをし、読み、理解した上で授業に参加します。またとくに当番に当たったときは、当該箇所について、解釈と問題提起のレジュメを作成して授業に参加します。学期末にはまとめのレポートを作成します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

丸山真男『忠誠と反逆—転形期日本の精神的位相』（ちくま学芸文庫、1998）

【参考書】

荻部直『丸山真男—リベラリストの肖像』（岩波新書）

竹内洋『丸山真男の時代—大学・知識人・ジャーナリズム』（中公新書）

水谷三公『丸山真男—ある時代の肖像』（ちくま新書）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 40 %、学期末レポート 20 % で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、テキストの理解 30 %、テキストの批判 30 %、日本人論の評価 40 % の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

-国際日本学

-哲学

<研究テーマ>

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

<主要研究業績>

-Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan(共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所）

-「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所）

-La philosophie japonaise（共著、Vrin, 2013）

-『風土（Fudo）から江戸東京へ』（編著、2020年3月、法政大学出版局）

【Outline and objectives】

< How to discuss Japan >

It's probably not wrong to consider Japan different. However, what accompanies it at that time is mischievous self-deprecation, or otherwise mischievous self-praise. One of the rare examples of avoiding both is the work of Masao Maruyama. In class, we will focus on how and why Maruyama saw more than what he saw, and learn the second half of Maruyama's "Loyalty and Rebellion."

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

柳田国男の諸著作を読み進めることを通じて、日本近代における民俗学のあり方を把握していく。特に、日本の民間信仰の特性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

【修士課程】

・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くことが出来る。

・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。

・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【博士後期課程】

・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くことが出来る。

・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。

・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

・論文形式で文章を作成することが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

（1）受講者全員に柳田国男の諸著作の担当箇所を割り当てる。

（2）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。

（3）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

（4）演習の始めに、前回の演習で議論された内容を整理しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	柳田国男に関する概説と演習の進行についての説明	柳田国男の民俗学に関する概要の説明と、演習内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	「海上」信仰に関する考察	「海神宮考」（一：35-72）（以下全て柳田国男全集の巻数とページ数表記による）
第3回	異界との交流に関する考察	「みろくの船」（一：73-84）・「根の国の話」（一：85-109）
第4回	『遠野物語』の探究	『遠野物語』（四：5-54）における異界の考察
第5回	『山の人生』① 里と山の相違から	『山の人生』（四：57-126）における「山」と「里」の相違からの考察
第6回	『山の人生』② 異界としての「山」	『山の人生』（四：126-186）における「山」の異界性の考察
第7回	「史料」の扱い① 「史料」を学問として扱う手法	「史料としての伝説」（四：189-239）による、史料の扱いの習得
第8回	「史料」の扱い② 「伝説」を学問として扱うこと	「史料としての伝説」（四：240-284）による、「伝説」を学問として扱うことの意義
第9回	「伝説」の扱い① 「伝説」の採録	「伝説」（五：3-59）による、「伝説」の採録についての考察

第10回 「伝説」の扱い② 「伝説」の学問化	「伝説」(五：59-110)による、 「伝説」を学問として扱うことの 実際の方法の確認
第11回 「口承文芸」の扱い	「口承文芸史考」(六：3-78)に よる、「口承文芸」の扱い方につ いての考察
第12回 「口承文芸」の学問化	「口承文芸史考」(六：78-150) による、「口承文芸」を学問とし て扱うことについての検討
第13回 「物語論」	「物語と語り物」(七：3-65)に よる、物語論の検討
第14回 「物」とは何か、「物」 を「語る」とはいかな ることか	「物語と語り物」(七：66-123) による、「物」とは何か、「物」を 「語る」とはいかなる営みにつ いての考察

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。
特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジ
ュメを作成することが強く求められる。
本授業の準備・復習時間は、計5時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『柳田国男全集』を用いる。受講者自身が入手することが望ましい
が、入手難易度を考慮して演習担当者が資料を準備する予定である。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず先入観を排して柳田国男の原典そのも
のにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれ
なかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。
参考文献は講義内で適宜指示していくことになる。

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）(60%)
と、演習内での発言や議論への参加姿勢(40%)によって評価する。
【博士後期課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）
(70%)と、演習内での発言や議論への参加姿勢(30%)によって
評価する。

修士課程・博士後期課程ともに、講義においては毎回の発言・質問
を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したもの
とは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ
上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習の展開や学生からの要望次第によっては、より多くの文献を扱っ
ていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。
紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合に
おいても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式
を採用すること。
パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教
員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならび
に日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>

- ①「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間
学」をめぐる—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）
 - ②『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
 - ③「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武
辺」との関係から—」（『倫理学紀要 第24輯』、2017）
- より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太の
ページ [http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/
profile.html](http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html) を参照

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding on
Japanese folklore through reading thoroughly the writings by
Kunio Yanagida. By the end of this course, students should
be able to fully grasp the background of Japanese thought and
faith.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

柳田国男の諸著作を読み進めることを通じて、日本近代における民俗
学のあり方を把握していく。特に、日本の民間信仰の特性とは一体
いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

【修士課程】

- ・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くこ
とができる。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることができる。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることができる。

【博士後期課程】

- ・柳田国男の諸著作を中心に、日本思想史のテキストを読み解くこ
とができる。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることができる。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることができる。
- ・論文形式で文章を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
た能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に柳田国男の諸著作の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表を
する。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論
する。
- (4) 演習の始めに、前回の演習で議論された内容を整理しフィード
バックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	柳田国男に関する概説 と演習の進行について の説明	柳田国男の民俗学に関する概要の 説明と、演習内容や進め方および 評価方法の説明。
第2回	「昔話」の成立	柳田国男『桃太郎の誕生』の出だ し部分の検討（八：3-36）（以下 全て柳田国男全集の巻数とページ 数表記による）
第3回	「昔話」の構造の探究	『桃太郎の誕生』（八：37-74）に 示されている昔話の構造について の考察
第4回	「昔話」と学問	『桃太郎の誕生』（八：157-188） による、昔話と学問との関係につ いての考察
第5回	民俗学と女性	「女性と民間伝承」（八： 317-358）の分析による、民間伝 承と女性の関係についての考察
第6回	女性と社会	『妹の力』（九：3-81）の読解に よる、社会における女性の働きの 検討
第7回	女性と伝承	『妹の力』（九：82-146）の読解 による、女性と伝承の関係につ いての検討
第8回	女性と力	『妹の力』（九：147-219）の読解 による、女性の力のあり方につ いての検討

第 9 回	祀りの問題	「巫女考」(九：221-260)の読解による、神の祀りの問題の検討
第 10 回	祀りと巫女	「巫女考」(九：260-301)の読解による、祀りと巫女との関係についての検討
第 11 回	祀りと共同体の問題	『先祖の話』(十：3-53)の読解による、祀りに共同体がいかに関わるのかという問題についての考察
第 12 回	共同体と信仰	『先祖の話』(十：54-104)の読解により、柳田国男の祖霊信仰の把握を目指す
第 13 回	祖霊信仰	『先祖の話』(十：104-152)の読解により、祖霊信仰の全体像の理解を目指す
第 14 回	祀りと祭	「日本の祭」(十：176-236)の読解による、信仰と祭りの関係性の把握を目指す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

本授業の準備・復習時間は、計 5 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『柳田国男全集』を用いる。受講者自身が入手することが望ましいが、入手難易度を考慮して演習担当者が資料を準備する予定である。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず先入観を排して柳田国男の原典そのものにあって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくことになる。

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）(60 %)と、演習内での発言や議論への参加姿勢（40 %）によって評価する。

【博士後期課程】発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）(70 %)と、演習内での発言や議論への参加姿勢（30 %）によって評価する。

修士課程・博士後期課程ともに、講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習の展開や学生からの要望次第によっては、より多くの文献を扱っていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。

紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。

パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

①「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる—」(『日本倫理思想論 第 2 号』、2014)

②『科学技術の倫理学Ⅱ』(勢力尚雅 編共著、2015)

③「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」(『倫理学紀要 第 24 輯』、2017)

より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding on Japanese folklore through reading thoroughly the writings by Kunio Yanagida. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought and faith.

OTR600B7

国際日本学演習 I

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では狂言の作品を読んでいく。狂言の作品研究を行なうためには、台本の比較、語釈、作品背景の調査が必要となる。これらを行なうための基礎力をつけるため、祝本と他台本との比較検討を行なう。その上で、作品の典拠・歴史的背景を調査し、作品の素材となったものを分析する。それと同時に類曲の整理も行ない、狂言研究の基礎を学んでいく。

【到達目標】

本講義では、狂言台本の比較の詳細な分析を通して、狂言の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第 2 回	狂言の作品研究概説	主要な作品研究の先行論文を読み、研究手法を概説する。
第 3 回	狂言台本概説①	狂言の作品研究に用いる台本を概説する（各流の台本）。
第 4 回	狂言台本概説②	狂言の作品研究に用いる台本を概説する（各流の台本）。
第 5 回	「したうはうかく」①	担当者による資料分析。
第 6 回	「したうはうかく」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 7 回	「子ぬす人」①	担当者による資料分析。
第 8 回	「子ぬす人」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 9 回	「ぬすむかん」①	担当者による資料分析。
第 10 回	「ぬすむかん」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 11 回	「とひこゑ」①	担当者による資料分析。
第 12 回	「とひこゑ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 13 回	「しんぼち」①	担当者による資料分析。
第 14 回	「しんぼち」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。狂言だけでなく、能・歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%

講義での発言 30%

レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学

<研究テーマ> 能楽

<主要研究業績> 『切合能の研究』（檜書店、2011 年）「義経の悲運を〈語る〉劇：判官物の能の手法」（『説話文学研究』54 号、2019 年 9 月）

【Outline and objectives】

In this lecture, we will read Kyogen works. In order to study Kyogen, it is necessary to compare the scripts, interpret the words, and investigate the background of the works. In order to develop the basic skills to do this, we will compare Iwaibon with other scripts. In addition, we will investigate the sources and historical background of the works, and analyze the materials used in the works. At the same time, students will learn the basics of Kyogen research by organizing similar works.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様に天正狂言本と他台本の比較を通しての作品研究を行っていく。春学期からの出席者を考慮し、まず春学期に学んだ狂言の作品研究の基礎を確認した上で、当該資料を用いた作品研究を行っていく。

【到達目標】

本講義では、狂言台本の比較の詳細な分析を通して、狂言の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とするが、それがある程度身に付いた出席者には他の資料も紹介し、主要な能楽資料に関する知識も広げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行っていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第2回	「おほか酒」①	担当者による資料分析。
第3回	「おほか酒」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第4回	「くわいちうむこ」①	担当者による資料分析。
第5回	「くわいちうむこ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第6回	「さいのめ」①	担当者による資料分析。
第7回	「さいのめ」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第8回	「まんちううり」①	担当者による資料分析。
第9回	「まんちううり」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第10回	「かんつぶて」①	担当者による資料分析。
第11回	「かんつぶて」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第12回	「ぶす」①	担当者による資料分析。
第13回	「ぶす」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第14回	総括	狂言作品研究のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。狂言だけでなく、能・歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%

講義での発言 30%

レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

＜研究テーマ＞

＜主要研究業績＞

【Outline and objectives】

As in the spring term we will study the work by comparing iwaibon and other scripts. Considering attendees from the spring term, we will first confirm the basics of Kyogen research learned in the fthe spring term and analyze the work using the text.

OTR600B7

国際日本学演習 I

遠藤 星希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『史記』精読】

司馬遷の『史記』を精読する。『史記』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、『源氏物語』にもその影響が色濃く見えるのみならず、その後の日本文学にも影響力を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（三家注や瀧川資言『史記會注考證』等）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ、『史記』巻七「項羽本紀」を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深め、そこに描かれた人々の英知を吸収すると同時に、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】

1. 『史記』についての基礎的な知識を習得する。
2. 漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
3. 漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『史記』本文を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『史記』の本文を数行ずつ区切ってそれぞれ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。毎回リアクションペーパーを提出して頂き、そこに書き込まれた質問等については、次の授業の冒頭でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『史記』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	ガイダンス（3）	『史記』から窺える当時の人々の世界観
第4回	『史記』精読（1）	担当者による発表と討論（1）
第5回	『史記』精読（2）	担当者による発表と討論（2）
第6回	『史記』精読（3）	担当者による発表と討論（3）
第7回	『史記』精読（4）	担当者による発表と討論（4）
第8回	『史記』精読（5）	担当者による発表と討論（5）
第9回	『史記』精読（6）	担当者による発表と討論（6）
第10回	『史記』精読（7）	担当者による発表と討論（7）
第11回	『史記』精読（8）	担当者による発表と討論（8）
第12回	『史記』精読（9）	担当者による発表と討論（9）
第13回	『史記』精読（10）	担当者による発表と討論（10）
第14回	『史記』精読（11）	担当者による発表と討論（11）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当部分について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・点校本二十四史修訂本『史記』（中華書局、2014）
- ・瀧川資言『史記會注考證』（上海古籍出版社、2015）
- ・吉田賢抗〔ほか〕著『史記』1-15（明治書院、1973-2014）
- ・小川環樹〔ほか〕訳『史記列伝』（岩波文庫、1975）
- ・小竹文夫、小竹武夫訳『列伝』1-4（ちくま学芸文庫、1995）
- ・武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（講談社文芸文庫、1997）
- ・宮崎市定『史記を語る』（岩波文庫、1996）

その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

時間意識・空間意識という側面からの分析を通した、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討

<主要研究業績>

「唐代伝奇『定婚店』をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）

「遺臣のゆれる心——杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）

「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中国學會報』65集、2013・10）など

【Outline and objectives】

In this course, we will closely read Sima Qian's Shiji (The Records of the Grand Historian). Shiji is one of the most familiar Chinese classics that not only exerted strong influence on the Tale of Genji but also had enduring effects on the subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in literary Chinese (So-called Sanjia Zhu — three standard commentaries — and Shiki kaichu kosho by Sukenobu Takigawa). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and absorb wisdom of people described therein through close reading of Chapter 86, Biography of Xiang Yu, of Shiji, and develop basic skills for close reading of Chinese classic writings.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

遠藤 星希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『文選』精読】

梁の昭明太子が編纂した『文選』所収の詩を精読する。『文選』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、その後も日本文学に影響を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（李善注や五臣注など）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ『文選』所収の詩を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深めつつ、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】

1. 『文選』についての基礎的な知識を習得する。
2. 漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
3. 漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『文選』所収の詩を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収の詩の中から比較的有名なものを精選し、一首ずつ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。毎回リアクションペーパーを提出して頂き、そこに書き込まれた質問等については、次の授業の冒頭でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『文選』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	『文選』精読（1）	漢武帝「秋風辞」
第4回	『文選』精読（2）	「古詩十九首」其四
第5回	『文選』精読（3）	曹丕「燕歌行」
第6回	『文選』精読（4）	阮籍「詠懷詩」其四
第7回	『文選』精読（5）	謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」
第8回	『文選』精読（6）	陶淵明「雜詩二首」其二
第9回	『文選』精読（7）	鮑照「東武吟」
第10回	『文選』精読（8）	曹植「箜篌引」
第11回	『文選』精読（9）	無名氏「長歌行」
第12回	『文選』精読（10）	曹丕「芙蓉池作」
第13回	『文選』精読（11）	潘岳「悼亡詩三首」其一
第14回	『文選』精読（12）	謝朓「游東田」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する詩について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・『文選』（上海古籍出版社、1986）
- ・『文選』（中華書局、1977）
- ・『六臣注文選』（浙江古籍出版社、1999）
- ・『唐鈔文選集註彙存』（上海古籍出版社、2011）
- ・小尾郊一・花房英樹『文選』（集英社、1974-1976）
- ・内田泉之助・網祐次〔ほか〕『文選』（明治書院、1963-2001）
- ・斯波六郎・花房英樹『文選』（筑摩書房、1963）
- ・興膳宏・川合康三『文選』（角川書店、1988）
- ・高橋忠彦・神塚淑子『文選』（学習研究社、1985）
- その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70％）、討論への参加度・貢献度・積極性（30％）。

【学生の意見等からの気づき】

授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

時間意識・空間意識という側面からの分析を通じた、中国文学・思想上における李賀の定位の再検討

<主要研究業績>

「唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）

「遺臣のゆれる心——杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）

「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中国學會報』65集、2013・10）など

【Outline and objectives】

In this course, we will closely read poetry contained in the anthology Wen Xuan, which was compiled by Xiao Tong, a Crown Prince of the Chinese Liang Dynasty. Wen Xuan was one of the most familiar Chinese classics for aristocrats in the Heian period and has been influential in subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in Literary Chinese (Li Shan and Commentaries by Five Officials). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and while developing basic skills for reading Chinese classical writings through close reading of poetry contained in Wen Xuan.

OTR600B7

国際日本学演習 I

王 安

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日中対照研究に関する重要なトピックを中心に、重要文献・論文を精読し、日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。

【到達目標】

- 1、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
- 2、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象や問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
- 3、対照研究の研究方法を用いて自分の興味ある言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文 1 本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ (A4 サイズ 3～4 枚／一人で担当する場合は 6 枚) を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく (例えば質問リストを作成するなど)。

また、春学期の授業は Zoom によるオンライン形式で行う。授業計画について変更がある場合、学習支援システムでまたは前回の授業で知らせる。本授業の開始日は 4 月 12 日 (月) とし、この日までに授業ガイダンスの資料などを学習支援システムで提示するのでご参照ください。

なお、授業のフィードバックは随時授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第 2 回	論文解説 (その 1)	論文講読：吉永 (2008) 「心理動詞の動詞的性質について」
第 3 回	論文解説 (その 2)	論文 (吉永 2008) の内容に関して議論を行う。
第 4 回	論文解説 (その 3)	論文講読：玉村 (1997) 「日本語と中国語における音象徴語」
第 5 回	論文解説 (その 4)	論文講読：荒川 (1997) 「日本語名詞のトロロ性」
第 6 回	論文解説 (その 5)	論文講読：楊 (2018) 「現代中国語の人称代名詞 “人家” について」
第 7 回	論文解説 (その 6)	論文 (玉村 1997、荒川 1997、楊 2018) の内容に関して議論を行う。
第 8 回	論文解説 (その 7)	論文講読：小野 (2013) 「中国語における連体修飾語の意味機能」
第 9 回	論文解説 (その 8)	論文 (小野 2013) の内容に関して議論を行う。
第 10 回	論文解説 (その 9)	論文講読：王 (2016) 「日本語と中国語の受動文に見られる類似点と相違点」
第 11 回	論文解説 (その 10)	論文 (王 2016) の内容に関して議論を行う。

第 12 回	論文解説 (その 11)	論文講読：楊 (2018) 「日中受益表現と所有構造の対照研究」
第 13 回	論文解説 (その 12)	論文 (楊 2018) の内容について議論を行う。
第 14 回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ (最終レポートにするテーマ) について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。
 - 2、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する (論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たり A4 サイズ 3～4 枚、一人で発表する場合は 6 枚以内)
 - 3、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく (例えば質問リストを作成するなど)
- 本授業の準備学習・復習時間は、各 10～12 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】

- <中国語学>
- 『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕 監訳 2004 三省堂
 - 『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 商務印書館
 - 『現代中国語文法総覧』劉月華他 1996 くおしお出版
 - 『現代漢語專題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 北京大学出版社
 - 『語法講義』朱德熙 1982 商務印書館
 - 『語法問答』朱德熙 1986
 - 『現代漢語語法研究教程』陸儉明 2005 北京大学
 - 『現代中国語用法辞典』呂叔湘 1983 現代出版
 - 『現代漢語八百詞』呂叔湘 2008 商務印書館 (虚詞が中心)
 - 『漢語基本知識 (語法篇)』施春宏 2011 北京語言大学出版社
 - 『中国語学概論』王占華他 2004 駿河台出版社
- <対照言語学関係参考文献>
- 井上優 (2002) 『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究 X, 国立国語研究所
 - 石綿敏雄 高田誠 (1990) 『対照言語学』桜楓社
 - 生越直樹 (2002) 『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会
 - 大河内康内編 (1997) 『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
 - 寺村秀夫 (1982) 「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学 10 外国語との対照』明治書院
 - 中川正之 (1997) 「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
 - 張 黎 (2012) 『漢語意合語法研究』白帝社
 - 張麟声 (2007) 「言語研究のための対照研究について—日本国内の事例を中心に—」『言語文化学研究—言語情報編 2』1-14. 大阪府立大学。

<中国語教育参考書>

- 『中国語文法教室』杉村博文 1994 大修館書店
- 『中国語の文法書』相原茂 他 1996 同学社
- 『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他 高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート (10%) + 論文内容発表 (20%) + 質問・発言 (20%) + 期末レポート (50%) で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>
- 対照言語学、現代中国語文法、認知言語学
- <研究テーマ>
- 形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究
- <主要研究業績>

「中国語の＜主観性＞の再考察―使役表出文を例として―」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編。pp.35-50. 2018. 開拓社

「感情の普遍性とその言語化―感情表現の類型論的研究に向けて―」『ことばのパースペクティヴ』（中村芳久教授退職記念論文集刊行会編。pp.71-84. 2018. 開拓社

第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版

「感情表現における日中対照研究―感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して―」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline and objectives】

The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

王 安

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

引き続き日中対照研究に関する重要なトピックを中心に、重要文献・論文を精読し、日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。また、学期後半の授業では各自の研究について発表をしてもらい、議論を行う。

【到達目標】

- 1、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
- 2、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象、問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
- 3、対照研究の研究方法を用いて自分の興味持つ言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文1本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ（A4サイズ3～4枚／一人で担当する場合は6枚）を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく（例えば質問リストを作成するなど）。

なお、授業のフィードバックは随時授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	論文解説（その1）	論文講読：大河内（1997）「日本語と中国語の同形語」
第3回	論文解説（その2）	論文（大河内 1997）の内容に関して議論を行う。
第4回	論文解説（その3）	論文講読：役割語関連
第5回	論文解説（その4）	論文講読：認識思考動詞関連
第6回	論文解説（その5）	論文講読：中国語受動文関連
第7回	論文解説（その6）	以上のトピックについて議論を行う
第8回	論文解説（その7）	論文講読：中国語呼称語について
第9回	論文解説（その8）	論文講読：中国語時間表現・空間表現について
第10回	論文解説（その9）	論文講読：日本語の文末表現について
第11回	論文解説（その10）	以上のトピックについて議論を行う。
第12回	研究発表（その1）	グループ1発表と議論
第13回	研究発表（その2）	グループ2発表と議論
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ（最終レポートにするテーマ）について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。

2、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する
 (論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たり A4 サイズ 3～4 枚、一人で発表する場合は 6 枚以内)
 3、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(例えば質問リストを作成するなど)
 本授業の準備学習・復習時間は、各 10～12 時間を標準とします。

【テキスト(教科書)】

特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】

＜中国語学＞

○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕 監訳 2004 三省堂
 ○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 商務印書館

『現代中国語文法総覧』劉月華他 1996 くおしお出版

『現代漢語專題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 北京大学出版社

『語法講義』朱德熙 1982 商務印書館

『語法問答』朱德熙 1986

『現代漢語語法研究教程』陸俊明 2005 北京大学

『現代中国語用法辞典』呂叔湘 1983 現代出版

『現代漢語八百詞』呂叔湘 2008 商務印書館(虚詞が中心)

『漢語基本知識(語法篇)』施春宏 2011 北京語言大学出版社

『中国語学概論』王占華他 2004 駿河台出版社

＜対照言語学関係参考文献＞

井上優(2002)『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究 X, 国立国語研究所

石綿敏雄 高田誠(1990)『対照言語学』桜楓社

生越直樹(2002)『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会
 大河内康内編(1997)『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

寺村秀夫(1982)「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学 10 外国語との対照』明治書院

中川正之(1997)「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

張 黎(2012)『漢語意合語法研究』白帝社

張麟声(2007)「言語研究のための対照研究について—日本国内の事例を中心に—」『言語文化学研究—言語情報編 2』1-14. 大阪府立大学.

＜中国語教育参考書＞

『中国語文法教室』杉村博文 1994 大修館書店

『中国語の文法書』相原茂 他 1996 同人社

『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他 高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート(40%) + 論文内容発表(40%) + 質問・発言(20%)
 で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

対照言語学、現代中国語文法、認知言語学

＜研究テーマ＞

形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究

＜主要研究業績＞

「中国語の＜主観性＞の再考察—使役表出文を例として—」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社

「感情の普遍性とその言語化—感情表現の類型論的研究に向けて—」『ことばのパースペクティヴ』(中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社

第 8 章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版

「感情表現における日中対照研究—感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して—」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline and objectives】

The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.

OTR600B7

国際日本学演習 I

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、前半は認知言語学（認知意味論）の基本的な考え方を学ぶためにテキストを皆で読み進める。受講生は、要約レポートを毎週作成し、授業開始時に提出する。その後、基本概念についての質疑応答、疑問点についての討論を行う。後半は、テキストで学んだことが実際の言語研究でどのように利用されているのかを学ぶために、意味について分析している学術論文を読む。受講生は、論文の要約レポートを毎週作成し、授業開始時に提出する。授業内容は、前半と同じように進める。

【到達目標】

テキストに出てくる認知言語学および言語学一般の基礎概念・用語を理解するとともに、具体例を挙げながら他者にそれらの概念を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

▼前半の数回はテキストを皆で読み進める。まず授業開始時に要約レポートを提出し、その後、その章の内容に関する確認の質疑応答を行い、最後に疑問点や問題点についてディスカッションを行う。後半の数回は、前半で学習した事項が分析に利用されている学術論文を毎週1本読むが、授業の進め方は前半と同じである。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	学習の仕方、要約の書き方、各種参考資料について	要約レポートの書き方などをレクチャーする
第2回	第1章「はじめに」と第2章「認知言語学」	受講生による発表・討論
第3回	第3章「認知メタファー理論」	受講生による発表・討論
第4回	第4章「新体制メタファー論」	受講生による発表・討論
第5回	第5章「イメージメタファー」と第6章「水のメタファー」	受講生による発表・討論
第6回	第7章「擬人のメタファー」と第8章「線と移動のメタファー」	受講生による発表・討論
第7回	第9章「因果のメタファー」と第10章「現実のメタファー」	受講生による発表・討論
第8回	第11章「可能性のメタファー」と第12章「希望のメタファー」	受講生による発表・討論
第9回	第13章「問題のメタファー」と第14章「善悪のメタファー」	受講生による発表・討論

第10回 論文レポート1（空間 受講生による発表・討論のメタファーに関するもの）

第11回 論文レポート2（時間 受講生による発表・討論のメタファーに関するもの）

第12回 論文レポート3（因果 受講生による発表・討論のメタファーに関するもの）

第13回 論文レポート4（水のメタファーに関するもの）

第14回 まとめ 本授業の総括をするとともに、期末レポートの所注意を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【宿題】

- (1) テキストの該当箇所もしくは課題論文の要約レポート（A4用紙一枚）。毎週、授業開始時に提出する。（1時間程度）
- (2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。（2時間程度）
- (3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく。（1時間程度）

【テキスト（教科書）】

『日本語のメタファー』（鍋島弘治朗著、くろしお出版、3300円＋消費税）

【参考書】

『認知言語学大事典』★★★（朝倉書店）
『意味論キーターム事典』★★（開拓社）
『新編 認知言語学キーワード事典』★（研究社）
『ことばの認知科学事典』★（大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（明治書院）
『日本語学研究事典』（明治書院）
『語用論キーターム事典』（開拓者）
『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社）
『認知意味論：言語から見た人間の心』（ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店）
『認知意味論のしくみ』（初山洋介著、研究社）
『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
『概念化と意味の世界 認知意味論のアプローチ』（深田智・仲本康一郎著、研究社）
『認知言語学 基礎から最前線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

宿題 (1)「要約レポート」(40%)
宿題 (2)(3) 質疑応答・ディスカッションへの参加態度 (40%)
学期末レポート (20%)

【学生の意見等からの気づき】

論文を書くための基礎になる知識を中心に教えて欲しいとの要望があったので、知識と論文レビューの両方を行うこととした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
<研究テーマ>
認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
<主要研究業績>
「アマルガム構文としての『『全然』+肯定』に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年)
「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年)
「接続詞ケドの手続き的意味」(『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年)
『構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ』(共著、研究社、2011年)

【Outline and objectives】

To understand the basic concepts of cognitive linguistics, we read the textbook for cognitive linguistics(semantics) and academic papers on (cognitive) semantics. Students are supposed to submit a summary of the chapter(or a paper) that we are to read on the day.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、(認知)言語学的な研究手法を学ぶことができる雑誌記事・学術論文を読む。論文ごとに担当者を決め、担当者には、論文の要旨を分かりやすくレジュメにまとめたものを授業で配付し、口頭でレポートしてもらう。その後、質疑応答・ディスカッションを行い、論文の分析手法について批判的に検討する。

【到達目標】

- (1) 論文における主張と根拠を的確に理解し、分かりやすく要約してレポートができるようになる。
- (2) 言語学の諸概念が言語分析においてどのように応用されているのかを理解し、具体例を挙げながら、それらについて説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。発表者はレジュメを作って、論文の内容を分かりやすく伝える。それ以外の受講者は、論文の不明点や欠点について容赦なく質問し、発表者とひたすらディベートを行う。最後に皆でその論文の欠点と改善点について考える。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文レポートの方法について	論文の要約の仕方を学ぶ
第2回	論文レポート(1)	動詞の多義について
第3回	論文レポート(2)	形容詞の多義について
第4回	論文レポート(3)	接続詞の多義について
第5回	論文レポート(4)	言いさし文と文法化について
第6回	論文レポート(5)	モダリティ副詞と文法化について
第7回	論文レポート(6)	接続詞の文法化について
第8回	論文レポート(7)	談話標識について
第9回	論文レポート(8)	若者言葉と対話表現について
第10回	論文レポート(9)	待遇表現について
第11回	論文レポート(10)	活用の変化について
第12回	論文レポート(11)	新語の発生について
第13回	論文レポート(12)	コーパスについて
第14回	まとめ	総括をする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【宿題】

- (1) 課題論文の要約レポート（A4用紙一枚）。毎週、授業開始時に提出する。
- (2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。（2時間程度）
- (3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（2時間程度）。

【テキスト（教科書）】

使用しない。（必要に応じて、教員が資料を配付する。）

【参考書】

『認知言語学大事典』（朝倉書店）
 『意味論キータム事典』（開拓社）
 『新編 認知言語学キーワード事典』（研究社）
 『ことばの認知科学事典』（大修館書店）
 『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
 『言語学大辞典』（三省堂）
 『日本語文法大辞典』（明治書院）
 『日本語学研究事典』（明治書院）
 『語用論キータム事典』（開拓者）
 『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社）
 『認知意味論：言語から見た人間の心』（ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店）
 『認知意味論のしくみ』（初山洋介著、研究社）
 『認知意味論の新展開－メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
 『概念化と意味の世界 認知意味論のアプローチ』（深田智・仲本康一郎著、研究社）
 『認知言語学 基礎から最前線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

宿題 (1) 「要約レポート」 (40 %)
 宿題 (2)(3) 質疑応答・ディスカッションへの参加態度 (40 %)
 学期末レポート (20 %)

【学生の意見等からの気づき】

論文の書き方が具体的に理解できた、というコメントが多かったので、今年度の実際に多くの論文を取り上げる予定である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
 <研究テーマ>
 認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
 <主要研究業績>
 「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008 年)
 「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年)
 「接続詞ケドの接続的意味」(『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年)
 『構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011 年）

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1)To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学を研究するにあたっては、注釈的な方法により本文を読むことが求められる。この授業では中世の刀剣伝承を集成した『剣巻』（『平家物語』『太平記』の一部の伝本の付録として流布）を素材に用い、輪読を行う。

【到達目標】

本授業の到達目標は以下のとおりとする。

1. 『剣巻』を的確に口語訳する作業を通じて、中世の文学作品を原文で読む力を習得する。
2. 現代の辞書、索引、データベースのみならず、他作品、資史料、古辞書等も使用して語釈を行い、作品の解釈を深める力を修得する。
3. 『剣巻』を通じて、怪異と刀剣をめぐる中世の伝承世界について一定の理解をもつ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業では、『剣巻』を素材として、履修者が各種の工具書、資史料、データベース等を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は本文 2 頁を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。また、授業に関する質問や研究指導は、授業時とオフィスアワーで対応する。なお、授業は来校できない学生がいることも考慮し、ハイフレックス方式で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	作品解説 1	軍記物語・説話・お伽草子の歴史について概説する。
第 2 回	作品解説 2	『剣巻』について概要を解説する。
第 3 回	作品講読 1	p.409～412 の講読。
第 4 回	作品講読 2	p.413～416 の講読。
第 5 回	作品講読 3	p.417～420 の講読。
第 6 回	作品講読 4	p.421～424 の講読。
第 7 回	作品講読 5	p.425～428 の講読。
第 8 回	作品講読 6	p.429～432 の講読。
第 9 回	作品講読 7	p.433～436 の講読。
第 10 回	作品講読 8	p.437～440 の講読。
第 11 回	作品講読 9	p.441～444 の講読。
第 12 回	作品講読 10	p.445～448 の講読。
第 13 回	作品講読 11	p.449～450 の講読。
第 14 回	まとめ	『剣巻』の文学史的位置づけについて確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
 分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

市古貞次校注・訳、完訳日本の古典『平家物語』四（小学館、1989 年）。ただし、絶版のため、古書またはコピーを手許においてほしい。

【参考書】

大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編『平家物語大事典』（東京書籍、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70 %）、討論への貢献（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【Outline and objectives】

In this course, we will read Tsurugi-no-Maki.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学を研究するにあたっては、既存の注釈書を批判的に読み、そこから問題点を見出だすことが大切である。この授業では『徒然草』を素材に、既存の注釈書を読み比べながら、この作品の課題を洗い出す。

【到達目標】

本授業の到達目標は以下のとおりとする。

1. 『徒然草』の代表的な注釈書を読み比べ、注釈の差異を指摘し、課題を読み取る能力を身に付ける。
2. 注釈書間における解釈の差に対し、どの説が妥当なものか判断する方法を身に付ける。
3. 『徒然草』をより深く読む姿勢と能力を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業では、『徒然草』の現代の代表的な注釈書（テキスト（教科書）欄参照）を複数とりあげ、読み比べる。そのなかで、注釈書間に解釈に差のある部分を見出だし、その違いを説明し、どの説が妥当かを検討し、その結果を口頭発表してもらう。履修者は1段を分担し、調査内容をレジュメにまとめ、発表するものとする。また、授業に関する質問や研究指導は、授業時とオフィスアワーで対応する。なお、授業は来校できない学生がいることも考慮し、ハイフレックス方式で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	作品解説1	『徒然草』について概説する。
第2回	作品解説2	『徒然草』の注釈書について解説する。
第3回	作品講読1	序段の講読。
第4回	作品講読2	第一段の講読。
第5回	作品講読3	第二段の講読。
第6回	作品講読4	第三段の講読。
第7回	作品講読5	第四段、第五段の講読。
第8回	作品講読6	第六段の講読。
第9回	作品講読7	第七段の講読。
第10回	作品講読8	第八段の講読。
第11回	作品講読9	第九段の講読。
第12回	作品講読10	第十段の講読。
第13回	作品講読11	第十一の講読。
第14回	作品講読12	第十二段の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

安良岡康作『徒然草全注釈』（角川書店、1967年）
三木紀人『徒然草 全訳注』（講談社学術文庫、1979年）
久保田淳『方丈記 徒然草』（岩波書店・新日本古典文学大系、1989年）
稲田利徳『徒然草』（貴重本刊行会、2001年）
小川剛生『新版 徒然草』（角川ソフィア文庫、2015年）

【参考書】

田辺爵『徒然草諸注集成』（右文書院、1962年）
桑原博史『徒然草研究序説』（明治書院、1976年）

三谷栄一・峯村文人『徒然草解釈大成』（有精堂出版、1986 年）
小松英雄『新版 徒然草抜書』（花鳥社、2020 年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70 %）、討論への貢献（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【Outline and objectives】

In this course, we will read Tsurezuregusa.

OTR600B7

国際日本学演習 I

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では研究文献を通じて日本文学とその周辺各分野の研究法を学び、その要件を考える。江戸～明治時代をおもな対象とし、文学・美術・芸能・思想など諸分野の論考を取りあげる。

【到達目標】

（１）各分野の研究アプローチの方法や要件を知り、またそれらに共通する点について説明できるようになる。
（２）文献から論点を探し、研究を発展させる視点を自分なりに獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究テーマを勘案して毎回、前の週に論文を配付する。各回の担当者は、その論文のテーマとその背景、内容、課題・問題をまとめて発表し、全員で議論する。そのなかでよい論文に求められるものについての理解を深める。
発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究とは	学際研究の課題
第 2 回	授業の進め方	一文献を例に本授業の発表方法についての理解を共有する。
第 3 回	文献講読 1 A	文学篇①
第 4 回	文献講読 1 B	同上
第 5 回	文献講読 2 A	文学篇②
第 6 回	文献講読 2 B	同上
第 7 回	文献講読 3 A	美術篇
第 8 回	文献講読 3 B	同上
第 9 回	文献講読 4 A	芸能篇
第 10 回	文献講読 4 B	同上
第 11 回	文献講読 5 A	思想篇
第 12 回	文献講読 5 B	同上
第 13 回	文献講読 6 A	歴史篇
第 14 回	文献講読 6 B	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
前の週に配られた文献を読むこと。
5 月の土曜日にケンブリッジ大学の大学院生との交流研究発表会を 2 回実施しますので、参加してください。小林ゼミ所属学生（修士・博士とも）は発表を必須とします。

【テキスト（教科書）】

コピーを配布する。

【参考書】

適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 50 %、授業中の質疑などの参加態度 50 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の関心に即して文献を選択するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化
 <研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌を中心とする近世中期文学・文化の研究

<近年の主要著書>

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル〔インターナショナル新書〕 2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

（共著）

『最後の文人石川淳の世界（仮題）』（集英社〔集英社新書〕 2021）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『奇と妙の江戸文学史』（文学通信 2019）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（共著 笠間書院 2014）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編 笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（江戸狂歌研究会編 共著 笠間書院

2014）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

【Outline and objectives】

Learning difference of disciplines to approach Tokugawa-Meiji period cultures by reading essays from various fields including literature, art history, performing arts, history etc.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、受講生相互の研究分野についての発表を通じて、学際的な日本研究をいかに意義づけるかについて、多様な視点から考える。

【到達目標】

（１）日本近世・近代文化研究がどのような学問領域にまたがっているかを認識する。

（２）日本文化史研究という広い視野で自らの研究の位置づけを説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は受講生が自らの研究において最重要と考える文献を紹介することを通じて、事例に則して「いい論文」とは何かを考える。後半は受講生相互の研究発表とする。発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	研究をどう意義づけるか（講義）
第 2 回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（１）
第 3 回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（２）
第 4 回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（３）
第 5 回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（４）
第 6 回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（５）
第 7 回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（６）
第 8 回	中間まとめ 討論	「いい論文」「いい研究」とは？
第 9 回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論 1
第 10 回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論 2
第 11 回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論 3
第 12 回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論 4
第 13 回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論 5
第 14 回	まとめ	全体をふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
 事前に配付された文献を読んでもらうようにしましょう。

【テキスト（教科書）】

適宜配付します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 50 %、授業中の質疑などの参加態度 50 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な討論を期待します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・文化

＜研究テーマ＞近世中期文学・文化の研究

＜近年の主要論文＞

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113号 2021

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020

「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（勉誠出版）2019

「書籍を模擬する遊び—「見立絵本」にかんする疑問、から—」『京都語文』26号 2018

【Outline and objectives】

Thinking how to attach significance to your interdisciplinary study/dissertation in a field of Japanese Studies

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を精読する。

【到達目標】

万葉集の注釈書を精読し、研究史を理解する。学生が万葉集注釈史が抱える問題点についての的確に説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

万葉集の中から各自研究テーマ・作品を選び、注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を発表する。最終授業で、13回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業概説	万葉集注釈の歴史を概観し、研究史の流れを理解する。
第2回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第3回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第4回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第5回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第6回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第7回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第8回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第9回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第10回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第11回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第12回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第13回	各自のテーマにそって発表、討議する。	左記発表に対する批評、検討を行う。
第14回	まとめ	万葉集注釈の歴史の意義と問題点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、宿題など、毎週3時間以上の学習を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き。

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50％）とレポート（50％）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本上代文学

＜研究テーマ＞古事記、万葉集などの研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群についてー」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

Carefully read the Manyoshu.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を精読する。

【到達目標】

注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を検討し、万葉集読解の基本的力を養う。学生が作品論研究の抱える問題点についての確に説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

万葉集の中から各自研究テーマ・作品を選び、注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を発表する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の歴史と問題点について概説する。
第 2 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 3 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 4 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 5 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 6 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 7 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 8 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 9 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 10 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 11 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 12 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 13 回	各自、テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 14 回	まとめ	万葉集研究の歴史と研究方法の問題点について確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、課題など、毎週 3 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本上代文学

＜研究テーマ＞古事記、万葉集の研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集 卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群についてー」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

Carefully read the Manyoshu (万葉集) .

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程 1 年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程 2 年次生は春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明
第 2 回	研究課題の紹介（2 年次生）①	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告
第 3 回	研究課題の紹介（2 年次生）②	同上
第 4 回	研究課題の紹介（2 年次生）③	同上
第 5 回	関心対象の紹介（1 年次生）①	関心対象について、学術研究の可能性を考える
第 6 回	関心対象の紹介（1 年次生）②	同上
第 7 回	修士課程の中間報告（2 年次生）①	国際日本学合同演習の中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第 8 回	修士課程の中間報告（2 年次生）②	同上
第 9 回	研究動向の確認（1 年次生）	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討
第 10 回	先行研究の論旨の整理（2 年次生）①	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討
第 11 回	先行研究の論旨の整理（2 年次生）②	同上
第 12 回	先行研究の論旨の整理（1 年次生）①	同上
第 13 回	先行研究の論旨の整理（1 年次生）②	同上
第 14 回	夏期休暇中の作業計画立案	各自が行うべき作業の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

①『唐代伝来の音楽とその再現』（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日是一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「工尺譜の起源をめぐって —唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集 文学と音楽史 —詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は秋学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	修士論文構想の報告（2年次生）①	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告
第3回	修士論文構想の報告（2年次生）②	同上
第4回	先行研究の紹介と整理（1年次生）①	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）②	同上
第6回	修士課程の中間報告（1年次生）①	国際日本学合同演習の中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第7回	修士課程の中間報告（1年次生）②	同上
第8回	修士論文の中間報告（2年次生）①	修士論文執筆の進捗状況に関する報告
第9回	修士論文の中間報告（2年次生）②	同上
第10回	修士論文の構想発表（1年次生）①	学術的な論理展開に基づき、修士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す
第11回	修士論文の構想発表（1年次生）②	同上
第12回	修士論文提出前の総点検（2年次生）	論文構成、要旨、英文要旨、参考文献などについて点検を行う

第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第14回	まとめ	1年次生は春季休暇中の作業課題に関する計画を示し、2年次生は提出論文について報告し、講評を受ける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日是一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマや課題について、先ずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

秋学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

教室授業にしてほしい。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005 年）

『万葉異説』（森話社、2011 年）

『沖縄古語の深層 [増補版]』（森話社、2014 年）

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

OTR600B7

国際日本学演習 I

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論していく。言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1 年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	人の言語能力	第一言語習得
3	言語習得研究 1	第一言語習得と第二言語習得
4	言語習得研究 2	L2 研究の歴史
5	言語獲得と言語習得	Learning & Acquisition
6	研究計画発表 1	修士 2 年生による研究計画発表・進捗状況の報告
7	研究計画発表 2	修士 1 年生による研究テーマ発表
8	エラーに関する研究 1	transfer エラー・developmental エラー
9	エラーに関する研究 2	Error Analysis
10	学びと注意 1	暗示的・明示的学び
11	学びと注意 2	気づき仮説
12	学生による発表 1	レビュー論文
13	学生による発表 2	実験による仮説検証
14	研究法	研究手法比較と研究計画の作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内でその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

<修士課程学生>

授業参加点：40%

授業内発表：30%

研究計画書：30%

【学生の意見等からの気づき】

受講生の基礎知識、興味の内容が大きく異なるため、それぞれの興味に応じて扱う題材を調整していきたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の研究を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる第二言語習得の理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】

—音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法を学ぶ。

— SLA の音韻習得・語彙習得の論文を読み、習得・音韻理論への理解を深める。

—自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の形にすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション 第一言語習得と第二言語習得	授業内容の説明・母語の影響
2	修士 2 年生の研究発表	研究の進捗状況発表（2 年生）
3	修士 1 年生・研修生の研究発表	研究の進捗状況の発表（1 年生、および研修生）
4	習得理論 1	Noticing
5	習得理論 2	input と output
6	習得順序 1	処理可能性理論
7	習得順序 2	セイリエンス
8	第二言語習得の研究手法	学生による実験論文の発表
9	データの分析・可視化 1	データ分析・統計処理
10	データの分析・可視化 2	データ分析・統計処理（ハンズオンデータによる実習）
11	論文構成	論文の構成・書式について学ぶ
12	1 年生による修論計画発表	1 年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表。
13	2 年生による修論発表	2 年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

＜修士課程＞

授業発表....40%

授業内での発言・議論への貢献....30%

学期末アブストラクト....30%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第2言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マッシュューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得(第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

OTR600B7

国際日本学演習 I

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には書かれたテキスト分析の方法です。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それを一つのテキストとみなし、そのスタイルを、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をします。今年は語用論研究の領域を概観します。それを出発点として、狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つのテキスト分析の方法を確認していきます。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とします。学生は、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初回は4月7日です。担当を決めるので、履修予定の学生は、必ず初回に出席してください。状況によってzoomと対面授業をします。HOPPIIの「教材」のところで連絡をしますので、毎週必ず見てください。

テキストは担当を決めて、発表してもらいます。その後で、みんなコメントを交換し、ディスカッションをします。

リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	学生のプレゼンテーションと議論：「語用論」とは何か？
第2回	第一章：イントロダクション	文脈における意味、英語の語用論：学生のプレゼンテーションと議論
第3回	第二章：指示語用論（1）：定表現、ダイクシス	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第4回	第二章：指示語用論（2）：前方照応	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第5回	第二章：指示語用論（3）：相互行為における指示表現の使用と理解	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第6回	第三章：情報語用論（1）：情報語用論、情報基盤	情報語用論、情報基盤、情報背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第7回	第三章：情報語用論（2）：情報背景、	情報語用論、情報基盤、情報背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション

第 8 回	第三章：情報語用論 (3)：相互好意的側面	情報語用論、情報基盤、情動的背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第 9 回	第四章：語用論の意味 I (1)：「言われたこと」以上の意味	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第 10 回	第四章：語用論の意味 I (2)：「言われたこと」対「推意とされたこと」	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第 11 回	第四章：語用論の意味 I (3)：「言われたこと」と「推意とされたこと」	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第 12 回	第五章：語用論の意味 II (1)：語用論の意味の分析	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション
第 13 回	第五章：語用論の意味 II (2)：誰の意味なのか	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション
第 14 回	第五章：語用論の意味 II (3)：意味を理解すること、相互行為の文脈における意味	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習・復習については各 2 時間を標準とします。担当者でなくても、かならずテキストを読んで予習をしてきてください。

【テキスト（教科書）】

ジョナサン・カルベパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』研究社

【参考書】

適宜、指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート（50 %）に加え、授業中の参加の度合、貢献度（50 %）を考慮し、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

面談が評判がよいので、指導は授業と面談とのコンビネーションで進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>語用論、文体論、コミュニケーション論
<研究テーマ>英語の呼称について、日本語のベネファクティブとポライテネスについて
<主要研究業績>「させていただく」という問題系『日本語語用論フォーラム 2』2017, ひつじ書房、他

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to gain an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply the methodologies and theories that are needed in their own research.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には書かれたテキスト分析の方法である。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それの一つのテキストとみなし、その語用論の意味を、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をします。狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つ一つのテキスト分析の方法を確認していきます。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とします。学生には、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得してもらうことをめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の形態は毎回 HOPPII でお知らせしますので、毎週必ずチェックしてください。

担当者がテキストについて発表し、その後、みんなでコメントを交わしてディスカッションをします。

秋セメスターは基本的にリモート授業ですが、コロナの感染状況によって大学の基準が変更する場合は、授業形式も変更になります。その場合は、HOPPII でお知らせします。大学の HP も定期的にみておいて下さい。

リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論の行為とスキーマ理論、相互行為における語用論の行為：担当の受講生による発表とディスカッション
第 2 回	第六章：語用論の行為 (1)：伝統的な言語行為論	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論の行為とスキーマ理論、相互行為における語用論の行為：担当の受講生による発表とディスカッション
第 3 回	第六章：語用論の行為 (2)：直接性・間接性	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論の行為とスキーマ理論、相互行為における語用論の行為：担当の受講生による発表とディスカッション
第 4 回	第六章：語用論の行為 (3)：社会・文化的文脈における言語行為など	伝統的な言語行為論、直接性・間接性、社会・文化的文脈における言語行為、語用論の行為とスキーマ理論、相互行為における語用論の行為：担当の受講生による発表とディスカッション

第 5 回	第七章：対人語用論（1）：ポライトネスへの2つの一般的アプローチ	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション
第 6 回	第七章：対人語用論（2）：2つの古典的な語用論的ポライトネス観	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション
第 7 回	第七章：対人語用論（3）：最近の展開、インポライトネス	ポライトネスへの2つの一般的アプローチ、2つの古典的な語用論的ポライトネス観、最近の展開、インポライトネス：担当の受講生による発表とディスカッション
第 8 回	第八章：メタ語用論（1）：メタ語用論と再帰性	メタ語用論と再帰性、メタ語用論的意識の形成、実用的メタ語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 9 回	第八章：メタ語用論（2）：実用的メタ語用論	メタ語用論と再帰性、メタ語用論的意識の形成、実用的メタ語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 10 回	第八章：メタ語用論（3）：実用的メタ語用論	メタ語用論と再帰性、メタ語用論的意識の形成、実用的メタ語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 11 回	第九章：結論（1）：語用論の使用の相における言語	語用論の使用の相における言語、統合的語用論、諸英語の語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 12 回	第九章：結論（2）：統合的語用論	語用論の使用の相における言語、統合的語用論、諸英語の語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 13 回	第九章：結論（3）：諸英語の語用論	語用論の使用の相における言語、統合的語用論、諸英語の語用論：担当の受講生による発表とディスカッション
第 14 回	語用論的研究の今後の課題	タームを振り返って、問題点などを議論する、これまで学んだことを総括する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習・復習については各 2 時間を標準とします。担当者もそれ以外の人も、全員、テキストを読んで予習をして来てください。

【テキスト（教科書）】

ジョナサン・カルベパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』研究社

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート（50 %）に加え、授業中の参加の度合、貢献度（50 %）を考慮し、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

面談が指導に有効で良かったと言われているので、授業に並行して、定期的に面談を行い、一人一人の論文作成を進めていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>語用論、文体論、コミュニケーション論

<研究テーマ>英語の呼称問題、日本語のベネファクティブとポライトネス

<主要研究業績>「させていただく」という問題系、『日本語語用論フォーラム 2』（ひつじ書房）2017 他

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to gain an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply the methodologies and theories that are needed in their own research.

OTR600B7

国際日本学演習 I

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際日本学として、日本史を客観的に見ようとするとき、一つの重要な視点として、「日本のなかの異文化」を検討するという方法がある。とくに日本古代という時代は、中央の地方に対する異文化観が強いので、そうした分析の格好の舞台である。この演習では、日本古代における「日本のなかの異文化」を分析する素材として『陸奥話記』を選ぶこととする。その著者は北方史について相当の見識を有していたものと思われ、その内容を、演習形式で原典史料をじっくりと読み解いていくこととしたい。春学期は第 12 話までの検討を行う。

【到達目標】

中央史料から北方世界の実態をどのように読み取るのか、その方法論を取得することを目標とする。

あわせて、自力で日本史を客観的に分析する能力を身につけることをも目標とする。

またディベート能力の向上も目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、受講者による文献の精読・発表、教員による補足・講義、全員での討論を織り交ぜて行う。

また適宜パソコンを用いて、デジタルテキスト検索実習や用語解析などの実習も行う。

本演習参加者には、あらかじめ担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本演習に臨むことを期待する。事前に最低限行うこととしては、本文の書き下し、現代語訳、語句註解、論点の整理、先行研究のまとめ、自分の見解などである。発表原稿の作成の仕方は、第 1 回目の講義で詳しく説明する。なお第 1 回目の講義において、実際の参加者のレベルや興味に応じて、素材を一部変更することもあり得る。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	陸奥話記講読（1）	1 俘囚長安倍頼良叛す
第 3 回	陸奥話記講読（2）	2 追討將軍源頼義の登場
第 4 回	陸奥話記講読（3）	3 安倍頼良帰順す
第 5 回	陸奥話記講読（4）	4 阿久利川の事件
第 6 回	陸奥話記講読（5）	5 頼義、平永衡を切る
第 7 回	陸奥話記講読（6）	6 互理経清の離反
第 8 回	陸奥話記講読（7）	7 頼義重任し征討に努む
第 9 回	陸奥話記講読（8）	8 黄海の戦い
第 10 回	陸奥話記講読（9）	9 佐伯経範の奮戦
第 11 回	陸奥話記講読（10）	10 藤原景季の忠死
第 12 回	陸奥話記講読（11）	11 和気致輔・為清らの奮死
第 13 回	陸奥話記講読（12）	12 藤原茂頼の忠節
第 14 回	春学期のまとめ	陸奥話記前半部の内容整理と陸奥話記史観の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストは難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者は準備学習に標準的に3時間程度。他の受講者は標準的に1時間程度は必要である。復習にはそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

新編日本古典文学全集本（小学館）

【参考書】

特に指定しない。発表に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表 55 %、討論への参加 30 %、期末レポート 15 %
現地側の視点を明確に読み取り、中央側の視点と比較できたかどうかを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度サバティカルにつきなし

【学生が準備すべき機器他】

資料のデジタル分析をするので携帯できる電子機器を持参できることが望ましい。
所有していない場合はこちらでゼミ室のパソコンなどを使用できるように用意する。

【その他の重要事項】

受講希望者の専門は問わないが、大学学部史学科卒業程度の知識は最低限でも持っていることを前提に演習を進めていく。また古文・漢文を読解する能力は必須である。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007 年、『「在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録」のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In this lecture, in order to learn a new analytical method of Japanese ancient history, we introduce the method of international Japanese study.

We will study the classic "Mutsuwaki" on Japanese ancient northern world. We will read until the 12th episode this time.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際日本学として、日本史を客観的に見ようとするとき、一つの重要な視点として、「日本のなかの異文化」を検討するという方法がある。とくに日本古代という時代は、中央の地方に対する異文化観が強い。そうした分析の格好の舞台である。この演習では、日本古代における「日本のなかの異文化」を分析する素材として『陸奥話記』を選ぶこととする。その著者は北方史について相当の見識を有していたものと思われ、その内容を、演習形式で原典史料をじっくりと読み解いていくこととしたい。秋学期は第24話までの検討を行う。

【到達目標】

中央史料から北方世界の実態をどのように読み取るのか、その方法論を取得することを目標とする。
あわせて、自力で日本史を客観的に分析する能力を身につけることをも目標とする。
またディベート能力の向上も目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、受講者による文献の精読・発表、教員による補足・講義、全員での討論を織り交ぜて行う。

また適宜パソコンを用いて、デジタルテキスト検索実習や用語解析などの実習も行う。

本演習参加者には、あらかじめ担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本演習に臨むことを期待する。事前に最低限行うこととしては、本文の書き下し、現代語訳、語句註解、論点の整理、先行研究のまとめ、自分の見解などである。発表原稿の作成の仕方は、第1回目の講義で詳しく説明する。なお第1回目の講義において、実際の参加者のレベルや興味に応じて、素材を一部変更することもあり得る。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	陸奥話記講読（1）	13 平国妙捕らわる
第3回	陸奥話記講読（2）	14 頼義苦境を訴う
第4回	陸奥話記講読（3）	15 清原光頼に援を頼む
第5回	陸奥話記講読（4）	16 頼義軍容を整う
第6回	陸奥話記講読（5）	17 小松の柵攻略
第7回	陸奥話記講読（6）	18 官軍霖雨に遭い飢えに悩む
第8回	陸奥話記講読（7）	19 貞任勢の反撃。武則勝利を予言す
第9回	陸奥話記講読（8）	20 官軍奮戦して大勝す
第10回	陸奥話記講読（9）	21 頼義負傷者を見舞う
第11回	陸奥話記講読（10）	22 武則奇襲し貞任勢を破る
第12回	陸奥話記講読（11）	23 衣川の関を攻略
第13回	陸奥話記講読（12）	24 鳥海の柵を攻略
第14回	春学期のまとめ	陸奥話記中間部の内容整理と陸奥話記史観の再検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストは難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者は準備学習に標準的に 3 時間程度。他の受講者は標準的に 1 時間程度は必要である。復習にはそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

新編日本古典文学全集本（小学館）

【参考書】

特に指定しない。発表に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表 55 %、討論への参加 30 %、期末レポート 15 %
現地側の視点を明確に読み取り、中央側の視点と比較できたかどうかを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度サバティカルにつきなし

【学生が準備すべき機器他】

資料のデジタル分析をするので携帯できる電子機器を持参できることが望ましい。

所有していない場合はこちらでゼミ室のパソコンなどを使用できるように用意する。

【その他の重要事項】

受講希望者の専門は問わないが、大学学部史学科卒業程度の知識は最低限でも持っていることを前提に演習を進めていく。また古文・漢文を読解する能力は必須である。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007 年、『「在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録」のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In this lecture, in order to learn a new analytical method of Japanese ancient history, we introduce the method of international Japanese study.

We will study the classic "Mutsuwaki" on Japanese ancient northern world. We will read until the 24th episode this time.

OTR600B7

国際日本学演習 I

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①研究論文の位置を理解することができる。
- ②史料から議論を立ち上げることができる。
- ③学会発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第 2 回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第 3 回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第 4 回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第 5 回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第 6 回	研究発表（5）	学会発表をめざして
第 7 回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第 8 回	論文講読（2）	論文構成の方法
第 9 回	論文講読（3）	史料批判
第 10 回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第 11 回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第 12 回	研究計画発表（1）	今後の方針
第 13 回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第 14 回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点 100 % で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019 年）

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

論文を執筆することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックとする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	春学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定
第2回	論文の作成技法	論文の作成技法の講義
第3回	文献検索方法	文献検索方法の講義
第4回	修士2年生の発表、発表レジュメ	発表レジュメの解説
第5回	日本語の文法	日本語の文法の説明
第6回	引用文献の表示	引用文献の表示方法の説明
第7回	修士1年生の発表、参考文献の表示	修士1年生の研究テーマ発表と参考文献の表示方法の説明
第8回	注の付け方	注の付け方の説明
第9回	構成表の作り方	構成表の作り方の説明
第10回	修士2年生二度目の発表、理論の考え方	修士2年生二度目の研究テーマ発表と理論の考え方の説明
第11回	方法論の選択	方法論の選択の説明
第12回	説明順序	説明順序の説明
第13回	夏季休暇のフィールドワーク準備(1)－調査マナー－	調査マナーの説明
第14回	夏季休暇のフィールドワーク準備(2)－調査方法－	調査方法の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A member of a class aims at completion of a master thesis by reporting and discussing. Other members of a class learn his thesis by questioning and submitting an opinion to an announcement. The several items necessary to thesis making are learned at the same time.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	秋学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定をします
第 2 回	修士 2 年生の発表と研究題名	修士 2 年生の研究テーマ発表と「疑問文で成り立つ題名」の説明をします
第 3 回	研究目的	研究目的における「オリジナリティの必要性」について説明します
第 4 回	方法論 (1)	経済地理学の方法論について説明します
第 5 回	方法論 (2)	方法論「地域事例の理論」について説明します
第 6 回	修士 2 年生二度目の発表と先行研究 (1)	修士 2 年生の研究テーマ発表と理論をたどる先行研究の重要性について説明します
第 7 回	先行研究 (2)	先行研究の類型化の重要性について説明します
第 8 回	説明順序の説明 (1)	説明順序「単純ストーリー」の重要性について説明します
第 9 回	説明順序の説明 (2)	説明順序「クロスストーリー」の重要性について説明します
第 10 回	修士 1 年生の発表と構成表の説明 (1)	修士 1 年生の研究テーマ発表と構成表による「全説明事項の見える化」の重要性について説明します
第 11 回	構成表の説明 (2)	構成表による「ボリュームの見える化」の重要性について説明します
第 12 回	日本語の説明	論文を支える日本語の文法的重要性について説明します
第 13 回	結論の説明	結論の中の「提案と願望」について説明します
第 14 回	論文を支える問題意識の説明	研究を支える「熱い心と冷静な頭」の重要性について説明します

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、討論：50 %

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A member of a class aims at completion of a master thesis by reporting and discussing. Other members of a class learn his thesis by questioning and submitting an opinion to an announcement. The several items necessary to thesis making are learned at the same time.

OTR600B7

国際日本学演習 I

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は対面形式で行いますが、場合によってはオンライン形式や対面（ハイフレックス）形式となる可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ゼミガイダンス	ゼミ概要の説明／方針の決定
第 2 回	研究テーマの発表	全受講生による発表
第 3 回	研究内容の報告 (1)	担当者の発表と質疑応答
第 4 回	研究内容の報告 (2)	担当者の発表と質疑応答
第 5 回	研究内容の報告 (3)	担当者の発表と質疑応答
第 6 回	研究内容の報告 (4)	担当者の発表と質疑応答
第 7 回	研究テーマに関する課題の検討 (1)	関連分野についての説明と討論
第 8 回	研究テーマに関する課題の検討 (2)	関連分野についての説明と討論
第 9 回	研究テーマに関する課題の検討 (3)	関連分野についての説明と討論
第 10 回	研究テーマに関する課題の検討 (4)	関連分野についての説明と討論
第 11 回	研究内容の報告 (5)	担当者の発表と質疑応答
第 12 回	研究内容の報告 (6)	担当者の発表と質疑応答
第 13 回	研究内容の報告 (7)	担当者の発表と質疑応答
第 14 回	研究内容の報告 (8)	担当者の発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

しかし、自らの研究課題に対しての発表準備をしっかりと行うことが求められ、また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので、授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「国際日本学演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的には対面形式で行いますが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式となる可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの発表	全受講生による研究の進捗状況の報告
第2回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第3回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第7回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第11回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答
第14回	総合討論	まとめ／包括的な討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

しかし、自らの研究課題に対しての発表準備をしっかりと行うことが求められ、また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので、授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「国際日本学演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論

＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法（1）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法・分析方法について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 歴史地理学の論文を読み、筆者の主張や学史における位置づけを読みとる訓練を行う。
 2. 歴史地理学的研究を行ううえでの史料収集の方法や史料読解の技術を身につけるため、実際の史料を読む練習を行い、該当分野のテキストを読んで学習する。
 3. 歴史地理学の論文内でのデータの利用方法や処理の仕方を学習する。
 4. 具体的な史料やデータを用いて、歴史地理学的な論理構成を考える訓練を行う。
- 対面授業とオンライン授業を組み合わせで行います。資料類はすべて学習支援システムにアップするようにします。紙での配布は行いません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	出席者の確認、授業の概要について説明する。発表の順番を決める。
2	歴史地理学の論文の収集方法	テキストを読みながら、歴史地理学的テーマとは何かを把握し、それらに関連する論文の収集方法について学ぶ。
3	歴史地理学の論文の読み方①	論文の著者の主張について十分に理解する。
4	歴史地理学の論文の読み方②	論文の中で図表の効果的な扱い方について、先行研究をもとに学ぶ。
5	歴史地理学の論文の読み方③	統計資料や行政の報告書類を用いた研究方法について、先行研究をもとに議論する。
6	史料の収集方法①	図書館における史料収集の方法を学ぶ。
7	史料の収集方法②	地方の文書館や博物館における史料収集の方法を学ぶ。
8	史料の読解練習①	古地図の読解方法について学ぶ。
9	史料の読解練習②	文書史料の読解方法について学ぶ。
10	データの処理方法①	史料をもとに、どのようなデータが論文作成に必要なかを学ぶ。
11	データの処理方法②	歴史地理学的な研究テーマに即した効果的なグラフや表を作成する。
12	データの処理と論文構成①	先行研究をもとに、収集・処理したデータと論文構成の関係について分析する。

13	データの処理と論文構成②	先行研究をもとに、データと論旨の関係について把握する。
14	データの処理と論文構成③	自分の研究テーマに即したデータの処理方法と構成について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。自分の発表前には、図書館における事前の文献調査は十分に行うようにしてください。また、テキストなどのわからない（読めない）専門用語などは事前に各自で調べてから授業に参加してください。

【テキスト（教科書）】

有蘭正一郎ほか『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2007 年。授業で使う該当部分を各自でコピーしていただきます。適宜授業内で指示します。

【参考書】

授業内において適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 30 %、討論への参加 20 %
評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

オリジナリティの高い論文が作成できるように、一人ずつ丁寧に指導するようにします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向けの演習です。大学院および学部の人文学部・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究
<研究テーマ> 日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究
<主要研究業績>
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015 年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015 年
「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号 2020 年予定など

【Outline and objectives】

Writing a paper on historical geography (1)

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法（2）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法、分析方法について、自分の関心あるテーマを選んで、発表し、論文作成の手順について学ぶことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 春学期の歴史地理学演習Ⅰの授業内容を踏まえ、各自の関心にもとづいて、歴史地理学的研究テーマを選ぶ。
2. 受講者が先行研究の紹介、史料収集、データ処理と分析を行い、それを発表し、授業内で議論する。
対面授業とオンライン授業を組み合わせで行います。資料はすべて学習支援システムにアップするようにします。紙での配布はいたしません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	受講者を確認し、発表の順番を決める。
2	先行研究の紹介①	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ①）。
3	先行研究の紹介②	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ②）。
4	先行研究の紹介③	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ③）。
5	先行研究の紹介④	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ④）。
6	史料紹介①	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ①）。
7	史料紹介②	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ②）。
8	史料紹介③	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ③）。
9	史料紹介④	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ④）。
10	研究報告①	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ①）。

11	研究報告②	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ②）。
12	研究報告③	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ③）。
13	研究報告④	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ④）。
14	まとめ	受講者による研究報告を踏まえて、歴史地理学研究的今後の展開について議論を行う（受講者全員）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。各自の発表の前には、その内容を十分に準備してください。

【テキスト（教科書）】

有蘭正一郎ほか『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2007 年。授業で使う該当部分を各自でコピーしていただきます。適宜授業内で指示します。

【参考書】

各自のテーマに即して、適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 50 %

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

先行研究の読み込みや論文の書き方など、一人ずつ丁寧に指導いたします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向きの演習です。大学院および学部的人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究 江戸東京の名所研究

＜主要研究業績＞

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015 年

「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号 2020 年予定など

【Outline and objectives】

Writing a paper on historical geography (2)

OTR600B7

国際日本学演習 I

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次産品の制作を行う。

【到達目標】

修士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。同時にゼミ生共通のテーマでの研究発表会も行う予定。今年度は日本語の表現力向上のためのワークショップを行う予定。具体的にはエッセイや創作の実践。成績評価は修士論文の出来次第だが、演習での中間発表などを通じて個別に指導、評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

上記に並行して修士論文の指導を行うが、院生各自のテーマに即し、最終的に論文としての体裁を完璧に整えてもらい、それをメイン・コンテンツと位置付ける。同時に研究テーマ関連のコンテンツ制作は論文執筆の豊かな副産物となることを望む。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに：春学期の計画および論文執筆計画	春学期のメニューを確認 ゼミ生の希望調査 各人の論文テーマの紹介
第 2 回	計画：論文執筆指導 1	論文執筆の方法論の確認と指導
第 3 回	計画：論文執筆の副産物の可能性	研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツ作りの計画
第 4 回	共同研究：テーマ設定分担	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンに焦点を当て、その功罪を検証する。
第 5 回	共同研究：発表	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンに焦点を当て、その功罪を検証する。
第 6 回	共同研究：発表	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンに焦点を当て、その功罪を検証する。
第 7 回	共同研究：発表	日本映画鑑賞とレビューの執筆
第 8 回	共同研究：発表	日本映画鑑賞とレビューの執筆
第 9 回	実践：各種コンテンツ作り	サブ・コンテンツ作りの計画
第 10 回	実践：各種コンテンツ作り	論文の一章、あるいは補足になるような小論文、書評の執筆
第 11 回	実践：各種コンテンツ作り	論文の一章、あるいは補足になるような小論文、書評の執筆
第 12 回	実践：発表	論文の一章、あるいは補足になるような小論文、書評の執筆
第 13 回	実践：中間発表	目次案の提出

第 14 回 論文指導：中間発表 個別指導を通じ、論文の進行状況のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題、レポートをこなし、論文執筆の進捗状況を随時報告する。本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』 島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

ほか授業内で指示

【参考書】

授業内で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点 20 %、サブコンテンツ 20 %、論文進行状況 30 %、論文完成度 30 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

＜研究テーマ＞

小説論 サブカルチャー研究

＜主要研究業績＞

小説作法ABC 新潮選書 2008

徒然王子全 2 巻 朝日新聞出版 2009

悪貨 講談社 2010

傾国子女 文藝春秋 2013

ニッチを探して 新潮社 2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社 2014

暗黒寓話集 文藝春秋 2014

【Outline and objectives】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次製品の制作を行う。

【到達目標】

修士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。同時にゼミ生共通のテーマでの研究発表会も行う。エッセイや創作の実践、演習での中間発表などを通じて、修士論文やレポートの調査、分析方法の問題点を把握し、その解決策を提示できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

上記に並行して修士論文の指導を行うが、院生各自のテーマに即し、最終的に論文としての体裁を完璧に整えるよう毎回個別指導する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った試験や小レポート等、課題に対する講評や解説も行う

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに：秋学期の計画	秋学期のメニューを確認 夏休みの課題の提出
第 2 回	立案：コンテンツ制作計画	各人の新たな制作テーマの紹介
第 3 回	指導：論文執筆指導 2	論文執筆の方法論の確認と個別指導
第 4 回	立案：論文執筆の副産物の生産	新たな研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツ作りの計画
第 5 回	立案：論文執筆の副産物の生産	新たな研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツ作りの計画
第 6 回	実践：各テーマに基づく小論文	小論文執筆および関連コンテンツの制作
第 7 回	実践：各テーマに基づく小論文	小論文執筆および関連コンテンツの制作
第 8 回	実践：各テーマに基づく小論文	小論文執筆および関連コンテンツの制作
第 9 回	共同研究 2：共通テーマによる研究、小論文、各種コンテンツ作り	論文に関連した書物、先行研究に対する批評
第 10 回	共同研究 2：共通テーマによる研究、小論文、各種コンテンツ作り	論文に関連した書物、先行研究に対する批評
第 11 回	共同研究 2：共通テーマによる研究、小論文、各種コンテンツ作成	論文要旨の確認
第 12 回	論文指導：討議	論文指導、修正

第13回 論文指導：発表 論文指導、修正
第14回 論文指導：発表 論文指導、個別面談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題、レポートをこなし、論文執筆の進捗状況を随時報告する。本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』 島田雅彦著 集英社インターナショナル新書2017

ほか授業内で指示

【参考書】

授業内で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点20%、サブコンテンツ20%、論文進行状況30%、論文完成度30%とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

＜研究テーマ＞

小説論 サブカルチャー研究

＜主要研究業績＞

小説作法ABC 新潮選書2008

徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009

悪貨 講談社2010

傾国子女 文藝春秋2013

ニッチを探して 新潮社2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014

暗黒寓話集 文藝春秋2014

虚人の星 講談社2015

【Outline and objectives】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to simply responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

謝 荔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

オンライン授業の実施にあたり、授業方法・内容・課題については、学習支援システムでご確認ください。

授業を通して目指すのは、(1) 研究テーマにアプローチするための研究分野の視点を理解し、文献の講読を通じて先行研究の研究手法と成果に対する理解を高め、これらを研究発表と論文の作成に生かしていくこと、(2) 先行研究の論点と現地調査のデータを結びつけて修士論文を書き上げることである。

【到達目標】

1年次生は研究背景、問題提起、テーマ設定を明確にし、先行研究の論点を整理する。2年次生は自らの調査データを文章化すると同時に、先行研究を吟味しながら執筆作業を進め、修士論文を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

リアルタイム配信型のオンライン授業を主とし、オンデマンド授業(資料型)を限定的に活用する。

受講生による文献の講読および発表・討議を中心に行う。先行研究の視点、研究方法、データ、結論について議論を交わし、自らの調査データや文献資料の整理・分析結果を発表することを主な内容とする。具体的なスケジュールは受講生の研究の進捗状況に基づいて決める。最終授業で、課題に対する講評や解説も行う。

なお、授業計画は授業の展開によって若干の変更、また、受講生の状況などによって中国語による補足説明があり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生による研究の進捗状況の報告（研究テーマや論文の構想、文章化した調査資料の提示）、教員による授業の進め方と評価方法の説明、発表スケジュールの確認
第2回	討議	文献の講読・討議
第3回	個人発表	文献の講読・討議
第4回	個人発表	文献の講読・討議
第5回	個人発表	文献の講読・討議
第6回	個人発表	文献の講読・討議
第7回	個人発表	文献の講読・討議
第8回	個人発表	文献の講読・討議
第9回	個人発表	文献の講読・討議
第10回	個人発表	研究発表
第11回	個人発表	研究発表
第12回	個人発表	研究発表
第13回	個人発表	研究発表
第14回	まとめと質疑応答	ゼミ生の研究内容に関する質疑応答。課題に対する講評や解説も行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とするが、確実に研究を進めていくにはより多くの時間が必要である。

事前に配布する文献を読み、自分の意見や質問を準備しておくこと。個別に指導した文献資料を必ず読んでまとめて提出すること。積極的に自分の研究テーマに関連する文献資料を集め、現地調査のデータを文章化すること。

【テキスト（教科書）】

文献のプリントを配布する。

【参考書】

授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表内容、ディスカッション、提出物）は 50 %、レポートは 50 % である。

【学生の意見等からの気づき】

研究指導を受けた内容のポイントを整理し、できるだけ早く実行することがさらなる研究の進展に功を奏する。

引用を明記しないものと期限を過ぎて提出したものは評価しない。

【学生が準備すべき機器他】

研究発表をする場合、ゼミ開始までに、資料写真などの調査データや参考文献の引用部分などをすぐ確認することができるように準備しておく。

【その他の重要事項】

非日本語話者はチューターによる日本語指導をしっかり受け、完成度の高い日本語の文章を提出すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

文化人類学。現代中国と日本社会の生活文化の比較

<研究テーマ>

グローカリゼーションにおける地域文化の変容、暦と社会生活

<主要研究業績>

① 2020 年、「近代中国における暦政策と旧暦」『宗教研究』第 93 巻別冊（第 78 回学術大会紀要特集）、日本宗教学会

② 2015 年、「グローカル化における祝祭日の再構築——中国端午節の文化変容を事例に」、韓敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集③）風響社

③ 2012 年、「端午節儀式活動伝承主体の社会変化——以中国嘉興市端午民俗文化節与日本相模原市児童節為例」『文化遺産』2012 年 03 期、中山大学中国非物質文化遺産研究中心

【Outline and objectives】

The students are instructed about the planning of study schedule, the way of collecting data, the way of doing the research and summarizing the results of research.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

謝 荔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

オンライン授業の実施にあたり、授業方法・内容・課題については、学習支援システムでご確認ください。

授業を通して目指すのは、（１）研究テーマにアプローチするための専門分野の視点を理解し、文献の講読を通じて先行研究の研究手法と成果に対する理解を高め、これらを論文の作成に生かしていくこと、（２）先行研究の論点と現地調査のデータを結びつけて修士論文を書き上げることである。

【到達目標】

１年次生は研究背景、問題提起、テーマ設定を明確にし、先行研究の論点を整理する。２年次生は自らの調査データを文章化すると同時に、先行研究を吟味しながら執筆作業を進め、修士論文を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

リアルタイム配信型のオンライン授業を主とし、オンデマンド授業（資料型）を限定的に活用する。

受講生による文献の講読および発表・討議を中心に行う。先行研究の視点、研究方法、データ、結論について議論を交わし、自らの調査データや文献資料の整理・分析結果を発表することを主な内容とする。具体的なスケジュールは受講生の研究の進捗状況に基づいて決める。最終授業で、課題に対する講評や解説も行う。

なお、授業計画は授業の展開によって若干の変更、また、受講者の状況などによって中国語による補足説明があり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	秋学期のガイダンス	夏期休暇の研究成果の報告、発表スケジュールの確認
第 2 回	個人発表	文献の講読・討議
第 3 回	個人発表	文献の講読・討議
第 4 回	個人発表	文献の講読・討議
第 5 回	個人発表	文献の講読・討議
第 6 回	個人発表	中間発表の予行演習
第 7 回	個人発表	中間発表の予行演習
第 8 回	個人発表	文献の講読・討議
第 9 回	個人発表	文献の講読・討議
第 10 回	個人発表	文献の講読・討議
第 11 回	個人発表	文献の講読・討議
第 12 回	個人発表	論文内容の発表
第 13 回	個人発表	論文内容の発表
第 14 回	まとめ、質疑応答	討議のまとめ、受講生の研究内容に関する質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とするが、確実に自分の研究を進めていくにはより多くの時間が必要である。

事前に配布する文献を読み、自分の意見や質問を準備しておくこと。個別に指導した文献資料を必ず読んでまとめて提出すること。積極的に自分の研究テーマに関連する文献資料を集め、現地調査のデータを文章化すること。

【テキスト（教科書）】

文献のプリントを配布する。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表内容、ディスカッション、提出物など）は 50 %、レポートは 50 %

【学生の意見等からの気づき】

研究指導を受けた内容のポイントを整理し、できるだけ早く実行することがさらなる研究の進展に功を奏する。

引用を明記しないものと期限を過ぎて提出したものは評価しない。

【学生が準備すべき機器他】

研究発表をする場合、ゼミ開始までに、資料写真などの調査データや参考文献の引用部分などをすぐ確認することができるように準備しておく。

【その他の重要事項】

非日本語話者はチューターによる日本語指導をしっかり受け、完成度の高い日本語の文章を提出すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

文化人類学、現代中国と日本の生活文化の比較

＜研究テーマ＞

グローカリゼーションにおける地域文化の変容、暦と社会生活

＜主要研究業績＞

① 2020 年、「近代中国における暦政策と旧暦」『宗教研究』第 93 巻別冊、日本宗教学会

② 2015 年、「グローバル化における祝祭日の再構築——中国端午節の文化変容を事例に」、韓敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集③）風響社

③ 2012 年、「端午節儀式活動伝承主体の社会変化——以中国嘉興市端午民俗文化節与日本相模原市児童節為例」『文化遺産』2012 年 03 期、中山大学中国非物質文化遺産研究中心

【Outline and objectives】

The students are instructed about the planning of study schedule, the way of collecting data, the way of doing the research and summarizing the results of research.

OTR600B7

国際日本学演習 I

高田 圭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、グローバルな視点から、日本社会の「成り立ち」や、現在の「変化」をとらえる視座をやしない、それらを研究をしていくためのアプローチや方法論について学ぶ。グローバルな視点とは、他国・他地域との「比較」、あるいは他国との「国境を越えたつながり」から日本社会を調査、分析するものである。こうした視点を念頭に置きながら、本授業では、特に以下の課題をカバーする：①テーマと問いの設定、②研究計画、③理論とデータの関係。また、日本社会の諸問題を概観する文献を講読し、日本についての理解を深めるとともに、受講者の学位論文テーマを探っていく。

【到達目標】

受講者は、以下の知識の習得を通じてオリジナルな研究を計画し、学位論文を執筆できるようになる。

- 日本戦後の現代社会を調査、研究するためのアプローチと方法を習得する。

- 「比較」と「越境」の視座と方法を学ぶ。

- 日本社会の諸問題についての理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、セミナー形式で実施する。講義や文献講読をベースに討論をおこなう。参加者自身の経験、文化的な背景を織り交ぜながら日本について論じ、受講者たちが互いに学び合う場を形成する。また、本授業はセミナー形式のため、報告発表へのフィードバックについては、主にディスカッションの場において実施する。その他、個別にフィードバックが必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方、研究について
第 2 回	関心テーマの発表	これまでの研究、これからの研究
第 3 回	社会調査①	問いの設定とオリジナリティ
第 4 回	社会調査②	研究計画
第 5 回	社会調査③	理論とデータ
第 6 回	日本社会の文献講読①	日本社会の諸問題
第 7 回	日本社会の文献講読②	言説・能力
第 8 回	日本社会の文献講読③	仕事・労働
第 9 回	日本社会の文献講読④	教育・友だち
第 10 回	日本社会の文献講読⑤	家族・居場所
第 11 回	日本社会の文献講読⑥	排除・分断
第 12 回	日本社会の文献講読⑦	市民社会
第 13 回	研究テーマ発表①	テーマについての報告
第 14 回	研究テーマ発表②	問い（RQ）についての報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。

- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。

- 受講者は、自身の関心テーマを探し、掘り下げ、それについてまとめ、報告する準備をおこなう。

- 本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とするが、文献および研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が必要な場合がある。

【テキスト（教科書）】

授業内にて提示する。

【参考書】

授業内にて提示する。

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加・発言：20%
- 文献・個人研究プレゼンテーション：40%
- 最終レポート：40%

【学生の意見等からの気づき】

初年度授業につき「特になし」。

【その他の重要事項】

授業計画の詳細については、初回授業において改めて説明する。
講読文献については、講師の専門分野と受講生の興味関心との兼ね合いを見て決定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学

<研究テーマ>

- 日本の市民社会と社会運動
- グローバル化と日本の社会変容

<近年の主要著書>

- 「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法―」『国際日本学』第18号、2021年、3-36頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarność, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klatext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture, 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor & Francis.

【Outline and objectives】

In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes of Japanese society from a global perspective. A global perspective here means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions and exploring transnational connections and linkage between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - finding a research topic, planning research, and the relationship between theory and data. Also, we will deepen our knowledge about Japan and, at the same time, explore students' possible dissertation topics through reading books and articles related to issues and problems in Japanese society today.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

高田 圭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、グローバルな視点から、日本社会の「成り立ち」や、現在の「変化」をとらえる視座をやしなひ、それらを研究をしていくためのアプローチや方法論について学ぶ。グローバルな視点とは、他国・他地域との「比較」、あるいは他国との「国境を越えたつながり」から日本社会を調査、分析するものである。こうした視点を念頭に置きながら、本授業では、特に以下の課題をカバーする：①データ収集、②質的データ分析、③アウトプット。また、グローバル化と日本社会についての文献を講読し、日本への理解を深めるとともに、各人の学位論文テーマを掘り下げていく。

【到達目標】

- 受講者は、以下の知識の習得を通じてオリジナルな研究を計画し、学位論文を執筆できるようになる。
- 日本の戦後・現代社会を調査、研究するためのアプローチと方法を習得する。
- 「比較」と「越境」の視座と方法を学ぶ。
- 日本社会のグローバルな変容についての理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、セミナー形式で実施する。講義や文献講読をベースに討論をおこなう。参加者自身の経験、文化的な背景を織り交ぜながら日本について論じ、受講者たちが互いに学び合う場を形成する。また、本授業はセミナー形式のため、報告発表へのフィードバックについては、主にディスカッションの場において実施する。その他、個別にフィードバックが必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	研究の経過報告①	受講者による夏期中の課題への取組報告
第3回	社会調査①	データ収集
第4回	社会調査②	データ分析
第5回	社会調査③	アウトプット
第6回	日本社会の文献講読①	グローバル化と日本社会
第7回	日本社会の文献講読②	移民・移住
第8回	日本社会の文献講読③	ハーフ・多文化主義
第9回	日本社会の文献講読④	文化・ツーリズムとグローバル化
第10回	日本社会の文献講読⑤	グローバル教育と英語化
第11回	日本社会の文献講読⑥	グリーン化と労働
第12回	日本社会の文献講読⑦	グローバル化とナショナリズム
第13回	研究の経過報告②	収集データについての中間報告
第14回	研究の経過報告③	分析結果についての中間報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 受講者は、自身の関心テーマを探し、掘り下げ、それについてまとめ、報告する準備をおこなう。
- 本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とするが、文献および研究報告をする週には、さらに2時間程度の準備の時間が必要な場合がある。

【テキスト（教科書）】

授業内にて提示する。

【参考書】

授業内にて提示する。

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加・発言：20%
- 文献発表・個人研究プレゼンテーション：40%
- 最終レポート：40%

【学生の意見等からの気づき】

初年度授業につき「特になし」。

【その他の重要事項】

授業計画の詳細については、初回授業において改めて説明する。
講読文献については、講師の専門分野と受講生の興味関心との兼ね合いを見て決定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学

<研究テーマ>

- 日本の市民社会と社会運動
- グローバル化と日本の社会変容

<近年の主要著書>

- 「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法―」『国際日本学』第18号、2021年、3-36頁。
- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno ́ ci, 2020, pp. 137 - 155.
- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.
- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor & Francis.

【Outline and objectives】

In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes of Japanese society from a global perspective. A global perspective here means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions and exploring transnational connections and linkage between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - gathering data, analyzing qualitative data, and outputs. Also, we will deepen our knowledge about Japan and, at the same time, further explore individuals' research projects through reading books and articles on various global changes that Japanese society is facing today.

OTR600B7

国際日本学合同演習Ⅰ

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

それぞれのゼミに属する学生が一堂に会して、ともに日本学について知見を広め、話題を共有します。

【到達目標】

国際日本学インスティテュートに在籍する修士課程学生（および博士後期課程学生で希望する者）が、国際日本学に関する共通の知識を得、互いの研究を知り、それを土台として、多角的な視点から日本について語ることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学インスティテュート修士課程に在籍する学生は2年間にわたって国際日本学合同演習を受講し、合計4単位を取得しなければなりません。この授業は3種の企画から構成されます。すなわち、① 国際日本学入門：国際日本学研究に必要な「姿勢」とは何か、国際日本学研究所の「論文」とはどういうものか、共同研修を行います。4月に実施します。

② 講師による日本文化に関する講演（あるいは実演）：原則としてセメスターに1回ずつ実施します（5月、10月予定）。講演の細目については開講時に発表します。

③ 修士論文・博士論文中間発表会：国際日本学インスティテュートに在籍するすべての修士課程および博士後期課程の学生が、自己の研究活動の状況について報告し、他の学生からの質問と教授たちからレビューを受け、それを修士・博士論文に生かします。実施時期は博士後期3年が6月、修士2年が7月（2回）、修士1年が11月（2回）、博士後期1・2年が12月（2回）。

国際日本学合同演習は、土曜日5時限および6時限を利用し、2時限単位で実施されます。

国際日本学合同演習は修士の学位を取得するために必要不可欠な授業である。2年間にわたって、必ず履修登録し、単位を取得する必要があります。この授業の実施にかかわる細目は国際日本学インスティテュートの掲示板（大学院棟3階）、および国際日本学インスティテュート専攻室入り口に公示するので注意すること。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行います。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡します。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼第1回目の授業についてはHoppiiでお知らせしますので、必ず確認しておくこと。

▼リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	国際日本学入門	共同研修：3人の教員（島田先生、小原先生、椎名）による講和 4月17日（土）5、6時限に実施
第2回	講演①	「国際日本学としての江戸学」田中優子先生 5月22日（土）5、6時限に実施
第3回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会①	博士後期3年 6月12日（土）5、6時限に実施

- 第4回 国際日本学インスティテュート 修士2年
テュート論文中間発表 7月10日（土）5、6時限に実施
会②
- 第5回 国際日本学インスティテュート 修士2年
テュート論文中間発表 7月17日（土）5、6時限に実施
会③

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
講演者によって参考文献が提示された場合はそれを読んでください。
中間発表会における発表資料を準備してください。

【テキスト（教科書）】

・国際日本学入門および講演については、講師が準備したものを授業時に配付します。
・中間発表会に際しては、報告者は、学生委員会の指示に従い、A4判1枚の資料を作成し、授業時に配付できるよう準備してください。

【参考書】

国際日本学入門および講演については、講師が事前に参考文献を指示することがあります。

【成績評価の方法と基準】

▼リアクションペーパーの内容（80%）

▼質疑応答・積極的な参加態度（20%）

リアクションペーパーは毎回4点満点で採点し、全10回分の合計を成績の80%に換算する。白紙で提出した場合は0点となります。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【Outline and objectives】

Every student is supposed to give a presentation on their study and discuss the problems on Japanese Studies. The objective of this class is to share a variety of problems on Japanese Studies.

OTR600B7

国際日本学合同演習Ⅱ

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

それぞれのゼミに属する学生が一堂に会して、ともに日本学について知見を広め、話題を共有します。

【到達目標】

国際日本学インスティテュートに在籍する修士課程学生（および博士後期課程学生で希望する者）が、国際日本学に関する共通の知識を得、互いの研究を知り、それを土台として、多角的な視点から日本について語ることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学インスティテュート修士課程に在籍する学生は2年間にわたって国際日本学合同演習を受講し、合計4単位を取得しなければならない。この授業は、以下に示す3種の企画から構成されます。
① 国際日本学入門：国際日本学研究に必要な「姿勢」とは何か、国際日本学研究の「論文」とはどういうものか、共同研修を行う。4月14日に実施します。

② 講師による日本文化に関する講演（あるいは実演）：原則として2回実施します（5月、10月予定）。講演の細目については開講時に発表します。

③ 修士論文・博士論文中間発表会：国際日本学インスティテュートに在籍するすべての修士課程および博士後期課程の学生が、自己の研究活動の状況について報告し、他の学生からの質問と教授たちからレビューを受け、それを修士・博士論文に生かします。実施時期は博士後期3年が6月、修士2年が7月（2回）、修士1年が11月（2回）、博士後期1・2年が12月（2回）。

国際日本学合同演習は、土曜日5時限および6時限を利用し、2時限単位で実施されます。

国際日本学合同演習は修士の学位を取得するために必要不可欠な授業です。2年間にわたって、必ず履修登録し、単位を取得する必要があります。この授業の実施にかかわる細目は国際日本学インスティテュートの掲示板（大学院棟3階）、および国際日本学インスティテュート専攻室入り口に公示するので注意すること。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行います。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡します。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼第1回目の授業は、所定の時間通り行います。日程はHOPPIIでお知らせしますので、必ず確認しておくこと。

▼リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	講演②	【日程調整中】 7月に掲示板、HOPPIIで告知 予定 10月〇日（土）5、6限目に実施 予定
第2回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会④	修士1年 11月20日（土）5、6時限に実施

- 第 3 回 国際日本学インスティ 修士 1 年
テュート論文中間発表 11 月 27 日（土）5、6 時限に実施
会⑤
- 第 4 回 国際日本学インスティ 博士後期 1・2 年
テュート論文中間発表 12 月 4 日（土）5、6 時限に実施
会⑥
- 第 5 回 国際日本学インスティ 博士後期 1・2 年
テュート論文中間発表 12 月 11 日（土）5、6 時限に実施
会⑦

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
講演者によって参考文献が提示された場合はそれを読んでくる。
中間発表会における発表資料を準備する。

【テキスト（教科書）】

- ・国際日本学入門および講演については、講師が準備したものを授業時に配付する。
- ・中間発表会に際しては、報告者は、学生委員会の指示に従い、A4 判 1 枚の資料を作成し、授業時に配付できるよう準備する。

【参考書】

国際日本学入門および講演については、講師が事前に参考文献を指示することがある。

【成績評価の方法と基準】

- ▼リアクションペーパーの内容（80%）
 - ▼質疑応答・積極的な参加態度（20%）
- リアクションペーパーは毎回 4 点満点で採点し、全 10 回分の合計を成績の 80 % に換算する。白紙で提出した場合は 0 点となる。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【Outline and objectives】

Every student is supposed to give a presentation on their study and discuss the problems on Japanese Studies. The objective of this class is to share a variety of problems on Japanese Studies.

ASR500B7

世界の日本論と日本学 I

リネペ・アンドレ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本論（＝日本文化論）について西洋と日本の著名な英文の文献をもとに、「世界の日本論」の言説史とそれにおけるキーとなるコンセプトを検討する。そのうえで、現代の日本学の可能性を考える。春学期には、明治後期から昭和前期にかけて西洋の読者に向けて書かれた文献や、英訳されて西洋で読まれた文献を検討する（新渡戸稲造、B.H. チェンバレン、岡倉天心、和辻哲郎など）。秋学期には戦後から現代に至るまで西洋の読者に向けて書かれた文献や英訳されて西洋で読まれた文献を検討する（R. ベネディクト、鈴木大拙、D. キーン、H. ハルトゥーニアンなど）。
注意：「世界の日本論と日本学 I」と「世界の日本論と日本学 II」はそれぞれ単独での受講が可能です。

【到達目標】

- ・世界の日本論の言説史を説明できる
- ・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
- ・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
- ・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。
- ・授業内の購読（クロース・リーディングの方法による）
- ・授業内の発表（ショートプレゼンテーション、資料の紹介）
- ・ディスカッション（グループワーク、ペアワーク）
- ・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション：世界の日本論とは何か？	本授業の問題関心、方法論、文献の説明
第 2 回	明治後期の世界の日本論	文献講読（Nitobe, Bushido）、ディスカッション
第 3 回	明治後期の世界の日本論	文献講読（Chamberlain, Things Japanese）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 4 回	明治後期の世界の日本論	文献講読（Kanzo, Representative Men of Japan）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 5 回	明治後期の世界の日本論	文献講読（Hearn, Japan: An Attempt at Interpretation）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 6 回	大正期の世界の日本論	文献講読（Okakura, The Book of Tea）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 7 回	大正期の世界の日本論	文献講読（Dewey, Liberalism in Japan）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 8 回	大正期の世界の日本論	文献講読（Griffith, Japanese Fairy Tales）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション

第 9 回	大正期の世界の日本論	文献講読（Satow, A Diplomat in Japan）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 10 回	昭和前期の世界の日本論	文献講読（九鬼『「いき」の構造』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 11 回	昭和前期の世界の日本論	文献講読（和辻『風土』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 12 回	昭和前期の世界の日本論	文献講読（タウト『日本文化私観』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 13 回	昭和前期の世界の日本論	文献講読（ヘリゲル『弓と禪』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 14 回	総括：現代の日本学の可能性を考える	ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各二時間を準備とします。
 ・本授業で指示した文献を読み、歴史・思想的背景について調べる
 ・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、資料のコメント）
 ・授業の出席前に前回の授業ノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】

・船曳健夫（2010）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
 ・南博（1994）『日本人論：明治から今日まで』岩波書店
 ・大久保橋樹（2003）『日本文化論の系譜：『武士道』から『「甘え」の構造』まで』中公新書

【成績評価の方法と基準】

・平常点（40 %）：授業への参加、発言、提出課題などを総合的に評価する
 ・発表（40 %）：数回のショートプレゼンテーションを総合的に評価する
 ・期末レポート（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

なし/none.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本思想史
 <研究テーマ> 近世の日本政治思想史

【Outline and objectives】

This course offers students an introduction into discourses about Japanese culture. It is designed to give an overview of key texts and concepts between the late Meiji-period until the present in international perspective. Students can expect to come out of the course better prepared to engage in an informed discussion about international discourses about Japanese culture and the challenges for future research in the field of Japanese studies.

ASR500B7

世界の日本論と日本学Ⅱ

リネベ・アンドレ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本論（＝日本文化論）について西洋と日本の著名な英文の文献をもとに、「世界の日本論」の言説史とそれにおけるキーとなるコンセプトを検討する。そのうえで、現代の日本学の可能性を考える。秋学期には戦後から現代に至るまで西洋の読者に向けて書かれた文献や英訳されて西洋で読まれた文献を検討する（R. ベネディクト、鈴木大拙、D. キーン、H. ハルトゥーニアンなど）。注意：「世界の日本論と日本学Ⅰ」と「世界の日本論と日本学Ⅱ」はそれぞれ単独での受講が可能です。

【到達目標】

・世界の日本論の言説史を説明できる
 ・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
 ・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
 ・日本学の日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。
 ・授業内の購読（クロース・リーディングの方法による）
 ・授業内の発表（ショートプレゼンテーション、資料の紹介）
 ・ディスカッション（グループワーク、ペアワーク）
 ・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション：世界の日本論とは何か？	本授業の問題関心、方法論、文献の説明
第 2 回	戦後の世界の日本論	文献講読（Benedict, Chrysanthemum and the Sword, 第 1~3 章）、ディスカッション
第 3 回	戦後の世界の日本論	文献講読（Benedict, Chrysanthemum and the Sword, 第 10~13 章）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 4 回	戦後の世界の日本論	文献講読（Suzuki, Zen and Japanese Culture）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 5 回	60~70 年代の世界の日本論	文献講読（丸山『日本の思想』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 6 回	60~70 年代の世界の日本論	文献講読（Richie, The Japanese Movie）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 7 回	60~70 年代の世界の日本論	文献講読（土井『「甘え」の構造』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション

第 8 回	80~90 年代の世界の日本論	文献講読（中根『タテ社会の人間関係』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 9 回	80~90 年代の世界の日本論	文献講読（ベフ『イデオロギーとしての日本文化論』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 10 回	80~90 年代の世界の日本論	文献講読（Reischauer, The Japanese Today）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 11 回	80~90 年代の世界の日本論	文献講読（青木『「日本文化論」の受容』）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 12 回	2000 年以降の世界の日本論	文献講読（Dover, Embracing Defeat）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 13 回	2000 年以降の世界の日本論	文献講読（Harootunian, Japan After Japan）、ショートプレゼンテーション、ディスカッション
第 14 回	総括：現代の日本学の可能性を考える	ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を準備とします。
・本授業で指示した文献を読み、歴史・思想的背景について調べる
・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、資料のコメント）
・授業の出席前に前回の授業ノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】

・船曳健夫（2010）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
・吉野耕作（2006）『文化ナショナリズム社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会
・E.W. サイード著；今沢紀子訳（1993）『オリエンタリズム』（2 巻）平凡社
・赤澤史朗（2020）『戦中・戦後文化論：転換期日本の文化統合』法律文化社

【成績評価の方法と基準】

・平常点（40 %）：授業への参加、発言、提出課題などを総合的に評価する
・発表（40 %）：数回のショートプレゼンテーションを総合的に評価する
・期末レポート（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

なし/none.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本思想史
<研究テーマ> 近世日本政治思想史

【Outline and objectives】

This course offers students an introduction into discourses about Japanese culture. It is designed to give an overview of key texts and concepts between the late Meiji-period until the present in international perspective. Students can expect to come out of the course better prepared to engage in an informed discussion about international discourses about Japanese culture and the challenges for future research in the field of Japanese studies.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語） I

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3 回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期		
回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第 2 回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第 3 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：伝達の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 4 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚と認識の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 5 回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：段落構成	文法：使役・被害等の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1 段落）
第 6 回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：存在の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3 段落）
第 7 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現① 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 8 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：変化の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 9 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現② 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 10 回	文法：分詞形容詞と形容詞構文の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：叙述の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成

第 11 回	文法：名詞相当語句の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：「もの・こと」の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 12 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1 段落）	文法：比較の表現① 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 13 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現② 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 14 回	文法：数量表現の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：数量の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
- 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
- 3 ～ 14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績> 【英語関連】

① “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)

② “Pitch, scale and mode in early *gagaku* and *shōmyō*.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)

③ “Court and Buddhist music (1): history of *gagaku* and *shōmyō*” / “Court and Buddhist music (2): music of *gagaku* and *shōmyō*.” (Tokita, Alison, and David Hughes, ed., *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Hants [U.K.]: Ashgate Publishing Ltd, 2008.)

【Outline and objectives】

This class in academic writing in English aims to increase the students' writing skill by means of two approaches. The first half of each class comprises remedial treatment of English grammar and sentence structure, focussing on a different aspect of English grammar each week. There is a textbook edited by the instructor, distributed in class free of charge. In the second half of each class, students are divided into groups and asked to examine texts of between one and three paragraphs in length that they themselves have drafted and submitted in advance. The instructor distributes versions of these texts with indications of parts that need to be corrected. He then lets the students discuss the problems and possible solutions, before assisting the students in getting the texts into their final form. Each student then submits a final, revised version of their own text. Grading is based on each student's portfolio of revised versions.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語）Ⅱ

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3 回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第 2 回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第 3 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：感情の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 4 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚・認識・判断の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 5 回	文法：接続の用法 自由英作文：段落構成	文法：原因・理由の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1 段落）
第 6 回	文法：接続の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：目的・程度・様態の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3 段落）
第 7 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：譲歩・仮定・条件の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 8 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：許可・勧誘・提案の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 9 回	文法：名詞修飾の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：詞修飾の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 10 回	文法：品詞転換の技法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：品詞転換の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成

第 11 回	文法：強調の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：強調の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 12 回	文法：否定の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1 段落）	文法：否定の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 13 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 14 回	文法：時・態の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：時と受身の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
- 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
- 3～14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【その他の重要事項】

科目名でわかる通り、これは国際日本学論文作成実習（英語）Ⅰの続きとして作成された内容であり、Ⅰの単位をとってからの履修を勧める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞ 【英語関連】

- ① “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)
- ② “Pitch, scale and mode in early *gagaku* and *shōmyō*.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)
- ③ “Court and Buddhist music (1): history of *gagaku* and *shōmyō*” / “Court and Buddhist music (2): music of *gagaku* and *shōmyō*.” (Tokita, Alison, and David Hughes, ed., *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Hants [U.K.]: Ashgate Publishing Ltd, 2008.)

【Outline and objectives】

This class in academic writing in English aims to increase the students' writing skill by means of two approaches. The first half of each class comprises remedial treatment of English grammar and sentence structure, focussing on a different aspect of English grammar each week. There is a textbook edited by the instructor, distributed in class free of charge. In the second half of each class, students are divided into groups and asked to examine texts of between one and three paragraphs in length that they themselves have drafted and submitted in advance. The instructor distributes versions of these texts with indications of parts that need to be corrected. He then lets the students discuss the problems and possible solutions, before assisting the students in getting the texts into their final form. Each student then submits a final, revised version of their own text. Grading is based on each student's portfolio of revised versions.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語） I

ヤナ・ウルバノヴァー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行う。そこでは受講生からの質問も受け付ける。

この授業はリアルタイムのオンライン形式で行う。コロナの感染状況が落ち着いたら、皆さんと相談の上、対面の授業形式に変更することを検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第 2 回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第 3 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：伝達の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 4 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚と認識の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 5 回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：段落構成	文法：使役・被害等の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第 6 回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：存在の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第 7 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現① 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 8 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：変化の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 9 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現② 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成

第 10 回	文法：分詞形容詞と形容詞構文の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：叙述の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 11 回	文法：名詞相当語句の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：「もの・こと」の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 12 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1段落）	文法：比較の表現① 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 13 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現② 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 14 回	文法：数量表現の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：数量の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
 - 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
 - 3 ～ 14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出
- 本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

【<専門領域>】

日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【<研究テーマ>】

琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較

【<主要研究業績>】

- 「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123 号（第 52 巻 1 号）、沖縄文化協会、2019 年 6 月）
- 「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122 号（第 51 巻 2 号）、沖縄文化協会、2018 年 3 月）
- 「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121 号（第 51 巻 1 号）、沖縄文化協会、2017 年 8 月）
- The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs. (『沖縄の歌である琉歌における四季について—古典の和歌と沖縄のオモロとの比較—』) (『Studia Orientalia Slovaca (SOS) (スロバキアの東洋研究)』第 15 巻 1 号、Comenius University, Department of East Asian Studies (コメニウス大学東アジア研究学科)、2016 年)
- 「琉歌の表現研究—和歌・オモロとの比較から—」(森話社、2015 年)
- 「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」(田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015 年)

【Outline and objectives】

This course will enable students to acquire and further develop academic reading and writing skills required at graduate level.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語）Ⅱ

ヤナ・ウルバノヴァー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行う。そこでは受講生からの質問も受け付ける。

この授業はリアルタイムのオンライン形式で行う。コロナの感染状況が落ち着いたら、皆さんと相談の上、対面の授業形式に変更することを検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業履修の確認
第2回	英語の日本学	自己紹介、授業の進め方の説明 日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第3回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：感情の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第4回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚・認識・判断の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第5回	文法：接続の用法 自由英作文：段落構成	文法：原因・理由の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第6回	文法：接続の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：目的・程度・様態の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第7回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：譲歩・仮定・条件の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第8回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：許可・勧誘・提案の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第9回	文法：名詞修飾の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：詞修飾の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成

第10回	文法：品詞転換の技法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：品詞転換の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第11回	文法：強調の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：強調の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第12回	文法：否定の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1段落）	文法：否定の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第13回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第14回	文法：時・態の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：時と受身の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
- 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
- 3～14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

【<専門領域>】

日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【<研究テーマ>】

琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較

【<主要研究業績>】

- 「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123 号（第 52 巻 1 号）、沖縄文化協会、2018 年 6 月）
- 「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122 号（第 51 巻 2 号）、沖縄文化協会、2018 年 3 月）
- 「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121 号（第 51 巻 1 号）、沖縄文化協会、2017 年 8 月）
- The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs. (『沖縄の歌である琉歌における四季について—古典の和歌と沖縄のオモロとの比較—』) (『Studia Orientalia Slovaca (SOS) (スロバキアの東洋研究)』第 15 巻 1 号、Comenius University, Department of East Asian Studies (コメニウス大学東アジア研究学科)、2016 年)
- 「琉歌の表現研究—和歌・オモロとの比較から—」(森話社、2015 年)
- 「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」(田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015 年)

【Outline and objectives】

This course will enable students to acquire and further develop academic reading and writing skills required at graduate level.

BSP500B7

日本語論文作成実習Ⅰ

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では日本語の文章を多く読み、受講生には多くの作文を書いてもらい、添削していきます。専門分野の論文を書くための日本語表現や、明確な文章を書くための論理構造を身につけることが目的です。

【到達目標】

- ①助詞や自動詞・他動詞等、基礎的な文法のミスを減らす。
- ②論文にふさわしい文体を維持する。
- ③論理展開の明確な文章が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

作文をメール（添付ファイル）で提出してもらい、添削してそれぞれに返すとともに、授業ではみなさんの文章から「よくある間違い」をピックアップして説明します。作文の準備として教室でディスカッションをおこなうこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方や参考書の紹介。受講者の専門分野の確認。
第2回	論文の文体	論文にふさわしい文体を学ぶ。
第3回	ねじれない文	主部と述部が論理的に対応している文を書く。
第4回	間違いやすい文法事項のチェック① 短文作り	留学生が間違いやすい助詞や自動詞他動詞、受け身の言い方などを確認しながら短文を作る。
第5回	間違いやすい文法事項のチェック② 添削とフィードバック	前回の続き。受講者が書いて教員に送った例文を材料にして間違いやすい箇所を確認。
第6回	文章の要約① 短めの文章の要約	短い文章を読み、表現を学ぶ。要約を宿題にして次回までに提出。
第7回	文章の要約② 添削とフィードバック	受講者の要約例を材料に、文法的な間違いのチェックやより良い要約の仕方を学習。
第8回	文章の要約③ 長めの文章の要約	第6回より長めの文章を教室で読み、理解したうえで、要約を宿題にし、次回までに提出。
第9回	文章の要約④ 添削とフィードバック	受講者の要約例を材料に、文法的な間違いのチェックやより良い要約の仕方を学習。
第10回	条件を比べる①	いくつかの条件を比べて優劣や差異を述べる文を書くため、材料となる文章を読んで理解する。
第11回	条件を比べる②	学生が自宅学習で書いて提出した文章を材料に、文法的な間違いや表現の不十分な部分等を集めて検討する。
第12回	要約とコメント①	授業では第8回よりもさらに長い文章を読んで表現を学び、各自がその要約と自分のコメントを書いて提出する。

第13回 要約とコメント② 提出された要約とコメントの例を材料に、文法的な誤りをチェックし、よりよい表現の仕方を学ぶ。

第14回 まとめ 学習した事項の復習とまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。教室で学んだ表現や語彙を辞書等で調べ直し、理解を確実にする。宿題の作文を毎回書き、期限内に提出する。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使いません。資料は授業中に配布します。

【参考書】

授業中に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

作文の提出率（60％）とその成績（40％）によって総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

他の学生の書いた文章を読むことも互いの勉強になるとの意見が多くありました。今年度も、教師と学生との個別のやりとりだけでなく、クラス全員に公開しながらの添削やそれについての質問・意見交換などをしていきます。

【その他の重要事項】

自分のレベルにあったクラスで学べるよう、授業開始前のレベルチェックは必ず受けてください。
作文の添削はメールでおこないます。PCでメールのやりとりができるような環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究
<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
<主要研究業績>

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93巻3号・2016年3月
★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐる―」『文学』16巻2号・2015年

【Outline and objectives】

The aim of this class is to acquire the knowledge and skills necessary to write a dissertation in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成実習Ⅱ

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では日本語の文章を多く読み、受講生には多くの作文を書いてもらい、添削していきます。自分の研究内容について論文を書く力を身につけることが目的です。

【到達目標】

①論文にふさわしい語彙や文体を身につけ、②各自の論文作成に必要な表現を数多く知り、③わかりやすい論理展開ができるよう、接続詞の使い方や段落等も学んで、自分の研究内容を日本語で確に述べることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

作文をメール（添付ファイル）で提出してもらい、添削してそれぞれに返すとともに、授業ではみなさんの文章から「よくある間違い」をピックアップして説明します。作文の準備として教室でディスカッションをおこなうこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	論文にふさわしい表現を確認する	春学期の復習も兼ねて、論文にふさわしい表現を確認。宿題は、学習した表現を使った短文作り。
第 2 回	論文にふさわしい表現—短文の添削とフィードバック	提出された短文を材料に、文法的な誤りや、使えるケース・使えないケースを確認。
第 3 回	文章の論理構造① 接続語の整理	論理的な文章を書くために、文と文を適切な接続語でつなぐ練習をする。
第 4 回	文章の論理構造② 練習問題	前回の続き。練習問題を用いて、文章の論理構造を確認する作業も行う。
第 5 回	文章の要約とコメント	前期よりも長い文章を読み、内容を要約したうえでコメントを付ける。
第 6 回	文章の要約とコメント—要約例の添削とフィードバック	受講者の要約例とコメント例を材料に、間違いやすい表現のチェックをし、要約文やコメントのブラッシュアップをめざす。
第 7 回	統計資料を見て書く	表やグラフに基づいてことがらを述べる際の表現を学ぶ。
第 8 回	絵や写真を見て書く	目の前にある絵や写真から見て取れることを書く際の表現（特に文末表現）を学ぶ。
第 9 回	比較して書く① ディスカッション	複数の事象を比べてその内容を叙述し、優劣や順位を述べる文を書くため、材料となる資料を用いて討議し、意見の相違を確認する。
第 10 回	比較して書く② 添削とフィードバック	学生が自宅で書いて提出した文章を材料に、文法的な間違いや表現の不十分な部分を集めて検討。
第 11 回	比較して書く③ 予想される反論	優劣・順位について他のメンバーの異なる意見を踏まえ、うたえでそれに再反論する文章を書く。

第 12 回	意見を述べる① 材料となる文章の読解	教室では論文作成に有益な表現や文体を学ぶ。読んだ文章について、3～4 段落程度の意見を説得力のある形で書く（宿題）。
第 13 回	意見を述べる② 添削とフィードバック	提出された文章を材料に、間違いやすい表現や論理展開を確認する。
第 14 回	まとめ	全体に間違いやすい文法事項の確認と復習。各学生のウィークポイントの確認。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

書く練習自体は教室ではあまりできませんから、宿題をきちんとやって期限内に提出してください。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使いません。資料は授業中に配布します。

【参考書】

授業中に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

作文の提出率（60 %）とその成績（40 %）によって総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

他の学生の書いた文章を読み、いろいろな表現や間違いやすい点などを学ぶこと、自分とは違う考え方を知ることが有益だと意見が多くありました。今年度も、教師と学生との一対一のやりとりではなく、クラス全体に公開しながらの添削やそれについての質問・意見交換などをしていきます。

【その他の重要事項】

自分のレベルにあったクラスで学べるよう、授業開始前のレベルチェックは必ず受けてください。
作文の添削はメールでおこないます。PC でメールのやりとりができるような環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究
<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
<主要研究業績>

★「修羅能以前の「平家の能」—〈経盛〉の再検討を通して—」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020 年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 巻 3 号・2016 年 3 月
★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐる—」『文学』16 巻 2 号・2015 年

【Outline and objectives】

The aim of this class is to acquire the knowledge and skills necessary to write a dissertation in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 A I

幸田 佳子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要な論文の書き方を学ぶ。

【到達目標】

論文に必要な書き言葉のルールを学び、書けるようになる。

段落構成を習得できるようになる。

文章全体の章立て構成を習得できるようになる。

参考資料の引用の仕方を学び、引用方法ができるようになる。

本論で使う文章展開の方法ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面（1-2 回）とオンラインのブレンド型の授業とする。

授業の進め方について

授業の初めに、前回の授業で提出されたリアクションペーパーから
いくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。講義形式で各々項目のレジメを見ていく。練習問題や書き方を説明
する。調べたことや自分の文は発表してもらうこともある。またテーマに
ついてディスカッションすることもある。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業
内で行った試験や小レポート等、課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	自己の研究テーマ紹介	授業のガイダンス クラス内で研究テーマを話す。対 面で顔合わせをする
第 2 回	書き言葉のルール①文 体	話し言葉と書き言葉 丁寧体と普通体 文体について調べる
第 3 回	書き言葉のルール②語 彙と文法	物事視点にして、主語が変わること。 名詞句の使い方を見る。文章 を書いてみる。
第 4 回	書き言葉のルール③段 落と構成	構成を立てながら一段落の文を書 く。
第 5 回	段落内の構成	論の展開 逆接と追加 構成を考えながら、文を書く。
第 6 回	二段落の構成の展開	二段落で事実と意見の文を書く。
第 7 回	現象などの事実と意見	アウトラインを ppt にして、要 約を発表。その後文章化する。
第 8 回	引用の意味と目的を 学ぶ。	モデル例の引用の仕方を見る。資 料の要約の仕方とそのあとの引用 方法まで、行う。
第 9 回	引用—先行研究の提示	自分の専門の研究の本の要約紹介 をする。
第 10 回	引用—事実と意見文	事実や現象に引用を入れる。
第 11 回	論証の仕方①構成	事実、意見、理由の構成を立て て、文を書いていく。
第 12 回	論証の仕方②証明の種 類	意見と理由を説得できるか検討す る。統計資料を使って文を書く。
第 13 回	論証の仕方③構成の立 て方	与えられたテーマで現象、意見、 理由の構成をたてて、文章を 書く。 対面で確認する。

第 14 回 まとめ 文章のフィー みんなの文章の推敲と評価
ドバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業中に書き終えなかったものは、次週までに提出。書き直しは、
PC でメール提出する。授業の終わりに必要な資料の検索を指示す
るので、調べておくこと。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行
う予定です。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。コピーとレジメを配布する。

【参考書】

『留学生のためのここが大切文章表現のルール』石黒圭 スリーエー
ネットワーク『新訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子 スリー
エーネットワーク『大学で学ぶ日本語ライティング』佐々木瑞枝 The Japan Times
『Good Writing へのパスポート』田中真理 くろしお出版

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物 50%（遅れた場合は 8 割となる） 学期末のレポート
30%（既習の到達度から見る） 平常点 20%（授業参加、発表、質
問など）

【学生の意見等からの気づき】

早口で、先生の出した指示がわからないという指摘を受けたので、
意識してゆっくり話すようにする。板書の字がわかりづらいと言わ
れ、丁寧に書くようにする。

【学生が準備すべき機器他】

必要時にパソコン持参などの指示

【その他の重要事項】

提出遅れは 80%になる。期限に遅れないこと。

欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと。特に提出
物は注意してください。

出席は全出席が前提。5 回以上の欠席は不可とする。

【日本語学】

<専門領域>日本語学

<研究テーマ>文法と日本語教育

<主要研究業績>

① 1994 「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』につ
いて」『語学教育研究論叢』11 号 大東文化大学② 2002 「副詞『一応』について」『語学教育研究論叢』19 号 大東
文化大学③ 2011 「接尾辞『がち』『ざみ』について」『語学教育研究論叢』28 号
大東文化大学④ 2012 「教師主導型から活動型授業への改善の考察—脱タスクを目
指して—」2012 年度 web 版実践研修フォーラム報告⑤ 2014 「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5 号 國
學院大学⑥ 2016 「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題
点」『語学教育研究論叢』34 号 大東文化大学⑦ 2020 「日本語教育に日本語文法を活かしていくには—「として」
を例に考えた試み—」『語学教育研究論叢』第 37 号 大東文化大学

【Outline and objectives】

This class learns how to write necessary report, article at a
university.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 A II

中島 久朱

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

日本語によるアカデミックな文章の作成において求められる語彙や適切な文体、文章構成のルールを身につけ、論理的な文章を作成できるようにする。

資料の要点を的確に読み取る力をつけ、適切な引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。

フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レビューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業概要の説明
第 2 回	書き言葉文体	日本語の表記 書き言葉にふさわしい文体
第 3 回	書き言葉と語彙	書き言葉にふさわしい語と表現
第 4 回	文章構成	文章の構成
第 5 回	段落構成	段落内容の構成
第 6 回	課題の提示	課題の提示の展開とパターン
第 7 回	研究行動の提示	研究行動の提示のための文型と表現
第 8 回	研究設問	研究テーマと問題の提示の展開とパターン
第 9 回	先行研究の紹介	先行研究の紹介、研究の目的を示すための文型と表現
第 10 回	研究方法の提示	研究方法の説明、定義と分類のための文型と表現
第 11 回	用語の定義と考察対象の提示	用語の定義と考察の対象の選択の練習
第 12 回	図表の提示	図表の提示のための文型と表現 図表を使った説明の練習
第 13 回	引用の仕方	適切な引用の仕方 参考文献の引用の練習 期末レポートのテーマの選定とアウトラインの作成
第 14 回	レポート作成	レポート作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語②作文編』アルク

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語④論文作成編』アルク

【成績評価の方法と基準】

提出課題： 40 %、期末レポート： 20%、平常点（授業参加、発表等）： 40%

【学生の意見等からの気づき】

本授業は文章作成能力を高めることを目的とするため、授業時間内での作文時間を可能な限りとるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC

作成したデータを保存する USB メモリ等

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。

欠席する場合は、各自で欠席回の内容を確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学

<研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策

<主要研究業績>

中島久朱（2008）「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第 14 号

中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会 20 周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline and objectives】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 A Ⅱ

幸田 佳子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学に必要な論文の書き方を学ぶ。

【到達目標】

論文に必要な書き言葉のルールを習得する。

段落構成を習得する。

文章全体の章立てをつけた構成方法を習得する。

参考資料の引用を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形態は、1-2 回対面とするブレンド型授業とする。

レジュメプリント導入後、調べたことやよくできた作文等は発表してもらう。課題提出後、添削した作文の書き直しを行う。共通の間違いや表現を取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	春学期の復習	秋学期のガイダンス オンラインと対面で顔合わせする。
第 2 回	表現の方法①	定義の意味、表現などを学ぶ。簡単な文を書く。
第 3 回	表現の方法②	分類の意味、表現等を学ぶ。簡単な文を書く。
第 4 回	表現の方法③	原因・理由の意味、表現等を学ぶ。簡単な文を書く。
第 5 回	表現の方法④	結果の意味、表現などを学ぶ。簡単な文を書く。
第 6 回	本論の展開の方法を見 てみる。	モデル文でどんな展開をしている かみる。その後各自の論の展開方法 を考える。
第 7 回	レポートの語彙表現	語彙や決まり句を調べてみる。
第 8 回	レポート作成の流れ	全体をとらえてから、一つずつ見 ていく。
第 9 回	問題提起と目標規定	資料を調べる。メモの取り方を指 導。
第 10 回	アウトラインの作成	自分レポートの構成を考えて、要 点を ppt で表す。発表
第 11 回	アウトラインから 文章化	各自のアウトラインの評価。良い ものを見せる。
第 12 回	序章の段落の書き方の 提示本論の論証の仕方	段落の構成と常套句を使って書 く。
第 13 回	結論、参考文献の書き 方	全体を仕上げる。最後に対面とオ ンラインで文章の書き方を確認す る
第 14 回	全員で読み合わせ、推 敲	各自の評価、他者の文を読んで評 価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業中書き終えなかった物は次週までに提出。書き直しはメール提出すること

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。

【参考書】

『留学生のためのここが大切文章表現』 石黒圭 スリーエーネット
ワーク『新訂版留学生のための論理的な文章書き方』 二通信子 スリー
エーネットワーク

『大学で学ぶ日本語ライティング』佐々木瑞枝 The Japan Times

『Good Writing へのパスポート』田中真理 くろしお出版

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物 50% 学期の末のレポート 30% 平常点 20%

【学生の意見等からの気づき】

知識を深めるために、話し合いも行うようにする。添削の字がわかり
づらいとの指摘があったので、丁寧に書くようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン持参については事前に指示する。

【日本語学】

<専門領域>日本語学

<研究テーマ>文法と日本語教育

<主要研究業績>

① 1994 「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』につ
いて」『語学教育研究論叢 11』大東文化大学② 2002 「副詞『一応』について」『語学教育論叢 19 号 大東文化
大学③ 2011 「接尾辞『がち』と『ざみ』について」『語学教育論叢 28 号
大東文化大学④ 2012 「教師主導型から活動型授業への改善の考察—脱タスクを目
指して—」2012 年度 web 版実践研修フォーラム報告⑤ 2014 「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要 5 号 國
學院大學⑥ 2016 「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題
点」『語学教育研究論叢 第 34 号⑦ 2020 「日本語教育に日本語文法を活かしていくには—「として」
を例に考えた試み—」『語学教育研究論叢 第 37 号 大東文化大学

【Outline and objectives】

This class learns how to write necessary report, article at a
university.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 A IV

中島 久朱

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

日本語によるアカデミックな文章の作成において求められる語彙や適切な文体、文章構成のルールを身につけ、論理的な文章を作成できるようにする。

資料の要点を的確に読み取る力をつけ、適切な引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。

フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レビューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	変化の形容	変化を表す図表の提示のための文型と表現
第 2 回	データの説明と分析	データの説明と分析の練習
第 3 回	数値データの対比と比較	数値データの対比と比較のための文型と表現
第 4 回	事実の対比と比較	データからわかる事実の対比と比較の練習
第 5 回	事実関係の考察	データが表す事実の考察と予測のための文型と表現
第 6 回	原因の考察	データを使用した原因の考察の練習
第 7 回	列挙	要点の列挙のための表現
第 8 回	引用	論述文の引用の仕方
第 9 回	同意と反論	引用に対する同意と反論の仕方
第 10 回	意見の提示	筆者自身の見解を表す表現
第 11 回	意見の段程の度合い	様々な表現による断定の度合いと使い分け
第 12 回	結論の提示	文章全体の結論を述べるための文型と表現
第 13 回	期末レポート作成準備	期末レポートのテーマの選定とアウトラインの作成
第 14 回	期末レポート作成	期末レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会『留学生の日本語②作文編』ア
ルク
アカデミック・ジャパニーズ研究会『留学生の日本語④論文作成編』
アルク

二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』ス
リーエーネットワーク
井上千以子『思考を鍛える レポート・論文作成方』慶應義塾大学出
版会

【成績評価の方法と基準】

提出課題： 40 %、期末レポート： 20%、平常点（授業参加、発表等）： 40%

【学生の意見等からの気づき】

本授業は文章作成能力を高めることを目的とするため、授業時間内でも可能な限り作文作業の時間をとるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC
作成したデータを保存する USB メモリ等

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学

<研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策

<主要研究業績>

中島久朱（2008）「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第 14 号

中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会 20 周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline and objectives】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 B I

藤田 百子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で研究する上で必要な日本語の学術的文章表現について学ぶ。

【到達目標】

- (1) 学術的な文体の日本語が書けるようになる。
- (2) 正確な文法で書けるようになる。
- (3) 様々な機能語・接続表現が使えるようになる。
- (4) 自分で表現の間違いを推敲できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

レポートや論文を書く際に必要な文法・表現について学習しながら、
文法・表現の練習する。随時、学習した表現の運用練習として、決
められたトピックに沿った 400 字程度の文章を 2 回、総合的な運用
練習として学期末に 600 字から 800 字程度の文章を 1 回書き、提
出する。添削された作文は、返却後 word 等で清書し、添付ファイ
ルをメール提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回目	研究テーマに関する 表現 文章・文体の種類	各自の研究テーマについて書き、 論文に必要な文体について学ぶ。
2 回目	作文実践―立場のある 文の作成	立場を決めた 400 字-500 字程度 の文章を書き、レポートに適した 表現や基本的な構成の概要を学 ぶ。
3 回目	表記の仕方	読みやすいレポートを書くため に、ひらがなと漢字のバランス、 カタカナ表記、句読点の打ち方 について学ぶ。
4 回目	助詞の使い方	間違いやすい助詞について学ぶ。
5 回目	自動詞・他動詞・受け 身	論文らしい動詞の表現を学ぶ。
6 回目	レポート、論文に用い る表現・文型	レポート、論文でよく使われる文 末表現・文型の使い分けを学ぶ。
7 回目	意見文で用いる文末表 現	意見を述べる際に使う文末表現の 使い分けを学ぶ。
8 回目	作文実践―資料をもと に意見文の作成	与えられた資料をもとに、400 字-500 字程度の説明文・意見文 を書く。
9 回目	名詞化・タイトル	論文のタイトル、章のタイトルの 書き方について学ぶ。
10 回目	呼応表現	ペアになる呼応表現について学 ぶ。
11 回目	専門用語の選び方	研究に特有な専門用語や語彙の使 い方を確認する。
12 回目	引用の仕方	適切な引用表現・文献の書き方 について学ぶ。
13 回目	図表の引用の仕方	図や表を引用する際の書き方につ いて学ぶ。

14 回目 作文実践―研究テーマ 研究テーマに関連した資料を自分
に関連する意見文の作 であらかじめ準備し、事実・意
成 見・引用を適切に書き分けた 600
字から 800 字程度の意見文を書
く。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。具体的
には、課題ごとにそのテーマについて下調べをしたり、資料を準備す
る。また、自分の研究テーマに関連した文章も書くので、常に専門
書や論文を読んでおく。添削された作文は、word 等で清書し、返
却後一週間以内に添付ファイルでメール提出する。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、毎回資料を配布する。

【参考書】

石黒圭・筒井千絵『留学生のための ここが大切 文章表現のルール』
スリーエーネットワーク（2009）
二通信子・他『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハ
ンドブック』東京大学出版会（2009）
鎌田美千代・仁科浩美『アカデミック・ライティングのための パ
ラフレーズ演習』スリーエーネットワーク（2014）
田中真理『Good Writing へのパスポート』くろしお出版（2014）

【成績評価の方法と基準】

作文：30 %（作文実践 2 回）学期末作文：20 % 宿題：20 %
平常点：30 %

【学生の意見等からの気づき】

課題の内容に関する検討やグループ・ディスカッションの時間も設
けたい。

【学生が準備すべき機器他】

大学貸与のノート PC、または各自のノート PC を持参すること。

【その他の重要事項】

秋学期開講〈日本語論文作成基礎 B III〉と合わせての履修が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本語教育学

<研究テーマ> 語用論、協働学習

<主要研究業績>

[学術論文]

伊藤奈津美、石川早苗、ドイル綾子、藤田百子、柴田幸子「ピア・レ
スボンスにおける教師の役割：教師の成否判断と学習者の自己上達
感からの考察」2017 年 3 月（早稲田大学『早稲田日本語教育実践
研究』第 5 号）

・三井一巳・鄭在喜・藤田百子・吉田好美「レポート作成における
ルーブリック評価の再考―教員と受講生の評価観点のずれとレポー
ト産出の変化からの考察―」2019 年 3 月（早稲田大学『早稲田日
本語教育実践研究』第 7 号）

・伊藤奈津美、藤田百子「学習者はグループワークで何を学んだか―
学習者の振り返りから―」2019 年 12 月（東京外国語大学『外国語
教育研究』第 22 号）

[書評]

・「日本語教育よくわかる教授法「コース・デザイン」から「外国語
教授法の史的変遷」まで」2019 年 12 月（早稲田大学『早稲田日本
語教育学』第 27 号）

【Outline and objectives】

To acquire competence in writing academic reports and papers
in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 B II

中島 久朱

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

書き言葉のルールを学び、レポート、論文に必要な文章表現を身につける。

アカデミックな文章の構成力を身につけ、日本語で論理的な文章が書けるようになる。

適切な参考資料の引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。

フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レビューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業内容の説明
第 2 回	文法・文型 助詞の使い方① 目的格、主格 など	「で」と「を」、「を」と「に」、「を」と「が」の使い分け
第 3 回	文法・文法 助詞の使い方② 複合助詞、「は」と「が」	複合助詞、「は」と「が」の使い分け
第 4 回	言葉の形の使い分け① 適切な形	適切な形の選択
第 5 回	言葉の形の使い分け② 時間表現	適切な時間表現の使い分け
第 6 回	自動詞・他動詞	自動詞と他動詞の形のルール 自動詞と他動詞の使い分けのルール
第 7 回	受身	受け身表現の使い方のルール
第 8 回	呼応	呼応表現の使い方
第 9 回	文末表現	文末表現の調整
第 10 回	文字・表記① ひらがな・カタカナ・漢字	ひらがなと漢字の使い分け カタカナ表記のルール
第 11 回	文字・表記② 漢字の選択、句読点	漢字の選択と誤変換 句読点の打ち方
第 12 回	書き言葉	書き言葉らしさ 表現のかたさ
第 13 回	文体と語彙	意味の似ている表現 名詞化、する動詞化 専門用語の選び方
第 14 回	ミニ・レポート作成	ミニ・レポート作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

授業内で出された課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

石黒圭・筒井千絵「留学生のためのここが大切文章表現のルール」スリーエーネットワーク

佐々木瑞江、細井和代、藤尾喜代子「大学で学ぶための日本語ライティング 短文作成からレポート作成まで」The Japan Times
二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

【成績評価の方法と基準】

提出課題： 40 %、期末レポート： 20%、平常点（授業参加、発表等）： 40%

【学生の意見等からの気づき】

文章作成のための授業ですので、実際に文章を書いて表現力を身につけるため、授業内でも作文の時間を多めに設けています。

文法については、要望により適宜説明の時間を増やしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC

作成したデータを保存する USB メモリ等

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。

欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本語教育学、比較教育学

＜研究テーマ＞マイノリティ教育、教育政策

＜主要研究業績＞

中島久朱（2008）「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第 14 号

中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会 20 周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline and objectives】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 B II

藤田 百子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で研究する上で必要な日本語論文の作成法を学ぶ。

【到達目標】

- (1) 論文の構成について理解する。
- (2) 日本語で学術的な文章が書けるようになる。
- (3) 日本語で要約文が書けるようになる。
- (4) 日本語で意見文（考察）が書けるようになる。
- (5) 適切な引用ができるようになる。
- (6) 自分で表現の間違いを推敲できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

「論文」の構成・体裁・書き方について学ぶ。論文を書く際に必要な資料や、先行研究を適切に引用できるようになるために、記事・評論文・学術論文等を読み、その「要約」を書く。その後、論文の考察にあたる「意見文」を書く。（要約文、意見文、学期中各 4 回。）授業中には内容について全員で検討をする。学期最後には研究計画書を書くため、自身の研究に関する先行研究の要約、意見文を書く。添削された作文は、返却後 word 等で清書し、添付ファイルをメール提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回目	論文の構成	論文の構成について学ぶ。
2 回目	要約の仕方	要約の仕方について学ぶ。
3 回目	意見文（考察）の書き方	意見文（考察）の書き方について学ぶ。
4 回目	新聞記事の要約文	自分で選んだ新聞記事を要約する。
5 回目	新聞記事に関する意見文の作成	4 回目で選んだ新聞記事に関する意見文を書く。
6 回目	評論文の要約文	自分で選んだ評論文を要約する。
7 回目	評論文に対する意見文の作成	6 回目で選んだ評論文に関する意見文を書く。
8 回目	論文の要約文	自分で選んだ論文を要約する。
9 回目	論文に対する意見文	8 回目で選んだ論文に対する意見文を書く。
10 回目	先行研究の要約文	自分の論文に関する先行研究の論文を要約する。
11 回目	先行研究に対する意見文	先行研究に関する考察を書く。
12 回目	研究計画アウトラインの作成	研究計画書に書くべき内容を確認し、アウトラインを作成する。
13 回目	研究計画書の作成	研究計画書を実際に書く。
14 回目	研究計画書の検討会	ペア又はグループで 13 回目で作成した研究計画書を読み合い、内容を検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。具体的には、自分の研究テーマに関連する意見文を書くので、研究テーマに関連した資料を資料（新聞記事、評論文、論文）準備する。授業中には事前に提出された資料をもとに、内容を検討するのでこちらで指定した締め切りは守ること。添削された作文は、word 等で清書し、返却後一週間以内に添付ファイルでメール提出すること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

石黒圭・筒井千絵『留学生のための ここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク（2009）
 二通信子・他『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会（2009）
 鎌田美千代・仁科浩美『アカデミック・ライティングのための パラフレーズ演習』スリーエーネットワーク（2014）
 田中真理『Good Writing へのパスポート』くろしお出版（2014）

【成績評価の方法と基準】

作文：50 % 宿題：20 % 平常点：30 %（ディスカッション、発表等）

【学生の意見等からの気づき】

本文の内容に関する検討、グループ・ディスカッションの時間も設けたい。

【学生が準備すべき機器他】

大学貸与のノート PC、または各自のノート PC を持参すること。

【その他の重要事項】

春学期開講（日本語論文作成基礎 B I）と合わせての履修が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本語教育学
 <研究テーマ> 語用論、協働学習
 <主要研究業績>

【学術論文】

伊藤奈津美、石川早苗、ドイル綾子、藤田百子、柴田幸子「ピア・レスポンスにおける教師の役割：教師の成否判断と学習者の自己上達感からの考察」2017 年 3 月（早稲田大学『早稲田日本語教育実践研究』第 5 号）

・三井一巳・鄭在喜・藤田百子・吉田好美「レポート作成におけるルーブリック評価の再考—教員と受講生の評価視点のずれとレポート産出の変化からの考察—」2019 年 3 月（早稲田大学『早稲田日本語教育実践研究』第 7 号）

・伊藤奈津美、藤田百子「学習者はグループワークで何を学んだか—学習者の振り返りから—」2019 年 12 月（東京外国語大学『外国語教育研究』第 22 号）

【書評】

・「日本語教育よくわかる教授法「コース・デザイン」から「外国語教授法の史的変遷」まで」2019 年 12 月（早稲田大学『早稲田日本語教育学』第 27 号）

【Outline and objectives】

To acquire competence in writing academic reports and papers in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎B IV

中島 久朱

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

書き言葉のルールを学び、レポート、論文に必要な文章表現を身につける。
アカデミックな文章の構成力を身につけ、日本語で論理的な文章を書けるようになる。
適切な参考資料の引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。
フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レビューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	文書・談話① 文の長さ	文の長さを読みやすさ
第 2 回	文書・談話② 読み手への配慮	読み手に配慮した文の書き方
第 3 回	指示詞による文の接続	文脈指示と接続
第 4 回	接続詞と文章の構成	接続詞による文章の接続と構成
第 5 回	意見と事実の提示	自身の意見を表す表現 他者の意見や事実を表す表現
第 6 回	レポート・論文の作成① アカデミックな文章の構成	複雑な内容を説明する場合の内容の整理 段落構成
第 7 回	レポート・論文の作成② 導入部の書き方	導入部の構成 定義と例示
第 8 回	レポート・論文の作成③ データの提示	データの提示と整理
第 9 回	レポート・論文の作成④ 引用	引用の方法と引用文の作成
第 10 回	レポート・論文の作成⑤ 対比と比較	対比と比較の方法
第 11 回	レポート・論文の作成⑥ 同意と反論	同意と反論の述べ方
第 12 回	レポート・論文の作成⑦ 考察と結論	考察と結論の述べ方 期末レポートのテーマの検討
第 13 回	期末レポート準備	期末レポートのアウトラインの作成と資料の整理
第 14 回	期末レポート作成	期末レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。
作成したデータを保存する USB メモリ等

【参考書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会『留学生の日本語④論文作成編』アルク
石黒圭・筒井千絵「留学生のためのここが大切文章表現のルール」スリーエーネットワーク
佐々木瑞江、細井和代、藤尾喜代子「大学で学ぶための日本語ライティング 短文作成からレポート作成まで」The Japan Times
二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

【成績評価の方法と基準】

提出課題： 40 %、期末レポート： 20%、平常点（授業参加、発表等）： 40%

【学生の意見等からの気づき】

文章作成のための授業ですので、実際に文章を書いて表現力を身につけるため、授業内でも作文の時間を多めに設けています。
文法については、要望により適宜説明の時間を増やしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学
<研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策
<主要研究業績>

中島久朱（2008）『グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—』、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱（2008）『イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育』、『国際教育』第 14 号

中島久朱（2009）『英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育』、『日本国際教育学会 20 周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱（2011）『現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—』、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline and objectives】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

LIN500B7

日本語の性格 I

滝浦 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、そのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。春学期は、文字、音、語、文といった言語学的単位に沿いながら、ひと味違った角度からトピックを眺めていく。

【到達目標】

- (1) 日本語が漢字をどのように取り入れたかを理解し説明できるようになる。
- (2) 日本語の音声コミュニケーションの観点で理解し説明できるようになる。
- (3) 言語の変化というものの正しい捉え方を理解し説明できるようになる。
- (4) 「ハ」と「ガ」を語り方の構えの相違として理解し説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、グループ・ラインなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第 2 回	漢字と日本語	日本語が漢字をどのように取り入れたかを見て、そこから漢字使用の日本語らしさを見出す。
第 3 回	日本語の表記	漢字・ひらがな・カタカナを併用することの意味を、それぞれの経緯に遡って考える。
第 4 回	日本語の語種	日本語の語彙を構成する和語・漢語・外来語という語種のもつ機能的相違を探る。
第 5 回	日本語の音とリズム	モーラと音節の相違を理解した上で、日本語のリズムがどう構成されるか考察する。
第 6 回	音象徴と日本語	日本語で好まれる擬音・擬態語を支える音象徴を普遍と特殊の側面から考察する。
第 7 回	日本語のオノマトペ	日本語の擬音・擬態語がもっている語構成的な特徴を探り、その機能を考察する。
第 8 回	連濁と日本語①	連濁が音声現象に見えてそうではないことを、生起／不生起環境の考察から見出す。
第 9 回	連濁と日本語②	連濁の機能を理解した上で、アクセントなどによる類似の機能についても検討する。

第 10 回 位相語

社会的条件や心理的条件などによって言葉が変わる側面に目を向けることを通して、日本社会を考える。

第 11 回 言語変化

若者言葉と言われるような言語変化の進み方を、言語一般の次元に置いて考察する。

第 12 回 ラ抜き言葉

「日本語の乱れ」と言われたラ抜き言葉が、実は長期におよぶ言語変化の一局面だったことを理解する。

第 13 回 「ハ」の語り

日本語の特徴である助詞「ハ」を取り上げ、それを語り方の構えとして考察する。

第 14 回 「ガ」の語り

「ハ」と対比的に用いられる「ガ」を取り上げ、語り方の構えとして比較考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人編（2020）『日本語学入門』放送大学教育振興会
ほか授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 60 %
期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論
＜研究テーマ＞ポライトネス、日本語語用論
＜主要研究業績＞

滝浦真人（2016）『日本語リテラシー』放送大学教育振興会
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

【Outline and objectives】

Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by native speakers. In the spring semester, linguistic functional aspects are focused on.

LIN500B7

日本語の性格Ⅱ

滝浦 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、そのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。秋学期は、日本語に特徴的な対人関係表現をはじめ「語用論的」な面に着目して、“人が言葉で何をなすか？”について、中国語などとも比較しながら考えていく。

【到達目標】

- (1) 日本語を語用論的に見るための基礎知識を理解する。
- (2) ポライトネスの考え方を理解し説明することができる。
- (3) 対人関係の表現に関わる諸現象を考察することができる。
- (4) 現代日本語の成立事情を理解し他言語と比較考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、グループ・ラインなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第 2 回	語用論の基本	グライスの協調の原理と会話の原則をはじめ、語用論の基礎知識を再確認する。
第 3 回	効率と配慮	伝達効率と対人配慮が反比例の関係にあることを確認し、具体的に考察する。
第 4 回	ポライトネス	ポライトネスの理論的枠組みを理解し、日本語のポライトネス的性格を考察する。
第 5 回	呼称	対人関係専用の手段として呼称をとらえ、理論的と具体的の両面から考察する。
第 6 回	あいさつ	あいさつという行為の意味に立ち返り、あいさつの意味論と語用論を考察する。
第 7 回	感謝・謝罪	非常に基本的な言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第 8 回	依頼・勧誘と応諾・断り	典型的な言語行為の 1 つを取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第 9 回	褒め／褒められ・フェイスイワーク	フェイスに直接関わる言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第 10 回	敬語（意味論）	対人関係専用手段としての敬語を取り上げ、それが対人的な〈距離〉の表現として機能していることを理解する。

第 11 回 敬語（語用論）

敬語は人間関係の像を表現するとの考えに立った上で、敬語の語用論を考察する。

第 12 回 授受表現

授受動詞を 3 系列有する日本語話者が、それによって何をやりとりしているのか考察する。

第 13 回 標準語と日本語

近代日本語の成立事情による影響を確認し、日本語のありかたについて考える。

第 14 回 日本語はどこへ向かっているか？

“気になる日本語”がいつも取り沙汰され、敬語などの“馬鹿丁寧化”が感じられる日本語の行く末を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
滝浦真人・大橋理枝（2015）『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会
滝浦真人編（2018）『新しい言語学』放送大学教育振興会
椎名美智（2021）『「させていただく」の語用論』ひつじ書房

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 60 %
期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論
＜研究テーマ＞ポライトネス、日本語語用論
＜主要研究業績＞（参考書に挙げたもの以外で）
滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
滝浦真人（2005）『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
加藤重広・滝浦真人編（2016）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房

【Outline and objectives】

Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by native speakers. In the fall semester, interpersonal aspects like politeness are focused on.

CUA500B7

伝統文化と民衆世界 I

ヤナ・ウルバノヴァー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学びます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。

【到達目標】

この授業を通じて次のスキルが獲得できます

1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学ぶことで、その文化や歴史的な背景に関する理解が深まります
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を養うことができます
3. 学んだことや気付いたことについて各自が意見交換、議論、プレゼンテーションすることによって幅広い考察力を身に付けることができます

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回は授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行います。そこでは受講生からの質問も受け付けます。この授業はリアルタイムのオンライン形式で行います。コロナの感染状況が落ち着いたら、皆さんと相談の上、対面の授業形式に変更することを検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第 2 回	日本文学の概要	奈良時代と平安時代を中心とした日本古典文学の代表的な作品やその時代背景の紹介
第 3 回	日本人の自然観	自然を愛する日本人、四季の意味、陰陽思想。自然に見る日本および西洋の文化・考え方の違い
第 4 回	日本美意識における主要な概念	兼好法師による『徒然草』から読み取れる日本文化や文学における美意識の四つの主要な概念
第 5 回	日本の神話世界	『古事記』に見られる古代日本の世界観。日本の神話、ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観の特徴と比較
第 6 回	和歌の修辞法	和歌の序詞、枕詞、掛詞の役割。日本の歌と西洋の詩における伝統技法の特徴
第 7 回	物語の世界	作り物語（『竹取物語』）と歌物語（『伊勢物語』）を中心に物語というジャンルの紹介

第 8 回	沖縄の言葉①	琉球列島の言葉と文化の発達。琉球語の中にある沖縄語
第 9 回	沖縄の言葉②	沖縄本島の言葉の特徴、琉歌の言葉と表記法について
第 10 回	琉歌の世界	琉歌の特徴（言葉、形式、作者、伴奏等）、古典音楽と民謡
第 11 回	恩納なべと吉屋つる	琉歌の伝説的な二人の女流歌人の生涯と代表的な琉歌の紹介
第 12 回	和歌と琉歌の表現に見られる類似点	和歌から影響を受けた琉歌における表現、和歌の改作琉歌
第 13 回	和歌と琉歌の表現に見られる特徴	和歌と琉歌に共通する表現におけるそれぞれの観念の違い。たとえば「雪」について
第 14 回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマの議論。エッセイの提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】

他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー、ディスカッションへの参加等、約 30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>
- <研究テーマ>
- <主要研究業績>

【<専門領域>】

日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【<研究テーマ>】

琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較

【<主要研究業績>】

- 「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123 号（第 52 巻 1 号）、沖縄文化協会、2019 年 6 月）
- 「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122 号（第 51 巻 2 号）、沖縄文化協会、2018 年 3 月）
- 「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121 号（第 51 巻 1 号）、沖縄文化協会、2017 年 8 月）
- The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs. (『沖縄の歌である琉歌における四季について—古典の和歌と沖縄のオモロとの比較—』) (『Studia Orientalia Slovaca (SOS) (スロバキアの東洋研究)』第 15 巻 1 号、Comenius University, Department of East Asian Studies (コメニウス大学東アジア研究学科)、2016 年)
- 『琉歌の表現研究—和歌・オモロとの比較から—』(森話社、2015 年)
- 「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」(田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015 年)

【Outline and objectives】

This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

CUA500B7

伝統文化と民衆世界Ⅱ

横山 泰子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の絵本文化を、比較文化的な観点から学びます。日本では前近代から子ども向けの絵本が多数出版されており、歴史的に有名な作品は外国語に翻訳されています。絵本文化の伝統をふまえたうえで、日本語の原書と翻訳版の差異を通し、文化の多様性を楽しむことを目的とします。

【到達目標】

例年、日本人学生と留学生の履修が多いクラスであり、互いのコミュニケーション能力を高めることが全体の目標です。学生は授業時間内での発表、翻訳の課題、他者の発表への応答を行い、最終的な期末レポートを書きます。それにより、以下の知識とスキルを身に付けることができます。

＊日本語を母語とする学生は、日本語や英語等を用いながら翻訳やディスカッションに参加することでコミュニケーション能力を高めるとともに、異文化の相手に対して論理的な日本語で絵本文化についての説明ができるようになる。

＊外国人留学生は、日本語や自らの母語能力を活用しながら翻訳やディスカッションに参加することでコミュニケーション能力を高めるとともに、日本の絵本文化について論理的な日本語で説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本の絵本についての概要を講義で説明します。その後、課題として受講生一人一人に各自が使用できる言語〔日本語以外〕で書かれた絵本を案内しますので、その文章を自力で日本語に翻訳してもらいます。その翻訳文を授業中に発表、全員での議論を経て、よりよい表現を工夫しながら、異文化理解につとめます。オンライン授業を予定していますが、状況により変更の可能性があります。リアクションペーパー等におけるコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業についての説明	シラバス内容の確認とテキストの選定
第2回	日本の絵本史（講義）	『はじめて学ぶ日本の絵本史』等を用いて、日本の絵本史の概要を簡単に説明
第3回	日本の絵本史（講義）	『はじめて学ぶ日本の絵本史』等を用いて、日本の絵本史の概要を簡単に説明
第4回	学生の発表 日本の絵本の絵について	担当者の発表と全体のディスカッション
第5回	学生の発表 日本の絵本の色彩について	担当者の発表と全体のディスカッション
第6回	学生の発表 日本の絵本のテーマについて	担当者の発表と全体のディスカッション
第7回	学生の発表 日本の絵本と漫画について	担当者の発表と全体のディスカッション

第8回	学生の発表 絵本と児童文化について	担当者の発表と全体のディスカッション
第9回	学生の発表 絵本と教育について	担当者の発表と全体のディスカッション
第10回	学生の発表 絵本と言葉遊びについて	担当者の発表と全体のディスカッション
第11回	学生の発表 絵本と大人の関わり	担当者の発表と全体のディスカッション
第12回	学生の発表 社会における絵本の位置づけ	担当者の発表と全体のディスカッション
第13回	学生の発表 絵本の読み聞かせ方	担当者の発表と全体のディスカッション
第14回	全体のまとめ	扱った絵本全体についてのディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。発表者は渡された資料（日本語以外）を事前に読み、日本語に翻訳し、音読する準備が求められます。

【テキスト（教科書）】

特にありません

【参考書】

特にありません

【成績評価の方法と基準】

期末レポート50パーセント

平常点（学習状況、発表内容、授業時の参加度）50パーセント

【学生の意見等からの気づき】

特にありません

【学生が準備すべき機器他】

特にありません

【その他の重要事項】

質問はメールで yyoko@hosei.ac.jp をお願いします。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/16/0001557/profile.html>

【Outline and objectives】

The goals of this course are

(1) Obtain basic knowledge of comparative history about Japanese children's books

(2) Understand the diversity of culture through seeing the differences between originals and the translated books.

PHL500B7

日本の思想・西欧の思想Ⅰ

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『「甘え」の構造』を読む。

「日本人は日本人論が好きだ」と言われます。加えて、その日本人論はとかく、「世界は日本人をわからない」といった日本人特殊論に向かいます。授業では、日本人による代表的な日本人論として土居建郎『「甘え」の構造』を取り上げて、そこでの日本人特殊論を批判的に読み解くことを試みます。春学期には、同書の前半を扱います。

【到達目標】

- 代表的な〈日本人論〉で著者の主張を正確に理解できるようになります。
- 代表的な〈日本人論〉で著者の主張に批判を行うことができるようになります。
- グローバリゼーションが進む現代世界において〈日本人論〉がレゾナントルを持つのかどうかを考えることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。

毎回、定められたテキスト箇所についてまとめと解釈のレジュメ発表を当番が行い、その後発表者の問題提起に従って、全員参加で討論を行います。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テーマについて概要の説明を行います。
第2回	第1章「甘え」の着想	議論の理解と批判
第3回	第2章「甘え」の世界 —甘えの語彙	議論の理解と批判
第4回	第2章「甘え」の世界 —義理と人情	議論の理解と批判
第5回	第2章「甘え」の世界 —他人と遠慮	議論の理解と批判
第6回	第2章「甘え」の世界 —内と外	議論の理解と批判
第7回	第2章「甘え」の世界 —同一化と摂取	議論の理解と批判
第8回	第2章「甘え」の世界 —罪と恥	議論の理解と批判
第9回	第2章「甘え」の世界 —甘えのイデオロギー	議論の理解と批判
第10回	第3章「甘え」の論理 —言語と心理	議論の理解と批判
第11回	第3章「甘え」の論理 —甘えの言語的起源	議論の理解と批判
第12回	第3章「甘え」の論理 —甘えの心理的原型	議論の理解と批判
第13回	第3章「甘え」の論理 —甘えと日本的思维	議論の理解と批判
第14回	第3章「甘え」の論理 —甘えと自由	議論の理解と批判、加えて全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回予定のテキスト箇所は下調べをし、読み、理解した上で授業に参加します。またとくに当番に当たったときは、当該箇所について、解釈と問題提起のレジュメを作成して授業に参加します。学期末にはまとめのレポートを作成します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

土居建郎『「甘え」の構造』（弘文社、増補版、2007）

【参考書】

土居建郎『表と裏』（弘文堂、1985）

土居建郎『続・「甘え」の構造』（弘文堂、2001）

中根千枝『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書、1967）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 40 %、学期末レポート 20 % で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、テキストの理解 30 %、テキストの批判 30 %、日本人論の評価 40 % の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

-国際日本学

-哲学

<研究テーマ>

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

<主要研究業績>

-Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan(共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所）

-「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究所叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所）

-La philosophie japonaise（共著、Vrin, 2013）

-『風土（Fudo）から江戸東京へ』（編著、法政大学出版局、2020年3月）

【Outline and objectives】

The Japanese are said to love Japanese theory. In addition, Japanese theory often goes to the assertion that the Japanese are special and the world does not understand them. In the class, we are going to take "Structure of" Amae "" from Doi Takeo as a representative Japanese theory by the Japanese, and try to interpret it critically. In the spring semester we shall cover the first part of the book.

PHL500B7

日本の思想・西欧の思想Ⅱ

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『「甘え」の構造』を読む。

「日本人は日本人論が好きだ」と言われます。加えて、その日本人論はとかく、「世界は日本人をわからない」といった日本人特殊論に向かいます。授業では、日本人による代表的な日本人論として土居建郎『「甘え」の構造』を取り上げて、そこでの日本人特殊論を批判的に読み解くことを試みます。秋学期には、同書の後半を扱います。

【到達目標】

- 代表的な〈日本人論〉で著者の主張を正確に理解できるようになります。
- 代表的な〈日本人論〉で著者の主張に批判を行うことができるようになります。
- グローバリゼーションが進む現代世界において〈日本人論〉がレゾナントルを持つのかどうかを考えることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。

毎回、定められたテキスト箇所についてまとめと解釈のレジュメ発表を当番が行い、その後発表者の問題提起に従って、全員参加で討論を行います。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テーマについて概要の説明を行います。
第2回	第3章「甘え」の論理 — 気の概念	議論の理解と批判
第3回	第4章「甘え」の病理 — 「とらわれ」の心理	議論の理解と批判
第4回	第4章「甘え」の病理 — 対人恐怖	議論の理解と批判
第5回	第4章「甘え」の病理 — 「気がすまない」	議論の理解と批判
第6回	第4章「甘え」の病理 — 同性愛的感情	議論の理解と批判
第7回	第4章「甘え」の病理 — 「くやむ」と「くやしい」	議論の理解と批判
第8回	第4章「甘え」の病理 — 被害感	議論の理解と批判
第9回	第4章「甘え」の病理 — 「自分がない」	議論の理解と批判
第10回	第5章「甘え」と現代 社会— 青年の反抗	議論の理解と批判
第11回	第5章「甘え」と現代 社会— 現代人の疎外感	議論の理解と批判
第12回	第5章「甘え」と現代 社会 — 父なき社会	議論の理解と批判

- 第13回 第5章「甘え」と現代 議論の理解と批判
社会
— 連帯感・罪悪感・被害者意識
- 第14回 第5章「甘え」と現代 議論の理解と批判、加えて全体で
社会 総括の討論を行います。
— 子供の世紀

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回予定のテキスト箇所は下調べをし、読み、理解した上で授業に参加します。またとくに当番に当たったときは、当該箇所について、解釈と問題提起のレジュメを作成して授業に参加します。学期末にはまとめのレポートを作成します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

土居建郎『「甘え」の構造』（弘文社、増補版、2007）

【参考書】

土居建郎『表と裏』（弘文堂、1985）

土居建郎『続・「甘え」の構造』（弘文堂、2001）

中根千枝『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書、1967）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 40 %、学期末レポート 20 % で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、テキストの理解 30 %、テキストの批判 30 %、日本人論の評価 40 % の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

- 国際日本学

- 哲学

<研究テーマ>

- 明治の日本近代思想の再評価

- 西洋思想の近代日本への導入の問題

<主要研究業績>

- Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan(共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

- 「明治啓蒙思想家の中国理解— 西周と福沢諭吉」(『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所)

- 「西周と軍人勅諭」(『日本のアイデンティティをく象徴するもの』、国際日本学研究所叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所)

- La philosophie japonaise (共著、Vrin, 2013)

- 『風土 (Fudo) から江戸東京へ』(編著、法政大学出版局、2020年3月)

【Outline and objectives】

The Japanese are said to love Japanese theory. In addition, Japanese theory often goes to the assertion that the Japanese are special and the world does not understand them. In the class, we are going to take "Structure of" Amae "" from Doi Takeo as a representative Japanese theory by the Japanese, and try to interpret it critically. In the autumn semester we shall cover the second part of the book.

HIS500B7

史料から読む琉球とアジア I

得能 壽美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、琉球史料の講読をしつつ考察する。前近代琉球を考えるためには、その歴史的環境から、中国・日本の史料、当然ながら琉球の史料にあたらなくてはならない。史料講読は琉球史料を中心に進める。

【到達目標】

琉球史料を中心に史料講読を進め、一定程度の理解と読解能力を身に付け、歴史学の方法により総合的・実証的に考える眼を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は琉球史の概括的な理解と、史料の全体的な把握にあたる。後半は、琉球史料から、その解読方法を学びつつ、東アジアにおける関係史をみる。基本的な方法論を身につけようとしていきたい。史料講読に際して、習熟度によっては担当部分を決めて報告を求め、講評や解説、論文指導までできればと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の紹介と、琉球・中国・日本の関係史を概括的にみる。
2	日本史と琉球史の史料論	日本史研究と琉球史研究における史料論と、その相違。
3	古琉球期史料にみる対外関係（中国・日本古代史料）	古代の琉球をめぐる中国と日本の史料について
4	古琉球史料にみる対外関係（歴代宝案・朝鮮王朝実録・琉球史料）	中世の琉球をめぐる中国・朝鮮・琉球の史料について
5	近世琉球史料にみる対外関係（島津関係史料）	1609年以降の島津による琉球統治関係史料について
6	近世琉球史料にみる対外関係（琉球史料）	いわゆる日中両属に関する琉球史料について
7	史料講読 中山世譜・中山世鑑	史料講読。首里王府編纂史料にみる近世琉球のありかた。
8	史料講読 羽地仕置	史料講読。羽地朝秀の施策にみる琉球の立場と政治的転換
9	史料講読 羽地仕置	史料講読。近世琉球の成立
10	史料講読 御教条	史料講読。蔡温の琉球史の認識と立場
11	史料講読 御教条	史料講読。近世琉球に生きた人々
12	史料講読 御教条	史料講読。琉球における儒教的支配の成立
13	史料講読 伊江親方日々記	史料講読。対島津関係
14	史料講読 伊江親方日々記	史料講読。琉球内政関係

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体的に下記で示す参考書を読む。史料講読については、事前に複写を配布するので、予習をする。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。史料等を配布する。

【参考書】

『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫 岩波ジュニア新書
『アジアのなかの琉球王国』高良倉吉 吉川弘文館（歴史文化ライブラリー 47）
『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『沖縄入門－アジアをつなぐ海域構想』浜下武志 ちくま新書

【成績評価の方法と基準】

出席点 40 % 平常点 30 % レポート 30 %
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極的にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認し、さらに史料による考察を加えてほしい。

【学生の意見等からの気づき】

多様な研究、あるいは新しい研究分野の創出につながるよう、最新の研究成果をとりこむ。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 琉球史 近世史

＜研究テーマ＞ 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論

＜主要研究業績＞

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林 2007 年 316 頁）

「中山政権と宮古・八重山」（財団法人沖縄県文化振興会史料編集室『沖縄県史 各論編第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会 2010 年 240～259 頁）

「移動するナマコと変化するその役割－近世八重山ナマコの行方－」『琉球・沖縄研究』3（早稲田大学琉球・沖縄研究所 2010 年 115～140 頁）

「明和大津波の被害概況と復旧・復興」『最新科学が明かす明和大津波』南山舎 2020 年

【Outline and objectives】

The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.

HIS500B7

史料から読む琉球とアジアⅡ

得能 壽美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、具体的な論考で使用した史料を確認しつつ考察を進める。論文作成のための課題設定、史料調査の方法、史料の所在なども、具体的事例をもとに講義する。

【到達目標】

史料について理解を身に着ける。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、学生自身の研究テーマにもそくして、新たな研究テーマの創成を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

具体的な論考に使用した史料を講読しつつ、近世琉球の生産と税制、物流を、具体的な産物を取りあげて、東アジアにおよぶ広がりを見る。史料講読から新たな研究テーマを創成し、その報告を求め、講評や解説、論文指導にまでおよびたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の概要と、琉球・中国・日本の関係史を概説する
2	近世琉球産品の由来と島産化Ⅰ	東アジアにおける技術などの移動
3	近世琉球産品の由来と島産化Ⅱ	琉球国内の島産化の展開と商品流通
4	ナマコⅠ	琉球関係史料にみる生産と上納
5	ナマコⅡ	薩摩・幕府への献上と中国との貿易
6	海人草	近世琉球の専売制、近現代における生産・流通
7	上布	人頭税と八重山上布
8	木綿Ⅰ	伝搬と栽培の広がり
9	木綿Ⅱ	近世における利用と商品としての展開
10	ジュゴン	近世の税制・捕獲・信仰
11	イノシシ	近世における害獣駆除と利用
12	牛馬	近世の利用と規制
13	アダン	近世における上納と民衆生活での利用
14	パインナップル	近代の導入事情と展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体的に下記で示す参考書を読む。

【テキスト（教科書）】

「移動するナマコと変化するその役割」（得能、『琉球・沖縄研究』第 3 号）など、それぞれのテーマに関連した論文のコピーを配布する。

【参考書】

『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『琉球・沖縄史の世界』豊見山和行（編） 吉川弘文館（日本の同時代史 18）
『近世八重山の民衆生活史』得能壽美 榕樹書林

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %

毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極にあたること、史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、それぞれの研究テーマに即しつつ、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認する。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方を解説する。多様な研究、新しい研究分野を考えるために、最新の研究成果をみる。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクター

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 琉球史 近世史

＜研究テーマ＞ 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論

＜主要研究業績＞

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』単著（榕樹書林 2007 年 316 頁）

『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）

『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（石垣市教育委員会 2015）
「明和大津波の被害概要と復旧・復興」『最新科学が明かす明和大津波』南山舎 2020

【Outline and objectives】

The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.

HIS500B7

戦後沖縄と対外関係Ⅰ

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

沖縄戦（1945 年）から四分の三世紀が、そして沖縄の「本土復帰」（1972 年）から半世紀ちかくがたつ。沖縄に対する米国の軍事植民地意識、そして日本本土の構造的差別は消え去っていないむしろ、2015 年後半からの、日本政府による名護市辺野古への米海兵隊普天間飛行場移設強行のようすをみていると、そうした差別は、より執拗になってさえるように思われる。

本授業では、沖縄・日本本土・米国の、ときに引き合い、ときに反撥し合う力学が、戦後沖縄の形成にどのような影響を及ぼしたかを解き明かす糸口を学生とともに探りたい。「戦後」とはさしあたり、プロローグとしての沖縄戦から冷戦期までを扱う。

【到達目標】

学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するトピックを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

第 2 回目以降、授業のはじめに、前回授業で教員が課したレポート等の課題に対する個々の受講生の解答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	なぜ沖縄戦は闘かわれたか	日米両国の戦略における沖縄の位置づけを探る。
2	恩賜の民権／恢復民権	沖縄と本土における初期占領政策を比較研究する。
3	沖縄とマッカーサーの「平和」憲法	制憲過程のウラにある「沖縄要塞化」構想について考察する。
4	昭和天皇「沖縄メッセージ」の深淵	昭和天皇にとって「沖縄」とは何であり、何でなかったのかを考える。
5	講和問題のなかの沖縄	対日講和をめぐって噴出する帰属論の位相を整理する。
6	「潜在主権」論	対日講和条約第 3 条の前提をなす「潜在主権」とは誰が何のために発案したのか検討する。
7	海兵隊と核の島の形成	冷戦期を象徴する「海兵隊と核の島」＝沖縄は、どのように形成されたのか跡づける。
8	軍用地問題の生起と展開	「土地を守る四原則」（立法院請願決議）を軸に軍用地問題とは何であったのか考えてみる。
9	沖縄の「赤狩り」	極東の軍事拠点沖縄で起こった人民党非合法化の動きは、沖縄戦後史ばかりでなく冷戦史の文脈でいかなる意味をもつのか検討する。

10	南と北の領土問題	日ソ国交回復交渉に対して米国は、「日本が二島返還でソ連に譲歩するなら米国は沖縄をもらう」と干渉した。この北と南の領土問題の形成過程を調べてみる。
11	沖縄と安保改定	沖縄という視点から 60 年安保改定を捉えなおす。
12	沖縄返還交渉の公約・違約・密約	外務省による「いわゆる密約」調査の結果も踏まえながら、沖縄返還交渉を検証してみる。
13	沖縄が怒った日	1970 年 12 月におこったコザ騒動とは戦後沖縄にとって何であったのか考える。
14	「安保」から「同盟」への変容と沖縄	「安保」が「同盟」へと変容するなか、日本の役割も基地提供に「行動」や「思いやり予算」を伴うものへと変わっていくが、沖縄については何が変わり、何が変わらなかったのか。この問題を検討してみたい。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を「粛々と、強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じるのが望ましい。

「戦後沖縄と対外関係Ⅱ」をも履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】

古典のなかの古典といえますが、さしあたり手ごろな通史として中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波書店、1976 年）、および新崎『沖縄現代史』（岩波書店、2005 年）、ならびに宮里政玄ほか編著『戦後沖縄の政治と法— 1945-72 年』（東京大学出版会、1975 年）を、また、沖縄をめぐる日米関係史について書かれた研究として、河野康子『沖縄返還をめぐる政治と外交—日米関係史の文脈』（東京大学出版会、1994 年）、宮里『日米関係と沖縄— 1945-1972』（岩波書店、2000 年）、沖縄国際大学公開講座委員会編集・発行『基地をめぐる法と政治』（2006 年）、我部政明『戦後日米関係と安全保障』（吉川弘文館、2007 年）、平良好利『戦後沖縄と米軍基地 「受容」と「拒絶」のはざま— 1945-1972 年』（法政大学出版局、2012 年）、および中島琢磨『沖縄返還と日米安保体制』（有斐閣、2012 年）を挙げておきます。近年の示唆にとむ研究成果として、鳥山淳『沖縄基地社会の起源と相克 1945-1956』（勁草書房、2013 年）および大野光明『沖縄闘争の時代 1960 / 70』（人文書院、2014 年）ならびに櫻澤 誠『沖縄現代史—米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015 年）、さらに野添文彬『沖縄返還後の日米安保—米軍基地をめぐる相克』吉川弘文館、2016 年もぜひ一読されたい。

【参考書】

拙著『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島』（みすず書房、2008 年）。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100 %）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムやオンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2021 年 2 月 9 日）

新型コロナ禍により、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米関係史、日本政治外交史

<研究テーマ> 日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史

<主要研究業績および刊行物>

- ・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999 年。
- ・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008 年（第 30 回沖縄協会・沖縄研究奨励賞 [社会科学部門] 受賞）。
- ・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017 年。
- ・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第 1 回配本分、全 7 巻）現代史料出版、2017 年。
- ・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に 2013 年 6 月号より 2015 年 8 月まで不定期連載）。
- ・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003 年（共訳）。
- ・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010 年（監訳）。
- ・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ「パックス・アメリカナ」か「パックス・アジア」か』NHK 出版、2014 年（共訳）。
- ・『占領期年表 1945-1952 年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015 年（監修）。

近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する「国民感情」と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950 年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしたことなく、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授ならびに河野康子・法政大学名誉教授による監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。

【Outline and objectives】

Seventy years have passed from the battle in Okinawa, and nearly fifty years from the reversion of Okinawa. Okinawa still seems to be under U.S. military colonialism. It suffers structural discrimination by the people of Japan proper as well. In post-war Okinawa and foreign relations 1, we consider and discuss the dynamism that formed post-war Okinawa. In this class, post-war means the period from the battle in Okinawa to the end of the cold war

HIS500B7

戦後沖縄と対外関係Ⅱ

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまで沖縄には在日米軍専用基地が著しく偏在してきた。その基地には米軍が排他的管理権を行使し、さらに、基地の外の軍用機事故等に対する捜査・検分から日本側が排除されることも少なくない。また、1972 年の施政権返還まで、米軍構成員・軍属・それらの家族に琉球民裁判所の裁判権は及ばず、施政権返還後も日本側の裁判権行使はままならない。本授業で学生は、これらの事柄に象徴される「戦後」沖縄が負わされた日米地位協定問題をめぐる日米琉関係の歴史を考察することになる。

【到達目標】

学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するテーマを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

第 2 回目以降、授業のはじめに、前回授業で教員が課したレポート等の課題に対する個々の受講生の解答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	対象	「軍人・軍属・それらの家族」をめぐる琉・米・日関係について考察し、議論する。
第 2 回	基地設定条項の形成	全土基地方式の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 3 回	基地設定をめぐる諸問題	全土基地方式の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 4 回	管理権条項の形成	排他的管理権の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 5 回	管理権をめぐる諸問題	排他的管理権の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 6 回	受け入れ国法令	受け入れ国国内法令の適用をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 7 回	裁判権条項の形成	刑事裁判権規定（第 17 条）の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 8 回	日本側一次裁判権放棄密約	受け入れ国の一次裁判権放棄取り決めをめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 9 回	被疑者の公訴前身柄引き渡し問題	被疑者の身柄引き渡しをめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。

第 10 回	負担分担条項の形成	「思いやり予算」の成立をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 11 回	「思いやり予算」をめぐる政治過程	「思いやり予算」の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 12 回	環境	環境保全規定／補足協定をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 13 回	合議組織	日米合同委員会をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 14 回	改定	地位協定改定問題をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を「肅々と、強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じる事が望ましい。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

さしあたり、近年に刊行された以下の文献を挙げておく。

拙著『日米地位協定 その歴史と現在』みすず書房、2017 年。

山本章子『日米地位協定 在日米軍と「同盟」の 70 年』中央公論新社、2019 年。

信夫隆司『米軍基地権と日米密約 奄美・小笠原・沖縄返還を通して』岩波書店、2019 年。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムやオンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2021 年 2 月 9 日）

新型コロナ禍により、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【220】

「戦後沖縄と対外関係Ⅰ」のシラバスを参照されたい。

【Outline and objectives】

United States military bases in Japan unevenly exist in Okinawa prefecture. U.S. armed forces exercise exclusive rights over them. And the Japanese authorities often can not exercise the right of search or inspection with respect to the accidents of U.S. military aircraft. Before the reversion of Okinawa, Okinawan court could not have criminal jurisdiction over the members of U. S. armed forces, civilian component and their dependents. Even after the reversion, Japanese court often cannot exercise the criminal jurisdiction over them. In post-war Okinawa and foreign relations 2, we consider the U.S.-Japan Status of Forces Agreement (SOFA or Chii-Kyotei) providing the conditions of the stationing of the U.S. military forces. And focusing SOFA problems, we discuss the history of the U.S.-Japan-Ryukyu/Okinawa relations.

ART500B7

仏教思想と仏教美術Ⅰ

高橋 悠介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の中世には、聖徳太子関連寺院を中心に、太子の伝記が連綿として編まれた。こうした太子伝には、聖徳太子をめぐる伝承のみならず、仏教教説や寺院における注釈学、太子関連の諸寺院の動向など、様々な背景がうかがえる。また、聖徳太子の伝記は絵画化されて絵解きが行われ、特徴的な太子像も造像された。ここでは、後世への影響力の大きかった『聖徳太子伝暦』と、鎌倉後期の『正法輪蔵（聖法輪蔵）』という二つの太子伝から、特徴的な場面を取り上げて、読み比べつつ、これらと関連の深い太子絵伝や太子像などの造形作品について検討したい。

【到達目標】

- ・図像資料とその背景にある文献資料を、複合的に読解する技術を身につける。
- ・寺院圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・日本の寺院における学問についての基礎知識を身に付け、中世の聖徳太子信仰をはじめ、日本の仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初は、聖徳太子伝の展開に関する概要と太子関連の造形作品、講読にあたっての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義の概要・進め方について説明。
第 2 回	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本について講義。
第 3 回	太子絵伝の展開	聖徳太子の伝記の造形化（彫刻・絵画）について講義。
第 4 回	太子十六歳条	用明天皇の葬送・六角堂建立等の記事を講読し、その造形を検討。
第 5 回	太子十七歳条	四天王寺の瓦を造る等の記事を講読し、その造形を検討。
第 6 回	太子十八歳条	牛飼に穀倉の鍵を与える等の記事を講読し、その造形を検討。
第 7 回	太子十九歳条	戴冠等の記事を講読し、その造形を検討。
第 8 回	太子二十一歳条	猪の献上・崇峻天皇暗殺等の記事を講読し、その造形を検討。
第 9 回	太子二十二歳条	推古天皇即位等の記事を講読し、その造形を検討。
第 10 回	太子二十四歳条	淡路国に霊木漂着等の記事を講読し、その造形を検討。
第 11 回	太子二十五歳条	法華経の落字・法興寺落慶等の記事を講読し、その造形を検討。
第 12 回	太子二十六歳条	百濟より阿佐太子来朝等の記事を講読し、その造形を検討。
第 13 回	太子二十七歳条（一）	黒駒で富士山に登る等の記事を講読し、その造形を検討。

第 14 回 太子二十七歳条（二） 膳大娘との婚礼・新羅からの孔雀
献上等の記事を講読し、その造形
を検討。及び最後のまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。指定した講
読文献の当該記事をよく読んで理解すると共に、関連する複数の造
形を見て比較検討すること。また、授業中に言及する参考書を読む
こと。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

・『東大寺図書館蔵文明十六年書写『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜
楓社、1985 年）
・『日本庶民文化史料集成』第二巻（三一書房、1974 年）
・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『中世聖徳太子伝集成』（勉誠
出版、2005 年）
・『日本の美術 442 中世の童子形』（至文堂 2003 年）
・図録『聖徳太子展』（NHK・NHK プロモーション、2001 年）
その他、授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表 5 0 %、平常点 5 0 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学
＜研究テーマ＞中世仏教文学・芸能・寺院資料論
＜主要研究業績＞
・『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014 年）
・「荒神の図像について―如来荒神を中心に―」（仏教美術論集第二
巻『図像学Ⅰ―イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012
年 5 月）
・「律院称名寺と聖徳太子伝―釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研
究』52 号、2017 年 9 月）

【Outline and objectives】

A Study of the biography and image of Prince Shotoku.

ART500B7

仏教思想と仏教美術Ⅱ

高橋 悠介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代を代表する絵巻の傑作『春日権現験記絵』の記事と絵を検
討する。この絵巻に収められた春日権現（春日大明神）の霊験譚に
は、貴顕や南都僧の春日信仰、鎌倉時代の南都の宗教環境、南都僧
の教学や儀礼、神仏習合など様々な背景がうかがえる。これまでに、
美術史・日本史・日本文学など諸方面で積み重ねられてきた研究史
をふまえ、『春日権現験記絵』を講読する。

【到達目標】

・寺社圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技
術を習得する。
・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
・『春日権現験記絵』を通して、日本の神仏習合や仏教文化に関する
理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
た能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初は、『春日権現験記絵』と南都の寺社文化についての基本的な知
識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講
者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったこと
も、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り
上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	講義の概要・進め方について説 明。
第 2 回	春日社と春日曼荼羅	『春日権現験記絵』を講読する上 での基礎知識として、春日社の沿 革と春日曼荼羅について講義。
第 3 回	『春日権現験記絵』と 貞慶の唱導資料	『春日権現験記絵』の成立をめぐ る研究史を整理し、特に貞慶とそ の周辺による春日権現をめぐる霊 験の集録との関係について講義。
第 4 回	『春日権現験記絵』巻 一（一）	巻一の序にあたる記事の講読と討 議。
第 5 回	『春日権現験記絵』巻 一（二）	巻一の承平託宣事・竹林殿事の記 事と絵の検討と討議。
第 6 回	『春日権現験記絵』巻 一（三）	巻一の金峯山御幸事の記事と絵の 検討と討議。
第 7 回	『春日権現験記絵』巻 二（一）	巻二の寛治御幸事・永久衆都闘乱 事の記事と絵の検討と討議。
第 8 回	『春日権現験記絵』巻 二（二）	巻二の二条関白事の記事と絵の検 討と討議。
第 9 回	『春日権現験記絵』巻 三（一）	巻三の堀川左府事・鹿嶋和歌事の 記事と絵の検討と討議。
第 10 回	『春日権現験記絵』巻 三（二）	巻三の信経事の記事と絵の検討と 討議。
第 11 回	『春日権現験記絵』巻 四（一）	巻四の天狗参入東三条事の記事と 絵の検討と討議。
第 12 回	『春日権現験記絵』巻 四（二）	巻四の忠実春日詣時神託事の記事 と絵の検討と討議。
第 13 回	『春日権現験記絵』巻 四（三）	巻四の普賢寺撰政事・三条内府事 の記事と絵の検討と討議。

第14回 『春日権現験記絵』巻四の後徳大寺左府事の記事と絵
四（四）の検討と討議。及び最後のまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。『春日権現験記絵』の当該記事をその場面の絵と共によく読み、関連説話を含めて利解すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

藤田経世『校刊美術史料 寺院篇上』（中央公論美術出版、1972年）
『続日本の絵巻 春日権現験記絵』（中央公論社、1991年）
神戸説話研究会編『春日権現験記絵注解』（和泉書院、2005年）

【成績評価の方法と基準】

発表50%、平常点（出席状況等）50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

＜研究テーマ＞中世仏教文学・芸能・寺院資料論

＜主要研究業績＞

・「称名寺聖教中の春日関係資料と『春日権現験記絵』」（『説話文学研究』46、2011年7月）

・「貞慶をめぐる説話と律院―「異砂記」・「伯行光春日霊験譚」」（『説話文学研究』55、2020年9月）

・「正楽寺蔵・荒神曼荼羅について―蔵王権現と習合した忿怒相の荒神像と諸尊」（『寺院文献資料学の新展開 第五巻 中四国諸寺院Ⅰ』臨川書店、2020年3月）

【Outline and objectives】

A Study of the "Kasuga Gongen Genkie" (miraculous stories of Kasuga deity picture scroll).

PRI500B7

データ分析法Ⅰ

田中 邦佳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて分析し、その結果を可視化（グラフ化）して示す必要がある。本授業では演習を通じ、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か、データ化や可視化における注意点について学ぶ。

【到達目標】

- (1) Excel や R を使用して基本的なデータの処理ができるようになる。
- (2) Excel や R を使用してデータの適切なグラフ化ができるようになる。
- (3) データの種類に応じた適切な分析・可視化ができるようになる。
- (4) 上記の3つの項目を踏まえて、参加者各自が関心を持つ研究テーマで用いられている手法の利点を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、Excel を用いたデータ処理や作図する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	データの入力	Excel を使いデータの入力、注意点について
第3回	データの代表値の提示	平均値
第4回	平均値以外のデータの代表値の提示	中央値・最頻値
第5回	データのバラツキの提示	標準偏差
第6回	データの集計	集計結果のまとめ方
第7回	グラフを用いたデータの可視化	棒グラフ・折れ線グラフ
第8回	データの頻度の可視化	ヒストグラム
第9回	複数のタイプのデータの可視化	複数の要素が含まれたグラフ
第10回	複数のデータを扱うタイプのデータの可視化	散布図
第11回	データの量が多い場合の分析	大きなデータの分析
第12回	データ分析の結果の言葉での説明	データ分析の結果の文章化
第13回	研究テーマに合った分析と可視化	適切な分析手法の選択
第14回	総合演習	データ分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析・作図課題を行う。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

40%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

具体的なデータを用いた分析演習の時間をより長く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

初回の授業は対面形式で行う予定です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basic approach to summarizing data and methods for visualizing data.

PRI500B7

データ分析法Ⅱ

田中 邦佳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて統計学的分析を行う必要がある。本授業では演習を通じ、いくつかの基礎的な統計的手法の仕組みを知り、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か学ぶ。

【到達目標】

- (1) 基本的な統計手法の仕組みについて理解する。
- (2) 数値の意味を理解する。
- (3) テーマに応じて適切な統計的分析ができるようになる。
- (4) 上記の 3 つの項目を踏まえて、参加者各自の研究計画でどのような手法を用いるのが適切か提案できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、Excel などを用いたデータ処理や統計に関する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	授業の進め方の説明
第 2 回	記述統計と推測統計	記述統計と推測統計の違い
第 3 回	記述統計で用いた数値	平均・標準偏差
第 4 回	データのバラツキ	正規分布・標準偏差
第 5 回	信頼区間	信頼区間
第 6 回	カイ 2 乗検定	カイ 2 乗検定
第 7 回	カイ 2 乗検定の演習	カイ 2 乗検定の分析演習
第 8 回	t 検定（対応あり）	t 検定（対応あり）
第 9 回	t 検定（対応なし）	t 検定（対応なし）
第 10 回	t 検定の演習	t 検定の分析演習
第 11 回	2 要因の分散分析	2 要因の分散分析
第 12 回	多重比較と交互作用	多重比較と交互作用
第 13 回	言葉での報告	統計結果の文章での報告
第 14 回	総合演習	データの統計的分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析を行う。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

40%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

分析課題を行う時間をより多く設定します。

【【担当教員の専門分野等】】

＜専門領域＞

第二言語習得

＜研究テーマ＞

第二言語の音韻習得やリーディングについて

＜主要研究業績＞

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basic statistical methods.

LIT500B7

サブカルチャー論 I

倉本 さおり

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のポップカルチャーはインターネットや SNS をはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。この授業では漫画やアニメ、ライトノベル、映画、ドラマ、2.5 次元舞台、アイドルなどのポップカルチャーを中心に、具体的な作品やコンテンツを取りあげ批評的に鑑賞するスタイルを採用します。さまざまな角度から積極的に楽しみつつ、ときに批判を交えた分析を行うことで、思考停止に陥らず、流動的な現実や個々の社会そのものの在り方を主体的に捉えるための視点や方法を学んでいきます。

【到達目標】

- ・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
- ・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べるようになる
- ・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる。
- ・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

履修生の人数と各自の希望を考慮したうえで、対面授業とオンライン授業を併用した講義を行う予定です。
講義では画像や映像サンプルをふんだんに用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。
授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したのち、各自「サブカル歴」をまじえつつ自己紹介をしてもらいます。これまで自分がどんな文化の中で育ってきたのか、どんなジャンルやコンテンツに興味があるのか改めて意識することで、サブカルチャーないしポップカルチャーというものの存在がどのような手続を経て人びとの自己形成に関わっていくのか主体的に確認していきます。
第 2 回	メディアとポップカルチャーの現況	『鬼滅の刃』や『呪術廻戦』といった最新のメガコンテンツをイントロダクションに、「サブカルチャー」と呼ばれてきたものの変遷、そして複数のメディアと連動して成長していく現代ポップカルチャーの特徴について概説します。
第 3 回	ポップカルチャーの諸相①	2013 年度文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞した雲田はるこ『昭和元禄落語心中』を教材に、漫画・アニメ化作品それぞれで描かれる落語シーンの演出の違いに着目しつつ、各ジャンルの表現形態の特徴についてディスカッションしながら立体的に検討していきます。
第 4 回	ポップカルチャーの諸相②	『昭和元禄落語心中』に登場する落語が落語家によって実際に上演されている様子を「語り」ないし「語り手」という枠組みに注目しながら鑑賞します。その後、前回の授業を踏まえ、「枠組み」や「場」の形成というものがポップカルチャーの中で果たす意味について考えます。

第 5 回	物語、キャラクター、世界観①	東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生—動物化するポストモダン 2』（2008 年）を読み、「データベース」理論の内幕について考え、日本のゼロ年代において大衆文化のキャラクターや世界観、物語がどのように捉えられていたのかについて考えます。
第 6 回	物語、キャラクター、世界観②	データベース理論について考え、現代の文芸批評の理論から捉え直します。ジュリア・クリステヴァのインターテクスチュアリティのほか、フーコー、デリダ以降の批評理論から考えたときに、どう位置づけられるのかを批判的に考えていきます。
第 7 回	ミニレポート発表会	これまでの授業を踏まえ、自分が興味のあるコンテンツから研究対象としてひとつ選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。その後クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第 8 回	テキストとコンテキスト①	日本のアニメーション映画『天気の子』（新海誠監督）と韓国の映画『パラサイト』（ボン・ジュノ監督）における〈水〉ないし〈豪雨〉の表象の差異に着目し、同じ言葉やモチーフが異なる文脈に置かれることでまったく別の表象を伴ったたちのぼる事例について検討します。
第 9 回	テキストとコンテキスト②	『天気の子』『パラサイト』を実際に鑑賞した上で、前回の授業を踏まえてディスカッションを行い、社会背景とポップカルチャーにおける表象の相関について考察を深めていきます。
第 10 回	解釈とアダプテーション①	田辺聖子の短編小説「ジョゼと虎と魚たち」（1985 年）を読んだうえで、犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』（2003 年）を鑑賞し、原作となったテキストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されたのか分析していきます。
第 11 回	解釈とアダプテーション②	前回の授業を踏まえ、タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』（2020 年）を鑑賞し、どのようなプロセスを経て翻案に至ったのか、時代背景や社会環境の変化も併せてディスカッションしながら考察していきます。
第 12 回	メディア文化と再帰性①	読者アンケートが作品の掲載順や内容にまで影響を及ぼす「週刊少年ジャンプ」というメディアの特徴を取り上げ、メディアとコンテンツとコミュニティの流動的な関係性に焦点を当てていきます。
第 13 回	メディア文化と再帰性②	「異世界転生もの」や「悪役令嬢もの」等、前回の授業テーマに基づき選んだ小説投稿サイト出身の作品（いわゆる「なろう系」小説）を分析してディスカッションし、メディアがコンテンツを配信するだけでなく、コミュニティを形成することによってコンテンツを特徴づけていく状況について考えます。
第 14 回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

※無理にそろえる必要はありません

- ・橋本陽介『ナラトロジー入門——プロップからジュネットまでの物語論』（水声社）
- ・東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
- ・三原芳秋、渡邊英理、鶴戸聡＝編著『クリティカル・ワード 文学理論 読み方を学び文学と出会いなおす』（フィルムアート社）
- ・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 90 年代保守言説のメディア文化』（青弓社）
- ・堀あきこ、守如子＝編『BL の教科書』（有斐閣）
- ・永田大輔、松永伸太郎＝編『アニメの社会学—アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』（ナカニシヤ出版）

・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く——「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度 20 %、授業内で執筆・提出する課題 30 %、期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【担当教員の専門分野等】

国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。共同通信文芸時評「デザインする文学」、文藝「はばたけ！ くらもと偏愛編集室」、週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」連載中。他、小説トリッパー、小説すばる、ダ・ヴィンチなど。『文藝界』新人小説月評（2018）、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」（2019）。TBS ラジオ「文化系トークラジオ Life」サブパーソナリティ。

【Outline and objectives】

Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you will critically appreciate and discuss pop culture content such as manga, animation, light novels, movies, TV dramas, 2.5dimensional musicals, and idols. By identifying and analyzing problems from various angles, you will learn perspectives and methods for actively grasping dynamic reality and social situations without stopping thinking.

LIT500B7

サブカルチャー論Ⅱ

倉本 さおり

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のポップカルチャーはインターネットや SNS をはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。後期の授業では「ジェンダー化されたマンガ・コンテンツ」としての側面を持つ『週刊少年ジャンプ』に注目し、現代社会の論点をあぶりだすと共に、ポップカルチャー批評が豊かな未来へとつながるような提言を模索していきます。

【到達目標】

- ・授業中に学んだジェンダーに関わる視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
- ・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べるができるようになる
- ・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる
- ・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

(2021 年度はオンライン授業の実施に伴い、適宜内容を変更していく可能性があります。変更は学習支援システム等で提示します)

履修生の人数と各自の希望を考慮したうえで、対面授業とオンライン授業を併用した講義を行う予定です。

講義では画像や映像サンプルをふんだんに用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえてポップカルチャーとジェンダーをめぐる諸問題について学んでいきます。

授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィードワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期		
回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介と授業の進め方についての説明。また、ジェンダーをめぐるいくつかの論題を紹介し、サブカルチャーないしポップカルチャーと呼ばれているものから社会規範や人びとの自己認識をかたちづくるプロセスを読み解くための有効な視点や手法について考えていきます。
第 2 回	マンガ雑誌とジェンダー	今なお日本で最も発行部数の多い雑誌メディアであり、かつ「(区分上)ジェンダー化されたコミック雑誌」という複合的な性格を有する『週刊少年ジャンプ』の今日に至るまでの位置づけと変化について、国内外のメディアにおける言及のされ方を参照しつつ社会的な文脈から検証します。
第 3 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ①（バトル形式と物語の展開）	週間発行部数 653 万部を記録し黄金期と呼ばれていた 1990 年代の『週刊少年ジャンプ』掲載作品（鳥山明『ドラゴンボール』、富樫義博『幽遊白書』、井上雄彦『SLUM DUNK』等）を取り上げ、その展開と結末の様相をめぐって噴出した言説から、当時の日本の「少年マンガ」の像がどのような論点を社会に提示したのか考えていきます。
第 4 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ②（ヒーローの相対化）	2014 年から『週刊少年ジャンプ』誌上で連載中の堀越耕平『僕のヒーローアカデミア』におけるヒーローとヴィラン（≒敵役）の描き方に着目し、いくつかの論文を参照しながら、近年の「少年マンガ」がどのような文脈で社会に受容されているか検討していきます。

第 5 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ③（チーム化とロジック化）	2013 年から連載が開始された葦原大介『ワールドトリガー』の構造に着目し、近年の「少年マンガ」が 90 年代に提示された〈バトル〉をめぐる論点をどのような形で更新しようと試みてきたか考えてみます。
第 6 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ④（勝者と敗者の解体）	2012 年から 2020 年にかけて連載され、2.5 次元ミュージカルという分野でも大きな注目を浴びている古舘春一の『ハイキュー!!』368 話「なにもの」にスポットを当て、群像劇としてのスポーツマンガの影響と可能性について多角的に検証していきます。
第 7 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツの主人公／主要キャラクターを取り上げ、その動機付けと物語の展開について、オリエンテーションで紹介した有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈成長〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第 8 回	中間レポート発表会	自分が興味のあるコンテンツや派生したメディアのトピックから期末レポートに向けた論点を見つ出し、簡単な発表を行っていただきます。
第 9 回	「少年マンガ」とジェンダーロール①（テキストとしてのキャラクター）	1984 年から 95 年にかけて連載された鳥山明『ドラゴンボール』における「役割語」の様相に着目し、テキストとしてのキャラクターが形成されるプロセスについて検証していきます。
第 10 回	「少年マンガ」とジェンダーロール②（「少年マンガ」における女性性）	前回の授業の踏まえつつ、2018 年から連載されている芥見下々『呪術廻戦』における「役割語」の様相に着目することで、作中の女性キャラクターがどのようなジェンダーロールを内面化し、あるいはそれを乗り越えようとしているか考察していきます。
第 11 回	「少年マンガ」とジェンダーロール③（ヒーローとヒロイン）	2016 年から 2020 年まで連載されていた白井カイウ原作・出水ぽすか作画『約束のネバーランド』の主人公・エマの造型を逆説的に参照することで、従来の「少年マンガ」の女性キャラクターたちがどんな磁場のもとに登場していたか検証していきます。
第 12 回	「少年マンガ」とジェンダーロール④（ラブコメの類型と逸脱）	2017 年から 2021 年まで連載され、パラレルストーリーを採用することで議論を巻き起こした筒井大志『ぼくたちは勉強ができない』を中心に、「ラブコメ」と呼ばれるジャンルの読者の反応を参照しつつ、これまで「少年マンガ」の磁場においてジェンダー規範とロマンチック・ラブがどのように受容されてきたか考えていきます。
第 13 回	「少年マンガ」とジェンダーロール⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツを取り上げ、そのキャラクター造型や物語の構造について有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈ジェンダー〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第 14 回	まとめとフィードバック	期末レポートに向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定・発表し、互いにアドバイスをします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

※無理にそろえる必要はありません

- ・東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
- ・足立加勇『日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象』（現代書館）
- ・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 90 年代保守言説のメディア文化』（青弓社）
- ・金水聡『役割語研究の展開』（くろしお出版）
- ・河野真太郎『戦う姫、働く少女』（POSSE 叢書）
- ・押山美知子『少女マンガ ジェンダー表象論 〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（アルファベータブックス）
- ・堀あきこ、守如子＝編『BL の教科書』（有斐閣）

・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く——「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度 30 %、授業内で執筆・提出する課題 30 %、期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度からの授業担当のためフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【担当教員の専門分野等】

国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。共同通信文芸時評「デザインする文学」、文藝「はばたけ！くらもと偏愛編集室」、週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」連載中。他、小説トリッパー、小説すばる、ダ・ヴィンチなど。『文学界』新人小説月評 (2018)、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」(2019)。TBS ラジオ「文化系トークラジオ Life」スーパーパーソナリティ。

【Outline and objectives】

Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you focus on "Weekly Shonen Jump" one of the magazine media that has been characterized from the perspective of gender, and learn about issues facing modern society and suggestions for leading criticism of pop culture to a prosperous future.

BSP500B2

日本文学・国際日本学基礎演習

本塚 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本に関する各種の文献を読み、その内容を要約し、それに対する自分自身の見解を小論文形式の文章にまとめることで、日本研究に求められる基礎的能力を養う。

【到達目標】

- 1、日本の言語・文学・歴史・文化・社会等に関する論文を読み、その内容・着眼点・意義等について理解する。
- 2、文献の内容を要約する作業を通して、読解力と文章力を高める。
- 3、自分自身の見解を小論文形式でまとめ、学術論文に相応しい文章を書けるようにする。
- 4、修士論文執筆のための研究計画を具体的にし、文章化する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

原則として、対面形式での授業を行う予定です。

まず日本の各分野（言語・文学・歴史・文化・社会等）に関する論文を読みます。そして、その内容を 400 字程度の文章で要約し、自分自身の見解を 800 字程度の小論文にまとめます。さらに、履修者同士で小論文を読み合い、論文の内容について討論を行います。また、履修者は修士論文執筆に向けた研究計画書の作成を行います。なお、履修者が執筆した要約・小論文・研究計画書には、担当教員がすべて添削を行い、返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	国際日本学とは何か	国際日本学とは何かを解説し、その研究方法について説明する。
第 2 回	研究の進め方	大学院修士課程での研究の進め方について説明する。
第 3 回	法政大学図書館のデータベースの使用法	法政大学図書館で利用できるオンラインデータベースについて説明する。
第 4 回	オンラインデータベースの活用文献検索の方法	NDL オンラインほか、各種の文献検索ツールについて説明する。
第 5 回	研究倫理について	剽窃をはじめとする研究不正の概要を説明し、正しい研究のあり方を共有する。
第 6 回	課題論文 A1（日本語）	課題論文 A を読み、要約する。
第 7 回	課題論文 A2（日本語）	課題論文 A に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 8 回	課題論文 B1（日本文化）	課題論文 B を読み、要約する。
第 9 回	課題論文 B2（日本文化）	課題論文 B に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 10 回	課題論文 C1（日本社会）	課題論文 C を読み、要約する。
第 11 回	課題論文 C2（日本社会）	課題論文 C に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 12 回	研究計画の検討 1	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。
第 13 回	研究計画の検討 2	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。

第 14 回 研究計画の発表 履修者による研究計画の発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
宿題として作文を課す場合があります。また、第 12 回（履修者の研究計画の検討）までに、各自で A4 用紙 3 枚以上の研究計画書を準備する必要があります。

【テキスト（教科書）】

プリントを配付します。

【参考書】

授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物：60 %

研究計画書の内容：40 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

1. この科目は外国人留学生（なかでも中国 5 大学入試により入学した特別研修生）を主な対象とします。
2. 新型コロナウイルスに関する大学の方針変更等の事由により、上記の授業内容を変更する可能性があります。変更があった場合は、hoppii にて連絡いたします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本古代歌謡 日本音楽史

＜研究テーマ＞催馬楽

＜主要研究業績＞「催馬楽の成立に関する研究」（博士論文、2017）、「催馬楽「同音グループ」における「替え歌」生成の原理について——歌の詞章と旋律の関係を中心に」（『日本歌謡研究』59 号、2019 年）

【Outline and objectives】

Reading various literatures on Japan, summarizing the contents, and summarizing your own opinion on it in essay-style sentences, develop the basic abilities required for Japanese studies.

BSP500B2

日本文学・国際日本学論文作成基礎実習

金子 広幸

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

先行研究の閲覧から自らの研究課題の明確化を行い、研究活動における手法・手順・発表などを学ぶことができる。あわせてその過程から自らの日本語の問題点についての解決策を導くことができる。

【到達目標】

1. 研究の方向性を明確化することができる。具体的には、その研究課題について、何を明らかにするかを表明できるようになる。
2. 研究の手法・手順を学び、日本語の能力向上と併せて、進めることができるようになる。
3. 自らの研究課題などを研究言語である日本語で他者に明確に伝えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

9 月 17 日（金曜日）からクラスが行われる。

教育支援システム（グーグルクラスルームやズームなど）を使用する。

1. 研究課題・計画を精緻化し明文化する作業を共同で行う。
2. 先行研究の文献・研究手法についての模擬的な発表をする。
3. 必要なら学期中に「ミニ調査（パイロット調査）」を行い、方向性を探る材料とする。
4. 後半日程には、研究の進捗について成果の発表を行う。
5. 完成した論文がどのようなものになるのか想定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	参加者の研究の課題を確認、学期全体の進め方とスケジュールを決める。
第 2 回	私の研究課題 1	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する
第 3 回	私の研究課題 2	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する。
第 4 回	私の研究課題 3	【自らの日本語の問題点を探る】研究課題を振りかえって何が学べたかを総括する。 【発表時に必要な日本語について模索する】【参考文献の引用などの扱い方、発表レジュメの書式などを学ぶ】
第 5 回	研究手法 1	研究の過程で必要な手法について学ぶ。
第 6 回	研究手法 2	研究の過程で必要な手法について学ぶ。 【研究・調査時に必要な日本語について学ぶ。連絡のメールや、調査依頼など】
第 7 回	研究手法 3	研究の過程で必要な手法について学ぶ。【ミニ調査のガイダンス】
第 8 回	先行研究発表 1	各自が探した先行研究について発表する。 【要旨をまとめる時の日本語の使い方学ぶ】

- 第9回 先行研究発表2 各自が探した先行研究について発表する。
【スライドの作り方を学ぶ】
- 第10回 先行研究発表3 各自が探した先行研究について発表する。
【ミニ調査の進捗状況・テーマを確認する】
- 第11回 先行研究発表4 各自が探した先行研究について発表する。
【調査報告書への反映】
- 第12回 先行研究発表5 各自が探した先行研究について発表する。
【スライドの作り方を学ぶ】
- 第13回 成果発表1 本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。
【研究論文の目次を作ってみる】
これは最終課題となる。
- 第14回 成果発表2 本調査・ミニ調査の結果発表及び今後の課題を明確化する
【前週に発表が終わっているものは反映点を明らかにする】

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、1回の講義に対して、以下のことを行うにあたって、各2時間を標準とします。

1. 研究の方向性を明確にするために、常に文献を探し、クラスで簡単に発表できるよう要点をまとめておくこと。
2. クラスでは問題を共有し、積極的に手法等について工夫を重ねること。
3. 日本語能力については、とくにスタイルや表現の選択を中心とした、「研究時に必要な日本語」を究明すること。
4. 発表がある場合には必ず「スライド」と「レジュメ」をその都度提出・配付すること。
5. 日本語使用者としての自覚に基づいて、クラスでの課題を作成・提出すること。
6. 発表や課題提出の時などは、あらかじめクラスメイト同士相互にチェックすること。

【テキスト（教科書）】

研究課題明確化が主目的なので教科書は使用しません。

【参考書】

金子広幸（2014）『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』

<https://www.ask-books.com/978-4-87217-856-2/>

研究活動を行うにあたってはメールで依頼する、調査時の使用言語など、敬語が必要です。敬語に関する知識・練習が足りない人は自主学习として使用してください。

【成績評価の方法と基準】

提出物（研究計画書 発表時のレジュメ 他メール文例作成など日本語に関する宿題など）30 %

発表参加 20 %

発表完成度 20 %

日本語小試験（2回程度実施）10 %

平常点 20 %

成績評価は 100 点満点で採点。60 点以上が合格。

【学生の意見等からの気づき】

参加者の皆さんへ。

●毎回参加者の発表があり、それについての教師のコメントや参加者の参加討議でクラスが進みます。準備をお願いします。

●参加人数にもよりますが、1学期あたり、4回程度の発表があります。他にもスライドやレジュメの作成、先行研究を探すことなど、様々な課題があります。

●準備してきた資料を読むだけでは、いい発表にはなりません。準備をさらに充実させて、視覚資料を使ったり、わかりやすく研究テーマを説明できるよう、教師といっしょに方法を探しましょう。もちろん自宅で発表の練習を「十分に」してください。

●これからの学術の世界を考える時、国際学術会議などでのオンライン発表は重要な鍵となります。対面クラスになっても、このオンライン発表などにぜひチャレンジしてください。

【学生が準備すべき機器他】

● ZOOM・グーグルクラスルームなどが使える機器・ネット環境の準備をお願いします。

【その他の重要事項】

●日本語が不十分であることを恥じることはありませんが、しっかりと挑戦してください。

●オフィスワークの時間を2020年度から多くしました。以下の時間帯から「予約をとって」ZOOMで会いましょう。

「火曜日の14時から15時」

「金曜日の16時30分から17時30分」

連絡はメールをお願いします。

hiroyuki.kaneko.75@hosei.ac.jp

【担当者の研究背景】

<専門領域>日本語教育学 社会言語学 地理学 歴史学 日本文化

<研究テーマ>敬語など待遇表現 日本語クラス活動 地域日本語支援 留学生相談業務 日中言語比較

<主要研究業績>

①『初級が終わったら始めよう にほんご敬語トレーニング』（アスク 2006年）

②『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』（アスク 2014年）

③『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ 50』（アスク 2005年）

④「日中漢字音対照研究の成果と今後の教学応用への可能性の模索」基礎研究その1（『日中学院紀要教学』 2008年）

⑤「初級日本語クラスで使用する絵の要素の分析」（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文 2012年）

【担当者の出演番組】

日本語教育関係のNHKの番組「しごとのにほんご」に出演・監修しています。（2023年まで以下で視聴可能）

<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/easyjapaneseforwork/>

【Outline and objectives】

You can clarify your own research issues by browsing previous research, and learn methods, procedures, and presentation methods in your research activities. At the same time, you can draw solutions for your Japanese language usage problems from the process.

LIT500B7

近代の文芸批評 I

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第 2 回	坪内逍遙と二葉亭四迷	坪内逍遙「小説神髓」と二葉亭四迷「小説総論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	島崎藤村と自然主義の誕生	島崎藤村「千曲川のスケッチ」を読み、日本における自然主義文学のはじまりについて解説します。
第 4 回	北村透谷『透谷選集』を読む	本の文芸批評の出発点として、北村透谷『北村透谷選集』について発表してもらいます。
第 5 回	1910 年と石川啄木	日本の近代文学史における 1910 年の状況を解説し、石川啄木「時代閉塞の現状」を読みます。
第 6 回	佐藤春夫の評論文を読む	印象批評の例として、佐藤春夫の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	平塚らいてうと与謝野晶子	平塚らいてう「元始女性は太陽であつた」と与謝野晶子「母性偏重を排す」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	小林秀雄の出版	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	白樺派の登場と私小説の完成	生田長江「自然主義前派の跳梁」と武者小路実篤「新しき村に就て」を読み、その意義を理解します。

第 10 回 中野重治の批評

プロレタリア文学以降のもっとも重要な成果の一つである、中野重治の評論文について発表してもらいます。

第 11 回 谷崎潤一郎と芥川龍之介

谷崎潤一郎「饒舌録（抄）」と芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な（抄）」を読み、その意義を理解します。

第 12 回 平野謙の登場

戦後文学の代表的な文芸時評家である、平野謙の評論文について発表してもらいます。

第 13 回 中村光夫と 1945 年

中村光夫「『近代』への疑惑」を読み、1945 年の敗戦にいたるまでの日本文学の状況を概括します。戦後文学を問い直す視点を提示しつつつけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

第 14 回 江藤淳の出版

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇] および [昭和篇] (岩波文庫)

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができていているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B7

近代の文芸批評Ⅱ

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第 2 回	伊藤整と横光利一	伊藤整「新心理主義文学」と横光利一「純粋小説論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	萩原朔太郎と保田與重郎	萩原朔太郎「日本への回帰」と保田與重郎「文明開化の論理の終焉について」を読み、その意義を理解します。
第 4 回	吉本隆明の登場	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第 5 回	川端康成と三島由紀夫	敗戦による 1945 年の断絶に注意しつつ、川端康成「横光利一弔辞」と三島由紀夫「重症者の兇器」を読みます。
第 6 回	福田恒存の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、福田恒存の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	戦後文学の空間と戦後派の登場	敗戦後に登場した戦後派の作家たちについて概括し、戦後文学のあり方の特徴を理解します。
第 8 回	秋山駿の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、秋山駿の評論文について発表してもらいます。

第 9 回	第三の新人と戦後文学批判	戦後文学のあり方に抵抗するように登場した第三の新人について概括し、吉本隆明や江藤淳による戦後文学批判の視点を理解します。
第 10 回	柄谷行人の出版	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、柄谷行人の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	構造主義とテキスト論	20 世紀後半以降の構造主義思想の意義について考察し、その文学版であるテキスト論に対する理解を深めます。
第 12 回	加藤典洋の登場	江藤淳を批判しつつ戦後文学を相対化する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	フェミニズム文学論	1980 年代以降の日本のフェミニズム思想について考察を加え、その文学的意義を理解します。
第 14 回	現代文学の批評	現代文学に対して重要な論点を提供しているものを選び、その評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができていているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B7

神話と歌 I

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を講読する。

【到達目標】

巻1・2の柿本人麻呂作品を読み進める。その中から各自が最も関心のある作品を取り上げ、注釈的な読解を中心に発表する。それにより、上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	講義概説	万葉集と柿本人麻呂について概説する。
第2回	近江荒都歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第3回	吉野讃歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第4回	留京三首	左記のテーマについて批評、検討する。
第5回	安騎野歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第6回	石見相聞歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第7回	日並皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第8回	河嶋皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第9回	明日香皇女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第10回	高市皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第11回	泣血哀慟哭歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第12回	吉備津采女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第13回	狭岑島死人歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第14回	臨死歌	左記のテーマについて批評、検討する。 各自、春学期の研究テーマを総括し、新たな発展の方法を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、毎週3時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文のついているもの。

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50％）とレポート（50％）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読む基本的知識の重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞上代文学

＜研究テーマ＞古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

Read the Manyoshu（万葉集），

LIT500B7

神話と歌Ⅱ

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を読む。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。各自、万葉集の中から学問的興味を持つ歌人、作品などを選定し、その作品について演習形式で読解を進める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の方法について概説する。
第 2 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 3 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 4 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 5 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 6 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 7 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 8 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 9 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 10 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 11 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 12 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 13 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。

第 14 回 まとめ

万葉集研究の方法と問題点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、課題など、毎週 3 時間以上の学習を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本上代文学

＜研究テーマ＞古事記、万葉集の研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島一万葉集卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群についてー」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

Read the Manyoshu（万葉集）.

LIT500B7

平安時代の物語 I

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』写本の精読と注釈。
- ◆鎌倉時代に書写された『源氏物語』「帯木」巻の写本を、読解し、注釈してゆきます。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
- A, くずし字（変体仮名）を解説する力
- B, 古文を正確に訳出する力
- C, 語法や典拠を調査する力
- D, 明快なプレゼンテーションをおこなう力
- E, 問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、句読点やカギカッコを付し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。
- ◆それを元に、先行の注釈書と比較しながら、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「帯木」	序文
3	「帯木」	長雨
4	「帯木」	頭中将
5	「帯木」	雨夜の品定
6	「帯木」	左馬頭、藤式部丞
7	「帯木」	葎の門の女
8	「帯木」	欠点
9	「帯木」	軽々しい女
10	「帯木」	艶なる女
11	「帯木」	夫婦
12	「帯木」	筆の道
13	「帯木」	物怨じの女
14	「帯木」	指をかむ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「桐壺」巻～「若紫」巻を、よく読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

阿仏尼本の影印（『東洋大学附属図書館蔵 阿仏尼本は、き木』勉誠出版）を用います。授業時にPDF版を配布します。

【参考書】

- ◆以下のテキストのいずれかを座右に置いてください。
- ◎中嶋尚編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 帯木』（至文堂）
- ◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）
- ◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）
- ◎今泉忠義訳『源氏物語 新装版』1（講談社学術文庫）
- ◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）
- ◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT500B7

平安時代の物語Ⅱ

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』写本の精読と注釈。
- ◆鎌倉時代に書写された『源氏物語』「帯木」巻の写本を、読解し、注釈してゆきます。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
 - A, くずし字（変体仮名）を解説する力
 - B, 古文を正確に訳出する力
 - C, 語法や典拠を調査する力
 - D, 明快なプレゼンテーションをおこなう力
 - E, 問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、句読点やカギカッコを付し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。
- ◆それを元に、先行の注釈書と比較しながら、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「帯木」	風流な女
3	「帯木」	なでしこの花
4	「帯木」	常夏の歌
5	「帯木」	賢き女
6	「帯木」	蒜の歌
7	「帯木」	座談の結論
8	「帯木」	光源氏、移動
9	「帯木」	紀伊守の家
10	「帯木」	朝顔の姫君
11	「帯木」	伊予守の後妻
12	「帯木」	小君
13	「帯木」	光源氏、寝所へ
14	「帯木」	なよ竹の心地

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「桐壺」巻～「若紫」巻を、よく読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

阿仏尼本の影印（『東洋大学附属図書館蔵 阿仏尼本は、き木』勉誠出版）を用います。授業時にPDF版を配布します。

【参考書】

- ◆以下のテキストのいずれかを座右に置いてください。
 - ◎中嶋尚編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 帯木』（至文堂）
 - ◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）
 - ◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）
 - ◎今泉忠義訳『源氏物語 新装版』1（講談社学術文庫）
 - ◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）
 - ◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT500B7

書誌学と文献学 I

佐藤 明浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

藤原定家著『僻案抄』の後撰集注釈をとりあげ、書誌・文献の知識を身につけたうえで、内容を精細に読解し、見出した課題を探究します。

【到達目標】

- ・書誌・文献に関する知識を身につけ、作品の研究を推進する技能を習得する。
- ・調査、考究の過程でみいだした課題について、適切な方法を用いて探究できる。
- ・写本、版本のくずし字を読解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・『僻案抄』の後撰集注釈を読解していきます。宮内庁書陵部鷹司家旧蔵本を底本とし、書誌の特徴をとらえたうえで、各受講者の担当部分を決め、精確に読解するための調査をし、課題について考究した内容を、作成した資料を提示して発表します。それを基に全員で討論します。
- ・はじめに各自の担当箇所を決め、調査・考究の方法、発表の要領を教員が提示します。
- ・発表、討論の内容、提出課題について、教員が講評します。
- ・研究文献を読んで、研究上の課題を共有します。
- ・随時、くずし字を読解する練習を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	調査、考究の方法 担当箇所の決定
第 2 回	『僻案抄』の概要	文献の基礎的情報
第 3 回	『僻案抄』の背景	平安・鎌倉時代の歌学・和歌注釈
第 4 回	『後撰和歌集』諸本の概要	天福本等の実態の確認
第 5 回	後撰 1「ふる雪の」	発表と討論
第 6 回	後撰 214「こよひかく」	発表と討論
第 7 回	後撰 241「けふよりは」	発表と討論
第 8 回	追註「かはやしろ」	追註「かはやしろ」の講読
第 9 回	後撰 262「秋くれば」	発表と討論
第 10 回	後撰 679「あふ事は」	発表と討論
第 11 回	『僻案抄』の研究	発表と討論
第 12 回	後撰 903「はちすはの」	発表と討論
第 13 回	後撰 1259「いまこむと」	発表と討論
第 14 回	まとめ	春学期の課題整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・各自の担当歌について、十分な調査、考究を行い、あらかじめ発表資料を提示して、発表に臨みます。担当者以外の受講者は、とりあげられる箇所について予習し、提示された資料を読んで、ポイントを把握して、討論に臨みます。
- ・授業でとりあげる研究文献をあらかじめ読んで、要点・問題点をとらえておきます。
- ・くずし字の読解練習をすすめます。
- ・準備学習、復習の時間は、1 回につき平均で 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

配付します。

【参考書】

授業時に提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容 50 %、考察レポート 20 %、討論への参加状況 30 % を総合して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

写本についての知識や読解技能を確認しながらすすめます。

【その他の重要事項】

受講者数によって、担当箇所、回数を調整します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本古典文学

＜研究テーマ＞平安・鎌倉時代の和歌集・歌書

＜主要研究業績＞『院政期和歌文学の基層と周縁』（和泉書院 2020 年）

【Outline and objectives】

This course deals with *Hekiansho* (written by Fujiwarano Sadaie). The aim of this course is to understand the characteristics of Waka literary works and to acquire skills to study them.

LIT500B7

書誌学と文献学Ⅱ

佐藤 明浩

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

藤原定家著『僻案抄』の古今集注釈をとりあげ、書誌・文献の知識を身につけたうえで、内容を精細に読解し、見出した課題を探究します。

【到達目標】

- ・書誌・文献に関する知識を身につけ、作品の研究を推進する技能を習得する。
- ・調査、考究の過程でみいだした課題について、適切な方法を用いて探究できる。
- ・写本、版本のくずし字を読解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・『僻案抄』の古今集注釈を読解していきます。宮内庁書陵部鷹司家旧蔵本を底本とし、書誌の特徴をとらえたうえで、各受講者の担当部分を決め、精確に読解するための調査をし、課題について考究した内容を、作成した資料を提示して発表します。それを基に全員で討論します。
- ・はじめに各自の担当箇所を決め、調査・考究の方法、発表の要領を教員が提示します。
- ・発表、討論の内容、提出課題について、教員が講評します。
- ・研究文献を読んで、研究上の課題を共有します。
- ・随時、くずし字を読解する練習を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	調査、考究の方法 担当箇所の決定
第 2 回	『僻案抄』の背景	藤原定家の三代集注釈
第 3 回	『古今和歌集』の受容	『古今和歌集』の諸本と注釈
第 4 回	古今 28「ももちどり」	発表と討論
第 5 回	古今 77「いざさくら」	発表と討論
第 6 回	古今 184「このまより」	発表と討論
第 7 回	『顕注密勘』との関係	研究上の課題
第 8 回	古今 208「わがかどに」	発表と討論
第 9 回	古今 469「ほととぎす」	発表と討論
第 10 回	古今 484「夕ぐれは」	発表と討論
第 11 回	藤原定家の歌学	研究文献の講読
第 12 回	古今 761「あかつきの」	発表と討論
第 13 回	古今 431「をがたまの 木」	発表と討論
第 14 回	まとめ	課題の整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・各自の担当歌について、十分な調査、考究を行い、あらかじめ発表資料を提示して、発表に臨みます。担当者以外の受講者は、とりあげられる箇所について予習し、提示された資料を読んで、ポイントを把握し、討論に臨みます。
- ・授業でとりあげる研究文献をあらかじめ読んで、要点・問題点をとらえておきます。
- ・くずし字の読解練習をすすめます。
- ・準備学習、復習の時間は、1 回につき平均で 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

配付します。

【参考書】

授業時に提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容 50 %、考察レポート 20 %、討論への参加状況 30 % を総合して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

写本についての知識や読解技能を確認しながらすすめます。

【その他の重要事項】

受講者数によって、担当箇所、回数を調整します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本古典文学

＜研究テーマ＞平安・鎌倉時代の和歌集・歌書

＜主要研究業績＞『院政期和歌文学の基層と周縁』（和泉書院 2020 年）

【Outline and objectives】

This course deals with *Hekiansho* (written by Fujiwarano Sadaie). The aim of this course is to understand the characteristics of Waka literary works and to acquire skills to study them.

LIT500B7

能と楽劇 I

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能の大成者世阿弥の芸談『世子六十以後申楽談儀』を通読し、能楽研究のために必要な基本情報を知るとともに、世阿弥時代の能楽に関する断片的な記事を作品研究や演出研究に生かす方法を学ぶ。昨年度からの継続テーマ。

【到達目標】

- ①世阿弥時代の能楽について『申楽談儀』に記されている内容を理解する。
- ②能の作品研究をする際に確認すべき項目やそのために参照すべき資料について習熟する。
- ③能の作品研究の様々な切り口を知る。
- ④世阿弥時代の断片的な記事を作品研究や演出研究に生かす方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

現代の能楽および、能楽研究に必須の基本文献の紹介等の後、『世子六十以後申楽談儀』を講読していく。世阿弥伝書や謡本など、能楽研究所所蔵の原本に触れる機会も採り入れる。新型コロナウイルスの感染状況により、オンライン授業となる場合も、許される範囲で、交代で研究所の原本資料に触れられるように工夫したい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	『申楽談儀』を含む世阿弥伝書についての概説
第 2 回	『申楽談儀』の講読：18 条	能の装束・道具など
第 3 回	『申楽談儀』の講読：18 条続き・19 条	能装束・道具・面
第 4 回	『申楽談儀』の講読：20 条～21 条	狂言の名人・田舎の風体
第 5 回	『申楽談儀』の講読：21 条～22 条	十二権守の手紙・面のこと
第 6 回	『申楽談儀』の講読：23 条	猿楽諸座の由緒
第 7 回	『申楽談儀』の講読：23～24 条	猿楽諸座の由緒（続き）・世阿弥をめぐる霊験談
第 8 回	『申楽談儀』の講読：25～28 条	田楽の起源・松囃子・薪猿楽
第 9 回	『申楽談儀』の講読：29～31 条	猿楽役者の日常の心がけ
第 10 回	『申楽談儀』の講読：結崎座座規	結崎座の座規・奥書
第 11 回	『申楽談儀』の講読：追記・別本聞書	獅子舞・声の薬・南都雨悦びの能・別本聞書
第 12 回	関連論文の輪読	大和猿楽の歴史に関する重要論文を選び輪読・討議
第 13 回	関連論文の輪読	申楽談儀の記事が重要な k ン居となる作品研究を選び輪読
第 14 回	まとめ	これまでの内容の確認。作品研究に役立つ他の世阿弥伝書について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指定された関連論文を次回までに読んで、疑問点があればまとめておく。

授業で扱う作品について、どんな形でも本文を用意し、内容も把握しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

岩波思想大系『世阿弥・禅竹』（表章・加藤周一）が理想。どうしても入手できない場合は岩波文庫『世子六十以後申楽談儀』（表章校注）

【参考書】

授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

学期末に課すレポート（60 %）、輪読の担当箇所 understanding（30 %）、通常の授業への貢献度（10 %）等を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度一年間で『申楽談儀』を通読する予定だったが、同書の理解に必要な、能に関する基礎知識を共有するのに相当の時間を費やすことになった。そのため通読はあきらめてゆっくりと進んできた結果、今年度も前期は『申楽談儀』を続け、最後まで読み通すことになった。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

特に春学期は世阿弥伝書や謡曲本文の理解に基づいて授業を進めるため、古文が読めない場合は受講が難しいと思います。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域> 能楽研究
- <研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
- <主要研究業績>

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020 年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 巻 3 号・2016 年 3 月

★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐる―」『文学』16 巻 2 号・2015 年 3 月

★「「天女舞」応用の一形態―神と遊女が舞った菩薩の舞―」『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）

【Outline and objectives】

In this class, students will read Zeami's "Sarugaku dangi(Talks on Sarugaku)" and acquire the basic knowledge about noh plays in his period

LIT500B7

能と楽劇Ⅱ

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能の作品研究に必要な技術を身につけ、能作品の特徴や魅力などについて自分の言葉で語れるようになる。

【到達目標】

- ①古写謡本を翻刻し、小段に分けて本文テキストを作れるようになる。
- ②他の古典作品とは違う能独特の用語や決まりに習熟する。
- ③世阿弥伝書の記事を作品の理解に役立てる方法を学ぶ。
- ④独特のレトリックを持つ謡曲本文の注釈に必要な方法を身につける。
- ⑤能の作品について主題や研究上の問題点等を明解に指摘できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

能楽研究所所蔵の文献資料及びその画像データ等を利用し、

- ①古写謡本の翻刻のしかたや校異のとりかた等を学ぶワークショップ
- ②能のテキスト独特の用語や演出上の決まりごと、注釈の方法等に関する講義
- ③各自が作品を選んでおこなう作品研究のミニ発表

を組み合わせて進めて行く。

新型コロナウイルスの流行により研究所が使えない場合はこちらから資料のデータを提供する。可能であれば、人数を分けて能楽研究所にて資料調査ができるよう工夫する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方についてのガイダンス。能楽研究所での文献利用方法。
第2回	能のテキスト通読（1）：〈融〉前半	能〈融〉前半の詞章を活字で読み、独特の構造や表記法、演出上のルール等について確認する。
第3回	能のテキスト通読（2）：〈融〉後半	能〈融〉後半の詞章を活字で読み、舞や囃子に関する記号なども確認する。
第4回	先行研究・世阿弥伝書記事等の確認	〈融〉に関する世阿弥伝書の記事・主要論文などを確認する。
第5回	ワークショップ：古写謡本（上掛り/下掛り）を読む	能〈融〉の古写本を読み、謡本に独特の用字法・記号を学ぶ。上掛りと下掛りの違いを知る。
第6回	ワークショップ：作品研究のための本文確定	翻刻、校合、小段分け等、〈融〉の本文を用い、作品研究用の謡曲本文の作り方を確認する。
第7回	テキストの厳密な解釈	〈融〉のテキストを現代語訳していきながら、読み物として通読することと作品研究のために読み込むことの違いを知る。
第8回	作品研究の論文に必要な情報の確認	能の作品研究で通常必要とされる情報と、それを論文に入れていく方法について確認する。
第9回	学生の発表と討議（1）	ここまでの授業を踏まえ、各自が選んだ作品について発表し、全員で討議する。

- 第10回 学生の発表と討議（2）
- 第11回 学生の発表と討議（3）
- 第12回 学生の発表と討議（4）
- 第13回 学生の発表と討議（5）
- 第14回 まとめ

各自が選んだ作品について発表し、全員で討議する。
各自が選んだ作品についての発表と討議。
各自が選んだ作品についての発表と討議。
各自が選んだ作品についての発表と討議。
各自が選んだ作品についての発表と討議。
レポートにまとめるための整理と復習。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

能の概説、小段理論等については、配布する資料を熟読して基礎知識を身につけてほしい。翻刻・小段分け・注釈等、すべて事前に各自が能楽研究所の資料や文献（オンラインの場合はこちらから配布）を使って準備する必要がある、特に慣れない間は長時間の予習が必要である。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは用いず、能研蔵の資料を利用する。

【参考書】

授業時に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

ワークショップでの翻刻、注釈等の成果（30 %）、ミニ発表の成果や他の発表への発言（30 %）、学期末のレポート（40 %）を総合して判断する。

【学生の意見等からの気づき】

能について少し知りたいと思って受講すると、古写本の翻刻や世阿弥伝書の参照など、負担が大きいのと感じる場合もあるようです。もちろん、やってみたいと思ってくれれば、いくらでも支援します。古文が読めない場合は、受講は難しいと思います。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域> 能楽研究
- <研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
- <主要研究業績>

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020 年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 巻 3 号・2016 年 3 月

★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐる―」『文学』16 巻 2 号・2015 年 3 月

★「「天女舞」応用の一形態―神と遊女が舞った菩薩の舞―」『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to acquire the skills of studying Noh works and to become able to explain the features and charms of Noh works in your own words.

LIT500B7

江戸の文芸と文化Ⅰ

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期は 18 世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙を読み解く。作品としては草双紙の発展に即して、浮世絵師による画風の変遷も反映した式亭三馬画・作『稗史億説年代記〔くさぞうしこじつけねんだいき〕』（享和 2・1802 年刊）をとりあげ、本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら読解する。

最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。簡略な既存の注釈を頼りに、三馬の仕掛けた謎をどこまで読み解けるかに挑戦しよう！

【到達目標】

- (1) 作品の翻刻を点検し、既存の注釈を批判的に検討しながら読む力をつける。
- (2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

作品の背景や注釈の方についての概説のあと、受講生で担当箇所を決めて、毎週、読解を発表してもらいます。本文の解釈とともに、挿絵の画風の分析も行いましょう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	時代状況と出版界、黄表紙とは
第 2 回	講義 1	作者・画工について
第 3 回	講義 2	注釈の基本・序文を読む
第 4 回	学生の発表	上巻 1
第 5 回	学生の発表	上巻 2
第 6 回	学生の発表	上巻 3
第 7 回	学生の発表	中巻 1
第 8 回	学生の発表	中巻 2
第 9 回	学生の発表	中巻 3
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	補足
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎週、次の場面を確認してきましょう。
発表担当者は既存の翻刻を点検・修正し、語釈・解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】

国立国会図書館・早稲田大学図書館・東京大学霞亭文庫／西尾市岩瀬文庫のデジタルデータを比較検討し、善本を選ぶ。注釈は『江戸の戯作絵本四末期黄表紙集』（社会思想社現代教養文庫 1983 * PDF で配付）を参照する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ> 大田南畝・江戸狂歌・戯作

<著書>

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

【共著】

『最後の文人 石川淳の世界』集英社新書（集英社 2021）

『東アジア文化講座 3 東アジアに共有される文学圏』（文学通信 2021）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信 2019）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

LIT500B7

江戸の文芸と文化Ⅱ

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。

【到達目標】

- （１）作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読む力をつける。
- （２）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第 2 回	学生の発表	上巻 1
第 3 回	学生の発表	上巻 2
第 4 回	学生の発表	上巻 3
第 5 回	学生の発表	上巻 4
第 6 回	学生の発表	中巻 1
第 7 回	学生の発表	中巻 2
第 8 回	学生の発表	中巻 3
第 9 回	学生の発表	中巻 4
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	下巻 4
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎週、次のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。
各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作
＜近年の論文・その他書き物＞

【論文】

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113 号 2021（査読付）

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179 号 2020（査読付）
「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（単行本）勉強出版 2019

「書籍を模擬する遊び—「見立絵本」にかんする疑問、から—」『京都語文』26 号 2018

「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17 巻 4 号 2016

【一般誌】「江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」『歴史 REAL 大江戸の都市力』洋泉社 MOOK 2018

「歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸」『別冊太陽 歌麿決定版』2016

「国芳時代の絵師ビジネス」『芸術新潮』2016 年 4 月号

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

LIT500B7

江戸の思想史 I

高木 元

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である注釈的読解に必要な参考資料群を紹介しつつ、具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見識を育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読し、固有名詞を中心とした語句の注釈が適切に出来るようになる。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと言う点の解明に及ぶ必要がある。これらの、原テキストに拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

年度始めに受講生の顔ぶれとその専攻する分野を見きわめつつ、採り上げるに相応しいテキストを複数提示する。その後、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的な位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後に、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第 2 回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第 3 回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第 4 回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第 5 回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 6 回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第 7 回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 8 回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第 9 回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 10 回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第 11 回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 12 回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第 13 回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 14 回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
テキストを読んてくることは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないと論じられない。

また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業の進み具合を受講者の理解度にそくして、適宜かえてみる。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本十九世紀文学

<研究テーマ> 絵入小説史の書誌学的研究

<主要研究業績> 『江戸読本の研究 - 十九世紀小説様式攷 -』（ベリカン社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。
<https://fumikura.net> 参照

【Outline and objectives】

Learn the skills to read and understand Japanese modern literature annotatively.

LIT500B7

江戸の思想史Ⅱ

高木 元

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見通しを育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読力をつける。参考図書を活用して語句の注釈が適切に出来るようにする。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと云う点の解明に及ぶ必要がある。これらの原本に拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の専攻する分野を見きわめつつ、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後に、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第2回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第3回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第4回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第5回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第6回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第7回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第8回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第9回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第10回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第11回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第12回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第13回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第14回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
 テキストを読んでくことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないと論じられない。
 また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の理解度を見ながら授業の進行速度を調整する。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本十九世紀文学

<研究テーマ> 絵入小説史の書誌学的研究

<主要研究業績> 『江戸読本の研究－十九世紀小説様式攷－』（ぺりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。
<https://fumikura.net> 参照

【Outline and objectives】

Learn the skills to read and understand Japanese modern literature annotatively.

LIN500B7

日本語の歴史と現在 I

竹林 一志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学の言語表現は如何なるものか、それをどのように解析すればよいのか、ということを学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。一字一句をゆるがせにせず、古典本文を丁寧に読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 日本古典文学の言語表現の特徴について、特定の作品の具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン授業の形式で行う（Zoom を使用する予定）。資料の配付や課題の提出は学習支援システムを用い、授業内でフィードバックをする。この授業では、いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、古代・中世・近世の文学作品を対象として表現解析を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える。
第 2 回	古典文法	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する。
第 3 回	表現解析の方法	日本古典文学の表現解析法について概説する。
第 4 回	『古今和歌集』所収歌の読解（先行研究についての検討）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に 16 番歌）について先行研究の論を検討する。
第 5 回	『古今和歌集』所収歌の読解（新たな解釈の提示）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に 16 番歌）の表現を解析する。
第 6 回	『枕草子』冒頭部の読解（先行研究についての検討）	『枕草子』冒頭部について先行研究の論を検討する。
第 7 回	『枕草子』冒頭部の読解（新たな解釈の提示）	『枕草子』冒頭部の表現を解析する。
第 8 回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（先行研究についての検討）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現について先行研究の論を検討する。
第 9 回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（新たな解釈の提示）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現を解析する。
第 10 回	『徒然草』第 89 段の読解（先行研究についての検討）	『徒然草』第 89 段について先行研究の論を検討する。
第 11 回	『徒然草』第 89 段の読解（新たな解釈の提示）	『徒然草』第 89 段の表現を解析する。
第 12 回	松尾芭蕉の俳句の読解（先行研究についての検討）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」について先行研究の論を検討する。
第 13 回	松尾芭蕉の俳句の読解（新たな解釈の提示）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」の表現を解析する。

第 14 回 総括

本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 3 時間を標準とする。各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。授業後は、配付物やノートを見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院、2009 年、2,200 円（税別）

【参考書】

『徒然草抜書』小松英雄、講談社
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：60 %
平常点（提出物・受講姿勢）：40 %

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

Zoom 授業を受けるために必要なデバイスや通信環境を整えておくてください。

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009 年
『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』いのちのことば社、2014 年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020 年

【Outline and objectives】

In this class we study about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to improve the skills for reading Japanese classical literature. We try not to neglect any word or phrase in the texts. This class is mainly intended for overseas students.

LIN500B7

日本語の歴史と現在Ⅱ

竹林 一志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『伊勢物語』第1段～第15段を丁寧に読み解きながら、日本古典文学の言語表現と、その解析法について学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。仮名文の性質を理解し、ディスコースの中で表現を読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 『伊勢物語』の言語表現の特徴について、具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン授業の形式で行う（Zoomを使用する予定）。資料の配付や課題の提出は学習支援システムを用い、授業内でフィードバックをする。この授業では、テキストを用い、おもに演習形式（受講者の分担発表と出席者全員による討議）で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」の読解	本授業の全体像を伝えた後、テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」を一緒に読む。発表の分担も行う。
第2回	テキスト「イントロダクション」の読解	担当教員作成のワークシートをもとに、テキスト「イントロダクション」を読み解く。
第3回	第1段「昔、をところ」～「心地まどひにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「昔、をところ」～「心地まどひにけり」の表現を解析する。
第4回	第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の表現を解析する。
第5回	第2段・第3段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第2段・第3段の表現を解析する。
第6回	第4段・第5段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第4段・第5段の表現を解析する。
第7回	第6段～第8段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第6段～第8段の表現を解析する。
第8回	第9段「昔、をところありけり」～「ほとびにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「昔、をところありけり」～「ほとびにけり」の表現を解析する。
第9回	第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の表現を解析する。

第10回	第9段「なほ行き行きて」～「こぞりて泣きにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「なほ行き行きて」～「こぞりて泣きにけり」の表現を解析する。
第11回	第10段～第12段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第10段～第12段の表現を解析する。
第12回	第13段・第14段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第13段・第14段の表現を解析する。
第13回	第15段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第15段の表現を解析する。
第14回	総括	本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各3時間を標準とする。
各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。
授業後は、テキストやノート、発表者のレジュメを見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『伊勢物語の表現を掘り起こす』小松英雄、笠間書院、2010年、1,900円（税別）

【参考書】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表・提出物・受講姿勢）：60％
レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：40％

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

Zoom 授業を受けるために必要なデバイスや通信環境を整えておくてください。

【その他の重要事項】

春学期科目「日本語・日本文学の基礎A」（「日本語の歴史と現在Ⅰ」）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『聖書で読み解く『氷点』』続『氷点』いのちのこば社、2014年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年

【Outline and objectives】

In this class we carefully read 'The tale of Ise' (from chapter 1 through 15) for studying about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to understand the characteristics of classical texts written in *kana* and interpret the linguistic expressions precisely in the context. This class is mainly intended for overseas students.

LIN500B7

現代日本語のしくみ I

前田 直子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語文法の多様性について、具体例の分析を通して学ぶ。テキストとして新書を使用し、日本語力全般の向上、読解力、書く能力、口頭発表能力の鍛錬も行う。

【到達目標】

- ・現代日本語の多様性について深く理解することができる。
- ・日本語のことばの地域差について理解することができる。
- ・日本語の語用論的な特徴について理解することができる。
- ・日本語の運用の全国的な多様性について理解することができる。
- ・日本語の地域差の歴史的変化を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、テキストの内容についての学生の発表、ディスカッション、それらに関する講義を通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	この授業で学ぶこと、授業の進め方について説明し、担当を決める。
第 2 回	序章 ものの言い方にも地域差がある	日本人のものの言い方について「個性」ではなく「地域差」が多分に見られることを学ぶ。
第 3 回	第 1 章 口に出すか出さないか	おしゃべりか無口か、挨拶をするかしないか、といった言語行動に地域差が見られることを学ぶ。
第 4 回	第 2 章 決まった言い方をするかしないか（前半）	挨拶や喧嘩の場面での地域差（方言差）を学ぶ。
第 5 回	第 2 章 決まった言い方をするかしないか（後半）	言語行動に「型」を持つ地域（方言）と持たない地域（方言）があることを学ぶ。
第 6 回	第 3 章 細かく言い分けるかどうか	場面ごとに細かく言い分けるかどうか、という言語行動に地域差が見られることを学ぶ。
第 7 回	第 4 章 間接的に言うか直接的に言うか	相手に対し、間接的に言うか直接的に言うか、という言語行動に地域差が見られることを学ぶ。
第 8 回	第 5 章 客観的に話すか主観的に話すか	驚きや喜びなどのような主観的なことがらをどのように表現するかに地域差が見られることを学ぶ。
第 9 回	第 6 章 言葉で相手を気遣うかどうか	敬語を中心としたさまざまな気遣いを表す言語表現や言語行動に地域差が見られることを学ぶ。
第 10 回	第 7 章 会話を作るか作らないか	ボケとツッコミに代表される話術・会話の構成に地域差が見られることを学ぶ。
第 11 回	第 8 章 ものの言い方の発想法	第 1 章から第 7 章までをまとめ、言語行動の地域差を確認する。
第 12 回	第 9 章 発想法の背景を読み解く	社会環境の在り方が発想法と言語環境の様相に影響することを学ぶ。

第 13 回	第 10 章 発想法はどのように生まれ、発達するか	第 9 章で見た発想法について歴史的にその変化を分析する。
第 14 回	終章 ものの言い方を見る目、および、本講義のまとめ	テキストを振り返り、本講義で学んだこと、学ぶべきことを整理する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、プレゼンテーションの準備をします。担当者以外の学生は、テキストを読み、質問項目を考えることを宿題とします。本講義の準備学習および復習（宿題）等の時間はそれぞれ 2 時間を標準とします。（前年度の受講生の平均時間）

【テキスト（教科書）】

小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言い方西東』岩波新書、780 円（＋税）

【参考書】

授業時に章ごとに指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・授業でのプレゼンテーション： 20 %
- ・毎回の宿題・小レポート： 65 %
- ・最終レポート： 15 %

【学生の意見等からの気づき】

教員の講義から始めるのではなく、学生のプレゼンテーションとディスカッションから始める授業は負担が大きく、最初は準備に長い時間がかかりますが、毎回「やってよかった」「だんだん短い時間で準備ができるようになった」との意見が出ていますので、ぜひ積極的に取り組んでほしいと思います。また、学生の課題の文章中に見られる日本語の誤用について解説をすることが好評を得ていますので、今学期もみなさんの希望があれば、実施したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>現代日本語文法
<研究テーマ>複文（条件文、および原因・理由文）の記述的研究、日本語教育文法
<主要研究業績>『ように』の意味・用法』笠間書院（2006）、『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版（2009）庵功雄・日高水穂・前田直子・山田敏弘・大和シゲミ（2020）『やさしい日本語のしくみ（改訂版）』くろしお出版、井島正博（編著）（2020）『現代語文法概説』朝倉書店

【Outline and objectives】

In this class, students learn the diversity of modern Japanese through analysis of concrete examples. Using a paperback pocket edition as a textbook, students can improve their Japanese skills and train their reading comprehension, writing, and oral presentation ability as well.

LIN500B7

現代日本語のしくみⅡ

前田 直子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語の音韻・語彙・文法・表現に関する変化の様相を、具体例の分析を通して学ぶ。テキストとして新書を使用し、日本語力の向上、読解力および口頭発表能力の鍛錬も行う。

【到達目標】

- ・現代語に特徴的に見られる「新しい表現」について正確な理解を深めることができる。
- ・現代語の標準的な音韻・語彙・文法・表現について理解することができる。
- ・言語変化の様相について、正しく理解し、説明することができる。
- ・ことばの変化と社会の変化について、自分なりに考察する力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、テキストの内容についての学生の発表、ディスカッション、それらに関する教員からの講義を通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	この授業で学ぶこと、授業の進め方について説明し、担当を決める。
第2回	I ラ抜きことばの背景 専門的な文章の読み方（前半）	ラ抜きことばとは何か、どのように広まったのか、変化の理由について学ぶ。
第3回	I ラ抜きことばの背景 専門的な文章の読み方（後半）	ラ抜きことばの文法的な位置づけ、動詞の活用における意義について学ぶ。
第4回	II 「じゃん」の来た道	「じゃん」という文末表現の地理的分布と歴史的な変化の過程について学ぶ。
第5回	III 簡略化の動き（前半）	「ちゃった」「わかんない」などの縮約や音便に関わる音韻変化と原理について学ぶ。
第6回	III 簡略化の動き（後半）	「違って」「みたく」のような品詞と活用形の齟齬に見られる現代語の変化について学ぶ。
第7回	IV 東京ことばの底流（前半）	「うざったい」「やっぱし」などの東京ことばに見られる新しい語彙の変化の過程について学ぶ。
第8回	IV 東京ことばの底流（後半）	方言から標準語に採用された語彙について、その変移のメカニズムを学ぶ。
第9回	V 新しい方言の広がり（前半）	東日本・西日本に見られる新しい方言の出現について学ぶ。
第10回	V 新しい方言の広がり（後半）	「新方言」と呼ばれる新しい方言について学ぶ。
第11回	VI 敬語の最前線	「デス」「(ラ)レル」敬語に見られる新たな敬語の形態について学ぶ。

第12回	VII 気になる？ 口調（前半）	ガ行鼻濁音の衰退や専門家アクセントなど、日本語の新たな音韻変化について学ぶ。
第13回	VII 気になる？ 口調（前半）	半疑問イントネーションをはじめとする、日本語の新たなパラ言語情報の変化について学ぶ。
第14回	VIII ことばの変化のとりえ方、および、本講義のまとめ	テキストを振り返り、本講義で学んだこと、学ぶべきことを整理する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、プレゼンテーションの準備をします。担当者以外の学生は、テキストを読み、質問項目を考えることを宿題とします。本講義の準備学習および復習（宿題）等の時間はそれぞれ2時間を標準とします。（前年度の受講生の平均時間）

【テキスト（教科書）】

井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』岩波新書、800円＋税

【参考書】

・授業時に章ごとに指示する。

【成績評価の方法と基準】

- ・授業でのプレゼンテーション：20 %
- ・毎回の宿題・小レポート：65 %
- ・最終レポート：15 %

【学生の意見等からの気づき】

教員の講義から始めるのではなく、学生のプレゼンテーションとディスカッションから始める授業は負担が大きく、最初は準備に長い時間がかかりますが、毎回「やってよかった」「だんだん短い時間で準備ができるようになった」との意見が出ていますので、ぜひ積極的に取り組んでほしいと思います。また、学生の課題の文章中に見られる日本語の誤用について解説をすることが好評を得ていますので、今学期もみなさんの希望があれば、実施したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>現代日本語文法

<研究テーマ>複文（条件文、および原因・理由文）の記述的研究、日本語教育文法

<主要研究業績>『ように』の意味・用法』笠間書院(2006)、『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版(2009)、庵功雄・日高水穂・前田直子・山田敏弘・大和シゲミ(2020)『やさしい日本語のしくみ（改訂版）』くろしお出版、井島正博(編著)(2020)『現代語文法概説』朝倉書店

【Outline and objectives】

In this class, students learn the new change of pronunciation, vocabulary, grammar and expressions of modern Japanese. Using a paperback pocket edition as a textbook, students will also improve their Japanese language skills and improve their reading, writing and oral presentation ability as well.

LIT500B7

沖縄文芸史 I

福 寛美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・琉球王国初の文字資料『おもろさうし』に親しむ。
- ・琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読む。
- ・また簡単な発表を通し、神歌や口頭伝承への理解を深める。
- ・琉球文学の古典に親しむ。

【到達目標】

- ・『おもろさうし』はおもろと称する神歌を集成した冊子である。おもろは日本本土のどのような歌謡とも似ていない。その世界観、そして神霊観を知ることが目的とする。
- ・また琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読み、その説話に影響を与えたと考えられる事象の考察も目的とする。
- ・琉球文学の古典に親しむことを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・講義形式と演習形式をまぜて行う。
- ・講義をした後、講義の内容にかかわる事象を学生が調べ発表する、という形をとる。
- ・調べものは琉球・沖縄に関する基本的な文献（辞典など）を使う程度とする。
- ・対面形式の授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷺の用例を読む 1	おもろの読み方を知り、おもろ世界の鷺の用例を読む。
第 2 回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷺の用例を読む 2	おもろ世界の鷺の用例を読んでいく。
第 3 回	第 1 回、第 2 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球・沖縄の文学や民俗に関する辞典の記述を読み、簡単に発表する。
第 4 回	おもろ世界の鷺の霊能、鷺のつく地名を考察する	おもろ世界の鷺は霊能ある存在とされている。そのことを考察していく。
第 5 回	鷺、そして鷺羽には戦勝の霊力があるとされた。そのことを考察する	おもろ世界の鷺、そして鷺羽の用例のうち、戦勝と関わる用例をみていく。
第 6 回	第 4 回、第 5 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『おもろさうし』の研究書で鷺の用例を考察したものを読み、簡単に発表する。
第 7 回	おもろ世界の船と猛禽類のダブルイメージのおもろを読む	おもろ世界では船が猛禽類とダブルイメージされることがある。その用例を読んでいく。
第 8 回	琉球船は実際に猛禽類と重ね合わされていく。そのことを考察する	琉球船には猛禽類の目玉模様が付けられていた。その意味を考察していく。

第 9 回	第 7 回、第 8 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球船の絵図は残っており、インターネットでも検索できる。その絵図、またおもろについて調べ、簡単に発表する。
第 10 回	『遺老説伝』を知る	琉球の口頭伝承を集成した『遺老説伝』について学び、鷺羽の説話を読む。
第 11 回	鷺のイメージを考察する	おもろ世界の鷺のイメージ形成に関与した、と思われる神話を読む。また矢羽根として珍重された鷺の尾羽について学ぶ。
第 12 回	第 10 回、第 11 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『遺老説伝』の現代語訳を読む、またインターネットで読める文献を読み、簡単に発表する。
第 13 回	鳥の墓の伝承、現代の八重山諸島で愛される「鷺之鳥節」について考察する	多良間（たらま）島の鳥の墓の伝承、現代も愛される「鷺之鳥節」とおもろ世界の鷺を比較する。
第 14 回	春学期の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	主に第 13 回の講義に関わる事象を簡単に調べ、発表し、春学期をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・『火山と竹の女神』（教科書）の「おもろ世界の鷺」の部分を読む。
- ・授業支援システムにおもろの読み方、「おもろ世界の鷺」に関わる事柄を記したプリントをアップするので、あわせて読む。
- ・大学の沖縄文化研究所にはおもろ、ほか琉球文学に必要な文献が揃っているので、発表する時はそこで辞書を引いたり、参考文献を読んだりする。
- ・学習時間は各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】

- ・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021 年）
- ・（なお 2021 年 3 月末～4 月初旬に出版予定のため、価格は未定）

【参考書】

- ・『喜界島・鬼の海域』（福寛美、新典社、2008 年）
- ・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（福寛美、森話社、2013 年）
- ・『ぐすく造営のおもろ』（福寛美、新典社、2015 年）
- ・『奄美群島おもろの世界』（福寛美、南方新社、2018 年）

【成績評価の方法と基準】

- ・期末試験は、問題を複数提示し、2 問を選んでそれぞれ 400 字以上記述することとする。
- ・平常点に含まれる、出席回数、発表への積極性も評価基準とする。
- ・期末試験 70%、平常点 30%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

担当者は琉球文学のほか、民俗学、神話学も専攻している。そのため、『おもろさうし』以外の学生の関心に応えることも可能である。学生からの申し出があった場合、『おもろさうし』のほか、シャーマン、神話なども積極的に授業で対応していきたい。過去の授業では、学生からの申し出によってシャーマンについて述べた。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムに副教材をアップするので、それを参照しながら受講することが望ましい。

【その他の重要事項】

春学期、秋学期ともに同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
琉球文学（『おもろさうし』）
民俗学（南西諸島のシャーマン）
神話学（日本神話、琉球神話）

【研究テーマ】

＜研究テーマ＞
現在の研究テーマの中心は南西諸島の神霊観である。また民俗学的関心としては、風が悪霊そのものを表現する事例であり、「悪霊の風」について考察している。

【主要研究業績】

＜主要研究業績＞

『火山と竹の女神』（七月社、2021 年）

『新うたの神話学』（新典社、2020 年）

『奄美群島おもろの世界』（南方新社、2018 年）

『歌とシャーマン』（南方新社、2015 年）

【主要研究業績】

『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015 年）

『うたの神話学』（森話社、2014 年）

『ユタ神誕生』（南方新社、2013 年）

『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013 年）

『夜の海、永劫の海』（新典社、2011 年）

【主要研究業績】

『琉球の恋歌』（新典社、2010 年）

『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008 年）

その他

『奄美三少年 ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017 年）の監修

【Outline and objectives】

The Omoro Soshi is the first written compilation of sacred songs and poems collected by Ryukyu kingdom. The Ryukyuan folklores in the Irousetsuden and the Okinawan cultural background may have affected the development of its oral traditions. In this course, you will learn the Ryukyuan sacred songs and literature are related to the cultures of surrounding areas and developed their own unique styles. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings.

LIT500B7

沖縄文芸史Ⅱ

福 寛美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・琉球文学・民俗を考察する際には南九州（薩摩）や薩南の島々についてよく知る必要がある。・古代日本の神話において、南九州を重視する箇所がある。
・そのことを考察し、沖縄島を中心とする南西諸島への理解を深めるようつとめる。

【到達目標】

・日本神話の従来の研究とは別の視点で神話を考察することにより、見えてくるものは多い。そのことを学ぶ。
・日本神話を火山や噴火という視点で考察する研究はあまり見られなかった。しかし、火山列島の日本で古代の噴火は神の仕業とされていた。そのことに注目し、新たな知見を得る。
・神話のコノハナノサクヤビメと『竹取物語』のカグヤヒメを比較検討する。
・日本語のヨ（世・代・節）は南西諸島の祭祀においても重要な存在である。またヨは世界観や時間意識を表現する語でもあるので、そのことを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・講義を数回した後、学生が講義に関わる事象について簡単な発表をする、という形をとる。
・講義と演習の混合形式で授業を進める。
・対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	噴火・火山の女神	古代における火山の噴火と、火山の女神とされるコノハナノサクヤビメについて考察する。
第 2 回	コノハナノサクヤビメの行動	コノハナノサクヤビメが天上のアマテラス同様の行動をとったり、隼人の女神らしく振舞ったりすることを考察する。
第 3 回	ヨ（節）	ヨが竹の節を意味する事例を考察し、『竹取物語』のカグヤヒメがそこにいた意義を考察する。
第 4 回	学生の発表	第 1～3 回の講義の中で関心のある箇所を調べ、簡単に発表する。辞書を引く、参考文献の粗筋を紹介する、などの発表をする。
第 5 回	ヨと輝き・カグヤヒメのカグ	カグヤヒメは竹の節の間におり、ヨ（節）は輝いていた。カグヤヒメと香具山、火の神カグツチを比較検討する。
第 6 回	影（カゲ）	カグと関わるカゲ（影）は霊力や魂、そして光とも結びつく語である。そのことを考察する。
第 7 回	隼人と畿内	隼人は畿内に移住し、その痕跡は考古学的事象、地名などに残っている。そのことを考察する。
第 8 回	学生の発表	第 4～7 回の講義の中で、学生が興味を持った箇所について発表する。

第9回	コノハナノサクヤビメ・ナヨタケノカグヤヒメ	コノハナノサクヤビメとカグヤヒメが神話的に極めて興味深い対応をしていることを考察する。
第10回	富士山	コノハナノサクヤビメは富士山の女神とされている。その意義を考察する。
第11回	隼人と水の献上	隼人は朝廷で水を献上する役割を担っていた。そのことの意義を考察する。
第12回	日向出身の皇妃	日本古代、日向（現在の宮崎県）出身、つまり隼人の女性が皇妃になったことが語られる。そのことの意義を考察する。
第13回	隼人と狗吠え（いぬほえ）	隼人は魔を祓うため狗吠えという特殊な声を出す役割を担っていた。そのことを考察する。
第14回	学生の発表	第9～13回の講義で学生が興味を持った箇所を調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・『火山と竹の女神』の「火山と竹の女神」をよく読むこと。
- ・教科書の理解を助けるため、学習支援システムにプリントをアップするので、プリントもあわせて読むこと。
- ・参考文献、インターネットで読める参考文献を指示するので、それらも読むこと。
- ・学習時間については、各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】

- ・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021年）
- （2021年3月末～4月初めに刊行予定のため、価格は未定）

【参考書】

- ・『夜の海、永劫の海』（福寛美、新典社、2011年）
- ・『うたの神話学』（福寛美、森話社、2014年）
- ・『新うたの神話学』（福寛美、新典社、2020年）

【成績評価の方法と基準】

- ・学期末に期末試験を行う。問題を複数提示し、2問選んでそれぞれ400字以上記述する、という形をとる。
- ・平常点も評価に加える。最低6回は出席すること。
- ・期末試験を70%、平常点を30%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

- ・筆者は琉球文学のほかに、南西諸島のシャーマン（ユタガミ・ユタ）の研究もしている。
- ・学生の関心が琉球文学や神話学よりもシャーマンの場合、シャーマンについても講じることは可能である。
- ・シラバスに沿った授業のほかに関心がある、という申し出が過去にあり、その対応をしたこともある。そのような場合、授業の時に申し出てほしい。
- ・また授業の内容があまり馴染みのないものであると、難解すぎる、という声が聞かれる。なるべくわかりやすく解説するようにつとめる。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムに授業内容を理解する助けとなるプリントをアップするので、それをパソコンで読みながら授業に参加することが望ましい。

【その他の重要事項】

- ・春学期、秋学期は共に同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】

- ＜専門領域＞
- ・琉球文学（『おもろさうし』）
- ・神話学
- ・民俗学（シャーマン研究）

【研究テーマ】

- ＜研究テーマ＞
- ・『おもろさうし』の文学研究
- ・日本神話・琉球神話研究
- ・奄美のシャーマン研究

【主要研究業績】

- ＜主要研究業績＞
- ・『新うたの神話学』（新典社、2020年）
- ・『奄美群島おもろの世界』（南方新社、2018年）

- ・『歌とシャーマン』（南方新社、2015年）

【主要研究業績】

- ・『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015年）
- ・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013年）
- ・『ユタ神誕生』（南方新社、2013年）
- ・『夜の海、永劫の海』（新典社、2011年）

【主要研究業績】

- ・『うたの神話学』（森話社、2010年）
- ・『琉球の恋歌』（新典社、2010年）
- ・『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008年）

その他

『奄美三少年 ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017年）の監修

【Outline and objectives】

The myth and folklore of Nansei Islands are closely related to Southern Kyushu. The Hayato were the people who sailed across the Southern Kyushu and Southern Satsuma islands. In this course, the myth of the Hayato and the people of the sea who sailed across the Nansei areas will be learned. The relationship between the Hayato from the Southern Kyushu and Japanese myths reveals the presence of Hayato people in Japanese myths. The culture of ancient Kyushu will be deeply learned. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings.

LIT500B7

女性文学 I

藤木 直実

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式による。2000 年代以降の芥川賞受賞作品のうち、女性作家による作品を精読する。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトまたはスライドにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス①	授業の目的、計画、方法についての概説
第 2 回	ガイダンス②	担当作品の決定
第 3 回	大道珠貴「しよっぱいドライブ」	担当者による報告と受講生による討議
第 4 回	金原ひとみ「蛇にピアス」	担当者による報告と受講生による討議
第 5 回	綿矢りさ「蹴りたい背中」	担当者による報告と受講生による討議
第 6 回	絲山秋子「沖で待つ」	担当者による報告と受講生による討議
第 7 回	青山七恵「ひとり日和」	担当者による報告と受講生による討議
第 8 回	川上未映子「乳と卵」	担当者による報告と受講生による討議
第 9 回	楊逸「時が滲む朝」	担当者による報告と受講生による討議
第 10 回	津村記久子「ボストライムの舟」	担当者による報告と受講生による討議
第 11 回	赤染晶子「乙女の密告」	担当者による報告と受講生による討議

第 12 回	朝吹真理子「きことわ」	担当者による報告と受講生による討議
第 13 回	鹿島田真希「冥土めぐり」	担当者による報告と受講生による討議
第 14 回	今期のまとめ	今期の学修内容の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期 20 世紀女性文学論』（晶文社、2014）、新・フェミニズム批評の会編『昭和後期女性文学論』（翰林書房、2020）、その他授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50 %）に加えて、報告の内容と水準（30 %）、授業中の貢献度（20 %）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【学生が準備すべき機器他】

ノートパソコンが自宅にあることが望ましい。プリンターがあれば学習効率がより高くなると思われる。オンライン会議用アプリケーションのダウンロードを求める可能性がある。

【その他の重要事項】

質問については学修支援システムとメールで対応する。メールでの質問の場合は、件名を「女性文学 学籍番号 氏名」とすること。メール宛先：fujiki@olive.ocn.ne.jp

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ> 森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績> 『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline and objectives】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

LIT500B7

女性文学Ⅱ

藤木 直実

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式による。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の目的、計画、方法についての概説、春学期の振り返り
第 2 回	黒田夏子「ab さんご」	担当者による報告と受講生による討議
第 3 回	藤野可織「爪と目」	担当者による報告と受講生による討議
第 4 回	小山田浩子「穴」	担当者による報告と受講生による討議
第 5 回	柴崎友香「春の庭」	担当者による報告と受講生による討議
第 6 回	本谷有希子「異類婚姻譚」	担当者による報告と受講生による討議
第 7 回	村田沙耶香「コンビニ人間」	担当者による報告と受講生による討議
第 8 回	若竹千佐子「おらおらでひとりいぐも」	担当者による報告と受講生による討議
第 9 回	石井遊佳「百年泥」	担当者による報告と受講生による討議
第 10 回	今村夏子「むらさきのスカートの女」	担当者による報告と受講生による討議
第 11 回	高山羽根子「首里の馬」	担当者による報告と受講生による討議

第 12 回	宇佐美りん「推し、燃ゆ」	担当者による報告と受講生による討議
第 13 回	今期のまとめ	秋学期の学修内容の振り返り
第 14 回	今年度のまとめ	春学期秋学期を通じた学修内容の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【予習】 報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】 授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期 20 世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50 %）に加えて、報告の内容と水準（30 %）、授業中の貢献度（20 %）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ> 森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績> 『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline and objectives】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

ART500B7

文学と映画 I

越川 道夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通して、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】

担当講師の作品だけでなく、主に参考作品を鑑賞し、または関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。オンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に回答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の概説
第 2 回	講義 1 / 現場からの報告①	毎年のことながら、映画の原理を知ることから授業を始めます。
第 3 回	講義 2 / 現場からの報告②	講師の現場での経験に則しながら、できるだけ具体的に映画の原理と身体との関係を学びます。
第 4 回	講義 3 / 現場からの報告③	実際の映画制作者が映画の現場において何を考えているかということ伝えていきます。
第 5 回	講義 4 / 現場からの報告④	必要に応じて文献を読むことを指示します。
第 6 回	講義 5 / 現場からの報告⑤	随時質問や学生の考えを吸い上げ、それに応える形で授業を進めていく予定です。
第 7 回	参考作品① / 鑑賞	参考作品①の鑑賞
第 8 回	参考作品① / ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第 9 回	参考作品① / ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第 10 回	講義 6 / 現場からの報告⑥	前回までのディスカッションを受けての講義
第 11 回	参考作品② / 鑑賞	参考作品②の鑑賞
第 12 回	参考作品② / ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第 13 回	参考作品② / ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第 14 回	講義 7 / 現場からの報告⑦	講師による講義 春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。

【テキスト（教科書）】

講師が選定する。授業内で指示する。

【参考書】

柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波現代文庫）
前田英樹『小津安二郎の家—持続と浸透』（書肆山田）

【成績評価の方法と基準】

研究発表、レポート (50 %)、授業参加度等 (50 %) によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年はオンラインでの授業となり、試行錯誤がありました。昨年の学生からの反応から本年もオンラインでの授業になった場合は、基本的に YouTube に限定公開します。授業を視聴後に講師のメールに必ず授業の感想、質問、授業を受けての考えを送ってください。そのメールに個別に回答、もしくは授業内でメールを紹介しつつ回答しながら臨機応変に授業を進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 映画

<研究テーマ> 映画

<主要研究業績> 『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

『夕陽のあと』（監督／2019）など

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline and objectives】

Through discussion and research, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, and the relationship between the body and the foundation of each.

ART500B7

文学と映画Ⅱ

越川 道夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。また秋期は特に映画表現の多様性に触れることも目的とする。

【到達目標】

主に参考映画作品を鑑賞し、その作品に関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。オンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に回答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	講義1／現場からの報告①	秋期の授業についてのガイダンス
第2回	参考作品①／鑑賞	参考作品①を鑑賞する
第3回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第4回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第5回	参考作品②／鑑賞	参考作品②を鑑賞する
第6回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第7回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第8回	講義2／現場からの報告②	秋期はできるだけ多様な映画表現に触れることを目標とします。
第9回	参考作品③／鑑賞	参考作品③を鑑賞する
第10回	参考作品③／ディスカッション①	参考作品③についてのディスカッション
第11回	参考作品③／ディスカッション②	参考作品③についてのディスカッション
第12回	参考作品④／鑑賞	参考作品④を鑑賞する
第13回	参考作品④／ディスカッション①	参考作品④についてのディスカッション
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波現代文庫）
前田英樹『小津安二郎の家—持続と浸透』（書肆山田）

【成績評価の方法と基準】

研究発表、レポート（50 %）、授業参加度等（50 %）によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年はオンラインでの授業となり、試行錯誤がありました。昨年の学生からの反応から本年もオンラインでの授業になった場合は、基本的に YouTube に限定公開します。授業を視聴後に講師のメールに必ず授業の感想、質問、授業を受けての考えを送ってください。そのメールに個別に回答、もしくは授業内でメールを紹介しつつ回答しながら臨機応変に授業を進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>映画

<研究テーマ>映画

<主要研究業績>『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

『夕陽のあと』（監督／2019）など

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline and objectives】

Through discussions and research presentations of their works, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, the relationship between the body and the foundation of each, and the diversity of film expression.

LIT500B7

文学と風土 I

庄司 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代作家の残した書簡や原稿などの所謂「直筆資料」を素材として、調査と分析の経験を培う。

直筆資料を読むとはどういうことか、その現実的なあり方を探求するなかで、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を旨とする。

【到達目標】

資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で充分に活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。受講者は、講義毎にコメントペーパーを提出する。前回講義の振り返りにも使う。最初の時間に要領を説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する資料についての説明と担当する資料の決定。
第 2 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 3 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 4 回	受講者による報告 1	担当する資料体についての報告
第 5 回	受講者による報告 2	担当する資料体についての報告
第 6 回	受講者による報告 3	担当する資料体についての報告
第 7 回	受講者による報告 4	担当する資料体についての報告
第 8 回	受講者による報告 5	担当する資料体についての報告
第 9 回	受講者による報告 6	担当する資料体についての報告
第 10 回	受講者による報告 7	担当する資料体についての報告
第 11 回	受講者による報告 8	担当する資料体についての報告
第 12 回	受講者による報告 9	担当する資料体についての報告
第 13 回	受講者による報告 10	担当する資料体についての報告
第 14 回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。

【テキスト（教科書）】

教員により、提供される。

【参考書】

特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

コメントペーパー（Microsoft Forms により提出する事を予定。20 %）、発表（40 %）、レポート等の提出物（40 %）による総合評価。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

学外授業として、文学館への見学を予定している。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学

＜研究テーマ＞芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容

＜主要研究業績＞

編著『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』（2013 双文社出版）

【Outline and objectives】

In this class ,we will exercise in how to read writer's autograph from an expert's point of view,while thinking background.

LIT500B7

文学と風土Ⅱ

庄司 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

芥川龍之介の残した言葉とその事に関わる芸術体験を素材とし、基本的な調査と分析の能力を培う。

作家の言葉を解釈してゆく中で、その事に関わる事実を踏まえるとはどのような事か、そもそも体験した事実とは何か。芸術体験に関わる資料を探索し、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げ、芥川龍之介の体験を語る言葉を解釈する力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

また、上記のことがらに加え、このような体験を可能とした当時の「東京」という土地が有した文化状況についての知識を深め、自らジャンル横断的なアプローチを行う力を養成する。

【到達目標】

芸術体験に関わる芥川龍之介の「言葉」を解釈する為のスキルを養成する。すなわち、芥川龍之介の芸術体験に関わる資料の収集と解析を行う事ができ、その成果を自らの発表や論文で充分に活用できる能力の獲得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。受講者は、講義毎にコメントペーパーを提出する。前回講義の振り返りにも使う。最初の時間に要領を説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。芥川龍之介の芸術体験に関わる基礎となる情報を提供し、担当するテーマを決定する。
第2回	担当教員による報告1	芸術体験を読み解くと云う事についてのガイダンス
第3回	担当教員による報告2	芸術体験を読み解くと云う事についてのガイダンス
第4回	受講者による報告1	担当するテーマについての報告
第5回	受講者による報告2	担当するテーマについての報告
第6回	受講者による報告3	担当するテーマについての報告
第7回	受講者による報告4	担当するテーマについての報告
第8回	受講者による報告5	担当するテーマについての報告
第9回	受講者による報告6	担当するテーマについての報告
第10回	受講者による報告7	担当するテーマについての報告
第11回	受講者による報告8	担当するテーマについての報告
第12回	受講者による報告9	担当するテーマについての報告
第13回	受講者による報告10	担当するテーマについての報告
第14回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

受講者は、毎回、報告で取り上げる芸術体験に関わる基本情報を得ておくこと。事典等でベースとなる知識を得、自分なりにテーマに対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。

【テキスト（教科書）】

庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房 1800円＋税）ISBN978-4-907282-13-4

【参考書】

特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

コメントペーパー（Microsoft Formsにより提出する事を予定。20%）、発表（40%）、レポート等の提出物（40%）による総合評価。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

学外授業として、文学館への見学を予定している。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代文学

<研究テーマ>芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容

<主要研究業績>

編著『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』（2013 双文社出版）

【Outline and objectives】

In this class ,we will exercise in how to read AKUTAGAWA Ryunosuke's words from an expert's point of view,while thinking background.

LIT500B2

表現と社会

内藤 裕之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知的財産権について理解し、現実にかかる事例に沿って、争点を理解することで、実生活における的確な判断が行えることを目指す。

【到達目標】

事例に対して、自身の判断ができること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講人数によって変更するが、基本的には前半を知的財産権についての講義、後半を実際の判例に基づく各人の発表形式で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業概観と進め方	半期全体の進め方と手順
第2回	知的財産権とは何か	知的財産権について考える
第3回	知的財産権の判例を検討する	争点の分析、判決について現場との乖離を考える。
第4回	ジャンルで考える	言語、写真、建築、美術などジャンルによる権利侵害の比較。
第5回	メディアで考える	メディアの種類による比較。
第6回	実際の判例に関する解説1	判決からみる、侵害の理由
第7回	実際の判例に関する解説2	判決からみる、侵害の理由
第8回	受講者が関心を持った実際の判例①を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第9回	受講者が関心を持った実際の判例②を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第10回	受講者が関心を持った実際の判例③を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第11回	受講者が関心を持った実際の判例④を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第12回	受講者が関心を持った実際の判例⑤を検討する5	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第13回	受講者が関心を持った実際の判例⑥を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第14回	総括	全体に関する締めくくりと、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

判決の出ている知的財産権についての訴訟例を探し、自身で判決内容について検討する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

裁判例を探して課題点を発表すること60%、他の発表者への積極的質問、発言など30%、平常点10%。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

対面形式とします。

【担当教員の専門分野等】

総合出版社の講談社で、「FRIDAY」「PENTHOUSE」「群像」「小説現代」などの雑誌編集や、文庫、書き下ろし単行本の企画、編集、また文芸分野の責任者。

【Outline and objectives】

By understanding intellectual property rights and understanding the issues in line with actual cases, we aim to make accurate decisions in real life.

LIT500B2

編集理論

仲俣 暁生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「編集」という行為がもつ創造的機能をさまざまな現代日本の雑誌の事例をもとに理解する。

【到達目標】

「編集」という行為の価値を理解することを通して、日本における出版メディアの現代史についての基礎的な知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義を中心としつつも、各自が課題を設定しての研究レポートや討論をおりまぜる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	「編集」（エディターシップ）とは何か	この講義において取り扱う「編集」の範囲について確定し、全体のオリエンテーションとする。
第 2 回	編集されたメディアとしての「雑誌」	「雑誌」というメディアを編集という観点から概観する。
第 3 回	雑誌における「編集者」とはなにか	雑誌において「編集者（editor）」が担うさまざまな機能を理解する。
第 4 回	「雑誌」のケーススタディ①～文芸誌／論壇誌の場合	おもに文芸、論説などをあつかう雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 5 回	「雑誌」のケーススタディ②～ビジュアル雑誌の場合	グラフィカルな要素をもつ雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 6 回	「雑誌」のケーススタディ③～ジャンル雑誌の場合	特定のジャンルに根ざした雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 7 回	「雑誌」のケーススタディ④～ミニコミ、ジンの場合	ミニコミやジンと呼ばれる「小さなメディア」を「編集」という観点から分析する。
第 8 回	「雑誌」における編集についての中間まとめと討議	ケーススタディ①から③までを受けて学生をまじえてディスカッションを行う。
第 9 回	「編集」の拡散	出版以外の世界に「編集」という行為が広がっていることを理解する。
第 10 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ①～ワールドワイドウェブの登場	インターネット上における「編集」行為の場としての WWW のもつ意義を理解する。
第 11 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ②～ウェブ 2.0 以後	「ウェブ 2.0」以後に起きた WWW の変質について「編集」という観点から理解する。
第 12 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ③～ソーシャルメディア	ソーシャルメディア勃興による「編集」の危機について理解する。

第 13 回 あらたな「編集」に向けての討議

第 14 回 総まとめ

これまでの講義を受けて、現在のメディア環境のなかでどのような「編集」が可能かを討議する。

講義全体のまとめとレポートについてのガイダンスを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。講義内で培った「編集」への問題意識をもとに、身のまわりの出版物やメディア環境をとらえかえすこと。具体的な出版物（雑誌や書物、ウェブサイト）およびそれを編集している人物（編集者）や出版主体について、つねに関心を抱くことが望まれる。

【テキスト（教科書）】

必要な教材は講義の際に配布する。とくに教科書は指定しないが、参考図書には自発的に目を通すことを推奨する。

【参考書】

・外山滋比古『新・エディターシップ』（みすず書房、2009）
 ・佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店、2015）
 ・野中モモ、ばるばら『日本の ZINE について知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史 1960～2010 年代』（誠文堂新光社、2017）
 ・赤田祐一、ばるばら『20 世紀エディトリアル・オデッセイ：時代を創った雑誌たち』（誠文堂新光社、2014）
 ・仲俣暁生『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）

【成績評価の方法と基準】

講義に対する姿勢＝30%、自主課題への取り組み＝30%、最終レポート＝40%

【学生の意見等からの気づき】

昨年度はすべてオンラインでの開講となったため、事前に参考資料の配布を行った。今季は対面講義となる場合も、できるだけ事前予習が可能となるようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン講義となる可能性があるため、なるべく良好な通信環境とパソコンの用意を望む。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞出版論、メディア論

＜研究テーマ＞雑誌研究、メディア環境論、現代日本文学論

＜主要研究業績＞

①『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）
 ②編著『電子社会』誕生～日本語ワープロからインターネットまで』（晶文社、1998）
 ③『極西文学論』（晶文社、2004 年）

【Outline and objectives】

To understand the creative function of "editorship" through the case studies of various magazines in modern Japan.

LIN500B7

英語発音法 I

高橋 豊美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

分節音の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- ・分節音の体系、分布、音声変化について、理論的に説明できる。
- ・発話を聞いて、分節音を発音記号で正確に書き取ることができる。
- ・発音記号を適切な発音で読むことができる。
- ・与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語を主な対象とし、個々の分節音の調音的・音響的特徴、分節音の体系について学んだ上で、授業計画に示すように分節音がかかわるさまざまな音声現象の仕組みを理解する。

配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取り、発音記号による発話モデルの作成などの練習などを行う。

課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。

授業は、対面で受講できない場合は、ビデオ会議システムと学習支援システムを併用してオンラインで受講する。（事前に学習支援システムのお知らせで受講方法等の詳細を確認すること。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 01 回	授業案内	授業の概要／参考文献
第 02 回	音声の基礎、母音	発声の仕組み／母音の調音的特徴／課題 1
第 03 回	子音、音素論	子音の調音的特徴／音声の分類／課題 2
第 04 回	音節の機能、構造	分節音と超分節音／リズムの基本単位／分節音現象の構造記述／課題 3
第 05 回	音節現象	音声変化／押韻／音節構造と音声分布／課題 4
第 06 回	音節とリズム	音節区分／音節子音／音節圧縮／課題 5
第 07 回	母音の変化	弱用／中和／短縮／課題 6
第 08 回	弱形	引用形と弱形／弱形の種類／課題 7
第 09 回	分節音現象	音声変化の概要／子音の分布／課題 8
第 10 回	連結、脱落	語境界を挟む音のつながり／子音の連続における発音の簡略化／課題 9

第 11 回	交替、挿入、短縮	語境界を挟む子音の同化／歯茎破裂音の挿入／硬音前母音短縮／課題 10
第 12 回	地域的な音声変化	母音体系／歯茎破裂音の異音／声門音化／r の現れ方
第 13 回	総括	前回までの授業内容のまとめと考察
第 14 回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を目安とする。

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。

この授業では、10 回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおりて知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上で返却される。チェックを受けた部分をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

- ・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
- ・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.
- ・BBC Learning English: Pronunciation Tips < <http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/grammar/pron/> >

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) に基づき成績を評価する。

- ・授業への取り組みでは、練習問題の解答や小テストの成績と、授業中の発言・質問の頻度と内容を、総合的に評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。
- ・課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。
- ・試験では、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。実技を含むので、毎回の授業を時間をかけて復習しておくこと。

【学生の意見等からの気づき】

課題で毎回同じ誤りが繰り返されている場合が複数あったので、次年度は授業の最後に質疑応答、リフレクションの時間をとるようにして、理解の定着を図っていく。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システム Hoppi を使用する。

【その他の重要事項】

英文学専攻では「英語発音法 B」、日本国際学専攻では「英語発音法 II」とあわせて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育

- <主要研究業績>
- ・Toyomi Takahashi (2014). Identity avoidance in the onset. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

- ・ Toyomi Takahashi (2008). Unique Path. 『音韻研究』 2008 (第11号). 3-10.
- ・ 高橋豊美 (2005). 『弁別素性理論』. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 『音韻理論ハンドブック』. 英宝社. 131-142.
- ・ Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

Together with English Pronunciation B (English Pronunciation II), English Pronunciation A (English Pronunciation I) aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses segmental aspects of English pronunciation. Its topics include the articulatory features of individual sounds, their accentual variations, the syllable structure, the distribution of sounds, and connected speech phenomena (lenition, alteration and insertion). These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

LIN500B7

英語発音法 II

高橋 豊美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

< 講義題目 >

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

韻律の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- ・ 音節の強さと発音の特徴、強勢の配置と役割、イントネーションのパターンと機能について、理論的に説明できる。
- ・ 発話を聞いて、強勢とイントネーションを含めて発音記号で正確に書き取ることができる。
- ・ 発音記号を適切な発音で読むことができる。
- ・ 与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語（Received Pronunciation）を主な対象とし、日本語との比較を適宜行いながら、リズムが形成される仕組みと、イントネーションの形式と機能を学び、韻律を含めた基本的な発話モデルの組み立てや、談話分析の方法を理解する。

配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聞き取りの練習、発音記号で発話モデルを提示したり発話を書き取ったりする練習などを行う。

課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。

授業は、対面で受講できない場合は、ビデオ会議システムと学習支援システムを併用してオンラインで受講する。（事前に学習支援システムのお知らせで受講方法等の詳細を確認すること。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業案内／語・句強勢	授業概要／参考文献／強勢の音声的特徴／複合語と句の強勢／課題1
第2回	文強勢（理論）	強勢移動／文強勢の配置／韻脚／課題2
第3回	文強勢（実践）	文強勢モデルの記述と実践／課題3
第4回	イントネーション概説	イントネーションの形式と機能／音調アクセント／課題4
第5回	イントネーション理論 (1)：声調	イントネーション句の構成／核声調／課題5
第6回	イントネーション理論 (2)：調性	イントネーション句の機能／課題6
第7回	イントネーション理論 (3)：核配置	イントネーション句の焦点／核配置と焦点領域／課題7
第8回	イントネーション理論 (4)：音調曲線	イントネーション句の頭部と核声調の組合せ／課題8

- 第9回 イントネーションの意 下降声調の表す意味と用法／課題
味(1)：下降声調 9
- 第10回 イントネーションの意 非下降声調の表す意味と用法／課
味(2)：非下降声調 題 10
- 第11回 イントネーションの定 複文・重文の音調曲線
型(1)
- 第12回 イントネーションの定 対照的な要素を含む文の音調曲線
型(2)
- 第13回 イントネーションの定 慣習的な音調曲線
型(3)
- 第14回 課題報告、試験 音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を目安とする。

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。

この授業では、10回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。(訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。) 提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上で返却される。チェックを受けた部分をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

- ・Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
- ・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み(35%)、課題(35%)、試験(30%)に基づき成績を評価する。

・授業への取り組みでは、練習問題の解答や小テストの成績と、授業中の発言・質問の頻度と内容を、総合的に評価する。授業外の学習活動(授業に臨むための準備)を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題では、授業で学んだ基礎を發展させて発話モデルを示す力を評価する。授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験では、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。実技を含むので、毎回の授業を時間をかけて復習しておくこと。

【学生の意見等からの気づき】

課題で毎回同じ誤りが繰り返されている場合が複数あったので、次年度は授業の最後に質疑応答、リフレクションの時間をとるようにして、理解の定着を図っていく。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システム Hoppiを使用する。

【その他の重要事項】

この授業は英文学専攻では「英語発音法A」、日本国際学専攻では「英語発音法I」の内容を前提としている。「英語発音法A」・「英語発音法I」を履修していない場合は、授業が始まるまでに、参考書に挙げた Tench (2011) の Part 1 をよく読んで理解しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育

<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton.101-120.

・Toyomi Takahashi (2008). *Unique Path*. 『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 弁別素性理論. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 音韻理論ハンドブック. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

Together with English Pronunciation A (English Pronunciation I), English Pronunciation B (English Pronunciation II) aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses prosodic aspects of English pronunciation. Its topics include the location and interpretation of stress in different domains (word/phrase/sentence), the components of intonational phrase and their pitch patterns, the location of nuclear accents and their focusing function, and the types and usage/meaning of tunes. These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

LIN500B7

行動科学方法論 I

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。

・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法

・実験設計およびデータの統計処理

<講義題目>言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようにすること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義およびパソコン実習。

試験には各人ごとに採点コメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること、注目していない要因の効果の除去
第4回	論文執筆の基本	構成、引用の方法
第5回	統計学的検定の基本1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t 検定（その1）	被験者間要因の場合
第11回	t 検定（その2）	1 サンプルの t 検定
第12回	t 検定（その3）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
わからない箇所は教員や周囲に質問すること。

また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしていただくこと。

【テキスト（教科書）】

学習支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.

大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.

Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology*. (6th ed.) Wadsworth.

Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS*. Sage.

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

全員の理解度をもっと上げたいです。

【その他の重要事項】

この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An introduction to research methodology in linguistic sciences, covering:

- Scientific construction and evaluation of theories

- Experimental design and statistical data analysis

LIT500B7

西欧比較文学 I

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会の追求は人類の歴史の中の根源的なテーマである。現代においても、あらゆる国家はそれを目指して考え続け、努力しているといっても過言ではない。

そのために理想社会、あるいはユートピアについて、とりわけ思想、文学、映画、芸術においてどのように考えられ、受容され、作用してきたのかを Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を講読しながら、考える。

とりわけ、＜現在＞という時点からのアクチュアルな問題提起として、現代の文学をも分析対象にいい、さまざまな文学作品を読みながら、現代文学の取り組みを考察する。

反ユートピア（ディストピア）、サイエンス・フィクション、映画、パラダイス・ロストなど現代の（反）ユートピア像の歴史に的を絞って、文献によって探っていく。＜講義題目＞現代のディストピアとユートピア像

【到達目標】

現代のユートピアの歴史を理解することができる。

また、その際に Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』やこの講義で挙げられた、あるいは考察対象とする小説や作品を読み、論じるので、そうした現代作家や作品の取り組みを知り、その小説や作品をユートピアという視点から批判的に分析できるようになる。

そうした討議の際に、自分の意見を明確に表現し、伝えることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的な概説として Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を読んでゆく。

ただし、総論から入るのではなく、各論から入って最終的に総論としてユートピアを考えるほうが理解を得やすい。そのために、後半部から読み進めたい。

また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア関連の文学作品（おもに米、英、カナダ、日本の作品）を比較文学的に読み、また思想、芸術などの諸分野においてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、プレゼンてもらう。また課題に対しては、次回の授業にフィードバックを行い、さらに全体で議論・検討を加えていきたい。

また、学期末の 2 回を使って、レポート発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第 2 回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解①	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（1）

第 3 回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解②	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（2） ザミヤーチン『われら』
第 4 回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter13 の読解③	Varieties of Dystopia: Totalitarianism and After in Satire and Reality 訳読と議論（3） オーウェル『1984』
第 5 回	Chapter13 の後半部 のまとめ 現代社会とディストピア	ル・グイン『所有せざる人々』 ウエルバック『服従』 をめぐらる問題
第 6 回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解①	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（1）
第 7 回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解②	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（2）
第 8 回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter14 の読解③	Utopia, Science Fiction and Film: The Final Frontier 訳読と議論（3） クラーク『2001 年 宇宙の旅』
第 9 回	Chapter14 のまとめ	バージェス『時計仕掛けのオレンジ』 ゴールディング『蠅の王』 をめぐらる問題
第 10 回	アトウッド『侍女の物語』	アトウッドとディストピア
第 11 回	カズオ・イシグロ『私 を離さないで』 をめぐらる問題	イシグロと現代と科学 吉田修一『橋を渡る』
第 12 回	Gregory Claeys 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 まとめ	まとめとプレゼンテーション
第 13 回	ユートピアと意識され たユートピア	レポート発表・討議
第 14 回	現代をめぐらる問題に関 する考察	レポート発表・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体を通して基本文献である Claeys のテキストの精読をおこなってこること。

また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claeys
『Searching for Utopia. The History of an Idea』
Thames and Hudson
New York
ISBN-978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。

これはコピーにて配布する。

また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献に関するものが参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題（最終回での各人のレポート発表）50 %
 平常点（訳読・レジュメ・プレゼンテーション・議論）50 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間をもっととり、議論を深めていきたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ドイツ文学、比較文学・文化、比較芸術

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術における諸テーマの扱われ方③ユートピア論、ファム・ファタル論

＜主要研究業績＞

①『英語文化研究』共著、2013 年、成美堂

②『英文学の風景』共著、2012 年、文化書房博文社

③「文学・科学・知の相互浸透—イシグロ。ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」

『言語と文化』第 17 号、2020 年、法政大学 言語・文化センター

④「知の獲得と語りのあて先— Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き」『異文化の諸相』第 39 号、日本英語文化学会、2019 年、

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』（共訳）2007 年、法政大学出版局

【Outline and objectives】

The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys' Searching for Utopia. The History of an Idea 《.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including contemporary literature.

To provide graduate students with opportunities to read and treat American, English, Canadian and Japanese literature from the perspective of comparative literature.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

LIT500B7

西欧比較文学Ⅱ

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会をどう考えるか、またどのようにそこに近づいていくのかは人類の歴史の中で考えられ続けてきたテーマである。

現代においても国家や政府、また個人がそれについて思索し、実現を目指し努力している。

理想的な社会のなかで＜ユートピア＞といわれるものの近代における定義を検証し、ユートピアが人間や社会にどのように発生し、変化を遂げ、受容され、作用したのか、ユートピアの意味を概念的に見てゆくことが秋学期の目的である。

秋学期のこの授業でも、さらにテキストを読みながら、現代におけるユートピア文学、ユートピア的思想を検討する。

ユートピアに関する思想を社会の中に位置づけることを目的とする。従って、さまざまなユートピア文学にも触れる。

こうした作業を通して、ユートピアまた反ユートピア（ディストピア）の意味や機能についても考察する。

＜講義題目＞

ユートピア像の歴史と受容

【到達目標】

近現代以降のユートピアに関する歴史的俯瞰と意味付けを理解することが目標である。

またその際に、Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』やこの講義で挙げられた作品を論じるので、それらを理解し、批判的に分析できるようになることが、第二の目標である。

最後に、そうした討議の際に自分の意見をわかりやすく表現し、伝え、また他者の意見を理解し、議論できるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的、概念的な整理としてユートピアの歴史や意義、範囲の基本文献である Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を基本文献として読みすすめてゆくが、また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア像を思想的、宗教的、また社会実現の試みにおいてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、訳読・プレゼンしてもらう。独自の観点でいいので、議論・検討に積極的に加わってほしい。

プレゼンテーション、考えるべき課題についてのフィードバックは次回の授業内でその都度、行う。

学期末の 2 回を使って、レポート発表を行ってもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第 2 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ① について	テキストの読解とジュール・ヴェルヌとその作品について

第 3 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ② について	テキストの読解と H.G. ウェルズ とその作品について
第 4 回	Chapter 12 The Emergence of Science Fiction ③ について	テキストの読解と R.L. スティー ブンソンとその作品について
第 5 回	Chapter 11,12 The Emergence of Science Fiction: Inventing Progress	テキストの読解と M.W. シュ リー、ペラミーとその作品につ いて
第 6 回	Chapter 9,10 The Second Age; Utopia as Community について	共同体としてのユートピア（現実 世界での実現へ）
第 7 回	Chapter 8 Ideal Cities について	理想の都市、都市国家としての ユートピア
第 8 回	Chapter 5,6,7 Revolution and Enlightenment: The Age of Defoe and Swift	新世界、デフォーとその作品につ いて
第 9 回	Chapter 4 A Genre Defined に ついて	領域の定義 トマス・モアとその作品について
第 10 回	Chapter 3 Extra-European Visions	東洋、オリエントのユートピア像 と概念について
第 11 回	Chapter 2 Christian Archetypes	キリスト教的原理 楽園思想、千年王国について
第 12 回	Chapter 1 The Classical Age	古典古代、黄金時代というイメー ジ
第 13 回	Conclusion Pradise Lost? ユートピアそしてユー トピアニズムとは何 か？	テキストの読解と 世界の現状分析（環境・戦争・宗 教）について レポート発表・討議
第 14 回	プレゼンテーション	レポート発表・総評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体を通して基本文献である **Claeys** のテキストを精読してること（予習）が必要である。また、その都度のテーマについての文献を読んでくことや内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる環境を作る。授業は全体的な展望をもちつつ、時間を考慮しながら個々の例を取り上げるので、自分で気づいたものがあればそれも絶好の題材となるので、各自で授業内で取り上げることもできる。さまざまな形のユートピアを検討したい。具体的には各回のテーマと内容を参照してほしい。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claeys の『Searching for Utopia. The History of an Idea』
New York:Thames and Hudson,
ISBN 978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。

これはコピーにて配布する。

また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献が参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

レポート課題（最終回での各人のレポート発表） 50 %

平常点（訳読・レジュメ・プレゼンテーション・議論） 50 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間をもっととりたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ドイツ文学、比較文学・文化、比較芸術

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術における諸テーマの扱われ方③ユートピア論、ファム・ファタル論

＜主要研究業績＞

①『英語文化研究』共著、2013 年、成美堂

②『英文学の風景』共著、2012 年、文化書房博文社

③「文学・科学・知の相互浸透－イシグロ。ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」

『言語と文化』第 17 号、2020 年、法政大学 言語・文化センター

④「知の獲得と語りのあて先－ Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き」『異文化の諸相』第 39 号、日本英語文化学会、2019 年、

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』（共訳）2007 年、法政大学出版局

【Outline and objectives】

The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'『Searching for Utopia. The History of an Idea』.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including contemporary literature.

To provide graduate students with opportunities to read and treat American, English, Canadian and Japanese literature from the perspective of comparative literature.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

PHL500B7

西欧の思想 I

谷口 カ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代、近代の古典哲学から、現代の分析哲学までを概観しながら、哲学の基本的知識（問題提起、概念、思考方法、など）を学びます。また同時に、学術的研究における基本的作法（原文購読、論文執筆、慣用的表現、など）もできる限り習得します。

【到達目標】

西洋哲学史全体の流れ、および、以下の各哲学における基本的知識を把握することを目標とします。

- ・古代ギリシャ哲学
- ・大陸合理論
- ・イギリス経験論
- ・近代ドイツ哲学
- ・19～20 世紀哲学
- ・現代分析哲学

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的には講義形式ですが、内容に応じて議論も交えます。序論として、まず西洋哲学史全体について説明したうえで、各哲学の項目に入っていきます。授業の進め方としては、レジュメを配布し、ポイントを解説し、レジュメに書ききれない部分については、そのつど各哲学者の著作から補足していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業の案内と導入	哲学とは何か、西洋哲学史全体の流れ
第 2 回	古代ギリシャ哲学 (1)	ソクラテス以前の哲学者たち、プラトン①
第 3 回	古代ギリシャ哲学 (2)	プラトン②
第 4 回	古代ギリシャ哲学 (3)	プラトン③、アリストテレス、新プラトン学派
第 5 回	大陸合理論 (1)	近代への過渡期、デカルト
第 6 回	大陸合理論 (2)	スピノザ、ライプニッツ
第 7 回	イギリス経験論 (1)	ロック、ヒューム
第 8 回	イギリス経験論 (2)	バークリ、カント①
	～近代ドイツ哲学 (1)	
第 9 回	近代ドイツ哲学 (2)	カント②
第 10 回	近代ドイツ哲学 (3)	フィヒテ、シェリング、ヘーゲル
第 11 回	19～20 世紀哲学	ショーペンハウアー、ニーチェ、実存主義、など
第 12 回	現代分析哲学 (1)	フレーゲ、ウィトゲンシュタイン①、論理実証主義
第 13 回	現代分析哲学 (2)	ウィトゲンシュタイン②、心の哲学、ほか
第 14 回	まとめ	授業の総括、総合的議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には、興味ある哲学者の著作は読んでおくことが望ましい。授業後には、興味をもった哲学者の著作を読んでみることを望ましい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

定まった教科書は使いません。授業時にプリントを配布します。

【参考書】

シュヴェーグラー『西洋哲学史』（上・下巻）、谷川徹三・松村一人訳、岩波文庫、1958 年改版。その他、授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

上記の「到達目標」に準じて、原則として、平常点（議論への参加含む）50%、学期末レポート 50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

専門外の人でも十分に理解できるように、わかりやすい説明を心がけていきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

哲学、言語哲学、形而上学

＜研究テーマ＞

世界、心、ウィトゲンシュタインの哲学

＜主要研究業績＞

「私的言語批判による独我論の貫徹および消去」（法政大学 言語・文化センター編『言語と文化』第 13 号、2016 年）、

「心の一般概念におけるいくつかの系統的区別と錯誤——ウィトゲンシュタインの心の非対象化についての一論証——」（『法政大学大学院紀要』第 71 号、2013 年）、など

【Outline and objectives】

The main objective of this course is to understand overview of the basic major philosophical questions and problems, in addition to this, to master some basic manners and methods in graduate studies.

PHL500B7

西欧の思想Ⅱ

伊藤 克己

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ：

アリストテレスにおけるプロテー・ウーシア（第一の実有）について

アリストテレス哲学において、極めて重要な位置を占めるウーシア（実有）のうちでも、取り分けて「第一の」と限定される「プロテー・ウーシア（第一の実有）」はその哲学の核心にあります。ところが量的に最も頻繁にこの用語を使用している、『カテゴリー（カテゴリー論）』の用例は、すべての用例を代表するものとはなっていません。にもかかわらず、主に歴史的な経緯から、このいわゆる「個体」を示す用例が、代表的見解とされてきました。本集中講義では、『カテゴリー』、『形而上学』Z巻、『形而上学』Λ巻、の当該箇所の主要テキストを、総合的に検討して考察し、アリストテレスが「プロテー・ウーシア」に込めた真意を探究することを通して、哲学的思考のひとつのありかたについて学ぶことを目的といたします。

【到達目標】

集中講義で講義する毎回のテーマごとに、そのテーマについて考え、小レポートを作成することを積み重ねることによって、難解とされているアリストテレスの哲学の探究を通して、履修生諸君の哲学的思索力を鍛錬し、強化することを到達目標といたします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業の講義形式でおこないます。テーマごとに課題の小レポートを提出していただき、フィードバックさせていただきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第1回	講義全体の構成について。本講義にかかわる古代ギリシア語のキーワードについて	本集中講義全体の構成について。アリストテレスにおける用語法の問題について。古代ギリシア語の「ウーシア」の訳語が、従来、「実体」と訳されてきた経緯についてと、その訳語を「実有」と訳すことについての解説。古代ギリシア語の「ピロンビアー」が、日本語の訳語として「哲学」として定着してきた経緯について。古代ギリシア語の「カテゴリー」と、現代日本語に代表される、「カテゴリー」ということばとの関係について。

第2回	『カテゴリーアイ』のテキストの性格と列挙された「カテゴリー」について	『カテゴリーアイ』のテキストとしての独自の性格の考察。『カテゴリーアイ』以外の諸著作における文脈で複数の「カテゴリー」の「枚挙」が行われている箇所を取り上げ、それらの箇所と『カテゴリーアイ』第4章における「枚挙」に関する叙述を、特に「個体」（『カテゴリーアイ』における「第一の実有」と「種」（『カテゴリーアイ』における「第二の実有」）の区別がなされているかどうか、に着目しつつの比較検討。
第3回	アリストテレスにおける「存在の類」と「あるもの」についての分類について	アリストテレスにおけるいわゆる「存在の類」とのかかわりに着目。『カテゴリーアイ』第2章における「あるもの」の四分類と、「あるもの」の分類に関連した言及のある他著作の場合との比較検討。特に「個体」が「あるもの」の分類項目として重視されているかどうかに着目しながらの考察。
第4回	「第一の実有」、「第二の実有」の区別と「実有」の分類について	「実有」を「個体」と「種」・「類」に区別し分類する、という視点と、各著作における「実有」の様々な分類との比較検討。『カテゴリーアイ』第5章におけるような「個体」と「種」・「類」の区別が、他の箇所でも「実有」を分類する際にも見出せるかどうか、という点についての考察。
第5回	「個体」としての「第一の実有」について	『カテゴリーアイ』における「第一の実有」の特徴と内実についての検討。古来、様々な形で議論されてきた、「個体」としての「第一の実有」の「個性性」にかかわる諸問題についての論及。『カテゴリーアイ』における「個体」としての「第一の実有」についてのまとめ
第6回	「エイドス」という用語の諸解釈について。『形而上学』Z巻、H巻における「エイドス」の用例について	『形而上学』Z巻における「エイドス」としての「第一の実有」の探究の開始。「エイドス」に関する諸解釈を含めて、「エイドス」という、「種」にも「形相」にもおさまらせない豊かな内容を持つ用語がどのような幅で解釈しうるのか、ということの検討。『形而上学』Z巻、H巻の構造の分析をおこない、挿入箇所と考えられる部分とそうでない部分を区別した上で、そこで使用されている「エイドス」の用例についての検討。
第7回	「第一の実有」としての「エイドス」の言及箇所について。「たましい」としての「第一の実有」について	「エイドス」の特徴を抽出して考察の基準の確保。「第一の実有」としての「エイドス」の言及箇所の検討。帰結としての具体例としての「たましい」の提示と、「たましい」としての「第一の実有」の内実の探究。
第8回	「エイドス」としての「第一の実有」の意義について	挿入箇所や参照箇所も含めた、「エイドス」をめぐる諸問題の考察。『形而上学』Z巻における「第一の実有」とされる、「エイドス」の内実と意義との解明のまとめ。

- 第9回 「第一の哲学」の探究対象としての「第一の実有」について 『形而上学』Λ巻を中心とした、「第一の哲学」の探究対象としての「第一の実有」という側面の、テクストに即しての確認。アリストテレスにおける「第一の哲学」の重要性と、「第二の哲学」とのかかわりについての考察。
- 第10回 「離されうる、動かされえない」「第一の実有」について 「第一の実有」の具体例として示唆された「離されうる、動かされえない「実有」」の内実について最も明確に叙述している文脈としての、『形而上学』Λ巻の第6章と第7章の一群の諸実例についての検討。
- 第11回 「ヌース」としての「第一の実有」について 『形而上学』Λ巻の課題としての、「実有」の探求。「実有」の中でも最高の「実有」としての「第一の実有」の提示。その際の「第一の実有」とは「ヌース」であり、「第一の動かされえずに動かすもの」であることの確認。アリストテレスの哲学における「ヌース」の重要性の指摘。
- 第12回 「動かされえない始源」としての「第一の実有」の意義について 『形而上学』Λ巻は、単に最初期の孤立した思考を示すのではなく、或る意味では『形而上学』全体の精髓を示しているという点の指摘。「第一の哲学」を見据えて、全領域的に「実有」を問題とした際の「第一の実有」が、「ヌース」としての「実働態」である「動かされえない始源」と密接にかかわっている、という点の確認。
- 第13回 「第一の実有」の諸実例の相互関連について 本集中講義の第1回から第12回までの考察を踏まえた上で、『カテゴリーアイ』における「個体」とその具体例としての「その或る人」、『形而上学』Ζ巻における「エイドス」とその具体例としての「たましい」、『形而上学』Λ巻における「離されうる、動かされえない「実有」」とその具体例としての「ヌース」、等の「第一の実有」の諸例の相互関係に関する総合的考察。
- 第14回 まとめ・「プロテー・ウーシア（第一の実有）」の意義について アリストテレスにおける「プロテー・ウーシア（第一の実有）」という表現が、『カテゴリーアイ』をも含む、それぞれの主題に応じていわばテーマに応じて互いに相補い、役割分担をしながら柔軟に叙述されていることが十分に認められるとともに、「第一の哲学」を見据えて、『形而上学』Ζ巻においては、「感覚的な実有」の根拠としての「内にあるエイドス」「たましい」を提示し、その内実を語り、そして『形而上学』Λ巻においては、全領域的に「実有」を問題とした際の、本来の「第一の実有」が、「第一の動かされえずに動かすもの」「ヌース」である、と主張し、その内実を論じている、という帰結の提示。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

集中講義当日の講義終了後に、その日の講義のそれぞれのテーマについて考えたことについての各テーマごとの小レポート（400字以内）を作成し、原則としてその次の集中講義の機会の際に提出すること。

【テキスト（教科書）】

担当者の博士論文を基礎とした集中講義のため、必要に応じて授業にて資料をお配りいたしますので、テキスト（教科書）は使用しません。

【参考書】

担当者の博士論文を基礎とした集中講義のため、必要に応じて授業にて資料をお配りいたしますので、参考書は使用しません。

【成績評価の方法と基準】

集中講義の毎回のテーマに対応した小レポートを、全部で10回以上は提出していただきますので、それらを合計して100%として評価いたします。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規集中講義につき、アンケートを実施しておりません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域><研究テーマ><主要研究業績>

<専門分野>

西洋古代哲学

<研究テーマ>

アリストテレスのプロテー・ウーシア（第一の実有）論

<主要研究業績>

・『「形而上学」Ζ巻における「第一の実有」としての「エイドス」の解釈について』,2006年8月、『西洋古典研究会論集』第15号,pp.33-77.
・『「たましい」が「離されうる」ことについて —アリストテレスにおける第一の哲学と第二の哲学—』,2019年3月、『ギリシャ哲学セミナー論集』XVI,pp.49-61.

・「プロテー・ウーシア アリストテレスにおける「第一の実有」について」,2020年2月,博士論文,立正大学大学院.

【Outline and objectives】

Theme: On Prote Ousia(first reality) in Aristotle

Among the Ousia(reality) that occupy an extremely important position in the Aristotelian philosophy, the “Prote Ousia(first reality)”,which is limited to “first”, is the core of that philosophy. However, the example of “Category”, which uses this term most frequently in terms of quantity, is not representative of all examples. Nevertheless, mainly for historical reasons, this so-called “individual” example has been regarded as a representative view. In this intensive lecture, the main texts of the relevant parts of “Category”, “Metaphysics” Ζ, and “Metaphysics” Λ, are comprehensively examined and considered, and search for the true meaning which Aristotle put them in “Prote Ousia”. And by exploring these issues, we aim to learn one way of philosophical thinking.

HIS500B7

東北アジアの文化伝播 I - 1

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を修得し、それを各自が保有する資料へ適用することによってその理解を深める。この過程で、考古学の課題・問題点の把握能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料にそれらの方法を適用する。修士2年の場合は、状況に応じ、課題の順番を入れ替える。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また、課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論の発展させ、課題の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第2回	編年研究の基礎1	型式学的前提、属性の抽出と操作方法
第3回	編年研究の基礎2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第4回	編年研究の基礎3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第5回	実践的研究の検討1	モンテリウスの研究1
第6回	実践的研究の検討2	モンテリウスの研究2
第7回	実践的研究の検討3	セリエーション1
第8回	実践的研究の検討4	セリエーション2
第9回	論文の検討1	旧石器時代論文
第10回	論文の検討2	縄文時代論文
第11回	論文の検討3	弥生時代・他論文
第12回	資料の検討1	旧石器時代資料
第13回	資料の検討2	縄文時代資料
第14回	資料の検討3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。テキストの熟読、課題に関連する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 The Theory and Practice of Archaeology. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 Archaeology: Theories, Methods, and Practice. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50％）とレポート（50％）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼をおいて検討する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本旧石器時代、縄文時代

＜研究テーマ＞

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

＜主要研究業績＞

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』

2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』Ⅱ 2009年

新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年

「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018年

「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020年

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of the chronology in the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to make chronology of their own archaeological materials.

HIS500B7

東北アジアの文化伝播 I - 2

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。春学期パターンソンのテキストを継続して使う。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理・方法の理解を深め、それを各自が保有する資料に適用することによって実践的な能力の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。

最初の数回の授業は、パターンソンのテキストの読解を行う。修士 2 年の場合、状況に応じて課題の順番を入れ替える。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論を進展させ、課題内容の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	春学期の課題・方法の整理
第 2 回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第 3 回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第 4 回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第 5 回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第 6 回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第 7 回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第 8 回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第 9 回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第 10 回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第 11 回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第 12 回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第 13 回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第 14 回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50 %）とレポート（50 %）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23 号 2007 年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560 号 2007 年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007 年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』

2008 年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』II 2009 年

新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25 号 2010 年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013 年

「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018 年

「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020 年

【Outline and objectives】

This course deals with the chronological and typological methods and theories of the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to understand many kinds of the methods and theories, and apply them to the participants' materials.

HIS500B7

東北アジアの文化伝播Ⅱ－1

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術を高める必要がある。本講義では考古学資料から情報を引き出すための方法論について、資料調査（整理・修復）・講読と発表を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

1) 考古学資料の整理・修復等の方法に関する実践・検討

2) 考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内を行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	実習資料の概要把握	対象資料の選定と資料整理に関わる予備調査
第 3 回	資料整理の実践（1）	土器の拓本
第 4 回	資料整理の実践（2）	土器の断面実測
第 5 回	資料整理の実践（3）	写真撮影
第 6 回	資料整理の実践（4）	事実記載
第 7 回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第 1 章）講読（1）
第 8 回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第 1 章）講読（2）
第 9 回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第 2 章）講読（1）
第 10 回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第 2 章）講読（2）
第 11 回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第 3 章）講読（1）
第 12 回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第 3 章）講読（2）
第 13 回	考古学資料の見学	博物館等での考古学資料の見学と解説
第 14 回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の実習計画の立案

第 2 回 選定した考古学資料に関する学習と整理方針のまとめ

第 3 回～第 6 回 実習内容の復習 用具・用材の特性の理解

第 7 回～第 12 回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成

第 13 回 見学対象資料についての事前学習

第 14 回 成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）

討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末リポート（成果報告）30 %（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午玉山遺跡」『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

HIS500B7

東北アジアの文化伝播Ⅱ－2

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。
実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術も高める必要がある。本講義では考古学資料から得られる情報を表現するための方法について、資料実測・文献講読と発表等を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

- 1) 考古学資料の整理・作図の方法に関する実践・検討
- 2) 考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	実習資料の検討	対象資料の概要把握と整理方法の検討
第 3 回	資料整理の実践（1）	土器の実測
第 4 回	資料整理の実践（2）	石器の実測
第 5 回	資料整理の実践（3）	資料のトレース
第 6 回	資料整理の実践（4）	デジタルトレースの概要と実技
第 7 回	資料整理の実践（5）	挿図・図版の構成
第 8 回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第 4 章）講読（1）
第 9 回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第 4 章）講読（2）
第 10 回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第 5 章）講読（1）
第 11 回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第 5 章）講読（2）
第 12 回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第 6 章）講読（1）
第 13 回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第 6 章）講読（2）
第 14 回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

- 第 1 回 自己の実習計画の立案
- 第 2 回 発掘調査報告書等からみる報告計画のまとめ

第 3 回～第 4 回 実習内容の復習

第 5 回～第 7 回 トレースの復習と図化の完了

第 8 回～第 13 回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末レポート（成果報告）30 %（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午玉山遺跡」『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午玉山遺跡」『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

HIS600B7

東北アジアの文化伝播Ⅲ－1

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

考古学資料を用いた実践研究の成果を受講者各々が発表し、内容について検討する。受講者は研究論文の体裁と形式をふまえたうえで、具体的な考古学資料を提示するとともに考古学の方法にもとづいて発表内容を作成する。実際の発表においてはレジュメをまとめ、研究の詳細を報告するものとする。次いで全員での討論に移り、発表者の研究目的と問題の所在がいかなるところにあり、設定された問題が適切であるかどうかを検討し、さらに取り扱う資料群の全体が議論にふさわしいものであるのか、提示された方法が適切であるか、考察および結論が正しいか等についても検討する。

また、本授業では各自の研究に関連する課題論文の講読も合わせて行うこととする。受講者は研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

これらの後に、自らの論文の構想発表指導を行う。

上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 3 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第 4 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 5 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）

第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 11 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 12 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 13 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 14 回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の学習計画の立案

第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）

個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

HIS600B7

東北アジアの文化伝播Ⅲ－２

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

考古学の分野で自らの論文を執筆する受講者に対して、論文構想の提示、研究上の最重要文献の講読、実践研究の報告などを行う。まず、自らの論文構想を提示し、具体的な資料検討状況についても報告し、それにもとづいた討議を行う。

次いで、今後の研究の核となる先行研究の成果について論文をもとに報告し、研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

さらに、受講者それぞれの研究状況を具体的に報告し、討議を行う。上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 3 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 4 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 5 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 11 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）

- 第12回 研究実践発表（3） 受講者による実践研究の発表と討議（3）
- 第13回 研究実践発表（4） 受講者による実践研究の発表と討議（4）
- 第14回 成果提出と講評 期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

- 第1回 自己の学習計画の立案
- 第2回～第5回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
- 第6回～第9回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習
- 第10回～第13回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
- 第14回 成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）

個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）

討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末リポート（成果報告） 30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会 2014年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会 2017年）
「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第45集（法政考古学会 2019年）
「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅰ－1

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。春学期は第22条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	田令集解第22条還公田条講読（1）	田令第22条還公田条集解A部分の論理展開
第3回	田令集解第22条還公田条講読（2）	田令第22条還公田条集解古記による大宝令の復原
第4回	田令集解第22条還公田条講読（3）	田令第22条還公田条の意味
第5回	田令集解第23条班田条講読（1）	田令第23条班田条集解A部分の論理展開
第6回	田令集解第23条班田条講読（2）	田令第23条班田条集解B部分の論理展開
第7回	田令集解第23条班田条講読（3）	田令第23条班田条集解C部分の論理展開
第8回	田令集解第23条班田条講読（4）	田令第23条班田条集解D部分の論理展開
第9回	田令集解第23条班田条講読（5）	田令第23条班田条集解古記による大宝令の復原
第10回	田令集解第23条班田条講読（6）	校田とは何か
第11回	田令集解第24条授田条講読（1）	田令集解第24条授田条集解A部分の論理展開
第12回	田令集解第24条授田条講読（2）	田令集解第24条授田条集解古記による大宝令の復原

- 第13回 田令集解第24条授田 課役とは何か
条講読(3)
- 第14回 班田収授法のまとめ 半年間の講読を踏まえて班田制とは何かについて意見交換を行う。
(1) 修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に2時間程度、聴講者の準備学習は標準的に1時間程度を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書〈歴史篇〉第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する（75%相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25%相当）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.
We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅰ－2

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけてもらいます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は第25条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	田令集解第25条交錯条講読(1)	田令集解第25条交錯条解A部分の論理展開1
第3回	田令集解第25条交錯条講読(2)	田令集解第25条交錯条解A部分の論理展開2
第4回	田令集解第25条交錯条講読(3)	田令集解第25条交錯条解A部分の論理展開3
第5回	田令集解第25条交錯条講読(4)	田令集解第25条交錯条解B部分の論理展開1
第6回	田令集解第25条交錯条講読(5)	田令集解第25条交錯条解B部分の論理展開2
第7回	田令集解第25条交錯条講読(6)	田令集解第25条交錯条解B部分の論理展開3
第8回	田令集解第26条官人百姓条講読(1)	田令集解第26条官人百姓条A部分の論理展開1
第9回	田令集解第26条官人百姓条講読(2)	田令集解第26条官人百姓条A部分の論理展開2
第10回	田令集解第26条官人百姓条講読(3)	田令集解第26条官人百姓条A部分の論理展開3
第11回	田令集解第26条官人百姓条講読(4)	百姓の字義をめぐって
第12回	田令集解第26条官人百姓条講読(5)	官人の字義をめぐって

- 第13回 田令集解第26条官人 自院の土地所有をめぐって
百姓条講読(6)
- 第14回 班田収授法のまとめ 半年間の講読を踏まえて班田制の
(2) 多様な側面について意見交換を行
う。修論執筆に資する内容にす
る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に2時間程度、聴講者の準備学習は標準的に1時間程度を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司木令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書〈歴史篇〉第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する(75%相当)。また討論においては自主的な発言の内容を重視する(25%相当)。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界ー城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66
2007年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後ーFileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position. We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅱ－1

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公開された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較史ながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。
海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。本年度は田令集解第22条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（1）	日本田令第22条相当条文の比定と配列
第3回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（2）	日本田令第22条相当条文の読解
第4回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（3）	日本田令第22条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第5回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（1）	日本田令第23条相当条文の比定と配列
第6回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（2）	日本田令第23条相当条文の読解（1）
第7回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（3）	日本田令第23条相当条文の読解（2）
第8回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（4）	日本田令第21条相当条文と武徳令・開元7年令との比較（1）
第9回	天聖田令（日本令第223条相当）講読（5）	日本田令第21条相当条文と武徳令・開元7年令との比較（2）
第10回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（6）	日本田令第23条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論完成にむけての報告会を兼ねます。
第11回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（1）	日本田令第24条相当条文の比定と配列

第12回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（2）	日本田令第24条相当条文の読解
第13回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（3）	日本田令第24条相当条文と武徳令・開元7年令との比較
第14回	秋学期の総括	唐代の田種と吐魯番文書にみえる田制実例との比較を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復元根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復元研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、海外史料である天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70%）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66
2007年、『「在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録」のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position. We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅱ－2

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公刊された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。
海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は田令集解第25条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（1）	日本田令第25条相当条文の比定と配列1
第3回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（2）	日本田令第25条相当条文の比定と配列2
第4回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（3）	日本田令第25条相当条文の読解1
第5回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（4）	日本田令第25条相当条文の読解2
第6回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（5）	日本田令第25条相当条文の読解3
第7回	天聖田令（日本令第25条相当）講読（6）	日本田令第25条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第8回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（1）	日本田令第26条相当条文と比定と配列1
第9回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（2）	日本田令第26条相当条文と比定と配列2
第10回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（3）	日本田令第26条相当条文の読解1
第11回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（4）	日本田令第26条相当条文の読解2
第12回	天聖田令（日本令第26条相当）講読（5）	日本田令第26条相当条文の読解3。

- 第13回 天聖田令（日本令第26条相当）講読（6） 日本田令第26条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
- 第14回 秋学期の総括 日唐の寺田の違いについて比較史的に総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、海外史料である天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70%）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66
2007年、『「在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録」のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position. We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

HIS500B7

王権の政治文化Ⅰ

春名 宏昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「平安時代と貴族社会」と題して講義します。平安前期の改革の時代の国家・政治のあり方、貴族たちのあり方を理解するようつとめます。

【到達目標】

平安時代の貴族社会のあり方の把握を目指します。基礎的な知識を得、その上でそれぞれの事象に興味を持ってアプローチし、国家・政治の本質を理解できる能力を身につけることができます。平安時代の官僚のあり方は現代の日本にも通じるオンタイムの問題ですから、現代の政治が抱える問題点も理解できるようになるでしょう。そのような視点から課題レポートにも取り組んで下さい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

平安前期の改革の時代から平安中期の王朝貴族の時代への移行期間に関しては、嵯峨天皇・藤原良房・藤原基経・宇多天皇に注目して国家・政治のあり方の変化を見ていきます。この授業では、一般啓蒙書に書かれることのない貴族たちのあり方を見ていきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。課題を課した場合は、次の授業でコメントします。本科目は対面授業で行いますが、参加が難しい場合はハイフレックス授業を検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし/No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要の説明
第2回	〈時代〉の変化	ワンランク上の国家を目指して
第3回	官人たちの変化	良吏政治のスタート＝大同元年勅
第4回	天皇の性格変化	桓武天皇と平城天皇
第5回	良吏政治の展開	嵯峨朝への政策継承
第6回	良吏政治の実践	弘仁三年勅から天長元年官符へ
第7回	承和の変の前奏	淳和朝・仁明朝の政治状況
第8回	承和の変	母橘嘉智子と娘正子内親王
第9回	貴族の時代へ	文徳朝・清和朝の様相
第10回	応天門の変	安定の時代、摂関政治へ
第11回	源氏と藤原氏	源氏の左大臣と藤原氏の右大臣
第12回	藤原基経の国政運営	清和天皇の悲嘆と陽成天皇の廃位
第13回	阿衡の紛議	昌泰の変へ
第14回	平安前期という時代	平安時代史概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平安時代に関して問題意識を持つには、その前提として平安前期・中期の知識が必要ですし、奈良時代から平安時代への推移についても概括的な理解は必要です。それらを得るためには、どれでもいいですから参考書（該当巻）を読んでみましょう。ただし、著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。

この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということ述べます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。また、講義の対象とする嵯峨朝の前の時代を知るには私の『平城天皇』（吉川弘文館人物叢書）を、延喜年間以降については『岩波講座日本歴史』第5巻の「摂関時代と政治構造」を読んで下さい。この講義の準備・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

春名宏昭『〈謀反〉の古代史』（吉川弘文館）。
授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波書店の『シリーズ日本の古代史』（新書）、『岩波講座日本歴史』の該当巻。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで評価します。

基準は平常点 30 %、レポート 70 %です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあられます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作ってください。

【Outline and objectives】

This lecture is attended under the heading of “The Heian period and the aristocracy”. We try to understand how should be the nation and aristocrats in the former term of the Heian period when the political innovation was extensively carried out.

HIS500B7

王権の政治文化Ⅱ

春名 宏昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「続日本紀の史料学」と題して講義を行ないます。八世紀の日本は、当時先進の文化を誇った中国のような国家建設を目標に掲げて邁進していました。『続日本紀』を題材に史料への取り組み方を学び、日本古代史における歴史の流れ、あり方の把握を目指します。

【到達目標】

続日本紀の記事を数点取り上げ、史料へのアプローチの仕方を習得することができる。この授業を通して、奈良時代の基礎的な理解を身につけ、他の史料に対してもつねに興味を持って臨めるようになり、それを論理的に解析し正しい理解に到達できる技能を身につけられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

取り上げた記事を糸口に、その背後にある問題点を探り出し検証していきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すとし新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

課題を課した場合は、次の授業でコメントします。

本科目は対面授業で行いますが、参加が難しい場合はハイフレックス授業を検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の概要の説明
第2回	天平二年の太政官奏（1）	続日本紀の3つのテキスト
第3回	天平二年の太政官奏（2）	天平二年六月甲寅朔条の紹介
第4回	天平二年の太政官奏（3）	関連史料の検討
第5回	税司主鑑（1）	大宝令施行直後の地方政治
第6回	税司主鑑（2）	大宝二年二月乙丑条の紹介
第7回	税司主鑑（3）	関連史料の検討
第8回	皇太妃と中宮職（1）	大宝元年七月壬辰条の紹介
第9回	皇太妃と中宮職（2）	天皇のキサキ〈妃と夫人・嬪〉
第10回	慶雲元年の公廩銀（1）	慶雲元年七月庚子条の紹介
第11回	慶雲元年の公廩銀（2）	関連史料の検討
第12回	衛士の代易（1）	和銅四年九月甲戌条の紹介
第13回	衛士の代易（2）	関連史料の検討
第14回	奈良時代史概観	これまでの授業内容をふまえて奈良時代を概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

取り上げた記事が含む意味を理解するためには、それぞれの記事に現れた事象の時代背景を知る必要があります。そのためには、どれでもいいですから参考書（奈良時代該当巻）を読んでみて下さい。著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。

この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということを書いていきます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。
この講義の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

岩波書店・新日本古典文学大系『続日本紀』が基本です。他に一般啓蒙書として、中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波新書『シリーズ日本の古代史』、『岩波講座日本歴史』の該当巻があります。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで評価します。基準は平常点 30 %、レポート 70 %です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史

〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制

〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』（吉川弘文館）

『平城天皇』（吉川弘文館）

『皇位継承 歴史をふりかえり変化を見定める』（共著、山川出版社）

『〈謀反〉の古代史 平安朝の政治改革』（吉川弘文館）

【Outline and objectives】

This lecture is attended under the heading of “The world of Shokunihongi”. In the way of taking up some descriptions of Shokunihongi, we were to learn how to grapple with problems in order to understand how Japan changed in the ancient regime.

HIS500B7

天皇制と政務・儀礼 I

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第 2 回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第 3 回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第 4 回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 5 回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 6 回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 7 回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 8 回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 9 回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 10 回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 11 回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。

第12回	武芸関係史料の検討 (儀式書・法制史料)	武芸に関わる政務・儀式について 儀式書・法制史料から検討します
第13回	武芸関係史料の検討 (古記録・編年史料)	同じく古記録・編年史料から検討 します。
第14回	武芸関係史料の検討 (儀式・政務次第の整理)	それらの政務・儀式の内容・次第 を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「古代の馬の生産と地域社会」（『歴史評論』839 2020年）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）
「正倉院文書と古代史料学」（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B7

天皇制と政務・儀礼Ⅱ

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討 (儀式書・法制史料)	仏事に関わる政務・儀式について 儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討 (古記録・編年史料)	同じく古記録・編年史料から検討 します。
第4回	仏事関係史料の検討 (儀式・政務次第の整理)	それらの政務・儀式の内容・次第 を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の 歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷 を整理し、歴史的性質を検討しま す。
第6回	神事関係史料の検討 (儀式書・法制史料)	神事に関わる政務・儀式について 儀式書・法制史料から検討します
第7回	神事関係史料の検討 (古記録・編年史料)	同じく古記録・編年史料から検討 します。
第8回	神事関係史料の検討 (儀式・政務次第の整理)	それらの政務・儀式の内容・次第 を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の 歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷 を整理し、歴史的性質を検討しま す。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検 討（儀式書・法制史 料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式につ いて儀式書・法制史料から検討し ます。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検 討（古記録・編年史 料）	同じく古記録・編年史料から検討 します。

第 12 回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 13 回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 14 回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第 1・2・3 編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編 3』山梨県、2001 年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編 1』2004 年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（1001%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史科学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019 年
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018 年）
「正倉院文書と古代史科学」（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016 年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B7

日本の歴史と宗教

及川 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の 16 世紀末～17 世紀初頭は城郭建設の時代である。当該期の城郭建設に関する大名間もしくは大名と家臣の間で取り交わされた書状を中心に読解し、当時の政治・社会の在り方について考える。

【到達目標】

16～17 世紀の日本史を考えるうえで、書状の読解は重要な要素であるが、難しい点の一つは、書状には基本的に日付のみで年次が記されないことにある。書状の年次を確定することは、その内容を正確に把握するうえで必要不可欠であり、一方で書状の年次を確定するためには、その内容を正確に把握しなければならない。本授業では書状を中心として 16～17 世紀の史料読解の基礎的な技術を獲得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回は教員側で史料読解の方法を例示する。その後は担当者を決めて、担当史料の内容解釈・解説をしてもらい、参加者全員で討論する。教員側からは関連史料などを提示し解説する。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。
なお、授業は ZOOM を用いて行う。新型コロナウイルス感染症の状況が劇的に改善した場合は対面授業に戻る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業方法と使用テキストに関する説明。
第 2 回	名古屋城建設に関する史料を読む ①	教員による史料読解の例示
第 3 回	名古屋城建設に関する史料を読む ②	教員による史料読解の例示
第 4 回	名古屋城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 5 回	名古屋城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 6 回	大坂城建設に関する史料を読む ①	担当者による報告と討論
第 7 回	大坂城建設に関する史料を読む ②	担当者による報告と討論
第 8 回	大坂城建設に関する史料を読む ③	報告者による報告と討論
第 9 回	大坂城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 10 回	江戸城建設に関する史料を読む ①	担当者による報告と討論
第 11 回	江戸城建設に関する史料を読む ②	担当者による報告と討論
第 12 回	江戸城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 13 回	江戸城建設に関する史料を読む ④	報告者による報告と討論
第 14 回	まとめ—書状から読み解く時代性	第 13 回までの全体の内容について討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

報告担当者は、担当史料を読解し、その年次・内容について十分に調査検討することが求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

教科書は用いず、テキストはプリントを配布する。

【参考書】

『大日本史料』第十二編之一～六十二

『佐賀県史料集成』一～三〇

『佐賀県近世史料』第一編・第二編

『大日本近世史料』細川家史料

『出水叢書 綿考輯録』一～四

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での担当箇所の報告と授業への参加度）により評価する。（100％）

【学生の意見等からの気づき】

関連史料なども使いながら、中近世の政治・社会が具体的にイメージできるようにしたい。また実践を通じて史料読解の方法が身に着くようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

ZOOM を利用できるインターネット環境。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルス感染症流行の状況により、ZOOM を用いて実施する。

URL は学習支援システムの当該授業のページで通知する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本中・近世史

＜研究テーマ＞

中世・近世の都市・流通史研究、中近世移行期の社会経済変動の研究

＜主要研究業績＞

論文「現場監督する大名－多久家文書にみる公儀普請－」小宮木代良編『近世前期の公儀軍役負担と大名家－佐賀藩多久家文書を読みなおす－』（岩田書院、2019 年）

論文「旅行者と通行証－関所通過のメカニズム－」高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世－史料の機能、日本とヨーロッパ－』（東京大学出版会、2017 年）

編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告 2015-3、2016 年

論文「中世の戦争と商人」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学 5 戦争と平和』竹林舎、2014 年）

論文「町の経済－算用帳にみる京都の人的結合－」（高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市－史料の魅力、日本とヨーロッパ－』東京大学出版会、2009 年）

論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝保鎮夫編『寺院・検断・徳政－戦国時代の寺院史料を読む－』山川出版社、2004 年）

【Outline and objectives】

From the end of the 16th century to the beginning of the 17th century, Japan entered the era of castle construction. Read mainly the letters regarding the construction of the castle during that period, and think about the state of politics and society at that time.

HIS500B7

古文書から読む江戸社会・入門編 I

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究において、くずし字の読解能力を身につけていることは、研究の幅を大きく広げると同時に、学問をより深めるものとなる。本授業は、基礎的な読解能力を養成することを目的とする。あわせて基本的な近世文書の種類を覚えていってもらいたい。

【到達目標】

- ①くずし字の読解能力を身につける。
- ②基本的な近世文書の種類を覚える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習を併用するかたちをとる。古文書のコピー Hoppii にアップするので、まずは自力で読解に取り組む（教室でプリントは配布しない）。授業時に割り当てるので、学生はこれを板書し、答え合わせをする。教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	くずし字の辞典について
第 2 回	古文書読解入門	近世史料学講義
第 3 回	検地帳読解（1）	数字を覚えよう
第 4 回	検地帳読解（2）	単位を覚えよう
第 5 回	武家屋敷組合名簿読解（1）	名前を覚えよう
第 6 回	武家屋敷組合名簿読解（2）	通称を覚えよう
第 7 回	領地宛行状読解	大名家領の安堵
第 8 回	年貢割付状読解	年貢請求書
第 9 回	年貢皆済目録読解	年貢領収書
第 10 回	宗門人別改帳読解	江戸時代の家族
第 11 回	五人組帳前書読解	百姓への規制
第 12 回	変体仮名読解	俳句をよむ
第 13 回	金子借用証文読解	年貢滞納
第 14 回	試験とまとめ	解説とも

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に、配布された古文書のコピーを辞書を引きながら予習すること。事後には、読めなかった字を必ず復習すること。とにかく古文書をながめる時間をたくさんとること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『新編古文書読解字典』（柏書房）

『くずし字用例辞典』（東京堂出版）など

辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90 %）、平常点（10 %）

【学生の意見等からの気づき】

まずは自分で辞書をひきながら読むことが大事です。

【その他の重要事項】

学部合同科目である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline and objectives】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

HIS500B7

古文書から読む江戸社会・入門編Ⅱ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多様な近世史料の読解能力を養うことを目的とする。さまざまなくずし字を解読すると同時に、読解した史料の意味を理解することが重要となる。

【到達目標】

- ①くずし字を解読することができる。
- ②読解した史料の意味を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は日本近世史料学Ⅰを履修済みであることを前提として授業を進める。Hoppiiに古文書のコピーをアップするので、これにまずは自力で読解に取り組む。授業時に答え合わせし、教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。古文書解読の中級編として、近世の行政文書のほか、書状や発句など書体の異なる史料も対象とする。なお、近世ゼミの夏合宿で撮影した古文書をテキストとすることがある。また、現物古文書の整理作業を体験することもある。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	発句読解	変体仮名
第2回	離縁状読解	三行半
第3回	触書読解（1）	ペリー来航
第4回	触書読解（2）	株仲間再興
第5回	武家文書読解（1）	御堀の管理
第6回	武家文書読解（2）	橋梁の管理
第7回	武家文書読解（3）	三方領地替（前半）
第8回	武家文書読解（4）	三方領知替（後半）
第9回	漢詩読解	七言絶句
第10回	書状読解（1）	松平容保書簡（前半）
第11回	書状読解（2）	松平容保書簡（後半）
第12回	日記読解（1）	自家年譜（前半）
第13回	日記読解（2）	自家年譜（後半）
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布された古文書のコピーを、辞書を使って自力で読むこと。事後には、必ず復習すること。多くの古文書に触れることが重要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『新編古文書解読字典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】

筆の動きをみるのが、古文書読解能力向上のためのポイントです。

【その他の重要事項】

学部合同科目である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline and objectives】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

HIS500B7

江戸の地方文化 I

西沢 淳男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物産・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】

日本近世史社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。授業はオンライン授業で行います。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配信し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第 2 回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義
第 3 回	「豊田友直日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第 4 回	「豊田友直日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第 5 回	「豊田友直日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第 6 回	「豊田友直日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第 7 回	「豊田友直日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第 8 回	「豊田友直日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第 9 回	「豊田友直日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第 10 回	「豊田友直日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第 11 回	「豊田友直日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第 12 回	「豊田友直日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第 13 回	「豊田友直日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第 14 回	「豊田友直日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1（岩田書院、2019 年）7,000 円。コピー対応で問題ありません。購入希望の場合は、教員より 3 割引で購入できます。

【参考書】

西沢淳男『代官の日常生活』（角川ソフィア文庫、2015 年）920 円。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の報告と討論参加 (50 %)、レポート (30 %)、平常点 (20 %)

【学生の意見等からの気づき】

より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【担当教員の専門分野等】

https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline and objectives】

This course introduces reading a diary of Gundai who was a local administrative official of Edo Bakufu and learning about the local history, customs, folklore, prices, weather, flora and fauna, civil administration, administration, family, mountain village and fishing village life of Hida country controlled by Gundai by reading personal diary to students taking this course.

HIS500B7

江戸の地方文化Ⅱ

西沢 淳男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】

日本近世史社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。授業はオンライン授業で行います。フィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配信し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第 2 回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義 新規受講者がいない場合は講読とします。
第 3 回	「豊田友直日記」1	日記の講読と質疑・応答
第 4 回	「豊田友直日記」2	日記の講読と質疑・応答
第 5 回	「豊田友直日記」3	日記の講読と質疑・応答
第 6 回	「豊田友直日記」4	日記の講読と質疑・応答
第 7 回	「豊田友直日記」5	日記の講読と質疑・応答
第 8 回	「豊田友直日記」6	日記の講読と質疑・応答
第 9 回	「豊田友直日記」7	日記の講読と質疑・応答
第 10 回	「豊田友直日記」8	日記の講読と質疑・応答
第 11 回	「豊田友直日記」9	日記の講読と質疑・応答
第 12 回	「豊田友直日記」10	日記の講読と質疑・応答
第 13 回	「豊田友直日記」11	日記の講読と質疑・応答
第 14 回	「豊田友直日記」12	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1 (岩田書院、2019 年)7,000 円。コピー対応で問題ありません。購入希望の場合は、教員より 3 割引で購入できます。

【参考書】

西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015 年)920 円。

その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の報告と討論参加 (50 %)、レポート (30 %)、平常点 (20 %)

【学生の意見等からの気づき】

より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【担当教員の専門分野等】

https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline and objectives】

This course introduces reading a diary of Gundai who was a local administrative official of Edo Bakufu and learning about the local history, stoms,folklore, prices, weather, flora and fauna,civil administration, administration, family, mountain village and fishing village life of Hida country controlled by Gundai by reading personal diary to students taking this corse.

HIS500B7

日本文化と西洋文化 I

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

洪沢栄一は、91年の生涯に約500の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。

近代日本の社会構造について、洪沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】

近代日本の社会構造について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・この授業は Zoom を使用し、オンライン授業（リアルタイム配信型）にて実施します。

――

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	洪沢栄一	洪沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（1）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（2）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（1）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（2）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（1）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（2）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（1）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（2）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（1）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（2）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（1）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（2）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜、レジュメ・資料を配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70 %）、コメント等の授業への参加度（30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度とテーマを連続しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007 年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011 年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010 年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business.

HIS500B7

日本文化と西洋文化Ⅱ

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

渋沢栄一は、91年の生涯に約500の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。

近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】

近代日本の社会構造について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・この授業は Zoom を使用し、オンライン授業（リアルタイム配信型）にて実施します。

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（1）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（2）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（1）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（2）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（1）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（2）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（1）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（2）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（1）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（2）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（1）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（2）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜レジュメ・資料を配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70 %）、コメント等の授業への参加度（30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度とテーマを連続しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007 年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011 年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市 3 インフラ』東京大学出版会、2010 年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business.

HIS500B7

日本の近代と国際社会 I

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業の概要：日露戦争後の明治時代の政治史を学ぶ。20 世紀初頭の日露戦争での勝利を経て、世界の列強の注目する軍勢力を有することとなった大日本帝国が、経済・産業・生活などの分野における後進性の克服に努める様相を学ぶ。

・目的：1) 大日本帝国の政治に関する知識を得る。2) アジア地域唯一の列強となった大日本帝国の国際社会における影響力行使と問題点に関する知識を得る。3) 日本近代史研究の現状に関する情報を得る。4) 大日本帝国と日本国との連続性と断絶について考える手がかりを得る。

【到達目標】

到達目標：1) 日露戦争後の政治、とりわけ桂閣体制と称される政治状況に関する知識を得る。2) 当該期の経済・産業・文化・生活の発展・向上に関する知識を得る。3) そうした知識の修得を通して、今日の日本との連続性と断絶を捉え、20 世紀日本の総合的理解と 21 世紀日本の展望とを併せ持つ手がかりを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・進め方：講義形式である。

・方法：受講生の能動的な学習と双方向的な授業運営に努め、授業での配布プリントに記載された史料を受講生が音読することや、教員・受講生間の質疑応答、受講生同士のディスカッションを取り入れる。・教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策に対応して、ZOOM を利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	帝国議会と国会	国会開設百年に関するビデオの視聴とその解説。
第 3 回	帝国議会の制度と人（1）	帝国議会に関する制度の解説。
第 4 回	帝国議会の制度と人（2）	帝国議会に関する人々の解説。
第 5 回	第 25 回帝国議会	第 25 回帝国議会の状況と争点の解説。
第 6 回	第 25 回帝国議会後の社会情勢	第 25 回帝国議会後の社会情勢の解説。
第 7 回	第 26 回帝国議会	第 26 回帝国議会の状況と争点の解説。
第 8 回	第 26 回帝国議会後の社会情勢	第 26 回帝国議会後の社会情勢の解説。
第 9 回	第 27 回帝国議会	第 27 回帝国議会の状況と争点の解説。
第 10 回	第 27 回帝国議会後の社会情勢	第 27 回帝国議会後の社会情勢の解説。
第 11 回	第 28 回帝国議会	第 28 回帝国議会の状況と争点の解説。
第 12 回	第 28 回帝国議会後の社会情勢	第 28 回帝国議会後の社会情勢の解説。

- 第13回 第29回帝国議会、大正時代の幕開け 第29回帝国議会の状況と争点の解説。大正時代の幕開けと展望の解説。
- 第14回 まとめ 授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・準備学習：学習支援システムの「授業内掲示板」サイトにテキストとなる授業プリントを添付ファイルでアップロードするので、受講生各自、授業前にダウンロードして読んでおくこと。授業テーマに関する参考文献を読んでおくこと。
- ・復習：授業後に授業プリントを読み直すこと。学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに記される毎回の授業の要点を読むこと。授業の中で示された参考文献を読むこと。
- ・本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- ・刊本としてのテキストは使用しない。
- ・授業内容をまとめたプリント（授業プリント）を学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに添付ファイルでアップロードする。

【参考書】

- 佐々木隆『日本の歴史 21 明治人の力量』（講談社）
- 小風秀雅『日本の時代史 23 アジアの帝国国家』（吉川弘文館）
- 飯塚一幸『日本近代の歴史 3 日清・日露戦争と帝国日本』（吉川弘文館）
- 宮田昌明『英米世界秩序と東アジアにおける日本』（錦正社）
- アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国会図書館の各ウェブサイトにおける日本近代史関連解説コラム

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 40 %、試験 60 %（設題は到達目標に沿うものとする）。参照可。
- ・特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、あるいは試験を受験しない場合には、不合格の評価とする。
- ・新型コロナウイルス感染防止策として教室での試験ができない場合には、レポート（設題方針は試験の場合と同じ）に切り替えることもある。

【学生の意見等からの気づき】

日本近代史に関する基礎的な知識の不足を感じている受講生もいることから、授業内容の理解と定着に資する質疑応答を積極的に行い、受講生の学習の動機付けや意欲を高めるように努める。

【学生が準備すべき機器他】

- ・学習支援システムを利用することができる IT 機器。
- ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

- ・学部合同科目（「日本近代史」）である。
- ・「日本近代史科学」（秋学期・学部合同科目、大学院科目「日本近代史研究Ⅱ」）との継続履修を強く推奨する。
- ・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
- ・新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
- ・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、頻繁に閲覧し、見落とさないようにすること。
- ・担当教員宛の直接連絡にはメールを利用すること。そのメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近現代政治史

＜研究テーマ＞

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

＜主要研究業績＞

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）

『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This course has four main points. The first point is to study the politics of Japan in the early 20th century, the period from the end of the Russo-Japanese War to the end of the Meiji Era. The second one is to study how Japan developed economy, industry, or life style in the above period as one of the Great Powers. The third is to get a basic information on the academic trends in the study of Japanese modern history. The fourth is to get clues for a comprehensive image of the 20th century Japan and a prospect on the 21st century Japan.

HIS500B7

日本の近代と国際社会Ⅱ

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・授業の概要：史料を通して日本近代史の種々相を学ぶ。
- ・目的：和紙に毛筆・草書体で書かれた史料の読解力を養うこと。

【到達目標】

到達目標：1) 日本近代史に関する幅広い知識を得る。2) 日本近代史研究に関わる史料の所蔵機関や利用法に関わる知識を得ること。3) 日本近代史研究に関わる史料の調査・収集に関わる知識を得ること。4) 日本近代史研究に関わる史料の読解力を養うこと。5) 情報・知識の調査・収集・分析・利用に関わる能力・技術を養い、高める手がかりを得ること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・進め方：講義形式である。
- ・方法：受講生の能動的な学習促進と双方向的な授業運営のために、教員と受講生間の質疑応答、受講生グループの助け合い学習による草書体文字の翻刻作業を取り入れる。新型コロナウイルス感染防止策への対応が必要な場合には、教室での対面授業を ZOOM を使って同時配信する方式を採用する。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	主な史料所蔵機関のウェブサイト	独立行政法人国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所戦史研究センター、国立国会図書館など主な史料所蔵機関のウェブサイトの説明。
第 3 回	日本近代古文書読解(1)	第 1 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 4 回	日本近代古文書読解(2)	第 2 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 5 回	日本近代古文書読解(3)	第 3 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 6 回	日本近代古文書読解(4)	第 4 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 7 回	日本近代古文書読解(5)	第 5 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 8 回	日本近代古文書読解(6)	第 6 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 9 回	日本近代古文書読解(7)	第 7 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 10 回	日本近代古文書読解(8)	第 8 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 11 回	日本近代古文書読解(9)	第 9 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 12 回	日本近代古文書読解(10)	第 10 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 13 回	日本近代古文書読解(11)	第 11 回毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第 14 回	まとめ	授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・準備学習：学習支援システムにアップロードされる授業プリントを事前にダウンロードして読んでおくこと。
- ・復習：授業プリントを読み直すこと。授業後、学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに掲示される毎回の授業要点を読むこと。授業テーマに関するウェブサイト（国立国会図書館電子展示会、アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館など）の関連コラムを読むこと。
- ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- ・刊本としてのテキストは使用しない。
- ・毎回授業前に、授業の要点をまとめたプリントや史料プリント（国立国会図書館所蔵「寺内正毅関係文書」コピー版）を学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに添付ファイルでアップロードするので、受講生各自、ダウンロードすること。

【参考書】

- ・くずし字辞典
- ・『日本近代の歴史』（吉川弘文館）全 6 巻
- ・アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館電子展示会の各ウェブサイトにおける日本近代史関連解説コラム。

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 40 %、試験 60 %（設題は到達目標に沿うものとする）。参照可。
- ・特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、あるいは試験を受験しない場合には、不合格の評価とする。
- ・新型コロナウイルス感染防止策として教室での試験ができない場合には、レポート（設題方針は試験の場合と同じ）に切り替えることもある。

【学生の意見等からの気づき】

日本近代史に関する基礎的な知識の不足を感じている受講生もいることから、授業内容の理解と定着に資する質疑応答を積極的に行い、受講生の学習の動機付けや意欲を高めるように努める。

【学生が準備すべき機器他】

- ・学習支援システムを利用することができる IT 機器。
- ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

- ・学部合同科目（「日本近代史科学」）である。
- ・「日本近代史」（春学期・学部合同科目、大学院科目「日本近代史研究Ⅰ」）との継続履修を強く推奨する。
- ・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。
- ・新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
- ・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、頻繁に閲覧し、見落とさないようにすること。
- ・担当教員宛の直接連絡にはメールを利用すること。そのメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）
 「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）
 「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）
 「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）
 『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This course has four main points. The first point is to get a basic knowledge about Japanese modern archives. The second one is to get an academic skill for reading old documents written in cursive style of Chinese characters in the Meiji era. The third is to study the Japanese modern history through reading old documents above. The fourth is to get clues for getting or improving the general skill of researching, gathering, analyzing and utilizing of information and knowledge.

CUA500B4

沖縄学入門 I

大里 知子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
 「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけた上で、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第 2 回	琉球・沖縄史概説	時代区分論、基礎資料・文献など
第 3 回	明治国家と「琉球処分」①日本国への併合	国王尚泰の冊封問題、台湾出兵と日清交渉、「琉球処分官」の派遣
第 4 回	明治国家と「琉球処分」②廃藩置県と日清交渉	「廃琉置県」と列強の対応、「分島・改約交渉」と琉球人の行動
第 5 回	明治国家と「琉球処分」③日清戦争と琉球救国運動	「琉球救国運動」と「脱清人」、日清戦争と運動の終焉
第 6 回	明治期の沖縄県政①明治政府による沖縄統治	「内国植民地」と初期県政
第 7 回	明治期の沖縄県政②「大名県令」から「官僚県令」へ、「旧慣温存」とその転換	奈良原知事による長期県政
第 8 回	明治期の沖縄県政③統治形態の変化と民衆の生活	「旧慣温存期」の村と民衆、宮古島における人頭税廃止運動
第 9 回	沖縄における近代化政策の導入①地方制度のなかの異制度	沖縄の地方制度改革、沖縄県島嶼町村制の制定
第 10 回	沖縄における近代化政策の導入②学校制度と日本化	近代学校制度の導入、標準語教育の開始
第 11 回	沖縄における近代化政策の導入③「土地整理事業」の影響	土地・租税制度の改革、「土地整理事業」
第 12 回	沖縄における近代化政策の導入④軍隊と民衆	徴兵制の施行と徴兵忌避
第 13 回	沖縄における近代化政策の導入⑤旧王府勢力と参政権	「公同会運動」、謝花昇の民権運動
第 14 回	「初期県政」について	沖縄の近代化政策についてまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布する

【参考書】

・沖縄県教育委員会『沖縄県史 各論編第 5 巻 近代』（2011）東洋企画
 ・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父 伊波普猷〔新訂版〕』（2017）清水書院
 ・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %、レポート 20 % 毎回の授業への参加態度に、授業内容に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】

「入門」という科目なので、基本的な内容をベースにしているが、より専門的な議論を求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 <研究テーマ>
 <主要研究業績>

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html>

【Outline and objectives】

In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.

It also the purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.

CUA500B4

沖縄学入門Ⅱ

大里 知子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
 「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけた上で、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第 2 回	近代沖縄の言論界①留学と新知識	琉球藩期の留学生、県費留学制度、沖縄青年会の設立
第 3 回	近代沖縄の言論界②新聞の発刊と言論	『琉球新報』と太田朝敷、『沖縄毎日新聞』と伊波月城
第 4 回	近代沖縄の言論界③「南島研究」の勃興	沖縄における郷土研究の興隆、柳田国男と南島研究
第 5 回	近代沖縄の言論界④沖縄の文化と「方言論争」	柳宗悦と「沖縄方言論争」
第 6 回	沖縄の移民①移民開始の背景	移民の開始と展開、移民の社会的背景
第 7 回	沖縄の移民②移民先での沖縄人	沖縄県民の移民先、南洋・南米・北米・ハワイ
第 8 回	沖縄の移民③大日本帝国の拡大と沖縄移民	「移住」と戦争、台湾・満州、東アジア移民
第 9 回	沖縄の移民④「ソテツ地獄」と移民	「本土」への出稼ぎ、移民と家族、「世界のウチナーンチュ大会」
第 10 回	近代教育と皇民化①近代的女子教育の展開	地方改良運動と女子教育の拡充、女子青年会・婦人会
第 11 回	近代教育と皇民化②社会運動と同化	労働組合運動と教育統制、標準語励行
第 12 回	近代教育と皇民化③近代的医療制度とハンセン病	ハンセン病政策と沖縄救済運動
第 13 回	国家総動員体制下の沖縄	「ソテツ地獄」と沖縄県振興計画
第 14 回	戦時下の沖縄	近代沖縄、これまでのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】

新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画

【参考書】

・沖縄県教育委員会『沖縄県史 各論編第5巻 近代』（2011）東洋企画
 ・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父 伊波普猷 [新訂版]』（2017）清水書院
 ・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %、レポート 20 % 毎回の授業への参加態度に、授業内容に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】

「入門」という科目なので、基本的な内容をベースにしているが、より専門的な議論を求める学生に対して、個別に対応する工夫が必要となる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html>

【Outline and objectives】

In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.

It also the purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.

CUM500B4

アーカイブズ学 I

宮間 純一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学の概要と基本理念を理解する。また、記録管理のあり方をその背景にある人間社会の営みと関連付けて考える思考力を身につける。
 アーカイブズとは、①組織や個人の活動のなかで蓄積された記録（とくに、永久保存される文書）、②記録を管理・公開する組織や施設のことを意味する用語であり、アーカイブズ学とはアーカイブズを支える学問分野である。

【到達目標】

アーカイブズ学の諸分野について具体的に探求するとともに、自己の研究領域とアーカイブズとの関係を認識し、具体的な研究課題を発見・設定することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義および演習。第1・2回は講義とし、第3回から13回は演習形式で論文講読を行う。論文講読は、受講生が分担して担当・発表したのち、教員が解説を加え、ディベートを実施する。第14回は、総括討論を行う。
 ハイフレックス型の授業を予定しているが、感染症拡大の状況によっては、Zoomを用いたオンライン授業とする。
 課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
 あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
 なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の概要と学ぶ意義に関する講義
第2回	アーカイブズ学総論	アーカイブズの歴史と基本理念に関する講義
第3回	アーカイブズと周縁の学問領域	アーカイブズと歴史学・博物館学などに関する論文を講読する
第4回	前近代のアーカイブズ	前近代のアーカイブズに関する論文を講読する
第5回	近代日本の官僚組織と記録管理	近代日本の官僚組織と記録管理に関する論文を講読する
第6回	戦争と記録	戦争と記録に関する論文を講読する
第7回	アーカイブズと現代社会	アーカイブズと現代社会に関する論文を講読する
第8回	オーラル・ヒストリー	オーラル・ヒストリーに関する論文を講読する
第9回	近世「家」文書の構造	近世日本の文書群の構造分析に関する論文を講読する
第10回	近現代行政文書の構造	近現代の行政組織と公文書の構造に関する文献を講読する
第11回	近現代の企業記録	近代の企業記録に関する文献を講読する
第12回	評価選別論	アーカイブズの評価選別論に関する文献を講読する
第13回	アーカイブズの編成と記述	アーカイブズの編成と記述に関する論文を講読する
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に講読する論文および関連する文献を各自が事前に目を通して
くる。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、
2003 年）

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道-記録・文書をどう残すか-』（吉
川弘文館、1985 年）
大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）
鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、
2002 年）
他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

輪読する文献は、受講生の要望を聞きながら選定する。

【学生が準備すべき機器他】

教室での参加が困難な受講生は、オンライン授業に参加可能なデバ
イス（PC・タブレット等）およびネットワーク環境が必要。また、
資料配付・諸連絡は原則 Hoppii にて行う。

【その他の重要事項】

以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う
2016 年 4 月 - 2018 年 3 月国文学研究資料館研究部 准教授
2011 年 4 月 - 2016 年 3 月宮内庁書陵部宮内公文書館 内閣府事
務官
2007 年 4 月 - 2011 年 3 月千葉県文書館県史・古文書課 嘱託職員

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代史およびアーカイブズ学
<研究テーマ>政治史、地域史、記録管理
<主要研究業績>

「公文書管理法前後の自治体アーカイブズアンケート調査の結果か
ら」（『日本歴史学協会年報』（34）、2019 年）／『天皇陵と近代－
地域の中の天友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－
明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015 年）／『戊辰内乱期
の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015 年）

【Outline and objectives】

In this seminar, students learn the basic principles of archival
science.

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅱ

宮間 純一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学におけるアーカイブズ資源研究の基本的な理念・手
法を理解し、具体的な文書群の構造分析を行うことができるように
なる。
アーカイブズ資源研究とは、記録管理に関わる研究、記録の伝来を
めぐる研究、アーカイブズの構造分析などからなる分野である。

【到達目標】

アーカイブズ学資源研究の理念・手法を踏まえて、自己の研究にお
いて利活用している（あるいはこれから利活用することが予定され
ている）文書群を対象としたアーカイブズ学的分析を具体的に行之、
その成果・課題を適切に示すことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
たどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義および演習。第1・2回は講義とし、第3回から13回は演習
形式で、受講生が具体的な文書群に関わる研究発表を行う（文書群
や研究テーマは各自が設定する、授業計画に示したのは例）。発表の
のちディベートを実施する。第14回は、総括討論を行う。ハイフ
レックス型の授業を予定しているが、感染症拡大の状況によっては、
Zoom を用いたオンライン授業とする。
課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の理念・概要に関 する講義
第2回	アーカイブズ資源研究 の方法論	アーカイブズ資源研究の研究史・ 方法論に関する講義
第3回	古代朝廷の文書管理	古代朝廷の文書管理に関する研究 報告
第4回	戦国大名の文書管理	戦国大名の文書管理に関する研究 報告
第5回	徳川幕府の文書管理	徳川幕府の官僚組織と文書管理に 関する研究報告
第6回	前近代の「家」と文書 管理	前近代の「家」における文書管理 に関する研究報告
第7回	近代官僚組織と文書管 理	近代官僚組織の成立・展開と文書 管理に関する研究報告
第8回	軍隊と文書管理	軍隊と文書管理に関する研究報告
第9回	政治家と文書管理	政治家と文書管理に関する研究報 告
第10回	企業と文書管理	企業と文書管理に関する研究報告
第11回	寺院と文書管理	寺院と文書管理に関する研究報告
第12回	神社と文書管理	神社と文書管理に関する研究報告
第13回	天皇と文書管理	天皇と文書管理に関する研究報告
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の発表担当者は関連する史料・文献を熟読し、報告の準備をす
る。それ以外の受講生は、発表担当者から事前に紹介された参考文
献に目を通してくる。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003 年）

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道－記録・文書をどう残すか－』（吉川弘文館、1985 年）

大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）

鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002 年）

国文学研究資料館編『近世大名のアーカイブズ資源研究』（思文閣出版、2016 年）

他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生からの要望に応じて、古文書調査や文書館見学の機会を設ける（任意参加）。

【学生が準備すべき機器他】

教室での参加が困難な受講生は、オンライン授業に参加可能なデバイス（PC・タブレット等）およびネットワーク環境が必要。また、資料配付・諸連絡は原則 Hoppii にて行う。

【その他の重要事項】

以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う

2016 年 4 月-2018 年 3 月国文学研究資料館 研究部准教授

2011 年 4 月-2016 年 3 月宮内庁書陵部宮内公文書館 内閣府事務官

2007 年 4 月-2011 年 3 月千葉県文書館県史・古文書課 嘱託職員

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代史およびアーカイブズ学

＜研究テーマ＞政治史、地域史、記録管理

＜主要研究業績＞「公文書管理法前後の自治体アーカイブズアンケート調査の結果から－」（『日本歴史学協会年報』（34）、2019 年）／『天皇陵と近代－地域の中の天友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015 年）／『戊辰内乱期の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015 年）

【Outline and objectives】

In this seminar, students learn the application of archives science.

CUM500B4

文書館管理研究Ⅰ

宇都宮美生・青木直己・葦名ふみ・新井浩文・富塚一彦・白石烈

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要：日本および各国のアーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。

目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。

なお、この授業は、文書館管理研究Ⅱ（秋学期）と連続して受講することを必須とする。

【到達目標】

到達目標：１）アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。２）アーキビストとしての技能を身に着け、実践することができる。３）アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の進め方：オムニバス形式で教員が講義する。

方法：初回のみオンライン授業とする。２回目より対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション (04/07 宇都宮美生)	授業の計画と心構え
第 2 回	とらや文庫 1 (04/14 青木直己)	企業アーカイブズの歴史
第 3 回	とらや文庫 2 (04/14 7 限 青木直己)	企業における記録史料の収集と管理
第 4 回	とらや文庫 3 (05/26 7 限 青木直己)	企業アーカイブズの利用
第 5 回	外務省外交史料館 1 (05/12 富塚一彦)	外交史料館所蔵記録の概要と記録公開の現状
第 6 回	外務省外交史料館 2 (05/19 富塚一彦)	外務省記録および日本外交文書の歴史学的利用
第 7 回	国立国会図書館憲政資料室 1 (05/26 葦名ふみ)	憲政資料室の収集活動（歴史と現状）
第 8 回	国立国会図書館憲政資料室 2 (06/02 葦名ふみ)	憲政資料室の実務
第 9 回	宮内庁書陵部 1 (06/09 白石烈)	「皇室アーカイブズ」の概要
第 10 回	宮内庁書陵部 2 (06/16 白石烈)	宮内公文書館所蔵資料の構造
第 11 回	宮内庁書陵部 3 (06/23 白石烈)	図書寮文庫の資料保存
第 12 回	埼玉県立文書館 1 (06/30 新井浩文)	概論：公立文書館の歴史と運営
第 13 回	埼玉県立文書館 2 (07/07 新井浩文)	公文書等の保存と運営

第 14 回 埼玉県立文書館 3 公文書等の公開と活用
(07/14 新井浩文)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：参考書を読むこと。各回のテーマに関わるウェブサイトの公開情報を読んでおくこと。

復習：参考書や関連文献を読み、理解を深めること。各国アーカイブズのウェブサイトを利用して識見を広げること。

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道』（吉川弘文館、1985 年）

高野修『日本の文書館』（岩田書院、1997 年）

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館、1998 年）

青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004 年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、期末試験（レポート形式）50 %。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

担当教員間の内容重複、関連する他の授業との内容重複に留意し、受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【学生が準備すべき機器他】

ZOOM を利用した授業もあるので、それを受講することができる IT 機器を用意すること。

学習支援システムを利用して受講に必要な情報を提供するので、それを利用することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルス感染防止対策として教室での授業ができない場合には、授業内容を変更する。本学 Web 学習支援システムの本科目における掲示板などの機能を利用するので、課題などを見落とさないように注意すると共に、頻繁に閲覧し、添付資料のダウンロードなどを行うこと。

第 3 回、第 4 回の授業が変更になっているので授業計画で確認して間違わないこと。

【担当教員の専門分野等】

〈現職〉

青木直己・元とらや文庫研究主幹

葦名ふみ・国立国会図書館利用者サービス部政治史料課憲政資料係長
新井浩文・埼玉県立文書館主席学芸主幹

白石烈・宮内庁書陵部編修課研究員

富塚一彦・外務省外交史料館外交公文書編纂官

【Outline and objectives】

Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below.(1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by professors.

CUM500B4

文書館管理研究Ⅱ

宇都宮美生・青木睦・赤松道子・長谷部圭彦・山田太造・渡辺浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要：日本および各国のアーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。

目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。

【到達目標】

到達目標：1）アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。2）アーキビストとしての技能を身につけ、実践することが出来る。3）アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の進め方：オムニバス形式で教員が講義する。

方法：オンライン授業あるいは対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション (09/22 宇都宮美生)	授業全体の概要説明と受講上の注意。
第 2 回	東京大学史料編纂所 1 (09/29 山田太造)	史料編纂所とコンピューターシステム～総論～
第 3 回	東京大学史料編纂所 2 (10/06 山田太造)	史料編纂所の DB～テキスト系 DB とメタデータ～
第 4 回	東京大学史料編纂所 3 (10/13 山田太造)	史料編纂所の DB～複製史料の画像系 DB～
第 5 回	トルコの文書館 1 (10/20 長谷部圭彦)	大統領府オスマン文書館の沿革と所蔵史料
第 6 回	トルコの文書館 2 (11/03 長谷部圭彦)	オスマン語文書史料を用いた研究の実例
第 7 回	ロシアの文書館 1 (11/10 赤松道子)	ロシアの文書と文書管理システムの歴史
第 8 回	ロシアの文書館 2 (11/17 赤松道子)	ロシアの文書と亡命
第 9 回	ロシアの文書館 3 (11/24 赤松道子)	ロシアの文書館の特徴：ロシア国立文書館など
第 10 回	アーカイブズ記述編成の方法 (12/01 渡辺浩一)	I S A D（G）「記録史料記述の国際標準」を学ぶ
第 11 回	アーカイブズ記述編成の実例 (12/08 渡辺浩一)	日本近世の文書を対象に I S A D（G）を実際に使ってみる
第 12 回	国文学研究資料館 1 (12/15 青木睦)	戦後の史料保存運動と史料保存の原則
第 13 回	国文学研究資料館 2 (12/22 青木睦)	史料のための保存環境と劣化の予防
第 14 回	国文学研究資料館 3 (01/12 青木睦)	アーカイブズ建築・設備と災害対策

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：参考書を読むこと。各回のテーマに関わるウェブサイトの公開情報を読んでおくこと。

復習：参考書や関連文献を読み、理解を深めること。各国アーカイブズのウェブサイトを利用して識見を広げること。

本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】

青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』岩田書院、2004 年

安藤正人『記録史料学と現代』吉川弘文館、1998 年

今村文彦『災害記録を未来に活かす』勉誠出版、2019 年

加藤諭『大学アーカイブズの成立と展開』吉川弘文館、2019 年
国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版、2014 年

高埜利彦『近世史研究とアーカイブズ学』青史出版、2018 年

壺阪龍哉『文書と記録』樹村房、2018 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、期末試験（レポート形式）50 %。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

担当教員間の内容重複、関連する他の授業との内容重複に留意し、受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【学生が準備すべき機器他】

ZOOM を利用した授業もあるので、それを受講することができる IT 機器を用意すること。

学習支援システムを利用して受講に必要な情報を提供するので、それを利用することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

「文書館管理研究Ⅰ」（春学期）との継続履修を強く推奨する。
新型コロナウイルス感染防止対策として教室での授業ができない場合には、授業内容を変更します。本学 Web 学習支援システムの本科目における掲示板などの機能を利用するので、課題などを見落とさないように注意すると共に、頻繁に閲覧し、添付資料のダウンロードなどを行うこと。

【担当教員の専門分野等】

<現職>

青木 睦・国文学研究資料館准教授

赤松（梶）道子・法政大学大学院兼任講師

長谷部圭彦・東京大学東洋文化研究所特任研究員

山田太造・東京大学史料編纂所准教授

渡辺浩一・国文学研究資料館教授

【Outline and objectives】

Every student of this class can get practical and basic knowledge and skills as to five points below.(1)What's an archive? (2)What are archives? (3)What's an archivist? (4)What's the mission of an archives and an archivist? (5)What are the skills of an archivist working for an archives? Students' questions, comments and discussion about the contents of this class are welcomed by the professors.

CUM500B4

記録史料学研究Ⅰ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

主に地方文書の保存・調査（整理）・管理の実践的知識について習得することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

記録史料管理の理論と方法について下記のような計画で授業を進める。具体的には、古文書の書札札や様式論を踏まえ、実物の古文書の初歩的・入門的な解説、古文書の取り扱いに関する手法、調査台帳の作り方や目録作成方法の基礎の習得が中心となる。講義・実習・発表を取り交えた授業とする。課題等に対するフィードバックは授業の後半でおこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	記録史料調査の理論と方法	目的 計画 etc
第 2 回	記録史料管理の歴史と現在 (1)	資料管理の歴史と現在
第 3 回	記録史料管理の歴史と現在 (2)	現在の史料管理の課題
第 4 回	記録史料の範疇 (1)	各種の資料管理の実情 社会組織と記録史料（身分・家・家業）
第 5 回	記録史料の範疇 (2)	地方文書 町方文書 武家文書 寺社文書
第 6 回	記録史料の範疇 (3)	古文書と古記録 古文書の種類
第 7 回	記録史料の範疇 (4)	古文書と古記録 古記録の種類
第 8 回	記録史料の取り扱い (1)	古文書 1
第 9 回	記録史料の取り扱い (2)	古文書 2
第 10 回	記録史料の取り扱い (3)	古記録 1
第 11 回	記録史料の取り扱い (4)	古記録 2
第 12 回	記録史料群の保存と調査	調査台帳の作成方法
第 13 回	記録史料群の調査・整理	調査台帳の作成方法
第 14 回	記録史料群の整理・管理	調査台帳と文書目録

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）

日本歴史学会編『概説古文書学』近世編 (吉川弘文館)
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』(柏書房)。

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %／研究発表 20 %

【学生の意見等からの気づき】

古文書をながめる時間をたくさん持つことが大事です。

【その他の重要事項】

本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史

〈研究テーマ〉都市論、記憶論

〈研究業績〉『江戸の都市化と公共空間』(塙書房、2019 年)

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

CUM500B4

記録史料学演習Ⅰ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究Ⅰの内容を踏まえ、より深く地方文書の保存・調査（整理）・管理について実践的に習得することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古文書学およびアーカイブズ学の成果ないし方法に基づき、実際の記録史料群をいかに構造的に理解し、有効な検索システムを構築するかを学ぶ。そのためには個々の史料を理解し、それを史料群全体に位置づけるという作業が必要となる。このとき史料群を生み出した人ないし組織への理解が必要不可欠となる。こうしたことを実践的に学ぶ。課題等に対するフィードバックは授業の後半でおこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容	etc
第 1 回	史料群とは何か	目的 計画	
第 2 回	史料群構造の理解（1）	史料群 1	
第 3 回	史料群構造の理解（2）	史料群 2	
第 4 回	史料群構造の理解（3）	史料群 3	
第 5 回	記録史料の取扱い（1）	古文書 1	
第 6 回	記録史料の取扱い（2）	古文書 2	
第 7 回	記録史料の取扱い（3）	古文書 3	
第 8 回	記録史料の取扱い（4）	古文書 4	
第 9 回	記録史料の調査（1）	史料 1	
第 10 回	記録史料の調査（2）	史料 2	
第 11 回	記録史料の調査（3）	史料 3	
第 12 回	記録史料の調査（4）	史料 4	
第 13 回	検索システムの構築（1）	目録整備 1	
第 14 回	検索システムの構築（2）	目録整備 2	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編（吉川弘文館）
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %／発表 20 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史

〈研究テーマ〉都市論、記憶論

〈主要研究業績〉『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019 年）

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

CUM500B4

記録史料学研究Ⅱ

浅井 良亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代の記録史料について理解を深めるため、多様な分析手法を学ぶ。具体的には、記録史料の構造や様態について、アーカイブズ学や史料学・書誌学の方法論を学ぶ。

【到達目標】

記録史料について、文字情報だけでなく、多様な情報を読み取るための知識と技能の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン方式による講義を予定している。ただし、受講生からの希望があれば、ハイフレックス方式への切替を検討する。授業は講義形式で行う。ただし、まとめの回には、質疑応答・ディスカッションを取り交えて授業を進める。課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行うこととする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	本授業の概要
第 2 回	記録史料の構造（1）	記録史料構造論と分析手法
第 3 回	記録史料の構造（2）	行政文書の構造と分析
第 4 回	記録史料の構造（3）	地域文書の構造と分析
第 5 回	記録史料の構造（4）	私家文書の構造と分析
第 6 回	記録史料の構造（5）	収集文書の構造と分析
第 7 回	記録史料の構造（6）	記録史料の構造とデジタルアーカイブ
第 8 回	まとめ	記録史料構造論に関する質疑応答・ディスカッション
第 9 回	記録史料の様態（1）	記録史料様態論と分析手法
第 10 回	記録史料の様態（2）	行政文書の様態と分析
第 11 回	記録史料の様態（3）	私家文書の様態と分析
第 12 回	記録史料の様態（4）	図像史料の様態と分析
第 13 回	記録史料の様態（5）	記録史料の様態とデジタルアーカイブ
第 14 回	まとめ	記録史料様態論に関する質疑応答・ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備（2 時間を標準）：授業内で関連文献を随時紹介するので、事前にそれらを読んで授業に臨むこと。

復習（2 時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

・熊本史雄『近代日本の外交史料を読む』ミネルヴァ書房、2020 年
・鈴江英一編『開拓使文書の森へ』北海道出版企画センター、2005 年
・中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %・レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度授業担当者変更のため）

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】

授業外の取組として、博物館や文書館における講習会の実施を予定している（詳細については、授業内でアナウンスする）。なお、講習会の参加については、あくまで授業外の取組であるため、成績評価には反映しない。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

・日本近世近代史

・史料学

＜研究テーマ＞

・近世近代移行期の政治と社会

・歴史の編纂と叙述

＜関連業績＞

・「モノとしての歴史資料を考える」（『村野日誌』第1巻、町田市教育委員会、2021年）

・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）

・「岩倉使節団復命記録の構造と特質」（『北の丸』52号、2020年）

・「戊辰戦争と『裏切り』言説」（原田敬一編『近代日本の軍隊と社会』吉川弘文館、2019年）

・「明治を編む―維新史料編纂事務局による維新史料の蒐集と編纂」（『北の丸』50号、2018年）

【Outline and objectives】

Learn how to understand the structure of Fonds and the function of Items for Archive Materials recorded in Modern Japan.

CUM500B4

記録史料学演習Ⅱ

浅井 良亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代の記録史料について理解を深めるため、多様な分析手法を学ぶ。具体的には、記録史料の構造や様態について、アーカイブズ学や史料学・書誌学の方法論を学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を、近代史料の調査研究やアーカイブ実務（史料整理・保存管理等）に応用することのできる実践的能力の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン方式による演習を予定している。ただし、受講生からの希望があれば、ハイフレックス方式への切替を検討する。

授業は演習形式で行う。発表・質疑応答・ディスカッションを取り交えて授業を進める。

課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行うこととする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の概要
第2回	発表（1）	担当受講生による発表・質疑応答
第3回	講評（1）	教員による講評およびディスカッション
第4回	発表（2）	担当受講生による発表・質疑応答
第5回	講評（2）	教員による講評およびディスカッション
第6回	発表（3）	担当受講生による発表・質疑応答
第7回	講評（3）	教員による講評およびディスカッション
第8回	発表（4）	担当受講生による発表・質疑応答
第9回	講評（4）	教員による講評およびディスカッション
第10回	発表（5）	担当受講生による発表・質疑応答
第11回	講評（5）	教員による講評およびディスカッション
第12回	発表（6）	担当受講生による発表・質疑応答
第13回	講評（6）	教員による講評およびディスカッション
第14回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備（2時間を標準）：授業で取り上げる記録史料を随時紹介するので、事前にそれらを読解・理解して授業に臨むこと。

復習（2時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

・熊本史雄『近代日本の外交史料を読む』ミネルヴァ書房、2020年
・鈴江英一編『開拓使文書の森へ』北海道出版企画センター、2005年
・中野目徹『近代史料学の射程』弘文堂、2000年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %・発表 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度授業担当者変更のため）

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】

記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を基礎として授業を進めるため、同科目と合わせて受講することを推奨する。

授業外の実習として、博物館や文書館における講習会の実施を予定している（詳細については、授業内でアナウンスする）。なお、講習会の参加については、あくまで授業外の実習であるため、成績評価には反映しない。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

- ・日本近世近代史
- ・史料学

＜研究テーマ＞

- ・近世近代移行期の政治と社会
- ・歴史の編纂と叙述

＜関連業績＞

- ・「モノとしての歴史資料を考える」（『村野日誌』第1巻、町田市教育委員会、2021年）
- ・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）
- ・「岩倉使節団復命記録の構造と特質」（『北の丸』52号、2020年）
- ・「戊辰戦争と『裏切り』言説」（原田敬一編『近代日本の軍隊と社会』吉川弘文館、2019年）
- ・「明治を編む：維新史料編纂事務局による維新史料の蒐集と編纂」（『北の丸』50号、2018年）

【Outline and objectives】

Learn how to understand the structure of Fonds and the function of Items for Archive Materials recorded in Modern Japan.

HUG500B7

日本の環境論Ⅰ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

経済地理学の基本的な方法論、研究分野の書かれたテキストを読み、発表することによって、経済地理学的方法についての深い理解を目指します。具体的には経済地理学の目標、理論、方法論、研究アプローチを取得し、自らの研究遂行時にそれらを使うことができるようにします。

【到達目標】

経済地理学に関する知識の蓄積、思考力、解決能力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く経済地理学の専門内容を理解すること、そして、自らの研究テーマに関わらせて、それをより深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらに受講生の関心領域、研究テーマと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「序章」	「序章 環境・空間と経済社会」の報告と討論
第3回	テキスト「第1章」	「第1章 経済立地の理論」の報告と討論
第4回	テキスト「第2章」	「第2章 地域経済の発展のメカニズム」の報告と討論
第5回	テキスト「第3章」	「第3章 サービス経済化と広がる地域間格差」の報告と討論
第6回	テキスト「第4章」	「第4章 人々のキャリアと経済空間」の報告と討論
第7回	テキスト「第5章」	「第5章 経済のグローバル化と産業立地・地域経済」の報告と討論
第8回	テキスト「第6章」	「第6章 サプライチェーンと南北問題」の報告と討論
第9回	テキスト「第7章」	「第7章 経済を左右する地域の制度と文化」の報告と討論
第10回	テキスト「第8章」	「第8章 都市の発展が生むインナーシティ問題」の報告と討論
第11回	テキスト「第9章」	「第9章 グローバル化時代の都市と都市ネットワーク」の報告と討論
第12回	テキスト「第10章」	「第10章 地域のなかでのものづくり」の報告と討論
第13回	テキスト「第11章」	「第11章 工業で変わる新興国」の報告と討論
第14回	まとめ	まとめ 授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 授業前、テキストの該当箇所を読んでくることはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。
 授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】

伊藤・小田・加藤編著（2020）『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房
 （2020 年度と同じため、履修学生によって変更する可能性があります）

【参考書】

山崎 朗ほか著（2016）『地域政策』中央経済社

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、討論：50 %
 十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論
 ＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
 ＜主要研究業績＞
 1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
 2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64 - 2、2018 年
 3. 「韓国の水辺環境改善事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72 - 3、2017 年
 4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
 5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
 6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
 7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

I aim at deep understanding about economic geography by reading and releasing the text on which basic methodology and research field of economic geography were written. A target, theory, methodology and research approach of economic geography are acquired and makes sure that it'll be possible to use those at the time of the study execution.

HUG500B7

日本の環境論Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。今年度は「地方都市の地域活性化」をテーマに行います。人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。

【到達目標】

人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。こうした作業を通じて、自らの調査能力のスキルアップを目指し、修士論文作成時の分析能力の向上を到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。アンケート票の作成は学生が行います。その後、具体的にアンケート調査を実施します。調査地域は学生が相談の上決定します。現地へ出向き、調査を共同で実施し、より多くの調査票の回収を目指します。授業の後半では、回収された調査票を集計し、その後、単純集計、クロス集計の分析を行います。最後に各自で報告書を作成します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応するが、足りない場合は次の授業において継続して議論する。レポートなどについては、コメントをつけて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロ	調査目的と調査方針の決定
第 2 回	社会調査の基本の説明	社会調査の基本の説明
第 3 回	アンケート票作成時のルール (1)	フェイスシートの作成
第 4 回	アンケート票作成時のルール (2)	質問項目の作成
第 5 回	アンケート票作成時のルール (3)	回答項目の作成
第 6 回	現地調査のマナーの説明	現地調査のマナーの説明
第 7 回	アンケート票の作成 (1)	アンケート票の形式の作成
第 8 回	アンケート票の作成 (2)	質問項目の選定
第 9 回	アンケート票の作成 (3)	アンケート票の完成
第 10 回	アンケート票の分析 (1)	データ打ち込み
第 11 回	アンケート票の分析 (2)	単純集計
第 12 回	アンケート票の分析 (3)	クロス集計
第 13 回	報告書の作成 (1)	作成手順の説明
第 14 回	報告書の作成 (2)	完成書の提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めますが、作業は授業外でも行うことになります。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

作業：50 %、報告書：50 %

【学生の意見等からの気づき】

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めます。

【学生が準備すべき機器他】

授業では必ずパソコンを使用します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64 - 2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72 - 3、2017 年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005 年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005 年
6. 『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006 年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A questionnaire survey is performed at this session. We decide about an investigation theme, survey item and investigation method, etc. first. Next a questionnaire vote is made. After that a questionnaire survey is put into effect specifically. Survey result is totaled by the tuition's second half, it's analyzed and a report is made. "Activation in a local city" is made a theme this fiscal year. And We aim at a rise of the investigation ability about the human geography.

HUG500B7

日本の都市と産業 I

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年春学期の授業では、主として都市の経済や産業に関わる都市の理論や概念、実践について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

また、課題等のフィードバックは次回以降の授業等で適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的に対面形式で行う予定ですが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	都市に関する理論・概念の概観（1）	都市に関する理論・概念についての整理
第 2 回	都市に関する理論・概念の概観（2）	都市に関する理論・概念についての関係性
第 3 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（1）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（1）
第 4 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（2）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（2）
第 5 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（3）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する議論（1）
第 6 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（4）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（3）
第 7 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（5）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（4）
第 8 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（6）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する議論（2）
第 9 回	都市の経済・産業に関する都市への実践例（1）	都市の経済・産業に関する実践例についての講読（1）
第 10 回	都市の経済・産業に関する都市への実践例（2）	都市の経済・産業に関する実践例についての講読（2）

- 第11回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 都市の経済・産業に関する実践例
についての議論 (1)
(3)
- 第12回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 都市の経済・産業に関する実践例
についての講読 (3)
(4)
- 第13回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 都市の経済・産業に関する実践例
についての講読 (4)
(5)
- 第14回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 都市の経済・産業に関する実践例
についての議論 (2)
(6)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50 %、ディスカッション：50 %で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「社会経済地理学研究Ⅱ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅱ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories, concepts and practices about urban economy and industries.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

HUG500B7

日本の都市と産業Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念、実践に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年秋学期の授業では、主として都市計画と都市開発に関わる都市の理論や概念について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

また、課題等のフィードバックは次回以降の授業等で適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的に対面形式で行う予定ですが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	都市に関する理論・概念の概観 (1)	都市に関する理論・概念についての整理
第2回	都市に関する理論・概念の概観 (2)	都市に関する理論・概念についての関係性
第3回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (1)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (1)
第4回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (2)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (2)
第5回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (3)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する議論 (1)
第6回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (4)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (3)
第7回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (5)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (4)
第8回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (6)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する議論 (2)
第9回	都市計画・都市開発に関する都市への実践 (1)	都市計画・都市開発の実践に関する講読 (1)
第10回	都市計画・都市開発に関する都市への実践 (2)	都市計画・都市開発の実践に関する講読 (2)

第 11 回	都市計画・都市開発に関する都市への実践	都市計画・都市開発の実践に関する議論 (1)
第 12 回	都市計画・都市開発に関する都市への実践	都市計画・都市開発の実践に関する議論 (3)
第 13 回	都市計画・都市開発に関する都市への実践	都市計画・都市開発の実践に関する議論 (4)
第 14 回	都市計画・都市開発に関する都市への実践	都市計画・都市開発の実践に関する議論 (2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50 %、ディスカッション：50 %で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「社会経済地理学研究Ⅰ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅰ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories, concepts and practices about urban planning and urban development.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

HUG500B7

地図の文化誌Ⅰ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸東京を学び、江戸東京アトラスを作成しよう！（1）

【到達目標】

江戸東京の地図作成の流れについて、各時期の主要な江戸図・東京図を取り上げ、その特徴を学習したうえで、各種の歴史的事象のデータをもとに江戸東京の地図を作成することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 近世江戸における絵図・地図を取り上げ、個別の絵図・地図に関する研究史を概観し、江戸図の特徴を把握する。
 2. 近代以降の東京における地図史の展開を踏まえながら、現代東京に至る地図全般について議論する。
 3. 具体的な地図作成として、江戸東京の構造物（橋や広場、堀など）・名所旧跡・史跡などの歴史的数据を収集し、東京の地図上にマッピングする。
 4. 地図上に歴史的事象を可視化することから、江戸東京の都市的・地域の特徴を考察する。
- 対面授業とオンライン授業を併用します。Google ドライブ上で作業をし、紙の配布・紙での作業は極力控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。大学の方針や社会状況の変化で授業方法を変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、履修者・出席者の確認をする。
2	江戸図の概説	主要な江戸図の歴史を学ぶ。
3	近代東京図の概説	主要な東京図の歴史を学ぶ。
4	江戸東京の鳥観図・風景画の概説	江戸東京の鳥観図や風景画について学ぶ。
5	戦後～現代東京図の概説	戦後から現代にいたる東京図について学ぶ。
6	江戸東京の歴史的数据の収集①	地図化するために、どのようなデータがあるのか、検討する。
7	江戸東京の歴史的数据の収集②	東京の名所史跡のデータを収集する。
8	江戸東京の歴史的数据の収集③	東京の名所史跡のデータを収集してまとめる。
9	東京の地図上にマッピングする①	名所史跡の分布を地図上に示す。
10	東京の地図上にマッピングする②	名所史跡の分布を地図上に示した地図をみながら考察する。
11	東京の地図上にマッピングする③	東京の名所史跡の分布の特徴を考察し、その検討事項をまとめる。
12	東京の地図上にマッピングする④	東京の名所史跡の分布の意味を分析する。
13	江戸東京における名所史跡の分布を考察する	それぞれの分布について、その特徴を考察し、その意味を分析する。
14	まとめ	作成した地図をもとに、江戸東京の空間的な多様性および歴史的な地域性についてまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
各地の博物館や美術館で開催されている地図展や風景画展などの常設および企画展をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

春学期は、江戸時代の代表的な名所図会『江戸名所図会』および江戸の地誌である『御府内備考』（文政年間～）および東京府編『東京府史蹟』（大正 8 年）を使います。江戸名所図会と御府内備考はデータを配布して作業します。東京府史蹟は国会図書館デジタルコレクションを利用します。Google ドライブに配布します。

【参考書】

Google ドライブに適宜、関連文献を紹介しします。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：参加 50 %、発表・作業 40 %、議論 10 %
「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

実際にデータを収集して地図を作成する作業は、とても面白いと感想をいただきました。いろいろな地図を見る機会をつくり、フィールドワークもします。江戸東京の地理にも詳しくなります。地理学専攻以外の大学院生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】

地図上の位置を探すために Google マップが必要です。スマートフォンや PC、iPad などの機器類を持参してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究
<研究テーマ> 日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究
<主要研究業績>
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015 年「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号、2020 年予定など

【Outline and objectives】

Studying and mapping Edo-Tokyo(1)

HUG500B7

地図の文化誌Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸東京を学び、江戸東京アトラスを作成しよう！（2）

【到達目標】

江戸東京の各時期の主要な地図や歴史的事象に関する論文や文献を読み、江戸東京に関する地理的知識を深めるとともに、地図にかかわる歴史的事象のデータをもとに江戸東京の地図を作成することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 江戸東京の都市空間の形成史、とりわけ「新宿区」を中心に学び、都市の空間的特徴を把握する。
 2. 江戸東京の地図を見ながら、治水や土木工事、都市開発などの研究史をおさえ、都市の空間的発達の歴史を学ぶ。
 3. 具体的な地図作成として、江戸東京の遺産にかかわる歴史的データを収集し、東京の地図上にマッピングする。
 4. 地図上に歴史的事象を可視化することから、江戸東京の歴史地理的特徴を考察する。
- 対面授業とオンライン授業を併用します。Google ドライブ上で作業を行います。なるべく紙の配布や紙上での共同作業は控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントして返します。なお、大学の方針や社会状況の変化で、授業方法を変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の説明、履修者・出席者の確認をする。
第 2 回	江戸の都市形成、新宿区の歴史を学ぶ①	江戸城およびその周辺、新宿区のフィールドワーク 新宿歴史博物館の見学
第 3 回	江戸の都市発展、新宿区の歴史を学ぶ②	江戸の都市図で確認作業する
第 4 回	近代東京の都市形成、新宿区の歴史を学ぶ①	新宿駅周辺の開発史を学ぶ
第 5 回	近代東京の都市変容、新宿区の歴史を学ぶ②	東京の都市図で確認作業する
第 6 回	江戸東京の旧跡や地形、土木事業関係のデータを収集する①	掘割・河川などの情報に関する文献を確認する。
第 7 回	江戸東京の旧跡や地形、土木事業関係のデータを収集する②	坂・谷など地形関連の情報を確認する。
第 8 回	江戸東京の旧跡や地形、土木事業関係のデータを収集する③	橋・河川改修などのデータを収集する。
第 9 回	江戸東京の旧跡や地形、土木事業関係のデータを収集する④	陸地測量部など地図作成にかかわる旧跡を確認する。
第 10 回	地図上にマッピングする①	収集したデータを地図上に表現する。
第 11 回	地図上にマッピングする②	収集したデータを地図上に表現して考察する。

- 第12回 地図上にマッピングする 各要素の分布の意味を分析する。
る③
- 第13回 地図上にマッピングする 分布を考察し、江戸東京の地域的
特徴を考察する。
る④
- 第14回 まとめ 地図から見える江戸東京の歴史地
理的特性を考察し、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。
江戸東京の地形や水系、それらの変化の歴史などを把握するために、
こまめにフィールドにでて、実際に歩いてみることをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

秋学期は、具体的な地域として、法政大学周辺としての「新宿区」の
歴史地理を中心に学びます。引き続き、江戸の地誌である『御府内
備考』（文政年間～）も利用します。

【参考書】

Google ドライブに適宜、関連文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：参加 50 %、発表・作業 40 %、議論 10 %

「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

ただ作業するだけでなく、実際に東京を歩いてみたいという意見を多
くいただきました。秋～冬は気候も温暖で歩きやすいので、ぜひ外
にでてみたいと思います。地理学専攻以外の大学院生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】

地図上の位置を探すために Google マップが必要です。スマートフォ
ンや PC、iPad などの機器類を持参してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学 日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究

＜主要研究業績＞

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本
をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015 年「近代の名所
図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号、2020 年予定など

【Outline and objectives】

Studying and mapping Edo-Tokyo(2)

OTR700B7

国際日本学研究 I

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心
をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのよう
な研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きを
とっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指
導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。
博士後期課程 1 年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調
査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。
博士後期課程 2・3 年次はそれぞれ秋学期と春学期の中間発表
に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練っ
た目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
たどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導
教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、
具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意
欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと
考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介（全員）、教員による授 業の進め方の説明
第 2 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）①	博士論文のテーマをすでに決めて いる学生の研究報告
第 3 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）②	同上
第 4 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）③	同上
第 5 回	関心対象の紹介（1 年 次生）①	関心対象について、学術研究の可 能性を考える
第 6 回	関心対象の紹介（1 年 次生）②	同上
第 7 回	博士後期課程の中間報 告（2・3 年次生）①	中間発表会に向けた配布資料・読 み上げ原稿の準備
第 8 回	修士課程の中間報告 （2・3 年次生）②	同上
第 9 回	研究動向の確認（1 年 次生）	先行研究の調査に基づいた文献目 録の提示と検討
第 10 回	先行研究の論旨の整理 （2・3 年次生）①	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討
第 11 回	先行研究の論旨の整理 （2・3 年次生）②	同上
第 12 回	先行研究の論旨の整理 （1 年次生）①	同上
第 13 回	先行研究の論旨の整理 （1 年次生）②	同上
第 14 回	夏期休暇中の作業計画 立案	各自が行うべき作業の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

- ①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
- ②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日是一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》
- ③「工尺譜の起源をめぐって —唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集 文学と音楽史 —詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程1年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程2・3年次生はそれぞれ秋学期、春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	博士論文構想の報告（2・3年次生）①	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告
第3回	博士論文構想の報告（2・3年次生）②	同上
第4回	博士論文構想の報告（2・3年次生）③	同上
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）①	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ
第6回	先行研究の紹介と整理（1年次生）②	同上
第7回	博士後期課程の中間報告（1・2年次生）①	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第8回	博士後期課程の中間報告（1・2年次生）②	同上
第9回	博士論文の中間報告（2年次生）①	博士論文執筆の進捗状況に関する報告
第10回	博士論文の中間報告（2年次生）②	同上
第11回	博士論文の構想発表（1年次生）①	学術的な論理展開に基づき、博士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す
第12回	博士論文の構想発表（1年次生）②	同上
第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義

第14回 まとめ

春季休暇中の作業課題に関する計画を示す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 夏季休暇中の研究成果をまとめてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日是一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏・小調子、笙・平調入調、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR700B7

国際日本学研究 I

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマに関連する論文内容を発表し、討論をする。また、共同研究を行うことによって、研究手法を学び博士論文の完成を目指す。

【到達目標】

共同研究、討論を通して、博士論文を執筆するために必要な研究計画の策定ができるようになる。博士論文の執筆に必要な論文を読み解くことができる。研究手法を学ぶことで、博士論文の執筆を自ら進めることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生は博士論文に関連した先行研究の発表、そして自らの研究計画、収集したデータの発表を行う。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	ゼミの進め方についてのオリエンテーション
第2回	研究内容の報告（1）	受講生の発表
第3回	研究内容の報告（2）	受講生の発表
第4回	研究内容の報告（3）	受講生の発表
第5回	研究内容の報告（4）	受講生の発表
第6回	共同研究計画（1）	研究計画の策定
第7回	共同研究計画（2）	実験・調査方法の策定
第8回	共同研究計画（3）	パイロットスタディの結果発表
第9回	共同研究計画（4）	パイロットスタディの結果発表と議論
第10回	共同研究（1）	実験・調査の実施
第11回	共同研究（2）	実験・調査の実施
第12回	研究内容の報告（1）	受講生による研究結果の発表
第13回	研究内容の報告（2）	受講生による研究結果の発表
第14回	研究内容の報告（3）	受講生による研究結果の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

論文発表：50 %

研究結果発表：50 %

【学生の意見等からの気づき】

実際のデータ分析をともに行うことにより、理解の確認を行いつつ進めたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムや、Kintone へ資料をアップロードします。状況によっては Zoom を用いた授業を行います。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of research methodologies in SLA and related field.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマに関連する論文内容を発表し、討論をする。また、共同研究を行うことによって、研究手法を学び博士論文の完成を目指す。

【到達目標】

共同研究、討論を通して、博士論文を執筆するために必要な研究計画の策定ができるようになる。博士論文の執筆に必要な論文を読み解くことができる。研究手法を学ぶことで、博士論文の執筆を自ら進めることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では受講生の発表と、チームでの共同研究・調査を行い、共同研究を通して研究手法を学ぶ。
課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第 2 回	研究内容の報告（1）	受講生の発表
第 3 回	研究内容の報告（2）	受講生の発表
第 4 回	研究内容の報告（3）	受講生の発表
第 5 回	研究内容の報告（4）	受講生の発表
第 6 回	共同研究計画（1）	研究計画の策定
第 7 回	共同研究計画（2）	実験・調査方法の策定
第 8 回	共同研究計画（3）	パイロットスタディの実施
第 9 回	共同研究計画（4）	パイロットスタディの結果についての議論
第 10 回	共同研究の実施（1）	共同研究の実験実施・データ収集
第 11 回	共同研究の実施（2）	共同研究の実験実施・データ収集
第 12 回	共同研究の実施（3）	共同研究の実験実施・データ収集
第 13 回	研究結果の報告（1）	受講生の発表
第 14 回	研究結果の報告（2）	受講生の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
先行研究をしっかりと読み、研究ノートの記録を行うこと。発表にあたっては十分な準備を行うこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

論文発表: 50 %

研究結果発表: 50 %

【学生の意見等からの気づき】

実際のデータ分析をともに行うことにより、理解の確認を行いつつ進めたいと思います。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of research methodologies in SLA and related field.

OTR700B7

国際日本学研究 I

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文が作成できるようになる。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識、適切な説明論理、適切な説明能力を獲得し、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。研究内容の報告については、授業内のやりとりで対応する。共同調査については、最後に提出してもらったレポートの評価を行い、受講生に返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第 2 回	研究内容の報告（1）	受講生の発表
第 3 回	研究内容の報告（2）	受講生の発表
第 4 回	研究内容の報告（3）	受講生の発表
第 5 回	研究内容の報告（4）	受講生の発表
第 6 回	共同調査（1）	フィールドワークを行う
第 7 回	共同調査（2）	フィールドワークを行う
第 8 回	共同調査（3）	フィールドワークを行う
第 9 回	共同調査（4）	フィールドワークを行う
第 10 回	共同調査（5）	フィールドワークを行う
第 11 回	共同調査（6）	フィールドワークを行う
第 12 回	研究内容の報告（5）	受講生の発表
第 13 回	研究内容の報告（6）	受講生の発表
第 14 回	研究内容の報告（7）	受講生の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 % 討論：50 % 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論
<研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
<主要研究業績>

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018 年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018 年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017 年
4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005 年
5. 「水資源開発の論理－その批判的検討－」成文堂、2005 年
6. 「木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－」成文堂、2006 年
7. 「水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－」ユニテ、2008 年

【Outline and objectives】

A member of a class reports on a thesis for a doctorate. A member of a class aims at completion of a thesis for a doctorate by discussing. A joint investigation is put into effect at the same time.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文が作成できるようになる。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識、適切な説明論理、適切な説明能力を獲得し、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。研究内容の報告については、授業内のやりとりで対応する。共同調査については、最後に提出してもらったレポートの評価を行い、受講生に返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第2回	研究内容の報告（1）	受講生の発表
第3回	研究内容の報告（2）	受講生の発表
第4回	研究内容の報告（3）	受講生の発表
第5回	研究内容の報告（4）	受講生の発表
第6回	共同調査（1）	フィールドワークを行う
第7回	共同調査（2）	フィールドワークを行う
第8回	共同調査（3）	フィールドワークを行う
第9回	共同調査（4）	フィールドワークを行う
第10回	共同調査（5）	フィールドワークを行う
第11回	共同調査（6）	フィールドワークを行う
第12回	研究内容の報告（5）	受講生の発表
第13回	研究内容の報告（6）	受講生の発表
第14回	研究内容の報告（7）	受講生の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
自らの研究課題に対しての準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 % 討論：50 % 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論
<研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
<主要研究業績>

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国4大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017年
4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005年
5. 「水資源開発の論理－その批判的検討－」成文堂、2005年
6. 「木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－」成文堂、2006年
7. 「水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－」ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A member of a class reports on a thesis for a doctorate. A member of a class aims at completion of a thesis for a doctorate by discussing. A joint investigation is put into effect at the same time.

OTR700B7

国際日本学研究 I

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏をめぐる1
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏をめぐる2
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏をめぐる3
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏をめぐる4
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制の特質
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国と日本の古代交通制度の比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界ー城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後ーFileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

OTR700B7

国際日本学研究所

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	大化前代氏姓制度の特質 1
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	大化前代氏姓制度の特質 2
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	大化前代氏姓制度の特質 3
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	大化前代氏姓制度の特質 4
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使と新羅使の比較
第10回	博士課程修了者による論文発表(5)	俘囚とはなにか
第11回	博士課程修了者による論文発表(6)	俘囚移配の特質
第12回	博士課程修了者による論文発表(7)	夷俘と俘囚の違い
第13回	博士課程修了者による論文発表(8)	律令国家の北方政策
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界ー城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、『「在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録」のその後ーFileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

OTR700B7

国際日本学研究 I

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、博士論文の完成に至るまでの各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文完成に向けて発表を重ねて研究を進め、学期に少なくとも 1 論文をしあげる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に各自、成果を 2～4 週に 1 度程度送って添削を受けることとします。オンラインゼミをやるかどうか、4/27 以降を目安に学習支援システム上で考えましょう。演習時にコメントするほか、執筆した原稿を添削して返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第 2 回	学生の報告 1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第 3 回	学生の報告 2	同上
第 4 回	学生の報告 3	同上
第 5 回	学生の報告 4	同上
第 6 回	学生の報告 5	同上
第 7 回	学生の報告 6	同上
第 8 回	学生の報告 7	同上
第 9 回	学生の報告 8	同上
第 10 回	学生の報告 9	同上
第 11 回	学生の報告 10	同上
第 12 回	学生の報告 11	同上
第 13 回	学生の報告 12	同上
第 14 回	学生の報告 13	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
ひたすら論文執筆と学会報告準備をすること。

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸、文化

＜研究テーマ＞戯作と挿絵、絵本、江戸東京

＜ 2019 - 20 年度の主要業績＞

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文芸』113 号 2020 年（査読付）

「四方赤良こと大田南畝判『狂歌角力草』稿本解題・翻刻」『法政大学文学部紀要』81 号

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179 号 2020（査読付）

編・執筆『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（文学通信）
みなさんもがんばって書きましょう！

【Outline and objectives】

Reporting and discussing each student's academic activities

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文に向けて発表を重ねて研究を進める。学期に少なくとも1論文を書くことを目標とする。演習での発表にコメントし、執筆した論文は添削して返却する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学生の報告と議論で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第2回	学生の報告1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第3回	学生の報告2	同上
第4回	学生の報告3	同上
第5回	学生の報告4	同上
第6回	学生の報告5	同上
第7回	学生の報告6	同上
第8回	学生の報告7	同上
第9回	学生の報告8	同上
第10回	学生の報告9	同上
第11回	学生の報告10	同上
第12回	学生の報告11	同上
第13回	学生の報告12	同上
第14回	学生の報告13	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
ひたすら論文執筆と学会報告準備をすること。

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸、文化
＜研究テーマ＞最近、プロジェクトの関係で江戸東京の地理や地誌をやっています。
江戸東京研究センターからもうすぐ江戸東京とヴェネツィアの比較研究の本を出します。

【Outline and objectives】

Reporting and discussing each student's academic activities

OTR700B7

国際日本学研究Ⅰ

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の執筆に向けた各種研究について錬磨するとともに、日本文学研究に携わるうえで必要な書誌学の基礎についても講義する。

【到達目標】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の完成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の口頭発表・討論を行うとともに、研究の指導、原稿の添削指導については、授業時およびオフィスアワーで実施する。授業は来校できない学生がいることも考慮し、ハイフレックス方式で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	基礎発表1	『太平記』に関する発表・討論。
第2回	基礎発表2	『平家物語』に関する発表・討論。
第3回	基礎発表3	石敢當に関する発表・討論。
第4回	書誌学の基礎1	本の歴史と形態について講義する。
第5回	書誌学の基礎2	本の歴史と形態について講義する。
第6回	学会発表指導1	『太平記』に関する学会発表指導。
第7回	学会発表指導2	『平家物語』に関する学会発表指導。
第8回	学会発表指導3	石敢當に関する学会発表指導。
第9回	書誌学の基礎3	版本の歴史について講義する。
第10回	書誌学の基礎4	版本の歴史について講義する。
第11回	学会誌投稿論文指導1	『太平記』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第12回	学会誌投稿論文指導2	『平家物語』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第13回	学会誌投稿論文指導3	石敢當に関する学会誌投稿論文添削指導。
第14回	夏期休業に向けての研究計画指導	今後の研究計画についての指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
基礎発表、学会発表、学会誌投稿論文の準備。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

基礎発表（12.5%）、学会発表（37.5%）、学会誌投稿論文（50.0%）の完成度。

【学生の意見等からの気づき】

授業時間以外でも指導の時間を設けるので、積極的に取り組んでもらいたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中世文学、書誌学

〈研究テーマ〉軍記物語、中世～近世初頭の出版
〈主要研究業績〉『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005 年）、『校訂京大本太平記』（共編、勉誠出版、2011 年）、『太平記をとらえる』第 1～3 巻（共著、笠間書院、2014～16 年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018 年）

【Outline and objectives】

In this course, I will advise graduate students on there thesis and lecture on basic bibliography.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の執筆に向けた各種研究について錬磨するとともに、日本文学研究に携わるうえで必要な書誌学の基礎についても講義する。

【到達目標】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の完成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の口頭発表・討論を行うとともに、研究の指導、原稿の添削指導については、授業時およびオフィスアワーで実施する。授業は来校できない学生がいることも考慮し、ハイフレックス方式で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	基礎発表 1	『太平記』に関する発表・討論。
第 2 回	基礎発表 2	『平家物語』に関する発表・討論。
第 3 回	基礎発表 3	石敢當に関する発表・討論。
第 4 回	書誌学の基礎 1	写本の書誌をとる。
第 5 回	書誌学の基礎 2	写本の書誌をとる。
第 6 回	学会発表指導 1	『太平記』に関する学会発表指導。
第 7 回	学会発表指導 2	『平家物語』に関する学会発表指導。
第 8 回	学会発表指導 3	石敢當に関する学会発表指導。
第 9 回	書誌学の基礎 3	版本の書誌をとる。
第 10 回	書誌学の基礎 4	版本の書誌をとる。
第 11 回	学会誌投稿論文指導 1	『太平記』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第 12 回	学会誌投稿論文指導 2	『平家物語』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第 13 回	学会誌投稿論文指導 3	石敢當に関する学会誌投稿論文添削指導。
第 14 回	春期に向けての研究計画指導	今後の研究計画についての指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
基礎発表、学会発表、学会誌投稿論文の準備。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

基礎発表（12.5 %）、学会発表（37.5 %）、学会誌投稿論文（50.0 %）の完成度。

【学生の意見等からの気づき】

授業時間以外の場合でも指導の時間を設けるので、積極的に取り組んでもらいたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉中世文学、書誌学
〈研究テーマ〉軍記物語、中世～近世初頭の出版

〈主要研究業績〉『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005 年）、『校訂京大本太平記』（共編、勉誠出版、2011 年）、『太平記をとらえる』第 1～3 巻（共著、笠間書院、2014～16 年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018 年）

【Outline and objectives】

In this course, I will advise graduate students on their thesis and lecture on basic bibliography.

OTR700B7

国際日本学研究 I

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〈博士論文指導〉

この授業は博士後期課程に在学中で、博士論文を準備中の学生を対象にしています。定められた年限で博士論文を完成させていくことができるように、この授業では、基本的には個別に、計画的に、論文指導が行われていきます。

【到達目標】

- 研究対象である文献・資料の把握と理解とを前進させることができますようになります。
- 先行研究についての知識と理解とを前進させることができますようになります。
- 研究テーマそのものについての理解と考察とを前進させることができますようになります。
- 博士論文の執筆の作業を前進させることができますようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。

毎回の授業をどう進めるのかを決めること自身が、授業の内容となります。そこから始めて、研究の直接の対象である主要文献と先行研究の諸文献とを読解していくこと、また、博士論文そのものを各章ごとに執筆していくことが、計画的に行われていくように、毎週の授業ではそのチェックと指導が、基本的には個人的に、行われていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	参加者の博士論文準備の状況と内容に応じて、授業の進め方を話し合います。
第 2 回	テーマ	準備されている博士論文のテーマの内容を改めて確認します。
第 3 回	テーマ	準備されている博士論文のテーマの価値を改めて確認します。
第 4 回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献 1 を検討します。
第 5 回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献 2 を検討します。
第 6 回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献 3 を検討します。
第 7 回	執筆	準備されている博士論文の執筆状況を確認します。
第 8 回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献 1 を検討します。
第 9 回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献 2 を検討します。
第 10 回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献 3 を検討します。
第 11 回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究 1 を検討します。
第 12 回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究 2 を検討します。
第 13 回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究 3 を検討します。

第 14 回 執筆

準備されている博士論文のその後の執筆状況を確認します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。博士論文の準備を、主要文献について、補助文献について進めるとともに、先行研究にも適宜触れていきます。並行して、論文の執筆自体も進めます。

【テキスト（教科書）】

準備されている博士論文が扱う主要文献。

【参考書】

準備されている博士論文が扱う補助文献、およびそのテーマの先行研究が見いだされる諸資料。

【成績評価の方法と基準】

主要文献や補助文献および先行研究の扱いでどれほどの前進があったか（50 %）、また、テーマの研究がどれほど進み、執筆がどれほど進んだのか（50 %）、に応じて、平常点で評価を行います。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っています。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

-国際日本学

-哲学

＜研究テーマ＞

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

＜主要研究業績＞

-Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan(共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第 10 号、2013 年 3 月 29 日、法政大学国際日本学研究所）

-「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの』、国際日本学叢書 17、2013 年 3 月、法政大学国際日本学研究所）

-La philosophie japonaise（共著、Vrin, 2013）

-『風土（Fudo）から江戸東京へ』（編著、法政大学出版局、2020 年 3 月）

【Outline and objectives】

＜ Doctor thesis instruction ＞

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〈博士論文指導〉

この授業は博士後期課程に在学中で、博士論文を準備中の学生を対象にしています。定められた年限で博士論文を完成させていくことができるように、この授業では、基本的には個別に、計画的に、論文指導が行われていきます。

【到達目標】

- 研究対象である文献・資料の把握と理解とを前進させることができますようになります。
- 先行研究についての知識と理解とを前進させることができますようになります。
- 研究テーマそのものについての理解と考察とを前進させることができますようになります。
- 博士論文の執筆の作業を前進させることができますようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。

毎回の授業をどう進めるのかを決めること自身が、授業の内容となります。そこから始めて、研究の直接の対象である主要文献と先行研究の諸文献とを読解していくこと、また、博士論文そのものを各章ごとに執筆していくことが、計画的に行われていくように、毎週の授業ではそのチェックと指導が、基本的には個人的に、行われていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	参加者の博士論文準備の状況と内容に応じて、授業の進め方を話し合います。
第 2 回	テーマ	準備されている博士論文のテーマの内容を改めて確認します。
第 3 回	テーマ	準備されている博士論文のテーマの価値を改めて確認します。
第 4 回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献 4 を検討します。
第 5 回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献 5 を検討します。
第 6 回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献 6 を検討します。
第 7 回	執筆	準備されている博士論文の執筆状況を確認します。
第 8 回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献 4 を検討します。
第 9 回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献 5 を検討します。
第 10 回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献 6 を検討します。
第 11 回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究 4 を検討します。
第 12 回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究 5 を検討します。
第 13 回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究 6 を検討します。

第14回 執筆

準備されている博士論文のその後の執筆状況を確認します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。博士論文の準備を、主要文献について、補助文献について進めるとともに、先行研究にも適宜触れていきます。並行して、論文の執筆自体も進めます。

【テキスト（教科書）】

準備されている博士論文が扱う主要文献。

【参考書】

準備されている博士論文が扱う補助文献、およびそのテーマの先行研究が見いだされる諸資料。

【成績評価の方法と基準】

主要文献や補助文献および先行研究の扱いでどれほどの前進があったか（50%）、また、テーマの研究がどれほど進み、執筆がどれほど進んだのか（50%）、に応じて、平常点で評価を行います。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

-国際日本学

-哲学

＜研究テーマ＞

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

＜主要研究業績＞

-Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan(共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所）

-「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの』、国際日本学叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所）

-La philosophie japonaise（共著、Vrin, 2013）

-『風土（Fudo）から江戸東京へ』（編著、法政大学出版局、2020年3月）

【Outline and objectives】

＜ Doctor thesis instruction ＞

OTR700B7

国際日本学研究Ⅰ

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論・語用論・統語論の基礎概念を理解し、適切な具体例を用いて説明できるようになる。(2) それらの分野における様々な研究・分析・論証の方法を理解し、自身でも実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学ぶ。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	論文について	論文の構成について
第2回	論文リポート1 名詞	受講生による発表・討論の意味拡張
第3回	論文リポート2 動詞	受講生による発表・討論の意味拡張
第4回	論文リポート3 形容	受講生による発表・討論詞の意味拡張
第5回	論文リポート4 接続	受講生による発表・討論詞の意味拡張
第6回	論文リポート5 語用	受講生による発表・討論論と意味論
第7回	論文リポート6 語用	受講生による発表・討論論推論
第8回	論文リポート7 ポラ	受講生による発表・討論イトネス
第9回	論文リポート8 イン	受講生による発表・討論ボライトネス
第10回	論文レポート9 対人	受講生による発表・討論的モダリティ
第11回	論文リポート10 対	受講生による発表・討論事的モダリティ
第12回	論文レポート11 若	受講生による発表・討論者ことば
第13回	論文レポート12 文	受講生による発表・討論未表現
第14回	論文レポート13	受講生による発表・討論ネットスラング

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（1時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キーターム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

発表 30 % 発言等受講態度 30 % 期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

博士論文のテーマだけに絞らず、言語学全般についての理解・知識が深められるコースワークになるよう、幅広い内容の研究論文を取り上げよう心がけている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『「全然」+肯定』に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』 pp.103-115. ひつじ書房、2008 年)

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年)

「接続詞ケドの接続的意味」(『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年)

『構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ』(共著、研究社、2011 年)

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語の意味を分析するための手法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論の専門用語・諸概念について理解し、説明できる。(2) 意味を研究するための様々な分析手法を理解し、実践できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、意味研究における基礎概念や分析方法について学ぶ。

▼必要に応じて、ZOOM を用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに	意味を分析する上での諸注意
第 2 回	論文リポート 1	多義 受講生による発表・討論
第 3 回	論文リポート 2	メタ 受講生による発表・討論
第 4 回	論文リポート 3	ファー 受講生による発表・討論
第 5 回	論文リポート 4	ニミー 受講生による発表・討論
第 6 回	論文リポート 5	ス キーマとプロトタイプ 受講生による発表・討論
第 7 回	論文リポート 6	意味 受講生による発表・討論
第 8 回	論文リポート 7	ネットワーク 受講生による発表・討論
第 9 回	論文リポート 8	拡張 受講生による発表・討論
第 10 回	論文リポート 9	と動的用法基盤モデル 受講生による発表・討論
第 11 回	論文リポート 10	文法 受講生による発表・討論
第 12 回	論文リポート 11	変化と意味変化 受講生による発表・討論
第 13 回	論文リポート 12	主体 受講生による発表・討論
第 14 回	論文リポート 13	文法化と文法化 受講生による発表・討論
第 15 回	論文リポート 14	語用 受講生による発表・討論
第 16 回	論文リポート 15	論理的強化と文法化 受講生による発表・討論
第 17 回	論文リポート 16	接続詞と文法化 受講生による発表・討論
第 18 回	論文リポート 17	尾辞と文法化 受講生による発表・討論
第 19 回	論文リポート 18	否 受講生による発表・討論
第 20 回	論文リポート 19	定表現の拡張 受講生による発表・討論
第 21 回	論文リポート 20	コーパスと定量的分析 受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2 時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約を A4 用紙一枚に書くこと（1 時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1 時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『認知言語学研究の方法 ― 内省・コーパス・実験』（辻幸夫監修、ひつじ書房）
 『日本語教育のためのコーパス調査入門』（李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著、くろしお出版）
 『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
 『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
 『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
 『言語学大辞典』（三省堂）
 『日本語文法大辞典』（山口明徳・秋本守英編著、明治書院）
 『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
 『語用論キーターム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

発表 30 % 発言等受講態度 30 % 期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

論文の具体的な書き方が理解できるよう、また博士課程らしい専門性が身につけられるよう、言語（意味）変化について深く理解するための研究論文を取り上げるよう心がけた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』 pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）
 「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）

「接続詞ケドの手续きの意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）

『構文ネットワークと文法 ― 認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011 年）

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

LIN500B7

国際日本学特殊講義 B I

滝浦 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、そのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。春学期は、文字、音、語、文といった言語学的単位に沿いながら、ひと味違った角度からトピックを眺めていく。

【到達目標】

- (1) 日本語が漢字をどのように取り入れたかを理解し説明できるようになる。
- (2) 日本語の音声コミュニケーションの観点で理解し説明できるようになる。
- (3) 言語の変化というものの正しい捉え方を理解し説明できるようになる。
- (4) 「ハ」と「ガ」を語り方の構えの相違として理解し説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、グループ・ラインなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第 2 回	漢字と日本語	日本語が漢字をどのように取り入れたかを見て、そこから漢字使用の日本語らしさを見出す。
第 3 回	日本語の表記	漢字・ひらがな・カタカナを併用することの意味を、それぞれの経緯に遡って考える。
第 4 回	日本語の語種	日本語の語彙を構成する和語・漢語・外来語という語種のもつ機能的相違を探る。
第 5 回	日本語の音とリズム	モーラと音節の相違を理解した上で、日本語のリズムがどう構成されるか考察する。
第 6 回	音象徴と日本語	日本語で好まれる擬音・擬態語を支える音象徴を普遍と特殊の側面から考察する。
第 7 回	日本語のオノマトペ	日本語の擬音・擬態語がもっている語構成的な特徴を探り、その機能を考察する。
第 8 回	連濁と日本語①	連濁が音声現象に見えてそうではないことを、生起／不生起環境の考察から見出す。
第 9 回	連濁と日本語②	連濁の機能を理解した上で、アクセントなどによる類似の機能についても検討する。

第10回 位相語	社会的条件や心理的条件などによって言葉が変わる側面に目を向けることを通して、日本社会を考える。
第11回 言語変化	若者言葉と言われるような言語変化の進み方を、言語一般の次元に置いて考察する。
第12回 ラ抜き言葉	「日本語の乱れ」と言われたラ抜き言葉が、実は長期におよぶ言語変化の一面だったことを理解する。
第13回 「ハ」の語り	日本語の特徴である助詞「ハ」を取り上げ、それを語り方の構えとして考察する。
第14回 「ガ」の語り	「ハ」と対比的に用いられる「ガ」を取り上げ、語り方の構えとして比較考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人編（2020）『日本語学入門』放送大学教育振興会
ほか授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 60 %
期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ごめん！）。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論
＜研究テーマ＞ポライトネス、日本語語用論
＜主要研究業績＞

滝浦真人（2016）『日本語リテラシー』放送大学教育振興会
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

【Outline and objectives】

Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by native speakers. In the spring semester, linguistic functional aspects are focused on.

LIN500B7

国際日本学特殊講義 B II

滝浦 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、そのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。秋学期は、日本語に特徴的な対人関係表現をはじめ「語用論的」な面に着目して、“人が言葉で何をなすか？”について、中国語などとも比較しながら考えていく。

【到達目標】

- (1) 日本語を語用論的に見るための基礎知識を理解する。
- (2) ポライトネスの考え方を理解し説明することができる。
- (3) 対人関係の表現に関わる諸現象を考察することができる。
- (4) 現代日本語の成立事情を理解し他言語と比較考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、グループ・ラインなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはどういうことを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	語用論の基本	グライスの協調の原理と会話の原則をはじめ、語用論の基礎知識を再確認する。
第3回	効率と配慮	伝達効率と対人配慮が反比例の関係にあることを確認し、具体的に考察する。
第4回	ポライトネス	ポライトネスの理論的枠組みを理解し、日本語のポライトネスの性格を考察する。
第5回	呼称	対人関係専用の手段としての呼称をとらえ、理論的と具体的の両面から考察する。
第6回	あいさつ	あいさつという行為の意味に立ち返り、あいさつの意味論と語用論を考察する。
第7回	感謝・謝罪	非常に基本的な言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第8回	依頼・勧誘と応諾・断り	典型的な言語行為の1つを取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第9回	褒め／褒められ・フェイスワーク	フェイスに直接関わる言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第10回	敬語（意味論）	対人関係専用手段としての敬語を取り上げ、それが対人的な〈距離〉の表現として機能していることを理解する。

第 11 回 敬語（語用論）	敬語は人間関係の像を表現するとの考えに立った上で、敬語の語用論を考察する。
第 12 回 授受表現	授受動詞を 3 系列有する日本語話者が、それによって何をやりとりしているのか考察する。
第 13 回 標準語と日本語	近代日本語の成立事情による影響を確認し、日本語のありかたについて考える。
第 14 回 日本語はどこへ向かっているか？	“気になる日本語”がいつも取り沙汰され、敬語などの“馬鹿丁寧化”が感じられる日本語の行く末を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
滝浦真人・大橋理枝（2015）『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会
滝浦真人編（2018）『新しい言語学』放送大学教育振興会
椎名美智（2021）『「させていただく」の語用論』ひつじ書房

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 60 %
期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ごめん！）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語学・語用論・コミュニケーション論
<研究テーマ>ポライトネス、日本語語用論
<主要研究業績>（参考書に挙げたもの以外で）
滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
滝浦真人（2005）『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
加藤重広・滝浦真人編（2016）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房

【Outline and objectives】

Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by native speakers. In the fall semester, interpersonal aspects like politeness are focused on.

CUA500B7

国際日本学特殊講義 C I

ヤナ・ウルバノヴァー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学びます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。

【到達目標】

この授業を通じて次のスキルが獲得できます

1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学ぶことで、その文化や歴史な背景に関する理解が深まります
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を養うことができます
3. 学んだことや気付いたことについて各自が意見交換、議論、プレゼンテーションすることによって幅広い考察力を身に付けることができます

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回には授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。
課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行います。そこでは受講生からの質問も受け付けます。
この授業はリアルタイムのオンライン形式で行います。コロナの感染状況が落ち着いたら、皆さんと相談の上、対面の授業形式に変更することを検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第 2 回	日本文学の概要	奈良時代と平安時代を中心とした日本古典文学の代表的な作品やその時代背景の紹介
第 3 回	日本人の自然観	自然を愛する日本人、四季の意味、陰陽思想。自然に見る日本および西洋の文化・考え方の違い
第 4 回	日本美意識における主要な概念	兼好法師による『徒然草』から読み取れる日本文化や文学における美意識の四つの主要な概念
第 5 回	日本の神話世界	『古事記』に見られる古代日本の世界観。日本の神話、ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観の特徴と比較
第 6 回	和歌の修辞法	和歌の序詞、枕詞、掛詞の役割。日本の歌と西洋の詩における伝統技法の特徴
第 7 回	物語の世界	作り物語（『竹取物語』）と歌物語（『伊勢物語』）を中心に物語というジャンルの紹介

第 8 回	沖縄の言葉①	琉球列島の言葉と文化の発達。琉球語の中にある沖縄語
第 9 回	沖縄の言葉②	沖縄本島の言葉の特徴、琉歌の言葉と表記法について
第 10 回	琉歌の世界	琉歌の特徴（言葉、形式、作者、伴奏等）、古典音楽と民謡
第 11 回	恩納なべと吉屋つる	琉歌の伝説的な二人の女流歌人の生涯と代表的な琉歌の紹介
第 12 回	和歌と琉歌の表現に見られる類似点	和歌から影響を受けた琉歌における表現、和歌の改作琉歌
第 13 回	和歌と琉歌の表現に見られる特徴	和歌と琉歌に共通する表現におけるそれぞれの観念の違い。たとえば「雪」について
第 14 回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマの議論。エッセイの提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】

他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー等、約 30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
＜研究テーマ＞
＜主要研究業績＞

【＜専門領域＞】

日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【＜研究テーマ＞】

琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較

【＜主要研究業績＞】

- 「琉歌における「雪」について（下）」『沖縄文化』123 号（第 52 巻 1 号）、沖縄文化協会、2019 年 6 月）
- 「琉歌における「雪」について（中）」『沖縄文化』122 号（第 51 巻 2 号）、沖縄文化協会、2018 年 3 月）
- 「琉歌における「雪」について（上）」『沖縄文化』121 号（第 51 巻 1 号）、沖縄文化協会、2017 年 8 月）
- The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs. (『沖縄の歌である琉歌における四季について—古典の和歌と沖縄のオモロとの比較—』) (『Studia Orientalia Slovaca (SOS) (スロバキアの東洋研究)』第 15 巻 1 号、Comenius University, Department of East Asian Studies (コメニウス大学東アジア研究学科)、2016 年)
- 『琉歌の表現研究—和歌・オモロとの比較から—』(森話社、2015 年)
- 「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」(田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015 年)

【Outline and objectives】

This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

CUA500B7

国際日本学特殊講義 C II

横山 泰子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の絵本文化を、比較文化的な観点から学びます。日本では前近代から子ども向けの絵本が多数出版されており、歴史的に有名な作品は外国語に翻訳されています。絵本文化の伝統をふまえたうえで、日本語の原書と翻訳版の差異を通し、文化の多様性を楽しむことを目的とします。

【到達目標】

例年、日本人学生と留学生の履修が多いクラスであり、互いのコミュニケーション能力を高めることが全体の目標です。学生は授業時間内での発表、翻訳の課題、他者の発表への応答を行い、最終的な期末レポートを書きます。それにより、以下の知識とスキルを身に付けることができます。

＊日本語を母語とする学生は、日本語や英語等を用いながら翻訳やディスカッションに参加することでコミュニケーション能力を高めるとともに、異文化の相手に対して論理的な日本語で絵本文化についての説明ができるようになる。

＊外国人留学生は、日本語や自らの母語能力を活用しながら翻訳やディスカッションに参加することでコミュニケーション能力を高めるとともに、日本の絵本文化について論理的な日本語で説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本の絵本についての概要を講義で説明します。その後、課題として受講生一人一人に各自が使用できる言語〔日本語以外〕で書かれた絵本を案内しますので、その文章を自力で日本語に翻訳してもらいます。その翻訳文を授業中に発表、全員での議論を経て、よりよい表現を工夫しながら、異文化理解につとめます。オンライン授業を予定していますが、状況により変更の可能性があります。リアクションペーパー等におけるコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期		
回	テーマ	内容
第 1 回	授業についての説明	シラバス内容の確認とテキストの選定
第 2 回	日本の絵本史（講義）	『はじめて学ぶ日本の絵本史』等を用いて、日本の絵本史の概要を簡単に説明
第 3 回	日本の絵本史（講義）	『はじめて学ぶ日本の絵本史』等を用いて、日本の絵本史の概要を簡単に説明
第 4 回	学生の発表 日本の絵本の絵について	担当者の発表と全体のディスカッション
第 5 回	学生の発表 日本の絵本の色彩について	担当者の発表と全体のディスカッション
第 6 回	学生の発表 日本の絵本のテーマについて	担当者の発表と全体のディスカッション
第 7 回	学生の発表 日本の絵本と漫画について	担当者の発表と全体のディスカッション

第 8 回	学生の発表 絵本と児童文化について	担当者の発表と全体のディスカッション
第 9 回	学生の発表 絵本と教育について	担当者の発表と全体のディスカッション
第 10 回	学生の発表 絵本と言葉遊びについて	担当者の発表と全体のディスカッション
第 11 回	学生の発表 絵本と大人の関わり	担当者の発表と全体のディスカッション
第 12 回	学生の発表 社会における絵本の位置づけ	担当者の発表と全体のディスカッション
第 13 回	学生の発表 絵本の読み聞かせ方	担当者の発表と全体のディスカッション
第 14 回	全体のまとめ	扱った絵本全体についてのディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。発表者は渡された資料（日本語以外）を事前に読み、日本語に翻訳し、音読する準備が求められます。

【テキスト（教科書）】

特にありません

【参考書】

特にありません

【成績評価の方法と基準】

期末レポート 50 パーセント

平常点（学習状況、発表内容、授業時の参加度） 50 パーセント

【学生の意見等からの気づき】

特にありません

【学生が準備すべき機器他】

特にありません

【その他の重要事項】

質問はメールで yyoko@hosei.ac.jp にお願います。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/16/0001557/profile.html>

【Outline and objectives】

The goals of this course are

(1) Obtain basic knowledge of comparative history about Japanese children's books

(2) Understand the diversity of culture through seeing the differences between originals and the translated books.

PHL500B7

国際日本学特殊講義 D I

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『「甘え」の構造』を読む。

「日本人は日本人論が好きだ」と言われます。加えて、その日本人論はとなく、「世界は日本人をわからない」といった日本人特殊論に向かいます。授業では、日本人による代表的な日本人論として土居建郎『「甘え」の構造』を取り上げて、そこでの日本人特殊論を批判的に読み解くことを試みます。春学期には、同書の前半を扱います。

【到達目標】

- 代表的な〈日本人論〉で著者の主張を正確に理解できるようになります。
- 代表的な〈日本人論〉で著者の主張に批判を行うことができるようになります。
- グローバリゼーションが進む現代世界において〈日本人論〉がレゾナントルを持つのかどうかを考えることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。

毎回、定められたテキスト箇所についてまとめと解釈のレジュメ発表を当番が行い、その後発表者の問題提起に従って、全員参加で討論を行います。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされて行きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方を確認し、テーマについて概要の説明を行います。
第 2 回	第 1 章「甘え」の着想	議論の理解と批判
第 3 回	第 2 章「甘え」の世界 —甘えの語彙	議論の理解と批判
第 4 回	第 2 章「甘え」の世界 —義理と人情	議論の理解と批判
第 5 回	第 2 章「甘え」の世界 —他人と遠慮	議論の理解と批判
第 6 回	第 2 章「甘え」の世界 —内と外	議論の理解と批判
第 7 回	第 2 章「甘え」の世界 —同一化と摂取	議論の理解と批判
第 8 回	第 2 章「甘え」の世界 —罪と恥	議論の理解と批判
第 9 回	第 2 章「甘え」の世界 —甘えのイデオロギー	議論の理解と批判
第 10 回	第 3 章「甘え」の論理 —言語と心理	議論の理解と批判
第 11 回	第 3 章「甘え」の論理 —甘えの言語的起源	議論の理解と批判
第 12 回	第 3 章「甘え」の論理 —甘えの心理的原型	議論の理解と批判
第 13 回	第 3 章「甘え」の論理 —甘えと日本的思惟	議論の理解と批判
第 14 回	第 3 章「甘え」の論理 —甘えと自由	議論の理解と批判、加えて全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回予定のテキスト箇所は下調べをし、読み、理解した上で授業に参加します。またとくに当番に当たったときは、当該箇所について、解釈と問題提起のレジュメを作成して授業に参加します。学期末にはまとめのレポートを作成します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

土居建郎『甘えの構造』（弘文社、増補版、2007）

【参考書】

土居建郎『表と裏』（弘文堂、1985）
土居建郎『続・「甘え」の構造』（弘文堂、2001）
中根千枝『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書、1967）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 40 %、学期末レポート 20 % で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、テキストの理解 30 %、テキストの批判 30 %、日本人論の評価 40 % の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
-国際日本学
-哲学
<研究テーマ>
-明治の日本近代思想の再評価
-西洋思想の近代日本への導入の問題
<主要研究業績>
-Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan(共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第 10 号、2013 年 3 月 29 日、法政大学国際日本学研究所）

-「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの』、国際日本学研究所叢書 17、2013 年 3 月、法政大学国際日本学研究所）

-La philosophie japonaise（共著、Vrin, 2013）

-『風土（Fudo）から江戸東京へ』（編著、法政大学出版社、2020 年 3 月）

【Outline and objectives】

The Japanese are said to love Japanese theory. In addition, Japanese theory often goes to the assertion that the Japanese are special and the world does not understand them. In the class, we are going to take "Structure of" Amae "" from Doi Takeo as a representative Japanese theory by the Japanese, and try to interpret it critically. In the spring semester we shall cover the first part of the book.

PHL500B7

国際日本学特殊講義 D II

安孫子 信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『「甘え」の構造』を読む。
「日本人は日本人論が好きだ」と言われます。加えて、その日本人論はとなく、「世界は日本人をわからない」といった日本人特殊論に向かいます。授業では、日本人による代表的な日本人論として土居建郎『「甘え」の構造』を取り上げて、そこでの日本人特殊論を批判的に読み解くことを試みます。秋学期には、同書の後半を扱います。

【到達目標】

- 代表的な〈日本人論〉で著者の主張を正確に理解できるようになります。
- 代表的な〈日本人論〉で著者の主張に批判を行うことができるようになります。
- グローバリゼーションが進む現代世界において〈日本人論〉がレゾナントルを持つのかどうかを考えることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

※基本的に対面で行います。
毎回、定められたテキスト箇所についてまとめと解釈のレジュメ発表を当番が行い、その後発表者の問題提起に従って、全員参加で討論を行います。なお、授業内での発表、また、授業外でのレポートがすぐれている場合には、それらは続く授業で行われる解説で積極的に活かされて行きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方を確認し、テーマについて概要の説明を行います。す。
第 2 回	第 3 章「甘え」の論理	議論の理解と批判
	一気概念	
第 3 回	第 4 章「甘え」の病理	議論の理解と批判
	—「とらわれ」の心理	
第 4 回	第 4 章「甘え」の病理	議論の理解と批判
	—対人恐怖	
第 5 回	第 4 章「甘え」の病理	議論の理解と批判
	—「気がすまない」	
第 6 回	第 4 章「甘え」の病理	議論の理解と批判
	—同性愛的感情	
第 7 回	第 4 章「甘え」の病理	議論の理解と批判
	—「くやむ」と「くやしい」	
第 8 回	第 4 章「甘え」の病理	議論の理解と批判
	—被害感	
第 9 回	第 4 章「甘え」の病理	議論の理解と批判
	—「自分がない」	
第 10 回	第 5 章「甘え」と現代	議論の理解と批判
	社会—青年の反抗	
第 11 回	第 5 章「甘え」と現代	議論の理解と批判
	社会—現代人の疎外感	
第 12 回	第 5 章「甘え」と現代	議論の理解と批判
	社会	
	—父なき社会	

第13回 第5章「甘え」と現代 議論の理解と批判

社会

一連帯感・罪悪感・被害者意識

第14回 第5章「甘え」と現代 議論の理解と批判、加えて全体で

社会

総括の討論を行います。

一子供の世紀

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回予定のテキスト箇所は下調べをし、読み、理解した上で授業に参加します。またとくに当番に当たったときは、当該箇所について、解釈と問題提起のレジュメを作成して授業に参加します。学期末にはまとめのレポートを作成します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

土居建郎『甘えの構造』（弘文社、増補版、2007）

【参考書】

土居建郎『表と裏』（弘文堂、1985）

土居建郎『続・「甘え」の構造』（弘文堂、2001）

中根千枝『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書、1967）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 40 %、学期末レポート 20 %で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、テキストの理解 30 %、テキストの批判 30 %、日本人論の評価 40 %の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

-国際日本学

-哲学

<研究テーマ>

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

<主要研究業績>

-Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan(共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所）

-「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究所叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所）

-La philosophie japonaise（共著、Vrin, 2013）

-『風土（Fudo）から江戸東京へ』（編著、法政大学出版局、2020年3月）

【Outline and objectives】

The Japanese are said to love Japanese theory. In addition, Japanese theory often goes to the assertion that the Japanese are special and the world does not understand them. In the class, we are going to take "Structure of 'Amae'" from Doi Takeo as a representative Japanese theory by the Japanese, and try to interpret it critically. In the autumn semester we shall cover the second part of the book.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 E I

得能 壽美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、琉球・中国・日本の基本的な史料講読を中心に考察する。

【到達目標】

(1) 近代琉球を考えるために必要な中国・日本・琉球の史料を読解できるようになる。

(2) それらの読解から得た知識をも利用して、琉球史を考えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は琉球史の概括的な理解と、史料の全体的な把握にあたる。後半は、琉球史料から、その読解方法を学びつつ、東アジアにおける関係史をみる。基本的には講義だが、史料講読に際しては、習熟度によっては担当部分を決めて報告を求め、講評や解説を行なう。また、個別の疑問にも答える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の紹介と、琉球・中国・日本の関係史を概括的にみる
2	日本史と琉球史の史料論	日本史研究と琉球史研究における史料論と、その相違
3	古琉球期史料にみる対外関係（中国・日本古代史料）	古代の琉球をめぐる中国と日本の史料について
4	古琉球史料にみる対外関係（歴代宝案・朝鮮王朝実録・琉球史料）	中世の琉球をめぐる中国・朝鮮・琉球の史料について
5	近世琉球史料にみる対外関係（島津関係史料）	1609年以降の島津による琉球統治関係史料について
6	近世琉球史料にみる対外関係（琉球史料）	いわゆる日中両属に関する琉球史料について
7	史料講読 中山世譜・中山世鑑・球陽	史料講読。首里王府編纂史料にみる近世琉球のありかた
8	史料講読 羽地仕置	史料講読。羽地朝秀の施策にみる琉球の立場と政治的転換
9	史料講読 御教条	史料講読。蔡温の琉球史の認識と立場
10	史料講読 農務帳と絵画史料	史料講読。近世琉球の農業政策と絵画にみる農業
11	史料講読 尚家文書	史料講読。王家文書の概要と利用
12	史料講読 評定所文書	史料講読。首里王府最高議決機関の史料
13	史料講読 琉球家譜史料	史料講読。琉球士族の家譜を読む
14	史料講読 地方史料と台湾琉球関係史料	史料講読。琉球内政関係と、台湾で確認されている琉球関係史料について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。全体的に下記で示す参考書を読む。毎回の授業では史料等を配布する。該当する史料の概要について、事前に調べる。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。史料等を配布する。

【参考書】

『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫 岩波ジュニア新書
『アジアのなかの琉球王国』高良倉吉 吉川弘文館（歴史文化ライブラリー 47）
『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『沖縄入門－アジアをつなぐ海域構想』浜下武志 ちくま新書

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極的にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、それぞれの研究テーマに即しつつ、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認し、さらに史料による考察を加えてほしい。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方などを基礎から説明する。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクター

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 琉球史 近世史
<研究テーマ> 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
<主要研究業績>
『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』単著（榕樹書林 2007 年 316 頁）
『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）
『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（沖縄県石垣市教育委員会 2015）
『明和大津波の被害概要と復旧・復興』『最新科学が明かす明和大津波』南山舎 2020

【Outline and objectives】

The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 E II

得能 壽美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、具体的な論考で使った史料を確認しつつ考察を進める。論文作成のための課題設定、史料調査の方法、史料の所在なども、具体的事例をもとに講義する。

【到達目標】

史料について理解と読解能力を身に付けられるようにする。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、学生自身の研究テーマにもそくして、新たな研究テーマの創成を考えられるようにする。個別の発表を求め、講評・解説、論文作成までできればと考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

具体的な論考に使用した史料を講読しつつ、近世琉球の生産と税制、物流を、具体的な産物を取りあげて、東アジアにおよぶ広がりをみる。史料講読から新たな研究テーマを創成し、その報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の概要と、琉球・中国・日本の関係史を概説する
2	近世琉球産品の由来と島産化Ⅰ	東アジアにおける技術などの移動
3	近世琉球産品の由来と島産化Ⅱ	琉球国内の島産化の展開と商品流通
4	ナマコⅠ	琉球関係史料にみる生産と上納
5	ナマコⅡ	薩摩・幕府への献上と中国との貿易
6	海人草	近世琉球の専売制、近現代における生産・流通
7	上布	人頭税と八重山上布
8	木綿Ⅰ	伝搬と栽培の広がり
9	木綿Ⅱ	近世における利用と商品としての展開
10	ジュゴン	近世の税制・捕獲・信仰
11	イノシシ	近世における害獣駆除と利用
12	牛馬	近世の利用と規制
13	アダン	近世における上納と民衆生活での利用
14	パインナップル	近代の導入事情と展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体的に下記で示す参考書を読む。

【テキスト（教科書）】

「移動するナマコと変化するその役割」（得能、『琉球・沖縄研究』第 3 号）など、それぞれのテーマに関連した論文のコピーを配布する。

【参考書】

『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『琉球・沖縄史の世界』豊見山和行（編） 吉川弘文館（日本の同時代史 18）
『近世八重山の民衆生活史』得能壽美 榕樹書林

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %

毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認するとともに、新たな研究テーマについて提案してほしい。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方を解説する。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクター

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 琉球史 近世史

＜研究テーマ＞ 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論

＜主要研究業績＞

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林 2007 年 316 頁）

『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）

『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（石垣市教育委員会 2015）
「明和大津波の被害概要と復旧・復興」『最新科学が明かす明和大津波』南山舎 2020

【Outline and objectives】

The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 F I

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

沖縄戦（1945 年）から四分の三世紀が、そして沖縄の「本土復帰」（1972 年）から半世紀ちかくがたつ。沖縄に対する米国の軍事植民地意識、そして日本本土の構造的差別は消え去っていないむしろ、2015 年後半からの、日本政府による名護市辺野古への米海兵隊普天間飛行場移設強行のようすをみていると、そうした差別は、より執拗になってさえいるように思われる。

本授業では、沖縄・日本本土・米国の、ときに引き合い、ときに反撥し合う力学が、戦後沖縄の形成にどのような影響を及ぼしたかを解き明かす糸口を学生とともに探りたい。「戦後」とはさしあたり、プロローグとしての沖縄戦から冷戦期までを扱う。

【到達目標】

学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するトピックを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

第 2 回目以降、授業のはじめに、前回授業で教員が課したレポート等の課題に対する個々の受講生の解答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	なぜ沖縄戦は闘かわれたか	日米両国の戦略における沖縄の位置づけを探る。
2	恩賜の民権／恢復民権	沖縄と本土における初期占領政策を比較研究する。
3	沖縄とマッカーサーの「平和」憲法	制憲過程のウラにある「沖縄要塞化」構想について考察する。
4	昭和天皇「沖縄メッセージ」の深淵	昭和天皇にとって「沖縄」とは何であり、何でなかったのかを考える。
5	講和問題のなかの沖縄	対日講和をめぐる噴出する帰属論の位相を整理する。
6	「潜在主権」論	対日講和条約第 3 条の前提をなす「潜在主権」とは誰が何のために発案したのか検討する。
7	海兵隊と核の島の形成	冷戦期を象徴する「海兵隊と核の島」＝沖縄は、どのように形成されたのか跡づける。
8	軍用地問題の生起と展開	「土地を守る四原則」（立法院請願決議）を軸に軍用地問題とは何であったのか考えてみる。
9	沖縄の「赤狩り」	極東の軍事拠点沖縄で起こった人民党非合法化の動きは、沖縄戦後史ばかりでなく冷戦史の文脈でいかなる意味をもつのか検討する。

10	南と北の領土問題	日ソ国交回復交渉に対して米国は、「日本が二島返還でソ連に譲歩するなら米国は沖縄をもらう」と干渉した。この北と南の領土問題の形成過程を調べてみる。
11	沖縄と安保改定	沖縄という視点から60年安保改定を捉えなおす。
12	沖縄返還交渉の公約・違約・密約	外務省による「いわゆる密約」調査の結果も踏まえながら、沖縄返還交渉を検証してみる。
13	沖縄が怒った日	1970年12月におこったコザ騒動とは戦後沖縄にとって何であつたのかを考える。
14	「安保」から「同盟」への変容と沖縄	「安保」が「同盟」へと変容するなか、日本の役割も基地提供に「行動」や「思いやり予算」を伴うものへと変わっていくが、沖縄については何が変わり、何が変わらなかったのか。この問題を検討してみたい。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は、各2時間が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を「肅々と、強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じる事が望ましい。

「国際日本学特殊講義 F II」をも履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】

古典のなかの古典といえますが、さしあたり手ごろな通史として中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波書店、1976年）、および新崎『沖縄現代史』（岩波書店、2005年）、ならびに宮里政玄ほか編著『戦後沖縄の政治と法—1945-72年』（東京大学出版会、1975年）を、また、沖縄をめぐる日米関係史について書かれた研究として、河野康子『沖縄返還をめぐる政治と外交—日米関係史の文脈』（東京大学出版会、1994年）、宮里『日米関係と沖縄—1945-1972』（岩波書店、2000年）、沖縄国際大学公開講座委員会編集・発行『基地をめぐる法と政治』（2006年）、我部政明『戦後日米関係と安全保障』（吉川弘文館、2007年）、平良好利『戦後沖縄と米軍基地 「受容」と「拒絶」のはざま—1945-1972年』（法政大学出版局、2012年）、および中島琢磨『沖縄返還と日米安保体制』（有斐閣、2012年）を挙げておきます。近年の示唆にとむ研究成果として、鳥山淳『沖縄基地社会の起源と相克—1945-1956』（勁草書房、2013年）および大野光明『沖縄闘争の時代—1960／70』（人文書院、2014年）ならびに櫻澤 誠『沖縄現代史—米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015年）、さらに野添文彬『沖縄返還後の日米安保—米軍基地をめぐる相克』吉川弘文館、2016年もぜひ一読されたい。

【参考書】

拙著『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島』（みすず書房、2008年）。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100％）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムやオンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2021年2月9日）

新型コロナ禍により、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日米関係史、日本政治外交史
 ＜研究テーマ＞ 日米地位協定の成立過程
 沖縄と日米安保体制の歴史
 日本と核兵器との関係史

＜主要研究業績および刊行物＞

・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999年。
 ・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞〔社会科学部門〕受賞）。
 ・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017年。
 ・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。
 ・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。
 ・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。
 ・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。
 ・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ—「ボックス・アメリカナ」か「ボックス・アジア」か』NHK出版、2014年（共訳）。
 ・『占領期年表 1945-1952年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。

近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する「国民感情」と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしたと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授ならびに河野康子・筑波大学名誉教授による監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。

【Outline and objectives】

Seventy years have passed from the battle in Okinawa, and nearly fifty years from the reversion of Okinawa. Okinawa still seems to be under U.S. military colonialism. It suffers structural discrimination by the people of Japan proper as well. In post-war Okinawa and foreign relations 1, we consider and discuss the dynamism that formed post-war Okinawa. In this class, post-war means the period from the battle in Okinawa to the end of the cold war.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 F II

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまで沖縄には在日米軍専用基地が著しく偏在してきた。その基地には米軍が排他的管理権を行使し、さらに、基地の外の軍用機事故等に対する捜査・検分から日本側が排除されることも少なくない。また、1972年の施政権返還まで、米軍構成員・軍属・それらの家族に琉球民裁判所の裁判権は及ばず、施政権返還後も日本側の裁判権行使はままならない。本授業で学生は、これらの事柄に象徴される「戦後」沖縄が負わされた日米地位協定問題をめぐる日米琉関係の歴史を考察することになる。

【到達目標】

学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するテーマを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

第2回目以降、授業のはじめに、前回授業で教員が課したレポート等の課題に対する個々の受講生の解答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	対象	「軍人・軍属・それらの家族」をめぐる琉・米・日関係について考察し、議論する。
第2回	基地設定条項の形成	全土基地方式の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第3回	基地設定をめぐる諸問題	全土基地方式の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第4回	管理権条項の形成	排他的管理権の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第5回	管理権をめぐる諸問題	排他的管理権の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第6回	受け入れ国法令	受け入れ国国内法令の適用をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第7回	裁判権条項の形成	刑事裁判権規定（第17条）の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第8回	日本側一次裁判権放棄密約	受け入れ国の一次裁判権放棄取り決めをめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第9回	被疑者の公訴前身柄引き渡し問題	被疑者の身柄引き渡しをめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。

第10回	負担分担条項の形成	「思いやり予算」の成立をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第11回	「思いやり予算」をめぐる政治過程	「思いやり予算」の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第12回	環境	環境保全規定／補足協定をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第13回	合議組織	日米合同委員会をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第14回	改定	地位協定改定問題をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は、各2時間が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を「粛々と、強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

さしあたり、近年に刊行された以下の文献を挙げておく。

拙著『日米地位協定 その歴史と現在』みすず書房、2017年。

山本章子『日米地位協定 在日米軍と「同盟」の70年』中央公論新社、2019年。

信夫隆司『米軍基地権と日米密約 奄美・小笠原・沖縄返還を通して』岩波書店、2019年。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100％）

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムやオンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2021年2月9日）

新型コロナ禍により、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】

「国際日本学特殊講義 F I」のシラバスを参照されたい。

【Outline and objectives】

United States military bases in Japan unevenly exist in Okinawa prefecture. U.S. armed forces exercise exclusive rights over them. And the Japanese authorities often can not exercise the right of search or inspection with respect to the accidents of U.S. military aircraft. Before the reversion of Okinawa, Okinawan court could not have criminal jurisdiction over the members of U. S. armed forces, civilian component and their dependents. Even after the reversion, Japanese court often cannot exercise the criminal jurisdiction over them. In post-war Okinawa and foreign relations 2, we consider the U.S.-Japan Status of Forces Agreement (SOFA or Chii-Kyotei) providing the conditions of the stationing of the U.S. military forces. And focusing SOFA problems, we discuss the history of the U.S.-Japan-Ryukyu/Okinawa relations.

ART500B7

国際日本学特殊講義 G I

高橋 悠介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の中世には、聖徳太子関連寺院を中心に、太子の伝記が連綿として編まれた。こうした太子伝には、聖徳太子をめぐる伝承のみならず、仏教教説や寺院における注釈学、太子関連の諸寺院の動向など、様々な背景がうかがえる。また、聖徳太子の伝記は絵画化されて絵解きが行われ、特徴的な太子像も造像された。ここでは、後世への影響力の大きかった『聖徳太子伝暦』と、鎌倉後期の『正法輪藏（聖法輪藏）』という二つの太子伝から、特徴的な場面を取り上げて、読み比べつつ、これらと関連の深い太子絵伝や太子像などの造形作品について検討したい。

【到達目標】

- ・図像資料とその背景にある文献資料を、複合的に読解する技術を身につける。
- ・寺院圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・日本の寺院における学問についての基礎知識を身に付け、中世の聖徳太子信仰をはじめ、日本の仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初は、聖徳太子伝の展開に関する概要と太子関連の造形作品、講読にあたっての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要・進め方について説明。
第2回	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本について講義。
第3回	太子絵伝の展開	聖徳太子の伝記の造形化（彫刻・絵画）について講義。
第4回	太子十六歳条	用明天皇の葬送・六角堂建立等の記事を講読し、その造形を検討。
第5回	太子十七歳条	四天王寺の瓦を造る等の記事を講読し、その造形を検討。
第6回	太子十八歳条	牛飼に穀倉の鍵を与える等の記事を講読し、その造形を検討。
第7回	太子十九歳条	戴冠等の記事を講読し、その造形を検討。
第8回	太子二十一歳条	猪の献上・崇峻天皇暗殺等の記事を講読し、その造形を検討。
第9回	太子二十二歳条	推古天皇即位等の記事を講読し、その造形を検討。
第10回	太子二十四歳条	淡路国に霊木漂着等の記事を講読し、その造形を検討。
第11回	太子二十五歳条	法華経の落字・法興寺落慶等の記事を講読し、その造形を検討。
第12回	太子二十六歳条	百濟より阿佐太子来朝等の記事を講読し、その造形を検討。
第13回	太子二十七歳条（一）	黒駒で富士山に登る等の記事を講読し、その造形を検討。

第14回 太子二十七歳条（二） 膳大娘との婚礼・新羅からの孔雀献上等の記事を講読し、その造形を検討。及び最後のまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。指定した講読文献の当該記事をよく読んで理解すると共に、関連する複数の造形を見て比較検討すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

- ・『東大寺図書館蔵文明十六年書写『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、1985年）
- ・『日本庶民文化史料集成』第二巻（三一書房、1974年）
- ・慶應義塾大学附属研究所所道文庫編『中世聖徳太子伝集成』（勉誠出版、2005年）
- ・『日本の美術 442 中世の童子形』（至文堂 2003年）
- ・図録『聖徳太子展』（NHK・NHK プロモーション、2001年）

その他、授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表50%、平常点50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学
 ＜研究テーマ＞中世仏教文学・芸能・寺院資料論
 ＜主要研究業績＞
 ・『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014年）
 ・「荒神の図像について―如来荒神を中心に―」（仏教美術論集第二巻『図像学Ⅰ―イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012年5月）
 ・「律院称名寺と聖徳太子伝一釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研究』52号、2017年9月）

【Outline and objectives】

A Study of the biography and image of Prince Shotoku.

ART500B7

国際日本学特殊講義 G II

高橋 悠介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代を代表する絵巻の傑作『春日権現験記絵』の記事と絵を検討する。この絵巻に収められた春日権現（春日大明神）の霊験譚には、貴顕や南都僧の春日信仰、鎌倉時代の南都の宗教環境、南都僧の教学や儀礼、神仏習合など様々な背景がうかがえる。これまでに、美術史・日本史・日本文学など諸方面で積み重ねられてきた研究史をふまえ、『春日権現験記絵』を講読する。

【到達目標】

- ・寺社圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
- ・『春日権現験記絵』を通して、日本の神仏習合や仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初は、『春日権現験記絵』と南都の寺社文化についての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	講義の概要・進め方について説明。
第 2 回	春日社と春日曼荼羅	『春日権現験記絵』を講読する上での基礎知識として、春日社の沿革と春日曼荼羅について講義。
第 3 回	『春日権現験記絵』と貞慶の唱導資料	『春日権現験記絵』の成立をめぐる研究史を整理し、特に貞慶とその周辺による春日権現をめぐる霊験の集録との関係について講義。
第 4 回	『春日権現験記絵』 卷一（一）	卷一の序にあたる記事の講読と討議。
第 5 回	『春日権現験記絵』 卷一（二）	卷一の承平託宣事・竹林殿事の記事と絵の検討と討議。
第 6 回	『春日権現験記絵』 卷一（三）	卷一の金峯山御幸事の記事と絵の検討と討議。
第 7 回	『春日権現験記絵』 卷二（一）	卷二の寛治御幸事・永久衆都闘乱事の記事と絵の検討と討議。
第 8 回	『春日権現験記絵』 卷二（二）	卷二の二条関白事の記事と絵の検討と討議。
第 9 回	『春日権現験記絵』 卷三（一）	卷三の堀川左府事・鹿嶋和歌事の記事と絵の検討と討議。
第 10 回	『春日権現験記絵』 卷三（二）	卷三の信経事の記事と絵の検討と討議。
第 11 回	『春日権現験記絵』 卷四（一）	卷四の天狗参入東三条事の記事と絵の検討と討議。
第 12 回	『春日権現験記絵』 卷四（二）	卷四の忠実春日詣時神託事の記事と絵の検討と討議。
第 13 回	『春日権現験記絵』 卷四（三）	卷四の普賢寺撰政事・三条内府事の記事と絵の検討と討議。

第 14 回 『春日権現験記絵』 卷四の後徳大寺左府事の記事と絵の検討と討議。及び最後のまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。『春日権現験記絵』の当該記事をその場面の絵と共によく読み、関連説話を含めて利解すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

藤田経世『校刊美術史料 寺院篇上』（中央公論美術出版、1972 年）
『続日本の絵巻 春日権現験記絵』（中央公論社、1991 年）
神戸説話研究会編『春日権現験記絵注解』（和泉書院、2005 年）

【成績評価の方法と基準】

発表 50%、平常点（出席状況等）50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

<研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論

<主要研究業績>

- ・「称名寺聖教中の春日関係資料と『春日権現験記絵』」（『説話文学研究』46、2011 年 7 月）
- ・「貞慶をめぐる説話と律院―「異砂記」・伯行光春日霊験譚」（『説話文学研究』55、2020 年 9 月）
- ・「正楽寺蔵・荒神曼荼羅について―一蔵王権現と習合した忿怒相の荒神像と諸尊」（『寺院文献資料学の新展開 第五巻 中四国諸寺院 I』臨川書店、2020 年 3 月）

【Outline and objectives】

A Study of the "Kasuga Gongen Genkie" (miraculous stories of Kasuga deity picture scroll).

PRI500B7

国際日本学特殊講義 J I

田中 邦佳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて分析し、その結果を可視化（グラフ化）して示す必要がある。本授業では演習を通じ、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か、データ化や可視化における注意点について学ぶ。

【到達目標】

- (1) Excel や R を使用して基本的なデータの処理ができるようになる。
- (2) Excel や R を使用してデータの適切なグラフ化ができるようになる。
- (3) データの種類に応じた適切な分析・可視化ができるようになる。
- (4) 上記の 3 つの項目を踏まえて、参加者各自が関心を持つ研究テーマで用いられている手法の利点を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。
参加者は、Excel を用いたデータ処理や作図する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	授業の進め方の説明
第 2 回	データの入力	Excel を使いデータの入力、注意点について
第 3 回	データの代表値の提示	平均値
第 4 回	平均値以外のデータの代表値の提示	中央値・最頻値
第 5 回	データのバラツキの提示	標準偏差
第 6 回	データの集計	集計結果のまとめ方
第 7 回	グラフを用いたデータの可視化	棒グラフ・折れ線グラフ
第 8 回	データの頻度の可視化	ヒストグラム
第 9 回	複数のタイプのデータの可視化	複数の要素が含まれたグラフ
第 10 回	複数のデータを扱うタイプのデータの可視化	散布図
第 11 回	データの量が多い場合の分析	大きなデータの分析
第 12 回	データ分析の結果の言葉での説明	データ分析の結果の文章化
第 13 回	研究テーマに合った分析と可視化	適切な分析手法の選択
第 14 回	総合演習	データ分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析・作図課題を行う。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

40%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

具体的なデータを用いた分析演習の時間をより長く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

初回の授業は対面形式で行う予定です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basic approach to summarizing data and methods for visualizing data.

PRI500B7

国際日本学特殊講義 K I

田中 邦佳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて統計学的分析を行う必要がある。本授業では演習を通じ、いくつかの基礎的な統計的手法の仕組みを知り、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か学ぶ。

【到達目標】

- (1) 基本的な統計手法の仕組みについて理解する。
- (2) 数値の意味を理解する。
- (3) テーマに応じて適切な統計的分析ができるようになる。
- (4) 上記の 3 つの項目を踏まえて、参加者各自の研究計画でどのような手法を用いるのが適切か提案できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、Excel などを用いたデータ処理や統計に関する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	授業の進め方の説明
第 2 回	記述統計と推測統計	記述統計と推測統計の違い
第 3 回	記述統計で用いた数値	平均・標準偏差
第 4 回	データのバラツキ	正規分布・標準偏差
第 5 回	信頼区間	信頼区間
第 6 回	カイ 2 乗検定	カイ 2 乗検定
第 7 回	カイ 2 乗検定の演習	カイ 2 乗検定の分析演習
第 8 回	t 検定（対応あり）	t 検定（対応あり）
第 9 回	t 検定（対応なし）	t 検定（対応なし）
第 10 回	t 検定の演習	t 検定の分析演習
第 11 回	2 要因の分散分析	2 要因の分散分析
第 12 回	多重比較と交互作用	多重比較と交互作用
第 13 回	言葉での報告	統計結果の文章での報告
第 14 回	総合演習	データの統計的分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析を行う。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

40%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

分析課題を行う時間をより多く設定します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basic statistical methods.

LITA500B7

国際日本学特殊講義 L I

倉本 さおり

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のポップカルチャーはインターネットや SNS をはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。この授業ではマンガやアニメ、ライトノベル、映画、ドラマ、2.5 次元舞台、アイドルなどのポップカルチャーを中心に、具体的な作品やコンテンツを取りあげ批評的に鑑賞するスタイルを採用します。さまざまな角度から積極的に楽しみつつ、ときに批判を交えた分析を行うことで、思考停止に陥らず、流動的な現実や個々の社会そのものの在り方を主体的に捉えるための視点や方法を学んでいきます。

【到達目標】

- ・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
- ・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら独創的な研究課題を見出すことができるようになる
- ・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる
- ・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

履修生の人数と各自の希望を考慮したうえで、対面授業とオンライン授業を併用した講義を行う予定です。
講義では画像や映像サンプルをふんだんに用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて現代日本のポップカルチャーをめぐる諸問題について学んでいきます。
授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したのち、各自「サブカル歴」をまじえつつ自己紹介してもらいます。これまで自分がどんな文化の中で育ってきたのか、どんなジャンルやコンテンツに興味があるのか改めて意識することで、サブカルチャーないしポップカルチャーというものの存在がどのような手続きを経て人びとの自己形成に関わっていくのか主体的に確認していきます。
第 2 回	メディアとポップカルチャーの現況	『鬼滅の刃』や『呪術廻戦』といった最新のメガコンテンツをイントロダクションに、「サブカルチャー」と呼ばれてきたものの変遷、そして複数のメディアと連動して成長していく現代ポップカルチャーの特徴について概説します。
第 3 回	ポップカルチャーの諸相①	2013 年度文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞した雲田はるこ『昭和元禄落語心中』を教材に、マンガ・アニメ化作品それぞれで描かれる落語シーンの演出の違いに着目しつつ、各ジャンルの表現形態の特徴についてディスカッションしながら立体的に検討していきます。
第 4 回	ポップカルチャーの諸相②	『昭和元禄落語心中』に登場する落語が落語家によって実際に上演されている様子を「語り」ないし「語り手」という枠組みに注目しながら鑑賞します。その後、前回の授業を踏まえ、「枠組み」や「場」の形成というものが大衆文化の中で果たす意味について考えます。

第 5 回	物語、キャラクター、世界観①	東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生—動物化するポストモダン 2』（2008 年）を読み、「データベース」理論の内実について考え、日本のゼロ年代において大衆文化のキャラクターや世界観、物語がどのように捉えられていたのかについて考えます。
第 6 回	物語、キャラクター、世界観②	データベース理論について考え、現代の文芸批評の理論から捉え直します。ジュリア・クリステヴァのインターテクスチュアリティのほか、フーコー、デリダ以降の批評理論から考えたときに、どう位置づけられるのかを批判的かつ建設的に考えていきます。
第 7 回	ミニレポート発表会	これまでの授業を踏まえ、自分が興味のあるコンテンツから研究対象としてひとつ選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。その後クラス内でディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第 8 回	テキストとコンテキスト①	日本のアニメ映画『天気の子』（新海誠監督）と韓国映画『パラサイト』（ポン・ジュノ監督）における〈水〉ないし〈豪雨〉の表象の差異に着目し、同じ言葉やモチーフが異なる文脈に置かれることでまったく別の表象を伴ったものの事例について検討します。
第 9 回	テキストとコンテキスト②	『天気の子』『パラサイト』を実際に鑑賞した上で、前回の授業を踏まえてディスカッションを行い、社会背景とポップカルチャーにおける表象の相関について考察を深めていきます。
第 10 回	解釈とアダプテーション①	田辺聖子の短篇小説『ジョゼと虎と魚たち』（1985 年）を読んだうえで、犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』（2003 年）を鑑賞し、原作となったテキストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されたのか分析していきます。
第 11 回	解釈とアダプテーション②	前回の授業を踏まえ、タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』（2020 年）を鑑賞し、どのようなプロセスを経て翻案に至ったのか、時代背景や社会環境の変化も併せてディスカッションしながら考察していきます。
第 12 回	メディア文化と再帰性①	読者アンケートが連載作品の掲載順や内容にまで影響を及ぼす可能性のある「週刊少年ジャンプ」というメディアの特徴を取り上げ、メディアとコンテンツとコミュニティの流動的な関係性に焦点を当てていきます。
第 13 回	メディア文化と再帰性②	「異世界転生もの」や「悪役令嬢もの」等、前回の授業テーマに基づき選んだ小説投稿サイト出身の作品（いわゆる「なろう系」小説）を分析してディスカッションし、メディアがコンテンツを配信するだけでなく、コミュニティを形成することによってコンテンツを特徴づけていく状況について考えます。
第 14 回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

- ※無理にそろえる必要はありません
 - ・橋本陽介『ナラトロジー入門——プロップからジュネットまでの物語論』（水声社）
 - ・東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
 - ・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 90 年代保守言説のメディア文化』（青弓社）
 - ・堀あきこ、守如子＝編『BL の教科書』（有斐閣）
 - ・永田大輔、松永伸太郎＝編『アニメの社会学—アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』（ナカニシヤ出版）
 - ・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く——「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
- 他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度 30 %、授業内で執筆・提出する課題 30 %、期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【担当教員の専門分野等】

国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。共同通信文芸時評「デザインする文学」、文藝「はばたけ！くらもと偏愛編集室」、週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」連載中。他、小説トリッパー、小説すばる、ダ・ヴィンチなど。『文学界』新人小説月評（2018）、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」（2019）。TBS ラジオ「文化系トークラジオ Life」サブパーソナリティ。

【Outline and objectives】

Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you will critically appreciate and discuss pop culture content such as manga, animation, light novels, movies, TV dramas, 2.5dimensional musicals, and idols. By identifying and analyzing problems from various angles, you will learn perspectives and methods for actively grasping dynamic reality and social situations without stopping thinking.

LITA500B7

国際日本学特殊講義ⅠⅡ

倉本 さおり

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のポップカルチャーはインターネットや SNS をはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。後期の授業では「ジェンダー化されたマンガ・コンテンツ」としての側面を持つ『週刊少年ジャンプ』に注目し、現代社会の論点をあぶりだすと共に、ポップカルチャー批評が豊かな未来へとつながるような提言を模索していきます。

【到達目標】

- ・授業中に学んだジェンダーに関わる視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
- ・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら独創的な研究課題を見出すことができるようになる
- ・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる
- ・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

容を変更していく可能性があります。変更は学習支援システム等で提示します）履修生の人数と各自の希望を考慮したうえで、対面授業とオンライン授業を併用した講義を行う予定です。

講義では画像や映像サンプルをふんだんに用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえてポップカルチャーとジェンダーをめぐる諸問題について学んでいきます。

授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介と授業の進め方についての説明。また、ジェンダーをめぐるいくつかの論題を紹介し、サブカルチャーないしポップカルチャーと呼ばれているものから社会規範や人びとの自己認識をかたちづくるプロセスを読み解くための有効な視点や手法について考えていきます。
第 2 回	マンガ雑誌とジェンダー	今なお日本で最も発行部数の多い雑誌メディアであり、かつ「(区分上) ジェンダー化されたコミック雑誌」という複合的な性格を有する『週刊少年ジャンプ』の今日に至るまでの位置づけと変化について、国内外のメディアにおける言及のされ方を参照しつつ社会的な文脈から検証します。
第 3 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ①（バトル形式と物語の展開）	週間発行部数 653 万部を記録し黄金期と呼ばれていた 1990 年代の『週刊少年ジャンプ』掲載作品（鳥山明『ドラゴンボール』、富樫義博『幽遊白書』、井上雄彦『SLUM DUNK』等）を取り上げ、その展開と結末の様相をめぐって噴出した言説から、当時の日本の「少年マンガ」の像がどのような論点を社会に提示したのか考えていきます。
第 4 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ②（ヒーローの相対化）	2014 年から『週刊少年ジャンプ』誌上で連載中の堀越耕平『僕のヒーローアカデミア』におけるヒーローとヴィラン（≒ 敵役）の描き方に着目し、いくつかの論文を参照しながら、近年の「少年マンガ」がどのような文脈で社会に受容されているか検討していきます。

第 5 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ③（チーム化とロジック化）	2013 年から連載が開始された草原大介『ワールドトリガー』の構造に着目し、近年の「少年マンガ」が 90 年代に提示された〈バトル〉をめぐる論点をどのような形で更新しようと試みてきたか考えてみます。
第 6 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ④（勝者と敗者の解体）	2012 年から 2020 年にかけて連載され、2.5 次元ミュージカルという分野でも大きな注目を浴びている古舘春一の『ハイキュー!!』368 話「なにもの」にスポットを当て、群像劇としてのスポーツマンガの影響と可能性について多角的に検証していきます。
第 7 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツの主人公／主要キャラクターを取り上げ、その動機付けと物語の展開について、オリエンテーションで紹介した有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈成長〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第 8 回	中間レポート発表会	自分が興味のあるコンテンツや派生したメディアのトピックから期末レポートに向けた論点を見つけ出し、簡単な発表を行ってもらいます。
第 9 回	「少年マンガ」とジェンダーロール①（テキストとしてのキャラクター）	1984 年から 95 年にかけて連載された鳥山明『ドラゴンボール』における「役割語」の様相に着目し、テキストとしてのキャラクターが形成されるプロセスについて検証していきます。
第 10 回	「少年マンガ」とジェンダーロール②（「少年マンガ」における女性性）	前回の授業の踏まえつつ、2018 年から連載されている芥見下々『呪術廻戦』における「役割語」の様相に着目することで、作中の女性キャラクターがどのようなジェンダーロールを内面化し、あるいはそれを乗り越えようとしているか考察していきます。
第 11 回	「少年マンガ」とジェンダーロール③（ヒーローとヒロイン）	2016 年から 2020 年まで連載されていた白井カイウ原作・出水ぽすか作画『約束のネバーランド』の主人公・エマの造型を逆説的に参照することで、従来の「少年マンガ」の女性キャラクターたちがどんな磁場のもとに登場していたか検証していきます。
第 12 回	「少年マンガ」とジェンダーロール④（ラブコメの類型と逸脱）	2017 年から 2021 年まで連載され、パラレルストーリーを採用することで議論を巻き起こした筒井太志『ぼくたちは勉強ができない』を中心に、「ラブコメ」と呼ばれるジャンルの読者の反応を参照しつつ、これまで「少年マンガ」の磁場においてジェンダー規範とロマンチック・ラブがどのように受容されてきたか考えていきます。
第 13 回	「少年マンガ」とジェンダーロール⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツを取り上げ、そのキャラクター造型や物語の構造について有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈ジェンダー〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第 14 回	まとめとフィードバック	期末レポートに向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定・発表し、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

※無理にそろえる必要はありません
・東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
・足立加勇『日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象』（現代書館）
・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 90 年代保守言説のメディア文化』（青弓社）
・金水聡『役割語研究の展開』（くろしお出版）
・河野真太郎『戦う姫、働く少女』（POSSE 叢書）
・押山美知子『少女マンガ ジェンダー表象論 〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（アルファベータブックス）
・堀あきこ、守如子＝編『BL の教科書』（有斐閣）

・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く——「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度 30 %、授業内で執筆・提出する課題 30 %、期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度からの授業担当のためフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【担当教員の専門分野等】

国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。共同通信文芸時評「デザインする文学」、文藝「はばたけ！ くらもと偏愛編集室」、週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」連載中。他、小説トリッパー、小説すばる、ダ・ヴィンチなど。『文学界』新人小説月評（2018）、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」（2019）。TBS ラジオ「文化系トークラジオ Life」サブパーソナリティ。

【Outline and objectives】

Modern pop culture is spread across multiple media, including the Internet, social networking services, television, magazines, and games, and has various effects on social norms and self-formation. In this class, you focus on "Weekly Shonen Jump" one of the magazine media that has been characterized from the perspective of gender, and learn about issues facing modern society and suggestions for leading criticism of pop culture to a prosperous future.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

水野 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際日本学演習Ⅱでは①ゼロ金利が日本、ドイツ、フランスで生じた背景、②グローバリゼーションが経済に与えた影響や米中新冷戦の背景、③資本と利子について学ぶ。
ゼロ金利は「例外」状況ではあるが、例外が物事の本質を表すということを学ぶ。

【到達目標】

ゼロ金利は近代社会が想定していない「例外」状況であり、利子率と利潤率の関係を理解することができる。グローバリゼーションは帝国システムのイデオロギーでもある。したがって利子率低下のもとで利潤率を引き上げるためのグローバリゼーションが国民国家の時代から帝国の時代へと向かわせる可能性が高く、21世紀はいかなる時代となるのかを学ぶことができる。

日本の例を参考にグローバリゼーションの行き着く先を考え、それにどう対処するかを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は複数の課題図書の中から、各自が最も関心のあるテーマに近い図書を選び、毎回、受講生が発表し、参加者で討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	この講義の全体的な流れを説明
第2回	経済学とは	経済学で大事な概念である Save は「救済」の意味をもつ
第3回	「蒐集」（コレクション）と資本の関係について	「蒐集」は社会秩序維持の目的で行われる
第4回	「蒐集」と資本について	近代社会における社会秩序は資本の「蒐集」によって生活水準の向上をはかる
第5回	資本の過剰性と利子率ゼロについて	人類の課題は「過剰貯蓄」にある（ケインズ）
第6回	グローバリゼーションの「暴力性」について	グローバリゼーションと格差拡大（エレファント・カーブ、OXFAM レポートなど）
第7回	グローバリゼーションと帝国の関係について	グローバリゼーションの起源は、キリスト教帝国の時代である 13 世紀から始まる
第8回	公式の帝国と非公式の帝国について	「陸と海のたたかい」（シュミット）について
第9回	20 世紀の帝国の条件とは（米中新冷戦の背景）	支配と被支配の関係は債権国と債務国の関係（シュミット）、国際収支発展段階説、所得収支の重要性
第10回	利子と利潤の関係について	源泉は同じであり、違いは利子は恒常性、利潤は偶発性（シュンペーター）
第11回	消費と投資について	今を楽しむか、将来に備えるか
第12回	日本企業の内部留保金について	利子率の時差理論（バヴェルク）と搾取説（マルクス）
第13回	「石」となった個人金融資産	「財産を失った守銭奴」（ラ・フォンテーヌ）
第14回	まとめ	21 世紀はいかなる時代なのか

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。

【テキスト（教科書）】

オリエンテーション時に指示（現在、執筆中の本を使用する予定）

【参考書】

『資本主義の終焉と歴史の危機』（水野和夫、2014 年、集英社新書）
『閉じてゆく帝国と逆説の 21 世紀経済』（水野和夫、2017 年、集英社新書）

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、受講態度：50 %

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努める。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 現代日本経済論、グローバル経済論

＜研究テーマ＞ グローバル化が経済に及ぼす影響、資本主義の課題
＜主要研究業績＞

- 『100 年デフレ～21 世紀は物価下落型のバブル多発時代～』日本経済出版社、2003 年
- 『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』日本経済新聞出版社、2003 年
- 『終わりのなき危機 君はグローバリゼーションの真実を見たか』日本経済新聞出版社、2011 年
- 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014 年
- 『資本主義の終焉、その先の世界』詩想社新書、榊原栄資共著、2015 年
- 『株式会社の終焉』ディスカバー 21、2016 年
- 『閉じてゆく帝国と逆説の 21 世紀経済』集英社新書、2017 年

【Outline and objectives】

This course introduces a cause of zero interest rate, economic effect of globalization and US-China New Cold War and relation between capital and interest rate to students taking this course.

Students can understand that exceptions prove anything.

OTR700B7

国際日本学研究 I

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次産品の制作を行う。

【到達目標】

博士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。博士論文は広範囲に渡る知識と教養をベースに先行研究にはない独自性と啓蒙性が求められる。それにはサブテーマに基づく補完的な研究論文が随時生み出されるべきである。

成績評価はサブ論文の出来次第だが、中間発表などの成果も評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士の演習と共同で行うが、随時、研究室で個別の論文執筆指導、リサーチテーマの指示、追加研究の必要性を吟味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	論文執筆計画の吟味	概要の発表
第 2 回	論文執筆計画の修正	詳細の検討
第 3 回	論文執筆計画の完成	詳細の決定
第 4 回	サブテーマの設定	サブテーマ選びを議論を通じて行う
第 5 回	サブテーマについてに 討議	サブテーマについてのブレインストーミング
第 6 回	共同研究 1	修士のゼミと合同で共通テーマに基づくワークショップその 1
第 7 回	共同研究 2	修士のゼミと合同で共通テーマに基づくワークショップその 2
第 8 回	共同研究 3	修士のゼミと合同で共通テーマに基づくワークショップまとめ
第 9 回	中間発表	論文の進捗状況報告
第 10 回	中間発表の修正	論文の内容吟味
第 11 回	テキスト購読 1	読書会
第 12 回	テキスト購読 2	読書会
第 13 回	論文指導 1	論文細部のチェック
第 14 回	論文指導 2	論文細部のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題、レポートをこなし、論文執筆の進捗状況を随時報告する。本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

ほか授業内で指示

【参考書】

授業で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点 20 %、サブコンテンツ 20 %、論文進行状況 30 %、論文完成度 30 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

情報端末 パソコンなど

【その他の重要事項】

オフィスアワーは水曜昼休み

【小説論 サブカルチャー研究】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史
＜研究テーマ＞

＜主要研究業績＞

小説作法ABC 新潮選書 2008
徒然王子全 2 巻 朝日新聞出版 2009
悪貨 講談社 2010
傾国子女 文藝春秋 2013

【創作】

ニッチを探して 新潮社 2013
往生際の悪い奴 日本経済新聞社 2014
暗黒寓話集 文藝春秋 2014

【創作】

虚人の星 講談社 2016
カタストロフマニア 新潮社 2017
人類最年長 文藝春秋 2018
君が異端だった頃 集英社 2019

【創作】

スノードロップ 新潮社 2020

【Outline and objectives】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次産品の制作を行う。

【到達目標】

博士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。博士論文は広範囲に渡る知識と教養をベースに先行研究にはない独自性と啓蒙性が求められる。それにはサブテーマに基づく補完的な研究論文が随時生み出されるべきである。成績評価はサブ論文の出来次第だが、中間発表などの成果も評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士の演習と共同で行うが、随時、研究室で個別の論文執筆指導、リサーチテーマの指示、追加研究の必要性を吟味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文執筆計画の見直し	計画の修正
第2回	論文執筆計画の補足	補足テーマの確認
第3回	論文執筆計画の完成	計画の決定
第4回	サブテーマ研究1	サブテーマ選びを議論を通じて行う
第5回	サブテーマ研究2	ディベート
第6回	サブテーマ研究3	発表
第7回	共同研究1	修士のゼミと合同で共通テーマに基づくワークショップその1
第8回	共同研究2	修士のゼミと合同で共通テーマに基づくワークショップその2
第9回	共同研究3	修士のゼミと合同で共通テーマに基づくワークショップ発表会
第10回	中間発表1	論文の進捗状況報告
第11回	中間発表2	論文の内容吟味
第12回	テキスト購読	読書会
第13回	論文指導1	論文細部のチェック
第14回	論文指導2	論文細部の修正

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題、レポートをこなし、論文執筆の進捗状況を随時報告する。本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書2017

ほか授業内で指示

【参考書】

授業で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点20%、サブコンテンツ20%、論文進行状況30%、論文完成度30%とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

パソコン等情報端末

【その他の重要事項】

オフィスアワーは水曜昼休み

【創作】

徒然王子全2巻 朝日新聞出版 2009

悪貨 講談社 2010

傾国子女 文藝春秋 2013

虚人の星 講談社 2016

カタストロフマニア 新潮社 2017

人類最年長 文藝春秋 2018

君が異端だった頃 集英社 2019

【小説論】

小説作法 ABC 新潮選書 2008

【日本近代文学】

深読み日本文学史 集英社インターナショナル新書2017

【Outline and objectives】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏をめぐる1
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏をめぐる2
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏をめぐる3
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏をめぐる4
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制の特質
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国と日本の古代交通制度の比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界ー城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後ーFileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	大化前代氏姓制度の特質 1
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	大化前代氏姓制度の特質 2
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	大化前代氏姓制度の特質 3
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	大化前代氏姓制度の特質 4
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使と新羅使の比較
第10回	博士課程修了者による論文発表(5)	俘囚とはなにか
第11回	博士課程修了者による論文発表(6)	俘囚移配の特質
第12回	博士課程修了者による論文発表(7)	夷俘と俘囚の違い
第13回	博士課程修了者による論文発表(8)	律令国家の北方政策
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界ー城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後ーFileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。
また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、ハイフレックス授業形式で行ないます。対面授業をオンラインでもリアルタイムで配信します。皆さんの都合に合わせて、教室での対面授業か、自宅等でのオンライン授業かを選択してください。

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第 2 回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第 3 回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第 4 回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第 5 回	研究発表（1）	研究報告と議論
第 6 回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第 7 回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第 8 回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第 9 回	研究発表（2）	研究報告と議論
第 10 回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第 11 回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第 12 回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第 13 回	研究発表（3）	研究報告と議論
第 14 回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Individual consultation on the composition and content of papers related to Japanese medieval history.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。
また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、ハイフレックス授業形式で行ないます。対面授業をオンラインでもリアルタイムで配信します。皆さんの都合に合わせて、教室での対面授業か、自宅等でのオンライン授業かを選択してください。

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第 2 回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第 3 回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第 4 回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第 5 回	研究発表（1）	研究報告と議論
第 6 回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第 7 回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第 8 回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第 9 回	研究発表（2）	研究報告と議論
第 10 回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第 11 回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第 12 回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第 13 回	研究発表（3）	研究報告と議論
第 14 回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Individual consultation on the composition and content of papers related to Japanese medieval history.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第 2 回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第 3 回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第 4 回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第 5 回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第 6 回	研究発表（5）	学術雑誌への投稿をめざして
第 7 回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第 8 回	論文講読（2）	論文構成の方法
第 9 回	論文講読（3）	史料批判
第 10 回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第 11 回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第 12 回	研究計画発表（1）	今後の方針
第 13 回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第 14 回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019 年）

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を複数掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第 2 回	研究発表（1）	研究史との格闘
第 3 回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第 4 回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第 5 回	研究発表（4）	表の効果的使用
第 6 回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第 7 回	論文講読（1）	分野の選定
第 8 回	論文講読（2）	表現力の問題
第 9 回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第 10 回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第 11 回	論文講読（5）	結論の妥当性
第 12 回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第 13 回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第 14 回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019 年）

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業の概要：日本近現代史に関わる博士論文の作成に必要な能力・技能を養う。
 ・目的：博士論文作成に向けた企画・構想力、批判力および表現力を養う。

【到達目標】

到達目標：1) 先行研究の動向を把握し、問題の所在を発見する。2) その上で課題を設定し、課題解決の論理を、史実・史料の取捨選択を行いつつ、構成する。3) 最終的に自分の独自性や独創性を主張し、当該研究分野における業績たり得る歴史像を相当の分量で著述する。4) 日本近現代史研究に関わる英語文献の読解力を養成し、高める。5) 歴史学における博士の学位にふさわしい歴史観と社会的情報発信力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・進め方：演習形式である。
 ・方法：研究発表と質疑応答、最先端の研究に関わる新刊書の合評会を行う。教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策として ZOOM を利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次回の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	課題図書紹介（1）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 3 回	課題図書に関する発表（1）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 4 回	課題図書紹介（2）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 5 回	課題図書に関する発表（2）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 6 回	課題図書紹介（3）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 7 回	課題図書に関する発表（3）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 8 回	課題図書紹介（4）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 9 回	課題図書に関する発表（4）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 10 回	課題図書紹介（5）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 11 回	課題図書に関する発表（5）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 12 回	課題図書紹介（6）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。

第 13 回 課題図書に関する発表 担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。

第 14 回 まとめ 授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・準備学習：課題図書を読んでおくこと。発表者は配布資料を作成しておくこと。
 ・復習：参考書や関連文献を読むこと。また、学術文献が掲載されているウェブサイトを利用して識見を広げること。毎回授業終了後学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに掲示される授業の要点を読み、同システムの「一般ディスカッション」サイトを活用すること。
 ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

継続的に使用する刊本としてのテキストはない。授業内合評会で取り上げる図書については事前に予告する。

【参考書】

・Marius B. Jansen, The Making of Modern Japan, Harvard University Press, 2002
 ・アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館のウェブサイトによる公開史料と関連コラム

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。なお、特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

博士論文執筆促進のための助言を増やすこととする。

【学生が準備すべき機器他】

・授業支援システムを利用することができる IT 機器。
 ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

・「史学特殊演習 A II」（秋学期）との継続履修を強く推奨する。
 ・学習支援システムを授業運営上フル活用するので、頻繁に閲覧し、見落としがないようにすること。
 ・発表者は事前に配布資料を添付ファイル形式で学習支援システムの「一般ディスカッション」サイトにアップロードし、受講生が各自ダウンロードできるようにしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 日本近現代政治史
 <研究テーマ>
 日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程
 <主要研究業績>
 「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）
 「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）
 『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）
 『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）
 『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、
 「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）
 「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）
 「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）
 『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）
 『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）
 「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）
 「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）
 「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）
 『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This is a course for the PhD candidates. The object of this course is for every student to obtain and enhance critical thinking ability and the skill of writing a PhD dissertation on the topic of the Japanese modern history through a presentation of his/her research, discussion, and a book review.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・授業の概要：日本近現代史に関わる博士論文の作成に必要な能力・技能を養う。
- ・目的：博士論文作成に向けた企画・構想力、批判力および表現力を養う。

【到達目標】

到達目標：1) 先行研究の動向を把握し、問題の所在を発見する。2) その上で課題を設定し、課題解決の論理を、史実・史料の取捨選択を行いつつ、構成する。3) 最終的に自分の独自性や独創性を主張し、当該研究分野における業績たり得る歴史像を相当の分量で著述する。4) 日本近現代史研究に関わる英語文献の読解力を養成し、高める。5) 歴史学における博士の学位にふさわしい歴史観と社会的情報発信力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・進め方：演習形式である。
- ・方法：研究発表と質疑応答、最先端の研究に関わる新刊書の合評会を行う。教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策として ZOOM を利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次回の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	課題図書紹介（1）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 3 回	課題図書に関する発表（1）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 4 回	課題図書紹介（2）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 5 回	課題図書に関する発表（2）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 6 回	課題図書紹介（3）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 7 回	課題図書に関する発表（3）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 8 回	課題図書紹介（4）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 9 回	課題図書に関する発表（4）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 10 回	課題図書紹介（5）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 11 回	課題図書に関する発表（5）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 12 回	課題図書紹介（6）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。

- 第13回 課題図書に関する発表 担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
- 第14回 まとめ 授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・準備学習：課題図書を読んでおくこと。発表者は配布資料を作成しておくこと。
- ・復習：参考書や関連文献を読むこと。また、学術文献が掲載されているウェブサイトを利用して識見を広げること。毎回授業終了後学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに掲示される授業の要点を読み、同システムの「一般ディスカッション」サイトを活用すること。
- ・本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

継続的に使用する刊本としてのテキストはない。授業内合評会で取り上げる図書については事前に予告する。

【参考書】

- ・Marius B. Jansen, The Making of Modern Japan, Harvard University Press, 2002
- ・アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館のウェブサイトによる公開史料と関連コラム

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。なお、特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

博士論文執筆促進のための助言を増やすこととする。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムを利用することができる IT 機器。
- ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

- ・「史学特殊演習 A I」（春学期）との継続履修を強く推奨する。
- ・学習支援システムを授業運営上フル活用するので、頻繁に閲覧し、見落としがないようにすること。
- ・発表者は事前に配布資料を添付ファイル形式で学習支援システムの「一般ディスカッション」サイトにアップロードし、受講生が各自ダウンロードできるようにしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近現代政治史

＜研究テーマ＞

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

＜主要研究業績＞

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）

『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This is a course for the PhD candidates. The object of this course is for every student to obtain and enhance critical thinking ability and the skill of writing a PhD dissertation on the topic of the Japanese modern history through a presentation of his/her research, discussion, and a book review.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ラテン語読解能力のさらなる向上、学会発表やその活字化、後進の指導など、研究者・教育者として自立的に活動していくための基盤を形成・強化する。

【到達目標】

- （１）自らのラテン語読解能力をさらに向上させる。
 - （２）研究会や学会で積極的に研究発表を行い、その報告原稿を活字化する。
 - （３）自分がこれまでに修得した専門的知識を生かして、修士課程在籍者に対する指導経験を積む。
- 以上の３点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業はブレンド型（対面授業の回とオンライン授業の回の混在）で実施し、主として受講者による研究の現状報告、学術雑誌掲載に向けた論文原稿作成とそれに対する指導を中心に、授業を進める。受講生からの報告レジュメ・論文草稿等の提出と、教員によるそれらへのフィードバックは、事前に学習支援システムで行ったうえで、内容に関する質疑応答・討議を対面で行う。なお、最後の数回は修士課程科目「西洋史学演習Ⅰ」と合同授業とし、博士課程在籍の受講者から修士課程在籍者に対し、ラテン語史料の読み方などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の進捗状況について	受講者による研究の現状報告と討議
第 2 回	研究内容の活字化に向けて (1)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議 (1)
第 3 回	研究内容の活字化に向けて (2)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議 (2)
第 4 回	研究内容の活字化に向けて (3)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議 (1)
第 5 回	研究内容の活字化に向けて (4)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議 (2)
第 6 回	研究内容の活字化に向けて (5)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (1)
第 7 回	研究内容の活字化に向けて (6)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (2)
第 8 回	研究内容の活字化に向けて (7)	論文原稿を学術雑誌に投稿可能な形に完成させる
第 9 回	英語による研究成果の発表に向けて	論文要旨を英語で作成する
第 10 回	博士論文作成に向けて	博士論文完成に向けて、残っている課題の整理と討議
第 11 回	後進への指導経験を積む (1)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する (1)
第 12 回	後進への指導経験を積む (2)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する (2)
第 13 回	後進への指導経験を積む (3)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する (3)
第 14 回	研究の今後に向けて	夏期休暇中の研究計画と教員からの助言

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、学会での口頭発表や学術雑誌論文の形でまとめる。後進のラテン語史料読解を補助するにあたっての予習と復習。本授業の授業外学習時間は、大学設置基準では 1 回につき計 4 時間以上とされているが、それをはるかに上回る授業時間外学習が必要なことは、論を俟たないであろう。

【テキスト（教科書）】

後進の指導については、
Caesar, *The Gallic Wars*, tr. by H. J. Edwards (Loeb Classical Library 72).

【参考書】

後進の指導については、
カエサル『ガリア戦記』、國原吉之助訳、講談社学術文庫、1994 年。
『カエサル戦記集 ガリア戦記』、高橋宏幸訳、岩波書店、2015 年。
長谷川博隆『カエサル』講談社学術文庫、1994 年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（研究の活字化に向けての自主的努力 70 %、ラテン語読解補助の予習も含めた後進の指導に向けての準備 30 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 古代ローマ史

<研究テーマ> 帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

- ① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).
- ② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料 1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012 年。
- ③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10 (1982 年 10 月)。

【Outline and objectives】

Through this class, students improve their abilities to read and comprehend the historical sources written in Latin, to make presentations concerning one's own research, and to help younger students in their researches, in order to become an independent researcher and teacher.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学術雑誌への論文投稿や、ラテン語読解能力のさらなる向上など、博士論文を完成させ、研究者として自立的に活動していくための基盤を強化する。

【到達目標】

(1) 学術雑誌への論文投稿を行い、博士論文を完成に近づける。
(2) ラテン語読解能力をさらに向上させる。
以上の2点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業はブレンド型（対面授業の回とオンライン授業の回の混在）で実施し、受講者による研究報告とその内容に関する討議を中心に授業を進める。ラテン語史料講読については、受講者が使用する予定の史料を中心に精読・討議する。受講者からの報告レジュメやラテン語史料の試訳の提出と、教員によるそれらへのフィードバックは、事前に学習支援システムで行ったうえで、対面授業ではさらに深い質疑応答や討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究の現状報告	受講者が夏期休暇中に進めた研究内容についての報告と討議
第2回	博士論文の完成に向けて (1)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議 (1)
第3回	博士論文の完成に向けて (2)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議 (2)
第4回	博士論文の完成に向けて (3)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議 (3)
第5回	新たな論文発表に向けて (1)	博士論文完成のために残されている課題の検討
第6回	新たな論文発表に向けて (2)	学術誌に投稿する新たな論文の概要報告と質疑応答・討議
第7回	新たな論文発表に向けて (3)	学術誌に投稿する新たな論文原稿の検討と討議
第8回	新たな論文発表に向けて (4)	新たな論文で使用する原典史料の読解に関する討議
第9回	博士論文の完成に向けて (4)	博士論文完成に向けたタイムスケジュールの確認。受講者による章立て構想の発表と討議。
第10回	博士論文の完成に向けて (5)	受講者の章立て案に沿っての内容確認と討議 (1)
第11回	博士論文の完成に向けて (6)	受講者の章立て案に沿っての内容確認と討議 (2)
第12回	博士論文の完成に向けて (7)	受講者の章立て案に沿っての内容確認と討議 (3)
第13回	博士論文の提出に向けて (1)	提出予定の博士論文に関して、討議で出された疑問点や批判への回答とさらなる討議
第14回	博士論文の提出に向けて (2)	提出予定の博士論文原稿の最終確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、研究内容を口頭発表や雑誌論文の形でまとめる。授業で読むラテン語史料の読解を自分で進めて学習支援システムに試訳を提出し、教員からのフィードバックおよび授業時の質疑応答や指摘を踏まえて、自分の読解を見直す。本授業の授業外学習時間は、大学設置基準では1回につき計4時間以上とされているが、それをはるかに上回る授業時間外学習が必要なのは、論を俟たないであろう。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

授業で読むラテン語史料については、受講者と相談のうえで決定する。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（自主的研究の進捗と内容 70 %、ラテン語読解の精度 30 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【その他の重要事項】

史学特殊演習 A I（後藤）から継続して履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ローマ史

<研究テーマ>帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).

② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012年。

③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10 (1982年10月)。

【Outline and objectives】

Preparations to complete a doctoral thesis and the enhancement of the abilities necessary for an independent researcher.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。それをもとに博士論文作成を進めるための力量を培い、独自の研究の確立につなげていく。

【到達目標】

- ・先史社会の内実を物質資料の分析に基づいて検討し、批判を加えつつ建設的な展望を提示することができる。
- ・先史社会に関する特定のテーマをもとにした論文を多面的に構成するための能力が高まる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者が関心を寄せる先史時代の社会に関する先行研究を講読し、受講者の研究テーマを設定するために検討と討論を重ねる。関連する諸研究を横断しながら、研究の現状と課題を明らかにし、受講者の問題意識の形成につなげ、資料の分析方法を見通していく。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の意義
第 2 回	構想発表（1）	受講者の目指す論文構想
第 3 回	構想発表（2）	現状の論文構想の課題と問題の検討
第 4 回	学史的論文の検討（1）	主に 1990 年代までの研究分野をリードしてきた先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 5 回	学史的論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 6 回	学史的論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 7 回	近年の研究論文の検討（1）	2000 年代以降の研究分野を形成した先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 8 回	近年の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 9 回	近年の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 10 回	最新の研究論文の検討（1）	当該分野における最新研究のテーマと目的に関する検討
第 11 回	最新の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 12 回	最新の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 13 回	先史社会研究の発達過程と多面的な方向性	受講者の掲げたテーマの有効性と問題点の摘出
第 14 回	総括	研究テーマと方針の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。当該分野の諸研究に関する論文集および研究史の概要把握。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。この授業では受講者の研究テーマを先行研究の中に確実に位置づけたうえで、資料の実践的な検討と考察を行い、博士論文作成に資することとする。

【到達目標】

- ・諸研究を総合的に検討することで受講者自身が新たな研究の方向を展望できる。
- ・受講者自身の研究テーマにもとづく資料集成を実践できる。
- ・集成した資料の分類と分析を一定の基準の下で実践できる。
- ・分析を元にした考察をまとめ、新たな展望を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の設定した研究テーマの学史的背景と妥当性を検討するとともに、対象となる資料の分析視点を絞り込んでいく。次いで資料の分類と分析に進み、その手順と理解の妥当性を検討する。最終的に考察された内容が資料にもとづいて正確になされているかについて討論し、最新の研究成果との相関性や先進性について理解を深めていく。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の実戦に向けた諸段階
第 2 回	研究テーマの学史的検討（1）	先行研究の展開過程
第 3 回	研究テーマの学史的検討（2）	研究史上の転換点・画期
第 4 回	研究テーマの学史的検討（3）	現状の研究の方向性と展望
第 5 回	資料集成（1）	資料集成の目的と方向性
第 6 回	資料集成（2）	目的にもとづく資料集成方法の検討
第 7 回	資料の分析（1）	資料のもつ諸属性の理解
第 8 回	資料の分析（2）	観察視点と属性抽出方法
第 9 回	資料の分析（3）	資料分析の実践と問題
第 10 回	資料の分析（4）	分析結果の処理
第 11 回	分析結果の読み取り（1）	分析結果の提示・表現方法
第 12 回	分析結果の読み取り（2）	分析結果の解釈と考察
第 13 回	成果の検討	研究テーマと結論の相関性および最新研究との関連性の検討
第 14 回	総括	研究論文の内容と構成の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。受講者のテーマに関連する研究論文の渉猟、考古学的方法論に関する理解。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

HIS500B4

日本史学特殊講義 A I**阿部 朝衛**

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を修得し、それを各自が保有する資料へ適用することによってその理解を深める。この過程で、考古学の課題・問題点の把握能力を高める。そして、理論・方法を各自が保有する資料に適用できる能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料にそれらの方法を適用する。論文作成をめざし、そのテーマとの関連で授業を進める。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また、課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論を進展させ、課題の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第 2 回	編年研究の基礎 1	型式学の前提、属性の抽出と操作方法
第 3 回	編年研究の基礎 2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第 4 回	編年研究の基礎 3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第 5 回	実践的研究の検討 1	モンテリウスの研究 1
第 6 回	実践的研究の検討 2	モンテリウスの研究 2
第 7 回	実践的研究の検討 3	セリエーション 1
第 8 回	実践的研究の検討 4	セリエーション 2
第 9 回	論文の検討 1	旧石器時代論文
第 10 回	論文の検討 2	縄文時代論文
第 11 回	論文の検討 3	弥生時代・他論文
第 12 回	資料の検討 1	旧石器時代資料
第 13 回	資料の検討 2	縄文時代資料
第 14 回	資料の検討 3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
テキストの熟読、課題に関連する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 The Theory and Practice of Archaeology. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 Archaeology: Theories, Methods, and Practice. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼をおいて検討する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23 号 2007 年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560 号 2007 年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007 年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』

2008 年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』Ⅱ 2009 年

新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25 号 2010 年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013 年

「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018 年

「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020 年

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of the chronology in the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to make chronology of their own archaeological materials.

HIS500B4

日本史学特殊講義 A II

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理・方法の理解を深め、それを各自が保有する資料に適用することによって実践的な能力の修得を目指す。そして理論・方法をもとにした論文を書けることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。論文作成を目指し、そのテーマとの関連でも授業を進める。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また、課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問等を受け付け、議論を発展させ、課題内容の理解を深める。発表内容に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	春学期の課題・方法の整理
第 2 回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第 3 回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第 4 回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第 5 回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第 6 回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第 7 回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第 8 回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第 9 回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第 10 回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第 11 回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第 12 回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第 13 回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第 14 回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50 %）とレポート（50 %）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本旧石器時代、縄文時代

＜研究テーマ＞

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

＜主要研究業績＞

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23 号 2007 年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560 号 2007 年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007 年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』

2008 年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』II 2009 年

新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25 号 2010 年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013 年

「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018 年

「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020 年

【Outline and objectives】

This course deals with the chronological and typological methods and theories of the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to understand many kinds of the methods and theories, and apply them to the participants' materials.

HIS500B4

日本史学特殊講義 B I

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第 2 回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第 3 回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第 4 回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 5 回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 6 回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 7 回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 8 回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 9 回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 10 回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 11 回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。

第 12 回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 13 回	武芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 14 回	武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第 1・2・3 編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編 3』山梨県、2001 年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編 1』2004 年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本古代史（奈良・平安時代史）
<研究テーマ>
古代史科学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
<主要研究業績>
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019 年
「古代の馬の生産と地域社会」（『歴史評論』839 2020 年）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018 年）
「正倉院文書と古代史科学」（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016 年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本史学特殊講義 B II

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第 2 回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 3 回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 4 回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 5 回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 6 回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 7 回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 8 回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 9 回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 10 回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 11 回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。

第 12 回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 13 回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 14 回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第 1・2・3 編
『訳注延喜式』上・中・下
『駒牽関係史料』（『山梨県史 資料編 3』山梨県、2001 年、山口英男編集担当）
『駒牽と相撲』（『山梨県史 通史編 1』2004 年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（1001%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本古代史（奈良・平安時代史）
<研究テーマ>
古代史科学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
<主要研究業績>
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019 年
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018 年）
「正倉院文書と古代史科学」（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016 年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本史学特殊講義 C I

末柄 豊

実務教員：

【Outline and objectives】

Diary of the Muromachi period

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明4年（1472）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	概要の説明、分担箇所の決定
第2回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松蘭斎編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>室町時代の政治史・文化史・史料論

<主要研究業績>

『戦国時代の天皇（日本史リブレット82）』（山川出版社、2018年）

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明4年（1472）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第2回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読14	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松蘭斎編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞室町時代の政治史・文化史・史料論

＜主要研究業績＞

『戦国時代の天皇（日本史リブレット82）』（山川出版社、2018年）
「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）
「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

HIS500B4

日本史学特殊講義 D I

落合 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究の諸問題。各人の研究テーマ、関心に即しながら、近世史の問題点を抽出し検討する。

受講生は、自分の関心から何を明らかにすべきかを考え、その学問の意味を理解することを目指したい。

【到達目標】

各人の研究で何をやりたいかを明らかにする。報告を期待するが、難しい場合、論文購読を行うようにする。

受講生は、批判的に論文が読めるようになること、また、自身の研究が如何なる研究史に位置づけられるかを明確にしたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式はブレンド型で行う。1回目は対面で実施するので、その時に計画を報告する。

講義は基本的に報告とそれに対する議論とする。可能であれば合宿も考えたいが、それは、受講生と相談の上、決める。課題や発表に対するフィードバックは授業内で講評として実施する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	テーマの紹介	Introduction of a theme
第2回	中近世移行期を考える。	Time during the modernized world medieval
第3回	徳川政権	Tokugawa political power
第4回	近世前期論	The early modern period first term is considered.
第5回	新井白石の政治	Arai Hakuseki's politics
第6回	享保改革	Tokugawa Yoshimune's politics
第7回	田沼時代	Tanuma's politics
第8回	寛政改革	Matudaira Sadanobu's politics
第9回	天保改革	Mizuno Tadakuni's politics
第10回	近世後期の社会	Society in the modern period latter period
第11回	幕末社会論	Society in the early modern period last years
第12回	明治維新时期	Meiji restoration period
第13回	近世社会論	I think about the early modern period.
第14回	まとめ	Summary

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告は事前に当てるので、その準備を行う。もちろん、論文を読んだり、史料を読んだうえでのぞまなければならない。報告担当者でない場合でも、当該テーマについて、事前に予習しておくこと。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてその都度指示する。

【参考書】

必要に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

各回に課せられた報告内容と議論の質（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

単位を目的とするのであれば、履修しないで欲しい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【日本社会経済史】

「近世後期、広島藩の経済政策思想」『日本経済思想史研究』17、2017年

【日本金融史】

「戦後直後の中小企業金融論議」（『青山経済論叢』68 - 4、2017年）

【近世社会論】

「二か領用水の展開と水争い」中央大学人文科学研究所編『地域史研究の今日的課題』（中央大学出版会、2018年3月）

【日本経済思想史】

『国益思想の源流』（同成社、2016年）

【Outline and objectives】

Miscellaneous problems of early modern history study. It's based on each person's research subject and interest. The problem of a modern history study is made clear on it. A member of a class thinks what to do clearly from the interest. And I aim to understand its scientific point.

HIS500B4

日本史学特殊講義Ⅱ

落合 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究の諸問題。各人の研究テーマ、関心に即しながら、近世史の問題点を摘出し検討する。

受講生は、自分の関心から何を明らかにすべきかを考え、その学問的意味を理解することを目指す。

【到達目標】

各人の研究で何をやりたいかを明らかにする。報告を期待するが、難しい場合、論文購読を行うようにする。

受講生は、批判的に論文が読めるようになること、また、自身の研究が如何なる研究史に位置づけられるかを明確にしたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式はブレンド型で行う。1回目は対面で実施するので、その時に計画を報告する。

講義は基本的に報告とそれに対する議論とする。可能であれば合宿も考えたいが、それは、受講生と相談の上、決める。課題や発表に対するフィードバックは授業内で講評として実施する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	テーマの紹介	Introduction of a theme
第2回	兵農分離	The dissociation of the soldier and the farmer
第3回	鎖国と海禁	National isolation and sea prohibition
第4回	飢饉	Famine
第5回	国益	National interests
第6回	徳川政権論	Tokugawa political power
第7回	貨幣と紙幣	Money and bill
第8回	実学	Practical science
第9回	砂糖業史	Sugar industry history
第10回	塩業史	Salt industry history
第11回	都市打毀し	House destruction
第12回	農兵	Farmer's soldier
第13回	大久保利通	Okubo Tshimiti
第14回	まとめ	Summary

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告は事前に当てるので、その準備を行う。もちろん、論文を読んだり、史料を読んだうえでのぞまなければならない。報告担当者でない場合でも、当該テーマについて、事前に予習しておくこと。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてその都度指示する。

【参考書】

必要に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

各回に課せられた報告内容と議論の質（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

単位を目的とするのであれば、履修しないで欲しい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【日本社会経済史】

「近世後期、広島藩の経済政策思想」『日本経済思想史研究』17、2017年

【日本金融史】

「戦後直後の中小企業金融論議」（『青山経済論叢』68 - 4、2017年）

【近世社会論】

「二か領用水の展開と水争い」中央大学人文科学研究所編『地域史研究の今日的課題』（中央大学出版会、2018年3月）

【日本経済思想史】

『国益思想の源流』（同成社、2016年）

【Outline and objectives】

Miscellaneous problems of early modern history study.It's based on each person's research subject and interest.The problem of a modern history study is made clear on it.A member of a class thinks what to do clearly from the interest.And I aim to understand its scientific point.

HIS500B4

日本史学特殊講義 E I

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

渋沢栄一は、91年の生涯に約500の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。

近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】

近代日本の社会構造について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・この授業は、オンライン授業（リアルタイム配信型）にて実施します。

――

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第3回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（1）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（2）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（1）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（2）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（1）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（2）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（1）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（2）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（1）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（2）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（1）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（2）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜、レジュメ・資料を配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告（70％）、主体的な授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度とテーマを連続しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子『華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合』（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business.

HIS500B4

日本史学特殊講義 E II

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

渋沢栄一は、91年の生涯に約500の企業にかかわり、他に教育、社会事業など多岐にわたる活動を行ない、近代日本社会の形成に広範にかかわった。

近代日本の社会構造について、渋沢栄一がかかわった事業を中心にテーマを設定し、史料から論点を構成し、理解することを目的とする。

【到達目標】

近代日本の社会構造について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・この授業は Zoom を使用し、オンライン授業（リアルタイム配信型）にて実施します。

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第3回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	渋沢栄一	渋沢栄一について。
第3回	史料読解と研究発表	金融（1）明治前期
第4回	史料読解と研究発表	金融（2）明治後期以降
第5回	史料読解と研究発表	交通（1）明治前期
第6回	史料読解と研究発表	交通（2）明治後期以降
第7回	史料読解と研究発表	商工業（1）明治前期
第8回	史料読解と研究発表	商工業（2）明治後期以降
第9回	史料読解と研究発表	対外事業（1）明治前期
第10回	史料読解と研究発表	対外事業（2）明治後期以降
第11回	史料読解と研究発表	社会事業（1）明治前期
第12回	史料読解と研究発表	社会事業（2）明治後期以降
第13回	史料読解と研究発表	教育（1）明治前期
第14回	史料読解と研究発表	教育（2）明治後期以降

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜レジュメ・資料を配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告（70％）、主体的な授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】

2020年度とテーマを連続しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子『華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合』（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study the social structure of modern Japan, focusing on themes related to Eiichi Shibusawa's business.

HIS500B4

東洋史学特殊講義 A I

大島 誠二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻を用いる。前期は、「洹北商城」「西周都城」を輪読する。どのように洹北商城および西周都城が構成され成立したのか、その過程を追ひ、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

文物や遺構など考古学資料の分析を通して、社会の在り方を考察する研究方法を身につける。

都市の成立過程を学ぶことにより、中国文明の特質について理解を深める。

都市の機能と構造を復元することにより、当時の社会の特質を考察し、多角的な視座で古代中国像を構築できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。基本的に受講者の発表によって進行する。

対面授業で実施予定。状況が悪化すればオンライン授業【リアルタイム配信型】に移行する。

課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	洹北商城の発現と発掘	「洹北商城の発現と発掘」を読み、洹北商城の発見と発掘の経緯を確認する。
第 2 回	洹北商城の布局	「洹北商城の布局」を読み、洹北商城の全体像を把握する。
第 3 回	洹北商城の城壁	「洹北商城の城壁」を読み、城壁の範囲と規模について確認する。
第 4 回	洹北商城の宮殿	「洹北商城の宮殿」を読み、宮殿区の配置と構造について理解する。
第 5 回	洹北商城年代と性質の討論①	「関于洹北商城年代と性質の討論」を読み、洹北商城の年代問題の研究史をたどりつつ年代について考察する。
第 6 回	洹北商城年代と性質の討論②	「関于洹北商城年代と性質の討論」を読み、宮殿区の建設年代について考察し、殷王朝の中で果たした役割について考察する。
第 7 回	殷王朝における都城の形態	「鄭州商城」「偃師商城」「洹北商城」「殷墟」を比較検討し、殷代の都城の構造と都市機能について考察する。
第 8 回	西周都城概述	「西周都城概述」を読み、西周王朝の都城の変遷をたどる。
第 9 回	豊鎬遺址①	「遺跡概況」を読み、豊鎬遺址の分布範囲を把握する。
第 10 回	豊鎬遺址②	「宮殿遺址」を読み、豊鎬遺址の大型建築遺跡の状況を把握する。

第 11 回 豊鎬遺址③

「墓地」を読み、豊鎬遺址の墓地の分布とその内容を把握する。

第 12 回 洛邑

「洛邑」を読み、西周時代の洛邑の痕跡について把握する。

第 13 回 西周時期都城特点①

「都城形態」を読み、文献史料上の記載と考古学資料の出土状況について比較検討する。

第 14 回 西周時期都城特点②

「都城相地与規格」を読み、西周都城の立地と構造について考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

発表担当者は、他の参加者の理解のために参考文献にあたり、レジュメを作成してほしい。

また博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってもらいたい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月

最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003 年（2011 年重印）

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004 年（2011 年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート作成 50 %

【学生の意見等からの気づき】

画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史、中国考古学

<研究テーマ> 秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究

<主要研究業績>

「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996 年

「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部 2005 年

「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008 年

【Outline and objectives】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Huanbei Shang city" and "Western Zhou period city". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

HIS500B4

東洋史学特殊講義 A II

大島 誠二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻を用いる。後期は、「西周都城」「東周都城」を輪読する。西周時期の都城と東周時期の都城とを比較検討し、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

文物や遺構など、考古学資料の分析を通して、社会の在り方を考察する研究方法を身に付ける。
都市の形成過程を学ぶことにより、中国社会の特質について理解を深める。
都市の機能と構造を復元することにより、当時の社会の特質を考察し、多角的な視座で古代中国古像を構築できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。基本的に受講者の発表によって進行する。
対面授業で実施予定。状況が悪化すればオンライン授業【リアルタイム配信型】に移行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期		
回	テーマ	内容
第 1 回	西周時期都城特点③	「宗廟与宮殿是都城中的重要建築」を読み、西周時期の大型建築址の構造と機能について検討する。
第 2 回	西周時期都城特点④	「聚族而居与聚族而葬」を読み、西周時期の集落と墓地の構成について考察する。
第 3 回	西周時期の都城形態の検討	「周原遺跡」「豊鎬遺跡」「洛邑遺跡」を新資料を交えて比較検討し、西周時代の都市の構造と機能について考察する。
第 4 回	東周時期都城概述	「東周時期都城概述」を読み、東周時期の都城形態の変化について理解する。
第 5 回	東周洛陽王城①	「城址概況」を読み、東周洛陽城の概略を理解する。
第 6 回	東周洛陽王城②	「宮殿建築基址」を読み、文献史料の記載と比較し、宮殿区の立地と建設年代について検討する。
第 7 回	東周洛陽王城③	「手工業作坊区与糧倉」を読み、洛陽における手工業生産と食糧問題について考察する。
第 8 回	東周洛陽王城④	「墓葬分布区」を読み、洛陽の墓地分布と車馬坑から見た王陵区問題について考察する。
第 9 回	侯馬晋国故城①	「城址概況」を読み、侯馬晋国故城の全体像を把握する。

第 10 回	侯馬晋国故城②	「宮殿建築基址」を読み、分散する大型建築遺跡の分布状況を理解し、その機能を考察する。
第 11 回	侯馬晋国故城③	「祭祀遺址」を読み、遺跡の状況を把握するとともに、出土した盟書の内容を理解し、祭祀の持つ意味を考察する。
第 12 回	侯馬晋国故城④	「手工業遺址」を読み、鑄銅遺跡の生産形態とその役割を考察する。
第 13 回	侯馬晋国故城⑤	「墓葬分布区」を読み、墓地区の分布状況を把握し、晋公陵墓とその他の墓地の構成要素を比較検討する。
第 14 回	西周時期と東周時期の都城形態	西周時期と東周時期の都城形態の変化を踏まえながら、背後にある社会状況の変化を考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
発表担当者は、他の参加者の理解のために参考文献にあたり、レジュメを作成してほしい。
また博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってもらいたい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003 年（2011 年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004 年（2011 年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート作成 50 %

【学生の意見等からの気づき】

画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史、中国考古学
<研究テーマ> 秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
<主要研究業績>
「秦の東進と陝東社会」「アジア史における制度と社会」 刀水書房 1996 年
「侯馬喬村墓地の変遷について」「アジア史における社会と国家」中央大学出版社 2005 年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008 年

【Outline and objectives】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Western Zhou period city" and "Eastern Zhou period city". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

HIS500B4

東洋史学特殊講義 B I

水上 和則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国陶磁生産文化研究

【到達目標】

陶磁生産技法を通じて、制作文化を研究する能力を獲得する。

**【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】**

【授業の進め方と方法】

中国は“やきもの”の国である。両大河により育まれた平坦で酸性の
広大な大地からは、豊かな陶磁原料を産し、各地で窯業生産が行わ
れた。陶磁器の生産技術を理解することで、陶磁文化が如何に開花
したかを学んでゆく。基本文献を精読し、文献史学の学術成果を活
用して、基礎力を構築する。中国国内だけでなく、交易と共にアジ
ア諸国への技法伝搬も講義する。
博物館・美術館所蔵品を提示し、優れた造形と装飾をもつ中国陶磁
の名品を鑑賞する能力を養う。時に、遺跡出土の陶磁片などを元に
ディスカッションを行い、具体性の強い授業を行ってゆく。

【授業形式】 対面授業を行う。

基本的に疑問は授業内で解決すること。授業内で出来なかった質問
等は、教員の学内メールで受け付ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	アジア陶磁生産研究の意義と目的
第 2 回	アジア陶磁研究の意味	アジア陶磁文化の世界視野上の位置付け
第 3 回	中国陶磁の調査方法	調査対象と調査方法の具体例
第 4 回	中国陶磁生産の基準資料	陶磁生産の基準資料とは。何を窯業生産と言うのか
第 5 回	中国陶磁機能分岐と年代設定	土器・陶器・磁器の分類と、開始年代設定
第 6 回	中国陶磁研究状況	中国に於ける研究状況
第 7 回	陶磁考古資料と取扱い	考古資料と分析試料の取扱い方法
第 8 回	陶磁生産研究上の基本文献（一）	『中国陶磁見聞録』（清・康熙六十一年）を読む
第 9 回	同 基本文献（二）	『景德鎮陶録』（清・嘉慶二十年）を読む
第 10 回	中国陶磁器の東アジア交易	新安沖沈船と交易品
第 11 回	陶磁交易と製陶技術伝搬	瀬戸と唐津の製陶技術からみる中国技法
第 12 回	朝鮮半島への技術伝搬	北宋官窯と高麗青磁の技
第 13 回	日本への技術伝搬	唐津の窯と肥前磁器窯の形態比較
第 14 回	中国陶磁の展示見学（日程未定）	東京国立博物館を予定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

提示する基本文献を身近に置き、繰り返し通読すること。
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じプリント配布

【参考書】

授業の進行に沿って随時紹介する。
講義で扱う文献は以下

『中国陶磁見聞録』（清・康熙六十一年）平凡社、東洋文庫（363）、ISBN-13: 978-4582803631

『景德鎮陶録 1 2』（清・嘉慶二十年）平凡社、東洋文庫（464・465）、ISBN-13: 978-4582804645 ISBN-13: 978-4582804652

【成績評価の方法と基準】

平常点（60%）と研究発表・レポート（40%）の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

陶磁制作の学外見学（日程未定）

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶磁史

<研究テーマ>

唐宋代の陶磁技法の研究

<主要研究業績>

(1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002 年

(2)「宋元代景德鎮窯における素地土配合の研究」『元代青花白瓷研究』六一書房、2009 年

(3)「景德鎮調査原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』雄山閣、2018 年

(4)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第 90 号』2018 年

(5)「宋代建窯黒褐釉煤熔剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』雄山閣、2021 年

【Outline and objectives】

Chinese ceramics production and cultural study

HIS500B4

東洋史学特殊講義 B II

水上 和則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国陶磁生産文化研究

【到達目標】

陶磁生産技法を通じて、制作文化を研究する能力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

中国は“やきもの”の国である。両大河により育まれた平坦で酸性の広大な大地からは、豊かな陶磁原料を産し、各地で窯業生産が行われた。陶磁器の生産技術を理解することで、陶磁文化が如何に開花したかを学んでゆく。基本文献を精読し、文献史学の学術成果を活用して、基礎力を構築する。中国国内だけでなく、交易と共にアジア諸国への技法伝播も講義する。

博物館・美術館所蔵品を提示し、優れた造形と装飾をもつ中国陶磁の名品を鑑賞する能力を養う。時に、遺跡出土の陶磁片などを元にディスカッションを行い、具体性の強い授業を行ってゆく。

【授業形式】 対面授業を行う。

基本的に疑問は授業内で解決すること。授業内で出来なかった質問等は、教員の学内メールで受け付ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	生産研究の基礎	中国陶磁生産で用いられる特殊用語
第 2 回	先史時代資料と研究方法	《土器》という言葉について考える
第 3 回	施釉陶器の始まりと構造	釉とは何か。釉の役割。釉の価値観。
第 4 回	陶磁発達の具体例	華北窯と使用原料
第 5 回	陶磁文化の発達	磁州窯の生産技法
第 6 回	陶磁文化の伝達	磁州窯と白瓷諸窯
第 7 回	青瓷の隆盛	越州窯と生産品
第 8 回	焼成すること	饅頭窯と石炭燃料の選択
第 9 回	陶磁と茶文化	建盞と茶文化に適した機能
第 10 回	陶磁の伝統技法	景德鎮窯と伝統技法（一） 北村弥一郎の支那窯業調査
第 11 回	陶磁の伝統技法（二）	同 伝統技法（二）
第 12 回	陶磁文化の広がり	華南陶磁器と沖縄陶器
第 13 回	中国陶磁とインド洋交易	肥前磁器の意匠と欧州への影響
第 14 回	まとめ	これまでのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

提示する基本文献を身近に置き、繰り返し通読すること。
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

【参考書】

授業の進行に沿って随時紹介する

講義で扱う文献は以下

『中国陶磁見聞録』（清・康熙六十一年）平凡社、東洋文庫（363）、ISBN-13: 978-4582803631

『景德鎮陶録 1 2』（清・嘉慶二十年）平凡社、東洋文庫（464・465）、ISBN-13: 978-4582804645 ISBN-13: 978-4582804652

【成績評価の方法と基準】

平常点（60%）と研究発表・レポート（40%）の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

博物館・美術館への中国陶磁器見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶磁史

<研究テーマ>

唐宋代の陶磁技法の研究

<主要研究業績>

(1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002 年

(2)「宋元代景德鎮窯における素地土配合の研究」『元代青花白瓷研究』六一書房、2009 年

(3)「景德鎮調査原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』雄山閣、2018 年

(4)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第 90 号』2018 年

(5)「宋代建窯黒褐釉媒熔剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』雄山閣、2021 年

【Outline and objectives】

Chinese ceramics production and cultural study

HIS500B4

西洋史学特殊講義 A I

松原 俊文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

本授業は、以下を到達目標とします。

- ・ 英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。
- ・ 論じられているテーマに関して自主的に調べ、批判的に考えることができる。
- ・ 古代ローマ史上の問題とそれに対する取り組み方を身につけ、自分の論点を立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. この授業は、オンライン授業（リアルタイム配信型）形式で行います。アプリケーションは Skype の WEB ミーティング機能を使用する予定です。
2. 古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。
3. 授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを下読みし、内容を把握しておく必要があります。
4. フィードバックは、授業時間内に講評と解説の機会をもうける形でを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	春学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前に指定された英文テキストの箇所を充分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストを配信します。

【参考書】

- ・ Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.
- ・ Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.
- ・ Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.
- ・ バウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
- ・ 松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（英文読解の精度と内容理解度 50 %、議論の背景と史料の把握度 50%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回授業に英和辞書を持ってくる。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

古代ローマ史

<研究テーマ>

ギリシア・ローマの歴史叙述

<主要研究業績>

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「伝記と歴史の境界を越えて - 英雄伝というジャンルの誕生」、小池登、佐藤昇、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦 新たなブルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、2019 年
3. 「記憶（メモリア）と政治 - ローマの政治文化における歴史の役割 -」、『西洋史研究』新輯第 48 号、西洋史研究会、2019 年

【Outline and objectives】

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 A II

松原 俊文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

本授業は、以下を到達目標とします。

- ・ 英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。
- ・ 論じられているテーマに関して自主的に調べ、批判的に考えることができる。
- ・ 古代ローマ史上の問題とそれに対する取り組み方を身につけ、自分の論点を立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. この授業は、オンライン授業（リアルタイム配信型）形式で行います。アプリケーションは Skype の WEB ミーティング機能を使用する予定です。
2. 古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の主題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。
3. 授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを下読みし、内容を把握しておく必要があります。
4. フィードバックは、授業時間内に講評と解説の機会をもうける形でを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	秋学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前に指定された英文テキストの箇所を十分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストを配信します。

【参考書】

- ・ Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.
- ・ Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.
- ・ Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.
- ・ バウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
- ・ 松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（英文読解の精度と内容理解度 50 %、議論の背景と史料の把握度 50%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回授業に英和辞書を持ってくる。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

古代ローマ史

<研究テーマ>

ギリシア・ローマの歴史叙述

<主要研究業績>

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「伝記と歴史の境界を越えて - 英雄伝というジャンルの誕生」、小池登、佐藤昇、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦 新たなブルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、2019 年
3. 「記憶（メモリア）と政治 - ローマの政治文化における歴史の役割 -」、『西洋史研究』新輯第 48 号、西洋史研究会、2019 年

【Outline and objectives】

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 B I

篠原 琢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

18 世紀末から第一次世界大戦期までの「長い 19 世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝國的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い 19 世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった……。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation State を近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の 19 世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。

【到達目標】

受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii 上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ 1. 帝国概論	ハプスブルク帝国とはどのような帝国だったのか、概説的に解説する。
第 2 回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ 2. 帝国を思い出す	ハプスブルク帝国崩壊後、帝国にどのようなイメージが存在したのか、代表的な流れを考える。
第 3 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 1. 帝国解体は必然だったのか？	ハプスブルク帝国後継諸国の歴史認識を問う。
第 4 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 2. 時代錯誤の帝国？	Oscar Jaszi, The Dissolution of Habsburg Monarchy

第 5 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 3. 帝国の長い解体過程	Alan Sked, The Fall and Decline of the Habsburg Monarchy
第 6 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 4. 帝国解体は必然ではない！	Pieter Judson, Habsburg Empire. New History
第 7 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 1. 諸国民社会の形成	Miroslav Hroch, Social Preconditions of National Revival in Europe
第 8 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 2. できごととしてのネイション	Rogers Brubaker, Nation without Groups
第 9 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 3. National Indifference	Tara Zahra, "Imagined Non-communities"
第 10 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 4. 国民化する帝国	Alexei Miller, Nationalizing Empires
第 11 回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国 1. ガリツィア・ブコヴィナ	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第 12 回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国 2. 文明化の使命	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第 13 回	ハンナ・アーレント『全体主義の起原』から帝国を考える	ハンナ・アーレント、『全体主義の起原』のうち、第二巻「帝国主義」を扱う。
第 14 回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時に扱うテキストは PDF で配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備してくる。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New History を教科書とする。

【参考書】

授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】

演習への貢献度、演習時の報告を 40%、学期末のレポートを 60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講者がいなかったため、特に該当しない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中央ヨーロッパ近現代史

<研究テーマ>中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline and objectives】

We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of different territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic existence by itself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anomaly deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summarizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 B II

篠原 琢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

18 世紀末から第一次世界大戦期までの「長い 19 世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝國的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。

ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い 19 世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった……。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation State を近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の 19 世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。前期は帝国史について、方法論を主に検討したが、後期は帝国の諸地域を具体的に検討する。

【到達目標】

受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii 上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ボヘミア（パーメン） 史 1.	「国民再生」概念について概説する。 チェコ「国民再生」の 思想と運動 1.
第 2 回	ボヘミア（パーメン） 史 2.	Vladimír Macura を読む チェコ「国民再生」の 思想と運動 2.
第 3 回	ボヘミア（パーメン） 史 3.	「フランクフルトへの手紙」を考 える 1848 年革命 1
第 4 回	ボヘミア（パーメン） 史 4.	「フランクフルトへの手紙」を考 える 1848 年革命 2

第5回	ボヘミア（ペーメン）史 5. 19 世紀後半のチェコ社会	チェコ・ナショナリズムと「ボヘミア王国の歴史的権利」
第6回	ボヘミア（ペーメン）史 6. 「言語闘争」	19 世紀のハプスブルク帝国の「ナショナリズム」問題について、「言語闘争」は典型的だと考えられてきた。その問題について批判的に検討を加える。
第7回	ボヘミア（ペーメン）史 7. 第一次世界大戦とチェコ社会	第一次世界大戦中の「帝国愛国主義」とチェコスロヴァキア独立論について検討する。
第8回	チェコにおけるユダヤ人社会	ボヘミア・モラヴィアにおける「ユダヤ人社会」、その同化とユダヤ・ナショナリズムを考える。
第9回	ガリツィア史 1. 「ガリツィアの虐殺」	1846 年のガリツィア蜂起、およびそれに伴って起こった「ガリツィアの虐殺」をナショナリズムの観点から考える。
第10回	ガリツィア史 2. ポーランド貴族とポーランド王国の正統性	ポーランド分割後のポーランド貴族の政治的影響力について考える。
第11回	ガリツィア史 4. 農民ナショナリズムの進展	19 世紀後半のポーランドの国民形成過程を農民を中心に考える。
第12回	ガリツィア史 5. ウクライナのピエモンテ？	ポーランド貴族の政治的・文化的ヘゲモニーに抗して進展したウクライナ・ナショナリズムをリヴィウを中心に考える。
第13回	ガリツィア史 6. ガリツィアにおけるユダヤ人社会	ガリツィアにおけるシオニズム、ユダヤ自治主義、同化主義の問題を考える。
第14回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時に扱うテキストは PDF で配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備しておくこと。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New History を教科書とする。

【参考書】

授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】

演習への貢献度、演習時の報告を 40%、学期末のレポートを 60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講者がいなかったため、特に該当しない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中央ヨーロッパ近現代史

<研究テーマ> 中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline and objectives】

We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of different territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic existence by itself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anomaly deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summarizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 C I

稲垣 春樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テキストの講読を通じて、19 世紀イギリス帝国に関する政治史研究の基本的な論点についての知識を深めます。

【到達目標】

学生は、イギリス帝国史の研究書を読み、高度な学術的ディスカッションをすることができますようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ハイフレックス授業。授業前にテキストを読み、論点をまとめておきます。授業では、各自が論点を報告し、全員で議論します。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について案内します。
第 2 回	文献講読 1	Introduction
第 3 回	文献講読 2	Chapter 1 - Setting the Scene for Emancipation
第 4 回	文献講読 3	Chapter 2 - Managing Expectations
第 5 回	文献講読 4	Chapter 3 - Political Freedom
第 6 回	文献講読 5	Chapter 4 - Settler Liberties
第 7 回	文献講読 6	Chapter 5 - Free Trade, Famine and Invasion
第 8 回	文献講読 7	Chapter 6 - Steam and Opium
第 9 回	文献講読 8	Chapter 7 - Setting the Scene: Hubris and Crisis
第 10 回	文献講読 9	Chapter 8 - 'A Struggle of Life and Death'
第 11 回	文献講読 10	Chapter 9 - A New Imperial Government
第 12 回	文献講読 11	Chapter 10 - Liberal Fathers and Sons
第 13 回	文献講読 12	Chapter 11 - Imperialism
第 14 回	文献講読 13、まとめ	Chapter 12 - Imperial Wars and Their Aftermaths

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は 4 時間を標準とします。授業前に、テキストの読解、追加調査、論点に関するコメントの作成を行ってください。

【テキスト（教科書）】

Alan Lester, Kate Boehme, and Peter Mitchell, *Ruling the World: Freedom, Civilisation and Liberalism in the Nineteenth-Century British Empire* (Cambridge, 2021).

【参考書】

参考書は授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。毎回の事前準備（論点コメントの作成）と授業中のディスカッションへの積極的な貢献により判断します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度が担当初年度のため特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞イギリス帝国史

＜研究テーマ＞植民地における政治と法、インド、ジャマイカ

＜主要研究業績＞「専制と法の支配— 1820 年代ボンベイにおける政府と裁判所の対立—」『史学雑誌』 127 編 1 号（2018 年 1 月）1～34 頁。

【Outline and objectives】

The class will read the text and discuss various topics on political history of 19th-century British Empire.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 C II

稲垣 春樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テキストの講読を通じて、イギリス帝国史研究の基本的な方法論および論点についての知識を深めます。

【到達目標】

学生は、イギリス帝国史の研究書を読み、高度な学術的ディスカッションをすることができるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ハイフレックス授業。授業前にテキストを読み、論点をまとめておきます。授業では、各自が論点を報告し、全員で議論します。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について案内します。
第 2 回	文献講読 1	Introduction
第 3 回	文献講読 2	Chapter 1 - Colonial and Indigenous Origins of Comparative Development
第 4 回	文献講読 3	Chapter 2 - Origins of Colonialism: Is There One Story?
第 5 回	文献講読 4	Chapter 3 - Colonialism as an Agent of Globalization
第 6 回	文献講読 5	Chapter 4 - Growth and Development in the Colonies
第 7 回	文献講読 6	Chapter 5 - Debates about Cost and Benefits
第 8 回	文献講読 7	Chapter 6 - How Colonial States Worked
第 9 回	文献講読 8	Chapter 7 - Did Institutions Matter?
第 10 回	文献講読 9	Chapter 8 - Colonialism and the Environment
第 11 回	文献講読 10	Chapter 9 - Business and Empires
第 12 回	文献講読 11	Chapter 10 - Decolonization and the End of Empire
第 13 回	文献講読 12	Chapter 11 - Summary and Conclusion
第 14 回	まとめ	授業のまとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は 4 時間を標準とします。授業前に、テキストの読解、追加調査、論点に関するコメントの作成を行ってください。

【テキスト（教科書）】

Leigh Gardner and Tirthankar Roy, _The Economic History of Colonialism_ (Bristol, 2020).

【参考書】

参考書は授業中に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。毎回の事前準備（論点コメントの作成）と授業中のディスカッションへの積極的な貢献により判断します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度が担当初年度のため特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞イギリス帝国史

＜研究テーマ＞植民地における政治と法、インド、ジャマイカ

＜主要研究業績＞「専制と法の支配— 1820 年代ボンベイにおける政府と裁判所の対立—」『史学雑誌』 127 編 1 号（2018 年 1 月）1～34 頁。

【Outline and objectives】

The class will read the text and discuss various topics and methods in British colonial history.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。
また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、ハイフレックス授業形式で行ないます。対面授業をオンラインでもリアルタイムで配信します。皆さんの都合に合わせて、教室での対面授業か、自宅等でのオンライン授業かを選択してください。

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Individual consultation on the composition and content of papers related to Japanese medieval history.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。
また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、ハイフレックス授業形式で行ないます。対面授業をオンラインでもリアルタイムで配信します。皆さんの都合に合わせて、教室での対面授業か、自宅等でのオンライン授業かを選択してください。

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Individual consultation on the composition and content of papers related to Japanese medieval history.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏をめぐって 1
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏をめぐって 2
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏をめぐって 3
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏をめぐって 4
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制の特質
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国と日本の古代交通制度の比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。
発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。
演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界ー城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後ーFileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	大化前代氏姓制度の特質 1
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	大化前代氏姓制度の特質 2
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	大化前代氏姓制度の特質 3
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	大化前代氏姓制度の特質 4
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使と新羅使の比較
第10回	博士課程修了者による論文発表(5)	俘囚とはなにか
第11回	博士課程修了者による論文発表(6)	俘囚移配の特質
第12回	博士課程修了者による論文発表(7)	夷俘と俘囚の違い
第13回	博士課程修了者による論文発表(8)	律令国家の北方政策
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。

演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界ー城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後ーFileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。それをもとに博士論文作成を進めるための力量を培い、独自の研究の確立につなげていく。

【到達目標】

・先史社会の内実を物質資料の分析に基づいて検討し、批判を加えつつ建設的な展望を提示することができる。
・先史社会に関する特定のテーマをもとにした論文を多面的に構成するための能力が高まる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者が関心を寄せる先史時代の社会に関する先行研究を講読し、受講者の研究テーマを設定するために検討と討論を重ねる。関連する諸研究を横断しながら、研究の現状と課題を明らかにし、受講者の問題意識の形成につなげ、資料の分析方法を見通していく。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の意義
第 2 回	構想発表（1）	受講者の目指す論文構想
第 3 回	構想発表（2）	現状の論文構想の課題と問題の検討
第 4 回	学史的論文の検討（1）	主に 1990 年代までの研究分野をリードしてきた先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 5 回	学史的論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 6 回	学史的論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 7 回	近年の研究論文の検討（1）	2000 年代以降の研究分野を形成した先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 8 回	近年の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 9 回	近年の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 10 回	最新の研究論文の検討（1）	当該分野における最新研究のテーマと目的に関する検討
第 11 回	最新の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 12 回	最新の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 13 回	先史社会研究の発達過程と多面的な方向性	受講者の掲げたテーマの有効性と問題点の摘出
第 14 回	総括	研究テーマと方針の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。当該分野の諸研究に関する論文集成および研究史の概要把握。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。この授業では受講者の研究テーマを先行研究の中に確実に位置づけたうえで、資料の実践的な検討と考察を行い、博士論文作成に資することとする。

【到達目標】

- ・諸研究を総合的に検討することで受講者自身が新たな研究の方向を展望できる。
- ・受講者自身の研究テーマにもとづく資料集成を実践できる。
- ・集成した資料の分類と分析を一定の基準の下で実践できる。
- ・分析を元にした考察をまとめ、新たな展望を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の設定した研究テーマの学史的背景と妥当性を検討するとともに、対象となる資料の分析視点を絞り込んでいく。次いで資料の分類と分析に進み、その手順と理解の妥当性を検討する。最終的に考察された内容が資料にもとづいて正確になされているかについて討論し、最新の研究成果との相関性や先進性について理解を深めていく。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の実戦に向けた諸段階
第 2 回	研究テーマの学史的検討（1）	先行研究の展開過程
第 3 回	研究テーマの学史的検討（2）	研究史上の転換点・画期
第 4 回	研究テーマの学史的検討（3）	現状の研究の方向性と展望
第 5 回	資料集成（1）	資料集成の目的と方向性
第 6 回	資料集成（2）	目的にもとづく資料集成方法の検討
第 7 回	資料の分析（1）	資料のもつ諸属性の理解
第 8 回	資料の分析（2）	観察視点と属性抽出方法
第 9 回	資料の分析（3）	資料分析の実践と問題
第 10 回	資料の分析（4）	分析結果の処理
第 11 回	分析結果の読み取り（1）	分析結果の提示・表現方法
第 12 回	分析結果の読み取り（2）	分析結果の解釈と考察
第 13 回	成果の検討	研究テーマと結論の相関性および最新研究との関連性の検討
第 14 回	総括	研究論文の内容と構成の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。受講者のテーマに関連する研究論文の渉猟、考古学的方法論に関する理解。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ラテン語読解能力のさらなる向上、学会発表やその活字化、後進の指導など、研究者・教育者として自立的に活動していくための基盤を形成・強化する。

【到達目標】

- (1) 自らのラテン語読解能力をさらに向上させる。
 - (2) 研究会や学会で積極的に研究発表を行い、その報告原稿を活字化する。
 - (3) 自分がこれまでに修得した専門的知識を生かして、修士課程在籍者に対する指導経験を積む。
- 以上の3点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業はブレンド型（対面授業の回とオンライン授業の回の混在）で実施し、主として受講者による研究の現状報告、学術雑誌掲載に向けた論文原稿作成とそれに対する指導を中心に、授業を進める。受講生からの報告レジュメ・論文草稿等の提出と、教員によるそれらへのフィードバックは、事前に学習支援システムで行ったうえで、内容に関する質疑応答・討議を対面で行う。なお、最後の数回は修士課程科目「西洋史学演習Ⅰ」と合同授業とし、博士課程在籍の受講者から修士課程在籍者に対し、ラテン語史料の読み方などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究の進捗状況について	受講者による研究の現状報告と討議
第2回	研究内容の活字化に向けて (1)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議 (1)
第3回	研究内容の活字化に向けて (2)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議 (2)
第4回	研究内容の活字化に向けて (3)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議 (1)
第5回	研究内容の活字化に向けて (4)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議 (2)
第6回	研究内容の活字化に向けて (5)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (1)
第7回	研究内容の活字化に向けて (6)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (2)
第8回	研究内容の活字化に向けて (7)	論文原稿を学術雑誌に投稿可能な形に完成させる
第9回	英語による研究成果の発表に向けて	論文要旨を英語で作成する
第10回	博士論文作成に向けて	博士論文完成に向けて、残っている課題の整理と討議
第11回	後進への指導経験を積む (1)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する (1)
第12回	後進への指導経験を積む (2)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する (2)
第13回	後進への指導経験を積む (3)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する (3)
第14回	研究の今後に向けて	夏期休暇中の研究計画と教員からの助言

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、学会での口頭発表や学術雑誌論文の形でまとめる。後進のラテン語史料読解を補助するにあたっての予習と復習。本授業の授業外学習時間は、大学設置基準では1回につき計4時間以上とされているが、それをはるかに上回る授業時間外学習が必要なことは、論を俟たないであろう。

【テキスト（教科書）】

後進の指導については、
Caesar, *The Gallic Wars*, tr. by H. J. Edwards (Loeb Classical Library 72).

【参考書】

後進の指導については、
カエサル『ガリア戦記』、國原吉之助訳、講談社学術文庫、1994年。
『カエサル戦記集 ガリア戦記』、高橋宏幸訳、岩波書店、2015年。
長谷川博隆『カエサル』講談社学術文庫、1994年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（研究の活字化に向けての自主的努力 70 %、ラテン語読解補助の予習も含めた後進の指導に向けての準備 30 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ローマ史

<研究テーマ>帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

- ① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).
- ② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエンと地中海世界』、岩波書店、2012年。
- ③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10 (1982年10月)。

【Outline and objectives】

Through this class, students improve their abilities to read and comprehend the historical sources written in Latin, to make presentations concerning one's own research, and to help younger students in their researches, in order to become an independent researcher and teacher.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学術雑誌への論文投稿や、ラテン語読解能力のさらなる向上など、博士論文を完成させ、研究者として自立的に活動していくための基盤を強化する。

【到達目標】

- （１）学術雑誌への論文投稿を行い、博士論文を完成に近づける。
 - （２）ラテン語読解能力をさらに向上させる。
- 以上の２点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業はブレンド型（対面授業の回とオンライン授業の回の混在）で実施し、受講者による研究報告とその内容に関する討議を中心に授業を進める。ラテン語史料講読については、受講者が使用する予定の史料を中心に精読・討議する。受講者からの報告レジュメやラテン語史料の試訳の提出と、教員によるそれらへのフィードバックは、事前に学習支援システムで行ったうえで、対面授業ではさらに深い質疑応答や討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の現状報告	受講者が夏期休暇中に進めた研究内容についての報告と討議
第 2 回	博士論文の完成に向けて (1)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議 (1)
第 3 回	博士論文の完成に向けて (2)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議 (2)
第 4 回	博士論文の完成に向けて (3)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議 (3)
第 5 回	新たな論文発表に向けて (1)	博士論文完成のために残されている課題の検討
第 6 回	新たな論文発表に向けて (2)	学術誌に投稿する新たな論文の概要報告と質疑応答・討議
第 7 回	新たな論文発表に向けて (3)	学術誌に投稿する新たな論文原稿の検討と討議
第 8 回	新たな論文発表に向けて (4)	新たな論文で使用する原典史料の読解に関する討議
第 9 回	博士論文の完成に向けて (4)	博士論文完成に向けたタイムスケジュールの確認。受講者による章立て構想の発表と討議。
第 10 回	博士論文の完成に向けて (5)	受講者の章立て案に沿っての内容確認と討議 (1)
第 11 回	博士論文の完成に向けて (6)	受講者の章立て案に沿っての内容確認と討議 (2)
第 12 回	博士論文の完成に向けて (7)	受講者の章立て案に沿っての内容確認と討議 (3)
第 13 回	博士論文の提出に向けて (1)	提出予定の博士論文に関して、討議で出された疑問点や批判への回答とさらなる討議
第 14 回	博士論文の提出に向けて (2)	提出予定の博士論文原稿の最終確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、研究内容を口頭発表や雑誌論文の形でまとめる。授業で読むラテン語史料の読解を自分で進めて学習支援システムに試訳を提出し、教員からのフィードバックおよび授業時の質疑応答や指摘を踏まえて、自分の読解を見直す。本授業の授業外学習時間は、大学設置基準では 1 回につき計 4 時間以上とされているが、それをはるかに上回る授業時間外学習が必要なのは、論を俟たないであろう。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

授業で読むラテン語史料については、受講者と相談のうえで決定する。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（自主的研究の進捗と内容 70 %、ラテン語読解の精度 30 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【その他の重要事項】

史学特殊演習 A I（後藤）から継続して履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 古代ローマ史

<研究テーマ> 帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

① The ‘conversion’ of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).

②（分担執筆・史料邦訳）歴史学研究会編『世界史史料 1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012 年。

③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10 (1982 年 10 月)。

【Outline and objectives】

Preparations to complete a doctoral thesis and the enhancement of the abilities necessary for an independent researcher.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業の概要：日本近現代史に関わる博士論文の作成に必要な能力・技能を養う。
 ・目的：博士論文作成に向けた企画・構想力、批判力および表現力を養う。

【到達目標】

到達目標：1) 先行研究の動向を把握し、問題の所在を発見する。2) その上で課題を設定し、課題解決の論理を、史実・史料の取捨選択を行いつつ、構成する。3) 最終的に自分の独自性や独創性を主張し、当該研究分野における業績たり得る歴史像を相当の分量で著述する。4) 日本近現代史研究に関わる英語文献の読解力を養成し、高める。5) 歴史学における博士の学位にふさわしい歴史観と社会的情報発信力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・進め方：演習形式である。
 ・方法：研究発表と質疑応答、最先端の研究に関わる新刊書の合評会を行う。教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策として ZOOM を利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次回の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	課題図書紹介（1）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 3 回	課題図書に関する発表（1）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 4 回	課題図書紹介（2）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 5 回	課題図書に関する発表（2）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 6 回	課題図書紹介（3）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 7 回	課題図書に関する発表（3）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 8 回	課題図書紹介（4）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 9 回	課題図書に関する発表（4）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 10 回	課題図書紹介（5）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 11 回	課題図書に関する発表（5）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 12 回	課題図書紹介（6）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。

第 13 回 課題図書に関する発表 担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。

第 14 回 まとめ 授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・準備学習：課題図書を読んでおくこと。発表者は配布資料を作成しておくこと。
 ・復習：参考書や関連文献を読むこと。また、学術文献が掲載されているウェブサイトを利用して識見を広げること。毎回授業終了後学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに掲示される授業の要点を読み、同システムの「一般ディスカッション」サイトを活用すること。
 ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

継続的に使用する刊本としてのテキストはない。授業内合評会で取り上げる図書については事前に予告する。

【参考書】

・Marius B. Jansen, The Making of Modern Japan, Harvard University Press, 2002
 ・アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館のウェブサイトによる公開史料と関連コラム

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。なお、特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

博士論文執筆促進のための助言を増やすこととする。

【学生が準備すべき機器他】

・授業支援システムを利用することができる IT 機器。
 ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

・「史学特殊演習 A II」（秋学期）との継続履修を強く推奨する。
 ・学習支援システムを授業運営上フル活用するので、頻繁に閲覧し、見落としがないようにすること。
 ・発表者は事前に配布資料を添付ファイル形式で学習支援システムの「一般ディスカッション」サイトにアップロードし、受講生が各自ダウンロードできるようにしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 日本近現代政治史
 <研究テーマ>
 日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程
 <主要研究業績>
 「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）
 「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）
 『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）
 『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）
 『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、
 「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）
 「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）
 「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）
 『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）
 『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）
 「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）
 「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）
 「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）
 『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This is a course for the PhD candidates. The object of this course is for every student to obtain and enhance critical thinking ability and the skill of writing a PhD dissertation on the topic of the Japanese modern history through a presentation of his/her research, discussion, and a book review.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

長井 純市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・授業の概要：日本近現代史に関わる博士論文の作成に必要な能力・技能を養う。
- ・目的：博士論文作成に向けた企画・構想力、批判力および表現力を養う。

【到達目標】

到達目標：1) 先行研究の動向を把握し、問題の所在を発見する。2) その上で課題を設定し、課題解決の論理を、史実・史料の取捨選択を行いつつ、構成する。3) 最終的に自分の独自性や独創性を主張し、当該研究分野における業績たり得る歴史像を相当の分量で著述する。4) 日本近現代史研究に関わる英語文献の読解力を養成し、高める。5) 歴史学における博士の学位にふさわしい歴史観と社会的情報発信力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・進め方：演習形式である。
- ・方法：研究発表と質疑応答、最先端の研究に関わる新刊書の合評会を行う。教室での対面授業を行うが、新型コロナウイルス感染防止策として ZOOM を利用して教室での対面授業を同時配信する方式を併用することもある。リアクションペーパーにおける受講生の疑問や質問、コメントなどには、次回の授業冒頭あるいは学習支援システムにおいて対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	課題図書紹介（1）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 3 回	課題図書に関する発表（1）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 4 回	課題図書紹介（2）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 5 回	課題図書に関する発表（2）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 6 回	課題図書紹介（3）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 7 回	課題図書に関する発表（3）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 8 回	課題図書紹介（4）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 9 回	課題図書に関する発表（4）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 10 回	課題図書紹介（5）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。
第 11 回	課題図書に関する発表（5）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
第 12 回	課題図書紹介（6）	課題図書の提示とねらいの説明及び質疑応答。

- 第13回 課題図書に関する発表 担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑。
- 第14回 まとめ 授業総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・準備学習：課題図書を読んでおくこと。発表者は配布資料を作成しておくこと。
- ・復習：参考書や関連文献を読むこと。また、学術文献が掲載されているウェブサイトを利用して識見を広げること。毎回授業終了後学習支援システムの「授業内掲示板」サイトに掲示される授業の要点を読み、同システムの「一般ディスカッション」サイトを活用すること。
- ・本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

継続的に使用する刊本としてのテキストはない。授業内合評会で取り上げる図書については事前に予告する。

【参考書】

- ・Marius B. Jansen, *The Making of Modern Japan*, Harvard University Press, 2002
- ・アジア歴史資料センター、独立行政法人国立公文書館、国立国会図書館のウェブサイトによる公開史料と関連コラム

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。なお、特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

博士論文執筆促進のための助言を増やすこととする。

【学生が準備すべき機器他】

- ・授業支援システムを利用することができる IT 機器。
- ・ZOOM 授業を受講することができる IT 機器。

【その他の重要事項】

- ・「史学特殊演習 A I」（春学期）との継続履修を強く推奨する。
- ・学習支援システムを授業運営上フル活用するので、頻繁に閲覧し、見落としがないようにすること。
- ・発表者は事前に配布資料を添付ファイル形式で学習支援システムの「一般ディスカッション」サイトにアップロードし、受講生が各自ダウンロードできるようにしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館『平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録』、2018 年）

『棚橋小虎日記・昭和 19 年』（法政大学大原社会問題研究所、2019 年）

【Outline and objectives】

This is a course for the PhD candidates. The object of this course is for every student to obtain and enhance critical thinking ability and the skill of writing a PhD dissertation on the topic of the Japanese modern history through a presentation of his/her research, discussion, and a book review.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第 2 回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第 3 回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第 4 回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第 5 回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第 6 回	研究発表（5）	学術雑誌への投稿をめざして
第 7 回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第 8 回	論文講読（2）	論文構成の方法
第 9 回	論文講読（3）	史料批判
第 10 回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第 11 回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第 12 回	研究計画発表（1）	今後の方針
第 13 回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第 14 回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史
 ＜研究テーマ＞都市論、記憶論
 ＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019 年）

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を複数掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第 2 回	研究発表（1）	研究史との格闘
第 3 回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第 4 回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第 5 回	研究発表（4）	表の効果的使用
第 6 回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第 7 回	論文講読（1）	分野の選定
第 8 回	論文講読（2）	表現力の問題
第 9 回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第 10 回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第 11 回	論文講読（5）	結論の妥当性
第 12 回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第 13 回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第 14 回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史
 ＜研究テーマ＞都市論、記憶論
 ＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019 年）

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article.

